日本戯曲全集

第四十四卷

有島武郎
長與善郎
倉田百三
室生犀星
吉田絃二郎
近藤經一

現代篇第十二輯

東京
春陽堂版

「出家とその弟子」　佐々木積の親鸞

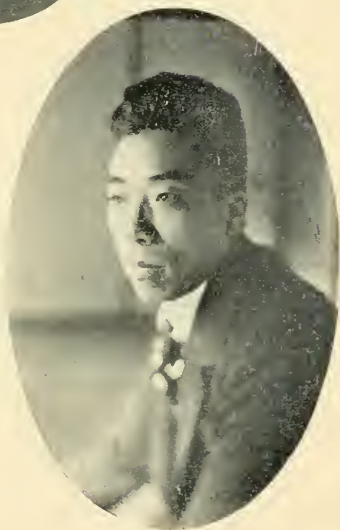
「出家とその弟子」の舞台面

同上

「俊寛」市川猿之助の有王・市川左團次の俊寛

「布施太子の入山」守田勘彌の布施太子・河村菊江の王妃曼抵

「玄宗と楊貴妃」村田嘉久子の楊貴妃・守田勘彌の玄宗

「死と其の前後」の舞臺面

有島武郎

長與善郎

倉田百三

吉田絃二郎

近藤經一

室生犀星

日本戯曲全集　第四十四卷　目次

有島武郎篇

長與善郎篇

倉田百三篇

室生犀星篇

吉田絃二郎篇

有島武郎篇

死と其の前後（六場）

登場人物

「死」
影人　若干人
夫
妻　A子
醫師
看護夫
婆や
一人の男
學生　三人
刑事係
其他

序幕

幕開く。舞臺中央の奥まりたる所に一箇の焰かすかに燃ゆる外總て暗黑。かくて時過ぐる事五分。

死　時の流れに漂ふ小さな泡がまた一つ、小さな音を殘してはじける時が來た。その用意をして置けよ。

（焰のあたりより感情のこもらぬつぶやく如きこの聲きこゆ。沈默。）

死　また一つの命に永劫開く事のない錠前をかける時が來た。錠前はいゝか。鍵はよくあふか。錠前も鍵も錆びてはゐないか。その用意をして置けよ。

（焰のあたりよりつぶやく如くこの聲きこゆ。又沈默。その沈默の間に舞臺やゝ明るくなり、焰を前にして坐せる「死」の姿灰色の背景中に現はる。舞臺の明るくなると共におもむろに薄れ行く焰の周圍には影人若干人半圓狀にうづくまり居る。）

死　その用意をしておけよ。（影人等しく點頭く。以下同じ）悲しみや苦しみや悶えの聲が又ひとしきり時の流れを小さくかきみだすだらう。たゞ今度のは耳にもさはらぬほど小さなものだ。兩手の指の數にも足らぬ人間の足なみが亂れるばかりだ。人間全體はふりむきもせずに、毎時のとほり的もなく急ぎきつてその側をすりぬけて行くだらう。（やゝ暫らく沈默）だが、小さくとも大きくとも同じ事だ。——小さくとも大きくとも同じ事だ。やがての果てには、天體の奏でる大音樂の聲も、赤兒のさゝやかな産聲も、靜かになる時が來る——無くなる時が

來る——絶え果てる時が來るのだ。總ては同じ事だ。(沈默) 錠前と鍵はいゝか。小さくとも命は命だ。金輪際かきがねがはづれてはならぬのだぞ。過ちなく、急ぐ事なく、この焔は薄れてゆかねばならぬのだ。(沈默) 凡そ世にあるかぎりの總ての焔が消え果てる時——凡そ動くものが動かなくなる時——俺が俺自身を忘れをはる時、その時の來るのを、靜かに、氣永に、冷やかに、待たねばならぬのだ。この焔も總ての焔と同じ運命をうけて消えねばならぬ。その用意をしておけよ。(稍々暫らく沈默。焰しきりにゆらぐ) 見ろ、焔が悶える。

妻の聲　あゝ熱いあつい。

夫の聲　苦しいだらう。俺が煽いでやらう。

妻の聲　いゝえ。

(影人夫婦の聲をきいて立ち上がらんとす。)

死　靜かに、(妻の呻く聲きこゆ、影人又立ち上がらんとす) 靜かに。お前達は命にそれほど氣を置くのか。哀れな者共だ。最終を考へて見ろ。總ての命のゆきつく先きをしつかりと見つめて見ろ。あわてるには及ばない事だ。(沈默) と云つて、お前達は威嚴をよそほふこともいらない。必ず勝つものには威嚴の要はない。慌てないで命の命ずるまゝにその用をつとめてやれ。(沈默)

夫の聲　ほんとに煽いでやらう。

妻の聲　いゝえ、ほんたうにいゝの。貴方がおきてゐらつしやると寢られませんから、早く寢て下さいまし。

死　慰め合ふ事のできる間に慰め合ふがいゝ。時は止まらずに過ぎて行く。(影人に向ひ) お前達は行つて死なうとするものゝ用をたしてやれ。俺はこゝで靜かに焔の戲れを見詰めてゐるのだ。(やゝ暫らく沈默) 明日の朝、萬物に命を與へると云ふ太陽が、新しい光で東の空から眞夏の山や海を輝かしく照らし始める時、總てのものが喜び勇んで命を讚美するその眞只中で、その若い女の小さな焔は燃えつくすだらう。總ては同じ事だ。明日の朝の七時。お前達は明日の朝の七時を忘れるなよ。

(舞臺もとの如く暗くなる。焰しきりにゆらぐ。やゝ沈默。)

老婆の聲　奧樣、只今。

夫の聲　何んだ、何んて仰しやつた。

老婆の聲　あの院長樣はもうおやすみになりましてすから、明日朝八時頃までに伺ひますと仰しやいまして御座います。

妻の聲　さう。御苦勞よ。

夫の聲　來るならもつと早へ來てくだされば いゝのになあ。

死　(恐ろしき暫らくの沈默の後) 總ては同じ事だ。

——幕しづかに下ろ。序幕終り

第一場

海岸保養別莊の一室。庭には小松三四本と朝顏の鉢十あまり。緣側には羽布團にて被へる籐椅子一脚。室の中には年若く衰へたる妻呼吸苦しげに白き床の上に仰臥して團扇をつかふ。その側に一人寢の蚊帳つりあり。

雨戶はあけ放し、軒には岐阜提燈をつる。

病室に隣り、腰窓にて庭に面せる一室には、眼鏡をかけたる看護婦看護服を脫ぎすて就寢の用意をなしつゝあり。

夜。波の遠音と蟲の聲のみきこゆ。

幕あく。暫らくして時計十時を報ず。

妻　看護婦さん。

看護婦　（面倒くささうに、然し聲はやさしく）　はい。

妻　あなた寢る前にもう一度氷嚢を取りかへて置いて下さいな。

（看護婦不承々々に返事して看護服をぬいだまゝ臺所の方へゆく。氷を割る音。）

（蚊帳より夫出て來る。）

夫　（舌打ちしながら小聲に）　來る奴〳〵しやうのない奴ばかりだ。又そんな事を怠つてるのかい。

妻　貴方まだおみおきてゐらしつたの？

夫　うと〳〵はしてゐたよ。いやにむし暑い晩だね。俺はやつぱり起きてゐる方がいゝ。寢ると夢ばかり見つちまふんだ。

妻　でも今うつたのは何時？　十二時でせう？

夫　うむ、まだ十時だ。

妻　まだ……夜の長い事。

夫　（同情して）　ほんとにつらいね。（額際をなでてやる）この汗はどうだ。（側にあるハンケチにて拭はんとす）

妻　いけません〳〵そんなに近くいらしつちや。貴方はあんまり無神經すぎるからいやですわ。感染したらどうなさつて？

夫　馬鹿な。

妻　馬鹿ぢやありません。貴方まで若し結核にでもなつて御覽なさいまし、子供達をどうなさるの。

夫　そんな消極的な事ばかり考へてゐるより、お前が治つたら子供達はどんなに喜ぶだらうと考へる方がずつと確かでそしていゝ事だよ。

妻　又そんな氣やすめばかり。

夫　氣やすめなもんか。

妻　氣やすめですとも。（むつとした樣子にて顏をそむけ

る、暫らくしてやさしき聲にて）もうお怒りにならないで頂戴ね。私はもうぢきに死ぬのにきまつてゐるんですから、是れからは死ぬまで怒りつこなしにしませうね。

（會話の間に時々力なき咳をして痰を吐く。以下同じ）

夫　馬鹿だなあお前は。怒つたのはお前ぢやないか。

妻　さうでしたわね。（暫らくして）でもお怒りになつてはいやですよ、私氣休めを云はれるとほんたうに腹が立つんですもの。この頃は、死ぬつて云ふ事がはつきりわかると、言葉のうそほんとが氣味の惡いほどはつきりわかるやうになりますからね。貴方までが心にもない事を仰しやつて私を慰めるつもりでゐらつしやると思ふと……私は寂しくなるんです。ですからね……

（この時看護婦氷嚢を五つか丶へて入り來る。話し途切れる。）

看護婦　たつたさつき代へたばかりですから、まだだと思つてましたら、もう解けまして。

夫　（妻の頭の氷嚢に手をかけて見ながら）この通りだ、よくあた丶まつてゐますよ。煎茶くらゐ飲めさうだ。

（看護婦氷枕をとりかへ、頭胸の氷嚢全部をとりかふ。）

看護婦　序でにお體温を拜見しませうね。

妻　苦しくつて面倒だからやめて下さいな。

看護婦　でもちよつとのまですから。

夫　（いら〳〵しながら）一度位い丶ぢやないか、やめといて下さい。

（この時格子の開く音す。靴をぬぐけはひに醫師なりと氣づき、看護婦あわて丶次室に去る。入れ代りて醫師登場。一同床に近より患者を熟視しつ丶。）

醫師　どうです。

夫　（妻に代りて）私も二日程東京に用があつて來られなくつて、今日夕食前に來たんですが、今夜は大分苦しいやうです。非常に暑がつて呼吸が御覽の通り困難です。氣分はいつもの通りではつきりしてゐますが……看護婦さん病床日記は。

（看護婦次室にて返事はしながら、鏡に向つて顏をなほしなどしてゐる。）

醫師　何、よろしう御座います。（靜かに脈を取り）食慾はおありになりませんか。

夫　夕方何を思ひ出したか、北海道のものが喰べたいと云つて干鮭を少しと昆布茶と重湯とを喰べました。林檎も喰べて見たいと云ひましたけれども、まだい丶のが出てゐませんし、不消化ではないかと思つてひかへさせたんですが。

醫師　宜しう御座いませう、少しなら。（妻に向ひ）召上

りたいものは何んでも召上つてかまひません。貴女は胃はお惡るくはないのですから。いかゞでした鮭と昆布茶は。さう、それはよう御座いました。北海道の味がなさいましたか。(笑ふ)

(看護婦看護衣をつけて出て來り、殊勝げに病床日記などわたす。)

先程院長にとのお使ひでしたが、丁度もうやすまれた後だつたもんですから、明日の朝早くには見えられるでせう。で、どんな御鹽梅かと私が取り敢ず上つたんです。

(今つけたばかりの氷嚢を取り去り、背腹共に打診聽診す。妻の呼吸益々逼る。醫師の眉ひそむ。足の方を探りて。)

醫師　足の方に惡寒がなさりはしませんか。惡寒がなさるやうだつたら湯タンポを入れて上げて。(看護婦うなづく)いや、別にかうと云つてお變りは御座いません……せんが、成るべく氣を落ち着けて靜かになさらなければいけませんですよ。もう一度注射をして置きますから。

(注射の用意を爲し注射せんとす。)

妻　今日のお藥は匂ひがちがひますのね。

醫師　一年も病氣してゐらつしやると御病人の方が私共より巧者になりますね。さうです、今日は少しちがへてやつて見ませう。

(診察を終へ挨拶して立ちぎはに醫師夫に眼くばせす。妻に氣を取られたる夫は同じく醫師に意味ありげな眼くばせはしながら共に立たんとはせず。醫師已むを得ず玄關に出づ。見送りたる看護婦歸り來り。)

看護婦　あの醫長樣が院長樣からおことづけがありますさうで。

夫　(はつと思ひ當りしが妻の手前素知らぬ態をして)あ、さう。

(立つて次室に行く。看護婦殘る。)

醫師　御容體が非常に險惡ですよ。御用心なさらなけりやいけませんな。

夫　(默つて醫師を見戍る)

醫師　何か御生前おききになつておく事でもありますなら今の中に。

夫　わかりました。

看護婦　(次室の話聲を紛らさんとして)奧樣私がさつき院長樣の所に行きます途中にね、あの犬が……こゝにも來るでせう、あの犬が……

妻　(きびしく)そんな話後にして。

看護婦　でもほんとに面白いつたらないですもの。その犬の眼の上にね何處かの小僧が……

妻　(小さく鋭く)默つてゐて下さい。(少し頭をもたげ

て聽く)

醫師　お知らせなさる所にもお知らせなさつておく方がいいですな。

夫　夕方手紙は出しておきました。それから子供達ですが、妻が決心してもう一年も逢はないでゐるんですが、どうしたもんでせう?

醫師　さうですなあ。……これは殘酷に聞えるかも知れませんが、奥さんが會ひたいと仰しやるのでなければお逢はせにならない方がよろしいでせう。お會ひになればどうしてもいゝ結果はこの場合想像する事が出來ませんからなあ。そのまゝなら萬一の機會が殘される事になります。醫師としては人の生命を最後の瞬間まで守らなければならない責任を感じますから、私はさう申上げるのです。まあお會はせにならない方が得策でせうな。尤もそれも……

夫　わかりました。もうわかりました。

醫師　それがです、お逢ひになつた處が、謂はば御不幸の色を一層濃くするやうな……

夫　醫長さんわかつた。もうわかりました。

醫師　申し過ぎたかも知れませんが……それから只今少し御安眠の出來る注射をしておきましたから暫らくは御安靜になるでせう。又御容體に變化が來ましたら何時でもお使を下さい、直ぐ參ります。何しろ御心配な事で誠にお察し致します。

夫　難有う。永々御世話になつたのに壽命がなかつたのです。

醫師　(少し聲を大きく)で、院長からはそれだけの事を申上げて置いてくれろとの事でしたから、その藥を使つて見たら或は存外特異な效果を見るかも知れません。

夫　(少し聲を大きく)色々ほんたうに御同情を難有う御座いました。

(醫師去る。夫病室に來る。)

夫　看護婦さん、お休み。氷が解けたら僕貴女をおこします。

看護婦　いえ、よう御座いますんですよ。

夫　よかない、明日がある。僕は明日晝間ゆつくりやすむから、貴女ねて下さい。……あ、それから寢る前にね、隣に行つて電話を借りて八百屋から林檎を持つて來さして下さい。今夜はもう駄目かも知れないけれども、明日は早く持つて來るやうに云つといて下さい。

(看護婦去る。次室の腰窓をしめて就寢する。暫らく沈默。妻、夫の方に向きなほる。)

妻　看護婦は寢ましたか。

夫　寢たやうだよ。どうだい注射してから少しは樂になつ

たかい。

妻　近頃にない程氣分も呼吸も樂になりましたわ。だけど汗がなほ〳〵ひどく出て。何んて暑いんでせう。暑いのも苦しいものね。

夫　ほんとうに今夜はむし暑い晩だ。（空をすかし見て）降りさうで降らないからだ。

妻　死にさうで死なないのも苦しいものですのよ。

夫　何を云つてるんだい。（沈默）

妻　あなた。

夫　なんだ。

妻　醫長さんは何を仰しやつたの。

夫　藥の事で院長から傳言があつたんださうだ。

妻　大分長いお話でしたのねえ。

夫　そんなでもなかつたぢやないか。

（暫らく沈默。）

妻　あのね。

夫　え。

妻　子供達ね。

夫　うん。

妻　やつぱり逢はない方がいゝんですつてね。

夫　（ぎよつとしながら）誰れがそんな事を云つたんだ。何時でも逢ひたければ連れて來るよ。逢ひたくなつたかい。

妻　いゝえ。……（暫らく沈默）もう虛言のつきつこはよしませうね。

夫　（感じたらしく）うむよさう……ほんとうだ。

妻　では私も貴方に下らない事をお尋ねするのももうやめますわ。死ぬか生きるかは自分が一番よく知つてる事なんですからね。

夫　…………

妻　私は貴方をこんなにして看病してあげたかつた。

夫　冗談ぢやない。俺はそんな病氣になるのは御免だよ。（無理に笑ふ）

妻　ほんとうにねえ。（妻も笑ふ）

夫　然し萬一さうなつたら、俺がお前にした十倍も以上に俺を看護しないと腹を立てるよ。

妻　又貴方は心にもない虛言を仰しやるの？　隨分貴方は虛言つきですね。

夫　虛言つきぢやないさ。
（妻非常に氣をそこねたらしく長き沈默）

夫　おいＡ子俺がいけなかつた。然し俺は誰れが何んと云つてもう一度お前をなほしてやりたいのだよ。虛言を云ふ俺の口を俺の耳は信じようとするんだ。

妻　（感じて）いゝえ。怒つたりして私こそ惡う御座いま

した。貴方のお心持はよくわかつて居るんですけれども……もうどうぞ私の覺悟に未練を起させるやうな事は仰しやらないで下さいましね。それよりお薬で氣持のいゝ中に、樂しいお話を少ししませうね。いゝでせう。

夫　然しお前は眠らなければ……（自分に氣付き舌打ちして）俺は何んと云ふ間にあはせ屋だ。……さうだ。一晩中でも話をしよう。

妻　まあうれしい。（いかにも樂しげに）何かお話して頂戴な。

夫　さうだなあ、何の話をしような。（沈默）話と云へば結婚したてには毎晩寢てから一つづゝお話をさせられたつけが。

妻　でも一箇月ほどで種切れにおなりになつてね。

夫　一箇月續いたのはえらい中さ。お前は隨分慾ばりだつたからな。トルストイの「復活」なんぞは始めから仕舞まで一晩かゝりで話させてしまふんだもの。話しながら自分の方で興奮した俺も可なり馬鹿だつたがお前も無考へな女だつたよ。だから一箇月で種も身も盡きたのさ。でもそのお蔭でお前はいゝ加減物識りになつた筈だ。

妻　ほんとに色んな事を覺えさせていたゞきましたわ。あの頃ほどどん／＼心の育つたのは前にも後にもありませんでしたわ。それから又段々と馬鹿にあともどりしてしまひましたのね。

夫　一つは俺も段々不熱心になつたからな。（笑ふ）どうだい雨戸をしめてやらうか。あんまり夜氣が來すぎはしないかい。

妻　いゝえ、やつぱり明けておいて下さい。暑いばかりぢやないの、締めると氣息が苦しくなりさうで。（戸外に眼をやり）曇つてゐますのね。星はどこにも見えませんか。

夫　（空をすかし見つゝ）風もないのにあの雲の走りやうは何うだ。八月と云ふとやはり何んとなく荒れ立つて來るね。あゝ、あすこにたつた一つ見える。見えるかい。

妻　えゝ。

夫　もう隱れてしまつた。

妻　（獨語のやうに）星にもお別れが出來たし　…（沈默）うそよ。冗談ですのよ。私こんなに色んなものが可愛かつたり、なつかしかつたりするやうでは迚も死ねませんわ。ほんとにこの世の中はいゝ世の中だつた事。苦しかつた事も悲しかつた事も皆んな美しくばかり思ひ出されます……だから私治りませうね。屹度治りませうね。

夫　さうだ、ほんとうに治らうね。（暫らく沈默）お前の苦しく思つたことも悲しく思つた事も、世の中の人に云はせれば、……俺の大嫌ひな、酸いも甘いも知りぬいて感激の種切れになつた人達に云はせれば馬鹿々々しいもの

であるかも知れないが、俺としてはやつぱりそれがうれしかつた。尤もその時分は隨分うるさいと思つたがね。（少し强ひた笑ひ方をする）何しろ俺の性格にも仕事にも眼鼻のつかない中にお前に死なれては俺の方が浮ばれないよ。俺もいつまでもかうやつては居ない。お前が病氣になつたのでこの二年間遊んで居る中に段々見當がついて來た。遊ぶと云ふ事も惡い事ばかりぢやない。今までは唯々無暗に齷齪してばかりゐた。それがいけなかつたんだね。考へて見れば今まで仕事らしい仕事といへば、何一つしなかつたのによくもお前は俺に辛抱して來たもんだ。つまりお前は餘程甘く出來てゐるんだよ。

妻　澤山仕事はなさつていらつしやいますわ。

夫　失敗に終つた仕事はいくらあつても、しなかつた以上に惡い仕事なんだ。

妻　でも貴方は學生たちから頼みにされてゐらつしやいますわ。

夫　駄目だ／＼。迷つてる羊は迷つてる羊を導く事なんか出來はしない。俺なんぞはほんとうを云ふと、默つてもつと自分だけを見戍つてゐなければならない男なんだ。こんな意氣地のない事をお前に云ふのは少し恥かしいことだけれども。

妻　まあいやな方。そんな事を仰しやると私はなほ／＼死にたくなります。あのねえ。

夫　え。

妻　私の手帳ね。

（この時婆やあたふたと登場。寢衣のまゝ。）

婆　旦那樣こんななりを致してをりまして御免下さいまし。

夫　どうしたんだ今頃起きて來て。

婆　またお笑ひ遊ばしますかも存じませんが只今ひよんな、夢を見ましたもので御座いますから。

夫　又御夢相か。もういゝ寢ろ。

婆　左樣で御座いませうか、奥樣はおやすみでゐらつしやいませう。

夫　おきてるよ。用かい。

婆　へえ。それでは又。

（婆や退場。暫らく沈默。）

妻　貴方にどうしても見せて上げなかつたあの手帳ね。お分りになつて、水色の表紙の分ですのよ。

夫　うん。

妻　あれはあの袋戸棚の下の方に入れさせておきましたからね……いゝえ、まだ御覽になつてはいや……お手を貸して頂戴（夫の手を取り、もう一つの手にて輕く撫でながら）私がね……私が若しか死んでしまひましたらね……

…御覧遊ばせ。私きつと治りませうけれどもね。而して今度こそはお邪魔ばかりしてゐないでせつせと私も働きますわ。ね、いゝでせう。

夫　…………

妻　そんなにお怒りになつてはいや。

夫　（殆んど同時に）何を怒る。

（沈黙。）

夫　お前はほんとに治らなければいけないんだぞ。その積りなら最後の瞬間までも命を大切にしなければいけないよ。疲れるといけないから… 然しもつと話さうか。まだ話す事があるかい。

妻　何んにも。

夫　そんなら寝て見たらどうだい。

妻　はい。その代り貴方もおやすみなさいましよ。

夫　俺はいゝよ。それに蚊帳をつらないでゐてはお前は蚊で眠られやしないよ。煽いで上げるからかまはないでおね。

妻　貴方がおやすみにならなければ、私は眠れませんもの。

夫　頑固だ。それぢや俺も寝るさ。

妻　どうぞ。貴方もほんとにお體を大事になさいましよ。お機嫌よう。

（夫蚊帳に入る。妻は呼吸困難になりながら雄々しく自ら團扇を執つて煽ぐ。催眠剤の效あらはれ、昏眠に入り團扇を手より落す。夫蚊帳より出で妻の傍に來り、團扇を取り上げて妻を煽ぐ。婆や再び竊やかに登場。）

婆　旦那様奥様は……

夫　（うるささうに）寝たから……

婆　旦那様、私は先程の夢を見ましてからどう致してもやすまれません。まざ／＼とした夢で御座いました。神様が、旦那様、奥様をお召しになりましたので御座います。それが、旦那様、神様のおみお顔が旦那様そつくりでゐらつしやいまして。

夫　何をくだらない事を云ふんだ。早くいつて寝ろ。

婆　それに、……私は何んだか こはいやうで 御座いますが……。

夫　もういゝ、早く寝ろと云ふのに。

婆　恐れ入りまして御座います。旦那様「神を信ずるものは幸なり」と申しますが……

夫　説教は明日にしてくれ。俺は考へる事があるんだから。さ、いゝから早くお寝。

婆　（不承々々）左様で御座いますか。では御免蒙ります。

（婆や退場。夫、妻の寝顔を凝視す。）

（舞臺そのまゝ暗くなる。）

――ダーク・チエンジ

第二場　夢　の　場

妻の夢。

序幕と同じ舞臺、始めは明滅する焰の外暗黒。漸次明るくなる。

焰の前には死のみ默坐す。

舞臺の一方に椅子によりて夫讀書し、他の一方に坐して妻と婆や、縫物なして居る。

婆　何んと云ふきびしいお暑さで御座いませう。北海道くんだりにをりましてこんな暑さにあひましては虻蜂取らずと申すもので御座います。こんな日には餘計お苦しう御座いませうね。氷はまだ解けませんで御座いますか。看護婦は一たい何處に參つたので御座いませう。暇さへあればお隣に話に出かけてしまひまして、しやうが御座いません。奥樣、私一寸氷嚢をつくつて參ります。

妻　婆や、お前何を云つてるの。氷嚢たなんて何するつもりなの。

婆　奥樣こそそんなむづかりを仰しやつてはこの婆が困りますでは御座いませんか。その御病氣ばかりは御養生一つでどうにでもなるものだと伺つて居りまりますから、何んでも我慢遊ばしてせつせとお胸をお冷やしになりませんぢや。第一おみ起きになつてゐらつしやるのがお惡う御座いますよ。お床でもおのべ申しませうか。

妻　お前はほんとにどうかして居るよ。私はこの通りぴんぴんしてゐるぢやないか。をかしな人ねえ。

婆　でも御氣分どほりに遊ばしてはよく御座いますまい。いくら熱にお慣れ遊ばしたつて、やつぱり三十八度もおありになりますので御座いますから。

妻　幾度云つて聞かしても分らないのね、婆やは、私はまだ病氣なんぞになりはしないのよ。私はね、あと五年たたなければ病氣になりはしないんぢやないか。そんな事がわからないの。

婆　おや左樣で御座いましたかね。お、さう〱、さうで御座いましたね。又耄碌を致してしまひまして御座いますよ。

（何か非常にをかしいやうに笑ひ出す。妻も釣りこまれる。突然二人とも恐ろしき衝動を受けたるやうに笑ひやむ。極度の不安。）

妻　どうしたんだらう。あゝ暑い事。

婆　通り魔で御座います。

（妻も婆も再び仕事をはじめる。）

夫　（讀書をやめて遠くの方に耳をすます）おいA子、お前の好きな郭公（カツクー）が鳴いて居る。聞こえるだらう。

妻　さう、ほんと。（耳をすます）聞えますわ。（暫らくし

て）いゝ鳥ですのねえ。

（夫再び讀書す。妻時々鳥の聲に聞き入りながら産衣を縫ひつゞける。）

妻　あなた。

夫　（讀書しながら）　う？

妻　この柄はおきらひ？

夫　うむ。

妻　おすき？

夫　うむ。

妻　まあいやな方。どつち？

夫　さう、どつちかなあ。

妻　まあ、……よござんすわ、そんな不熱心な方。

夫　（始めて書物より眼を放ち）　俺が折角熱心になりかけて居ると、お前が不熱心にしてしまふんぢやないか。いやな方も何もあるもんかい。ほんとうにうるさい奴だ。

妻　でもあなた不熱心なんですもの。そんな方私大きらひ。

夫　ふん、さうか。（又讀書す）

妻　本ばかり讀んでゐらつしやれば着物の事なんかどうでもいゝのね、あなたは。

夫　やかましい奴だな。着物がどうしたと云ふんだい。（始めて立ちて妻の方に行き、産衣を見て珍らしげに見やる。）

夫　何んだそれは。

妻　何んでもよう御座いますのよ。

夫　よかあないよ、赤坊の着物だらう。もうそんなもの作つて置くのかい。一寸お見せ。

妻　いゝえよう御座います。あなたはたんと御本を御覽なさいまし。

夫　（妻のわきに坐りて）　ふむ、割合にいゝ模樣だ。だが、ちつと赤すぎるね。男の子が生れても是でいゝか知らん。

妻　（恥かしげに）　いやな方。男の子なんか生れやしないからいゝ。ほんとに男の方なんてわからず屋なんですもの。

夫　おい婆や、お前には子供があるんだつけかな。

婆　ございますが、子供などと申しますとをかしいやうで御座います。息子が三人と娘が一人御座いますが、末の息子がもう、旦那樣、三十になりまして御座いますよ。

夫　それはいゝねえ。

婆　よくでも御座います事か旦那樣。一人々々やくざもの許りで御座いまして。私のやうでは何んの爲めにお産を致しましたか、さつぱり譯が分らなくなつてしまひます。一人なんぞは、奥樣、暗い所に入れられますし、娘は娘で私の申します事なぞはこれつぱかりも（針を眼の前に出す）　聞き入れは致しませず、それにおやぢがのんだく

れで御座いましたから、今日様がおでになるたんびに考へます事と申しましたら、どうかせめて今日一ぱいは災難が御座いませんやうにと申す事だけで御座います。女の罪障で誰でもお産は苦しいと申しますが、子を育てる苦しさにくらべますれば、まるでお話になんぞなるものでは御座いません。もう〳〵世の中は、いやなもので御座います。人間と申す者はどれもこれも根つから頼みにも的にもならないもので御座います。皆んな人の隙ばかりねらつてをりまして、奥様、やゝともすれば、つかみかゝらうと致しますので御座いますからね。早くこんな世の中はお暇に致して、神様のお側に參りたいもので御座います。

妻　そんな事を云ふものではないわ婆や。世の中には惡人もゐるだらうけれども、いゝ方もいらしつてよ。

婆　それが奥様……

妻　だつてお前は神様を信じてゐるんだらう。

婆　それは神様を信じさせていたゞいてをりますお蔭でやうやくかうやつて生きてる空も御座いますので御座います。

妻　その神様がお作りになつた人間ぢやないの。神様がお惠み深ければ、人間にだつて惠みぶかい所があつていゝわけだわ。

婆　ところが、奥様、人間の御先祖のアダムとイブとが罪を犯して神様にお叛き申しましたので御座いますから駄目で御座います。取りわけ男などと申しますものは、こなたの旦那様などは別でいらつしやいますが、それはおほそれた虚言つきで御座います。

妻　そんなにひがんでは自分の心までひがんでしまふわ。

婆　だから聖書にも「蛇の如く慧かれ」と御座います。意地の惡いほど氣を附けて居りませんと、周圍のものに罪をつくらせるばかりでは御座いません、飛んでもない損な目に遇ひますので御座いますからね。それも旦那様のやうに教會でも飛びはなれて信仰のお堅い方。

夫　（物を考へてそこらを歩きまはり居りしが）おい婆や、俺は四五日前に教會を退會したのだよ。

婆　え、何を仰しやいます。まあほんとうで御座いますか。

妻　えゝ、ほんとうなのよ。

婆　あの、旦那様が……まあ怖い事で御座います。でも奥様、それもこれも下世話で申します「榮耀の餅の皮」で、徒然のお慰み位なもので御座いませう。誠に結構なお身分でいらつしやいます。私共のやうに體をへらし〳〵生きてをりますものには思ひもよらない事で御座います。結局この世の中は何んと申しましてもいやな苦しい世の中で御座います。

夫　婆や、お前が苦しい〳〵と云ふ時には何んだか嬉しさうな樂しさうな顏をしてゐるぜ。それだけでもお前は世の中を仕合せだと思ふ筈だがな。それより、話に氣を取られて、婆やはまた氷嚢を忘れやしないかい。もうとうに解けた時分だぜ。

婆　おや左樣で御座いましたねえ。

（婆やあわてゝ立たうとする。）

妻　氷嚢をどうなさるの。

夫　知れた事ぢやないか。そんなに不養生をすると又熱が出るぞ。さう云へば體溫も計らないんだらう。

妻　今日はあなたも婆やもほんとに變ねえ。五年たゝなければ病氣にはならないのだと今も婆やに云つたばかりですのに。

夫　お前ほんとうに病氣ぢやないのか。

妻　この通りぢやありませんか。

夫　さうか。（非常に喜ばしげに）さうだつたんだねえ。

（三人聲を立てて笑ふ。突然衝動の如く笑ひやむ。）

婆　通り魔で御座いますよ。

妻　婆や、臺所に行つてお湯を沸かしておくれ。もう御飯のお支度をしなくちや。

（婆や去る。夫は再び書に向ふ。妻は裁縫を片付けはじむ。影人一人の男を連れ來る。總て舞臺に現はるゝ人物は首を垂れ眼を閉ぢ、よき所に來りてはじめて眼ざめたる如くなる。）

夫　まだ郭公がなきつゞけてゐる。（男を認め）お、君か、何時の間に來たんだい。ちつとも知らなかつた。

男　呼んで見たけれども返事がなかつたから勝手に這入つて來たんだ。奧さん、今日は。

妻　まあいらつしやいまし。お暑う御座います。

男　またあいつが來たつて？

夫　うむ。

妻　ほんとにいやなんですのよ。はじめに來た時はほんとにをかしかつたんですのよ。

夫　僕の留守中にやつて來てね。婆やに「私は高等の方をやつてるんです」と云つたんださうだ。黑眼鏡の後ろからあの物凄い眼を光らしたんだから驚いたらうさ。僕の歸るまでの間妻と二人でさん〴〵考へた擧句高等小學の先生と云ふ事にきめたんださうだ。

男　高等刑事とはちよつと氣が附くまいからな。何んにでも高等のくッつく世の中だね。この間來た時は何んと云つたんだ。

夫　あなたの主義に對して御意見を伺つて來いと云ふ命令を受けて參りましたといやに底氣味惡く下手から人を見詰めながら云ふんだ。

男　ふうん、で。

妻　わきで聞いてゐてもひや／＼するやうな事を仰しやるんですもの、私ほんたうに怖う御座いましたわ。

夫　おい、お茶はどうしたんだい。

（影人茶器を運び來る。妻疑はしげに見る。影人馬鹿丁寧に辭儀して退場。）

妻　（夫の方に寄り添ひ影人を見ながら）變な人ねあれは。

夫　ちつとも變ぢやないぢやないか。

妻　今度新しく雇つた人ですの？

夫　をかしな女だなあ。あいつは昔から働いてる男ぢやないか。

妻　（自分の思ひ違ひを恥づる如く）おやさうねえ。でも何んだかをかしいわ。私いやですわ、あんな人。婆やはどうしたんだらう。

夫　晩飯の支度でもしてゐるんだらうさ。（男に向ひ）所謂高等につけねらはれては教員と云ふ僕の位置はもうおしまひだよ。

男　何、そんな事もあるまいが、君が教育界を退くのはまあ一寸惜しいな。失望する學生もすくなくないだらう。君の評判は中々いゝからな。

夫　「評判がいゝ」か。僕は教育の出來るやうな男ぢやないよ。自分の事もわからないで人の世話をやく事なんざあ出來やしないさ。然し學生の中にはいゝ青年が居るね。畏ろしいやうな青年が居るね。あいつ等との交渉がなくなるのは少し寂しいよ。

男　君は教會も退會したさうだね。

夫　あゝ。……熱い湯がほしいな。

（影人又現はれ藥罐を持ち來る。妻再びおびえる如くこれを見やる。再び茶を入れて出す。）

夫　僕が教會をやめたのが自然の成り行きだつて云ふ事は君には分つてゐる筈だが、妻には突飛な出來事だつたと見えてね。昨日妻の父から手紙が來たから讀んで見たら、此奴（妻を意味す）は僕の事について嘗て父に相談がましい事をしたためしはなかつたのに、今度は非常に心配をして相談してよこしたが、一體どうした譯だと云つて來たよ。お前はまだあの手紙を見ないだらう、こゝにあるよ。（妻に手紙を渡す）教會に這入つた時は君も知つてる通り勘當までされそこなつて這入つたんだから、出るにつけても僕は相當に苦しんだ。然し思ひ切つて出たのは結局よかつたと思ふんだ。

妻　それでもあなたは神様はお信じになるんでせう。

夫　お前は例へば飯の味がほんとにわかるかと聞かれてはつきり判ると答へられるかい。神を信じないと云ふのは恐ろしい事だ。神を信ずると云ふのも恐ろしい事だ。

妻　あなたはいつでも切羽つまると曖昧を仰しやるのね。
夫　さうか知らん。
妻　私にはあなたのほんとうの御心がわかりませんわ。
夫　段々わかつて來るだらうさ。而していやになるさ。
男　君か何か女の事で墮落した爲めに教會を捨てたと評判するものがあるさうだよ。
夫　さうか、それは無暗にほめ上げられるのよりどれ程いいか知れないよ。
男　ふん、全くだ。……君も結婚してからもう一年になるが、結婚生活はいゝものだから是非結婚しろと人に勸めるだけの自信ができたかい。
夫　人の細君をわきに置いて、相變らず無遠慮の男だなあ。それはいゝ事もあるし、惡い事もあるしさ。こいつなんぞもこいつだけの煩悶はして居るやうだよ。僕は結婚するとすぐ第一に妻に與へたものは自由だつた。妻から要求したものも自由だつた。つまりお互に離れたくなつたら勝手に離れる條件が成り立つてゐる譯だ。
男　そこいらが Neo-Romanticism と云ふんだらう。（笑ふ）
夫　然し事實それより仕方がないぢやないか。この事は眞面目に考へて眞面目に實行する積りだ。
男　何しろ君の未來を見守つてるのは一寸興味があるよ。今夜は勿論會に行くだらうね。それぢや夕飯後僕がよるからつれ立つて行かう。左樣なら。（男退場）
妻　（男を見送りて）隨分な方ねえ。默つて這入つていらつしやるかと思ふと挨拶も碌々なさらずにお歸りなさるんですもの。（暫らくの間茶器をかたづける）私家に歸つてしまはうか知らん。
夫　何を云つてるんだい。
妻　だつてその方があなたのお氣に入るんでせう。あなたはお心の底の方で結婚なさつた事を悔いていらつしやるのね。
夫　そんな事もある。と同時に若し結婚でもしてゐなかつたらどれ程苦しかつたらうと思ふ時もあるんだ。……見ろ、俺の廻りからは友達が一人へり二人へりして幾人も殘つてやしない。神樣も教會ももうないんだ。この上學校の方でも追ひ出されれば俺の心は煤掃きをした空家のやうなものだ。そこにお前ばかりが殘つて居るんだ。
妻　そして私は折角綺麗になつたお家に一つだけこびりついた塵のやうですのね。……あの方さへあなたの奧樣になつていらつしやれば、あなたもこんなにお淋しくはないでせうのにね。あの方もおかはいさうね、病氣ばかりしてゐらしつて。私は小さい時から片意地でなか〳〵泣かなかつたものですから、母などからもこんな可愛氣のない子はありはしないとよく云はれましたわ。私も世の

中つてものは何だか淋しい冷たい所で痩我慢で押し通す所のやうに思つて育つて來てゐたのに、あなたにお選ひ申して心をゆるめたのがほんとに私の越度(おちど)でした。それにしてもあなたは何故あの方と結婚なさらなかつたの。

夫　俺は始めからあの女と結婚する心持なんぞはなかつたんだ。

妻　でもあなたはお父樣に、結婚する位ならあの方としたいと仰しやつたのね。

夫　それは全く見も知りもしないのを俺にあてがはうとなさるからさ。そんな結婚をする位なら氣心を知つてるだけでもあの女と結婚する方がましだと云つただけなんだ。あの女はかはいさうな女なんだ。俺は深い同情はしてゐた。然し俺は戀をしてゐた覺えはない。

妻　でもあの方が結婚なさつた時にはあなたは御病氣におなりになつたんですつてね。

夫　もう度々そんな事を聞かされるのはおれは閉口だ。一體俺の何處がお前の氣に喰はないんだ。はつきり云つてくれ。なほせるものならなほしてやる。ちく／＼針でつツつくやうなやり方はしないでほしいよ。

妻　あなたはこのお話にはすぐお怒りになるのね。

夫　俺はおこりやしないさ。おこつてゐるのは癇癪の蟲だよ。

妻　どうせあなたは口がお上手ですわ。……あなたは何故教會をおやめになつたの。一言の御相談もなかつたのね。それは私どうせお力になれないのは知れてゐますけれども。いやな評判までたてられてもおやめになるには何か深い譯がおありになりますわね。

夫　それはあの場合に殊更らお前に話さなかつたにしても、不斷云つてる事ぢやないか。俺にはまだ基督のやうな嚴肅な生活は出來ないのだ。しようと勉める事さへ、敢へてし得ないのだ。そんなものが教會に居るのは教會を墮落させる事だよ。

妻　それではよくない評判をお立てられになつても仕方がありませんわね。

夫　全くだ。俺は十分それに値するんだ。

妻　あなたはすぐさうおひがみになるからいや。男らしくもない。

夫　ひがむのはお前だ。俺はいまにお前に總てを告白しなければならない時が來るだらう。

妻　もうそんな皮肉を仰有つてはほんとにいやです。私が餘計な事を云つてしまつたのが惡う御座いました。

夫　お前は人の言葉を皮肉だと云ひながら、巧みにもその言葉の裏に皮肉を持たせようとするな。何んとでも云へ。兎に角俺はモウパッサンの小説に出て來る主人公のやう

な間抜けはしないからな。さん〴〵不貞を働いて致くな
つた細君の墓石にあらゆる讃美の言葉を彫り附けるやう
な馬鹿はしないよ。

妻　おや、あなた何を仰しやるの。

夫　（自分を辱かしめ鞭つ如く）何を云つてるんだい。

妻　結婚の時からあなたには自由が差上げてありますから
勝手におあつかひなさいまし。

夫　自由はお前にもやつてあるね。どの位使ひへらしたい。

妻　よう御座いますわ。あなたはほんとにひどい。（袖にて
顔を被ふ）

（婆や登場。）

婆　旦那様またあの高等とか云ふ方が參りまして是非お目
にかゝりたいと申してをります。

夫　夕飯前でゐますから又來て下さいと云つてくれ。

婆　私、旦那様、氣をきかした積りでさう申しましたらち
よつとの間でいゝからお會ひ申したいと申すので御座い
ます。

夫　よし、つれて來い。

妻　あなたよろしくつて？

夫　よくなくつたつて仕やうがないさ。

（高等刑事登場。黒眼鏡の奥より四方を見まはし、與
へられもせざる椅子に腰かけ、妻を見つめたりなどす。
妻は婆やと共に夕食の用意をなす。夫は一寸挨拶した
ゐまゝにてそこいらを歩きまはる。）

刑　今夜も研究會にお出でですか。

夫　さうです、行きたくなつたら行きます。……刑事君、
僕は餘計な事を云ふ男かも知れないが、君はその職掌を
おやめになつたらどうです。自分でも非常に不愉快では
ないんですか。始終人を疑ひ通してゐると云ふのはたま
らないと思ひますがね。是れが君に相當な職業だとは思
ひたくありませんよ。

刑　それは私の考へやう一つにある事ですから。

（不愉快なる沈默。）

刑　研究會では今夜どう云ふお話をなさるのです。

夫　むかうに行つてから考へ出すんです。

刑　然し大抵御腹案が。

夫　（殆ど同時に）然しそれは君に云ふ必要はない。

刑　然し私はそれを伺ふべき義務を持つてゐます。權利も
持つてゐます。

夫　處が僕の方から云はせるとそれを君に發表すべき權利
はあるとしても義務はありませんよ。而して權利の方は
この場合放棄する事にしますから。僕の説を聞きたいと
云ふなら官廳にだつて相當の人も相當の方法もある筈
だ。

刑　（不愉快なる沈默。）あなたは白藝藝者屋だの料理屋に出入なさる相ですな。

夫　深夜出入するよりはましでせう。

刑　それに失禮ですがあなたは或る有夫の女と通じてゐらつしやる相ですな。

夫　（默したるまゝ歩きまはる）……

刑　あなたの學校の校長は餘程寛大たと見えますね。然し社會と云ふものもありますから少し警戒なさつたら宜しいでせう。

（是れより少し前より、先程訪れ來れる男現はれ二人の對話を聞きをる。）

夫　君は少なくとも君の職掌たけに忠實であればそれですむんだ、それは決していゝ事でないけれども。

刑　ふむ、それならあなたの云はるゝ通りに職業を忠實にやりませうか。令狀を執行します。警察へお出でなさい。

男　（中に割つて這入る）そんな亂暴はないぢやないか。君はこの男（夫を指す）の主義の内容も行跡も實否を確めてはゐないんだ。考へて見たまへ、この男が拘引されて職業を失へばすぐ生活にひゞくばかりぢやない、新婚の家庭もこはれれば、懷妊してゐる細君も氣の毒ぢやないですか。少しその邊も考へてやつたらいゝでせう。

刑　私は職務たけの事をすればいゝんだ。私は令狀を執行する命令を受けてゐるのですぞ。（夫に向ひ）さ、直ぐお立ちなさい。

男　そんな事つてかあるか。

刑　餘計な事をする貴樣こそ何んだ。（懷中のふくれて居るのに眼をつけ）何を入れてるんだ。出せ。（突然懷中に手を入れてつかみ出す）兇器でも持つてゐるんだらう。けしからん奴た。（濡手拭の中からは石鹼入れと楊枝出て來る）

男　僕は今錢湯から歸つて來たところなんだ。刑事君、この男を引つ立てて行つた所で、又警察で今と同じやうな馬鹿な目に遇ふぜ。やめたらどうです。

刑　やかましい默つとれ。さ、お立ちなさい。

夫　君はほんたうに連れて行くつもりなのかい。さうか。それぢや行かう。A子一寸行つて來る。行く所に行けばすぐわかる事だからぢき歸つて來る。心配しないでおいで。では君後を賴むぜ。

妻　あなた私も御一緒に行かして下さいまし。（刑事に向ひ）どうぞ私もお連れなさつて下さい。

（刑事取りあはず。そこにありし書狀入りの手箱二箇及び書籍一册を證據物件として押收し夫を拘引し去る。妻泣く。婆やは唯々おろ／＼する。男は眉をよせ

て歩きまはる。)

男　亂暴極まる奴だ。然しとう〳〵あなたの御主人にも革命の時が來たんだ。是れからはあなたも今までのやうに新婚の樂しみにばかりは浸つてゐられませんぜ。

妻　それは私もかねての主人の言葉から覺悟はしてをりました。でもあんな理不盡な事つたらありませんわ。あなたどうかしていたゞく事は出來ませんでせうか。私ほんとにどうしたらいゝんでせう。

男　おまけにあの刑事はいま〳〵しい事を必要もないのに云ふ奴た。藝者家に行つたそれがどうしたと云ふんだ。

妻　それは主人が家に預かつて居ります放蕩な書生がこの間姿をかくしたものですから、それを探すためにそんな所に度々參つたのですわ。それにしても夫の有る女と……聞くもいやな事ばかり云つて……あんな事を云はれたら私ならびし〳〵云ひ返してやりますのに、主人は默つたまゝでゐるんですもの……人が疑ひますわ。

男　(笑ふ) 馬鹿な。あんまり馬鹿らしいので默つて居たんですよ。何しろあなたはあの人を腹のどん底から信じてやらなくつてはいけませんよ。淋しい人ですからね。他人の思ひもよらないやうな事を考へて獨りで苦しんでゐる人ですからね。

妻　ほんたうに私が惡う御座いました。その心はよく判つてゐる癖に、どうして私はこんなに子供らしく我儘だつたので御座いませう。

男　刑事の持つて行つた手文庫に、もし日記や、會の人達からやつた手紙なんかがはいつてはゐませんでしたか。

妻　ゐました〳〵、みんなさうなんで御座います。私どうしませう。

男　何心配する事はありません。然し……玄關に誰れか來たやうだが。

妻　ほんとに……婆やお前行つて見ておくれ。

婆　(しりごみして) 私で御座いますか。私でわかりますで御座いませうか。

妻　早くお出でなね。澤山いらつしやつたやうだよ。

男　僕が行つて見ませう。

(男退場。二人の學生を伴ひて登場。學生妻に不愛想な會釋をする。)

學一　先生はお出でですか。

妻　いゝえ、只今ちよつと出かけました。

學一　さうですか。(他の學生に向ひ) どうしよう。

學二　云つた方がいゝぢやないか。(妻に向ひ) 私達は總代に擧げられて今日は少し不愉快な使命を齎しに來たのです。今俱樂部で學生會を開いてゐるのですが、先生に御自身で說明していたゞきたい事があるのです。

妻　（きつとなり）それはどんな事で御座いますの。

學一　おい、先生が歸られてからにしたらいゝぢやないか。

學二　先生はどこにおいでなのか分らないのでせうか。

妻　わかりませんの。（呼吸段々苦しげになる）

學二　先生が平生自分達に教へて下さる事と先生のこの頃の素行との間には自分達に理解し得ない所が出來たのです。それを說明していたゞきたいのです。

男　餘計な口を出すやうだがそんな事は何も先生の夫人に云ふ必要のない事ぢやありませんか。僕は君等の先生の親友として承らうが、一體先生の言行不一致とは何を指すんです。

學一　おい歸らう。そして先生の歸られるのを待たう。

學二　こゝで待つてればいゝさ。言行不一致ですか。それは明らさまに云へば先生と或る婦人との關係が日頃のお言葉とちがふと云ふんです。

男　君等がその事實を握つて居るのなら先生を待たないでも問題は決定してゐますよ。かまはずに決議をしたらいいでせう。

學一　たしかな事實は判らないのです。判らないからこそ先生に伺はうとするんです。

男　それでは何を根據にそんな事を云ふんです。

學二　貴方はまだ昨日の夕刊を御覽にならないのですか。

男　見ましたよ。然し君等は君等の先生以上に——少なくとも同樣に、新聞を信ずるのですか。君等は隨分先生先生と云つてた人達ぢやありませんか。時々私は君等にこゝでお目にかゝつたやうだ。それが新聞の記事と多少の流言位でぐらつくんですね。

學一　それですからゆつくり先生のお口から譯を承らうと云ふのです。

男　そんな事はわかつてるさ。學生會たあ何んだ。君等に若しほんたうの愛に燃えた心があるなら何故君等はそつと先生の所に來て靜かに先生の意見をたゝかうとはしないんだ。始めから君等には先生に對して眞實の理解も愛もないんだ。

學二　それほどの理解と愛とを inspire し得ないのは先に責めがあるんだ。

男　そんなやくざな先生なら、何んだつて今頃さう騷ぐ。胸糞の惡い僞善はやめ給へ。

（他の學生現はる。）

學三　どうした、先生はゐないだらう。

學一 學二　居られない。

學三　その筈さ。先生は拘引されたんだ。

（學生一及び二驚く。）

學二　さうだらう。然しかうなつては學生會にも及ばない事だ。歸つて總ての報告をしよう。

三人　お邪魔をしました。

（三人退場。妻の呼吸益々苦しくなる。）

男　おや奥さん、どうかしましたか。

妻　何んだか苦くつて……氣息がつまりさうで……

男　（舌打ちして）それはいけない。心配する事はないんですよ。皆んな揑造沙汰だから。それよりあなたの健康が大切です。氣を落ち着けなさいよ。僕は醫者の所まで行つて來ますから。おい婆やぼんやりしないで床でも敷いて上げるといゝ。それぢやちよいと行つて來ます。（退場せしが又もどり來り）婆や誰れが尋ねて來ても決してよせつけちやいけないぞ。（退場）

妻　（婆やの肩によりさめ／″＼と泣く）

婆　さうお泣きになつてはこの婆やが困つてしまひます。お氣をたしかにお持ち遊ばしませ。ほんとに世の中はこれで御座いますねえ。（祈る）神様、どうかあなたにお反き申した一人の僕をお許しなさつて下さいまし。アメン。

妻　婆や、旦那様にかぎつてどうしてもあんな事はありはしないわ。

婆　左様で御座いますねえ。

妻　さうは思はないかえ。

婆　ほんとにいゝ旦那様ではございますが、神様からお離れ遊ばしては……

妻　婆や、お前まで疑ふの……疑ふのかい……そんな人は早くこの家から出ておくれ。お前には用はない。私は是れから警察に行つて來る。

婆　飛んでもないそんなお體で。死んでおしまひになります。

妻　死ぬものか（不氣味げに「死」の方に眼をやる）死ぬものか。旦那様を潔白にして上げるまでは私は死ねやしない。（又恐ろしげに「死」の方を見やる）提灯をおくれ。

（影人提灯を持つて登場。婆や影人より提灯を奪ひ妻に渡さぬやうにする。）

妻　早く、早く、その提灯をおくれと云ふのに。

婆　是れをさし上げるとおもてにおいでになりますから、さし上げられません。

（妻氣息せき／＼婆やを追ふ。その中に舞臺漸次暗くなる。）

妻　（暗黒の中にて）早くおくれと云ふのに。あゝ苦しい、氣息がとまる。灯を早く……

――幕しづかに下る

第　三　場

第一場と同じ舞臺。

夏の夜はしのゝめならんとす。

妻眼をさまし何處を見るともなく見つめて氣息をはずませ居る。夫その傍にあり。

夫　提灯は何んともなつてやしないよ（軒の岐阜提灯を指す）灯は消えたやうだけれども、もう夜があけるからいいだらう。

妻　あなたはいつお歸りになりましたの。

夫　俺は何處にも行きはしなかつたんだよ。夢でも見たんだらう。提灯だの灯だのと囈言を言つてゐたよ。

妻　いやな夢を見ましたのよ。夜があけますか。

夫　お前の大きらひな夜ももう明けるよ。それでもゆうべは割合によくねたね。思ひの外夜か短くてよかつたね。あれから二度程看護婦に氷嚢を取りかへて貰つたが、お前は半分夢中でゐるやうだつた。あれだけ寢られたら少しは氣分もよくなつたらう。

妻　夢を見ないで寢られたら少しは……休まるかも‥‥あゝ、苦しい。もつとそつちに……そつちにどいて下さい……氣息がつまる。

（夫少し離れる。妻吸氣のみ激しくなり苦しみのあまり身をもがく。）

妻　氷嚢を取つて‥‥胸か……胸をあけて……。

（夫近よらうとする。妻手をもつて拂ひのけるやうにし。）

妻　いや、いや……氣息がつまる。酸素……酸素吸入。

夫　あゝ、さうだつた。すつかり忘れて居た。（立つて次室とのへだての襖の所に來り）看護婦さん。……おい、看護婦さん。（舌打ちする）看護婦さん。

看　（とつ拍子もない大きな聲にて返事し）はい。氷で御座いますか。

夫　病人の呼吸が苦るしくなつたから、酸素吸入をしてやつて下さい。

看　はい。（半分寢ぼけたとつ拍子もない大きな返事。容易に起き上らず）

夫　早く起きて下さい。（臺所の方に行き）婆や、婆や、もう夜か明けるぞ。

婆　はい、もう眼はさましてをりまして御座います。只今起きます。

（夫そこいらを片附け岐阜提灯をはづしなどす。やがて看護婦やうやく起き來り寢衣のまゝ婆やに手つだはせて臺所より壓搾酸素筒その他を持ち出す。）

妻　そーつと、そーつと。……暑い〳〵。‥‥團扇を……

（夫煽いでやらんとす。妻手まねにて團扇を取り上げ自分にて煽ぐ。看護婦酸素吸入を施す。その間に夫次室の雨戸を開け電報三通を大急ぎにて認む。そつと婆やを呼ぶ。）

婆や　大分御容態がお惡いやうでゐらつしやいますねえ。

夫　惡い。それでね。

（この時、時計五時をうつ。）

夫　もう五時か。（自分の時計を出して見る）あれは七分ほど進んでゐる、今丁度五時七分前だ。六時にならなければ電報は取りあつかはないから六時がうつたらお前は忘れないでこれを出しに行つておくれ。それから湯をたくさん沸かしておいとくれ。（病室に入り來り）どうですいゝやうか知らん。

看　大分呼吸がお樂におなりのやうですよ。（妻に向ひ）この位に致しておきませうか。（妻うなづく）又少し間をおいてしませう。（吸入をやめる）

妻　（夫に）看護婦さんに起きてゝもらつてあなたお休み遊ばせ。看護婦さん……そんなに……そんなに近くにゐては苦しい。あゝ、暑い、暑い。

夫　よし／＼寢るよ。お前も樂になつたらよく氣を落ち着けてお休みよ。（夫蚊帳の中に這入る）

（暫らくの後看護婦居睡をしはじむ。妻看護婦を呼びながら寢がへりをうつ。）

妻　看護婦さん。

看　（驚いて眼をさまし）はい。

妻　子供の寫眞……あすこにある子供の……子供の寫眞を……もつと近くに持つて來て見せて……下さい。

（看護婦立ちて、寫眞を取り來り自分先づゆつくりと眺め、妻の眼の前におく。）

看　ほんとにお可愛いゝお坊ちやんがたですわねえ。三人ゐらつしやるんですね。どんなにかまあお子さん方の方でもお母なんのよくなるのを待つてらつしやるでせうねえ。

（暫らくして看護婦再び居睡りはじむ。臺所よりは婆やのありふれたる讃美歌の鼻歌聞こゆ。やがて看護婦ばつたりと前に伏して寢倒れる。妻寫眞を見つゝ泣く。）

妻　あなた。

夫　（直ぐ答へる）よし、何んだ。（蚊帳より出て來る）

妻　やつぱりあなた……あなたがついてゐらつしつて……ゐらつして下さいまし。而して……そして看護婦をあつちに……あつちにやつて。

夫　おい、看護婦さん。あなた向うに行てゝよござんす。ゆうべ頼んだ林檎の電話はかけてくれたでせうね。

看　あんまり遲う御座いましたから、今朝早くにしようと思つてゐましたんです。
夫　そんなら今朝早くかけておいて下さい。
看　はい。（時計を見）お藥をさし上げておきませう。
妻　もういゝ……
夫　飲んでお置き、最後まで體を大事にしなければいけないんだからね。
妻　はい。それなら飲みます。（藥を飲む。）
看　お體溫を……
夫　よし／＼それは僕がする、おいといて下さい。（看護婦次室に退く。婆や次室に來る。）
夫　さ、今朝は一つ體溫を取つて見よう。まだ暑いかい。
妻　えゝ。
夫　どれ。（檢溫器をかく）
看　婆やさん、お前さんお隣に行つて林檎の事を頼んで下さいな。
婆　いやだよ、それはお前さんが頼まれた事ぢやないか。（病室の方を見やりながら親指を出して）お天氣が惡いだらう。
看　いやになつちまふよ。
婆　これ（小指を示し）さへよければ、そんなでもないんだけれども、わるいとなるとやつあたりだからねえ。どうだらう。
看　もう駄目よ、かはいさうに。
婆　さうかねえ。そりや何んにしてもお氣の毒な事だねえ。
看　それぢや私ちよつと行つて來ますからね。（看護婦退場。婆やは次室を片づけ看護婦の小箱の中、葉書など見たる後退場。）
妻　子供を齒醫者にやつて……下すつて？
夫　うむ、昨日の朝兒きを連れて行つてやつた。痛がつて困るだらうと心配したら案外勇ましくしてゐたつけ。もう體溫はいゝだらう、どれ。（檢溫器をあらためて）六度八分だ。熱はないんだがなあ。（暫らく沈默）齒醫者でエンジンをかけられたのさ。初めてなもんだから驚いてゐたつけが、口の中を自動車が通ると云つたんでお醫者まで笑ひ出したよ。（暫らく沈默）呼吸が少しは樂になつたやうだね。なつた？　さうか。汗が出てる。玉のやうに。拭くよ。（暫らく沈默）おゝ、朝顏が綺麗に咲いた。（緣を下り朝顏の鉢三つほど妻の枕許に持ちこむ）美しいねえ。（暫らく沈默）「昔見しはかなき夢のゆくへにも似てあはれなり朝顏の花」――お前が作つた歌だぜ、覺えてゐるかい。（沈默）
妻　ほんたうに夢のやうね。

夫　（妻の意味する所は氣附きながらわざと氣附かぬ風に朝顏を見やりて）さうだなあ。
妻　あなた。
夫　何んだ。
妻　たつた一つ……一つだけ伺つておきたい事があるの。
夫　何んだい。
妻　私、私は……あなたを信じ切つてゐてよう御座いますか。
夫　（男らしく）いゝとも。俺はこの一言をはつきりお前に云ふ事が出來るために、他人が知らない程俺の迷ひ易い心と戰つて來た。而して俺は幸ひにも勝ちぬいた。俺はそれを自分ながらいさぎよく思ふんだ。安心して俺を信じ切つていゝよ。俺もお前を心の底から愛する事が出來るのをありがたく思ふ。（涙して）俺たち二人はほんとに幸ひだつた。
妻　うれしう御座います。もう……もういつ死んでもいゝ。
夫　さうだ。お前はそこで生きてるより、俺の心のなかで餘計生きてゐる。俺の心はお前を吸ひ取つてしまつたんだとさへ思へる。然し今お前を失ふのは――俺がやつとお前の夫らしくなつた時にお前を失ふのは苦しいからな、出來るならなほつてくれ、いゝかい。（妻うなづく）俺の血管の中にはお前が想像も出來ない程毒血が流れてゐるんだ。結婚してからもいくたりの女に誘惑を感じたか知れなかつた。ある時は運命がお前以外の女に俺を結び附けてるなと思つた事さへあつた。然し俺はそのたんびにたつた一人でお前にさへも打ち明けられない戰をたたかつたんだ。而して血みどろになりながらも、一つ／＼勝ちぬけて來た。一つ勝つたんびにお前の俺に對する愛と、俺のお前に對する愛とがはつきりわかり出して、それが力に變つて來たんだ。Ａ子、俺は俺たちの淋しい道を悔いないよ。わかるか。俺たち二人は無駄には生きなかつた。一つの力となつて生きて來たんだ。わかるね。（妻うなづく）是れは俺たちが感謝すべき事だ、誇るべき事だ。謙遜な心で誇るべき事だ。
妻　もうほんとに天國もいりません。ほんたうにうれしくつて涙がこぼれます。私は死んでも、もつと生きてますのね。
夫　さうだ、お前は死んでも生きてる人の一人だ。だがお前は肉體的にも死んではいけない。
妻　生きられるだけ……生きられるだけ勇ましく生きます……もう何んにも云ふことはありません。（暫らく沈默）足の方が寒くなりました。湯たんぽを……お醫者樣を。

（眼をとぢて、氣息ます／＼せはし。）

夫　看護婦さん、看護婦さん。

（婆や臺所より走り出る。）

婆　看護婦はまだお隣から歸つてまゐりませんので御座いますよ。ほんとにしやうのない人で……

夫　餘計な事は云はなくともいゝ。早くありつたけ湯たんぽを作つて來てくれ。それから看護婦に……居ないんだつけな。病院に行つてもらひたいんだから迎へに行つて來てくれ。湯たんぽは俺がする。

婆　ちよつとお待ち遊ばして下さいまし。ぢきお湯を沸かしますから。

夫　馬鹿！　さつきあんなに言ひつけておいたのをどうしたんだい。（妻の脚をさはつて見る）冷たい。今まで暑い〳〵つて云つてたのにこんなに冷えて居る。おい藥罐か何かに少しでも沸いてはゐないのか。

婆　左樣で御座いますね、ひよつと致したら土瓶に（臺所に去る。やがて土瓶と湯たんぽを持ちて登場）これだけ御座いまして御座います。（湯たんぽに湯を入れかゝる）

夫　それつぱかりの湯をそんな大きなものに入れて……こつちによこせ。而して早く隣に行つてくれ。

婆　お隣に參りまして何んと申上げますので御座い……

夫　（舌打ちして）看護婦を呼んで來るんぢやないか。

婆　おや左樣で御座いましたね。では一寸いつて參ります。

（夫藥瓶の藥を庭に捨てそれに土瓶の湯をうつし自分のハンケチに卷きて妻の足もとに入れ、心配げにその顏を見やる。）

夫　どうしたと云ふんだ。まだ歸つて來やしない。Ａ子、寒いか。

妻　（驚きたるやうに眼を開き、手まねにて夫を遠ざける）氣息が苦しいから、もつとあつちに……そこいらに在るものを……みんな……みんなあつちに……

夫　これか。

妻　みんな……みんな……

（夫立ちて朝顏の鉢を庭に捨て、枕許にあるものを臺所に移し居る。看護婦、婆やと共に登場。）

夫　看護婦さんすぐ病院に行つて誰れかに來てもらつて下さい。

看　どんなです。（近寄りて脈を見んとす）

夫　あなたより醫者の方がたしかだよ。すぐ行つてくださ い。

看　どなたをお願ひしませう。

夫　そんな事を……誰でもいゝぢやないか。婆や、湯は沸かしてゐるか。

婆　はい〳〵只今。（看護婦、婆や去る）

妻　（再び眼を開き）掛物も何もみんな……部屋をきれいにして……

夫　うむ、わかつた。
（總てのものを臺所に移し子供の寫眞も片づけんとす。）

妻　（再び眼を開き）いゝの……それは。（夫を恐ろしく睨む）……それから……それからあなたと……あなただけ……こゝに……こゝに……寒い。

夫　今湯たんぽを持つて來るよ。その中にお父さんもお母さんも見えるから、氣をしつかり持たなくては駄目だよ。わかつたか。

妻　（かぶりをふり）あなた……あなた。

夫　俺はどこにも行きはしないよ。安心しろ。
（醫者來る。簡單に挨拶して第一場の如く注射す。）

醫　電報はお出しなすつたでせうな。

夫　出した筈です。

醫　こゝ二時間とはおもちになりますまいと私は思ひます。

夫　どうかして兩親の來るまで……

醫　その手あてはしましたが、どうも……（脈を見る）結滞がひどいですから……（爪を見る）

妻　（眼を開き）あなただけ……こゝにはあなた、あなただけ……

醫　それでは私は隣のお部屋に行つてゐます。

夫　さうですか。恐れ入りますが湯たんぽをどうか。

醫　畏りました。
（醫者次室に去る。妻又眼をしげ／＼と部屋を見まはす。婆や湯たんぽを持ちて入り來りこの樣を見て心當りありげにうなづく。）
（醫師次室にて看護婦より容體を聞き病床日記に書きこみ居る。婆や臺所の方より次室へ入り來り。）

婆　先生。奥樣がね、只今からやつて部屋中をしげ／＼と御覽になつてゐらつしやいましたが、どなたでもおなくなりになります前に遊ばす事で御座いますねえ……ほんとに何んと申上げてよろしう御座いますやら……いゝ御親切な奥樣でゐらつしやいましたが……
（夫、妻を見戍りながらこの言葉を聞き眼を拭ふ。）
（そのまゝにて舞臺暗くなる。）

――ダーク・チエンヂ

第四場　夢の場

妻の夢。

序幕と同じ舞臺。始めは明滅する焰の外暗黑。漸次明るくなる。

焰の前には「死」のみ默坐す。

五つと三つ程の子供戯れ居り、傍の搖籃には乳兒ねか

しある。妻いそがしく働く。

妻　さあ片づいたからこゝにいらつしやい。よくおとなしく二人で遊んでゐましたね。どれ。（一人づつかき抱きて接吻してやる）まあ、あなたのキスの甘いこと。今のお菓子がどつさりお口のまはりについてゐますよ。（手拭を出してふいてやる）赤ちやんにももう御馳走を上げる時分だから、ちよつとお待ちなさいよ。（妻牛乳を調合す）

長子　マ、ちやん、パ、ちやんはまだ？

妻　もうぢきお歸りでせうよ。それまで婆やと一緒におんもにいつて遊んでいらつしやいな。でも戸外は寒いか知らん。婆や。

（婆や登場。影人に導かれて來る事前の如し。）

妻　あの戸外がさう寒くなかつたらお庭に連れてつて遊ばしておくれ。

婆　畏りまして御座います。さあ坊ちやまがた。

（二人の子供婆やに連れられて去る。）

妻　（牛乳を乳兒に與ふ）そらお待遠うさま。おいしうござんすか。その限かよ……笑つて。

（學生二登場。）

學二　奧さん行つて參りました。大變喜んで御禮を云はれました。

妻　さう、御苦勞さま。下田さんはどんな御樣子でした。

學二　どうもよくない風です。お母さんが何んだかやつれてお出ででした。

妻　おかはいさうねえ。

學二　盃と帛紗は何處におきませう。

妻　さうね、その棚にでも置いといて下さいまし。

（學生二、棚の所に來り。）

學二　下田さんではいつ奧さんが死なれたんですか。

妻　去年です。去年ではない、もうをとゝしになりますねえ。

學二　下田さんは奧さんから結核が感染したんでせうね。この頃でも時によると二時頃まで勉強するんださうですが、その翌朝はきつと腸から血が下るんだと云ひました。學校に出ても暇の時間は宿直室にぶつ倒れてゐて、授業時間が來ると、教室に出て、例の通り熱辯を振ふものですから、前の方にゐる生徒は唾が飛んで來さうで生きた心地はないと云つてゐるさうです。學校の衞生から考へると隨分問題ですね。

妻　ほんとに自分の子でも預かつていたゞいてるとすると怖う御座んすね。けれども下田さんの方から考へると、たまらない程御同情が出來ますわ。お母さんはあの通りのお齢なのに奧さんのお殘しになつたお子が二人もおあ

りでせう。それがばつたり俸給から離れておしまひになれば右にも左にも動けはしませんわ。下田さんが時々いらしつてね、あすこの醫者に試驗をしてもらつたけれども少しも徴候がないとか、こゝの醫者はビルケの反應を認めたけれどもその反應はさつぱり的になるものではないと云つたとか、云つてゐらつしやるのを聞いてゐますと、お氣の毒でならなくなりますよ。どうかして御自分の病氣が傳染性のものではない事を證明して御自分の良心を安心させたいと思つてゐらつしやるのですわね。あんな勉強家な、中學校の先生にしては勝れて實力のある方ですのに、惜しい方ですのね。

學二　さうです。少し世の中を見ると不公平な事ばかりですね。それから思ふと先生の御境遇はお仕合せです。

妻　さうですのよ。ほんとに私どもは勿體なくなつて恐ろしい位です。主人も始終さう云つてをりますよ。

學二　然し私は……さう五年前になりますねえ……先生に喰つてかゝつて、學校から先生をやめさせるやうにしたあの時の事を思ひますと今でも背中に冷汗が出ます。それなのに先生はかうやつて私をお家において下さるんですから、私は時々實際たまらなくなるんです。あの頃は先生は隨分お苦しみになつたでせう。

妻　いゝえ主人は割合に平氣でしたの。私こそ餘計な事を……馬鹿だつたものですからね……餘計な苦しみをしました。

學二　お詫びのしやうがありません。

妻　いゝえあんな事があつたんで私も少しづつ眼があいて來たんですもの、……今でも御禮がしたい位ですわ。……ほんたうですのよ。その代り貴方も少しは修行をなさいましたわね。

學二　さうですとも。あの時先生の仰しやつた言葉は私忘れる事が出來ません。

妻　何んと云つたんです。

學二　私はあれから總代になつた二人と俱樂部に歸つて、先生が拘引されなさつた事を報告し、先生の抱かれてる主義の立場から考へれば有夫姦位の事はありがちの事だし、主義そのものが日本の國體や政體と一致しないと云ふ事を極力主張して、たやすく先生排斥の決議を成り立たせたんです。そして先生はすぐ學校を退かれました。先生のやり口があまり執着かなさ過ぎるので、一部のものは似而非物（にせもの）の本性がます〳〵現はれたと云ふし、一部のものは生活に餘裕のある人間の遊び半分さが見すかされると云つて笑つてゐました。けれども私には唯々笑つてばかりすまされない事が起つたのです。それは先生が一通りの取調べの後で證據不十

分で歸つて來られたからです。かうなると私の先生に對する非難の根據が丸崩れになる譯ですからね。それはかりでなく、先生が一度も自分を辯解なさらなかつた事が不思議に思はれてならなかつたのです。お寒いんですか。

妻　えゝ何んだか寒う御座んす。子供たちは戸外で大丈夫でせうか。

學二　子供は風の子です、大丈夫ですとも。それから私は苦しみ出しましてねえ。とう／＼こらへ切れなくつて先生の所に一人で伺つたのです。

妻　さうだつたんですか。丁度あの頃私は一番目の子のお産の時でしてね。

學二　さうでしたね。

（急に賑やかになり夫子供等と戯れつゝ登場。）

妻
學二　お歸りなさいまし。

夫　あゝ。雪になつたよ。坊主共は二人きりで雪の中に犬ころのやうになつて遊んでゐた。

妻　婆やは？

夫　女中部屋に小さくなつて居た。

妻　あんなに賴んで置くのにねえ。

夫　（肩より亞麻製の大袋を下し）馬鈴薯と玉葱は是れだけあれば當分いゝだらう。雪が大分深くなつてるから掘り出すのに骨が折れた。今日は君厩肥を畑中に播いて來たんだがね。

學二　それは早過ぎませんか。あれは雪解け前後でいゝんでせう。

夫　何、それだつて少しきゝめが薄くなる位のものだらう。おい、坊主ども來い。（大手を開いて子供を呼ぶ。子供かけよる）この雪は。（拂つて抱き上ぐ）

妻　あなたこそ一ぱいですよ。（夫の肩を拂つてやる）

夫　ベビーはどうした。寢てゐるな。さ、もういゝからお前達は婆やの所にいつてストーヴでこれを焙つておもらひ。おいしいよ。

（子供等父の手より馬鈴薯を受取り、「婆や」と呼びながら退場。）

學二　御本人がいらしつたから私のお話の先きは先生からお聞き下さい。

夫　何の話。

學二　先生の懺悔です。

夫　（陰鬱になる）そんな事は一度でもういゝ事ぢやないか、俺の傷をさうあら／＼しく撫でないでくれ給へ。A子。下田さんのお婆さんに途中で遇つた。あの年で小さい方の子をおぶつて、雪の中を歩きにくさうにして居られた。病院に藥を取りに行く處たつて云つてたが、いろ

いろお前に禮を云つて居られたよ。馬鈴薯を分けるやうに云つて置いたから後で婆やに持たしてやつて置けよ。

學二　先生……

夫　いつまでも先生は困るな。もう百姓になつてから五年たつよ。

學二　外に一寸呼びやうがないもんだから……それぢや私から奥さんに一應お話していゝでせう。私がこちらに御厄介になつた譯を奥さんはまだ御存知がないのですから。

夫　女は好奇心の强いものだな。それなら話したまへ。俺は讀み物をする。（机の所に至り）Ａ子、こゝにこんな手帳があるよ、お前んだらう。（水色の手帳を示す）

妻　さうです。（急いで受取る）

夫　お前の祕密な手帳だ。こんな所に置いとくと俺が讀む氣にならないとも限らないよ。

妻　（笑ひながら）さうですね。（棚にしまふ）

（夫讀書す。學生二、妻と語る。妻は棚にある風呂敷と盆とを片附けながら。）

學二　私は何しろこの通りの性質ですからね、何故あんなひどい評判を立てられて辯解が出來ないんですと正面からお尋ねしたのです。さうしたら先生が意外にも辯解が出來ないからしないのだと云はれるのでせう。一縷の望みを抱いて來た私はがつかりしてしまひました。それからです。先生が懺悔をなさつたのは……何んだか話しにくくなりましたね。かうです、先生は奥さんと結婚なさつてからも竊かに心をよせた婦人達があると云ふのです。その事は御承知でせう。その婦人の中の一人には殊に心を牽かれたんださうです。そしてその婦人は夫の有る人だつたんだ相です。そしてですね。ちゞめて云へば、先生は運命と云ふものにでも引きずられるやうになつて、或・夕方ふら／＼とその婦人の家の方に行かれたんだ相です。

妻　然しとう／＼その誘惑には打ち勝つたのでせう。

學二　さうです。

妻　それぢや立派に辯解が出來る筈ぢやありませんか。

學二　然し先生はさうは考へられなかつたのです。基督の言葉の、女に對して心を動かしたものは姦婬を犯したものだと云ふあれをきびしく御自身の上にあてはめられたのでせう。

夫　さうぢやないんだ。さう云ふ譯ぢやないんだ。（室中を歩きまはる）僕は君が來た時までは幸にも一つ／＼誘惑に打ち勝つてゐた。然し僕の中の毒血はなくなつては居なかつたんだからね。僕は自分の未來に對して自分の心を保證することが出來なかつたんだ。何時どんなつまづ

きをするだらう、さう思ふと僕は默るより外にしやうがなかつたのさ。退校の處分にきまつた學生を僕の家に引き取つたのも、云はば自分の心を憐れんでした事だつた。この心は學生を動かす事が出來るとも思つてゐたのだが、世の中はそろばん通り行くものではないね。その學生は僕の所に來てからますく墮落してしまつたよ。

學二　私は兎に角その時先生の心に觸れたんです。この言葉が僭越なら、觸れたと思つたんです。そして先生は寛大にも先生の敵を容れてくれたんです。

夫　さ、敵と云へば敵だが、味方と云へばこの上もない味方だ……何しろお互に一寸づゝでも五分づゝでもいゝから、偉くなつて、よくなつて、行きたいもんだ。人生の可能性を具體的に證據立てるほどいゝ仕事はないからね。

學二　さうです。

夫　（妻に向ひ）俺が辯解をし得なかつた譯はお前も解つたらう。俺が學校をやめたのも學生のためによかつたんだ。俺のやうな危險人物は下田さんの病氣よりもつと學生には危險だからな。

學二　その事はどうかもう云はないで下さい。私は非常に苦しう御座います。……何か外に用事はおありになりませんか。

夫　何んにもない。部屋に行くならこの袋を婆やの所に持つて行つて、それから郵便函を見て來てくれ給へ。

妻　下田さんに今日も何か上げたのか。

夫　あつめものとあの藥を少し上げましたの。あの藥は大變きくやうだつて仰しやつてでしたつて。

妻　さう信じられゝばきくだらう。……あの藥と云へば、結婚してすぐ二人で東京からこゝまで旅をした時の事を覺えてゐるかい。

夫　さうでしたねえ。お父さまが何にでもきくからつてあの藥を下さつたのを、私があんまり飲み過ぎたもんで、頭痛を起したり鼻血を出したりしてしまひましたつけね。

夫　もう一つあるんだが。

妻　何んでしたかねえ。

夫　倶知安あたりから俺達の隣りに夫と一緒に乘つた婦人が汽車に醉つて苦しんでゐると、お前がそれを見て懷中からあの藥を出したもんだ。

妻　そんな事がありましたか知らん。

夫　あつたさ。何をするかと見てゐると自分で一粒のんでまた引つこめてしまつた。

妻　さうでしたかねえ。

夫　さうかと思ふと又出したつけ。そして又引つ込めてし

まつた。思ひ出したらう。そんなにしてお前は何度出したり引つこめたりしたか知れやしなかつた。そしててれかくしに時々自分で飲みたくもないのに一粒づゝ口に入れたよ。

妻　うそですわ。

夫　うそなもんか。そして札幌に汽車が着きさうになつて降りの奥さんがいそ〳〵と降りる支度をする頃にやうやう大勇猛心を起してその奥さんの所に薬を持つて行つてやつたぢやないか。奥さんは迷惑さうに紙切れにつゝんで帶の間にしまつてしまつたさ。

妻　うそでせう。

夫　あの頃からすると大分お前の面の皮も厚くなつたよ。そんな事も一つ話になるまでになつた。然しこゝまでに來るにはお互に危い難所を通つて來たつけな。

（學生二登場。一枚の郵便を夫に渡す。）

夫　噂をすれば影だ、お父さんから來たんだ。（手紙を讀みながら）俺は幾度むしやくしやして來て家庭なんぞたゝき壞はしてしまはうかと思つたか知れなかつた。お前も時時自分の生活が眞暗になつたつけね。

妻　そんな事はありませんわ。

夫　無いとは云はさないよ。お前の心の隅に……と云ふより女の心の隅に根づよく隱れてゐる華美好な、いたづらものがお前の愛を幾度も眼隱ししたんだ。そればかりぢやない。どんな柔順な女でも、イヴ以來男に對して持つてる恨みが頭を持ち上げる時のあるものだ。お前は氣が強いだけに可なりそれで苦しんだのを俺は知つてゐる。東京も寒いさうだ。然しみんな丈夫だとさ。頭の冷えるお母さんが又眞綿帽子をかぶんなさる時が來たらう。花が散つて實がなつた。是れから俺達はうんと腹をきめて靜かに熟してゆけばいゝんだ。お父さんもおだやかになられた。（手紙を妻に渡す）今月は金を送る所にはみんな送つたかい。

妻　えゝ送りましてよ。（手紙を讀む）ほんとですのね。いゝ方ね。私お父様の笑顔を拜見すると世の中が急に明るくなるやうに思ひますわ。

夫　心の底の綺麗な方だからな。もとはよく無鐵砲に喧嘩をしたもんだが、この頃はなつかしくばかり思つてしまふ。どことなく俺にたよつて來られるやうな所が見えたりすると、あの勝氣な方も齡のせゐだと思つて俺はしんみりした心になる。何しろ長いきしておもらひしたいものだ。然し俺のして來た事が絶えずお父さんの心に不安を與へてるのは苦しい事だ。是ればかりはしかたがないけれども。

妻　妙な事がこゝに書いてありますのね。追書に。

夫　そこは讀まなかつた。何が書いてあるい。
妻　(讀む)「追て序ながら申上置候。老生萬一の後の事は遺言に作り母上に預けおき候間、その時機來らば母上と同座にて御披見なさるべく候」ですつて。
夫　そんな事が書いてあるんか。
妻　えゝ。
(沈默。)
妻　私も遺言が出來てゐますのよ。
夫　何、馬鹿。
妻　人はいつ何時死ぬかわりませんからね。
夫　俺は今日何んと云ふ事ばかり聞かされるんだ。馬鹿な事を云つてくれるな。
妻　さうです、あなたはお聞きにならなければなりません。
(水色の手帳を出す)
夫　それに書いたのか。
妻　さうですわ。まあ椅子に腰かけて下さいまし。そして氣を落ち着けて下さいましよ、讀みますから。(讀む)
「あなたに手紙を差上げたいと思ひましても、手紙を書けばきつとこの頃の私の心持が現はれませう。それは私にとつては何んでもない事で御座いますが、あなたや皆樣には悲しい事と存じますので、こんなに始終私の事を案じてゐて下さる上に、猶はお悲しめ申すのが私には堪へらない苦しみです。そんなら一人でたゞ思つてゐればよさゝうなもので御いますけれども、それも何んだか淋しいのであなたに手紙を差上げる代りにこゝに認めておきます。私が死んで後、(何となく恐ろしげに「死」の方を見やる) 御覽になりませう。けれど決して悲しんで下さいますな私の爲めには。後に殘られたあなたや子供達御兩親樣の爲めに泣いて下さい。
「死が忍びやかに(恐ろしげに「死」を顧みる)近づいて參ります。私にはそのひゞきを聞くことが出來ます。あなたには聞えないと仰しやいましても。私は自分の爲めに悲しみません。
「あなたは私が失望しすぎると仰しやいますが私はさう思ひません。皆樣にはお氣の毒で御座いますが、もういけません。いつかは死が參ります。そしてその死がもう近づいてるのを私は知つてゐます。(「死」の方を顧みる)
「私は死を少しも恐れません。かうして筆を執つてゐましても涙さへ浮びません。人らしい事をしないで死ぬと云ふ事が殘念で御座いますけれども、死そのものは悲しくも恐ろしくも何んとも御座いません。こんなにひどくなつてはどうせ全治しないのですから、生きてゐるのは名のみで、唯々ぶら〳〵してゐるよりも死ぬ方が、すべての爲めによくはないかと思ひます。全快して生きられ

るならこんな嬉しい事は御座いませんけれども、今はもうそんな事は願はれもしない事となつてしまひました。

「この十日ばかり私の心は死といふ事ばかり思ひつゞけました。さうして今では死を思ふ事は樂しみのやうになりました。戀人の上でも思ふやうに死ばかり思つてゐます。

「それから私はあなたの御事業の御成功を見ないで死ぬのが殘念で御座いますけれとも、必ず御成功遊ばす事を信じてをります。總ての事に打ち勝つて御成功遊ばして下さい。

「それから皆樣にお願ひ申して置きたい事は三人の子供達の事で御座います。弱い私の子供達だからやつぱり身弱であらうなどと云ふ考へは決して／＼どなたもお持ち下さいますな。ほんたうに、いつも申上げます事ですが、人の精神の力は恐ろしいもので御座います。私に似ず父親に似て三人の子等は丈夫だと云ふ事をお信じ下さいまし。さうかと云つて丈夫にまかせて病氣の時手おくれなとはさせないやうにしていたゞかねばなりません。あゝ私の一念は三人の子供達を立派な丈夫な人にしないではおきません。必ず立派に致します。

「死ぬ時は誰れにも知られずに一人で靜かに死にたいと思ひます。最後の苦しみの樣を人樣から見られる事は一人の苦しみです。親子兄弟に遇ふのが普通では御座いますが私はどなたにもお目にかゝりたく御座いません。

「子供達には私の死と云ふ事を知らさないやうにして頂きたいと思ひます。お葬式などには參列させないで下さい。小さい淸い子供心に死とかお葬式とか云ふ悲しみを殘させるのはほんたうに可哀さうで又惡い事で御座います。ほんたうにどうぞ知らさないやうに、お葬式の日などには何處かへ遊びにやつて下さい。大きくなつて知る時が參りませう。それまでは病氣と云ふ事にしておいて下さい。

「あなたはこんな何一つとりえのないものをよくも愛して下さいました、導いて下さいました。ほんとに心の底の底から私は難有いとも、うれしいとも、もつたいないとも思つてをります。あなたのやうな方を夫に持つたと云ふ事が短い生涯の中に唯々一つの誇りで御座います。この誇りの爲めに私は淋しい中にもよろこんで死ぬ事が出來るので御座います。

「ほんとにこんな病氣で若死しようとは思ひもかけない事で御座いました。あとにお殘りになるあなたと子供達の爲めに私は涙を惜しみません。（こらへ切れずして涙をのみつゝ泣く）

（手帳を捨て、輝きたる顏になりて夫の方に近づき）この

頃の私の心は美しう御座います。から云ふ時にこそエデンの園が見られるので御座いませう」

（この間に影人出て來て家具一切を運び去る。）

夫　どうしたと云ふんだ。お前は本氣でそんな事を書いてゐるのか。

妻　運命で御座います。もう永く／＼お別れする時が來たやうです。たつた今まであなたのお顏にあつた笑ひも私の顏にあつた笑ひも逃げてしまひました。皆んな逃げてしまひました。

夫　俺には何もかもわからなくなつた。

妻　笑ひ許りぢやありません。私共の暖かつた家も、婆やも、學生の方も、お友達も見えなくなつてしまひました。御覽なさいましこの廣い野を。

夫　何んと云ふ淋しい景色だ。

妻　何んにも見えませんね。

夫　淋しい。

妻　寒い／＼雪がふつてる許りです。

（影人籠の中に雪紙を滿たし來りそれを舞臺にまき退場。雪紙やがて上より降り來る。）

（夫妻相抱く。）

妻　私はあなたの懷の中で靜かに眠ります。子供達に逢はして下さい。

（影人子供三人を連れ來る。）

妻　寒いだらうね。さあ、私の所にいらつしやい。さ、あなたも。さ、あなたも。みんないゝ子ですね。あたゝめて上げませうね。でもマヽはね、自分が寒さにふるへてゐるのだから、どうして上げやうもないわね。可哀相に。どうして上げたらいゝだらう。（見まはす。「死」の前に明滅する焰あるを見出し）あ、あすこに私の火が燃えてゐる。あの火が燃えてゐるかぎりはあなた方もパヽさんもあたゝめて上げますよ。御覽、あすこに坐つてゐらつしやるをぢさんは怖いをぢさんだから決してあの方を見てはいけませんよ。あの方はあなた方をどうもなさりはしないんだからね。あなた（夫に向ひ）もあれを御覽になつてはいけませんよ。

（妻、子供をいたはりながら焰の處に近づき手を翳す。）

夫　火が消えて行くではないか。

妻　その時に私は死ぬのです。

夫　あれは何んだ。（「死」を指す）

妻　私はあの方の顏を永い間見つめましたからもう怖くはありませんけれども、あなたが御覽になつてはいけないものです。さ、もう火が消えます。寒い／＼暗黑が來ます。あなたは子供達を連れて早くこゝから逃げて下さい。

ました。

夫　お前もおいで。俺はお前を連れずにどうして此處が立退けよう。

妻　私も一緒に參りたいのですけれども、もう駄目です。（泣く）さ、早く逃げて下さいまし。

（影人來り夫と子供達とを强ひて焔より遠ざける。夫抵抗しながら退場。妻いつまでも〳〵あとを見送る。）

妻　（接吻をなげ）もう見えない。（泣く）

（時計七點をうつ。影人等妻を取りかこむ。）

「死」（左手に持てる砂時計を高くかゝげ）砂はまだ殘つてゐる。お前達はさう慌てる事はいらないのだ。

（妻その際に戰慄して焔の上に倒れかゝる。）

（舞臺急に暗黑となる。）

――靜かに幕

第五場

第一場と同じ舞臺。
午前七時七分前。
妻、靜かに横はる。夫、妻の手の脈を見つゝその顏を注視す。
次室には醫師と看護婦よき所に坐して各々雜誌を讀みつゝあり。

夫　（小さき聲にて）A子、何を見詰めてゐるの？（ふと驚きし樣子、醫師を呼ばんとする如く顏をもたげしが、思ひかへして手を妻の眼に翳す、眼瞬がず。驚き）A子！　A子！

夫　醫長さん。

（次室の醫師と看護婦雜誌を捨てゝ立ち上る。）

（醫師、看護婦病室に入り來る。）

夫　瞬きをしません。脈を見て下さい。

（醫師脈を見る。）

夫　眼をふさぎましたね。脈はまだありますか。

醫　ありません。おい看護婦、水を用意して、水を。

（看護婦臺所に入り水の入りたるコップと杉箸の先きに脫脂綿を附したるを持ち來る。）

看　是れで水をおあげなさいまし。

（夫、末期の水を妻に與ふ。婆や泣きながら出で來る。）

夫　今になつて泣いたつて仕樣がない。そんなに取りみだしてはいけない。お前も水をあげてくれ。

婆　さう仰しやいますけれども、旦那樣、是れが泣かずにをられませうか。（聲を立てゝ泣く）

夫　しいッ。靜かに。

婆　まあ喘いでゐらつしやいますよ。神樣。奧樣をお助け遊ばして下さいまし。

醫　申し憎う御座いますが、お事ぎれになつたやうです。
（妻の胸に聽心器をあて、やがて夫の方に向きて嚴かに）
殘念で御座いました。

夫　……（たゞうなづく）

醫　（時計を出して見て）丁度七時ですな。

看　（同じく）さやうで御座います。
（醫師看護婦末期の水を與ふ。）

婆　奥樣、とう／＼あなには神樣のところへいらつしやいましたか。私も、奥樣、おッつけ參つてあちらでお目に懸らせて頂きます。（末期の水を與へて）アーメン。
（暫らく沈默。）

醫　（看護婦に）後の事を手落ちなくして上げるがいゝ。何か必要なものがあつたら病院に行つておいで。私が歸つたらすぐ車夫を一人よこしておくから。（夫に向ひ）御愁傷はお察ししますが、是ればかりは還らぬ事ですから、お諦めが御大事です。それでは私は一先づ御免を蒙ります。

夫　御禮の申しやうもありません。いづれ後程。
（醫師立ちて襖を開けんとし。）

醫　何か外に御用はありませんか……電報でも。

夫　電報を願ひませう、私の兩親と妻の兩親にあてゝ。

醫　畏りました。普通の文句でよう御座いますな。

夫　「今朝七時A子靜かに逝く」としていたゞきます。

醫　承知しました。（退場）
（看護婦と婆やかはる／＼悔みを述ぶ。）

夫　永い間お世話になりました。あなた方を叱りつけたり、亂暴に取りあつかつたことを許して下さい。非常に失禮をしました。（暫らく放心したやうに妻を見つむ）口のきけなくなつた妻に代つて御禮を云ひます。

看　恐れ入ります。

婆　（同時）恐れ入りまして御座います。

夫　（看護婦に）是れから何をすればいゝんです。

看　左樣で御座います、おからだを淨めて上げませうか。

夫　それをして下さい。二人にまかせるから。
（二人準備に去る。夫、妻の額に輕く接吻す。）
（二人準備をとゝのへて入り來る。夫先づ妻の顏をふきやる。看護婦と婆や他の部分を淨めはじむ。夫袋戸棚の所に至り水色の手帳を取り出し、緣側に來る。不思議さうな面持ちにて空の樣、庭の樣子など打ち眺めやがて緣に腰かけて手帳をめくり讀みはじむ。）
（暫らくして後ろをふり向き、婆やが妻の髮をつかれ居るを見。）

夫　婆や、その髮の毛を少し切りとつといてくれ。

婆　畏りまして御座います。美しいおぐしで御座いますの

に。

（鉄の音高くひゞく。夫わが身を切られたる如き表情をなす。）

（婆やがて半紙の上にのせたる遺髪を夫の所に持ち來る。）

婆　どこにお置き申しませう。

夫　そこにおいときな。

婆　お縁側の上にで御座いますか。

夫　さうだ。

（暫らく沈默。突然臺所の方にて威勢よき八百屋の聲きこゆ。婆や臺所に赴く。暫らくして林檎を盆に盛りて登場。）

婆　旦那様、今朝頼みました林檎をもつて參りまして御座います。

夫　さうか。そんなら奥さんの枕許に置いてあげろ。

（看護婦と婆や默りしまゝ働く。夫は手帳を讀みつゝけつゝありしが、感にたへかねて潸かに泣き、やがて傍にありし遺髪を取り額にあてゝ默禱する如き形をなす。）

――幕しづかに下る

終　幕

序幕と同じ。但し焰は消え去りて亡し。始め暗黑。漸次明るくなる。「死」を圍繞して影人若干うづくまる。やがて舞臺また暗くなり行く。「死」の獨白はその間に行はる。

「死」　小さい焰はみじめにもたやすく消え果てた。錠前はたしかにかけたな。金輪際錠前の外づれるやうな事があつてはならないぞ。

（沈默。何處かにすゝり泣きの聲きこゆ。以下同じ。）

人間全體は、何事も知らずに、ふりむきもせず、毎時のとほり的もなく急ぎきつてその側をすりぬけて歩いて行く。

（沈默。）

夫や親たちの悲しみもやがて消えるだらう。

（沈默。）

然しあの男はまだ苦しむのがいゝのだ。まだ苦しませるのがいゝのだ。そのためにあの男の父はまた死なねばなるまい、錠前はいゝか。鍵はよくあふか。錠前も鍵も錆びては居ないか。

（沈默。）

その用意をしておけよ。

（恐ろしき沈默の後。）
總ては同じ事だ。

――幕しづかに下る

（一九一七年五月、新公論所載）

御　柱（一幕）

場　所

下總の或る都會の東南半里程を距てた或る村の百姓家

時

安政元年五月九日の朝

人　物

龍川平四郎　彫物大工（六十一歳）
嘉　　　助　堂宮大工（四十歳）
龍川久和藏　平四郎の婿養子（三十二歳）
お　　　初　平四郎の娘。久和藏の妻（二十七歳）
仙　太　郎　久和藏の息子（八歳）
五　兵　衞　百姓家の主人（五十七歳）
五兵衞の女房（五十七歳）
其　の　他

風の音。幕靜かに開く。

納屋を兼ねた五兵衞の裏庭の離れ。土間には筵を敷き、半成の木彫、木屑、彫刻用の器具、子供の玩具等。土間に續きて座敷、その隣に小間。堺は古びた障子立て。

久和藏泥まみれになり、つかれた樣子で座敷に腰かけ草鞋を脱いでゐる。お初は土間の片隅で立ちながら泣いてゐる。

行燈に薄く灯がともつて、朝はまだ明けきらぬ。

久和藏　見舞の人がそろ〳〵來るずら。顏洗ひ代りに澁茶でも……お前……お初……へえ泣いたつて追つくもんか……

（お初、久和藏には答へず。涙を押し拭つてせつせとそこらを片付けはじめる。久和藏立つて七輪に炭をつぎ足さうとする。）

お初　いんね、それは私が今するに、お前はこれを（彫刻物を指し）その壁際になほしておくれ。一晩中ちつとも眠らなかつたら、五月といふに朝冷えが……お前また濡れたまゝだぞな。

（二人彫刻物を片付け始める。）

寒くはないかえ。

久和藏　何あに。けんど寒いといへば寒いなあ。郷里(くに)では御柱(おんばしら)の祭もへえ明日といふだが……野郎、嘉助の野郎、妙見樣の罰があたるものかあたらねえものか……己れの

猜みからこんな取りかへしもつかねえ大事をしでかしやがつて……俺らあへえ（彫刻物を見やりながら）これをたゝき割りてえよ。

お初　そりやお前、お前の……萬が一にもお前の僻見だやないかえ。

久和藏　（険しい眼でお初を見やりながら）俺の僻見だ………今もよくいつて聞かしたに、考へても見ろ。下小屋に不寢番を置いて、火元に氣を配るのは大工の衆の役目だで、あの衆が火を間違はねえで、誰れが間違ふもんか。殊にも、明日は地鎮祭といふその晩だ。粗相のある筈かねえに……五つ時さがりから火の手が上つてへえ……それもをかしなことだが、火元は一と處や二た處どころではねえ……つけ火だ。つけ火だ。嘉助が、あの嘉助の畜生が（このあたりより久和藏は座敷に、お初は久和藏に着物を着換へさせる）俺らあ家のおとつさまの評判を猜んで仕組んだことだわ。

お初　だけんど……

久和藏　おとつさまが、へえ二年の上も、かうやつて他國の空で難儀をしてやうやく仕上げた宏大もない仕事が、昨夜一晩で他愛もなく灰になつただ。俺もおとつさまに負けず骨を折つたつもりだつた。お前の甲斐々々しさもへえ一通りではなかつた。それもこれも今は無駄なこんだ……おうまだ燃えてるずら、半鐘が聞えるに……

お初　（戸口なる急造の厨の方に行き、七輪をいぢりながら、小間の方に聞耳を立て）おとつさまは眼をお覺ましなさつたか知ら、音がするやうだえ。あれまだ向うの空が赤く見えるも何んも。

（五兵衛野菜を下げて登場。）

あれ家主様済みましない、一晩中お寢みなさりもせずに、何かと難有う御座ります。

五兵衛　なあに、災難の節はお互ひのこんだよ。親方はよく休んだかなあ。本卦返りといやあ、はあ體を大事にしねえだや……坊やもまだ眼が覺めねえだね……や、久和藏さん歸つたけえ。

久和藏　やあ家主様お早う御座ります。

五兵衛　（仕事場の方に廻り、脱ぎ捨てた着物に眼をつけ）先づでつかい騒ぎだつたんべ。えらい泥になつたなあ。お前さんとこの彫つたものはちつとは助かつたんべえか。

久和藏　何から何までお世話になります……（火鉢を持ち出しながら）あの風に煽られたぢやへえ一たまりもないで御座ります……俺ら死んだも同然に力が落ちてしまひました。

五兵衛　さうだつぺえともさ。時に……

久和藏　（神棚の下にある小欄間用の透彫二枚を見かへりながら）せめてはと思つて、手輕な奴をあれだけさらひ出しはしたものゝ、大工の衆と違つて俺らあ家は手不足だで……何せ、かうしてへえ親子ぎりのこんだから……

（この會話の間お初、五兵衞に茶をすゝめ。小間の方に近づき隣室の寢息を伺ひ、更らに愁ひを催す。）

五兵衞　して大工の衆も鳶の衆も、彫物小屋の方に手傳ひのしつこなしか……はあて……この火事についちや村にも妙な噂が傳はつてゐるだよ。

久和藏　え、どんな噂が……

五兵衞　そりや……一體噂といふものは、はあ藝もねえもんだから聞いたら聞き流しにして貰ふべえ……何んでもはあゆんべの妙見樣の火事てえは怪火だといふだ。たゞの過ちではねえ風だ。……誰れとなく見てゐただが、いかく燃え上つた火の中に、白裝束をした白髮の姿のものがふつと現はれてな……それが見る／＼火花の中に消えたといふこんだ。妙見樣が怒りをなさつただ。もうお宮はどうあつても建つことはねえといつてゐたが……

久和藏　それなら俺もまざ／＼と見た。白い衣冠束帶のお姿が勿體なくも火の中に消えて行つただ。それを見たものは誰れ彼れとなく、へえ膽まで震へ上つたか、恐れをなして逃げ出しただよ。

五兵衞　はてすさまじいこんだなあ……親方の腕が餘り冴えてゐるで、妬みに思ふ奴がゐたかも知んねえだ。それでなくつて何んであんな處からはあ火事が出べえさ……何しろおつかねえこんだ。やれ／＼……ぢやまあ久和藏さんもたんとがつかりしねえが分別だあ。何もはあ因緣ごとだかんなあ。……別に何か用は無えかね。

久和藏　へえ俺も歸つてゐますで、なゝ案じなして。……やい／＼お初、茶呑茶碗がいくつかあるか。

お初　あれ、いくつもなかつたわやれ。

久和藏　それぢや家主樣、ちつと貸して下さりますか。見舞人が來ると思ふで。

五兵衞　安いことだともさ。おきに持つて來ますべえよ。

久和藏　辱う御座ります。

お初　（同時に）難有う御座ります。

（五兵衞退場。お初入口よりにじり上り行燈の灯を消して片隅によせ、久和藏の眞向うに坐る。）

お初　お前、仕事場に火をかけたのは嘉助親方に違ひないと思つてゐますかえ。

久和藏　…………。

お初　心底からさう思つてゐますかえ。

久和藏　おう、さう思ふに不思議があるといふだか。お前はあの野郎に恩でも着せられてゐるずら……

お初　あさましい……お前は……お前は男か……男かえ。……男なら何んでおめ〳〵と歸つて來ただえ。何んで嘉助といふ奴に仕返しはしてくれなかつただえ。これが浮世の年貢のなし納めだといつて、おとつさまがかうして仕上げなさつた大事な仕事を……おゝ私は胸が痛むわやれ、むごたらしい……その仕事を灰にし腐つた男に、お前は恨み言一つ云ひ得ずに歸つて來なすつただなあ。お前はどの面さげておとつさまにお辭儀しなさるえ。昨晩はおとつさまはこゝにかう坐りきりで、村の衆が見て來たことを、笑つたなり聞いてゐなすつたが、その胸の中を思ひやると、側にゐた私は切なくて、泣かずにはゐられなんだ……お前……久和藏さ……お前の仕事も煙になつたに、まことロ惜しくはねえかえ。

久和藏　…………

お初　お前は恩知らずだえ。七つの歳からこの家に養はれて、仕事の手ほどきからして貰つてゐるに……ほんとに……

久和藏　俺が男か男でねえか、恩知らずか恩知らずでねえか、見てゐろ。

お初　その高慢をいふ口がありや……

（この時子供の叫び聲小間より聞こゆ。お初はつと立つて小間の障子を開けて見る。）

平四郎　（小間の中から）やい〳〵お前等がたんとわめき合ふで仙太郎がうなされるわ。昨夜はおそかつたでまだねむいらに……やあ、よし〳〵何んでもねえだ。おつと眠つてろ……やあ、よし〳〵。

（お初小間に入る。入れ代りに平四郎寢衣の上に長半纒を羽織りながら登場。久和藏いひ出る言葉もないやうにうづくまる。）

久和藏いつ歸つたな。

久和藏　さつきがた戻りました。

平四郎　御苦勞だつたなあ。すつぱり燒けたか。

久和藏　…………

平四郎　さうか……へえ何時だ。曇りだか晴れたか。まだ風は落ちねえな。

久和藏　六つ少し前で御座りますずら……昨晩は少しはお休みなさりましたか。

平四郎　うむ。彼れ是れ……仙太郎が時折り眼をさましてなあ……どれ顏でも洗はづ……

（顏を洗ひに立たうとする。お初小間より出て來て、）

お初　いんね、そこにおゐでなして、今私が水を汲みますに。

（お初厨に下りて水を汲みて土間の方に持つて來る。平四郎顏を洗ひ終りて町の方を見ようとする、お初が

何んとかしてさうさせまいとするけれども頓着なし。）
平四郎　（獨白の如く）ふむ、……またえらい煙だわやれ。何しろ山のやうな木材でなあ…や、お袋さまか。お初、家主のお袋さまが茶碗を持つて見えたぞ。お早う御座ります。
（五兵衛女房登場。）
女房　はあ眼が覺めただなあ……お早う御座りますよ。お初さ、こんなものでも間に合ふべえか。
お初　間に合ひますどころか、難有う御座ります。
女房　久和藏さんも歸つただね。えらいまあ災難で、嘸や難儀なことだんべえなあ。
（平四郎神棚の方に向きながら。）
平四郎　お袋様、昨夜お頼み申したお御酒はへえ來ますだか。
お初　それならこゝへ來てゐます。
女房　何んぞまだ用はねえかね。お、用といへば、嘉助親方といふ人が來て、俺らが家で親方の眼を覺ますのを待つてゐだあよ。どうすべえなあ。
久和藏　何、嘉助か……
（久和藏走り出ようとする。お初思はずそれをとめる。）
平四郎　やい／＼久和藏、手前つれの無分別者に嘉助がてこじろにあふ男かい。引つ込んでゐろ。手前は（土間の中央に長々と置かれたる雲龍の總彫りの虹梁を指し）そこにへたばつてそこの肩の所の仕上げでもするだ。
（五兵衛の妻、去りかねてまご／＼してゐる。）
女房　親方、嘉助親方は……
平四郎　來いと申して下さりまし。
（五兵衛の妻退場。）
（久和藏に向ひ）手前は嘉助が來ても出しやばるだやねえぞ。俺には俺の分別があるで……假令ひほかの仕事は燒けをへても、その虹梁を仕上げてこの土地に殘して行かづ。念入りに仕上げろよ。やい／＼お初、お御酒を明神様に（神棚を指す）上げてくれろ。
お初　へえ上げました。
（久和藏漸々道具を揃へて仕事にかゝる。）
平四郎　さうか。今朝はむしやくしやするで顏洗ひをやるぞ。
（平四郎神棚に行き祈念する、お初は朝酒の燗にかゝる。平四郎祈禱を終へてふと久和藏が持ち歸りし彫刻物に眼をつけ。）
平四郎　久和藏。
久和藏　へ……
平四郎　これはどうしただ。

久和藏　………
平四郎　燒け殘りを拾つて來ただな。
久和藏　火の中に飛び込んで、それだけは助け出したけんど、手の足りない俺らあとこのこんだで、あとはへえ無殘々と燒け終へたで御座ります。
平四郎　未練がましい奴が……
（大工嘉助、岡持ちをさげたる手代を連れ、五兵衞に案內されて登場。）
五兵衞　親方お早う御座りますよ。嘉助親方をこゝへお連れ申したから……
（お初急ぎ小間の方へ退場。平四郎彫刻物を下に置き坐りたるまゝ。五兵衞手代と共に退場。）
嘉助　お免なせえまし。親方。寢ごみに押しかけたやうな仕儀になつちめえやして……
平四郎　ま、お上り。
（嘉助座敷に上りよき處に坐る。久和藏不穩。）
久和藏、その龍の肩の方が肉が厚いでそこを丹念にはつるだ。（嘉助に向ひ）お早う御座ります。
嘉助　お早う御座いやす。久和藏さんえ、お早う御座いやす、　…親方何から申してよろしいやら、お互の災難とはいひながら、こんなことにならうとは、夢の夢にも思はねえことで御座いやした。口惜しいといつたんぢや方圖がつくが、私の胸は方圖なしにかきむしられるやうで御座いやす。お悔みを申しに來てゐて、こんなことをいつちや間拔けじみてゐやせうが、私の心の中もおもひやつて下せえまし。……親方と一緒になつてかうして二年の餘も、誠心のありつたけをこめて、江戶職人の名折れになるまいと、夜の目も合はさずに精を出しやした。去年は去年で品川のお臺場普請があるし、今年はまた炎上した御所の御造營で、第一に人手が引けるなり、西京への御寄進といふんで木場の材木は手つ拂ひになるなり、手違ひから手違ひがつゞきやした。だがかうなつちや私も損得づくぢや御座いやせん。瘦腕ながら後々の人に後指をさゝれねえ仕事をしたいと念じ切つてゐやしたが、ふと魔がさしたとでもいふ……さあやつぱり魔がさしたんで御座いやせう。思ひも寄らねえ災難が持ち上つて……私は、親方、生きてる空も無えやうで御座いやす。
平四郎　親方はいくつだな。
嘉助　何んで御座やいす。
平四郎　親方はいくつだといふだ。
嘉助　はて丁度になりやすが、それが……
平四郎　四十かえ。若いなあ。待てよ、ふむ、すれば亥の年づら。思慮分別のやたらつッ走る星まはりだわやれ。俺は寅だ。寬政六の六十一で御座ります……生ひ先きの

へえたんとねえ爺だよ。（放笑）やい／＼お初顔洗はどうしただ。

（お初小間より出て來り、嘉助には挨拶もせず厨に行つて燗を見る。）

お初　つい忘れてゐて、つき過ぎましたが……

平四郎　構はねえ。

（お初燗德利と猪口とを取りそろへて平四郎の處に持つて來る。）

これは俺らが獨娘のお初といひますだ。お初、これが江戸の棟梁樣の嘉助親方だわやれ。かしこまつてお辭儀をしろ。

（お初父の命に從はず。）

親方、氣を惡るくしねえで下され。歲は二十七だが甘やかして育てたで、八つになる餓鬼を持ちながら己れが三つ子同樣で御座りますだ。

（お初そのまゝ小間に入る。そつと小間と土間との隔ての障子を開け、久和藏をそゝのかして嘉助に害を與へようとする。）

嘉助　（辛やく憤り、鎭めながら）朝からけづりをおやりなさるなら、心ばかりでは御座いやすが、丁度御見舞にと思つてちよつとばかり肴を持たして來やしたから……

平四郎　それは辱う御座ります。やい／＼久和藏、親方からいたゞいた肴をそれ、戸間口にでも出しておけ。犬でも來て食ふづらに。

（久和藏立ちていひつけられた通りにする。）

嘉助　（腹にすゑかねて）親方、それや何んぼ何んでも無禮といふもんだ。何か私に意趣でもあるなら、この場ではつきりさういつて下さいやし。

平四郎　意趣……（笑）それは無えかといへば無えでも無え。……が……それはそれとして、江戸ではこれを朝酒といひなさるやうだが、俺らが在所の諏訪といふ山國では、顏洗ひといひますだ。これで一杯かう。（燗德利に手をかけ）あつゝ……熱いわ。熱過ぎるわ……これは全くお前樣見たやうな酒だわやれ。（放笑）

（長半纏の裾を德利に卷いて酒をつぐ。）

嘉助　…………

平四郎　先づ毒見もしたに、親方も一杯行かうづ。

嘉助　（苦がり切つて）憚りながら顏を洗ふに人達の世話にはなりやせん。

平四郎　さうか、へえ顏は洗つただか……頸根つ子も序でに、洗つて來さつしやると世話がなかつたに……

（久和藏潜かに手斧を執り上げる。）

やい／＼久和藏、手斧でそこをほつて何にする氣だ。鑿で行くだそこは。

顔が洗つてあれば俺らが言葉もちつたあ解らづ。……お前は仕事で俺れのむかうに立つ氣だつただな。

嘉助　知れたこつた。お前も俺も同じ伊藤平の下請けだ。信州からぽつと出の彫物大工づれに、江戸の大工がひけを取つて引つ込んでゐられるかい。

平四郎　（放笑）先づ拙いながらお前ほどの腕があつたら、物のよしあしは見極めがつく筈だ。……それがお前の不仕合せになつただなあ。意氣込みだけでは仕事の出來るものではねえからな。賤しいながら藝と名のつく仕事をする上は生れ付きといふものが口をきくだぞ……修行が譃はいはせねえだぞ。俺の仕事とお前の仕事とを己れが眼でしつかと見比べるがいゝだ。……やい／＼久和藏、手前は今朝氣でも狂つたか。そんな大鑿をつかつたら、龍の鱗はけつし飛ばづ。小鑿が行くだそこは……五分鑿だ。……五分鑿だといつたら五分鑿でやれといふに、野郎……（嘉助に向ひ）お前は……

嘉助　そりや、いふまでもない事だ。俺も七つの年から年期を入れて、暑い寒いの辛い味から、鋸、鉋の甘え味まで、この文身(ほりもの)同様に身にしみついてゐるんだ。堂宮にかけちや、廣い江戸でも深川の嘉助で通る男を、お前の見くびりやうは、そりや**ほぞ**がちつとばかり外づれてゐるようぜ。寒天や蕎麥の名所では、鑿がたつたばかりで凡くら者が名人と化けられるかは知らないが、憚りながら山のない江戸界隈ぢや通らねえ。

平四郎　お前見たやうな未熟者がそんな口をきいてゐたら、犬も尿(いばり)をひりつけめえまでよ。

嘉助　何んだと……年嵩だと思やこそ、折れて見舞ひに來れば……

（久和藏いきなり手斧を取つて嘉助に走りかゝらんとす。）

平四郎　馬鹿、砥石はこつちには無え、そこの隅だわやい。（久和藏手を下しかねる）見舞ひに來ればではねえ、探りに來ればといふだそこは（放笑）……さう短兵急に氣をいらつちや、お前は壽命を取りにがさづ、孫奴が眼をさますで落ち着いて貰はうかな。久和藏等も物々しいぞ。……久和藏。村の衆が見舞ひに來るとうるさいに……お初、鼻紙を、……やあ、それにも及ぶめえ、その筵に「忌中だで……客無用」……からつと……と書いて戸間口につるしておけ。でつかく書け。

お初　おとつさま縁起でもねえ、忌中だなんて誰れが死にましたえ。

平四郎　木曾の義仲が死んだわやれ。

（以下の會話の間に久和藏命ぜられるまゝに筵に書いて、お初に手傳はせてそれを奥へ行き木立ちにかけ

ろ。）

（嘉助に向ひ）ちつたあ氣が落ち着いたづら。俺が一つ昔話をして聞かせづ。

偖て、俺らが在所に諏訪明神といふ、いやちこな荒神の鎭守がある。（神棚を指し）な、こちらが當國の妙見樣で、むかうが諏訪明神だ。こちらの宮造りは久和藏がしただ。あちらは俺た。しつかと拜んでおくがいゝ。……この明神の御本體は建御名方尊といつて、大黒樣のお子ぢやげな。その尊がな、仔細あつて信濃國に閉門になられただ。閉門といへば、家のぐるりに柵を打ちまはすが定だによつて、それが末代に殘つて、寅の年申の年と、七年目には御柱の祭といふがあるだ。圍り五抱へもあらづ立木を切り倒して、八ヶ嶽の山中から鄕々のものが引き出すだが、そいつの里引きが丁度今月の明日にあたるわやれ。それを一本づゝ社の四隅にぶつ立てるだ。それが柵の型を傳へたものだといふことだ。信濃國はさういふ國だ。山が高く、雪が深く、人の心も險しいが、一旦腹をすゑて山を出た上は、出ただけのことはしねえではおかねえ人氣だぞ。

俺らが昔話といふはそれだけだ。

偖て、昨年、下總の妙見神社といつて、由緒の深い御朱印二百石の御社を、江戸から南に類の無え見事なものに建てかへるとて、彫物一切を引き受けたらと名古屋の棟梁から名指しがあつた時、俺は死物狂ひで、山又山の柵を踏み越えて江戸の空へと轉がり出ただ。相模の運慶、飛驒の甚五郎には及ばずとも、信濃國ではあばき足らぬこの腕つぷしを、根かぎり試して見づと思ひ立つただ。……俺の向鎚にまはる大工といふがお前だつた。俺にとつては不足千萬な生腕だ。先づさう惡あがきをするものでねえ。……腕のちがひが知りたければも一度眼をすゑてしつかとこれを見たがいゝだ。これを見ても誠頭が下らずば、お前の心はへえ慢心の業病で氣息の根が絶えるだぞ。

（平四郎、久和藏の持ち歸りたる彫刻物を嘉助の前に置く。嘉助始めは輕蔑の態度を示せしが、段々と牽きつけられるやうになつて、それを熟視する。）

よつく見ろ…… 見えたか……手前もそれが見えねえ程のみじめな腕ではねえ筈だ。……それでもまだ頭が下らねえか……口の先きでは何んとでもいへ、手前づれが俺と肩を列べられる大工かさうでねえか、胸に手をあてて思案して見ろ……たはけたこんだわ。末代までも國の寶とならづものを、手前はよくも一晩の中に灰にしたな。（沒義道に嘉助の膝から彫刻物を奪ひ取る。嘉助その言葉に思はずぎよつとして平四郎を見守る）手前がへえ已れ一

人の愚かさから國の寶を滅ぼしただぞ。

嘉助　飛んでもねえ。聞き捨てならねえよまひ言をほざく上は、俺にも俺の覺悟がある。老いの繰り言と思つて默つて控へてゐれば方圖のねえ。

平四郎　俺の言葉がまだ胸にはこたへねえか。仕事づくで爭ひもし得ねえ畜生はかうしてくれるわ。久和藏、手斧をよこせ。

（久和藏逸早く手斧を平四郎に渡し、己れも得物を取り上げる。嘉助も懷ろに手をさし入れて身構へする。平四郎手斧を手にし、やゝ暫らく嘉助を睨みつめてゐたが、突然憤りを發して自分の彫刻物を滅多打ちに打つて微塵に碎く。一同思はず固唾を呑む。）

（仙太郎その物音に眼を覺まし、大聲に泣き出す。お初小間にかけこむ。久和藏その場にくづれて男泣きに泣く。）

平四郎（手斧をがらりと放げ棄て）偖て俺も年を喰つたなあ。愚に返り腐つたわやれ。……久和藏、明日は俺は在所に歸るぞ。

（仙太郎母に伴はれて登場。）

やれ仙太、眼が覺めたか。（仙太郎を抱き取る）昨夜は火事でおつかなかつたづら。へえ何んでもねえだぞ。案じるぢやねえ。

仙太郎（碎かれた彫刻物を見て）おぢいさまか、今これを敲き割つたは。俺はへえ驚いただえ。

平四郎　うむ、氣にすまねえ仕事は俺はかうして敲き割るだ。……仙太、お前は諏訪に歸りてえ／＼といつてゐたなあ。

仙太郎　あいよ。おばあさまが皆の歸るを待つてゐるらに。……俺は御柱の祭も見てえだし。

平四郎　げえもねえ。祭は明日だに。諏訪へ行くには兩手の指の上も日がかゝるだ。……さうだ、おばあさまも村の衆も俺ら達を待つてゐるら。明日はへえ歸るぞ。諏訪は今若葉になつて不如歸が啼きしきつてゐるづら。八ヶ嶽の雪もあらかた解けて、山膚が靑く見えるぞ。

仙太郎　俺は御柱の祭が見てえだわやれ。

平四郎　はて聞き分けのねえこんだお前は

仙太郎　だけんどおぢいさまの仕事はへえし終へただか。

平四郎　へえ終へたわやれ。

仙太郎　し終へただけえ。

平四郎　うん……終へただ。

仙太郎（お初に）し終へたたなあ、へえ歸るだで……俺は今日おぢいさまの仕事を町に見に行くだ。

久和藏　やい／＼仙太。俺ら達の彫つたものは、お宮が建つてから飾りつけるだに、お宮は木取りをし終へたばつ

かだで、俺らが家の彫物は大事に下小屋にかくまつてあるだ。

仙太郎　したら、おぢいさまもまだお宮に飾つたを見ねえだな。

平四郎　誰れも見ねえだわやれ。

仙太郎　それが見られねえなら、俺は御柱の祭が見てえなあ……。

平四郎　よし／＼。したらおぢいさまが見せてやらず。久和藏、その虹梁の鼻へ綱を卷けや。仙太、これからな、おぢいさまはへえ仕事はやめて、ゆるりとお前と遊び暮らすだ。へえ元のやうには腹は立てねえぞ。……お前だけを可愛がるとおとなしいおぢいさまになるらよ。嘉助親方。俺も今は、ひとむきに腹を立てた。年を取るとこらへ性が失せるでなあ。……お前樣はさつき魔がさしたといつたが、まつたくだ。……人間冥利をぶつ越えた仕事をしたばつかに燒け終へたとおもへば、腹を立てるでもなかつただ。

嘉助　親方……平四郎親方……私や今になつて眼が覺めやした。濟まねえことを仕でかしてしまひやした。

（仙太郎驚きて平四郎よりお初の膝に移る。）

平四郎　眼が覺めたか。

嘉助　えゝ私しや何んといふ人非人た。わが身の腕の足らねえのは棚に上げて、町の人も村の衆も親方の仕事ばかりに眼をつけるのを腹にすゑかねて、かうして普請が出來上つた上、二人の名前が末代まで列んだら、死んでも死に切れねえ業曝らしだと一圖に思ひこんだその擧句が……何をお隱し申しませう、親方、仕事場一帶に……

平四郎　魔がさしただよ、誰れの科でもねえわやれ。

嘉助　さういつて安閑として居られません。私は……

久和藏　したら手前が……

お初　むごい事をし腐る人畜生……

平四郎　（押しへだて）何んの、魔がさしただといふによ。……その寛性の奴の可哀さわやれ。……俺はへえかうしたやくざな爺だが、一藝にはまり込んでこの長い年月を苦勞したばつかで、その魔性のものの殊勝さがしみ／＼と胸にこたへますだ。……手前でもねえ、お前樣の心持ちも今になると俺にはよつく分る。手前た、お前たと呼ばれる人間では無え、お前樣は矢張りお前樣た。……お前樣はまだ生ひ先きが長いだから、念にかけて早まつたことをするではねえぞ。

嘉助　…………

（消え半鐘の音近く聞こゆ。）

平四郎　あれは何づら。

嘉助　おゝ、しめつたな。

久和藏　村でうつた消え半鐘で御座ります。
平四郎　さうか。へえ火事も終へたか。……ほう、凪もねえいゝ朝げになつたなあ。……うら／＼とした景色だわやれ。
仙太郎　おとつさま、綱がついたかえ。
お初　この子といへば會釋のねえ。
久和藏　まて／＼。
（五兵衞、嘉助の手下の大工を案内して登場。）
大工　こちらで…… 左樣で……もし、やじやう、こちらですかい。大變だ。
嘉助　（屹となり）何んだ。
大工　何んだつてやじやう、大事が持ち上つてしまひやした。火事場にとう／＼人死が出來ちやつたんだ。それも生やさしいんぢやねえ、神主樣か…… 宮司樣がやじやう……宮司樣が我れと進んで火の中に飛び込みなすつたんで御座います。……何んでも眞夜中頃、白裝束の姿のものが火花の中に見え隱れしてゐたのは、やじやうも承知で御座いませう。今から思へばそれが宮司樣だつたんだ。
久和藏　それなら俺もたしかに見た。
大工　おいたはしい、それが眼もあてられねえ姿になつて……
嘉助　それぢや何んだな、火事を出したのを濟まねえ事におもひなすつて、妙見樣にも代官所にも申譯の爲め、我れと我か身をその火で燒いて――おしまひなすつたか。
大工　全くそれに違ひねえ。何んでも書置きが殘してあつたんで、大騷ぎになつて、私達も鳶の者も滅多やたらに火の中を尋ね廻つた擧句、骨にならんばかりの死骸を搜しあてたんで御座います。……これは何をおいてもやじやうからも代官所に申し立てねえぢや越度になると思つて、私は取りあへず驅けつけやした。……すぐ歸つておくんなせえ。
嘉助　よし、今行くから待つてゐろ。……今お聞きになつたやうな譯で御座いやす。つく／＼私は罰あたりだ……私は……
平四郎　出る所に出てその屆けをさつしやれ。早えがいゝ。たがな。お前樣の仕事はこれからだで、夢にも短氣は出さねえもんだ。火の元は大工衆のあづかりだで、火事を仕でかしたは、何處までもお前樣のあやまちだが、過ちは誰れが身の上にもあるものだでなあ。この界隈の衆がどのやうな噂を立てようとも、びくともするではねえ。事が面倒になつたら俺がこゝにひかへてゐるで……お前樣の仕事も念の入つた素晴らしいもんだつたに、それを無殘々々と燒き終へたお前樣の心を思ふと、老いぼれは涙もろいで、貰ひ泣きになり腐りますだ。

嘉助　親方、腸をかきむしられるやうで御座いやす。私は今になつてはもう何も申しません。……若し私が生き延びてゐやしたら。長い眼で見てゐて下さいまし。

平四郎　長生きをさつしやれ、俺は信濃の雪の中からじつくり見てゐるづらに。

嘉助　では御免なさいまし、親方、久和藏さん、ごしんさん。

平四郎　早々とお見舞を辱う御座りました。

（久和藏、お初相當の挨拶をする。嘉助及び大工退場。）

五兵衛　やれ、親方、（忌中と書いた筵を見やりながら）これはあお前さ、何を書くだ。いたづらにも程があるべえものを。

平四郎　家主様、俺らが國にな、昔、木曾の義仲といふ荒武者がゐて、信濃の山の中から西京眼がけて猪の子のやうに飛んで出ただが、力は餘れども武運が拙くて、粟津ヶ原の泥田に馬を蹴けこまいて、犬死をして退けただ。今朝はふと、その昔を今のことのやうに思ひ出したでな、一つは今更らめかしい弔ひの心、一つは見舞ひの人のうるささにあゝ書いてつるしたで御座ります。（放笑）……偖も、家主様、俺ら達は永々と御邪魔になりましたが、明日は發つて在所に歸りますに……

五兵衛　それはまたあんまり火急だんべえさ。荷ごをりだけでせえ、はあ二日三日はかゝるべえに。

平四郎　いえね……

お初　おとつさま、それはお前様のいつもの悪い癖の短氣ではねえかえ。二年の上も住み慣れゝば、名殘りを申して廻はらにやならぬ人様も數あるづらに。

平四郎　（激怒を以て）親の心子知らずとは手前のこんだ。俺がこゝに（足で床をふみ）へえ一時でもゐたゝまれると思ふかやい。仕事が終へればへえ、俺は名もない他國のおいぼれ爺だぞ。こちらから暇乞ひしてまはる人様もありはしねえだ。家主様よ、「これがまあつひの住家か雪五尺。」信濃國の山猿には、裸身の外にこをる荷物も御座りましねえ。ひよこり／＼と親子四匹で輕々とした道中をしませうづ。

仙太郎　おぢいさま、おとつさまがこれに綱をつけ終へたに、早く御柱を引かづ。俺は待ち遠いわやれ。

平四郎　や、待たしたなあ、（土間に下り）……仙太、こゝは下總ではねえ諏訪の山の中だぞ。あすこに見えるが、あれが（神棚を指し）八ヶ嶽、あすこのむかうが木曾飛驒の山又山、こゝからこれまでは諏訪の湖、廣い湖だぞ。それ岡谷の村も、下諏訪の宿も見えるら。こゝが神宮寺村の明神様、（壁上の積俵を指さし）このわきにあるが俺ら達が住家だわやれ。今日は御柱をそこへ引くだ。おぢ

いさまの身のまはりに高々と四本ぶつ立てるだ。……高高と四本ぶつ立てるだ。……仙太は力がえらいで元綱をやれ、おとつさまは裏綱……おぢいさまはへえやくざだでこゝに（綱の中ほどを握る）立たづ。やれ見ろ仙太、在所のものも他國のものも俺らがためにいかいこと綱引きにと集つて來たぞ。さあ皆の衆も綱を取つた。……それ仙太、おぢいさまが木やりをやるぞ。「お小屋の山のもみの木は里にひかれて神となる」やれえんやらさんのういえ——

仙太郎　（よろこび勇んで）やれえんやらさんのういえ——

（久和藏、お初泣きしづむ、五兵衛も貰ひ泣きをしてゐる。）

何故に皆の衆は泣くづら。をかしいわやれ。

平四郎　をかしいなあ、それぢや仙太とおぢいさまと二人で引かづ。

仙太郎　やれえんやらさんのういえ——

平四郎　やれえんやらさんのういえ——

（虹梁動かず。）

——幕——

この戯曲には方言を用ひる必要があつた。藤森成吉、吹田順助、里見弴の諸氏が私の爲めに親切に教へて下さつた。玆に謝意を表する。……作者

（一九二一年三月、白樺所載）

ドモ又の死（一幕）

（これはマーク・トウエインの小説から暗示を得て書いたものだ）

人物

花田
澤木（評名、生蕃）
戸部（評名、ドモ又）
瀬古（評名、若樣）
　　　　　　　　――若き畫家
青島
とも子（モデルの娘）

處
畫室

時
現代　氣候のよい時節

澤木と瀬古とがとも子をモデルにして畫架に向つてゐる。戸部は物憂さうに床の上に臥ころんでゐる。

澤木　（瀬古に）おい瀬古、ドモ又がうなつてゐるぞ、死ぬんぢやあるまいな。

瀬古　僕も全くうなりたくなるねえ。死にたくなるねえ。……ともちやん、お前もおなかがすいたらう。

とも子　もう物をいつてもいゝの、若樣。

瀬古　いゝよ。おなかがすいたらう。

とも子　そんなでもないことよ。

（戸部うなる。）

どうしたの、戸部さん、あなた死ぬとこなの。まだ早いわ。

瀬古　ともちやんはこゝに來る前に何か食べて來たね。

とも子　えゝ食べてよ。おはぎを。

澤木　默れ〳〵、あゝ俺はもう駄目だ（腹をかゝへる）唾も出なくなつちまひやがつた。

瀬古　ふうん、おはぎを……強勢だなあ、いくつ食べたい。

とも子　まあいやな瀬古さん。

瀬古　而しておはぎはあんこのかい、きなこのかい、それとも胡麻……白狀おし、どれをいくつ……

澤木　瀬古やめないか、俺は本當に怒るぞ。飢じい時にそんな話をする奴が……あゝ俺はもう駄目だ。三日食はないんだ、三日。

瀬古　澤木は生蕃だけに藝術家としての想像力に乏しいよ。僕が今こゝにおはぎを出すから見てろ――ぢやない聞いてろ。ともちやんが家を出ようとすると、お母さん

が「ともや、こゝにこんなものが取つてあるから食べておいでな」といつて鼠入らずの中から、ラーヴエンダー色のあんこと、ネープルス・エローのきなこと、あのヴエラスケスが用ひたといふプアーリツシ・グレーの胡麻……

（戸部うなり聲を立てる。）

澤木　だから貴樣は若樣だなんて輕蔑されるんだ。そんなだらしのない空想が俺達の藝術に取つて何んの足しになると思つてるんだ。俺達は眞實の世界に立脚して、根强い作品を創り出さなければならないんだ。だから……俺は殘念ながら腹がからつぽで、頭まで少し變になつたやうだ。

とも子　生蕃さんは普段あんまり大喰ひをするから、こんな時に困るんだわ。……それにしてもどうしてこゝにゐる人達の畫はこんなに賣れないんでせうねえ。

澤木　わかり切つてゐるぢやないか。俺達が立派なものを描くからだ……世の中の奴には俺達の仕事が解らないんだ……あゝ俺はもう駄目だ。

瀨古　ともちやん、そのおはぎの舌ざはりは一體どんなだつたい……僕には今日はおはぎがシステイン・マドンナの胸のやうに想像されるよ。ともちやん、お前のその帶の間に、マドンナの胸の肉を少しばかり買ふ金がありやしないか。

とも子　なかつたわ。私隨分長い間何にも貰はないんですもの。

瀨古　許しておくれ、ともちやん、僕達はお前んちの貧乏もよく知つてるんだが……

澤木　惡い〳〵――。そんなに長く何にも君にやらなかつたかい。俺達は全く惡いや。待てよ、と。ない。無い筈だ。今頃やる物がある位なら遠の昔にやつてゐるんだ。

戸部　お母さん怒らないか。

とも子　偶にいやな顏はしてよ。

戸部　ぢや君は、もうこゝには寄りつかなくなるかね。（うなる）

とも子　そんなこと……餘計なお世話よ。私のしたいやうにするんだから。

澤木　瀨古の若樣がひかへてゐる間は大丈夫だが……

とも子　人聞きの惡い……よして下さい。

（戸部うなる。）

瀨古　ともちやん、賴むから每日來ておくれ。賴むよ。僕達は一人殘らずお前を崇拜してゐるんだ。お前が歸ると、この畫室の中は荒野同樣だ。僕達は寄つてたかつてお前を讃美して夜を更かすんだよ。尤もこの頃は、餘り夜更かしをすると、なほのこと腹が空くんで、少し控へ氣味

にはしてゐるがね。
とも子　何んて讃美するの。ともの奴はおかめつ面のあばずれだつて。
瀬古　だが收入が無くつちやお前んちも暮らせないねえ。
とも子　知れたこつてすわ、馬鹿々々しい。
澤木　ぢや矢張りドモ又がいつたやうに、君は何處かに岸をかへるんだな。
とも子　さあねえ。さうするより仕方がないわね。私は一體男爵とか先生とかのくつ附いた畫かきが大嫌ひなんだけれども、……いやよ、本當にあいつらは……何んていふとお高くとまる癖に、ひとの體にさはつて見たがつたりして……けれどもお金にはなるわね。あなた方見たいに食べるものもなくなつちや私は半日だつてやり切れないわ。大の男が五人も寄つてる癖に全くあなた方は甲斐性なしだわ。
戸部　畜生……出て行け、今出て行け。
とも子　だから餘計なお世話だつてさつきも云つたぢやないの。いやな戸部さん。（悔しさうに涙を眼にためる）
（戸部うなる。）
云はれなくたつて出たけれや勝手に出ますわ、あなたのお内儀さんぢやあるまいし。
戸部　俺達の仕事が認められないからつて、裏切りをするやうな奴は……出て行け。
瀬古　腹がすくと人は怒りつぽくなる。戸部の氣むづかしやの腹がすいたんだから、謂はばペガサスに惡魔が飛び乘つたやうなもんだよ。お前氣を惡くしちやいけないよ。
とも子　だつて戸部さん見たいな解らず屋つてないんだもの。畫なんてちつとも賣れない畫かきばかりの、こんな穢ない小屋に、私もう半年の餘も通つてゐてよ。餘程有難く思つていゝ譯だわ。それを人の氣も知らないで……
戸部　貴樣は（瀬古を指し）こいつの顔が見たいばかりで……
とも子　燒餅やき。
戸部　馬鹿。（うなる）
澤木　あゝ俺はもう駄目だ。死ぬ位なら俺は畫をかきながら死ぬ。畫筆を握つたまゝぶつ倒れるんだ。おい、ともちやん惡體をついてる間にモデル臺に乘つてくれ。……それにしても花田や青島の奴、どうしたんだ。
瀬古　全くおそいね。計略を敵に見すかされてむざ〳〵と討死したかな。一體計略々々つて花田の奴は何をする氣なんだらう。
澤木　おい、ともちやん……乘るんだ。君は俺達のモデルぢやないか。若樣も描けよ。
瀬古　うん描かう。一體計略々々つて……おい生蕃、ガラ

ンスをくれ。

澤本　その色こそは余が汝に求めんとしつゝあつたものなんだ。貴様のところにも無いんか。

とも子　ドモ又さんもお描きなさいな。人つてものはうなつてばかりゐたつてお金にはならないわ、自動車ぢやあるまいし。

澤本　ドモ又ガランスを出せ。

戸部　(自分の畫箱の方に這ひずつて行つて中を捜しながら、無い。

瀨古　ペガサスの腰ぬけはないぜ。お前も起き上つて描けよ。花田の畫箱はどうだ。(隣りの部屋から畫箱を持ち出して捜しながら歌ふ)

「一本のガランスをつくせよ
空もガランスに塗れ
木もガランスに描け
草もガランスに描け
□□もガランスにて描き奉れ
神をもガランスにて描き奉れ
ためらふな、恥ぢるな
まつすぐにゆけ
汝の貧乏を
一本のガランスにて塗りかくせ」

村山槐多も貧乏して死んだんだ。あゝあ、あいつの畫箱にもガランスは無かつたらうな。描き奉つてしまつたんだから。

「天にまします我等の神よ」途中はぬかします。「我等は日用の糧を今日も」ぢやない「今日こそは與へ給へ」。序でに我等にガランスを與へ給へ。あとは腹がへつてゐるからぬかします。「アーメン」えゝと我等にガランスを與へ給ん。ガランスを與へ給へ。我等に日用の糧を與へ給へ。(銀紙に包んだものを探り出す) 我等に (銀紙を開きながら喜色を帶ぶ) 日用……糧を……我等に日用の糧を……(急に跳り上つて手に持つた紙包をふりまはす)……ブラボー〳〵ブラビッシモ……おゝ太陽は登つた。

(一同思はず瀨古の周圍に走りよる。)

澤本　食へさうなものが出て來たんか。

戸部　ガランスか。

瀨古　澤本、お前はさもしい男たなあ、なんぼ生蕃と渾名されてゐるからつて、美術家ともあらうものが「食へさうなもの」とは何んだね。

澤本　食へさうなものが出て來たんかといつただけで、何んでさもしい。あゝ俺はもう駄目だ。食へさうなものなんて云つたら駄目になつた……畜生、俺は畫を描く。ガランスが無けりや血で描くんだ。

（書架の方に行きかける。）

瀨古　いゝ覺悟だ。そこでともちやん、これを何んだと思ふ。これは勿體なくもチヨコレットの食ひ殘りなんだ。

（澤木と戸部と勢込んで瀨古に逼る。）

戸部　俺によこせ。

瀨古　これはガランスぢやないよ。

戸部　ガランスかつて聞いたのは、ガランスだと困ると思つてさう聞いたんだ。俺はガランス位ほしくはない。それは俺のだ。俺によこせ。

澤木　ガランスが無けりや、俺だつて食へさうなものを辭退する譯ぢやないぞ。ドモ又いゝ加減をいふな。これは俺んだ。

瀨古　さうがつ／＼するなよ。待て／＼。今僕が公平な分配をしてやるから。（パレットナイフでチヨコレットに筋をつける）これで公平だらう。

澤木　四つに分けてどうするんだ。

瀨古　澤木と戸部にチヨコレットを食ひかゝせながら）最後の一片は勿論僕達の守護女神ともちやんに獻げるのさ。僕は何んといふ幻滅の悲哀を味はねばならないんだ。このチヨコレットの代りにガランスが出て來て見ろ。君達はこれほど眼の色を變へて熱狂しはしなからう。ミユーズの女神も一片のチヨコレットの前には、醜い老いぼれ婆に過ぎないんだ。（今度は自分が食ひかく）ミユーズを老いぼれ婆にしくさつたチヨコレット奴、藝術家が今復讐するから覺悟しろ。（ぼり／＼と甘さうに食ふ。とも子の方に向け最後の一片をさし出しながら）ともちやん、さあ。

とも子　まあいやだ。誰れがひとの食べかいたものなんか食べるもんですか。

瀨古　（驚いた樣子をしながら）え、食べない。これを食べないとはお前偉らいねえ。お前の趣味がそれ程ノーブルに洗練されてゐるとは思はなかつた。全くお前は見上げたもんだねえ。お前は全くいゝ意味で貴族的だねえ。レデイのやうだね。それぢや僕が……

（澤木と戸部とが襲ひかゝる前に瀨古逸早くそれを口に入れる。

瀨古　來た／＼花田達が來たやうだ。早く口を拭へ。

花田　（指をぱきん／＼鳴らす癖がある）お前達は俺のことを俗物だ／＼といつてゐやがつたな。若樣どうだ。

瀨古　僕は汚されたミユーズの女神の爲めに今命がけの復讐をしてゐるところだ。待つてくれ。（口をもが／＼させながら物を云ふ）

花田　貴樣俺のチヨコレットを喰つてるな。この畫室にはそのほかに食ふものはない筈だ。俺はそれを昨日畫箱の

中にちやんとしまつておいたんだ。

澤木　隠し食ひをしておきながら……貴樣はチヨコレツトで畫が描けるとでも思つてるんか。神聖なる畫箱にチヨコレツトを……だから貴樣は俗物だよ。

花田　何んとでもいへ。然し俺がゐなかつたら、お前達は飢ゑ死にをするより仕方ないところだつたんだ。

澤木　まあいゝから、貴樣の計畫といふものの報告を早くしろ。

花田　さうだ。愚圖々々しちやゐられない。おい青島、堂脇は九頭龍の奴と一緒に來るといつてたか。

青島　そんな事をいつてたやうだ。何しろ堂脇のお孃さんていふのには、僕は全く憧憬してしまつた。その姿に見とれてゐたもんで、おやぢの言葉なんか、半分がた聞き漏らしちやつた。

澤木　馬鹿。

青島　あの娘なら藝術が本當にわかるに違ひない。藝術家の妻になるために生れて來たやうな處女だ。あの大俗物の堂脇があんな天女を生むんだから皮肉だよ。而してかの女は、藝術に對する心からの憧憬を踏みにじられて、遂には大金持ちの馬鹿息子のところにでも片付けられてしまふんだ……あんな人をモデルにつかつて一度でも畫が描いて見たいなあ。

瀨古　そんなか。

青島　そんなだとも。

とも子　今日はもう私、用がないやうだから歸りますわ。

戸部　俺に用があるよ。くだらないことばかりいつてやがる。俺が描くから……

とも子　又うなりを立てゝ、床の上にへたばるんぢやなくつて。

戸部　いゝから……こいつら、うつちやつておけ。

（戸部ひとりだけとも子をモデルにして描きはじめる。その間に次ぎの會話が行はれる。）

花田　全くともちやんに歸られちや困るよ。青島、貴樣餘計なことをいふからいかんよ。……兎に角皆んな氣を落ちつけて俺の報告を聞け。ドモ又もともちやんも、そこで聞いてゐるんだぜ……待てよ（時計を出して見ようとして無くなつてゐるのを發見）時計もセブンか。セブンどころぢやない。イレブン位だらう。いそがないと間に合はない。今朝俺は青島と手分けをして、青島は堂脇んちの庭に行き、俺は九頭龍の店に行つた。迚もたまらない奴だ。はじめの間は中々取りつく島もなかつたが、たうとう利を以つておびき出してやつた。名は今一寸いへないが私共の仲間に一人、圖拔けてえらい天才がゐる。油でもコンテでも全然拔群で美校の校長も、黑馬會の白

島先生も藤田先生も、凡そ先生と名のつく先生は、彼の作品を見たものは一人殘らず、唯々驚嘆するばかりで、是非展覽會に出品したらといふんだが、奴、旋毛曲りで、うんといはないばかりか、てんで今の大家なんか眼中になく、貧乏しながらも、默つてこつ〳〵と畫ばかり描いてゐた。だから世間では、俺達の仲間の外に、奴のことを知つてるものは一人だつてゐやあしない。

澤木　うん全くそれはその通りだ。

花田　ところがその男が貧に逼り、飢に疲れてたうとう昨日死んでしまつた。

澤木　馬鹿をいふない。俺は兎に角まだ生きてるぞ。

花田　誰れが死んだのはお前たつてさういつたい。……ところで俺達は實に悲嘆に暮れてしまつた。一體俺達が、五人揃つて貧乏のどんづまりに引きさがりながらも、鼻歌まじりで勇んで暮してゐるのは、誰れにもあづけておけない仕事があるからだ。その仕事をし遂げるまでは、縱令ひ死神が手をついて迎へに來ても、死神の方をたゝき殺す位な勢ひでやつてゐるんだ。その中でもがんばり方といひ、力量といひ、一段も二段も立ち勝つてゐたのは奴だつた。東京の隅つこから世界の美術をひつくり返すやうな仕事が出るのを俺達は彼に於いて期待してゐた。だのに、餘りに勝れたものは神も妬むのだらう。奴は倒れてしまつた。奴は火だつた。焰だつた。奴の燃えることは奴の滅びることだつたんだ。

戸部　貴樣さういつたか。

花田　うむ。

戸部　よくいつた。

花田　俺はまだかうもいつた。奴には一人の弟があつて、その弟の細君といふのが、心と姿との美しい女だつた。而してその女が毎日俺達の畫室に來てモデルになつてくれた。俺達のやうな物質的には無能力に近いグループの爲めに盡してくれるその女の志は美しいものだつた。奴は竊かにその弟の妻君に戀をしてゐたけれども定められた運命だから如何することも出來ない。奴は苦しんだ。而してその苦しみと無限の淋しみとを、幾枚もの畫に描き上げた。風景や靜物にも素晴らしいのはあるが、その女の肖像畫に至つては神品だといふより外に言葉がない。

瀨古　おい〳〵それは誰れの事だい。ともちやん、お前覺えがある。

花田　まあ、あとでわかるから默つて聞け。ところで、奴が死んで見ると、俺達彼の仲間は、奴の作品を最も正しい方法で後世に遺す義務を感ずるのだ。ところで、俺は九頭龍にいつた。苟くもお前さんが押しも押されもしな

い書畫屋さんである以上、書畫屋といふ商賣にふさはしい見識を見せるのが、お前さんの譽れにもなるし沽券にもなる。一つお前さんあれを一手に引受けて遺作展覽會をやる氣はありませんか。さうしたら、九頭龍の野郎、それは耳よりなお話ですから、私も一つ損得を捨てゝ乘らないものでもありませんが、それ程先生方がお讃めになるもんなら、展覽會の案内書に先生方から一言づゝでもお言葉を頂戴することにしたらどんなものでせうといやがつた。

瀨古　僕はいやだよ、そんなのは。僕等の藝術に先生方の裏書きをして貰ふ位なら、僕は野末でのたれ死をして見せる。

とも子　えらいわ若樣。

瀨古　ひやかすなよ。

花田　全くだ。第一俺達のやうな頸骨の固い謀叛人に對して、大家先生達が裏書きどころか、俺達と先生方と何のかゝはりあらんやだ。……ところで俺はいつた。そんなら、こちらでお斷りする外はない。奴の畫はそんなけちな畫ではない。大手をふつて一人で通つてゆく畫だ。さういふものを發見するのが書畫屋の見識といふものではないか。さういふ見識から儲けが生れて來なければ、大きな儲けは生れはしない。

澤本　俗物の本音を出したな。

花田　俺がそんなことでもして大きな儲けをしたら俗物でも何んとでもいふがいゝ。融通のきかないのをいゝ事にして仙人ぶつてるお前達とは少し違ふんだから。……ところで九頭龍が大分頭を縱にかしげ始めた。まあ來て御覽なさいといつたら、それではすぐ上りますといつた。……ところで、これからが本當の計略になるんだが、……おい皆んな嚴肅な氣持ちで俺のいふことを聞け。お前達の中誰れでも、この場に死んだとして、今まで描いたものを後世に遺して恥ぢないだけの自信があるか、どうだ。生蕃どうだ。

澤本　無くつてどうする。

花田　よし。瀨古はどうだ。

瀨古　僕は恥ぢる恥ぢないで畫を描いてるんぢやないよ。僕は描きたいから描くんだ。

花田　わかつた。ぢやその氣持ちは純粹だな。

瀨古　今更らそんなことを……水くさい男だなあ。

花田　ドモ又はどうだ。

戸部　出來たものは皆んないやだ。けれども人のに比べれば、俺の方がいゝと俺は思つてゐる。俺はそれを知つてゐる。

花田　靑島の心持ちはもう聞いた。靑島も俺も、自分の仕

事を後世に殘して恥かしいとは思はない。俺達は皆んな謂はゞ子供だ。けれども子供がいつでも大人の家來ぢやないからな。
一同　さうだとも。
花田　ぢやいゝか。俺達五人の中一人は、この場合死ななければならないんだ。あとの四人が畫を描きつゞけて行く費用を造り出すための犧牲となつて、俺達のグループから消え去らなければならないんだ。
瀨古　おい〳〵花田、お前氣でも違つたのか　僕達は藝術家だよ。殉教者ぢやないよ。
花田　藝術の爲に殉死するのさ。その位の意氣があつてもいゝだらう。その代り死んだ奴の畫は九頭龍の手で後世まで殘るんだ。
澤木　俺んといふ智慧のない計略を君樣は考へ出したもんだ。そんなことを考へだした奴は自分が先きに死ぬがいいんだ。
花田　俺が死んでいゝかい。……さうだもう一ついふことを忘れてゐたが、死ぬ番にあたつた奴は、その褒美として、ともちやんを奧さんにすることが出來るんだ。この大事な條件をいふのを忘れてゐた。おいともちやん……ドモ又、もう描くのをやめろよ……ともちやん、お前頼むから俺達五人の中の誰れでもいゝ、お前の氣に入つた人と本當に結婚してくれないか。
とも子　何んですねえ途轍もない。
花田　俺達五人の中の一人、お前の旦那にしてもいゝと思ふのがゐるつてお前いつかのろけてゐたぢやないか。
とも子　それや……それやゐないこともないことよ。
花田　待てよ「ゐないこともないことよ」といふのは結局ゐるといふことだね。
とも子　知らないわ。
花田　女が「知らないわ」といつたら、もうしめたもんだ。お前が一人選んだら、俺達あとに殘された四人は、綺麗に未練を捨てて、二人が一緒になれるやうに、極力奔走する。成功させるために乾度盡力する。だからお前、本氣になつてこの五人の中から選ぶんだ。ともちやんだつて、俺達ボヘミヤンは自由なものだ。ともちやんだつて、俺達の仲間になつてくれてる以上はボヘミヤンだ。ねえ。さうだらう。構はないから選び給へ。俺達は縱令ひ選にもれても、ストイツクのやうに忍ぶから……心配せずに。俺達の方にはともちやんを細君に持つのに反對する奴は一人もゐまい。どうだ皆んないゝかよければ「よし」といへ。
一同　よし。
とも子　選んだらどうするの。

花田　そいつが殘る四人の爲に死ななければならないんだ。
とも子　冗談もいゝ加減にするものよ。人を馬鹿にして。(涙ぐむ)
花田　なあに、冗談ぢやないさ。わけはない、ころつと死にさへすればいゝんだよ。
戸部　花田、貴樣は殘酷な奴だ。……ともちやんをすぐ寡婦にする……そんな……貴樣。
花田（初めて思ひついたやうに堪らない程笑ふ）何んだ、貴樣達はともちやんのハスが本當に……
瀨古　死なければならないんだらう。
花田　死ぬことになるんださ。
瀨古　同じぢやないか。
花田　同じぢやないさ。
靑島　花田のいひ方が惡いんだよ。死ぬことになるんぢやない、つまり死んだことにするんだよ。わかつたらう。つまり死ぬんぢやない、死んでしまふこと……でもないかな。
花田　つまり、かうだ、いゝか、頭を冷靜にしてよく聞け。いゝか。ともちやんに選ばれた奴は實はその選ばれた奴の弟なんだ。いゝか。而してともちやんとその弟とは前から夫婦なんだ。ともちやんは、俺達に理解と同情とを持つてゐて、モデルも償へない程貧乏な俺達のためにモデルになつてくれたのだ。いゝか。ところでともちやんのハスの兄貴にあたるのが、本當は俺達五人の仲間の一人で、それがともちやんに戀をして、貧乏と戀との爲に業半ばにして死ぬことになるんだ。今度はわかつたらう。……まだ解らないのか……濟度しがたい奴だなあ。ぢや靑島、實物でやつて見せるより仕方がない、あれを持ち込まう。

（花田と靑島黑布に被はれたる寢棺を擔ぎこむ。）
とも子　いや……緣起の惡い……
澤木　全く貴樣はどうかしやしないか。
花田　さあ、ともちやん、俺達の中から一人選んでくれ。俺が引き受けた、お前の旦那は決して死なしはしないから。
とも子　だつてそんな寢棺を持ち込む以上は……
花田　死骸になつてこゝに這入る奴はこれだ。（といひながら、壁にかけられた石膏面を指す）こいつに繪具を塗つてお前の選んだ男の代りに入れればいゝんだよ。例へば俺がお前に選ばれたとするね。本當にさうありたいことだが。すると俺は俺の弟となつてお前と夫婦になるんだ。而してこいつ（石膏面）が俺の身代りになつてこの棺の中にはいるんだ。

とも子　はゝあ……少し解つて來てよ。

花田　わかつたかい。天才畫家の花田は死んで了ふんだ。本當にもうこの世の中にはゐなくなつてしまふんだ。その代り花田と弟といふのがひよこり出來上るんだ。それが俺さ。而してお前へのハスさ。

とも子　はゝあ……大分解つて來てよ。

花田　な。そこに大俗物の九頭龍と、頭の惡い美術好きの成金堂脇左門とが、娘でも連れてはいつて來る。花田の弟になり切つた俺がお前と一緒にこゝにゐて愁歎場を見せるといふ仕組みなんだ。どうだ俗人共もわかつたか。花田の弟になる俺は生きて行くが、花田の兄貴なる本當の花田は死んだことにするんだ。ぢやない死ぬことになるんだ。現在死なねばならないんだ。それだから俺は始めから死ぬんだ〳〵といつて聞かせてゐるのに、貴樣達はまるで木偶の坊見たいだからなあ。……ところで俺の弟は、兄貴の志をついで天才畫家になるとしても、兎に角俺が死なねばならぬといふのは悲壯な事實だよ。死にさへすれば、殊に若死さへすれば大抵の奴は天才になるに決つてゐるんだ。（石膏面をながめながら）死は如何なる場合に於いても、嚴かな悲しいもんだ。だからかゝる犧牲を拂ふからには、俺がともちやんのハスとして選ばれる位のことが必要になるんだ。

とも子　何もあなたなんかまだ選びはしないことよ。女つてものは。

花田　さうつけ〳〵やり込めるもんぢやないよ。女つてものは。

澤木　俺はもう駄目だ。俺は或る女を戀してゐた。而して飢が逼つて來た。あゝ俺は死んだ方がいゝ。俺は天才畫家として畫筆を握つたまゝ死にたいよ。

とも子　花田さん、私、死ぬ人を旦那さんにするんぢやないのね。私の旦那さんが死ぬことになるのでせう。

澤木　さうつけ〳〵やり込めるものぢやないよ、女つてものは。

花田　皆んな俺の計略が解つたな。俺達は今俺達の共同の敵なるフイリステインと戰はねばならぬ時が來た。青島、お前と堂脇との遭遇戰についても簡單に報告しろよ。

青島　僕はかまはず堂脇の家の廣い庭にはいりこんで畫を描いてゐてやつた。さうしたら堂脇がお孃さんを連れて散歩にやつて來た。堂脇はこんな風に歩いて、お孃さんはこんな風に歩いて。而して俺の脇に突つ立つて畫を描くのをぢつと見てゐたつけが、庭にはいりこんだのを怒ると思ひの外、ふんと感心したやうな鼻息を漏らした。お孃さんまでが「まあ綺麗だこと」と御意遊ばした。僕はしめたと思つて、物をいひ出すつぎ穗に苦心したが、あんな海千山千の動物には俺の言葉はとてもわからない

と思つて黙つてゐた。全くあんな怪物の前に行くと薄氣味の悪いもんだね。さうしたら堂脇が案外やさしい聲で、「失禮ながらどちらで御勉强です、大層お見事だが」と切り出した。僕は花田に敎へられたとほり、自分の畫なんか何んでもないが、昨日死んだ仲間の畫は實に大したものだ、若しそれが世間に出たら、一世を驚かすだらうと、一生懸命になつて吹聽したんだ。いかもの食ひの名人だけあつて堂脇の奴すぐ乘り氣になつた。僕は九頭龍の主人が來て見ることになつてゐるから、何んなら連れ立つておいでなさいといつて飛び出して來た。何しろお孃さんがちかちか動物電氣を送るんで、僕はとても長くゐたたまれなかつた。どうして最も美を憧憬する僕達の世界には、ナチュール・モルトの外に美がとりつかないんだらうかな。

瀨古　どうかしてそのお孃さんを描かうぢやないか。

靑島　あの人がモデルになつてくれゝば僕はモナ・リザ以上のものを描いて見せるよ、乾度。

瀨古　僕はワットーの精神でそのデカダンの美を見きはめてやる。

靑島　見もしないで何をいふんだい。

瀨古　君は藝術の想像力を……

花田　報告終り。事務第一。さ、皆んな覺悟はいゝか。ともちやん、さあ選んでくれ。

とも子　私！　恥かしいわ。

瀨古　お前の無邪氣さでやつちまひ給へ。何、一と言、誰れつていつてしまへば、それだけのことだよ。

とも子　ぢや一生懸命で勇氣を出して……けど、私たこれつていつた人は、いやだなんていはないで頂戴ね。でないと、私本當に自殺してよ。

花田　誓ひを立てたんだから皆んな大丈夫だ。

（瀨古は自信をもつて歩きまはる。花田は重いものを度々落して自分の方に注意を促がす。澤本は苦痛の表情を强めて同情を惹く、靑島はとも子の前に坐つてぢつとその顏を見ようとする。戸部は畫箱の掃除をはじめる。）

とも子　（人々から顏をそむけ）では始めてよ。花田さん、あなたは才覺があつて畫がお上手だから、いまに立派な畫の會を作つて、その會長さんにでもおなりなさるわ。お嫁にしてもらひたいつて、學問の出來る美しい方が掃いて捨てる程集まつて來てよ乾度。澤本さんは男らしい、正直な生蕃さんね。あなたとは隨分口喧嘩をしましたが、奥さんが出來たら隨分可愛がるでせうね、而してお子さんも澤山出來るわ。而して物干竿におしめが賑やかにならびますわ。靑島さんは花田さんと一緒に會をやつて、

屹度偉らくなるわ。いまに皆んながあなたの畫を認めて大騷ぎする時が來てよ。而して堂脇さんとやらが、美しいお孃さんを貰つて下さいつて、先方から頭を下げて來るかも知れないわ。けれどもあんまり浮氣をしちやいけなくつてよ。瀨古さん……あなた若樣ね。きさくで親切で、顏付きだつて一番上品で綺麗だし、お友達にはうつてつけな方ね。でもあなた、屹度日本なんかいやだつて外國にでも行つちまふんでせう。お大事にお暮しなさい。戶部さんは叱りで、癇癪持ちで、氣むづかしやね。いつまでたつてもあなたの畫は賣れさうもないことね。けれどもあなたは強かりなくせに變に淋しい方ね……

戶部　畜生……

とも子　惡口になつたら、許して頂戴。でも私は心から皆さんにお禮しますわ。私見たいながらくした物のわからない人間を、皆さんで可愛がつて下さつたんですもの。お金にはちつともならなかつたけれども、私、何所に行くよりも、こゝに來るのが一番嬉しかつたの。ともどもに苦勞しながら、銘々が一番偉らいつもりで、仲よく勉強してゐるのを見てゐると、何んだか知らないが、私時時淚がこぼれつちまひましたわ……でも私、自分の旦那さんを極めなければならないんだわ。いやになるねえ。私、私がいゝ人を選んでも、どうか怒らないで頂戴よ。私、これでも身の程をわきまへて選ぶつもりですから………（急に戶部の前にかけ寄り、ぴつたりそこに坐り頭を下げる）戶部さん、私あなたのお內儀さんになります。怒らないで頂戴よ。私あなたのことを思ふと、變に悲しくなつて泣いちまふんですもの……

戶部　君……冗談をいふない、冗談を……

花田　ともちやん、出來したぞ。全くお前に似合はしい選び方だ。だがドモ又におはちが廻らうとは俺も實は今の今まで思はなかつたよ。ともちやんが戶部一人のものになつて、明日から來なくなると思ふと、急に俺達の上には秋が來たやうだなあ……然しもう何もいふな。皆んなもう何もいふな勇ましく運命に默從する外はない。而して戶部とともちやんとの未來を祝福しようぢやないか。

戶部　俺はともちやんをなぐつたことがある。

とも子　えゝ、たしかに二度なぐられてよ。

戶部　それでも、俺のところに來る氣か。

とも子　行きます。その代り、今度こそはなぐられてばかりはゐないわ。

瀨古　夫婦喧嘩の仲裁なら僕がしてやるよ。

戶部　餘計な世話だ。

とも子　（同時に）餘計なお世話よ。

青島　氣が強くなつたなあ。

花田　それどころぢやない。もうおッつけ九頭龍等がやつて來る。おい若夫婦、お前達は今日は花形だから忙しいぞ。ともちやん……ぢやない、奥さんは庭にお出でなすつて、お兄さんの棺を飾る花をお集め下さいませんか。ドモ又、お前が描いた畫といふ畫は何んでもかんでも持ち出してサインをしろ。而して青島、お前一つこの石膏面に繪具を塗つてドモ又の死顏らしくしてくれ。それから澤本と瀬古とは部屋を片付けて……但し畫室らしく片付けろよ。藝術家の尊嚴を失ふ程きちんと片付けちや駄目だよ。美的にそこいらを散らすのを忘れちやいかんぜ。そこで俺はと……俺はドモ又をドモ又の弟に仕立て上げる役目にまはるから……お前の畫は大抵隣りの部屋にあるんだらう。これはお前んだ。これも〳〵皆んな持つて行かう。

（とも子は庭に、戸部と花田別室に入り去る。）

青島　こんなアポロの面にいくら繪具をなすりつけたつて、ドモ又の顏にはなりやしないや。も少し獅子鼻ででこぼくのある……まあこれだな、ベートーヹンで間に合はせるんだな。

（青島塗りはじめる。）

澤本　あゝ俺はもう駄目だ。興奮が過ぎ去つたら急に又腹がへつて來た。一體花田の奴餘計なことをしやがる奴だ……あの可憐な自然兒ともちやんも、人妻なんていふ人間じみたものに……あゝ、俺はもう駄目だ。若樣、貴樣勝手に掃除しろ。

瀬古　僕もすつかり悲觀したよ。もとはつていへば青島が惡いんだ。堂脇のお孃さんのモデル事件さへ無ければ、運命はもつと正しい道筋を歩いてゐたんだ。

青島　僕が惡いんぢやない、堂脇のお孃さんが存在してゐたのが惡いんだ。お孃さんの存在が惡いんぢやない、その存在を可能ならしめた堂脇のぢゝいの存在してゐたのが惡いんだ。つまり堂脇のぢゝいが僕達の運命をすつかり狂はしてしまつたんだよ……どうだ少しドモ又に似て來たか……他人の運命を狂はした罪科に對して、堂脇は存分に罰せらるべきだよ。

澤本　さうだとも。何しろ彼奴の金力が美の標準を目茶苦茶にする爲めに使はれてゐたんだ。その爲めに俺達は三度のものも食へない程に飢ゑてしまふんだ。ドモ又が死んで色づけのベートーヹンになる結果に陷つたんだ。ドモ又の命が買ひもどせる位の罰金を出させなけれや、俺達の腹の蟲は納まらないや。

瀬古　而してそれが結局堂脇や九頭龍を教育することになるんだからなあ。いくら高く買はせたつてドモ又の畫は高くはないよ。今度あいつらは生れてはじめて畫といふ

ものを拜むんだ。うんと高く賣りつけてやるんだなあ。

澤木　さうすると、俺達はうんと飯を食つて底力を養ふことが出來るぞ。

青島　さうだ。

澤木　あゝ早く我等の共同の敵なるフイリステイン共が來るといゝなあ。おい若様、少し働かう。

（二人であらかた畫室を片付ける。花田と戸部とがはいつて來る。戸部は頭を虎斑に刈りこまれて髭を剃り落されてゐる。）

花田　諸君、ドモ又の戸部が死んだについて、その令弟が急を聞いて尋ねて來られたんだ。諸君に紹介します。

（一同笑ひながら頭を下げる。）

戸部　俺れ……ぢやない、俺の兄貴の死顏を一寸見せてくれ。

青島　どうだこれで、（石膏面を見せる）

戸部　俺の兄貴は醜男だつたなあ。

花田　醜男はいゝが髭が生えてゐないぢやないか。近所の人が悔みに來るとまづいから、剃り落した髭を植ゑてやらう。それから體の方も造らなきや……この棺を隣りに持つていつて……おいドモ又の弟、お前そこで殘つたのにサインしろ。

（戸部を殘し一同退場。戸部しきりとサインをしてゐる。とも子花を持ちて入場。）

とも子　（戸部とは氣がつかず次ぎの部屋に行かうとする）あの、御免下さいまし……

戸部　ともちやん……俺だ……俺だ……

とも子　あら……あなた戸部さんぢやなくつて。

戸部　俺は君のハスで……戸部の弟だよ。

とも子　あらさうだわ。まあそれに違ひないわ。戸部さんの弟つて。戸部さんより若い方ねえ。

戸部　ともちやん……俺は君に遇つた時から……君が好きだつた。けれども俺は、女なんかに縁はないと思つて諦めてゐたんだが……

とも子　御免なさいよ。私、はじめてこゝに來た時、あなたなんて默りこくつた醜男な人、ゐるんだかゐない人だかわからなかつたんですけど、だん／＼、だん／＼好きになつて來てしまひましたわ。花田さんが私の旦那さんに誰れでも選んでいゝつていつた時は、本當は隨分嬉しかつたけれど、あなたは屹度私が嫌ひなんだと思つて隨分心配したわ。

戸部　何しろ俺は幸福だ……俺は自分の藝術の外には、もう何んにも望みはないよ……俺はもう君をなぐらないよ。

とも子　（嬉しさに涙ぐみつゝ）なぐつてもいゝことよ。

いゝから私を可愛がつて下さいね。私も一生懸命であなたを可愛がりますわ。あなたは寶の珠のやうに、可愛がれば可愛がる程光りが出て來る人だつてことを私ちやんと知つてゝよ。あなたは泥だらけな寶の珠だわ。

戸部　俺は口がきけないから……思つたことがいへない……

（とも子の手を取つて引き寄せようとする。澤本突然戸を開けて登場。）

澤本　おうい、ドモ又……と、あの、貴様のその上衣をよこせ、貴樣の兄貴に着せるんだから。その代りこれを着ろ……ともちやん花が取れたかい。それか、それをおくれ、棺を飾るんだから……

（澤本退場……戸部ととも子寄り添はんとす。別室にて哄笑の聲、二人口惜しさうに離れたところに坐る。）

とも子　今夜歸つたら、私すぐお母さんにさういつて、いやでも應でも承知させますわ。で、今度のあなたの名前は……

戸部　俺は何んといふ名前にするかな……

とも子　いゝわ、私の名を上げるから、戸部又ぢやいけない……それぢやをかしいわね。あのね……あなた又畫かきになるんでせう……

（とも子近づかうとする。瀬古登場。）

瀬古　ちよつと／＼。こゝにお前の靈がまだ殘つてゐたから……

戸部　うるさい奴だなあ……

（瀬古退場。別室にて哄笑の聲、やがて一同飾りを終つて棺をかついで登場。）

花田　早く／＼……もうやつて來るぞ。棺のこつちにこの椅子をおいて……これをこゝに、おい青島……それをそつちにやつてくれ……おい皆んな手傳へな……一時間の後には俺達はしこたま御馳走が食へる身分なんだ。生蕃、そんな及び腰をするなよ、みつともない……これで大體いゝ……さあ皆んな舞臺よきところに坐れ。若夫婦はその椅子だ。

何しろ俺達は、一人の大事な友人を犧牲に供して飯を食はねばならぬ悲境にあるんだ。ドモ又は俺達五人の仲間から消えてなくなるのだ。ドモ又の弟はその細君のともちやんと旅の空に出かけることになるだらう。俺達のやうに良心を以て眞劍に働く人間がこんな大きな損失を忍ばねばならぬといふのは世にも悲慘なことだ。然し俺達は自分の愛護する藝術のために最後まで戰はねばならない。俺達の主張を成就するためには手段を選んではゐられなくなつたんだ。俺達はこの棺の中に死んで横たはるドモ又の靈にかけて誓ひを立てよう。俺達はこの友人の

死に値ひするだけの立派な藝術を生み出すことを誓ふ。
一同　誓ふ。
花田　俺達は力を協せて、九頭龍といふ惡ブローカー及び堂脇といふ似而非美術保護者の金嚢から、能ふかぎりの罰金を支拂はせることを誓ふ。
一同　誓ふ。
花田　その爲めには日頃の馬鹿正直を拋つて、巧みに權謀術數を用ふることを誓ふ。
一同　誓ふ。
花田　但し尻尾を出しさうな奴は默つて引つ込んでゐる方がいゝぜ。それでは俺達四人は戸部とともちやんとに最後の告別をしようぢやないか。……戸部、お前のこれまでの藝術は、若くして死んだ天才戸部の藝術として世に殘るだらう。然してこでお前の生活が中斷するのを俺達はすまなく思ふ。然しその償ひにともちやんを得た以上、不平をいはないでくれ。な、而してお前は新たに戸部の弟として新生面を開いてくれ。俺達はそれを待つてゐるから。おやさよなら。
（一同交る／＼握手する。）
花田　ともちやん、お前は俺達の力だつた。慰めだつた。お母さんだつた、可愛いゝ娘だつた。お前と別れるのは俺達には全くつらいや。だからお前の額に一度だけ皆んなで接吻するのをゆるしておくれ。なあ戸部いゝだらう。
戸部　よし、一度限り許してやる。
花田　ともちやんさよなら。（額に接吻する）
とも子　さよなら花田さん。
澤本　俺はまあやめとく。握手だけしとく。
とも子　さよなら生蕃さん。
青島　さよなら。（額に接吻する）
とも子　お大事に浮氣屋さん。
瀨古　唇をよくお見せ、あゝあ。（額に接吻する）
とも子　さよなら可愛いゝ若樣。
（とも子さすがに感情せまつて泣き出す。）
花田　よし。それからドモ又の弟にいふが、不精をしてゐると、頭の毛と髭とが延びて來て、ドモ又にあと戻りする恐れがあるから、今後決して不精髭を生やさないことにしてくれ。
とも子　そんなこと、私がさせときませんわ。
（戸外にて戸をたゝく音聞こゆ。）
人の聲　えゝ、御免下さいまし、九頭龍で御座いますが、花田さんはおゐでで御座いませうか。
他の人の聲　私は堂脇ですが……
花田　そら來やがつた……皆んないゝか大丈夫か……俺達は非常な不幸に遇つたんだぞ。悲しみのどん底にゐるん

だぞ。此の際笑ひでもした奴は敵に内通した謀叛人として皆んなで制裁するからさう思へ。九頭龍も堂脇も……今開けます、一寸待つて下さい……九頭龍も堂脇もたまらない俗物だが、政略上向腹を立てゝ事をし損じないやうに皆んな誓へ。

一同　誓ふ。

花田　泣ける奴は時々涙をこぼすやうにしろ、いゝか……ぢや開けるぞ。

澤本　花田、ちよつと待て……（茶碗に二杯水を入れて戸部の所に持つて行く）おいドモ又、貴様の涙をこの中に入れとくぞ。これはともちやんのだ。尻の後ろにやつとけ。慌てゝこぼすな。

花田　しいつ。（觀客の方に向いて笑ふのを制する）ぢや開けるぞ。皆んなしかめつ面をしてろ。

（とも子はさつきから本當に泣いてゐる。戸部茶碗から水をすくつて眼のうちに塗る。花田戸を開けに行く。）

——幕——

（一九二二年十月、泉所載）

長與善郎篇

項羽と劉邦（六幕十六場）

——友なる若き人々に——

人物

項羽

項梁　項羽の叔父

殷通　會稽の太守

殷桃娘　その娘後に韓信の妻

虞姫（虞美人）　虞一公の養女、項羽の妃

鍾離昧
季布
桓楚
英布　｝皆項羽の將帥

范增　項羽の老軍師

楚の懷王

劉邦　後に漢王となり遂に漢の高祖となる

呂姫（呂雉）　その妃呂文の娘

張良　劉邦の參謀

蕭何
樊噲
曹參
夏侯嬰　｝皆劉邦の將帥

韓信　始め項羽の臣後に漢軍の元帥

李左車

其他多勢

處　支那

時　秦の始皇帝の死後より漢の高祖の即位の前迄、即ち西曆紀元前二百十年頃より同二百年頃迄、約十年の間とす。

序幕

會稽の太守殷通の館

殷通、及び大將鍾離昧、地圖を擴げたる机を挾むで對話す。

鍾離昧　何でも中途でやり損へば盜賊と云はれても、それでやり遂げて了へば豪傑と云ふ名に變るんですからね。實際

の處、誰だつて始皇が成り上り者で、天下の騷亂に紛れて旨く主人の空巢を占領した體のいゝ大泥棒だと云ふ事は認めてゐるんです。その癖奴等は矢張りかう云ふんです。「何と云つてもあれ丈けの事を仕出かすと云ふなあ豪傑でなくちや出來ない事さ。皆から惡く云はれると云ふのは矢つ張り何處か豪い處のある證據なんだ。」と。

殷通　だがそれでゐ乍ら矢張り鍍金は剝げて來るから不思議なものさ。尤もあれでもう少しつゝしむと云ふ事さへ知つて居たら秦もあんなに脆い崩れ方はしなかつたらうが、そのつゝしみを自分の威勢にまかせてつい忘れ勝ちになると云ふのがあゝ云ふ盛者の誘惑なのだな。

鐘　さうです。誰れでも王にならうと云ふ野心の燃えて居る間は相當に天命を怖れて愼しむことも知つて居ますが、さてその野心が充たされて了ふと、之からが大事と云ふ處でなあに俺なら之位の事はしたつて構ふ事はないと云ふ慢心に打ち克たれて了ふんですね。而も其「之位の事」と云ふのが始めは大した事でもなかつたのが次第に氣か大きくなつて滅茶苦茶なことをし出かすもんですから忽ち民望を失つて、自分で氣がついた時分にはもう瓦解が始まつてゐると云ふ譯なんですね。

殷通　そこへ行くと夏の禹王とか殷の湯王とか云ふ人達はさすがに名王と呼ばれる丈けあつて利巧な者だ。所謂勝てば勝つ程甲の緒を締めるのだから運命も油斷を狙ふと云ふ事が……（地圖を見乍ら）はあ、之がその沼だな。不思議な氣が昇つたとか云ふ。

鐘　さうです。天子の氣が立ち昇つたとか云ひますね。ふむ。どんな氣が昇つたのかそんな噂が立つと腹に一物ある奴がすぐと御幣を擔いで、「それ見ろ。俺の事に違ひない。」なんて自惚をてんでに起すから面白いですよ。

殷通　ふむ。（又地圖を見て）それから例の隕石が落ちたとか云ふのは何處だ。

鐘　此處です。東郡です。「始皇死して地分る」とか書いてあつたと云ひますね。乾度誰かゞ惡戲にそんな石を投げて天から降つたやうに云ひふらしたんでしようが、それでも始皇は酷くそれを氣に病んで其近在十里四方の百姓を悉く斬り殺して、其石を燒き捨てたとか云ふ事です。可哀想に、何かと云つては災難に遭ふ者は百姓です。

殷通　ほんとうに天下は滅茶苦茶だ。

鐘　之からは猶ほ血腥くなるでしやう。今迄は云はゞ菌を生やす爲めの大雨のやうなものですが、之からはその菌同志の咬み合ひになるんですから。まあ當分の間は天下に血の雨は絕えませんね。

殷通　哀しい事だ。だが咬み殺されない爲めには此方が先きに起たなければならない。どうも愁つか秦の恩を受け

た事がある丈けに兵を擧げろ理由を附けにくいが、そんな事を云つてはゐられない。

鐘　こんな時に理由もへちまもあるもんですか。理由があつて戰ふ方は毎も敗けろに定まつてゐるんですからね。とは云へ、私達が起たなければ百姓共は秦の暴政に苦しむ一方なんですから、こんな公明な理由かあれや他の理由なんぞ要るもんですか。

（二人猶ほ地圖を檢べる。殷通の娘、桃娘入り來る。）

桃娘（肩に手をかけ）お忙しいの？

殷通（微笑み乍ら頭髪を撫て）又邪魔をしに來たね。お前は。

桃娘　いゝえ、妾少し阿父樣にお願ひがあつて來ましたの。

鐘　お孃さん。どうも貴孃は益々お綺麗におなりですね。

桃娘　そんた事を被仰ると貴方の馬の手綱をほどいて逃がして了ひますよ。鐘離昧さん。

鐘　はゝ。大丈夫です。お孃さん。私の馬は私のしろと云ふ事でなければしませんから。

殷通（地圖を見乍ら）又お願ひか。お前のお願なら大抵定まつてゐる。

桃娘（巫山戯てゐるやうに見せて何處となく眞劍に）そんならそれを聞いて下さる？

殷通　聞いてやるよ。だがそれはまあ後にして貰はう。今は忙しいから向うへ行つておいで。

桃娘　阿父樣は一體妾を何時迄子供扱ひになさるお心算なんでせう。

殷通（娘の顏に見入り乍ら）さう、お前が丁度お前位の年頃の娘でも持つ頃になつたらな。

鐘　はゝ。阿父樣は貴孃が餘り可愛いもんでついねんねえ扱ひになさり度いんですよ。無理はありません。他人の私だつて貴孃のやうた方を見るとつい一緒に巫山戯度くなりますからね。（桃娘の手を取り）まあ、そんなに早く大人ぶらずに可愛いお孃さんでゐてお上げなさい。それが孝行ですよ。もう二三年も經つて貴孃が眩ぶしいやうな花嫁におなりんなる頃にはもうそんな眞似は爲度くもお出來んなれないでしやうからね。はつ。

桃娘　鐘離昧さん。妾今本當に眞面目なお願ひがあつて來たのですからどうかそんな冗談を云つて掻き廻はさないで下さい。（もじ〳〵して）ねえ阿父樣。……今日……あの項羽つて云ふ人にお會ひんなりますの？

殷通　會ふよ。それがどうした。

桃娘　それが……何だか妾かうして阿父樣の前へ出て鐘離昧さんを見たりしますと又氣が變つて安心して來ましたけれど、そして妾の心配してゐた事がもう何だか妾の氣の故で、云ふのが馬鹿らしいやうな氣がして來ましたけ

れど……

鐘　いや、分りました。大方あの熊のやうな項羽が貴孃を見度いとでも云ひはしないかと被仰るんでせう。

桃娘　まあ、そんな事ぢやありませんわ。あゝ、妾矢張り云はないと氣がすまないわ。あの阿父樣。どうかお怒りんならないで…妾本當に氣か揉めてなりませんの。

殷通　何がそんなに氣が揉めるのだ。項羽がどうしたと云ふんだ。

桃娘　阿父樣。どうかあんな人とお會ひになるのはお止しになる事は出來ませんの？

殷通　（地圖を見乍ら頷く）うん。うん。さう。さう。

桃娘　（噴き出して）まあ、人の云ふ事を聞いてもいらつしやらずに一人で「うん、うん、さう、さう」ですつて。妾厭になつて了ふわ。

殷通　いや、聞いてゐるよ。

桃娘　阿父樣、冗談ではなくつてよ。本氣で聞いて下さらなくつちや。妾昨夜あの……それは恐ろしい厭な夢を見たんですの。

殷通　何だ。項羽が俺の首を取る夢でも見たと云ふのか。

桃娘　（其言葉にドキッとして項垂れる）いゝえ。槍で………。

鐘　天井から槍が阿父樣のお頭の上に落ちて來ましたか。

（態とらしく笑ふ）

桃娘　何でもあるお城の城主になつてお居でになる阿父樣の處へ兄弟二人の賊が阿父樣と何か相談をし度いと云つて來ましたの。そして其兄さんの方が阿父樣に會つて話をしてゐる間に何か合圖をすると其弟がいきなり此幕の後ろから阿父樣を槍で突き殺して……其お城を取つて了ひましたの。そして其兄さんの方が代つて城主になつて了ひました。

殷通　（つい顏色をかへる）ふん、馬鹿な夢を見たものだ。

鐘　貴孃がそんな殺風景な夢を御覧になるとは意外ですね。

殷通　それに項羽と項梁とは兄弟ではない。項羽は項梁の甥で、そんな卑怯な瞞まし討ち抔をするやうな奴ではない。疑ひ深いと云ふ奴もあるが、何方かと云へば少し正直過ぎる方の男だ。

鐘　（冷笑的に）何もお孃さんの夢を眞面目にお取りになるには當らないでせう。お孃さん、阿父樣の傍には第一此私と云ふ者も附いてゐるではありませんか。それにあの強い忠義者の季布だつてあゝして傍にゐるんですから。

桃娘　それはさうですけれど、いくら強い貴方々が傍にいらしつても不意討にお遭ひんなつたら間に合ひはしませ

んわ。

鐘　（笑つて）　大丈夫ですよ、劍は德には敵ひません。會稽の太守殷通と云つたら此近隣で知らない者はない位阿父樣は皆から慕はれていらつしやるんですから、何の理由も無しにそんな不埒を働いたら僕が生かしちやおきません。それにあの項梁と云ふ奴は中々利巧者ですから其邊の事はよく心得てゐますよ。

殷通　のみならずあれ等にとつて今俺を殺すのは損だ。あれ等は兵を擧げやうにも兵を持たないのだから。何かやらうと云ふには先づ近い俺から其力を借りるより外はない。而も落ちぶれたとは云つても相手は秦なのだから此方は一人でも多く與む事が必要なのだ。

鐘　早い話が——お孃さんですから打ち明けた處——あれ等二人の者がどんな氣持でゐるかそれを探つてあれ等がつけ上らない先きに此方が向うを旨く手懷けてやらうと云ふのが今日の會合の主意なんです。なあに一寸でも怪しい樣子が先方に見えたら向うが劍の束に手をかけるより先きに此方から向うの首を引つ掻いてやります。はゝ御心配は要りませんよ。

桃娘　それでもその項梁と云ふ狡い叔父さんがどんな事をたくらむであの項羽に智慧をつけるかも知れませんわ。何でもあの項羽つて云ふ人は力が強いばかりであの叔父さんの云ふなり次第になつてゐると云ふではありませんの？

殷通　さう思はれてゐる。だが實はあの馬鹿正直な猪武者に見える項羽の方があの拔け目のない策士の叔父よりもずつと上は手なのだ。阿父さんはちやんとそこに眼星をつけてゐるから、今の中にあの若者を此方の味方に引き入れて先き〲の片腕にしようと思つてゐるのだ。

鐘　何うです。お孃さん。少しは安心しましたか。

桃娘　えゝ、少しは安心しましたわ。でもどうか要心はして居て頂き度いわ。妾矢つ張り變に氣になるんですもの。

鐘　（笑つて）　それやどうせあれ等は腹に一物ある連中ですから無論要心に手ぬかりはありません。私の部下で腕利きな者を五六人その幕の裏に忍ばせて置くことになつて居ます。それで阿父樣が一つ咳拂ひでもなされや直ぐそれ等の者が拔劍で飛び出すと云ふわけです。

桃娘　それよりか寧ろ貴方々も此所に居らしつて一緒にお逢ひんなつた方がよくはありませんか。どうかさうなすつて下さいな。咄嗟の間にどんなことが降りかゝつて、後で向うを殺したつて追付きはしませんわ。

鐘　それやいけません。そんなことをすると始めから向うに警戒させることになつて疑を起させます。阿父樣一人で氣輕にお逢ひんなるのが一番いゝんです。そんなこと

を貴孃のやうに一々心配して居た日には今時誰にだつて逆へるもんではありません。(笑ふ) 殊に大勢の頭になつて人の上に立たうと云ふ阿父樣ではありませんか。

殷通　さうだ。人を我物にするにはこつちが向うを信用してかゝつて居ることを向うに呑み込ませることが大事なのだ。此方が先方を疑つて要心して居ることを相手に氣取らせると此方に惡意の無かつた者までが自然反抗の牙をむくやうになる。危險はお互だ。此方が刀に手をかければ向うはそれを拔くのだ。ね、解つたらう。

鐘　つまりかうです。油斷はしてゐない。然し腹帶は固く締めて居乍ら相手には十分胸を開いて見せると云ふのです。隨分私達の身の上では明かに此方に殺意を抱いて居ると分つて居るやうな者にも差し向ひで逢はなければならない時もありますが、そんな時にはうんと落ちついて、相手を呑むでかゝるに限ります。どうせ向ふは自分の利益の爲めに此方を殺せば殺さうと云ふんですから、其の相手の肚をよく見拔いて、向うの目がけてゐる利益より、も一つ先きの利益を示してやるんです。そして一つ〳〵相手の先廻はりをして向うが突き出す手をあべこべにぐいとたぐりこんでやれや相手は當が外れて面喰つて、此奴は俺の手に合ふ奴でないと氣か付きます。すると始めには嚴めしい脅かすやうな顏付きをして居たものが腋の下に冷汗をかいて逃げて行つて了ひまさ。

桃娘　でももし向うも此方を呑むでかゝつて來たらどうして？

鐘　さうなつたら呑み合ひですね。大きくつて強い者の方が勝ちです。

殷通　まあ阿父樣に任せて安心して居ろ。この會稽の殷通が壯士一人位を怖れるやうでどうする。まさかあの若造に呑まれるやうな事もあるまいぢやないか。

鐘　(起ち上る) はゝ。では又何れ御目にかゝりませう。元より安心はして居りますがどうぞ充分旨く御やりになることを祈つて居ります。

殷通　天が殷通を見捨てない限りは。はゝ。あのことは宜しく頼みましたぞ。

鐘　承知しました。ではお孃さん。御免下さい。今晩又御目にかゝる時には貴孃も先刻は馬鹿な心配をしたもんだと御自分で笑つて居らつしやるでせう。(退場)

桃娘　(間をおいて) 阿父樣。

殷通　何だ。

桃娘　乾度大丈夫？

殷通　お前は此父親をそんなに見縊るのか。

桃娘　まあ、見縊るなんてそんなことが。でも阿父樣が「天が殷通を見捨てない限りは」なんて被仰るんですもの。

殷通　と云ふのは天は殷通を見捨てはしまいと云ふことを少し遠慮して云つたまでだ。天には毎も控へ目にものを云はないと祟られるからな。ふむ。之から旗を擧げようと云ふ今から天に見捨られるやうなことがあつて堪まるものか。誰それは小聲でそつと自分の胸に云ふ可きことなのだ。

桃娘　妾も他の人と御逢ひになるのならこんな心配はしないのですけれど、何しろあの項羽つて云ふ人は恐ろしい秦の始皇帝がこの會稽に來た時でさへ群衆の中から一人で飛び出して行つて、いきなり刺し殺さうとした程の荒武者ですから何をするかと氣になるんですの。

殷通　それは項羽の家にとつては秦は代々の仇敵である上に、始皇があゝ云ふ暴君だからの事だ。が、此俺が彼奴に何の恨みがある。もうかれこれ云ふな。お前が何と云つたつて阿父様は安心してあれ等に會ふ用があるのだ。(歩き廻る)もうそろ／＼來る時分だ。さあ、お前は向うへ行つておいで。そして馬に秣をやり過ぎはしないかどうか見ておいで。

(桃娘、何か云ひたげに渋々退場。殷通は又地圖を見る。風の音。殷通再び立上つて何か考へ乍ら彼方此方歩く。窓の傍に行き街の様子を眺めたりする。)

殷通　テエッ。彼娘が下らぬことを云ふものだから俺の內の臆病蟲迄がとう／＼眼を覺して了つた。誰もそれを知らずに居るからいゝやうなものゝ。馬鹿な。だが、あの鍾離昧と云ふ奴も口先き上手な爲めか少し當てにならぬやうな氣もする。奴、娘の一件で少しは俺に恨みを抱く理由もない事はないのだから。が、彼奴たつて俺に恩を感じてはゐるだらう。――今更此會見を見合はす譯にも行かず、そんな事をすれば却つて危險だ。何、案外容易く望み通りに行かぬものでもない。彼奴たつて命は惜し、野心は强し。まさかそんな無茶な事もしやすまい。季布が五十騎を連れて出迎へに出てゐるのに道で逢へば此俺を斬つて只では歸れない事に奴等も氣がつくだらうし、それにあの城門の側に屯してゐる鍾離昧の兵を見てもだ。其處で此室では俺が一人で如何にも打ちとけた調子で氣楽に款待を表するのだ。(頷き／＼微笑んで)何でもないわ。落ちついて地圖でも見てゝやるか。(風窓をガタガタ云はす。殷通ビクッとする)えゝッ。どうも俺は、生れつき人の頭に立つ器でないのかな。何、白痴でもない限り、臆病でない奴があるものか。まさか誰も聞いてやしまいな。(起つて窓を開き、又扉を明けて見る。安心して)鍾離昧の奴、未だ部下を寄來し居らぬな。どうも彼奴怪しいて。(不安相に)だがこんな事をしてゐても仕方がない。俺は退いてゐよう。こんな物は片づけてお

いてと。（地圖をたゝみ）あゝ（頭を振り胸を抑へ）彼娘の娘らしい恐怖が所謂蟲の知らせと云ふ奴でなければいゝが。チツエ。そんな馬鹿な事が。（退場）

（舞臺一時空。やがて戸外にてワヤ／＼云ふ聲。殷桃娘、乳母と共に出で來る。）

桃娘　とう／＼來て了つたよ。あゝ、妾どうしやう。乾度只では濟まない氣がするけれど。お前大丈夫だと思ふかえ？　えゝ？　婆や。

乳母　何だか大さう大きな人で御座いますねえ。全で犬殺しか、ごろつきの親分のやうで御座いますわね。

桃娘　あゝ妾、心配だ。心配だ。妾行つて斷つてやらうかしら。今急に少しお加減が惡くつてお目にかゝれないつて。あゝもう石段の處迄來て了つたよ。何だつて阿父樣はあんな人をお呼びんなつたのだらうね。（幕を開け）それに未だ誰も來てやしないわ。もう間に合ひはしない。あゝどうしたらいゝだらう。

乳母　お孃樣。大丈夫で御座いますよ。皆んなお氣の故で御座いますよ。なんのいくらきつい荒武者だと云つたとて豹や虎ではあるまいし矢張り妾達同然涙も持つてゐれば情けの血も通つてゐる人間では御座いませんか。人が亂暴をするのは自分の身が危ないと思へばこそです。自分が大丈夫だと云ふ事が分つて而も向うから勸んで迎へられて喜ばない者があるもんで御座いますか。もうお捨て遊ばせ、そんな無駄な御心配は。さあ／＼彼方へ參りましやう。

桃娘　そんな事を云つたつて何うして乾度大丈夫だと云ふ事がお前に分るの？　世の中には自分の利益の爲めに酷たらしい事をする位は何とも思はない人だつてあるわ。まあ、あの雲を御覽よ。眞黑ぢやないか。あゝ、どうしても何か恐ろしい事が起るんだわ。それともお前の云ふやうに妾の氣の故かしら。

乳母　お氣の故で御座いますとも。それでもお孃樣、そんなにお氣におかゝりになるなら其處の入り口の處に立つてお居で遊ばせ。さうして御自分であの人達を御出迎へになつて、此處へ御通し遊ばせ。さうすればあの人達も此可愛いゝ綺麗な娘はあの殷通の娘なんだなと思ひます。さうして先づあの人達の堅い心が軟げられます。それからあの人達の胸に貴孃と阿父樣との間の温かい親子の愛情が浮んで參ります。すると又あの人達の荒い心に人情と云ふものが起つて來て、亂暴な事がしにくゝなります。

桃娘　では妾、さうしやうかしら。（うろ／＼して）あゝ、そんな事をしたつて效き目はないと思ふけれど、仕方がないわ。やつて見るわ。

乳母　餘り固くおなりになつて向うを疑るやうなきついお顔をなすつては駄目で御座いますよ。では妾は向うへ參りますよ。宜しう御座いますか。（退場せんとす）

桃娘　（悶えて）あゝ婆や。婆や。妾も行くわ。妾には此氣持で迚もそんな事は出來ないわ。あゝどうしたらいゝだらう。（乳母に擁せられつゝ慌てゝ退場）

（侍臣、項梁と項羽とを案内して導き來る。項梁は四十位の男。項羽は二十三四に見える風采魁偉なる男。）

侍臣　（禮をして）暫く之へ。（退場）

項羽　あの幕は何です。

項梁　此室には取つて附けたものゝやうに見える。

項羽　叱。

（殷通。登場。）

殷通　之はお二人共ようこそ。お待ちしてゐました。

（互に立つて禮をする。）

項梁　態々御出迎へを頂きまして。

殷通　實は天下の形勢と、それに對して吾々が取るべき方針に就いて、親しく有力な貴方々と御相談をすると云ふ事は不肖乍ら私の義務であると考へ、今日はお招き致した次第で、早速お出でを願ふことが出來ましたのは何よりの本懷です。

項梁　私達の本懷も御同樣です。何でも惡事を働くには出來る丈け獨りである程安全であるのと反對に善事をするには一致協力する事が多い程いゝのですから、私達も折あらば及ばず乍ら力をお添へし度いとかねぐ〜思つてゐた處です。

殷通　勢ひは吾々に起てと命じてゐます。御承知の通り秦は己れを滅ぼす敵が外にあるものと許り思つて世を驚かす事に腐心してゐる間に自分の蒔いてゐる滅亡の種子に氣がつかず、天下は表面に於ては中心を失つて、自由は吾々に還つて來るべき時に遭つてゐ乍ら、事實に於て無道な壓制は益々募るばかりで、人民の安寧利福を許り度い吾々が何か事をしようと望んでも、それは吾々の身を危くするのです。勿論爭亂は吾々の等しく忌む處ではありますが、何にせよ、眞の平和を來らせる爲めには、暴虐への服從の假平和を破らなければなりません。

項梁　いかにもです。しかし壓制もある程度を超すと反抗が起つて來ます。其反抗を更に又蹂み躙つて再び起つ事が出來ない處迄抑へつけきらない中は――そんな事は出來ない事ですが、――人民の彈力は却つて抑へられた爲めに強くなつてゐるので、其事は義兵を擧げるのには最も都合のいゝ事です。

殷通　そして又それが義兵を擧げる理由です。過酷な重稅の爲めに飢ゑと寒さに迫られ、夜晝戰々兢々として、秦

の無道に對する恨みと、憤りに胸がはり裂ける程になつてゐる憐れな民百姓共は、只竊かに一日も早く第二の武王の出る事を慈雨のやうに待ち望んでゐるのです。而もあの暗愚なる二世皇帝は晝となく夜となく只もう酒色に溺れるのみで、骨と皮ばかりの人民の膏血をいやが上に搾る事を唯一の能事としてゐるのですから。

項梁　いくら馬鹿でもまさか自分のしてゐる事が善いとは思へないでしやうが、其處が小人ですからそれに氣がつくと自分の非を改めやうとはしないで、唯もうそれに對する人民の反抗ばかりが無闇に怖はくなつて、それだけ又抑へつける方に焦慮る(あせ)のですから人民は堪りません。

殷通　眞個く(まった)力の使ひ道を知らない者が暴力を持つ位厄介なものはありません。が、兎に角時機は熟してゐます。此機會に臨んで猶ほ片唾を飲んでおめ〳〵懐手をしてゐると云ふ事は吾々として餘り忍びない屈辱です。しかるに此の江東の地は首府咸陽から去る事がこのやうに遠いので、祕密に義兵を募るには實に持つて來いの地と云ふものです。

（此時幕の裏に大勢の兵士のドヤ〳〵と入り來る音す。）

（項梁と項羽とは眼を見交はす。殷通は頗る不安の體。）

（兵士等幕の裏にありて故らガチ〳〵劍を鳴らす。）

殷通　（不安の餘り苛立ちて立ち）これは何事だ。誰だ、其處に來たのは。

項羽　（立ち上り）大抵そんな事とは思つてゐたのだ。君の爲めに吾々は犠牲になれる體ではない。（殷通が身を引かんとするより早く劍を拔いて其首を斬り落す）

（殷通のアッと云ふ叫び聲に桃娘扉を押し開けて遽しく飛び入る。）

桃娘　（殷通の死して倒れ居るを見て打ち驚き氣狂ひのやうになりて叫ぶ）おゝ、阿父様が殺された！　阿父様が殺された！（家中に向ひて叫び、走る。館の中大騷ぎとなる）

項梁　えらい騷ぎだ。怪しいぞ。

（項羽幕に近づき劍の先きを以て幕を開く。鐘離昧始め、士卒等平伏してゐる。）

項羽　不忠な犬奴。主人を瞞し討ちにしたのだな。

鐘　（出でて項羽の前に跪き）よし瞞し討ちの罪は重くとも天下はそれを許すことゝ思ひます。私は機があつたら貴方々を殺せと云ふ命令を私に授けた主人を天下の爲めに出し拔きました。其罪は輕くない事は素より知つてをります。併し此人こそ自分の身命を賭して終生仕へるべき人と心服する主人に一つしかない此の體と、力とを捧

げる事は私の自由であつていゝと存じます。どうかそれをお認め下さい。

（大勢の臣下ドヤ／＼と入り來る。大將季布その大勢を押し分け拔劒にて入り來る。）

季布　あゝ、此有樣はどうしたと云ふのだ。（拔劒の儘立ちたる項羽と、平伏せる鐘離昧とを見比べて、驚き、怒り、甲を床にたゝきつけて進み出る）逆賊。天罰がほしければさあ尋常に勝負をしろ。（と云ひつゝ項羽の威に近寄れざる樣子）

項羽　（ほゝ笑み）殊勝な馬鹿。命が惜しければ甲を捨てた序でに其處へ跪け。それとも又主人に殉じて俺の劍を穢ごしたいとでも云ふのか。

季布　（何とも云ふ事が出來ず、只止むを得ず項羽に喰つてかゝらんとす）

鐘離昧　（それを引き止め）おい／＼、季布、夢に浮かされて變な眞似をするなよ。かけがへのない命をそんなに安く捨てたがる馬鹿があるか。そんな危ぶなつかしい腰つきでふら／＼向つて行つたつて迚も敵はない事は君だつてもう氣がついてゐないのではないぢやないか。君の魂はもう疾うの昔に此項羽殿に呑み込まれてゐるのに、無理に形ばかりの忠義を勸めるのは止し玉へ。惡い事は云はない。僕は君の爲めを思つて云ふのだ。さあ、早く一緒に降參して了ひ給へ。

季布　チエッ。忌々しい。鐘離昧。君の根性がそんなに迄腐れてゐやうとは思はなかつた。項羽殿。こんな犬にも劣つた畜生を信じてはいけませんぞ。あゝ俺はこんな穢はしい處にゐるのも嫌だ。（行かうとする）

項羽　待て。こんな奴は殺すにも當らないが、貴樣には可愛い處がある。今日から生れ變つた氣で俺の家來になれ。俺と云ふ幹にからまつて貴樣は始めて花を咲かす事が出來るだらう。

項梁　項羽。腹の黑い奴は使ひ道によつては役に立つものだ。此鐘離昧とやらも吾々が活かして使へば案外役に立たないものでもない。此奴が出し拔いた殷通は又其恩ある主人の秦を裏切つたのだ。此奴が殷通を裏切るには當らないが、殷通は裏切られても不服の云へない叛逆人だ。云はば當然の天罰を受けたのだ。

項羽　では氣の毒な叛逆人殷通の犬死に免じて貴樣の命は俺が預ろ事にしよう。汝の主殷通に對する不忠の罪亡ぼしに今後は專心の赤誠を以て此項羽と其叔父項梁とに仕へるがいゝ。さうすればとりも直さず天下の爲めに盡す事になるのだ。

鐘　鬼神にかけてそれを誓います。自分がそむいた主人の顏に又泥を塗すらうとするのではありませんが、殷通は

到底私達が身を任せて頼れる程の人物ではありません。龍は風雲に乘じて天に昇ると云ひますが、しかしその風雲を呼び寄せてそれに乘じる事の出來る本當の龍は失禮乍ら貴方の外にはないと云ふ事が、先刻城門の處で貴方をお迎へ申した時に猶更はつきり私に分つたのです。貴方を一眼見た時に私の心の躍つた事は籠の鳥が蓋の開いたのを見た時の心にも譬へませうか。私の迷つてゐた心は實に其時に臍を固めたのです。

季布　何、此男が貴方を試めし、主人を瞞し討にした事にはも一つ大きな理由があります。此男は殷通の娘、桃娘と云ふ者に結婚を申し込で殷通の爲めに斷られたのです。此男はそれを怨んでゐました。

鐘　と云ふのは私が其の結婚によつて此家の財産を横領する氣ではないかと殷通が私を疑つたからです。

項羽　默れ。そんな事はどうでもよい。此項羽を殷通同樣出し拔ける者なら出し拔いて見るがいゝ。俺は殷通のやうに秦が無道であるから兵を擧げる抔と姑息な名義を借りはしない。又我が家は秦の爲めに迫害を受けたが、その復讐の爲めに起つとも云はぬ。祖先が受けた仇は祖先の仇で俺の仇ではないからだ。假令秦の皇帝が賢明仁德ある明主であつて、天下は泰平安穩に治つてゐやうとゐまいと、又よし我が家が秦の爲めに恩を受けた者であらうと、俺の起つ事に變りはない。俺は只大釜の中に沸き立つ氣が其蓋を押し上げるやうに、俺の内に沸ぎる力を吐き出す事の外何も知らないのだ。征服は目的ではない、だが、俺が其の力を吐き出し了つた時、天下はおのづから征服し盡されてゐるだらう。俺に從つて嵐の中に進む覺悟ある者は、自分等の運命を固く俺のそれに結びつけろ。俺はそれを天高く引きずつて行くだらう。それが恐ろしいなら今の中た引き退がれ。

（一同の者自づと平伏する。）

鐘　さあ、季布、どうせ降參するものは早くして了つた方がいゝぜ。「寄らば大木のもと」と云ふ事がある。君たつてそれ丈けの抱負と、腕とを持つてゐて、憖つかな強情からいゝ加減な奴を主人にして瞬く中に項羽殿に亡ばされて了ふより今の中に潔く味方になつて獲難い主君を獲た幸運を僕と一緒に喜んだらどうだ。

項羽　餘計な口を利くな。差し出者。俺は自ら進んで平服して來る氣のない者を貴樣等の勸めを借りて家來にしたがる程臣下を重く見ては居らぬぞ。そんな者の一匹や二匹。惜しがる俺と思ふか。

季布　（劍を投げ捨てゝ項羽の前へ跪き）　降參しました。今日只今から此身を閣下に捧げます。如何やうにもお使ひ下さい。私は閣下の爲めに身の粉になる事を惜しみま

せん。良禽は樹を相て巣を作るとか云ひますが、こんな立派な樹を見て猶ほ巣を作る事を躊躇した私は良禽ではなかつたのでせう。いや、閣下と云ふ木が餘りに大き過ぎて私は面喰つたのかも知れません。本當に私は盲目でした。危なく下らない男だての爲めに一生を棒に振つて了ふ處でした。

鐘　眞個く君は今迄世話になつた此籠が自分には小さ過ぎると云つて始終こぼしてゐた癖にいざ自分の翼を本當に伸すことの出來る大空が自分の前に開け放された時には呆然自失して了つて却つて其籠に噛りつかうとしたんだ。其癖先へ飛び出した僕をやれ根性腐れたの、犬よりも劣つた畜生だのと云つて勝手な惡口を吐いたのだ。

季布　悪かつた。許し玉へ。だが僕だつてまさか君があんなにして殷通を殺さうとは思はなかつたからな。

鐘　（季布の肩を叩く）はゝ、だが今ではそれを有り難いと思ふだらう。僕だつて何も好んで不義をやつたわけぢやないんだ。

季布　いや全く。これこそ小さな忠を捨てゝ大きな忠に就くと云ふものだ。何だかかう體に新しい力が湧いて來たやうな氣がするよ。（一同に向ひ）さあ、皆の者今日からは此の方が吾々の御主人だぞ。御挨拶を申し上げるがいゝ。

（大勢の將項羽に平伏する。）

項羽　お前らは皆心を一にして助け合つて行くがいゝ。少しは骨の折れる事もあるだらうが。俺の舟に乘つた上には安心するがいゝ。然らば今日からは此處にゐる我が叔父項梁を立てゝわが副統帥となし、併せて此處會稽の太守とする。末長く仕へて吳れ。

（一同又平伏する。）

項梁　（立ちて挨拶し）ふつゝかな身ではあるが、及ばず乍ら出來る丈けの事はする心積、天下多端の際宜しく諸君の御助力を願ひます。

鐘　季布と私との將士七千は城下に集つてをります。早速ながら之から御謁見を下すつて、宣誓を給はる事が出來れば一同も喜んで勇氣づく事と存じます。

項羽　よからう。では此殷通の死骸を鄭重に葬るやうに、その方の一切は季布に申しつける。

（項梁、項羽の耳に何かさゝやく。）

項羽　（笑つて）大丈夫です。さあ行きましやう。

（項羽、項梁を始め一同退場。）

（桃娘髮を亂して一方より馳せ來る。）

桃娘　（氣狂ひのやうになつて殷通の體に抱きつき）あゝ、あの畜生！　鬼奴！　あゝ、どうしたらいゝだらう。覺えてゐろ。此のかたきは死んでも打つてやるぞ。乾度屹

度打つてやるぞ。あゝゝゝゝ。（泣きくづれ倒る）

第一幕

第一場　徐州塗山驛なる虞一公の家

虞姬、一人闇窓の際に機を織つてゐる。少しも氣乘りのせざる樣子。止めて溜息を吐く。自らその事に氣がつき入口の方を見る。起ちてそつと窓を開け。首を伸すやうにして彼方を望む。秋の夕陽彼女の面を照らす。蟲の聲聞こゆ。彼女は落膽の體にて呆然と起ち居る。急に何かの音にハツとして急ぎ機織の前に腰を卸し、前の如く機を織れる風をなす。養父、虞一公、靜かに燭臺を持つて登場。

養父　驚かしてすまない。わしだよ。

虞姬　（とぼけて其方を振り向き）驚きは致しません。阿父樣。

養父　（燭臺を卓子の上におき、燧石か何かで明りをつけ乍ら）どうだ。中々忙しいな。

虞姬　何がで御座います。

養父　何だと云つてお前は一人で兩つの機を織らねばならぬからな。眼に見える機と、眼に見えぬ機とを。はゝ。

虞姬　まあ、それなら兩つでは御座いませんわ。三つで御座いますわ。

養父　三つと云ふのは分らぬな。

虞姬　阿父樣は妾をそんな不孝者だと思つていらつしやいますの。

養父　いや、わしはお前がわしの事を云つたのか、それともあのお前を慕つてゐる王陵の事を指したのか分らなかつたのだ。兩方たとすると四つになる譯だからな。

虞姬　妾はもうあの人の事なんか思ひ出しもしませんわ。

養父　可哀相とは思はないのか。尤も其中の一つに比べると他の三つは全で太陽の前の星程にも行くまいからな。

（また灯りをつける事が出來ない）

虞姬　妾が點けましやう。

養父　まあいゝ。そこにおゐで。わしはお前がこんな薄暗い處で機を織つてゐても普段と違つて眼を惡くしはしないかなぞと云ふ心配はしないがな。（明り漸く點く）

虞姬　おゝやつと點きましたわ。（顔輝く）

養父　さうだ。明りがついた。（意味深く笑ひ乍らしげしげと彼女を見守り、頭を振る。さて又燭臺を拭き乍ら）な、人間は一生に三度人に顔を見られると云ふ、――產れた時と、婚禮の時と、死んだ時と、お前は今その中で一番目出度い又唯一度の嬉しい場合に遭つて居るのぢやない

か。

虞姫　妾は嬉しいのだか何だか分りません。たゞ胸が重苦しいのです。たまらなく切ないのです。（急に涙ぐみ養父の胸に顔をうづめる）

養父　（その髪を撫でる）　人間と云ふ者は可愛いものだ。自分程世に幸福な者はない、運命に愛されてゐる者はないやうな氣がして來ると切なくなるのだ。何となく自分には過ぎてゐる、勿體ない、忝けない、と云ふ氣がして來るだらう。するともう死んでも惜しい事はない、何かの祭壇に喜んで自分の身を犠牲に捧げ度いと云ふやうな氣がしてじつとしてゐられなくなつて來るだらう。だから切ないのだ。

虞姫　それぱかりではありませんわ。妾は何故か淋しくつてなりませんの。阿父様。

養父　それは一方に附くと云ふ事は他方から離れる事を意味するからだ。新たに附く喜びの後ろには離れる淋しさが附き纒ふのだ、

虞姫　お祭ししてゐますわ。阿父様。

養父　お前がわしを察して呉れるとわしは猶ほお前を察しなければならなくなる。何故と云つて兩方から引かれるものは一方に引かれる者よりはなほ辛らい譯だからな。

虞姫　（間）　どうかお胸のすく迄被仰つて下さいまし。妾はそれを堪らへていらつしやるのを見るよりそれを伺ふ、方が未だしもたへ易う御座います。

養父　いや／＼。泣き言は云ふべきでない。丁度園丁が永い年月丹念して育てた植木を漸く之からが花の見時だと云ふ處で人に賣つて了ふのを喜ぶやうにわしも喜ばねばならぬのだ。（頭を振り）いや／＼、わしは、心からお前を祝ふぞ。悦びと云ふものは一番貴いものだからな。わしは、唯一人ぎりになる老いの身のわしは、お前の運命が益々大きく花を咲かせて立派に實を結ぶ事を心から祈るぞ。なあに人間はどんなに淋しい境遇にでもいざとなればどうにかして不思議に堪へて行くものだ。はゝ、案じる事はない。わしはもうこんなに喜んでゐるのだ。

（二人強く抱き合ふ。）

養父　お前は泣いてゐるのか。泣いてはゐないのか。どう、見せて呉れ。（虞姫の眼に涙のあるのを見て滿足し）おお、お前の眼には大きな露が宿つてゐるな。よし／＼。（虞姫の織りし機を見て）だが、どうだ。お前は眼に涙をためても心の悦びをかくせない證據が此處にあるぞ。それ、お前は此處の赤と紫とを織り違へてゐる。赤を通す處に紫を通してゐる。

虞姫　おやまあ。明りが暗う御座いましたので。

養父　いや、どんなに明るくとも一人で同時にさう幾種も

の機が間違ひなく織れる者がゐたらそれは奇術師だ。お前が間違へるのも無理はない。此近所の女子でお前を羨むでゐない者は一人もないのだからな。

虞姫　妾はあの人達が氣の毒でなりませんわ。何だか自分許りあんまり善過ぎる目に遭つてゐるやうな氣がして。

養父　そのくせお前はその憐れむでゐる娘達に何とかお芽出度を云はせ度いのだらう。わしはよく見てゐるぞ。お前があれ等に逢つてゐる時の容子は羊のやうに謙遜だ。それでゐてお前の眼は孔雀のやうな誇りに溢れてゐる。さうして強ひても自分を視はせずには承知しないやうに見える。だがそれもお前を少しも見苦しくはしない。(虞姫の手を握る)

虞姫　まあ阿父様の手の温かいこと。

養父　(淋し氣に笑ふ)お前の半分の血もないわしの手の方がお前のよりも温かい。はゝ、冷たい手と、温かい溜息と、いやわしも昔はな、お前のやうにぞく〳〵した不安な心で刻一刻と自分に近づいて來る幸福の羽音に耳を澄ました事もあるのだ。お前はわしの云ふ事を聞いてゐるのか。それともその青い翼の使ひの羽音に耳を傾けてゐるのか。

虞姫　妾には分りませんわ。阿父様。

養父　いや、今のお前にはその羽音程高く響くものはないのだ。それでお前はその使ひの脊中に乗つて何處へ行くかな。何處へでもあの方の行く處へ……、と、お前は胸の中で笑つてゐるな。(異様に笑ふ)いや、わしは此處にゐて遠い處からわしを迎へに來つゝある黒い使の羽音に耳を傾けながら、お前等がどの位高い處まで昇つて行くかを此窓から見てゐやうよ。さうしてそれをわしの唯一の慰めとも、樂しみともしてゐやうよ。おゝ御覧。何時の間にか月が上つてゐる。今宵は月もお前を祝はつてほゝ笑むでゐるやうに見える。優れた婿を持つて、お前は運がいゝな、と云つてゐるやうに。大方あの項羽には又此上ない良い花嫁を持つて仕合せだな、と云つてゐるやうに見えるだらう。

虞姫　(羞かし相に)ほんとにいゝ月夜になりましたこと。(月を仰ぎ乍らぶる〳〵と身顫ひして抑へきれぬやうに)あゝ、阿父様、妾どうしてから氣が弱くなつたのでせう。

養父　實はお前は誰よりかも強いのに。

虞姫　誰よりかも強いつて何の事でございますの。

養父　あの剛勇並ぶ者のない項羽さへお前の前には兜をぬいで跪くではないか。

虞姫　まあそんなこと、……(うれし氣に顔をかくす。溜息を吐く)

養父　さうしてお前が一つ溜息を吐けばそれ丈けお前の戀は強くなるのだ。何でも物は餘り早く無造作に獲られて了つては樂しみがない。長く引つ張られれば引つ張られる丈けそのあこがれは強くなるのだ。さうしてあこがれが強くなればなる程それを最後に獲た時の喜びも亦一層濃く深くなるものだ。お待ち。お待ち。お前が今辛抱して一刻多く待てば、お前の戀は猶ほ一段高く昇り、それの齎らす贈り物も亦それ丈けふえるのだ。

虞姬　(ギクッとして耳を傾く)　あゝ、蹄の音が。

養父　來たか。(寂し氣な表情)　どれ。(窓の處に行き外を見る)

虞姬　(おど／＼して)　あゝ、もしやそれはあの方が道であの方に怨みのある賊にお打たれになつた事を知らせに來たのではないでしやうか。阿父樣。(獨白)　もしもそんな事があつたら妾はそれを聞く前に此胸を刺さずにおくものか。

養父　まあ、此處へ來て見ろ。

虞姬　(夢中で窓の處へ行き外を見る)　おゝ、あの方。あの方ですわ。(急に喜びに溢れる)　あゝ、入らしつた。あゝ月の光りがあの方の兜にキラ／＼と輝いてゐますわ。あゝ、手を振つてゐらつしやる。あの烏騅に乘つて、ほんとに立派な馬ですわね。

養父　お前の太陽は來たのだ。わしは消えて了はなければならない。天と地との樂しみをゆつくり味ふがいゝ。(止むを得ざるやうに退場)

虞姬　(窓よりほゝ笑みながら手を振る。胸を押へる)　あゝ妾はあの方にお目にかゝれるかどうかゞ心配になつて來た。この胸にはもうそんな力は拔けて了つたやうな氣がする。妾はあの方をお出迎へに行く事も出來ない。だけどかうしてもゐられないわ。あの方はお怒りになるかしら。(息をはずませて漸く戸口の處迄爪先きにて忍び行く。向ふより項羽の來る氣はひする爲め、急に逃げるやうに飛び退きて室の隅にかくれて立つ。眞に恐怖を感じつゝあるものゝ如し)

(項羽、靜かに來りて戸口の閾の上に立ち止まる。項羽、虞姬を見る。)

項羽　(半ば獨白のやうに緊張して)　此處へやつて來ると毎も乍ら俺をわなゝかす此の靈妙な本尊は一體何者なのだ。それは眼に見る者にしては餘りに美し過ぎ、幻影であるにしては餘りに生ま／＼しい力を持ち過ぎてゐる。さうして俺はその幻影だか、實在だか分らぬものゝ美しさにうつゝをぬかして手負ひの傷の痛みをも忘れて了ふ。何だ。其處の薄暗い隅に懷かしい光りを放つ女神の像のやうに輝いて見えるのは。

虞姬　お分りになりませんの。項羽樣。

項羽　おゝ、あの聲。私の眼がそなたを見ることに飢ゑかつゑてゐたやうに、私の耳が聽く事に饑ゑ渴いてゐたのはその聲だ。

虞姬　（漸くほゝ笑む）そんな處で何を云つてらつしやるのでせう。貴方は。

項羽　そなたが聲を發するのが私には不思議でならないのだ。

虞姬　妾は石像ではありません。

項羽　地から響く天の聲のやうだ。私の強い魂はその響きにをのゝき引き寄せられて打ち碎かれて了ふやうな氣がする。

虞姬　妾こそ。……眼まひがして倒れ相です。妾を支へて下さい。

項羽　（一歩近より）いや、私が此手でさはつたらそなたは牡丹の花びらのやうにくづれて了ふだらう。而もそのいたいけなそなたは、この私よりも強いのだ。

虞姬　あゝ。では貴方は妾にさはつては下さらないの。何故貴方は何時迄もそんな處に立つていらつしやるの？　貴方のお顏は妾にはよく見えませんわ。（前へ進む）

項羽　月は物を見る者ではない。只仰いで眺められゝばいいのだ。默つて、あこがれられてゐればいゝのだ。

虞姬　誰からでも。

項羽　さうだ、私のわきに立つて、さうしてそなたが此私のものだと云ふ事を下界の者共に示すのだ。

虞姬　さうして貴方が妾のものだと言ふ事も。さあ早くその貴方の強い腕に妾を抱きすくめて下さい。あの嬉しいお言葉を、妾を愛してゐると云ふあのお言葉を、聞かせて下さい。

（虞姬。項羽に近より抱かんとす。項羽、一歩後へすさる。）

項羽　虞美人。怒つてはいけません。私は今日は怪我人なのです。

虞姬　（驚く）怪我人？　貴方が。（項羽を月光の下に連れ來りて上から下迄見る）まあ、どうしやう。此處には血がついてゐます。おゝ此處にも！　あゝやつぱり道で賊にお出遭ひになりましたのね。

項羽　私だつて怪我をする事はある。私は猜まれてゐるから。又少しは怪我をする事もいゝのです。それは私の征服欲を突つつき、餘計な事ではあるが、私が不正でない事を私に思はせるから。（左の腕をまくつて見せる）

虞姬　おゝ、むごたらしい。（顏をそむける）屹度さうではないかと妾はお案じしてゐましたわ。貴方の事ですから素より大丈夫とは思つてゐましたけれど。

項羽　誰も私に向つては卑怯になるやうに、そ奴もたしぬけに森から現はれて後ろから切りつけて來たのです。はは。然し項羽に傷を負はせたのだから其男も滿足に往生したに違ひありません。

虞姫　本當に。一寸待つてゐらしつて。（急いで奥に入る）

項羽　（虞姫の後を見送り、獨白す）何と云ふ美しい者か。あの處女が美しいのか、それとも美がその姿を現はす爲めに特にあの處女の體を選んだのか、いや、むしろ美があの處女だと俺は云ひ度い位だ。此下賤な世にどうしてあんな淸らかな者が生れたか。其處らの畜生共と同じに、あの處女の命も露のやうな者だと云ふなら何故あれ程に迄神々しい美を造化はあの處女に贈つたのか、俺には不思議でならぬ。俺が迷つてゐると云ふのか。然らば此迷ひよ、永劫覺めてはならぬぞ。もし迷ひが此様に氣高く、莊嚴なよろこびであるなら如何な貴い現つの眞實も俺は犬に食はせて惜しがりはしないぞ。あの愛らしい美の中に此俺の身と魂とが溶けこんで行くものなら俺はあの處女に迷つて、迷つて、迷ひ拔いた擧句の果に知らぬ奈落に落ち行かうと、何の悔いるべき快樂であらう。あゝあの哀れな男よ。俺はお前が嫉みのための發狂から俺に斬りつけてくれた親切に對して禮を云ふぞ。

（虞姫、小さき金盥と、治療の道具とを持ちて急ぎ入り來る。）

虞姫　大變お待たせして御免遊ばせ。（項羽に寄り添つて傷口を洗ふ）お痛いでせう。

項羽　此傷を受けた時私は腹が立つた。しかしかうしてそなたに治療して貰ふ事が出來る事を考へた時、私は傷を受けた事を喜んだ。こんな小さな傷さへも私達の愛のたのしみを彌が上に濃くする事に役立つ事を私は喜んだのだ。（虞姫の肩に右手を廻はす）

（虞姫は俯向いたまゝぢつとして了ふ。手を動かし得なくなる。其顏は火のやうにほてる。）

（深き息を吐きつゝ猶ほも項羽に寄りかゝるやうになる。）

（項羽突然右の片手に虞姫を膝の上に抱き上げる。二人抱きつき、長き接吻する。）

虞姫　未だ貴方は劍をお取りになりませんのね。

項羽　忘れてゐた。併しそなたに見せるものが其處にある。

虞姫　妾に見せるものが？　（布を卷き舉る）

項羽　（血痕のつきたる劍を拔きそれを卓子の上におく）さあ、その血を接吻しておやりなさい。それで引導が渡るのだ。

虞姫　誰にです？　これは賊の血ではありませんか？

項羽　私は賊を斬つたとは云はなかつた。

虞姬　それなら……（と項羽の顏色を讀み）誰の……

項羽　そなたを戀した男の中の誰の血かと云ふのか。いや、そなたは私が誰を指してゐるのかもう氣取つてゐるのだ。それはそなたを最も厚ましく戀した男であり、そなたから最も多く愛を受けとつてゐた果報者だ。

虞姬　貴方はあの王陵の事を被仰るのですか。

項羽　その首を私は月に照らして見て、始めて知つたのだ。さうだ。私は彼の男を知らずに殺したのだ。

虞姬　あゝ、……

項羽　ではそなたは矢張りあの男を、私よりも愛してゐたのか。

虞姬　貴方よりもですつて？（あきれて狂ふ如く笑ふ）

項羽　犬は人と同等な待遇をうける時、人よりも遙かに多く愛された事になる。さう云ふのがそなたに不服なら、あの川へ行つて身投げをするがいゝ。彼の屍體はあの川に流れてゐるだらうから。

虞姬　貴方のしろと被仰る事なら、身投げでも何でもしますわ。（巾にて劍の血を拭く）血に飢ゑてゐらつしやる貴方は、妾が此の血を貴方の命令で接吻すれば、すぐ此場で妾の首をお斬りになるお心算なのでせう。えゝ、妾はよろこんで、御自分の愛する者を虐めないとお氣のすまない貴方の殘酷なお心を滿足させて上げます。さあ、お斬り遊ばせ。（首をさし出す）

項羽　では覺悟をして。（素早く劍をとりて勢よく振り落しその脊の方でそつと虞姬の首をたゝく。虞姬、悲鳴を上ぐ。項羽笑ふ）はあ、可愛いゝ臆病者！

虞姬　（項羽の頸にかじりつく）ほんとに殺して上げ度い程好きな暴君。もうお氣がすんだでせう？

項羽　ふむ。私達の間を結ぶ神々しい鎖に對してこんな蛆蟲殺しの劍抔が役に立つて堪るものか。さあ、天から降りて來た序でに地上の結婚を急ぎましやう。美と、力との。その上にやがて二つの冠は戴るだらう。

虞姬　（そつと項羽の劍の先きにて自分の指の端を切り血を出す）さあ、之を吸つて下さいな。別々には死なゝいと云ふ印に。

項羽　（それを吸ふ。恍惚として）死が最も善い時期に來て、而もそなたと一緒に死ぬる事が出來たら、私は花嫁をつれて天の凱旋門をくゞる氣がするだらう。（劍を鞘に納め）それはさうと、そなたの支度は出來てゐるのか。

虞姬　もう、何時でも、門出の出來るやうに用意をしておけと貴方が被仰つたから。貴方は今晩妾を迎へに入らしつたの。

項羽　私の軍勢は明朝彭城に向つて出發する事になつてゐる。それで氣の毒だが、私は今夜このいゝ月の下をそな

たを連れて行く樂しみをしなければならないのだ。

虞姬　あゝ。（大いなる喜びと悲しみと一時にくる）何故、氣の毒だが、なんて被仰るの？

項羽　そなたの心は察してゐる。

虞姬　そんな事を貴方が被仰ると又恐ろしい裏言葉のやうに聞えますわ。妾は嬉しいのです。嬉し過ぎるのです。

項羽　お前は泣いてゐるな。ふむ。女のいじらしさか。（その眼を接吻する）

（月光二人を照らす。人の來る音す。虞姬、項羽を離れる。養父、入り來る。）

養父　お芽出度う。選ばれたお二人。そして貴方が珍らしく怪我をされた事も。（虞姬に）ではいよ／＼お前ともこれでお別れか。

虞姬　阿父樣。

養父　それは結構だ。お前の行かなければならない處へ、幸福へ、勇んで行くがいゝ。そこで貴方には唯一言、貴方の力にお氣をおつけなさいと云ふ事をわしの老婆心から餞にしたい。それは人間の力以上の力にお氣をお附けなさいと云ふのも同じですが。それからもう一つ、傑れた軍師を是非一人捕まへる事。その軍師の意見をよく取り入れるだけ貴方が毎も寛大であると云ふ事。それさへ行はれたら貴方の天下は安心なものだ。

項羽　この女を今迄育てゝ善く守つてくれられた貴方の先見の恩に對して、その忠告を頂戴しませう。それでは。

（項羽虞姬を擁して去る。養父それを見送る。月光。）

――幕――

第二場　沛縣にある劉邦の館

劉邦と、その妃、呂妃。呂妃は赤子を抱いてゐる。劉邦は頤鬚ありて齡よりは老けて見ゆ。鬚を撫でつゝ考へ／＼物を云ふ癖あり。卓上には出陣祝ひの酒と盃とあり。

呂妃　あの人にお會ひになつたら先づ何と被仰るお心算。

劉邦　貴方を尊敬して私の微力を添へに參りましたと云はう。

呂妃　（酒を盃に注ぐ）何でも煽てゝやるに限りますわ。貴方を尊敬してゐると云つて無暗に褒めさへすれば氣に入る人だ相ですから。

劉邦　（酒をのみ）いや、それは嘘のお世辭では無い。人物のない今時、彼は俺が自分を卑しくして心に恥ぢずに面と向つて貴方を尊敬してゐると云ひ得る唯一の男だ。

呂妃　併し又、正直にしてゐたら殺されるに定まつてゐるやうな今時、貴方の御性質は餘り潔白過ぎますわ。だから妾は心配なのです。臨機應變に卑しい眞似や、我身に

恥ぢる事を少しは我慢してなさるやうにと、妾はお願ひしたい位ゐです。

劉邦　（笑ふ）なあに俺だつて小さな潔白のためにむざむざ大事な使命を棒に振るやうな馬鹿をするものか。かう見えても俺はあの項羽より人がわるいのだよ。

呂妃　それを伺つて妾は餘つ程安心しました。でもあの人は貴方の價値を認めてゐるでしやうか。

劉邦　多分內心ではわりに認めてゐるだらう。表にはそれを現はすまいが。

呂妃　でも、恐ろしく自信の強い人だと云ふではありませんか。

劉邦　自信の弱い事を辱とする念が強い程、自信そのものが強い譯でもあるまい。何と云つても未だ若いのだからな。だが恐ろしいのは彼の自信ではない。運勢だ。

呂妃　運勢。……ですから貴方はあの人に大それた自惚を彌が上に持たせる事が必要ですわ。そして其間に……（急に恐怖な感じて）だけど、もしや其前に貴方があの會稽の太守の二の舞をなさるやうな事はないかと妾は心配で……

劉邦　と云つた處で今彼と結んでおかなければ俺の運命は猶ほ危險になるのだからな。噂によると彼は今度范增と云ふ軍師を迎へた相だ。これは中々智慧のある事で聞えた男だ。それでもし萬一項羽が俺を殺さうとでもするならその范增がそれの不利を說くに違ひないと思ふのだ。何故と云ふに俺は未だ彼よりも勢力は弱いが、彼は俺の人望を利用する事が得策だからな。

呂妃　當分はね。しかしあの人達が秦を亡ぼして了つて、事實の上で天下の主權を握るやうになり、さうしてもう貴方の人望を借りる必要がなくなつた時はどうでしやう。

劉邦　どうも早晩には、形勢は彼と俺との競り合ひになるのだ。今は恰度その勝負を大仕掛けにするために假りに與んで、秦を材料に膨脹し合ふやうなものだ。だからそれ迄の間に俺はうんと自分の實力を養ひ、其德によつて次第に人材を驅り集め、何時でも彼から獨立して對抗出來るやうに準備しなければならないのだ。

呂妃　祕密にね。しかしあの人達がそれ丈けに貴方を熟させる時機を與へるか何うかが問題です。今貴方を活かしておけと說くその智慧者は、やがて貴方を殺せと勸める人に違ひありません。その時は……

劉邦　その時は俺がどの位の力を持つてゐる人間かと云ふ事が始めて人にも解り、自分にも解る時だ。あゝ平常は俺の眞價と實力との上に止むをえず被けてある薄衣が荒荒しい運の合圖によつて引き剝がれて、露はに見える時

の感じ――それがどんなものか俺は知り度くもある。

呂妃　お〻思つただけで身顫ひがします。どうか秦が案外にねばり強くつてあの人の力をうんとすり減らして呉れるといゝのですけれど。

（劉邦、酒を飲む。悲壯沈默。部下の猛將樊噲登場。）

樊噲　準備はすつかり整ひました。何時でも御出發を。

劉邦　さうか。では日の暮れない中に。（立ち上る。呂妃に）どうか、辛抱強く元氣でゐてくれよ。決して希望を失はずに、俺は自分の星に不思議に深い樂觀を感じてゐるのだ。お前の不撓な忍耐と希望とを俺は何よりの愛の證據だと思ふぞ。

呂妃　御心配なく。ではいよ〳〵。（泣きかけるが我慢する）

（劉邦と、呂妃熱烈に抱きつく。次に劉邦はその子供を抱き上げ接吻し、默禱する。）

劉邦　どうか、丈夫で育つて呉れよ。俺はお前が何の爲めに生れて來たのかと天を呪ふやうな目には必ずお前を遭はせないだらうと云ふ事を誓ふぞ。其代りにお前がやがて父の後を嗣いで或る位地に卽く時に生れた事を天に謝するやうにさせる事が出來るだらう。（再び子供を呂妃に渡し）では、お前達を咸陽で呼び迎へる日迄暫く之でお別れだ。隨分大事にしてな。

呂妃　貴方も。御成功を屹度。屹度。

劉邦　いや、それはお前が思ふ程先きの事ではなからうよ。（決然として大股に去る）

（呂妃、遂に泣く。）

樊噲　奧方。御安心なさい。此私が此首にかけて閣下の御安全を保證致します。（懷劍を取り出す）お預りした此懷劍は多分役に立てる機はなからうと思つてゐます。それでは之で御免を。（退場）

呂妃　あゝ、これが永久のお別れになるのでないと誰が知り得やう。あの樊噲がゐて呉れるのでいくらか氣丈夫な氣もするけれど、あゝ、妾達は子を生すのではなかつた。（窓際に行く。「劉邦萬歲」と云ふ聲聞ゆ）何と云ふ大勢の人だらう。百姓も、女も、子供も、老人も、皆んな泣いたり、わめいたりしてお見送りに來たのだわ。あの方はあんなに皆から愛されてゐらつしやるのだ。あゝ此方をお向きになつた。（片手に赤子を抱き乍ら夢中に手巾を振り又、赤子を高くさし上げて見せる）あゝ又旗の影にかくれてお了ひになつた。（呆然と沈んでゐたが、急に決心の色を現はし）妾だつて妾だつてかうしてはゐない。あゝおめ〳〵かうしてゐるものか。

――幕――

第三場　彭城に於ける楚軍の本營

正面に帷幕左右に分れをり、遙かに蜿蜒せる淮河金色に輝きて見ゆ。帷幕の外に衛士兩側に立ちゐる。幕の內部、中央には大いなる卓子を圍みて數脚の椅子。右手の壁には地圖、左手及び正面には大いなる靑き旗二三流掛けあり、其他甲冑、劍、鉾、楯等の武器いかめしくかけあり。床には虎の皮を敷きたり。

（項梁、范增と出る。范增は白髮の老人。）

項梁　とにかく貴方に來て貰ふ事が出來たのは吾々にとつて百萬の兵を得たのにも優る幸福ですと云つた處で少しも云ひ過ぎではありません。つまり七の力を持つ智慧のある力士は十の力を持つた愚かな力士に勝つと云ふ道理で。（椅子にかけ乍ら）さあ。

范增　（共に腰をかける）それは陸の上で死にかゝつてゐた魚を助けて又水へ放した者の方で其魚に禮を云ふのと同じです。運命は私の犬死する事を望まなかつたと見えて、山の中で朽木同然に果てるのを待つてゐた私は、七十になつて云はゞ始めて此世に生れたやうなもの。それに對しては私の方でこそ幾重にもお禮を申さなければなりません。どうせ先きの知れたやくざな體です。粉にしてでもお役にお立て下さればこんな本懷はありません。

項梁　何しろ甥は恐ろしく我儘な奴ですから一緒に仕事をして行く上には面白くない事もあらうとは思ひますが、何、ドシ／＼遠慮のない御指導を願はないと獨りあれの爲めばかりでなく、味方凡ての爲めになりません。何もあれ一人の意志を奉つて增長させるには當らないのですから。

范增　貴方がゐて下さる事は私にとつても大きに都合がよいと申すものです。あの方も貴方の御意見にはお逆らひにならないでせうから。

項梁　（滿足氣に）私の方があれの云ふ事を餘計に聞いてやるからです。（間）小さい時から一風變つた奴で、書物を敎へてやるとそんなものは學ぶに足らない。自分は書記や兵法學者になるのではない。書は只自分の姓名を記す事が出來れば足ると云ふのです。それでは劍術を敎へてやらうと云ふとそんなものは猶ほ更習ふに足らない。劍は一人の敵だ、自分は萬人の敵を學ぶのだ。しかしそれも先人の兵法によるのではなく、自分自身のやり方で。と云ふのです。はゝ。そしてあれは始皇のやうに自家にあつた數千卷の兵書を皆燒き捨てゝ了ひました。さう。あれが十二三の時でしたか。

范增　（幕の間の遠方を見て）一寸向うを御覽下さい。遠くに何か見えはしませんか。私の老眼ではよく分りませ

んが。

項梁　（其方を見る）　夕日が當るので旗の色が樺色か赤かよく分らないが、陣立ての容子で見ると一寸英布のに似てゐる。尤も英布が今頃あんな處にゐる筈もないが。

范增　英布と云へばあの男は本當に儲けものでした。あれは味方の寶です。私ももし貴方々が未だあの男を召しておいでにならなかつたら、是非御推薦しようと思つてゐたのでした。

項梁　變な事であれも味方に加はる事になつたのです。まあ天佑ですな。其時に味方の兵は未だ三萬にも足らなかつたのでしたが、其處へ英布が其倍にも餘る兵をつれて召集に應じて來たのです。思ふに彼はさうして私達を試めしに來たのです。つまり、事によつたら私達を其場に討ち倒して兵を奪ふ心算だつたのでせう。私は項羽に出迎へるやうにすゝめたのですが、項羽はあの男の來方が召集の時間に遲れたと云ふので酷どく腹を立てゝ、吾々の軍の一番しんがりに附くやうに云ひつけたものです。私はその無謀を案じてゐた處が運よく其無謀があの英布を屈服させる事に成功して、忽ち味方の忠臣になつたわけです。

范增　いや、いくら小才や腕つ節はきいても人の下に働くやうに生れた者は上に立つやうに生れた者には敵ひません。

項梁　兵を擧げる機がよかつたのか、今迄の處ではほんとに幸運と云ふより寧ろ僥倖のやうな氣がします。未だ會稽で殷通を斬つてから二ケ月經つか經たないのにもうかれこれ二十萬を超える兵と、容易に獲難い大將連とを得た上に、今度は又貴方に迄來て貰ふ事が出來たのですからね。

范增　いや、運がいゝか惡いかは終りまでやつて見なくては分りませんよ。凡ては之からですからね。それに何しろ早くあの後繼ぎの王子が見つからないと味方の名義がはつきりしないで何かにつけて損になる譯です。

項梁　實は其事で貴方と御相談しようと思つてゐたのですが、項羽は其事を餘り喜んではゐないのです。

范增　御尤もな事です。併し其名義が入用なのは當分の間丈けの事で、どうせ實權は悉かり此方のものなのですから。あの一時羽振りのよかつた陳勝なんぞがしくじつたと云ふのは全く此手段によらなかつたからで、——勿論項羽殿と彼とを一緒にして云ふのではありませんが。

項梁　併しあれが云ふには「では軍を私と二分しよう。そして私の方にその王子を立てるがよからう。（范增を指して）貴方も他の者も皆私の方に呉れる。」と云ふのです。尤もあれはいくらか私に甘えてゐるので永久に私と一緒

に仕事をしようなぞとよく云つておき乍ら、何か氣に喰はない事でもあると直ぐ又がらりと氣が變つて、何時でも私と分れるやうな事を平氣で云ひ出すことは度々なのです。が丁度その悶着の處へあれの妾の虞姬が入つて來て執りなしたものですから、今朝は又叔父さんの思ふやうにするがいゝ抔と機嫌を直してゐましたが。

范增　お見えになりました。

（項羽、虞姬と共に馬にて帷幕の外に來り下りる。衛士二人敬禮をする。范增起ちて迎へる。項羽は虞姬を伴ひて登場す。虞姬は鷹狩に使ふ鷹を持ち居る。）

項梁　お歸へり。獵は何うだつたね。

項羽　（輕く辭儀をして座につきながら）　變な事があるもので、今日は私の良い鷹を殺して了つた。

虞姬　今日は每になく獵がありませんでしたの。それで歸りかけようとしてゐると妾の此鷹が一匹の仔狐を叢の中に見つけてそれを追ひかけたんです。するとあの親鷹が全で怒つたやうに其處へ飛んで行つて此鷹を威しつけて其狐を奪ひ取つて了ひました。

項羽　處が鷹と云ふ奴は自分の獲物を主人の處に持つて來る前に一度見せびらかしに高く飛び上るのであの親鷹も其仔狐を啣へて高い空をだん／＼此方へ飛んで來る間に其疲れたのを狙つて、だしぬけに此鷹が後ろから矢のやうに其頭を一突きに突き殺したんです。復讐をした譯です。

虞姬　もし妾が止めなかつたら此鷹は御處刑にあつて殺される處でした。あの親鷹はそれは御祕藏だつたのですから。でもあの鷹は自分の強いのを威張り過ぎた罰が當つたんですわ。

項羽　威張り過ぎた罰ではない。油斷し過ぎた罰だ。處で鍾離眛は未だ歸つて來ませんか。

項梁　未だ。

項羽　早く連れて歸つて來るといゝに。

（虞姬。眼にて項羽と「又後で」と云ふ合圖をなし、輕く會釋して右手に退場す。）

項梁　昨夜とは大分話が違ふぢやないか。

項羽　いや、私は其王子に位を授けやうと思ふのです。懷王と云ふ稱號で。

項梁　お前がか。

項羽　さうすれば强ひて軍を二分するには及びません。私の方においてやりませう。

項梁　と云ふとわしはどうなるんだ。わしはお前の叔父だ。

項羽　分家としての。併し私は本家の嫡男です。ふむ。どうでもいゝ事だが、王子を立てる事が名義ならば、他の事も名義に從ふのが當然だらう。

項梁 （旁白） 何を云つてるんだか、譯が分らない。

范増 お待ち下さい。貴方々はそんな些細な事でお爭ひになる事のつまらなさをお考へにならない……

項羽 （睨みつける） 何だ。貴樣はもうそんな差し出口を主人に向つてするのか。（間） 俺は誰とも爭ひはしない。只俺が定めた事に、つまりもう定まつて了つた事に、此叔父御が反對を唱へた丈けの事だ。叔父御は私の功勞と、私に負つてゐる色々の恩とをまさか忘れては居られまいと思ふのだが……私は一寸汗を落して來る。（退場）

范増 （苦笑して） 何處迄も若々しい無邪氣さを失はない方ですね。位を授ける者は位を受ける者より、眼上だと云ふ事がお氣に召したのですね。併し彼處があの方の頼もしい處です。

項梁 ふむ。無邪氣。しかしあれは屹度あれ丈けでは濟まないから見ていらつしやい。あれは今汗を拭き乍ら屹度全で反對な事を考へてゐるでしやう。少くとも今はもう何方でもいゝと思つてゐるでしやう。王冠を王子に授ける者が私であらうと。自分であらうと。あれは一時は何とか云つても、直ぐ又氣が變つて大抵の事は何方でもいいと云ふのが癖ですから。

范増 いづれにしても之は大した問題ではないのですから寧そあの方にお任せになつては如何です。あの方は屹度運命を自分に任せて來る弱い者に對しては極端な位にお優しくおなりになる方です。そしてそれは味方の平和の爲めに何より善い事であらうと思ふのです。

項梁 ふむ、あれの我儘を抑へない間はそれを募らせる手段は凡て一時的ですよ。あれは寄生物を持つてゐると云ふ自覺は好きなのです。そのくせ寄生物其物を愛する事は出來ないのです。

（項羽、服裝を着換へて機嫌よく登場。）

項羽 范増、彼處に來るあの軍勢に氣がついたかね。俺が思ふにあれは多分劉邦の軍だ。

范増 （其方を見て） 大分近づいて參りましたな。私もさうではないかと思つてをりました。劉邦の外にあんな大軍を持つてゐる者はない筈です。

項梁 雪達磨が轉がり出すと大きくなるにつれて雪が澤山喰つついて來るやうなものだな。

項羽 なにも喰つついて貰ひ度くて轉がるわけぢやないが、喰つついて來るものは仕方がない。

項梁 （旁白） そんな事を云つて喰つついて來なけれや怒るくせに。

范増 いや、他の者と違つてあの劉邦丈けは味方につかせておゝきになる方がお得です。少し見込みのある者は自分の側において存分其得手を發揮させて利用するに限り

ます。さうすれば先き／＼もし其男が謀叛をしても其得手の裏をかく事が出來る譯ですから。

項羽　さう云ふやり方は俺の性には向かないが、しかしまアそんな事はどうでもいゝさ。それはさうと叔父御。先刻の事ですが、貴方が强ひて自分で冠を授け度いと云ふならお授けなさい。そんな事を私は兎や角云ひはしない。

（項梁と范增と顏を見合はす。項羽鋭くそれを見て不愉快な容子。）

項羽　私は今日は少し氣分が惡いから家來共に謁見はしまい。あれ等が來たらさう云つて來れ。

（項羽、左手に退場。沈默。）

范增　又何かお氣にさはつたのでせうか。いや、眞個く一緖に仕事をするにはやりにくい方だ。（顏を曇らせる）

項梁　あれが何の爲めに腹を立てゝゐるのか傍の誰にも分らない事はよくあるのです。だがなに、直き直ほりますよ。あれは人を疑つたり、腹を立てたりする事を又人一倍恥と思つてゐるのですから。（間）尤もあれは一旦はあゝして折れて出ても、何のかのと云ひながらとゞの詰りは矢張り自分の思ひ通りにして了ふのです。

（沈默。士卒登場。）

士卒　大將鐘離昧殿がお戻りになりました。

項梁　何、戻つた？

范增　一人で？

士卒　はい。もうおいでになりました。

（鐘離昧、登場。禮をする。士卒退場。）

鐘　（やゝ息を切らし）只今歸りました。

項梁　御苦勞だつた。で、王子は？

鐘　見つかりました。

項梁　（喜び）見つかつた？　そして何處に。

鐘　途中迄お連れ申して來ました處が丁度此方へ從はうとして進軍中でありました劉邦の軍隊に出遭ひまして、一緖に參る事になりました。

范增　夫では彼處に來る彼の軍の中に澤山の赤い旗に交つて一本輝いて見える錦の旗が其印なのですね。

鐘　さうです。あの眞中に金箔の輿に乘つて劉邦自ら護衞をし乍ら參るのがそれです。何しろ非常な軍勢なので驚きました。少くも七八萬は確かにゐます。もうそろ／＼着く時分ですが私丈け一足先きに馬を飛ばしてお知らせに來ました。

項梁　では早速此處を片づけてお迎への用意をしなければなるまい。（退場）

范增　貴方は此事を兎も角項羽殿へ申し上げて下さい。（鐘離昧退場）私には私の仕事がある。それは劉邦を觀察する事だ。

（范增は正面の帷幕の間より外に出づ。大勢の下士卒出で來りて中央の卓子を運び去り、椅子をわきに片づけ、右手に一段高く座を設く。）

下士甲　（働き乍ら）だがあの御氣象の大將が王子をお迎へになると云ふのは變な話だな。

下士乙　（同じく）何れ其處には何かわけがあるのだらうよ。あの智慧者の范增殿の發議だと云ふからにはな。

下士丙　（同じく）其爲めに一時大分御悶着があつたらしい。だけど今度來るあの劉邦とか云ふ人も餘つ程豪らい人だつてえぢやないか。

下士丁　（同じく）何でも近頃沛縣の人民に推されて其處の太守になつたとかで普通沛公とか云ふんだ相だが、おい。こんな風でいゝのだらうな。

下士丙　閣下がお入でになつたから伺ふ事にしよう。

（項梁。禮服に着換へ、英布、鐘離昧、季布、桓楚、于英等の大將を連れて登場。）

下士乙　（項梁に）こんな風で宜しうムいますか。

項梁　（見廻はして）宜しい。下れ。

（下士一同退場。軍鼓、及び鐘の音聞こゆ。）

項梁　（大將等に）さあ、君達は其處に整列し玉へ。早く。私は出迎へに行くから。

（正面の幕の間より一同出で去る。幕の間より整列せる大將等少し見ゆ。舞臺一時空。音樂。）

（やがて項梁先登になりて王子、其後に劉邦、樊噲等莊重に登場。幕外に整列せる大將は拔劍を地に向けて敬禮をなし居る。王子は氣持よき十七八の少年にして上品なる容姿。）

項梁　（謙遜に）こんなむさ苦しい處へお通し申して申し譯ありません。活動の陣中にありますので住居の事抔構つてゐる暇がないのだとお思召し下さい。さあどうぞこれへ。（右手の高座に王子を導く。王子其座に就く。次に劉邦に）貴方が遠路の處を來て下すつたお禮は後で云ひます。とにかくこれへ。（劉邦、挨拶して正面の高座に就く）

（范增は劉邦の部下をそれ〲の席に就かす。劉邦は范增を一寸注目す。范增は劉邦の一擧一動にそれとなく注意してゐる。幕外に整列しをる味方の大將等も再び入り來り、一同其席に居竝んだ時音樂止む。）

項梁　（王子の側近く劉邦に面して坐し）突然に今日がこんな吉い日にならうとは全く思ひがけない處で、年來の宿望の大きな一つが遂げられた上に、又とない良い名將軍を迎へる事が出來て私達の滿足は此上ありません。一時に根が出來、幹が太り、其上花か咲いたやうなもので、此喜びを祝ひ度がるのは永年の間秦に踏みつけられてゐ

た楚國の人民ばかりではないと思ひます。

王子　宿望の大きな一つが遂げられた事の滿足はお互です。

劉邦　私も。

項梁　皆んなの滿足が一つになつて得られたと云ふ事が何よりも芽出度いのです。之で殿下が皆を導く明星のやうに上に立つてゐて下されば私共の仕事は大義名分に叶つたものである事が明かになり、同時に又私共は立派な名目に背くまいとして各自正義を貴んずる念が益々強くなる事と思ひます。而も此正義の念は凡そ利慾心と云ふものが銘々を分裂させる事の反對に最も皆を團結させる力のあるものです。之からはたとへ何十萬の將卒がゐやうとも皆の心は上下一つになつて正義の爲めに惡虐と戰ひ、向ふ處敵がないでしやう。

王子　（喜びを禁じ得ず）　私は今こそ希望を擲つ事が一番惡い事だと云ふ事を知りました。昨日迄は私は自分程世に不幸な者はない氣がしてゐた。其感じが私に憑いて了つたので今俄かにこんな幸福な目に逢つても何だか未た欺かれてゐるやうな氣がして、此れも亦例の夢ではないのかと疑はれて仕方がない。そして此れが若し矢張り夢だとするとそれが何より私の望むでゐた喜びである丈けに又覺める時の怖ろしさが思はれてならない。

項梁　それは殿下が並の人間ではなく、王子である事を御自分で知つてゐらしつた丈けその逆運の不幸をお感じになり方が人一倍强かつた爲めと思ひます。しかし今少し此事實にお慣れになればこんな事は殿下が王子でいらつしやる事實と同じやうに當り前な事實だと云ふ事がはつきりなさるでしやう。

鐘離昧　差し出がましいやうですが私は隨分王子を御見つけ申すに骨を折りました。其代りあの南淮の浦で圖らずもお見つけ申した時の喜びは又譬へやうもありませんでした。あの時は自分乍ら自分の眼の利いてゐる事に感心して誇りが私を躍り上らせました。

王子　ほんとにあれを思つても夢のやうだ。私は又瞞し討ちに遭ふのではないかと云ふ氣が直ぐして、之はもうてつきり秦の使が僞つて自分の首を取りに來たのだなと思つたのでした。で、いつそ一思ひに此人を打ち殺してやらうかとさへ思つたのです。併し漸く本當の事が分つた時私は俄かに眠つてゐた胸の中に火がついたやうな氣がして、其明りでもつて眞の自分を見知つたやうに感じました。私は嬉しさの餘り思はず此人を抱きしめて了つたが、ふと又それが自分を瞞してゐる惡魔の企みのやうな氣がして來て、譯が分らなくなつて了つた。

項梁　はゝ。餘り熱心に思ひつめて居らしつたからでしや

う。――(起ち上る)私の甥の項羽であります。

(項羽、平服の儘にて登場。一同を睨め廻す。)

項羽　之は私の分家の叔父に當る項梁と云ふ者です。

(王子起ちて項羽に禮をする。項羽、輕くそれに答へて禮をする。)

劉邦　(起ちて)私は劉邦です。貴方を尊敬して微力をお添へし度い爲めに參りました。

項羽　(劉邦をヂロリと見て)僕も君には興味を持つてゐたが、よく來て呉れたな。俺は何處にかけたらいゝのだ。俺の席はないやうだが。

項梁　(項羽に)お前は先刻加減が惡いからお目にかゝらないやうな事を云つてゐたぢやないか。

項羽　では私が來なければ私の席は作らないのか。

范增　いゝえ、そんな譯では厶いません。此處が狹いもので何誰の席と定める事も出來ず御銘々勝手に著席して頂いた譯です。どうぞ之へ。

(王子と劉邦との間へ座を設く。項羽、其座に就く。)

王子　貴方々の力で私の豫ねての希望が實現されてこんな嬉しい事はありません。私は生き返つたやうな氣がしてゐます。

項羽　そんなにお嬉しいのですか。はゝ。とにかくこゝへ來られゝばもう大丈夫です。一體今迄どんな風でおゐででした。

王子　私は牧童をしてゐたのです。そして其日も朝から每ものやうに澤山の羊を驅つてあの湖水のわきで番をしてゐた。其處へ每も私を虐める村の若者達がよつてたかつて來て何のかのと又私の惡口を吐き始めて――何故かと云ふと私は其奴等に向つて一度かう云つた事があつたのです。「君達は大勢で、皆んな兩親を持つてゐるけれど百姓の子ではないか。自分は一人で、親のない孤兒だけれど王の子孫だ。今に見てゐろ。」かう云つたからです。

項羽　はゝ。さうしたら皆は貴方を法螺氣違ひの嘲け者だと云つたでしやう。さうして笑ひ乍ら貴方を嬲つたでしやう。

王子　そればかりではありません。私がさう云つた眞似をして「俺は王子だ。今に見てゐろ。」と冗談に云ひふらす者が彼方にも此方にも出來たのです。中には眞面目でさう吹聽する者も出來た程です。それでどれが本當か噓か區別がつかなくなつて了つた。

鐘　しかしその流行のお蔭げで私は王子をお見つけ申す事が出來ました。をかしな言葉が流行るものだ。之には乾度何か本尊があるに違ひないと云ふ不審を起したのがキッカケになりました。

項梁　何が仕合はせの手引きになるか分らぬものですね。

王子　併し皆が餘り私の云ふ事を馬鹿にして取り合はないので、仕舞には自分迄がそれを疑ひ出して自分は實際何かにまやかされてゐるのではないかと云ふ氣がして來たのです。それと云ふのも私は自分の血統を詳しく知らないので、お前の父親は何と云ふ王さんでどうして死んだのだ抔と訊かれると、何とも答へる事が出來なかつたからです。私は始終さうして一人除け者にされ乍ら淋しい日を送つてゐたのだ。

項羽　一人除け者にされると云ふ氣持を全で味つた事のない者は迚も語るに足らぬ者だ。いや、私なぞも、若い時分にはどうしてかう自分は除け者にされるのか、その譯がどう云ふものか分らなかつた。後に自分が何者かと云ふ事を知つてから漸く成る程と分つたが。賤民は一生その淋しさを知らない。何時でもいゝ仲間がゐるから。王者の運命を以て生れる者は不思議と皆淋しいのだ。其淋しさの上に榮えあれだ。

項梁　併し今こそ其眞僞の區別が明かになる時は來たのです。「時」はさう何時迄も不正の跋扈を喜ぶ譯はありません。王子が今に見ろと被仰つた其「今」は今來たのです。さうして「時」は吾々正しい者の味方に「起て」と眼くばせをしたのです。

項羽　さう云ふわけで私達は起つたのでしたかな。

項梁　お前は又そんな事を云ひ出さうと云ふのか。

項羽　いや、私は只一人の不幸な王子をその不幸から救つて上げたのだと思つてゐた、自分を正しいものとするために王子を戴くのだとは思つてゐなかつた、と云ふまでだ。

項梁　（旁白）今になつて何をとぼけてるんだ。（項羽に）だがお前は今の世の腐つてゐるのを見ないのか。又それを見て、あれらが不正で吾々が正し事を認めないのか。

項羽　（甚だ冷嘲的に）私は刑吏ではない。だから今に始まつた事でもない世の腐つてゐる事抔を名目に借りなければならなかつた事は一度もない。英雄はどんな正しい世に生まれやうと征服をするのだ、なぜなら只彼が英雄であるから。さうではないか。劉邦。

劉邦　さうです。眞の英雄は自分丈けで正しいので、他の爲めに正しいのではありません。

項羽　さうだ。その通りだ。

王子　私は貴方が慕はしくなりました。魂の拔けた、だらけきつた今の世に貴方のやうな豪傑がゐやうとは何と云ふ頼もしい事だらう。今の世は駄目なのだ。どれも之も團栗の背比べで、昔の英雄のやうな大した者は一人もゐないと皆が口を揃へて云ふので、私も實はさうなのかと許り思つてゐたのに。

項羽　はゝ、大した者が出てほしくないからです。而も奴等がその定まり文句を並べてゐる後ろには毎も乾度その大した者が出てゐるのだから面白い。（機嫌よく）私におすがりなさい。しつかと。私も貴方が可愛くなつた。寄生物を持つてゐると云ふ事は私は嫌ひではない。

項梁（思はず嘆息して）王子。

王子　貴方にすがる事はとりも直さず貴方の叔父さんにもすがる事にはならないのですか。

項羽　宜しい。私は貴方に王冠を授けやう。（劍で季布に合圖をする）

（季布、退場。）

項梁　項羽。お前はそんな勝手をするのか。

項羽　貴方にはさう見えるのですか。はゝ。それなら貴方がお授けなさい。（項梁は無言なので王子に云ふ）あの叔父は私の小さい時始めて弓矢を私に敎へて呉れた人です。私が大きくなつてからは私はあの人を育てました。あの人の世話をし、あの人を敵から防ぎ名譽と位置とを授けてやりました。私はあの叔父を愛してゐます。あれにも一方の手を持たせておやりなさい。

王子　私は皆んなに手を持つて貰はなければならない。私は一人で追放されてゐる時は强かつた。しかし今は女のやうに弱くなつて了つた。

（季布、冠を入れたる筥を持ちて登場。恭しくそれを項羽の前に持ち行く。項羽、その蓋を開きて王冠を取り出し、それを眺める。溜息を吐く。）

項梁（旁白　彼奴はよだれを垂らしてゐる。もう人にやるのが厭になつたのだ。

（項羽、冠を再び筥の中におく。）

項梁　即位は一つ時でも早い方が宜しい。どうせ之は假りの儀式です。本式には何れ王號の御宣誓と一緒に關中を占領した曉に、祝捷を兼ねて改めて行ふ事にしましやう。ではとにかく。（王子を眼にて促す）

（王子、項羽の前に行く。）

項羽　お跪きなさい。

（王子、跪く。項羽、再び王冠を取り出し、それを王子の頭の上に載せんとして躊躇する。突然それを床の上にたゝき捨てる。一座驚く。只劉邦のみは落ちついてゐる。）

項梁（起ち上りて怒る）何をするのだ。項羽。お前は王位を侮辱するのか。

項羽　貴方は喜んでゐる！　私を排斥する口實の爲めに。はつ。下らない！

王子　私はどうしたらいゝのだ。

項羽　俺にこんな嚥けた眞似が出來ると思ふか。豚の頭に

でもなげてやるがいゝ。（王冠を蹴る）

項梁　無禮も程がある！　誰れがお前にしろといつた。

（項梁、項羽を斬らんとして劍の束に手をかける。一座、大に不穩。此時虞姬、幕の間より飛鳥のやうに出で來りて元氣よく舞を舞ふ。急調子の音樂。立ちゐたる一座は呆氣にとられてそれを見る。其間に項羽は自然と座に凭れ、妻の舞に見とれる。虞姬は一座の氣持ちが次第に緩化して一同再び座につくを見て舞を止める。と同時に腰元大勢、酒と盃とを見事な盆に載せて出で來る。）

虞姬　（王子の前に進み）妾は項羽の妻でございます。失禮をお許し下さい。（かく云ひ乍ら王子に盃を渡して自ら酒を注ぐ。虞姬は次に劉邦、項梁、項羽等にそれ〲盃をさす）

項梁　（虞姬が自分の前に來た時に）出かしましたな。貴女は貴女の美の雨でざわついたほこりをしづめて了つた。（王子に）どうか項羽の不作法はお見遁し下さい。

王子　私は王冠杯はほしくない。それよりも貴方々の間の平和がほしい。

項羽　（虞姬が自分の前に來た時つい其手を握る）お前は叔父の一命を救つたな。

（虞姬、一同に禮をして退場。）

項梁　項羽、今の王子のお言葉を聞いたか。

王子　（高座を下つて項梁と項羽との間に來り項羽に）どうか貴方の御夫人の美しい心と、私の愛とに免じて貴方は和解して下さい。天下に代つて私がそれを賴みます。私にとつては貴方々の親密な平和が何よりも嬉しいのだと云ふ事を知つてゐて下さい。私達は今詰らない事で仲割れ抔してゐる時ではないでせう。

項羽　（微笑む）私の慈けに免じて。盃を。

劉邦　それは私がさしましやう。

（劉邦、腰元より酒、盃をとり、項羽と項梁とに注ぐ、項羽は又王子と劉邦の盃を注ぎて四人にて立ち乍ら盃を擧げ、飲む。注進の使急ぎ登場。）

使　（敬禮して）申し上げます。秦の朝廷では味方の樣子を悉く聞き知つたものと見えまして、相丞の趙高は非常な慌て方で、とりあへず大將の章邯に三十萬の兵を與へて直ちに此方に攻め寄せるやうに命令を下しました。それで章邯は部下の司馬欣に一部の軍勢を裂いて、もう函谷關を出た相であります。（退場）

項梁　屹度二手に分れてやつて來るに違ひない。

項羽　少しはぶつかつて來るものがないと力の試めしやうがない。（起ち上る）味方には今どの位の兵數がゐるのだ。（じやら〱劍を引きずつて何か考へ乍ら舞臺を歩

きまはる）

范増　劉邦殿が約十萬の兵を加へられましたので、矢張り三十萬位はゐる事と思ひます。

項羽　そんな牛刀を以てどの肉を裂かうと云ふんだ。

王子　どうでせう、味方も東西二手に分れて進む事にしたら。

項羽　（傲然と）そんな事は貴方が口を出す處ではない。

項梁　では兎に角明朝曉方に出發する事にしましやう。道は遠いのだから急ぎ過ぎては却つて惡い。今夜はゆつくり休む事にして、準備を整へやう。（一同に）諸君は其心算で。

一同　心得ました。

項羽　愈々小手慣しをする時は來たのだ。（壁に立てかけありし大なる青き地に金の龍を縫ひたる旗を持ち來り、それを衝き樹て）此處に俺の旗がある。未だ新しくて何の傷も受けてをらぬ。之からは血にまみれる事もあり、やぶけ裂ける事もあらう。だが此旗のひらめく處それは死のやうに人心をおびやかすだらう。そしてそれは俺の心が勝にゆるんだ時俺の運命が何だと云ふ事を俺に警告するだらう。お前等俺の命に從つて俺と身命を共にし、飽く迄此旗の爲に戰ふ決心ある者丈け劍を擧げるがいゝ。

（多くの將士皆劍を拔きて高く掲げ、その覺悟を表す。）

項羽　宜しい。では今宵は大いに飲め。明日は咸陽へ向ふのだ。咸陽へ！　恐らく、否、確かに、一撃の下に陷れる事が出來ると俺は信じてゐる！

――幕――

第二幕

第一場　定陶附近に在る居酒屋の場

賑かなる笑聲にて幕開く。大勢の兵士彼方此方に組みをなして酒をのみ騷ぎ居る。

兵士甲　さあ、酒だ〳〵！　今夜は飲み明しだぞ。人生の快樂を今夜の一晩に舐め盡して、もう快樂と云ふ言葉を聞いた丈けでも嘔吐を催す程やりぬいてやれ。さうすれや、あの血腥い戰場の狂氣が却つて慕はしくなるまいものでも無え。

兵士乙　さうだ、醉つて醉ひしびれて二三日は體中の何處を斬られても流れ出るものは只酒ばかりで、痛くも痒ゆくも無えと云ふ迄飲んで呉れやう。そこで俺達を遙かの岡から鞭一本でワイ〳〵驅り立てる野郎共が戰ひの濟んだ死骸だらけの戰場へ來て見ても其處ら中に流れてゐる

ブンブンするどぶろくの臭ひにあてられて「何だ、之は血かと思つたら酒ぢや無えか」と云つてがつかりさせて呉れようぢやないか。

（笑聲。「贊成々々」杯云ふ聲。亭主（實は項梁の間諜）酒を持ちて登場。）

亭主　さあ〱早い處。早い處。いくらでも持つて參じますぞ。（同に酒杯を渡し乍ら）眼が廻る程早く、たんとお飲み下せえ。

兵士丙　酒もいゝが、姐さんがゐなくつちや興醒めだ。姐さんは何處へ行つた。え？　蘇桃娘は。

亭主　へえ〱、今參ります。（呼ぶ）これ、桃娘や。呼んで御座るから早く來な。

桃娘の聲（奥より）今行きます。

兵士丁　どうだ。あの嫌な號令の銅鑼聲たア少し違ふなあ。おい、諸君。今夜は俺ああの姐さんの寢床へ泊めて貰ふ約束になつてゐるんだからな。一寸御披露するぜ。

兵士丙　馬鹿云へ。俺の方が先約だぞ。

兵士戊　憚り乍ら我輩は又其先約だ。

兵士甲　止せ〱。そんな馬鹿な喧嘩は。みんな共同だ。どうせ死ぬも生きるも一つの體ぢや無えか。

兵士乙　明日から又「死ね」と云はれる代りに前進だ、吶喊だ、退却だと怒鳴られるんだ。進め、火の中へ。ハッ。飛び込め、死の谷へ、ハッ。敵の眼球を刳り拔け。ハッ。何でもハッ〱と云ふより能の無えのが俺達だ。たが「何の爲めに」なんて事は一切考へつこなしだ。そんな理窟を考へる資格は俺達にや無え相だからな。

兵士戊　當り前よ。命を惜しむ資格さへ持つてゐ無え俺達が考へるなんて生意氣な事あ以ての外だ。そんな事あ俺達こわつぱ共の柄にや無えんだ。

兵士丙　はゝ。だがお前は本當に人の眼球をくり拔いた事があるか。俺はあるんだぞ。男ながら惚れ惚れするやうな綺麗な若者だつたがな、敵の間諜だと云ふんで俺がその眼球をくり拔いて、石つころを詰め込むつて有り難い役を云ひつかつたんだ。（亭主は間諜と聞きてドキッとする）

兵士丁　そんな事は珍らしくも無え。此節のやうに人間の命が大根よりも安くなつちや少しや念の入つた殺し方をしねえと殺したやうな氣がし無えんだ。人間て者は何にでも贅澤んなるものだからな。

兵士乙　だから項羽のやうな化け者は一時に十萬人も殺さねえと血の匂ひを感じねえんだ。

亭主　十萬人？　それや本當ですかい。

兵士甲　お前は知ら無えのか。あの靑鬼の野郎、幕舍の巡察中に降參した秦の兵卒共が劉邦の家來にならずに運惡

くあの青鬼の家來になつた事を悲觀し合つてゐるのを立ち聞きしやがつて、御丁寧にも一々皆の唇をチョン切つて解雇したんだ。

亭主　それで皆物が食へずに死んじまつたんですな。ふーむ。ひどひ事をしやがる畜生だ。

兵士乙　何しろ十萬人の血だ。だからあの洛水には赤の氷が張つたつて云ふぢや無いか。

（蘇桃娘、肉を盛りたる皿を持ちて登場。）

兵士丁　さあ、女王の出御だ。敬禮！

（一同笑ひ聲、蘇桃娘に敬禮す。）

兵士甲　蘇桃娘萬歳！

（一同、蘇桃娘萬歳を叫び、酒を飲み肉を喰ふ。）

桃娘　今度は妾が唱へますよ。（臺の上に飛び上り）劉邦萬歳！

（一同、劉邦萬歳を叫び飲む。）

亭主　いや、貴方々はそれでも劉邦の部下にお附きで結構ですよ。

兵士丙　なに、俺は元とは項羽の方に屬してゐたんだがな、あの彭城で籤引きがあつて項羽が東軍、劉邦が西軍と定まつてそれ〴〵咸陽へ出發する事になつた折にこつそり劉邦の方へ附いちやつたんだ。自分の爲めにやいくらでも命をなげ出すのが當り前だと思つてけつかるある青鬼の下に使はれてた日にや生きてるのが不思議な位だからな。

兵士戊　それにあの蝮のやうな項梁奴がゐる許りでも俺や東軍に附いてゐる氣はしねえや。だがまあかうして駱駝の番人になつてゐれや卑しい役でも命の危なさは少いつて譯だ。

桃娘　何方が先きに咸陽へ入るでしやう。

兵士乙　それが今では天下の「賭け」になつてゐるんだがな。それや一寸分らねえさ。何方から行つても七百里はあるんだからな。だが俺の考へぢや、先あ何方かと云へや俺達の方が一足先きに入る事になり相だね。何故と云つて項羽のやり方は一つの城へぶつかると一々それを攻め落して死骸の山を積み乍ら進むと云ふ風だが、劉邦のやり方は全で違ふ。まあ、一つの城へ來ると戰はねえ先きに使を遣つてから云はせるんだ。喧嘩は止さう。強ひて喧嘩をすりやお前の方の損になる許りだ。だが我軍の敵はお前達のかたきの秦なのだから、お前達だつて我軍を味方にしなくつちや損だ。さあ早く明け渡しちまへ。かう云つてやるんだ。何しろ此方には何十萬と云ふ精鋭がゐるんだからグウもスウも無え。向うだつて仕方がねえから結句明け渡して了ふ。まあそんな風にしてあの邑邑だの高陽だのつて城市は取つちまつたんだ。

亭主　所謂「刄に血らずして」と云ふ譯ですな。ぢや却つて其方が早いことも早いでしやう。

兵士乙　うん。昌邑や高陽の市民は前よりも却つて心配がなくなつて氣樂になつたつて喜こんでゐる位だ。處が項羽の方と來たら到る處に怖れと恨みを撒き散らしてゐるんだ。現にあの懷王でさへが項梁や劉邦と話をする時には坐つた儘で懇ろに話されるが、奴と會ふ時には屹度立つて話をされると云ふ事だ。さもないとあの氣儘な野郎承知しねえんだ。

兵士丁　だがうつかり此方とらが先に關中に入る事にでもなれや其餘が又大事だぞ。此處は一つ奴を溫和しく先へ入れて滿足させてやつた方がいゝかも知れねえな。

兵士戊　眞個くだ。今一足先へ關中へ入る入らねえなんて事あ大した事ぢや無え。此方が先へ入りやあの靑鬼め、又癇癪を起してどんな酷え眞似をするか分らねえや。

桃娘　（つい昂奮して）項羽の上に呪ひあれ。

兵士甲　はゝ、姐さん、豪らい勢だな。どうだね、その勢ひで、昔周の幽王を笑ひ殺して大勢の同胞を救つたあの褒姒のやうに、姐さんも一つあの靑鬼の寢首をかいてやつたら。「英雄色を好む」つてえから姐さんの其容貌で勇氣さへあれや俺が請け合ふぜ。

桃娘　（をのゝきて）まあ、妾には迚もそんな怖ろしい芝居は出來ませんわ。

兵士丙　馬鹿な。あの靑鬼には幽王の褒姒に負けない位惚れ込んでゐる御自慢の內儀さんが附いてゐるぢや無えか。それに奴は幽王のやうな腑拔けたあ違ふし、迚もそんな手ぬるい色仕掛けなんかぢや追つかねえや。

（桃娘はそつと拔け去つてゐる。）

兵士乙　まさか笑ひ殺すなんて事あ出來つこ無えが、奴だつて石や岩ぢやなし、可愛いゝ娘を見れや厭な氣はしめえやな。いくら本妻に惚れてたつて他の女の味は又別だア。あんな出鱈目な野郎は一旦惚れ出した日にや又思ひきつてやらかすに違え無え。お前はそんな事を云ふが、奴に天下でも取られて見ろ、俺達あ何うなると思ふんだい。なあ、姐さん。おや、又逃げちやつたな。

兵士甲　はゝゝ。どうしたと云ふんだ。（呼ぶ）姐さん。今のは冗談だよ。

兵士丙　お前が碌でも無え事を話すからいけ無えんだ。もうそんな話は止せやい。おい、姐さん。此處に來て俺に抱かつて吳れよ。可哀相だと思つて。

亭主　おい、桃娘や、桃娘や。どうしたんだ。（返辭なし）仕樣のない娘たなあ。（奧へ行く）

兵士戊　酒を持つて來な。酒を。あゝ醉つた〳〵。殺すならこんな時に殺して吳れるといゝ氣持で往生するんだがな

ア。姐さんともう今夜でお別れか。今迄はまあかうしてどうかかうかやつちや來たが、之から先きが思ひやられらあ。あゝいやだ／＼。

（或る者は歌を唱ふ。扉をたゝく音。）

兵士丁　（寢そべりながら）　又仲間だな。戸なんぞ叩きやがつて、洒落た眞似は止してズン／＼入れ！

亭主　（出て來る）　お入りなせえ。

（呂妃二人の憲兵を連れて登場。桃娘は帷の蔭よりのぞいて甚く吃驚した樣子。）

呂妃　（威嚴ある態度）　妾は劉邦の妻です。お樂しみの邪魔をして心苦しいが、貴方々は少し此處を退いて下されまいか。

兵士乙　へえ、之は大變だ。皆んな、起きろ／＼。劉邦閣下の奥方樣だ。

憲兵　失禮な事をすると承知せんぞ。さあ、早く出て行け／＼。野郎共。

呂妃　（憲兵に）　そんな手荒な事はお云ひでない。妾は皆さんにすまなく思つてゐる。さあ、御亭主、皆さんの酒代は妾が拂ひます。（財布より金を出して亭主に與ふ）

亭主　へえ／＼。之はどうも。……こんなに頂いちや……

兵士甲　ぢや皆んな歸らう。少し物足りないが、奥方から只で酒肴料を頂戴したんだと思へやお禮を申さなくつちやならねえ。

兵士丁　どうも有り難え事で御座えます。奥方樣。

呂妃　濟まないが、飲み足らなければどうか又わきへ行つて飲んでお呉れ。

（一同、手眞似で物を云ひ交はしつゝ禮をしてそこそこに退場す。）

呂妃　時に御亭主、妾は或る私用があつて來たのだが、お前の家に近頃傭はれた娘がゐるなら一寸會はせて貰へまいか。

亭主　へえ、お易い御用で。あれは不幸な娘で御座いまして惡者に危く身を賣り飛ばされやうとしてゐました處を私が救つて連れて參つたやうな譯で。これ、桃娘や、奥方がお前に何か御用がおありだ相だ。早く來な。

（桃娘、出て來る。そは／＼し乍ら隔つた處に立ち居る。）

呂妃　（亭主に）　不躾のやうだがお前さんも暫く遠慮をして下さらないか。

亭主　いえ、私も恰度之から其處迄用達しに出掛けやうと存じて居りました處で。では桃娘や、お前に留守を頼むからな、いゝか。では奥方、どうぞごゆつくり。（退場す）

呂妃　（二人の憲兵に）　お前達は外にゐて人が入つて來ないやうに番をしてゐてお呉れ。（憲兵等退場）　お前は殷

桃娘だね。

桃娘　（燃えるやうな眼をして）　あゝ奥樣。どうしてそれがお分りです。

呂妃　一眼見ればすぐ分るよ。あゝ、妾はお前に逢はうとしてお前を探すのにどんなに骨を折つたらう。

（二人は迅速な調子にて會話す。）

桃娘　貴方にお目にかゝる事は又妾の夢でした。併し妾はとても叶はない事と諦めて居りました。

呂妃　妾達は諦めてなんかゐられる時ではない。飢ゑた隼のやうに生命と捷利を貪らなければならない。しつかりおし。妾の股桃娘や。妾はお前を救ひに來たのだ。お前を活かしに來たのだ。

桃娘　奥樣。大きなお聲で妾を股桃娘とお呼びにならないで下さい。妾は自分乍ら自分の本名を聞くとをのゝきます。妾は父が殺されて家を出ましてから蘇桃娘と云ふ名に變へてゐるのです。

呂妃　では自分の名の響きにをのゝくお前は未だ親の仇きを打つ氣はあるのだね。

桃娘　唯一人の親を殺されて、こんな怖ろしい陷し穽に蹴落された妾は、親のかたきを打つ前に先づ自分のかたきを打たなければなりませんわ。（呂妃はゝ笑む）奥樣、貴方は妾の鏡です。貴方にお目にかゝつて妾は漸く自分丈けでは見る事の出來なくなつてゐた自分の正體をはつきり見るやうな氣が致します。

呂妃　妾を敵と思はなければ妾に抱かれてお呉れ。お前は知るまいが、天下の運命、幸と不幸とが妾達二人の女の肩にかゝつてゐると云つても言ひ過ぎではないのだよ。さあ、之からは妾をお前の姉と思つて賴りにしてお呉れ。妾は又お前を妹と思つて蔭になり日向になつてお前の爲めに力を盡すだらう。妾達二人の運命は一つだ。お前の幸福は妾の幸福、お前の仇は妾の仇だ。さあ、それを誓つてお呉れ、妾達が運命を共にする姉妹になつたと云ふ事を。

桃娘　（呂妃に抱きつく）　奥樣。……

呂妃　お前は誓ふ事が出來ないのかい。怖ろしい陷し穽に陷ちたお前は、妾が手をのべて救つてやらうと云ふのにその穴の中で溺れ死に度いと云ふのかい。

桃娘　併し妾に何か出來るでしやう。奥樣、踊る事と、唄ふ事の外出來ない妾に。

呂妃　幇間は戲けた道化が出來るばかりに王の後宮へも大手を振つて入つて行くではないか。ところがお前には四つの武器が與へられてゐる事に氣がつかないのかい。女であると云ふ事と、美しい事と、歌と、舞と。え？　さうしてあの荒んだ陣中で何が一番求められてゐるとお思

ひか。お前の備へてゐるものが其一番求められてゐる處のもの許りぢやないか。

桃娘　（戰きて）奥樣は妾にあの怖ろしい虎の口へ入つて行けと被仰るんですの。

呂妃　叱。（手眞似にて桃娘の言を制し、奥を見て來いと命ず）

桃娘　（忍び足にて奥の扉を開け、奥を覗き見る。戻り來る）誰も居りません。

呂妃　お前の祕密を知つてゐる者はあるのかい。

桃娘　一人もゐません。故郷の者は皆妾が兵火で燒け死んだものと思つてゐますの。それも其筈ですわ。妾すら自分が殷桃娘である事を時折は忘れて了ひ相になるのですもの。

呂妃　それは何よりだ。項羽はお前を見た事があるのかい。

桃娘　一度。項梁と一緒に妾の父を殺した時に。

呂妃　心配する事はない。粗野な男の眼を暗ます位の變裝をする事は女には難かしくはない。それにどんな荒武者でも人を殺した時に落ちついて物のすがたを眼にとめる事は出來ないものだ。

桃娘　併し未だ其外に妾をよく知つてゐる家來が二人ゐます。それは元と妾の父に使はれてゐた者なのです。

呂妃　季布と鍾離昧の事だらう。妾は檢べてちやんと知つてゐるよ。だがあの季布はもう鉅鹿の戰ひで討死して了つた。

桃娘　でも未だ誰か他に妾を見覺えてゐる者があり相な氣がしますわ。さうしてもし妾が殷桃娘だと云ふ事が分つたら妾はすぐその場に殺されて了ふでしやう。

呂妃　大丈夫だ。妾には用意がある。（青い少年の服と帽子を取り出す）さあ、之を着て御覽。お前には屹度よく似合ふだらう。どうせお前の其髮も直さなければならないが、お前は胡弓を彈く事は出來ないかえ。

桃娘　（啞然とした調子にて）出來ますわ。

呂妃　では胡弓を持つて此少年の服を着て剽輕者になつて入るのだよ。妾が態々青い色を選んだのは、青が旗の色になつてゐるあの項羽の一門が屹度それを御幣に擔いで歡ぶと思つたからよ。野心家と云ふものは御幣擔ぎなものだからね。そして歌と舞との武器を適宜に遣ふがいゝ。あせらずに出來る丈け氣長に陣中に留まつてお居で。其間にはいゝ機もあるだらう。さうしてあの二人の中何方かを片附けて了へばもう半分は占めたものだよ。項羽を先きに殺せばそれはあの叔父が暗殺したのだと云ふ事になり、叔父を殺せば項羽が殺させたと云ふ事になる。同じ望みを持つあの二匹の獸がどんなに仲が惡いかと云ふ事は誰でも知つてる事だからね。それ許りではない、項

羽はあの叔父が自分の妻に横戀慕をしてゐると云ふ疑ひからなほあの叔父を亡き者にし度がつてゐるのだ。

桃娘　あゝ奥樣。々々。妾には迚もそれは出來ない氣がします。二人も人を殺すなんて、あんまり女には怖ろし過ぎます。

呂妃　氣の弱い事をお云ひでない。（聲を低くして、段々熱烈に）項羽を先きに片附けて了ふに越した事はないが、もし先きに叔父を殺したお前の手が二度と刄物を持つ事が出來ない程に痺れて了つたら、仕方がない、口を遣ふのだ。さうしてもし項羽に直かに云ふ事が出來なかつたなら、あの美人氣取りの女の耳に注ぎ込むがいゝ。懐王が項羽を怖れる餘り竊かに獨立の用意をしてゐると云ふ噂だと。するとあの疑ひ深い項羽はさもなくてさへ邪魔物に思つてゐる懐王弑逆の決心をするに違ひない。懐王は懐王で豫ねぐ〜あの男の專横には恨みを抱いてゐるのだから、あの不安な若い耳に毒を注ぎ込むには「今度は貴方がやられる番ですよ」と一言云へばいゝのだ。お前は項羽があの懐王に自分の威勢を示す爲めに自分が狩り取つた豹を虎だと云つて献じた話を知つてゐるだらう。さうして其席にゐる誰もが其豹を豹だと云へる者がなかつたのを見て滿足氣に笑つたと云ふ事を。兎も角それで二人の戰ひになれば可哀相でもあの弱い懐王は犧牲になるより仕方がない。しかしその後で天上の憎みがあの項羽の一身に集まる時、あゝその時こそは妾達の時代の曉となるのだよ。妾の夫劉邦が義兵を擧げるのは其時だ！

桃娘　奥樣。貴方は怖ろしい方です。

呂妃　怖ろしい運命に投げ込まれた妾達は怖ろしい者にならずに生きて行けるとお思ひか。あゝ妾は羊のやうだつた自分の心を鬼にするためにどんなにいたい血を流して來たゞらう。（わざと笑ふ）あゝ妾はあんまり先きを急いで、いじけてゐるお前の心をおどかしすぎたかも知れまいね。

桃娘　でも、妾その前に名を變へなければなりますまい。

呂妃　あゝ、本當になりばかり男になつても蘇桃娘では仕方がないね。其處で妾はお前の運が開けるやうにちやんといゝ名前も考へて來たのだよ。拔け目がないだらう。それは、金祥鳳と云ふのだよ。かう云ふ字でね、（指の先で臺の上に字を書いて見せる）何故つて云ふと妾は昨夜(ゆうべ)巨きな金色の鳳凰が東の方から咸陽の方へ遙か妾の頭の上を渡つて行つたいゝ夢を見たからだよ。

桃娘　金祥鳳。ほんとに男らしくつて、可愛らしい名ですこと。妾一寸、着て見ませうか、（帽を被り、少年の上被を被る。呂妃、手傳ふ。笑ひ乍ら）男のやうに見えまして？

呂妃　見えるとも、立派な美少年だ。だけど言葉つきでも、態度でも自然に男らしくしてゐなくつちや駄目だよ。女のやうにしてゐては。さうしてお前の祝された運命の瞬間が來る迄はお前はそれを脱いではいけない。一寸歩いて御覽。

（桃娘、男の眞似して歩く。呂妃笑ふ。）

呂妃　そんなに威張らないでもいゝ。もつと普通にさ。

桃娘　（急に呂妃に飛びついて）あゝ奥樣。妾には出來ませんわ。とてもそんな事。おそろしくつて。

呂妃　（憤然として冷酷に）出來なければ妾は歸るまでだ。お前は此家で卑しい男の餌になつて朽ち果てゝ行く方が樂でいゝだらう。（行きかける）

桃娘　（泣きかけてその袖にすがり）あゝ、奥樣。奥樣。妾やりますわ。思ひきつて勇氣を出してやれる迄やつて見ますわ。どうせ此處で腐れて了ふ位なら。

呂妃　（喜んで）本當かい？　おゝそれでこそ妾の妹だ。そして又本當のお前だ。思ひきつてやつて御覽。何でやれない事があるものか。石にかぶりついても妾達は運命に負けてはならない。勝たなくつちや。さうしてあの虞美人と云ふのぼせ女を氣違ひのやうに絶望させてやつたらどんなに小氣味がいゝだらう。あはゝゝゝ。

桃娘　それに、奥樣。實は妾があの陣へ入るにはもう一つの望みが他にあるんですの。妾はどうしてもあそこへ入つて行かずにはゐられないのです。

呂妃　（喜んで）ではお前の會ひ度い人でもゐるのかい。

桃娘　奥樣。妾は其人の事を忘れる事が出來ません。妾の一命はその人に捧げてあるやうなものなのです。

呂妃　妾はお前を一見した時からお前の顔に「戀」と云ふ字を讀んでゐたよ。もしお前と愛し合つてゐる人があの陣中にゐると云ふならそれはまあ何より願つたり叶つたりな事だ。

桃娘　愛し合つてゐるかゐないか、そんな事は分りません。恐らく愛してゐるのは妾の方ばかりかも知れません。いえ、其人は屹度妾の事なんか何とも思つてはゐないでせう。……それは妾が諸國を流浪して、あの淮下の富豪の家に傭はれてゐた時でした。（二人は腰かける）妾が毎日洗濯に行く河へ矢張り毎日のやうに釣をしに來る一人の男の人がゐましたの。恐ろしく脊の高い、肩幅の廣い、髯の蓬々と生えた顔色の惡い人でした。其人はぼろを着て釣をし乍ら始終何かを考へ耽つてゐると云ふ樣子で、魚がかゝつてもそれに氣がつかないでゐるんですの。妾は一度餘り氣になるので默つてゐられず、「貴方、魚が引つ張つてゐます。」と云つてやつたのが口の利き始めで、それからは何遍もその人がぼんやりしてゐるとわ

きから教へてやりました。其度に其人は優しい人の善い眼つきをして妾に禮を云ひました。(呂妃は何か思ひ當りたる樣子なるも猶ほ頷きて聽き居る）妾は其人の眼に何か並々ならない或る秘密な火が燃えてゐるやうな氣がしました。或時其人が餘りひもじ相にしてゐるので妾は到頭思ひきつてそつと一握りの御飯を持つて來て其人に上げたのです。すると其人は眞赤な顏をしてじつと妾の顏を見乍ら「此御恩は何時か屹度お返へしする時があるでせう」と云ひました。其時から妾は其人の事がへんに忘れられなくなつて了つて、雨が降つて川へ洗濯に行けない日は一日鬱いでゐました。其後其人が釣に來なくなつて了つてから、妾は其人がもうてつきり妾を嫌つて逢ふのを避けたのだと思つてどんなに惱んだでせう。でもそれは多分妾の邪推でした……と云ふのは其人が釣つた魚を提げて街へ賣りに行きますと大勢ののらくら者が其人にかう云つて揶揄つたのです。「お前は大きな圖體をして長い刀を携げてゐるが其刀は一體何の役に立てるのだ。其刀が役に立つたら俺達を斬つて見ろ。それが出來ないなら俺達の股をくゞれ」と。さうして其人は地べたに匍つて、其ならず者共の股をくゞつたのです。

呂妃　まゝ、その男の噂なら妾も聞いてゐるよ。それはお前、淮陰の韓信といふ評判の男だよ。

桃娘　あの人が世間の物笑ひの種子になつてゐた時妾はどんなに口惜しかつたでせう。笑ふ者は笑へ。お前達にあの人の偉らさが解つて堪るものかと思ひました。しかしさう思ひ乍らも又あの人もあの人だ。なんぼなんでも馬鹿者の股なんぞくゞらなくもいゝのにと思ふと、本當にあの人はそんな詰らない意氣地なしだつたのか、と云ふ疑ひが起つて、妾はます〳〵苦しみました。しかし奥樣。妾の眼は間違つてはゐませんでした。あの有名な智慧者の范增が間もなくあの人を見立てゝ項羽の家來にしたと云ふ事を聞いた時、妾は人知れずどんなに鼻を高くしたでせう。——

呂妃　ところがあの分らずやの項羽にはあの男の値打ちが見ぬけないのだ。だからあの男は未たにあの鍾離昧の下について、卑しくこき使はれてゐると云ふぢやないか。

桃娘　まあ。あんなオッチョコチョイに！　なんて馬鹿な項羽だらう。

呂妃　さうお云ひでない！　何が仕合はせになるか分るものか。あゝ妾は圖らずもお前の戀人があの鬼の幕僚にゐると云ふ事を天に感謝するよ。お前は其處で二倍以上の力を得る事が出來るだらう。そして又お前が彼處へ行くのにも二重の使命が出來た譯だ。お前は彼處でお前の運命の仇を滅ぼし、お前の眞の運命に邂逅ふ事が出來るの

だ。さあ、妾達は一刻もぐづ〱してはゐられない。お入で。妾と一緒に。妾は之からすぐその變裝のお前をあの項羽の陣の近く迄馬車で送つて行つて上げやう。（金貨を一枚皿の上におく）之でいゝ。さあ。（上衣を開きて桃娘を其中に擁し、曳ずるやうに扉より退場す）

（風の音。亭主、外より窓を開け、乘り越えて入り來る。扉の處に行き耳を澄ます。）

亭主　へむ、野郎行つちまつたな。俺を只の酒屋の亭主だと思ひやがつて、拔け目のないやうでも女の爲事だ。（金貨を手に取り笑ふ）多分こんな事が何かあるだらうと思つて、かうして酒店を開いて係蹄を張つてゐたんだが、まさかこんなどえらい鳥が引つかゝらうとは思はなかつた。野郎、何を得意で喋舌りやがつたかよくは聞こえなかつたが、何しろあの娘つ子が男に化けてあの陣へ忍び込むつて事丈けは確かた。多分あの親方の何方かをやつつけやうつてんだらう。太え奴だ。どれ、手遲れにならねえ先に早速此事を一つ走りあの項梁さんの耳に注ぎこんで來て呉れやう。馬鹿に評判の惡い野郎だが天下なんぞがどうならうと俺は只自分の懷を肥やしさへすれやそれでいゝんだ。（にこ〱と金貨を眺め乍ら）あの娘は殺し度く無えもんだが、今時の流儀で可哀相だなんて事はまあ考へねえ事にするんだな。（頭を振り乍ら引つ込む）

――幕――

第二場　咸陽に近き新城に於ける項羽の陣處

高地に在る城砦の一角。三月のある夜。咸陽の市街程遠からざる眼下に見ゆ。項羽、鐘離昧登場。

項羽　して彼は其時妃の居間からぬけ出やうとしてゐたと云ふのか。

鐘　はい。尤もそれが何の御用であつたか、强ちお疑ひに値する御用であつたかどうかは私の知る限りではありません。只私は其處の垂幕のゆらぐのと、私を御覽になつた時項梁殿のお顏色が變られたのを見たと云ふ事實を申し上げるに過ぎません。

項羽　ふむ。其方は其樣に態とらしい控へ目な物云ひをする事が猶更其方の腹を俺に見透かさせる事になるのを知らないのか。利口のやうでも家來は家來だ。

鐘　誰でも恐ろしい運命のまぎ添へに好んで入る者はありますまいからな。ですが此事には何より確かなお妃と云ふ證人がお居でになるのですから……

項羽　眼は口よりも正直だ。眼によつて確かめられてゐる事を口で質すには及ばぬのだ。慾み深い虞姫は彼の生命

を憐れむで、彼が俺の留守を狙つては彼女に近づく事を口では語らずにゐる。あれは俺に嘘を吐く事は出來ず、さればと云つてあの叔父の首を獄門に晒らさせる事を不憫に思ふからだ。而も彼の破廉恥な盜賊は又それを知つて厚ましくも妃に近寄らうとするのだ。

鐘　兎角美しい女と云ふ者は自分の美しさの證據を攫んで、其誇りに醉つて見度いと云ふ誘惑から不貞の非難を免れ難いものでありますが、私は未だお妃のやうにお美しくて、而も慈み深い中に淑德の高い御婦人を見うけた事がムいません。

項羽　俺は戰場に於いて俺の打ち破つてゐる敵が果して眞の敵勢であるか、それとも俺の成功を猜む味方の勢であるか分らなくなつた事は幾度かあつた。それで今二重の意味で俺を亡き者にしたがつてゐる盜賊を處分するに最も至當な方法は彼が俺に爲したやうに彼を危地に立たせて強敵とぶつからせて見る事にある。

鐘　處が生憎くさう云ふ強敵か只今は品切れになつてをります。又あつた處で其機會を待つ猶豫か此方にあればですが。

項羽　然らば俺には此最後の手段が殘されて居る許りだ。（鐘離昧の耳に何か囁く）解つたか。今晩だ。俺は勿論此樣な事をし度くはない。只彼の愚かな運命が自ら其業果を招いたのだ。

鐘　誠にお氣の毒な次第ではありますが、之も身から出た銹とあれば如何とも仕方はムいますまい。何、あの腹黑の劉邦がしたとでも塗すりつけておきやつくろへる事でムいます。

項羽　いや、王者に祕密は要らない。公けにせい。

鐘　公けに。其處で項王の公明正大が益々明かになる事でムいませう。（項羽に從ひ退場す）

（風吹く。間。項梁、少年の裝せる殷桃娘を曳きずつて入り來る。桃娘は髮を振り亂し抵抗し居る。）

項梁　さあ〳〵、もうそんな抵抗ひは止して神妙にするがいゝ。もうかうして俺に捕まつて了つたからにはお前がいくら其の弱い腕で藻搔いた處で蜘蛛の巢にかゝつた蝶と同然益々お前の身の破滅となる丈けの事だ。（手を離し）な、俺はお前を白狀させずともお前があの殷通の娘だと云ふ事は分つてゐるし、さうしてお前がわざ〳〵少年の道化に化けて此處へ忍び込んで來たからには俺達を殺す心算だと云ふ事も分つて了つたんだ。生憎くとお前は俺の張つておいた係蹄にかゝつたのが運が惡かつたんだと諦めるよりないな。（そつと桃娘の肩に手をかけると見せて突然その手を彼女の懷に差し入れ、桃娘が「アレッ」と云ひて抵抗する間もなく懷劍を奪ひ取る）ふむ、

こんな危ない物を持つて！　何かゞお前をこんな刺を持つ痛々しい薊にして了つたのだな。（桃娘、身投げをせんとする者の如く見せやうとして故と砦の一方に逃げるを、項梁抑へ止む）これさ、馬鹿な。「神の輕卒な愛し子」と云ふのはお前のやうな者のことを云ふのだ。まあ少し其慌しい心を落つけるがいゝ。そしてお前が狼のやうに思ふ此項梁も戰場以外の場所では案外只人情の厚い男に過ぎないと云ふ事を知つてお呉れ。な、お前の正體が何者だと云ふ事を知つてゐる者は此陣中で未だ此項梁一人よりないのだ。さうして誰も此處では俺達の話を聞いてゐる者はない。お前の祕密も運命も此懷劍同樣俺が握つてゐる。お前はあの蛇のやうな劉邦の妻にそゝのかされていぢらしくもそんな大それた決心をしたのだね。いやさ、そんな事で驚くやうではもし此項梁自身も今では實はお前の味方だと云つたらお前はどんなに驚かなければならないだらう。いや／＼、疑ふのは尤もだが、此項梁はお前のやうないぢらしい者に嘘などは吐けない男だ。第一あの甥奴が、此叔父の意志を無視して見せるだけのために非道にもお前の父親を殺した時だつて、俺が後でどんなに彼奴を責めたかお前は知るまい。いや、この俺と云ふ眼の上の瘤が今となつて邪魔で邪魔でならぬ彼奴は淺間しくも俺が彼奴の妻に不義な思ひをかけてゐる抔と云ふ嘘をつくつて今にも俺を殺さうとさへ企んでゐるのだ。さあ、此懷劍を以て俺の代りにあの鬼を殺せ。お前のかたきは又此俺の敵なのだ、俺は機先を制して彼奴の寢室にお前を案内しよう。さうしてお前が旨く彼奴の此處（胸を指し）にとゞめを刺してくれたら、ふむ。ふむ。――其時こそ俺はかね／＼の望みであつたお前を大びらに迎へて――いや、其時こそ天下の者皆がお前の手柄を稱讚するだらう。さうなれや、お前はもう自然王妃と云ふ身分になつたも同じものさ。もしお前がそれを「うん」と云つて呉れさへすりやアだ。（桃娘は抱擁されるままに溫和しくなつてゐる）うむ？　お前はうなづいたな。では俺の云ふ事を聞いて呉れるのか。それは本當か。（桃娘合點く）お前が俺を瞞まさうとしたつて俺が此處から一聲叫べばお前が何だと云ふ事を城中に知らす事は出來るのだぞ。

桃娘　でも貴方は妾をお許し下さつたのではありませんか。

項梁　さう／＼、許したとも。そんな事は定まつてゐる。あゝ俺は天下を取つたよりもお前の其言葉が嬉しい。いや／＼、彼奴を殺すよりも何よりも先きに俺は先づお前が俺の云ふ事を聞いて呉れた證據を見せて貰はなければならない。お前が俺と希望を一つにする誓ひの印を見せ

て貰はなければならない。さあ、此方へお入で。（桃娘を引きずつて幕の中に入る）

（鐘離昧、覆面して槍を持つた士卒数名を從へてこつそり出る。彼は幕の中をそつとのぞきて後、士卒等に何か相圖をする。と士卒等隱れる。）

鐘　どうやら運命の荒繩が大分もつれて面白くなつて來やがつた。それをほぐすには斷ち切るより他はなさ相だ。（向を見て）やあ、又何か祕密の御相談かい。（去る）

項羽　俺は實際がつかりした。この小さな町が俺の子供の時から憧れてゐた東方の大帝都あの咸陽であらうとは。寶物を見れば何でもこんなものなのか。俺はもう此町を踏み潰す氣もなくなつてしまつた。どれだ、あの愛嬌者の始皇帝が子供じみた見榮のために拵へたとか云ふ阿房宮と云ふのは。

范增　（指して）あの北の方に巨きな黑い駱駝か何かのやうに見えますのがそれでございます。春になると高樓の周圍に紫の雲が棚引くと申しますが、あの途方もない宮殿を造る爲めに晝でも魔物の棲むとか傳へられるあの蜀の金山は禿山となり、靈山と云はれる崑崙の山には寶石が絶えてなくなつたと申すことでムいます。

項羽　俺は一つ其後宮を見てやらう。そして凡庸な彼奴にとつて人生最上の生き甲斐であつた榮耀と歡樂との極みが此俺にどれ丈けの魅力を及ぼし得るものかを試めして見よう。

范增　ところがその歡樂の花である後宮の美女を先達て劉邦が殘らず解放して了ひました。

項羽　何、劉邦が解放した！

范增　其證據にはあの晝よりも明るい不夜城と云はれた王宮には今やぱつたり灯りが絶えてあの樣に黑く見えるのでムいます。

項羽　何の事か俺には分らぬ、彼は臣下ではないか。

范增　ところが彼はさう心得て居ないのでムいます。あの男こそ眞に油斷のならぬ恐ろしい野心家だとは私の豫ね豫ね申し上げておいた通りでムいますが、今度自分が閣下より先きに關中に入りましてからはいよいよ其本性を露はし、秦を滅ぼした者は自分である抔と稱し、僭越にも自ら漢王と呼ばしめて居ります。

項羽　彼奴は氣違ひではなかつた筈だ。それは本當か。

范增　そればかりではムいません。あの男は勝手に秦の三世皇帝の一族を赦し、死刑を廢し、租税を減じました。

項羽　出しやばり奴。誰がそれを彼に命じた。劉邦を此處へ呼び寄せろ。

范增　それよりも明朝閣下自ら我全軍を率ゐて關中に入御遊ばされた上で鴻門に陣を張り、其處へ彼を呼び寄せて

嚴しく審問の上、適當の處罰をお加へになつた方が宜しくはムいませんか。どうせ我軍は關中に入らなければなりません。

項羽　王者の行列が進む時には王者自ら先登には立たぬ。俺は劉邦を俺の前驅と見做して居るから奴が先きに關中に入つた事を怪しみはしなかつた。彼は俺より一足先きに彼處へ入つて後に俺が入るべき準備をして待つてゐなきやならぬのだ。

范增　處が其前驅である者が、自ら獨力を以て關中を占領したやうな顏をして勝手氣儘を働いて居ります。素と素と彼に謀叛氣があると云ふことはあの函谷關を堅く鎖して其處に兵力を集中して居るのを以て見ても分る事でムいますが。恐らくあの男は近頃蕭何とか張良とか云ふ青二才の策士達をかり集めたので、そんな事からも增長したものと見えます。

項羽　あの臆病者にそんな謀叛氣が起つたとは正氣の沙汰とは思へない。恐らくそれは外敵の闖入に備へる爲ではないのか。

范增　もし左樣ならば彼は自分を漢王と呼ばせる要はムいません。野心滿々たる彼はあらゆる如才ない手管を盡くして民衆の歡心を獲ることにかゝり、市中の一軒々々に祝ひの酒肴料を配つたり、囚人を解放したり、自分のやうな獲難い有德な善人を統治者に戴くことが民にとつて如何に有り難い幸福であるかを思ひ知らしめることに醜いほど汲々としてゐるのでムいます。

項羽　（彼方此方を歩いて）春らしい風が出て來たな。此陽氣が小人の頭を蒸して其小さな腦を狂はして了ふのだ。哀れな劉邦奴、貴樣迄が發狂して俺の進行の敷石にならうと云ふのか。貴樣丈けは少しは話し相手になる奴かと思つて俺は末長く寵をかけてゐたのに。では止むを得ぬ。范增、英布に相當の兵を與へて今宵の中に函谷關を破らせろ。俺は項梁を……いや、お前を使ひに遣はして、凡てをそつくり元の儘に返へさせる事を命令する。法令を悉く秦の法令に戻し、租稅を元の如くし、三千の宮女を再び後宮に入れさせろ。其處で俺が關中に入つてから改めてどんなやり方をするかを示さう。（退場せんとす）

范增　（止めて）急がはしい場合ではムりますが、閣下に猶ほ一言申し上げる事がムいます。閣下は「何遍一つ事を云ふか」と被仰るかも知れませんが私は全く只閣下の御爲め、我軍の御爲めを思ふ許りに申すのでムいます。

項羽　用事は何だ。（振り返へる）

范增　每度申し上げましたあの韓信の事でムいます。あの男をもう少し取り立てゝおやりになる事が先き／＼無益

な事でありましたなら、私は自分の不見識を償ふ爲めに此しなびた首を溝に投げ捨てる事を厭ひません。

項羽　范增。お前がそれ程あの股くゞりに打ち込んでゐるなら彼奴をお前の家來にしたらよからう。俺は彼奴をお前に呉れてやる。

范增（再び項羽の去らんとするを追ひかけて）しかし閣下。そのならず者共の股をくゞつたと云ふ處にも見樣によつては却つてあの男の非凡さが現はれて居ります。

項羽　ふむ、頑個な。俺は人を善く見過ぎた事はあつても見縊り過ぎた事はないが、併し小さな事だ。では執戟郎にしてやれ。其處で奴が見せる實力次第によつては又上役に取り立てよう。（去る）

范增　執戟郎なんと云ふひどい役であの男に腕前を示せと云ふのは、全で虎を檻の中に入れて其力を見せろと云ふやうなものだ。そこで奴がその地位に不滿を抱いて、あの人を惹きつける德のある劉邦の方へでもついたらそれこそ由々しい大事。何うしても劉邦は今の中に殺して了はなければならないが、それが失策つたら惜しくてもあの韓信をやつて了はなければなるまい。今日迄あの叔父御を殺さずに來た事はまあよかつたが、之から先きがどうなる事か。（退場）

（突然項梁の呻き聲聞こえ、次いでドヤ〳〵と云ふ騷ぎ聞こゆ。桃娘、血に染み、氣違ひのやうになつて幕の內より蹣跚と出て來り欄干を乘り超え、姿をかくす。）

――幕――

第三場　關中霸上に於ける劉邦の館の前

正面の段上に劉邦、其傍に蕭何、樊噲、夏侯嬰等侍す。左右には劉邦の護衞の士卒大勢、日輪を追へる金地の龍を縫ひたる赤き旗數旒を飜へし、槍を捧げ居る。前面には咸陽の市民集まり騷ぎ居る。

市民甲　漢王にお願ひ申します。どうか鴻門へお出での儀はお見合せ下さいますやうに。

市民乙　項王は漢王を祝宴に招くと僞はつて屹度漢王に危害を加へる心算に定まつてをります。

市民丙　畏れ乍ら漢王にはあの會にお出でになるが最後御無事でお歸りになる事は六ケしいと存じます。これでもしも二度と漢王のお顏を拜する事が出來なくなりでも致さうものなら私共は生きてゐる甲斐は厶いません。どうか此儀ばかりはたつてお止まり下さいまし。

樊噲　こらッ。不埒な事を申すな。二度と漢王の龍顏を拜する事が出來まい抔とは何だ。漢王の傍には此樊噲がゐる事を知らないのか。

劉邦　いや、お前だとて內心は彼等と同じ慮れを抱いてゐ

るのではないか。怒る事はない。

市民等（代る〴〵）どうかお止り下さい。貴方様を失つて私共は生きてゐる空はムいません。私達は暴君の下に生きる位ならいつそ死んだ方が宜しうムいます。漢王は私達人民の親です。救ひ主です。

劉邦　お前等の言葉は餘りに忝けない。だが俺とても行き度くて行くのではない。止むを得ないのだ。

市民丁　それならばどうにかしてお斷りになる事は出來ないのでムいますか。項羽は貴方様の德望を嫉むで居ります。そしてあの男は自分の叔父さへも暗殺した桀紂にも劣らぬ男でムいます。

女甲（子を抱きて）全く罪のない妾の夫は漢王の御慈悲で牢獄から解き放されて、一家の者がやつと喜びの息を吐き返す暇もなく、あの暴君は再び夫を何の譯もなく牢獄にぶち込んで了ひました。妾共は夫と主なしには活きて行く事は出來ません。子供は此樣に飢ゑて泣いて居ります。（すゝり泣く）

市民戊　私達はもうとても此重い税の負擔に堪へる事は出來ません。

若者　私の父は項羽が暴虐な出來心で虐殺した秦の降兵十萬人の中の一人でした。さうして私の家はつぶれ、母親は發狂して了ひました。

女乙　貴方様は私共を滅びと死とからお救ひ下すつたのです。貴方様が此咸陽へお入で下すつた時私共は永い〳〵苦しみの夜が明けて温かい日の光りを仰いだやうな氣が致しました。それなのに息を吐く間もなく前のよりは更に怖ろしい黑雲が今や貴方様の上にもおほひ被さらうとして來てゐるので御座います。私共はどうしたらいゝので御座いませう。

市民乙　貴方様は御自分の御運を試めして御覽になるお氣かも知れませんが、貴方様によつて生きてゐる私共につてはそれは生死の境に身をおく事で御座います。貴方様は御自分のものであると同時に吾々萬民のものである事を知つてゐて下さらなければ困ります。

蕭何　これ〳〵。もういゝ加減にしないか。お前等は漢王の御身を案ずるやうな事を云ひ乍ら自分達の事許り考へてゐるではないか。そしてそんな事を云ふ事が漢王をどの位お苦しめ申すかを知らないのだ。少しは漢王の御心にもなつて見ろ。お前等が云ふ事は漢王は百も承知していらつしやるのだ。

劉邦　お前等が自分等の事しか考へる餘裕がないのは無理はない。だが俺を最も苦しめるのはお前等が俺を買ひ被つてゐる事だ。俺が此位置にゐると云ふのは只運に過ぎないのだ。併しお前等は珍らしく亂暴な君主に許り會ひ

つゞけて來たので今度始めてお前等と殆んど違ふ處のないこの俺を見て、何か德でも高い人間のやうに思ひ違へてゐるのだ。だがお前等のあのひどい窮迫の樣を見て苟も人間の心を與へられた者がどうしてあれより外に爲す道があらう。俺は只あの場合誰でも爲すやうな事を爲した迄の事だ。賞められる覺えは少しもない。

老人　貴方樣ともあらう方が御自分にどれ程の德が備つてゐるか丸で御承知のない筈はありますまい。併しそれでも猶は貴方樣は未だ御自分の持つてゐらつしやる値打ちの半分も御存じないのです。――

劉邦　それならば俺はお前等にかう云はなければならない。お前等は俺の不德、例へば臆病である事を知らないのだと。項羽を怖れてゐた俺は思ひきつた事をするのを怖れてゐたのだ。しかし眼のあたりお前等の悲慘を見た時怒りが俺の胸を內からたゝき破つた。俺は自分がやらなければならないと感じたやうにやれば項羽をひどく怒らすに定つてゐる事を知つてゐた。しかし俺は項羽を怖れる事を恥ぢた。さうして俺が未だ嘗て知らずに來た死に物狂ひな力と勇氣とが俺の內に漲つた。俺はその時何物をも怖れなくなつた。が、その勇ましい焰は永くは保たなかつた。そして今では俺は又……（額を抑へる）俺は未だお前等に愛される資格がないばかりではない。未だお前等を愛する力さへないのだ。（昂奮して）人民よ。俺がお前等を愛してゐる者だ抔とかりそめにも思つて吳れるな。俺は未だお前等を眞に愛する事は出來ないのだ。愛してはゐないのだ！

市民等　（昂奮して）貴方樣が私共を愛して下さらない！おゝ天よ、それが本當なら私達は呪はれてゐるのだ。其御言葉は私達には死です。御謙遜にも程があります。

老婆　（進み出て）貴方樣は其樣な事を今になつて被仰る事がどんなに罪な事であるかをお知りにならないので御座いますか。運命は迫つてをります。私共はそんなお言葉を伺つては居られません。私の唯一人の娘は又もあの魔窟のやうな後宮へ入れられて了ひました。元は天使のやうな淸い心を持つた處女(むすめ)で御座いました、それが此間の有り難い大赦で出て參つた時には親乍ら愛想を盡かす程いやらしい腐れた女に變つて居りました。私は此齡になつて可愛い娘の見す〲墮落して行くのを見續けなければならないので御座います。

劉邦　いや、お前にさう云はれると俺は益々苦しい。俺は此間あの後宮へ入つて群れ居る美しい女達や、驚く許りの豪奢を極めた快樂の房々(へや〲)を見た時、俺は矢張り空しい誘惑の力強さをしみ〲と感じたのだ。俺は始皇や二世を譏(そし)る資格の自分に微塵もない事を感じた。彼等は只俺

よりもずつと無邪氣であるに過ぎないと思つた。俺は力を持つ事の怖ろしさを感じた。俺は夢中で一人盲目な迷ひの力と闘つた。美しい悪夢に魅せられたやうなあの時の心地は今思つても恥しい。しかし幸運にも一人の美しい女は其時に俺を其悪夢から眼覺ませて呉れた。其女から泣いて哀れな身の上を話された時、俺は立ち處に總ての不幸な女達を後宮から解放せずにはゐられなくなつた。あの時位俺は嬉しかつた事はない。俺は自分自身を解放したからだ。

女　併し項羽は貴方様を解放は致しません。今晩にも貴方様を取り殺さうとして居ります。

劉邦　（顔を顰め）　俺は殺されるかとも思ふが、殺されないやうな氣もする。俺は恐ろしくない事はないが、又何となく自分が運命に守護されてゐる人間のやうな氣もするのだ。

老人　しかし暴力はもつと盲目滅法なもので御座います。

劉邦　默れ！　お前等は項羽も亦人間だと云ふ事を忘れてゐるのだ！　此劉邦の内にも暴君がゐる事を忘れてゐるのだ！

市民甲　おゝ東南の方の空は眞黒で御座います。見るも物凄いやうな黒雲が一面にはびこつて居ります。あれは確かに凶い前兆に相違御座いません。

市民乙　本當に氣味の悪い空模様になりました。私達は何と御叱りを受けやうとも鴻門へお出でになる事丈けはお止め申さずには居られません。

一同　（平伏して）　どうかお見合はせ下さいまし。お願ひで御座います。

劉邦　（強く）　だが、西の方の空を見ろ。あんなに赤く輝いてゐるではないか。恐らく俺は助かつて歸つて來るだらう。孔子は大樹の下で禮を弟子達に説きながら彼を殺さうとした桓魋に襲はれた時、「天徳を我に生ず、桓魋夫れ我を奈何」と云つたではないか。俺は今更に彼の偉大を感じる。だが俺も男だ。いざとなれば勇氣は湧く。恥知らずにはなれない。項羽が何だ。

（張良登場。）

張良　もう時刻が參りました。そろ〳〵お出掛けなさつて宜しう御座いましやう。

劉邦　さうか。では行かう。（立ち上る）

市民等　あゝ、どうしてもお出でにならなければならないので御座いますか。もうこれが永のお別れになるので御座いませうか。（女達は泣く）

樊噲　默れ。たとへ此身は粉微塵にならうとも俺は誓つて漢王のお體にお怪我はあらせないぞ。此樊噲の居る限り、漢王のお體に指一本でも觸れる者があつたら俺は其奴の

生首を引つこ抜いて貴様らへの土産にして呉れやう。安心してゐろ。

夏侯嬰　どうぞ私をお連れ下さい。私は飽く迄も漢王と生死を共にし度いのです。

張良　いや、君は殘つて居給へ。そんなに大勢で行つたつて只向ふの敵意をそゝる許りだ。私に考へがあります。萬事は私にお任かせ下さい。

劉邦　俺はもう凡てを天に任せてゐる。俺はもう後へ引く事は出來ない。又今更運命の關を逃げようとも思はない。只進むより外に道はないのだ。俺が猶ほ生きるに値するものなら天は俺を殺しはしまい。もう何も云つて呉れるな。

張良（蕭何と夏侯嬰等に）では諸君には留守の警戒をしつかり賴みますぞ。

蕭何　天佑を信じて恙ないお歸りを待つてゐます。其處迄お見送りしませう。

（劉邦、市民に會釋し乍ら右手に退場。張良、蕭何、樊噲等それに次ぎ、護衞の士卒等又それにつゞく。市民等、泣き、わめき、「漢王萬歳」を叫ぶ。「天よ、漢王を守り給へ」と祈る者あり。「暴君を亡ぼし我等を滅びより救ひ給へ」と祈る者あり。或者は又「どうか無事で歸つて來て下さるといゝが。今夜は此方とらも心配で夜明かしだ。」とか、「漢王の事だから運よく助かつて歸つて入らつしやるかも知れねえよ。」とか種々云ひながらわい／＼右手へ退場。）

第三幕

第一場　關中鴻門に在る項羽の館

見事なる閣上の大廣間。正面に高く項羽及び虞美人の座を設く。後方には幔幕を垂れ、左右には多くの座を設けあり。又立派なる燭臺を配列す。前面には四本の彫刻せる柱。其前は廊下となり居る。范增と鐘離昧廊下に登場。

范增　どうしても今夜はあの男をやつて了はなければならない。こんないゝ機會は又とないのだ。

鐘　どうでせう。うまく行くでせうか。

范增　うまく行くか行かないかを心配するよりも是非共うまく行かせるやうに心配しなくてはならない。項王がわしの計事を用ゐて其通りにやつてさへ下されば先づ間違ひはない筈だが、うつかり此處でやり損ねて、あの蛇を取り逃がしでもしやうもんなら、天下はもう九分通り奴の手に歸したやうなものだ。

鐘　貴方は本當にさう思つてゐるのですか。

范增　わしは始めて彭城であの男を見た時から最後の勝利を獲る者は事によると此奴かも知れない。確かに項王の眞の敵は劉邦の外にはないと睨んだのだ。あの男を見る迄わしは項王の成功に全く樂觀してゐた。だがそれからと云ふもの――之は此處丈けの話だがな……。

鐘　（旁白）自分のとまつてゐる船が危くなれば他の船へ飛び移る丈けの話だ。（范增に）何、貴方が永生きして、項王が貴方の云ふ事を用ゐてゐる限りは楚の天下は鬼に鐵棒ですよ。大丈夫。

范增　處がこの亡者になりかけてゐる體が樂になつて了ふより先きにわしはどうやらお暇を頂戴し相だて。わしが心配するのはもう只その前に禍の根を絶つておく事だけさ。

鐘　ふむ。そんな事はないでせう。だが人の事でよくそんなに心配が出來るものですね。いくら忠義でとは云ひ乍ら、全く貴方には感服しますよ。

英布　（登場）先刻から諸國の使節達が彼方で待つてゐます。

范增　さうか。ではわしが此處へ案内しよう。貴方はその事を項王に申し上げて下さい。どうも今夜のやうに落ちつかない晩はわしも始めてだ。（右手に退場）

鐘　爺さん、可哀想に一人で氣を揉むでゐる。（英布の肩をたゝき）だがなあ相坊、俺も考へるに餘り豪い奴と一緒の時代に生れて來るもんぢやないな。之で此處の大將や劉邦のやうなでか物がゐなかつたら俺達も結構一かどの英雄の仲間に紛れこんで歷史にも殘るんだが、生憎くの廻り合はせでお互にうだつの上りつこはないや。

英布　「お互に」は止して貰はう。俺は未だやつと二十五なんだからね。

鐘　ふむ。齡の若えのを自慢にするやうな奴が豪い者になつた例めしはないて。（向き直り）そりやさうと君が先刻大將に云ひつかつてゐた事は何だね。恩賞の話ではなかつたのか。

英布　まあ、恩賞の話が出た處で君には碌な賞與もあるまい。ガツ／＼するなよ。俺が云ひつかつた用と云ふのはな、今度天下の神社を殘らずぶち毀はして集めた夥しい金物を鑄直して一つの途方もなく大きな偶像を造れと云ふのだ。だが俺は今忙しい。又會はう。（急ぎ左に退場）

鐘　へむ。それを俺達に拜ませやうと云ふのか。自分の偶像を。馬鹿にしてやがるぜ。かうつと……（考へ乍ら）だか、とに角今夜は見物だぞ。（右手に退場）

（美々しき王妃の服を着たる虞姫、急ぎ足にて入り來る。）

虞姫　これ／＼、鐘離昧。

鐘　（戻り來り禮をする）はい、之はお妃殿で。（見とれる）

虞姬　用意は出來たかえ。

鐘　御覽の通り出來て居ります。

虞姬　劉邦は未だ來ないのかえ。

鐘　居牛場に曳かれる牛は足が臆すると同じやうにあの男も何か蟲の知らせで足の進みが遲いので厶いませう。

虞姬　いつそ時刻に遲れて來る方がいゝ。さうすればそれも一つの罰を加へる理由になる。

鐘　へえ。それが貴女樣のお言葉で。（旁白）どうも感化と云ふものは怖ろしいものだ。

（鐘離昧、禮をして振りむき／＼去る。虞姬、何か心に鬪つてゐる樣子で考へてゐる。少年に扮せる殷桃娘、二人の腰元と巫山戯ながら登場。）

腰元一　お妃殿、こちらにいらつしやつたので御座いますか。

腰元二　お探し申して居りました。

桃娘　御機嫌麗はしう。

虞姬　あゝ。金鳳凰。お前は何時も氣樂でいゝね。毎も愉快な顏をして。

桃娘　私の眼には凡ての物が笑つて見えます。お妃のお眼には凡ての物が青い顏をした鬼のやうに見えるものと見えますね。誠にお氣の毒な次第で。

虞姬　本當に妾にはお前が羨ましいよ。まあお前は見れば見るほど何と云ふ綺麗な顏をしてゐるのだらう。男には勿體ない光澤のあるいゝ髮だこと。お前はあの後宮へ行くと屹度女達に羨まれるに違ひない。（と云ひつゝ桃娘の頭を撫でる）

桃娘　いや、後宮迄行かなくとも此處で此位ゐ羨まれてゐれやもう澤山ですよ。同じ男に生れても男冥加を味ひ方はいろ／＼ありますからね。項王のやうに天下の男達の征服者になる者もあれば、私のやうに天下の女共の征服者になる者もあります。いや、私は項王の御身分を羨ましいとは思ひませんよ。項王の御生涯が「力」を漁つて送る御一代なら私は一生「美」を漁つて暮すのです。

腰元一　お妃樣。妾共の仲間では此人は實は女だらうと云ふ噂で御座いますの。

桃娘　あはゝゝゝ。いや、お疑ひも無理はない。何を隱さう妾は被仰る通り實は女ですよ。（笑ふ。態と女らしく舞を舞つて見せ）どうです。之でも男と見えますか。

虞姬　（扇子にて桃娘をはたき）あゝ暢氣者。妾はそんな態とらしい戲けた女の眞似なんぞ見てはゐられない。（決然と）今夜こそ妾はこの弱い自分に打ち克つて、この心を鬼にして、あの方のいやな疳積を焚きつける事が出來

なければならない。金祥鳳、妾は後であの方の前でお前を接吻してやる。あの方はそんな事で腹を立てるのを恥だとお思ひになるからその疳積の火が劉邦へ飛ぶのだ。あの方は御機嫌の悪い時は傍で眼をあいてはゐられないやうな事も平氣でなさるけれど、御機嫌のいゝ時はなさらなければならない事もなさらずに了ふ。妾の賴みとなるのはあの范增丈けだ。范增は何處にゐるだらう。

桃娘　丁度向うからやつて來ました。相變らず陰亡が灰を被つたやうな顏つきをして。

（虞姬と腰元等笑ふ。范增、諸國の使節を案內して入り來る。使節等はそれ〲祝ひの獻げ物を持ち居る。虞姬は帳の後ろにかくれて彼等の樣子をうかゞふ。）

范增　（廣間の中の左右にそれ〲使節を着かせ）どうぞ皆さん御着席下さい。項王は只今御臨席になります。

（項羽、左手より王冠をいたゞき、王の禮服を着し登場。英布、項莊、桓楚等の諸臣、後に從ふ。虞姬は項羽が見てゐる事を知りながら態と帳の隙間の中を覗き居る。）

項羽　（虞姬の肩を玉笏にてたゝき）女らしい眞似をして居るな。

虞姬　貴方も妾の室をおのぞきになつた事がおありになるくせに。

項羽　俺達は今や王と王妃だ。それを忘れてはいけない。來い。俺の美しい矜りよ。今夜は大いに笑はうではないか。（廣間の中に入る）

虞姬　（堂々と廣間に入り、項羽と並びて正面の座に着く）

（諸國の使節、立ちて禮をする。項羽と虞姬、尊大に會釋する。）

使節等　御機嫌麗はしう。今日の御盛典を祝し奉ります。

項羽　同時に明日の滅亡をも祝するかな は ゝ。（冗談のやうに）だが項羽は始皇帝のやうな脆い亡び方をすると思ふと間違ふぞ。餘りそれをあてにせぬがよい。今から云つておく。

使節等　滅相な事を。國王から謹んで宜しう申し上げて吳れとの事で御座いました。

項羽　何だ、其方達は皆使節なのだな。

使節甲　（慌てゝ）始皇帝卽位の折も參列者は皆國王代理で御座いました。

項羽　王に先例はない。（使節等色を失ひ、互ひに顏を見合はす）だが卽位早々俺は小言を云ひ度くはない。俺は特別の恩典を以て今日は其方達に謁見を許さう。

使節等　私共もかゝる過分の光榮を豫期しては居りませんでした。（皆々持參の獻げ物を項羽の前に持ち出し）お祝ひのお印し迄に之をお獻げ致します。

項羽　嘉納しておくぞ。よし〳〵、どうせ俺にとつては其方達の君主も其方達も變りはないわ。王の眼には小さな區別は存在しない。ゆつくりくつろぐがよい。
鍾離昧（登場）　劉邦が參りました。
項羽　末座へ通せ。（使節等に）俺は今夜遠來の其方達に好い土産ものを見せて呉れやう。
（鍾離昧、歩らんとして廊下の一隅に佇み居たる殷桃娘の頭を揶揄ふ如く輕く叩きて退場す。）
桃娘（鍾の後をにらみ）　氣味の悪い奴。未だ妾に氣がつかずにゐるのだ。あゝ今夜こそ妾はあの方を助けなければならない。畢生の勇氣よ、湧いてお呉れ。
范增（桃娘の處に來り、其耳にさゝやく）――うんとすすめて醉はすのだ。項王の杯と代り〴〵に注げば奴も酒を疑ひはしまい。あの男は酒好きだから醉ふ間には自づと禮を失するやうな事もあらう。よいかな。（項莊や桓楚等に）貴方々は此幕の裏に隠れてゐて下さい。わしが機を見て合圖をするまで。（廊下の彼方を見て）はあ彼奴、悪い奴を連れて來をるわい。
（項莊、桓楚等幕の裏にかくる。）
桃娘（廊下の向うより劉邦の來るを見てをのゝき）おゝ、何と云ふ氣高い立派な方だらう。そんな事を妾がするものと思ふのか。あの老耄。妾はあべこべに項羽には餘計注いであの方の盃にはほんの注ぐ眞似丈けしておけばいいのだ。
（劉邦、張良を從へ、鍾離昧に案内されて登場。）
劉邦（禮をして）久々に恙なき龍顏を拜して嬉しく存じます。
項羽　おゝ、劉邦、俺も久々にて其の方の龍顏を拜して嬉しく思ふぞ。（使節等に）聞け、其方共。關中には今や二人の王が居るのだ。これは漢王だ。
（使節等氣色ばむ。）
虞姫　まあ、お掛け。劉邦。（張良に）貴方も。
項羽　どうだ、劉邦。其方は風邪でも引いたのか。蒼い顏をして顫へてゐるぢやないか。
劉邦　一月の風に道々吹かれて參つたからで御座いませう。
項羽（滿足氣に）ふむ、感心に其方はそれを知つてゐるな。
使節　私共の國では既う桃の花が咲いて居ります。一月だからと被仰るのは何ういふ譯で御座いますか。
項羽　桃の花は此咸陽でも盛りだ。では改めて其方達に告げやう。俺は昨日から紀元を改めて、年號を大楚とした。昨日は卽ち大楚元年一月元日、今日は二日だ。新しく天下を握る者があれば紀元も亦改めなければならぬ。

虞姬 （腰元等に）では酒盛りを。

（腰元等、酒、盃を持ち來り、項王を始め、一同に注ぐ。）

使節 （祝盃を擧げながら）限りなき榮えを項王と大楚の御代にお祈り申し上げます。

項羽 いや。俺の事を項王と呼ぶ習ひは昨日以來變つた筈だ。以後は俺に對し、懷王や此處にゐる漢王と區別した稱號を用ひさせる。序禮を無にする事は亂れの基だ。よいか。（一同頭を下げる）いや俺は始皇のやうに皇帝の稱號に敬禮させやうと言ふのぢやない。俺にもし子孫が出來るならばそれ等は又自ら帝王にでも賤民にでも成るべきだ。

劉邦 私は大王と同時代に生れたと云ふ事を此上ない光榮であり、又幸福であると存じて居ります。

項羽 光榮であると云ふのは分る。幸福と思ふと云ふのは何う云ふ意味だな。

劉邦 もし英邁な大王が私の上にお居でにならなかつたならば私は今の時代をもつと與みし易く思つたでありませう。そして私の慾望の鋒先は鈍くされ、私は眞に自分の天命の頂上に自分を持ち上げる事なしに慢心の誘惑に打ち克つ事が困難であつたらうと存じます。

項羽 では俺がゐればそちはその頂上に自分を持ち上げられると云ふのだな。

張良 いや、それは只私の主人が到底大王の臣下以上の器に非ざる事を證する丈けの事で御座います。

項羽 ふむ。お前が張良か。いかにも俺は生れて以來頭の上にあの大空の外に何も戴いた事がない。自分の外に相手と云ふ者を持つた事のない淋しい王だ。だが俺の死後萬民は俺の事を何と云ふかな。張良。

張良 苟も萬民に追憶の力ある限り大王の事を想ひ乍らいかなる男も勇氣を失ひ、女々しくいじけ、或はだらける事が不可能になるで御座いませう。大王は恐るべき生の偶像となつて、永久に彼等の怯懦を誡められるで御座いませう。

（此時戸外何となく騷がしくなり、ざわめき立つ。）

使節等 何事でせう。

項羽 （滿足氣に）はゝ。暴動ではない。宴の餘興だ。

（項羽、體を後ろに振ぢり、劍の先にて幔幕を左右に開く。炎々として阿房宮の眞赤に燃えてゐるのが窓一面に見える。一同驚く。）

使節等 あれは阿房宮では御座いませんか。大變な事になりました。

項羽 （笑ひ乍ら）阿房宮は燒けてはならぬのか。他でもない、あれに火を放たせたのは此の項羽だ。俺は俺の殿

堂を新しく建立するために一度この地上を洗ひ淸めねばならぬ。俺の破壞は創造の爲だ。

使節　あの巨きな宮殿が燃え盡すには恐らく三ヶ月もかゝりませう。

鐘離昧　風が火の子を町の方に吹きつけて、全で火の雪が降つてゐるやうです。あれを造つた始皇帝に此壯觀を見せてやれないのが遺憾です。

項羽　眞の前に僞りの消え行く事は斯の如しだ。あの火があの皇宮を燒き盡すやうに俺はこの情熱を以て人生を燒き盡してやる。そして俺の燒かれる憂ひのない新たなる「生」の偶像はあの燒け跡の礎の上に立つのだ。其眞正な偶像を俺は庶民と共に禮拜するだらう。

英布　（窓際に行きて外を見る）人民共が泣き叫んで居ります。飛び火た、／＼と云つて騷いで居ります。

項羽　宮殿の近くに住む者には昨日から退去を命じてある。音樂をやれ。そしてあの蚊の鳴くやうなざわめきを消して了へ。

（音樂始まる。腰元等大きな皿に肉の料理を盛つたのを銘々持つて出て、又酒を注ぎて廻る。）

項羽　（昂奮して）あゝ音樂よ／＼。生命の焔よ。俺の內に力湧く時俺は汝の旋律を聽かない時はない。汝は俺の力の聲、情熱の響き、戀の歌だ。あゝ俺は常にその聲を聞き度い。汝が雷（いかづち）のやうに俺の內に鳴り響く時、天は地と合して燃え、地は天を抱いて燃え上るのだ。（劍を宙宇に振り廻し乍ら）おゝ力よ、力よ、力よ！　力は音樂だ！

虞姬　（やきもきし乍ら傍白）あゝ、又何をしていらつしやるのだ！　音樂をお聽きになるともう御自分の事に氣を奪はれて大事な用事も何も忘れてお了ひになる。（殷桃娘を認め）おや、金祥鳳、お前其處にゐたのだね。漢王にお酌をしてお上げ。

（殷桃娘、劉邦の前に進み出で盃に恭く僅か酒を注ぐ。次に項羽の處に行きて注ぐ。）

虞姬　（桃娘に）金祥鳳や。お前は此處へ來て妾を煽いでおくれ。妾は少しお酒にのぼせたやうだ。

桃娘　（わざと仰山に跪づいて）畏まつて候ふ。（虞姬を扇で煽ぎ乍ら傍白）此處に居れば却つて妾も働く事が出來ると云ふもの。

項羽　（肉を食ひ乍ら）お前は大分其小猫が氣に入りだな。

虞姬　每も戰場に出てゐる夫を持つ者は自分のわきに何か可愛い者を飼つておき度くなります。さあ妾の小猫や。これをおあがり。（自分の皿から肉片を取らせる）

（桃娘、猫の聲色をして食ひ、笑はせる。一同食らひ

つゝひそ〳〵と語り合ふ。人民の叫び聲。）

項羽　（不快になり）　は。馬鹿。――あの幕を閉ぢろ。（鐘離昧後ろの大いなる遮幕を閉づ）

范増　チェッ。どうしたのだ。彼奴はあんなに飲み乍ら未だ一向酔つてゐる樣子がない。（劉邦に向ひ）劉邦殿、貴方は咸陽の樣子はよく御承知の筈だが、市民は貴方の御入城をどんなに喜んでゐますか。そして大王の御入城をどんなに恐れてゐますか。

劉邦　貧の爲めに罪を犯さうとする者も大王の御名を思ふ爲にそれを敢てし得ない程で御座います。咸陽には今や酒を飲む者も稀になりました。酩酊の中につい大王の御名を口にする事を恐れるからで御座います。どの家庭にも今や高い笑ひ聲や、泣き聲は聞かれません。市街は寂として居ります。

項羽　（滿足氣に）　はゝ、いや、俺はいづれ俺の記念像の成つた祭典の日に彼等一同を其盛大な祝宴に招いて酒盛りの興に飽かしめてやるだらう。

虞姫　劉邦。貴方は大の酒豪だと云ふ事ではありませんか、近頃は餘程おつゝしみと見えますね。

劉邦　私が少し愼しみませんと部下の者が見習ひますで。

項羽　が今宵は俺が所望するぞ。劉邦及び其方達。わが妃の健在と其衰へざる美の爲めに飲んでくれ。

一同　（立ちて盃を擧げ）　我等が惠み深き女王の美と、その限りなき榮光との爲めに。（飲む）

張良　遲れながらお祝ひの品を獻げます。之は昔から天下の主たる者が神器として世々讓り傳へて參つた玉璽で、私の主劉邦が大王に獻じまする爲めに秦の三世皇帝から讓り受け、今日迄保管致して居たので御座います。（見事なる玉璽を持つて出る）

項羽　（それを手に取り、滿足の色を表はしつゝそれを見、それに七寶にて記したる字を讀む）「誇りは美なり。」ふむ此文句は氣に入つたぞ。して之を其方が取る心算でなく、預つて居たと云ふのか。

虞姫　（項羽に囁く）　そんなものは詰らないまやかしものです。お信じになつてはいけません。

項羽　（盃を手にしたまゝ振り返へる）　それはさうと劉邦、其方は先刻俺と同時代に生れた事を幸に思ふと云つたが、其同時代に生れた事の爲めにもし俺の犧牲となつたとしたらどうだ。それでも猶ほ其方はそれを幸だと思ふ事が出來るかな。

范增　左樣。大王と時を等しくする者は皆其覺悟を持つ上で幸福であると云ふ事が許されるのです。もし其覺悟なしにさう云ふ者があれば其奴は其代りに自分の自惚の罰を覺悟しなければなりません。

劉邦殿、何とお咎へなさる。

劉邦　私は何にも其様な事は考へませんでした。唯々大王の忠僕を以て任じて居ります私は、自分を大王のお邪魔になる程の者と自惚れてはをりません。

張良　(傍白のやうに)　どうやら世間の噂にも滿更聞き捨てにはならないものがあるやうに思はれて來たが、どうも私には合點が行かない。

范增　貴方は何を呟いて居られる。

張良　なに、私はまさかそんな事があらう筈はないと信じるので……。

范增　そんな事とは何ですか。

張良　實は世間の衆愚共の中には大王が此劉邦を內々怖れてお居での餘り、强ひて此人にありもせぬ罪を被せ、今晚の目出度い此の御祝ひの席に招くと云ふ僞りの口實の下に亡き者にされやうと云ふ御計略であるやうに申して居る者が……

項羽　何、俺が其方の主人を怖れて居る？　(笑ふ)　そして俺が劉邦を殺す爲めに僞りの口實を設ける必要があるのだと？

張良　いや、それ程衆愚と云ふ者は仕方のない阿呆で御座います。何を申すやら分りません。それ故私共は道にさう云つて私共を引き止めやうと致した氣違ひの馬鹿者共を懲らしめる爲めに咸陽中を引きずり廻し、此奴はこんな痴けた事を申しをつた氣違ひであると云ひふらせて市民共に笑はしめるやう伴の者に申しつけたやうな次第で……。

范增　はゝ、張良殿。なる程それなら貴方が合點が行かないのは御尤だ。殊に其氣違ひとやらの言葉を咸陽中にふれ廻はさせると云ふのは流石は貴方の思ひつき丈あつて、味方には效き目のある嚇かしのやうに見えますな。併しその衆愚とやら云ふのは實は本物の衆愚ではなくて、貴方の頭の中に居る衆愚の噂ではありませんかな。衆愚に寃罪を被せやうと云ふのは彼等を愛する貴方々にも似合はしからぬ遣り方ではありませんか。

張良　いや、私は今になつてこれらの噂に少々合點が行きかけて來た……と申すのは、私の主人がもしもう少し凡庸な小人物であつたら貴方々は恐らくこの劉邦に寃罪を被せる代りに、きつとその功勞のために賞與を賜はるであらうものをと私は申すに過ぎません。何故と申して我我が關中でなしたことは皆大王の御意を忠實に果したものであることは市民の末に至るまで……

范增　お待ちなさい。貴方は漢王が先きに關中に這入つて「忠實に果された」色々の功勞が大王の御認可を經たものでない事實を否定なさることが出來ますか。劉邦殿が無

斷に自らを漢王と呼ばせ、愚民の甘心をそゝる事に全力を盡されたのが何故であるかそれ位ゐの事が見透せない我々だと思つて居られるなら貴方々はよく／＼大王を見縊つて御座るか、さもなくば餘程の頓馬であらつしやると云ふ事になりますぞ。貴方々の隱れもない野心があんな子供瞞しのやうな玉璽の獻納を以つてまやかされ得る者と思つて居られるやうだと貴方もまだ／＼お若い。いや、よく／＼窮されたものですな。

項羽　默れ。其方が先觸れの身でありながら無斷に俺の威權を濫用し居つたからとて其麼なことを細々意に介する項羽と思ふか。子供は大人の刀を借りるとそれを持つて無暗に物を切つて見たがるものだ。俺は凡ての事實を知つて居る。俺が其方の主人を恐れて居るなどとは俺の誇りを突ついて劉邦を誅することを俺に恥ぢせしめやうと云ふ其方の殊勝な作り事だと云ふことも、其方の野心も、從つて俺に對する謀叛氣も、恐怖も、諛ふ心も、愚民に媚びる心も……。

劉邦　私は何物にも媚びるものではありません。諛ひは致しません。

項羽　只愛すると云ふのか。ふむ。だが若し果して諛はぬと云ふのが本當なら、其方は此上ない馬鹿者だ。俺の臣下である其方に取つて生きる事は俺に媚び諛ふことであるのを知らないのか。いや、俺はそれが其方達の運命であることを今此處で知らしめて遣らう。（かく言ひつゝ玉璽を蹴飛す。其の拍子に一方の鞜脫げて飛ぶ）さあ、その鞜を取つて俺に穿かせろ。漢王！

（一同啞然とす。劉邦默然として立ち、その鞜を取りて項羽の前に跪き其足に穿かす。）

項羽　其方の鬚は塵拂きには丁度よさ相だ。序でに塵を拭け！

（劉邦、躊躇して後、頤鬚を一寸其に當て袖にて塵を拭く。）

虞姬　（顏を背向けて）あんな事はなさらなくもいゝのに。

使節等　（顏を見合せて呟く）之はどうも恐ろしい事になつて來た。――漢王にどの樣な罪があるにした處で之を見せつけられる吾々もたまつたものではない。

項羽　はゝゝ。よく／＼其方は犬に生れついてゐるな。あの股をくゞつた韓信といゝ取組だ。之で其方にも自分が何者であるかゞよく分つたらう。下れ！　貴様を罰する事は俺の恥辱だ。

劉邦　（火の如く顏を赭らめ）確かに私は自分が何者であるか、今程それを知つた事はありません。此世の何者も私を辱しめ、私の神聖を穢かす事の出來ない事を今程感

じた事はありません。

項羽（凱歌を上げるやうに高笑して） どうだ、皆の者。漢王の怒つた面を見てやれ。あの眞赤な顔を。人間が其弱さの爲に如何に輕々しく一命を抛つか。……併し俺は今其方の怒つた顔を見るとどうやら其方が不憫になつて來たわい。俺は其方を助けてやり度いが、どうだな、劉邦、一つ其處で誓ひを立てる氣はないか。其方が關中でした事は悉く唯忠實に此俺の意に叶はんが爲めにした事で、其方の專斷でした事ではないと云ふ事を。

劉邦 …………

張良（劉邦に私語く） あんなことは唯殘酷な揶揄(からかひ)です。お誓ひなされ、早く。

范増（張良に） 漢王は貴方よりも正直な御性分ぢやで嘘の誓言がお出來なさらぬのだ。して漢王がお答へに窮して居られる處を見ると之はいよ／＼……、隱れもない恐るべき謀叛。（張良等が何か云はんとするのを制して）いや、もう辯解は御無用。沈默は一つの答へだ。（使節等に）いかに、皆さん。漢王は自ら大王に不節なる事を告白されました。して見れば既に散々血を流して來た吾々は今又此一人の叛逆者のためにむざ／＼何萬と云ふ無辜の血を更に流さなければなりますまいか。いや、吾々は今そんな事をしてゐられる時ではない。しかるに漢王にとつては恐らく今が花の散らし時であらうと云ふのは、今大王の御手にふれて斃れなされたら或は貴方の云はるる通り、漢王は大王に怖れられてと云ふ僞りの名譽を被られる事も出來ませうし、人民の惜しがり方も大きなものでせう。が憖じ此場を助かつて空しく西域の雪の中にでも朽ち果てられて見なされ、誰も漢王を惜しむ者はありますまい。

虞姫（昂奮し悶えて旁白） まあ、何といふ長たらしい毒吐(つ)き方だ！ あゝ、あの男を見ない今先刻(さつき)迄此胸の中に沸(たぎ)つてゐたあの不安な殺意は何處へ行つたやら。何ぼ何でも之はあまりだ。妾はあの正直者の生首が此處へごろごろと轉ろがり、眼の前にあの男の血がむざ／＼流されるのを見てはゐられない。あゝ此溫和しい男がそんなに恐ろしい敵なのだらうか。（突然杯を落して失神の樣を裝ふ）

項羽（驚き） 之はどうしたのだ。虞姫！（癇癪を起して）誰か水を！ 早く！ 妃を……

虞姫（少し頭を上げ） 少し氣分が惡う御座います。氣晴らしに貴方のお好きな音樂をやらせて下さい。

（音樂始まる。范增ヤキモキして幕の裏にゐる項莊を呼び出す。）

項莊（進み出でて） お慰みに無骨な藝を御覽に入れます。

（短劍を拔いて舞ふ。劉邦の方に近づきて機あらば劉邦を刺し殺さんとす）
殷桃娘　（起ち上り）舞も一人では物足りなう御座います。私が相手になつて與を添へませう。（項莊に）さあ私は蝶々ですぞ。貴方は私を追つかけるんです。
　桃娘は燭臺の間を縫ひて舞ひ乍ら巧みに項莊を操る。項莊止むなく彼女を追ふ。彼女は斯くして項莊が劉邦に近寄る時は劉邦と項莊との間に踊り入りては自然に項莊の邪魔をし、劉邦を防ぐ。かくて幾度も危ふくなり乍ら項莊は劉邦を刺す事能はず。此時張良トンと床を踏めば背後よりサツと幕を開きて樊噲現はる。一同其威に怕れをなす。
項羽　何者だ！
樊噲　（項羽を睨みつけ）主の爲めに萬死を辭しない者であります。
項羽　主は一人よりない。殊勝な奴だ。
樊噲　私の主人は漢王の外にはないのです。
項羽　（威壓するやうに）何？　誰の前と思ふ。引き退れ！
樊噲　漢王の御身が安全になられる迄は天地が碎けやうとも私は一歩も此場所を退く事は出來ません。
張良　（なだめるやうに）いや、大王が漢王の主であらせられる上は漢王の臣は即ち大王の臣であります。之は樊噲と申す劉邦の護衛の者で、並外れて力の強い外に別に取り柄と云つてない無骨者でありますが、唯正直と命知らずの點で誰にも負けない事を誇りにしてをります。無作法の點は何卒御見逃し下さい。（樊噲を眼で制す）
樊噲　私は武勇の爲めに仲間の尊敬をうけてゐた者ですが、こんな冷遇を受けた事は始めてゞす。先刻から未だ一滴の酒も頂戴しません。
項羽　（笑つて）近頃面白い奴だ。（腰元等に）酒を注いでやれ。諛ひに飽きてゐる俺は却つて其方の無遠慮が氣に入つたぞ。
　（腰元等樊噲に酒を注ぐ。此時又も民衆のわめき聲聞こえ、「劉邦を返へせ。漢王を返へせ。」と呼ぶ。一人の家來慌てゝ登場す。）
家來　大變で御座います。飛び火の爲に諸所に火災が起り、咸陽は一面の火となりました。民衆は氣違ひの樣になつて營門に闖入して參り、「火を消し止めろ。否れば漢王を返へせ。」と叫んで動きません。
英布　屹度何者かの爲業です。此風を口實にして飛び火と僞り、實は放火をしたのでせう。
鐘　成る程。そして大王が此咸陽全市を燒き打たれたと云ひふらすのかも知れませんね。

范增　（齒嚙みをして）　もしさうだとすると其放火をさせて愚民を煽動してゐる者は多分あの韓信の外にあらうとは思はれません。あの男は普段から自分の地位に不滿を抱いてをりました。

虞姬　屹度それに違ひありません。（項羽に）　貴方、では今宵は一先づ劉邦を赦してやつて、其代りにあれをお打たせになつたら宜しくはありませんか。妾はひどく疲れました。

范增　いや、韓信は漢王の代りにはなりません。な。張良殿。

項羽　同じ者だ。豚の好な物を豚にやれ！　あゝ俺は此室の騷がしい空氣に厭きた。今玆で穢はしい血を見る氣にもなれぬわい。（虞姬を擁しつゝ立ち上り使節等に）　其方達はもう退つても宜しい。此會は之で終りだ。劉邦、其方も今日は歸してやる。其方は死罪に値するが、最大の輕蔑は寬大である。だが其方が此關中に居る事は今夜限りだぞ。明朝は早速覇上を立ち退いて、俺が再び其方を呼び出す時迄あの巴蜀の山中に引き籠り、謹愼して居るのだ。よいか。さあ、こんな物は返してやる。持つて行け。（先刻の玉璽を劉邦の方に蹴りやる。一同起立して頭を下げてゐる中項羽は虞姬を擁しつゝ奥へ退場す。腰元等從ふ。殷桃娘は踊り乍ら何時の間にか姿をかくす。）

張良　さあ、もう十二分に醉はせて頂きました。失禮な振舞でも致さぬ中に退出を許して頂きませう。

使節等　偶然にも私達は今晚芝居以上の芝居を拜見させて頂いて手に汗を握りました。しかしまあ無事に事濟みまして誠にお芽出度う存じます。（夫々禮をして去る）

范增　（劉邦等に）　貴方々は一寸お待ち下され。市中のあの混雜で詰らぬお怪我でもあつてはならん。武士共に其處迄お送り致させませう。（項莊に眼くばせする。數人の武士現はる）

樊噲　はゝ、もうそんな見え透いた嘘をお吐きなさらぬでもいゝでせう。私等の主人は折もあれ態々あの諸國の使節等の面前で死罪にも勝る侮辱を受けたのです。それでも未だ飽き足らないと云ふのですか。（脅かすやうに）御心配は御無用です。伴には此樊噲が附いてゐます。もし一寸でも私の主人に危害を加へる意志の者でもゐましたら何人でも私一人でたゝ斬つてやります。（張良に眼くばせする。張良素早く劉邦を引き立て乍ら急ぎ去る。樊噲は拔劍の儘室中を睨め廻はし悠々と後より退場。武士等其威に怖れて近よる事を得ず。呆然と後を見送る）

范增　あゝ、天下の運命は之で定まつた！　大王は彼奴を巴蜀に追放すれば、それでもうすつかり彼を葬つたものと安心して居られるが、わしはもう働く甲斐もない。凡

ては水の泡だ。（劉邦の飲みし盃を床にたゝきつけて微塵に砕く）

英布　どうもあの金祥鳳と云ふ小僧が曲者ですよ。彼奴が變な邪魔をした許りにすつかり計畫が狂つて了つたのです。

項莊（口惜しがり）眞個（まつたく）です。あの小僧が一緒に踊らなかつたら私は樂に彼奴を刺し殺す事が出來たんです。（武士に）あの小僧を探して早く此處へ連れて來て呉れ玉へ。

（武士等退場。）

范增　劉邦を守つてゐる者は彼奴ではない。又張良でも樊噲でもない。天だ。人間には克てるが天には克てない。かうなつた上はせめて韓信でも身代りに立てる外はないが、今更韓信を殺した處で此勢ひが輓回出來るものとは思へない。あゝ之からわしは味方の降り坂を見なければならないのだ。（絶望して椅子にくづをれる）

（人民の騒ぐ聲。）

――幕――

第二場　韓信の館

見すぼらしき室。壁には兜、劍などかけあり。室は暗く、只窓より遠くの火事によりて薄赧き光線さし居る。一人の負傷せる男寢臺の上に横へられ、韓信はそれに水、干し飯などを與へ居る。遠く警鐘の音時々聞こえる。

男　貴方の忍耐力には皆んな感心してゐるでせう。

韓信　輕蔑を以て。だが俺はそんな事は構はない。俺は忍耐の苦しみは嫌ひぢやないのだ。俺は世間と云ふ世間が皆俺を笑ひ者以上には認めてゐない事はよく知つてゐる。俺は奴等の忍ぶ事の出來ない辱を忍へる丈の自信があつたから。だから俺は自分のした事を後悔はしない。何故と云つて俺が後悔すれば俺は自分を侮辱した奴等に實際侮辱された事になるのだからね。俺はもういゝ齢をしてゐる。光陰は矢のやうに飛んで行く。そして僕は未だ項羽の足にくゝりつけられてゐる哀れな執戟郎に過ぎないのだ。何時になつたら此運が開けるのか。だが俺は絶望に負けはしない。焦慮（あせ）る事に負けはしない。

男　貴方は本當に強い人です。大抵の者なら貴方の今迄の苦勞で大方へこたれて了ふかひねくれてねじけ死んで了つたでせう。

韓信　いや、希望さへ持てれば、俺はもつと苦勞が來て呉れてもいゝと思つてゐる。俺は何時も果てしない闇が自分の行手をとざす時、俺は今天の試めしに遭つてゐるのだ。負けてはならないと思ひ思ひして來たんだ。が、今

日ばかりは流石の俺ももう耐らなくなつて逃げ出すやうに表へ飛び出して見ると此火事で、圖らずも倒れてゐる君と云ふ人にぶつかつたんだ。で、俺は君を抱きかゝへて兎に角此處へ連れては來たものの、扨て何うする事も出來ない仕末だ。

男　此上なほそんな事を貴方に云はれては却つて私を苦しめる丈だと思つて下さい。實は私は此咸陽へ嫁を取りに來たのでした。しかし其女はある理由で私を輕蔑して嫌つたものですから私は仕方なしに國へ歸らうとした途中で此火に出遭ひ、火に包まれてゐた家の中から親子の者を救ひ出さうとして梯子から墜ちたんです。

韓信（歩き乍ら）其女は何うして君を嫌つたのだね。

男　私は趙の國に仕へてゐる者ですが、實は匈奴の血を受けてゐるからなのです。匈奴のやうに狡猾で血を好む杯と云ふ言葉さへある程ですから。併し匈奴には始皇帝や項羽のやうな暴君はゐません。そして項羽は今や中國を平らげたので今度は私等の祖先の領土へ手を延ばして罪もない民族を亡ぼさうとしてゐるのです。

（警鐘の音近くなる。韓信は窓をあけて見る。外は赤い。）

男（嘆息して）あゝ、あの聲、可哀相な女や子供達が火の海の中に逃げ惑ひうろたへて叫ぶあの聲。聞く處によると項羽がこんな火事を起したのは何でもあの宮殿へ入つて見て、野蠻地育ちの彼奴はその豫想外な快樂の魅力に方途もない其自惚を打ち砕かれたのが業腹たつたからだと云ふ事ではありませんか。

韓信　それに、彼奴は何でも人が貴ぶ物を踏み躙る事が好きなんだ。だが君は餘り興奮してはいけない。氣分をおちつけて少し眠つたらどうだ。

男　では少し休ませて頂きます。お蔭げで今になつて疲れが出て來ました。（夷狄の仕方にて天を禮拜して眠る）

（韓信は又彼方此方歩き、頭をふりて溜息をつき壁より劍を取りて腰を卸ろし、劍を拔きてその錆を眺めて居る。急にピシヤッとそれを鞘に收めて壁にかけ、窓に面せる椅に凭れて兩手に顏を埋めて突伏す。警鐘の音。此時外より速き馬蹄の音聞こえ、やがて韓信の家の前にてパタリと止む。韓信耳を欹つ。扉を叩く音。）

韓信（立ち上り）誰だ。

殷桃娘（眞赤な光線と共に息を切らし乍ら入り來る）御免下さい。妾です。

韓信（よく判らず凝視して）お前はあの何とか云ふ少年ぢやないか。

桃娘　貴方はもう妾の聲をお忘れになつたのですか。貴方迄があの少年を本當の少年だと思つていらしつたのです

か。

韓信　（驚き一歩後に退き）　いや、私は日外庭苑で腰元等と一緒に戯れてゐる貴女を遠くから一眼見た時直ぐ「貴方」を感じたのでした。併し後ではそれが私の迷ひだらうと思つてゐた。たつた今私にはそれが分つたけれど、貴女の口からその言葉を聞き度かつたのだ。

桃娘　（少年の装を脱いで女になる）　韓信様……。（涙乍らに韓信の手にすがる）

韓信　殷桃娘、貴女はどうして此處へ……

桃娘　妾は貴方をお救ひに參つたのです。

韓信　救ひに？

桃娘　貴方は早く此處をお逃げにならなければいけません。項羽は貴方を殺さうとしてゐます。

韓信　何、項羽が私を殺す？

桃娘　項羽は今晩劉邦を呼んで殺す心算だつたのです。併し殺す事が出來なかつたもので其代りに貴方を殺す事にしたのです。あの范増の入れ智慧で、此咸陽を燒き打ちしたものは貴方だと云つて。

韓信　（脣をかみ）　俺は何時かそんな時が來相な氣がしてはゐたのだ。（拳を握り）あゝ今こそ俺は奴との惡縁を斷ち切るぞ。俺は俺の運命を踏み潰ぶさうとした奴に恩を返へす義務はないのだ。（兜を取りて楚の臣下であると云ふ印しの靑い毛總を劍にて斷ち切り、その毛總を床に踏みつける）さあ、之で俺はもう自由の體だ。（殷桃娘の手を摑み）そして貴女は私を闇の牢獄から解放して吳れた自由の天使だ。わが運命が憧れてゐた戀人だ。（桃娘を抱かうとする）

桃娘　（逃げて）　待つて下さい。貴方は未だ妾に觸はつてはならないのです。（すゝり泣く）

韓信　どうしたのです！

桃娘　妾は人殺しです……。

韓信　貴女が人を殺した？　いや、天下に人殺しでない者は一人もない。貴女はそんな事を云つて幾人人を殺したか知れない私に當てつけてゐるのですか。

桃娘　そればかりではないのです……（泣く）妾は……妾は呪はれてゐるのです。

韓信　今時呪はれてゐない者は珍らしい。では誰かゞ貴女を蹂み躙つたと云ふのですか。穢がしたとでも云ふのですか。そんな事を訊くのも堪らないが。

桃娘　みんな貴方の爲めです。貴方と一緒になり度い爲めに……。

韓信　私の爲めに！　泣いてはいけません。さあ早く云つて下さい。貴女が殺した奴が貴女を穢がしたと云ふのですか。え？　そしてそれは誰です。

桃娘　項梁です。

韓信　何、項梁？　彼奴はあの甥に殺されたのではありませんか。

桃娘　さう云ふ事になつてゐます。しかしさうではないのです。項羽は妾が殺した死骸を知らずに斬らせたんです。

韓信　……、そ、そして彼奴がどうして貴女を穢がしたんだ。

桃娘　妾はあの男の係蹄にかゝつて陣へ入ると直ぐあの男に捕まつて了つたのです。妾は父と自分との仇を報いる爲めに項羽とあの男とを殺す心算(つもり)だつたのです。併しあの男は妾の計畫を見拔いて妾の胸から懷劍を奪つて了ひました。そして妾はあの男に無理に引張られて……あの男の寢部屋に連れて行かれました。

韓信　あゝ……

桃娘　あの男は妾に項羽を殺せと云ふのです。そして妾が項羽を殺したら妾を自分の妃にすると云ふのです。妾はあの男の暴力には叶ひませんでした。そして妾はあの男が妾をねぢ伏せて獸のやうな接吻を迫つた時其舌を噛み切つてやつたのです。

韓信　何と云ふ話だ！

桃娘　そして丁度妾がその忌はしい寢部屋を逃げ出すと同時に幕の後ろから澤山の槍があの男の死にかゝつてゐる體を突き刺したんです。

韓信　あゝ、何故その槍がもう一刻早くあの獸の體を刺して吳れなかつたのだ！　だがそれにしても貴女はどうして今迄彼處に留まつてゐられたのです。

桃娘　妾はそれから夢中で妾を驅り立てた劉邦の奧方の處へ逃げて行きました。併し奧方は妾を家の中へは入れさせないのです。そして妾は未だ其恐ろしい夜が明けきらない中に又も虞美人のゐる方の館へ驅り立てられて行つたのです。妾はもう破れかぶれでした。自分の正體があばかれるものならあばかれろと思つてゐました。併し妾にどうして項羽に近づく力があつたでせう。あれは本當に怖ろしい鬼です。人を脅かし乍ら牽きつける不思議な魔力を持つてゐます。

韓信　あゝ、俺は何と云つていゝのか分らない。貴女に禮を云はなければならないのか、自分にくやみを云はなければならないのか……

桃娘　さあ、貴方、妾をどうにでもなさり度いやうになさつて下さい。妾はもう貴方の前に凡てを明かして了ひました。しかし此事だけは信じて下さい。もし貴方に逢へると云ふ望みがなかつたら、妾には迚も二度とあの忌はしい命賭けの魔窟に踏み込む勇氣はなかつたでせう。

韓信　おゝ、本當に有り難う！　貴女は來るべき時に來て、

私を救つて呉れたのだ。見ろ、天は俺を見捨てはしなかつたのだ。(飛びかゝるやうに桃娘を抱きしめる。暫く無言。赤い光線の中に桃娘の顏をまじ／＼と見乍ら）それにしても貴女はまあ何と云ふ變り方だ。窶れ方だ。僅か三年の中に。貴女の顏を見ると運命が實に不安の狀態にゐる事がまざ／＼と分る。(ある苦痛を以て）だが貴女は矢張り美しい。稻妻に照らされた花のやうに。勇敢な貴女も私に逢つたので急に氣が挫けて了つたのですね。だがさう云ふのは痛々しいがもう少し勇氣を振ひ起してゐて下さい。私達は今氣を落してゐては大變だ。出來るだけ心の弦を張りつめてゐなければならない。私達は未だやつと一つ關門の前で落ち合つたに過ぎない。門は開け放たれた。だがそれは先きに控へてゐる待ち伏せを吾吾に喰はせる爲めかも知れない。しつかり私にからみついていらつしやい。私達が此關門を無事に通り拔けて、私が貴女の運命から其不安を悉く追ひ拂つて了ふ迄。いや、その義務を思ふと私の勇氣は百倍する。

桃娘　妾だつた貴方を危險からお救ひする迄は倒れる事が出來ませんわ。(眠れる男に氣がつき）彼處にゐるのは誰ですの。

韓信　あれは私の救つた韃靼人だ。あれは項羽を呪つてゐる吾々の味方です。

男　(起き上り）御免下さい。私は貴方々の會話を殘らず伺つて了ひました。併し私をお信じ下さい。私は李左車と云ふ者ですがどうか私の生涯を貴方々の事業に結びつけさせて下さい。貴方々と天命を與にする事によつて私は私の同胞を項羽の災ひから妨ぐ事が出來るのです。どうか私をお連れ下さい。

韓信　(素早く劍を佩き、用意をなす）よし、では早く逃げやう。追つ手の來ない中に。だが厩には私の馬が一頭しかゐない。

桃娘　妾の乘つて來た馬がゐます。あの英布が自慢にしてゐる黑龍と云ふ名馬を盜んで來たのです。

韓信　有り難い。(男に）ではそれに君が乘る事にして貴方と私とが私の馬に乘らう。

男　しかし何處へ。

桃娘　蜀の棧道の方へ逃げませう。そして咸陽を逐はれて其方へ逃げて來る劉邦を待ち受けてゐませう。

韓信　さうだ。漢王こそ吾々の主人だ。私は前からあの人を慕つてゐた。漢王によつて吾々は十分に翼を伸ばす事が出來、又暴虐を滅ぼす事も出來るだらう。(男に）併し君は私等と此處を逃げる事が出來るか。

男　貴方の愛によつて私の力は蘇生しました。此通り私はもう立つてゐます。(立ち上る）

桃娘　では、急ぎませう。一刻も猶豫してはゐられません。
韓信　さあ、私が腕を貸さう。もう何が來たつて敗けはしないぞ。
（韓信は男か右手に擁し、殷桃娘を左手に擁して、急ぎ退場す。）

――幕――

第四幕

第一場　洛水に臨める項羽の館

高き樓臺の上。舞臺の左手には雄大なる秋の風景を見渡す。正面奥は項羽の寢室の戸口になり、右手は奥の廊下に通ず。方々裂けた項羽の軍旗が樹てかけてある。虞姬は欄干の傍に腰をかけて腰元に髪を梳かせてゐる。卓子の上に果物の盛りたる器あり。

腰元　本當にお妃樣の御心勞はお察し申して居ります。
虞姬　妾の苦勞を察して呉れるものはお前一人だ。王妃になつてから以來妾は唯の一日も心の安まつた日はないのだ。天下は平らげられたやうなもの丶それは上べ許りで、人民の心は未だ妾達に反いてゐる。妾達を恨み、呪つてゐるやうな氣さへする。諸侯は只此方の力を怖れてゐる許りに旗こそ舉げずにゐるけれど、妾達の力が一寸でも衰へやうものなら明日にも牙をむき出して蜂のやうに起つて來るに違ひない。そして天下は前よりは又一層血腥く亂れて恐ろしいものになるのだ。
腰元　屹度大王の御威勢が餘りにお強いので皆は嫉むでゐるので御座いますよ。本當に嫉み程淺間しい物は御座いませんね。
虞姬　あれ等の中にだつて少しは公明な善い人間もゐるのだらうけれど、一寸見渡した處では天下は息苦しい程怨みやら、惡計みの毒氣に充ちてゐるとしか思へないね。妾はつく〴〵人民の心の猜み深いのが厭になつて了ふよ。ね、お前、かうして高殿へ出て廣々した閒濶な大氣を吸ふとまあ何んと好い氣持ぢやないか。え?
腰元　本當に皆は馬鹿で厶いますわね。眼先きの小さな利慾に許りあくせくしてゐるので、大きな幸福なんぞ考へる餘裕も力もないので御座いますね。
虞姬　あゝ幸福。思へば妾もあの頃は本當に幸福だつたよ。あの塗山の賤が家で月の好い晩なんぞに妾の親切な養父と一緒に圓窓のわきに腰をかけて戰爭の話抔をし乍らあの方の入らつしやるのを待つたゐた頃は。今思へばあのぞく〴〵するやうな胸騷ぎで未來の幸福を夢みてゐたあの頃の方がそれが事實となつた今よりずつと幸せだつたのだ。なぜと云つて妾はあの時分未だ愛と云ふもの丶外

は何も知らなかつたのだからね。

腰元　妾の死んだ父がこんな事を申しました。幸福と云ふものは鬼火のやうなもので前にゐるかと思ふと後ろに見える。それが自分の處に來てゐる時には人は氣がつかない。併し手の屆かない先きにあると美しく見えるのだつて。それでもお妃のやうな方が未だ幸福でない抔と被仰つたら天下に幸福な者は一人もない事になつて了ひます。

虞姬　妾は幸福でない抔と云ふのではないよ。あの方は昔に變らず妾を愛してゐて下さるし、妾は又あの方を……（項羽の夢に魘されてゐる聲物淒く聞こゆ）あゝあの方は又魘されていらつしやる。（額に掌をあてる）

腰元　お眼覺しになりましてはお惡いので御座いますか。

虞姬　あの方は近頃劍の束を把らずにはお眠みにならないのだ。そして何か惡い夢にお襲はれるになるとうつゝで劍を振り廻していらしやる事なぞがあるのだよ。

腰元　妾は大王が吉いお夢を御覽になる事を祈つてをります。本當に夢一つでも大王が御覽になれば天下の運命にも係はるので御座いますからね。

虞姬　ではお前はもう彼方へ下つてゐてお吳れ。もうお眼覺めになつたに違ひない。あの方は直き此處へ出て入らつしやるだらう。あの方は妾のわきにゐて妾に何かとあたつていらつしやれば一番お氣が樂なんだからね。妾は迎へに行かない方がいゝ。此處に一人でゐて鏡でも見てゐよう。

腰元　では御免を蒙ります。（去る）

（虞姬。一人鏡を見てゐる。）

項羽　（豹の革衣を着、顏蒼褪め、下の言葉を呟き乍ら奧より出て來る）それが出來るものなら……さうして見るがいゝ。遠慮なくして見るがいゝ。もしさうなつたら俺は負けたんだ。俺は斷じて負けた時に勝つたとは云はぬ。しかし勝つてゐる時に負けたとは云はない。（グツタリ腰を卸ろす）

虞姬　（近より）貴方お好きな葡萄を召上りませんか。

項羽　茶を吳れ。（又呟く）もし貴樣等が嘘吐きでないと云ふなら俺が嘘吐きになる。しかし俺が嘘吐きでないなら貴樣等が嘘吐きなんだぞ。

虞姬　もし貴方が嘘吐きでないならなんてそんな事を苟も大王たる貴方が被仰るんですか。

項羽　さうだ。俺は大王だ。だから俺は安心して態とそんな冗談が云ひ度くなるのだ。はゝ、愉快ぢやないか。今迄俺に曖昧な好意を見せてゐた諸侯ももうそれを見せる事は出來なくなつた。俺は奴等の爲度くて出來ずにゐる理想を思ふが儘に實現してゐるのだからな。奴等は俺に

何かとケチを附けずにはゐられなくなつた。だがもしそれで奴等が俺に爪の垢程の淋しさでも與へ得ると思つたら、此位笑止な事はない。俺は征服の何よりの證據を見てゐるのだからな。俺を嫉む蛆蟲共よ、遠くから出來る丈け態とらしい無頓着を見せるがいゝ。俺の後ろに廻つて唾を吐くがいゝ。俺は只笑ふ許りだ。（大きな聲で）ははゝゝ。

虞姬　（項羽の言葉の間に自ら茶を入れて項羽にすゝむ）それはもし私達が自分の唾を浴びるのを構はなければ、太陽に向つて唾を吐く事だつて出來ますわ。でも太陽は笑つてそれを見逃すでせう。

項羽　そして又見逃してやると云ふ事は王者の法則だ。（急に鋭く）だがお前は劉邦を怖れてゐるのだらう。

虞姬　（ドキッとして）まあ、何を被仰るのです。何んで妾があんな幾度も殺せる處をゆるして態と逃がしてやつたやうな者を怖れる譯がありませう。

項羽　はゝ、お前は馬鹿だからな。處で俺は今こんな夢を見たのだ。俺が一人の亡者の頭を此處から（欄干の外を指し）下へグン／＼と抑へつけてやると其奴は浮標（うき）のやうに死の谷に沈んで行く。此城壁の下は底知れぬ闇にとざされた死の谷になつてゐるのだ。と、又見覺えのある顏が闇の中から禿頭を擡げてふわ／＼浮き上つて來る。それは俺が何時か其奴が餘り弱つてゐた時憐れみの心からお世辭を云つて勵ましてやつた爲めにつけ上つて俺の上に立たうとしたので、俺が又踏み潰ぶしてやつた恩知らずだつた。で、俺は其奴を（手眞似をして）かう突き落してやる。すると今度は三つも四つも同じやうな禿頭がふわ／＼浮き上つて來る。俺は片つ端からそれをグイグイ下へ押しつけてやると仕舞ひには數知れぬ頭が浮き上つて來て、「項羽、貴樣の力では俺達は押へられないぞ。押へられないぞ。」と、かう云ふんだ。ふん。

虞姬　昔ある金持が下男に金を盜まれる夢を見て、それが怖ろしさにある丈けの大金を持つて家を逃げ出した處が道で追盜（おいはぎ）に逢つてすつかりそれを取られて了つたと云ふ話がありますわね。

項羽　まあ夢と云ふ奴はそんな物さ。だから俺は大きな聲をして其亡者共を笑ひ消してやつた。すると今度は其亡者共の落ちぶれた遺族が如何にも哀れ氣な姿でこんな事を云ひ乍ら果てしもなく行列して行くんだ。「秦は十五年にして亡んだ。だがお前は五年にして亡びるだらう。」だと。（淋し氣に笑ふ）

虞姬　（笑つて）本當に貴方は病氣をして休んでいらつしやると全で貴方ではいらつしやらなくなるんですのね。丁度火が燃えてゐる間丈け火であるやうに、貴方は力に

充ちて闘つていらつしやる時に丈け貴方なんですわ。
項羽　俺は彼等の事を思ひ過ぎる。勿論俺にはよく解つてゐるさ。奴等は獅子の威に怖れてその力を身に感じれば感じる程それを暴力にして、その額に暴君の烙印を捺したがる負け惜しみの強い狐共だと云ふ事は。
虞姫　しかし何と云つたつて貴方はもうすつかり征服してお了ひになつたのですから、今更そんな詰らない事をお氣にかけるのは馬鹿氣てゐますわ。どうせ嫉まれる者は嫉む者よりは幸です。そして幸福な者は賤しい者を嫉ませまいとする事は出來ませんわ。
項羽　（寂しさを抑へて）だから俺は奴等を憐れむでゐるぢやないか。しかしそれは奴等に通じないのだ。全で通じないのだ。
虞姫　しかしそれなら妾達は又王者だけの淋しい寛大さを以て、その運命を忍ばうではありませんか。
項羽　ほゝ笑み乍ら。（間）俺は生れ乍らにして強い翼を與へられた。俺はそれを振はない譯に行かなかつた。そしてそれを振へば俺は否でも高く飛ばない譯に行かなかつた。が、その卓越が俺の禍になつたのだ。はゝ。
虞姫　誇るべき禍ですわ。しかしまあ一寸彼處を御覽遊ばせ。あんなに澤山の鴉が妾達を祝福するやうに舞つてゐるではありませんか。

項羽　（垂れたる頭を擡げ）何が俺を祝福し得るのだ。お前にはあの哀れな啼き聲がそんな風に聞こえるのか。
虞姫　あれは芽出度い鳥です。しかし矢張り高く飛び過ぎてゐる爲めにあんな淋しい聲を出すのでせう。
項羽　見ろ。あれ等は皆北の方へ飛んで行くぢやないか。巴蜀の方へ。俺は奴等を射落して呉れやう。（弓を取らうとする）
虞姫　お止し遊ばせ。貴方が天下をお取りになつたのは矢張り貴方が何かに祝福されていらしつたからです。貴方は其祝福を傷けるやうな事をなさつてはいけません。
項羽　だがその祝福も俺を怖れて逃げて行くぢやないか。（弓に矢をつがへて鶴の方を射る）はあ、一羽奴に中つた。突き刺さつた矢の苦しみにもがき乍らくるくると墜ちて行くわい。（虞姫は溜息を吐きて横を向く）どうだ、綺麗ぢやないか。白い羽が青空の中で蓮の花瓣のやうに散つてゐる。
虞姫　外の者は恨めし相に啼き乍ら急いで逃げて行つて了ひますわね。
項羽　（又グッタリ弓を投げ捨て）皆行つて了へ。逃げて行け。俺は一人で居度いのだ。强者は已れ以外の者から祝福を受ける事を恥ぢる。（間）お前は淋し相な顏をしてゐるな。

虞姫　妾は幸福過ぎるからですわ。
項羽　（反抗的に）さうだ。俺達は幸福だ。孤獨な日月のやうな幸福だ。
虞姫　此處は寒う御座いますわね。
項羽　高いからだ。
（間。范增登場。）
范增　（禮をして）申し上げます。久々の小手しらべに丁度いゝやうな事件が一つ起りました。
項羽　何だ。
范增　豫期通り趙が反旗を飜しました。
項羽　誰か煽動てたな。彼處は嗄國だから逆上せ性な奴は兎角氣が狂ふのだ。煽動てられるやうに出來た國だ。
范增　これには明かに黑幕が見えます。御承知の通り、趙王があんな風であるのにつけ込んで、劉邦が遁がしてやつた亡秦の廢王は力を併せて折もあらば再興を計る心算で早くから彼處に身を忍ばせてをりました。それを今度あの奸佞な張良が煽動したものと見えます。そして表面では秦の二世皇帝が趙と聯合して反旗を舉げたと云ふ事にしてゐるので御座います。
項羽　そして今頃俺に二世皇帝の弑逆者と云ふ名を附けさせやうと云ふのか。野呂馬奴が。
范增　それも一つの策であるに相違御座いません。しかし主もなる策はさうして味方の軍勢の大部分を遥々趙の方へ引きつけ、少しでも味方の兵力を趙との合戰によつてけづらせておいて、其留守に韓信を大將とした漢の軍をそつと乘り出させやうと云ふ肚に定まつて居ります。
項羽　（笑つて）あの山の奥から、山猿の軍勢でもくり出さうと云ふのか。
范增　併し碎かれた種子も芥溜の中で芽をふきます。彼等はあの蜀の棧道を燒き打ちました。それで中國との公けな通路は全く塞がれて了ひました。併しそれは云ふ迄もなく、此方に油斷をさせやうと云ふ肚と、一つには又さうして漢の軍勢をして劉邦を捨てゝ故郷へ歸らうとする心を斷念させる策に出たもので御座いませう。それで彼等從者は皆劉邦と生死を共にするより外はないとあきらめねばならなくなつたので御座います。今度彼等があの人氣もない巴蜀から出て來る時には牢獄から自由な天地へ解き放された者のやうな意氣組みと、竊かに蓄へた力とを以て逆るやうに突き進んで來る事かと思ひます。
虞姫　では彼等が拔け出る道はあるのだね。それを喰ひ止めるいゝ考へはないのかえ？
范增　いえ、それは向うがさう云ふ手に出て來るからには、此方が其裏をかく手段はいくらでもあります。趙の方に大軍を出すやうに見せておいて、主力を竊かに蜀の國境

へ廻はしておけばそれでもよし、又あの故郷にゐる劉邦の一族を人質に捕へておく事も有效な一策で御座ます。

虞姫　何、人質に。

范増　と云ふより單に幽閉しておくので御座います。あの呂妃と云ふ劉邦の妻は浮身をやつして絕えず諸所方々に隱見出沒しては種々な奸策を廻してをります。あの金祥鳳と云ふ僞りの小僧も全く奸智に長けたあの女の手一つに操られてゐたので、それに早く氣のつかなかつた私達の手ぬかりの爲めに味方の受けた損害は御承知の通りです。過ぎ去つた事は致し方がないとしても、小事も疎かにすれば大害の原になります。之からは同じ失策を繰り返へすやうな禍の種子を放つておく必要は御ざいません。

虞姫　しかしどうしてその蛇を捕まへる事が出來るだらう。

范増　譯はありません。あの女の子供は劉邦の母親と一緒にあの故郷の豐沛に殘つてをります。それを捕まへさへすればあの毒蛇を捕へる事は小鳥の巢を取つて親鳥を捕まへるよりも容易い事で御います。

項羽　（欠伸をして）　どうだ。欠伸をしても涙が出ると云ふのは今の世では憨みの涙は欠伸に過ぎないと云ふいゝ暗號ではないか。（自分の軍旗を執つてながめ、撫でる）どうだ。この埃りの溜つたことは。お前は又血に飢ゑて來たな。お前がその埃りだらけの面で欠伸をしてゐる間に俺の血は溜つて腐り、體は此樣に肥滿病になつた。奴等は俺を人食鬼のやうに呼んでゐるが、實際の俺は猶ほ遙かに血に飢ゑてゐる。あらゆる安價主義の中に此世の天井を高くする爲めの鬼として生れた俺は、奴等が人情とか云ふものゝ何であるかを知らない。只戰ひと血を知る許りだ。

下臣　（登場）　只今一人の使者が參りまして是非大王にお目通りを願ひ度いと申してをります。懷王からの使者らしく見えます。

項羽　通せ。

（下臣退場。一人使者あわたゞし氣に登場。笏を持ち居る。）

使者　（禮をなして）　私は今迄懷王に仕へて居りました者で御座いますが、常々懷王が邪推の爲めに大王に反感を抱き、劉邦と好しみを通じて居られるのを心ならず思つて居りました。私は幾度となくお諫め致したので御座いますが、若氣の不安と野心との爲めに益々劉邦の甘言に唆かされた懷王は遂に私がたつての諫言にも拘はらず、此度密かに彭城を出て二三の腹心と共に巴蜀へ忍び行かうとなされたので御座います。

項羽　懷王が俺を疑つたのは邪推ではない。當然な推察だ。それで其方は懷王の謀叛を俺に密告しに來たのか。
使者　私は大王の御爲めを思ひ、涙を飮んで遂に弑し奉つたので御座います。
范増　(絶望的に旁白す)　チヨツ、何と云ふ事だ。
項羽　何、其方が懷王を弑した？　其方の意志でか。それとも誰か他の者の云ひつけでか。
使者　私一個の忠節からそれを致しました。私は御首を持參したので御座います。(箱を開け懷王の生首を取り出す)
虞姬　(顏を背向けて)　あゝ。
項羽　(ジツと其首を見て)　貴樣は俺の命令の先走りをしたのだな。其方の目的通り褒美を取らさう。其首を持つて近うよれ。
(使者、その首を持つて項羽の前へ出る。其途端に項羽は素早く劍を拔きて使者の首を斬り落とす。)
項羽　貴樣のやうな忠義者には之が最上の褒美だ。もし俺の代りに劉邦が大王であつたら其方は同じやうに俺の首を斬つて忠義者らしくそれを劉邦に獻げるだらう。(懷王の首を取りて掲げ)　せつかちな露奴、陽の爲めに脆くも消されて了つたな。
(笑ひ乍らかく云ひて其顏を眺め居る中急に恐ろしいものを見たやうに恐怖の聲を放つて「おゝ！」と云ひ其首を欄干の外に投げ捨てる。虞姬と范増とは驚いてそれを見る。)

――幕――

第二場　巴蜀山中に於ける劉邦の屯

鬱蒼たる林間の空地。劉邦、韓信、蕭何、樊噲、夏侯嬰等團欒し居る。

劉邦　早いもので此處へ來てから既に二ヶ年の星霜は過ぎ去つた。又も新緑の間に諸々の花は咲き、微風(そよかぜ)は薫り、小鳥共は喧々と囀つて萬物皆それ〴〵の生を表現し合ひ、誇り合ひ、祝ひ合つてゐる。見ろ。一昨年の春は未だ俺達といくらも脊の違はなかつた是等の灌木は不足な日光にも拘はらず、最早あの樣な喬木となつた。あれを見るにつけても俺達が此配所に來てから隨分の日數の經つた事が分るな。
蕭何　しかし私達も二ヶ年の間に決して怠惰な休息をしてゐたのでありません。中國の者が華々しい表面の活動に忙しい日を送つて其浮はついた働き振りを誇つてゐる間に、私達は此深山の僻地で人知れず眼に見えない眞の修業をつみ、力を養つてゐたので御座います。
劉邦　さうだ。俺達は淋しい二ヶ年を無爲に暮したのでは

なかつた。始めの中は俺達の追放を聞いて泣き哀しむだ中國の民も、今では最早過去に葬られた犧牲者として偶まに俺の事を思ひ出す位に過ぎないだらう。未だに俺を忘れずにゐる者も「あれは善い人だつた。併し要するにあの人も竟に項羽の敵ではなかつたのだ」と云つてゐるに相違ない。しかし俺は滅びたのでもなければ消えたのでもない。現に此樣に壯健で生きてゐた。晨(あした)となく夕となく斷えず俺につき纒つたあの恐ろし淋しさは腹の底から俺の天命に對する熱望と、執着との火を燃やし續けた。見ろ。あの閑濶な黃河の流域を安々と照らした同じ太陽は、此鬱蒼とした森林の中では一倍の要求と熱心とを以つて强ひても其光りを射込んでゐるやうに見えるではないか。幽邃な樹木の繁みがその光りを遮れば遮る程それは一層の努力を示して猶ほ其中に突き入らうとしてゐるではないか。

韓信　生命の力の弱い者は暫く其活動を封じておけば大方其間に火を萎びさせて了ひます。彼等は何か燃料なしに火を焚き續けてゐる事が出來ないのです。項羽は迂濶にも其筆法で私等を葬らうしたのでせう。併し眞に力强い生命は到る處に糧を見出し、如何なる鬪も彼の火を强くこそすれ弱める事は出來ません。かゝる時に眞の火を持つてゐるかゐないか、又火がどの位の力を持つてゐるかが分るのです。

劉邦　いや、俺と云ふ火ももしお前等の火が傍にゐてたえず俺を支へ、助けてゐて呉れなかつたら、一人では持ちこたへる事は出來なかつたらう。お前等と與にゐて互に其熱を加へ合つてゐたればこそ、俺は自分の火力を保持して行く事も出來たのだ。俺は心からお前等の恩を有り難く思ふぞ。

夏侯嬰　忝けないお言葉で痛み入ります。私達は此僻地に封せられましたが、それは却つて私達の運命を深い同情と愛とによつて堅く結びつける機緣となりました。中國にゐた間は仲が惡かつた同志も此處に同じうき目の鎖に繋がれてからは、兄弟のやうに親密になつた者もあります。如何なる軍勢と雖も嘗て此漢軍のやうに心から一致團結してゐるものはありません。あの大楚も强相(つよさう)には見えますが、大將等の心はてんでな利己心によつて離れ離れになつて居ります。皆の利益が一致してゐる間は圓滿ですが、いざと云ふ時は何の賴みにもならない敵同士です。

蕭何　其處へ行くと此方は氣丈夫なものだ。しかし我軍が斯樣に上下心を一つにしてゐると云ふのも一に漢王の御威德に依る事は吾々の皆感じてゐる處で御座います。

劉邦　(頰髯を撫で乍ら)　いや、始め此處へ來た時のあの

絶望と、無念との淋しさは永久に忘れられない。こんな處で人間が生きて行けるものか。俺は栗鼠や岩と一緒に此山中に腑甲斐もなく朽ち果てなければならないのかと思つた時の氣持は。俺は自分と運を與にするお前等の顏を見るに忍びなかつた。そして俺はどんなに全力を以て此處を逃げ出す事を企むだ事だらう。しかしお前等にたつて諫められ勵まされて一と月經ち、二た月經つ中に俺は始め程此處が厭ではなくなつた。慣れると云ふ事は妙なもので、あの不思議にもこんな處に滿足して長閑に暮してゐる樵夫や、狹い畑を耕してゐる善良な農夫等と交るにつけて、俺は次第に此處へ追放されて來た事が無意味でなかつたどころか、却つて俺が最後の勝利を獲る爲めには俺にとつて實によき天惠の試練であり、もし俺に天下の支配者たる資格があるならばそれが現はれるのは今此悲境に於てゞあると思へて來た。さう思つてそれを忍ぶと、只哀れな妻子の身の上が如何にも氣がゝりではあつたけれど、此處の簡素な生活も亦却つて喜ばしいものにも思へた。百姓共は毎日飯を焚き、菜を持つて來ては食はせて呉れる。淋しい時はお前等と會つて未來の事業や計畫に就いて熱心に話をする。すると俺の鬱いだ氣も紛れて、時の經つのも忘れて了ふ。或時は狩獵をして遊び、林間の小川に魚を捕つて樂しむ。いや、色々思ふと此配所に於ける愛の生活こそ、俺の一生で一番樂しい時であるかも知れないて。

（部下の者數名酒と盃とを持つて出る。）

劉邦　おゝ話に實が入つて忘れてゐたが、さう云へば今日此處に集つて貰つたのも今日は俺の誕生日であつたからだ。さあ、遠慮なく飲んでお呉れ。此山中での平和なまどゐも或は之が終りになるかも知れぬのだ。

一同　（酒盃を捧げて起ち）漢王の御健康を祝します。漢王萬歲。

（一同の上に花散りかゝる。）

（小鳥の囀り聲。）

樊噲　此和氣靄々たる吾々の親睦と幸福さ加減を項羽に見せてやり度いものです。奴が此樣を見たらがつかりするよりは呆れるでせう。

韓信　（笑つて）いや面白いもので「幸福の鳥」は隨分皮肉な現はれ方をするものでございます。世間の者から見たら吾々程不幸な者はなく、項羽程幸福な者はない樣に見えませう。處が事實は反對で、誰かに天下を奪はれはしまいか、暴虐の復讐をされはしないかと日夜猜疑と、不安の中に寂しく暮して、あの虞美人の入れたものでなければ茶一杯も飲る事の出來ない不幸な男と、賤しい農夫と殆んど違ふ處のない不自由な生活してゐ乍らも心は

希望に充ち、平かな慰安に充ちて何をも疑ふ事なく、怖れる事なく、常に眞實をふりかざして自由に自然の懷に生活してゐる吾々と何方が幸福であるかは只天のみが知つてゐるのでございます。

劉邦　今迄の處では俺は不思議に運のいゝ男だ。あの鴻門の會でも俺は死ぬべき處を助かつた。併し韓信、あの項羽が俺に鞜を取つて穿かせろと云つた時、そして俺が此鬚でその鞜の塵を拂つてやつた時、もしお前が以前あのならず者共の股をくゞつたと云ふ手本を俺に見せてゐて呉れなかつたならば俺は勘忍の緒を切つてあの場で死んでゐたかも知れなかつたのだ。善い行ひの手本は作つておくべきものだな。それは人を生死の境から救ひ出す事も出來るのだ。

韓信　しかし私の事を思ひ出して下さつた時に漢王は又詰らない事も力のある人にとつては自分を活かす材料になるのだと云ふ手本を御自身作つていらしつたのです。が兎もあれ吾々はもう十分に待ちました。機は熟する丈け熟しました。之からはいよ／＼中國へ打つて出て此二ケ年の間を吾々がいかに暮してゐたかを示さなければなりません。

劉邦　さうだ。時機は遂に來た。俺は項羽一人を相手にしてはゐない。あの哀れな男の氣持には俺は同情さへ出來る。俺は貧しい家に生れたが溫かい愛の微笑を浴びせかけられて育つたものだ。俺が此世に出て始めて見た顏は優しい笑顏だつた。そして其笑顏は色々の不幸が代る／＼それをかき消さうとして來たにも拘らず、一生俺の眼の底を去らない。俺は絕望の苦難の中にもやがて其顏を見、辛らい悲しみの後ろにも遂には其顏を見る。しかし落ちぶれた貴族の子である項羽は如何に作ろつた笑を貪らうとも一生眞の笑顏を見る事のない不幸な男だ。俺は彼奴が俺に加へた非道な仕打ちを思ふと、思ひ切り彼を打ち砕いて怨みの溜飮を下げてやり度くもなるが、又ある氣持からは赦してやり度くもなる。彼奴は淋しいのだ。彼奴だつてよく知れば憎めない奴に違ひないのだ。俺は彼と運命を賭して爭はなければならない俺の運命を情けなく思ふ。だがそんな事を云つてはゐられない。俺は俺のために、又人民のために、俺が其處に眞の生き甲斐を感じられるやうな仕事をやり遂げずにはゐられない。そして其爲めには彼とも身命を賭して爭はない譯に行かない。自ら不幸の礎の上に幸福の殿堂を築かうとしてゐる項羽には人民を幸福にする事は出來ないのだ。

蕭何　それはもし中國の平和と福祉との爲めに天に召し出されてゐる覇者があるとすればそれは漢王の外にはない事は今更申す迄もありません。もし漢王が其樣な方でな

いならどうして之れ丈けのえり拔きが偶然に此處に集る事が出來ませう。中國の民百姓はひどい旱魃の後の慈雨を待つやうに漢王のお出ましを今日か明日かと待ち望んでをります。項羽が五千人の人夫を苦しめて無理やりに半年の間に造り上げた自分の像の馬鹿祝ひに、自分が嘲笑つてゐた始皇の二の舞を演じてゐる間に、吾々が兵士にも祕密にしておいたあの間道からだしぬけに打つて出たなら彼等は寢耳に水のやうに慌てふためく事で御座いませう。

夏侯嬰　聞く處によると項羽と范增との仲ももう昔のやうではないやうです。項羽の成功の半分はあの爺の力だと云ふ一般の說が確かに奴の氣を惡くしてゐるのです。それに段々自信がぐらついて來て前よりも猶ほ人の說を受け入れる餘裕が乏しくなつてゐる彼奴は、近頃では范增が右と云ふ事は何でも左と云ふのだ相です。それで范增が忠義の一徹から自分の說を固持すればする程益々奴の機嫌を損ねて行く事になるので、さうなれば此方にはいよいよ都合がいゝ事になる譯です。

韓信　叱。今からそんな事を當てにして油斷をしたらそれこそ永久に味方の破滅です。そんな事が兵士に知れて士氣が弛むやうになつたらどうします。何時も大事でない時はないが、殊に今は大事な時だ。うんと緊張してゐなくてはならない。對手には項羽が十人居り、范增が百人ゐる心算でぶつからなくてはいけないのだ。

劉邦　さうだ。吾々の目的は項羽を倒す事にあるのではない。項羽は只吾々の途上に橫はる最初の障害に過ぎない事を皆に知らしめるがいゝ。さうしてもし俺が項羽を倒したら、今度は此俺を打ち倒して見るがいゝ。其位の意氣組を持つてゐれば項羽が強いと云ふ事は吾々にはむしろ祝福になる。愈々待ちくたびれてゐた今が來て見れば配所にも名殘りはあるが、しかし人生は戰た。俺は又戰つて戰ひぬくぞ。血を流さう。ではお前等も張良から今一度最後の知らせが來次第明日にも此處を出發する心算で用意を賴むぞ。

樊噲　吾々は戰ひに飢ゑ渴いて居ります。いよ〳〵之から又あの戰場へ出て久しぶりに汗を流すのかと思ふと日頃休んでゐた勇氣と力とが眼を覺まして今から腕が鳴るやうな氣が致します。

一同　（劍を拔く）漢王の御爲めに身を粉にして最後迄潔く戰ふ事を誓言致します。

劉邦　あゝ何だか俺は海邊に立つて朝日の昇るのを見乍ら船出の用意を待つ者のやうな心持がする。俺の胸は希望に燃え、全身は喜びの力に溢れて寒くわなゝいてゐる。俺も亦お前等の爲に今迄にない奮鬪振りを見せる心算

だ。やあ向うから使ひがやつて來た。何の便りか、惡い
報知を聞き度くないものだ。

（使ひの者登場。）

使者　（禮をして）張良殿から御手紙で御座います。

（書簡を出して劉邦に渡す。）

劉邦　（開封し乍ら）何ぞ不吉な事でゞもないとよいが。

（讀み行く中「オヽ」と云ひて手にせる杯を落とす）

一同　な、何事でござります。

劉邦　とう／＼やられた。恐れてゐた事が出來たのだ。（見
る／＼顏色を變へ極度の絶望と悲嘆とに沈み齒を食ひし
ばる）妻子は人質になつた。そして病中であつた我が老
母は、項羽の館へ着く前に道で亡くなられたのだ。（泣く）

（一同愁然と頭を垂れ、もらひ泣きする。）

蕭何　何と申し上げてよいやら分りません。併し文面は唯
それ丈けでございますか。

劉邦　張良はまだ何とかして救ひ出す道はあらうと云つて
慰めてはゐる。併しどうしてそんな事が保證出來よう。
あゝ、俺はもう駄目か！

（一同齒を噛ひしばり乍ら無念と同情に堪へざる如き
體。）

――幕――

第三場　九里山に於ける戰場

漢、楚兩軍チャン／＼と鬪つてゐる。併し漢軍には樊
噲がゐて馬を躍らせて斬りまくるので楚軍の旗色が惡
いと見えたところへ「樊噲逃げるナー」と呼ばはりつゝ
項羽が右手から現はれ、二人は二三合馬上で戰ふ中、
項羽は鐵の鞭で樊噲を打ちのめし、樊噲は馬上から轉
げ落ち相になつて逃げる。それと共に漢軍なだれを打
つて逃げる。鼓や銅鑼の聲。そこへ前より更にやぶれ
た項羽の軍旗を捧げた楚軍勢范增追いついてくる。

項羽　（やきもきして）皆何をグヅ／＼してをるのだ。誰
も未だ休戰を命じはしないぞ。こんな張り子のやうな敵
勢を打ち破るのに、もう日は暮れかけてゐるぢやないか。
恥晒し奴。さあ皆の者、俺の後につゞけ。追擊だ！

英布　（左手より戻り來る）私は隨分追擊しては見ました
が全で手答へがありません。時々思ひがけない處から敵
の大將らしい者が不意に現はれては私等を罵ります。そ
して二三合戰ふと直ぐ私等を釣り込むやうにさつさと退
却するのです。それを追つかけると突然傍から鼓を鳴ら
して綠の旗を飜へした趙の軍隊が現はれ、其先きには又
魏や燕の伏兵が隱れてゐると云ふやうな始末で、全で只
此方を當てなく引つ張り廻はして面喰はせると云ふやり

方です。實に人を馬鹿にしてゐます。

項羽　（なほも馬上にて）　俺の腹を立てさせる計畫に成功してゐる處か奴等の馬鹿な處だ。俺は腹を立てれば一層鋭くなるばかりだ。構ふ事はない。ドシ〳〵追ひかけろ。敵が十の速力で退却したなら此方は十五の速力で追撃すればよい。奴等は俺が屹度或る處迄追撃して來る心算で、其處迄はおびき寄せやうとしてゐるが、それより先き迄進むとは思つてゐない。そこで俺は最後のどん詰り迄突き拔けて行つて奴等の裏をかいてやるのだ。

范增　しかし今日はもう之にてお止まりになつた方が宜しいと存じます。此處迄來て引き返へすのは如何にも殘念ではございますが、戰は此一戰に限りません。既に吾々は本城を去ろ事八十里の處迄進み出て居りますのに本城は殆んどガラ空になつてゐます。吾々が此方にばかり主力を注いで後を顧みずに進んでゐる間にどんな變事があの留守城に起らないとも限りません。あの企らみ深い韓信が此様に易々と退却すると云ふのは明かに何か計略のない仕事では御ざいません。

項羽　どんな計略か俺は一つ其計略にかゝつて見度いものだ。奴も俺を其計略に陷れたら始めて狐の智慧が獅子には何の役にも立たぬ事を知るだらう。其兵法を見れば大將の人物が解ると云ふが、流石は股くゞり丈けあつて戰術迄が賤しいわい。奴等が俺の留守城を襲つて萬一あの捕虜の妻子を救ひ出さうと、俺が此方で夫の首をかいてやつたらどうしやうと云ふんだ。

英布　ところがその夫が何處にゐるかそれが分らないのでございます。本陣の有り場所さへ分つてゐれや傍の物には眼もふれず只其れを目がけて突進も出來ますが、それがてんで分らないのでぶつかつて行きやうがございません。

范增　戰ひでは一時の强襲よりもねばり强い根氣が勝を占めます。急く事は何よりの禁物でございます。それに今迄は此方に地勢がよかつたのでございますが、之から先きは地の利が向うによくなる一方で、之から夜に入れば益々戰ひにくゝなる丈けでございます。

項羽　畜生共は眞晝の戰爭では人間に叶はぬので夜を待つのだ。然らば夜戰をしやう。二十四の齡に兵を起して以來七十餘戰未た一度たりとも負けた事のない俺は物の數にも入らぬこんな敵との戰ひに二日も三日も潰ぶす馬鹿らしさには我慢が出來ぬのだ。（彼は馬に鞭を當てる）

（項莊其處へ血だらけになつてやつて來て倒れる。）

項羽　どうした。項莊。

項莊　（息絶え〳〵に）　實に驚きました。ど、どうしたと云ふ不埒でせう。あの鐘離昧の奴めが向うに附いてゐる

のです。私は奴が味方であるのを信じて、どん〴〵彼奴の誘ふなりに後をついて進みました處が、それに氣がついた時には、私はもうすつかり敵に圍まれてもう少しで奴等の足に屍を……

英布　(齒ぎしりして)　彼奴は自分の利の爲めには義も名譽も捨てゝ顧みない恥知らずでしたから、其位の事はし兼ねないとは思つてゐましたが。

項莊　あゝ大王殿。私は殘念です。あんな犬よりも劣つた野郎の爲めに、う、討死する事にならうとは!　チッエ!　彼奴の細首を引つこ拔いて……あゝ。(息絶える)

范增　おゝあんな不貞な賣國奴が一人位敵に附いた處で憤慨する値打ちもありません。敵の大立て物の樊噲を難なく打ち斃された丈けでも今日の獲物は小さくはないのです。こゝで一つ敵の裏をかいて今日はわざと之にて引き返し——

項羽　(怒つて)　默れ!　老人と女子とは何時も同じやうな事許り云ふ。范增、俺はお前の說に從つてよかつたと思つた例しはないぞ。お前にはお前の自信以上の力が無謀に見えるのだ。俺の兵法は思ひ切り自分の身を危地に晒らす事によつて自分の未だ知らぬ力を自分に覺らせる事にある。俺は僅か三百騎の兵を以て一萬に餘る章邯の軍を三日間追ひつめた事がある。敵はまんまと俺を係蹄に陷れた。俺は始めからそれを知つてゐた。そして其係蹄に陷つた爲に俺は又一層敵を粉碎した。俺に從ひ度くない者はさつさと敵に附け。俺は行く。あの新月が現はれる迄に俺が何を土產に持つて歸るかを見て驚くな。

(項羽は馬を躍らせ去る。軍旗がつゞくダークチエンヂにて次の場に變る。)

第四場　同じく、韓信の陣營。夜

韓信　(步き廻り乍ら)　樊噲の代りに李左車を其方に廻はせればよかつたのだが、あの男の遣ひ道に就いては俺に良い考があるのだ。それにしても項羽を生捕にし損なつたのは如何にも殘念だつたな。

曹參　どうして生け捕り處ではありません。彼奴の力が恐ろしいと云ふ事は聞いてゐましたが、まさかあれ程とは思ひませんでした。あの強い辛奇と彭越の二人を笑ひ乍ら一槍に突き落し、後から來たあの猛者の樊噲を鐵の鞭で只一打ちに打ちのめして腦天をぶち割つて了ひました。そして今度は傍にゐた私をも序でにやつゝけやうとしたので私は生心地もない樣な氣持で後も見ずに逃げて來ました。

韓信　はゝ、あんな奴は一騎打の相手ではない。智慧づくで係蹄に陷れるか圍み打ちにするかよりないのだ。

曹參　その圍み討ちをやつたのです。彼奴が豫定の處迄ガムシヤラに突進して來たので味方はソレッと四方八方から彼奴を目がけて一齊に雨のやうな火箭を浴びせかけたのです。處が奴は傷ついた虎のやうに哮り狂つて驚くべき剛勇を現はしました。それに又奴の馬の速いことゝ、自由の利くことゝ云つたらないのです。迚も手におへる代物ではありません。それ、樊噲の屍骸を持つて來ました。

（炬火を持つた多勢の士卒擔架に樊噲の屍を載せて運び來る。韓信と曹參とはそれを天幕の外迄出迎へる。一同兜を脫ぎてそれを正面に据ゑ、手を拇して禮拜す。）

韓信　今日の戰ひの目的はあの人質の身になつて居られる漢王の御家族をお救ひ申す事にあるのだから、多少の犧牲は免れないとは思つてゐたが、猛將樊噲を其爲めに失つた事は返へすがへすも大き過ぎる犧牲だつた。しかしもうそろそろ張良の方からも吉い報知があるだらう。あの男の事だから仕損ひのあらう筈はない。

夏侯嬰　全くあの人が行つてゐれば安心です。しかし犧牲戰とは云ふものゝ此戰は案外成功に畢りました。項羽に向つた樊噲の軍は不幸にして破れましたが陳平はあの桓楚の率ゐてゐた敵の左翼を殆んど全滅にしました。

韓信　それもあの鐘離昧が敵の祕密を敎へたからだらう。どうもあんな不貞な賣國奴を利用すると云ふのは如何にも味方の名譽にとつて心苦しい事ではあるけれど、漢王の御身內を救ひ出す爲めにはいやでも敵情に明るい彼奴の智慧を借りる必要があつたのだから、吾々としても今更奴を處刑する權利はない。尤も此方から奴を買收したわけではないがな。

曹參　何、向ふだつて人質を取つておくやうな卑怯な眞似をしたのですから其位の事は當り前です。おや、炬火が見えます。張良からの使が來たのでせう。

（使者馬より下りて入り來る。）

韓信　どうだ。うまく行つたか。

使者　どうもお答へに困るのです。

韓信　ではやり損なつたのか。

使者　お妃丈けはどうかかうかお救ひ申す事が出來ましたが。王子の劉盈殿は畏れ多くもお果てになりました。

韓信　何、王子が果てられた。

使者　何しろ敵軍の大部分は九里山の戰場へ出向いてゐるので其留守をだしぬけに正面から襲つた時には殆んどあの彭城に殘つてゐる丈けの全部の兵卒が城を明けて打つて出ない譯に行きませんでした。まさか味方の軍が二手に分れて後ろから燒き打ちを食はすとは思はなかつたの

です。

夏侯嬰　矢張り新進の若手には叶ひませんな。あの古狸の范增奴の鼻の穴を明かしてやつたのは痛快の至りではありませんか。

使者　正面から巧みに敵を誘ひ、後ろからは周勃殿の軍が城の中に闖入しました。しかし呂后と王子とは別々の室に幽閉されてお居でになつたので、始めにお妃をお救ひ申してゐる中に老ぼれの番卒奴が無謀にも王子のお首を斬つてそれをお妃に投げつけたのです。

曹參　お互だとは云へ酷い事をする奴だ。

韓信　項羽は今頃嘸口惜しがつてゐるだらう。そこで俺は漢王に何と云つて此事をお知らせしたらよいか。が、兎に角之でやつと吾々も安心して自由に腕を振ふ事も出來るやうになつたと云ふものだ。之からはもう今迄のやうな姑息な戰ひ方はしない。正々堂々と正面から肉薄して此月末迄には奴等を垓下迄追ひつめて呉れやう。

――幕――

第五幕

第一場　固陵に於ける韓信の館

カナリ立派な一室。室の一方に韓信と呂妃とは同じ長椅子に凭れて語り居る。

韓信　お妃は漢王が不幸にも御家族の人質にならせられたのをお聞きになつた時どの位お嘆きになりお苦しみにならせられたかを御存じないのです。漢王はあの山中での二ケ年の慘苦の中にあらせられて同じ憂き目に生活する私等の手前を憚られ、其御身内に對する御不安を御洩らしになるやうな事は餘りありませんでしたが、あの時ばかりは流石の漢王も御自分の運命を呪ふと仰せられました。そして全二日の間全く絶食して御居でになりました。

呂妃　さうだ。あの方は御自分の運命をお呪ひになつたのだ。妾等の運命をお呪ひにはならなかつたのだ。

韓信　勿論それが一つ物でなければ漢王はあの様な恐ろしい嘆息をお洩らしにならなかつたのです。漢王にとつては……

呂妃　萬人の運命は御自分の運命と一つだと云ふのだらう。しかし妾子の運命とは別なのだ。その證據にはあの方はもし兵をお擧げになれば人質になつてゐる妾等親子の者が首を斬られる事を御承知であり乍ら矢張兵をお擧げになつたではないか。

韓信　それは餘りお妃が漢王の御心に對して御理解が薄過ぎると申すものです。漢王は竊かに中國へ打つて出られるや否や……それは漢王、いや、あらゆる偉大な願望を

持つた男子にとつては到底自分の力で拒む事の出來ない唯一の道であつたので御座います……

呂妃　それなら其男は妻子を持つてはならないのだ。少くとも運命の安全が定まる迄は。

韓信　一應御尤です。しかし生きる事が命賭けである事は男女區別はありません。そして女の運命にとつて之程名譽で、偉大な仕事が他にあるでありませうか。英雄の使命の爲めにその身命を賭して內から助けると云ふ事程、世の中にわが血を流さない貴い仕事は一つとしてありません。而もお妃は大抵の男子ですら流し得ないやうな貴い健げなお血をお流しになつたではありませんか。

呂妃　（泣いて）あゝ妾は助けた。妾の全力と全生命をあの方の爲めに捧げて盡したのだ。妾はさうせずには居られなかつたのだ。しかしあの方は……劉盈を殺してお了ひになつた。

韓信　其事の爲めに悲しみ苦しむでいらつしやる點では漢王は決してお妃に負けてはいらつしやらないのです。しかし漢王も同じやうに海よりも深くお妃や王子を愛していらつしやり乍ら猶ほあゝ爲さるより他に道はなかつたのです。さうして漢王は何よりも先きにお妃や王子をあの幽閉から お救ひ出し申す 事に おかゝりに なつたのです。

呂妃　そしてあの子のいぢらしい生首が妾にたゝきつけられた時、それを聞いてあの方はかう被仰つたと云ふではないか。「だが之位の犠牲は味方全體の運命の爲めには却つてあつた方がいゝのだらう。」と。そしてもしあの子の代りに妾の首が斬られてもあの方は矢張り同じやうな冷淡さを以て同じ事を被仰つたのだ。妾の助かつたのは誰が助けたのでもない、全く偶然の天佑た。

韓信　偉大な事業をする男子は御婦人からは往々冷淡と云ふ悲しい誤解を受けます。漢王はさう云つて御自分を悲嘆の底から揺り起さずには ゐらつしやれなかつたのです。そして漢王はお眼に涙を溜め乍ら御自身の股に劍をお突き差しになりました。

呂妃　もういゝよ。お前も男だ。妾にはあの方のお心は解つてゐる。妾はもう何も云ふまい。

韓信　お妃のお心には天下の者皆舉つて御同情申してをります。お苦しみになるのは全く御無理はありません。がお妃の御心は今餘りに亂されていらつしやるのです。私は切に其御心が再び安かにならせられ、そして一日も早く漢王とお目通りになる日を樂しみに致して居ります。漢王はあれ程それを待ち望んでいらつしやるのです。もう天下の形勢は定まりました。之からは敵にとつては日に日に悲運が募つて行くに引きかへ、味方は旭日のやう

に捷利と、光榮との境に一歩々々進んで行く一方で御座います。漢王がいよ〳〵天下の主とならせられる慶福の日も最早遠からぬ事と信じます。

呂妃　（立ち上る）　あゝ妾は行かう。そして八年ぶりであの方に逢はう。何れ天下があの方の物になつた時、そしてあの方がその榮耀の中にやがておかくれになつて妾があの方に代つて天下の政權を握る時、妾は自分の爲度い事をすればいゝのだ。（呂妃去る）

（韓信、戸口の處迄呂妃を送りて戻る。考へ込む。桃娘入り來る。後より四つになる女の子（項梁と桃娘との間に出來た子）つき來る。）

韓信　（思はず顏をしかめる。次に努めて柔和な顏をなし、子供の頭に手をおく）どうだ。

桃娘　（うな垂れる。やがて頭を上げ）　貴方、今此處でお妃と何を話していらしつたの。

韓信　恐ろしい女だ。俺は何時かあの女に祟られる時が來相な氣がする。天下が漢王の物になると同時に俺の勢力が盛んになり、そして漢王が俺より先きに世を去られたら俺の位置はあの女の爲めに危ふくされるだらう。さうなれば此方も要心はしようが。

桃娘　何か又不服を被仰つたのですか。誰でも自分の境遇に安心が出來て來ると、前の苦勞の中に畜へられた不服が俄かに堰を破つて出て來るものですわ。

韓信　兎に角明日はいよ〳〵總攻撃だ。あの厄介な范增もとう〳〵項羽と緣が切れて、脊中に腫物が出來て死んで了つたと云ふからには、いよ〳〵向うの大運命も瓦解の時が來たのだ。かうなつて見れば氣の毒な話だ。

桃娘　本當にね。では貴方も今夜はたつぷりお休みになつた方がよろしいでせう。

韓信　さうしやう。

桃娘　妾も直ぐに行きますわ。お休み遊ばせ。

（韓信去る。沈默。風の音。桃娘子供を膝の上に乘せて接吻し、其顏を凝視め涙ぐむ。突然、何物か金屬の品の床に落ちたる音鏘々と聞こゆ。簪の落ちたる音なり。）

桃娘　（ドキッとして）　誰？

（虞姬。簾をあげて悄然と入り來る。其容姿はやつれ髮の毛はほつれて、難儀なして來たものだと云ふ事が分る。顏色蒼く、眼は燃える如く輝けり。）

桃娘　（驚き）　まあ、貴方はお妃……（立ち上る）

虞姬　殷桃娘……

（二人は暫く顏を見合せてゐる。）

桃娘　お變りになりましたこと。

虞姬　お前こそ。

桃娘　それにしてもまあ今頃どうしてこんな處へ……

虞姫　妾はお前が韓信の夫人になつたと云ふ事は聞いてゐたのだ。それで妾はお前の腰元と僞つて前へ祝の酒盛に醉つてゐる番卒共の眼をやつとくらませて來たのだ。

桃娘（虞姫の來た意を覺る）隨分御難儀を遊ばした事でせうね。お察し申しますわ。

虞姫　妾はお前から同情されなければならないやうな者にならうとは夢にも思はなかつたよ。……しかし妾はもうどうしてもお前の同情に縋るより仕方がなくなつたのだよ。……お前は妾等を欺して妾達の陣に忍んでゐた時、妾がどんなにお前を可愛がつてゐたかは覺えてお居でだらうね。

桃娘（間をおいて）覺えてをりますとも。妾が毎も襲はれる昔の恐ろしい夢の中では只お妃のお姿丈けがほんのりとお美しく浮き出ます。妾は今でもお妃にはお懷かしさを感じて居ります。

虞姫　お前がもし妾を愛してゐて呉れるなら、妾の境遇に同情して呉れるなら……あゝ妾はこんな事を人に云ふ位なら舌を嚙み切つて死んで了ひ度いのだ。（脣を嚙む）

桃娘　お妃の御來意は妾には解りました。もうそれを被仰る爲めにお苦しみになるには及びません。

虞姫　あゝ殷桃娘。妾は項王の妃だ。その天下の霸王たる項王の妃である妾がこんな風に頭を下げてお前に泣きつかうとは。あの方がもしそれをお知りになつたら妾の體は八つ裂の刑に處せられても未だ足らないだらう。それを知つてゐてお呉れ。此處へかうして妾が來たのは全く妾一人の女らしい馬鹿な心配の爲めだ。あの方は夢にも御存じないのだと云ふ事を。あゝ妾は馬鹿だ。氣違ひだ。妾はもう二度と彼處へ歸る事は出來ない。妾は此處へ來た事をどんなに後悔してゐるだらう。だけど妾はあの方の名譽を蹂み躙りはしない。あの方のお顏に泥を塗すりはしない。凡ての恥は妾にあるのだ。さうだ。皆只妾から出た事だ。さうして妾はもう其恥の爲めに死んでゐるのだ。（ヒステリカルに體を搖すりて泣く）

桃娘　あゝ、明日は總攻擊。妾はどうしたらいゝだらう。

虞姫（桃娘にしがみつきて）さあお前はどうして呉れる。妾達にもう三日の猶豫を與へるやうに、お前の夫に賴んで呉れることは出來ないかえ？　それは餘りだ。卑怯だ。妾はかうしてお前に頭を下げて……（泣く）

（此時サッと後ろの幕が開きて呂妃現はる。虞姫はそれを見て俄かに驚愕と懼へとの爲めに失神し相になり、思はず「アラッ！」と聲を放つ。）

呂妃（物凄き冷笑を以て）誰かと思つたら韓信の代りに妾でした。餘り騷ぎがえらいので何事かと思つて來て見

たら驚きましたわね。貴方は皇后の虞美人様……
虞姫　（恐れて石の如く硬くなり物を云はず）
呂妃　（態と虞姫を頭の上より足の爪先迄凝視して）　まあ
何と云ふ悲劇的な扮裝でせう。そして又何と云ふ痛々し
げな美しさでせう。夜風に逢つた海棠のやうにとでも云
ふ處でせうね。（ヒステリカルに笑ふ）本當にお痛はし
く見えてよ。貴方のやうな絶世の美人が、貴女のやうな
最高の身分の人が、自分の愛する夫の爲めを思つて、其
夫があはよくば取り殺し損ねた者の處に忍んで來て泣き
ついたり、飛びついたりする程氣が狂ふと云ふのはね。
實際痛はしい事ですよ。誠實と云ふものはどんな痴けた
物でも人を泣かす力があるのに、それが貞淑のための美
しい狂亂の姿でやつて來るのですもの。確かにどんな利
口な男でも動かされずにはゐますまいよ。（笑ふ）
（虞姫は反抗しやうとして唇を噛みしめつゝ慄へてゐ
る。）
桃娘　（呂妃に）　お妃、それは餘りなお言葉では御座いま
すまいか。
呂妃　何、餘りなお言葉ですつて？（笑ふ）さう、お前さ
んは芝居上手な泥棒に物を惠んでゐる間にその惡者が上
はの空の涙を流し乍らそつとお前さんの抱いてゐる子供
を人形とすりかへても氣がつかない位の善人なのだから
ね。お前さんは此中國一の別嬪が其自信のある色仕掛け
でお前の御亭主の力を奪ひに來たのを助けやうと云ふの
だね。天下廣しと雖もお前さんのやうなえらい氣の利い
た女房は二人とはゐまいよ。（笑ふ）
桃娘　（熱して）　まあ、お妃。
呂妃　お妃は此處に二人ゐますが、お前さんは何方のお妃
を呼んでゐるの？　先刻から聞いてゐるとお前さんは未
だ此人の事をお妃々々と呼んでゐるし、此人は又お前お
前と横柄な皇后面をして呼んでゐるのね。變な泣きつき
方もあつたもんだ。それや天下の皇后で押し通して來た
者がその惡運が盡きたからと云つて俄かに今迄の家來衆
に頭を下げて禮に叶つた物言ひをすると云ふ事は意地に
も出來ない事でせうよ。自分の頼む事が滑稽な蟲のいゝ
注文であればある程猶更横柄な威嚴を振りまき度くなる
ものでせうよ。併し此方迄それに引き込まれて譲り遜る
なんて云ふのは餘り氣のきいた話でもないね。不自然な
誇りが醜いやうに不自然な謙遜も醜いのだ。そんな見苦
しい威嚴が保つてゐ度いなら何故項王の妃ともあらうお
前さんは此殷桃娘を自分の館へ呼びつけないの。（間）し
て見るとお前さんは矢張り實は此昔馴染みの殷桃娘によ
りは其夫の方に用があるのだね。お前さんは自分の色香
で征服出來ない男は天下に一人もない心算でゐるのだ相

だから。

虞姫　（ヒステリカルに）　あゝ妾はもう怺へられない！お前は何だ……お前は……おゝ恩知らずの人でなし奴。鬼婆！　（言葉を繼げずに只狂的に體を搖すぶりて泣く）

呂妃　何ですつて？　妾が恩知らずの人でなしで、鬼婆だつて？　そしてお前さんは慈け深い善い皇后樣だとお云ひなのか。（笑つて）馬鹿な恩を被せるにも程がある。どうせ此樣な正義の天運が來るからには妾等を始めに殺して了はなかつたのはお前の方の大手拔かりさ。しかしあの時妾を殺さなかつたのはお前の慈けでも何でもない。お前達が妾の夫を怖れてゐたからだ。さなきだに惡い天下の評判を彌が上に惡くするのを怖れてゐたからだ。そんな事を人が知らずにゐると思つてゐるお前は流石に深閨のお妃だ。

桃娘　（呂妃に）　しかし妾達だつてもし此方と同じ破目に陷ればそれが到底叶はない望みだと云ふ事は百も知り乍ら矢張りかうして妾の地位にゐる者の處へ泣きつきに來るより外はありませんわ。此方がかう云ふ破目に陷つた事は以前の無上な境遇に置かせられたと同じやうに、御自分の意志ではなかつたのですわ。妾等のやうな何の力もない女の身にとつては凡てが只運命の意の儘に從ふより外に何が出來ませう。妾は自分の永いさすらひによつて運命と云ふ物の常ない事をつく〴〵知りました。そして妾等が只その波のまに〳〵弄ばれてゐる他愛ない浮草に過ぎない事を知れば妾等は自分の今の境遇かいゝからと云つて人を責める事は空怖ろしい事ですわ。それを思ふと妾は他人の運命に同情せずにはゐられません。妾は此方を欺きました。妾の今の幸福は忌はしい復讐によつて購はれたのです。ですから妾はその幸福が又復讐によつて覆される事が怖ろしいのです。

呂妃　ふむ。それは誰だつて人の舌を嚙み切つて迄腹癒せをし拔いた擧句ならどんな悟つたやうな理窟でも云へる氣持になるでせう。だけどお前は妾のやうに此女から執拗く酷どい目に遭はされはしなかつたのだ。父親の首を斬られても子供の首を斬られはしなかつたのだ。夫に死ぬよりも酷い恥をかゝせられはしなかつたのだ。それなのに、それなのに此女は却つて妾を鬼婆だと云ふのだ。此アマは……（扇子にて虞姫の額をピシヤリと打つ）

（虞姫短劍を拔きて呂妃に斬つてかゝる。呂妃身をかはして扇子で受けとめ素早く鞭を取りて虞姫を打つ。桃娘驚きて「まあ何をなさるのです。お妃」と云つて間に入らんとするより早く、呂妃は「已れ」と云ひ乍ら虞姫を其場に突き倒し鞭にてピシ〳〵虞姫を打擲す。此時迄桃娘の背ろにつかまつて指を啣へ乍ら萬事

を見てゐた子供は急に恐ろしさの爲めに泣き出し、母親にかじりつく。）

呂妃　（打ち乍ら）あゝ、よくもお前は妾の子供を殺したね。妾の夫を辱かしめたね。（感極まりて共に泣き乍ら）妾等を牢にぶち込んだね。よくも永い間妾等を踏み躙つたね。（足蹴にして）あゝ狀を見ろ。狀を見ろ。天罰はとう／＼お前等の上に來たのだ。口やしいだらう。しかしそれを來させたのは誰だ。妾等だと思ふのか。お前等自身ではないか。お前等自身のあらゆる殘虐と、惡業と、人でなしとがお前等に報いて來たのではないか。よくも此處へやつて來た。（桃娘に）お前は此女を牢にぶち込むがいゝ。そしてあの項羽の首を取つて此女にたゝきつけてやるがいゝ。いや。妾が韓信にさう云つてやる。お前のやうな意氣地なしには何も出來ないのだ。お前は此女に辱しめられた事はない。此の女に自分のいとし子の首を斬られた恨みはない。併し妾にはあるのだ。此アマ奴、今度はお前の番だ。お前が飛び込んで來た籠からはお前は一生出る事は出來ないだらう。はゝゝゝ……

（氣違ひのやうに勝ち誇つた笑をし乍ら退場す。虞姫の額からは血がしたゝつてゐる。彼女も亦氣違ひのやうになりて短劍を再び取り呂妃を追はんとして倒れ已れの咽喉を突かんとす。泣き入つてゐる。）

桃娘　（力任せに其短劍をもぎ取り）あゝ、妾はどうしたらいゝだらう。お妃……虞美人様！

——幕——

第二場　垓下に於ける項羽の城内　夜

廣間。右手なる廊下には篝火が燃え、番卒が其處に立つてゐる。室内には虞姫と腰元と二人居る。

腰元　それでも大王が心の中ではお妃をどんなに赦し度く思つていらつしやるか、いゝえ、實はもう赦してゐらつしやる事は傍眼にも見えてをります。

虞姫　そんな事が何にならう。あの方は妾を赦し度くお思ひになればなる程妾をお苦しめになるのだ。さうして御自分もお苦しみになるのだ。妾には其お心持はよく分つてゐる。妾はあの事をあの方に懺悔した時、妾の言葉が終りきらない中に此愚かな首は飛んでゐるものと覺悟してゐた。そして又それを望んでゐたのだ。併しあの方は妾をお罰しになるには死罪ではまだお足りにならないのだ。

腰元　それは大王のお妃に對する御愛著が死よりも強いと云ふ證據では御座いますまいか。妾には只今の御不和が甚ければ甚い丈け、又それ丈けの圓滿な御和解が後に來る時を待ち望んでいゝやうに思はれます。

虞姬　和解。妾はもうそんなものを望みはしない。只此不幸が皆妾の誇らしい貞操から、そしてそれを自分で信じるやうに誰も信じるものと思ひ込みすぎた處から來てゐる事を理解して頂けばいゝのだ。あゝ、お前は男にとつて愛よりも何よりも強い名譽心と云ふものがある事を知らないのだ。丁度女に心の臓がすべてゞあるやうに、男は冠の爲めには何もかも打擲つて了ふのだよ。

腰元　まあ、お妃が歸つていらしつた事がお妃の御貞操の何より明かな證據では御座いませんか。

虞姬　昨夜妾はあの方から隔離された一人寢の淋しい寢床の中でこんな事を思ひ乍ら一人で泣いたよ。在るものは何だらう。只「移り變り」だ。譯の解らない變化の流れだ。そして妾達は其の流の中で難船しかけてゐる古い大きな船なのだ。妾は助けを乞はずにはゐられなくなつて其朽ちた親船から飛び降りて、以前妾達に曳かれた他の小舟へと泳いで行つた。しかし其船は最う自分等の流れに行く邪魔になつてゐる妾達を假りにも助けやうとはしない。そして意地惡く溺れかけてゐる妾を船べりから突き放した。妾は其屈辱の爲めに親船に歸る事も出來ずにあらゆるものから捨てられた時、一人の舟子が死にかゝつてゐる妾を親切相に引き上げて親船に屆けて呉れた。然し其舟子は妾と一緒に親船に乘り込んで其最後の栓を拔いて了ふのではないか。妾はそんな氣がしたのだ。

腰元　そして其舟子と云ふのはあの李左車の事では御座いませんか。

虞姬　妾はあの匈奴のうまい口車を信じはしなかつたけれど、どうせ死ぬる位ならあんな穢はしい敵陣の中で屍を曝すよりもう一眼でもあの方のお顏を見て、あの方の傍でこの罪深い妾を地獄へ蹴落すあの方のおみ足に接吻して死に度いと思つて、妾を救ふと云ふあの男の馬に乘せられてあの大雨の中を歸つて來たのだけれど、あの口先き上手な男をお信じなさらないやうに妾はあの方に忠告する事も出來ない。

腰元　こんな時にあの范增が居てくれましたらね。おや、御覽遊ばせ。軍旗が勇ましく戻つて參りました。

（此時一人の士卒、もうボロ／＼になつて殆んど棒ばかりになつた項羽の軍旗を捧げ慌しく登場。）

虞姬　あゝ何にも云つてお呉れでない。お前の云ふ事は聞かずにも分つてゐる。あの方はお果てになつたのだらう。

士卒　いえ、さうでは御座いません。大王は傷をおうけになりましたが相變らず御元氣です。

虞姬　（やゝ安心の吐息を吐き）あゝ、でもお前は「然し」と云ふのだらう。其「然し」を聞き度くない。

士卒　（腰元に）味方は大敗戰です。大將の英布は眼球を、

射抜かれて馬から落ち、三萬の兵はもう僅か七八千になつて了ひました。

腰元　まあ、どうしてそんな事が。

士卒　李左車が裏切つたのです。あんな憎むべき不埒な奴（やつ）は二匹とはゐません。彼奴の忠義は皆化けの皮だつたのです。今迄彼奴は持久の策を取つて此城で守戰をする說を唱へてゐました。と云ふのはそれ迄は未だ敵の用意が不十分だつたからです。併し今になつて敵の用意は十分整つて遠征の爲めに疲れてゐた兵卒の氣力もすつかり恢復したものですから急に味方の出動を促したのです。それで味方はまんまと敵の術中に陷入れられたのです。（齒嚙みをして口惜しがる）

腰元　さう云へば今日に限つてあの男がしきりに大王に御出動をお勸めしてをりました。

虞姬　妾の豫想は的（あた）つてゐた。そしてあの匈奴は。

士卒　その合戰の騷ぎの中に雲霞と姿をくらまして了ひました。（軍旗をそこに樹てかけ獨り呟く）あゝ、いよいよもう之で味方も運の盡きか。（悄然と退場す）

虞姬　鎧を持つて來てお吳れ。

腰元　まあ。鎧をと被仰るので御座いますか。

（虞姬領く。腰元止むなく隣室より鎧を持ち來る。虞姬それを着る。）

腰元　（手傳ひ乍ら）妾はどんな事がありましても決してお妃のお傍は離れません。

虞姬　馬鹿な。お前は妾が鎧を着る時迄は妾に仕へてよく盡すがいゝ。けれども妾が鎧を着る時が來たら其時は妾から離れなければいけないと云つた前の約束を忘れたのか。

腰元　あゝ、そんな情けない事を。

虞姬　その時は來たのだ。お前は未だ若い。お前は幸福になれるし、又ならなければいけない。妾はお前の盡してくれた永の恩に心からお禮を云ふよ。永い事妾の傍にゐたお前は世間の者の羨む幸福がどんなに果敢ないものかを眼のあたり見知つたらう。併し幸福と云ふものは無いものぢやないのだ。幸福でお居で。之が妾のお前に送る最後の云ひつけだ。そして時々は妾達の事も思ひ出して、妾達の死をお前の生の龜鑑（かゞみ）にするがいゝ。

腰元　（泣き乍ら）でもお妃は幹の幸福許りをお知りになつて蔦に生れた者の幸福が何處にあるかを御存じないのです。妾を幸福にし度いとお思召すならどうか生きてゐて下さいまし。いつ迄も。

虞姬　それはよし大王がおかくれにならうと妾は强ひて生き殘らうと思へば出來ない事はない。敵は妾を殺しはしないだらう。そして誰も表面（うはべ）では體のいゝ事を云ひ乍

ら、腹の中では妾を寵姫にと奪ひ合ふだらう。妾は未だ二十七だ。體はまだ衰へてはゐない。しかし牡丹の花の壽命が短いやうに妾も二十七年の間に永い女の一生を咲き盡したのだ。妾を蹂み躙り度いものは蹂み躙るがいゝ。しかし妾を生きた儘で蹂み躙る事は出來ない。大王と云ふ木の高い枝の上でのみ咲くやうに生れた妾は、其木を切り倒す者共が土足で妾を蹂みにじる時、最早大王の爲めに死んでゐなければならない。妾は最後の望みであつたあの方のお顔を又見る事が出來たのだ。そして妾には幸に子もない。妾は此上猶ほ生き存へてあの方の邪魔になるより、苦痛になるより、恥曝しになるより、早く死んで了ひ度いのだ。

（番卒望臺より入り來る。）

番卒　大王がお歸りになりました。二人の兵が左右からお體を支へてをります。

虞姫　あの方が支へられて？（立ち上る）あゝ、妾はどうしたらいゝだらう。妾は此處にゐよう。そして一捲きの布でもあの方のお傷にあてゝ死に度い。（腰元に）お前は退いてゐてお呉れ。

（腰元泣き沈み乍ら去る。項羽血に染み、二人の侍卒に擁せられて入り來り、椅子に靠れかけさせられる。）

虞姫　あゝ……（項羽の傍におづ／＼近より泣き聲にて）貴方。

侍卒一　並の者なら一遍で參つて了ふやうな箭傷をいくつとなくお受けになりました。あの名馬の烏騅も二三遍脚を射られて躓きましたが、そんな事があればある程大王は人間業とも思へない程の豪勇をお現はしになりました。

侍卒二　全で何萬と云ふ羊の群が一匹の獅子に向ふやうに大王が唯一人で突き進んで入らつしやると只それを遠くから見た丈けで敵勢は蜘蛛の子を散らすやうに逃げて了ひます。その癖逃げて行つては遠くからワイ／＼生意氣な事をぬかすのです。とう／＼仕舞にあの鐘離昧の放つた矢が烏騅の前足を射抜いたので大王は馬諸共にお轉びになり腦をひどくお打ちになりましたが、大王は直ぐ跳ね起きて鐘離昧の方をお睨みつけになりました。するとあの意氣地なしの賣國奴はそれ丈けで馬からころげ落ち、其儘雪崩のやうに押し寄せてゐた自分の兵卒共の足の下に踏み潰ぶされて了ひました。

虞姫　妾が御看護をする。お前等は退るがいゝ。

（侍卒等去る。虞姫項羽の腕をまくりて傷口を洗ひ、繃帶する。）

項羽　（我に返へり呆然と前を見て）小癪な……。天は氣が狂つたのか。でなければ俺は又夢を見てゐるのか。

虞姫　えゝ、貴方は夢を見てゐらつしやるのですわ。

（項羽。始めて虞姫を見る、虞姫哀願するやうな眼つきにて項羽と眼を見交す。項羽突然荒々しく彼女が繃帶しつゝある傷の腕を引きたぐる。）

虞姫　あゝ貴方……（のめるやうに項羽の膝へ泣き伏す）

項羽　（それを汚物のやうに拂ひのけて無理に起たんとして起つ事を得ず、又椅子に倒れ凭る。苦し相に怒鳴る）誰か居らぬのか。

（先刻の腰元出る。）

項羽　（其腰元に）傷を捲いてくれ。

（虞姫。泣きくづれる。腰元は爲す處を知らずうろうろしてゐる。）

項羽　（叱りつけるやうに）捲けと云ふに！

腰元　（はら／＼して）でもお妃が……

項羽　お妃かどうしたと云ふのだ。汚辱の墓場から甦つて來たと云ふのか。俺には妃はない筈だ。

腰元　（思はず掌を合はす）おゝ神樣……。

項羽　女は男の傷を癒す爲めにゐる。其方が女なら早く捲け。だが俺の體を賣女の手にふれさせてはならぬぞ！

腰元　……それは……それは餘りなお言葉です。いくら大王のお仰せでも妾には出來ません。

虞姫　（泣きつゝ）妾はもうお腕のお傷を捲いて了ひました。それが惡かつたら早く妾をお手打ちになさつて下さい。

項羽　（横を向きて）貴樣がそんなに死に飢ゑる處を見ると、貴樣の罪に對する俺の疑ひは猶ほ更ら疵口を擴げるばかりだ。

虞姫　妾は貴方のお手にかゝつてもう一度死に度い爲に墓場から甦つて來た亡靈です。貴方はさうして妾の血が黑い罪の血であるか、潔白な赤い血であるかを御覽になるでせう。さあ。（首をさしのべる）

項羽　恐らく俺は赤い血を見るだらう。そして赤とは馬鹿と云ふ色だ。（赤は漢の色なり。旁白）かうして此白い細首を見ると昔劍の脊中でそれをたゝいておどしてやつた頃の事が思ひ浮ぶわ。

腰元　神樣。どうぞお二人の仲を元にお戻し下さいまし。

（かく云ひて　いきなり懷劍を己が胸に突き刺して俯向きに倒る）

虞姫　（腰元に抱きつく）あゝお前は……妾も死に度い。貴方、妾はどうして死ねばいゝか、早く命じて下さい。

項羽　俺は亡靈の事は知らぬ。

虞姫　まあ……。貴方は妾を殺すよりももつと酷く罰する爲に生殺しにして生かしておゝきになつても未だお足りにならないのですか。貴方のなさり方はあんまりです。

殘酷過ぎます。（泣く）

項羽　俺は貴樣に生きてゐろと云つた事はない。貴樣から死の武器を奪つた覺えはない。

腰元　あゝ貴方が亡びるのは當り前です。天よ。早く此頑(かたくな)な鬼をお亡ぼし下さい。（息絶ゆ）

項羽（怒つて）何。もう一遍云つて見ろ。俺を亡ぼして與れだと。あはゝゝ。簡單な地獄の牝犬め。俺が貴樣等の罪を宥さなかつた事でもあるか。俺は宥し過ぎた。信じ過ぎた。そして奴等は其恩に報いるに俺を欺き、惱みつく事を以てするぢやないか。丁度俺が或る女の頭に皇后の冠を載せてやると其女は其代りに……（と云ひかけた時何處ともなく悲しき樂の音聞こゆ）ぺつ。俺はもう口を利くのも可厭(いや)になつた。

虞姬（傍白）あゝ此の方の額にもお苦しみの膏汗がにじみ出てゐる。

（長い沈默。樂の音次第にはつきり聞こゆ。）

項羽　何だ。あの謠は何だ。

虞姬　あれは楚の歌ですわ。遠い故鄕の歌ですわ。

項羽　どうして今頃あんな謠が聞こえるのだ。誰が謠つてゐるのだ。

虞姬（窓際に行き外を見る）四邊(あたり)は寢沈つたやうにひつそりとしてゐます。聖女山の方から響いて來るのです。

項羽　あの謠を止めさせろ。あの哀れな謠を！

虞姬（戶口の處に行き其邊を見廻す）誰もゐませんわ。

項羽　誰もゐない。番卒はどうした。

虞姬（廊下の方を見て）番卒もゐませんわ。

項羽　皆逃げて了つたのか。

（虞姬。項羽の傍に戾り來て其手を取る。二人、自づと淋し氣に顏を見合はす。間。）

項羽　お前は鎧を着てゐるな。

虞姬　えゝ。何時迄も貴方のお伴をし度い爲めに。（項羽の手を眺めて）貴方は隨分御怪我をなさいましたのね。

項羽　俺の體は傷だらけだ。

虞姬　そしてそれを皆妾が繃帶して上げましたわね。此處にも、此處にも。そして妾はそれを皆一つ一つ覺えてゐますわ。どのお傷は何時、何處の戰でお受けになつたお怪我か。

項羽　古い傷痕には美しい思ひ出が伴ふものだのう。

虞姬　一番古いのは丁度もう十年になりますわね。

項羽　あゝ十年。十年は一夜た。しかし夢は煙ではない。俺は絕えず戰つて打ち勝つて來たのだ。（悲しき樂の音一層明かに聞こゆ）あゝ、しかしあの可厭(いや)な謠を聞くと……。酒を與れ。

虞姬（傍白）まあ珍らしい事。（項羽に酒を注ぐ）

項羽　お前も飲め。俺達は二人きりだ。
虞姫　（酒を飲み乍らひそかに泣く）
項羽　泣いてゐるのか。
虞姫　貴方が又「妾達」と被仰つて下さつたのが餘り嬉しかつたからです。妾の喜びであの哀れつぽい歌を消してやりますわ。（自分の涙をかくす爲めに舞を舞ふ）
（項羽、酒を飲み乍らそれを見て涙ぐむ。涙をまぎらさうとして又飲む。）
項羽　止めろ。何と云ふ情けない舞ひ方だ。そんな葬ひのやうな舞を見てゐると氣分は變る所か却つて滅入る許りだ。お前は絶望してゐるな。
虞姫　何に妾が絶望するのです。
項羽　知れた事だ。俺達の運命にだ。
虞姫　妾の希望は唯貴方にかゝつてゐます。貴方が絶望なさらない間どうして妾が絶望する事がありませう。
項羽　（低く）處が俺も始めて絶望と云ふ事を知つたのだ。
虞姫　え？　貴方は何と被仰つたのです。
項羽　空々しく驚いて見せるな。天命と云ふものも在る事があるのだ。人間はそれを強ひる事は出來ない。
虞姫　あゝ、それが貴方の御言葉でせうか。
項羽　俺の内に詩が湧いた。墨と筆を持つて來い。

（虞姫、それを持つて行く。項羽、白壁に下の詩を書く。）
（「力拔レ山兮氣蓋レ世、時不レ利兮騅不レ逝、騅不レ逝兮可レ奈何、虞兮虞兮奈レ若何、」かく書き畢りてそれを朗讀す。）
虞姫　（嘆息して）妾にも詩が出來ました。（項羽の詩と竝べて書く）
（「漢兵已略レ地、四方楚歌聲、……」）
虞姫　（此處迄書きて筆を止め）あゝ、妾には此先きが出來ません。
項羽　ふむ。お前が何を書かうとしたか俺には解つてゐる。恐らくお前は其先きをこんな風にやらうとしたのだ。『大王意氣盡、賤妾何聊レ生。』とでも。さう書け。俺達はもう互に噓を吐いてゐる時ではない。
虞姫　貴方、妾が此疾うに死んでゐる體で未だ自分の生死の事なんぞ考へてゐるものと思つていらつしやるのですか。又妾達はそんなに弱い、不幸な者でせうか。妾達はこんな苦しい悲境の裡で賤しい敵共の知らない高い幸福や誇りを感じてはゐないでせうか。妾は其氣持を詩にする事が出來ません。妾は今踊る事も、歌ふ事も出來ない程嚴肅な寂しさを感じてゐます。併し妾の内には靜かな明るい〳〵悦びが漲つてゐます。それは生死以上のもの

の氣がします。（次第に感情高まる）あゝ、妾は貴方のお傍にかうしてゐる無言な時間の中に本當に嬉しい祝福の一生を送りました。妾の一生は唯三つの言葉で云ひ盡せます。悦びと、感謝と、誇りと。妾はもう妾ではありません。何時迄も貴方によつて咲かされ、貴方の爲めに咲き匂ひ、咲きほこる悦びの花です。妾の此悦びは天地に漲つて死をも懷に抱き込んで了ひます。たとへ妾達の體はくづれやうとも妾達の生涯感じ通して來た幸福と誇りとは永久に太陽のやうに輝きますわ。たとへ妾達は別別の場所で崩じやうとも妾の屍を吸ひ込む處の地面からは悦びの花が咲いて貴方の魂を其處に招くでせう。（ヒステリカルに）あゝ、妾は何故こんなに嬉しいのでせう。妾を抱いて下さい。馬鹿者の罪を許す帝王の寛大な懷に！

（項羽、虞姬を抱く。莊重な沈默。）

（桓楚一人登場。）

桓楚（禮をして、憤慨し乍ら）實に慨はしい事が起りました。

項羽　どうした。

桓楚　大王はあの謠をお聞きにはなりませんでしたか。

項羽　それがどうした。

桓楚　檢べました所、あれは張良の策略であつたので御座います。誰しもあの笙の音につれて故郷の歌を聽く者は自分の運命を考へるやうな氣持に誘はれます。希望のあるものは希望を感じ、悲境にゐる者は益々悲觀の淵に沈みます。そして人は死を考へ、我身の有樣を考へ、愛する者の身の上を考へます。あの歌を聞いて味方に殘つてゐた八千の將士は悉かり鬱ぎ込んで了ひ、そして大多數の者は互に何の相談をするでもなく、銘々一人々々に陣を拔け出て散つて了つたので御座います。

項羽　何、散つて了つた。

桓楚　私はそれを知つて直ちに嚴重な警戒線を張りました。そして一人でも逃げて行くものを見附け次第取り抑へて嚴しい處分に當てるやうに命じました。所が其の警戒の任に當る者自身が逃げて行くのでどうすることも出來ないやうな次第で御座います。最早後に殘つて居る者は、僅か一千餘りに足りません。

虞姬（獨白）あゝ、僅か一千。そして敵は五十萬。妾達は十重二十重に取り圍まれてゐる。そして敵はもう聲の屆く處迄來て了つたのだ。

桓楚　實に今になつて未だ斯樣な卑怯な手くだを弄して味方を嬲り殺しにすると云ふ根性は七度生き返つて輕蔑しても輕蔑し足りません。下劣な奴の下劣さは量り知れません。

項羽　（激怒して）　行け！　俺はもう貴樣のそんな言葉を聞いて居度くない。

（桓楚去る。）

虞姬　貴方、妾に劍を貸して下さい。妾だつて貴方の妻です。意氣地のない漢の兵卒なら五人や六人は殺せるでせう。妾は貴方と一緒に打つて出て、最後迄潔く戰ふ爲めに此鎧を着ました。そして妾も女ながら項王の妃だと云ふ事を示してやりますわ。あの劍を下さいな。

項羽　（ぢつと虞姬の顏を見）　遣らう。あれは俺が五つの時に死に別れた母親から授かつた寶劍だ。あれを以て俺は最初殷通の首を刎ね落した。次にはお前の戀人の王陵を屠つた。それから後は……地獄の役吏が覺えてゐるだらう。

虞姬　（壁より一つの劍をはづし取り、それを拔きて見てをののく）まあ、此刄の減つてゐる事！　貴方がお遣ひになるには輕過ぎる程減つてゐますわ。併し妾が遣ふには丁度いゝでせう。さあ貴方。此處に接吻をして下さいな。昔から妻に劍を授ける時にはそれに口づけをする事になつてゐます。

（項羽、唇を劍の端に當てた眞似をする。）

虞姬　有り難う！　妾の願は叶ひました。貴方、妾はお先きに行つて待つてをります。（自ら喉を突き刺して倒る）

項羽　（起ち上りて彼女を見下ろす）

虞姬　貴方。今こそ、貴方を欺いたのをお許し下さい。（息絕ゆ）

項羽　（頭髮をかき挘り、虞姬の死に行く魂を呼び戾さうとするやうに强く云ふ）……それは俺の云ふ事だ。欺かれたのは俺ではない、お前だ。俺はお前に瞞まされたやうなふりをしてお前に離別の劍を授けてやつた。俺はお前の大罪をお前自らの手によつて罰しなければならなかつたからだ。今こそ俺もお前の罪を宥してやる。俺の云つた事は皆嘘だ。絕望したと云ふのも嘘だ。あの詩も嘘だ。天命があると云ふのも嘘だ。そんなものがあるものか。あるものは只自力だ。奮鬪だ。捷利だ。あの諸譃の詩よ、此城と共に燒け失せろ。俺は之から一人で故鄕の江東へ逃れて行く。彼處には未だ俺を慕つて、俺の爲めに命を擲つ壯士が數知れずゐるのだ。其兵を率ゐて俺は再び一年の中にあの增長してゐる成り上り者をたたきのめしてくれる。二十四の歲に兵を擧げて以來戰ふ事百戰未だ嘗て負けた事のなかつた俺は今始めて一時の怪我敗けに遭つた。俺は今迄勝ち續ける事によつて力を鍛へて來たやうに、今度は此一時の怪我敗けによつて俺が更にどの位强くなるかを示してやらう。腕が一本でも殘つてゐる限り項羽には大軍は要らないのだ。

（再び悲しき樂の音聞こゆ。項羽呆然として、ふと後ろを振り返へり、血みどろになれる虞姫の屍體を見る。）

項羽　あゝ……しかしお前は死んだな。俺を一人置き去りにして逝つて了つたのだな。それは本當か。お前が死んだのは又夢ではないのか。夢であつて吳れよ。（彼女の屍體をゆする）おゝ、お前のあの可愛い、美しい生命はもう歸つては來ないのか。あゝ。何だつてお前は俺がどうしても罰したければならないやうなあんな取り返へしのつかぬ馬鹿な罪を犯して吳れたのだ。あゝ、俺はそのためにどんなに苦しまされたか。併し最う俺は此樣にお前を宥してゐるのだ。生き返つて吳れよ。おお、わが生活の美しい泉よ。もう一遍生き返つてあの甘へるやうな微笑みを見せて吳れ。「貴方」と云つて吳れ。春の若草のやうな柔い手で傷口に布を捲いて吳れ。抱きすがつてあの執拗い接吻をねだつて吳れ。おゝその可憐な生命は何處へ行つたのだ！

（敵勢の歡呼を擧げて押し寄せる聲笑ひ聲のやうに聞こゆ。）

項羽　（立ち上りて窓の方に行き齒ぎしりしてそれを睨みつけ）己れ、命知らずの夏の蟲共奴。もう俺を滅ぼした氣になつて笑ひ居るな。痴けた慌て者奴。項羽の首が項羽の體にくつ附いてゐる間かりそめにも笑ふ事を怖れおれ！　俺が亡びるものと思ふのか。又此妃の貴い屍を此儘貴樣等の尾籠な眼に晒らさせると思ふのか。（刀をぬいて燭臺を薙ぎ倒す。その火、壁にうつる。虞姫を見て）おゝ併し俺はたとへ萬國を征服して全世界の民をわが足下にひれ伏させようとも俺にはもう捷利の歡びはないのだ。おゝお前は俺を一人此荒凉たる世に殘して俺のあらゆる希望と、力と、生活と、太陽とを墓迄持つて行つて了つたのだな。あゝもう俺に何の生き甲斐があらう。人生があらう。わが妃よ。わが月よ。おゝ、おゝ、おゝ！

（號哭す）

（火焔ひろがる。）

――幕――

大　詰

烏江のほとり

正面は漂渺たる大河の背景。大風に河邊の蘆そよぎ居る。

張良　どうだね。笙を吹かせた僕の策略はうまく行つたらう。

曹參　實際あんな事があれ程奇效を奏するとは全く思ひがけませんでした。流石は貴方の智慧です。

張良　なに、時機さへ誤たなければ運命一つを興こすも倒すも急處に指一本當てれば何うにでもなるのさ。いや、萬事うまく行く時は不思議にうまく行くものだ。韓信だつてあの李左車がまさかあれ程に成功しやうとは思ひがけなかつたに相違ない。

曹參　李左車と云へば彼奴も風變りな男です。虞美人が自害をしたと云ふ事を聞くと何を思つたのか急に劍や具足を投げ捨てゝ「あゝ俺もこれ位惡い事をすればもう澤山だ。之からは罪亡ぼしに俺は道士になる」と云つて百姓のなりをして北の方へ姿をかくして了つたさうですよ。

張良　大方あの女の伴を逃げ出させる證にして項羽の城へ伴をして行く間にあの女に參つたのだらう。はゝ。だが彼奴はもう立派に役割りを果したんだ。之で一段落ついた後では大將に取り立てゝやらうと思つてゐたが、さう云ふ譯なら道士にでも儒者にでも勝手になるがいゝさ。何しろえらい風だ。

曹參　本當にあの墨を流したやうな雲の走つて行く工合と云つたら凄いやうですね。平和の前兆でせう。

部下の者一　私達は此處に隱れてゐたら宜しいのですか。

張良　左樣さ。何處でもいゝ。其邊の蘆の中に隱れてゐるがいゝ。そして俺が合圖をしたら打つて出るのだ。

部下の者二　そしてあの靑鬼を生捕にしなければならないのですか。

張良　はゝ。項羽と云ふとお前等は顏色を變へてビク／＼してゐるな。何。もうそんなに怖がる事はない。奴があの垓下を拔け出てからもう三日になる。其間に奴は殆んど食ふ事も眠る事も出來ずに戰ひづめでゐるのだ。いくら項羽だつてもう此處迄來る時分には疲れ果てゝ劍を揮ふ力もないに相違ない。

（右手より使者登場。）

張良　どうだ。奴は此道に來るか。

使者　來ます。もうあの河を渡りました。

張良　しめた。それでいよ／＼奴を袋の中の鼠にしてやるのだ。

曹參　怖ろしい鼠もあつたものだ。部下にはどの位ゐるのだね。

使者　一昨晩奴が自分の城に火を放つて垓下を出た時には未だ八百騎位はゐた相です。それが昨日は半分に減り、今日あの長い藪を拔けて河べりに來た時にはもう僅か二十騎許りになつてゐました。

曹參　二十騎ではいくら項羽でももう見極めをつけるより外はないだらう。

使者　處が奴は味方が豫ねて用意しておいた一艘の渡し船に乘つて河を渡るともうすつかりそれで落ちのびる事が

出來たものと思つて大喜びに喜び、其渡しの船頭にかう云つた相です。「お前は項羽の雛を助けたのだ。それで俺はお前の一族が永久の榮譽に與るやうに一年後にはお前に會稽の太守の地位を授けてやる事を誓ふぞ。」とかう云つて其誓ひの印に例の烏騅を其船頭に呉れてやつた相です。

張良　は丶、會稽の太守の死に始まつた奴の運命が圖らずも同役の者に仇を取られると云ふ譯だな。

使者　流石にあの名馬と別れる時は奴も涙ぐんでゐたと其船頭が云つてゐましたよ。

曹參　（張良に）とにかく江東へ行く道は此道一本しかないのだから奴が逃げて來ればどうしても此處へ來なければなりません。後ろからは漢王と韓信とが四十萬の大兵を合せて追ひつめて來る。其處で此方には貴方と私とが待ち伏せして最後のとゞめをさして呉れるのです。到る處に斥候が出てゐます。之で仕損ひがあつたらそれ丈けで天下を項羽に戻してやつても然るべきですね。

張良　は丶、奴は未だ前途を夢みて江東へ行きついたら、江東へ行きさへしたら、と思つてゐるのだ。だがもうそろ／＼奴が惨めな姿になつて來る時分だ。皆々、用意はいゝだらうな。

部下一　（おづ／＼）何時でも。

使者二　（急ぎ登場）項羽はもう其處迄やつて來ました。獅子奮迅とはあの事です。全で雷神が氣違ひになつて怒り哮つてゐるやうです。

部下二　（顏色を變へ）やあ、隱れろ。隱れろ。（去る）

張良　部下は未だ少しはゐるのか。

使者二　もうあの桓楚一人きりです。二人とも血みどろになつてゐます。針鼠のやうに矢をさゝれて項羽は倒れては起き、倒れては起き上り、左の手を吊つたまゝあの夏侯嬰を眞二つに斬り倒して了ひました。逆立つた頭の毛を振り亂して走つて來る樣子と云つたら迚も物凄くて人間とは思へません。

張良　いくら強くても力は智慧には叶はない。天命には叶はない。皆、おじけるな！　どんな事があつても此處で奴の首を取り逃がしては面が立たない。

使者二　あゝもう彼處へやつて來ました。もう項羽一人になつてゐます。（逃げ去る）

（張良、呼笛を吹く。鬨の聲上がる。）

張良　よし、此處迄來たら俺が戰つてやる。なんぼ何でもあれ程力を失つてゐる項羽に打つてかゝる勇氣がないと云はれては俺も恥さらしだ。

曹參　いや、貴方一人では危ない。私が助けます。貴方が前から戰つてゐる間に私が後ろから刺してやります。（旁

自）君一人に其功名を得させて堪るものか。

（二人、劍を拔きて右手に去る。鼓を鳴らす音、ワイワイ云ふ鬨の聲。劍戟の音。部下の兵大勢、二人を助けに左手より走りて舞臺を拔け、右手に行く。やがて「萬歲！」の聲聞こゆ。）

（張耳、血に染み、右手に項羽の首を持ち、左手に劍を握りて曹參と共に戻り來る。）

（部下の兵、項羽の體を引きずつて來る。曹參それを奪ひ取る。皆、大變な珍らしい物を見るやうに「ドレドレ」と云ひ乍ら押しのけつゝ怖る〳〵項羽の首と體とを見に來る。風凪ぐ。）

部下の者一　とう〳〵くたばりましたね。

曹參　いや、どうも恐ろしい奴だ。私が横から脇腹をズブりとやると奴は「此首は貴樣等が取つたのではない。俺が呉れてやるのだ」と云つて自分の手で自分の首を斬り落したではありませんか。そして私の劍は全で岩の隙間に突込んだ杖のやうにポキリと折れて了ひました。

部下の者二　さうして未だ暫くは首のない儘で突つ立つてゐましたぜ。

張耳　飽く迄も項羽らしい死に方をした。其點では奴も滿足だらう。さあ、漢王が此首を御覽になる迄は丁重にしておかなければならない。

（豹の皮衣を地に敷き其上に項羽の屍體を置き、臺の上にその首をのせておく。）

曹參　何しろ此人の頑張り強い執着には驚きます。最後の一人になつて自分の脇腹に私の劍でとゞめが刺され、息の根が絶えると云ふ間際迄あはよくば助かつて又運命を盛り返へさうと云ふ望みを失はないのですからね。

部下の者一　本當に大抵の者なら昨日の中にもう降參して了ふか、諦めて自害して了ふかすべき處です。否それどころかあの垓下で、虞美人が果てた時にもう自分も一緒に咽喉を刺して倒れる位が落ちです。それを此項羽と來たら今此處へ來て息の根が切れる迄未だ駄目だとは思はなかつたのです。何と云つても流石は天下の覇王です。

部下の者二　あゝ、漢王が御着きになつた。

（一同各々兜を脱ぎ、それを拔劍の先きにて高く揭げ祝意を表しつゝ萬歲を唱へ、劉邦を迎ふ。劉邦は韓信以下の諸將を從へ赤き旗に圍まれつゝ歡呼の中に勇ましく登場。張耳出迎ふ。）

劉邦　（項羽の屍體に近づきつゝ）とう〳〵打ち取つたな。

張耳　御覽の通りです。之で永年の爭亂も一先づ一段落がつき、天下は漸く暗雲を除く事が出來ました。

韓信　之からは天日も人も共に喜んで中國の民の上に安らかな微笑をもらすでありませう。

劉邦　偉い屍た。虞美人の遺骨と一緒にして丁重に葬るがよい。虞美人の遺骨は何處にあるのぢや。

蕭何　何分城と一緒に灰になつて了つたので遺骨と云ふものは見當りません。處が茲に不思議な事もあればあるもので、あの虞美人の燒け死んだ城跡に昨日から俄かに見慣れない美しい草花が咲いてゐると云ふのです。

劉邦　何。燒け跡の灰の上に花が咲く。

蕭何　誰でもそれを自分の眼で見ない中は嘘だと思はないのが嘘です。處が現に土地の娘などがもう其花を虞美人草などと名付けて、てんでに簪（かんざし）の代りに髮に挿したり、胸に飾つたりして居るのを此眼が見たのでございます。

張良　ふむ乾度又こじつけの好きな迷信家の愚民共が根も葉もない偶然の現象に詩的な因縁をくつつけたのかも知れませんぜ。

劉邦　いや、俺はそれを別に不思議とは思はない。世は不思議許りだ。俺が今迄諸君の力で此危い運命をもちこたへ、かうして遂に敵手の首を打取つて眺める者が項羽である代りに俺となつたと云ふ事がどうして不思議でないと云へやう。丁度よい。此男らしい屍を其虞美人草とやらの茂みの中に埋めるがよい。それがせめてもの供養ぢや。（項羽の首をとつてそれを眺め）わが友、わが恩人、君は遂々（とう／＼）こんな姿になつたのか。（其口に接吻し）祝福されてあれ、英雄の靈よ！　君は英雄らしく生きそして斃れた。かうして今最後に君の首を打ち取つて見ると、私は張りつめてゐた宿年の力が一時に拔けるやうな氣がする。私は自分の禍を除いた今、今更のやうに私の畢生の敵であり、運命の競爭者であつた君が誰より私の生涯の缺くべからざる道づれであり、教訓者であつた事を感じる。君は私の喜びを知つても其淋しさを知るまい。君に次いで覺束なくも天下の主となるべき運命となつた私に、其盃を受けるべき資格を授けて與れた者は君でなくて誰であらう。私は天が私を鍛へる爲めに君を授けて與れた事を感謝する。君がゐて常に私を打ち碎き、私を鞭打つ事がなかつたなら私は天子にならうとも君の如くにして果てなければならなかつたらう。願くは天下が久しく待ち焦がれてゐた之からの平和の日の事業の中に私は天意に叶ふ天子となり度い。思へば今迄の凡てはそれの試錬であつたのだ。かくて君の首を打ちとつた此大爭亂の終結と共に 私は此血腥い禍の劍を此最後の 戰場に葬る。

（自ら劍を取りはづして烏江に投げ込む。）

（月、河の向ふより赫奕と輝き昇る。劉邦、それの方に向つて手を揖しつゝ祈る。）

（一同、首を垂れ。劉邦と共に祈る。月、次第に高く

昇る。）

――静かに　幕――

（一九一七年四月二三日　同年十月二四日再訂正了
一九二四年五月十一日第三回訂正了）

倉田百三篇

出家とその弟子（七幕十三場）

極重惡人唯稱佛。我亦在彼攝取中。
煩惱障眼雖不見。大悲無倦常照我。
（正信念佛偈）

序曲

死ぬるもの

——ある日のまぼろし——

人間（地上をあゆみつゝ）わしは產れた。そして太陽の光を浴び、大氣を呼吸して生きてゐる。ほんとに私は生きてゐる。見よ。あのいゝ色の弓なりの空を。そしてわしのこの素足がしつかりと踏みしめてゐる黑土を。生ひしげる草木、飛び廻る禽獸、さては女のめでたさ、子供の愛らしさ、あゝわしは生きたい生きたい。

（間）わしは今日までさま〳〵の悲しみを知つて來た。しかし悲しめば悲しむだけ此世が好きになる。あゝ不思議な世界よ。わしはお前に執着する。愛すべき娑婆よ、わしは煩惱の林に遊びたい。千年も萬年も生きてゐたい。いつまでも。いつまでも。

顏蔽ひせる者（あらはる）お前は何者ぢや。

人間　私は人間でございます。

顏蔽ひせる者　では「死ぬるもの」ぢやな。

人間　私は生きてゐます。私の知つてゐるのはこれきりです。

顏蔽ひせる者　お前はまたごまかしたな。

人間　私の父は死にました。父の父も。おゝ私の愛する隣人の多くも死にました。しかし私が死ぬるとは思はれません。

顏蔽ひせる者　お前は甘えてゐるな。

人間（稍躊躇して後）わたしは恐れてはゐます。もしや死ぬのではなからうかと。……あゝあなたは私の心を見拔きましたな。本當は私も死ぬのだらうと思つてゐるのです。私の祖先の智慧ある長老たちも昔から自分等のことをモータルと呼んでゐますから。

顏蔽ひせる者　それは本當ぢや。禽獸草木魚介の族と同じく死ぬるものぢや。

人間　あなたはどなたでございますか。その威力ある言葉を出すあなたは？

顏蔽ひせる者　わしは死なざるものに事へる臣ぢや。お前

はわしを知らぬかの。

人間　知つてゐるやうな氣もするのですが、……いゝえ、やはり知りません。

顏蔽ひせる者　お前はたび〳〵わしの名を呼ぶやうぢや。殊に此頃はあまりたび〳〵なので煩はしい程ぢや。

人間　では若しやあなたは？　畏れながらお顏蔽ひをとつて一度だけどうぞお顏をお見せくださいませ。

顏蔽ひせる者　わしはモータルには顏は見せぬのぢや。死ぬるものには。

人間　それは何故でございます。

顏蔽ひせる者　モータルを見るとわしは恥しくて死ぬるからぢや。

人間　死ぬる者といふ言葉には輕蔑の意味が含まつてゐるやうに聞えます。

顏蔽ひせる者　死ぬのは罪があるからぢや。罪のないものはとこしへに生きるのぢや。「死ぬる者」とは「罪ある者」と同じことぢや。

人間　では人間は皆罪人だとおつしやるのでございますか。

顏蔽ひせる者　皆惡人ぢや。罪の價は死ぢや。（消ゆ）

人間　今のは彼れだな。それに違ひない。一體あれは幻だらうか實在だらうか。わしは初めは無論幻だと思つてゐた。けれど段々さうは思はれなくなりだした。だつてあの恐ろしい破壞力は、あまりはつきりしてゐるもの。實在だとして一體あれは何者だらう。私はあれの正體が見たい。それを知りさへしたら恐くはない。私はあの恐ろしい火と水との正體を知つてからは、彼等自身の法則で却つて彼等を使役して私の粉碾場の車をまはさせたり竈を焚かせたりしてゐる。わしは彼の法則を知りたい。彼の本體を摑みたい。でなくてはわしの生活はいつも脅かされるから。あれを知るやうになつたのは私の不幸だ。しかし私の智慧の成長でもある。あゝ恐ろしい彼よ！

顏蔽ひせる者　（あらはる）お前はまたわしを呼んだな。

人間　私はあなたの顏が見たい。

顏蔽ひせる者　ゆるされぬ。

人間　どうあつても。

顏蔽ひせる者　その欲望はお前の分に過ぎてゐる。お前の眼に不淨のある限りは。

人間　弓矢にかけても。

顏蔽ひせる者　あはれなものよ！

人間　（手をのばし顏蔽ひをとらうとする）

顏蔽ひせる者　その手に禍ひあれ！　（遠雷きこゆ）

人間　（ひざまづく）

（幻影の列あらはる。）

顏蔽ひせる者　見よ。

人間　鳥や獸や匍ふものゝ列がすぎる。鷲は鳩を追ひ、狼は羊を掴み、蛇は蛙を咬へてゐる。だがあの列の先頭に甲冑をかぶり弓矢を負うて、馬にのつて進んでゐるのは人間のやうだ。

顏蔽ひせる者　彼は全列を率ゐてゐる。

人間　あれは征服者だ。

顏蔽ひせる者　そして哀れなものゝなかの最も哀れなものだ。

人間　あ、馬に拍車をあてた全列は突進しだした。（兇暴なる音樂おこる）まるで嵐のやうに。あんなに急いでどこに行くのだらう。

顏蔽ひせる者　滅亡へ。すべての私を知らないものゝ行くところへ。

人間　おゝ。

（列通過す。嵐の如き音樂次第におだやかになり、靜かに夢の如き調子となる。新らしき幻影現はる。）

顏蔽ひせる者　見よ。

人間　若い男と女だな。男は逞ましい腕の中に女を抱いてゐる。そして女は男の胸に顏を埋めてゐる。玉のやうな肩に黒髮がふるへてゐる。甘い歡語に醉つてゐるのだらう。

顏蔽ひせる者　よく見よ。

人間　（熟視す）あゝ泣いてゐるのだ。男は女をはなして溜息をついてゐる。淋しさうな顏。

顏蔽ひせる者　幸福の破れるのを知りかけてゐるのだ。

人間　あなたを呼んでゐるのではありませんか。

顏蔽ひせる者　わしに氣がつきかけてゐるのぢや。しかし、わしを呼ぶのを自らさけてゐるのぢや。自分をいつはつてゐるのぢや。

人間　男はふたゝび女を抱かうとしました。けれど女は此度は突きのけました。そして男を呪うてゐます。男は女を捕へました。無理に引つぱつて崖の側に行きました。……あゝ危ない。……（叫ぶ）あッ。

顏蔽ひせる者　わしをまつすぐに見ないものゝ陷るあやまちぢや。（音樂やみ、幻影消ゆ）

人間　私はあなたをみとめてゐます。あなたをまつすぐに見てゐます。あなたの本體を知りたいと願つてゐます。

顏蔽ひせる者　小猿の知識でな。ものゝ周圍をまはるけれど決してものゝ中核に入らない知識でな。

人間　私はあなたの力を認めます。あなたの破壞力を、あなたは何のために、ものを毀すのですか。

顏蔽ひせる者　それは毀れないたしかなものを鍛へ出すた

めぢや。

人間　私はそのたしかなものを求めます。私があなたを知つて以來あなたに毀されないものを探してゐます。

顏蔽ひせる者　見つかつたかな。

人間　まだ。たしかなと思つたものはみなあなたが毀してしまひましたから。征服慾も友情も、戀も學問も。

顏蔽ひせる者　毀れるものはみな毀すのがわしの役目ぢや。（間）

人間　たしからしいものを見つけました。今度は大丈夫のつもりです。

顏蔽ひせる者　何ものぢや。

人間　子供です。たとへ私は衰へて死滅しても、わたしの子供は新しい力で生きるでせう。私の欲望を子供の魂のなかに吹きこみます。

顏蔽ひせる者　お前はまだ知らないな。

人間　え。

顏蔽ひせる者　お前の息子は死んだぞ。

人間　えつ。（眞青になる）そんなことがあるものか。

顏蔽ひせる者　凶報が來るのに間もあるまい。

人間　達者で勉強してゐるといふ手紙が來たのは今朝のことです。

顏蔽ひせる者　午すぎに死んだのだ。

人間　嘘だ。

顏蔽ひせる者　（沈默）

人間　（熟視す）あゝあなたの態度にはたしかさがある。（絶望的に）駄目だ！

顏蔽ひせる者　左樣なら。

人間　（あわてる）待つて下さい。伜は病氣をかくしてゐたのですね。あはれな父に心配させまいと思つて。

顏蔽ひせる者　組で一番元氣だつた。

人間　決闘しましたか。無禮な侮辱者を倒すために。あれは名譽を重んじたから。

顏蔽ひせる者　いゝや。

人間　ではどうして？

顏蔽ひせる者　烟突から落ちたのだ。

人間　（失神したるが如く沈默）

顏蔽ひせる者　二分間前まで日あたりのよい芝生の上で友人とたのしく話してゐた。その時友の一人がふとした思ひつきで、たれか烟突にのぼつて見せないかと云つた。お前の子はこれもほんの氣まぐれに、一つは友達を笑はせようといふ人のいゝおどけた心で、快活に「やつてみよう」といつてのぼりはじめた。仲間はその早業をほめた。ところで、てつぺんのところの足止めの釘が腐つてゐたのだ。

人間　おゝ。

顔蔽ひせる者　人はその日の午後に來た道樂者の烟突掃除人をしあはせものだと云つてゐた。

人間（呻くやうに）　藝術だ。たしかなものは藝術です。わたしはわたしの涙で顏料を溶します。私の畫布の中に毀れないたしかなものを塗りこみます。

顔蔽ひせる者　こゝまで來てはもうたしかなともたしかにないともわしは云はない。だが、お前はお前の病氣のことを忘れはしまいな。

人間　片時も。あなたが私の健康を奪つてしまつたのが私の不幸のはじまりでした。そしてあなたを知るはじまりでした。それからといふもの私がどれほど苦しんでゐるか！

顔蔽ひせる者　お前の體温がもう一度高くなればお前は刷毛を捨てねばなるまい。

人間　おゝ。

顔蔽ひせる者　それは起り得ぬ事だらうか。今だつてお前は毎日熱が出るのではないか。

人間　祈りです。たしかなものは祈りです。私は寢床のなかで身動きも出來なくとも目をつむつて祈ることが出來ます。

顔蔽ひせる者　一つの打撃がお前の頭の調和を破れば、お前は今まで祈つた口で他愛もない囈言を語り、今まで殊勝に組み合せた手で穢らしいことを公衆の前にして見せるかも知れない。あの動物園の猿のやうに。

人間（よろめく）　そんなことはあり得ぬことだ。

顔蔽ひせる者　あり得ることだ。現にお前たちの仲間は此頃盛に殺し合つてゐるやうだが、そのやうな白痴が幾人出來たか知れない、――

人間　あなたはあまり殘酷だ。

顔蔽ひせる者　お前の價に相當したゞけ、――

（鳥獸等無數の生物の群のおらぶ聲起る。）

人間（をのゝきつゝ）　あの聲は？

顔蔽ひせる者　お前の殺した生物の呪詛だ。

人間　あゝ。（頭を抑へる）

顔蔽ひせる者　お前は姦淫によつて生れたものだ。それを愛の名でかくしてはゐるが。

人間　私の罪を數へたてるのはよしてください。

顔蔽ひせる者　限りがないから。――

人間　私は共喰ひしなくては生きることが出來ず、姦淫しなくては產むことが出來ぬやうにつくられてゐるのです。

顔蔽ひせる者　それがモータルの分限なのだ。

人間（訴へるやうに）　人間の苦痛を哀れんで下さい。

顔蔽ひせる者　同情するのはわしの役目ではない。

人間　何故？　あゝ何故でございますか。

顔蔽ひせる者　刑罰だ！　（大地六種震動す）

人間（地に仆れる）

顔蔽ひせる者（消ゆ）

（舞臺暗黑。暴風雨の音。やがて其音次第に靜まり、舞臺ほの白くなり、うす甘き青空遠くに見ゆ。人間の姿屍の如く横たはれるが見ゆ。かすかなる音樂。）

童子の群（天に現はる。歌を唱ふ）
すべての創られたるものに惠みあれ。
死なざるものゝめぐし子に幸ひあれ。

童子の群（消ゆ）

人間（起き上り天を仰ぐ）遠い〳〵空の色だな。そこはかとなき思慕か、わたしを惹きつける。吸ひ込まれるやうなスヰートな氣がする。此世界が善いものでなくてはならぬといふ氣が本當にしだした。たしかなものがあることは疑はれなくなりだした。私はたしかに何物かの力にただめられてゐる。けれど惠みにさだめられてゐるやうな氣がする。それをうけとることが、すなはち福ひであるやうに。行かう。（二三歩前にあゆむ）向うの空まで。私の魂が舉げられるまで。

——黑幕——

第一幕

人物

日野左衞門（四十歲）
お兼　その妻（三十六歲）
松若　その息。出家して唯圓（十一歲）
親鸞（六十一歲）
慈圓　その弟子（六十歲）
良寛　その弟子（二十七歲）

第一場

日野左衞門屋敷。座敷の中央に爐が切つてある。長押に槍、塀に鐵砲、笠、蓑など懸けてある。舞臺の右に偏つて門がある。外は一寸した廣場があつて通路に續いてゐる。雪が深く積つて路のところだけ低くなつて居る。

お兼（爐の側で着物を縫うて居る）やつと此處まで出來た。後四五日もすれば出來あがるだらう。何しろ早くしなくてはもう直ぐお正月が來る。松若も來年は十二になるのだ。早く大きくなつてくれなくては。ほんとに引き延ばしたいやうな氣がする。（間）それにつけても左衞門殿の此の頃の氣の荒みやうはどうしたものだらう。段

段ひどくなるやうだ。國に居た頃はあんな人では無かつたのだけれど。ほんとに末が案じられてならない。（外を嵐の吹き過ぎる音がする）今日も大層立腹して吉助殿の家に行かれたのだけれど、面倒な事にならなければよいが。（立ちあがり、戸をあけて空を見る）おゝ寒む。（身慄ひする）また降つて來るな。（戸を閉め爐の傍に來り、火掻きで火をつゝき手をかざす）松若は今日は遲い事、寒いのに早く歸つて來ればよいのに。（あたりを見廻し）もう暗くなつた。（立ちあがり、押入から行燈を出して火を點ける。佛壇にお燈明をあげ、手を合はせて拜む）

松若　（登場。色目の惡い顏。膨れるやうに着物を着てゐる。戸をあける）母樣、只今。（風呂敷包みと草紙とを投げ出し）おゝ寒い、さむい。（手に息を吹きかける）

お兼　おゝお歸り。寒かつたらう。さあおあたり。今日は大變遲かつたね。

松若　（爐の側に行く）お師匠樣のうちで御馳走が出たの。皆お呼ばれしたのだよ。それで遲くなつたの。

お兼　さうかえ。それはよかつたね。御行儀よくしていただいたかえ。

松若　あゝ。わしの清書が松だつたのだよ。

お兼　さうかえ。それはえらいね。草紙をお見せ。此の前の清書の時は竹だつたにね。（松若より草紙を受取り、擴げて見る）なる程、「朱に交はれば赤くなる」だね。大分しつかりして來たね。も少し字配りをよくしたら尙いゝだらう。丹誠してお稽古したお蔭だよ。（松若の頭を撫てる）

松若　吉助さんとこの吉也さんは梅だつたよ。

お兼　あの子はいたづら好きでなまけるからだよ。（間）あの、ちよいと立つて御覽。（松若立つ。もの指しで丈を測る）三寸五分だね。ではあげを短くしなくては。お前の著物だよ。よくうつるだらう。お正月にこれを着てお師匠樣の所に年始に行くのだよ。

松若　お正月はいつ來るの。

お兼　もう十二日寢ると來るよ。

松若　お父さんは？

お兼　お父さんは吉助殿の所へ行かれた。もうおつ付けお歸りだらう。

松若　吉助のうちの吉也は私をいぢめるよ。今日もお稽古から歸りに、皆して私の惡口を云つて。

お兼　え。惡口をいつて虐めるつて。ほんとかい。

松若　松若のお父さんは渡り者の癖に、百姓を虐めたり、殺生をしたりする惡い奴だつて。

お兼　まあ（暗い顏をする）そんな事を云ふかい。

松若　うむ。宅のお父さんをいぢめるから、私はお前をい

ぢめてやると云つて雪をぶつかけたよ。

お兼　悪いことをする奴があるね。大丈夫だよ。私がお師匠様に云ひつけてやるから。

松若　いんや。私が一度お師匠様にいひつけたら、歸り道に餘計にいぢめたよ。(殘念さうに) 道ばたの田の中に押し落したりしたよ。

お兼　まあ　そんな酷い事をするかえ。心配おしでないよ。私が今によくしてあげるからね。

松若　うむ。(うなづく)

お兼　(戸棚から皿に干柿を容れて持ち來る) さあ、これをおあがり。秋に母さんが干して置いたのだよ。私は一寸お臺所を見て來るからね。(裏口から退場)

(松若柿を食ふ。それからあたりを見廻はし佛壇の前に行き、立つた儘不思議さうに佛像を見る。それから坐つて一寸手を合はせ拜むまねをする。それから卓の上の本を探がし、繪本を一册持つて爐の傍に來り、好奇心を感じたらしくめくつて見る。)

お兼　(登場。前掛けで手を拭きつゝ) おいしかつたらう。(間) 何を見てゐるのだえ。

松若　うむ。おいしかつたよ。(熱心に繪本に見入る)

お兼　今の間に少し裁縫(しごと)をしよう。(爐の傍に近く縫ひさしの着物を持ち來り針を動かす)

(兩人しばらく沈默。)

松若　母さん。これ何の繪だえ。

お兼　(針を止めて) お見せ。(覗き込む) それはね、お釋迦様といふ佛様がおなくなりなさつた繪だよ。(針をつゞける)

松若　さうかい。衣を着た澤山の坊さんが側で泣いてゐるね。

お兼　皆なお弟子たちだよ。偉いお師匠様がおかくれなされたのだからねえ。

松若　ふむ。猿だの蛇だの居るね。鳩も居るよ。皆泣いてゐるね。どうしたのだらうね。

お兼　お釋迦様は慈悲深いお方で畜生でも可愛がつておやりなされたのだよ。それで可愛がつて呉れた人が死んだので皆泣いてゐるのだよ。

松若　ふむ。(考へて居る)

左衞門　(登場。獵師の裝をしてゐる。鐵砲を擔ぎ、腰に小鳥を二三羽携へてゐる) 歸つたよ。馬鹿に寒い。

お兼　お歸りなさい。待つて居ました。寒かつたでせう。降つてゐますか。(戸の側まで出て迎へる)

左衞門　大雪だよ。この分では道が塞がつてしまふだらう。(雪を拂ふ)

松若　父樣。お歸りなさい。(手をつき頭を屈む)

左衛門　うむ。（頭をなでる）今日はお師匠樣とこのお振舞だつたつてな。
松若　あい。よく知つてるね。
左衛門　吉助かたで吉坊に聞いて來た。
お兼　あの話の首尾はどうだつたの。（鐵砲を塀に架け、獲物をかたづける）
左衛門　まるで駄目だ。今日は散々な目に遇つた。朝から山を駈け廻つてやつと雜鳥が三羽だらう。それから吉助の宅に寄つたが、あの奴狡い奴でね。私が强く出ると淚をめそ〳〵こぼして拜み倒さうとするのだよ。それでゐて此方が優しく出ようものなら、酷い目に遇はせるのだからね。全く此邊の百姓は手に合はないよ。（着物を着換へ、爐の側に寄る）
お兼　それでどういふ話になつたの。
左衛門　正月までに拂はなければ此方は此方の考へを實行するからさう思へときめ付けてやつたよ。そしたら吉助が眞靑になつたよ。お袋はすがりついてことわりをするしね、吉也まで側で泣き出したよ。
お兼　まあ可哀相ではありませんか。も少し待つてお遣りなさいな。あの宅でも本當に困つてゐるのでせうから。
左衛門　どうだか知れたものではない。私はあの吉助が心から嫌ひなのだ。腹の惡い癖にお追從を使つて。此の春だつてそ知らぬ顏で宅の田地の境界を狹めてゐたのだ。
お兼　それは吉助も惡いには惡いけれど、さうなるのも餘程困るからのことですわ。
左衛門　困ると言へば宅だつて困つてるではないか。此方に移つて來てからといふもの、不運つゞきで、少しばかりの貯へで買つた田地は大水で流れるし、松若は病氣をするし、なか〳〵樂な渡世ではないよ。優しくして居ればきりが付かないのだ。吉助ばかりではない。此邊の百姓は皆さうだ。私は時々自暴になるやうな氣がするよ。世の中の人間が皆嫌になるよ。
お兼　でも此のお正月だけは無事に祝はせておやりなさいな。餘り手荒な事をして恨みを結んだりしては寢覺めがよくないわ。人に撲かれたのでは寢られるが、人をたゝいたのでは寢られないと云ふではありませんか。（間）まあ御飯をおあがり遊ばせ。（裏口より退場）
左衛門　松若、お前はさつきから何を見てるのだい。
松若　母樣の繪の本だよ。佛壇の卓にあつたのだ。澤山繪があるよ。御殿やお寺の繪もあるし、鬼が火の車を曳いてゐる繪もあるし、それから……
左衛門　はあ。あの「地獄極樂のしるべ」か。
松若　地獄極樂つて私知つてるよ。善いことをしたものは死んで極樂に行くし、惡い事をしたものは地獄に行くの

だらう。だがあれは本當かい。

左衛門　皆噓だよ。さう言つて警めてあるのだよ。（考へて）若し本當としたら、地獄だけあるだらうよ。はゝゝは。

松若　此處に子供が川端で澤山石を積んで、鬼が金棒で崩してゐる繪があるがこれは何だらうね。

左衛門（暗い顏をする）それは賽の河原と云つて子供が死んだら行く所だ。

松若　私は死んだら賽の河原へ行くのかい。

左衛門　皆噓だ。つくり話だ。（松若の顏を見る）その本はもう見るのお止し。

松若　私は何だか此の本がおもしろいよ。

左衛門　いやそれは子供の見る本ではない。（松若より繪本を取る）お前は寒いからもうお寢みよ。また風を引くといけないからな。

松若　まだ睡くないよ。

お兼　（登場。箱膳の上に德利を載せて左衛門の前に置く）お待遠さま。餓じかつたでせう。さあお食りなさい。（德利を持つ）

左衛門　（盃をさし出し注いで貰つて飮む）お兼。私もな酷いことをするのは元來好な質ではないのだ。小さい時から人の喧嘩をするのを見ても胸がドキ〳〵した位だよ。だがあんな風にして殿樣に見捨てられて、浪人になつて此方に渡つて來てから、私は世間の人の腹の惡さを嫌になる程知つたからな。人は皆惡いのだ。信じたものは賣られるのだ。心の善いものは馬鹿な眼を見せられて、迚も世渡りは出來ないのだ。私は嘲笑したいやうな氣がするのだ。私は思ふのだ。私の優しいのは性格の弱さだ。私はそれに打克たねばならない。酷い事にも耐へる强い心にならねばならない。私は自分で酷い事に自分をならさうと努めて居るのだよ。

お兼　まあ。そんな事をする人があるものですか。自分の心を善くせうと心懸けるかはりに惡くせうとして骨折るなんて。

左衛門　（飮み〳〵語る）私は惡人になつてやらうと思ふのだ。善人らしい面をしてゐる奴の面の皮を剝いでやりたいのだ。皆噓ばかりついてゐやがる、私はな、これで時々考へて見るのだよ。だが死んでしまふか、盜賊になるか、この世の渡り方は二つしか無いと思ふのだ。生きてるとすれば食はねばならぬ。人と爭はずに食ふとすれば乞食をする外はない。世の中の人間が皆もの〻解る人間なら乞食は一番氣持のいゝ暮らし方だらう。だが嫌な人間から犬に物を投げてやるやうにして哀れみの目で見られて殘り物を貰つて生きるのは一番辛いからな。そし

て世の中の人間はみんなそのやうな手合ばかりだからな。乞食も出來ないとすれば、寧ろ力づくで奪ふ方が幾ら氣持がよいか知れない。どうせ爭はねばならぬのなら、私は慈悲深さうな顏をしたり、また自分を慈悲深いもののやうに考へたり、虚僞の面を被ぶるよりも、私は惡者ですと銘打つて出たいのだ。さもなくば乞食をするか。それも業腹なら死んでしまふかだよ。ところで私はまだ死にともないのだ。だから強くなくてはいけないのだ。だが私は氣が弱いでな。氣を強くする鍛錬をしなくてはいけないのだ。今日も吉助の宅でお袋に泣かれた時にはふら／＼しかけたよ。私は私を叱つてもつと氣強くしなくてはならないと腹を決めて怒鳴り付けてやつたのだよ。惡くなりくらなら、俺だつて幾らでも惡くなれるぞと云ふ氣がしたよ。（酒を飮む）

お兼　まあ、あなたのやうな一概な考へ方をなさる人もないものですわ。その樣な事を松若の前で話すのは止して下さいな。自分の子にお父さんがお前は泥棒になれと敎へるやうなものではありませんか。あなたはとても惡者になれる柄では無いのですからね。根が優しいのですからね。それは善い性格ではありませんか。

左衞門　いや、私は自分を善い性格とは考へたくないのだ。善い人間なら何故乞食をしないのだ。いや何故死なないのだ。皆嘘の皮だよ。私の言ふ事が解らないかい。（段々興奮する）

お兼　あなたの心持は解りますけれどね。

左衞門　私は氣が弱くていけないのだ。此方に來てから段段貧乏になつたのもそのためだよ。樣子を知らぬ武士の果てと見て取つて、損と知れてゐる商賣をつかませたり、田地をせばつたり、貸した金は返りはしないし。今にいやいやで乞食にならねばならなくなるよ。嫌な／＼奴の門口に哀れみを乞うて親子三人立たねばならなくなるよ。私はお前や松若が可愛いでな。今の内にしつかりしなくては末が知れて居る。何しろ氣が弱くては駄目だよ。（酒をがぶ／＼呑む）

お兼　（心配さうに）もうお止しなさいな、お酒は。あなたは段々氣が荒くおなりなさるのね。私は本當に心配しますわ。それに近所の評判も惡いのですもの。今日もね。（聲を落して）松若から聞くと、吉也が他の子供をけしかけて松若をいぢめるのですつて。それがあなた、皆あなたの氣荒い勢からなのですよ。

左衞門　何だつて私の勢だと云ふのだい。

お兼　松若のお父さんは殺生をしたり百姓をいぢめる惡い奴だつていふのですよ。宅のお父さんをいぢめるから、お前を俺がいぢめてやると云つて雪をぶつかけたり、道

ばたから押し落したりするさうですよ。

左衞門　そんな事をするかい。惡い奴だ。お師匠樣に云ひつけてやれ。

お兼　さうすると歸り道に餘計に酷い目に會はせるさうですよ。

左衞門（怒る）吉也の惡る奴。よし、そんな事をするなら俺に考へがある。明日にも吉助の宅に行つてウンといふ眼に遭はせてやる。

お兼　そのやうな手荒な事をしたのでは却つて松若のためにもなりませんわ。それよりもあなたがもつと氣を靜めて百姓などを勞つてやつて下さればよいのですわ。無理をしないであなたの生れ付きの性質の通りにして下さればよいのではありませんか。

左衞門　それでは見る／＼家が潰れるよ。此方が優しく出れば、向うも、正直に應じるといふやうに世の中の人間は出來てゐないのだ。飽くまで優しく出る氣ならさつきも言つたやうに嫌な奴の門口に立つ覺悟でなくては出來ないのだ。お前にその覺悟があるかい。私は世渡りの巧みな性質に生れて來てゐないのだ。此の性質を鍛へ直さなくては世渡りが出來ないのだ。妻子を養ひ外の侮辱を防ぐ事が出來ないのだ。（氣を焦立てる）もつと惡に耐へ得る強い性格にならなくてはならないのだ。俺はお蔭で段々惡くなれさうだよ。昔は人樣に惡く言はれると氣になつて夜も眠られなかつたものだ。今は惡く云はれても平氣だよ。いや氣持がいゝ位だよ。俺も強くなつたなと思ふのでな。鐵砲で鳥や獸を打つのでも鷄を屠すのでも、初めは嫌でならなかつたが今では何でもなくなつた。（酒を飮む）

お兼　私はあなたに云はうと思つてゐたのです。後生だから獵はもう止して下さいな。私殺生は心から嫌ですのよ。獵をしなくつては食べていけないと云ふのではなし。

左衞門　初めは嫌々やつたのが、今ではおもしろくて止められないのだ。向うの木の枝に鳥がゐる。あれはもう俺のものだと思ふと勝ち誇つたやうな愉快な氣がする。殺すも生かすも俺の心のまゝだでな。バタ／＼落ちて來た奴を拾ひ上げて見ると、まだ血が翼について温かいよ。偶には翼を打たれて落ちてバタ／＼してまだ生きてゐるのもあるよ。そのやうな時には永く苦しませずに首をねぢつて參らせてやるのだ。

お兼　私そんな話を聞くのは、もう嫌ですから止して下さい。私のお母さんは生きてるとき生き物を殺すのをどんなに嫌がつたか知れません。あんなに信心深かつたのですからね。私などはお母さんのしつけの勢か、殺生は心から嫌ですわ。あなたが庭で鷄を屠しなさる時のあの鳴

聲のいやな事といつたらありませんわ。それに（松若の方を一寸見て）それに私は何だかあのやうに松若の弱いのは、あなたが殺生をしだしてからのやうな氣がするのですよ。

左衞門　そんな馬鹿な事があるものか。お前の御幣かつぎにもあきれるよ。

お兼　それにあなたは、信心氣がありませんからね。せめて朝と晩とだけはお禮だけでもなさいましな。私などは一度でも拜むのを怠ると氣持が惡くていけませんわ。ほんに行く末が案じられますわ。此のやうな事では運の廻つて來ないのも無理はありませんわ。

左衞門　佛樣を拜んだ所で仕方がないよ。私は佛像と面を見合せて坐わるのが辛いのだよ。（間）今晩は變な氣がして一寸も醉へないよ。お前が陰氣な話ばかりするものだから。もつと醉はなくては。（酒を盃に二三杯續けて呑む）

お兼　そんな無茶に呑むのはお止しなさいな。（左衞門を心配さうに見つゝ一寸沈默）私はほんとに心細くなるわ。

（戸の外を嵐の音が過ぎる。）

お兼　ひどい吹雪ですねえ。

（左衞門は手酌でチビリ／＼飲んで居る。お兼は默つて考へてゐる。松若は木を見てゐる。親鸞。慈圓。良寛。舞臺の右手より登場。墨染の衣に、笈を負ひ草鞋を穿き、杖をついてゐる。笠の上には雪が積つてゐる。）

慈圓　大變な吹雪になりましたな。

良寛　段々ひどくなるやうで御座います。

慈圓　お師匠樣。あなたは大層お疲れのやうに見えますな。

良寛　おん衣の袖はしみて氷のやうに冷めたうなりました。

親鸞　もう日も暮れて大分になるな。

慈圓　雪で道も塞がつてしまひました。

良寛　私はもう歩く力が御座いません。

親鸞　では此の邊りで泊めて貰はうかな。

慈圓　此の家で一夜の宿を乞うて見ませう。

良寛　他の家も見あたりませんね。（戸口に行き戸を叩く）もし、もし。

松若　（耳を澄ます）父さん。誰か戸を叩くよ。

お兼　風の音だらう。

左衞門　此の吹雪に外に出るものは無いからな。

松若　いんや。確かに誰か戸を叩いてるよ。

良寛　（戸を強く叩く）もし／＼。お願ひ申します。お願ひ申します。

お兼　（耳を澄ます）ほんとに戸を叩いてるね。誰か人聲

がするやうだ。（庭に下り戸を開く）どなた樣で？　（三人の僧を見る）何か御用で御座いますか。

（松若母の後ろより好奇心で眺めて立つてゐる。）

眞寛　旅の僧で御座いますが、此の吹雪で難儀致して居ります、誠に恐れ入りますが、一夜の宿をお願ひ致す事は出來ますまいか。

お兼　それはお困りで御座いませう、もう十丁程おいでなされば宿屋が御座います。

慈圓　あの、私たちは托鉢致して歩きますものでお錢を持つて居りませんので。

眞寛　どのやうな所でも只眠ることさへ出來ればよろしいので御座いますが。

お兼　左樣で御座いますか。（三人の僧をつく〴〵見る）では一寸夫に訊ねて見ますから。そこはお寒う御座います。内に入つてお温まり遊ばせ。

左衞門　お兼。何だい。

お兼　旅の坊さんなんですがね。三人ですの。此の雪で困るから一夜だけ泊めてくれないかとおつしやるのです。お錢がないから宿には着けないのですつて。

（三人の僧内に入り庭に立つ。）

左衞門　（いやな顏をする）折角だがお斷りしよう。

お兼　でも困つていらつしやるのだから泊めてあげようではありませんか。

左衞門　いや泊める譯には行かないよ。

お兼　あなたいゝではありませぬか。何も迷惑になるのではなし。それに御出家樣ではありませぬか。

左衞門　いやだよ。（聲を荒くする）坊さんだから泊められないのだ。私は坊さんが大嫌ひだ。世の中で一番嫌ひだ。

お兼　そんな失禮なことを。（慈圓に小聲にて）お酒に醉つてゐるのです。氣を惡くしないで下さい。

慈圓　（左衞門に）何處でもよろしう御座いますから、今晩一夜だけとめて戴かれますまいか。

左衞門　お斷りします。

眞寛　緣先でもよろしう御座いますが。

左衞門　くどい人だな。

慈圓　御師匠樣どう致しませう。

親鸞　私がも一度賴んで見ませう。（左衞門に）御迷惑では御座いませうが、難儀を致して居りますで、御緣と思召して一夜だけ泊めて戴かれませんでせうか。

左衞門　お前さんは師匠樣だな。（冷笑する）なる程有り難さうな顏をしておいでなさるよ。だが生憎私は坊さんが嫌ひでしてな。蟲が好きませんのでな。

親鸞　お嫌やなのは解りました。だがあはれんでお泊め下

さいまし。

左衛門　お前さん方をあはれむなんて。どう致しまして。一番お羨ましい御身分でいらつしやいますよ。此の世では皆に貴ばれて死ぬれば極樂へ行かれますでな。あなたがたは善い事しかなさらないさうだでな。私は惡い事しかしませんでな。どうも肌が合ひませんよ。

親鸞　いゝえ。惡い事しかしないのは私の事で御座います。

左衛門　（親鸞の言葉には耳を傾けず）あなたがたのなさる說教といふものは有り難いものですな。お蔭で世間に惡人がなくなりますよ。喜捨、供養をすれば罪が滅びると敎へて下さるので、皆喜んで米やお錢を持つて行きますでな。お寺は繁昌致しますよ。坐つて居て安樂に暮して行けますよ。善い事をすれば極樂に行けるとは有り難い敎へで御座います。ところで生憎此の世の中は善い事が出來ぬやうに工夫してつくつてありますでな。皆極樂參りが出來ますよ。はゝゝゝ。

親鸞　そのやうにおつしやるのは御尤で御座います。

左衛門　あなた方はまつたくお偉らいよ。六ケ敷い御經を澤山讀んで居られるでな。またその御經に書いてある通りを實行なさるのでな。殺生もなさらず、肉も喰はず、妻も持たず、まるで生きた佛様見たやうで御座いますよ。心の內で人を呪ふ事もなければ、婦を見て色情も起りませぬのでな。いや汚ない夢さへも御覽になりませぬのでな。御立派な事ですよ。左様な立派なお方々に、私見たやうな汚れたものゝ宅に泊つて戴いては畏れ多い氣がしますのでな。

親鸞　滅相な。私は決してあなたのおつしやるやうな淸い人間ではありません。

左衛門　私は今朝も殺生しました。それから喧嘩をしました。それから酒を飮みました。それから今はお前さん方を……

お兼　左衛門殿。ちとたしなみなさらぬか。傍の聞く耳も辛いではありませんか。（顏を赤くする。親鸞に）御出家様。どうぞ堪忍してやつて下さいまし。（左衛門に）あなたそんなに口汚なく云つたり、皮肉を云つたりしないでも、お斷りするのなら、さう云つておとなしくお斷りすればいゝではありませんか。

左衛門　だから始めから斷つてるではないか。私は坊さんは嫌ひだから、お泊め申す事は出來ないのだ。

慈圓　では私ら二人は泊めて戴かなくともよう御座います。どうぞ御師匠様だけは泊めてあげて下さいませ。大變お疲れで御座いますから。

良寛　御覽の通り寒さに慄へていらつしやいます。

慈圓　吹雪さへ止めば、明日の朝早く發足致しますから。

良寛　一夜の宿を頼むのも何かの因縁と思し召して。
左衛門　出來ないと云つたら出來ません。
（外で嵐の音がする。）
慈圓　私はどうなつてもよろしい。唯お師匠だけは……（涙ぐむ）
左衛門　生憎そのお師匠様が一ばん嫌ひだよ。人に虛僞を教へるものは尙更いやだよ。私はな惡人だ。惡人といふ事を知つてゐるのだ。
親鸞　あなたはよい所に氣がついて居られます。私とよく似た氣持を持つてゐられます。
左衛門　はゝゝ。あなたと私と似てたまるものかい。
良寛　では宿の儀はかなひませぬか。
左衛門　かなひません。
慈圓　ではあきらめます。どうぞその爐で衣を乾かす事だけお許し下さい。しみて氷のやうに冷めたくなつてゐます。
お兼　さあ、さあどうぞお乾かしなさいませ。今炭をついでよい火をおこしてあげますから。（爐の方に行かんとする）
左衛門　（さへぎる）餘計な世話を燒くな。（聲を荒くする）お前がたは何といふくどい奴だらう。さつきから私がこれ程云ふのが解らないのかい。少しは腹を立てい。

此の僞善者奴。面の皮の厚い――
お兼　左衛門殿、左衛門殿。
左衛門　（親鸞に）早く出て行け。此の乞食坊主奴。（親鸞を押す）
慈圓　あまりと云へば失禮な――
良寛　お師匠様に手を掛けたな。
左衛門　早く出て行け。（良寛をこづく）
良寛　なにを。（杖を握る）
左衛門　打つ氣か。（親鸞の杖を取つて振りあげる）
親鸞　良寛、手荒な事はなりませぬぞ。
（親鸞二人の中に割つて入る。左衛門親鸞を打つ。杖は笠にあたる。）
慈圓　お師匠様早くお出遊ばせ。（左衛門をさへぎる）
松若　お父さん。お父さん。（うろ〳〵する）
お兼　（眞青になる）左衛門殿。左衛門殿。（後から左衛門を抱き止める）
左衛門　放せ。打ち撲つてやるのだ。
（親鸞、慈圓、良寛、戸の外に出る。左衛門杖を投げる。杖は雪の上に落ちる。）
松若　お父さん。お父さん。（左衛門にしがみついて泣く）
お兼　（外に飛んで出る。おど〳〵して親鸞をさする）痛かつたでせう。許して下さい。私どうしませう。お負傷

はありませぬか。

親鸞　大事ありません。托鉢をして歩けば此の様な事は時時あることです。

お兼　どうぞ私の夫を呪つてやつて下さいますな。（泣く）悪い奴でも赦してやつて下さいまし。

親鸞　心配なさるな。私は寧ろ彼の人は純な人たと思つて居ますのぢや。

慈圓　あまり酷過ぎると思ひます。

良寛　（涙ぐむ）お師匠様。私はなさけなくなつてしまひました。

――黒幕――

第　二　場

（舞臺一場と同じ。夜中。家の内には左衞門、お兼、松若三人枕を並べて寢て居る。戸の外には親鸞石を枕にして寢てゐる。良寛、慈圓雪の上にて語り居る。）

慈圓　夜が深けて來ましたな。

良寛　風は落ちましたけれど、餘計に冷たくなりました。

慈圓　足の先がちぎれるやうな氣がします。（間）お師匠様はお息みで御座いますか。

良寛　さつきまで念佛を唱へてゐられましたが、疲れて寢入り遊ばしたと見えます。

慈圓　すや／＼と眠つてゐられますな。

良寛　お寢顏の尊い事を御覽なさいませ。

慈圓　生きた佛様とはお師匠様のやうな方の事でせうねえ。

良寛　私はおいとしくてなりません。（親鸞の顏に雪がかゝるのを自分の衣で蔽ふやうにする）

慈圓　なか／＼の御苦勞では御座いませんね。

良寛　私は若いからよろしいけれど、お師匠様やあなたは嘸辛う御座いませう。おからだに障らなければよう御座いますが。（親鸞の體に手を觸れて）まるでしみるやうに冷めたくなつてゐられます。

慈圓　此の屋の家内は爐の側で温かく休んで居るのでせうね。

良寛　主人はあまり酷過ぎますね。酒の上とは云ひながら。

慈圓　縁の先位は貸してくれてもよさゝうなものですにね。

良寛　私は行脚しても此の樣な眼に遭つたのは初めてゞす。

慈圓　お師匠様を打つなんてね。

良寛　私はあの時ばかりは腹が立つて怺へかねましたよ。お師匠様がお止めなさらぬなら打ちのめしてやらうと思ひました。

慈圓　あの手が腐らずにはゐますまい。（間）お師匠様の忍耐強いのには感心致します。私は越路の雪深い山道をお供をして永らく行脚致しましたが、それは〳〵様々な難儀に出遇ひました。飢ゑ死にしかけた事もありますし、山中で盗賊に襲はれたこともありますよ。親不知、子不知の險所を越える時などは、岩角で御足をお負傷なされて、足袋は紅く血が滲みましてな。

良寛　京にゐられた時には草鞋など召した事はなかつたのでせうからね。

慈圓　いつもお駕籠でしたよ。大勢のお弟子がお供に着きましてね、お上の御勘氣で御流罪にならせられてから此の方の御辛苦といふものは、とても言葉には盡せぬ程で御座います。

良寛　あなたはその頃から片時離れずお供遊ばしていらつしやるのですからね。

慈圓　私は死ぬまでお師匠様に從ひます。京に居る頃から受けた御慈しみを思へば私はどんなに苦しくても離れる氣にはなられません。

良寛　御尤もで御座います。（間）私は比叡山と奈良の僧侶たちが憎くなります。か程の尊い聖人様を何故惡し様に讒訴したので御座いませう。あの頃の京での騷動の程も忍ばれます。

慈圓　あの頃の事を思へば堪らなくなります。偉らいお弟子たちは或は打首、或は流罪になられました。どんなに多くの愛し合つて居る人々が別れ〳〵になつた事でせう。今でも私は忘れられませぬのはお師匠様が法然様とお別れなされた時の事で御座います。

良寛　さぞお嘆きなされた事で御座いませうねえ。

慈圓　それは深く愛し合つてゐられましたからね。お師匠様が小松谷の禪室にお暇乞ひにいらした時法然様は文机の前に坐つて念佛してゐられました。お師匠様は聲をあげて御落涙なされましたよ。何しろ土佐の國と越後の國ではとても再會の出來ないのは知れてゐますからね。それに法然聖人は八十に近い御老體ですもの。

良寛　法然様は何と仰せになりましたか。（涙ぐむ）

慈圓　親鸞よ。泣くな。只念佛を唱へて別れませう。淨土できつと逢ひませう。その時はお互に美しい佛にして貰つてゐませう。南無阿彌陀佛とおつしやいました。

良寛　それきりお別れなされたので御座いますか。

慈圓　忘れもせぬ承元元年三月十六日、京は丁度花盛りでしたがね。同じ日に法然様は土佐へ向け、お師匠様は北國をさして御發足遊ばしました。

良寛　法然様は今はどうしていらつしやいますでせう。

慈圓　もうおかくれ遊ばしました。その便りのあつたのは上野の國を行脚してゐる時でしたがね。お師匠樣は道に倒れて泣き入られましたよ。
良寛　では本當に生き別れだつたのですね。
慈圓　はい。（衣の袖で涙を拭く）
（兩人暫く沈默。）
良寛　まだ夜は中々明けますまいな。
慈圓　まだ夜中過ぎで御座います。
良寛　寒くてとても眠られさうにはありませんね。
慈圓　でも少しなと眠らないと明日の旅に疲れますからね。
良寛　では少し眠つて見ませうか。
（兩人横になり眼をつむる。）
左衛門　（唸る）うーむ。うーむ。
お兼　（身を起す）左衛門殿。左衛門殿。（左衛門をゆり起す）
左衛門　（眼を醒ます）あゝ、夢だつたのか。（あたりを見廻し、ぼんやりしてゐる）
お兼　あなた大變うなされましたよ。
左衛門　あゝ恐い夢を見た。
お兼　私は一寸も寢つかれないでうつら／＼してゐたら、急にあなたが變な聲をして唸りなさるものだから吃驚しましたわ。
左衛門　ふむ。（考へてゐる）
お兼　私は氣味が惡かつたわ。あなたが眼を覺ますと、私を見た時にはそれは恐ろしさうな顔付でしたよ。
左衛門　恐ろしいといふよりも不氣味な、質の惡い夢だつた。魂の底にこたへるやうな。
（眞面目な顔をして、夢を辿つてゐる。）
お兼　どんな夢ですの。話して下さい。私も氣にかゝる事があるのですから。
左衛門　（寢床の上に坐る）私が雞を屠して居る夢を見たのだよ。薄寒いやうな竹藪の蔭だつたがね。私は其處らに轉ろがつて居る材木の丸太に片足かけ片手で雞の兩の翼と頸とを一緒に疊み込んで、しつ尾や胴の羽を一本一本むしつてゐた。雞は痛いと見えて一本拔くたびに足をひきつけて、頸をぐい／＼させてるけれど頸を捻ぢてあるのだから啼く事は出來ないのだ。見る／＼胴體から胸の方にかけて黄色いぼツ／＼のある鳥肌がむきだしになつた。その毛の拔けた恰好の不樣なのが、皮肉なやうな、殘酷な感じがするものでね。
お兼　まあいやな。あなたがいつも雞を屠しなさるから、その樣な夢を見るのですわ。
左衛門　ところで今度はあの翼を拔かねばならない。私は

片方の翼と足とを捕まへて、地べたに壓しつけて力を入れて抜いた。翼は大きくて小さい骨程あるのだから一寸引つぱつた位では抜けはしないからね。すると一本抜く毎に雞が悲鳴をあげるのだ。

お兼　私はあの聲位嫌なものはありませんわ。殺してしまつてからぬけばよかりさうなものですにね。

左衛門　それでは羽が抜け難いし、だいち肉がおいしくなくなるのだ。私は夢の中で其聲を聞くと何とも云へない殘酷な快感を感じるのだ。それで頸を自由にさせて、ゆつくり／＼一本宛ぬいて行つた。するとお前が飛んで來てね。

お兼　まあ。いやな。私も出るのですか。

左衛門　うむ。後生だから、鳴かせるのは止して下さいと云ふのだ。それで私は雞の頸をぐる／＼振つたのだ。それがまるで手拭を絞るやうな氣がするのだよ。そして雞の頭を、背のところに壓し付けて、片手で腹をしめつけて、足を踏まへて、暫らくぢッとして居たのだ。雞は執念深くて、お尻で呼吸をするのだからな。もう參つたらうと思つて手を放したところが、其の毛のぬけたもう雞とは見えないやうな奴が、一、二間も駈け出すのだよ。

お兼　もう止して下さい。ほんとに怖ろしい。

左衛門　それからが氣味が悪いのだよ。私はあわてゝ、その雞を捕まへて、今度は雞の頸を打ち切らうと思つて地べたに踏みつけて庖丁を持つて今にも切らうとしたのだよ。雞は變な眼付をして私を見た。そして訴へるやうな、か弱い聲でしきりに啼くのだ。その時急に夢の中で私がその雞になつてるんだよ。私は怖ろしくて聲を限り泣いた。「雞屠し」は冷然として私の顏を見下ろしてゐた。私はもう鳴く力も弱くなつて、哀れな訴へるやうな聲を立てゝゐた。すると私は何だか此の通りの事がいつか前に一度あつたやうな氣がするのだよ。はて聞き覺えのある聲ではあるわいと思つた。その時今迄永く忘れてしまつてゐた一つの光景が不思議な程はつきりとその雞になつてる私の記憶に蘇つて來たのだ。ずつと昔に私が前きの世に居た時に一人の旅の女を殺した事があつたのだ。私は山の中で脇差をぬいて女に迫つた。女は訴へるやうな聲を立てゝ泣いた。私が思ひ出したのはその泣き聲だつたのだ。その報いが今來たのだなと思つた。屠殺者の庖丁は今に下りさうで下らない。その時私は唸されて眼が覺めたのだ。

お兼　何て變な怖ろしい夢でせうねえ。（身慄ひする）

左衛門　その前世の悪事の光景を思ひ出した時の怖ろしさ。氣味の悪いほどはつきりしてゐるのだからね。あゝ地獄だと云ふ氣がしたよ。今でも思ひ出すと魂の底が寒

いやうな氣がする。（若い顔をしてゐる）

お兼　今夜は何だか變な氣がしますね。私も寢床に入つてから少しも眠られないので、色々な事が考へられてならなかつたのですの、實は私の亡くなつたお母さんの事を思ひ出しましたね。變な事をいふやうですけれどもね。私は何だか宵のあの出家樣が私のお母さんの生れ更りのやうな氣がするのですよ。

左衞門　なにを馬鹿な。そんな事があるものか。

お兼　お母さんはあんなに信心深かつたでせう。そして死ぬる前頃私に「私は今度はどうせ助かるまい。私が死んだら坊さまに生れ更つて來る。よく覺えてお置きよ。門口に巡禮して來るからね。」つて云ひました。それを眞顔でね。それからといふものは私は巡禮の僧だけは粗末にする氣になれないのですよ。その事を思ひ出しますのでね。

松若（眼を醒ます）もう起きるのかい。

お兼　いゝえ。夜中だよ、寒いから寢ておいで。（蒲團をかけてやる）

松若　さうかい。（また寢入る）

（二人沈默。外を風の音が過ぎる。）

左衞門　宵の出家の衆はどうしたゞらうね。

お兼　雪の中を迷つてゐるでせうよ。

左衞門　私は氣になつてね。酒に醉つて居たものだからね。すこし酷すぎた。（考へてゐる）

お兼　あなた坊さまを杖で撲ちましたね。

左衞門　惡い事をした。

お兼　私が傍で見て居ても宵のあなたの遣り口は立派とは思へませんでしたよ。亂暴なだけではありませんでしたからね。あなたのいつもは嫌ふ、皮肉やら、あてつけやら、ひねくれた冷たい態度でしたからね。

左衞門　私もさう思ふのだ。宵にはどうも氣が變になつて來てゐたからね。

お兼　それにあの坊さんは善さゝうな人でしたよ。少しも氣取つた所などなくて、謙遜な態度でしたからね。私は好きでしたから、泊めてあげたかつたのですのに、あなたはまるで聞き譯が無いのですもの。

左衞門　少し變つた坊樣のやうだつたね。

お兼　少しも惡びれない立派な應對でしたわ。私は却つてあの坊樣にあなたの風を見せるのが恥しくて顏が赤くなるやうでしたわ。

左衞門　まつたくいけなかつたね。

お兼　それにあの坊樣はあなたの言葉に興味を感じて注意してゐるやうでしたよ。むしろ親しい好意のある表情をして聞いて居ましたよ。

左衞門　私もそんな氣がせぬでもなかつた。
お兼　ほんとに宵のあなたは慘めだつたわ。坊樣はあなたの皮肉に參らないで、却つてあなたを哀れみの目で見てゐるやうでしたよ。
左衞門　（顏を赤くする）さう云はれても仕方がない。
お兼　お弟子衆は私等は家の外でもよろしい、只お師匠樣だけは凍えさせたくない、と云つて折入つて頼むのに、あなたは冷淡に構へてゐるのですもの。私かはいさうでしたわ。
左衞門　どうしてあゝだつたのだらう。私の中に惡靈でもゐたのだらうか。
お兼　おまけに杖で撲つたのですもの。あの時年老つたお弟子は涙ぐんでゐましたよ。若い方のお弟子が腹を立てて杖を握りましたら、坊樣はそれを止めましたよ。威嚴のある顏付でしたわ。
（左衞門、默つて腕を組んでゐる。）
お兼　私は外に飛んで出て思はず坊樣の肩を撫つて許しを乞ひましたのよ。でもあまりおいとしかつたのですもの。
左衞門　坊樣はその時何と言つた。
お兼　大事ありません、行脚すれば、此の樣な事は度々ありますとおつしやいました。
左衞門　あれからどうしたゞらうかねえ、定めし私を呪つた事であらう。（考へる）お前これから行つて呼び戻して來て吳れないか。あの坊樣が一生呪ひを解かずに雪の中を巡禮してゐると思ふと私は堪らなくなる。
お兼　いゝえ。夫を呪つてやつて下さるなと私が言つたら、安心なさい、私は寧ろ彼の人を心の純な人と思つてゐますとおつしやいましたよ。
左衞門　そんな事を云つたかえ。（涙ぐむ）どうぞも一度連れて來てくれ。私はあやまらなくては氣がすまない。
お兼　此の雪の降る眞夜中に何處とあてもなく探すことが出來るものですか。
左衞門　これきり遇へないのは堪らない氣がする。
お兼　でも仕方がありませんわ。
左衞門　若しかまだ門口にゐられはすまいか。
お兼　そんな事があるものですか。あんな處に立つてゐたら凍え死にしてしまひますわ。
左衞門　でも氣になるから、見て來て吳れ。
お兼　見て來るには來ますけれどね。（手燭を點し、庭に下り、戸を開けて外を透して見る）あら（叫ぶ。外に一度飛んで出る。それからまた内に入る）左衞門殿。早く來て下さい。來て下さい。（外に飛び出る）
（左衞門、緊張した、眞靑な面をして外に飛び出る。若松母の聲に目を醒し、父の後から隨いて出る。三人

の僧驚いて眼を醒まし、身を起す。）

お兼　まあ、あなた方はまだ此處にいらしたのですか。此の雪の降るのに。此の夜中に。まあ、どうだらう。冷めたかつたでせう。凍えつくやうだつたでせう。

左衞門　（親鸞に）私は……私は……（泣く）許して下さい。（雪の上に跪く）

（親鸞、感動する。少しおど／＼する。それから默つて左衞門の肩をさする。）

お兼　根はいゝ人なのですからね。根はいゝ人なのですからね。

慈圓　（涙ぐむ。小聲にて）南無阿彌陀佛々々々々々々。

良寛　南無阿彌陀佛々々々々々。

（異様な緊張した感動一同を支配す。少時沈默。）

お兼　どうぞ皆樣内に入つて下さい。爐にあたつて下さい。冷めたかつたでせう。此の夜中に。薄い衣きりで。ほんとにどうぞ入つて下さい。（親鸞の衣より雪を拂ふ）こんなに雪が澤山かゝつて。（内に入る）

（左衞門續いて入る。親鸞、慈圓、良寛、沈默して内に入り、雪を戸口で衣より拂ひ庭に立つ。）

左衞門　（座敷に上る）どうぞ上つて下さい。お兼薪を澤山ついでくれ。

お兼　（薪をつぎつゝ）どうぞ上つて下さい。爐の側で衣をかわかして下さい。

親鸞　（弟子に）ではあげて貰ひませう。（草鞋を脱いで座敷に上り爐の側に寄る。慈圓、良寛それに倣ふ）

左衞門　宵には私は酷い仕打を致しました。酒を飲んで氣が變になつてゐたのです。一體に此の頃氣が變になつてゐるのです。私が惡う御座いました。私は恥しい氣がします。私は皮肉を言つたり冷笑したりしました。（熱心になる）私はそれが一番氣にかゝります。あなたがたは嘸私を卑しい奴だと思召したでせう。さう思はれても仕方がありません。私はいつもはそのやうな事を卑しんでゐました。けれど昨夜は心の中に不思議な力があつて、私にそのやうな所業をさせてしまひました。私はその力に抵抗する事が出來ませんでした。

親鸞　それを業の催しといふのです。人間が罪を犯すのは、皆その力に強ひられるのです。誰も抵抗する事は出來ません。（間）私はあなたを卑しい人とは思ひませんでした。寧ろ純な人だと思ひました。

左衞門　ようおつしやつて下さいます。私が一つの呪ひの言葉を出した時に、次ぎの呪ひの言葉が自ら唇の上にのぼりました。私は罵り果す迄は止められませんでした。あなた方を戸の外に締め出した後で、私の心は直に悔い初めました。けれど私はそれを姑息にも醉ひでごまかし

ました。私は今朝不思議に怖ろしい夢にうなされて眼が覺めました。醉ひは既に冷め果てゝ居ました。私は宵の出來事を思ひ返しました。そして心鋭い後悔の苦しみと、あやまりたい願ひで一ぱいになりました。此の儘あやまらずに仕舞ふならどうしようかと思ひました。その時雪の中で凍えかけてゐられるあなたがたを見出したのです。どうぞ私を許して下さい。

親鸞　佛樣が許して下さいませう。あなたのお心が安まるために、私も許すと申しませう。あなたが私に惡い事をなさつたのなら。けれど私はあなたを裁きたくありません。だいち私はその價がありません。昨夜私は初めあなたの言葉を聞いた時あなたの心の善さが直きに解りました。私は親しい心であなたに對しました。けれどあなたは私を受容れて呉れませんでした。その時私はあなたをお恨み申しました。外に追ひ出された時私の心は怒りました。若し奧樣のとりなしの言葉が無いならば、あなたを呪つたかも知れません。私は奧樣に決して呪ひませんと申しました。けれど夜が更けて寒さの身に沁むにつれて、私の心はあなた方を恨み初めました。私は決して佛樣のやうな美しい心で念佛してゐたのでありません。私はだいち肉體的苦痛に壓倒されさうでした。それからあなた方を呪ふ心と戰はねばなりませんでした。私の心は罪と苦しみとに囚はれてゐたのです。

左衞門　あなたのお話はこれまでの坊樣のとは異ひます。あなたは自分を惡人かのやうにお話しなされます。

親鸞　私は自分を惡人と信じてゐます。さうです。私は救ひ難き惡人です。私の心は同じ佛子を呪ひますもの。私の肉は同じ佛子を喰ひますもの。惡人でなくて何でせうか。

慈圓　お師匠樣はいつもそのやうに仰せられます。

お兼　左衞門殿も常々そのやうに申します。

親鸞　（左衞門に）あなたはよい所に氣がついてゐられます。あなたのお考へは本當です。

左衞門　あはたはそれで苦しくはありませんか。私は考へると自棄になります。私には善を慕ふ心が御座います。けれど私は惡をつくらずに生きて行く事が出來ません。またその惡であることを思はずにゐる事も出來ません。これは怖ろしい事だと思ひます。不合理な氣がします。私は仕方がないから惡くなつてやれといふ氣が時々致します。

お兼　左衞門殿は自分を惡に耐へる強い人間に鍛へあげるのだと云つて、わざと酷い事に自分を練らさうとするので御座いますよ。その癖いつも心は責められてゐるので御座いますよ。それで苦しまぎれに自棄（やけ）になつてお酒な

ど飲むのです。段々氣が荒んで行きますので、私もほんとに案じてゐますの。

左衞門　どうせ遁れられぬ惡人なら、外の惡人どもに侮辱されるのは嫌ですからね。また自分を善い人間らしく思ひたくありませんからね。私は惡人だと云つて名乘つて世間を荒れ廻りたいやうな氣がするのです。（間）御出家樣教へて下さい。極樂と地獄とは本當にあるもので御座いませうか。

親鸞　私はあるものと信じて居ます。私は地獄が無い筈はないといふ氣が先きにするのです。私は他人の運命を傷けた時に、そしてその取返しがつかない時に、私を鞭つて下さい、私を罰して下さい、と何者かに向つて叫びたい氣がするのです。その償ひをする方法が見つからないのです。また自分が殘酷な事をした時には此の報が無くて濟むものかといふ氣がするのです。これは私の魂の實感です。

左衞門　私はさつき其の樣な氣が致しました。若しあなた方にあやまる機會がなくて、あれ限りになつてしまつたら、あなた方がいつまでも呪ひを解かずに巡禮していらしたなら、私のつくつた惡はいつまでも消えずに嚴かに殘るにちがひないといふ氣がしました。また私は生きた鷄を屠す時にいつも感じます。此の樣なことが報いなくて濟むものかと。私はあなたを打つたことを思ふと、どうぞ私を打つて下さいといひたい氣がします。

親鸞　私は地獄がなければならぬと思ひます。その時に、同時に必ずその地獄から免れる道が無くてはならぬと思ふのです。それでなくては此の世界が嘘だといふ氣がするのです。此の存在が成り立たないといふ氣がするのです。私たちは生まれてゐる。そして此の世界は存在してゐる。それならその世界は調和したものでなくてはならない。何處かで救はれてゐるものでなくてはならない。といふ氣がするのです。私たちが自分は惡かつたと悔いてゐる時の心持の中には何處かに地獄ならぬ感じが含まれてゐないでせうか。かうしてこんな爐を圍んで沁々と話してゐる。前には爭うたものも今は互に許し合つてゐる。何だか涙ぐまれるやうな心地がする。何處かに極樂が無ければならぬやうな氣がするではありませんか。

左衞門　私も其樣な氣がするのです。けれど其の樣な心持は直きに亂されて仕舞ひます。一つの出來事に當れば直ぐに變ります。そして私の心の中には依然として、憎みや怒りが勝を占めます。そして地獄を證するやうな感情ばかり滿ちます。

親鸞　私も其の通りです。それが人間の心の實相です。人間の心は刺戟に依つて變じます。私たちの心は風の前の

木の葉の如くに散り易いものです。

左衛門　それに此の世の成り立ちが、私たちに惡を強ひます。私は善い人間として、世渡りしようと努めました。しかしそのために世間の人から傷けられました。それでは迚も渡世の出來ない事を知りました。死ぬるか乞食になるかしなくてはなりません。しかし私は死にともないのです。女房や子供が可愛いのです。また嫌やな奴の門に哀れみを乞うて立つのは耐りません。私は惡人になるより外に道がありません。けれどそれがまた嫌なのです。私の心はいつも責められます。

親鸞　あなたの苦しみはすべての人間の持たねばならぬ苦しみです。只僞善者だけがその苦しみを持たないだけです。善くならうとする願ひを抱いて、自分の心を正直に見るに耐へる人間はあなたのやうに苦しむのが本當です。私はあなたの苦しみを尊いと思ひます。私は九歳の年に出家してから、比叡山や奈良で數十年の永い間自分を善くせうとして修行致しました。自分の心から呪ひを去り切つて仕舞はうとして、どんなに苦しんだ事でせう。けれど私のその願ひは叶ひませんでした。私の生命の中にそれを許さぬ運命のあることを知りました。私は絶望致しました。私は信じます。人間は善くなり切る事は出來ません。絶對に他の生命を損じない事は出來ません。そのやうなものとしてつくられてゐるのです。

左衛門　あなたのやうな出家からそのやうな言葉を聞くのは初めてゞす。では人は皆惡人ですか。あなたもですか。

親鸞　私は極重惡人です。運命に逢へば遇ふだけ私の惡の根深さが解ります。善の根の心の眼に展けて行くだけ、前には氣のつかなかつた惡が見えるやうになります。

左衛門　あなたは地獄はあるとおつしやいましたね。

親鸞　あると信じます。

左衛門　（まじめな表情をする）ではあなたは地獄に墮ちなくてはならないのではありませんか。

親鸞　此の儘なら地獄に墮ちます。それを無理とは思ひません。

左衛門　あなたは恐くはないのですか。

親鸞　恐くないどころではありません。私はその恐怖に晝も夜も慄へてゐました。私は昔から地獄のある事を疑ひませんでした。私はまだ童子であつた頃に友達と遊んで、よく「目蓮尊者の母親は心が邪険で火の車」といふ歌を唱ひました。私はその歌が恐ろしくてなりませんでした。その頃から私は此の恐怖を持つてゐたのです。いかにすれば地獄から免れる事が出來るか。私は考へ悶えました。それは罪をつくらなければよい。善根を積めばよいと教へられました。私はその通りをしようと努めました。そ

れからといふもの、私は艱難辛苦して修行しました。それは隨分苦しみましたよ。雪の降る夜、比叡山から、三里半ある六角堂迄百夜も夜參りをして歸り歸りした事もありました。併し一つの善根を積めば、十の惡業が殖えて來ました。丁度、賽の河原に、童子が石を積んでも積んでも鬼が來て覆すやうなものでした。私の心の內に蔓る惡は、私に地獄のある事を益々明らかに證しました。そして私はその惡から遁れる希望を失ひました。私は所詮地獄行きと決定しました。

左衞門　私は恐しくなります。あなたのお話を聞いて居ると、地獄が無いなどとは思はれなくなります。魂の底の鋭い、根深い力が私に迫つて參ります。私は地獄はないかも知れないと、運命に甘えて居りました。今日も悴に地獄極樂は本當にあるのかと訊かれて私は嘘だ。つくり話だと云ひましたけれど、自信はありませんでした。地獄だけはあるかも知れないと冗談を云つて笑ひましたけれどほんとにさうかも知れないといふ氣がして變に不安な氣がしました。あなたに遇つて話してゐると、私は甘える心を失ひます。魂の深い智慧が呼び醒されます。そして地獄の怖ろしさが身に迫ります。

お兼　昨夜の夢の話と云ひ、私は何だか氣味の惡い心地がするわ。

（外を嵐の音が過ぎる。）

左衞門　その地獄から免れる道はありませぬか。

親鸞　善くならなくては極樂に行けないのならもう望みはありません。併し私は惡くても、別な法則で極樂參りがさせて戴けると信じてゐるのです。それは愛です。赦しです。善、惡を超えて働く力です。此の世界はその力で支へられてゐるのです。その力は善、惡の區別より深くしてしかも善惡を生むものです。是迄の出家は善行で極樂參りが出來ると敎へました。私はもはやそれを信じません。それなら私は地獄です。併し佛樣は私たちを惡い儘で助けて下さいます。罪を赦して下さいます。それが佛樣の愛です。私はそれを信じて居ます。それを信じなくては生きられません。

左衞門　（眼を輝かす）殺生をしても、姦淫をしても。

親鸞　假令十惡五逆の罪人でも。

良寛　御慈悲に二つは御座いませぬ。

慈圓　他力の信心と申して、お師匠樣のお開きなされた救ひの道で御座います。

左衞門　（眞靑な、緊張した顏をして沈默。軈て異常の感動のために調子の外れた、物の言ひ方をする）私は變な氣がします。私は急に不思議な、大きな鐘の聲を聽いたやうな氣がします。その聲は私の魂の底まで冴え渡つて響

きました。私の長く待つて居たものが遂に來たやうな親しい、しつくりとした氣持がします。私は有難い氣がします。私は直ぐにその救ひが信じられます。その筈です。それは嘘ではありません。本當でなければなりません。私は氣が付きました。前から知つて居たやうに、私のものになりました。まつたく私の所有になりました。有り難い、泣きたいやうな氣がして來ました。

親鸞　それは本當です。私は吉水で法然聖人に遇つた時、即座にその救ひが腹に入りました。あなたの今の感じの通りです。さながら忘れてゐたものを思ひ出したやうでした。まるで單純な事です。誰でも此の自分に近い、平易な眞理が解らないのが不思議でした。私たちの魂の眞實を御覧なさい。私たちは愛します。そして赦します。他人の惡を赦します。その時私たちの心は最も平和です。私たちは惡い事ばかりします。憎み且つ呪ひます。併し樣々の汚れた心の働らきの中でも私たちは愛を知つてゐます。そして赦します。その時の感謝と涙とを皆知つてゐます。私たちの救ひの原理も同じ單純な法則です。魂の底からその單純なものが蘇つて來るのです。そして信仰となるのです。

慈圓　あなたは永い間正直に苦しみなさいました。自分の心を直視なさいました。あなたの心の歩みは他力の信仰を受取る充分な用意が出來てゐたのです。

良寛　前のものから後のものに移る必然性がある時には、容易いほどな確かさがまるで水の低きに流れるやうにして得られるものでございますね。

親鸞　あなたの信心は堅固なものだと存じます。

左衞門　私は今夜は嬉しい氣がします。此の幾年私の心を去つてゐた平和が返つて來たやうな心地が致します。

(涙ぐむ)

お兼　ほんとにさうですわ。もう隨分長い間あなたが潤うた、和かな心でいらしたことはありませんわ。

親鸞　あなたは自分を惡に馴らさうとつとめてゐるとおつしやいましたね。

左衞門　私は生れつき氣が弱くていけないのです。それでは渡世に困るから、もつと惡人にならねばならぬと思つたのでした。

お兼　それで獵を始めたり、鷄を屠したり、百姓と喧嘩したりするので御座いますよ。

親鸞　私はあなたの心持に同情します。しかしそれは無理な事です。あなたは「業」といふことを考へたことはありませぬか。人間は惡くならうと努めたとて、それで惡くなれるものではありません。また業に催されゝばどのやうな罪でも犯します。あなたは無理をしないで素直に

あなたの心の本當の願ひに從ひなされませ。あなたの性格が善良なのだから仕方がありません。

左衛門　では、善くならうと努めるのも無理ですか。

親鸞　善くならうとする願ひが心に湧いて來るなら無理ではありません。素直にといふのは自分の魂の本然の願ひに從ふ事です。人間の魂は善を慕ふのが自然です。併し宿業の力に妨げられて、その願ひを滿たす事が出來ないのです。私たちは罰せられてゐるのです。私たちは惡を除き去る事は出來ません。救ひは惡を持ちながら攝取されるのです。併し私は善くならうとする願ひは何處までも失ひません。その願ひが叶はぬのは地上のさだめです。私はその願ひが念佛に依つて成佛する時に、滿足するものと信じてゐます。私は死ぬるまで此の願ひを持ち續けるつもりです。

左衛門　渡世が出來なくなりは致しますまいか。

親鸞　出來ない方が本當なのです。善良な人は貧乏になるのが當然です。あなたは自然に貧しくなるなら、仕方がないから貧しくおなりなさい。人間はどのやうにしてゞも暮らされるものです。お經の中には韋駄天が三界を驅け廻つて、佛の子の衣食を蒐めて供養すると書いてあります。お釋迦樣も托鉢なさいました。私も御覽の通り行脚致して居ます。でも今日まで生きて來ました。私の悴も何とかして暮らしてゐます。

お兼　あなたにはお子樣がお有りなさるのですか。

親鸞　はい。京に殘してあります。六つの年に別れてからまだ逢はずに居るのです。

お兼　まあ。そして奧樣は？

親鸞　京を立つ時に別れましたが、私が越後にゐる時に死にましてな。

お兼　御臨終にもお遇ひなさらないで。

慈圓　お師匠樣は道のために、お上のお咎めを被つて御流罪におなり遊ばしたので御座います。奧樣の御かくれ遊ばしたのは、その御勘氣中で京へお歸り遊ばす事は出來なかつたのです。まだ廿六のお若死で御座いました。

良寛　玉日樣と申してお美くしい方で御座いました。それから後の御苦勞と申すものは、一通りでは御座いません。何しろ公家の御子息――

親鸞　それはもう言うて與れるな。

お兼　（涙ぐみ）定めしお子樣に遇ひたい事で御座いませうねえ。

親鸞　はい。時々氣になりましてな。

お兼　御尤で御座います。

親鸞　（松若に）お幾つにおなりなさる。

松若　（顏を赤くする）十一。

親鸞　よいお子ぢやの。（頭を撫でる）
左衞門　少し體が弱いので困ります。
親鸞　ほんに少し顏色が惡いね。
（一同暫く沈默。）
親鸞　良寛、一寸私の笈を見てくれ。最前杖があたつた時に變な音がしたのだが、若しかすると……。
良寛（笈を披いて見る）おゝ阿彌陀樣の御像が毀れてゐます。
（小さな阿彌陀如來の像を取り出す。）
慈圓　左の御手が缺けましたな。
左衞門（若ざめる）私に見せて下さい。（小さな佛像をつくづく見入る。やがて涙をはらはらこぼす）
親鸞　左衞門殿どうなされた。
（一同左衞門を見る。）
左衞門　私は堪まりません。此の小さく刻まれたお顏の尊い事を御覽なさいませ。私は此の御像を杖で打ちこはしたのです。此の美しい左の御手を、指まで一本々々美しく彫つてある此の御手を。私の魂の荒々しさが今更のやうに感じられます。私は惡い事を致しました。私の業の深さが怖ろしくなります。私は親鸞樣を打ちました。御弟子たちを罵りました。そして佛像を片輪にしました。私は、私は……（泣く）

親鸞　左衞門殿、お泣きなさるな。さ程に罪深きあなたをもその儘許して下さるのが佛樣の御慈悲です。此の佛像はかたみにあなたに差上げます。これを見てはあなたの業の深いことを思つて下さい。そしてその深重な罪の子を救して下さる佛樣を信じて下さい。そしてあなたの隣人をその心で愛して下さい。（間）もう程無く夜も明けませう。私はお暇致します。明日の旅路を急ぎます。良寛、慈圓、支度をなさい。（親鸞立ちあがる）
左衞門（親鸞の衣の袖を捉る）どうぞお待ち下さい。私は出家致します。これからあなたのお供を致します。何處までも連れて行つて下さい。
親鸞（感動する）あなたのお心は解ります。私は涙がこぼれます。けれどあなたは思ひ止つて下さい。淨土門の信心は在家の儘の信心です。商人は商人、獵師は獵師のまゝの信心です。だから私も妻も持てば肉も食ふのです。私は僧ではありません。在家のまゝで心は出家なのです。形に捕はれてはいけません。心が大切なのです。
左衞門　でもあなたと此の儘お別れするのは辛う御座います。いつまた逢はれるのか解りません。
お兼　せめて四五日なりとお泊り遊ばして。
親鸞　會ふものはどうせ別れなくてはならないのです。それが此の世のさだめです。戀しく思召さば南無阿彌陀佛

を唱へて下さい。私はその中に住んでゐます。
左衛門　ではどうあつてもお發ちなされますか。
親鸞　縁あらばまたお目にかゝれる時も御座いませう。
お兼　これから何方に向けてお出なされます。
親鸞　どこと定まつたあてはありません。
（親鸞、慈圓、良寛身支度をして外に出る。夜はしらしらと明けかけてゐる。左衛門、お兼は門口に立つ。松若も母に手を引かれて立つて見送る。）
親鸞　私は此の様にして澤山な人々と別れました。私の心の中には忘れ得ぬ人々の俤があります。今日からあなた方をもその中に加へます。私はあなたがたを忘れません。別れてゐてもあなた方のために祈ります。
左衛門　私もあなたを一生忘れません。あなたのために祈ります。
お兼　お體を大切になさつて下さいまし。（涙ぐむ）
慈圓　夜も明けはじめました。
良寛　雪も止んだやうで御座います。
親鸞　では左様なら。
左衛門　左様なら。
お兼　左様なら。（松若に）おい、左様ならをおし。
松若　をぢさん、左様なら。
親鸞　（松若を衣の袖で抱く）左様なら。大きく偉らくおなりなさいよ。
慈圓　左様なら。
良寛　左様なら。
（親鸞、慈圓、良寛、退場。左衛門、お兼、松若、涙ぐみつゝ見送る。）

第二幕

場所

西の洞院御坊
（本堂の裏手にあたる僧の控へ間。高殿になつて居て京の街を望む。直ぐ下に通路あり。通行人あり。）

人物

親鸞（七十五歳）
松若改め唯圓（二十五歳）
僧　三人
同行衆　六人
内儀
女中
丁稚　二人（十二、三歳）

時

第一幕より十五年後　秋の午後

（僧三人語り居る。）

僧一　まだお勤めまでにはしばらく暇がありますね。

僧二　おつ付け初まりませう。もう本堂は參詣人で一ぱいで御座います。

僧三　今更ながら當流の御繁昌は大したもので御座いますね。

僧一　本堂には入り切れないで廊下にこぼれて居る者も澤山御座います。何しろ今日はあれ程歸依の厚かつた法然聖人樣の御法會で御座いますもの。

僧二　その筈でもありませうよ。御存命中は黑谷の生佛樣とあがめられていらつしやいましたからね。土佐へ御流罪の時などは、七條から鳥羽まで御輿の通る御道筋には、老若男女が垣をつくつて皆泣いて御見送り致した程で御座いました。

僧三　私はあの時鳥羽の南門までお供を致しました。それからは河舟でした。長くなつた白髮に梨打烏帽子を被り、水色の直垂を召した聖人樣が御輿から出て、舟にお乘りなされた時のおいとしいお姿は、まだ私の眼の前にあるやうで御座います。

僧一　もう御かくれ遊ばしてから二十三年になりますかね。月日の經つのは早いものですね。私たちの年寄つたのも無理はありませんな。

僧一　法然聖人樣と申し、お師匠樣と申し、隨分御難儀をなされたもので御座いますね。今日の御繁昌もその蔭で御座いますね。

僧三　淨土門今日の御威勢を法然樣が御覽なされたら、嘸お滿足遊ばすでせうにね。

僧二　お師匠樣も大分お年を召しましたね。

僧一　今度の御不例は大事ありますまいか。

僧二　いゝえ、ほんのお風を召したばかりで御座います。

僧三　御老體故お大切になされなくてはなりません。

僧一　唯圓殿が大事にお仕へなさる故安心で御座います。

僧二　唯圓殿はお若いのによく萬事氣が付きますからね。

僧三　あゝしておとなしい氣の優しい人ですからね。

僧一　お師匠樣はまた唯圓殿を殊の外お寵愛なさいますやうですね。

僧二　お側の御用事は皆唯圓殿に仰付けられます。

唯圓　（登場。廊下傳ひに本堂の方に行く。僧の方に會釋する）御免遊ばせ。

僧三　唯圓殿。

唯圓　はい。（立ち止まる）

僧一　急ぎの御用で御座いますか。

唯圓　いゝえ。別に。一寸本堂まで行つて見ようと存じまして。

僧二　では一寸此處にお寄りなされませ。伺ひ度い事も御座います。

僧三　お勸めの初まるまでお茶でも入れて話しませう。

（唯圓、僧の側に行きて坐る。僧三お茶をついで唯圓にすゝめる。）

僧一　お師匠樣の御模樣は如何で御座います。

唯圓　只今はお寢みで御座います。

僧二　氣遣ひな御容體では無いのでせうね。

唯圓　はい、もう殆どよろしいので御座います。今日も大切な法然樣の御命日故起きてお勸めするとおつしやつたのを私が無理に御用心遊ばすやうにお止め申したので御座います。もう起きて庭などお散歩遊ばす程で御座います。

僧三　それがよろしう御座います。お體に障つてはなりません。

僧一　私などゝは違ひ大切なお體で御座いますからね。

僧二　誠に念佛宗の柱石でいらつしやいます。

僧三　法然聖人御入滅後法敵多き淨土門を一身に引受けて今日の御繁昌を來たしましたのは、まつたくお師匠樣のお德で御座います。

僧一　萬一今お師匠樣の身に一大事がありでもしたら、當流はまるで暗闇の如くになりませう。

僧二　我々初め數知れぬお弟子衆は善智識を失うて、途方に暮れる事で御座いませう。

僧三　頼りに思ふ御子息善鸞樣はあのやうな風で御座いますしね。

僧一　當流の法統を繼ぐべき身であり乍ら、父上にお背き遊ばすとは淺ましい事で御座います。

僧二　お師匠樣とは打つて變つて荒々しい御性質で御座います。

僧三　不肖の子とでも申すので御座いませうか。

唯圓　早く父上の御勘氣が解けてくれゝばよいと思ひます。

僧一　いやあの樣な御身持では御勘氣の解けぬが當然と思ひます。彼の樣な御子がお世繼ぎとあつては當流の名にも懸ります。

僧二　普敎の障りにもならうと思はれます。

僧三　たゞさへ世間では當流の安心は萬善を廢するとて非難致して居る折で御座います。

唯圓　善鸞樣は善い方で御座います。あなた方の思つてゐられるやうな方ではありません。私は善鸞樣と暫らく話して直ぐに好きになりました。どのやうな事をなされたかは存じませぬが私は彼の方を惡い方とは思はれません。

僧一　唯圓殿の御言葉ですが、善鸞樣は放蕩にて素行の修まらぬ上に、淨土門の信心に御反對で御座います。

僧二　放蕩をなさるのなら淨土門の信心でなくては出離の道はありますまいにね。

僧三　では惡くても救はれるから惡い事もしてやれといふのではないのですね。

僧一　私もさうであらうと思ひました。併し本當はさうでは無さゝうです。それで私も合點が行かぬので御座います。

僧二　それではお師匠樣の御立腹も無理は御座いませんね。

唯圓　お師匠樣は善鸞樣の事を蔭ではどれほど氣にしていらつしやるか知れませんよ。

僧三　併し今の儘では迚も御勘氣の解ける見込はありませんね。何しろ稻田の時からの永い御勘當で御座いますからね。

唯圓　善鸞樣は今度稻田から御上洛遊ばすさうで御座いますが。

僧一　とても御面會はかなひますまい。

唯圓　どうぞ御面會がかなひますやうにあなたがたのおとりなしの程をお願ひ申します。

僧二　そのやうな事は滅多に出來ません。お師匠樣のお叱りを受けます。

僧三　善鸞樣のお心が改まらなくては却つてお爲めにもなりますまい。

唯圓　私は悲しい氣が致します。

（一同一寸沈默。）

僧一　今日の法話はどなたがなさるので御座いますか。

僧二　私が致す筈になつて居ます。

僧三　どのやうな事に就いてお話しなさるおつもりですか。

僧二　法悅といふ事に就いて話さうと考へて居ます。佛の救ひを信ずるものゝ感ずる喜びですな、經にいはゆる踊躍歡喜の情ですな。富も要らぬ、名譽も欲しくない、私にはそれよりも樂しい法の悅びがあります。その悅びがあればこそ此の年まで墨染の衣を着て貧しく暮らして來たのですからね。

僧一　さうですとも。私は他人の綺羅を羨む氣はありません。私は心に目に見えぬ錦を着てゐると信じて居ますから。

僧二　私は今日話さうと思ひます。皆樣は此の法悅の味を知つてゐますか。若し此の味を知らないならば、假令皆さんは無量の富を積んでゐようとも、私は貧しい人であると斷言致しますと。（肩を聳かす）

僧三　それは思ひ切つた、强い宣言ですな。
僧二　若い息や娘たち――私は云はうと思ひます。皆樣は此の法悅の味を知つてゐますか。若し此の味を知らないならば假令皆樣は樂しい戀に醉はうとも、私は哀れむべき人々であると斷言致します。
僧三　若い人々は耳をそば立てるでせうね。
僧二　私から何んでも奪つて下さい――私は云はうと思ひます。富でも名譽でも戀でも。たゞしかし此の法の悅びだけは殘して下さい。それを奪はれることは私に取つては死も同じ事です。
僧一　丁度私の云ひ度い事をあなたは云つて下さるやうにいゝ氣持がします。
僧三　私も同じ心です。その悅びがなくては私たちは實に慘めですからね。僧ほどつまらないものはありませんからね。私もその悅びで生きて居るのです。
僧二　私はその悅びは私たちの救はれてゐる證據であると言はうと思ひます。私たちは此の濁つた娑婆の世界には望みを置かない、安養の淨土に希望を抱いてゐる。私たちは病氣をしても死を怖れることはない。死は私たちに取つて失でなくて得である。安養の國に往いて生きるのだからである。此の樣な意味の事を話さうと思ふのです。
僧三　それは皆本當です。私たち信者の何人も經驗する實感です。
僧一　昔からの開山たちが、一生涯貧しくしかも悠々として富めるが如き風があつたのは、皆心の中に此の踴躍歡喜の情があつたからであると思ひます。
僧二　唯圓殿、あなたは何を考へ込んでゐられますか。
僧三　大層沈んでいらつしやいますね。
僧一　顏色もすぐれませんね。お氣分でも惡いのではありませぬか。
唯圓　いゝえ、只何となく氣が重たいので御座います。
僧三　その樣に氣の滅入る時には佛前に坐つて念佛を唱へて御覽なさい。明るい、冴え冴えした心になります。
唯圓　左樣で御座いますか。
僧一　大きな聲を出してお經を讀むとよう御座います。
僧二　一つは信心の足りない勢かも知れません。氣を惡くなさいますな。私は年寄りだから云ふのですからね。だが佛樣の御慈悲を頂いてゐればいつも心が嬉しい筈ですからね。いつも希望が充ちてゐなくてはなりません。また佛樣の兆載永劫の御苦勞を思へば、感謝の念と衆生を哀れむ愛とが常に胸に溢れてゐなくてはなりませんからな。法悅のないのは信心の獲得出來てゐない證しだと思ひます。氣を惡くなさいますな。いや若い時は誰でもそんなものですよ。

僧一　おやお勤めの初まる鐘がなつてゐます。
僧二　本堂の方へ參らなくてはなりません。
僧三　では御一緒に參りませう。唯圓殿は？
唯圓　私はお師匠樣のお給仕を致しますので。
（三人の僧退場。唯圓暫く沈默。やがて茶器を片付け、立ちあがり、廊下に出て、柱に身を倚せかけ、ぼんやりして下の道路を見てゐる。商家の内儀と女中と下の道路の端に登場。）
内儀　今日は澤山なお參りだね。
女中　いゝお天氣で御座いますからね。
内儀　隨分埃りが立ちますね。（眉を顰む）
女中　お髮が白くなりましたよ。
内儀　さうかえ。（手巾を出して髮を拂ふ）少し急いで歩いたものだから、汗がじつとりしたよ。（額や頸を拭く）
女中　ほんに少し暑すぎる位ですね。
内儀　線香に、米袋に、お花、皆ありますね。
女中　皆ちやんと揃つて居ます。
内儀　おやお勤めの鐘がなつてるよ。
女中　丁度よい處へ參りました。
内儀　早く本堂の方に行きませう。（道路の向うの端に退場）
親鸞　（登場。唯圓の後ろに立つ）唯圓、唯圓。
唯圓　（振り向く。親鸞を見て顏を赤くする）
親鸞　そんなところで何をして居る。
唯圓　ぼんやり街を通る人を見て居ました。
親鸞　今日はよいお天氣ぢやの。
唯圓　秋にしては暑いくらゐで御座います。
親鸞　澤山な參詣人ぢやの。
唯圓　はい。此處から見て居ると色々な人が下を通ります。
（丁稚二人登場。角帶をしめ、前垂をあて、白足袋を穿いてゐる。印の入つたつゞらを載せた車を一人が曳き一人が押してゐる。）
丁稚一　もつとゆつくり行かうよ。
丁稚二　でも遲くなるとまた叱られるよ。
丁稚一　私は草臥れたよ。
丁稚二　また昨夜のやうに居睡りするとやられるよ。
丁稚一　でも睡くてねむくてせうがなかつたのだよ。
丁稚二　隨分暑いね。（手で汗を拭く）
丁稚一　そんなに草履をバタ／＼させな。
丁稚二　澤山な人だね。
丁稚一　皆お寺參りだよ。
丁稚二　見せ物の看板でも見て行かうか。
丁稚一　（一寸誘惑を感じたらしく立ち止まる）でも遲くなると叱られるから早く行かうよ。（退場）

親鸞　世の様々な相（すがた）が見られるな。私は昔から通行人を見てゐると淋しい氣がしてな。

唯圓　私もさつきから其の様な氣がして居たのです。

親鸞　此處で暫らく息んで行かうか。

唯圓　それがよろしう御座います。（座蒲團を持つて來て布く）今日はよく晴れて比叡山があの様にはつきりと見えます。

親鸞　（坐わる）　あの山には今も澤山な修行者がゐるのだがな。

唯圓　あなたも昔あの山に永くいらしたのですね。

親鸞　九つの時に初めて登山して、二十九の時に法然樣に遇ふまでは大てい彼の山で修行したのです。

唯圓　その頃の事が思はれませうね。

親鸞　あの頃の事は忘れられないね。若々しい精進と憧憬との間にまじめに一すぢに煩悶したのだからな。森なかで靜かに考へたり漁るやうに經書を讀んだりしたよ。また夕がたなど暮れて行く京の街を眺めてあくがれるやうな寂しい思ひもしたのだよ。

唯圓　では私の年には彼の山にいらしたのですね。どの樣な氣持で暮らしてゐられましたか。

親鸞　お前の年には私は不安な氣持が次第に切迫して來た。苦しい時代だつた。お經を讀んでも／＼私の心にしつくりとしないのだからな。それに私はその不安を心に收めて、まるで孤獨で暮らさねばならなかつた。

唯圓　同じ年輩の若い修行者が澤山近くにゐられたのではないのですか。

親鸞　何百といふ程居たよ。恐ろしい荒行をする猛勇な人や、夜の目も惜んで研究する人や、また仙人のやうに淸く身を保つ人や様々な人が居た。私もその人々のするやうな事を後れずにした。随分思ひ切つた行もした。しかし私の心のなかには其の人々には話されぬやうな淋しさがあつた。人生の愛とかなしみとに對するあくがれがあつた。話せば取り合はれないか、或は輕蔑されるかだから、私はその心持を獨りで胸の内に守つてゐた。その淋しさは私の心の内で段々と他には知れずに育つて行つた。私が愈々山を下る前頃には其淋しさで破産しさうな氣がした位だつたよ。

唯圓　お師匠樣。私は此の頃何だか淋しい氣がしてならないのです。時々ぼんやり致します。今日も此處に立つて通る人を見てゐたらひとりでに涙が出て來ました。

親鸞　（唯圓の顏を見る）　さうだらう。（間）　お前は感じ易いからな。

唯圓　何も別に是れと言つて原因はないのです。併し淋しいやうな、悲しいやうな氣がするのです。時々は泣ける

だけ泣きたいやうな氣がするのです。永蓮殿は體が弱い勢だらうと言はれます。私もさうだらうかとも思ふのです。けれどさうばかりでもないやうに思はれます。私は自分の心が自分で解りません。私は淋しくてもいゝのでせうか。

親鸞　淋しいのが本當だよ。淋しい時には淋しがるより仕方はないのだ。

唯圓　今に淋しくなくなりませうか。

親鸞　どうだかね。もつと淋しくなるかも知れないね。今はぼんやり淋しいのが、後には飢ゑるやうに淋しくなるかも知れない。

唯圓　あなたは淋しくありませんか。

親鸞　私も淋しいのだよ。私は一生涯淋しいのだらうと思つてゐる。尤も今の私の淋しさはお前の淋しさとは違ふがね。

唯圓　どのやうに違ひますか。

親鸞　（あはれむやうに唯圓を見る）　お前の淋しさは對象によつて癒される淋しさだが、私の淋しさはもう何物でも癒されない淋しさだ。人間の運命としての淋しさなのだ。それはお前が人生を經驗して行かなくては解らない事だ。お前の今の淋しさは段々形が定まつて、中心に集中して來るよ。その淋しさを凌いでから本當の淋しさが來るのだ。今の私のやうな淋しさが。併し此の樣なことは話したのでは解るものではない。お前が自ら知つて行くよ。

唯圓　では私はどうすればいゝのでせうか。

親鸞　淋しい時は淋しがるがいゝ。運命がお前を育てゝゐるのだよ。只何事も一すぢの心で眞面目にやれ。ひねくれたり、ごまかしたり、自分を欺いたりしないで、自分の心の願ひに忠實に從へ。それだけ心得てゐればよいのだ。何が自分の心の本當の願ひかといふことも、すぐには解るものではない。樣々な迷ひを自分でつくり出すからな。しかし眞面目でさへあれば、それを見出す智慧が次第に磨き出されるものだ。

唯圓　あなたのおつしやる事はよく解りません。併し私は眞面目に生きる氣です。

親鸞　うむ。お前には素直な一向な善い素質がある。私はお前を愛してゐる。その素質を大切にしなくてはならない。運命にまつすぐに向へ。智慧は運命だけが磨き出すのだ。今はお前は年の割りに幼いやうなけれど、先きでは大きくなれるよ。

唯圓　さつき私は知應殿に叱られましてな。

親鸞　何と云つて。

唯圓　私が淋しいのは信心が足りないからだと云うて。佛

樣の救ひを信ずるものは法悅がなければならぬ。その法悅は救はれてゐる證據だ。踴躍歡喜の情が胸に滿ちてゐれば淋しい事はない。淋しいのは救はれてゐない證據だとおつしやいました。

親鸞　ふむ。（考へてゐる）

（兩人暫く沈默。本堂より、鐘の音讀經の合唱かすかに聞えて來る。）

唯圓　お師匠樣、あの（顏を赤くする）戀とはどのやうなものでございませうか。

親鸞　（まじめに）苦しいものだよ。

唯圓　戀は罪の一つで御座いませうか。

親鸞　罪に絡まつたものだ。此の世では罪をつくらずに戀をすることは出來ないのだ。

唯圓　では戀をしてはいけませんね。

親鸞　いけなくても誰も一生に一度は戀をするものだ。人間の一生の旅の途中にある關所のやうなものだよ。その關所を越えると新しい光景が眼の前に展けるのだ。此の關所の越え方の如何で多くの人の生涯はきまると云つてもいゝ位だ。

唯圓　そのやうに重大なものですか。

親鸞　二つとない大切な生活材料だ。眞面目に此の關所にぶつかれば人間は運命を知る。愛を知る。すべての智慧の芽が一時に眼醒める。魂はもの〻深い本質を見る事が出來るやうになる。いたづらな、浮いた心で此の關所に向へば、人は盲目になり、ぐうたらになる。その關所の向うの涼しい國をあくがれる力がなくなつて、關所の此方で精力が耗きてへと／＼になつてしまふのだ。

唯圓　では戀と信心は一致するもので御座いませうか。

親鸞　戀は信心に入る通路だよ。人間の純な一すぢな願ひをつき詰めて行けば、皆宗教的意識には入り込むのだ。戀するとき人間の心は不思議に純になるのだ。人生のかなしみが解るのだ。地上の運命に觸れるのだ。そこから信心は近いのだ。

唯圓　では私は戀をしてもよろしいのですか。

親鸞　（ほゝゑむ）お前の問ひ方は愛らしいな。私はよいとも惡いとも云はない。戀をすればするでよい。たゞまじめに一すぢにやれ。

唯圓　あなたも戀をなさいましたか。

親鸞　うむ。（間）私が比叡山で一生懸命修行してゐる頃であつた。慈鎭和尙樣の御名代で宮中に參内して天皇の御前で和歌を詠ませられた。その時の題が戀といふのだよ。ところが數多公家たちの歌詠みの中で私のが一番すぐれてゐるとて天皇のお氣に召したのだよ。そして御褒美をばいたゞいた。私は恐縮して退らうとした。すると

公家の中の一人がかやうな歌を讀むからにはお前は戀をしたのに相違ない。戀をした者でなくては解らぬ氣持だ。どうだ戀をした事があるだらうと訊くのだ。

唯圓　あなたは何とお答へ遊ばしましたか。

親鸞　そのやうな覺えはありませんと云つた。するとその公家がそのやうな嘘を云つても駄目だ。出家の身で戀をするとは怪しからんと云ふのだ。他の公家たちがクスクス笑つてゐるのが聞えた。

唯圓　まじめに云つたのではないのですか。

親鸞　からかつて笑草にしたのだよ。私は威嚴を傷けられて御所を退出した。どんなに恥しい氣がしたらう。それから比叡山に歸る道すがら、私はまじめに考へて見ずには居られなかつた。私は本當に戀を知らないのであらうか。私はさうとは言へなかつた。では何故戀をしましたと云へなかつたのか？　何故嘘をついたのか。出家は戀をしてはいけない事になつてゐるからだ。私はいやな氣がした。私は自分らの生活の虚僞を今更のやうに憎惡した。そして山上の修行が一つの型になつてゐるのがたまらなく僞善のやうに感じられた。その時から私は山を下る氣を起した。もつと嘘をつかずに暮らす方はないか。戀をしても救はれる道はないかと考へずにはゐれらなかつた。

唯圓　凡そ惡の中でも僞善ほど惡いものは無いのですね。あなたはいつか僞善者は人殺しよりも佛に遠いとおつしやいましたね。

親鸞　その通りだ。百の惡業に催されて自分の罪を感じてゐる惡人よりも、小善根を積んで己の惡を認めぬ僞善者の方が佛の愛にはもれてゐるのだ。佛樣は惡いと知つて私たちを助けて下さるのだ。惡人のための救ひなのだからな。

唯圓　善いものでなくては助からぬといふ聖道の敎へとは何といふ相違でございませう。

親鸞　他人はともあれ。私のやうなものはそれでは助かる見込みはつかないのだ。私は今でも得忘れぬ。が六角堂に夜參りして山へ歸る道で一人の女に出遇つてね。寒空に月が氷りつくやうに光つてゐる夜だつたよ。私を山へ連れて登つてくれといふのだ。私は比叡山は女人禁制で女は連れて登る譯に行かないと斷つたのだ。すると私の衣の袖にすがつて泣くのだ。私も修行して助けられたいから是非山へ連れて行つて出家にしてくれと一生懸命に哀願するのだ。幾ら云つても聽き入れないのだ。はては女は助からなくてもよいのですかと怨むのだ。私は實に困つた。山の上では女は罪深くして三世の諸佛も見捨て給ふといふことになつてゐるのだ。仕方がないから私は

その通りを云つて諦らめさせようとした。すると女は見る見る眞靑な顔をした。やがて胸を叩いて佛を呪ふ言葉を續發した。それから一目散に走つて逃げてしまつた。

唯圓　まあ可哀想な事をなさいましたね。

親鸞　でも山の上へは連れて行けなかつたのだ。嵐で森ははげしく鳴つてゐる。私は女の呪ひが胸の底に應へて夢中で山の上まで歸つた。その夜はまんじりともしなかつた。それからといふものは私は女も救はれなくては嘘だといふ氣が心から去らなくなつた。私は毎夜々々六角堂に通つて觀音樣に祈つた。夢中で泣いて祈つた。私は死んでもよいと思つた。私はその頃からものゝ見方が大分變つて來だした。山上の生活を嫌ふ心は極度に達した。私は六角堂から歸りによく三條橋の欄干にもたれて往來の人々を眺めた。六ケし相な顔をした武士や、胸算用に餘念の無さゝうな商人や、娘を連れた老人などが通つた。或は口笛を吹きながら廓へ通ふらしい若者も通つた。私はどんなに親しく其の人たちを眺めたらう。皆許されねばならないやうな氣がした。世の相(すがた)をあるがまゝに保つて置く方がよいといふ氣がした。「此の儘で、此の儘で」と私は心の中に叫んだ「みんな助かつてゐるのでは無からうか」と。山へ歸つても、もはや、其處は私の住み家ではない氣がした。

唯圓　其時法然聖人にお逢ひなされたのですね。

親鸞　まつたく觀音樣の御ひきあはせだよ。私は法然樣の前で泣けて〳〵仕方がなかつたよ。

唯圓　（涙ぐむ）あなたのお心は私にもよく解ります。

（兩人暫く沈默。僧一、僧三登場。）

僧一　御師匠樣は此處にゐられましたか。

親鸞　唯圓と日向で話してゐました。

僧三　御氣分は如何で御座いますか。

親鸞　もう殆どよいのだよ。有難う。

僧一　それは嬉しう御座います。大切に遊ばして下さい。

親鸞　お前たちも此處でお話しなさい。本堂の方はどうだつた。

（唯圓。座蒲團を持ち來り、兩人に薦め、茶をつぐ。）

僧三　一ぱいの參詣人で御座います。お勤めが濟みまして、今は知應殿の說教最中で御座います。

僧一　知應殿の熱心な說教には皆感動したやうで御座いました。

僧三　權威のある、強い說教でした。皆かしこまつて聽聞(ちやうもん)致してゐました。

僧一　今日の說教は殊に上出來で御座いました。

親鸞　やはり法悅といふ題でしたのだな。

僧三　御存じでいらつしやいますか。

親鸞　知應が私に話した事もあるし、さつき唯圓から一寸聞いた。
僧一　宗教的歡喜といふものがいかに富や名譽など、地上の樂よりもすぐれて尊いかを高潮してお話しなされました。
僧三　戀よりも樂しいとさへおつしやいました。
唯圓　死の恐怖もなく孤獨の淋しさもなく、浮世への誘惑も無いとおつしやいました。
僧一　法悅は救ひの證據であると云はれました。
僧三　私たち出家してゐるものゝ、特別に惠まれた境遇である事を、あの說教を聽いて私は今更の如くに感じました。
唯圓　私はあれを聞いて不安な氣が致します。私は此の頃は淋しい氣がいつも致します。ぼんやりしてお經を讀んでも心が躍らない時があります。私は病身で先月も少し熱が高かつたので死ぬのではないかと恐くて堪りませんでした。今死んでは惜しくてなりません。私は何だかあくがれるやうな、浮世を懷しむやうな氣が催して來ます。知應樣のやうに強い證(あかし)を立てる事が出きません。法悅が救ひの證據とすれば私は救はれてゐないのでせうか。私は此の樣でも佛樣が助けて下さる事丈は疑はないのですけれど……

僧一　證の弱い勢だらうと私は思ひます。
僧三　やはり信心が若いからではありますまいか。
唯圓　御師匠樣、一體どうなので御座いませう。敎へて下さい。私は不安で堪りません。私は助かつてゐますか。ゐませんか。
親鸞　助かつて居ます。心配する事はありません。實は私も唯圓と同じ心持で暮らしてゐます。病氣の時は死を怖れ、煩惱には絕えず催され、時々は淋しくて堪らなくなる事もあります。踴躍歡喜の情は、どうもおろそかになり勝ちでな。時に燃えるやうな法悅三昧に入る事もあるが、その高潮は軈て灰のやうに散り易くてな。私は始終苦しんでゐます。
僧一　（驚きて親鸞を見る）　あなたがですか。
親鸞　私は何故かうなのだらうといつも自分を責めて居ます。よく／＼私は業が深いのだ。私が老年になつてからなのだから、若い唯圓が苦しむのも無理はない。併し私は決して救ひは疑はぬのだ。佛かねて知ろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられた。その致し方のない罪人の私等を此の儘助けて下さるのだ。
僧三　では知應殿の御考へは間違ひで御座いますか。
親鸞　いや間違ひではない。人によつて業の深淺があるのだ。法悅の相續出來る人は惠まれた人だ。私はそのやう

な人を祝福する。或る人は煩惱が少く、或る人は煩惱が強くて苦しむのだ。只法悦を救ひの證とするのが淺い。知應にも話さうと思つて居るがよくお聞きなさい。救ひには一切の證はありませんぞ。その證を求めるのは此方のはからひで一種の自力です。救ひは佛樣の願ひで成就してゐる。私らは自分の機にかゝはらず只信じればよいのです。業の最も淺い人と深い人とはまるで相違した此の世の渡り樣をします。しかしどちらも救かつてゐるのです。

唯圓　私は有難い氣が致します。もつたいない程で御座います。

僧一　私は其處に氣が付きませんでした。法悦があつても、なくても、私らの心の有樣の變化には係りなしに救ひは確立してゐるので御座いますね。

親鸞　それでなくては運命に毀たれぬ確かな救ひと言はれません。私らの心の有樣は運命で動かされるのだからな。

僧三　やはり自らの功で助けられようとする自力根情が殘つて居るのですね。すべてのものを佛樣に返し奉る事は容易では御座いませんね。

親鸞　何もかもお任せする素直な心になりたいものだな。

唯圓　聞けば聞くだけ深い教へで御座います。

親鸞　みんな助かつてゐるのぢや。たゞそれに氣がつかぬのぢや。

僧二　（登場）　皆樣此處にゐられましたか。今やつと說教が濟みました。（昂奮してゐる）

親鸞　御苦勞樣でした。暫く此處でお休みなさい。

僧二　お匠師樣にお願ひであります。只今私が說教を終りますと、講座の側に五六名の同行が出て參りまして、親鸞樣に是非お目にかゝりたいから遇はれるやうにとりなして吳れと賴みました。

親鸞　何か特別な用向きでもあるのですか。

僧二　往生の一大事に就いて承りたき筋あつて、はる〲遠方から尋ねて參つたと申します。皆熱心面に溢れてゐました。

親鸞　往生の次第ならばもはや幾度も聽聞してゐる筈だがな。まことに單純な事で私は別に話し加へる事もありませんがな。

僧二　私も左樣申し聞かせました。殊に少し御不例故また日をかへていらしたらどうかと申しました。しかし皆はるばる參つたもの故、是非親鸞樣にお目にかゝらせてくれと泣かぬばかりに賴みます。あまり熱心でございますから、私も不便になりまして、一應お尋ね申す事に致しました。

親鸞　それはお易い事です。私に會ひたいのならいつでも

お目にかゝります。只私は六ヶ敷い事は知らぬとその事だけ傳へて置いて下さい。では此處へすぐに通して下さい。

僧二　有り難う御座います。嘸皆が悦ぶ事で御ざいませう。

（退場）

僧一　遠方から參つたものと見えますな。

僧三　熱心な同行衆で御座いますね。

唯圓　お師匠樣に遇ひたさにはる〴〵京にたづねて來たのですね。私は殊勝な氣が致します。

親鸞　（默つて考へてゐる）

僧二　（同行衆六名を案內して登場）

親鸞　（同行衆の躊躇してゐるのを見て）さあ、此方にお出でなさい。遠慮なさるな。

（唯圓、席をとゝのへる。同行衆皆座に着く。）

親鸞　私が親鸞です。（弟子を指して）此の人たちはいつも私の側にゐる同行です。

同行一　あなたが親鸞樣でございましたか。（涙ぐみ親鸞をぢつと見る）

同行二　私は嬉しう御座います。一生に一度はお目にかゝりたいと祈つてゐました。

同行三　逢坂の關を越えて此處は京と聞いたとき私は涙がこぼれました。

同行四　ほんになか〳〵の思ひでは御座いませんでしたね。

同行五　永い間の願ひがかなひ、此の樣な本望なことは御ざいません。

同行六　私はさつき本堂で斷られるのではないかと氣が氣でありませんでした。

親鸞　（感動する）よくこそ訪ねて來て下さいました。私も嬉しく思ひます。どちらからお越しなされました。

同行一　私共は常陸の國から參りましたので。

同行四　私等は越後の者で御座います。

親鸞　まああなた方はそのやうに遠くからいらしたのですか。

同行二　隨分長い旅をいたしました。

親鸞　さうでせうともね。常陸も越後も私には思ひ出の深い國で御座います。

同行四　私の國では方々であなたの事を同行が集つてはお噂申して居ります。

同行一　あなたのお遺しなされた御感化は私の國にも隈なく行き渡つて居ります。

同行三　まだお目にかゝらぬあなた樣をどんなにお慕ひ申した事で御座いませう。

親鸞　私も懷しい氣が致します。あのあたりを行脚した頃

の事が思ひ出されます。
同行五　あの頃とは色々變つてゐますよ。
親鸞　何しろもう二十年の昔になりますからね。
同行六　雪だけは相變らず澤山積ります。
親鸞　雪に埋もれた越後の山脈の景色は一生忘れる事は出來ません。
同行四　も一度いらして下さる氣は御座いませんか。
親鸞　御縁がありましたらな。だが恐らく二度と行くことはありますまい、もう年をとりましたでな。
同行一　お幾つにおなりなされますか。
親鸞　七十五になります。
同行二　さつき一寸承はりましたら、あなたは御病氣でいらつしやいますさうで。
親鸞　はい少し風を引きましてな。もう殆どよいのです。
同行二　どうぞお大切になされて下さいませ、
同行三　皆の者がいか程お頼り申してゐるか知れないのですから。
親鸞　はいようおつしやつて下さいます。（間、唯圓を指し）此の人は常陸から來てゐるのです。
唯圓　私は常陸の大門村在の生れで御座います。
同行一　同じお國と聞けば懷しう御座います。もう長らく京にゐられるのでございますか。

唯圓　國を出てから十年になります。國には父が殘つてゐますので戀しう御座います。
親鸞　十五年前に私が常陸の國を行脚した折に、雪に降りこめられて此人の家に一夜の宿をお世話になつたのです。それが縁となつて、今ではかうして朝夕一緒に暮らすやうになりました。
同行二　因縁と申すものは不思議なもので御座いますな。
僧一　袖の振り合ひも他生の縁とか申します。
僧二　かうして皆様と半日を一緒に温かく話すのでも、縁なくば許される事ではありませんね。
僧三　一つの逢瀨でも、一つの別れでもなか〳〵つくらうとしてつくれるものではありませんね。人の世のかなしさ、嬉しさは深い宿世の約束事で御座います。
唯圓　私は縁といふ事を考へると涙ぐまれる心地がします。此世で敵同志に生れて傷け合つてゐるものでも、縁といふ事に氣がつけば互ひに許す氣になるだらうと思ひます。
「あゝ私たちは何といふ惡縁なのでせうか」と云つて涙をこぼして二人は手を握る事は出來ないものでせうか。
親鸞　互ひに氣に入らぬ夫婦でも縁あらば一生別れる事は出來ないのだ。墓場に入つた時は何もかも解るだらう。そして別れずに一生添ひ遂げた事を互ひに嬉ぶだらう。

唯圓　愛してよかつた。許してよかつた。あの時に呪はないでしあはせだつた、と思ふでせうよね。

僧三　人は皆仲よく暮すことですね。

（一同しんみり沈默。）

同行一　（膝をすゝめる）實は私達が十餘ケ國の境を越えてはるばる京へ參りましたのは往生の一儀が心に懸るからで御座います。私たちは是非とも今度の後生の一大事が助けて戴きたいので御座います。皆に代つて私が一向に御願ひ申します。何卒往生の道をお敎へ下さいませ。

親鸞　さ程に懸命に道を求めなさるのは實に殊勝に存じます。私はいつも世の人が信心を輕ろい事に思ふのを不快に感じてゐます。信心は一大事ぢや。眞劍勝負ぢや。地獄と極樂との追分ぢや。人間が一番眞面目に對せねばならぬ事だでな。だが、あなた方は國のお寺では聽聞なされませぬかの。

同行二　每度聽聞致してゐます。

親鸞　どのやうに聽聞してゐられます。

同行三　阿彌陀樣に、何卒今度の後生を助け給はれと一すぢにお願ひ申せばいかなる惡人も必ず助けて下さると、から承はつて居ますので。

親鸞　その通りです。それでよろしい。

同行四　そこまでは度々聞いてよく承知致してゐます。それから先きを詳しく敎へて戴きたいので。

親鸞　それを聞いて何になさるのぢや。

同行五　極樂參りが致し度いので。

親鸞　極樂參りはお國で聽聞なされてよく御承知の通りの念佛で確かに出來るのです。

同行六　でも何だか不安な氣がしまして。

親鸞　安心なさい。それだけで充分です。

同行一　あなたの御安心が承はりたいので。

親鸞　私の安心もたゞその念佛だけです。

同行二　でもあまり曲がなさ過ぎます。

親鸞　その單純なのが當流の面目です。單純なものでなくては眞理ではありません。また萬人の心に觸れる事は出來ません。

同行三　では御座いませうが、あなたは長い間比叡山や奈良で御研學遊ばしたので御座いませう。私たち無學な者には解らぬかは存じませぬが、御敎養の一部をお漏らしなされて下さいませ。

同行四　それを承はりに遙々參つたので御座います。

同行五　國の土產に致します。

親鸞　（眞面目な表情になる）いやその樣々の學問は極樂參りの邪魔にこそなれ助けにはなりません。信心と學問とは別事です。假令八萬の法藏を究めたとて、極樂の門

が開ける譯ではありません。念佛だけが正定の業です。若し各々方が親鸞は六ケ敷き經釋をも辨へ、或は往生の別の仔細をも存じ居るべしと心惱く思し召して、はるばる尋ねていらしたのならば、まことにお氣の毒に思ひます。私は何も六ケ敷い事は存じませぬのでな。その儀ならば南都北嶺に由々敷き學者たちが居られます。其處に行つてお聽きなされませ。

同行一　御謙遜なるお言葉に痛み入ります。尚更ゆかしく存じます。

同行二　北嶺一の俊才と聞えたるあなた樣、何のおろそかが御座いませう。

親鸞　北嶺南都で積んだ學問では出離の道は得られなかつたのです。私は學問を捨てたのです。そして念佛申して助かるべしと善き師の仰せを承はつて、信ずる外には別の仔細はないのです。

同行三　それは眞證でござりますか。

（一同不審の顏付をしてゐる。）

親鸞　何しに虚言を申しませう。思はせぶりだと思召しなさるな。凡そ眞理は單純なものです。救ひの手續きとして、外から見れば念佛程簡單なものはありませぬ。たゞの六字だでな。だが内からその心持に分け入れば、限りもなく深く複雜なものです。恐らくあなた方が一生かゝつてもその底に達する事はありますまい。人生の愛と運命と悲哀と――あなた方の一生涯かゝつて體驗なさる內容を一つの簡單な形に煮詰めて盛り込んであるのです。人生の歩みの道すがら、振りかへる每に此の六字の深さが見えて行くのです。（段々熱心になる）それを知慧が增すと申すのぢや。經書の教義を究めるのとは別事です。知識が殖えても心の眼は明るくならぬでな。若し各々方が親鸞に相談なさるなら、御熟知の唱名でよろしいと申しませう。經釋の聽きぼこりは以ての外の事ぢや。それよりも名々に念佛の心持を味はふ事を心掛けなさるがよい。人を愛しなさい。許しなさい。悲しみを耐へ忍びなさい。業の催しに苦しみなさい。運命を直視なさい。その時人生の樣々の事象を見る眼が濡れて來ます。佛樣のお慈悲が有り難く心に沁むやうになります。南無阿彌陀佛がしつくりと心にはまります。それが本當の學問と申すものぢや。

同行五　畏れ入りました。鈍な私達にもよく腹に入りました。極樂へ參らせて戴くためには、たゞ念佛すればよいので御座いますな。たゞそれだけでよいので御座いますな。

同行六　鋭い刀で切つたやうに、心がはつきりとして參りました。

同行一　只一つ私にお聽かせ下さい。その念佛して淨土に生まれると云ふのは何か證據があるのですか。

親鸞　信心には證據はありません。證據を求むるなら信じて居るのではありません。（一層に強く）彌陀の本願眞に御座しまさば、釋尊の教說虛言ではありますまい。釋尊の教說虛言ならずば、善導の御釋僞りでござりますまい。善導の御釋僞りならずば法然聖人の御勸化よも空言ではありますまい。（間）いや假令法然聖人に騙されて地獄に墮ちようとも私は怨みる氣はありません。私は彌陀の本願がないならば、どうせ地獄の外に行く所は無い身です。どうせ助からぬ罪人ですもの。さうです。私の心を著しく表現するなら、念佛は本當に極樂に生まるゝ種なのか。それとも地獄に墮ちる因なのか、私はまつたく知らぬと云つてもよい。私は何もかもお任せするのぢや。私の希望、いのち、私そのものを佛樣に預けるのぢや。何處へなとつれて行つて下さるでせうよ。

（一同暫く沈默。）

同行一　私は恥しい氣が致します。私の心の淺ましさ、證據が無くては信じないとは何といふ卑しい事で御座いませう。

同行二　私の心の自力が日に晒されるやうに露はれて參りました。

同行三　樣々の塀を作つて佛のお慈悲を拒んでゐたのに氣がつきました。

同行四　まだ〳〵任せ切つてはゐないのでした。

同行五　心の內の甘えるもの、媚びるものが崩れて行くやうな氣がします。

同行六　（涙ぐむ）思へばたのもしい佛の御誓ひで御座います。

親鸞　さかしらな物の言ひ方を致して氣になります。必ずともに六ヶ敷い事を知らうとなさいますな。素直な子供のやうな心で佛樣にお縋り遊ばせ。あまり話しが理に落ちました。少し四方山の話しでも致しませう。もう名所の御見物はなされましたか。

同行一　まだ何處も見ませんので。

同行二　京に着くとすぐ此處に御參り致しましたのです。

親鸞　祇園、淸水、知恩院、嵐山の紅葉ももう色づきはじめませう。何なら案內をさせてあげますよ。

同行一　はい有り難う御座います。

（此の時夕方の鐘が鳴る。）

唯圓　お師匠樣、夕ざれて、涼しくなつて參りました。もうお居間でお休み遊ばしませぬとお體に障りますよ。

同行四　どうぞお休みなされて下さいまし。

同行五　私たちはもうお暇申します。

親鸞　いや、今夜は私の寺にお泊り下さい。これから私の居間でお茶でも入れて、ゆつくりとお話し致しませう。唯圓、御案内申しあげておくれ。（弟子達に）お前たちも一緒にいらつしやい。

（親鸞先きに立ちて退場。皆々立ちあがる。）

唯圓　さあ、どうぞ此方にお越しなされませ。

——幕——

第三幕

第一場

場所

三條木屋町　松の家の一室　鴨川に臨んでゐる）

人物

善鸞　親鸞の息（三十二歳）
唯圓
淺香　遊女（二十六歳）
かへで　遊女（十六歳）
遊女三人
仲居二人
太鼓持

時

秋の日ぐれ

（遊女三人欄干にもたれて語り居る。）

遊女一　冷めたい風が吹いて氣持のいゝこと。

遊女二　顏が燃えてせうがないわ。（顏に手をあてる）

遊女三　私は遊び疲れてしまひました。

遊女一　此の四、五日は飲みつゞけ、歌ひつゞけですものね。

遊女二　私は善鸞樣に盛り潰され、醉ひくたびれて逃げて來ました。

遊女三　善鸞樣は幾らでも無茶におあがりなさるのですもの。とてもかなひませんわ。その癖おいしさうでもないのね。

遊女一　飲むほど青いお顏色におなりなさるのね。

遊女二　馬鹿に燥やいでいらつしやるかと思へば、急に泣きだしたりして本當に變な方ですわね。私はお酒によつて泣く人は嫌だわ。

遊女三　本當に私は時々氣味が惡くなつてよ。此の間も私がお酒の御對手をして居たら、妙に沈んでいらしたが、私の顏をじつと見て、私はお前がかはゆい〱と云つて私をお抱きなさるのよ。それが色氣なしなのよ。

遊女一　氣が狂ふのではないかと思ふと、一方ではまたしつかりした所があるしね。

遊女二　私は始め少し足りないのではないかと思つたのよ。ところがどうして、鋭すぎる位しつかりしてゐるのよ。滅多な事は言はれませんよ。

遊女三　何しろ好いたらしい人ではありませんね。

遊女一　そんな事をいふと淺香さんがおこりますよ。

遊女二　淺香さんと云へば、彼の方にひどく身を入れたものね。あの音なしい淺香さんがどうして彼のやうな方が好きなのでせうね。

遊女三　それは好き〳〵で仕方がないわ。あなたならあの此の間善鸞樣の所に見えた、若い、美しい坊樣の方がお氣に召しませうけれどね。

遊女二　冗談ばつかし。（打つまねをする）あれはかへでさんよ。

（歌ふ聲。話し聲。人々の足音が聞える。）

遊女一　此方にいらつしやるやうよ。

（善鸞。淺香とかへでと太鼓持と仲居をしたがへて登場。）

太鼓持　これはしたり、各々方にあ此處に遁げ込んでゐられたか。

善鸞　私たちをまいて、此處に來て內證でよい事をしたのかい。はゝゝゝ。

太鼓持　ひそ〳〵話は平に御容赦。

遊女一　（善鸞に）あなたこそおたのしみ。

遊女二　私たちがゐてはお邪魔と思つて氣を利かしてあげたのですわ。

善鸞　これは恐れ入つたな。

太鼓持　恐れ入りやのとうさい坊主。

善鸞　坊主とはひどいな。はゝゝゝ。

太鼓持　これはとんだ失禮。（自分の頭を扇子で打つ）

（一同笑ふ。）

善鸞　默つて遁げた罰にもつとお酒を呑ましてやるぞ。おい酒を持つて來い。

仲居　はいかしこまりました。（行かうとする）

淺香　もうお酒はお止し遊ばせ。お體に毒です。昨夜から飲みつゞけではありませんか。

善鸞　此の私に攝生を守れと云つて吳れるかな。お前は貞女だな。はゝゝゝ。此處で河の景色を見つゝ飲み直さう。さつきのお前の陰氣な話しで氣が滅入つた。（仲居に）すぐに持つて來い。

（仲居退場。）

淺香　本當にもうお止しなさればいゝのに。好きでかなはぬ酒でもないのに。

善鸞　私は飲んで〳〵私の體を燃やし盡すのだ。體で火を點して生きるのだ。火が消えると淋しくて仕樣がないの

だよ。

淺香　でも程がありますわ。

善鸞　淋しさには程がないのだよ。魂の底まで淋しいのだよ。

淺香　その淋しさを慰めるために私たちがついてゐるではありませんか。

善鸞　うむ。お前たちは私に無くてはならぬものだ。お前たちがなくては生きられない。その癖お前たちと遊んでゐるとまた餘計に淋しくなるのだ。淺香、お前はいつも淋しい顔をしてゐるね。今日はもつと陽氣になつてくれ。

淺香　でも私の性分なんですから仕方がありませんわ。

善鸞　今日は皆騷ぐのだよ。何もかも忘れて仕舞ふのだよ。人生は淋しくても、樂しいものと無理に思ふのだよ。人生は醜い、調和したものと無理にきめるのだよ。（聲を高くする）さあ今世界は調和した。人と人とは美しく從屬した。人の心の惡の根が斷滅した。不幸な人は一人もゐない。みんな喜んでゐる。みんな子供のやうに遊んでゐる。あ川が流れる、流れる。緩るやかに、平和に。（川を見入る）

（仲居、酒、肴、其他酒宴の道具を運ぶ。）

善鸞　さあ、皆飲んだ、飲んだ。（遊女に盃をさす）

遊女一　もう堪忍して下さいな。

遊女二　私は苦しくてせうがないわ。

善鸞　いやどうあつても飲ませねばいけないのだ。

太鼓持　君命もだし難く候ほどに。

（仲居遊女たちに酒を注いでまはる。）

善鸞　（杯を手に持ちて）此のなみ／＼と賑れるやうに盛りあがつた黄金色の液體の豐醇なことはどうだらう。歡樂の精を融かして流したやうだ。貧しい、缺けた人の世の感じは、何處にも見えないやうな氣がする。（飲みほす）此の盃は誰れに遣らう。（見廻はす）かへで、かへで。小さいかへでに。（杯をかへでにさす）

かへで　おほきに。（心持頭を傾け、盃を受取る）

（仲居酒をつぐ。かへで一寸居をつけて下に置く。）

善鸞　かへで、何か歌つておきかせ。

かへで　私はいやですわ。姉さんたちが澤山いらつしやるではありませんか。

善鸞　いやお前でなくてはいけないのだ。

太鼓持　さあ、所望ぢや。所望ぢや。

かへで　せうがないのね。（子供らしい聲で歌ふ）

（淺香三味線をひく。）

萩、桔梗、なかに玉章しのばせて、
月は野末に、草のつゆ。
君を松蟲夜毎にすだく。

ふけゆく空や雁の聲。
戀はかうした……

善鸞　もうよい。もうよい。（堪へられぬやうに）おゝ、あの口もとの小さなこと。

淺香　（まだ三味線を持つたまゝ）まあ、不意に途中でお切りなさるのですもの。

善鸞　見てやつて下さい。此の小さい子を。他所の荒男が歌をうたへと責めまする……（涙ぐむ）も一つおあがり。（かへでに杯をさす）

かへで　もう澤山。

太鼓持　（女の聲色を使ふ　私がすけてあげませうわいな。（かへでの前の杯を取つて飲む）

淺香　今日のあなたはどうかしていらつしやるのね。

善鸞　いやどうもしてはゐないよ。

淺香　今日はもう止しませうよ。お顔色もよくありませんよ。私少しも騒いだりする氣になれないわ。

善鸞　淋しい事を云ふ女だな。（淺香の顔をぢつと見る。軈て急に淺香の前髪の中に手を突き込む）

淺香　（おどろく）あれ、何をなさるのです。（頭に手をやる）

かへで　髪がほつれてしまつたわ。

善鸞　お前の房々とした黑髪を見て居たら、憎らしくなつたのだ。（太鼓持に）これ、鷄の鳴くまねをして見ろ。

太鼓持　心得ました。（鷄の聲色を使ふ）

（遊女たち笑ふ。）

善鸞　膝頭で歩いて見ろ。

太鼓持　かうで御座りますか。（膝頭であるく）

（遊女たち笑ふ。）

善鸞　お前の頭を打いて見ろ。

太鼓持　お易いことで。（己れの頭を扇子で打つ）

善鸞　（狂ふやうに）もつと、もつと。

（太鼓持つゞけざまに己れの頭を打つ。）

善鸞　おゝ。（眼をつぶる）

遊女二　大そうお沈みなされましたのね。

淺香　（いとしさうに善鸞を見る）善鸞様。私は知つて居ますよ。お寺へ遣つた使の事で、心がお苦しいので御座りませう。

遊女一　何を考へていらつしやるの。

（一座やゝ白ける。善鸞默つて考へてゐる。）

遊女二　大層お沈みなされましたのね。

善鸞　（急に浮き〳〵する）今お前を身受けする事を考へて居たのだ。

遊女二　（笑ふ）それは大きにありがたう。身受してどうなされます。

善鸞　はて知れた事。連れて歸つて女房にする。さあ此方にお出で。（立ち上り、遊女二の手を取つて引き立てる）
遊女二　じやうだんはお止し遊ばせ。
善鸞　さあ、此方にお出で。（無理に引つ張る）
遊女二　（よろ〳〵して引張られる）いたづらをなさいますな。（振り放して座に返らうとする）
善鸞　かはゆい奴め。（後ろから遊女二を抱きしめる）
遊女二　あれ、放して下さい。放して下さい。（身をもがく）そんなになすつては、切なくて、切なくて、せうがありはしないわ。
善鸞　（笑ふ）何て色氣の無い人だ。此の人は。
（一同驚いて見てゐる。仲居登場。）
仲居　唯今唯圓樣がお見えになりました。
善鸞　（遊女二を放す。稍動搖す）此處に通して吳れ。（座に返る）
（一同沈默、唯圓登場。衣を着てゐる。）
唯圓　御免下さいまし。（一座の光景に打たれ、一寸躊躇する）
善鸞　よく來て下さいました。待つて居ました。さあ此方にお通り下さい。誰も遠慮な者は居ません。えらい所を見せますな。はゝゝゝ。
仲居　どうぞお通り下さいませ。

唯圓　（座に通り、善鸞の前に坐る）先日は失禮致しました。
善鸞　今日は使を立てゝ失禮しました。御迷惑ではありませんでしたか。
唯圓　いゝえ。あなたからのお使と聞いて喜んで參りました。何か御用で御座いますか。
善鸞　いゝえ。用と言つてはありません、私はたゞ淋しくつてあなたに逢つて話したかつたのです。
唯圓　私もあなたに遇ひたう御座いました。
仲居　（新しい盃を持つて來て唯圓の前に置く）どうぞお持ち遊ばしませ。
唯圓　（もぢ〳〵する）私は飮みませんので。
仲居　でも一つ。
善鸞　いや、此の人にはすゝめてくれな。（唯圓の不安さうなのを見て）私たちは少し話があるから皆あちらに遠慮して吳れ。
仲居　かしこまりました。では皆さん。
（一同二人を殘して退場。）
善鸞　此のやうな處へあなたを呼んで濟みません。それに私はお酒に醉つてゐます。
唯圓　私は構ひません。私は喜んで來たのです。
善鸞　私は淋しかつたのです。誰も私の心を理解して吳れ

る人はありません。私はかうして酒を飮んでゐても腹の底は冷めたいのです。私は苦しいのです。私は此の間あなたと遇つた時から、親しい、溫かい氣がするのです。私の胸の思ひをすら〳〵と受け容れて下さるやうな氣がするのです。あなたと向き合つてゐると、色々な事が聞いて戴きたくなるのです。

唯圓　私も此の間あなたと別れてから、あなたの事が思はれてならないのです。あなたにお目に懸りたいといつも思つてゐました。あなたから使の來た時にどんなに嬉しかつたでせう。

善鸞　こんなに人を懷しく思つた事はずつと前に一度あつたきりです。永い間私は心が荒んで來てゐました。（間）私はあなたが好きです。

唯圓　私は嬉しう御座います。あなたの樣な方を何故人は惡く云ふのでせう。私はそれが解りません。先日も寺で皆樣があなたの事を惡く云はれましたから、私は腹が立ちました。そして彼の方は善い人です。あなた方の思つてゐるやうな人ではありませんと云つてやりました。

善鸞　私の事をどのやうに惡く申しますか。

唯圓　放蕩な上に、淨土門の救ひを信じない滅びの子だと申してゐます。父上に肖ぬ荒々しい氣質だと云つてゐましたよ。

善鸞　無理はありません。その通りです。私は滅びる魂なのでせう。まつたく荒々しい氣質です。私は皆の批評に相當して居ます。

唯圓　まああなたのやうに優しい御氣質を……

善鸞　いや。（さへぎる）あなはの前に出ると私の善い性質ばかり呼び醒まされるのです。然し他の人に向ふとまるで違つて荒い氣質が出るのです。

唯圓　皆がよくないのだと思ひます。あなた自身は善い方に違ひありません。私はそれを信じてゐます。

善鸞　（涙ぐむ）そのやうに云つて吳れる人はありません。私は自分の氣質が、自分で自由にならないのです。それには小さい時からの境遇や、また私の受けた心の傷やの勢もありますがね。私は御存じのやうに長く父の勘當を受けて居るのです。

唯圓　………

善鸞　父には色々な迷惑をかけましたからね。嘸私を今でも憎んでゐるでせうねえ。

唯圓　いゝえ。違ひますよ。お師匠樣は蔭ではあなたの事をどれ程案じていらつしやるか知れませんよ。

善鸞　どうして暮らしてゐますか。

唯圓　朝夕、御念佛三昧で御座います。此の間はお風を召しまして、御寢みなされましたが、もう殆どよろしう御

座います。しかし大分お年をお召し遊ばしましたよ。

善鸞　さうでせうねえ。私はいつも稲田にゐて、京へは滅多に出ませんし、殊に面會もかなはぬ身で少しも様子が解りません。私は親不孝ばかりしてはゐますが、父の事は忘れてはゐません。氣をつけてやつて下さい。

唯圓　私はいつもお側を離れず、お給仕申してゐるのです。

善鸞　父はあなたを愛しますか。

唯圓　もつたいない程で御座います。數多いお弟子衆の中でも私を一番愛して下さいます。

善鸞　あなたを愛せぬ人はありますまい。あのかへでがあなたを好きだと云つてゐましたよ。（ほゝゑむ）

唯圓　（顔を赤くする）御戲談をおつしやいます。

善鸞　あなたは女と云ふものをどんなに感じますか。私はあはれた感じがして愛せずにはゐられません。殊に此の様な處にゐる女と觸れるのが私は一番人間と接してゐるやうな氣がします。世の中の人は形式と禮儀とで表面を飾つて、少しも本當の心を見せて呉れません。そのやうなものを武裝にして身を守つてゐるのですからね。私はそのやうに用心をせずに觸れたいのです。自分の醜さや弱さを隱さずに交はりたいのです。此のやうな處では人は恥しい事を互ひに分け持つてゐますからね。どれ程温かい本當の接觸か知れません。それに私は女の與へる氣分に心を惹かれずにはゐられません。それは實に秋の露よりもあはれです。

唯圓　私は心の奥で私が女を求めてゐるのを感じてゐます。しかし女とはどのやうなものか少しもまだ解りません。またどのやうにして觸れたらよろしいやら手續きが解りません。

善鸞　（愛らしいやうに唯圓を見る）本當にあなたは純潔です。私は自分は汚れ果てゝゐますけれど、純潔な人を尊敬します。眼の色からが違ひますからね。だが恐らくあなたも女で苦しまずには人生を渡る事は出來ますまい。私などは物心が附いてから女の意識が頭から離れた事はありません。しかし私はあなたを誘ふのではありませんよ。はゝゝ。

唯圓　（まじめに）此の間もお師匠樣とそのやうな話を致しました。

善鸞　父は何と申しましたか。

唯圓　戀はしてもいゝが、まじめに一すぢにやれとおつしやいました。

善鸞　ふむ。

唯圓　私はあなたに聞かう〳〵と思つてゐましたが、あなたはどうして御勘當の身とおなりなされたのですか。

善鸞　（暗い顔になる）私は道ならぬ戀をしたのです。い

や、道か、道でないかは私は今でも解らぬのです。私は人妻と戀をしました。

唯圓　まあ。

善鸞　女は結婚せぬ前から私を戀してゐたのです。此の世の義理が私の手から女を奪ひました。しかし私の心から戀を奪ふ事は出來なかつたのです。その後の出來事はその矛盾の生む必然的な結果でした。女の夫は私の親戚でした。それが悲劇を複雜にしました。私は戀故に道を破つた惡人になりました。（罵るやうに）戀が道を破るのか、道が戀を破るのか私は今でも解りません。

唯圓　女の方はどうなされました。

善鸞　離られてから病氣になりました。私は遇ふ事も許されませんでした。終に女は死にました。私は死に目にも遇へなかつたのです。

唯圓　女の夫の方はどうなされました。

善鸞　泣いて怒りました。今でも一人の名を呪つてゐます。私はその人の事を思ふと堪りません。私は其の人を愛してゐました。音なしい、善良な人でした。私は此の出來事の責任を誰に負はせるべきかゞ解りません。私は惡いのに違ひありません。しかしたゞそれ切りでせうか。私は寧ろ人生の不調和に歸したいのです。若し世界をつくつた佛があるならば佛に罪を歸したいのです。

唯圓　おゝ、善鸞樣。それは恐しい事です。私はあなたを愛します。私はあなたのために泣きます。どうぞ終りの言葉を二度と云つて下さいますな。

善鸞　私は何も解りません。何も信じられません。私は世界の成立の基礎に疑ひを挾みます。何といふ變な世界でせう。不調和な人生でせう。私はそれからといふもの、心の中から祝福を失つてしまひました。ものゝ見方が歪んで來ました。ものが信じられなくなりました。悲しみと憤りと惱みの間に、女ばかりが私の眼に紅い花のやうに映じます。私は女の肌にしがみついて、私の苦しみを遣る道を覺えました。人は私を放蕩者と呼びます。私は其の名に甘んじます。

唯圓　私は何と申してい〻か解りません。私はあなたの不幸な運命を悲しみます。あなたは本當に堪らない氣がするでせう。しかし佛樣はどのやうな罪を犯したものでも、罪のまゝで赦して下さると聞いてゐます。罪を犯さねばならぬやうに、つくられてゐる人間のために、救ひを成就して下さると、お師匠樣から常に教はつてゐます。

善鸞　あなたの信じ易い純な心を祝します。けれども私はそれが容易に信じられないのです。私の心が皮肉になつてゐるのかも知れません。あまり虛僞を見過ぎたのかも知れません。あまり都合よく出來上つてゐる救ひですか

られ。蟲の好い極惡人のずるい心がつくり出したやうな安心ですからね。私は私の曲つた考へ方をあなたの前に恥ぢます。しかし淨土門の信心は惡人の救ひのやうに見えて、實は矢張り心の純な善人でなくては信じ難いやうな教へですからね。私はやはり爭はれぬものだと思ひます。私が信じられぬのも私の罪や放蕩の罰と思ひます。あなたでも、父でも純な清い人ですからね、自分では深い罪人たと感じていらつしやるけれど。魂を汚し過ぎると、ものが眞直に受取れなくなるのです。私はずゐ分ひどく汚れて居ますからね。とてもあなたには想像出來ません。たとへば（苦しさうに口ごもる）いや、迚もあなたの前では言へないやうな事をしてゐますからね。實に皮肉な、卑しい、不自然な事をしてゐますからね。迚も罰なくして赦されるやうな身ではありません。それは蟲が良すぎます。私は卑しくても、此の樣な汚ない罪を犯しながらその儘助けて呉れと願ふ程あつかましくはなつてゐないのです。それがせめてもの良心です。私の誇りです。私は寧ろ、かく〳〵の難行苦行をすれば助けてやると云つて欲しいのです。どんな苦しい目でもいゝと思ひます。それがかなはぬならば、私は罰を受けます。その方が本望です。

唯圓　あなたの御話を聞いて居ると私は切なくなります。あなたは私などの知らない深い苦しみを持つていらつしやいます。あなたの言葉には尊い良心が波打つてゐます。私は寧ろ尊い說教でも聞いてゐるやうな氣が致します。

善鸞　いゝえ。私は一人の惡魔としてあなたの前に立つてゐるのです。私は滅ぶる運命を負はされてゐるのです。信ずる事の出來ない呪はれた魂をあはれんで下さい。

唯圓　あなたは佛の子だと私は信じます。私はあなたと對して居て惡魔らしい印象を少しも受ける事が出來ませんもの。善鸞樣、私の申す事を聞いて下さい。私は何もあなたに申上げるやうな知慧はありませんけれど。私はあなたは自分で自分の魂を侮辱していらつしやると思ひます。ひねくれて物を反抗的にお考へなさると思ひます。私はあなたのさうおなりなさつた道筋に無限の同情を捧げます。しかしあなたの步み方は本道をまともに進んでいらつしやらないと思ひます。お師匠樣が私に常々おつしやるには、苦しい目に遇つたとき、その罪が自分に見出されない時は不合理な、怨めしい氣がするものだ。その時にその怨みを佛樣に向けたくなるものだ。其處を怺へよ。無理は無いけれどもじつと忍耐せよ。相構へて呪ふな。その時にその忍耐から信心が生まれるとおつしやいました。墓場に入れば何もかも解るのでありますまいか。その不合理の中に佛樣の深い愛がこもつてゐること

が歸つたとき、私たちは佛樣を怨んだ事を恥ぢるやうな事はありますまいか。人間の知慧と佛樣の知慧とは違ふのではありますまいか。

善鸞　あなたのお言葉は單純でもまつすぐです。幼なくても知慧が光つて居ます。私は鞭打たれるやうな氣が致します。私は考へて見なくてはならないやうな氣が頻りに致します。

唯圓　自分の魂の本當の願ひを殺すのは一番深い罪と聞いてゐます。

善鸞　あゝ、私は素直なまともな心を恢復したい。

（兩人沈默して考へてゐる。）

唯圓　あなたはお父上に逢ひたくはありませんか。

善鸞　逢ひたくても逢へないのです。

唯圓　私がお師匠樣に頼んで見ませうか。

善鸞　有り難う御座いますが、ほつて置いて下さい。迚も逢つては呉れませんから。

唯圓　でもお師匠樣も心ではあなたに逢ひたくつていらつしやるのです。父と子とがどちらも逢ひたがつてゐる。それが逢へなくては嘘だと思ひます。それを妨げる力は何でせう。私はその力を毀したい。私は堪らない氣がします

善鸞　其の力は私の戀を破つた力と同じ力です。その力はなか／＼強いものなのです。私はその力を呪ひます。しかしそれを毀す力がありません。

唯圓　それは社會意志です。世の中の頑くなゝ無數の人々の意志です。その力は私のお寺の中をも支配してゐます。私は此間その力に觸れました。あゝどうして世の人はもつと情を知らぬのでせう。己れの硬い心が他人を苦しめてゐることに氣かつかぬのでせう。私はなさけなくなります。

善鸞　私が今父に逢ふ事は父のためにもなりません。假令父がそれを許してくれても。浮世の義理と云ふものは苦しいものです。私は幼ない時からその冷めたい力に觸れました。實は私は父の妻の子では無いのです。

唯圓　（驚く）それは初めて承はります。

善鸞　私の母は稻田のある武士の娘でした。父が越後にゐる時に父の妻はなくなりました。父は諸方を巡禮して稻田に來て私の母の父の家に足を止め、稻田に十五年棲みました。その間に私の母と父とは戀に落ちました。私はそのやうにして生まれたのです。私は父母を父母と呼び得るまでには暗い月日を過ごしました。私は父を咎める氣は少しもありません。其處には人生の愛と運命の悲しさがありませう。

唯圓　あなたの母上はどうなされました。

善鸞　父が京へ歸るとき稻田に殘りましたが、もはや死んでしまひました。
唯圓　本當に世の中は限りもなく淋しいもので御座いますね。
善鸞　私には世界は悲しみの谿の如くに見えます。
（兩人沈默。）
唯圓　私は今日はこれでお暇申します。
善鸞　左樣ですか。今日は嬉しい氣がしました。私はもつと話したいのですけれども。
唯圓　私もいつまでも居たいのですが、お師匠樣に內證で來たのですから。
善鸞　私のために苦しい思ひをさせますね。許して下さい。今日は色々と考へさせられました。有り難い氣が致します。
唯圓　私はこんなに充實して話した事はありません。きつとまた參りますからね。
善鸞　出來るだけ度々來て下さい。私はいつも淋しいのです。
唯圓　では失禮致します。（立ち上り、入口の側まで行き振り返り、力を入れて）若しお父樣が逢ふとおつしやればどうなされます。
善鸞　（考へて、きつぱりと）私は悅んで遇ふ氣です。
唯圓　では左樣なら。
善鸞　（見送る）左樣なら。
（唯圓退場。善鸞暫く立つたまゝ動かずにゐる。軈て部屋の中をあちこち步く。それから柱に背をあてゝ立つたまゝ凝と考へて居る。）
（淺香絹張りの行燈を持ちて登場。入口に立ちながら善鸞を見る。善鸞淺香に氣がつかずにじつとしてゐる。）
淺香　善鸞樣。
善鸞　（淺香を見る）淺香お前は如何思ふ。此處に父と子とがある。父は諸天の惠みに浴して民は聖者と仰いでゐる。子は酒肉に溺れて人は蕩兒と蔑んでゐる。父と子とは浮世の義理に隔てられつゝ互に慕うてゐる……
淺香　まあ、だしぬけに……（注意を集注する）
善鸞　互に飢ゑてゐる。しかし逢へば父の周圍の美しい平和が傷けられる。人々は猜疑と嫌惡の眉を顰める。父の一身に非難が集まる。その時に子は如何したらよいのであらう。遇ふのがよいか遇はぬがよいか。
淺香　（聲を慄はす）遇はぬがよい。
善鸞　若し父が招いたら、迷へる子よ、かへつて來よと云つたら。
淺香　（苦しげに）遇はぬがよい。

善鸞　おゝ。（よろめく。柱で身を支へる）
浅香　善鸞様。善鸞様。（駈せよつて善鸞を抱く）
善鸞　私は解らない。私は思ひにあまる。私は……助けてくれ。
浅香　過ほずに祈つて下さい。父上の平和と幸福を祈つて下さい。私は強くなければなりません。あなたが私に、弱いと知つていらつしやる私に助けをお求めなさるなら。あなたはずつと前にあなたの生涯の運命をきめる危ぶない時に、今と同じ別れ道にお立ちなされたのではありませんか。おいとしいあなたの戀人と、おとなしいお從弟との一生の平和を守つてあげねばならないときに、あなたはお弱う御座いました。人をも身をも傷けたとあなたは私におつしやいました。何故あの時泣いて耐へ忍ばなかつたらうと、あなたは幾度後悔なすつたでせう。たつた今日の晝間です。あなたが初めて、あなたの悲しい物語を私に打明けて下すつたのは。あなたは私の膝の上でお泣きなされました。まだ涙も乾かぬ位です。その時あなたは私があはれな父母の犧牲になつて居る事をほめて下さいました。他人をしあはせにするために、苦しさを忍べとをしへて下さいました。
善鸞　お前は私の言葉をそのまゝ繰りかへすのだ。
浅香　（泣く）あなたに頬をあてるのです。私のことばの強さうなこと。
善鸞　私の良心の代りになつて呉れたのだ。
浅香　おいとしい善鸞様。
善鸞　さうだ。私は強くなければならない。かはゆい奴。
（浅香を強く抱く。舞臺廻る）

第二場

場所
親鸞聖人居間

（清楚な八疊、隅に小さな佛壇がある。床に一枚起請文を書いた軸が掛つてゐる。寢床の側に机、その上に開いた本、他の隅に行燈がある。庭には秋草が茂つてゐる。）

人物
親鸞
唯圓
僧　二人
小僧　一人

時
同じ日の宵

（親鸞寢床に坐つて僧二人と語つて居る。）
僧一　ではやはりお遇ひなさいませぬのですな。

親鸞　うむ。（うなづく）

僧二　私も折角その方がよいと思つてゐたのです。

僧一　同行衆の間に色々な物議が起つてはおもしろくありませんからな。

僧二　口さがない世の人々はどのやうな噂を立てるかわかりません。まだ若い弟子たちの躓きになつてはならぬと思ひます。

僧一　若い弟子たちの間には段々と素行の亂れたものも出來たしたやうで御座います。木屋町のあるお茶屋から出て來るのを見たと申すものも御座います。

僧二　世間ではそれを眞宗の敎へは淫逸をも嫌はぬからだなどと申して居ます。

僧一　他宗の者どもは當流の繁昌を嫉んで非難の口實を探して居る時で御座います。

僧二　何しろ氣を付けなければならない大切な時期と思ひます。（間）實は唯圓殿は善鸞様のところに時々逢ひに行くといふ噂があるので御座いますがね。

親鸞　左様かね。唯圓は私には何も云はぬけれどもね。

僧一　どうも少し素振りが怪しいやうで御座います。先日も善鸞様の事をひどく辯護致して居りました。

親鸞　私から注意して置きませう。

僧二　善鸞様は此の頃は木屋町邊のあるお茶屋で、毎日居つゞけして遊んでゐられるさうで御座います。

親鸞　彼の子には實に困ります。お前方にもいつも心配をかけて濟まないね。

僧一　いゝえ。私たちはたゞあなたのお德の傷かぬやうに祈るばかりで御座います。

僧二　あなたのやうな清いお方にどうして彼のやうなお子が出來たので御座いませう。

僧一　せめて京にお出で遊ばさねばよろしいので御座いますが。

親鸞　どうか人様に迷惑を掛けて呉れねばよいがと祈つてゐます。（頭を垂れ、默然としてゐる）

（少時沈默。）

僧一　もう晩のお勤めになりますから失禮致します。今日は由ない事をお耳に入れて濟みませんでした。

親鸞　いゝや。

僧二　あまりお氣にお掛けなされますな。お體に障つてはなりません。

親鸞　ありがたう。

僧一　ではまた後程。

僧二　お大切になされませ。

（僧一。僧二退場。親鸞眼をつむり、考へに沈む。）

小僧　（登場）暗くなりました。火を點けませう。（行燈

に火を點ける）

親鸞　唯圓はどうした。

小僧　お午下りに用達に行つて來ると云つて出られました。もうお歸りになりませう。晩のお勤めまでには歸ると申されましたから。

親鸞　さうか。

小僧　今夜はお氣分は如何で御座いますか。

親鸞　お蔭でいゝ氣持だ。今日はお庭を掃除してくれて御苦勞だつたね。

小僧　しばらく手入れを怠るとすぐに雜草がはびこりますからね。

親鸞　草臥れたらう。今夜は早くお寢み。

小僧　はい。では御用があつたら呼んで下さいませ。（退場）

（本堂から晩のお勤めの鐘が聞える）

親鸞　（寢床の上にて居住ひを正し）南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

（眼をつむる。）

唯圓　（登場）只今歸りました。（手をつく）

親鸞　あゝ、お歸りか。

唯圓　遲くなりました。

親鸞　何處へ行きました。

唯圓　木屋町の方まで行きました。

親鸞　左樣か。

唯圓　暇どつて濟みませんでした。御夕飯は？

親鸞　さつき濟ませました。お前の歸るのを待たうかと思つたけれど、先きに食べました。

唯圓　お給仕も致しませんで。

親鸞　いゝえ。（間）お前はまだゞらう。

唯圓　私は今夜はほしくはありませんので。

親鸞　氣分でも惡いのかえ。少しでもおあがり。（唯圓の顏を見る）

唯圓　いゝえ少し急いて歩いたからでせう。後でまたいたゞきます。

親鸞　さうかえ。氣をおつけよ。お前は丈夫な質ではないのだから。

唯圓　ありがたう御座います。今夜はお具合は？

親鸞　もう殆どいゝのだよ。私はかうしてゐるのが勿體ない位だ。お前が止めなければもう床上げをしようと思ふ位だよ。

唯圓　それは嬉しう御座います。しかしも少し御用心遊ばしませ。大切なお體ですから。（間）あなたお寒くはありませんか。夜分は大層冷えるやうになりましたね。

親鸞　いゝや。頭がしつかりして氣持がいゝ位だよ。

唯圓　秋も大分深くなりました。今朝もお庭に佛様のお花を剪りに出て見ましたが一面に霜が置いてゐました。花もすがれたのが多う御座います。

親鸞　おつゝけ木の葉も落ちるやうになるだらう。

唯圓　庫裡の裏のあの公孫樹の葉が散つて、散つて、いくら掃いても限りがないつて、庭男のこぼす時が來るのですね。

親鸞　四季のうつりかはりの速いこと。年を老るとそれが殊に早く感じられるものだ。此の世は無常迅速というてある。その無常の感じは若くても解るが、迅速の感じは老年にならぬと解らぬらしい。もう一年經つたかと思つて恐しい氣がする事があるよ。人生には老年にならぬと解らない淋しい氣持があるものだ。

唯圓　世の中は若い私たちの考へてゐるやうなものではないのでせうね。

親鸞　「若さ」のつくり出す間違ひが澤山あるね。それが段段と眼があかるくなつて人生の眞の姿が見えるやうになるのだよ。併し若い時には若い心で生きて行くより無いのだ。若さを振り翳して運命に向ふのだよ。純な青年時代を過さない人は深い老年期を持つ事も出來ないのだ。

唯圓　私には人生はたのしい事や悲しい事の一ぱいある不思議な、幕の向うの國のやうな氣が致します。

親鸞　さうだらうとも。

唯圓　蟲が鳴いてゐますね。（耳を傾ける）

親鸞　まるで降るやうだね。

唯圓　私はあの聲を聽くといつも國の事が思はれますの。私の家の裏の草叢では秋になると蟲が頻りに鳴きました。私の亡くなつた母は、よく私を負つて裏口の畑に出ました。そしてあのこほろぎの啼くのは「襤褸針せつゞれさせ」と云つて啼くのだ、貧しいものはあの聲を聽いて冬の着物の用意をするのだと云つて聞かせました。私はその時淋しいやうな、寒さの近づくやうな變に心細い氣がしたものです。それからはあのこほろぎの聲を聽くと母の事を思ひます。

親鸞　お兼さんが亡くなつてから何年になるかね。

唯圓　今年の冬が七回忌で御座います。

親鸞　ほんに惜しい事をした。あんないゝお母さんはめづらしかつた。

唯圓　母は私をどんなに愛して呉れたでせう。私は小供の時の思ひ出を辿るたびに母の愛を沁々と感じます。

親鸞　左衞門殿からお便りがありましたか。

唯圓　はい、達者で暮らしてゐるさうです。母が亡くなつてからは淋しくていけないさうです。人生の無常を感じてからひたすらに墨染の衣がなつかしいと云つて來ました。

そして母の七囘忌を機に出家したい、私の家を寺にしようと思つてゐる。本尊はあの、あなたから、かたみに戴いた片手の缺けた佛像をまつるつもりだ、と云つてよこしました。

親鸞　たうとう出家する氣になつたかねえ。

唯圓　永い間の願ひだつたのですからね。寺の名を枕石寺と附けるのですつて。それはあなたがあの雪の降る夜、石を枕にして門口にお寢みになつたのに因むのですつて。それからお師匠樣に法名をつけて貰つて呉れと云つてゐました。

親鸞　彼の人もずゐ分苦しまれたからね。

唯圓　私は父が戀しう御座います。もうずゐ分永く逢はないのですから。

親鸞　私は彼の雪の朝に別れたきりお目にかゝらないのだ。あの夜の事は忘れられない。

唯圓　凄い樣な吹雪の夜でしたつけね。私は小供心にもはつきり覺えてゐます。

親鸞　お前はまだ稚ない童子だつたがな。あの頃から少し體が弱いと云つてお母さんは案じていらしたつけ。

唯圓　あの時あなたが門口のところで、もうお別れのときに、私を衣のなかに抱いて下すつたのを私は今でもよく覺えてゐます。

親鸞　もう逢へるか逢へないかも解らずに、どこともなしに立ち去つたのだつた。

唯圓　師と弟子との契りを結ぶやうにならうとは夢にも思ひませんでした。

親鸞　緣が深かつたのだね。

唯圓　（暫く沈默。軈て思ひ入つたやうに）お師匠樣、あなたは私を愛して下さいますか。

親鸞　妙な事を訊くね。お前どうお思ひかな。

唯圓　愛して下さいます。（急に涙をこぼす）私はもつたいない程で御座います。私はあなたの御恩は一生忘れません。私はあなたの爲なら何でも致します。私は死んでも厭ひません。（すゝり泣く）

親鸞　（唯圓の肩に手を置く）どうした。唯圓。何でそんなに感動するのだ。

唯圓　私はあなたの愛に縋つて賴みます。どうぞ善鸞樣を赦してあげて下さい。善鸞樣と逢つて下さい。

親鸞　…………

唯圓　私は堪りません。善鸞樣は善い方です。不幸な方です。誰が彼の方を憎む事が出來るものですか。皆が惡いのです。世の中が不調和なのです。皆が寄つてたかつて彼の方をあのやうにしたのです。彼の方はあなたを愛していらつしやいます。どうぞ逢つてあげて下さい。赦し

てあげて下さい。私が直ぐに行つてお連れ申します。どんなにお喜びなさるか知れません。

親鸞　（苦痛を制したる落付きにて）お前は善鸞と遇ひましたか。

唯圓　私は逢ひました。今日善鸞樣からお使ひが來て私はあなたに內證で遇ひに行きました。私は噓を申しました。私は木屋町に用達しに行くと云つたのは僞りです。善鸞樣は木屋町にゐられます。私は噓を申しました。

親鸞　善鸞はどうしてゐましたか。

唯圓　（思ひ切つて）私が行つた時には遊女や太鼓持とお酒を飲んでゐられました。

親鸞　そのやうな席にお前を呼んだのか。純な、幼ないお前を。放縱な人は小さいものを瞞かすことを慮れないのだ。

唯圓　でも善鸞樣は此の樣な處を見せて濟まないとおつしやいました。また仲居が私に酒をすゝめた時に、此の人にはすゝめてやつて吳れなとおつしやいました。また自分は汚れてゐるが純潔な人を尊敬するとおつしやいました。善鸞樣はいつもの自分のしてゐるありのまゝのところへ私をお呼びなすつたのです。見せつけるためではなく、自分を僞はらないためだつたのです。

親鸞　善鸞は何のためにお前を呼び寄せたのだらう。

唯圓　淋しいのですよ。私と逢つて話したかつたのですつて。私のやうな者をでも慰めにお呼びなさらなくてはならないとは彼の方も餘程孤獨な方です。まつたく淋しさうでした。杯やお膳や三味線などの狼藉としたなかに坐つて、醉ひのさめかけた善鸞樣は實に不幸さうに見えました。私は一人の人間があの樣に淋しさうにしてゐたのを見た事はこれまでありませんでした。

親鸞　人生の淋しさは酒や女で癒されるやうな淺いものではないからな。多くの弱い人は淋しい時に酒と女に行く。そして益々淋しくされる。魂を荒らされる。不自然な、險惡な、わるい心の有樣に陷る。それは無理はないが、本道ではない。何處かに自欺と回避とごまかしとがある。強い人はその淋しさを抱きしめて生きて行かねばならぬ。若しその淋しさが人間の運命ならば、その淋しさを受取らねばならぬ。その淋しさを內容として生活を立てねばならぬ。宗教生活とはそのやうな生活の事を云ふのだ。耽溺と信心との岐れ道は際どいところに在る。まつすぐに行くのと、ごまかすのとの相違だ。

唯圓　善鸞樣も自分の生活に自信を持つてしてゐられる譯ではないのです。それで餘計に不幸なのです。今の彼の方のお心持では、あゝして暮しなさるよりないのだらうと思ひます。私は善鸞樣の苦しいお話を聞いて壓しつけ

られるやうな氣が致しました。何と云つて慰めていゝか解らないで、同悲の情に胸を打たれるばかりでした。私は善鸞樣を責める氣など少しも起す事は出來ませんでした。私はたゞ私の前に痛ましく苦しんでゐる一人の人間を見ました。そして其の人を傷けた責を誰が背負ふべきかを考へて不合理な感じばかりに先き立たれました。私は歸る道で考へると眩暈がするやうな氣がしました。だつて何一つ私の頭では得心が行かないのですもの。私は凡ての考への混亂の間に、たゞはつきりと解つてゐる一つの事ばかり思ひつめて歸りました。それは善鸞樣は赦されなければならないといふ事でした。

親鸞　彼も可哀相な奴とは私も思うてゐる。彼にも數々の辯解がある事だらう。だが彼れは他人の運命を損うたのだからな。一人の可憐な女は死んだ。一人の善良な青年の心は一生涯破れてしまつた。幾つかの家族の間には平和が失はれた。それが皆彼の弱かつた勢なのだからな。その報いをうけてゐるのだよ。

唯圓　でも彼の方ばかりが惡いのではありません。彼の方の一生の運命を傷つけたのも社會の不自然な意志の責に歸すべきものと私は思ひます。戀して居る男と女とを添はせるのは天の法則です。その法則に反逆したものは社會の罪と思ひます。彼の方ばかり責めるのは酷すぎます。

親鸞　社會もその報いを受けてゐるのだよ。世の中の不調和は、そのやうにして、人間が互に傷つけ合うては報いを受け合ふところから生ずるのだ。それが遠い〳〵昔から、傷つけつ傷つけられつして積み重ねて來た「業」が錯雜して居るのだからな。

　その縺れた糸の結び目にぽつり一個の生を享けてゐるのが私たちなのだもの、不調和な運命を生れ乍らに負はされてゐるのだ。その上私たちが作る罪や過失の報いはいつまでも子孫の末に傳はつて消えないのだ。

唯圓　私たちの存在は實に險惡なものですね。

親鸞　佛樣がましまさぬならば、私は誰よりも先きに誰よりもはげしく、私たちの存在を呪ふであらう。だが佛樣の恩寵は此の世に禍惡があればあるだけ深く感じられる。世界の調和は一層複雜な微妙なものになる。南無阿彌陀佛は一切の業の縺れを解くのだ。

唯圓　その南無阿彌陀佛を信ずる事が出來ないと善鸞樣はおつしやるのです。

親鸞　何故にな。

唯圓　私はその理由を聞いてどんなに感動したでせう。善鸞樣は御自分がそれに相當しない程強く自分を責めてゐられるのです。自分の樣に汚ない罪を犯しながら、此の儘助かることを願ふほど自分はあつかましくなつてゐな

いと云はれました。「せめてそれは私の良心です、私の誇りです」とおつしやつた時には涙が光つてゐました。父のやうに淸い人間には念佛はふさはしいが、私のやうな汚れたものには寧ろ難行苦行が似つかはしいとおつしやいました。私はいつそ罰を受けたい氣がする。私は滅びの子だと云つてお泣き遊ばしました。私は彼の方がおいとしくて堪りませんでした。

親鸞　も少し素直になつて吳れたらな。人にも自らにも反抗的になつてゐる。罰を受けたいといふのは甘えてゐる。地獄の火の恐ろしさを侮つてゐる。指一本燒ける肉體的苦痛でも迚も耐へ切れるものではないのだ。（間）彼れはまだ失ふべきものを失うてゐないと見える。

唯圓　善鸞樣は今亡くなられたら魂は何處に行きます？

親鸞　（苦痛を耐へるために緊張した顏になる）　地獄に墮ちる……

唯圓　おゝ、お師匠樣、善鸞樣に遇つてあげて下さい、助けてあげて下さい。あなたは彼のお子がいとしくはないのですか。

親鸞　………

唯圓　あなたは嚴し過ぎます。彼の方に丈け酷過ぎます。あなたは若し善鸞樣があなたのお子でないならば疾くに赦してあげていらつしやります。いつぞや了然殿は彼の方よりも遙かに惡い罪を犯されました。けれどもあなたはお赦しなされました。また唯信殿が此春過ちを犯された時、お弟子衆は皆破門するやうに勸められたのに、あなたは一人庇つておあげなされました。何故善鸞樣にばかり嚴しいのですか。私は解りません。あなたは常々私におつしやるには私たちは骨肉や夫婦の關係で愛するのは純な愛ではない。何人をも隣人として愛せなくてはならないと敎へて下さいました。それなら彼の方も一人のあなたの隣人ではありませんか。その隣人を赦すのは美しい事ではありませんか。私はこれまで一度も御師匠樣に逆うた事はありません。けれど此の事ばかりは逆はずには居られません。私の一生の願で御座います。隣人として彼の方に逢つてあげて下さい。

親鸞　（涙ぐむ）　お前の心持はよく解る。私は嬉しく思ひます。（考へる）善鸞は遇ひたいと云ひますか。

唯圓　初めは、今私が父に遇ふのは父の爲めにならないとおつしやいました。けれどお別れする時にお父樣が逢ふとおつしやれば如何なされますと訊いたら、悅んで逢ふとおつしやいました。

親鸞　私を怨んで居たらうね。

唯圓　いゝえ。あなたに濟まない〳〵と云つてゐられました。そしてあなたの事を色々案じてお聞きなされまし

た。今度御上洛遊ばしたのもあなたに心が惹かれたのらしいのです。私をお呼びなさるもあなたの身邊の御樣子が何くれとなく聞きたいためなのですよ。

親鸞　實は私も彼の子の事はいつも氣になつてゐるのだ。殊に彼の子の母の事を思ひ出すと時々堪らなくなることもあるのだ。あの子の不幸なのも私に罪があるやうな氣がしてな。

唯圓　私はその事に就いても今日善鸞樣から伺ひました。

親鸞　善鸞は何と云ひましたか。

唯圓　何事も人生の悲哀と運命だ。父を責める氣はないとおつしやいました。

親鸞　ふむ。（考へる）やはり私の罪――過失だよ。さう云ふ事を許して貰へるなら。朝姬をも――あの子の母の名だよ――私は隣人として取り扱ふ氣だつたのだ。けれど遂にさうはゆかなくなつたのだ。私が弱かつたのだ。おとなしい、けれども一途な朝姬の熱いなさけにほだされたのだ。北國の永い巡禮で私の心は荒野のやうに淋しくなつてゐたからな。私は何故亡くなつた玉日の記憶を忠實に守つて獨りで暮らすことが出來なかつたのであらうか。それを思ふと自分を責める心に耐へない。私は苦るしい。

唯圓　…………

親鸞　けれど朝姬は責めるには餘りに善良な溫和な女だつたよ。弱々しい感じを與へる程だつたよ。その裏には強い情熱がかくれてゐたけれどね。私が京に歸るときにどんなにはげしく泣いたらう。

唯圓　もうおかくれ遊ばしたのですつてね。

親鸞　うむ。（間）私はもう幾人（いくたり）愛する人に死なれたか知れない。慈悲深い法然樣や貞淑な玉日や、甲斐々々しいお兼さんや――

唯圓　あの孝行な御嫡男の範意さまや。

親鸞　（眼をつむる）みんな今は美しい佛樣になつてゐられるだらう。そして私たちを哀れみ護つてゐて下さるだらう。生きてゐるうちに私の加へた過ちは皆赦してゐて下さるだらう。

唯圓　逝くものをさびしく送つたこゝろで、殘るものは仲よくせねばならぬと思ひます。それにつけても善鸞樣を一日も早く赦して上げて下さいまし。

親鸞　私は赦してゐるのだよ。彼の子を裁くものは佛樣の外には無いのだ。

唯圓　では逢つてあげて下さいまし。

親鸞　…………

唯圓　お師匠樣、あなたは、本當は逢ひたいので御座いませう。

親鸞　遇ひたいのだ。（聲を強くする）放蕩こそすれ私は彼の子の純な性格も認めて愛してゐるのだ。私は彼の子の事を忘れた日はない。彼の子の顔が見たい。彼の子の聲に飢ゑてゐる……

唯圓　お遇ひなさいませ。お師匠樣。父と子とが互に逢ひたがつて居る。それを遇ふのが何故その樣に六ケ敷い事なのでせう。實に單純な事では御座いませんか。

親鸞　まことに單純な事だ。調和した淨土なら直ぐ出來るやさしい事だ。その單純な事が出來ぬやうな不自由な世界が此の世なのだ。（聲を強くする）多くの人々の平和がその單純な一事に懸つてゐる。無數の力が集つて私を遮つてゐる。私は今その力の壓迫を痛切に感じてゐる。私は爭ふ力がない。（身をもがく）私は遇へない。

唯圓　いゝえ。遇つて下さい。遇つて下さい。あなたはあまり義理を立て過ぎなされます。あなたのお子と思はずに、隣人として、赤の他人と思つて……

親鸞　（苦しげに）おゝそれが私に出來たなら！　私はさう思ふべきであると信ずる。さう思へよとお前に教へる。併しさう思ふ事が出來ないのだ。お前はさつき私が他人に優しく我が子に嚴しいと言つたね。それは私が我が子ばかり愛して、他人を愛する事が出來ないからだ。私は善鸞を愛してゐる。私の心は動もすれば善鸞を抱きかゝへて他の人々を責めようとする。丁度愛に溺れる母親が惡戲をする小供を擁して、あはれな子守を叱るやうに。私は私の心のその弱味を知つて居る。それを知つてゐる丈け私は善鸞を許し難いのだ。私は善鸞のために死んだ女の家族と、女の夫と、その家族と――すべて善鸞を呪つてゐる人々の事を思はずには居られない。「あなたの子のために……」とその人々の眼は語つてゐる。「私の子のために……」と私は詫びずにはゐられない。殊に私は其の人々を愛してゐないのだから。私は彼の子に遇はなくとも彼の子を愛してゐないとの苛責は感じない。それほど私は彼の子を心の內では愛してゐるのだ。

唯圓　私は切なくなります。私は解らなくなります。

親鸞　その上私の弟子たちにも私が善鸞に遇ふ事を喜ばぬものゝ方が多いのだ。先刻も智應と永蓮とが來て私に遇はぬやうに勸めて行つた。

唯圓　まあ、あなたのお心も察しないで。

親鸞　私のためを思つて言つて吳れたのだ。けれど濟まぬ事だがそれは耳に快く響かなかつた。

唯圓　皆は何故其の樣な考へ方をするのでせうねえ。

親鸞　お前のやうに情の溫い人は少ないのだ。

唯圓　あなたは本當にお遇ひなさらぬおつもりですか。

親鸞　うむ。周圍の人々の平和が亂れるでな。

唯圓　では善鸞樣はどうなるのでせう。どんなにか失望なさいませう。それよりもあの方の迷つてゐる魂はどうなるのでせう。

親鸞　私が一番氣に懸けたのは其處なのだ。若し私でなくては善鸞の魂を救ふ事が出來ず、また私に救ひ得る力があるなら、私は他の一切の感情に瞑目しても彼の子に遇つて說教するだらう。だが私には彼の子を攝取する力はない。助けるも助けぬも佛樣の聖旨（みむね）に在る事だ。私の計らひで自由に出來る事ではない。彼の子も一人の佛子であるからには佛樣の守りの外に出てはゐない筈だ。よもお見捨てはあるまいと思ふ。私に許される事はたゞ祈りばかりだ。私は遇はずに朝夕彼の子のために祈りませう。おゝ佛さま、どうぞ彼の子を助けてやつて下さいませと。愛は所詮念佛にならねばならない。念佛ばかりが眞の末通りたる愛なのだ。彼の子がいとしい時には、私は手を合せて南無阿彌陀佛を唱へようと思ふのだ。お前もあの不幸な子のために祈つてやつてくれ。

唯圓　私も祈らせて貰ひます。あゝ、併し、何といふ淋しいお心で御座いませう。

親鸞　これが人間の恩愛の限りなのだ。

唯圓　私は堪らなくなります。人生は餘りに淋し過ぎます。

親鸞　人生にはまだ〱淋しい事があるのだ。人は捨て難いものをも次第に失うてゆくのだ。私も今日まで如何に多くのものを失うて來た事だらう。（獨語の如くに）あゝ、滅びるものは滅びよ。崩れるものは崩れよ。そして運命に毀たれぬ確かなものだけ殘つてくれ。私はそれを葬と摑んで墓場に行きたいのだ。（默禱する）

唯圓　あゝ、私は畏ろしくなりました。

――幕――

第四幕

第一場

場所

黑谷墓地

（無數の墓、石塔、地藏尊等壘々として竝んでゐる。蔭深き樹立あり。一寸した草地、所々にばら、いちご等の灌木の叢。路は叢の蔭から、草地を經て樹立の中に入つてゐる。）

人物

唯圓

かへで

女の子　四人

時

春の午後　第三幕より一年後

（唯圓一人。木の株に腰を掛けて居る。）

唯圓　春が來た。草や木の芽はまるで燃えるやうだ。大地は日光を吸うて、ふくれるやうに柔かになつた。小鳥は樂しさうに啼いてゐる。數々の花のめでたいこと！　若い命の歡びが私の體から湧いて出るやうな氣がする。（立ち上り、あちこち歩く）もう來さうなものだがな。（叢の蔭を透して見る）若しかすると都合が惡くて、出られなかつたのではないか知ら。私も內證でやつと出て來たのだもの。（間）だん／＼嘘を言ふ事になれて行く。（立ち止り考へる。聽て急に生々とする）いゝや、今、そんな事は考へられない。（歩き出す）氣がいそ／＼して迚もぢつとしてはゐられない。（歌ひ出す）春のはじめのおん喜びは、おんよろこびは、さわらびの萠えいづるこゝろなりけり。きみがため、摘む衣の袖に、雫こそかかれ、わがころも手に……

かへで（灌木の叢のかげより登場）唯圓樣、たゞ今。お待ち遊ばして？

唯圓　えゝ。ずゐ分永く。

かへで（唯圓の側に寄る）私少し家の都合が惡かつたものですから。でも急いで走るやうにして來たのよ。（息をはずませてゐる）

唯圓　私は若しか出られないのでは無いかと思つて氣が氣ではありませんでした。

かへで　出られないのを無理に出たのよ。でもあなたとあれ程堅くお約束して置いたのですもの、あなたを一人待ちぼけにすることはどうしたつて私には出來なかつたのだわ。けれど今日は早く歸らないと惡いのよ。

唯圓　來るとから歸る話をするのは止して下さい。（かへでの顏を見る）どんなに遇ひたかつたでせう。

かへで（唯圓に寄り添ふ）私も遇ひたくて、あひたくて。（淚ぐむ）

（兩人一寸沈默。）

唯圓　此處に坐わりませう。（草を藉いて坐わる）

かへで（唯圓と並んで坐わる）人に見られはしなくつて。

唯圓　滅多に人は通りません。通つたつていゝではありませんか。惡い事をするのではなし。

かへで　でも氣まりが惡いわ。

唯圓　ずゐ分久しぶりのやうな氣がします。此の前松の家の裏で別れてから何日目でせう。

かへで　半月ぶりですね。

唯圓　その半月の長かつたこと。私はその間あなたの事ば

かり思ひ續けてゐました。

かへで　私もあなたの事は束の間も忘れた事はありません。戀しくて、すぐにも飛んで行きたい事が幾度あつたか知れません。でもどうする事も出來ないのですもの。私もどかしくて堪りませんでしたわ。

唯圓　私もお寺でお經など讀んで居ても、ぼんやりしてあなたの事ばかり考へて居るのです。私は晩のお勤めを濟ませた後で、誰もゐない靜かな庭を、あなたの事を思ひながら歩くのが一番たのしい時なのです。

かへで　あなたなどは其の樣な時があるからよう御座いますわ。私なんかそれは辛いのよ。一日ぢゆう騷々しくて、凝とものなど考へられるやうな時はありませんわ。

唯圓　ほんとにもつと度々逢へたらねえ。

かへで　此の前の時だつて、ねえさんがとりなして下さらなかつたら逢ふことは出來なかつたのですわ。

唯圓　淺香さんはどうしてゐられます。

かへで　善鸞樣がお歸國遊ばしてからは、それは淋しい日を送つて居られます。

唯圓　彼の方のお蔭であなたに手紙があげられるのです。此の前も私は夜遲くまで起きてあなたに長い手紙を書きました。そしてその手紙を懷に入れて外に出ました。外は水のやうな月夜でした。私はとても逢へないとは思ひながら、自づと足が木屋町の方に向いて、いつしか松の家の門口まで行きました。二階の障子には明りがさして影法師が動いてゐました。彼處にはあなたがゐるだらうと思ひました。私は去りかねて其の邊をうろ／＼してゐました。すると淺香さんが出て來たのです。私は手早く手紙を渡して急いでお寺へ歸りました。

かへで　あの夜階子段の下の薄暗がりで、ねえさんが、いいものを上げましようと云つて何かしらくれました。私は廊下のぼんぼりの光で透して見ました、あなたのお手紙なのでせう。どんなに嬉しかつたでせう。私は一字づつ、たまひたまひ讀みました。讀んでしまふのが惜しいのですもの。あなたの手紙はほんとにいゝお手紙ね。私なんかお腹に思つてることが一ぱいあつても、筆が澁つて書けないからくやしいわ。

唯圓　あなたもお手紙を下さいな。

かへで　だつて私はいろはだけしか知らないのですもの。（顏を赤くする）そして書くことが下手ですもの。

唯圓　いろはで澤山です。また心に思ふことを飾らずにすらすら書けば、ひとりでにいゝ手紙になるのです。お腹に眞ごころさへあれば。

かへで　まごころでなら誰れにもまけなくてよ。私今度から手紙をあげますわ。（一寸考へる）駄目よ。どうして

あなたに渡すの。

唯圓　さうですね。あなたは出られないし。使がお寺へ來ると變だし。

かへで　何かいゝ分別は無くつて。

唯圓（考へる）私が取りに行きます。

かへで　そんな事が出來るの。

唯圓　あなたは手紙を書いて持つてゐて下さい。私があの松の家のかけだしの下の石段のところに行つて、口笛を吹きます。あなたはあの河原へ下りる裏口のところから出て私に手紙を渡して下さい。

かへで　そしたら一寸でもお顏を見ることも出來るわね。けれど見付けられると大變よ。（聲を低くする）家のおかあさんは私とあなたと仲善くするのを大變惡く思つてるのよ。遊ぶならお錢を持つて來て遊ぶがいゝと云つて怒るのよ。

唯圓（拳を握る）私にお錢があつたらなあ。

かへで　いゝのよ。私はあなただけはお客としてつきあつてるのではないのですもの。幾ら出來たつて、あなたにお錢で買はれるのは死んでも嫌ですわ。（涙ぐむ）

唯圓　あなたは私故に辛いでせうねえ。

かへで　私は構ひませんわ。それよりもあなたはお寺の方の首尾が惡くはなくて。

唯圓（暗い顏をする）少しはお弟子たちには怪しく思つてるものもあるやうです。

かへで　お師匠樣には知れはしなくつて。

唯圓　えゝ。（不安さうな顏をする）

かへで　今日は何と云つて出ていらしたの。

唯圓　黑谷樣にお參りして來ると云つたのです。

かへで　お師匠樣は何とおつしやいました。

唯圓　ついでに眞如堂にも廻つて、緩くりして歸るがいゝとおつしやいました。

かへで　さうですか。（考へる）

唯圓　私はお師匠樣に嘘をつくのが苦しくていけません。今朝も黑谷にお參りして、法然樣のお墓の前に跪いて、私は心からお詫びを申しました。

かへで（急に沈んだ表情になる）淸いあなたに嘘を云はせるのも皆私の勢です。

唯圓　いゝえ。さうではありません。

かへで　堪忍して下さい。（手を合はす）

唯圓　私が惡いのです。（手を解かせる、そのまゝじつとかへでの手を握つてゐる）無理に嘘を云はなくても、ありのまゝをお師匠樣に打ち明ければいゝのです。私が勇氣が無いのがいけないのです。

かへで　だつてそんな事を打明けたら叱られはしなくつ

て。

唯圓　私たちは悪い事をしてゐるのではありません。私たちは其の自信を何よりも先きに持たねばなりません。かへでさん。いゝですか。卑屈な心を起してはいけませんよ。

かへで　だつてあなたは坊樣でせう。そして私はあれでせう。女のなかでも人樣に賤しまれる遊女でせう。

唯圓　僧は戀をしてはいけないといふのは眞宗の信心ではありません。また遊女だからとて輕蔑するのはお師匠樣の教へではありません。假令遊女でも純粹な戀をすれば、その戀は無垢な淸いものです。世の中には卑しい、汚れた戀をするお孃さんが幾らあるか知れません。私はあなたを遊女としてつきあつてはゐません。あなたも私を客としてつきあつてはゐないと先刻言ひましたね。私はあれは有難い氣がしました。實際あなたは純潔な心を持つて居るのだもの。私はあなたを愛します。（手を強く握りしめる）

かへで　でも私は、私は……（涙をこぼす）私のからだは汚れてゐます。（袖で顏を蔽うて泣く）

唯圓　（かへでを抱く）かへでさん。かへでさん。

かへで　私を捨てゝ下さい。私はあなたに愛される價値（ねうち）がありません。私は汚れてゐます。あなたは淸い／＼玉のやうなお體です。私は濟みません。私は泣いて耐へ忍びます。これまで何もかも怺へて來たのですもの。私は一生男のなぐさみもので終るものと覺悟してゐました。その侮辱さへも私の運命としてあきらめる氣でした。あきらめないと云つたとて仕方はないのですもの。私に力が無いのですもの。また皆が私にさうあきらめさせるやうに仕向けるのですもの。どのお客も、どのお客も皆私をなぐさみものとして取扱ひました。そして私に自分をさう思へよと強ひました。私はそれにならされました。自分はなぐさまれる犧牲（いけにへ）、お客は苛責する鬼ときめました。あなたは私を娘として取扱つて下さつた最初の方でした。私でも人間であることを敎へて下さつた最初の方でした。あなたは私でも佛樣の子であるとまでおつしやつて下さいました。（泣く）私はあなたのやうに私を取扱つてくれる人があらうとは夢にも思ひませんでした。あなたは天の使のやうな方だと私は思ひました。あなたとつきあつてゐるうちに、私はだん／＼と、失つてゐた娘の心を恢復して來ました。娘らしいねがひが、よみがへつて來ました。雨のやうなあなたの情けに潤うて、私の胸に蕾のまゝで壓し付けられてゐた、娘のねがひ、よろこび、いのち、おゝ、私の戀が一時に綻びました。私は嬉しくて夢中になりました。そして私の身の程も、境遇

も忘れてしまひました。私は許されぬ世界を夢みました。今私は私の立つてゐる地位を明らかに知りました。私はあなたの玉のやうな運命を傷けてはなりません。私を捨てゝ下さい。私はあきらめます。あなたの事は一生忘れません。私はしばらく私に許されたたのしい夢の思ひ出を守つて生きて行きます。

唯圓　夢ではありません。夢ではありません。私は私たちの戀を何よりも確かな實在にしようと思つてゐるのです。天地の間に嚴存するところの凡そ美しきものゝ精として、あの空に輝く星にも比べて尊み慈しんでゐるのです。二人の間に産まれた此の寶を大切にしませう。育てて行きませう。私は戀のためと思ふと一生懸命になるのです。力が湧くのです。凡そ私たちの戀を妨げる敵と勇しく闘ひませう。あなたも悲しい事を考へないで心強く保つてゐて下さい。私たちの戀が成就するためには、山のやうな困難が横はつて居ます。それを踏み越えて勝利を占めねばなりません。凡そ私たちの戀を夢と思ふほど間違つた考へはありません。かへでさん、私はそのやうな浮いた心ではありませんよ。私は戀の事を思うたゞけでも涙がこぼれるのです。（涙をこぼす）私は甘い、たのしい事を考へるよりも、寧ろ難行苦行を思ひます。お百度參りを思ひます。戀は巡禮です。日參です。（かへでの顏をじつと見る。やがて強くかへでを抱きしめる）あなたの體の汚れてゐることをあなたはひどく氣にします。あなたの心を察します。あなたは堪らないでせう。私もそれを思ふとふら〳〵するやうな氣がしました。私は夜も眠られませんでした。私は考へ悶えました。けれど私はもうその苦しみに打ち克ちました。それはあなたの罪ではありません。あなたの不幸です。あなたを責めるのは無理です。他人の罪です。その他人の加へた傷害のために、あなたはそのやうに苦しんでゐるのです。そのために自分の一生の幸福さへも諦めようとしてゐるのです。何といふ事でせう。私は此の事實を呪ひます。恐ろしい事です。不合理な事です。皆惡魔の仕業です。おお、私は惡魔に挑戰します。（拳を握る）

かへで　皆惡魔です。冷酷な鬼です。毎晩その惡魔が來て恥かしい事を仕掛けるのですもの。それがみんな、しつこいのですもの。

唯圓　その小さな、美しい體に。おゝ。（よろめく）

かへで　（唯圓を支へる）唯圓さま。唯圓さま。

唯圓　畜生！　私はかうしてはゐられない。（かへでに）私はあなたを惡魔の手から守らなくてはなりません。一日も早くあなたをその境遇から救ひ出さねばなりません。しつかりしてゐて下さい。氣を落してはいけません。

ん。今に、今に私があなたを助け出します。

かへで　でも一度汚れたからだはもう二度と――

唯圓　その事はもうおつしやいますな。あなたはその事で決して私に氣がねをなさいますな。あなたの罪ではないのですから。それどころではありません。私はあなたが假令これまで自分でどのやうな汚ない罪を犯していらしつても、私はそれを赦してあなたを愛する氣なのです。

かへで　（涙ぐむ）　まあ、それほどまでに私を愛して下さいますの。

唯圓　（痙攣的にかへでを抱く）　永久にあなたを愛します。あなたは私のいのちです。

かへで　（唯圓の胸に顔を押し當てる）　いつまでも可愛がつて下さいよねえ。

唯圓　いつまでも。いつまでも。

（兩人沈默。叢の蔭から子供の歌がきこえる。軈て子供四人登場。女の子ばかり。手拭を被り、籃を持つてゐる。唯圓、かへで離れる。）

子供一　（歌ふ）　蕗のたう十になれ。わしや廿一になる。

子供二　見つけた。（蕗のたうを摘む）

子供三　此處にもあつてよ。

子供四　入れて頂戴。（籃を差出す）　もうこんなにたんとになつてよ。

（子供たち唯圓とかへでを見て一寸默つて躊躇する。軈て、其處此處を、探しては摘む。摘みつゝ歌ふ。かへでは子供をじつと見てゐる。）

子供一　此處につくしがあつた。

子供二　さう。（見る）　ほんに。皆土筆を摘みませうよ。

子供一　（土筆を手に持つて歌ふ）　一本摘み初め。（探しつゞける）

（子供たち土筆を探す。）

子供二　見つけた。（歌ふ）　二本摘み添へ。

子供三　此處にもあつてよ。ずゐ分大きくてよ。

子供四　私も見つけた。私の方が大きくてよ。

子供三　比べて見ませう。（二本あはせて丈を比べる）

子供四　私のが少し長いわ。

子供三　くやしいね。

子供一　皆、來て御覽、此處にお地藏さんが、小さなよだれかけをしていらしてよ。

（子供たち其方に行きて見る。皆笑ふ。）

子供三　赤ちやん見たいね。（地藏の頭を撫でる）

子供三　幾つ並んでるの。

子供四　（數へる）　六つよ。

子供一　四つ目のは首がないのね。

子供二　あゝ、解つた。これは六地藏といふのでしよ。

子供三　地藏さんてなあに。

子供四　佛さまでせう。

子供一　では此の花をあげませうよ。（籃の中から野菊を出して地藏の前に立てる）

子供二　皆をがみませうよ。（跪き手を合はす）

（子供一同代はる〴〵跪き手を合はす。）

子供一　あの森のなかの塔の方に行つて見なくて。

子供二　えゝ、行つて見ませう。

（子供たち森のなかに入り、歌ひつゝ退場。）

かへで　子供は無邪氣なものね。（考へてゐる）

唯圓　まつたく罪がありませんね。

かへで　何の苦も無さゝうに見えるのね。（間）私も一度あの頃に返つて見たいわ。あの頃はしあはせだつたわ。まだお父さんが生きていらつしやる頃は。

唯圓　あなたにはお父さんが無いのでしたね。私にはお母さんが無いのですけれど。

かへで　あなたのお父さんは何處にいらつしやるの。

唯圓　國に獨りゐます。常陸の國の田舍に。

かへで　常陸と云へばずゐ分遠いのでせう。

唯圓　えゝ。十何ヶ國も越えた東の方。あなたのお母さんは？

かへで　播州の山の奥よ。病身なのよ。（考へる）お父さんのないのと、お母さんの無いのと、どちらが不幸でせうか。

唯圓　お母さんが無いと、着物の事なんか少しも解らなくて、それは困りますよ。

かへで　でもお父さんが無いと暮らしに困つてよ。私なんかお父さんさへ居て下すつたら此の樣な身にならなくてもよかつたのだわ。

唯圓　もう止しませうよ。自分らのふしあはせの比べつこをするなんて、ずゐ分なさけない氣がします。

かへで　私は子供の時には家の貧乏な事など少しも氣にならないで、お友だちと跳ね廻つて遊んだわ。けれどもその樣な時は短かゝつたの。私が十三の時にお父さんが亡くなつてからは、お母さんと二人でそれは苦勞したわ。御飯も食べない時もあつたわ。その内にお母さんが病氣になつたのよ。それからはもうどうもかうもならなくなつてしまつたのよ。その頃の事よ。私は村はづれのお地藏樣に毎日はだし參りをしました。お母さんの病氣がなほりますやうにと夢中になつて祈りました。私はさつき子供がお地藏樣を拜んで居るのを見て、その時の事を思ひ出して涙が出ました。幾ら拜んでも病氣は治らないのよ。

唯圓　それで仕方が無いから身を賣つたの。

かへで　身を賣るのがどのやうなものか私はよく知らなかつたのよ。十四の年ですもの。世話人が來て京に出て奉公すれば澤山お錢が貰へると勸めたのよ。お母さんはやらないと云つたのよ。けれど私は思ひ切つて京に出る氣になつたの。だつてお母さんは藥も何もないのですもの。

唯圓　………

かへで　私は小さな風呂敷包みを負つて、世話人に連れられて村を出ました。村の土橋の所まで母さんが送つて來てくれました。別れる時にお母さんは私を抱いて泣いて、泣いて——

唯圓　堪らなかつたでせう。辛かつたでせう。

かへで　京へ來てからは毎日こき使はれました。三味線や歌を習はせられました。よく覺えられないので撥でたゝかれました。お稽古の暇には用使ひから、お掃除から、使はねば損のやうに皆が追ひ使ひました。私はいつそ死んで仕舞はうと思つた事もありました。

唯圓　さうまで思ひ詰めましたか。

かへで　えゝ。お皿を一枚毀したと云つて、酷く、しつこく叱るのですもの。犬だの、青猿だのと罵るのですもの。それでも私は默つてお庭のお掃除をしました。でも口應へでもせうものなら、それこそ大變な目に遭ふのですからね。私は塵取りを持つてごみを捨てに川原に出ました。そして河の水の流れるのを見て立ちつくしました。その時私は死んで仕舞はうかと思ひました。

唯圓　ほんとにねえ。

かへで　ねえさんが居て下さらなかつたら、私はきつとあの頃死んでゐたでせう。

唯圓　淺香さんはよくしてくれましたか。

かへで　えゝ。影になり、日向になり、私を庇うて下さいました。（間）私より小さい人が新しく來てからは、私は少しはらくになりました。けれど今度は嫌な〳〵事を強ひられました。

唯圓　それはもう云はないで下さい。云はないで下さい。（眼をつむる）

かへで　怺へて下さい。私はあなたより外に此の樣な話をする人はないのですから。つい釣り込まれて、身の上話しを致しました。

唯圓　いゝえ。私はたゞ何と云つてあなたを慰めていゝか、解らないのが辛いのです。どうぞ耐へ忍んで下さい。私はさういふよりありません。悲しいのはあなたばかりでは無いのです。お師匠樣でも、善鸞樣でも、内容こそ違へ、それは〳〵堪らないやうな深いかなしみを持つてゐられます。でも耐へ忍んで生きてゐられます。死ぬのはいけません。どんなに苦しくても死ぬのはいけません。

自殺は他殺よりも深い罪だとお師匠樣がおつしやいました。佛樣から戴いたいのちに對して何よりも敬虔な心を持たねばいけません。火宅の此の世では生きる事は死ぬる事よりも苦しい場合は幾らもあります。其處を死なずに、耐へ忍ぶ時に、信心が出來るやうになるとお師匠さまがおつしやいました。

かへで　私のやうなものでも信心ができるでせうか。

唯圓　出來なくてどうしませう。あなたのやうな純な人に。

かへで　私は學問も何も知りませんよ。

唯圓　そのやうなものは信心と何の關係もありません。悲しみと、愛とに感ずる心さへあればいゝのです。

かへで　私はどうすればいゝのでせう。

唯圓　あなたはお地藏樣に、母さんの病氣が癒るやうに願ひましたね。治りませんでしたね。あの時お地藏樣を怨みましたか。

かへで　お恨み申しました。

唯圓　その時佛樣を怨まずに、此の樣に不しあはせなのも、私がいつか惡い事をした報いなのだ。けれど佛樣は私を愛してゐて下さるのだ。そして何處かで助けて下さるのだと信ずるのです。それが信心です。それは本當なのですからね。あの慈悲深いお師匠樣が噓をおつしやる筈はありません。

かへで　私のやうに人から賤まれる、汚れた女でも佛樣は助けて下さいませうか。

唯圓　助けて下さいますとも。どの樣な惡い人間でも赦して、助けて下さるのですもの。

かへで　私は嬉しう御座います。私はあなたとつき合ふやうになつてから、美しい、善いものを段々と願ひ、また信じる事が出來るやうになつて來ました。私はこれまで媚びることや、欺くことばかり見たり、聞いたりして來ました。愛といふやうなものは此の世には無いものとあきらめてゐました。それが此頃は、私をつゝむ愛の溫かさを待ち、望み、そして信じることが出來さうな氣がしだしました。明るい光りが何處からかさし込んで來るやうな心地がしました。

唯圓　あなたの周圍に居る人たちが惡かつたのです。これからは、明るい美くしい事を考へるやうにならねばいけません。

かへで　あなたなどはしあはせね。毎日尊いお師匠樣のお側で淸いお話を敎へて貰つたり、佛樣の前でお經を讀んだりなさるのね。私などの毎日してゐる事はそれと比べて何といふ醜い事でせう。私は熟々いやになつてよ。

唯圓　あのお師匠樣の側に居る事は心からしあはせと思ひます。けれどお寺の中は淸い事ばかりはなく、また坊樣

にも嫌な人は澤山ありますよ、お寺とか、坊樣とかいふ事はそんなに大した事ではないのです。大切なのは信ずる心なのです。お師匠樣から聞いた事は、皆私があなたに教へてあげますよ。またあなたをいつまでも、今の所には、私は決して置かぬ氣です。

かへで　ほんとに早くさうなれるやうな、よい分別を出して下さいな。そして私を善い女になれるやうに、導いて下さいな。

唯圓　さうしなくていゝものですか。（肩を聳かすやうにする）

かへで　私は何だか嬉しくなつて來ました。（ほれ〴〵と唯圓の顏を見る）本當にいつまでもあなたのお側に居られるやうにして下さいよねえ。

唯圓　きつとさうしますよ。

かへで　おゝ、嬉しい。そしたら私あなたを大切にしてよ。

（此の時夕暮れの鐘が殷々として鳴る。）

かへで（立ち上る）私今日はもう歸らないといけないのよ。

唯圓　も少しいらつしやいよ。

かへで　でも遲くなると困るのですもの。

唯圓　では一寸の間。あの夕陽があの楠の樹の蔭になるまで。私は歸しませんよ。（遮ぎる眞似をする）

かへで（坐わる）私も歸りたくなくてせうがないのよ。

（二人しばらく沈默。）

唯圓　かへでさん。

かへで　はい。

唯圓　かへでさん。かへでさん。かへでさん。

かへで　まあ。（眼をみ張る）

唯圓　あなたの名が無暗と呼んで見たいのです。幾ら呼んでも飽きないのです。

かへで（涙ぐむ）私はあなたといつまでも離れなくてよ。墓場に行くまで。

唯圓　私は戀の事を思ふと死にたくなくなります。いつまでも生きて居たくなります。

かへで　でも人は皆死ぬのね。此の澤山な墓場を御覽遊ばせ。

唯圓　私は戀をしだしてから、變に死の事が氣になりだしました。（獨言の如く）戀と運命と死と、皆何處かに通じた永遠な氣持があるやうな氣がする。（考へる）若しかすると私は若死にかも知れない。

かへで　どうして？

唯圓　私は病身ですもの。

かへで　そんな事があるものですか。

（兩人一寸沈默。）

かへで　もうお日樣が楠の樹にかゝりました。（立ち上る）

唯圓　あゝ仕方がない。（立ち上る）

かへで　では歸りますわ。

唯圓　今度はいつ。

かへで　きめられませんわ。後でお手紙で知らせますわ。

唯圓　できるだけ早く。

かへで　えゝ。本當に手紙を取りに來て下さる？

唯圓　きつと行きます。口笛を吹きますからね。

かへで　これからお寺へ歸つてどうなさるの。

唯圓　晩のお勤めに佛樣を拜むのです。

かへで　あゝ。私はまた歌を唱はねばならぬのだらう。（溜息を吐く。思ひ切つて）せうがない。では左樣なら。

唯圓　左樣なら。

（兩人抱き合ふ、離れる、かへで叢の蔭に退場。）

唯圓（ぼんやりたゝずむ、やがて木の株に腰を下ろす）おゝお淋しいさびしい。（頭を兩肱で支へて沈默）

――黑幕――

第二場

場所

淺香居間

（稍々古代めいた裝飾。小さな佛壇、お燈明があがつてゐる。衣桁に着物が懸けてある。壁に三味線が二丁、一丁には袋がかけてある。火の點つた行燈。鏡臺と火鉢がある。川に面して欄干あり。）

人物

かへで

淺香　遊女

村萩　遊女

墨野　遊女

仲居

時

同じ日の宵

（淺香。村萩。墨野。花合せをしてゐる。暫らく默つて札を引いてゐる。）

村萩　おや紅葉。氣をつけないと淺香さんが靑丹をしますよ。

墨野　ぬかりはなくてよ。後は菊ですね。

淺香　きつと出來ますわ。

村萩　そら、あやめ。三本が飛び込みになりましたよ。

墨野　うまくやつてるね。

村萩　後幾らも札が殘つてなくてよ。

淺香（札を引く）そら菊。（一寸眉を寄せる）あらいやだ。桐のからだわ。

墨野　お生憎さま。
村萩　（札を引く）　そら菊。出た。
墨野　青はやぶれましたね。
淺香　くやしいわ。
村萩　（笑ふ）　お氣の毒樣。
（三人しばらく沈默して札をめくる。）
墨野　これでお仕舞ひ。
（三人點を數へる。仲居登場。）
仲居　墨野さん。さつきからお座敷で呼んでゐられますよ。
墨野　すぐに行きますよ。（村萩に）　いま十ヶ月ね。後二ヶ月ね。ついでにきりをつけて行かうか知ら。
仲居　大變待ち兼ねていらつしやるのよ。
村萩　すぐに行かないとまた後で惡くてよ。
墨野　せうがないね。
仲居　ではすぐに來て下さい。（退場）
墨野　では行つて參ります。いづれ後ほど。（退場）
村萩　二人でしませうか。
淺香　（氣の無さゝうに）　もう花合せは止しませうよ。
（札をかたづけつゝ）私は今晩は負けてばかりゐました。
（考へる）今年はどうも運星がよくないらしい。
村萩　花合せのやうたものでも、負けると氣持のいゝものではないのね。

淺香　まつたく。
村萩　あなたは此の頃お體でも惡いのぢやなくて。
淺香　どうして？
村萩　何だか景氣がよくないのね。いつも沈んでいらつしやるわ。
淺香　私の性分ですわ。
村萩　少しお痩せなさいましたね。
淺香　さうですか。
村萩　あまり物事を苦になさるからよ。私見たやうにのんきにおなりなさいな。
淺香　でも何もかも情けない事だらけですもの。
村萩　それはさうよ。けれど私たちのやうな身で、物を苦にした日には、それこそ限りがありませんわ。
淺香　ほんとにねえ。
村萩　私も初めはあなた見たいに、考へては悲しがつてゐたのよ。來た當座は泣いてばかりゐましたわ。けれど泣いたとて、どうもなるのではなし、くよくよ思ふだけ損だと思つて、一切考へない事にしてしまつたのよ。今日一日がどうにか過されさへすればいゝと思ふことにしたのよ。だつて行く末の事を案じだしたら、心細くて、とてもかうやつてはゐられなくなりますもの。
淺香　私もあなたのやうな氣分になりたいと思ふのよ。ま

たさうなるより外に仕方もないのですしね。けれど生まれ付き苦勞性とでもいふのでせうかね。ものが氣になつてならないのよ。（間）私もね。もう行末の事などそんなに考へはしないのよ。だけど今日の一日が味氣なくて、淋しくてならないの。

村萩　あなたは本當に陰氣な方ね。あなたと話してゐると私まで釣込まれて淋しくなるわ。そして忘れてゐる——といふよりも、忘れようと努めてゐる不幸を新しく思ひ出しますわ。（間）えゝ。止しませう。止しませう。こんな氣の滅入るやうなお話は。今は陽氣な春ではありませんか。もつと樂しい話でもしませうよ。

淺香　ほんに春の宵なのね。

村萩　街も春めいてずゐ分陽氣になりましたよ。今晩方も店に出てゐたら、格子の外を輕さうな下駄の音などして、通る人は花のうはさをしてゐましたよ。

淺香　もう間も無く咲くでせう。

村萩　皆で花見に一日行かうではありませんか。

淺香　さうね。（沈む）

村萩　それはさうとかへでさんはまだ歸らないの。

淺香　えゝ。まだですの。

村萩　何處へ行つたのでせう。

淺香　一寸清水へお參りして來ると云つて出たのですがね。

村萩　ずゐ分遲いのね。

淺香　もうおつゝけ歸るでせう。何しろまだ子供ですからね。

村萩　さうでもないやうよ。（間）實はね。おかあさんが私に腹を立てゝ話してましたよ。

淺香　何と云つて。

村萩　かへでの遣り方は横着だ。あのやうな若い小僧あがりのやうな者に身を入れて、家の勤めがお留守になる。お錢なしに稼業をしてゐる女と遊ばうとするのは蟲が好すぎる。外の客を粗末にして困つてしまふ。それに淺香も淺香だつて。

淺香　私の事を云つてましたか。

村萩　えゝ、淺香が仲に立つて取り持つてゐるらしい。妹分を取り締らなくてはならない身で不都合だと云つてゐましたよ。

淺香　そんな事を云つてゐましたか。

村萩　ぷり〳〵してゐましたよ。氣を注けないと、またあのおかあさんが怒りだすと、しつこくて面倒ですからねえ。

淺香　それはねえ。（考へ込む）

村萩　私はかへでさんは若くはあるし、あゝなるのも無理はないと思ふのよ。私だつて覺えの無い身ではなし。け

れどかへでさんのはあんまり聞き分けがなさ過ぎると思つてよ。勤めの身でゐて、まるで生娘のやうな戀をしようとするのですからね。

淺香　それはおかゝあさんで見れば、困る事もありませうけれどね。

村萩　何しろ際業になりませんからね。それにかへでさんは私なんかには何も打ち明けないで、内證にばかりしてゐるんですからね。かう〱だからたのむと云へば、私だつて、都合をつけて、一度や二度は逢はしてあげないものでもないのだけれど、あれでは可愛らしくありませんからね。

淺香　お花にならずに、かくれ遊びをしてゐるのだから、氣が咎めて打ち明けられないのでせうよ。

村萩　けれど彼の人は氣が高すぎます。今日も孤鼠々々出かけてゐたから、私が何處へ行きますと訊いたら、白ばくれて一寸其處までと云ふのよ。私は少し癪だつたから、へえ、一寸お寺まででせうと云つてやつたのよ。そしておかゝあさんの怒つてゐる事や、勤めを大事にせねばならないことを云つてきかせてやつたのよ。そしたら、彼の子の口上が憎らしいではありませんか。私は悪い事をしてゐるのではありません。姉さんなどとは考へが少し異ふのだから、いゝから、ほつといて下さいと、かうなのでせう。

淺香　そんな事を云ひましたかえ。歸つたら私がよく言ひ聽かせてやりますから、どうぞ氣を悪くなさらないで、堪忍してやつて下さいね。元來はおとなしい性質なのですからね。

村萩　あんまり私たちを輕く見て居ますからね、

淺香　彼の子も此の頃は思ひ詰めて、氣が立つてゐるのです。あのやうに云つたのもよく〱思ひ餘つたのでせうから。

村萩　あなたはかへでさんに甘過ぎますよ。おかゝあさんも此の間云つてゐました。かへでの氣の高いのは、淺香の仕込みだつて。

淺香　そんな事はありませんわ。

村萩　何しろ少しあなたから氣を注けた方がよくてよ。皆さう云つてゐるのですからね。優しくするとつけあがりますからね。

淺香　氣を注けませう。堪忍してやつて下さい。（涙ぐむ）

村萩　何も堪忍するの、しないのつていふ段ではないのですけれどね。話のついでに云つたまでの事ですよ。あれではかへでさんのためにもならないと思つて。

淺香　ありがたう御座います。（居なかむ）

村萩　そんなに氣に留めなくてもいゝことよ。ではまた寄

せて貰ひます。(立ち上る)

淺香　まあ、いゝではありませんか。

村萩　いづれ又。花合せにのぼせてまだ夕方の身じまひもしてゐませんから。

淺香　さう。ではまたいらして下さい。

(村萩退場。淺香、一寸ぼんやりする。それから花合はせを箱に入れる。それからまた考へ込む。驟て氣を替へたやうに立ちあがり、鏡臺の前に行きて坐わる。)

淺香　(鏡を見つゝ) ほんとに少し瘠せたやうだ。(頰に手を當てる) 瘠せもするだらうよ。(鏡臺の曳き出しから櫛を出して、髪を撫でつける) 此のやうにして何のために身じまひをするのだらう。自分を弄びに來る嫌な男——自分の敵に媚びるために自分の顏形を飾らなくてはならないとは！　いや、今ではもうそのやうな事も考へなくつて、たゞ習慣で、夕方毎に鏡に向くのだ。それも自分の色香に自信があつた間はまだよかつたけれど。(間) 髪の毛の拔けること。(櫛から髪の毛を除く) 弱いからだを資本にして、無理な體の使ひ方をして働けるだけ働き拔いて、そして働けなくなつたら——(身慄ひする) えゝ、考へまい。考へまい。

(他の座敷から鼓の音がきこえて來る。かへで登場。淺香を見ると聲をあげて泣く。)

淺香　(かへでの側に寄り、覗き込む) かへでさん。どうしたの。かへでさん。

かへで　あんまりです。あんまりです。(身を慄はす。簪が脫けて落ちる)

淺香　どうしたのだえ。たしぬけに。(簪を揷してやる) まあお坐わり。(かへでを火鉢の側に坐わらせる。自分もその側に坐わる)

かへで　(泣き止む) おかあさんに酷く叱られたのよ。歸ると呼びつけられて。私が惡いのよ。遲くなつたのだもの。でも歸られなかつたのよ。けれどあんまりな事をおつしやるのだもの。

淺香　私もさうだらうと思ひました。

かへで　攫みかゝるやうにして、頭から怒鳴りつけられたわ。出來るだけ酷い言葉を使つて。私は構はないのよ。どうせ私はおかあさんにかけたら蟲けらのやうなものですもの。何と云つたとて仕方はないのだし。もう叱られつけてゐますからね。けれどおかあさんは彼の方の事を惡く惡く傍で聞いて居られないやうな事をいふのですもの。

淺香　唯圓樣の事もかえ。

かへで　お錢を持たずに遊ぶ者は盜人も同じ事だつて。彼の方の事を臺所でおさかなを咬へて遁げる泥棒猫に譬へ

ました。

浅香　まあひどいことを。

かへで　私はあまり腹が立ちましたから、いゝえ、あの方は鳩のやうに純潔な優しい方ですと言つたのよ。すると口應へをするといつて烟管で撲つたのですよ。

浅香　撲つたの。

かへで　えゝ。此處のところを力一ぱい。（膝をさする）そしてもう一切外出はさせないと云ひました。

浅香　酷いことをするものだね。彼の人の荒いのはいつもの事だけれど、撲つのはあまりだ、云つて聞かせればよかりさうなものだのに。

かへで　きつと村萩さんが告げ口をしたのよ。今晩もおかあさんの側に居て、意地惡い皮肉や、針のある嫌味をならべましたわ。

浅香　村萩さんもかえ、皆して小さいお前を虐めるなんて。

（間）村萩さんはさつきまで此處で話して行つたのだよ。お前は氣が高くて姉さんたちを輕く見てゐると云つておこつてゐたよ。それにお前が打明けないのが氣に入らないのだよ。

かへで　いやなことだ。彼の人に打ち明けるなんて、自分の心の內に守つてゐる大切な戀を、輕いチョコ〱した心ない人に安つぽく話す氣になれるものですか。私本當に姉さんきりよ。何もかも打ち明けるのは。また私が氣が高いつて云ふのは本當かも知れないわ。いつか姉さんが私におつしやつたでせう。どのやうな身になつても心に何かの誇りといふものを持つてゐない女は嫌ひだつて。

浅香　（淚ぐむ）よく覺えてゐてくれた。あゝ、けれど人樣から卑しきものゝ例に引かれる遊女の身で、其の樣な事を考へてゐるのは馬鹿氣てゐるかも知れない！　かへでさん。私は何も云ふ事はなくてよ。たゞあなたがいとしいだけよ。何もかも耐へ忍ぶより外ありません。あきらめるより外——あゝ、諦めるといふ心持は何て淋しいこゝろでせう。

かへで　わかつてゝよ。姉さん。（淚ぐむ）あなたがゐて下さらなかつたら、私はこれまでに如何なつてゐたか解りませんわ。私はお腹の內では手を合せて拜んでゐますわ。

（兩人沈默。鼓の音だけきこえる。）

かへで　（欄干の側に行き外を眺める）姉さん來て御覽なさい。東山から月が出るところよ。

浅香　（かへでの側に行き欄干にすがる）山の線がぽーつと明るくなつてゐますね。

かへで　向う岸の灯の美しいこと。

淺香　橋の上を人影がちらほらしてゐますね。

かへで　私はあのやうなところを見ると變に人懷かしい氣がしますのよ。

（しばらく默つて夜景を見てゐる。）

淺香　今日は何處で遇つたの。

かへで　黑谷樣の裏手の墓地で。

淺香　うれしかつて。（ほゝ笑む）

かへで　それはねえ。だけど私たちは悲しい方が多いのよ。そして泣いたわ。

淺香　どうして？

かへで　二人ゐるとひとりでに悲しくなるのよ。それにあの方はどうかするとすぐに涙ぐみなさるのですもの。

淺香　優しいんですからね。あなた方は遇ふとどの樣な話をするの。（ほゝゑむ）

かへで　（嬉しさうに）それは色々の事を話しますわ。逢ひたかつた事や、手紙の事や、身の上話や、それから行く先き先きの事や――

淺香　（まじめに）行く先々どうすると云つて。

かへで　一緒になるといつて。（口早やに）私は濟まないといふのよ。私は此の樣な身分ですから捨てゝ下さいといふのよ。けれど唯圓樣はどうしても一緒にならうとおつしやるの。眞宗では坊樣でも奧樣を持つてもいゝのですつて。

淺香　では體の汚れてゐる事も知つての上で。

かへで　えゝ。それを思ふと苦しくて夜も眠られなかつた。しかしその苦しみに打ち克つた。あなたの體の汚れたのはあなたの罪ではなく、あなたの不幸だとおつしやるのよ。そればかりでなく、假令、あなたが自分で自分の體を汚して居たとしても私は赦して愛する氣だとおつしやつて下さるのよ。

淺香　（涙ぐむ）よく〳〵眞面目な熱いお心だわね。

かへで　唯圓樣はそれは眞面目よ。私と遇つて居る時でもどうかすると直ぐ說敎のやうな堅い話になるのよ。私はまたそのやうな話を聽くのがうれしいの。六ケ敷い顏をして、美だの、實在だのと、私にはよく解らないやうな事をおつしやる時の彼の方が一等好きなのよ。

淺香　（ほゝゑむ）それでまだ一度も何しないの。

かへで　（まじめに）えゝ。その樣な事は一寸もないのよ。

淺香　ほんとにあのやうな人はあるものではない。よくしてあげなさいよ。

かへで　それは大切にしますわ。私はもつたいないと思つてゐますのよ。

淺香　私も彼の方は心から好きです。あなたが、嫌な、卑しい人と何するのなら、私お手紙のお取次ぎなんか眞平

だけれどね。

かへで　ほんとにお世話になりますね。唯圓樣もあなたを好いていらしてよ。この間もあなたの事を色々氣にしてたづねていらしてよ。そして幾度も有難いといつてゐられました。

淺香　此の間の夜はいゝ都合だつたのね。私はふと門口に出て見たら、あの方が月あかりのなかをうろ〳〵していらつしやるのよ。私はいとしくて涙が出てよ。駈けつて行つて、かへでさんに何か用事はありませんかと云つたら、どうぞこれを賴みますと云つて、手紙を渡して、あわてゝ、向うへ行つてお仕舞ひなすつたわ。

かへで　あの時あなたに逢はなかつたら、夜通しでもうろうろしてゐたゞらうと云つていらつしやいました。

淺香　あの方なら、さうしかねなくつてよ。（ほゝゑむ）だけど私はいゝお役目が當つたものね。

かへで　まあ。あんなことをおつしやる。（ほゝ笑む）

淺香　（急に暗い顏をする）これから後はどうして逢ふ氣なの。

かへで　（心配さうな顏をする）さあ。私はそれが心配でならないのよ。おかあさんは今晩の權幕では、もう一寸も外へは出してくれますまい。と云つて唯圓樣は宅へ來て下さる事は出來ないのだし。

淺香　お錢の都合をつけなくてはいけますまい。

かへで　唯圓樣に幾らお錢があつても、私はあの方にだけはお錢で買はれたくはないのよ。私はお客とは思ひません。私は娘として取扱ひますと今日もお約束しましたのよ。自分を卑しいものと思つてはいけないと吳々もおつしやつたのよ。

淺香　ではあなたがお勤めを止めるより外に道はないではないの。

かへで　唯圓樣は今にさうしてやるとおつしやるのよ。

淺香　ふむ。（考へる）彼の方に何かあてがあるのでせうか。

かへで　（不安さうに）どうなのですかねえ。

淺香　彼の方に誠心があつても、世の中の事はなか〳〵一筋に行かないものでね。

かへで　彼の方は世間の事はかいもく知つていらつしやらないのよ。私の方が分別がある位なのよ。

淺香　さうでせうとも。

かへで　彼の方はお師匠樣に打ち明けて相談するとおつしやるの。それがたゞ一つの賴りらしいのよ。

淺香　あの親鸞樣に？

かへで　えゝ。お師匠樣は坊さまは戀をしてはいけないとはおつしやらないのですつて。何でも力になつて下さる

のですつて。遊女だからといつて輕蔑はなさらないのですつて。

淺香　何もかも解つて居る方とは善鸞樣から聞いてゐますけれどね。

かへで　姉さん。私はどうなるのでせうか。

淺香　さあねえ。お弟子達にはいゝ人ばかりは居ないさうですからねえ。

かへで　ほんとに心細くなつて仕舞ふわ。

淺香　それにしても、さうなるまではどうして逢ふ氣なの。

かへで　仕方がないから、唯圓樣が河原の方から廻つて、石段の所で合圖をして下さる事になつてるの。そしたら私が裏口から出て、お手紙を取り換へるお約束になつてるのよ。私早くしないと、見付かると大變だけれど、でも一寸でもお顏か見られるわね。

淺香　そんなにしてまで遇ひたいの。

かへで　一と目だけでも。（間）唯圓樣は眠られない夜が多いのですつて。私のやうなものをでも、そんなにまで思つて下さるのですもの。

淺香　（しみ〴〵と）それであなたも身も心もと思つたの。

かへで　えゝ。（涙ぐみてうなづく）

淺香　（氣を替へる）うまく行きますよ。私はそれを祈ります。私が云つたのは、今急に行くまいと云つたのよ。色々と六ケ敷い事が起るでせうけれど、二人の心さへしつかりして居れば屹度成就すると思ふわ。辛抱が第一よ。

かへで　どんなに苦しくても辛抱しますわ。

淺香　氣が強くなくてはいけませんよ。私などはすぐに氣が弱くなるからいけないのです。自分の幸福を守る事に勇敢でなくては駄目よ。皆はおとなしい人には勝手な事を仕向けて、その人のいのちよりも大切にしてゐるものをでも造作もなく奪つて行つて仕舞ひますからね。そしてそれを義理だと云つて無理に怺へさせますからね。善鸞樣がいつも云つていらつしたつけ。義理を立て貫く覺悟がない時には、なまなか義理を立てようとすると却つて後で他人に迷惑を掛けるやうな事になるつて。善鸞樣でも初め、戀人と心を併せて、強く自分たちの幸福のために戰はれたら、後で皆を苦しめ、自分も泣かなくてもよかつたのだわ。また一旦自分の幸福を犧牲にする氣になつたのなら、もう自分は死んでしまつた者と思つて、一生涯淋しく強く生き通さなくてはならないのです。けれど優しい人はさうは行かないのね。初めは義理にからまれるし、後には淋しさに堪へられないし。（間）彼の人は本當に不幸な人だ。（間）あなたはまけてはいけませんよ。

かへて　私は一生懸命になりますわ。今日唯圓様もどの様な困難にも戰つて必ず勝利を占めようとおつしやいました。姉さんも力を貸して下さいね。
淺香　私はどんな事でもしてあげますわ。
かへて　姉さんの御恩は忘れません。（涙ぐむ）
淺香　私は眞身の妹のやうに思つてゐるのよ。
かへて　私も本當の姉さんのやうな氣がするのよ。
淺香　あなたが初めて家に來たとき、私の部屋に來てこれからお賴み申しますと云つて、手をついてお辭儀をしたでせう。私はあの時から妙にいとしい氣がしたのよ。おかあさんから、今度新しい子が來るから、お前の妹分にして仕込んでやつてくれと豫ねてたのまれてゐたのよ。けれど私は別に氣にも留めなかつたの。それにあなたを一目見ると何とも云へないあはれな氣がしたのよ。あなたは氣まり惡さうに、おづ〳〵して言葉も田舍訛りのまゝでしたわね。
かへて　私は勝手は解らないし、心細かつたわ、あの時あなたは少し氣分が惡いと云つて火鉢にもたれて、何もしないで凝と坐つていらしたわね。私は優しさうな方だと思ひました。段々つきあつて居る內に、外の姉さんたちとは違つた淋しい、ゆかしいところが私にもよく解つて來たのよ。そしてすつかりあなたが好きになつてしまつたの。
淺香　あなたは初めはずゐ分苦しい目に遇つたわね。小さい身には怺へ切れないやうな。
かへて　あなたはよく私を庇うて下さいました。
淺香　あなたが死にかけた時にはどんなに驚いたでせう。
かへて　辛抱おし。何もかも解つてゐる。私も同じ思ひを忍んで來たのだ。何事も國のお母さんのために。とあなたは泣いて止めて下さいました。
淺香　でもよく聞き分けて下すつたわね。それから互の身の上話になつて、二人で話しては泣いたのね。
かへて　まるで數でも計へるやうに、互の不仕合せを並べ立てゝ――
淺香　何故私たちは此の樣に不幸なのでせうと云つて二人で考へたのね。そしたら譯が解らなくなつてしまつて、とう〳〵あきらめるより外はないといふことでお仕舞ひになつたのね。
かへて　あの時から二人は一層の事親しくなつたのね。
淺香　何もかも打明けあうて。
かへて　（淺香の顏を見る）見棄てゝはいやよ。
淺香　あなたこそ。
かへて　姉さん、手をかして。
淺香　はい。（手を延ばす）

かへで（淺香の手を胸のところで握りしめる）まあ、ねえさんのお手の冷めたいこと！
淺香　私は冷え性なのよ。
（二人暫らく沈默。）
かへで　善鸞様からお便りがありますの。
淺香　えゝ、折々。
かへで　お國ではどうして暮していらつしやるの。
淺香　やはりお寺に坐つていらつしやるのよ。しきたりで佛様は拜むけれど、本當は何も信じられないで、心は段段寂びれて行くばかりだと、お手紙に書いてありました。
かへで　あの様な淋しい方はありませんね。つきあへば、つきあふだけ、どんなに心の奥に、不幸を持つていらつしやるかゞ思はれるやうな氣がしました。
淺香　善鸞様は本當はお父様に遇ひたくて京にいらつしやつたのよ。けれどお父様のお身の爲や、お弟子衆や、親戚の方の心持や、色々な事を考へて、とう／＼逢はない事に決心なすつたのよ。
かへで　では淋しいお心で御歸國なすつたでせうねえ。
淺香　おいとしいと云ふよりも、あはれなと云ふ位でしたよ。（間）けれど唯圓様の御蔭でお父様のお心持がよく解つたので、大變安心なさいました。別れてゐて互ひの幸福を祈る——すべての人間は隣人としてさうするのが普通のさだめなのだ。人間はどのやうに愛し合つてゐても、いつも一緒にゐられるものではない。別れてゐて祈りを通はす外は無い。お前と俺でも其の通りだ、もうぢきお別れしなくてはならない。今度はいつ逢へるか解らない。別れても俺のために祈つてくれ。俺もお前の仕合はせを祈るからとおつしやいました。
かへで　善鸞様は唯圓様を大變お好きなさいましたね。
淺香　あんな溫かい、純潔な人は無いと云つて、いつもほめていらつしやいました。
かへで　唯圓様も、善鸞様を皆が惡く云ふのは譯がわからないと云つていらつしやいました。
淺香　彼の方は善い心が傷けられたゝめに、一旦心の調子が狂ふと、なか／＼元には返りませんからね。それには始終その荒んだ心を溫め潤ほす愛が傍になければなりません。それだのにあの方の周圍には、その愛が缺けてゐる代りに、呪ひと蔑みとが充ちてゐるのですもの。
かへで　あの方はまたその他人の非難を氣に掛けずにゐられるやうな人ではありませんでしたからね。自分では強さうな事を云つていらつしやる癖に。いつかも私にお前は俺を善い人と思ふか、惡い人と思ふかと眞顏でおつし

やいましたから、私はあなたのやうに心の善い人は知りませんと云つたら、本當にさう思ふかとおつしやるから、あなたにはお世辭は申しませんと云つたら、涙ぐみ遊ばしてね。かへで、私は本當は善い人間なのだよ。皆が惡口を云ふやうな人間ではないよ、私を惡く思つてくれるなとおつしやいました。丁度その日お座敷で私に無理にお酒を飮ませたり、いたづらをなすつた夜でしたのよ。

淺香　つきあふだけ深味の出る人でしたよ。私は彼のやうに手應へのあるお客にぶつかつた事はありませんでした。

かへで　あなたと善鸞樣とは一體どんな仲だつたのですの。私は今でもよく解らなくてよ。

淺香　（淋しく笑ふ）それはあなたと唯圓樣と見たやうなのとは違ひますよ。おたがひに年を取つてゐますから。

かへで　だつてどちらも愛していらしたのでせう。

淺香　それは愛してゐましたとも。

かへで　ではどうしてあんなにして別れてしまつたの。

淺香　それが人生の淋しいところなのよ。私も彼の方もその樣に出來るやうな淋しい心になつてるのよ。今のあなたには解りませんけれど。

かへで　さうを。でもいつも思ひ出すでせう。

淺香　思ひ出しますとも。

かへで　今度はいつ京にいらつしやるの。

淺香　いつだか解りません。

かへで　さびしいでせう。

淺香　（涙ぐむ）ねえさんはその淋しさにもうなれてゐるのよ。

かへで　私は何だか心細くなるわ。

仲居　（登場）かへでさん、お花、そのまゝで直ぐ來て下さい。（退場）

かへで　あゝ、嫌だ。今夜だけは出たくない。お座敷などへ出るやうな氣分ではないわ。

淺香　でも辛棒して出ていらつしやい。さつきの今ですから出ないとおかあさんがそれこそ大變よ。

かへで　せうがないねえ。（鏡臺の前に坐り、一寸顏をなほしてすぐ立ち上る）では一寸。

淺香　（火鉢の側に戻る）お早くお歸り。

（かへで退場。しばらく沈默。）

淺香　（火箸で灰をならしつゝ）あゝ、火もいつの間にやら消えたさうな。（溜息を吐く）私の心は丁度此の灰のやうなものだ。もう若い情熱もなくなつた。かへでさんのやうな戀はとても出來ない。自分の不幸を泣く涙も涸れて來た。訴へる心も段々無くなつて行く。何の望みもない。と云つて死ぬる事も出來ない。たゞ習慣で何の氣

乘りもなしにして來た事をつゞけて行くだけだ。何が殘つてゐる、何が？　たゞ苦痛を忍び受ける心と、老いと死と、そしてそのさきは……あゝ何もわからない。あんまり淋しすぎる。（つきふす、泣く、間、顏をあげて四邊をぼんやり見まはす）たれかがたすけてくれさうなものだ。本當に誰かゞ……

――幕――

第五幕

第一場

場所

本堂

（大きな圓柱が澤山立つてゐる大廣間。正面に佛壇。左右に古雅な繪模樣ある襖。燈盞にお燈明が燃えてゐる。廻り廊下。庫裏と奥院とに通ず。横手の廊下に鐘が釣つてある。）

人物

唯圓

僧數人小僧一人

時

晩い春の夕方　第四幕より一月後

（僧六人、佛壇の前に坐して晩のお勤めの讀經をしてゐる。も早終りに近づいてゐる。）

僧一同　（合唱）釋迦牟尼佛能爲甚難希有之事。能於娑婆國土五濁惡世、劫濁見濁煩惱濁衆生濁命中濁得阿耨多羅三藐三菩提。爲諸衆生說是一切世間難信之法。舍利弗。當知我於五濁惡世行此難事得阿耨多羅三藐三菩提爲一切世間說之難信之法是爲甚難佛說此經已舍利弗及諸比丘一切世間天人阿修羅等聞佛所說歡喜信受作禮而去。

（鐘）佛說阿彌陀經（鐘）

僧一　なむあみだぶつ。

僧一同　なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。

（此合唱たび／＼繰返さる、一同禮拜す。沈默。立ち上り無言のまゝ左右の襖をあけて退場。舞臺暫らく空虛。小僧登場、夕ぐれの鐘をつく。此の所作二分間かゝる。無言のまゝ退場。）

唯圓　（登場。靑ざめて、眼が充血してゐる）もうお勤めは濟んださうな。（溜息をつく。冴えた柝の音がきこえてくる）あ、（耳をすます）庫裏で夕食を知らせる柝が鳴つてゐる。（佛壇の前にくづ折れる）あゝ心のなかゝら平和が去つた。靜けさが――あのしめやかに、落ちつい

た心は何處へ行つたのだらう。誰もゐない本堂の、この經机の前に跪いて夕べごとの祈りをさゝげたとき、私のこゝろはどんなに平和であつたらう。あの香爐から立ちのぼろ焚きものゝにほひのやうに、やはらかにかをつてゐた私のたましひはどうなつたのだらう。小さな胸を抱くやうにして私はその靜けさを守つてゐた。（間）此の頃の私のふつゝかさ、こゝろはいつも亂れて飢ゑてゐる。もう何日眠られぬ夜がつゞく事だらう。朝夕のお勤めさへも亂れた心でおこたりがちになつてゐる。たましひはまるで野良犬のやうにうろ〳〵して落ちつかぬ。さうだ野良犬のやうだと今日松の家のお内儀（かみ）があざけつた。（身を慄はす）物欲しさうな顔をして、人目を畏れて裏口から忍び込まうとするものは、宿無し犬のやうだと云つた。おゝ此の墨染の衣を着て、顔を赤くして、おど〳〵と裏口に立つてゐたのだ。侮辱されても何とも得云はずに。みじめな私の姿は犬にも似てゐたらう。乞食犬にも。（泣く）

（僧三人。登場。唯圓顔をかくし、立ちあがり去らうとする。）

僧一　唯圓殿。

唯圓　はい。（立ち止まる）

僧一　少しお話があります。お待ち下さい。

僧二　あなたのお歸りを待つてゐたのです。

僧三　まあお坐りなされませ。

（僧三人坐わる。）

唯圓　（おづ〳〵坐わる）何か御用で御座いますか。お改り遊ばして。

僧一　實はちと伺ひたい儀がありまして。（唯圓の顔を見る）どうなされました。お顔色がひどく惡い。

僧二　眼が血走つてゐますが。

唯圓　…………

僧三　今日はどちらへお越しなされました。

唯圓　木屋町の方まで。遲くなりまして。

僧一　木屋町の何處に？

唯圓　…………

僧二　お勤めを怠りなさるのももう度々の事で御座います。

唯圓　相濟みません。（涙ぐむ）

僧三　氣を注けて貰はなくては困ります。

僧一　まだお若いとは申しながら。……

僧二　いや、若い時こそ精進の心が旺んでなくてはなりません。私たちの若い時には皆一生懸命に修行したものでしたよ。朝は日の出ぬ前に起きて、朝飯までには靜坐をして心を錬りました。夜は遲くまで經を學んで、有明の

月の出るのを知らなかつた事もありました。お勤めを怠るといふやうな怠慢な事は思ひも寄らぬ事でしたよ。
僧三　何しろ今時の若いお弟子たちとは心がけが違つてゐましたからね。此のやうに懈怠の風の起るのは實に嘆かはしいことゝ思ひます。身に緇衣をまとふものが女の事を――あゝ私はとう〳〵云つてしまひました。
僧一　いや云ふべき事は云はなくてはなりません。今日までは默つてゐましたけれど、いつまでもほつて置いては唯圓殿のお爲でありません。だいゝち法の汚れになります。（聲を強くする）唯圓殿、あなたは今日木屋町の松の家にいらしたのでせう。
僧二　そしてかへでとやら申す遊び女のところに。
唯圓　…………
僧三　何もかも解つてゐるのです。六角堂に參詣するとか、黒谷樣に墓參のためとか云つて、繁々と外出遊ばしたのは皆その女と逢引するためだつたのでせう。
唯圓　すみません。すみません。
僧二　私はとくからあなたの素振りを怪しいと思つてゐたのです。いや、今はもうお弟子衆でそれに氣のつかぬものはありません。三人集ればあなたの事を噂してゐます。
僧三　若いお弟子たちは羨ましがりますからな。私たち見たやうな年寄りはよろしいけれど、此の間も控への間を通つてゐたら、ふと耳にしたのですが、唯圓殿はお師匠樣の（縫に力を入れる）秘藏弟子で、美しい女には思はれるし、果報者だと申してゐました。
僧二　（からかふやうに）あなたの事を蔭で墨染の少將と申してゐます。
唯圓　（唇を噛む）おなぶり遊ばすのですか？
僧二　いや、人がさう申してゐるといふ事ですよ。（かたくなる）お師匠樣が默つていらつしやれば、あなたは猶更つゝしまなくてはなるまいかと存じます。お優しいのをいゝことにして。思ふがまゝのお振舞ひは道であるまいと存じます。
僧三　それも良家の淑女といふならまだしも、卑しい遊女などを相手にして。僧たるものが、淺ましい事で御座います。
唯圓　遊女ではありますが心は純潔な女です。
僧二　（僧三と顔を見合はす）あなたが欺されてゐるのですよ。諺にも「傾城に誠なし」と申します。遊女などの申す言葉などあてになるものですか。
唯圓　でも彼の女ばかりはその樣な女ではありません。私は寧ろ私が彼の人を傷けはしないかとそれを恐れてゐるのです。
僧三　ほう。あなたはまだお若いからな。あなたを欺す位

たやすい事はありませんよ。あなたの膝に片手を置いて涙を一滴落して見せる――それだけの事ですよ。

唯圓　私は彼の人を信じてゐます。

僧二　若し彼の女が本當にあなたに對して何かの興味を感じてゐるとしたら。まあ、好奇心でせうよ。若い坊様といふことにな。あなたは御きりやうがよいからな。

唯圓　そんな浮いた事ではないのです。私たちは苦しいほどまじめなのです。逢ふたびごとに泣くのです。二人ゐるとひとりでに涙が出るのです。

僧三　まじめとは驚きます。女郎買ひすることがまじめとは。僧たるものが。いや、まつたく今時の若いお弟子たちにはおどろきますよ。

唯圓　私は彼の人を遊女として取扱つてゐるのではないのです。ひとりの娘と思つてつきあつてゐるのです。また彼の人も私に買はれるとは思つてゐないのです。

僧二　娘としたら餘程氣まぐれな娘でせうな。もろこしの書にも「晨に呉客を送り、夕べに越客を迎ふ」というてあります。考へて御覽なされませ。女にはあなたの外に幾十のお客があろ、それ等の人のなかにはもつとお金のある、歴々の、立派な紳商や武家もありませう。それ等の人をさしおいて、特別に女があなたに心を寄せるといふには、何かあなたに惹きつけるところがなくてはならぬ筈です。だが、かう申しては失禮だが、あなたは未だ修行も熟さぬ若僧ぢや、お金は無し。一體僧といふものはあまり女に好かれる性質ではありませんよ。え。考へたらいかゞです。男といふものは女にかけては自惚れの強いものでしてな。氣を悪くしてはいけませんよ。まつたくあなたは興奮してゐられますよ。だがかうして話してゐるうちにも、あの女は他のお客に抱かれてゐるかも知れない。

唯圓　あゝ。それを云はれては！（興奮する）私は自分の値うちのないことはよく知つてゐます。また、あの女の體の汚れてゐることも知り抜いてゐます。けれどあの女の心が本當に私のものであることは疑ふことはできません。

僧三　そしてあなたの心が彼の女のものであることもでせう。（唇に笑ひを浮べる）幾千萬のお目出度い若者が昔からその通りに云ひました。そして後悔するときは、もう自分の浮ぶ瀬は無くなつてゐました。だから君子は初めよりその危さに近づきません。知者は、自分の身の安全の失はれない範圍で女の色香をたのしみます。あなたのは身を以て、その危さの中に飛び込まうとするのです。何の武裝もなしに。痴と云はうか。稚と申さうか。何しろ女遊びは火を弄ぶより危險ですよ。

唯圓　けれど眞劍な事は皆危險なものではありますまいか。お師匠樣も眞理は身を以て經驗にぶつかる時にばかり自分のものになる。信心なども一種の冒險だとも云へるとさへおつしやいました。

僧三　お恥ぢなさい。唯圓殿。（聲を荒くする）あなたは女遊びと信心とを一つにして考へるのですか。

僧二　お師匠樣の名によつて、己れの罪を掩はうとするのは横着といふものです。一體お師匠樣はあなたを買ひ被つてゐられます。あなたは寵に甘えてゐます。

僧三　素性も知れない遊女に溺れて、佛樣への奉公をおろそかにし、そのうへあれこれと小さかしく辯解する。一體ならたゞ畏れ入つてあやまらねばならないところです。私たちの若い時には、此の樣な所業をしたものは寺の汚れとして直ぐに放逐されたのです。

僧二　卑しい遊び女などの言葉をまに受けてたまるものですか。おめでたいといつても限りがある。大てい解つたことではありませんか。それ、下世話によく申す、「後ろに向いて舌をべろり」――此のやうな言葉はあまり上品なものではありませんけれどね。

唯圓　（いかる）あなたは一人の少女の心をあまり見くびつていらつしやいます。また僧だから尊い、遊女だから卑しいといふやうな考へ方は概念的ではありませんか。僧の心にでも汚れはあります。遊女の心にでも聖さはあります。純な戀をすることは出來ます。どのやうな人か解りもしないのに、初めから惡いものと疑ふのはいけないと思ひます。一つの事に一生懸命になるときには人間はまじめになるのです。私は最前からあなた方のお話を聞いてゐて、あなた方が女に對してまじめな考へを持つていらつしやらないのを感じました。そのやうな考へが女を惡くさせたのではありますまいか。

僧三　あなたは私たちに說敎する氣ですか。（冷笑する）

唯圓　（逆上する）あなた方は私を愛して下さらないのです。私は初めから冷めたい氣に觸れて、心が堅くなるやうな氣がしました。愛しては下さらないのです。（涙ぐむ）最前あなたが舌をべろりとおつしやつた時にあなたの口元には卑しい表情が漂ひました。あの女が私はよごれてゐるといつて涙をこぼして手を合せて私にすまないといつて詫びた時には聖い感じがあらはれました。一體に此頃あの女は信心深くなりました。私は時々あの女から純な宗敎的な感じのひらめきに打たれてありがたいとさへ思うてゐるのです。

僧二　あなたは佛樣のかはりにあの女を拜んだらいゝでせう。

唯圓　（立ち上る）私はごめんをかうむります。（行かう

とする）

僧三　（さけぶ）勝手になされませ。

僧一　（制する）そんなに荒くなつてはいけません。唯圓殿まあお待ちなされませ。

唯圓　（坐わる）私はなさけなくなります。（涙ぐむ）

僧一　あなたは自分のしてゐる事を悪るいとはお思ひなさらぬのですか。

唯圓　皆様のおつしやるやうに悪るいとは思つてゐません。

僧一　ではなぜ嘘を云つて外出あそばすのですか。

唯圓　……　……

僧一　やはりよくない處があるのですよ。私はお若いから無理はないとは思ひますがね。またきびしくは申しませんがな。少し考へなすつたらいゝでせう。他の若い弟子たちの風儀にもかゝはりますからな。

唯圓　嘘をついて出たのは重々悪るうございました。私がお師匠様に打明けなかつたのがいけなかつたのです。私はいつも心がとがめてゐました。

僧一　お師匠様に打明けるのですつて。

唯圓　はい。何も彼もつゝまずに。

僧一　そんな事がよく考へられますね。

僧二　あつかましいといつてもほどがあります。

僧三　どんなにご立腹あそばすか知れません。

唯圓　でもお師匠様は戀をしてはならないとはおつしやいませんでしたもの。

僧二　まさか遊女と戀せよとはおつしやらなかつたでせう。

唯圓　けれど遊女だからといつて輕蔑してはいけないとおつしやいました。

僧一　當流では妻帶をいとはないとはいつても、それはおもてむきの結婚をした男と女との事です。男女の野合をゆるすのではありません。ことに遊び女とかくれ遊びをするのが、いゝか悪いか位の事は解りさうな筈と思ひます。

唯圓　かくれ遊びをしたのはまつたくいけませんでした。あやまります。もう二度と致しません。許して下さい。私は此の頃いつも考へてゐるのです。けれどどのやうな男女の關係が一番本當なのか解らなくなるのです。或は野合のやうなのが實は一番眞實なのではないかと思はれることもあります。

僧二　あなたには驚かされます。

唯圓　私はあの女と一緒になるつもりです。

僧三　あの遊び女と？

唯圓　はい。もう堅く夫婦約束をいたしました。

僧二　よくま顔でそんな事が言へますね。
僧一　あなたは篤と考へましたか。
唯圓　はい。夜も眠れないで考へました。
僧二　そして其の結果がこの決心に到着したといふのですね。この淫縦な決心に。あきれます。私は淺ましい氣が致します。あなたは何かに憑かれてゐるのではありませんか。
僧三　破戒だ。おそろしい。（間）これはまつたく惡魔の誘惑にちがひない。
唯圓　（溜息をつく）
僧一　唯圓殿、私はしつこくは申しますまい。私はあなたの一すぢな氣質を知つてゐますからな。私は今日まであなたを愛してゐたつもりぢや。たゞも一度たけ申します。考へて見て下さい。靜かに、心を落ち付けて。あなたは興奮してゐられる。戀は知慧者の目をも曇らすものだでな。私はお寺のため、法のためを思はずにはゐられませぬ。また何百といふ若いお弟子達のことを慮らねばなりませぬ。あの迷ひやすい羊たちの群をな。若い時の心は私も知つてゐる。あなたが女を戀しく思はれるのを無理とは思ひませぬ。その儀ならば、幸に當流は妻帯をいとはぬこと故、しかるべき處から、良家の處女を申し受けても苦しくない。私に心當りもあります。しかし素性も知れぬ遊女とはあまり理不盡と申すものです。世間では此の頃當流の安心は惡行をいとはぬとて非難の聲が高いときです。その時お師匠樣御近侍の若僧か遊女を娶つたとあつては、法敵の攻撃に乘ずる口實ともなります。若い弟子達の精進は鈍くなります。日頃御發明なあなたです。此處の道理の解らぬことはありますまい。若しあなたが此の決心をひるがへさぬなら、私はあなたに此の寺にゐて貰ふことは出來ません。或は私が出て行くかどちらかです。だが、多分、あなたは私にその樣な苦しい思ひをさせずに思ひ止つて下さるだらう。私はあなたを愛してゐるつもりぢや。な。唯圓殿。あなたは今は興奮してゐるからでせう。思ひ切つて下さるでせう。彼の女の事はふつゝりとあきらめ……おや、あなたは泣いてゐますね。
僧二　女ではあるまいし。
僧三　いや。思ひ切られたのでせう。それで辛いのでせう。
唯圓　私は思ひ切ることができません。私はもう考へ拔いたのです。私は寺の事、法の事、朋輩衆の事も考へないのではありません。けれど彼の女を振り捨てる氣にはなれません。あの女に罪はないのですもの。振り捨てねばならない理由が見つからないのですもの。私はどうしても戀を惡いものとは思はれません。若し惡いものとした

ら何故涙と感謝とがその感情にともなふのでせう。彼の人を思ふ私のこゝろは眞實に充ちてゐます。胸の内を愛が輝き流れてゐます。湯のやうな喜びが全身を浸します。あゝ、今こそ生きてゐるのだといふやうな氣が致します。あなた方が知つて下さつたら！　私は自分の心から湧いて起るねがひを大切にして生きたいと思ひます。そのねがひが惡いものでない以上は、決してあきらめまいと思ひます。お師匠樣がおつしやいました。宗教といふのは、人間の、人間として起してもいゝ願ひを墓場に行くまで、いかなる現實の障碍にあつてもあきらめずに持ちつゞける、そしてそのねがひを墓場の向うの國で完成させようとするこころを云ふのだつて。あの小さい可憐なむすめ、淵の底に陷つて泥にまみれてもがいてゐる。もう死ぬのだとあきらめてゐる。そこに救ひの綱が下りて來た。それを握れば助かるといふ。でもそれを初めは拒んだほど不幸に身を任かせてゐたのだ。私は彼の女に助けられたいといふ欲望を起させるのにどんなに骨を折つたらう。とうとう綱を握つた。もう明るい陸のきはまでひきあげられた。そこに幸福と希望とが眼の前に見えて來た。その時急にその綱を斷切つてしまふ――おゝ。そんな殘酷な事が私に出來るものか。そんなことをするのが佛樣のみ心に適ふものか。そんな事は考へられない。私はできない。（熱に浮かされたやうになる）彼の女とともに生きたい。どこまでも、いつまでも。

僧二　寺はどうなつてもいゝ。法はどうなつてもいゝのですか。

僧三　若いお弟子たちはつまづいても。

唯圓　あゝ、では解らなくなる。（身をもだえる）

僧二　あなたは二つの中から選ばなくてはならない。戀か或は法か――

唯圓　不調和だ。どうしても不合理だ。戀を捨てなくては、法が立たないといふのは無理だ。どちらも出來なくては――

僧三　何といふ蟲のいゝ事だらう。

僧二　あなたは女郎と佛樣とに兼ね事へる氣なのですか。私はあきれてしまふ。恥を知りなさい。

僧一　（しづかに）そんなに荒々しくしてはいけません。落ちつきなされ。唯圓どの。あなたは嘸苦しいでせう。けれどその苦しいのは當座の事です。日が經つにつれていつのまにやらあはくなります。人の心といふものは一つの對象に向つてゞなくては燃えないやうな狹いものではない。蝶は一つの菫にしか止まらないといふわけはない。あなたはこの事を今は特に著るしく、重大に感じて

ゐられる。さもあることです。けれど私たちのやうな老人から見れば、たゞ何處の太郎もそのお花を見つけるといふ一つの普通の事に過ぎません。

唯圓　（いかる）　私はそのやうな考へ方をするのを恥ぢます。

僧一　そんなに興奮しない方がいゝです。私はたゞ年寄りとして若いあなたに、まあ、そのやうなものだといふことを云つたまでのことですから。もうあなたに向けて議論を幾らしてもしかたがありません。私たちは、私たちの考へを行ふよりほかに道がありません。だが、たゞも一度だけ伺ひます。あなたはどうしてもあの遊女を思ひ切る事は出來ませんか。

唯圓　どうしても出來ません。

僧一　では仕方がありません。（僧二、三に）もう話してもだめですからあちらに參りませう。（立ちあがる）

（僧二、三立ち上る、三人の僧行かうとする。）

唯圓　（僧一の衣を握る）　何となされます？

僧一　私はあなたと一つお寺に居ることは出來ません。私が出るか、あなたが出るか、お師匠樣に決めて頂きます。

唯圓　それはあまりです。まあお待ち下さいまし。

僧一　私は申すだけのことは申しました。（衣を拂ふ）　もう外に致し方がございません。

（僧三人退場。）

唯圓　（後を見送り茫然とする。溜息をつく）　私はどうすればいゝのだらう。戀はこのやうに辛いものとは思はなかつた。ほとんど絶え間のない此の心配、そしてたましひは荷を負はされたやうに重たい氣がする。（間）　けれどその奥から湧いて來る深いよろこび！　をのゝくやうな、泣きたいやうな――死にたいやうなうれしさ！　（狂熱的に）かへでさん、かへでさん、かへでさん。（自分の聲に驚いたやうに四邊を見廻はす。考へがちになる）　けれど私は間違つてるのだらうか。見えない力に捕へられてゐるのではあるまいか。（佛壇の方を見る）　あのとぼとぼする蠟燭の火が私の心に何か囁くやうな。あの慈悲深かさうなおん顏、無私があはれに慘めに見えることだらう。私は何もわかりません。今してゐることがいゝのやら、惡いのやら、行く先き〴〵どうなることやら、思へば私はこれまで人を裁くことがどんなに嚴しかつたらう。こんなに弱いみじめな自分とは知らないで。さつきはあんなに強くいつたけれど。私は何だか、何もかも許されない人間のやうな氣がする。お慈悲深いほとけ樣、（手を合はせる）どうぞ私をゆるして下さいませ。

―― 黑幕 ――

第二場

場所

親鸞聖人居間

舞臺　第三幕第二場に同じ。

人物

親鸞

唯圓

僧　三人

時

同じ日の夜

（僧三人、親鸞と語りゐる。）

親鸞　私もうす〳〵氣はついてゐたのだ。けれど默つて見てゐたのだよ。此の樣なことはあまり側でかれこれ騷ぐのはよくないからな。

僧一　私たちもさう思つて今日まで見のがして來ました。そして若いお弟子衆の騷ぐのをおさへてゐました。そのうちには、唯圓殿も自分の所業を反省するのであらうと考へましたので、けれど唯圓殿の身持はだん〳〵惡くなるばかりのやうで御座います。

僧二　日に〳〵わがまゝがつのります。何とか云つては外（そと）出（で）いたします。そして晩くまで歸りませんのでお勤めなども怠りがちで御座います。

僧三　いつも溜息を吐いたり、泣きはらしたやうな眼をして控への間などに出たり、庫裏で考へ込んだりしてゐるものですから、他の弟子衆の眼にもあまるらしいかして、ずゐ分やかましく申してゐます。

僧一　唯圓殿が木屋町あたりのお茶屋の裏手をうろ〳〵してゐたのを見たものがありまして、私のところに告げて來ました。取りみだして、うろたへた、淺ましい姿をしてゐましたさうです。お錢（あし）無しのかくれ遊びなのでお茶屋でもおこつてゐるさうです。私はもう若い弟子たちを鎭めることができなくなりました。

僧二　相手は松の家といふお茶屋のかへでとかいふまだ十七の小さい遊女ださうですがね、昨年の秋かららしいのです。親鸞樣御上洛の際唯圓殿が度々ひそかに逢ひに行つたらしいのです。その時知り合つたものと見えます。何しろ困つたことで御座います。

僧三　今日もお勤めが濟んでから晩く歸りました。私たちが本堂に行つたら、佛壇の前にうつ臥して泣いてゐました。顏は蒼ざめ、眼は釣り上つて、たゞならぬ樣（さま）に見えました。私たちはいつまでも、ほつて置いては、唯圓殿の身のためでないと存じましたので、懇ろに意見致しました。

僧一　寺のため、法のためを說いて、吳々も諭し聞かせました。けれど耳には入らぬやうで御座います。

僧二　自分のしてゐる事をあまり惡いとは思つてゐないやうに見えます。自分でさう申しました。

僧三　何といふ事でせう。その遊女と夫婦約束をしたといふのです。そして私たちの眼の前でその女をほめたてました。

僧一　私は懇ろにものゝ理と非を說き、法のために、その遊女を思ひきるやうに賴みました。けれど飽くまで思ひ切る氣は無いと云ひ切りました。

僧二　お終ひには法と戀とどちらも出來なくては噓だと云ひ出しました。もう我を忘れて狂氣のやうになつてゐました。

僧三　私たちの意見を聽き容れぬのみか、反對に私たちに向つて、說教せうとする勢ひでした。

僧二　何しろ驚きました。あきれて、淺ましくさへなりました。さすが忍耐深い永蓮殿も遂にお立腹遊ばして、唯圓殿と一つお寺にゐることは出來ぬとおつしやいました。

僧一　私は唯圓殿と同じお寺にゐる恥辱に堪へる事は出來ません。私が出るか、唯圓殿が出るか、どちらかです。私はお師匠樣に裁いて戴かうと存じて茲に參りました。

親鸞　（默つて考へてゐる）

僧二　御老體の永蓮殿が長らく住みなれた此の寺をお出遊ばすことはできません。

僧三　今あなたに去られては若いお弟子たちを誰が取締るのでせう。且つは功績厚きあなたさま――

僧一　いゝえ。私は此のまゝではもう寺にゐても若いお弟子たちを取り締る力はありません。

僧二　いゝえ。あなたに出て貰つては困ります。（親鸞に）お師匠樣永蓮殿はあの樣に申されます。此の上はあなたの御裁決を仰ぐ外は御座いません。

（三人の僧親鸞を注視す。）

親鸞　私が惡いのだよ。（間）私にははつきり解つて、そして恐れずに云ふことが出來るのはたゞこれだけだ。外の事は私には是非の判斷がはつきりとつかないのだ。一寸解つてるやうでも、深く考へると解らなくなつてしまふ。唯圓の罪を裁く自信が私にはない。惡いやうにも思ふけれど無理は無いやうにも思はれてな。（考へ〳〵語る）此のやうなことになつたのも、私に深い、かくれた責任がある。私はさつきから、お前たちが唯圓を非難するのを聞きながら、私の罪を責められるやうな氣がした。だいち男と女の關係に就ての考へからが、私に斷乎たる定見がないのだ。昨年の秋だつたがね。唯圓が私に戀の事

をしきりにきいてゐた。戀をしてもいゝかなどと云つてね。私はいゝとも惡いとも云はない、しかし若し戀するなら眞面目に一すぢにやれと云つて置いた。私は唯圓の淋しさうにしてゐるのを見て、私の青年時代の心持から推察して、大ていその心持が解るやうな氣がした。これはとても戀をせずにはをさまるまいと思はれたのでな。そのとき私は戀は罪に絡まつたものだとは云つた。しかし淋しく飢ゑてゐる唯圓の心に何のそれが強く響かう。唯圓は自分のあくがれに油をそゝがれたやうな氣がしたに相違ない。淋しさは益々強くなつて行く、其處へ善鸞が花やかな光景を見せつける。向うから誘ひ寄せる美しい女の情熱があらはれる。それにふら／＼と身を任かせたのだ。一度身を任かせればもう行くところまで行かねば止まれるものではない。「一すぢにやれ」私の言葉を思ひ出したにちがひない。おゝ、私はおだてたやうなものだ。それに（苦しさうに）善鸞の稚ないものゝ運命を畏れない輕率な招き、私は他所事には思はれない。私はどうしても唯圓の罪を分け負はなくてはならない。その私がどうして裁くことが出來よう。

僧一　御尤のやうではありますが、あなたはあまり神經質に御考へ遊ばします。あなたは戀をすなと禁じられなかつたまでのことです。戀をせよ。殊に遊女と隱れ遊びをせよとすゝめられたのではありません。唯圓殿が自分の都合のいゝやうに勝手に解釋したのです。善鸞樣の事に就いて私は何も申し上げることはありません。あなたの關係遊ばしたことではなし。唯圓殿があなたに內證で行つたのですもの。

親鸞　さうばかりも考へられなくてな。

僧二　あなたのやうにおつしやれば何もかも皆自分の責(せめ)になつてしまひます。

親鸞　大抵のことは、よくしらべて見ると自分に責のあるものだよ「三界に一人の罪人でもあれば悉く自分の責である」とおつしやつた聖者もある。聖者とは罪の感じの人並すぐれて深い人のことを云ふのだよ。（間）私が惡い、善鸞はことによくない。ほんとに人を傷けるやうにできてゐる不仕合せな生れつきだ。

僧三　では唯圓殿には罪がないやうに聞えます。

親鸞　唯圓も惡いのだよ。惡いといふ側から云へば皆わるいのだよ。無理はないといふ側から云へば誰も無理はないのだよ。みな惡魔の仕業だよ。どのやうな罪にでも云ひ分けはあるものだ。どのやうな罪も皆業といふ惡魔がさせるのだからな。そちらから云へば私たちの責任では無いのだ。けれど云ひ分けをしてはいけない。自分と他人とをなやますのは皆惡いことだ。唯圓もたしかに惡い。

周圍の平和を亂してゐる。自分の魂の安息を毀してゐる。

僧一　それはたしかに惡う御座いますとも。あれ程恩遇を受けてゐるお師匠樣の御心を傷めまつることだけでも容易ならぬ事である。私たちの心配、若い弟子衆の激昂、お寺の平和と威嚴を損うてゐます。私の考へでは事は唯圓殿の一身から生じてゐると思ひます。從つて唯圓殿の心掛け一つでお寺の平和と秩序とは回復出來る。また彼の人はさうする義務があると思ひます。しかるに唯圓殿は私たちの理を盡しての意見も用ゐず、今の身持をあらためる氣はないと宣言しました。理不盡ではありませんか。あまつさへ私たち長者に向つて非難の口氣を示しました。善鸞樣御上洛の砌にも、私は間違ひがあつてはならないと思つて幾度彼の人を戒めたか知れません。私を輕ろく見てゐます。私はこれまで多くの弟子衆をあづかりましたが、あの人のやうなのは初めてゞす。

親鸞　（默然として考へてゐる）

僧二　いや。たしかに上を侮る傲慢な態度でしたよ。あれでは永蓮殿の御立腹は決して無理はないと思ひます。

僧三　御師匠樣の袖にかくれて自分の罪を掩はうとするのは最もいけないと思ひました。

親鸞　日頃おとなしいたちだがな。

僧二　そのおとなしいのがくせものですよ。小さな惡魔はしば／＼みめよき容をしてゐますからな。おそれながら、お師匠樣は唯圓殿を信じ過ぎていらつしやいませんでせうか。（躊躇しつゝ）寵愛があまると申してゐる御弟子たちも御座います。

親鸞　しかし誰でも過ちといふものはあるものだからな。

僧一　（不服さうに）しかしその過ちは悔い改められなくてはなりません。唯圓殿はその過ちを悔いないのみか、それを重ねて行く、それも意識的にさうする、それを宣言する――まつたく私は堪へられません。私は今日まで永い間お寺のために働いて來ました。幸に當流は今日の繁昌を來しました。だがもう法の威力は衰へかけて來ました。嘆はしいことで御座います。私はもう御弟子衆を鎭める威嚴を失ひました。唯圓殿と一つお寺に棲むことを私は恥と思ひます。唯圓殿がお寺にゐるなら、私はお暇をねがひます。（涙ぐむ）

親鸞　（あはれむやうに僧一を見る）　お前はお寺を出てはいけません。お前がどれほど寺のために働いたか私はよく知つてゐます。お前は私と今日まで辛苦をともにして來てくれた。此の後もいつまでも私を助けておくれ。

僧一　私はいつまでも寺にゐたいのです。

僧二　では唯圓殿はお寺を出るのですね。

僧三　それは無論の事ではありませんか。

親鸞　唯圓も寺を出すことは出來ません。

（三人の僧親鸞を見る。）

親鸞　お前たちのいふのはつまり唯圓は惡人だから寺から出せといふのだらう。私は惡人なら猶更寺から出せないと思ふのだ。私やお前たちの愛と守りのなかにゐてさへ惡い唯圓を、世の中の冷めたい人の間に放つたらどうだらう。だん／＼惡くなるばかりではないか。世の人を傷けないだらうか。惡いといふことは初めから知れてゐるのだよ。何處に惡くない人間がゐる。皆惡いのだよ。外の事ならともかくも惡いからといふのは理由にならない。少くとも此のお寺では。此のお寺には惡人ばかりゐる筈だ。此の寺が他の寺と違ふのはそこではなかつたか。佛樣のお慈悲は罪人としての私たちの上に雨とふるのだ。みなよく知つてゐる筈ぢや。あまり知りすぎて忘れるのぢや。な。永蓮。お前と此の寺を初めて興したときの事を覺えてゐるか。

僧一　よく覺えてゐます。

親鸞　私はあの頃の事が忘れられない。創立者の喜びで私たちの胸はふるへてゐたつけね。お前のお蔭で道俗の喜捨は集つた。此の地を卜したのもお前だつた。

僧一　棟上げの日の嬉しかつたこと。

親鸞　あの時私とお前と佛樣の前に跪いて五つの綱領を定めたね。その第一は何だつた。

僧一　「私たちは惡しき人間である」でございました。

親鸞　その通りだ。そして第二は？

僧一　「他人を裁かぬ」でございました。

親鸞　その綱領で今度のことも決めてくれ。善いとか惡いとかいふことはなか／＼定められるものではない。それは佛樣の知慧で初めて解ることだよ。親鸞は善惡の二字總じてもて存知せぬのぢや。若し唯圓が惡ければ佛樣がお裁きなさるだらう。

僧一　（沈默して首を垂れる）

僧二　でもあまりの事で御座います。

親鸞　裁かずに赦さねばいけないのだ。丁度お前がお佛樣に赦して戴いてゐるやうにな。どのやうな惡を働らきかけられても、それを赦さねばならない。若し鬼が來てお前の子をお前の眼の前でなぶり殺しにしたとしても、その鬼を赦さねばならぬのぢや。その鬼を呪へばお前の罪になる。罪の價は死ぢや。いかなる小さな罪を犯しても魂は地獄に墮ちねばならぬ。人に惡を働らきかけることの惡いのは、その對手をも多くの場合共に裁きに干からせるからぢや。お前は唯圓を呪はなかつたらうか。赦しておやり、赦し

ておやり。

僧三　あの場合私たちが少しも怒らずにゐられたらうか。あの傲慢とあの我儘と、そしてあの侮辱を――

親鸞　無理はないのだよ。だがそれはよくはなかつた。どのやうな場合でも怒るのはいけない。お前たちは確かに少しも怒りを發せずに赦すべきであつたのだ。だが誰にそれが出來よう。ねがはくばその怒りに身を任かすな。火を忽にすればぢきに擴がる。眼をつぶれ、眼をつぶれ。向うの善惡を裁くな。そしてたゞ「なむあみだぶつ」とのみ言へ。

僧二　それはずゐ辛いことで御座います。

親鸞　辛いけれど一番善いことなのだ。また一番慧いことなのだ。何事もなむあみだぶつだよ。（手を合はせて見せる）

僧一　やはり私が間違つてゐました。唯圓殿はどのやうにあらうとも、私としては赦すのが本當でした。いくら苦しくても。知らぬ間に我慢の角が出てゐました。

親鸞　赦してやつておくれ。

僧一　はい。（涙ぐむ）

僧二　私はもう何も申しません。

僧三　私も赦します。

親鸞　それを聞いて私は安心した。皆赦し合つて仲よく暮らすことだよ。人間は皆不幸なのだからな。皆墓場に行くのだからな。あの時赦して置けばよかつたと後悔するやうなことのないやうにして置くことだよ。惡魔が惡いのだよ。人間は皆佛の子だ。惡魔は佛の子に障を見ては呪ひの靈を吹きこむからな。それに打克つには赦しがあるばかりだ。裁き出すと限りがなくなる。祈ることだよ。心の平和が第一ぢや。

僧一　ほんに左樣で御座います。罵つた後の心は淋しいもので御座いますね。私は腹を立てゝゐる時より、赦した今の心持が勝利のやうな氣が致します。

親鸞　さうとも。さうとも。人間の心に若し淨土のおもかげがあるならば、それは正しく赦した時の心の相であらう。

僧二　して唯圓殿をばどのやうに御處置遊ばすつもりですか。

親鸞　唯圓には私がよく申しきかせます。だがね。お前たちの心が解けた今だから云ふのだが、お前たちの考へにも狹いところがあるやうだよ。例へば、かへでとやら申す遊女の運命のことをお前たちは考へてやつたかね。たゞ卑しい女と云つて振り捨てゝしまへばいゝといふ譯のものではない。今度の出來事のうちで一番不幸な人間はその女だらう。法然樣がある時室の宿にお泊り遊ばした

とき、一人の遊女が道をたづねて來たことがある。そのとき法然樣はどんなに懇ろに法を說き聞かせなすつたらう。その遊女は淚をこぼして喜んで歸つた。またお釋迦樣の一人のお弟子が遊女に戀慕されたことがあつた。その時お釋迦樣はその遊女を尼にしてしまはれたといふ話もある。佛緣といふものは不思議なものだ。その遊女のためにも考へてやらねばならない。唯圓と遊女との運命のために祈つてやらねばならない。皆してよく祈つて考へて見ませう。よいかね。私は此處ではお前たちの側ばかり云ふのだよ。唯圓には唯圓でよく諭しきかせます。これから、お前たちは此處を退つて、唯圓を呼んで來てくれないか。

僧一　かしこまりました。直ぐに呼んで參りませう。

僧二　私たちはよく祈つて考へて見なくてはなりません。

僧三　では失禮致します。お心を傷めて相濟みませんでした。

親鸞　いゝえ。よく聞き分けてくれて嬉しく思ひます。

（僧三人退場。）

親鸞　（ため息を吐く）　いとしい弟子たち！　みんなそれぞれの惱みを持つてゐるのだ。誰を見てもあはれな氣がする。（間）私のかつて通つて來た道を、今は唯圓が步んでゐる。おぼつかない足どりで。ため息をつきながら。（間）長く夢を見させてやりたい。だがどうせ醒めずにはおかないのだ。（緣さきに出る。重たさうに咲き滿ちた櫻の花を見る）よう咲いたなあ。（間。遠くの方で靜かに蛙が鳴いてゐる。考へる）ほんに昔のむかしのことだ。（追想に沈む）

唯圓　（登場。親鸞を見ると、跪いて泣く）

親鸞　（側に寄り背をたゝく）　唯圓、泣くな。私は大てい察してゐる。きつと叱りはしない。お前が自分を責めてゐるのを知つてゐるから……

唯圓　私はかくしてゐました。度々お師匠樣に噓を申しました。私はどうしませう。どうでもして下さい。どのやうな罰でも覺悟してゐます。それに相當してゐます。

親鸞　私はお前を裁く氣はない。お前のために、お前の罪のために、とりなしの祈りを佛樣にさゝげてゐる。

唯圓　私を責めて下さい。頰打つて下さい。

親鸞　佛さまは赦して下さるだらう。

唯圓　すみません、すみません。

親鸞　そのすまぬといふこゝろを、ありがたいといふ心に、ふかめてくれ。

唯圓　永蓮樣が、さつき本堂で永蓮樣が（新しく淚をこぼす）私の手をお握り遊ばして、ゆるしてくれとおつしやいました。私はたまらなくなりました。私はあの方をお

怨み申してゐたのですもの。

親鸞　あれは律儀な、いゝ老人ぢや。

唯圓　私は空おそろしいやうな氣がいたします。私のために皆樣の平和がみだれるのですもの。けれど何といふことでせう。私は永蓮樣のお心をやすめることができないのです。永蓮樣は涙ぐんで私をじつと見ていらつしやいました。ひとつの大切なことを私が保證するのを待つために。けれど私は、和解とゆるしを求めるこゝろで、きつくその手を握り返したゞけで、大切なことを云はずにしまひました。……私にはできないのです。

親鸞　それもみなで祈つてきめなくてはならないことだ。まあ心を靜かにするがよい。（間。唯圓をしみ／＼見る）お前はやつれたな。

唯圓　眠られぬ夜がつゞきました。こゝろはいつも重荷を負うてゐるやうでございます。

親鸞　戀の重荷をな。だが、その重荷も佛さまにお委せ申さねばならぬのぢや。その戀の成るとならぬとは、私事ではきまらぬものぢや。

唯圓　この戀のかなはぬことがありませうか。この私のまごころが。いえ／＼、私はそのやうなことは考へられません。あめつちが崩れても二人の戀はかはるまいと、私たちは、いくたび、かたく誓つたことでせう。

親鸞　幾千代かけてかはるまいとな。明日をも知らぬ身をもつて！（熱誠こめて）人間は誓ふことはできないのだよ。（庭を指して）この滿開の櫻の花が、夜はの嵐に散らないことを誰が保證することができよう？　また佛さまのみゆるしなくば、一ひらの花びらも地に落ちることはないのだ。三界の中に、かつ起り、かつ亡びる一切の出來事はみな佛樣の知ろしめし給ふのだ。戀でもその通りぢや。多くの男女の戀のうちで、たゞゆるされた戀のみが成就するのぢや。その他の人々はみな失戀の苦がいさかづきをのむのぢや。

唯圓　（をのゝく）それはあまりにおそろしい。では私の戀はどうなるのでせう？

親鸞　なるかも知らぬ、ならぬかも知れぬ。先きのことは人間にはわからぬのぢや。

唯圓　ならさずに置くものか。いのちにかけても。

親鸞　數知れぬ、戀する人々が昔から、さう誓つた。そして運命に向つてか弱いかひなをふるつた。そして地に仆された。多くのふしあはせな人々がそのやうにして墓場に眠つてゐる。

唯圓　たすけて下さい。

親鸞　私はお前のために祈る。お前の戀のまどかなれかしと。これ以上のことは人間の領分を越えるのだ。お前も

たゞ祈れ。縁あらば二人を結び給へとな。決して誓つてはならない。それは佛の領土を侵すおそろしい間違ひだ。けれど間違ひもまた、報いから免れることは出來ないのだ。

唯圓　若し縁が無かつたら？

親鸞　結ばれることはできない。

唯圓　そのやうなことは考へられません。私は堪へられません。不合理な氣が致します。

親鸞　佛樣の知慧でそれをよしと見られたら合理的なのだよ。つくられたものは、つくり主の計畫のなかに自分の運命を見出さねばならぬのだ。その心をまかすといふのだ。歸依といふのだ。陶器師は土くれをもつて、一の土偶を美しく、一の土偶を醜くつくらないであらうか？

唯圓　人間のねがひと運命とは互ひに見知らぬ人のやうに無關係なのでせうか。いや、それは多くの場合寧ろ暴君と犧牲者とのやうな殘酷な關係なのでせうか。「かくありたし」との希望を、「かく定められてゐる」との運命が蹂躙してしまふのでせうか。どのやうな純な、人間らしい、願ひでも。

親鸞　其處に祈りがある。願ひとさだめとを内面的に繋ぐものは祈りだよ。祈りは運命を呼びさますのだ。運命を創り出すと云つてもいゝ、法藏比丘の超世の祈りは地獄に審判されてゐた人間の運命を、極樂に決定せられた運命にかへたではないか。「佛樣み心ならば二人を結び給へ」との祈りが、佛の耳に入り、心を動かせばお前たちの運命になるのだ。それを祈りがきかれたといふのだ。そこに微妙な祈りの應驗があるのだ。

唯圓　(飛び上る)　私は祈ります。私は一心こめて祈ります。祈りで運命を呼びさまします。

親鸞　祈りの内には深い實踐的の心持ちがある。いや、實行の一ばん深いものが祈禱だよ。戀のために祈るとは、眞實に戀をすることに外ならない。お前は今何よりもお前の祈禱を聖いものにしなくてはならない。云ひかへればお前の戀を佛の御心に適ふやうに淨めなくてはならない。

唯圓　あゝ、私は佛のみ心に適ふ、聖い戀をしたい。お師匠樣どのやうな戀が聖い戀で御座いますか。

親鸞　聖い戀とは佛の子にゆるされた戀のことだ。一切のものに呪ひをおくらない戀のことだ。佛樣を初めとし戀人へも、戀人以外の人にも、また自分自身へも。

唯圓　(一生懸命に傾聽してゐる。時々不安な表情をする)

親鸞　(嚴肅に)　佛樣に呪ひを送らぬのに二つある。一つは誓はぬ事。他の一つは、たとひ戀が成らずとも佛樣を怨みぬ事。

唯圓　つまり佛樣に委せることでございますな。

親鸞　その通りだ。戀人以外の人に呪ひをおくらぬとは、戀人を愛するが故に他人を損ふやうにならないことだ。戀の中には此の我儘がある。これが最も戀を汚すのだ。今度の騷ぎを起したのは此の我儘が種になつたのだ。お前は戀のために私を欺し、先輩や朋輩衆に勤めを缺いた。戀は排外的になりがちなものはないからな。また多くの戀する人は他人を排することによつて、二人の間を密接にせうとするものだ。「彼の樣な人は嫌です」と云ふと、「あなたは好きです」といふことを、ひそかに、けれど一層つよく表現することになるのでな。そこに甘味があるからな。だが、罪なことだよ。考へて御覽、他人を呪ふことで、自分をたのしくせうとするのではないか。

唯圓　私はあの人の事で胸が一ぱいになつて、他の人の事を考へる餘裕がないのです。またそれでなくては、愛してゐるやうな氣がしません。

親鸞　其處に戀の間違ひがあるのだ。愛の働きには無限性がある。愛は百人を愛すれば百分されるやうな量的なものではない。甲を愛してゐるから、乙を愛されないといふのは眞の愛ではない。法藏比丘の水の中、火の中での幾萬劫の御苦勞はあまねく、衆生の一人、一人への愛のためだつたのだ。聖なる戀は他人を愛することによつて深くなるやうなものでなくてはならない。逢つて下さいと戀人が云つて來る。自分も飛んで行きたい程に逢ひたい。けれど今日は朋輩が病氣で臥てゐて自分が看護してやらねばならない時にはどうするか？　朋輩をほつて置いて夢中になつて遇ひに行くのが普通の戀だ。その時その朋輩を看護するために逢ひたさを忍び、また逢はうと云つて來た戀人も、では今日來ないで看護してあげて下さいと云つて、その忍耐と犧牲とによつて、自分等の戀はより偉いものになつたと思ひ、後では淋しさに堪へかねて、泣いて戀人のために祈るやうならば聖なる戀と云つてもいゝ。そのとき逢はなかつたことは、戀を薄いものにしないで、却つて强い、たしかなものにするだらう。それが祝福といふものだ。

唯圓　私のして來たことは聖い戀の反對でした。自分の樂しさのために他人を傷つけてゐました。

親鸞　自分自身に呪ひをおくらないとは、自分の魂の安息を亂さないことだ。これが最も惡いことで、そして最も氣のつかないことなのだ。お前は眠れないね。お前の心はうろ／＼して落ち付かないね。お前は痩せて、色目も靑ざめてゐる。散亂した相ぢや。お前は自分を慘めとは思はないか。（あはれむやうに唯圓を見る）

唯圓　（涙を落す）淺ましいとさへ思ひます。私は宿無し

犬のやうにうろ〳〵してゐます。（自分を嘲るやうに）今日、私の家のお内儀(かみ)に、泥棒猫たとのゝしられました。私の小指ほどの價もないあの鬼婆に！

親鸞　その様な言葉使ひをお恥ぢなさい。お前はまつたく亂れてゐる。自分を尊敬し、自分の魂の品位を保たなくては聖なる戀ではない。我と我が身をかきむしるのは此の世乍らの畜生道だ。柔和忍辱の相が自然に備はるべき佛の子が、まるで狂亂の形ぢや。

唯圓　おゝ。私はどうしませう。私は自分の影を見失ひさうです。（動亂する）

親鸞　待て、唯圓。も一つ一番本質的なのが殘つてゐる。お前はお前の戀人に呪ひをおくつてはならない。

唯圓　私が彼の女を呪ふのですつて。いのちにかけても慕うてゐる戀人を？

親鸞　さうだ。よくお聽き。唯圓。其處に戀と愛との區別がある。その區別が見えるやうになつたのは私の苦しい經驗からだ。戀の渦卷の中心に立つてゐる今のお前には、戀それ自身の實相が見えないのだ。戀の中には呪ひが含まれてゐるのだ。それは戀人の運命を幸福にすることを目的としない、否寧しろ、時として戀人を犧牲にする私の感情が含まれてゐるものだ。その感情は憎みと背を合せてゐる際どいものだ。戀人同志は互ひに呪ひの息をかけ合ひながら、互ひに祝してゐると思つてゐることがあるのだ。戀人を殺すものもあるのだ。無理に死を强ふるものさへある。それを皆愛の名によつてするのだ。愛は相手の運命を興味とする。戀は相手の運命をしあはせにするとは限らない。かへではお前をしあはせにしたか。お前は亂れて苦しんでゐるな。そしてお前はかへでをしあはせにしたか。

唯圓　（ある光景を思ひ浮べる）おゝ。あはれなかへでさん！

親鸞　戀が互ひの運命を傷けないことはまれなのだ。戀が罪になるのはそのためだ。聖なる戀は戀人を隣人として愛せねばならない。慈悲で憐れまねばならない。佛様が衆生を見給ふやうな眼で戀人に對せねばならない。自分のものと思はずに、一人の佛の子として、赤の他人として——

唯圓　（叫ぶ）出來ません。とても私にはできません。

親鸞　さうだ。できないのだ。けれどしなくてはならないのだ！

唯圓　（眩暈を感ずる）あゝ、（額に手をあてる）互に傷け合ひながらも、慕はずにはゐられないとは！

親鸞　それが人間の戀なのだ。

唯圓　（獨白の如く）あゝ、一體どうすればいゝのだ。

親鸞　（しづかに）南無阿彌陀佛だよ。（眼をつむる）やはり祈るほかはないのだよ、おゝ佛さま、私があの女を傷けませんやうに。彼の女を愛するが故にとて、外の人人を損ひませんやうに。わたし自らを亂しませんやうに――

唯圓　（手を合はせる）緣あらば二人を結びたまへ。

親鸞　おゝ。そのやうに祈つてくれ。そして心をつくしてその祈りを踐み行はうと心がけよ。出來るだけ――後は佛さまが助けて下さるだらう。

唯圓　（沈默、段々感動高まり、終にすゝり泣く）

親鸞　お慈悲深い佛樣に何事も委せたてまつれ。何もかも知つていらつしやるのだよ。お前の心の切なさも。悲しさもな。（祈る）おゝ、佛さま、まどかなをはりを、あはれなものゝ戀のために！

――幕――

第六幕

場所　善法院御坊

時　第五幕より十五年後　秋

人物

親鸞（九十歲）
善鸞　慈信房（四十七歲）
唯圓（四十歲）
勝信　かへで（三十一歲）
利根　唯圓の娘（九歲）
須磨　同（七歲）
專信　弟子
顯智　弟子
橘基員　武家
家來　二人
侍醫
輿丁　數人
僧　數人

第一場

（善法院境內の庭。正面及び右側に塀。右側の塀の端に通用門。塀の向うに寺の建物見ゆ。庭には泉水あり。そのほとりに靜かな樹立、その蔭に園亭あり。道は第一の門（見えず）を越えて、境內に入り庭を經て、通用門に入るところ。朝。）

（お利根とお須磨と園亭で手毬をついてゐる。）

お利根（手毬を拾ふ）今度はあたしよ。須磨さま。（毬を
　つく）
二人（歌ふ）
　手毬と手毬とゆきあうて、
　一つの手毬がいふことにや、
　姉さん、姉さん、奉公せう。
　…………　…………
　ちゆん／＼雀が鳴いてゐる。
　奥様奥様おひなれや。
　…………　…………
　お寺の門で日が暮れて、
　西へ向いても宿がなし、
　東へ向いても宿がなし……
お利根（毬を落す）あら。
お須磨　そら毬がそれた。（毬を拾はうとする）
お利根（すばやく毬を拾ひあげてすぐつきかける）
お須磨　あたしよ。姉さま。
お利根　お待ちよ。も一度あたしよ。今のはかんにんよ。
お須磨　いやよ、私がつくのよ。
お利根　お待ちと云つたら。
お須磨　いや。いやですよう。（涙ぐむ）
お利根（毬はずつきかける）茶の木の下に宿があつて…

……
お須磨（毬をとらうとする）あたしだわ。あたしだわ。
お利根（くるりと横を向く）一ぱいあがれや長六さん。
　二はいあがれや長六さん。三杯目にや……
お須磨（泣きだす）姉さま。ひどいよ。
お利根（驚ろく）さあ。あげませう。これ。（毬を持たせ
　ようとする）
お須磨（振り放す）いやだよ。いやだよ。（聲を高くして
　泣く）
勝信（登場。髪を上品な切髪にしてゐる。門を出ると二人
　の爭うて居るのを見て馳せ寄る）どうしたのだえ。須磨
　ちやん。
お須磨（泣聲にて）姉さん。ひどいよ。ひどいよ。
お利根　だからあげようと云つてるのだわ。
お須磨　あたしの番だのに、自分ばかりつくのよ。
お利根　かんにんだつたのよ。
お須磨　うそだよ。うそだよ。
勝信　後生たから今日ばかりは喧嘩などしておくれでな
　い。
お利根　母様、泣いてるの。
お須磨　母さま。母さま。（すがりつく）
勝信　お師匠様が大變お惡いのだよ。それでみんな心配し

てゐるのだよ……ほんとに何もしらないで。（涙ぐむ）空飛ぶ鳥でさへ羽音をひそめて憂鬱いでゐるやうな氣がするのに。

お利根　母さま。もう泣かないで。あたしどうしませう。（お須磨に）須磨さま。ごめんなさい。

お須磨　もうけんかしないわ。母さま。

勝信　（二人の子を抱く）仲よくするのですよ。さ今日はもう內へ入つて、靜かにしてお部屋でお遊び。

お須磨　かあ様は？

勝信　私は少し用があります。後で行くからね。

お利根　さうを。

（二人の少女門より退場。）

勝信　空ゆく雲もかなしさうな氣がする。大きな不幸がやがて地上におとづれる前ぶれのやうに。（門の內を見る）お輿が來るやうだ。お醫者さまのお歸りなのだらう。（門の方に行く）

（輿一丁門より出る。）

唯圓　（輿の後ろに從うて登場。門の出口に立つ）氣をつけてお越し遊ばしませ。

（勝信。門口に立ち腰をかゞめて見送る、輿の中より何か挨拶の聲聞ゆ。輿去る。）

唯圓　（しをれて沈默したまゝ立つてゐる）

勝信　お醫者は何とおつしやいますか。

唯圓　（絕望したやうに）あゝ。人類はその最大なものを失ふのか。

勝信　では、やはりもつまいと……

唯圓　（ぢつとしてゐられぬやうに庭をあるく）橘樣の御殿醫のお診察も侍醫のお診察と同じことなのだ。壽命のお盡きとあきらめられよとのお言葉なのだ。

勝信　何とかしてとりかへすてだてはないのでせうか。

唯圓　それどころではない。今日か明日かも知れないのださうだ。

勝信　え。そんなことはありますまい。（自分の考へを信じようとするやうに努力しつゝ）お話などお機嫌よく遊ばすのですもの。

唯圓　それが前ぶれなのださうだ。消えかゝる燈火が一寸明るくなるやうにな。もう御脈搏が折々とぎれるのださうだ。いつ落ち入り遊ばすかも知れない。無病で高齡の方の御最期は皆そのやうな風のものだから、たのみにはならないとおつしやつた。もうあきらめて、ひたすら、思ひ殘しのない御臨終を……

勝信　おゝ、私に代はられるものなら！

唯圓　私もいく度さう思つたらう。だがそれも甲斐ないことだ。お師匠樣はもうとくに御覺悟遊ばしていらつしや

る。もう佛さまに召されるのだとおつしやつてな。

勝信　ほんに此の頃はお話もことに細々として來たやうで御座います。そして御臨終の事が氣になつていらつしやるやうでございますよ。昨日も私にあの上品往生の發願文を讀んでくれとおつしやいましてね。

唯圓　此の上はせめてやすらかな御臨終をいのりたてまつるほかはあるまい。（考へる）

勝信　唯圓樣。私はいつも氣になつてゐるのでございますがね。

唯圓　善鸞樣のことだらう。

勝信　えゝ。（涙ぐむ）御臨終には必ずお目にお掛り遊ばさなくては。呪ひを解かずに此の世を去られては。

唯圓　その事を私も心配してゐるのだよ。御不例の初めの頃、今度はどうも御恢復の程も覺束なく思はれたので、弟子衆が相談してね。知應殿が善鸞樣をお召し遊ばすやうにお勸め申したのだがね。彼の子憎しとて隔てゐるのでもないものを。由ない事を云ひ出して、私を苦しめてくれなとおつしやつて、御不興氣に見受けたので、それからは誰もそのことを云ひ出すものがないのだよ。

勝信　でも今度ばかりは是非御面會遊ばさなくては、もう二度と……私はたまりません。後で善鸞樣がどのやうにお嘆き遊ばすでせう。

唯圓　急ぎ御上洛遊ばすやう稻田へ使を立てゝ置いた。もう重なお弟子達には皆通知してあるのだ。

勝信　早く申し上げなくては。若しかのことがあつたらとり返しがつきません。あなたの外に申しあげる方はありますまい。

唯圓　今朝の內に私が誠心こめて願つて見よう。お師匠樣もお心ではお氣にかゝり遊ばしていらつしやるのにちがひないのだから。

勝信　左樣でございますとも。私も一緒にお願ひ申しませう。（向うを見る）おやお輿が參りました。

唯圓　お見舞の方だらう。お出迎へ申さなくては。

（唯圓、勝信門口に立ち迎へる。）

家來二人　（輿に從うて登場。輿止まる）主人橘基員。御見舞ひの爲參上仕りました。

唯圓　よくこそ御越し下されました。昨日は御殿醫樣をわざわざ御遣はし下されまして、まことに有り難う御座いました。どうぞお通り下さいませ。御案內申上げます。

（唯圓勝信先に立ちて退場。侍二人輿に附添ひて門に入る。）

—— 幕 ——

第二場

（親鸞聖人病室。正面に佛壇。寢床の後ろには、古雅な山水の繪の描かれた屛風が立て廻してある。枕下に脇息と小さな机。机の上に經書、繪本など二三册置いてある。藥壺、湯呑み等を載せた盆。その上に白絹の布が掩うてある。すべて品よき裝飾。襖の模様もしつとりとした花や鳥など。廻り緣にて隣りの宿直の部屋に通ず。庭には秋草。短册、色紙等のはりまぜの二枚屛風の蔭に、藥を煎じる土瓶をかけた火鉢。金盥、水瓶等あり。）

親鸞　（鶴の如く瘠せてゐる。白い、厚い寢卷を着てゐる。やゝ身を起して脇息に凭れる）そのさきをもつと讀んでおくれ。

勝信　（手紙を持ちて）これを讀むと法然聖人様がどのやうに、母様思ひであつたかゞわかりますのね。（手紙を讀みつゞける）けさまではなやかに、いろかもふかくみだれ髮の、まゆずみにほひ、たぐひなきその人も、ゆふべには野べのけむりとたちまちに、よりそふ人も遠ざかり、ひとりかばねをさらす。たゞ〳〵世のなかは、あさがほのはかなきわざにたわぶれて、けふやあすやとうちくれて、何か菩提のたねならむ。たゞ一すぢに後の世のいとなみあるべし。此の世はゆめのうち、とてもかくてもすぎゆけば、うきもつらきもむなしく、たゞまぼろしの身のうへに、こぞやことし、きのふやけふも、うつりかはれる世のなかは、たゞ一すゐのゆめのうちには、よろこびさかえもあり、かなしび、あめ山なすこともあれど、さめぬればあとかたちもなきもの。あら。なにともなのうきよや。あら、いたづらごとどもや。あさましや……

親鸞　わしのやうに年が寄るとね、そのやうな氣持がしみじみしてくるものだよ。九十年のながい間にわしのして來たさま〴〵のことがほんに夢のやうな氣がする。花鳥風月の遊びも、雪の野路の巡禮も、戀のなやみや嬉しさも、みんな遠くにうたかたのやうに消えてしまつた。ほんとに「うきもつらきもむなしく」といふ氣がするね。何もかもすぎてゆく。（獨白の如く）さうだ、すぎてしまつたのだ。わしの人生は。淋しい墓場がわしを待つてゐる。（勝信何か云ひかけて止める）さきを讀んでおくれ。

勝信　（讀みつゞける）よもかりのよ、身もかりの身、すこしのあひだにむやくの事を思ひ、つみをつくり、りんゑ、まうしふの世に、二たびかへり給ふまじく候。さきに申候ごとく、さま〴〵に品こそかはれ、をしい、ほし

い、いとほしい、かなしいと思ふが、みなわがこゝろに候。こゝろといふものはさら〳〵たいなきものにて候、それを思ひつゞくるほどに、しふしんとなりて、りんゑする事にて候ほどに、ふつと心はなきものよ。心が鬼ともなりて身をせむるなれば心こそあだのかたきよ。凡夫なればはらもたち、いつくしきものが、をしい、ほしいとおもふ一念がおこるとも、二念をつがず、水にゑをかくごとく、あらあさましやと、はらりと思ひ切り、なに心なくむねん、むさうにしておはし候はゞ、それこそまことの御心にて候へ……

親鸞　そのあたりは清い、涼しい法然樣のおこゝろがよくあらはれてゐる。（昔をおもふやうに）それは淸らかなうつくしいお氣質だつたからね。わたしなどとちがつて。その手紙は老體のお母上が御病氣をなすつて、いろ〳〵と悲しいお便りをなすつた御返事なのだよ。

勝信　それでなぐさめたり、はげましたり遊ばすのですね。ほんとに女のやうに、こま〳〵としたお優しいお手紙ですのね。（よみつゞける）まことのこゝろざしある人は、人のあしきことあらば、わが身のうへに受けてかなしみ、人のよきことあらば、わが身に受けてよろこび、なに事もわれ人へだてなく、あしかれとおもはず、人をそしらず、ねたまず、にくげ云はず、たよりなき人を、言葉のひとつもやはらかに、おとなしやかにひきたてゝ、少しのものもあひ〳〵にほどこして、人をたすくるこゝろこそ、大慈大悲のきようやうにて候へ。（涙ぐむ）ほんとに涙がこぼれるやうな氣がします。何てお優しいおこゝろでございませう。（つゞけてよむ）いかなるちしき上人、そのかみ、しやか佛ほどのによらいも、五體に身を受け給へば、やまひのくるしみ、しやうらうびやうとして、なくて叶はぬ物にて候。りんじうなどのことなどもことごとくしやべつはなきものにて候。つね〳〵御こゝろがけさへふかく候はゞ、しなばしぬるまで、いきは生きるまでと打ちまかせてあるがよろしく候。せんねんまんねんいきても、一たびは老いたるも、若きも、しなでかなはぬものにて候。會者定離は人間の習ひなれば、たれになごりか惜しき……（親鸞を見る）わたしもう止しませうかしら。何だか切なくなつて……

親鸞　（緊張してゐる）さきをよんでくれ。終りのところに臨終の心得がかいてあつたはずぢや。

勝信　（よみつゞける）またこの世にいますこしすみたき、あらかなしや、いま死ぬかよなどとは、かまひて〳〵おぼしめすな。（聲を慄はす）死ぬることちかづくならば、かならず錯亂しては、だんまつの苦しみとて、五體はなれ〳〵になり候へば、いかほど苦がなうてはかなは

ぬものなり。何とくるしく候とも、そのくるしびに打ちまかせて、しなばしぬるまでと、なに心もなくいう〳〵とおぼしめし候ふべし。くれ〴〵この御心もち、忘れ給ふまじく候也。源空。母上樣。（手紙を卷き返しつゝ）終りの方を讀むのはあまりに恐しう御座います。

親鸞　その母上へのお手紙は、そのまゝ私へおほせきけられるお師匠樣のはげましのおことばのやうな氣がする。もう時はせまつて來た。わしが永いあひだ待つてゐた、けれどまたおそれてゐた時が。わしははげましの必要を感じる。わしはおそろしい不安と、それに打ち克たうとする心とのたゝかひを感じてゐる。

勝信　（不安をかくす）そのやうなことがあつていゝものですか。このやうに御元氣なのですもの。皆が御恢復をお祈り申してゐるのですもの……もうお藥ができたでせう。お召しあがりなされませ。（宿直の部屋に立たうとする）

親鸞　お藥はもうよろしい。此處にゐてくれ。わしはもうかくごしてゐるのぢや。わしはお前がそのやうなことを云つて、なぐさめてくれねばならぬほど弱さうに見えるかな。

勝信　…………

親鸞　もうそのやうなことは云うてくれな。私がこの不安に――さけがたい恐怖に打ち克つことが出來るやうに勵ましてくれ。私は勇氣をあつめなくてはならない。そして美しい、取りみださぬ臨終をするために心をとゝのへなくてはならない。

勝信　（泣く）

親鸞　（しづかに）唯圓を呼んで來てくれ。

勝信　はい。（退場する）

親鸞　（しばらく默然として眼を閉ぢてゐる。やがて眼をひらき、何ものかの影に脅かさるゝ如くあたりを見まはす）どこからともなく、わしの魂を掩うてくる、この寒い陰影は何ものであらう。薄くなりゆく日輪の光、淋しく誘ふやうな風のこゑ、そしてゆうべのあのゆめ見……近づいて來たやうだ。（眼をつぶる）誰も避けることのできない運命なのだ。何十年のながい間私はその日を待つてゐなかつたらうか。永い、絶え間の無い罪となやみの生涯の終りに來るあの永遠の靜かな安息を。むなしく待つことの多い此の世の希望のあざむきのなかで、これのみはたしかな、必ず來るものとして、わたしは待つてゐた。それを考へるになれて親しさができてゐた。わしはしば〳〵思はなかつたらうか。「わしのこの苦しみと忍耐とは限りなきものではない。必ず終る日が來ると」と。そしてさう思ふことは、私の唯一のなぐさめではなかつ

たらうか？　遂にその日が來た。それだのにこの不安はどうしたものだらう。この打ち克ちがたき不安は！　死は私にとつて損失ではない。私は永い間墓場の向うの完全と調和とをいのちとして生きて來たのだ。私はそれを信じてゐるのだ。それだのに私の生命のなかにはまだ死を欲せぬ何ものかゞ殘つてゐる。運命に反抗するこゝろが。おゝ私はまだ生きてゐたいのか？　此の病みほうけたわしが。九十歳になる老人が――此の世に何の希望が殘つてゐる。何の享樂が？　煩惱の力の執拗なことはどうだらう。今更ながら恐ろしい。私は一生の間運命を素直に受取つて、それを愛して來た。それに事へて來た。運命に乖く心と戰つて來た。さうだ。わしは墓場に行くまで此のたゝかひをつゞけねばならない。もう、ながいことではない。もうぢきだ。休戰の喇叭が鳴るのは。その時私は審判の前に立つのだ。一生を惡と戰つた、勇しい戰士として。靈の軍勢の虛空を遍滿するそのなかに。そして冠が私の頭に載せられる。佛樣の前に跪いて私がそれを承ける。（だん／＼顏が輝いて來る）その日から私はあの尊い聖衆のなかの一人に加へられるのだ。何といふ平和であらう。何といふ光榮であらう。朝夕、佛樣をほめる歌を唱つて暮らすのだ。その時はもう私の心に罪の影さへおとづれない。そして、（涙をこぼす）此の世に苦しんでゐる無類の不仕合せな人たちを攝取することができるのだ！　間）おゝ、不安よ、去れ。（默禱する）

（唯圓と勝信と登場。）

唯圓　（手をつく、重々しく）御氣分はいかゞで御座いますか。

親鸞　もう近づいたやうだ。わしは兆しを感じる。

唯圓　（何かいはうとする）

親鸞　（さへぎる）いや。もう避くべからざるものを避けようとすまい。運命を受取らう。お互ひに大切なことのみ云はう。

唯圓　…………

親鸞　わしはもう覺悟してゐる。

唯圓　（苦しく緊張する）此の上は安らかな御臨終を……

勝信　（泣く）

（親鸞。唯圓沈默。勝信の泣き聲のみ聞える。やがてその聲も止み、一座森とする。）

親鸞　佛樣がお召しになるのだよ。此の世の御用がつきたのだよ。此の年寄つて病み耄けてゐるわしを、此の上此の苦しい世のなかにながらへさせるのを不便と思し召して下さるのであらう。わしももうずゐ分永く生きたからな。九十年――といへば人間に許される稀な高齡だ。も

う此の世に暇をつげてもいゝ時だ。（考へる）

唯圓　お師匠樣の百年の御壽命をいのりたてまつるのでございますけれど……

親鸞　それが正直な人間の情だよ。恥しながら此のわしも、この期に及んでもまだ死にともないこゝろが殘つてゐる、それが迷ひとはよく知つてゐるのだがな。淺ましいことぢや。わしは一生の間煩惱の林に迷惑し、愛欲の海に浮沈しながら今日まで來た。絕えず佛樣の御名を呼びながら、業の催ほしと戰つて來た。そして墓場にゆくまでそのたゝかひをつゞけねばならないのだ。唯圓、此の大切な時に私のために祈つてくれ。わしはそれを必要とする。わしは心をたしかに保たなくてはならない。一生に一度の一大事を出來るだけ、恥を少なくして過すためにな。わしはそのために祈つてゐる。空澄み渡る月のやうに淸らかな心で死にたい。

唯圓　佛樣にお任かせ遊ばしませ。私はあなたのために心をこめて祈つてゐます。（力を入れて）めでたく往生の本懷をお遂げ遊ばすやう。

親鸞　死はわしの永い間のねがひだつたのだ。たゞ一つの希望だつたのだ。墓場の向うに私を待つ祝福をわしはどんなに夢みたことだらう。いまその夢が實となるべき時が來た。めでたい時が。（間）昨夜、私は祈りながら眠りに落ちた。眠りはひとつのありがたい夢で祝された。此の世ならぬ、莊嚴と美とに輝く淨土のおもかげがわしの前に展かれた。わしの魂は不思議な幸福で充たされた。地上の限りを越えたその幸福をわしは何と云つて表はしてい丶か解らない。あの阿彌陀經のなかに「諸上善人俱會一處」といふところがあるね。わしは多くの聖衆の群れにかこまれた。みな美しい冠を被つていらしたよ。わしはもつたいなくて頭が下つた。わしも今日からその列の中に加へられるのだと聞いたとき、わしはうれしさに淚がこぼれた。と見るとわしの頭にも同じやうな美しい冠が載せてあるのだ。その時虛空はるかに微妙なる音樂がきこえ初めた。聖衆の群れはそれに合せて佛樣を讚める歌をうたはれた。すると天から花が降つて來て、四邊は淨い香りに滿ちた。わしは金砂を蒔いた地の上に散り布く花を見入りつゝこれこそあの「曼陀羅華」といふのであらうと思つた。その時私は眼がさめたのだ。

唯圓　何といふ尊い夢でございませう。

勝信　美しく輝く冠ほど聖人樣にふさはしいものはございますまい。

親鸞　さめてから後も私の心はその幸福の餘波で躍つてゐた。けれどそのときからわしに一つの兆しがあきらかに感じられはじめた。わしが死ぬといふことが……蟲の知

らせだよ……（顔色が悪くなる）

勝信　お臥つていらつしやいませ。（親鸞を助けて寢床に臥させる）お苦しう御座いますか。

親鸞　うむ水を飲ませておくれ。

勝信　（湯呑みに水を注いで親鸞に飲ませる）

親鸞　肉體的苦痛といふものは大分人間を不安にするものだ。地上の一番大きな直接な害惡だ。多くの人間は此の害惡を避けるためには、魂の安否を忘れてしまふ程だ。人間に與へられた刑罰だ。わしも斷末魔の苦しみが氣にかゝる。わしはその苦しみに打ち克たねばならない。この最後の重荷を耐へ忍ばねばならない。（額に玉のやうに汗をかく）何もかも直きにすむのだ。その後には湖水のやうな安息が、わしの魂を待つてゐるのだ。

唯圓　そしてひかり輝く光榮が？

親鸞　死はすべてのものを淨めてくれる。わしが此世にゐる間に結んだ恨みも、つくつた過ちもみんな、ひとつのかなしい、とむらひの心地で和らげられてゆるされるであらう。墓場に生ひしげる草は汚ない記憶を埋めてしまふであらう。わしのをかした惡は忘れられて、人は皆わしを善人であつたと云ふであらう。わしもすべての呪ひを解いて此の世を去りたい。みなわしに親切なよい人であつたとおもひ、そのしあはせを祈りつゝ、左樣ならを告げたい。

唯圓　（勝信と面を見合はす）お師匠樣、あなたは善鸞樣をおゆるし遊ばしますか。

親鸞　わしは赦してゐます。

唯圓　何卒善鸞樣をお召し下さいませ。

親鸞　…………

勝信　（泣く）あなたの口づから赦すと云つてあげて下さい。

唯圓　私の一生の願ひでございます。お弟子衆も皆それを願つてゐないものはありません。御臨終には是非とも御面會遊ばさなくては、後で善鸞樣がどのやうにお嘆き遊ばすでせう。私は十五年前に此の事を一度申上げてから、今日まで默つて來ました。その間一日も此の事を思はぬ日とてはございませんでした。絶えず祈つてゐました。今度ばかりは私の願ひをかなへて下さい。後に憾いの殘らぬやう、すべてと和らいで下さいませ。それはあなたの只今おつしやつたお言葉でございます。佛樣のお心に適ふことでございます。末期の水は必ず善鸞樣がお汲み遊ばさなくてはなりません。此の期に及んで私はもう何も申上げることはございません。（涙をこぼす）たゞ安らかな御最期を。すべてと和らいだ平和な御臨終を……

親鸞　（涙ぐむ）みなの勸めに從ひませう。

唯圓　お嬉しう存じます。（手をつきうつむく、疊の上に涙が落ちる）先日お便り申上げて置きました。今日あたり御到着遊ばす筈でございます。
親鸞　善鸞は此の頃はどうして暮らしてゐますか。
唯圓　稻田で息災で御暮らし遊ばされます。
親鸞　佛樣を信じてゐますか？
唯圓　はい。（不安をかくす）大層お靜かにお暮らし遊ばしていらつしやるやうでございます。
勝信　善鸞樣がどんなに、お喜び遊ばすでせう……けれどあゝ、それがすぐ永いお別れになるとは！（泣く）
親鸞　もう泣いてくれるな。（間）たゞ祈つてくれ。わしは大分心が落ちついて來た。魂を平かにもちたい。靜かにしておくれ。平和のなかに永い眠りに就きたいから。
（勝信涙を抑へる。しづかになる）一生を佛樣にさゝげてはたらいたものゝ良心の安けさがわしを訪づれて來るやうだ。彼の世へのそこはかとなき思慕のこゝちにたましひは涙ぐみつゝ、舉げられてゆくやうな氣がする。しめやかな輝き、濡れたこゝろもちが慕みのやうにわしをつつむ……唯圓。もつと側近く寄つておくれ。お前の親しい忠實な顏がもつとよく見えるやうに。
唯圓（膝をすゝめる）あなたのたましひに祝福を。
親鸞　おゝ、お前のたましひに祝福を。お前は一生の間よく私に事へてくれた……私の枕元の珠數を取つてくれ。
（珠數を受取り手に持って）此の桐の念珠はわしの形見にお前にあげる。これはわしが法然樣からいたゞいたのだよ。（唯圓珠數を受取る）わしが常々放さず持つてゐたのだ。貰きとめたこの珠々には三世の諸佛の御守りがこもつてゐる。わしが亡くなつた後この珠數を見てわしを思ひ出しておくれ。わしは淨土でお前のために祈つてゐるのだから。（段々聲の調子がちがつてくる）寺の後事はお前に托したぞ。佛樣に祈りつゝ、凡ての事を皆と和らぎ、はかつて定めてくれ。此の世には無數の不幸な衆生がゐる。其の人たちを愛してくれ。佛樣のみ榮えがあらはれるやうに。（息をつく）
唯圓　後の事はお案じなされませんやうに。及ばずながら私が皆樣と力を併はせて、法の隆盛を圖ります。佛さまが助けて下さいませう。あなたの丹精してお蒔きなされた法の種子は、すでに到るところに善き芽生えを見せてゐます。佛樣のみ名はあなたの死によつて益々讃められるのでございませう。
親鸞　佛さまのみ名をほめたてまつれ……（次第に夢幻的になる）わしの心は次第に靜かになつてゆく。遠い、なつかしい氣がする……佛さまが悲憫なさるのだ……外は涼しい風が吹いてゐるのだね。

唯圓　（そつとする）　はい。いゝえ、あか〳〵と入陽がさしてゐます。

親鸞　近づいて來たやうだ。兆しが……座敷は綺麗に掃除してあるね。

唯圓　塵一つ落ちては居りませぬ。

親鸞　わしのからだは清潔だね。

勝信　昨日、御沐浴遊ばされました。

親鸞　弟子達を呼んでおくれ。皆呼んでおくれ。わしが暇乞ひするために。最後の祝福をあたへてやるために。

勝信　かしこまりました。（立ち上る）

唯圓　深き動搖を制する。小聲で勝信に）　お醫者樣を。

（勝信いそぎ退場。）

唯圓　（親鸞の手を握る）　お師匠樣。お氣をたしかにお持ち遊ばしませ。

親鸞　うなづく）　お燈明を。佛壇にお燈明を。南無阿彌陀佛。

――幕――

第三場

（舞臺、第一場に同じ。夜。淡白い空に黒い輪廓を劃してゐる寺の屋根。その上方に虹のやうな輪を被つた黄色な月がかゝつてゐる。通用門の兩側には提灯を持つた僧二人立ちゐる。舞臺月光にてほの暗し。）

僧一　あの輪のかゝつたお月樣を御覽なされませ。

僧二　不思議な、色をしてゐますね。

僧一　黄色くて、そして光芒が少しもありませんね。

僧二　あゝ、お師匠樣も愈々御かくれ遊ばすのですね。聖人が亡くなられる時には大に凶徴が顯はれると錄してあります。

僧一　昨日あたり烏が本堂の屋根の上で世にも悲しさうな聲をして鳴いてゐましたよ。

僧二　禽獸草木に到るまで聖者の御かくれ遊ばすのを嘆き惜むのでございますね。

僧一　もう重なお弟子衆はみな御出でなされましたね。

僧二　まだお見えにならないのは二、三人丈でございます。

僧一　重なお弟子衆は皆聖人樣のお枕べに集つてゐられます。

僧二　夕方から急にお模樣がお變り遊ばしましたやうでございます。御臨終も程近くと思はれます……あゝお輿が來ました。

（輿一丁登場。急ぎ門の方に來る。）

輿丁　遠江の專信房樣の御到着でございます。

僧一　皆樣の御待兼ねでございます。すぐに奧院へ御越しなされませ。

（輿、門に入り退場。）
勝信　（不安の面持にて急ぎ門より登場）　慈信房樣はまだ御到着遊ばしませぬか。
僧一　いまだ御見えなさいませぬ。御輿の御模樣は？
勝信　（第一の門の方を注意しつゝ）　もう御臨終でございます。（空を仰ぐ）おゝ、變な月の色。
僧二　もう引き潮時になります……あ、輿が來ました。
（輿一丁登場。急ぎ門の方に來る。勝信注意を集める。）
輿丁　高田の顯智房樣の御到着でございます。
僧一　急ぎ奥院へ。もはや御臨終でございます。
（輿、門に入り、退場。）
勝信　善鸞樣の遲いこと。（庭をうろ〳〵する）
僧一　もはやお越し遊ばさなくては御間に合ひませぬが。
僧二　（不安なる沈默）　灯が。提燈でございます……輿が來ました。
（勝信注意を緊張する。輿一丁登場。急ぎ門の方に來る。）
勝　（輿の方に馳せ寄る）　善鸞樣では御座いませぬか。
輿丁　はい。稻田の慈信房樣で。
善鸞　（輿より飛び下りる）
勝信　善鸞樣！
善鸞　おゝ、勝信殿。父は、父は？
勝信　もはや御臨終で御座いますぞ。
善鸞　おゝ。（よろめく）
勝信　御勘氣は釋けました。あなたをお待兼でございます。
善鸞　父は遇つてやると申しましたか。
勝信　赦すと云つて死にたいとおつしやいます。
善鸞　（輿へ駈け込まうとする）
勝信　お待ちなされませ。たゞ一つ。あなたは佛樣をお信じなされますか。
善鸞　わたしは何もわかりません。
勝信　お父上は大層それを氣にしてゐられます。きつとあなたにそれをお訊ねなされます。
善鸞　わたしは何も信じられないのです。
勝信　信じるといつて下さい。信じると。お父上のお心が安まるために。
善鸞　でもわたしは……
勝信　此の世を去る人の心に平和を與へてあげて下さい。
善鸞　（不安さうに）　えゝ。
僧三　（いそぎ門より登場）　善鸞樣はまだお見えなさいませぬか。
善鸞　只今到着仕りました。
僧三　一刻も早く奥院へ。皆樣お待兼ねでございます。もはや御最期も迫りました。

（退場。）

（善鸞、勝信門に馳せ入る。輿それにつゞく。僧二人も退場。舞臺一瞬間空虚。黒き鳥四五羽庭の樹立より飛び出で、月の前を掠めて怪しげなる聲にて啼きつゝ、屋根の上を飛ぶ。舞臺廻る。）

第四場

（舞臺、第二場に同じ。夜。佛壇にあか／＼と燈明が點つてゐる。行燈の灯影に弟子衆。歸依の武家。商人等つゝしみ竝びゐる。親鸞は寢床の側に醫者侍して脈をとりゐる。唯圓は枕下に近く侍して看護しつゝ居り。不安の豫感一座を支配してゐる。）

親鸞（眼をつぶり、小さき聲にて語る。四邊靜かなるためその聲は明らかに聽き取らる。言葉は時々夢幻的となり、また獨白の如くになる）だから皆よくおぼえてお置き、臨終の美しいといふことも救ひの證しではないのだよ。わしのやうに、かうして柔かな寢床の上で、懇ろな看護を受けて、愛する弟子達にかこまれて、安らかに死ぬことができるのは、惠まれてゐるのだよ。わしは身にあまる、もつたいない氣がする。わしはそれに相當してゐるとは思はれないのだ。だが世にはさま／＼な死に方をする人があることを忘れてはならないよ。刀で斬られて死ぬ人もある。火の難、水の難で死ぬ人もある。飢ゑと凍えで路傍にゆき仆れになるものもある。また思ひも設けぬ偶然の出來事で、途方もない、殆ど信じられぬやうな死に方をするものもある。やがて愛らしい花嫁となる處女が、祝言の前晩に頓死するのもある。母親の永い嘆きとなるのも知らずに。麻痺した心の臓のところに、縫ひかけた晴れ着をしつかり抱きしめたりしてな。或はつい先刻まで快活に冗談など云ひながら働らいてゐた大工が、踏みはづして屋根から落ちて死ぬのもある。その突然で偶然なことは涙をこぼす暇さへも與へないやうに殘酷なのがある。皮肉な感じさへ起させるのがある。あの觀經にある下品往生といふのは、手は虚空を掴り、毛穴からは白い汗が流れて目もあてられぬ苦悶の臨終ださうな。恐ろしいことぢや。業によつては何人がそのやうな死に方をするかもはかられぬのぢや。だがそのやうな淺ましい臨終はしても、佛様を信じてゐるならば、助けていたゞく事はたしかなのぢや。救ひは機にかゝはらず確立してゐるのぢや。信心には一切の證はないのぢや。これがわしが皆にする最後の説教ぢや。わしがこれを云ふのは人間の心ほど慢心を去つて素直になり難いものはないことをよく知つてゐるからぢや。素直な心になつてくれ。ものごとを信ずる明るいこゝろになつてくれ。信じて欺まされるのは、

まことのものを疑ふよりどれ程優つてゐるだらう。何故人間は疑ひ深いのであらう。長い間互に欺したり、欺されたりし過ぎたからだ。若し此の世が淨土で、未だ一度びも僞りといふものが存在したことがないならば、誰も疑ふといふ事は無いであらう。信じてゐる心には祝福がある。疑うてゐる心には呪詛がある。若し魂の影法師が映つるものならば、鬼の姿でも映つるのであらう、信じてくれ、佛樣の愛を、そしての善の勝利を。（間、聲が少しく高くなる）わしは不思議な地位に立つてゐる。わしの後ろには九十年の生涯の光景が横はつてゐる。そして前には彼の世の豫感が充ちてゐる。わしのたましひは、最も高く擧げられ、そして驚くべき擴がりに達してゐる。魂の壯觀！（夢幻的になる）靈はいま高く／＼天翔つて、人間界の限りを越えようとしてゐる。墓場の彼方と此方との二つの世界の對立と、その必然の連絡とが、わしの心の眼に見えようとしてゐる、魂をつないでゐた見えぬ鎖が今斷れようとしてゐる。打ち克ちがたくあきらめられてゐた地上の法則が滅亡して、魂は今新しき天の法則の支配に入らうとしてゐる。試みられ煉められたる魂は新生のよろこびに躍つてゐる。今こそすべての矛盾が一つの深い調和に歸しようとする。そしてこの世での樣々の苦しみが一つとして無駄でなかつたことが解らうとしてゐる。あゝ。それがみな佛樣の愛と義の計畫であつたことが解らうとしてゐる。（しみ／＼した獨白の如くになる）なにもかもよかつたのだな。わしのつくつたあやまちもよかつたのだな。わしに加へられた傷もよかつたのだな。往きずりにふと挨拶を交はした旅の人も、何心なく摘みとつた路のべの草花もみなわしとはなれない緣があつたのだな。皆わしの運命を成し遂げるために役立つたのだな。

專信　（登場。弟子衆に一禮する）只今到着致しました。

唯圓　專信殿、一刻も早くお師匠樣の御側に。

專信　（親鸞の寢床の側に寄る）御師匠樣、專信でございます。

親鸞　（眼をひらく）專信か。よく來てくれた。（眼自ら閉づ）わしはいよ／＼召されるのぢや。

專信　安らかに往生の本懷を遂げられますやう。

親鸞　先きに往つて待つてゐる。

專信　お師匠樣の御恩はいつまでも忘れませぬ。師弟の緣ほど深い、純いものはありますまい。

親鸞　彼の世でふたゝび逢ひませう。もう二度と別れることのない處でな。

專信　わたしも後から參ります。ぢきに參ります。（涙ぐむ）本當にぢきでございます。

（弟子　涙ぐむ。顯智登場。一同に會釋する。唯圓「すくにお側へ」と目くばせする。）

顯智　（親鸞の枕元に寄る）顯智でございます。お解りでございますか。

親鸞　（眼をひらく）わかります。（眼を閉ぢる）何ごとも淨土でな。

顯智　はい。

親鸞　お前の國の御法儀は。

顯智　ます／＼隆盛でございます。

親鸞　專空は。

顯智　此の春奥州へ發足致しました。（涙ぐむ）所詮御臨終の御間には合ひますまい。

親鸞　それは逢ふよりも嬉しく思ひます。（間）みんな仲よく暮らしてくれ。わしの亡くなつた後は皆よく力をあはせて法のために働らいてくれ。決して爭ふな。どのやうな苦しい、不合理な氣がすることがあつても、佛と人とに呪ひをおくるな。凡そ祝せよ。悲しみを耐へ忍べよ。忍耐は德を己れのものとするのぢや。隣人を愛せよ。旅人を懇ろにせよ。佛の名によつて皆繫かり合つてくれ。（段々聲が細く、とぎれ勝ちになる）自分らがしてほしいやうに、人にもしてやらぬのは間違ひぢや。（唯圓、筆を水に注けて脣をうるほす。弟子たちそれに倣ふ）裁く心と誓ふ心は惡魔から出るのぢや……人の僕になれ。人の足を洗つてやれ……履の紐をむすんでやれ。（間）ほむべき佛さま。（段々夢幻的になる）わしのした惡がみなつぐなはれる。みな赦される。罪が美しくなる、罪で美しくなる。奇蹟！　七菩提分、八聖道分、涼しい鳥の啼き聲がする……園林堂閣のたゞずまひ……綺麗な浴池だな。金色の髮を洗つてゐられる。皆履をぬがれた。あの素足の美しいこと。お手を合された。皆歌はれるのだな。佛さまをほめるうただな……

（勝信、善鸞登場。）

唯圓　善鸞樣。早くお側へ。もう御臨終でございますぞ。

善鸞　（我を忘れてよろめくやうに親鸞の側に寄る）父上樣。（聲咽喉につまる）

親鸞　皆跪いて三寶を禮拜してゐられる。金色の樹の果(み)が枝をはなれて地に落ちた。皆それを蒐めて十方の諸佛を供養なさるのぢや……あ、花がふる。花がふる……

唯圓　（親鸞の耳に口をあてる）善鸞樣がお越しなされました。

善鸞　（聲を高くする）父上樣　善鸞でございます。わかりましたか。わたしで御座います。父上樣。

親鸞　（眼を開き善鸞の顔を見る）おゝ、善鸞か。（身を起さうとしてむなしく手を動かす）

侍醫　（制する）おしづかに。

善鸞　（涙をこぼす）遇ひたう御座いました……ゆるして下さい。わたくしは……

親鸞　ゆるされてゐるのだよ。だあれも裁くものはない。

善鸞　わたくしは不孝者です。

親鸞　お前はふしあはせだつた。

善鸞　わたしは悪い人間です。わたし故に他人がふしあはせになりました。わたしは自分の存在を呪ひます。

親鸞　おゝ畏ろしい。われとわが身を呪ふとは、お前自らを祝しておくれ。悪魔が悪いのだ。お前は佛樣の姿に似せてつくられた佛の子ぢや。

善鸞　もつたいない。わたしは多くの罪をかさねました。

親鸞　その罪は億劫の昔阿彌陀樣が先きに償うて下された……赦されてゐるのぢや。赦されてゐるのぢや。（聲細くなりとぎれる。侍醫眉を顰める）わしはもう此の世を去る……（細けれどしつかりと）お前は佛樣を信じるか。

善鸞　……………

親鸞　お慈悲を拒んでくれるな。信じると云つてくれ……わしの魂が天に返る日に安心をあたへてくれ……

善鸞　（魂の苦悶のために眞青になる）

親鸞　たゞ受取りさへすればよいのぢや。

（一座緊張する。勝信は顔青ざめ、眼を火の如くにして善鸞を見てゐる。）

善鸞　（唇の筋が苦しげに痙攣する。何か云ひかけてためらふ。遂に絶望的に）わたしの淺ましさ……わかりません……きめられません。（前に伏す。勝信の顔ま白になる）

親鸞　おゝ。（眼をつむる）

（一座動搖する。）

侍醫　どなた樣も、今が御臨終でございますぞ。

（深い、內面の動搖其の極に達する。されど森として、聲を立つるものなし。弟子衆枕元に寄る。代はる〴〵親鸞の唇をしめす。）

親鸞　（かすかに唇を動かす。苦悶の表情顔に表れる。やがて、その表情は次第に穩かになり、終にひとつの靜かなる、惠まれたるもののみの持つ平和なる表情にかはる。小さけれどたしかなる聲にて）それでよいのぢや。みな助かつてゐるのぢや……善い、調和した世界ぢや。（此の世ならぬ美しさ顔に輝きわたる）おゝ平和！　もつとも遠い、もつとも內の。なむあみだぶつ。

侍醫　もはやこときれ遊ばしました。

（尊き感動。一座水を打ちたる如く靜かになる。一同合掌す。南無彌陀佛の聲一しきり。やがて止む。一瞬間沈默。平和なヒムリッシュな音樂。親鸞の魂の天に返つたことを示すため。）

――幕――

布施太子の入山（三幕四場）

此の物語を長與善郎兄に捧ぐ。

人物（登場順）

濕波　葉波國王
侍從
寡婦
子供
門衛
市民　甲。乙。丙。
騎馬兵
馭者
須太拏　太子
曼坻　太子妃
耶利　その息
罽拏延　その女
廷臣　甲。乙。
女官
夫人
乳母
使者
王妃
兵士　甲。乙。
群集
波羅門　甲。乙。丙。丁。但し墮落して乞食、盜賊等を業とせるもの。
帝釋天
侍童
衆生の群

處　印度
時　古代

第一幕

東宮城門外。左手寄りやゝ奥に大いなる城門。嚴めしく鎖されあり。その側に門衛の屯所。城門の右手より前面にかけて城壁。城壁の後ろに宮殿の甍、天守閣、鐘樓、樹立等の一部見ゆ。右手遙かに、堀を繞らせる

城壁の層重なりて見ゆ。夏の黎明。殘月あり。

濕波王侍從をしたがへて登場。

濕波王（四邊を憚りながら）人影は見えぬであらうな。

侍從　幸ひ人影も見當りませぬ。消え殘つた月がひとり淋しく空にかゝつてゐるばかりでございます。

濕波王（溜息をつく）余が微行で此處に來て、他所ながら、太子を見送ると云ふことが知られたなら、また大臣たちが余を嚴しく責めるであらう。

侍從　諸大臣は口を揃へて陛下が太子殿下を牢獄に幽閉なさらなかつたことを非難致した位でございますから。彼等とても子を持たぬ人たちばかりでございますまいに。

濕波王　彼等には太子の一身よりも葉波國の社稷が重いのぢや。

侍從　大義のために親を滅して、愛する獨兒を異域の深山に追放遊ばされる陛下のお心をお察し申し上げるのも畏れ多う存じまする。

濕波王（月を仰ぎながら）月も悲しう見えるわい。あの月が太子の馬車の崎嶇として行く旅路を獨り照らすのかと思へば。檀特山へは道も遠いのぢや。

侍從　あの月が菩提樹の梢にかゝつて、葉蔭に半ば隱れた太子殿下の御書院の窓から、なつかしい咿唔の聲の漏れるのを私はほんの此の間まで床しい氣持で聞いたものでございますが。

濕波王　太子は小さい時から書を讀むことが好きであつた。わしは煩はしい政事に疲れた時、太子に尊い書物を讀み聞かせて貰ふのが何よりの樂しみであつた。わしは若い時から戰陣の間に月日を過して、書に親しむ暇が無かつたから。わしの太子の學藝に秀いでてゐるのを誇りにしてゐた。荒い頑固なわしの心が少しでも和らぐことを知つたのは彼の感化であつた。彼は攻略が壓制に過ぎると云つては戒め、誅斂が重きに傾くと云つては諫めてくれた。

侍從　政治は自由になり、稅役は輕くなり、訴訟は正しく裁かれるやうになつたと民は皆陛下の御德をたゝへて居りまする。殊に太子殿下が寶藏を開いて度々行はれたあの莫大な布施には人民どもゝ驚いてゐたやうでございます。前代未聞の御仁政であると百姓悉く擊壤鼓腹して居ります。飢ゑたるものは食を、凍えたるものは衣を、病めるものは藥を得て涙をこぼして喜んで居りまする。遠國のものも傳へ聞いて、仁政を慕うて集つて參りますので葉波國の人口は益々繁昌致しまする。

濕波王（苦笑して）いや人民は肥え太るが、御影で王室の寶庫は空にならうて。その太子の立てた布施行の大願が軈て身を過り、國を危くし、父子の恩愛を割く刄とな

つたわい。太子は幼い時から施すことが不思議と好きであつた。まだ元服もしない時、四人の乳母に守られて遊樂のために出城したことがあつた。馬車がやつと城門の外に出ると彼は道の邊りに跪いて施を乞うてゐた盲者や唖者や聾者や癩病やみの群を見つけて、顔色を變へ、車を旋らして歸つてしまひ、そのまゝ部室に閉ぢ籠つてふさぎ込んでしまつて乳母が幾ら慰めても駄目であつた。そして彼が再び禮樂の學びや、鞦韆の遊びに就くまでわしが庫を開いて七日の間その乞食の群に布施をしてやらねばならなかつた。

侍從　殿下のその慈しみ深いお心に誰か感動せぬものがございませう。たゞその御慈愛がある節度を保ちさへ致しますならば――

濕波王　（溜息を吐き乍ら）太子の布施行には限りがない。彼は衣食、田宅、車馬、什器、宮殿内のあらゆる財寶、いや宮殿そのものをも施してしまはねば止むまい。此間も大藏大臣が嘆息してわしに訴へた。「國庫は空しくなりまする。國庫内のすべての穀物、すべての獸畜は盡きました。此分では今に我々百官の愛する妻子が人民の僕婢として施されることでございませう」と。

侍從　けれどあの須大延のみは――穀物は散じ盡されるかも知れない。妻子は僕婢とならしめられるかも知れない。けれどあの靈象のみはいかに太子殿下と雖も決して布施さるゝことはあるまいと確信して居りましたが。

濕波王　（青ざめて）わしは陸軍大臣がそれを知らせに來た時初めはどうしても信じられなかつた。が大臣の沈痛な顔付で愈々本當だと知つた時わしは不意に大地が搖らいだやうな氣がして眼の前が暗くなつた。

侍從　陛下があの時昏倒して玉座からお落ち遊ばしたのも無理ではございません。

濕波王　あの靈象は葉波國の守護神であつた。近國が我國を懼れて敢て近づかないのもあの須大延のあるためだつた。わしの軍隊が戰へば必ず勝つたのもあの靈象の威勢のためであつた。

侍從　あのヒマラヤ山に積る雪のやうに白い靈象があの榕樹の株よりも太い鼻を揚げ、金鞍の上に嚴めしく軍裝せられた陛下を載せて敵陣めがけて突進する時には、まるでガンヂス河の氾濫が堤を切つたやうに敵はなだれを打つて潰走致しましたが。

濕波王　あの須大延はわしが祭司百官を率ゐて、徒歩にて蓮華に詣り、神聖な儀式を以て軍神に獻げた神象だ。わしは右手に象鉤を持ち、左手に金甕を提げて、自ら象の足を滌いで奉つたのだ。

侍從　そのかけがへの無い靈象を國もありませうに、あの

祖先以來の宿敵たる鳩留國から遣した焚士に施しておしまひになりますとは！

濕波王　わしが幾百度の戰勝の度毎に、戰利品や珍寶で眩ゆく飾つた黄金の凱旋車を曳かせて、わが都の街々を練りあるかせたのであつたが。

侍從　（感慨深さうに）あゝあの神のやうな白象が新月のやうな優しい眼をして宮殿の柱のやうな太い足でしつかりと大地を踏んで、大山の移るやうに悠々と歩く英姿を最早永久に見ることは出來ないのか！

濕波王　（靑ざめて）いや。今に再び見るかも知れないぞ。戎めが戰陣の眞先きにあの象を押し立てゝ、攻め寄せ、味方を散々蹂み躙るのを。（默想に沈む）。

侍從　あゝ取り返しのつかない一大事だ！

濕波王　（決心したやうに）いや。今は徒らに嘆いてゐる時ではない。祖國を護り、侮りを禦ぐ策を立てなくてはならない。今夕諸大臣初め百官諸將を招集して、わしの面前にて直ちに前後の計を議することにしやう。

侍從　大臣達の憂慮されるのは尤もでございます。さすがの太子殿下も今度ばかりは後悔してゐられるでございませう。

濕波王　いや太子は自分の所業を惡いとは思つてゐない。去つて自分が天の名によつてなしたる布施の酬いで葉波國は祝福されるであらう云つてゐる。

侍從　（驚いて）私は葉波國が滅びはしないかと恐れて居りますのに。

濕波王　そればかりではない。わしや諸大臣が最重の刑罰の威嚇を以て、またわが尊い先祖代々の王達の名によつて彼が將來此の上祖國の安危にかゝるやうな布施を思ひ止まることを保證せしめやうとしたのに對して、彼は自分の立てた檀波羅密事の本願が滿足するまでは決して布施は止めない、自分は自己のため、血族のため、萬人のためにこの本願を立てたのだ。自分は何ものをも所有しない誓ひを立てた。自分が一物でも所有してゐる間は決して乞ふものに拒むことは出來ないと答へた。そしてわしや諸大臣の眼の前で地に跪き、天を拜して彼は一度その誓を新らしくした。

侍從　それでは諸大臣が激昂して嚴罰を申請されたのは、畏れながら止むを得ないことかと存じまする。

濕波王　わしも諸大臣の申請に對して何と言葉を返すことも出來なかつた。そして默然としてゐた時に、あの老いたる宮内大臣がわしの心を察して、太子を拘禁することは穩でないから、國外に追放することにしやうといふ議を立てた。諸大臣も流石にそれに異議を申し立てるものはなかつた。わしはせめて太子の生命の無事であること

に滿足してその建議を裁可するより道がなかつた。それに出家して檀特山に行くことは太子の豫ねてからの願であつたので、彼が今日まで城に留つてゐたのはたゞわしと妃との悲嘆を慮れてゐたために過ぎなかつたのだから。

侍從　最愛の太子を、最重の國寶と同時にお失ひ遊ばさなければならない陛下のお心を思へば私は涙がこぼれまする。

濕波王　あゝ誰か來るやうだ。人目にかゝらぬやうに早く身をかくさう。

侍從　あの門衞の屯所に。もう夜が明けまする。太子殿下の御馬車の出城するのも程なくと思はれまする。

（王と侍從退場。引き違ひに一人の寡婦襤褸をまとひ、泣き叫ぶ子供を背負うて登場す。）

寡婦　あゝ。やつと來た。此處があの御慈悲深い太子樣のゐらつしやるお城なのか。もつたいない。もつたいない。亡くなつた夫は決してお城の方へ足を向けては寢なかつた。夫にあのやうにおやさしくして下さつた太子樣だもの、夫に先き立たれたふしあはせなやもめにきつと惠みをかけて下さるだらう。どうか太子樣にお目にかゝつてわたしや夫がどのやうに太子樣の御恩を一生感謝してゐたかをお傳へ申し上げたい。そして無慈悲な稅吏（みつぎとり）のためにどんなに酷い目に遇つて死んだかを訴へたい。（泣き叫ぶ子供をすかしながら）坊や。お泣きでない。坊や。いい子だから。もうわたしたちは太子樣のお城の門の前まで來たのだからね。もう跪いてお願ひ申しさへすればいいのだからね。

子供　（泣きながら）ひもじいよ。ひもじいよ。

寡婦　（子供を下ろし）あゝひもじいだらうね。もう二日も食べないのだからね、今に太子樣が食べるものを澤山惠むで下さるよ。

子供　（地べたに足を投げ出して）あゝ、痛い。痛い。

寡婦　（面をしかめて）はだしで、石ころ道をよつぴて歩いて來たのだもの。（子供を抱き胸をひろげて）さあ母さんのお乳を。

子供　（ちよつとしやぶつて直ぐ放し、泣き出す。）

寡婦　乳も干あがつてしまつた。もうわたしの膚を傷けて血でも飮ませるより仕方がない。（石の上に腰をかけて泣く。）

（城門内にて鑰の響きこゆ。）

寡婦　（立ち上り、子供の手を引つぱつて門の側に行く）もう朝だ。今太子樣が御出ましになると聞いたのだが。

（門、內より開かる）

門衞　（登場）此の門を衞るのも今日限りだ。主人を失つ

た城の門は今晩から永く／＼陰氣くさく鎖されるだらう。今日まで貧乏餓鬼どもが極樂の門でゝもあるやうに、ありがたがつて居たのだが。

（寡婦）（門衛の側に行く）お役人様。お願ひ申します。お惠みをおかけ下さいまし。貧しいやもめでございます。

門衛　（泣き叫ぶ子を見て眉をひそめながら）門前でそんなに八ケ間しく泣き立てゝは困る。今朝はことに靜かにしなくてはならないのだ。

寡婦　父のない不仕合はせな子でございます。（子供に）これ、泣かないでお役人様へお惠みをお願ひ申さないかい。

子供　（泣きながら跪きて器械的に）お惠みを。父のない子でございます。

門衛　おや、この子は物乞ひすることを敎へられてゐると見える。

寡婦　（節のついた白にて）ふしあはせな母子でございます。何にも食べてゐませんので、夜通し歩いて參りましたので。

門衛　惠みなら太子様に乞ふがいゝ。

寡婦　その太子様にお目にかゝりたいのでございます。今朝お出ましになるときゝましたので。

門衛　うむ、今にお出まし遊ばされる。お前たちは片筈な處に來合はせたものだ。

寡婦　何んでございますつて？

門衛　（考へつゝあちこち歩みながら）もう半日遲かつたらもう太子様は此の國を去つていらつしやつたであらう。

寡婦　え、太子様が此の國をお去り遊ばすのでございますつて？

門衛　（己れに物云ふ如く感動を以て）今朝出城遊ばしたら、もはや永久にみ車をお迎へ申すことはないかも知れない。

寡婦　（子供を突き放ち、顚倒して）あの太子様がでございますか。あの國中のものが讚めたゝへてゐる太子様が！　それは本當でございますか。

門衛　（默つてあちこち歩む。）

寡婦　（すり寄つて）もう二度とお歸り遊ばさないのでございますつて。あゝどうしたらいゝだらう。どうぞおつしやつて下さいまし。何處にお出で遊ばすのでございますか。

門衛　お前たちに云ふやうなことではない。

寡婦　（泣き出しさうになつて手を絞りながら）どうぞ聞かせて下さいまし。お慈悲でございます。おつしやつて！

門衛　檀特山にいらつしやるのだ。

寡婦　檀特山？　あの遠い〳〵荒れた山へ！　恐ろしい獸のをるといふ深山へ！　どういふわけで？

門衛　それはお前たちに云はれない。だがあまり施しが過ぎたからだといふことだ。（悲憤するやうに）あまり人民が貪慾すぎた。太子樣のお慈悲深かいのにつけあがつて、飽くことを知らずに乞ひむさぼつたからだ。

寡婦　（地に倒れて）ではお布施のために王樣のお氣にふれて。

門衛　さうだ。云はゞお前たちの犧牲におなりなさつたのだ。

寡婦　（取り亂して）あゝ、どうしたらいゝだらう。私たちのためにあの太子樣が國をお追はれ遊ばすのか。赦して下さいまし。赦して下さいまし。皆があまり慾深いものでございますから。餘り愼みがないものでございますから。けれど私たちだけは本當に貧しかつたのでございます。本當に困つてゐたものでございます。こんなことになるのだつたら。假令私たちは飢ゑて死んでしまつてもお施しをお願ひ申すのではなかつたのに！　申しお役人樣、私たちはもう施しを乞ひはいたしません。人民はどうなつてもよろしう御座います。どうぞ太子樣がいつまでも〳〵此の國にゐて下さるやうにして戴きたうございます。お願ひでございます。

門衛　そんな重大な事件が俺らの手に合ふものか。それが出來る程なら俺らもこんなに愁嘆するには及ばないのだ。（子供の泣き立てるのを見て澁面をつくりながら）あゝ。退け。退け。こんなに門前を騷がすのは畏れ多い。今朝の皆樣の永いお別れにふさはしいやうに靜かに、嚴かにしてゐなくてはならないのだ。（寡婦、子供をつれて門前をはなる）もう御車の出るのもすぐだ。

（門内に退場。）

寡婦　（子供をゆすぶりながら）お泣きでない。お泣きでない。あゝ、どうしたらいゝだらう。あの太子樣に行かれてしまつては世は眞暗になるやうな氣がする。私たちの望みの綱は切れてしまふ。私たちは今よりもつと〳〵酷い眼に遇はなくてはならなくなるだらう。本當に漿一杯だつて頂かなくても此のお城に太子樣がじつと住んでゐて下さりさへすれば私たちにはどんなにか慰めになるんだが。（間）あゝ試つて見やう。跪いてお願ひして見やう。太子樣の御車にしがみ着いてもお止まり下さるやうにお願ひしなくては！　（子供を賺しながら）もう泣かないで。（抱いてあちこち歩く。子供泣きつゞける。自棄に搖ぶりながら）靜かにおしつてば！（子供火のつくやうに泣く。子供を地に下し泣き聲になつて）後生だから

もう泣いておくれでない。母さんは氣が氣ではないのだから。(石の上にうつ伏し已れも泣く。)

(市民甲、乙、丙しやべりながら登場。)

市民甲　大言を吐くなあもういゝ加減にするがいゝや。少し廻りがよくなるとすぐこれだ。

市民乙　(よろめきながら)　俺はお前のやうに吝嗇ではないのだ。

市民甲　ふむ。ひどく景氣がよさゝうだが、お前さんは半月ばかり前あんなにしよげ込んでわしに無心に來たことを忘れやしまいね。(傍白)臭え呼吸だ。

市民乙　(唾を吐く。)大きなお世話だ。お前そんなことを云つてこれつぽかしでも貸してくれたのかい。

市民甲　それあお前さんが碌な質草も持つて來なかつたからさ。ところでお前さんがそんな大きな口が利けるのも此の前の大布施の時にせしめた馬をうつた金をもとでに、やつた危ぶない勝負が、たま／＼うまく當つたからだぜ。

市民乙　うむ。俺あ賭け事にかけちやあ膽が太いからね。だがお前たつてあまり大きな顔は出來まいぜ。あの大布施の時のお前のやり口にや驚かされたよ。お前はめそめそ泣き聲を出してやつてゐたぢやないか。「私は貧乏です。私は馬にやる切藁を喰つてゐます。子供はみな白痴で、みな片端で」なんかしやべり立てゝゐたぢやないか。お前の庫には米を腐る程貯め込んでゐやがるくせに。

市民甲　それが羨しいと云ふのかい。それは私が正直に稼いで少しづゝ儲けた金をお前さんのやうに飲んでしまはないで貧乏なものに廻してやるからさ。

市民乙　ふむ。眼玉の飛び出るほど高い利息をとりやあがつて。

市民丙　おい／＼お前さんたちそんなにがみ／＼云はないで、少し靜かにしたらどうだ。此處は太子殿下のお城の前だ。

市民甲　本當にさうだ。此奴があまり利いた風のことを云やがるものだから。

市民乙　なんの。わしは地道に貯めることは好きだが、高言を吐くことはあまり好まぬ方だ。

市民甲　太子殿下に敬意を表しやう。

市民乙　さうだ。福の神は大事にしなくてはならない。

市民丙　(頭巾を脱いでお辭儀をしながら)　やれ／＼、ありがたいことだ。太子様がこの城に住んでゐて下さりさへすりやわしらは安心だ。わしらは丹精に百姓をするが幾らはたらいても食へない時がある。何しろ幾ら凶年でも税吏は年貢を高くして懷を肥やすことを止めはしないから。そんな時には太子様にお願ひすれば飢ゑ死にする

ことはない。わしは此の前のお布施の時に牛をいたゞいたが、お影でそれから田を耕すのがどれほど樂になつたか知れない。

市民乙　太子樣は私たちにとつては何よりも大切な寶槌だ。いざとなつたらそれを振りさへすれば田地でも車でも衣物でも何でも出て來る。

市民甲　何處までも勘定高いことをいふね。俺などは困つた時には貰ひに行きはするが、御恩はいつも忘れたことはない。おやあれは何だ。

市民乙　女と子供だ。

市民丙　かはいさうに子供がひどく泣いてゐる。

市民甲　あのお袋は子供の泣くのもほつたらかしにして何か獨りでぶつ／＼云つてらあ。

市民丙　お祈りをしてゐるのだ。

市民甲　施物を貰ひに來た乞食だらう。

市民乙　御覽、いゝ女だぜ。

市民甲　此奴は女を見るとすぐこれだ。

市民乙　惜しいことに氣が狂れてゐるやうだ。

市民丙　いや、さうでもないらしい。

（市民丙、女の側に近づかんとす。その瞬間に女市民等を認めて飛んで來る。）

寡婦　（狂ふやうに）皆さん。大變です。どうかして下さいまし。行つておしまひなさいます。

市民甲　何だ。

市民乙　どうしたと云ふのだ。

寡婦　行つておしまひなさいます。太子樣が――

市民丙　太子樣がどうなさるつて？

寡婦　檀特山に行つておしまひなさいます。今すぐに。今朝のうちに。

市民丙　檀特山へ？　これ。お前さん。もつと氣を落ちつけて話して御覽。それは本當かい。どうして知つたのだ。

寡婦　門衞からきゝました。本當です。だから早くして下さい。早く太子樣がお止り遊ばすやうにお願ひして下さい。

市民丙　もつとくはしく――靜かにして――太子樣がどういふわけで――

寡婦　（少し落ちついて）王樣のお氣にふれたのです。太子樣があまりお布施をなさつたのがいけなかつたのですつて。

市民甲　そいつは大變た。

市民乙　それはいけない。噓ぢやあないか知ら。門衞奴が嚇かしたのぢやないか知ら。

市民丙　（考へて）いや。本當だらう。ありさうなことだ。

寡婦　早くして下さい。早く。もう太子樣の御車が直ぐに

出るのですから。

市民甲　是非止まつてもらはなくちやあ。どうしたらいゝだらう。

市民乙　役人に賄賂を使つてどうにかならないか知ら。

市民丙　お願ひするより外はない。皆で車の前に跪いて一生懸命お願ひして見るのだ。

市民甲　さうだ。こんな時にあ拜み倒すのが一等だ。

（鐃の聲城内よりきこゆ。）

寡婦　あゝもうお出ましになる。

騎馬兵　（門より登場）退れ。退れ。

（市民等道を開く。騎馬兵退場。）

市民甲　行つて皆に知らせてやらなくちや。

市民丙　さうだ。皆呼んで來てお願ひしやう。わしらだけでは駄目だ。

市民甲　皆びつくりするだらう。太子樣を慕つてゐないものは無いから。

市民丙　太子樣に行かれては葉波國は暗闇だ。

（市民甲と市民丙退場。）

市民乙　（退場しながら）福の神を逋しちやならないぞ。わしの金函が乾上るから。

寡婦　あゝどうしたらいゝだらう。どうしてお止め申したらいゝだらう。太子樣を失つたら國中の貧乏人はどうなるのだらう。國中の寡婦（やもめ）は、孤はどうして生きて行くのだらう。行つて女たちを呼んで來やう。孤をみんな連れて來やう。皆で私達の厨（くりや）がどんなに乏しいか訴へたら、ふしあはせな孤がみんなひもじいお腹を絞つて泣き立てたら太子樣も役人たちも心を動かして思ひ止つて下さるかも知れない。さあ。今のうちに。大急ぎで。（泣き立てる子供の手を曳いて退場。）

（鐃の聲きこゆ。やがて先驅の騎馬兵數名消え殘りたる松明を持ちて登場。太子、太子妃、及び二人の王孫を乘せたる馬車次いで登場。その後より多數の延臣、女官及び八人の夫人。四人の乳母馬車に從つて登場。）

太子　（馭者に眼くばせして馬車を止めしめ、一同を顧みて）見送りは此の門限りで辭退しますぞ。

延臣甲　我々は是非國境まで殿下をお見送り申上げたう存じます。

延臣乙　若し殿下のお許しが御座いますならば檀特山までもお伴申したいのでございます。

女官の一　一度御車をお送り申し上げたならまた、いつの日にお迎へ申し上げるのかわからないのでございますから。

太子　一同の厚い志はうれしく思ひます。わしも名殘り惜しくおもひます。だがもはや見送りは辭退しますぞ。わ

しは父王陛下の御勘氣を受けて國を立ち退くのだから。それにいつまで送られても限りが無いのだから。

夫人の一　ではございませうが、も少し名殘を惜ませて下さいませ。私たちはいぶせき深山の奥までもお隨ひ申して、朝夕おかしづき申し上げたい切なねがひをも、お言葉のゆゑにあきらめたのでございますもの、このまゝお別れ申し上げるのはあまりに淋しうございます。

乳母の一　（涙ぐみ）せめてこの城が見えなくなるところまでお見送りをお許し下さいまし。今日の行啓の後私どもが二度と殿下におまみえ申すことは御座いますまい。私どもはもうあまりに年が寄りましたから。

太子　いや。いつまで見送つても悲しみは盡きまいぞ。（肅然として）別れに臨んで皆に一度だけ云つて置くぞ。わしが今日此の住み馴れた城を去つて山に行くのはお前たちすべての悲しみを負ふからだ。お前たちと永久に別れたくないからだ。わしが今此の城に留つたなら私たちはいつまでも別れないですむのであらうか。いや／＼ぢき苦い別離が來るのだ。時が刻々に冷めたい死の塀を築いて否應なしにわしらの間を割いてしまふのだ。その時になつてお前たちは今の悲しみが手習ひに過ぎなかつたと思ふ程嘆き悲しむであらう。が、葉波國の全國民が聲を限りに泣き叫んだら、此の城の門は崩れるかも知らぬが死の鐵門は金輪際揺らぐことはない。そしてその後はどうなるのだ。お前たちは今日まで心をつくしてわしに事へてくれた。その君臣の深かい契りはどうなるのだ。夫人たちがいくたびかその淸い珠飾りにかけて示してくれた誠の誓はどうなるのだ。乳母たちが私を抱いて、襁褓の間から幾百度となく立てた愛の證は？　わしはそれを思ふと此の城も塚のやうに見えるのだ。わしの萬歳を唱へてくれる聲も挽歌のやうに聞えるのだ。（夫人たちの間からすゝり泣きの聲が起る）わしは愛する者と永久に別れないですむ國を求める。その國の民となることが許されるならば、たとひ最も卑しい僕であつても、今の太子の位を喜んで捨てたいと思ふのだ。あの檀特山に阿周陀といふ聖人が棲まれ、常に果蓏を喰ひ水漿を飮んで道を修め、無上の知慧と絶妙の德を備へて猛獸や毒蛇まで喜び從うてゐると聞いてゐる。わしは行つて敎へを乞ひたい。道を求めたい。死に打ち勝つ知慧を得たい。わしが山に行つて無上の悟りを成したならば、その時わしは再び喜んでお前達の處に歸つて來やう、その時は葉波國の太子としてゞはなく、精神の國の王としてお前達に迎へて貰ひたい。その時こそわしはお前たちを不滅にする本當の寶を與へること出來るだらう。わしは今日まで持つてゐるすべてのものを惜まずに布施して來た。だがわし

の布施した物には一つとして不滅なものはない。わしは貧しい人々がわしの布施した財寶を得て喜んで歸るのを見る時に彼が當座の困窮から免れるのを喜びはしたが心の底にはいつも〳〵深い淋しさがあつた。わしは知つた。わしは貧乏人だ。彼等に與へる本當の寶を一つも持ち合はせてゐない貧乏人だ。わしの財寶で、わしの城や冠で彼等を救はうと思つたのは愚かな〳〵ことだつた。わしは行かう。行つて不滅の寶を發掘しやう。お前たちはわしが無上微妙の知慧で莊嚴せられて歸るのを待つてゐてくれ。きらびやかな行列は今日の旅にはふさはしくない。わしは太子としてゞはなく本當に貧しい求道者として行くのだから。

（一同しばらく肅然としてゐる。）

廷臣甲　殿下の世にも尊いおこゝろを承はりまして、何と申上げてよろしいか私共はたゞ頭が下がるばかりでございます。

廷臣乙　此の上は心をこめて殿下の御念願の一日も早く滿足するやうお祈りしていさぎよくお送り申上げるほかはございません。

女官の一　私どもも心を奮ひ起して殿下の御決心に副ひたてまつらねばならぬと存じます。

廷臣甲　（嘆息して）此の期に及んでもはや殿下をお止め申さうとは存じませぬ。たゞ心にかゝるのは殿下を失つた後の葉波國の運命でございます。慈父の如くに慕うてゐた殿下が國を去られたと知れ渡つたら人民がきつと騷ぎ出すに相違ございません。それに乘じて敵國が攻め寄せたら――

太子　國は滅び、國は起こる――さながらベンガルの濱邊に起伏する砂丘のやうだ。（嚴然として）よくお聞き、そして忘れずに覺えてお置き。わしは永久に滅びることのない國を求めに行くのだ。わしがふたゝび歸るときにはお前達を不滅の國の民として永久に渝ることのない福祉にあづからせるぞ。（馭者に目くばせして）では左様なら。愛する人々よ。これでお別れ致しますぞ。

夫人の一人　あゝ、ではどうしてもうお別れ申さねばならぬのでございますか。わが主、わが師としてお仕へ申し上げるのは今が最後となつたのでございますか。お惠みを受けた此の幾年の間の様々な思ひ出が今夜から私たちを眠らせぬことでございませう。露よりもしげくおかけ下さつた愛のお言葉が永く〳〵私たちを泣かせることでございませう。もう夜衣に殘つた移り香の外には殿下をお偲ひ申上げるよすがはないのでございますか。せめては佛となつて淋しい閨の戸に立つて下さいまし。（頸飾りから眞珠をとつて捧げながら）此の眞珠をわたした

ちのかはらぬ愛のしるしにお身におつけ下さいまし。

（他の夫人達も各々一個の眞珠を太子に捧げる。）

太子　（眞珠を受け取つて）　わしは遠く別れてもお前達のことを決して忘れはしない。いつもお前たちのために祈ります。お前達はつゝしみ深く暮らして、わしが望みを達して歸るのを待つてゐてくれ。お前達が心をこめて餞にしてくれた此の眞珠の報いにわしが山からかへる時には七倍美しい不滅の法珠でお前達を飾つてあげますぞ。

乳母の一人　（涙ぐみながら）　ではその時には私達には香華をお手向け下さいまし。私たちは冷めたい墓になつてゐませうから。（馬車側に走せ寄つて）あゝこれが一生のお別れでございます。も一度玉體に觸らせて下さいまし。（太子の差し延べたる腕をさすりながら）あなた樣にお哺ませ申上げた乳房はもう萎み果てゝしまひましたが、私の心はあのあなたさまを籃に載せてお搖ぶり申上げた頃と少しも渝つて居りませぬ。どうぞどうぞお體を大切に遊ばして下さいまし。山にお入り遊ばしたら恐ろしい虎や毒のある蛇がお體を傷けはしまいかと私は心配でなりませぬ。あなた樣の玉のやうな膚をいばらが破らぬやうに氣をつけて下さいまし。本當にあなたのお肌のどの隅にある小さな黑子にも、私の脣の痕のつかぬのはない程でございますのに。山にお入り遊ばしても、わたしたちのことも時々は思ひ出して下さいまし。わたしたちはあなた樣のお體のつゝがないことゝ御念願の遂げられる日の一日も早く來るやうにとお祈りすることを、たゞそれだけを死ぬる日までの仕事にするでございませう。その日はもう間もなく來るのでございますから。（小さな錦襴の嚢を捧げながら）これはあなたさまの守護神の帝釋天樣のお守りでございます。いつも肌身につけてゐて下さいまし。あなた樣は帝釋天樣の御申兒で御幼少の時から御病氣の折にはいつも帝釋天樣にお祈りして不思議に御本復遊ばしたのでございますから。

太子　（涙ぐみながら）　乳母よ、お前たちの悲しみはわしの胸を千切るやうだ。だがわしは行かねばならない。今わしの行くのはお前たちと永久に別れたくないためだ。お前たちは老いた。お前の云ふ通りにお前たちは程なく此の世を去るだらう。わしが今千年の齡をお前に約束してやつたとて、それが何の慰めにならう。わしが今たとひ此の城に留つても私たちはもうぢきに別れねばならないのだ。今別れたらわたしたちはもう此の世では二度と逢へないかも知れないが、もはや二度と別れなくてもいい國でまた逢はう。わしはさういふ國を求めに行くのだ。さういふ國は屹度無くてはならないのだから。其の國でいつまでも／＼わしを愛してくれ。小さい時からお

前たちがどんなにわしを愛してくれたか、それを思へばわしは涙ぐむ。此の城の廻りはどの丘も、どの樹影も、あらゆる徑あらゆる隈がみな一つとしてお前たちに守られて一緒にした幼ない遊戯の思ひ出の殘つてゐないのはない位だ。そのなつかしい城を棄てるのはわしの深い、深い決心からだ。わしの氣持は解つてくれると思ふ。どうぞ達者で暮らしてくれ。わしは山に入つてもお前たちのことは一生忘れることはない。平和な晩年と靜かな眠りとを祈つてゐるぞ。（廷臣の一人に）此の老婆たちが一生不自由をしないやうに厚く扶養してやつてくれ。

廷臣　畏りましてございます。

乳母　（泣きながら）あゝ、もつたいないことで御座います。

太子　（一同に會釋して）ではお別れしますぞ、（馭者に眼くばせして）行け。

（使者急ぎ登場。）

使者　（恭しく）只今王妃陛下がこれへお成りでございます。

太子　母上が！

（蹄の音、轍の響が聞える。）

廷臣　王妃陛下の御車だ。

（間）

（王妃の馬車登場。供奉の列なく只一人の女官陪乘せるのみ。馬車止る。王妃馬車より下りて太子の馬車に走せ寄る。太子急ぎ馬車より下りる。）

王妃　おゝ。須太拏や。（太子を抱いて）わたしの愛兒、わたしの寶！（嗚咽のために聲がつまる。間。）お前は行つてはならない。行つてはならない。

太子　（やさしく王妃を抱いて）母上よ。お心をお靜かに。

王妃　そなたに行かれてわたしは何うして生きて行かう。わたしの望みはなくなつてしまふ。わたしのいのちは滅びてしまふ。わたしは——

太子　（しづかに）昨夜くれ〴〵も申し上げてお暇乞ひ致しました如く——

王妃　あゝ。昨夜、夜どほしわたしは考へあかしたのだよ。そなたを離れてこれから生きて行かれるかどうか試めして見たのだよ。わたしはお前はもう私から去つたものと思ひ定め、神々にわたしの心を支へて下さるやうにお祈りして、できるだけ耐へやうと努めてみたのだよ。けれどわたしは昨夜そなたのない私の生活がどんなものであるかといふことを知つた。とても私には耐へられるとは思へない。お前はどうあつても去つてくれてはならない。

太子　（肅然として）母上よ。私は行かねばなりませぬ。

王妃　いゝえ。そなたは行つてはなりませぬ。わたしが崩れて死んでしまふことをそなたが望むでくれるのでなかつたなら。須太拏や。どうか思ひ出しておくれ。わたしがどんなにしてそなたを育てゝ來たかを。そなたが小さい時私はそなたを私の瓔珞を飾つてあるどの珠よりも美しい、どの珠よりも稀な珠のやうに愛でました。實際にそなたにそれだけの價があつたのだ。そしてそなたが長じてからはそなたは私の誇りであつた。私の師であつた。私は薬波國の全領土よりもそなたを尊んでゐる。そなたのやうな氣高い人の母であることの名譽を王妃の位よりも重んじてゐる。思へばそなたは私の胎に宿るにはあまりに尊かつたのだ。抑も私はどのやうにしてそなたを私のものとすることができたのだとおもふ？　そなたの場合では私は特別に私のものといふ感じを私か持つてゐることが許されねばならないと思ふ。何故と云つて私はそなたを神に祈り求めて授けられたのだから。王様と私とは世嗣のないのを嘆き悲しんだ。その他のすべての充ち足つた幸福もその嘆きの前に輝きを失ふかと思はれる程だつた。王様は尊敬すべき祖先から傳へられ、多くの記念すべき名譽ある戰爭によつて外敵から完全に護られた此の美しい豐饒な國を嗣ぐものゝないことを嘆息遊ばした。そして遂に王樣と私とは寢物語りに相談して帝釋天樣に子種をお授け下さるやうに祈願を立てることにしたのだよ。私たちはどんなに嚴かな儀式と、淨い齋戒と永い斷食とを以つて熱心に祈つたことだらう。そして終に私達の切なる祈りが聽かれて、私は身重になり、軈てそなたが生れた時に私達の喜びはどんなだつたらう。その時程王様のお顏が幸福に輝いたのを見たことはどの凱旋の時にもなかつた。金盥の水で玉のやうな肌を洗ひ、練りのいい絹布で裹んで、しみ〴〵とそなたの顏を見た時に私は涙がこぼれて止まらなかつた。その瞬間からそなたは私のいのちになつてしまつたのだ。そなたはまたあの立太子式の日のことを思ひ出しておくれ。そなたが元服するのを待ちかねて、あの盛んな、目の眩ふやうな華麗な儀式で、王様の手づからそなたの頭に冠が載せられた時宮殿も搖らぐやうな萬歳の裡に、そなたが百官と庶民の前に太子として初めての挨拶をした時そなたはどんなに立派で、王者の威嚴を備へて美しく氣高く見えたことだつたらう。その時私は母の幸福に醉ふやうな氣がした。須太拏や、考へてみておくれ。その幸福が皆空しくなつてしまふのだ。幸福が大きかつたゞけに、それを失つた後の苦しみは一層ひどいだらう。どうぞあはれな母をその恐ろしい淋しさのうちに殘さないでおくれ。

太子　母上よ。あなたのお心はよく〳〵解ります。あなた

はどんなに私を愛して下さつたでせう。色々思ふと私の胸は淸い淸い淚で一杯です。あなたは此の法界に愛といふもののあることを私に知らせて下さつた最初の方でした。私がそれを至上の眞理と認め、その眞理に私の一生を捧げて奉仕しやうと思つてゐる、その愛といふものは實はあなたから初めてその觀念の種子を賜はつたのでありました。あなたは私にはありあまる程の母らしきめぐみをかけて下さいましたが、その種子こそあなたの私に賜はつた一番尊い賜物でございました。私はあなたから賜はつた生のまゝの愛の粗鑛から、純粹の黄金を錬り出しました。（淚と道德的興奮とを同時に感じ乍ら）あゝ母上よ。私が今あなたとお別れせねばならぬと決心するのも實にその愛のためです。その愛の至上命令に從ふのです。あなたと今お別れするのが却つて本當にあなたを愛する道であると信じるからです。永久にあなたとお別れしたくないからこそ今お別れせねばならないのです。昨日吳々も申上げた通りです。不滅の都で、再びお目にかゝり、そして其處なる宮居に永久に共に棲みませう。何卒私をいさぎよく送つて下さい。

王妃　須太拏や。私はそなたの心が解らないのではありません。そなたがどんなに母思ひであつたか、わたしの思ひ出か一杯です。それがわからないでどうしませう。それだからこそそなたと別れることが耐へられないのだよ。わたしどうあつてもそなたを遠くの山に遣つてしまふことは出來ません。年とつた母親の愛といふものがどんなに切ないものだかどうか察しておくれ。そなたに云ふがわたしは此二三年めつきりと體が衰へてきてゐますよ。老の淋しさがもう私をとりまくやうになつて來ました。見ておくれ、わたしの此の鬢の霜を。

太子　わたしの心を弱くしないで下さい。

王妃　私の白髮頭が冠の重さにも耐へられなくなるのはもうぢきです。そなたと別れてしまつたらわたしは乾度床につきますよ。

太子　あゝ。

王妃　わたしが死ぬ時そなたは私の臨終の枕べに侍しては下さらないのですか。わたしの最後の息が呼ぶのは乾度そなたの名にちがひない。その時そなたは私を抱いては下さらないのですか。母親がその獨兒を育てるときに、自分の末期の脣を潤ほして貰ふことを願はないものがゐるだらうか。

太子　母上！

王妃　そなたはわしの葬らひの列にもつらなつて下さらないのですか。

太子　お聞き下さい。母上。あなたの母としての執愛が今

の私を躓かすならば、あなたにとつて恐ろしい禍ひですぞ！　母なるものの名の上に永久に天の呪ひを呼ぶのですぞ！　母性の愛の中に巧みに造られた惡魔の陷穽が今はつきりと私に見えます。よくお聞き下さい。私は母上から愛の觀念の種子を賜はりましたが、私はそれを地に蒔いた時に不思議にも其處には藥草と毒草とが同時に生えました。私がその二つを見分けることが出來るやうになつたのはほんの最近のことなのです。これは實に恐ろしいことでした。一つは人類を平和に導き一つは爭鬪に誘ふのです。一つは涅槃に一つは輪廻に、其處に深い陷穽がかくされてゐるのです。種族の愛はそれが法の光で照らされないならば眞の愛と異るばかりでなく相乖くのです。母子も一度隣人でなくてはなりません。隣人の愛のみ眞の愛です。世嗣に豐かな領土を遺したい欲望が父上を多くの戰ひに驅りました。我子の聲色に觸れてゐたい執着が今世にも尊い大願の旅程から私を阻まうとしてゐるのです。今私が退轉して此の城に留まれば母上も私も共に滅ぶのです。葉波國の人民も滅ぶのです。どうぞ私を行かせて下さい。勇ましく送つて下さい。

王妃　（すゝり泣き乍ら）あゝ、わたしはどうしても還らねばならぬのか。（太子を沁々と見る。やがて取り亂して）いゝえ。いゝえ。わたしはやることは出來ません。別れることは出來ません。

太子　（跪きて母の手を取り）尊き母上よ。勇氣を奮ひ起して下さい。あなたの生れながらの美しい知慧と、敬虔なこゝろを呼び醒まして下さい。假令今お別れ致しましても、やがて天上で、限りないいのちを持つて――

王妃　わたしは眩ゆい天上よりも此の葉波國の黑土がなつかしい。假令短かいいのちでも、そなたの黃金色の髮を見、わたしの胎から出たその鳶色の肌に觸つてゐたい。（全く取り亂して）あゝ、わたしは今の苦しみを見るよりは母とならなかつた方がよかつたと思ひますわい！

（地に伏して泣き崩れる。）

太子　（無言のまゝ王妃の瓔珞の搖らぐのを凝つと見つめて居る。）

（間。群衆の喧噪の聲舞臺の後ろに起り次第に近づく。「太子殿下！」「檀特山へ。」等の叫び聲時々聞ゆ。）

太子　（突然立ち上がる）ではお別れいたしまする。（馬車の方に行かんとす）

王妃　（起き上り、怨めしさうに）あゝ、そなたはどうあつても行くのですか。（咽び泣き乍ら）お行き！　死んでしまふから。わたしは生きてはゐられないから！

太子　（思はず、二三歩母の方に寄らんとし、踏み止まり顏色蒼ざめ、一瞬間沈默の後決然として）お死になさい！

母上。

王妃　（眞青になつて）　え〻？

太子　（天を拜しながら）　惡魔よ退け！　今のわしの決心を鈍らさうとするものは禍ひだ。永恆に呪はれるであらう。假令肉身の母であつても外道だ。惡魔だ。我前に立つ女人よ。汝と我と何の關はりがあらう。

王妃　須太拏！

太子　今の私の發心を妨げて永久の冥罰を蒙るよりも慈み深き天よ、願はくば速かにわが母に死を給へ。

王妃　お〻。（太子に飛びつかんとし、太子の威に打たれてそのま〻立ち竦み、やがて瞑目して沈默す）

太子　女人よ。私は今そなたの子としてそなたの前に立つてゐるのではないぞ。今私は衆生のものだ。今私は私を孕んだ女に屬くものでなく、天に屬くものだ。あ〻今私の道を阻むよりも、死は寧ろそなたにとつて幸ひだ。今私をそなたの懷から人類の手に返せ。そなたが帝釋天からあづかつてゐた私を、も一度帝釋天に返せ！

王妃　（天に向つて兩手を絞り乍ら）　南無帝釋天！

太子　天王帝釋よ。此の女人を守らせ給へ。

王妃　（地にひざまづく。）

（間。群衆の喧噪益々はげしく、近づき來る。）

王妃　（突然、涙に洗はれたる顏を上げ）　行け！　須太拏よ。行つて無上の悟りを開け。道を成じて父と母と葉波國の先祖代々の靈と、すべての市民を救つておくれ！

太子　お〻母上！　（走せ寄つて王妃の腕に身を投げかく）

王妃　お〻わたしの愛兒！　（一度抱き緊め、やがて靜かに太子を放し、跪きて太子を拜し）　わが師よ。

太子　（瞑目して佇立す。）

王妃　そなたは私の善智識です。わたしの救主です。もつたいない。もつたいない。そなたを孕んだわたしの胎は何といふ祝福されたものであらう。わたしに何の價かあつて數多い女の中から選ばれたのだらう。いつくしみ深き天よ。いと小さきはした女が今さ〻げまする心からの感謝をお受け下さいまし。

太子　（涙ぐみ）　あなたのお言葉はあまりに畏ろしう御座います。若し私に何か尊いものがありますならば、母上よ、それは實にあなたに、かくも高貴なあなたに負うてゐるのでございます。

王妃　そなたを私の私有と思つたのは私のあやまりであつた。私の思ひあがりであつた。私は今はつきりとそれが解りました。天よ、わたくしの僭冒をお赦し下さい。そなたは本當に人類の有です。天のものです。わたしは今そなたを私の手から返します。天に返します。お行き。須太拏。そなたの使命のために！　そなたを產んで人類

に贈つた私の勳は永久に人類の記憶から滅びることはないであらう。私の名譽は眩ゆい程です。

太子　餘き母上よ、諸天もあなたを嘉し給ふでございませう。

（群衆の喧噪いよ〳〵烈しくなる。遂に二、三の市民群衆に押し出されるさまにて右手の端より登場す。）

兵士甲　退け。退け。

兵士乙　寄るな。無禮者！

（二、三の市民退場す。喧噪いよ〳〵烈しくなる。）

騎馬兵　（示威的に群衆の前に馬を驅けさせつゝ）叱ッ。靜かに！　御前だぞ！

寡婦　（突然登場群衆を押し分け、子供を抱きたるまゝ太子に驅せ寄らんとす。）

兵士甲　無禮者！（槍の柄にて押し出さんとす。）

寡婦　（槍の下をくゞり拔け、太子の側に突進し、その足下にうつ伏し）お願ひでございます。お願ひでございます。

兵士甲と乙　（左右より槍の鋒先を擬しながら）退れ、退れ。

寡婦　太子様！

太子　（靜かに兵士を制して）捨てゝ置け。今日は何人も拒みたくないから。（兵士後ろに退く）願ひの筋を云ふがよろしい。

寡婦　ありがたう御座います。有り難う御座います。お止まり遊ばして、どうぞお止まり遊ばして！

太子　（稍おどろいて）誰から？　そなたは何人か。

寡婦　貧しいやもめでございます。名もない小商人の妻でございます。（泣き立てる子を搖ぶりつゝ）お泣きでない。お泣きでない。あはれなみなしごでございます。

太子　（顧みて）女と子供に食物をやれ。

寡婦　いゝえ。いゝえ。それがお願ひではございません。

太子　飢ゑてゐるのではないのか。ひどく疲れて見えるが。

寡婦　倒れ込みさうでございます。もう三日何も食べません。夜通し歩いて來たのでございます。あなた様にお目にかゝつて、親子が干死するのを助けていたゞかうと存じました。けれど〳〵恐ろしいことを聞いた今そんなことは何んでもございません。おつしやつて下さいまし。あれは本當でございませうか。あなた様が檀特山へいらつやると申しますのは。

太子　（しづかに肯く。）

寡婦　（青ざめる）あゝ。やつぱり本當だつたのか。（泣き出して）お止まり下さいませ。太子樣。どうぞ御慈悲に。あゝ、どうしたらいゝだらう。（手をもみながら）おなさけでございます。おなさけでございます。門中のも

のがどんなにお賴り申してゐるか知れないのでございますから。それはもうみんな親の樣にお慕ひ申してゐるのでございますから——

太子 （感動を抑へ乍ら） 女よ、わしは行かなくてはならない。

寡婦 いゝえ。いゝえ。どうあつても止つていたゞかなくてはなりません。あなた樣がおいで遊ばしたら國中のものがどんなに嘆くでございませう。どんなに困るでございませう。明日から此の國には日輪が昇らないのと同じでございます。國中の貧しいものや、年寄はどうするのでございませう。私たちのやうなやもめや孤兒はどうして生きて行くのでございませう。

太子 わしが行くのは皆のためだ。

寡婦 皆のため？ さうでございます。皆があまり貪欲なものでございますから。あまりに——

太子 そなたは間違へてゐる。

寡婦 いゝえ。あまりに愼しみが無いものでございますから。あなた樣が皆を憐んで布施して下さいましたのに、皆はつけ上つて慾張り過ぎました。そのために自分等が何より賴りにしてゐるあなた樣を失はなければならないやうな羽目になるとは何といふ淺間しいことでございませう。嘸愛想が盡きませう。でも赦してやつて下さいまし。皆馬鹿でございますから。皆後悔してゐるのでございますから。

太子 いや、わしは皆を責める氣は微塵もないのだ。皆は責めるにはあまりに人が好い。あまりに自分を知つてゐない。自分の運命の恐ろしいことを知らない氣の毒な人たちだ。わしが行くのは皆に布施するためにもつと〳〵尊い寶が欲しいからだ。

寡婦 （驚いて） 此の上にまだでございますか。あゝ、何處まで御慈悲深いのでございませう。そのお心のために王樣の御勘氣をお受け遊ばして國をお立ち退き遊ばさなくてはならないとは！ （四邊を見廻し）申しお役人樣。どうぞ太子樣をお止め遊ばして下さいまし。お立退き遊ばさなくてもすむやうにおとりなし遊ばして下さいまし。（地に頭をすりつけて） お慈悲深いお妃樣。どうぞ王樣にお願ひして御勘氣の解けるやうお計らひ下さいまし。皆はもう決してお布施をねだるやうなことは致しません。皆本當に後悔してゐるのでございますから。それはもう私が承け合つてもよろしいのでございますから。

（一同沈默。）

寡婦 どうぞ小さなものの願ひを斥けないで下さいまし。（一同の答へざるを見て突然に、狂ふやうに） わたしに命がある限りはお足にすがりついても此處からお立た

せ申しは致しませぬ。强ひてお立ち遊ばすのでしたら、あの御車の軌でわたしの體を轢いてお通り下さいまし。
（地上に身を投げて、泣きくづれる）

太子　（深く感動して天を仰ぎ）　天よ。此の小さきものからこれほどまでに慕はれる價が私にありませうか。私は恐ろしうございます。何卒私がそれに價するほど偉大にして下さい。（愛憐の眼を女の埃にまみれた背に注ぎ乍ら）女よ。わしの云ふことを心を落ち付けてよくお聞き――

（此の瞬間群衆の喧噪極度に達し、群衆の中より「お慈悲でございます。」「國が亡びます。」「暗闇になります。」「餓死します」等の叫び老若男女入り混じりたる聲にて聞こえ、やがて數名の市民後より押されて右手端城壁の前に登場す。兵士、騎馬兵等群集を押し止めんとして槍を揮ひ、馬を驅つて叱咤す。）

太子　（兵士達を制して）　止めなくてよろしい。人民を集まらせてくれ。わしは彼等に別れの挨拶がしたいから。
（兵士等道を開き太子の後ろに警戒す。群衆入り來り皆、太子の前に跪く。）

太子　（天を拜して）　天よ。私の言葉を祝福して出來る限り眞理と愛とを含ましめ、且つ理解し易く語らしめ給へ。人々の心の耳を聰からしめて、よく目前の傾好の情を抑へ、永久の眞理に聽く知慧を眼ざめしめ給へ。（沈默）
（太子の一心に祈禱せる樣を見て群衆は自づと靜肅になる。）

太子　（靜かに、親しげに群衆の側に數歩近よりて）　愛する葉波國の人々よ。わしが今心の底から眞心をこめて語る言葉をどうか心を靜かにして聞いてくれ。わしの言葉は袂別の挨拶なのだ。わしは今そなたたちとお別れすることを堅く〳〵決心して此處に、そなた等の前に立つてゐるのだ。
（群衆色めき、「お止まりなされて！」といふ聲方々に起るが、叱ッ叱ッと制する聲に壓せられて再び靜かになる。）

太子　（聲を勵まして）　わしはお前たちの意に逆らうて此の決心を語ることを決して恐れない。何故なれば、その決心こそお前たちに對する私の愛の印だから。わしは本當にお前達を愛してゐる。わしはかういつて何者の前にも僞はつてゐるとは思へない。これまでもわしの器量の及ぶ限り愛して來たつもりでゐる。これから後も永久にわたしの愛の渝ることはない。お前達はそれを信じてくれるだらうか――
（「信じます、信じます。」と興奮した、おろ〳〵て叫ぶものがある。「太子殿下。」とだけ云つて涙ぐんでゐる

ものもゐる。方々から歔欷の聲が起る。）

太子　（涙ぐみ）　皆信じてくれるね。皆よく聞いてくれ。わしはそのやうに心からお前達を愛してはゐるが、幾ら一生懸命に愛しても、本當にお前達を助ける力がない。どうしたら助けることが出來るかといふ知慧がない。わしが行かなくてはならないのは畢竟そのためだ。——

（群衆動搖し、布施は？　布施は？　といふ聲方々に起る。）

太子　お前たちはあの布施のことをそれ程にいふのか。あの平凡な、下手な、效果の乏しい贈物を！　だがせめてあれがわしのお前達に與へ得る最大の贈物だつたのだ。それがわしの器量の限りを露骨に示してあまりある。わしの力の足りなさを！　またあれだけの布施でそれ程に喜ぶお前達がわしは氣の毒でならないのだ。御覽、わしがどれ程布施をしてもお前達の間に乏しいもの、飢ゑたるものは無くならないではないか。布施の度毎に集る人人は殖えるばかりではないか。王室の寳藏がいくら豐かに見えても、國庫を空しくして布施しても、それを以て人民の苦艱を救はうとするのは、恰も水盤を覆して恆河の砂を潤ほさうとするやうなものだ。假令それが出來たにしても米穀、金帑、器什の類を以て人間の性命の苦患を醫やすことは絕對に出來ない。若しそれで幸福になれるものなら、それ等に事缺かぬ此のわしは幸福でなければならない筈だ。　だがわしは果して幸福であらうか？　わしは心の內に深い〳〵不幸を感じてゐる。わしが宮殿や、父母や、人民と別れて山へ行くのも實にその不幸に堪へ切れなくなつたからだ。わしは自分が生を享けてゐる此の法界が調和あるものであることを感じてゐなくては幸福であることは出來ない。しかし此のまゝでは世界は生あるものが互に鬩ぎ合ふ鬪場としか見えない。でなければ空しい墓場だ。私達は生を悅ぶ。しかし乍ら私達はいつまでも生きられるのか？　あゝ私たちは死ぬのだ！　これは實に〳〵恐ろしい。嚴肅な事實だ。若し私達がいつまでも生きられる道が此の法界の何處かに無いならば、私たちが生を享けたといふことは實に恐るべき禍である。わしはその道が屹度なければならないと信ずるのだ。だからその道を求めに行くのだ。私達は愛に生きる。若し愛がなかつたら私達は恐らく生きたいと願はないだらう。だが愛するものゝ不幸を助け援ることが出來るのか？　いや、それよりも淋しいのは愛するものと別れなくてはならないことだ。これは實に云ひやうのない惡い事實だ。若し相愛するものが永久の別離から免れる道が此の法界の何處かに無いならば、人間に愛のあることは實に恐るべき禍ひだ。わしはその道が必ずなけれ

ばならぬと信ずるのだ。だからその道を求めに行くのだ。實にその道を求めに行くのだ。若し私達が永久に愛するものと共に生きることが出來るならば、他のすべてのものが缺けてゐても猶且つ幸福であり得る。がその事が許されないならば、假令他の凡てのものが備はつても決して幸福であることは出來ない。がその一番大切な、無くてはならぬものが私達には缺けてゐるのだ！　あゝ生きるものが必ず滅び、會ふものが定めて離れるこの永久の、人類に課せられた運命に打ち克つ時にのみ初めて人間は救はれるのだ。本當に幸福になれるのだ。此の難題を解決しないで、宮城が何であらう。王冠が何であらう。あゝ、わしは行かねばならない――

（群衆の聲が方々から起る。「葉波國は滅びます。」と叫ぶものがある。）

太子　（嚴かに）葉波國は滅びるであらう。わしは永久に滅びない國を求めに行くのだ。

（呻吟の聲が群集の中に充ちる。或る者は地に倒れ、或るものは流涕し、或るものは慟哭し、或るものは手を天に伸ばして祈つてゐる。「人民は死にます。」と叫ぶものがある。）

太子　人間は皆死ぬのだ。人間は皆死ぬのだ。わしは永久に死なない命を求めに行くのだ。

（「お止りなされて！」と云ふ聲が天地に充ちる。）

太子　わしの此の決心は、須彌山にかけて搖らぐことはない。わしが止まるならばお前達も共に滅ぶのだ。わしが行くならばお前達も共に救ふのだ。決してわしを止めやうとはすな――

（群衆は、自づと垣をつくつて太子の行く道を塞いでしまふ。）

太子　（大音聲にて）皆よく聞け。今のわしの行く道を遮ぎるものは恐ろしい〳〵ことをしてゐるのだぞ。天の意志に適はないことをしてゐるのだぞ。諸天も鼓を鳴らして讃め給ふわしの今日の旅をお前達も祝して勇ましく送つてくれ。

（群衆は、堵列して、動かうとしない。）

太子　（嘆息して）お前達は遂に理解してくれないのか。此の一番大切な、一番普遍な、何人にでもその心の奥の理性の耳で聽きさへすれば、必ず解らなければならない眞理を受け容れることが出來ないのか。わしが行くのはお前達に取つて益なのだ。人類にとつて益なのだ。お前達が理解しないのを見ても、わしは益々わしが行かなければならない使命を感じる。あゝ天よ、彼等の心の耳をお啓き下さい！

寡婦　（此の時まで跪いて、始終注意深い耳を傾けてゐた

が、突然立ち上つて）太子樣、おいで下さい、私はもうお止め申しは致しませぬ。あゝ、尊い、尊い太子樣。私にはわかりました。あなたのおつしやることは私に、此の何も知らないはしためにはつきりと解りました。あなたの求めにいらつしやるものは本當に私の要るものです。私の欲しいものです。私たちがいつまでも生きられるため、愛するものと一緒にいつまでも生きられるためにはどうすればいゝかといふことを學びにいらつしやるのでございますね。そしてそれを私たちに教へて下さるのでございますね。三年前私の主人がなくなりました時に私はそれをどんなに求めたでせう。あゝそれさへ私に解つてゐるのだつたら！　私はそれは出來ないものとあきらめてゐました。いつの間にかそれを求める氣をなくしてゐました。それは私が心の底では一番欲しがつてゐるものでございますのに。あゝしかしあなたの今の御言葉でやつぱりさうかと思ひました。あの時私が馬鹿氣たことを考へたのではなく、あなた樣のやうな尊い方でもやはり同じ事なのでございました。あゝあなた樣は何てお優しく、お勇ましく、そして私たちにお近い方でございませう。私はやがて此の坊やとも別れなければならない時が來る。此れ程お慕ひ申し上げてゐるあなた樣とお別れしなくてはならない時が來る。それは屹度來る。その時どんなに苦しいでせう。今日お別れするのはどんなに淋しくても、またお目にかゝれる望みがございます。あなた樣をたゞ一圖にお止め申さうと思つたのは私の間違でございました。勇ましくお出でなされて下さいませ。あゝ太子樣。しかしきつと〱また歸つて來て下さるのでございますね。

太子　あゝ、屹度歸つて來るぞ。その時はそなたの本當に求めるものをあげることが出來る。そなたの亡くなられた主人と、も一度逢へる道を教へてあげることも出來るのだぞ。（群衆に向いて）人々よ。お前たちは此の女の言葉を何と聞いたか。此の小さき者の言つたことはわしの心に適うた。お前たちもいさぎよく送つてくれ。わしが今度歸つて來る時には、これまでした布施が塵埃と見える程盛大な布施をするぞ！　此の葉波國が粟散の邊地であつたかと思はれる程光榮ある國の王として歸り、そしてお前達をその國の民としての福祉に與らせるぞ！　其の國土と其の人民との壽命は無量無邊であつて、阿僧祇劫に到るも盡きないであらう。

（群衆は猶は口々に何か云ひ合ひつゝ、堵列して道を開かない。）

太子　あゝ。わしは行く。徒らに別れを惜んでゐる時ではない。一刻遲くなれば、その一刻の間に人類の受ける害

悪は測り知れない程だ。わしは旅を急がなくてはならない。（王妃の側に行き、跪きて）母上よ。私はこれにてお暇申します。（高まつて來る感動を抑へやうと努めつゝ）今日まで母上がおかけ下さつたありあまる程の恩愛は私の胸の底に深く〳〵沁み込んで居ります。淸い〳〵感謝で一杯です。私はあなたを思ふ每に一生感謝といふことを忘れることはございますまい。そしてその度每に道に勵む心を燃え立たせられるでございませう。あなたの名によつて天地をはぐゝむ「母」なる愛を憶念するでございませう。今日までお心をお傷め申上げた事の多かつたのをお許し下さい。私は今日の旅が眞實の報恩に適ふ道であることを信じます。それを信じます故に勇んで參ります。何卒お體をおいとひ下さい。私が成道して歸るのを待つてゐて下さい。（涙を一杯眼に溜めて）若し私が歸りますまでに——

王妃（涙を抑へ乍ら）若しそなたが歸るまでにわたしが死ぬやうなことがあつても、須太拏や、そのために決して志を挫いてはなりませんぞ。それは却つて私の心に適ひませんぞ。今いさぎよくそなたを送る以上私はそれを覺悟してゐますのぢや。その時は私をそなたの母らしく死なしておくれ。假令葉波國がいかなる危難に逢はうとも、そなたは成道するまで歸つてはなりませんぞ。若し落城の知らせを山で聞いたならば、私がどんなに王妃らしい死に就いたかを信じておくれ。私の罪の多い魂がどんなに恐ろしい地獄に墮ちやうとも、そなたが必ず救ひ揚つて下さることを信じてゐますから。

太子（母を拜して）尊き母上よ。あなたの強い〳〵御言葉は今の私をどんなに勵ましてくれたでせう。今あなたは何といふ美しく、そして神々しく見えるでせう！ 私は今程あなたのお顏の輝いたのを見たことはありませんでした。あなたは星のやうです。あゝ。私はあなたを讚仰します。あなたはこれまで一つの冠に充分價して來られましたが、今やまたも一つのもつと高貴な、天的な冠にふさはしくたられました。「法母」の冠があなたの頭に載せらるべきです。今より後萬代までもあなたの御名は人類の子々孫々にほめ傳へられるでございませう。

王妃（涙ぐみて）あゝ私は今選ばれた母の悲しみと誇りとを同時に感じます。高い〳〵絶頂と深い〳〵淵とを同時に感じます。私は昇天するやうた氣がする。けれどもまた死ぬやうな氣がする。諸天よ、私をお讚め下さい。あゝけれど私をお憐れみ下さいまし。私が燈盞に注いだ油がどんなものか見て下さいまし。私の獨兒、私の誇り、私のいのちを——（自分を制して）惠み深き天よ。（一心に祈る）願はくば此の小さき母を憐れみ給うて、我子を

守りてつゝがなからしめ、彼の念願を成ぜしめ給へ。

太子　（默禱す。）

（間。）

太子　（決然として）ではお別れ申しまする。（馬車の方に行きかける）

王妃　あゝ。待つておくれ。須太拏や。――も一度抱かせて――！

太子　（王妃の腕に身を投げる。）

王妃　（太子を抱きしめて）氣をつけておくれよ。からだを大切にして――

太子　母上にも、おいとひ遊ばされて――

（間。）

太子　（靜かに母より離れ、一同に一揖して）ではお別れしますぞ。

廷臣　御健勝に渡らせますやう祈り奉ります。

女官　御念願の一日も早く滿たされますやう念じまする。

夫人　再び御車を迎へまつる日を――！それのみ待つて居りまする。

乳母　（泌々と太子の顏を眺め）お氣をつけ遊ばして――お體を大切に遊ばして――（泣く。）

（一同恭しく頭を下げる。）

太子　（馬車に乘り、人民に向つて一揖しながら）わしは行くぞ。お前たちは互ひに愛し、赦し、和らぎ合つて暮らしてくれ。お前たちは軈てわしが權威あるものとなつて法輪を轉じつゝ歸つて來るのを迎へるであらう。（馭者に）行け。

（馭者車を進めんとす。群衆は口々に叫びつゝ馬車の前に堵列して道を塞ぐ。馭者ためらふ。）

太子　（火の如く）行け。蹂み躪つて行け。今わしの車を阻むものは永劫に呪はれるであらう。

（馭者馬に鞭打つ。馬車群衆の中に衝き進む。群衆思はず道を開く。此の瞬間に寡婦は己れの衣を脫ぎて馬車の前の道に布く。群衆皆これに傚うて衣を脫ぎて道に布く。）

寡婦　（涙と共に聲を振りしぼつて叫ぶ）太子殿下萬歲。

太子　（車上より廷臣を顧みて）東宮の寶庫を開け。すべてわしに屬する財帑を一物も殘さず、人民に施せ。何物にも拒むな。わしがする最後の布施だ。

（太子殿下萬歲の聲天地に充ちる。笳の音。馬車粛々として進む。群衆は口々に或は萬歲を叫び、或は歔欷しつゝ馬車の後を追うて退場す。急に森とする。）

（間。）

王妃　（倒れんとしてわづかに女官の腕に支へられ乍ら）
おゝ諸天よ。お守り下さい。小さき母をお憐れみ下さい。今私から失はれたものが私にとつて何であるか、見そなはし給ふでございませう。わたくしがさゝげた最貴最重の贄にかけてめぐみ深き諸天よ。願はくば私が、今は私にとつて望ましいものとなつた永き眠りに就きますまで、「法母」として誇り支へることが出來ますやうお守り下さい。（女官に扶けられて退場す）

（一同妃に從うて肅然として退場す。一瞬間舞臺空虚。

濕波王侍從をしたがへて登場。

濕波王　おゝ須太拏よ。此の父もそなたを勇ましく送りますぞ。そなたは誠に王の胤であつた。それをはづかしめなかつた。いや／＼そなたはもつと高い天の胤であつたわい。あゝ葉波國はそなたにとつてあまり小さい。そなたは法の國を嗣がねばならない。わが氏はそなたによつて永久にほまれあるものとなるであらう。（間。急に意氣沮喪して）あゝわしの幸福は去つた。今より葉波國の政治はわしの負ひ目となるであらう。

侍從　（暗然として）　陛下の御惱みを深く拜察申し上げまする。

（間。突然殷々として鐘聲起る。）

侍從　陛下！　警鐘でございます。

使者　（騎馬にて急ぎ登場、馬より飛び下り）　申上げまする。鳩留國の軍勢が須大延を眞先に押し立てゝ國境に侵入致しました。

濕波王　（愕然として青ざめる。やがて決心せる如く勇氣凛然として）　直ちに將軍に余の命を傳へよ。全陸軍に出動の準備をなせ。今日正午に余が親ら閲兵するであらう。

使者　かしこまりました。（退場す）

濕波王　戰ひは初まつた。わしは世嗣を失つたが、わしは猶此の葉波國をわが先祖代々の靈に負うてゐる。わしは祖國を守らなくてはならない。わしは最後までわしの義務を果たさう。わしに生命がある限り葉波國は神聖で且つ自由であらう。（侍從をしたがへて退場す）

（警鐘ます／＼はげしくなる。）

――幕――

第二幕

菩提樹の並木に圍まれたる泉の邊。岸邊には曼陀羅華、素馨、百合、蘭等の種々の夏草青々と茂り泉の中には萍蓬(かわほね)、菱、睡蓮等樣々の水草の花の中に一際美しく紅、白、黄等の蓮の華が咲いてゐる。並木を透して遙かに檀特山及びその山脈を望む。道は泉の傍を過ぎ、遠く

檀特山の方に向つてつゞいてゐる。空は晴れ渡り、眞夏の日盛りの太陽は赫々として照つてゐる。三人の波羅門泉の傍の草の上にだらしなく寢そべつてゐる。

波羅門甲　（衣を脱して醜き肌を表はしながら）馬鹿に暑いぢやねえか。これぢや遣り切れねえな。

波羅門乙　無遠慮に照りつけやがるね。（裳を捲くりあげて太股のあたりまで泉に浸りながら）涼しいぞ。冷めたい水がチョロ／＼と踝のあたりを擽つて乙な氣持だ。

波羅門甲　泥足を突込んで水を濁すのは止せ。今俺が飲まうと思つてゐるのだに。（水上の方の泉から瓶に掬みぐつと飲み干して）あゝ、うめえ。恐ろしく渇きやがる。

波羅門乙　（岸に上つて）幾ら波羅門が死太くても、かう燒き付けられちや參つてしまふ。（樹蔭に轉寢をしてゐる波羅門丙の方を見ながら）此奴氣持好ささうに眠り込んでゐやがらあ。

波羅門甲　どうだ。隨分醜い面付きをしてやがるぢやあねえか。ひどく平べたい小鼻のあたりに寢汗までたら／＼搔きやあがつてさ。

波羅門乙　（何か感じたやうに波羅門丙の寢顏を眺め）つまり波羅門の十二醜の中に數へてある鼻正匾㾓と云ふのはあれだらう。

波羅門甲　すると汝の腹の恐ろしく膨れて突き出てゐるのは大腹凸臗といふのに當るわけだらうな。

波羅門乙　（舌打ちしながら）なる程な。汝がひよろ／＼とひん曲つた足付きで歩くのが脚復線戾つて云ふ奴だらう。

波羅門甲　（忌々しさうに）つまりお互に俺たちはあまり美しくは生みつけられなかつたのさ。云ひ換へて見れば善ひ行ひが出來ねえやうに生みつけられたのさ。

波羅門乙　それはさうさ。幾ら善い行ひをしたつて面が醜いからと云つて嫌はれるのぢや始まらねえからな。

波羅門甲　左様さ。そんなものはあの葉波國の布施太子にでも任かせて置けばいゝのだ。

波羅門乙　だが彼奴は奇特な奴たな。あんなに惜し氣もなく金や寶をぶち撒くなんて一寸俺たちには飲み込めねえ話だ。

波羅門甲　なあに金に困らねえものゝやる贅澤な遊びさ。あんな眞似の出來るのも、金や寶が塵埃のやうに見える程不自由したことのねえ結構な身分だからさ。

波羅門乙　だが彼奴は今度城や位を捨て、檀特山へ行つてしまふと云ふぢやねえか。

波羅門甲　それだて。彼奴の醉狂が何處まで高じやうと彼奴の勝手だが、お影で俺たちの折角の寶藏が無になるのには大頭痛たて。何しろ俺たちは彼奴から是まで金銀や

牛馬や穀物や、しこたま絞りとつてゐたものだからな。
波羅門乙　魁が今朝事實を採りに葉波國の方へ行つたのだが吉い報らせを持つて歸れやいゝが。
波羅門丙　（眠りながら突然に）もう放せ。阿魔。そんなに云ふたらまた來てやらあ。
波羅門甲　（噴き出して）此奴眞晝中にいゝ夢を見てゐやがるぜ。いゝ加減にして起きろ。（搖り起さうとする）
波羅門乙　ほつて置いてやれ。此奴が女の子に可愛がられるのは夢のなかより外ねえんだから。
波羅門丙　（突然に立ち上る）可愛い奴め。（眼が醒めて、きまり惡さうに、毛だらけの脛にとまつた蚊を平手で打ち殺し）あゝ痒い。
波羅門甲　（笑ひ乍ら）おい〱お安くねえぜ。何だか面白さうな夢を見て居たやうだつたぢやねえか。
波羅門乙　折角のところを眼が醒めて生憎だつたね。
波羅門丙　（苦笑して）冗談ぢやねえぜ。（溜息を吐いて）恐ろしく蒸しあがるね。あゝ。やり切れねえ。眼を醒ますとすぐ地獄だ。（三人苦々しく沈默す。遙か向うの砂漠の道を象や駱駝を連れた隊商の列が通るのが見える）
波羅門丙　（何か感じたやうに）ねえ。一體俺たちはどうして生まれて來たのだらうね。
波羅門甲　それあおやぢとお袋とがこしらへたのだらうぢやねえか。（呼ぶ）おや蝎だ。あの泉のそばの曼珠沙華の叢の中に這ひ込みやがつた。
波羅門丙　（考へ乍ら）變だな。俺が氣ついた時には俺はもう此の世に生まれてゐるのだ。どうしてさうなつてるるのだか自分にも解らねえ。そしてまはりの皆がして居たから、俺も毎日此の砂漠で乞食と泥棒とをしてゐるのだ。
波羅門甲　（欠伸をしながら）止せ。俺は可愛い女のおのろけでもしやべる時の汝はすきだが、そんな悟りめいた口をきく時にはちつとも好きぢやねえや。
波羅門乙　おや。魁が歸つて來たぜ。向うの坂を自棄に馬を驅けさせて。
波羅門甲　ふむ何處かでまた馬をせしめて來やがつたね。
波羅門乙　彼奴は強欲な、高慢ちきな野郎だが何しろ稼ぐことにかけちや凄い腕だね。
波羅門丙　俺は彼奴などの下に働きたかねえんだが、彼奴に喰つ付いてさへ居りや何とか彼とか儲け口を見付けてくれるもんだからね。
波羅門甲　それやお前なんかより、どの道段違ひに役者が上だあね。それに寶のところ彼奴の仕返しがこはいからね。
波羅門丁　（馬に乗つて急ぎ登場。飛び下りて）何だ。汝

たちはまだ泉の側に坐り込んでなまけてばかりゐやがつて。俺は汗みどろになつて一と働きして來たのに。

波羅門甲　（追從笑ひして）　お歸りなさいお魁隨分暑かつたでせう。

波羅門乙　（泉に浸した布切れを絞りながら）　何しろ汗を拭はなくつちやあ。

波羅門丙　まあ冷たい水を一杯飲むことだ。（瓶をさゝげる）

波羅門丁　拭け。（乙に肌を拭はせ乍ら瓶から水を飲む）

波羅門甲　（馬を幹につなぎながら傍白）　ふむ。歸るとからがみ〳〵怒鳴りやがつて。

波羅門乙　（恐ろ〳〵）　お魁。布施太子の方の首尾はどうでした。

波羅門丁　（不機嫌に）　駄目だ。彼奴とう〳〵底拔けの醉狂になつてしまやがつた。東宮の寶庫は俺が行つた時にはもうすつかり空になつてしまつてゐた。彼奴が門出に人民にみな撒き散らしてしまやあがつた。

波羅門丙　そいつあ惜しいことをしたね。みなで早く行けばよかつた。

波羅門甲　癪だね。そして太子はどうしたい。

波羅門丁　太子は妃と二人の王子を連れて馬車で檀持山へ向けて出發した。

波羅門乙　ぢやあいよ〳〵駄目なんだね。

波羅門丁　なに。まだ絞れるだけ絞らなくちやあ。俺は貧乏百姓の風をして太子の馭者をねだりとつてやつた。田地が荒れて耕作するものがゐねえからと云つて。

波羅門甲　よく手放したもんだね。

波羅門丁　なあに彼奴は否とはいへねえわけがあるんだ。其處をチヤンと捕まへてゐるんだ。俺は早速その馭者を奴隷にたゝき賣つて、馬を買つて、乘つて駈けつけて來た。

波羅門甲　凄いもんだね。

波羅門丁　あんな不細工な馭者より馬の方が調法だからな。

波羅門丙　一體太子は後でどうする氣だらう。

波羅門丁　自分で馭すさ。

波羅門丙　いやはや。

波羅門丁　まだ〳〵絞れるだけは絞らなくちやあ。

波羅門丙　まだかい。

波羅門丁　何だ。欲のない奴だな。まだ馬がある車がある。太子と妃と王子と王女との寶衣もあるぢやねえか。

波羅門乙　へえ。

波羅門丁　汝たちはもつと〳〵腕を鍛へなくちやあ駄目だ。

波羅門甲（感心して）なる程な。だがどうしてねだるのだ。彼奴が手放すか知ら。檀特山まで乘物も着物もなくして行くだらう。

波羅門丁（冷笑して）ひどく思ひ遣りがいゝね。裸で跣足で行くさ。

波羅門丙　あゝ。太子が自分で馭して向うの坂をやつて來たぜ。

波羅門丁　叱ッ。藪の陰について來い。彼處でねだる手を仕込んでやるから。

（丁さきに立ちて退場。甲。乙。丙。馬をつれて後より退場。太子自ら妃、王子、王女を載せたる馬車を馭して登場。）

妃（馬車の上より）あゝ涼しさうな泉だこと。

王女　綺麗な水がふつ〳〵と噴き出してるわ。

王子　水草の花が澤山咲いてるよ。（母の袖を引つぱり乍ら）下りて見たいなあ。

妃（太子に）殿下。御覽遊ばせ。美しい泉ではございませんか。

太子（馬車を緩め）涼しさうな並木だね。

妃　あの深々とした菩提樹の陰で少し休んで參らうではございませんか。

太子　いや休まないで行かう。俺は心がせかれるから。御覽。向うに檀特山が見えてゐる。あの山を見ると、俺はぢつとしてゐられない氣がする。

妃　でもあまり暑うございますから。私たちはあんなに燒けるやうな砂漠を旅して參りましたのでございますもの。それに馭者がなくなつてからはあなたは馴れないお手で御自分で馭していらつしやらなければならなかつたので、大變お疲れ遊ばしてお見えになりますわ。

太子　いや。俺は少しも疲れを感じない。俺は念願で燃え切つてゐるから。

妃　でもお顏色は蒼く、お額には玉のやうなおみ汗が滲んでゐますわ。（無意識的に小さな扇で太子を煽ぎ乍ら）それに子供たちも大變疲れてゐますから。

王女（嘆願するやうに）あたしくたびれちやつたわ。

王子　咽喉が乾いて、乾いて――

太子（一瞬間默想の後）では少し休んで行かう。

（馬車駐る。太子先きに下りて妃を扶け下ろす。王子王女は飛んで下り嬉々とし先きに立つて泉の側に走り寄る。）

王女（泉の縁の綠草の上に足を投げだして）あゝ。いゝ氣持だわ。

王子（しやがんで泉の中に手を突つ込み）冷めたい。冷めたい。

（太子と妃は大きな菩提樹の陰の下草の上に坐す。二人とも自づと沈默す。）

妃　（越し方をふりさけ見て）山や川を越えて乘つて參りましたのね。もう餘程遠く故鄕を離れたのでございませうか。

太子　もう二百里も離れたらう。山まではもう三日の旅程だ。

王子　（手にて水を掬んで飲み乍ら）冷めたくておいしいよ。姉樣いらつしやい。

王女　（木の葉で盃をこしらへ水を掬つて飲み乍ら）おいしいね。母樣も召しあがらない？

妃　母樣もいたゞきますよ。ころぶと危ぶないよ。

王女　（小さな履をぬぎ、裳をからげて泉の中につかりながら）大丈夫ですわ。淺いのだもの。ほんの踝飾りの珠がやつとかくれる位なのだから。

王子　姉樣あれとつて頂戴。あの水の上に浮いてる紅い蓮の花を――

王女　あいよ。あたしとれるかしら――試つて見やう。

妃　（淋しさうに）お城のお庭で遊んでゐるのと同じ氣持なのでございますね。

太子　（元氣に充ちて）無邪氣なものだ。これからは山で色々な獸や鳥などと一緒に遊ぶだらう。

妃　まあ、危ぶないではございませぬか。

太子　いや。あの山では獸も鳥も少しも人間を傷けないさうだ。子供と動物と位ふさはしい友達はないと俺は思ふ。（微笑しながら）俺にはもう見える樣な氣がする。耶利が獅子の背に乘つて威張つてゐるところや、罽拏延が孔雀の尾をつかまへていたづらをしてゐる樣子などが――（夢見るやうに）子供たちは無心のまゝで毎日鳥獸と嬉戲して遊び、樂しむだらう。

妃　けれど宮城でこれまで毎日大膳所から供奉されてゐたおいしい羹や、膾や、滋味の豐かな肉漿やまた、子供たちのよろこぶ饅頭などは無いのでございませう。

太子　いや。あの山には樹木は繁茂して折り傷けるものなく、枝にはさま／＼の甘果が實り、樹かげには美泉、淸池があつて、山中のものは人間も、鳥、獸もその甘果を啖ひ、水漿を飲んで、飢ゑ渴くことを知らないのだ。私たちは一日も早くその聖地に行つて道を學びたいものだ。（波羅門甲、藪の陰より現はれ鞠躬如として太子の前に近づく）

波羅門甲　太子殿下に御挨拶申上げます。

太子　何者だ。此の邊地にわしの身分を知つてゐる汝は？

波羅門甲　私は貧乏な人夫でござります。あなた樣のことを知らぬものがございませうか。葉波國の須太拏太子樣

と申しますれば、私たちには天道様と申すのも同じことでございます。

太子　そのやうな畏ろしいことは云はぬがいゝ。

波羅門甲　（跪いて太子を拜しながら）世にお尊い太子様。あなたは今日まで宮城のあらゆる財寶を惜しげもなく貧乏人にお施し遊ばされました。皆は喜んで涙をこぼし、あなた様を布施太子様とお呼び申上げて居ります。あなた様のお慈悲深さには限りがございません。

太子　いや。俺は俺に不用なものを、それを入用な人々に頒つただけだ。

波羅門甲　左様でございます。私共にとつて尊い寶物もあなた様にとつては塵や埃も同然でございます。あなた様の無欲なお心は本當にあの雪山に積む雪よりも淸うございます。

妃　（氣味惡るさうに）そなたは太子様をたゞ讃仰するためにお出でたのだらうね。

波羅門甲　（追從笑ひして）これはお妃様でいらつしやいますか。それはもう讃めたゝへてお禮を申上げたさに參つたのでございます。

妃　（太子に小聲にて傍白）御用心遊ばせ。また今朝の農夫のやうなものかもわかりませんから。

波羅門甲　お慈悲深い太子様、人の話ではあなた様は一物でも所有してゐられます限りは必ずそれを布施することを天にお誓ひなされたと申しますが、あれは多分本當では無いのでございませうな。ものには限りといふものがございまして――

太子　いや。俺が帝釋天にその誓言を立てたことは本當だ。

波羅門甲　え？　本當でございますか。それは實に驚き入ります。あなたは愈々たゞの人間ではいらつしやいません。私はかうしてお言葉を交はしてゐるのも、もつたない氣が致します。

妃　（傍白）此のおべつか使ひをお斥け遊ばせ。

波羅門甲　實は私は貧乏な人夫でございまして、人様の荷物を荷車で運ひまして、その賃金で渡世致して居るのでございます。何しろ御覧の通り、あまりいゝ體ではございませんのに、人と競爭することの嫌な弱氣なたちに出來てゐますので。その日、その日の細い烟もたてかねる次第でございます、何しろ女房が長わづらひで、子供が澤山でそれが皆馬鹿でございますので、それに――

太子　願ひの筋を眞直に申せ。

波羅門甲　はい。實は馬が一頭欲しいのでございますが、車を曳く馬をな。さうすれば荷物を三倍以上積むことができますので、そして體も無理をしないですみますのでな。

妃　此の馬はとてもあげるわけには行きませんよ。私たちの車を曳くたゞ一頭の馬なのだから。
太子　俺は決して吝んで、あげないのではないのだが、私達はこれからあの遠い檀特山まで行かなくてはならないので馬がなくては困るのだが――
波羅門甲　なる程な。私たち下々のものは重い荷車を曳いて歩いてゐますが、上つ方はお徒歩(かち)では行けますまいて。
妃　私たちがあの遠くの山まで焼砂の道を車を曳いて行けるものですか。考へて御覧。
波羅門甲　御尤で御座います。たゞし私共は遠出に参ります時でも、子供らを荷車に載せて、私が曳き、女房が後から押して参りますが、それは無論私共下賤のものゝすることでございます。幾ら大勇猛心を起して修道にいらつしやるのだからと云つて高貴の方は――
太子　馬を持つて行け。
波羅門甲　（驚いて太子を拝し）え？　本當でございますか。その馬を私共に下さるのでございますか。
太子　（無言のまゝ肯く）
波羅門甲　（ヒョコ／＼頭を下げ乍ら）　あり難う御座います。ありがたう御座います。御影で今日から樂になれます。女房や餓鬼共も助かります。
妃　（心配さうに）　あなた、その馬をやつてしまつてどうして山まで參りますおつもりでございますか。
太子　俺が車を曳いて行かう。
妃　そのやうなことがあなたにお出來になるものでございますか。馴れないお身で――今日御自分で馭していらつしやつたのだつて、隨分御無理だつたのではございませんか。
太子　いや。俺は施しを乞ふものに拒むわけには行かないのだ。
妃　ではございませうが。
波羅門甲　太子殿下に榮あれ。（わざと聞こえるやうに獨白）流石に偉いものだ。これでこそ布施太子の名に恥かないといふものだ。女が男より吝臭いのは下々のものも上つ方も同じことゝ見えるわい。
妃　何ですつて。
波羅門甲　（馬の手綱を樹から解き乍ら）いやなにお妃様。お美しい御婦人方は、其の上にまたお慈悲深くていらつしやいます時には、一層お美しくお見えになるものでございますて。
太子　馬を可愛がつてやれ。
波羅門甲　（馬を撫で乍ら）　はい、はい。可愛いがりますよ。あゝ立派な馬だ。今日から俺が飼つてやるぞ。前の主人よりちつとばかり下作ではあるが、ずつと上手(うはて)な馭

し手だらうて。(手綱を曳つ張り乍ら) ウムついて來い。ついて來い。(馬が動かないのでピシャリと鞭を當てゝ) 歩みやがれ。畜生奴! (荒々しく馬を引き立てゝ退場)

王女　馬は行つてしまふの。

王子　いやだなあ。あんなにひどく打つて。

妃　(淋しさうに) 本當にこれからどうなさいますおつもりでございますか。

太子　お前と子供たちは車に乘れ。俺が自分で曳つぱるから。

妃　そんな事が出來ますものでございますか。

太子　いや。これしきの事が出來なくて、これから先の修業をどうするのだ。もう行かう。愚圖々々してはゐられない。

妃　私もこんな處に永く休んでゐたくは御座いませんわ。けれどこれからどうして、長い燒砂の道を行つたらいゝのでございませう。

太子　さあ。皆乘れ。今の人夫は天王帝釋が化成して俺の安逸になるのを戒めて下さつたのだ。

妃　だつてあなた――

太子　(嚴しく) お乘りなさい。出發た――

(妃、王子と王女をつれて車に乘る。太子自ら轅の中に入り、力をこめて車を曳く。)

妃　(車から飛び下りて) あゝもつたいない。私が後から押しますわ。(車を押す)

(車動く。太子と妃と汗を流し乍ら、まだ五、六間と曳かないうちに波羅門丙襤褸を纒ひ、老いたる人夫の裝ひして登場。)

波羅門丙　(いきなり太子の前に跪きて) お願ひでございます。お願ひでございます。

太子　(車を止め) 何者だ。

波羅門丙　お慈悲深い太子樣。私は貧乏な、年老つた人夫でございます。女房も子供もない賴りない獨りものでございます。私は先刻道で仲間の人夫から太子樣がこれに渡らせられるといふことを聞きまして、取るものも取り敢へず、やつて參りましたのでございます。あり難い太子樣のお顏を一度拜ませて頂きたいと存じまして。私は强欲な仲間とちがひまして、まだ一度も葉波國へ施しをお願ひにあがつた事はございませんので。私は他人の無心はなるべく聞いてやるが、自分の事は自分でやつて、他人に無心を云はないのが私の主義でございますので――

太子　願ひの筋は何事だ。

波羅門丙　それがでございます。太子樣。(めそ〳〵泣き出して) 私がこんなに貧乏を致しましたのもその主義のためでございます。實は私は仲間の奴の係蹄にかゝつた

のでございます。その私を裏切つた奴はあなたから先刻あの立派な馬をねだり取つた人夫でございます。彼奴は實に憎い奴でございます。私は彼奴が貧乏してゐる時にこれまで幾度無心を聞いてやつたか知れません。私は年老つて貧乏になりましたが、それでも彼奴に無心に行きませんでした。すると彼奴が親切さうに金を貸してやらうと申しますので、私は初めて彼奴から借りることにしました。高い利息で僅かばかりの金を。處が運の悪い時には何處までも悪いもので、私が長わづらひを致しまして、その利息が拂へなくなつたので彼奴は私の渡世の只一つの道具である車を取り上げてしまひました。無論拂つた利息はもう疾く元金の幾層倍になつてゐるのでございますが。

妃　(傍白)　此のおしやべりの申すことはどうもあてにならないやうでございますよ。

波羅門丙　私をお憐れみ下さいまし。尊い太子様。私は車が無くては渡世を致す事が出來ません。あの憎い奴は先刻私に道で太子樣から頂いた馬を見せびらかして、私からもぎ取つた車を曳かせて行きました。彼奴の馬小屋では雌馬が仔を三匹も生んだばかりでございますのに。私はくやしくて／＼死にたい氣が致します。私は生れて初めて人様に無心を申しますのでございます。それはあなた樣のお優しいお心をよく存じ上げてゐるからでございます。

妃　此の車は迚もあげるわけには行きませんよ。

波羅門丙　(聞こえぬふりをして)　私はその車でその日その日の渡世のたづきを得たいばかりでなく、あの憎い奴に、車を見せつけて、太子様からかけていたゞいたみ惠みを誇りたいのでございます。

太子　俺はあげたいのだが。お前も見る通り、俺たちは二人の子供を此の車に載せてあの遠方の檀特山まで行かなければならないので、車がなくては困るのだが――

波羅門丙　(わざと聞きちがへて)　はい／＼。その、車が無くてはまことに困りますのでな。老いぼれて、荷物を擔ぐことは迚も出來ませんので――

妃　お前よく御覽よ。殿下が御自分で車をお曳きになつて、此の私が後押しをしてゐるのですよ。

太子　決して吝むのではないが、俺たちに無くてはならないものなのだから――

波羅門丙　(急に皮肉に笑ひながら)　無くてはならないものでございますつて。へゝゝゝ。世間の誰でもが、施しを求める者に拒むときにはいつもさう申すものでございますて。どんな物持でも何一つなくてもすむものだと思つて貯へてゐるものはありませんからな。

妃　お前さうお云ひだけれども私たちは今は物持なんかではありませんよ。私たちは一錢の金貨も、一枚の着替も持たないで城を出たのだから。

波羅門丙　（ニヤ〳〵微笑し乍ら）金貨や着替へがないのでございますつて。なる程な。落ちぶれた王妃は、景氣のいゝ匹婦よりも氣位が高いつて申すのは本當でございますな。

太子　（考へながら）俺と妃とは徒歩でも行けるが、二人の子供は車で無くては無理ではないかと思ふのだが――

妃　どうして子供達があの遠方まで歩いて行けるものでございますか。お城ではやつと閾のなかを歩いたきりでございますもの。あの柔かい足はきつと石ころで傷いてしまひますわ。それに蒸々した燒砂の照り返しで氣息が窒つてしまふでせう。

波羅門丙　私達貧乏なものは男の子供は父親が背負ひ、女の子供は母親が抱いてども、渡世のためには隨分遠方までも歩いて行くのは常のことでございますさあ。

妃　でもお前、少しは考へて見ておくれ。私達はちつとも歩くことには馴れてゐないのですよ。本當に私たちは此處まで旅して來るのでもどんなに苦しみを忍んで來たでせう。

波羅門丙　と申しますのはつまりそれ程までにあなた樣がこれまで結構な目ばかり味はうてゐらつしたといふことになりませうなあ。

妃　まあ、何て意地惡な、思ひやりのない人たらうねえ。

波羅門丙　え！　思ひ遣りでございますつて。滅相な。それは豐かなものが、貧しいものに對して負うてゐる義務かと私は心得て居りますが。

妃　お前、幾ら貧しくても施しを乞ふのは權利ではありませんよ。それは豐かなものが自由意志でする惠みです。ましてお前の樣な物の乞ひ方はゆするのも同然です。

波羅門丙　（露骨に悶々しき態度を示して太子に）如何でございませう。その御車を頂戴することは出來ないものでございませうか。

太子　（妃と丙との會話の間始終默想してゐたが）車を持つて行け。

波羅門丙　（一寸拍子拔けのしたやうな面をするが、やがて追從笑ひをし出して）有難うございます。あり難うございます。（妃の方を横目で見ながら、己れの所有權を確める樣に車體を色々と撫で廻し）どうも立派な車だ。（わざとらしく）流石に腹のさつぱりした太子樣だ。

妃　（淋しさうに傍白）彼んな奴に大事な車を遣つておしまひになるなんて。

波羅門丙　いや。私などは一番遣り甲斐のある人間でござ

いませうて。若し一番正直で、一番餘計する人間が、一番遣り甲斐があるものと致しますればな。

太子　行け。

波羅門丙　はい／＼參ります。（棒の中に入りて、車を曳き試みら乍）あゝ。有難い。お蔭で早速あの强欲な、罰當り奴に此の車を見せびらかして、腹の癒えるまでしつぺい返しを喰はしてやれると云ふものだ。

太子　彼の男は赦してやるがいゝ。

波羅門丙　（無造作に）心得ました。（べら／＼と）太子殿下のみ名によつて赦してやりませう。たゞに、私はたゞ此車でその日／＼の渡世が出來さへすれば、外に望みはないのでございます。（大袈裟に跪きて、太子を拜して）布施太子殿下に榮えあれ。（立ち上り、重たさうに車を曳きて退場）

妃　（心配さうに）　本當にこれからどう遊ばすおつもりでございますか。

太子　王子は俺が背負つて行く。王女はお前手を曳いて行け。

妃　お言葉に乖くのではございませぬが、そのやうなことが出來るとは迚も思はれません。

太子　いや、試つて見やう。これしきの事が出來なくて是から先きをどうするのだ。凡そ此の世の一番貧しいもののする事を俺等も負はなくてはならない。彼等が已でに耐へて來た事を俺等が耐へられないことはない筈だ。それを忌ひ避けてはいけない。それを忌ひ避けやうとするのは俺等がこれまで安樂に暮らして來た惰劣のためだ。

妃　お言葉を返すやうではございますが、私は是まで妃らしい華麗な生活に慣れて參りましたが、それは決して私が特別に安逸を好みましたと申す譯ではございませんわ。私はたゞ生れ乍らに與へられた幸福を享け、またあなたから妃として選ばれて、許されたものを素直に樂しんでゐたのに過ぎないと存じますわ。

太子　お前がさう云ふのは本當だ。お前は決して奢侈ではなかつた。お前の育ちは寧ろ質素な方であつた。お前の生活が多少でも華麗であつたとすれば、それは妃としての位を辱めない莊嚴を保つための必要と、そしてお前の妃らしい上品な趣味のためであつた。たゞさういふ生活が他の無數の衆生の上に築かれてゐたのであつた。それが私達が無意識に積んでゐた業であつたのだ。それは恐ろし勞苦であつた。それに氣の付いた以上は出來る限りその償ひをしなくてはならない。そのためには貧しいものゝ押し付けがましい、布施の要求も拒まないで、受け容れ、また私たちには慣れない勞苦をも辭してはならない。それは實に私たちの業の報いなのだ。それを勇まし

く忍受することは諸天の心に適ふに相違ない。
妃（素直に）御教へ下さいましたことは淺墓な私の心にも深く沁みました。私はあくまでも殿下にお願ひ申します。たゞ私たちの業のために幼いものに難儀を負はせなくてはならないのか、どんなにか苦しうございませう。
太子　あゝ妃よ。それは此の世界で恐ろしい事の中でも一番恐ろしいことの一つなのだ。親の業が子に報いるといふことは！　俺が城を捨てたのは來微國の先祖代々の攻略と貪欲と奢華との業報を背負うたのだ。我が子々孫々の業報を償ひたいためなのだ。
妃（眼を閉ぢて、沈默す）
（此の瞬間に並木の陰より、乞食の裝ひせる波羅門丁、盲者に變裝せる波羅門乙を杖にて導きつゝ現はれ、太子の前に跪く。）
波羅門丁　御願ひで御座います。御願ひでございます。
太子　何者ぢや。
波羅門丁　盲目の父を連れた惨めな乞食でございます。お慈悲深い太子樣。殿下のみ惠みはヒマラヤの山よりも高く、ベンガルの灣よりも深く、ありとあらゆる衆生に隈なく行き渡り、さながらガンジス河の水が兩岸の果畑を潤ほすやうでございます。
妃（堪へかねたる如く、太子に小聲にて）また隣國使ひが出て參りました。
波羅門丁　何卒お憐みをお垂れ下さいまし。今度はお相手に遊ばしますな。困り切つてゐますので。此奴が因果な片輪なものでございますので。
波羅門乙（つくり聲にて）慘めな盲目でございます。死に損ひ奴でございます。
波羅門丁（手をさしだしつゝ）お布施をお願ひ申します。
乙・丁（聲を揃へて）おめぐみを！　お施しを！
太子　俺はあげたいのだが、持つてゐた物は皆施してしまつて、もう何もあげるものがない。汝も見る通り、車も馬もなく檀特山まで子供を背負つて徒歩で行かうと思つてゐた所だ。金も――食物さへも持つてゐないのだ。
波羅門丁　へゝゝゝ。失禮ながらまだ充分にお持合はせのやうに見受けますが。
妃　いゝえ。本當に何も持つてはゐませんよ。
波羅門丁　これはしたり、お妃樣。御手の扇は大層立派なものでございますな。
妃（眉を顰め乍ら）お前此の扇が欲しいのならあげてもいゝよ。
波羅門丁（直ぐ手を出して扇を受取り）いや、どうも有難うございます。（太子に）その立派な寶衣を戴きたうございます。
太子（一瞬間沈默の後寶衣を脱して與へる。纏へる薄き

衣の外裸體となる）

妃 （驚いて） 何て酷い――

波羅門丁 冠を！ 冠を！

太子 （決然として冠を脱して與へんとす）

妃 殿下！

太子 いや、城を出た時から俺はもはや太子ではないのだ。

波羅門丁 （冠を受取つて） ありがたうい厶ます。あり難うございます。（妃に圖々しく） 寶衣を戴きたうございます。

妃 不作法者！

太子 妃よ。お與りなさい。今はすゝんで錦繍の衣を脱ぐべき時が來たのだ。

妃 （一瞬間躊躇して後寶衣を脱して與へろ。薄き肌衣一枚となる）

波羅門丁 （寶衣を受取るや否や） 瓔珞を！

妃 （嚴しく） お控へ！

太子 （靜かに決然と） お與りなさい。

妃 殿下。こればかりは！ （涙ぐんで） あゝ殿下から選ばれた日の光榮の印でございます。

太子 おゝ、妃よ。潔くお與りなさい。その寶石の眩ゆい瓔珞とても今のお前の頭を飾るにはあまりに光なきものになつたのだ！

妃 おゝ殿下！ （決然として、瓔珞を與ふ）

波羅門丁 ありがたうございます。ありがたうございます。生れてからこんな立派なものを手にしたことはございません。（裏を返し、表を返しして眺め乍ら） いや、どうも素敵なものだ。眼がチカ／＼する程だ。

太子 行け。

波羅門丁 はい／＼參ります。 （貪慾な、鳶のやうな眼付でジロ／＼王女の方を眺めてゐる）

妃 （不安を感じつゝ） お前はもう充ち足りたのだらうね。

波羅門丁 十二分でございますよ。お妃樣。此の上頂いては罰が當りますさあ。私はな。處であの因果な盲目奴はまだ何も戴いてはゐませんですが。なあ。おやぢさん。

波羅門乙 （おろ／＼聲にて） お施しを！ おめぐみを！

波羅門丁 お前の洞穴のやうな眼玉にやあ何も映るまいが、王子樣と王女樣はそれあ立派な寶衣をめしていらつしやるのだぜ。

波羅門乙 寶衣を下され。寶衣を下され。

妃 （涙ぐみ） お前たちは幼いもののまで剝がうとするのかい。

波羅門丁 此の死に損ひ奴は強欲でございますな。

太子 （決然として） 王子と王女の寶衣をお與り。

（妃 溜息を吐き乍ら、王子と王女の寶衣を脱がして

與へろ。王子王女は裸體となる。）
波羅門丁（寶衣を乙に渡して）これをお前に與らうとよ。果報者奴が。
波羅門乙（鬚だらけの顏を寶衣にこすりつけて）肌觸りのいゝ、やはらかものだ。おまけに何ていゝ薫りだらう。
波羅門丁（感心したやうに王子と王女を眺め）何て綺麗な頸輪と踝飾りだらうなあ、
波羅門乙（頭を大地にこすりつけて）頸輪を下され。踝飾りを下され。
妃　何てしつこい！
太子　與つてしまへ。
妃（頸輪と踝飾りを解いて與へろ）
波羅門丁（頸輪と踝飾を乙に渡し）今日はお前は大當りだね。お前盲目で却つて結構かも知れないぞ。こんな眩ゆい寶石を見れや、眼がまうてしまふからな。
波羅門乙　やれ／＼。有難いこつた。長生きはして見るものだ。
太子　行け。
波羅門丁　はい／＼只今。（眼敏く太子をジロリと一瞥して）へゝゝゝ。思ひ切りの悪い申出ではございますが、お別れ際のお景物に一つ序でに戴きたいもので。なに。その小函と寶華とをな。
太子　いやこれは與るわけに行かない。これは俺を深く愛するものが、はなむけに、自分の愛の證にくれたのだから。外の俺の所有物とはちがふのだ。
波羅門丁　なる程な。私が勘違ひをしてゐました。（獨白の如く）それはさうだらう。どんな偉い人にでも程度といふものがあるのは當然だからな。幾ら一生懸命の場合、天に立てた誓ひとは云つても例外は一つ位はあることは許されなくてはならないからな。
太子　持つて行け。（寶華と眞珠の小函を丁に渡す）
波羅門丁　え！　頂きましてよろしうございますか、これは／＼どうも。（華と函とを懷ろに收め乍ら）どうも有難うございます。（猶もジロ／＼油斷なく一行の身邊を目祭し乍ら）勿體ないことでございます。（乙の耳元に囁く）もう何も眼ぼしいものはねえぜ。
波羅門乙　畏れ多いこツた。いつまでも業晒しな姿を御眼にかけるより、もう御前を下らうぢやねえか。
波羅門丁　それがいゝ。それがいゝ。（跪きて）太子殿下に榮えあれ。安らかな御旅行をなされますやうに。今日のみ惠みの功德が倍になつて殿下に返りますやうに。おい。おやじさん。お禮を申し上げねえかい。
波羅門乙（よぼ／＼聳て）やれ／＼。勿體なや。お蔭さまで親子が助かりました。

波羅門丁　ぢやお暇しやう。さあ立つた。杖はこつちだ。しつかりつかまへろ。（わざと聞えるやうに）あれこそ本當の施主だ。一物も吝まれなかつた。あれでこそ布施太子の名にそむかねえ。（退場）

妃　（涙ぐみて）深いお教へを受けました今道のためには苦しみを避けやうとは存じませぬが、あまりに私たちの姿が慘めな氣が致しまして――

太子　いや。皆前よりも淸く、美しく見えるぞ。私たちは世俗の裝飾を振り捨てた。これからは與へられた、生れ乍らの美を「法」の光りで飾るのだ。慚愧を上服とし、深信を華鬘とし、戒品を以て塗香とするのだ。妃よ。そなたたちのその玉のやうな體を、七淨の華を布いた浴池で澡いだなら、どんなに美しく、淸らかになることであらう。私はそれを見たく思ひますわい。

妃　（淋しく微笑して）殿下の御意に適ひさへ致しますれば、私はどのやうな姿も本望でございますわ。

太子　（決然として）さあ。行かう。勇氣を出して試つて見やう。さあ。耶利よ。お出で。（王子を背負ふ）

妃　（その樣を見るや、決然として立ち上り）罽拏延や。私についてお出で。母樣が手を曳いてあげるからね。

太子　行かう。お前たちの雄々しい姿は俺を奮ひ立たせる。檀特山は遠いとはいへ既に彼處にあのやうに見えてゐるのだ。泰然とした、嚴かな山ではないか。實に靈山だ。「法」そのもののやうな崇高な、しかも調和した姿だ。鐵のやうに凝り固まつた勇猛心の前に燒砂の道が何であらう。眞夏の太陽がなんであらう。さあ、行かう！（一同退場す）

（引き違ひに波羅門甲、乙、丙、丁並木の後ろより登場す。）

波羅門甲　うまく行つたな。

波羅門乙　何もかもはふり出しやあがつたな。

波羅門丙　見ろ。向うの道をとぼ〳〵行つてらあ。

波羅門甲　羽を拔かれた孔雀といふざまさね。

波羅門丙　（丁に）だが魁の凄い腕前にや今更だが驚いちやつた。

波羅門丁　（蓑を脱ぎ捨て乍ら）何だ。これしきのことに。

波羅門乙　（立つたまゝ尿をして）だがよくはふり出す奴も、はふり出す奴ぢやねえか。

波羅門丁　飛んだ所に感心する奴だね。そりやさうさ。若し太子が貴樣のやうな奴ぢや、迚も幾ら俺らが逆立ちしたつて鐚一文出しやあしめえからな。

波羅門乙　（考へながら）併し考へると少し氣の毒だなあ。

波羅門丁　ふむ。間拔け野郎が。同情心なんか起したけれや、初めつから俺らの仲間に入らねえがいゝや。

波羅門甲　處で獲物の分配はどうして呉れるんだ。

波羅門丙　今日のやうにしこたま獲物のあつた日にや各々勝手なものを取つたらいゝだらう。

波羅門乙　それや無論さうだ。

波羅門丁　なに。鬮だ。さもなきやどうせ喧嘩なしに分けられつこはねえや。だが冠と寶石の函とは俺らがとるのだぞ。

波羅門甲　ふむ。うまくやつてやがる。

波羅門丙　（と面を見合せて、囁く）何處までも強欲な奴ぢやねえか。

波羅門丁　（路傍の草を引拔いて鬮をつくり乍ら空とぼけて）何とか云つたかい。さあ鬮を引け。

波羅門乙　いやなんでもねえ。お前さんの腕前をほめてゐたのさ。（鬮を引く）

波羅門丙　（同じく鬮を引き乍ら）ねえ、魁、俺らもなまじつかな弱氣は止しにして、ちつとお前さんにあやかりたいもんだ。だが今日のやうに根こそぎふんだくりや流石のお前さんも本望だらうな。

波羅門丁　（冷笑して）何だ。慾の少ない野郎だね。

波羅門丙　えゝ？　まだですかい。

波羅門丁　無論さ。まだ大獲物が殘つてるぢやねえか。（甲に）さあ引け。

波羅門乙　（眼を圓くして）おや、おや。

波羅門甲　（鬮を引いて）もう眼ぼしいものは何も殘つてないぢやねえか。

波羅門丁　（あざ笑つて）頓馬奴。まだ殘つてるぢやねえか。あの上玉と二人の餓鬼が——

波羅門乙　（びつくりして）いや、はや。

波羅門丁　おどろくにや及ばねえ。さあ鬮をあけろ。早く獲物を分配して、また仕事にかゝらなくつちやあ。

波羅門甲　（鬮を投げ出して）畜生。また貧乏鬮か當りやがつた。

波羅門丁　（先きに立つて退場し乍ら）さあ。藪の後ろへ來な。俺が手をしこんでやるから。俺は是から大急ぎで馬で間道から先廻りして待伏せしてゐなければならねえ。これからいよ／＼大仕事だ。

（甲乙丙隨うて退場。）

第二場

鬱蒼として繁茂した密林。重なり合つた梢や葉の間から月光さし込み舞臺仄白く照らされてゐる。一面に滴るやうな厚ぼつたい青々とした葉蔭に處々美しい濃艷な色彩の花が燃えるやうに咲いてゐる。其の花は非常に大輪で人をして車輪を聯想せしめる。大きな天を摩

すやうな榕の樹の下に美しい斑のある大きな虎が前足の上に猛々しい顔を載せて眠つてゐる。遠くの森の奥から獸の吠える聲、近くの樹の枝から夜啼く類の鳥の聲が時々聞える外はひつそりとしてゐる。風無く、樹の葉は少しも動かない。突然青葉の繁みが風に撫でられた樣に搖らいて、榕の樹の枝から一頭の大蛇が垂れ下り、鎌首を擡げて虎の鼻先きに擬する。虎はすやすやと眠つてゐる。と蛇に驚いた鳥がけたゝましく鳴く。虎眼を醒ます。蛇を見るや猛然として背を擡げ、牙を剝き、飛びかゝらんとする姿勢をとり、烈しく咆吼す。蛇は一瞬間對峙して後、波のやうに體軀を迂れらして樹上に引きあげる。虎は猶ほ二三度樹上を睥睨して咆哮して後密林の後ろに姿を隱す。またひつそりとする。舞臺一瞬間空虛。と波羅門丁及丙馬を驅つて登場す。

波羅門丁　（馬をとゞめ）　さあ。此處だ。此處で森の蔭に隱れて一行を待ち受けやう。

波羅門丙　（同じく馬をとゞめ、四邊を見廻して）　氣味の惡い程ひつそりしてゐやがる。

波羅門丁　一仕事やるのにや持つて來いの處だ。惡くすると荒療治をやらなくちやならねえかも知れねえから。

波羅門丙　そんなことをやるのかい。

波羅門丁　何だ。もう怖氣づきやがつて。（刀を檢しながら）萬一の時にやあこれでやつつけるのだ。だがそんなことは恐らくあるめえ。

波羅門丙　だが幾ら太子だつて子供は可愛いからな。それに鬼のやうな奴にくれてやるのぢやあな。

波羅門丁　だから貴樣を選んでやつたのだ。貴樣なら幾らかやさしさうに見えるだらうからな。鬼子でも可愛いのと、憎々しいのとあるといふからな。使ひ道はあるものだ。だが度胸を据ゑてしつかりやりな。

波羅門丙　俺らが一人でやるのかい。

波羅門丁　俺は森の後ろで樣子を窺つてゐる。若し貴樣の手に負へなけれや俺が出てやる。だが拜み倒せば彼奴は乾度倒れるんだ。嫌とは云はれねえ譯があるんだから。

波羅門丙　試つて見やう。俺らは嚇しは利かねえが、愁ひは隨分利くのだから。だがこんなに苦心して生白い餓鬼を二人ものにしたところで何になるだらうな。

波羅門丁　馬鹿。王の種ぢやねえか。どんなにいゝ値にだつて賣れるさ。

波羅門丙　ふむ。何處までも凄い――

波羅門丁　叱つ！　向うにやつて來た。森の蔭へ！

（丙と丁退場す。）

（間。）

（太子王子を背負ひ、妃王女の手を曳きて登場。）

妃　（喘ぎ乍ら）あゝ。私はもう歩けさうにはございませ
　ん。

太子　（疲勞のために蒼白くなつた顏に冷汗をべつとりと
　滲ませて）勇氣を出せ。今は大事な時だ。もつと行かう。

妃　私は一生懸命氣を張つてはゐるので厶いますが。（ぐ
　つたりとくづ折れて）もう迚も駄目でございます。暫ら
　く休息させて下さいまし。

太子　此の森林だけ越えてしまへばあの檀特山が見えるの
　だ。あの山さへ行手に見えればまた勇氣か奮ひ起つだら
　う。

妃　（嘆願するやうに）どうぞお休み遊ばして。闍孥延も
　足を傷めてゐますから。

王女　（母の傍に坐し、足を投げ出して）こんなに血が出
　るんだもの。

妃　ひどく痛むかい。お待ち。くゝつてあげるから。（衣
　を引き裂いて繃帶してやる）

王子　（父の背にて小さな足をバタ〳〵させて）下りるよ。
　下りるよ。

太子　では暫らく休んで行かう。（王子を下ろす）

王子　（すぐに母の傍に馳せ寄つて）母樣お乳頂戴やう。
　ひもじいのだもの。

妃　あゝ。ひもじいだらうね。今朝から何も喰べないのだ
　から。（乳房を攪げ）さあ。

王女　あたしも渇いて、渇いて。

妃　あゝ。渇くだらうね。お前もおあがり。（も一つの乳
　房を王女に哺ませる）

太子　待つてゐろ。わしが木の果を採つて來てやるから。
　（も寄りの林の中に行く。）

　（間。）

妃　（思はずうと〳〵眠りかけるがすぐに眼を醒ます）あ
　あ。二人とも眠つてしまつた。疲れてしまつてゐるんだ
　わ。（涙ぐみ兩腕で子供を抱きしめて、接吻し、自分の肌
　衣で掩ふやうにして）かはいさうに！

太子　（林の中から出て來る）さあ、採つて來たぞ。

妃　さつきまで乳を飲んでゐましたが寢入りましたわ。

太子　ではお前おあがり。

妃　はい。（食べやうともしないで考へ込む）淋しい森で
　ございますのね。

太子　淋しい森だね。（勵ますやうに）だが日に照りつけ
　られて、砂道を歩くよりか凌ぎいゝね。

妃　（耳を傾け）獸が吼えてゐますわ。

太子　檀特山へ急かう。彼處では聖人の德で淋しい森の中
　も樂園だ。獸も少しも害をしないのだ。

妃　（淋しさうに考へ込み、やがて涙を膝の上に落す）御免遊ばせ。（あわてゝ涙を拭ひ）私今夜は何だか淋しくて、淋しくて――

太子　氣を強く持て。今は大事な時だ。

妃　どうしたのでございませう。私勢一杯氣を引き緊めてゐるのでございますけれど。何だか此の森にさしかゝつてから、氣が變になつて急に歩く力もつきてしまつたのでございますの。あんなに月が照つてゐますのに雨が降るやうに思へたり、左腕がむづ痒く、右瞼がうるみ、森の樹が皆倒れかゝるやうな氣がしたり、兩方の乳房が變に痙攣つたり致しますの。何か子供達の身の上に凶い事でも起るのでは無いのか知ら――

太子　何をつまらない。お前の氣根が弱つたので色々なことを考へるのだ。

妃　左樣だとよろしうございますが、（身慄ひして）また獸が吼えましたわ。（子供をしつかり抱きかゝへて）子供をとりに來はしないでせうか。

太子　大丈夫だ。あんなに遠方だから。お前氣をしつかり張り締めてゐなくてはいけまんぞ。

（間。）

（突然近くの森の中で角笛の音が聞える。）

妃　（訝しげに）何でございませう。

太子　あれはたしか角笛だが。狼から羊たちを守るために羊飼が鳴らしてゐるのだらう。

（一瞬間沈默。波羅門丙羊飼ひに變裝して角笛を腰に吊し鞭を持ちて息を切らして登場。）

波羅門丙　（いきなり太子の足下に跪き歔欷し乍ら）お願ひでございます。お願ひでございます。

妃　（ギクッとして本能的に子供達を後ろにかばふ）

太子　何者だ。

波羅門丙　（やつと泣き止めて）私は貧乏な羊飼ひでございます。やれ〱。やつと追ひ付きました。坂道を走りつゞけて參りましたので息が切れさうでございます。あなたがあのお慈悲深い布施太子樣でいらつしやいましたか。

太子　願ひの筋を申せ。

波羅門丙　はい〱。有難うございます。私の牧場は荒れ果てゝ居ります。實は女房が永く病みついたきりでございますのでな。迚も私一人ではあの氣まぐれな羊どもの世話を燒く手が廻りません。毎晩狼や虎が襲つて來て荒らし廻ります。それで私は羊の番をしてくれる牧童が欲しいのでございます。

妃　（眞青になる。何か云はうと試みて、唇が空しく痙攣する）

波羅門丙　で誠に申兼ねますがお子様方のお手をお借り申し上げたいのでございます。

妃（せき込んで）お前お願ひ出來ることゝ、出來ないことの別は心得てゐるだらうね。

波羅門丙（おづ〳〵して）左樣仰せられますと誠に恐縮致します次第でございまして。偉い王子樣に賤しい牧童の仕事がふさはしいとは決して思はないのでございますが、何しろあまりに困り切つてゐるものでございますから。それに人の話では、あなた樣方はお城をお立ちになりました時から、もうお位をお捨て遊ばして、世の一番賤いものと同じ列に身を落し、下々の貧しいものと苦しみをお頒ち下さるのだと聞いてゐました。私はそれを聞いて勿體なくて涙がこぼれました。そしてそれではと存じまして、お願ひ申して見る氣になりましたのでございます。決しておなさけにつけ上る氣ではないのでございますが。

太子（考へ込みながら）それ程までに難儀致してゐるのか。

波羅門丙　全く持ちまして、困り切つてゐるのでございます。病氣の女房のために藥が得られないことなどは無論あきらめて居りますが、食べさせる事さへも出來兼ねるのでございます。たゞ羊の番さへしてくれるものさへ居てくれゝば助かるのでございますが。炊事と看護とでぐた〳〵に疲れ切つてしまひますので。

太子　それは不愍なことだ。助けてくれる隣り人は無いのか。

波羅門丙（悲憤するやうに）殿下。番人のゐないのをねらつて墻を越えて羊を盜む奴はゐましても、不幸な隣りのものゝために一槽の秣をも刈つてくれるものはございませぬ。

太子　……

波羅門丙（めそ〳〵と泣き出して）此の樣子ではあはれな妻は屹度今に死んでしまふでございませう。私は貧しいものゝ悲しみと人情の冷めたさとを沁々と感じます。私は寧ろ女房が一層の事邪慳な奴ならまだ心の苦しみは少なからうにとさへ思ひます。女房はどんな乏しさにも、病氣にも少しも不平を申しませず、私を心配させまいと思つてわざと呑氣なやうな風をして見せるのでございます。普段あれ程の働き手であつたのに、それを少しも鼻にかけず、たゞ私に手間へさせる事を氣の毒がつてばかりゐるのでございます。もうすべての苦しみを忍び受けて、運命に身を任せ切つてゐるのでございます。私は襖越しに私の眼の前では苦しい顏を見せない女房が、うめき聲を立てゝお腹を抑へ乍ら、早く死の來るやうに天に

祈つてゐるのを見ました。私は今日も女房の枕元に凝つと坐つてその青ざめた寝顔を見てゐました。あゝ女房もかうして死んで行くのかと思ひました。何一つ惡い事をしない、從順な、働き手の女房が、何うしてこんなに苦しまなければならないのだらうと思ひました。何一つ樂な目もさせないで見す〳〵死なせる自分を腑甲斐なくも思ひました。あゝ。牧童さへあつたらと思ひました。その時私は殿下のことを聞きました。そして矢も楯も堪らなくなつて、後を追つて參りましたのでございます。

太子　（涙ぐみ）世にも氣の毒な夫婦だ。俺に出來る事なら何とかして助けてやりたいが――

妃　（せき込んで）子供たちには迚も羊飼ひの仕事は出來ないのだから――

波羅門丙　大丈夫でございます。お妃樣。遊び半分にでも出來ます。牧場は廣くて、青々として、お子樣方のためには、此の上もないいゝ遊び場でございます。角笛を吹いて、杖を持つて羊たちと遊んでゐてさへ貰へばよろしいのでございます。

妃　でもお前それでは危ぶなくて仕樣がないからねえ。

波羅門丙　どう致しまして。お妃樣。對手は獸の中で一番柔しいと云はれる羊でございます。決してお子樣方をお傷け申すやうなことはございません。

（子供達不意に眼を醒まし、見知らぬ人と父母の語れるを見て、縋り付く。）

妃　（子供を抱きしめて）怖がることはないよ。怖がることはないよ。（丙に、訴へるやうに）ねえ。お前。お前は惡い人では無ささうだから聞き分けておくれ。私はお前のお連れ合ひの人を本當にいとしく思ふのです。けれどそれだからと云つて迚も子供たちを手放す氣にはなれません。なれる筈がありません。どうぞお願ひだから私の心を察してあきらめておくれ。

太子　（妃の樣子を見て動かされて）わしは汝を助けてやりたいのは山々なのだが、他のものと違つて幼い者の事ではあり、また汝も見る如く、妃があの樣に手放すことを悲しがるから、不本意乍ら汝の願ひを叶へてやることが出來兼ねる。氣の毒だが牧童は外で求めねばなるまい。

波羅門丙　あゝ、可哀想な女房よ。お前はどうあつても死なねばならぬわい。（地に倒れ伏し號泣す）

太子　（默然として聞いてゐる）

波羅門丙　お前の運が拙いとあきらめてくれ。わしを腑甲斐ない夫だと思はないでくれ。何一つ樂な目に遇はせることも出來ないで苦勞ばかりさせたのを恕してくれ。（間）わしは太子樣が若しかお救ひ下さるかと果敢ない望みをかけてゐた。併しその唯一つの望みの綱も切れた。

お慈悲深い太子樣もそなたをお助け下さる譯には參らぬさうだ。そなた程の善人が太子樣のお慈悲に洩れなくてはならないといふのもよく／＼不運な生れだなあ。お前は多分今頃明りも點けないで藪蚊に責められ乍ら、痛む腹を抱へて俺が苦い報らせを持つて歸るのを待つてゐるだらう。俺はどう云つて歸つたらいゝだらう。お前が俺の云ふ事を聞いて失望して息が切れはしないかと心配だ。（間）いや／＼お前は初めから當てにしてはゐなかつたらう。屹度さうだ。お前は人情の冷たいことは知り拔いてゐたからな。さうだ。俺は今思ひ當る。俺が太子殿下の處にお願ひに上ると云つた時、お前が變に淋しく淋しく笑つたのを。どんなに慈悲深い人でも他人の幸福よりは自分の幸福を願ふものだと云ふことを俺は今こそ本當に知つた氣がする――

太子　（苦しさうに）　待て！　もつとよく考へて――

波羅門丙　（耳に入らないやうに）　だが恨んではならないぞ。考へて見れば御尤な事だ。此方の運が悪いのだ。誰だつて子供は可愛いのだ。幾ら天に立てた誓ひだと云つても、背に腹は換へられない。慈悲と云つたつて程度問題だ。自分の幸福の保てる限りの話だ。誰を恨むわけもない。不運な星の下に生れたのだ。あゝ。あきらめて死んでくれ。お前を見送つたら俺も後からついて行くぞ。俺は甲斐しよは無かつたが、どんなにお前を愛してはゐたかといふことをそれで知つてくれ。そして俺をあはれみ赦してくれ。（泣きつゞける）

太子　（眼をしばたゝき）　氣の毒な羊飼よ。汝の言葉はわしの心を搾めつけるやうだ。汝が愁嘆するのは本當に尤もだ。汝の身になつたら實に堪へられまい。俺は心から不愍に思ふぞ。

波羅門丙　（我に返つた如く、やうやく面を上げ）　御免下さいまし。太子樣。取り亂した姿をお目にかけまして。あまり絶望致しましたものでございますから。

太子　いやゝ苦しうない。誰がそなたの樣な身の上になつて取り亂さずにゐられやう。

波羅門丙　もつたいなうございます。太子樣。あなた樣からそれほどのお言葉をかけていたゞきますれば死ぬる女房も本望でございませう。ではお暇申上ます。（立ち上りコソ／＼身仕度をする）

太子　（凝つと眺めて）　もう行くか。

波羅門丙　はい。女房が待ち侘びてゐませうから。（眼をしょぼ／＼させて）では御健勝に渡らせられまするやう。（妃に）あなた樣にもおいとひ遊ばされて。

妃　（始終うなだれて聞いてゐたが）おゝ。お行きか。（心苦しさうにしながら）くれ／＼もお連れ合ひに氣をつけ

てあげてね。

波羅門丙　（わざと殊勝に）　あり難うございます。尊いお妃樣にさうおつしやつていたゞいたことをせめて土産に致しませう。嘸ぞ女房もよろこんで死ぬるでございませう。（大地に頭をコスリつけてお辭儀をし）　ではお暇申上げます。（行きかける）

太子　（丙のしよんぼりとした後姿を見送つてゐたが、堪へられなくなつたやうに）待て。

波羅門丙　（振り返り）　お呼び止めでございましたか。

太子　お前に訊くが、お前は連れ合ひの病氣が恢復して、牧童が要らなくなつたら、子供たちは必ず返すであらうか。

妃　（思はずギクッとして不安に堪へぬ面持で二人を見比べてゐる）

波羅門丙　（瞬間的に得意の表情を浮べるが、直ぐ巧みに押し隱して）それは無論でございます。太子樣。私はたゞ可哀相な女房の一命を助けたさに、無理とは知りつゝあんなお願ひを致しましたのでございます。お子樣方に羊の守りをして戴きまして、女房が恢復し、その日の業が立ちさへ致しますれば、私はもう直ぐにも擅特山へ飛んで行つて、お子樣方は屹度お手許にお返し申し上げます。

太子　しかと左樣か。

波羅門丙　（大袈裟な誓ひの徴をしながら）　恒河が逆まに流れませぬ限りは——今のあなたを欺きましたら天罰があまりに恐ろしうございます。

太子　そなたの誓ひを信じるぞ。

妃　（堪へ切れないで）　殿下。御考へ下さいまし。如何に清淨な、信じ易いお心とは申しながら——

波羅門丙　御安心下さいまし。お妃樣。私はよく／＼存じて居ります。幼な兒は親に、とりわけ母親に屬くものであると申すことを——私は屹度お手元までお屆け申します。

妃　（太子に、嘆願するやうに）　殿下、私をお憐れみ下さい。母にとつて子供がどんなものだかお考へ下さい。私はすべてのものを與へました。持物も、衣服も、あの私の、最高の誇りと記念の徴であつた冠までも！　其の事で私が殿下の御教へにお乖き申上げるつもりでは無いことをお信じ下さいまし。若し私がまた他に何物かを身につけてゐるのでございましたら、私は即座にそれを惜し氣もなく與へるでございませう。けれど子供達だけは！　私は堪へられませぬ。私の二つの乳房を切り取つて與へるのでも、まだ／＼それに比べれば易い氣が致します。何卒お赦し下さいませ。

太子　そなたの母らしい慈愛には深く同情する。そなたは

嘸苦しからう。だが妃よ。勇氣を出せ。そなたの胸の底の愛を燃え上らせろ。他人の危難を助けるためそなたの肉身の愛を供へ物にしろ。

妃　でも私の苦しみを忍ぶだけではございません。幼いものがあまり可哀相でございますから。

太子　可愛いゝ子供たちに善い奉仕をさせて、その善行のために諸天の祝福を招いてやるのだ。それが一番正しい親の愛だ。

妃　（泣きながら）殿下、それはあまりにお嚴しい——

太子　妃よ。今は俺の生涯で一番嚴しさの必要な時だ。若しその嚴しさに耐へ得ないならば俺はあまり器量不相應な大願を立てたことになる！　運命が今俺を試みて居るのだ。俺は道のためには恩愛に打ち克たねばならない。

妃　あゝ。私は躓きさうでございます。人は道で生きるのでございませうか。愛で生きるのでございませうか。

太子　おゝ。妃よ。愛こそ唯一の道なのだ。若しその愛が純粹無垢でありさへするならば！　純粹無垢の愛は法の愛だ。母性の愛はまだ不純なものを含んでゐる。それは法の愛まで淨化されて高められなくてはならない。母性の愛を否定するのではない。それを法の愛で包攝するのだ。法の光で照らされた時母の愛は一層生かされて輝くのだ。母の愛の名によつて、法の愛をなみするものは禍ひだ。そなたはその愛で生きてくれ。法の愛に照らされた母の愛で子供たちを愛してくれ。今その愛がそなたに子供たちを放つことを命じるのだ。そなたはその命令に從つてくれ。それは最も深く子供たちを愛する所以なのだから。そなたの胸に法の愛の火を點してくれ。悲を切つて焔を燃えあがらせてくれ。その火を高くかゝげて見よ。その時其處には子供達しか見えないそなたの眸にも可哀相な羊飼の妻が獨り淋しく臥つてゐる姿が映つるだらう。彼の女は死にかけてゐる。妃よ。子供たちを彼の女に送らう。若し私たちが拒むならば彼の女は死んでしまふのだ。

妃　（身を悶えながら）おゝ。私はどうしたらいゝのだらう。私には憐れみの心が乏しいのだらうか。眞理への愛が足りないのだらうか。私はやつぱり子供が放したくない。尊いお教へもよくは耳には入らない氣がする。

太子　今そなたの耳には俺の言葉は空しく聞えるかも知れない。切迫した苦しい心には迂濶にも冷淡にも響くかも知れない。だが俺は飽くまでも道を說かずにはゐられない。そなたや子供たちを愛すれば愛するだけ道に嚴しくならないではゐられない。俺は假令死に瀕してゐるそなたの耳元にでも道を說かずには置かないだらう。俺は說教者としての使命を感じる。法輪を轉ずるために此の世

に遺はされたものゝ天務を――

妃　あゝ。私は息が窒りさうです。

太子　俺はそなたを我が身に親く考へる程そなたに眞理を強ひたくなるのだ。

妃　（眩暈を感じて）あゝ。

太子　（蒼白になりながら）子供を放せ！

妃　（額に手を當てながら一生懸命の努力にて）お許し下さい。私は子供たちを放すことは出來ません。

太子　暫くの間貸し與へるのだ。彼の妻の病氣が癒えるまで――羊飼ひが左樣申してゐるではないか。

妃　でも若しその時になつて――

太子　俺は人間の内にある良心に望みをかける。それはどんな人の心の内にも屹度ある筈なのだから。若しそれが無いとしたら俺がこれから成し遂げやうとしてゐる大願は最後の據り處を失ふ事になる。（跪きて）天よ。私の今かけます望みは屹度眞直な、公けな道の上に立つてゐることを信じます。天の祝福を受けてゐることを信じます。

妃　（抵抗し難きを感じ、慄へながら沈默す）

太子　二人の子供を貸し與へる。連れて行け。

波羅門丙　（跪いて太子を拜し）有難うございます。勿體なうございます。御慈悲深い布施太子樣。女房よ。喜べ。太子樣がお助け下さつたぞ。此の世で誰も顧みてくれる者のないお前を葉波國の御世嗣に渡らせられる須太拏太子殿下がお救ひ下されたのだぞ。これからは附き切りで看病してやるぞ。食物も藥も不自由はさせないぞ。お前は屹度快くなるだらう。此の喜びと感謝とだけでも快くならずには居られまい。（空涙をこぼして）さうだ。お前が恢復したら、夫婦連れであらゆる村々を驅け廻つてふれて歩かう。太子樣がどのやうにして貧しい羊飼の女房にお惠みをかけて下さつたか。どのやうにしてお妃樣がその玉のやうに愛でゝいらつしやるお子樣たちを貸し與へて下さつたかを。

太子　行け。

波羅門丙　はい〳〵。（王子と王女に愛嬌顏をして狎れ狎れしく近寄りながら）坊ちやま。孃ちやま。さあ〳〵此のおやぢの牧場にお伴致しませう。

王女　（母に縋り付き）いやだよ。いやだよ。

王子　（面をしかめて）こはいよ。こはいよ。

波羅門丙　（ますます愛嬌よく）こはいことはございません。おやぢが可愛がつておあげ申しますよ。おやぢの處には澤山かはいゝ羊が居りますよ。

王子　いやだよ。行くのはいやだよ。

太子　お前達は此のぢいやの所に暫らく行つておいで。ぢ

きに歸つて來るのだから。(丙に) 連れて行け。
波羅門丙　さあ參りませう。參りませう。
妃　(絕え入るやうに) お前本當に返しておくれだらうね
え。返して——
波羅門丙　(杖て誓ひの印をしながら) 羊が肉を喰ひませ
ぬ限りは——屹度お返し申します。
王子　(泣き出して) 行くのはいやだよ。いやだよ。
太子　行つてぢいやを手傳つて羊の番をしておやり。
王女　(猶も母に縋りついて) 離れるのはいや。離れるの
はいや。
妃　(優しく) しばらくぢいやの處に行つておいで。ね。
いゝ子だから。そしてぢきにまた歸つておいで。ぢいや
が可愛がつてくれるからね。ぢいやの處には廣い牧場が
あつて可愛い羊が澤山ゐるから。羊たちと遊んでおいで、
いゝかい。ぢきにまた母樣の處に歸るのだよ。(涙ぐみ
ながら) 羊たちの草を喰べるのを見るのはおもしろいか
らねえ。
太子　(嚴しく) ぢいやと一緒にいらつしやい。
波羅門丙　(せき立てゝ) さあ。行きませう。
妃　(猶も縋りつく子供たちを放して、立たせ丙に渡しな
がら) お前可愛がつてやつておくれよ。可愛がつて——
波羅門丙　御安心下さいませ。羊の子でさへ優れた種を大
切にせねばならぬことは羊飼の一等よく心得ねばならぬ
事でございます。まして至尊の王種たるお子樣方をおろ
そかにしてなりませうか。
妃　(も一度子供たちを抱きしめて、接吻して) 氣をつけ
ておいでよ。早く歸つておいでよ。
波羅門丙　(繩を出して) 御免下さいまし。(ジロジロ妃の
面を見ながら) なに若し途中でうつかりして豁問などに
お轉び遊ばすと大變でございますから。(子供の腰に繩
を結び付ける)
太子　(瞑目して) 早く連れて行け。
波羅門丙　(子供たちを引き立てながら) さあ參りませう。
行つて羊たちと駈け比べをして遊びませう。(角笛を吹
いて見せて) かうして吹くと羊が皆集つて參りますよ。
それは面白うございますよ。(丁寧にお辭儀をし) では
お二方氣をつけてお越し遊ばしませ。今日のお惠みは孫
の末まで云ひつたへて忘れませぬ。(泣いてゐる子供を
引き立てゝ退場)
(森の奧で、獸の吠える聲聞ゆ。)
妃　(狂ふやうに) 待つておくれ。も一度子供を見せてお
くれ。私はまだ云ひ殘した事がある。も一度子供を——
(後を追うて退場)
太子　(後見送り暫く不安の表情にて突き立つてゐるが、

跪て跪きて）私はなすべきことをなしました。諸天よ。子供たちをお守り下さい。（一心に祈る）
（間。）
妃　（息せき返つて來て）あゝ、行つてしまひました。（くづ折れて）子供達は行つてしまひました。
太子　（強く）心を勵ませ。今は大願の門出だ。
妃　まるで屠所に曳かれる羊のやうだつた。素裸の腰に繩をくゝりつけられて。
太子　勇猛心を奮ひ起せ。今退轉してはなりませんぞ！
妃　（獨白のやうに）もう二度と子供達に逢へないのではないか知ら。子供達の運命は――
太子　わしは諸天の守護を信じる。妃よ。試みに敗けてはならないぞ。出城の際に母上が世にも見事に打ち克たれたあの同じ試みに、そなたも立派に勝つて見せろ。
妃　（一生懸命心内に鬪ひながら）殿下に選ばれた名譽に適ふために。
太子　勝て。勝ち誇れ。祝福はそなたの頭に下るであらう。
妃　（太子の腕に身を投げて）殿下を、たゞ殿下を命と致しまする。
太子　おゝ。妃よ。（妃を抱く）
（間。）
太子　（妃を靜かに放し、立ち上り）さあ、行かう。一刻も猶豫してはゐられない。
妃　參りませう。今は疲れを恐れてはゐられませぬ。此の恐ろしい森を早く出ませう。
太子　（勇ましく）さうだ。森を過ぎたれば山が見える。聖山の姿は勇氣を奮ひ起たせてくれるだらう。
妃　（見廻して）おゝ、いやな森だこと！（身慄ひして）惡魔が潜んでゐるやうな！
太子　私達は勝つた。だが新しい試みの來るのを畏れねばならない。まつしぐらに檀特山へ！（先きに立ちて退場）
妃　（森の奥の方の道を振り返りながら）……。子供たちよ。つゝがなく行つておくれ。（太子に從うて退場しながら）森を越え、谷を渉り、何處々々までもお隨ひ申上げまする。
波羅門丁　（森蔭より登場）腰拔け奴が出かし居つたぞ。案の條太子奴が拜み倒されやがつた。なる程俺のやうに嚇かすばかりが手でも無えわい。（間）處で二人の餓鬼はうまく賣りつけなくちやあならねえが、一等いゝ價の出相なのは何處か知らんて。
波羅門丙、王子達を引き立てゝ別の道より引き返して登場。）
波羅門丁　（笑ひ乍ら）出かしたぞ。貴樣にしちや少し上

出来だつた。
波羅門丙　魁、冗談ぢやあねえぜ。俺いらあ少し此の稼業がいやになつた。
波羅門丁　何だ。これしきのことが。
波羅門丙　あの妃にや少し藥が利き過ぎたて。
波羅門丁　なあに。俺あ貴様が嘘をつくことの甘いのには少し感心した。あんなに出任かせに嘘がべら〳〵しやべれるたあ賴もしい。その道にかけちや俺もかなはねえや。
波羅門丙　（考へ乍ら）どうもいけねえ。彼奴が鳩のやうな眼付をして云やあがつた言葉が妙に耳に喰つ付きやあがつた。「そなたの誓ひを信じるぞ」つて。
波羅門丁　（丙の肩を叩いて）おい〳〵。しつかりしろ。折角少し腕前が上つたかと思つて望みをけてやつてるのに。
波羅門丙　（頭を振りながら）「カンジス河が逆まに流れませぬ限り」か……
波羅門丁　（王子の顏を眺め乍ら）ふむ。流石に格のある面をしてゐやがるな。（王女の顎を手の平に載せて）ふむ。綺麗だな。……好色な金持のペルシャ人にでも賣り飛ばすかな。それとも俺が使はうかな。
波羅門丙　（何か思ひついたやうに）魁。此の餓鬼を賣るなあ俺いらに任せてくんねえ。

波羅門丁　ふむ。それや望みならさうしてやつてもいゝ。貴様の手柄だからな。だがぬかりはあるめえな。
波羅門丙　大丈夫だ。
波羅門丁　ぢやこの餓鬼等は貴様に任せたぞ。俺らあこれからまた仕事にかゝらなくちや。
波羅門丙　まだかい。
波羅門丁　まだ上玉が殘つてゐらあな。（馬に乘り乍ら）間道から先廻りだ。
波羅門丙　いや、どうも。
波羅門丁　（考へながら）俺ああくまでも「嚇し」でやらう。（馬首を巡らし二三歩行きかけて振り返り凄い目で一瞥して）云つて置くが、萬一餓鬼を逃がしでもしやうものなら後は恐いぞ。
波羅門丙　（ギクッとするが、笑つて見せて）まさか自分が骨折つてやつとせしめた獲物を逃がす馬鹿もあるめえよ。
波羅門丁　ぢやあ任せたぞ。しつかりやれ。（馬に一鞭當てゝ）どれ。又一汗掻かせなくつちやあ。
波羅門丙　俺らも歸らう。（慳貪に繩を曳つぱり）さあ歩め。（王子達を鞭打ち）歩まねえか。
（王子と王女悲鳴をあげて抱き付く。）
波羅門丁　（心地好げにその狀を眺めて）ぢやあ任せたぞ。

波羅門丙　うむ。しつかりやりな。

（丁馬に鞭打つて退場。）

波羅門丙　（後見送つて）チェッ、何處までも酷い奴だ。（間。考へる）俺あ少し嫌氣がさした。何だか腹の底がゾク／＼する。どうもさつき彼の太子に誓はされた時には變に恐ろしかつた。（あちこち歩く）どうも俺には此の稼業は少し向かねえやうだ。彼奴に何日まで喰つ付いてゐたつて碌な事は無えのは知れてゐる。もうい丶加減に彼奴との腐れ緣を切らう。逃げ出さう。さうだ。せめて王子たちを連れて葉波國の宮城へ行かう。彼處なら王孫達をどんなに高くでも買ふだらう。其の金を資本にしてさつぱりと足を洗つて、堅氣な小商なひでも初めやう。さうだ。鬼の歸らぬ間に早く逃げやう。（王子達を連れて退場す）

——幕——

第三幕

巖石よりなれる嶮岨なる山道。間近く檀特山の麓の一部をなせる幽邃なる森林を望む。山道と森林との間に聖地と穢土とを區劃するが如くに一條の清らかなる溪流橫はる。綠滴たる無憂樹の森林と、全く草木なき磽确なる巖山とは著ろしき對立をなす。夏の正午の太陽は赫奕として巖山を照り付けてゐる。岩石の形狀は不思議に或る醜きものを聯想せしむ。

波羅門丁　（馬に鞭打つて峻しき坂路を登つて登場。四邊を見廻して）何て醜い、露骨な山だ、剝き出しの地肌を無遠慮にカツ／＼と日が照りつけてゐやがる。（泡を一杯噴き出して苦しさうに腹を波打たせて喘いでゐる馬を無暗にピシャ／＼と鞭打ち乍ら）歩みやがれ。痩馬奴。（たら／＼流れる埃だらけの汗を筋の一杯浮き出た手の甲で拭つて）恐ろしく燒けつけやがるな。（ウロ／＼見廻して）何だ。休まうにも木影と云つちやあ一つも無えや。馬鹿に蒸々しやがるな。やり切れねえ。息が窒りさうだ。まるで焙烙の上に居るやうなものだ。咽喉がヒリ／＼する程乾きやあがる。（怪しげなる鳥群の鳴き聲聞こゆ）ふむ此の山にや乾度行き倒れの死骸があるな。あの人喰鳥が集つて來るからにやあ。（下を覗いて）恐ろしい崖だな。あゝ地獄だ。（間。向うを見て）あれが檀特山か。馬鹿に綺麗な水だな。（咽喉を鳴らし乍ら）一口飲みてえな。（考へこむ）だが待て。　あれは滅多に飲めねえぞ。惡人があの水を飲むと恐ろしい疫病に取つ付かれると云ふからな。俺はどうも餘り自信は無えからな。畜生。地べたにへいたばつてしまやがつた。立ちやあがれ。四ツ足

奴。（鞭打つ）何だ馬鹿に臭えと思つたらあづり糞を垂れやがつたな。（向うを見て）來たぞ！　立たねえか。（馬をつゞけさまに鞭打つ。馬ヨロ〳〵として立つ）歩め。（岩影に隱れる）

（太子と妃喘ぎ喘ぎ登場。）

妃　あゝ。とても苦しくて。苦しくて。

太子　しつかりしろ。もう一息だ。

妃　（足を引きずり乍ら）とてももう歩けませんわ。（岩角に蹉く）あツ！

太子　（腰布を引裂いて）血を拭へ。俺が縛つてやるから。（跪いて妃の足の傷をくゝらうとする）

妃　いゝえ。よろしうございますの。私息が窒りさうで。窒りさうで。私出來る限りは默つて耐へてゐたのでございますけれど。

太子　氣を確かに持て。

妃　（地べたにへたばつて）あゝ。胸が惡くて、胸が――

太子　（妃を扶け乍ら）しつかりしろ。氣を緊き締めろ。

妃　（眞靑になつて倒れかゝつて）水を。咽喉（のど）がくつ付いて――

太子　（妃を抱きかゝへて）氣を張れ。一生懸命勇氣を出せ。御覽。彼處に崖の下にあんなに綺麗な溪川が流れてゐる。俺が下りて水をとつてくるから。

妃　（太子にしがみついて）いいえ。私の側をお放れ遊ばさないで！　私何だか恐くて、恐くて――

太子　恐いことは無いよ。心を靜かにして俺の腕にもたれて居ろ。苦しいのは今一息だ。御覽。あの聖山を。あの眼のさめるやうな無憂樹の森を。

妃　（一生懸命自分を支へやうと努め乍ら）此處まで來たのだ。もう此處まで來たのでございますもの。

太子　さうだ。此の崖を下つて、あの溪川を渡りさへすればもう檀特山だ。あの長い間憧れ進んで來た靈山だ。

妃　あゝ。あの聖山へ早く入りたい。

太子　今一息だ。あの川に足を浸せば痛みも直きに去るだらう。あの森の靈氣に觸れゝば疲勞も直ぐに醫されるだらう。

妃　（再び靑ざめ乍ら）私どうしたのでせう。氣がさして、氣がさして――（四邊を見廻し身震ひして）あゝ、此處は何て嫌な、不作法な、醜い處だらう。

（此の頃より黑雲檀特山の一角に起り、見る見る四方に擴がり一天俄かに搔き曇る。）

波羅門丁　（影より身を現はす）

妃　（思はず聲（いきごゑ）を立てゝ）鬼が！　（しがみつき）殿下。あの異形の者は何でございませう。

太子　（ギクッとするが睇視して）人間だ。恐れる事はな

い。
波羅門丁（つか／＼と太子の前に進み）葉波國の太子須
太拏に挨拶するぞ。
太子　何者だ。
波羅門丁　俺は波羅門だ。
太子　俺に何用あつて參つた。
波羅門丁　布施の所望があつて參つた。
太子（靜かに）俺は旣に凡てのものを布施して餘す所が
ない。
波羅門丁　凡てものを？　汝は一番貴重な寶を所持してゐ
るではないか。
太子　いや。一物も持つてはゐない。俺はそちに吝んで施
さないのではないのだ。
波羅門丁（齒をむき出して皮肉に薄笑ひして）汝の最愛
のものを除いてはな。
太子（思はず妃を後にかばひ）俺は二人の子供さへも施
したのだ。
波羅門丁　他のすべてのものを施しても、最愛のものを施
さないならば、一物をも施さないのに去ること遠くはな
いわい。
太子（嚴しく）去れ！　そちに施すものは一物もないの
だ。

波羅門丁（から／＼とあざ笑ひ）虚言者よ。汝の後ろに
かばうてゐるものは何ものだ。
太子　……
波羅門丁　俺はそのものを所望するぞ。
太子（靑ざめて）これは余の妃だ。
波羅門丁　汝の妃を俺に施せ。その時初めて汝は凡てのも
のを布施したといひ得るであらう。
太子　妃は俺と一心同體だ。二體にして一體だ。分け施す
ことは出來ないのだ。
波羅門丁　誑言者よ。汝は一波羅門の耳は瞞まし得ても、
天を欺くことは出來ねえぞ。
太子　惡人よ。天の名を呼ぶことを恐れよ！
波羅門丁　僞善者よ。天の名を呼ぶことを恐れなくてはな
らないのは寧ろ汝であらうぞ。
太子（眼を閉ぢる）
波羅門丁　汝は自ら僞はつてゐるのだ。妃を施せ。俺は是
非とも所望するぞ。伴ひ歸つて俺の婢とする。
妃（慄へ乍ら）退りや。無禮者。
波羅門丁（一向頓着せず、圖々しく太子に詰め寄りて）
汝の誓ひは守られねばならねえぞ。
太子（やゝ和睦的に）施すものは拒んではならない。だ
が乞ふものは強ひてはならない。乞ふものには乞ふもの

の踏むべき道があるのだ。

波羅門丁　はゝゝ。汝はあまり甘え過ぎたな。汝は初めから衆生の欲望はこれ位なものと高を括つてゐたのだな。それならば汝はあまり大言を吐き過ぎたのだ。天を輕ろしめたのだ。

太子　いや俺は決して天を輕ろしめたのではない。俺は何ものをも何者にも拒ばない決心で誓つたのだ。だがよもや妃を乞ふものがあらうとは思はなかつた。

波羅門丁　須太拏よ。甘いぞ。甘いぞ。若し善人がその「善」に於て賭けるものが、惡人がその「惡」に於いて賭けるものよりも小さいならば、その善人の權威はどこにあるのだ。俺に敗けずに賭けろ。俺はたつて妃を所望するぞ。

太子　（思はず数歩のり出して何か言ひかけるが、妃の青ざめて、慄へてゐるのを見て再び思ひ返したやうに）善行に賭けるのは、惡行に賭けるやうに容易なものではない。それには恐ろしい犧牲が要るのだ。

波羅門丁　惡行に賭けるのにも恐ろしい犧牲が要るのだ。それには良心を賣らねばならない。汝が拂ふ犧牲は、汝が贏ち得てゐる名譽に對する當然の代價に過ぎないのた。

太子　俺はその代價は已でに充分に拂つてゐる。

波羅門丁　いやまだ決算は濟まなかつたぞ。今こそその刹那が來たのだ。汝は回避することは出來ないぞ。天はその名によつて立てた汝の誓言の實行を迫るのだ。

太子　（天を仰いで）あゝ、天よ。生を人身に享けたるもののあはれな愛をお許し下さるでございませうか。

波羅門丁　（嘲笑して）何だ。汝は此の期に及んで天の課税の割引を哀願しやうと思ふのか。俺は汝はもつと偉大な奴かと期待してゐた。しかるにどうだ。汝は先きには詭辯を以て事實を瞞着しやうと試みるかと思へば、今は哀訴を以て負擔を輕減しやうとあせつてゐる。

太子　（憤然として色をなし、決心せる面持にて手を高くあげ、二三歩波羅門丁の方に進み近づく）

妃　（太子の樣子を見て無意識的に二人の間に身を投げ出し）私を憐んでおくれ。汝が若し鬼でないならば、汝が今要求してゐることがどんなことだか考へて見てお呉れ。そして此の上もう私達を苦しめないでおくれ。

波羅門丁　（空嘯いて）泣いて見せるのは止した方がいゝ。俺の無慈悲な本能を挑發するばかりだから。

太子　（妃の泣き崩れたる態を見て再び決意の鈍りたる樣にて空しく佇立してゐる）

妃　（突然肌衣を脱ぎ捨てゝ丁の前に投げ出し）お前、こ

の肌衣をあげるからこれで滿足しておくれ。それは一等練りのいゝ絹で出來てゐるのだから。私の肌の匂ひが一杯にこもつてゐるのだから。私はどんなことがあつても此の薄絹一枚だけは脫ぐまいと思つてゐた。けれどもお前のためにはこれを脫いだのだ。殿下にさへも一番祕密な閨の中でなくては決して見せない肌を、そちの眼の前に露したのだ。お前これで滿足しておくれだらうねえ。

波羅門丁　（恐る〳〵妃の裸體を眺めながら）　何だ眞晝中に丸裸になりやがつたな。（眼をぱち〳〵させて）　少し眩しいぞ。いや。俺も流石に汝の肌をほめないではゐられねえわい。だが汝は逆上して、一番無分別な振舞をしたと云はなければならねえ。俺は益々汝を欲するぞ。そちのその玉のやうな乳房を見た今、俺はもう金輪際汝を斷念することは出來ねえぞ。

太子　（堪へかねたる如く）　恥を知れ。無作法者奴が。

波羅門丁　所望だ。所望だ。妃を我が所有となす迄は奈落にかけて此處は動かねえぞ。

妃　（眞青になつて手を絞り乍ら）　天よ。波羅門の心に慈心を催ほし下されませい。

波羅門丁　俺は外道の名によつて誓ふぞ。此の禿山から青草が生えねえ限り、俺の心から慈悲は起こらねえぞ。

妃　おゝ殿下。（太子の腕に倒れかゝる）

太子　（妃を抱きかゝへて）　しつかりしろ。（玉のやうな汗を額に一杯掻いて）　波羅門よ。汝が今起こす一念の善心は、千念萬念の菩提心よりも優るのだぞ。汝が若し冥罰を恐れるならば——

波羅門丁　（嘲笑して）　醜いぞ。須太拏。汝はまことに烏滸がましい僭越者であつたわい。或は憐みを求め、或は嚇かし文句を使つて、いかにもして汝の當然負はねばならない課税を免れやうと藻掻く態は、寧ろ笑止千萬だ。何處に大願を立てた大行者の權威があるのだ。汝は空恐ろしい大言をほざきすぎた。天を指し、地を指して途方もない恐ろしい誓言をしたその罰を汝が受くべき時が今來たのだ。神妙に刑罰を受けろ。

太子　（妃をしつかりと抱きしめ、顏色土の如く、焔の如き眸にて波羅門の面を直視せるまゝ無言にて彫像の如く突き立つてゐる）

波羅門丁　さあ答へろ。度胸を据ゑて返答をしろ。さうして返す言葉もなく立つてゐる態はまるで木偶だ。おゝ聖人の假面をかぶつた無細工な木偶だ。

太子　（卒倒せんとして僅かに自ら支へる）

波羅門丁　笑止な僞善者よ。假面を脫げ。己れが約束した布施を己れが拒むのなら、もつと露骨な堂々とした方法をとれ。汝は武力を以て男らしく俺と闘へ。雌を爭ふ二

頭の猛獸のやうに、此の燒山の上で闘はう。
太子　……
波羅門丁　さあ。武器を執れ。（二つの劍を出し、一つを拔き放ち他の一つを太子に差し出す）闘へ！
太子　（無意識に劍を拔き放ち、波羅門丁をめがけて突きかからんとす）
（此の刹那突然電光閃めく。）
太子　（愕然として自己に氣付き、劍を地に投げ捨てる）
波羅門丁　何だ。劍を投げ出したな。汝は闘ふことも出來ねえのか。卑怯者奴。ではいよ／＼妃は俺の所有だぞ。
（雷鳴す）
太子　あゝ天よ。（地に倒れる）
波羅門丁　はゝゝ。須太拏よ。汝は今こそ知つたらう。汝が大それた身の程知らずの大願を立てたことを！　汝は今汝の大願を捨てゝ、俺の前で彼の恐ろしい誓言を取り消せ。しからば俺は汝の負擔(おひめ)を許してやらう。汝が妃を布施することを免かれるためには唯其の一つの道が殘されてゐるのみだぞ。
太子　（身を起し、跪きて天を拜し、一心に祈る）
波羅門丁　（太子の答へざるを見て）　取り消さねえな。よし。（つか／＼と妃に近寄り）婢よ。俺に從へ。（妃の手を捕へんとす）

妃　（ぶる／＼と慄へ哀願に充ちたる聲にて）　殿下！
太子　（妃の聲を聞くや思はず）　待て！
波羅門丁　取り消せ！
太子　（顏色を失ひ、脊の如き汗をたら／＼と垂れる。はげしき苦悶と、心的闘爭と祈禱との數瞬間の後突然立ち上り兩手を天に延ばし）　誓言は神聖であるぞ。妃を汝に與へるぞ！
妃　おゝ。（地に倒れる）
波羅門丁　（一瞬間茫然として突き立つてゐるが驀て獸の如く飛びかゝつて妃の腕を摑み）　來い。
妃　（波羅門丁の手を振り放し）　寄るな。無禮者！
波羅門丁　太子は汝を俺に與へたのだぞ。
妃　（太子にすり寄つて）　殿下。あなたは——あなたは。
太子　（無限の感じを含めて）　曼坻よ。諸天の名によつて立てた誓ひは守られねばならない。
妃　（顚倒して）　わたしを此の下司に——鬼にお與へ遊ばすので御座いますか。
太子　（一生懸命に）　今退轉しては凡てを失ふのだ。
妃　いやです。いやです。あゝ考へても恐ろしい。私に出來ることか出來ないことかお考へ下さい。私はとても、とても——
太子　大願を捨てることは法界を亡ぼすことだ。

妃　あゝ死んでも！　私は死んでも彼に從ふものか！

太子　妃よ。汝の決心は三千大千世界を救ふのだぞ。

妃　あゝ世界も滅び失せよ。私が悪魔に嫁かねばならないなら！

太子　（一生懸命に）汝一人の犠牲は一切の衆生を救ふのだ。

妃　私は既に衆生のために二人の愛兒を施しました。それでまだ犠牲が足りないので御座いますか。

太子　汝自らを捨てゝ俺の成道を助けよ。

妃　おゝ。あまりに酷い――

太子　捨身せよ、捨身せよ。

妃　人身御供をお強ひ遊ばすので御座いますか。

太子　おゝ。俺は強ひるぞ！　わが成道のために汝の身を鬼に供へさせるぞ！

妃　おゝ地獄よ。足下に口を開いて私の體を嚥み込んでくれ。（地に倒れて慟哭す）

太子　（妃の泣く状を凝視し乍ら）今の俺のために己れを失ふものは畢竟己れを得るのだ。無量劫に亙つて不滅の法身を得るのだ。今俺は如何なる犠牲を拂つても成道しなければならない。成道は今の俺にとつて、唯一の誓、唯一の愛だ。今俺が退轉するならば俺は一切衆生と共に汝をも滅ぼすのだ。俺が成道した時俺は汝を鬼の手から奪ひ返すことが出來るのだ。汝に不滅の生命を與へることが出來るのだ。

妃　――

太子　曼坻よ。汝を伴つて聖山に入らうとしたのは抑も俺の誤りであつたのだ。汝は忘れはしまい。城を出る時俺は汝を伴ふことを力をつくして拒んだのだ。その時汝がどうしても聞き入れぬ故俺は萬一の時には汝をも布施する覺悟を語り、汝は堅い決心を示してそれを拒まぬことを誓つた故、俺は汝を此の千載一遇の重大な旅に伴つたのだ。が運命は甘えることを許さなかつた。嚴しい恐ろしい、試練の時が今來た。捨つべきものを一絲だも携へて聖山に入ることは諸天の心に適はぬことであつたのだ。曼坻よ。受くべきものを受けてくれ。俺の成道の蹉きとならないでくれ。俺を助けて大願を成就させてくれ。そなたが若し今の俺をつまづかすなら、億千萬劫は汝にとつて恐ろしい呪詛となるであらう。俺はそなたに強ひずには居られないのだ。

妃　（太子にしがみつき）助けて！　お助けなされて――

太子　行け。妃よ。（骨が砕けるやうに妃をしつかり抱きしめ、妃の眼の底に己れの魂を射込むやうに見入りながら）俺は此の瞬間俺の生涯のどの瞬間よりもそなたを愛してゐるのだぞ！　どの瞬間よりもそなたは俺のものだ

ぞ！

妃　おゝ。（太子の腕の中にて慟哭す）

太子　（燃えるやうに妃を接吻し、やがて決然として妃を突き放つ）

波羅門丁　（馴々しく妃に寄り）さあ。行かう。もういゝ加減にしろ！　俺に随いて來い。連れて歸つて可愛がつてやる。（妃の腕を捕へんとす）

妃　（突然落ちたる劍を拾ひ波羅門丁をめがけて突きかゝる）

波羅門丁　（體をかはし、妃の腕首を捕へ劍を叩き落し）あぶないぞ！　際どい眞似をやりをつたな。はゝゝゝ。だが美しい女が危ない眞似をするのは味なものだて。（振り放さんとして身をも掻く妃の腕を鷲掴みにして）ふむ。何て柔かな、尋常なお手だ。

妃　あゝ。どうしても――どうしても行かねばなりませぬか。

太子　行け。そなたは神聖な神聖なさゝげ物だぞ。人類の救主をつくるために供へられた贄だぞ。衆生の罪業を贖ふために、魔王の怒りをなだめるために選ばれた人身御供だぞ。おゝ。法界を溺らす大洪水を治めるために建てられた人柱だぞ。

波羅門丁　（妃の腕を捕へて引き立てながら）婢よ。さあ。俺に從へ。今日から俺が汝の主だ。

妃　（引き立てられながら太子に畢生の力をこめて）あゝ我が主、我が夫よ。私は今こそあなたの婢、あなたの妻で御座いますぞ。あなたのために私は行きます。あなたの大願を成就させるために、あなたの最も忠實な妻であるために、私は鬼に嫁きますぞ。

太子　おゝ。我が眼、我が玉、我がいのち！　そなたは今こそ正眞正銘の我が妻だぞ。夫の使命を助けるものこそ本當の妻だ。今こそ俺がそなたを選んだことを天に感謝するぞ。尊き尊き妻よ。あゝ我が母は我れを産んだが、我が妻は我を成したのだ！

妃　（汪然として涙を垂れながら）あゝ。我が背よ。その御一言のために私は勇んで嫁きまする。

太子　我が妹よ。俺は汝を鬼の手から奪ひ返さずに置かないぞ。汝を攝取せずには置かないぞ！

妃　その日を、その日を信じて待ちまする。

波羅門丁　（いらだたしく）さあ。行かう。乘れ。（妃を馬に載せ自ら轡をとる）

妃　（馬上より振り返り、渾身の愛をこめて太子を凝視し）殿下！

太子　妃！

（瞬間沈默。此の時沛然として大雨到る。）

波羅門丁　ひどい雨だな。（天を仰いで）眞暗になつて降りやがる。

妃　あゝ。鬼神よ。我がために哭け。葉波國の華、全印度の女の誇りなる曼坻は卑しき波羅門の醜男に嫁くのだぞ。（檀特山の方を仰いで）諸天よ。私をお守り下さい。お嘉し下さい。私を最も美しき女、最も忠なる妻とお賞め下さい。（獨白）私は絶體絶命の場合には自ら玉の緒を斷つことによつて、此の下司男の凌辱を避けることが出來るであらう。

波羅門丁（ピシヤリと馬を鞭ち）さあ。しつかり歩め。畜生奴。貴樣の載せてゐるのは印度第一の美人だぞ。

（妃振り返り／＼波羅門丁に伴はれて退場。）

太子（妃の去るや張り詰めし勇氣の緩みたるさまにて、岩の上にくづれて慟哭す。やゝあつて立ち上り、大雨に濡れながら、暫らく身動きもせず石像の如く突き立つてゐる。軈て奮然として驀直に峻しき斷崖を攀じ下らんとす）

（雷光、雷霆はげしくなる。）

騎馬兵（甲冑を裝ひ武器を持ち、息せき登場、太子を見るや馬を飛び下り）殿下。これに渡らせましたか。一大事で御座いますぞ。

太子　何事だ。

騎馬兵　鳩留國の大軍が侵入致しました。

太子　なに。鳩留國の大軍が？

騎馬兵　彼等は須大延を眞先きに押し立てゝ攻め寄せました。大王親ら葉波國の全軍を率ゐて防ぎ戰はれましたが、戰ひ利なく味方は苦戰です。

太子　父王殿下の御安否は？

騎馬兵　大王は戰陣の先頭に立つて、亂れ足の立つた味方の軍勢を叱咤して、勇ましく奮戰せられましたが、味方は陣形が崩れて、遂に潰走致しました。何しろ敵は靈象を得て勇氣が百倍し、味方は士氣沮喪して居りますので。遂に葉波城は重圍に陷りました。

太子　天よ。葉波國を守らせ給へ。

騎馬兵　私は重大な使命を帶びて、單身重圍を破つて、殿下の後を追つて參りました。殿下、一時も早く御歸國下さい。殿下が御歸國下されば、人民は殿下の旗下に馳せ集つて侵入軍を打ち退けるでございませう。敵は間諜によつて殿下が國を去られて、民心の離散したことを知り、隙に乘じたのでございます。祖國の安危は殿下の一身にかゝて居りまする。一刻も早く御歸國下さい。御伴仕りまする。

太子（默然として、瞑目し）俺は歸國致さぬぞ。

騎馬兵　殿下！　祖國は危殆に瀕して居りますぞ。

太子　俺は山に入らねばならない。

騎馬兵　兩陛下の御生命は風前の燈火の如くでございますぞ。

太子　（木石の如く）恩を捨てゝ無爲に入らねばならないのだ。

騎馬兵　若し一度葉波城が陷落致しますれば、神聖なる國土は荒され、祖先の墳墓は發かれ、處女は犯され、人民は永く他國の壓制の下に哭かなければなりませぬぞ。

太子　俺は不滅の國を求めて行くのだ。無鬪の士と無窮の民とを創りに行くのだ。

騎馬兵　殿下！今は夢を追つてゐる時ではございません。祖國は現前に阿鼻の巷でございます。歸つてお救ひ下さい。人々は殿下の御歸國に唯一縷の望みをつないでゐるのでございます。事は切迫して居ります。夢をして夢を葬らしめて下さい。火は已でに放たれて居るのでございます。

太子　火宅だ。火宅だ。三界を焚燒する劫火を治するものは唯法水あるのみだ。

騎馬兵　殿下！　即刻に御歸り下さい。

太子　俺は歸ることは出來ないのだ。

騎馬兵　殿下は兩陛下の御最期を傍觀遊ばすのでございますか。無辜の民を見殺しに遊ばすのでございますか。辱かしめられる少女を！　虐殺される嬰兒を！

太子　（死灰の如く）俺は山に入らねばならないのだ。

騎馬兵　殿下！　敢て申しまするが、一大事を招いたのは靈象を敵國に布施なされた殿下の御責任でございますぞ。

太子　（心内に苦鬪しつゝ聲を振りしぼつて）惡魔よ。退散せよ。（驅け出さんとす）

騎馬兵　（追ひすがつて）お待ち下さい。（無限の哀願と詰責とをこめて）殿下はどうあつても御歸國なされませぬか。

太子　（決然として）金輪際歸國は致さぬぞ。（檀特山を指して）俺はあの山に行く！　あの山こそ俺が據つて以て魔軍を除ぐ法城だ！

騎馬兵　（急にがつかりしたる態に茫然自失する。一瞬間沈默。軈て奮然地を蹴つて馬に飛び騎り、天を仰いで）おゝ鬼神よ聞け。而して左右に命じて記錄せしめよ。（無限の怨嗟を含めて）葉波國の太子須太拏は祖國を滅ぼし、父母を殺し、人民を賣つたのだぞ。（熱涙をハラハラ滾し）俺は最後まで鬪はう。祖先の墳墓を枕にして死なう。（馬を鞭打ち豪雨を衝いて退場）

太子　（後を見送り大雨に打たれながら、巖上に立つ。一瞬間沈默。軈て枯木の如く卒倒す）

（雨俄かに止み、雷電去り、黑雲次第に四散し、青空

現はる。軈て檀特山の一角より聖なる白雲湧き出でゝ、たなびき、微妙の音樂虛空に聞こゆ。）

帝釋天（侍童を隨へて天に現はる）善哉。善哉。太子。須太拏。

侍童等。（天鼓を打ち鳴らし聲を合せて歌頌す）

一人出家則九族生天。一人出家九族生天。

（大地六種震動。異香薫じ、虛空より花降る。帝釋天と侍童消ゆ。）

太子（我に返り、四邊を見廻す）今のは幻であつたか。あゝ。聖なる、聖なる御姿よ！　嵐は去つた。おゝ俺は試みに勝つたぞ。勝つたぞ。（勝ち誇つて）天王帝釋も鼓を打つて嘉し給ふ此の大勝利をあゝ全世界の山川草木も讃めたゝへよ。（隨喜の涙をはら／＼とこぼし）祖國よ。父母よ。妃よ。子よ。人民よ。須太拏は汝等を此の世界の誰よりも一番深く愛したのだぞ。一番慧く、一番末通りて愛したのだぞ。俺は汝等を悉く救ひ取らずには置かないぞ。天に生れしめずには置かないぞ。（跪いて天を拜し）諸天よ。彼等の運命を守らせ給へ。（間）（立ち上り勇氣凜然として）さうだ。一刻も早く檀特山へ。

（險崖を下らんとして路を選ぶ）

（此時檀特山の麓の無憂樹の森より、孔雀。鸚鵡。舍利。伽陵。頻伽。共命。翡翠等の衆鳥。獼猴。獅子。麋鹿。虎。牛。羚羊。栗鼠の諸獸、及び蛇。蝮。龜。蜥蜴。蟇。百足。守宮。鰐。蝎等の爬ふものゝ類群をなして溪流を渡つて太子の方に向つて來り、歡び迎へ、信じ、順ふ態をなす。）

太子（法喜に輝き）あゝ。禽獸や爬蟲も俺を歡び迎へるのか。（親しげに彼等に近づきて）愛する畜生達よ。俺は今親しく汝等に挨拶するぞ。俺に道を教へてくれ。案内を頼みますぞ。さあ、聖山へ。（畜生の群に圍繞せられて溪の流の方へ崖を下る）

―― 幕 ――

（一九二〇、一二、一七）

俊　寛

（三幕六場）

人　物

法勝寺執行俊寛
丹波少將成經
平判官康賴
有　　王　俊寛の昔の家僮
漁　　夫　男、女、童子等數人
丹左衞門尉基康　淸盛の使者
その從者　數人
船　頭　數人

時

平氏全盛時代

處

鬼界ヶ島

第一幕

（鬼界ヶ島の海岸。荒凉とした砂濱。處々に蘆荻など乏しく生ゆ。向うは渺茫たる薩摩潟。左手はるかに峽灣をへだてゝ空際に硫黄ヶ嶽聳ゆ。頂より煙を噴く。處々の巖角に波碎け散る。秋。成經濱邊に立つて海の彼方を見てゐる。康賴岩の上に腰を下ろして木片にて卒都婆をつくつてゐる。）

成經　あゝとう〳〵見えなくなつてしまつた。九州の方へ行く船なのだらう。それとも都へのぼる船かも知れない。わしの故鄕の方へ。

康賴　どうせこのやうな離れ島に寄つて行く船はありませんよ。そんなに每日濱邊に立つて、遠くを通る船を見てゐたつて仕方がないではありませんか。

成經　でも船の姿だけでもどんなになつかしいか。灰色にとりとめもなく廣がる大きな海を見てゐるとわしは氣が遠くなつてしまふ。わしとは何の關係もないやうに、まるで無意味で、とりつくしまも無いやうな氣がする。せめて向うに髮毛ほどでもいゝから、陸地の影が見えてくれたら。

康賴　それは及びもつかない願ひでございます。此處から一番近い薩摩の山が、絲條ほどに見える處まで行くのでも、どんなに速い船でも二、三日はかゝると云ひますから。

成經　でも船の姿がほんの一寸でも見えるとわしには希望

の手がゝりがつくやうな氣がします。

康賴　それで每日々々海ばかり見てゐるのですか。

成經　十日に一度くらゐは白帆のかげが見られます、でもはれた日でないと雲がかゝつて見えません。だからしけの日は私にとつて實に不幸な日です。朝起きて見て雲が晴れてゐると、あゝ、今日もまた濱邊に立つて船の見えるのを待たうと思つて希望が湧きます。

康賴　希望といふ言葉は本當に私たちにとつてありがたい、けれど身を切るやうな響きを持つて聞えますね。

成經　希望、さうだ希望だ。船の姿は私の一縷の希望だ。だつてそれでゞもなくて何をたのしみに生きるのだらう。若しも何かの不思議であの遠くを通ふ船か此方にやつてくるかも知れない。

康賴　それは神佛の力でなくてはとても出來ることではありません。

成經　それであなたは每日卒都婆をつくつて流すのですか。

康賴　今日でもう九百九十五本流しました。もう五本流せば、熊野權現樣に立てた誓ひの通り、千本といふ數になります。

成經　あ。また白帆が見える。ほんとに幽かで、よく見なくては鷗とまちがふ位小さいけれど。來て御覽なさい。

康賴　私は見ますまいよ。

成經　早く見ないとかくれてしまふ。あなたは初めは私と一緒に每日船を見にいらしたではありませんか。

康賴　けれどとても此の島へは來ないとあきらめたのです。あの船の姿か雲にかくれて見えなくなるときの氣持が恐ろしくなつたのです。私は何だかあの帆を見ると、葬らひの行列の幡のやうな氣がしてなりません。

成經　何を葬るのですか。

康賴　わたしたちの希望を！

成經　（悲しげに）あゝ、止して下さい。私のたゞ一つの希望に、そんなに不吉な想像を描くことは。

康賴　私はそれよりも、日頃念する神樣の不思議の力によつて、都へ歸ることの許さるゝやう祈つた方がいゝと思ふやうになりました。

成經　けれど考へて御覽なさい。その小さな卒都婆か何百里といふ遠い海を漂うて都の方の海べに着くといふことがありませうか。

康賴　でも千本のうち一本位は。

成經　とても九州までも行きはしますまい。潮風に吹き流されて、此の島の磯にでも打ちあげれば、蜑の子が拾うて薪にでもしてしまふだらう。

康賴　然しあれには二首の歌が彫りつけてあります。故鄕

をしたふ歌が。心あるものはまさか焚いてしまひはしますまい。
成經　文字等讀めるやうな人が此島に居るものですか、言葉でもろくに通じない位だのに、男は烏帽子もかぶらず女は髮もさげず、はだしで山川を歩るく樣はまるで獸のやうではありませんか。
康頼　あゝ。わしはあの優雅な都の言葉がも一度聞きたい。あの殿上人の禮容たゞしい衣冠と、そして美しい上﨟の品のよい裝ひがも一度見たい。
成經　此島の女は猿のやうに醜い。
康頼　わしは今朝卒都婆を流しにいつて、岸邊に立つて淋しい事を考へました。わしはわし自身が丹精してほりつけた歌を今更のやうに讀み返しました。何たる淋しい歌だらう。卒都婆は波にもまれて芦のしげみにかくれてしまひました。わしはそれをじつと見送つてゐたら涙がこぼれた。然し神樣には何でも出來ない事はない筈だ。千本の内一本でも中國あたりの濱にでも着いて心ある人に拾はれたら、きつと淸盛の所へ送つてくれるだらう。淸盛だつて鬼神でもあるまい。あの淋しい歌を讀んで心をうごかさぬ事はあるまい。あゝ。我々が此孤島でどんな暮し方をしてゐるかを知つたら。どんなに古里をしたうてゐるかを知つたら。迎への使を送つてくれまいものでもない。
成經　然しそれはあまりにおぼつかない希望だ。
康頼　神を疑つてはいけません、熊野權現は靈驗あらたかな神で御座います。これまでかけた願の一つとして成就しなかつたのはありません。
成經　然しこゝは紀州ではなし、那智の瀧もないではありませんか。
康頼　神は何處にでもゐられます。私があの奥深い森を選んだのは、あたりの樣子が何處となしに那智の御山に似てゐるからです。あれは本宮、これは新宮、一の童子、二の童子と假に所を定め、谿川の流を那智の瀧と思ひ、其處に飛龍權現を形ばかりに祀りたてまつゝたのでございます。どんなに淋しい孤島に流されても、拜する神のないのは堪へられません。あの鬼のやうな淸盛だつて嚴島明神に歸依してゐるではありませんか。
成經　(嘲るやうに)では私は天魔でも祀りませうよ。そしてあの淸盛を呪つてやりませう。
康頼　私は此の間も權現樣に通夜をして祈りました。そして祈り疲れてうと〱しました。すると私は不思議な夢を見たのです。沖方から潮風に吹かれて木の葉が二枚ひらひらと飛んで來て、私の袖にかゝりました。それを手に取つて見ると御熊野の山に澤山ある梛の葉なのです。

よく見るとその葉に歌が一首書いてあるのです。「ちはやふる神に祈りのしげければ、などかみやこへかへらざるべき」と歷々讀みました。あゝありがたいと思つてその梛の葉をいたゞいて眼が覺めたのです。

成經　それはあなたがいつも都へ歸りたい〳〵と思つてゐるから、そんな夢を見たのでせう。

康賴　然しあり〳〵と歌まで覺えてゐるのです。靈夢に相違ありません。たとひさうでなくつても、私はさうと信じたいのです。

成經　それであの卒都婆流しを思ひついたのですね。

康賴　（淋しさうに）はい。

（間。）

成經　俊寛殿は何處へ行きましたか。

康賴　今日も熊野權現にお參りなされました。

成經　あの人は神など拜むやうな人ではなかつたが。

康賴　人間は苦しい眼にあふと神を拜むやうになるものですよ。今でも時々こんな事をしたつて何になるなどと自棄になつて私にあたつたり、それかと思ふと絶望したやうに、溜息を吐いたりなさいます。その癖やはり毎日お參りしていらつしやるやうです。

（此の時雷のとゞろく如く、大いなる音響き渡る。）

成經　あゝ、また山が荒れるな。

康賴　では明日は雨ですぞ。あの山が荒れるときつと麓には雨が降るのだから。

成經　明日は舟の姿も見られますまい。雨降りの日位私は不幸の氣のすることない。私はあなたのやうに信心はなし、雨の漏るあばら家で衣の袖を濡らしながら、物思ひに耽ると、淋しい事ばかり考へられます。希望の影も見失うて、一番寂しいことをさへ考へますよ。……死のことをさへ。

康賴　（身顫ひする）それを云ふのは止して下さい。私はそれを考へるのを恐れてゐるのですから。きつといゝ日が來ますよ。成經殿。私たちは希望を失ひますまい。權現様の御利生でもきつと迎ひの舟が來て、都へ還る事が出來るでせう。

成經　それはあの山から烟の出ない日を待つよりも、はかないことかも知れない。

康賴　でもあの山で硫黄を取つて、集めてそれを漁師の魚や野菜と交換しなかつたら、私たちはどうして生きて行くのでせう。

成經　あの年に一度九州から硫黄を取りに來る舟に賴んで、せめて九州の地まで行くことは出來ますまいか。九州の地にさへ着けば其處からは都へ通ふ船は多いのだがら。

康頼　私等が飛ぶ鳥も落とす清盛に謀叛して、島流しになつてる身である事を、知らない者はありません。迚も船に載せてはくれません。島の漁師たちさへ私等を恐れて近づかぬのではありませんか。

成經　何とかして商人を欺して九州まで行けば、何處かに隱れて時期を窺ふ事も出來るだらう。

康頼　草の陰洞の隅を探しても、あの清盛が見つけ出さずには置きますまい。さうなつたら今度は迚も生かしては置きますまい。

成經　（絶望したやうに）あゝ。私は人間といふものが此の樣な淋しい、乏しい狀態に陷り得るものとは思はなかつた。否や、それよりもか樣な寂寞と缺乏とに耐へても尙ほ生を欲するものとは思はなかつた。私が若し死を願ふことが出來たなら！　私はたびたびさう思ふのです。若し私が私の唯一つの希望を失つて了つたら、も一度都へ歸れるかも知れないといふ、微かな、何の據り處もない此の空想を。（悲しげに）あゝ此の空想を描く勇氣をもはや失つてしまつたなら、私は泥のやうに崩れて死んでしまふであらうと。そしてその方が却つて幸福かも知れないと。けれど濱邊に立つてたまさかに遠くの沖を掠めて通る舟の影を見ると、私には再び希望が媚びるやうに浮かんで來るのです。私をからかふやうに、じらすやうに、幸福を載せて行く舟、やがて戀しい故里の岸邊に着く舟、疲れた旅人は温かい團欒に加はる嬉しさに舟を急がせてゐるのだらう。

康頼　（顏を掩ふ）妻や子の事を考へるのは恐ろしい。

成經　私の子はもう髮を結ふほどになつてゐる筈です。別れる時に三つだつたから。乳母の六條の膝に乘つて、いつも院の御所に出仕する時と同じやうに、何もしらないで片言を云つて私に話しかけてゐました。門の外にはいかめしく武裝した清盛の兵士等が私の車を擁して待つてゐた。彼等のある者は劍や槍で扉を毀れるほどたゝいて早く早くと促してゐた。妻は眞靑な顏をして慄へてゐた。私の袖をつかんで、おゝ妻は姙娠だつたのだ。私は無禮な野武士等の前に跪いて、乞食の如くに哀願した。たゞ出發をほんの五分間延はすことを。たゞ一口妻をはげます言葉をかけてやるために、そして伜の頭髮を別れのまへにも一度撫でゝやるために！

康頼　あゝ、わしが彼の時に受けた屈辱を思へば胸が惡くなる！

成經　野武士等は私の懇願を下等な怒罵をもつて拒絶した。そして扉を破つて闖入し、武者草鞋のまゝで私の館を蹂躪した。私は直ぐに飛び出て馬車に乘つた。彼等が妻を侮辱することを恐れたから。

康頼　北の方はどうなされました。
成經　母は父の安否ばかり心配して泣いてゐました。そして何故私が斯る恐ろしいことを企てたかを掻き口說きました。父はその朝院に出仕する途中で捕へられたのです。
康頼　あゝ。成親殿はどうされたやら。
成經　父の事を思ふのは私の地獄です。淸盛は謀叛の巨魁として父を最も憎んでゐました。淸盛が父を捕へていかに復讐的に侮辱したか。私はそれを聞いた時寧ろ死を欲しました。私は馬車の中で警固の武士等に父の安否を訊きました。彼等は詳しく／＼語りました。不必要な微細なことまで。私を辱しめるために。淸盛は西八條の邸で父を地べたに蹴り落したさうです。その時父が冠をたゝき落されて、あわてゝ拾はうとしたことまで彼等は語りました。その時淸盛がまた蹴つたので父は鼻柱が砕けて黑血が垂れた。その時淸盛は二人の武士に命じて左右から父の手を捕へて地べたに捻ぢ伏せさせ、「彼れに喚かせろ」と云つたさうです。二人の侍は流石に氣の毒になつて、小さい聲で耳下に囁いて「何とでもいゝから聲を立てなさい」と云つた。するとおゝ何たる事でせう。父はつくり聲で悲鳴をあげたさうです。淸盛は大笑ひして勝ち誇つたやうに襖を明けて出て行つた。その時父には無念の表情よりも、寧ろ責苦を遁れた安堵の色が見えた。かういふ事を傍で見てゐたと云つて、明らかに私をからかふ意圖を見せて詳しく／＼語りました。そして彼等は父がかゝる法懦なる器量をもつて、淸盛を倒さうと企んだのは、全く嗚滸の沙汰であると放言しました。無論、私は彼等の話の細部は信じなかつた。併し默つて聞いてゐなくてはならなかつたのです。
康頼　いつもは私の車の先拂ひの聲にも慄へ上つた青侍が、急に征服者のやうに傲慢な態度をもつて臨み出した。彼等と車を同じくすることだけでも堪へられない恥辱と思つてゐたのに！
成經　私は同志の安否を氣遣ひました。しかし駄目だつた。彼等は何事をも隱して語らなくなつたから、私は牢獄の中で幾度も壁に頭を打ちつけて死なうとしました。彼等は私の武器を取り上げてしまつたから。しかし死に切れなかつた。私は死に切れない自分を恥ぢた。併し骨肉の愛と淸盛に對する復讐心とが私を死に切れさせなかつた。
康頼　侮辱されながら、しかも自殺出來ない程の苛責がありませうか。それは實に一種云ひやうの無いわるい狀態です。
成經　淸盛奴は父と私とを同じ備前の國に流しました。
康頼　流石に氣の毒に思つたのでせう。

成經　重盛が懇願したからです。しかし結果は殘酷な惡戲と同じになりました。丁度中を隔てた一つの檻に親子の獸を繋ぐやうに。私の配所の兒島と父の配所の有木の別所とは間近いのです。しかも決して逢ふことは許されないのです。その缺乏と恥辱との報知だけは頻りに聞えるけれども。（間。顏色が惡くなる）遂に私は父が殺されたといふ噂を聞きました。しかしその眞否は確めることが出來ないうちに、此の鬼界ケ島に遷されてしまつた。

康賴　それはきつと虛報でせう。重盛が生きて居る限りはよもや成親殿を殺させはしますまい。自分の愛する妻の兄を！　假令淸盛が何と云ひ張つても。

成經（頭を振る）いや虛報ではありますまい。虛報にしては、餘りに細部に渉つた報知だつたから。淸盛は父をひどく憎んでゐました。彼は自分の憎惡を復讐せずに制することの出來るやうな奴ではありません。西光殿をあらゆる殘酷な拷問によつて白狀させた後で、その口を引き裂いて首を梟けた程の淸盛です。あゝ彼等は父を殺すのにどんな恥づべき手段を用ゐたことか！

康賴　重盛に祕して、暗夜に刺客を忍び込ませましたか。

成經　彼等は鼠を斃すに用ゐる毒藥を食に盛つて、父を毒害しやうとしました。父が病死したと云つて重盛を欺くために。しかしそれが成功しなかつたので、（よろめく）あゝ。殆ど信ずることの出來ないやうな殘酷な方法です。葦の密生してゐる高い崖の上に連れ出して、後ろから突き落したのです。父は葦に串刺しにされて悶死したさうです。そして父が踏み辷つて落ちたと云ひふらさせたのです。

康賴（耳を蔽ふ）あゝ。わしは聞くに耐へない。

成經　その殘酷な父の最期を聞きながら、一指をも仇敵に觸れることの出來ない境遇に在ることは恐ろしい。その境遇に在りながら、死に切れない身は猶は恐ろしい。（面を蔽ひ、くづ折れる）

（間。）

康賴（森の方より通ずる道を見る。いたく心を動かされたるさまにて）俊寛殿が歸つて來られます。

成經（顏をあげ、向うを見る）何か考へ込んでゐられますね。

康賴　まるで蜻蛉のやうに痩せてゐる。

成經　ひよろ〳〵して今にも倒れさうな足どりをしてゐる。

康賴　あゝ、影のやうな力ない人間の姿だ。

成經　私はまるで人間のやうな感じがしません。木の株が歩いてゐるやうな。それとも石のきれか。

康賴　あゝ、立ち止りました。岩にもたれて溜息を吐いて

ゐる。疲れたのでせう。

成經　沖の方を見てゐます、

康賴　いや、何も見てゐるのではありません。空虚な目付をしてゐます。

成經　あゝ墓石だ。あゝして凝と凝として動かないところはまるで墓石だ。

康賴　（身慄ひをする）あゝ。

俊寛　（登場。溜息を吐きつゝ、海を見入る）

成經　呼んでやりませう。私等にも氣がつかないのだ。

康賴　（二三歩あゆむ）俊寛殿。

俊寛　（じつとしてゐる）

成經　（聲高く）俊寛殿。

俊寛　（二人の傍に近づく）私に力を與へて下さい。私をはげまして下さい。私は絶え入りさうです。

成經　（俊寛を抱く）今希望を失ふ時ではありません。

康賴　あゝ神々よ。

俊寛　私はその名を呼ぶのがいやになりました。我々に此の非運を與へた神に祈るのが。正しきものゝ名によつて兵を企てた勇士をかゝる悲慘な境遇に陷らしめ、そして王法の敵にかゝる榮えをあたふる如き不合理な神々の前に、乞食の如くに伏してあはれみを求めることが！

康賴　神々は正しく照覽してゐられます。耐へ忍んで祈つて倦きなかつたらいつかは我々の日がきつと來るでせう。

俊寛　あなたは本當にさう信じるのですか。

康賴　信じてゐます。

俊寛　本當ですか。

康賴　本當に信じてゐます。

俊寛　（康賴の面を見る）嘘ではありますまいね。

康賴　（面をそむける）嘘ではありません。

俊寛　どうぞ今日ばかりは本當にいつて下さい。私は一生懸命なのですから。私を慰さめようと思つて僞りの證を立てないで下さい。私は今日も熊野權現に日參して祈りました。しかし駄目です、私は本當に信じてゐないのですから。祈りの心はすぐに涸れます。私は宮の周圍に生えた不恰好な樹立と、そしてちよろ〳〵と落ちる谷水を見てゐると、何とも云へない缺乏の感じに打たれました。その感じは祈りとか望みとかいふやうな、すべての潤うた感じを殺してしまふやうないやなものでした。一體此の島に生えてゐる草や木はどうしてこんなに醜いのでせう。私はすべての陰氣なものを生み出すやうな祠の陰の濕地にぐじや〳〵になつて、簇り生えた一種異樣な不氣味な色と形をした無數の茸を見つけました。その時私はたまらなくなつて立ち上りました。私は餓鬼の祠を拜ん

でゐるのではないかと云ふ氣がしたのです。

康頼　（力なく地面を見つゝ）　地獄の底にも神はゐられます。

俊寛　あゝあなたがその通りの言葉をもつと自信を以つて云つて下すつたら！

康頼　法華經の中にも入於大海假使黑風吹其船舫飄墮羅刹鬼國其中一人稱觀世音菩薩名者是諸人等皆得解脫羅刹之難とかいてあります。

俊寛　權威を以て云つて下さい。それは嘘ではありませんか、あなたは信じますか。

康頼　（うつむく）　私はそれを信じます。

俊寛　（溜息をつく）　あゝあなたは囚徒の如く不安な態度で佛の名をよばれます、此の大切な證を立てるのに私の顏をも見ないで――あゝ。

成經　（堪へかねた如く）　康頼殿の唯一の希望を毀するのはよして下さい。

俊寛　いや。私は私の唯一の希望を毀しました。

成經　（俊寛の肩をたゝく）　我々は今絕望する時ではありません。我々は最後の瞬間まで勇士としての覺悟を失ひますまい。勇士の子孫としての誇りを。あなたはあまりに衰へました、私たちがいかにあなたに信頼してゐるかを思つて下さい。

俊寛　私はもうその誇りを失ひさうです。

成經　蘇武は胡國との戰爭に敗けて、異域の無人の山に餓ゑた獸のやうになつて、十五年間もさまよひ暮らしました。しかしその困苦に耐へ切つて遂に漢の都に歸ることが出來たではありませんか。

俊寛　あゝ、都よ、都よ、私はその都といふ言葉を聞いただけでも戀しさに慄へるやうだ。

成經　歸れますよ、屹度も一度その都の地を踏む時が來ます。

俊寛　若し清盛がも一度都へかへしてくれたら、私は清盛が私に加へた罪惡をも許してやり、清盛の武運を祈つてでもやらうものを。

成經　おゝ、私は私の耳を信ずることが出來ない、あなたの口からそんな言葉の出るのを聞くとは思はなかつた。

康頼　俊寛殿はもはや何も反省することは出來ないのです。夢中で云つてゐるのです。故鄕を慕ふほかには何も考へられないのです。

俊寛　（耳を傾けず）　妻はどうしてゐるだらう。あの氣の弱い妻は、娘はどうしたらう。もう今年は十一になる筈だ。おゝあのよく泣いて母を困らせた伜はどうしたらう。あの小さな、可愛ゆい奴は。無事に育つてゐるだらうか。（間）若しや清盛か。（慄へる）いや、そんな事は

決してない。彼だつて人間の心は持つてゐるだらう。重盛もついてゐる。あゝそれよりも若しやあの純潔な、誇りをもつた妻が、侮辱されるのを恐れて、子供を刺し殺して、自害しはしなかつたらうか。いや決してそんなことはあるまい。わしの安否も定まらぬうちに、自害する勇氣はとてもあるまい。それに有王がついてゐる。あの忠實な勇敢な下僕が。他のすべての家來が皆背き去つても、有王だけはきつと最後まで守護してゐてくれるだらう。（間）しかし、もしも、もしも、（間）わしの苦しみは決定することの出來ない苦しみだ。決定する材料の得られない苦しみだ。しかも死んでゐるか、生き存へて恥を忍んでゐるか、二つの凶事の中から、決定しなくてはならないのに！　わしは人間に想像力があるのが恐ろしい。不吉な想像よ。わしを放つてくれ。わしに息をつかせてくれ。

康頼　神樣にすがりませう。靈驗あらたかな熊野權現の利益によつて――

俊寛　もう止して下さい。神の名をきくのも嫌な氣がする。私は信じません。我々の神はすでに我等を見捨てたのではないか。正しき我等を。そして清盛の惡を祝してゐるのではないか。

康頼　神のことをそんな云ひ方をなさつては――

俊寛　丁度暴虐な主人に仕へる犬が、幾度鞭で打たれても、今度は、今度はと思つて、媚びるやうに尾を振つては、憐れみを乞ふやうな眼付をして、泣き聲を立てるのを聞くやうないまいましい氣がする。

康頼　（力なく）あなたは私を犬に例へるのですか。

俊寛　主人は外に氣に入る犬を手に入れたので、もうその犬を殺さうと無慈悲に決心してゐる。主人の興味はもはやいかにおもしろく殺さうかといふ事にのみかゝつてゐる。

康頼　神の名のために、俊寛殿。

俊寛　（罵るやうに）我々はもはや神を捨てゝ外道を祭つた方がいゝかも知れない。

成經　（耳を蔽ふ）私は祟りを恐れます。

俊寛　（此の前後より山鳴動することはげしくなる）みな祟りかも知れない。（何事かを思ひ出す。慄く）我等一味はもう疾くから祟られてゐるのだ。わしは今本當にさう思ふ。わしは今日まで隱してゐたことを話してしまはう。私は獨りで此の重荷を心に負うてゐるのにもはや堪へ切れなくなつた。

成經　もはや此の上瀆す言葉を吐くのは止して下さい。

俊寛　（成經の面を見る）あなたは何も知りませんな。成親殿は我子に語ることをも恐れてゐたと見える。

成經　父が何と致しました。

俊寛　成親殿は神を瀆しました。

成經　少しお愼しみなされい。いかに自棄になつてゐるとは云ひながら。

俊寛　この事を知つてゐるのは私とあなたの父上より外にはない。成親殿は恐ろしいことを企らみました。私は一生懸命止めて見たのだ。しかし成親殿はまるで何ものかに憑かれてゐるやうに頑固たつた。私は力の限り抵抗したけれども、彼れの欲望に征服されてしまつた。彼れの欲望は奈落の底に根を持つてゐるやうに強かつた。

成經　此の上聞くのは恐ろしい。しかし私の耳は聞かずにはゐられない。

俊寛　私は短く話します。思ひ出すのも恐ろしいから。あなたは成親殿が宗盛と左大將の位を爭つたのを知つてゐますね。

成經　父は宗盛をひどく憎んでゐました。法皇は父にその位を與へたいと思つてゐられるのに、あの清盛がそれを妨げましたから。

俊寛　あの時成親殿は八幡の甲良大明神に百人の僧を籠らせて、大般若を七夜の間行じさせました。その時宮の前の橘の木に、男山の方から山鳩が三羽飛んで來て怪しい聲で鳴きつゝ喰ひ合ひをはじめました。それがいかにもしつこく、憎み合つてゐるやうに、長い〳〵間。終に三羽とも斃れて死んでしまふまで。私はその時恐ろしくなつて、これはきつと凶兆だからと云つて彼を止めました。しかし彼はきゝ入れなかつた。しかしあの青二才の宗盛が多くの位を飛び越えて、竟に左大將になつた時に彼の怨恨は絶頂に達しました。彼れは上賀茂の神社の後ろの森の中に呪詛の壇を築いて、百夜の間吒幾爾の密法を行じました。宗盛を呪ひ殺すために。夜陰の森中に、鬼火の燃える鼎の中に熱湯をたぎらせて、宗盛に似せてつくつた藁人形を煮ました。惡僧等はあらゆる惡鬼の名を呼んで、呪文を唱へつゝ鼎の廻りをまはりました。まるで夢中で、憑かれたものゝやうに、しつこく〳〵繰り返して。

成經　父は無論その場にゐなかつたでせうね。たゞ命じてやらせたのでせうね。

俊寛　いや。成親殿は夜陰にまぎれて毎夜賀茂の森まで通ひました。大杉の洞の下の壇の前にぴたりと坐つてゐました。顏は眞青でしかし燃えるやうな眼で僧等の所業を見てゐました。

成經　わしの知らぬ間にそんな恐ろしい事が人知れずなされたとは！

俊寛　それを祕密にするために彼は恐ろしい事をしまし

た。わしはそれを一生懸命留めたのだが。吒幾爾の密法は容易ならざる呪詛であつて、若し神々がそれを受けない時には還著於本人と云つて詛つたものに呪詛がかへるのだからと云つて。

康頼　あゝ、止して下さい。此の上もはや成經殿を——

成經　云つて下さい。早く云つて下さい。

俊寛　滿願の夜成親殿は祕密の露顯することを恐れて七人の僧侶を殺して、その死骸を地の中に埋めました。

成經　おゝ。（石の如く硬くなる）

俊寛　それからは彼の企てることは恐ろしいことばかりになつた。宗盛は死なゝかつた。そして平家の一門がますます榮えるにつれて、彼の怨恨はいよ／＼募るばかりだつた、彼れはいかにして平家を轉覆して怨みを復讐すべきかをばかり考へるらしかつた。彼はまるで怨恨の權化のやうに私には見えた。

成經　あゝ惡魔が父に魅入つたのか。

俊寛　（慄へる）あゝ今恐ろしい考へが私の心に起つた。まるで陰府から湧き上りでもしたやうに。

康頼　（堪へかねたる如く制する如き手付きをしつゝ）俊寛殿。俊寛殿。

俊寛　（憑かれたものゝ如く）怨靈だ。怨靈だ。

康頼　成經殿の心臟の止まらないために！

俊寛　わしは此の思ひつきに慄へる。信頼の怨靈が成親殿にのりうつゝたのだ。あの平治の亂に淸盛に慘殺された信頼の怨靈が。

成經　あゝ。呪はれたる父よ。（よろめく）

俊寛　保元の亂に頼長の墓を發いた信西は、頼長の靈に呪はれて平治の亂には信頼に墓を發かれた。信西の靈は淸盛に憑いて、信頼を殺させた。今信頼の靈は成親殿にのりうつゝた。

成經　おゝ神々よ。

俊寛　しかし成親殿は世にも慘めな最期を遂げた。父の怨を相續するものは子でなくてはなるまい。成親殿の怨靈はあなたに憑くに相違ない。

成經　あなたは惡とたゝかつて難に遭つた我々をいたづらに醜い復讐心を滿たさうとして失敗したあはれむべき破産者に貶してしまはうとするか。正義に殉じた父をたゞの犬死にさせ、あの堪へられない程な恥ぢな最期にも相當してゐたやうな、醜い人間にしてしまはうとするのか。

（俊寛につめ寄せる）

康頼　（なだめるやうに）成親殿は今は平和に眠つてゐられると私は思ひます。

俊寛　（苦しさうに）その正義の觀念の上にはつきり立つてゐられなくなりだしたのが私の苦しみなのだ。いかな

る困苦と缺乏とに惱まうとも自分は正しきものである！かく考へることによつて私は自分の不幸を支へてゐた。しかし私はそれがあやしくなりだした。私は勢に卷き込まれたのだといふ氣がする。他人の欲望――といふよりも、寧ろ無始以來結ぼれて解けない人間の怨讐の大渦のなかに卷き込まれたのだといふ氣がする。私たちが若し事を起さなかつたら誰れかゞきつと起したらう。我々はたゞ選ばれたのに過ぎない。三界をさまようてゐる怨靈に憑かれたのに過ぎない。

康賴　あなたは自分でつくりだした恐ろしいまぼろしで自分を苦しめてゐられるのだ。

俊寛　私は私のしぶとい性質を呪ふ。しかし私は駄目だ。私は人間の惡が根深い／＼ものに見える。二人や三人の力で抵抗しても何の苦もなく押し崩されるやうな氣がする。私の父、父の父、また私の與り知らない他人、その祖先、無數の人々の結んだ怨みが一團になつて渦卷いてゐる。私はその中に游泳してゐるにすぎない。私自身の欲望はその大いなる靈の欲望に征服される。そしてその欲望を自分の欲望だと思つてしまふ。あゝ私は此間恐ろしい夢を見た。いや、夢ではない。まぼろしだ。わしは白晝に見たのだから。それは無數の靈の空中に格鬪する恐ろしい光景であつた。私は武器の鏗鏘として鳴る音を空中に聞いた。その或るものは爲義のやうであつた。そのあるものは信西のやうであつた。彼等は叫び、呪ひ、刄をもつて互に傷けた。その爭鬪ははてしのないやうに見えた。終に幻影の群勢は格鬪しながら海の中へ沒した。そして私は地に倒れた。

康賴　あなたは頭が變になりかけてゐるのだ。夜も眠らずにあまり思ひつめるから。心を靜めるやうにしなくてはあなたが狂氣することを私は恐れる。

俊寛　わしは寧ろ氣狂になりたい。そして此の晝夜間斷のない苛責から免れたい。

成經　あなたは私の誇りをも、康賴殿の信仰をも毀してしまはうとするのだ。そして自分の心をも搔き亂してしまはうとするのだ。

俊寛　あゝ、わしは駄目だ。わしは自分を支へる事が出來ない。支へるものが一つも無い。わしの魂が亡んでゆくのをはつきりした意識で見てゐるのは堪へられない。

成經　私はあなたを見てゐるのは堪へられない苦痛になりだした。あなたはだん／＼荒くなられる、あなたと每日一緒に暮らさなければならないことはわしの重荷になりだした。あなたは私たちに不幸と絶望との息を吐きかける。そして私たちに慰めを與へてくれないばかりでなく、私たちから何の慰めをも受取らうとしない。

俊寛　おゝ、あなたは何を云ひますか。これ程慰めに飢ゑてゐる私に！（いら立つ）たゞ私は知つて來た。あなた方はもはや私に送る何の力も持つてゐられない。餓鬼は餓鬼に求めても何ものをも與へられない。

成經　（居なふるはす）あなたは餓鬼かも知れない。だが私は名譽ある武士の裔だ。正義の殉教者の子だ。

俊寛　七人の僧を暗殺し、神を瀆したものゝ子だ。

成經　あなたは父の墓を發いて、死骸に唾を吐きかける氣か。（俊寛にせまる）

俊寛　（自暴的に）わしは、わしの顏に唾を吐きかけたい。

康賴　（涙ぐむ）止して下さい。止して下さい。何といふ淺ましいことだらう。私たちが爭ひ合はなくてはならないとは。私は思ひ出さずにゐられない。私たちの此の島に着いた當初のあの美しい一致を！　私たちは温く塊まつて一團となつてゐた。不幸と淋しさは三人の心をかたく結合してゐた。私はその愛のために死にたいとさへ思つてゐた。私たちは此の缺乏と艱苦との中にあつて、友情をさへ失はなければならないのか。私はあなた方が段段不和になつて行くのを見てゐるのは實に苦しい。いつも仲裁者の位置に立たねばならぬのはたまらない。私がゐなかつたらあなた方は互に飛びかゝるやうになりはしないかと思ふと恐ろしい。檻の中の獸のやうに。

成經　（涙ぐむ）わしはあまりの侮辱には耐へられない。わしはいつも忍耐を用意してゐるにはあまり餘裕のない心でくらしてゐる。わしはそれどころではないのだ。わしは不幸で崩れさうなのだ。

俊寛　わしは何故かうなのだらう。わしは呪はれた人間だ。わしの魂の中には荒らす要素がある。わしの行く處はきつと平和が無くなる。わしは小さい時からそのために皆に嫌はれて來たのだ。その氣質を自分でどんなに嫌つたらう。しかし變へることが出來なかつたのだ。わしの祖父の血がさうなのだ。わが氏の遺傳なのだ、私の運命は不幸になるにきまつてゐたのだ。いや私の魂をつくつてゐる要素、私そのものが不幸なのだ。わしの魂は鎌首をもたげていつもうろ〳〵してゐる。心の座が定まらない。わしは失はれる人間なのか。地獄に墮ちる人間なのか。（殆ど慟哭に近い溜息）あゝ。

康賴　（傍白）あゝ何といふ不幸な眼付だらう。暗い影が一ぱい翳してゐる。

（三人沈默。山鳴りいよ〳〵烈しくなる。）

成經　あゝまた山が荒れるな。

康賴　明日はいよ〳〵雨だな（空を仰ぎ歎息す）あのしつこい。退屈な。

成經　（力なく）明日はしけだ。舟の姿も見られぬわい。

俊寛 （山の方を見る） あゝ。あの山位いやな山はない。まるで私たちを呪つてゞもゐるやうだ（慄へる）わしの魂の來世の行く先きを暗示してゞもゐるやうだ！

康頼 おゝ。神々よ。（ひざまづく）和らぎたまへ。

（三人沈默。もう一度烈しき山の鳴動。その後を單調な彈力のない波の音ひゞく。）

――幕――

第二幕

第一場

（第一幕と同じ淋しき濱邊。熊野權現の前。横手に貧しき森。その一端に荒き丸太にてつくれる形ばかりの鳥居見ゆ。第一幕より二年後の春の暮。）

康頼 （濱邊に立つて海を見入る） あゝ。此の離れ島にも春が來たのか。海の色も濃くなつて來た。此のふくれるやうに盛りあがつて滿ちて來る潮の香の惱ましさ！ わしは此の島の春が一番苦しい。わしの郷愁を堪へがたい程誘ふから。乏しい草木も春の裝ひをしてゐる。わしは昨日森の中を終日花を探して歩いた。都にあるやうな花は一つもなく、皆わしの名を知らぬ花ではあつたけれど、それでもわしに春のこゝろを告げてくれた。交野や嵐山の春を思へばたまらない。櫻の花のなかに車をきしらせた春を思へば。摘んだ花を一ぱい車の中に撒いて、歌合はせをして遊んだ昔の女たちを思へば。わしは寧ろ死を願ふ。彼の女らは皆わしに好意を持つてゐた。わしはやさしくて趣味が勝れてゐたから、わしが戯れに袖を握つて云ひ寄つた時に、あの機智のある歌をつくつてわしをたしなめた美しい藤姫はどうしたらう。（間）あゝわしの幸福は過ぎてしまつたのだ。（濱邊を歩む）何といふ淋しい春だらう！ 今日もまた沙濱を走つて波と戯れて遊ばうか。（汀をつたふ）あゝ濱千鳥よ。わしの思ひをお前が故郷にはこんでくれたら！

成經 （叫びながら登場） 餓鬼だ。これほど淺ましくなれば申分はない。

俊寛 （手を振りつゝ成經を追うて登場） 待て。あなたは間違へてゐる。若し貴方の獲物なら、わしは敢へて取らうとは思はない。（小鳥の死骸を投げつける）

成經 （康頼に） わしは驚いた。わしはあきれた。

俊寛 （康頼に） わしは無理にわしの獲物だといふのではないのだ。

康頼 （悲しげに） あなた方は獲物の爭ひまでしだしたのか。

成經 わしが確かに射落した鳥を横取りしやうとするの

だ。わしの矢が立つてゐるのに！

俊寛　わしはわしが射落したと思つたのだ。假令わしが射落したにせよ、わしがこんなに飢ゑてゐなかつたら、成經殿に讓つたゞらう。高が小鳥一羽位！

成經　わしは他人の惜しみのかゝつた獲物を欲しいとは思はない。(俊寛の前に小鳥をたゝきつける) 持つて行け！

俊寛　持つて行け！ (弓ではね飛ばす)

成經　わしはいらない。呪はれでもしたら大變だ。

俊寛 (嘲るごとく) あなたの父ではあるまいし。

成經 (火の如く怒る) も一度云つて見よ。墓場に眠つてゐる父を侮辱されるのが子に取つてどんなものだか！

(弓を取つて詰め寄せる)

俊寛　わしを射る氣か。(身構へする)

成經　武器を取れ。わしはお前の言葉の價をお前に知らせてやる！

康賴 (成經を抱き止める) 成經殿。輕はずみをして後で悔いないために！　あなたは敵を屠るやうにして友を屠す氣か！

成經　彼がわしの友だらうか。此の荒らす言葉と呪ひの息を吐き出す餓鬼のやうな奴が。

俊寛　わしを殺せ。わしは死を願ふ。わしの境涯は餓鬼道より少しもまさつては居ない。

康賴 (成經と俊寛との間に身を投げる) あゝ。淺ましい何たることだ！　あなた方は正氣を失つたのか。わしは信じられない。愛する友が互に呪ひ合ひ、汚す言葉を吐き合ひ、互に殺し合はうとする！　名譽ある武士の裔が、食物を爭ひ合ふ。あゝ、そんな淺ましい事をするよりわしは餓死を選ぶ。わし等の間にはもう親和は失はれた。一緒に暮すことは互の重荷になつた。もはや何の慰めも勵ましも互に期待することは出來ないのか。あゝ凱歌をあげてゐるものはたゞ淸盛だけだ！　あなた方は知つてゐよう。檻に繋いだ二頭の獸の間に食物を投じればどうなるかといふことを！　それとあなた方と何處が違ふのか。あゝ、わしが今見たことは恐ろしい事だ。(泣く)

成經 (涙ぐむ) 康賴殿。あまりに心を痛めないで下さい。わしはやさしいあなたの心を傷けたのを悔いる。あなたはどんなにいゝ友だつたらう。わしの寂寞はいつもあなたの平和な、溫かい友情で慰められてゐるのだ。わしの今したことをあなたに恥ぢる。(康賴の肩に手を置く) わしはもはや決してあなたの眼に荒々しい振舞ひは見せまい。此のやさしいあなたの心の平和を保つだけにでも！　許して下さい。

俊寛　わしを嫌つてくれ、嫌つてくれ。わしはそれに相當

してゐる。わしは荒々しい人間だ。わしは平和を惠まれない人間だ。どうぞわしを捨てゝくれ。憎んでくれ。あなた方は仲よく慰め合つて暮らしてくれ。わしはそれを望む。わしはそれを嫉んではならない。（慟哭す）

康頼　（俊寛を抱く）俊寛殿。私はあなたを惡い人とは思ひません。あなたは憎むべき人ではない。むしろあなたは感じやすい心を持つてゐられる。若しあなたが荒々しくなつたとしたら、それはあなたがあまりに不幸なからだ。

成經　（和解を求めるやうに）さうだ。我々は此の上もなく不幸なのだ！　その不幸を三人で分け持たなくてはならない。我々の心が少しでも輕ろくなるために、我々が苦しみに負けて崩れてしまはないために、力を戮せなくてはならないのだ。

俊寛　（嘆息する）わしはあなた方が段々わしを嫌ふやうになるやうな氣がする。そしてさうなるのは無理はないと思ふ。わしは實際一緒に暮しよい人間ではない。自分でそれを認める。わしは嫌はれても仕方がない。あゝ。しかしわしは淋しいのだ。嫌はれたくはないのだ。愛されたいのだ。それだのにわしは荒いことを云ふ。ひねくれたことを考へる。氣まぐれな小鬼めがわしの生命の中に巢を喰つてゐるやうだ。わしの氣質は自分の自由にならないのだ。わしは孤立無緣の靈魂だ。人と和ぐことの出來ない粗野な性格だ。わしはわしを呪ふ。わしを憎む。おゝわしを憐れむ。

康頼　俊寛殿。心を平かにして下さい。わしはあなたを責める氣は少しもない。あなたはあまりに痛ましい。困苦寂寥の歲月があなたの忍耐力を奪つてしまつたのだ。あなたは心の平衡を支へる勇氣を碎かれてしまつたのだ。誰れが我々のやうな境遇にあつて自暴にならないでゐられよう。わしはわしの心が砂のやうに崩壞するのを防ぐために必死の力を盡してゐる。しかも踏みしめても、踏みしめても、足下の大地のずり落ちるやうな心を制することが出來ないのだ。

成經　わしは昨日巖の上に立つて、一艘の船も見えない、荒れ狂ふ海を見てゐたとき、強い／＼誘惑を感じた。私は足が辷つて前にのめりさうな氣がした。しかもわしはそれに殆ど抵抗する氣力を缺いでゐた。若しあの時康頼殿が、とぼ／＼と波打際を歩いて、首を垂れて考へに沈みながら、私の方へ、恐らくわしのゐることをも知らずに、近づいて來られるのを見なかつたら、わしはどうなつてゐたかわからない。その姿はわしに何とも云へない、愛と憐憫の情を起こさせた。同悲の情を湧き立たせた。わしは淚がこぼれた。わしはこの淋しき友をなぐさめる

ためだけにでも、生きてゐたいと思つて、走りだした。

康頼　（涙ぐむ）私はあなたの姿に氣が付いた時慄へた。私はあなたの心をすぐ知つた。今あなたがいかなる危險な狀態にゐるかを直覺した。そしてあなたを抱き止めに走らうとする刹那、私はあなたが兩手を擴げて涙を一ぱい眼に溜めて、わしの方に走つて來るのを見た。

成經　わし等は抱き合つて泣いたのだ。

（間。）

俊寛　わしは淋しい氣がしてならない。昨夜から變に心細い氣がしてならない。こんな氣がすることは此の島に來てからはじめてだ。不幸が近づいて來るやうな……

成經　白帆だ！（急に元氣づく）あの姿がどんなに希望を私に與へてくれることか。

康頼　（沖を眺める）此の島に來るのなら！（考へる）來るかも知れないぞ。わしは昨夜から不思議に胸騷ぎがしてゐたのだ。何か大きな幸福が來るやうな……

俊寛　（顏色が惡くなる）どうしたのだ。あの白帆を見ると寒い影がサツとわしの心に翳して來るのは！

成經　幸福の船よ！　いや、いや。わが心よ。輕はずみに躍るな。後であまりに淋しいから。わしは幾百度裏切られたらう。しかも今度は、今度はと思つて希望をかけないではゐられない。今日もまた無慈悲に方角を變へてしまふのかも知れない。そして結果は船の姿を見なかつた前よりも、惡くなるのかも知れない。あの氣ぬけのした、いま〱しい、なぶられたやうな、不幸な心に！

康頼　（船より眼を放たず）わしの愚かな妄想だらうか。いや、どうもいつもとは違ふやうだ。わしに與へる氣もちがちがつてゐる。いつもは氣まぐれな鷗のどちらに飛ぶか見當のつかないやうな、あてにならない氣がするのに、今日は信ずべきものゝ渡來を待つやうな氣がする。あの舟は決心したやうに眞直に此の島に向つて來るやうに見える。

成經　わしもどうもそんな氣がする。初めてあの舟の姿を見た時から、待つてゐたものが、終に來たやうな氣がしてならない。

康頼　わしはまだ童子であつたとき、兄の花嫁の輿を迎へに行つたことがあつた。國境で私たちは長く待つた。輿は數百の燈火に守られて列をつくつてやつて來た。あれでもない。これでもない。けれど本當に花嫁の輿が來たときに、わし等は皆申合はせたやうにそれを直覺した。わしの今の心持はそれに似てゐる。

俊寛　（傍白）本當にわしはどうしたのだ。棺を迎へるやうな氣がするのは。

成經　もう半時すればはつきり見込がつく。此島に眞直に

來るとしても、到着するまでには二、三時はかゝるだらうけれど。

康頼　恐ろしい半時だ。わしは凝として舟を見てゐるのに堪へられない。わしは熊野權現の前に跪いて、心不亂に祈らう。祈りの力で舟を此の島に引き寄せよう。神々よ。あの船を此の島に送り給へ。神風を起してあの帆を膨らせ、水夫の腕の力を二倍にし、鳥の如くに速かに此の岸に着かしめ給へ。（鳥居の方に走り出さうとする）

俊寛　（康頼の袖を捉る）待つて下さい。後生だからわしの側を離れずにゐて下さい。わしは淋しくてたまらない。淋しい淋しい考へがさつきからわしの心に起つて來た。

康頼　あなたはどうしたのです。あなたの面の色は！　此の希望に痙攣するやうな瞬間に、あなたは何故そのやうな淋しい顔をしてゐるのです。

成經　（傍白）まるで喪のやうな顔付をしてゐる。

俊寛　わしを捨てゝくれな。嫌つてくれな。

康頼　あなたは何を云ふのです。今、幸福が、信じられない程な幸福がわたしたちに向つて近づきつゝある。見なさい。あの穩かな春の海を、一ぱい日光を浴びて、金色に輝いて帆走つてくる船を！　あの姿があなたを躍りあがらせないのは不思議といふ外はない。

俊寛　わしは不安で〳〵たまらない。

康頼　大きな幸福が來る時には、そしてその幸福がまだ確定しない時には人間は不安を感ずるものだ。その不安ならわしも同じことだ。あまり幸福が大きいから。わしと一緒に行きませう。一緒に祈りませう。

俊寛　（哀願に充ちたる調子にて）誓つてくれ。愛を誓つてくれ。

成經　（和睦と愛憐の表情をもつて）あゝ。あなたはそれを氣にしてゐるのか。人間は幸福が來る時には人と和らぎたくなるものだ。俊寛殿。安心なされ。さつきのことたら、わしはすつかり忘れてゐる。わしに來かゝつてゐる幸福はわしのすべての憎惡を揉み消してしまつた。わしは心からあなたに和睦の手を差し延べよう。

俊寛　わしはまだ〳〵淋しいことが考へられる。あなた方がわしを捨てゝしまひはせぬかといふやうな氣がしてたらない。わしを振り捨てゝ、二人だけ都へ歸つてしまひはしまいかといふやうな氣がしきりにする。

康頼　あなたはどうしたのです。あなたは凶事を自分で描いてはまねき寄せようとするやうに見える。凶事についてのあなたの異常な想像力にわしはまつたく驚いてしまふ。それがあなたの不幸の原因だ。わしが一度でもあなたを捨てると云ひましたか。

成經　わしはあなたを一人此の島に捨てゝ歸る程なら、寧

ろ三人で此の島で餓死する方がいゝ。

俊寛 （涙ぐむ） あなたは本當にさう思つてくれますか。

成經 何しに嘘を云ひませう。我々は同じ日に此の孤島に流された。同じ舟で。それ故に同じ日に、同じ舟で此の島を去らねばならない。我々はいか程の困苦を共にして來たことか。我々の間に不和が生じたとすれば、それは、我々の受けてゐる運命の苛責があまりに嚴しかつたからだ。

俊寛 （成經を抱く） わしはあなたの寛い心がありがたい。わしはあなたにとつて確かに平和な、親切な友ではなかつた。わしの氣質は荒くて、歪んでゐるから。最も平和な時でさへも、わしはあまり陰氣だつたから。あなた方には、長い歳月の間嘸ぞわしが堪へ難い重荷だつたらう。でもわしを嫌つて下さるな。わしはあまりに淋しい。（沖を見る）あゝ。あの舟を見るとわしは變に淋しくなる。初めてあの帆影を見た時暗い陰がわしの心を蔽うて來た。あの舟には何かわしを不幸にするものが乘つてゐるやうな氣がする。「死」が乘つてゐるやうな氣さへする。わしは今本能的に助け手を求める。忠實な友が側にゐてくれることが、今のわしには絶對的に必要だ。

康賴 わしはあなたの最後までの助け手だ。死に到るまで渝らぬ忠實なる友だ。

俊寛 あゝ。あなたは心強いことを云つて下さる。（康賴の面を見る）どうしてあなた方のか程の強い勵ましが、わしの不安を拂ひのけてくれぬのだらう。

康賴 わしはあなたを憐む。あなたは今日はどうかしてゐられる。あまり異常な幸福が近づいたために、心がその喜びを荷ひ切れなくなつて、平衡を失つてしまつたのではないか。

俊寛 本當に、本當にわしを見捨てませんか。

康賴 わしの眼を御覽なさい。あゝ、あなたは泣いてゐますね。どうしたと云ふのだらう。

俊寛 （康賴の足下に崩れて泣く）

成經 あなたはあまりに衰へました。風雨が樹木を打つやうに、長い間の不幸があなたを打つたのだ。あなたはあはれな老人の如く、幸福なときにも泣くことしか出來ないのだ。あなたの姿はあまりに痛ましい。私は思ひ出さずには居られない。我々が昔あの鹿ケ谷のあなたの山莊に密會した頃の事を。あの頃のあなたのあの鐵のやうな意志と、鷲のやうな覇氣とを。我々は皆あなたに一番信賴してゐた、

康賴 我々の意氣は既でに平氏をも呑んでゐた。我々は恐ろしい陰謀を企みながらも、輕い諧謔をたのしみ得る程に餘裕があつた。わしは忘れることが出來ない。あの法

皇を密かに山莊に迎へた夜、淸盛を斃す細密な計略を定めた後で、さながら我々の勝利の前祝ひのやうに、期せずして生じたあの諧謔を！

成經　あの機智に充ちた、天來の猿樂を！

康賴　成經殿がふと狩衣の袖に引つ懸けて、法皇の前にあつた瓶子を倒したのが初めだつた。

成經　平氏が倒れた！　とあなたが叫んだ時には、私はその思ひ付きに笑はずにはゐられなかつた。

康賴　西光殿が横合ひから口を入れて云つた。あまりに瓶子（平氏）が多いので醉つてしまつた。此眼ざはりな瓶子（平氏）をどうしたものだらう。と。

俊寛　（默然として目を閉ぢてゐる）

成經　俊寛殿。あなたは覺えてゐるでせう。その時あなたが非常に機智のある、不思議な程に甘いつゞめをつけたのが、此の一場の猿樂に驚くほど活々した效果を與へたのを。（俊寛苦しさうに首を垂れる）あなたは瓶子の頸を取つて立ちあがりざま、心地よげに一座を見廻して叫びましたね。平氏の頸を取るがいゝと。

俊寛　（顏を蔽ふ）わしは恥ぢる。わしは失敗者だ。すべて愚かな愚かなことだつた。あなた方は今一番惡いことを思ひだしてくれた。わしはかうして立つてゐられないほど恥しい。あなた方はわしを此の思ひ出で元氣づけようとしたのか。此の皮肉な思ひ出で……あゝ呪はれたるわしよ。（痙攣する兩手で頭をかゝへて砂上に伏す）

康賴　（氣の毒に堪へざる如く）わしが愚かなことをしたのならわしは悔いる。許して下さい。わしは今あなたを慰めることならどんなことでもしたい。俊寛殿、今、我我の時が來つゝあるのだ。此の幸福の豫感の中にあつて、わしが少し輕い心になつても許して下さい。わしは足が地に付かないやうな氣さへしてゐる。あなたと云へば、どうしてこんなに不幸そのもののやうな顏をなさるのだらう。あなたの內に不幸を吐き出す魔でも棲んでゐるのか。あなたは私と共に悅んで下さる筈だ。我々が長い長い間待つた日が來かけてゐるのではないか。あなたはその日をあれほど待つてゐられたではないか。

成經　（沖を見る）あの舟はいよ〳〵此の島に來るらしいぞ。

俊寛　（苦しさうに）何故こんな淋しい考へがわしにだけ起るのだ。去つてくれ。去つてくれ。（舟を見る。身慄ひする）駄目だ。わしは凶兆を感じる。わしの運命は、わしの星は凶だ。（地に倒れる）

康賴　俊寛殿。氣が狂つたか！

成經　何か憑いたのか！

俊寛　（起き上る）わしに必要だ。一つのことがわしに保（刀を拔く）外道よ、去れ！

證されねばならない。わしを見捨てゝ歸らぬといふことが！
成經　安心なさい。俊寛殿。わしはあなたに何のわだかまりをも持つてはゐない。持つてゐたものは皆消えた。わしはあなたを慰めたい心で一ぱいになつてゐる。鬼神も今のあなたの姿を見ては憐れみを起すだらう。
康賴　あなたはあり得ぬ事を想像して獨りで苦しんでゐられる。二人だけ都へかへして、あなただけを此の島に殘すといふ筈がないではないか。わしらは同じ罪に坐して配流されたのだから。
俊寛　若しあつたとしたら。
成經　わしはも一度繰り返して敢へて言はう。あなたを一人見捨てゝ都へ歸るほどなら、わしは此の島で餓死することを選ぶ。
康賴　生きるも、死ぬるも三人一緒だ。
俊寛　それを誓つてくれ。誓つてくれ。
成經　（弓を天にさゝげる）わしは名譽ある武士の裔だ。わしは弓矢にかけて誓ふ。あなたと生死を共にすることを！
康賴　わしは神々の名に依つて誓ふ天神よ。（天に息を吹く）地神よ。（地に息を吹く）わしは永久に友を見捨てませぬ。

俊寛　（靜かに泣く）
（長き沈默。）
成經　（突然沖を見て叫ぶ）いよ／＼きまつた。あの舟はもう此の島に必ず來る。彼處まで來たからにはもう大丈夫だ。いつも方角を更へるのはもつとずつと遠くの沖だから。わしの考へでは、あの船はなか／＼大きいらしい。
康賴　（沖を凝視す）あれは都から來た船だ。（渚に走る）あの帆柱や帆の張り方や櫓の恰好はたしかにさうだ。田舍の舟にはあんなのはない。（波の中に夢中でつかり、息を凝らして舟を見る）
成經　（康賴の側に走る）旗だ！　たしかに赤い旗が見える。平氏の官船だ。
康賴　迎への船だ！
成經　（夢中に叫ぶ）追風よ。吹け。吹け。吹け。
康賴　眞直に、漕ぎつけよ。一刻も早く、此の岸に！　わし等は此處にゐる。此處の岸に立つてゐる。餓鬼のやうに痩せて！　（急に咽び泣く）わしはどんなに待つたらう。
成經　あゝ。長い／＼間だつた。
康賴　神々よ。今日の惠みは我が子孫に書き遺して傳へられませう。
成經　わしの心が此の悦びに持ちこたへられるやうに！

（沖の船より銅鑼の音ひゞく。）
康頼　合圖だ！　船着場へ！　（走せ去る）
成經　（無言にて康賴の後を追うて馳せ去る）
俊寛　（前の處に不安さうに立つたまゝ）　あの船は陰府から來たやうに見える。（心の内にさす不吉の陰を拂ひのけるやうに首を振る）わしは馬鹿氣た妄想に惱まされてゐるかも知れないぞ。さうであつてくれ。さうであつてくれ。わしの此の恐ろしい考へには少くとも根據はないのだ。たしかに根據はないのだ。たゞわしにさういふ不安な氣が何となくするといふのに過ぎない。そんな事が何のあてにならう。（沖を見る。慄へる）どうしたのだ。（打ち敗かされたるごとく）あの舟の帆は死骸の面にかける白い布のやうにわしに見える。（墓標の如くに凝つと立つたるまゝ動かぬ）
（ながき沈默。やがてやゝ近き沖にて銅鑼の聲つゞけざまにひゞく。）

第　二　場

（船着場。疎らなる松林。右手寄りに小高き丘の一端見ゆ。その麓に稍大なる船泊りゐる。正面に丹左衛門尉基康。その左右に數名の家來槍をたてゝ侍立す。その前に俊寛、康頼、成經跪く。）

基康　（家來に目くばせす）
家來　（雜色の首に懸けたる布袋より赦文を取り出し、恭しく基康に捧げる）
基康　謹んで聽け、（赦文を讀む）重科遠流を免ず。早く歸洛の思ひをなすべし。今度中宮御産の祈禱によつて非常の赦行はる。然る間、鬼界ヶ島の流人、丹波成經、平ノ康賴を赦免す。
成經　（康頼と面を見合す）
基康　謹んで御承けなされい。
俊寛　（聲を慄はす）その赦文をも一度お讀み下さい。
基康　（も一度讀む）命に依つて迎へに參つた。兩人共支度をなされい。
俊寛　あなたは俊寛といふ名を讀み落しなされたやうだ。
基康　此の赦文には俊寛といふ名は記してない。
俊寛　（靑ざめる）そんな筈はありません。
基康　自分で見るがよからう。（赦文を康頼に渡す）
俊寛　康頼殿。早く見て下さい。
康頼　（默讀し、成經に渡す）
俊寛　成經殿。私の名は？
成經　（默讀し、俊寛に渡す）
俊寛　（慄へる手にて受取り讀む。眞靑になる）禮紙を見てくれ。禮紙を！

基康　（無言にて家來に禮紙を渡す）
俊寛　（家來より禮紙を受取り、裏を返し、表を返して見る）執筆の謬りだ。基康殿。あなたは都を出發する時三人を連れ歸るやうにとの命令を受けられたに相違ない。
基賴　わしの役目は此の赦文に記された通りを行使するのにある。
俊寛　若し執筆の謬りだつたら。
基康　（冷やかに）あなたを殘して歸つても、責はわしにはかゝるまい。
俊寛　（せき込む）しかし淸盛殿の意志が三人を都へ呼び戻すにあるとしたら。主人の意志を果すが本當の忠實なる使者でせう。あなたは主人の意志を熟知してゐられませう。
基康　（皮肉に）わしがそんな高い身分のある者だつたら、こんな役目は仰せつからなかつたゞらう。主人の意志を知る事などわしなどには思ひも寄らぬことだ。わしはただ此の紙に記されてあることを忠實に遂行することを上役から命じられたに過ぎない。
俊寛　我々三人は同じ罪に由つて、同じ日に此の島に流されたものだ。二人だけを都へ返して、一人だけを殘すといふのは法に適はない處置ではありませんか。
基康　あなたの訴へは正しいかも知れない。しかしそれは此の命令を發した人に向つて言はれるべきだらう。わしから二人の伴侶を無慈悲に奪ひ去らうとするのだ。
俊寛　淸盛は何故特別にわしを憎むのだ。わしから二人の伴侶を無慈悲に奪ひ去らうとするのだ。
基康　それはわしから訊きたい位だ。
俊寛　刑には理由がなければならない。その理由を示さずに、たゞわしだけに重い刑罰を課するのは非法ではないか。
基康　あなたの申立ては道理でもあらう。しかしわしはそれを裁く權利を持つてゐないのだ。
俊寛　あなたは惡い人ではないやうだ。わしはあなたに乞ふ。わしを都へ連れて歸つて下さい。
基康　わしはあなたに何の憎みもない。わしはお氣の毒に思ふ。若しわしに咎めがかゝらないものなら、わしは連れて歸つてあげてもいゝのだが。
俊寛　若しあなたがさうしてくれたら、わしは十倍にして屹度あなたに報います。
基康　（考へる）どうもわしの身に難儀がかゝりさうだ。
俊寛　もしあなたに咎めがかゝつたら、わしが立派に申し開きをしよう。その責任はわしがきつと荷ふ。だがそんなことはきつとない。主人の意志は三人を都へ返すにあるのは解り切つたことなのだから。
基康　その點もあなたが云ふ程わしにははつきりしてゐな

いのだ。少くとも赦文の意味を文字通りに行使するのが最も賢いことが私にはつきりしてゐる程には。

俊寛　しかし一度都へ歸つてから、またはる〴〵此の島まで迎ひに來なくてはならないとしたら。

基康　（ある感動をもつて）あなたがさう云ふのはもつともだ。わしは長い船旅には實際弱つてしまつた。都を出てから想像もつかない程の長い日數がかゝつてゐる。それに都を去るにつれてだん〴〵航路が荒くなつた。その上九州の本土を離れてからは何といふ退屈だつたらう。都に還つてから、も一度此島に來るといふやうなことは迚も耐へられないことだ。（考へる）だがわしは長い間の役目の經驗で知つてゐる。一番安全に役目を果す方法は、いかなる場合にも文書の文字通りに行使することだといふことを。わしはもう長い間さういふことに決めてゐるが、やはり一番無難なやうだ。それにも一度此の島に來なければならないことになれば、わしは上役に懇願して、此のありがたくない役目を誰かに代つて貰ふことも出來るだらう。

俊寛　しかしそれは區々たる小役人のすることだ。大いなる役人は文書の意のあるところを汲み取るべきだ。

基康　（皮肉に）あなたは初めからわたしをあまりに高い身分のものと買ひ被りすぎたやうだ。わしは平凡な、一人の役人に過ぎない。またさうでなくて誰れがこんな役目を仰せつかるものか。わしは實際今度の役目には懲り懲りした。わしは疲れてゐる。わしは一日も早く此の役目を果して、都へ歸りたいと願ふほかには何も考へる氣はなくなつてゐる。

俊寛　しかしわしにとつては大きな〳〵問題だ。わしの一生の運命が決まるのだ。

基康　わしはその大きな問題を引き受けるにはあまりに地位も低く、力が乏しい。

俊寛　わしを憐んでくれ。

基康　私は貴方に同情する。しかしわしの一身の安全も計らずにはゐられない。

俊寛　（嘆息する）あゝ、あなたは惡い人間ではない。しかしたゞそれだけに過ぎない。

基康　成經殿、康賴殿、出發の支度をなされい。

成經　わしからあなたに改めてお願ひする。何卒、俊寛殿をも我々と一緒に都に連れ歸つていたゞきたい。

康賴　我々は長い間此の島で困苦を共にしました。今俊寛殿だけを此の島に獨り殘して歸るに忍びません。

基康　あなた方の氣持はあなた方として至極尤もに思はれる。しかし私の立場としては前云つたことを繰り返す外はない。

成經　あなたの立場は解らないではありません。だが此の我々にとつて千載一遇の非常の時機に際して、あなたの一身の安全を圖るより外に、我々のために敢へてして頂くことは願へないものであらうか。

基康　（不愉快さうに）わしには妻子があるのだ。わしの思ひ出す限りでは一家の安全を賭けてまで、貴方がたの爲につくさねばならぬ程の恩を受けてもゐないやうだ。

成經　然し、貴方にとつては一家の運命を賭する程の大事とは思はれない。只貴方の役目の解釋に少しばかりの自由を保つのに過ぎない事はあるまいか。

基康　その少しばかりの自由から、どれ程の大事が又わしの身に起つて來るか知れたものではない。貴方がたは此命令の發布者がどんな性格の人であるかを忘れはすまい。獅子の意志は鼠には解らない。

成經　わしは同じ弓矢を把る武人として貴方の義氣に訴へたい。

基康　（氣色を損じる）此場合わしに對してあまり押付けがましく出る事は、貴方がたの利益でないことはないか。

成經　（怒を抑へて沈默す）

康賴　私は只貴方に乞ふ外はありません。我々のみじめな姿が貴方に憐れみを起さゝぬであらうか。あなたが若し俊寛殿の地位に立つたとしたら！

基康　わしは貴方がたに同情しないのではない。だが、永い間の職務上の經驗から同情と役目とを別々に考へる事にしてゐるのだ。

康賴　窮鳥が懷に入る時は獵師もそれを殺さないと申しますが。

基康　わしはかういふ立場に立つたのは初めてゞはないのだ。わしには結果の見越があまりにつきすぎる。わしがいか程の同情を起したにしても、結局わしがどうしなければならないかといふ事はあまりにはつきりとして居るのだ。わしは片時も早く此の不愉快な役目を終りたい。

康賴　私達を憐れんで呉れ。私は只管貴方に助けを乞ふ。あゝ佛樣が貴方の心に慈悲を催ほさして下さるやうに！

基康　（もどかしさうに）幾度言つても同じ事だ。わしは外に選ぶみちがないのだ。わしを無慈悲な人間として考へねばならぬ地位にいつまでも立つてゐるのは堪らない。わしにも人間の心はある。わしは一人の平凡な役人に過ぎないのだ。

俊寛　ではわしは敢へていふが、貴方の役目は果たされますまいぞ。成經殿も康賴殿もわしを殘しては此島から歸られないのだ。今朝私に對して誓言をしたのだから。

基康　（兩人に）それに相違ありませぬか。

成經　わしは弓矢にかけて誓ひました。俊寛殿と生死を共

にする事を。
康賴　わしは神々の名によつて誓ひました。永久に友を見捨てませぬと。
基康　（沈默）
俊寛　此上は三人を連歸つた方が貴方の役目にも適ひはしますまいか。遥々此島まで來た事が無駄にならない爲にも。
基康　（默つて暫らく考へる。やがて信ずる所あるが如く）では念のため、も一度だけ御尋ねする。御兩人共俊寛殿を殘しては都へ歸る氣はありませぬな。
成經　俊寛殿を一人殘して私だけ歸る氣はありません。
康賴　私は友を見捨てるに忍びません。
基康　では三人の意志は確かに聞き屆けました。都に立ち歸つて其旨を淸盛殿に傳へませう。
俊寛　（恐怖を隱さうとつとめつゝ）それでは貴方の役目が立ちますまいが。
（成經と康賴、基康を凝視す。）
基康　わしは此命令の執達吏に過ぎないのだ。わしは淸盛殿の意志を貴方がたに御傳へすればそれでいゝのだ。貴方々がそれを受けようと受けられまいと、それはわしの立入る限りではない。
（三人沈默す。）

基康　（家來に目配せす）出發の支度をなさい
成經　（狼狽す）しばらく御待ち下さい。
康賴　そのやうに急がれるには及びますまい。
基康　（冷やかに）貴方がたの意志を聞いた以上は、最早わしの役目は濟んだといふものだ。わしは片時も早く此荒れた島から離れたい。何か都に言傳てはありませんか、わしが貴方がたへの只一つの親切にそれを取次いであげませう。あゝわしは忘れるところだつた。都を立つ時貴方がたに言づかつた物があつた。故鄕からの迎ひの使を拒絕する程の貴方がたに、大した用はないかも知れんが。
（家來に）かの品を。
家來　（文函を基康に渡す）
基康　（文函を成經と康賴に渡す）
成經　（震へる手にて文函を開き、手紙を手に取り裏を返し、表を返しゝて見る。已れを制すること能はざる如く）母上の手蹟だ。（感動に堪へざる如く）……。
康賴　（手紙を握り締め）私はどんなに餓ゑてゐたか！
俊寛　（吾を忘れたる如く）わしへの手紙は？　故鄕の便りは？
基康　わしのことづかつたのはこれだけだ。
俊寛　（顏を掩ふ）
基康　（家來に）出發の用意をしろ。

成經 (慌てろ) 待つて呉れ。わしがもつとよく考へるために。
康頼 今暫らくの猶豫が願ひたい。
基康 貴方がたの意志は最早確かに承つた筈だが。
成經 いや、わしはもつとよく考へて見なければならない。貴方に聞きたい事もある。
康頼 我々がもつとよく考へて決心する爲に、今暫らく待つて頂きたい。
俊寛 (不安に堪へざる如く、成經に) 成經殿、わしは貴方を信じてゐる。貴方が誓を守つて下さる事を。
成經 (俊寛にむけてゞはなく) わしは考へねばならない。考へねばならない。
俊寛 康頼殿、わしは貴方の誓を最後の頼みとしてゐますぞ。
康頼 私達はよく考へて見ませう。今はあまりに大事な時だ。
俊寛 (天に向つて兩手をのばす) 神々よ、汝の名に據つて立てられた誓は守られねばならぬ!
基康 わしの前で内輪の爭ひは、見ろに堪へぬわい。申の刻までに考へを決められい。猶豫はなりませぬぞ。(退場)

(家來つゞく。)

成經 (基康の去るやいなや、飢ゑたるものゝ如く手紙の封を切りて讀み入る)
康頼 (手紙を讀みかけて、俊寛を見て止める)
成經 (傍らに人無きが如く) 懐かしい母上よ、貴女の恩愛が身に沁みまする。(今ひとつの手紙を讀む) 妻よ、お前の苦しみは察するに餘りある。どんなに會ひたかつたらう。(他の手紙を見る) 乳母の六條の手紙に添へて、わしの小さな娘の手紙も入れてある。何んといふ可憐な筆付きだらう。六條よ、おゝ御前の忠義は倍にして報いられますぞ。(手紙を讀み續ける)
俊寛 (堪へ兼ねたる如く) わしの前でその手紙を讀むのは止して下さい。わしは不安で〳〵堪らない。成經殿、貴方は考へを更へてはなりませぬぞ。今日貴方が弓矢に賭けて立てた誓を忘れて下さるな。
成經 (我に歸りたる如く) わしはあまりに苦しい、今はわしの一生の運命の定まる時だ。わしに考へさせて下さい。
俊寛 貴方は名譽ある武士の裔だ。貴方はいつもそれを誇つて居られた。わしは貴方の誇りに望みを懸ける。
成經 故郷の便りはわしの臓を掻き挘るやうな氣がする。不幸なわしの家族はどんなにわしを待つて居るだらう。彼等にも一度會ふ日の夢は、わしの此荒い慘めな生活の

只一つの命であつた。今や時が來た。そしてわしは歸つてはならぬのであらうか。

俊寛　貴方の心持は尤だ。だがわしの事を考へて下さい。貴方がたが側にゐて不幸を分けて下さつたればこそ、此云ひやうのない苦しみにも堪へる事が出來たのだ。が、若しわし一人此島に殘らねばならなかつたら、わしはどうして此先きを暮らして行く事が出來よう。それはあまりに堪へ難い。考へただけでも恐ろしい。

成經　わしは貴方の事を思はないのでは決してない。だが私として、私の境遇になつて、果して故郷への迎への船を空しく歸す事が出來るだらうか。

俊寛　わしはかういふ時の來る事を豫感したのだ。それと思へばこそ今朝あれ程貴方に念を押したのだ。そして貴方のあの心強い誓言を得たのだ。貴方はそれを忘れはなさるまい。

成經　（心の内に戰ひながら）時機は二度と來ぬのだから。

俊寛　わしは貴方に要求する氣はない。只貴方の友情に縋つて折入つて賴む。何卒わし一人を此島に殘さないで下さい。

成經　わしは一度だけ母に會ひたい。妻に會つて其苦しみを勞うてやりたい。一生に、も一度だけわしの子供が抱きたい。

俊寛　それはみなわしの願ふところだ。わしの朝夕の夢だ。今其夢を實にする事の出來る貴方の幸福と、此荒れた島に只一人殘る自分の運命とを較べるのは堪へ難い。わしの恐ろしい運命を考へて下さい。

成經　わしは只一度だけ故郷の土が踏みたい。只一度だけ家族と會へば又此島に歸つてもよい。だが只一度だけは。

俊寛　わしを助けて吳れ。

成經　わしは苦しい。何も考へられない。わしの心が顚倒するやうだ。

俊寛　貴方はどうしても歸る氣か、誓を破り、わしを捨てて。

成經　（苦しさうに沈默す）

俊寛　今日からわしは貴方を名譽ある武士とは思ひませぬぞ。困苦を共にした友に危難の迫つた場合、無慈悲に見捨て去るとは、實に見下げた人だ。八幡の祟りを恐れられい。わしはいふが吾々がこんな慘めな境遇に落ちたのも、もとは貴方の父上のためだ。

成經　（顏を掩ふ）

俊寛　貴方の父を鼠の如く殺した淸盛のところへ、憐みを乞うて歸る氣か。

成經　（四邊をはゞかりつゝ）わしは復讐する事が出來る。都へ歸れば機會を覗ふ事が出來る。

俊寛　（不安に堪へざる如く、康頼に）康頼殿、今はわしの頼みは貴方一人となりました。わしは貴方の愛と誠實とに依頼する。貴方は永い間どんなに私を愛して下さつたらう。貴方だけは私を見捨てゝ下さらぬだらう。

康頼　私は貴方の運命を思へば堪らない氣がする。貴方は實に苦しからう。

俊寛　わしは恐ろしい。わしの側にいつまでも離れずにゐて下さい。

康頼　私は貴方を憐れむ心で一杯だ。貴方の今の地位の恐ろしさは言ひ現はす言葉もない程だ。

俊寛　（哀願に滿ちたる調子にて）貴方は私を見捨てゝは下さらぬだらう。

康頼　わしは貴方を見捨てゝ去るには忍びない。

俊寛　では私と共に此島に殘つて下さるのですね。

康頼　（力なく）私はさうしたい。さうしなければならぬと思ふ。けれ共――

俊寛　（不安の極度に達す）わしは貴方の信心に依頼する。

康頼　迎への船の來たのは熊野權現の靈驗と思はれる。

俊寛　貴方は神々に立てた誓を忘れはすまい。あれ程信心深い貴方が、天地の神々の名によつて立てた誓を破らうとは信じられない。

康頼　（沈默）

俊寛　（憐みを乞ふ如く）康頼殿、貴方だけは私を見捨てて下さるな。貴方は成經殿の例に倣つて下さるな。此長い困苦の年月貴方が私の爲にどんなに忠實な友であつたか、私は感謝の心で一杯だ。今一人の友が無慈悲に私を捨てゝ去らうとする時、貴方だけは私を助けて下さい。私は貴方に救ひを求める。

康頼　（沈默）

俊寛　（康頼の袖を握り地に跪く）哀れな友の最後の願を拒けて下さるな。

康頼　私は貴方を見るに忍びない。私の心は千切れるやうだ。

俊寛　わしを地獄から救つて吳れ。（地に伏して慟哭す）

康頼　（苦し氣に）私は貴方の側にゐたい。貴方は見捨てる氣にはなれない。

俊寛　わしは貴方を最後の頼みと致しますぞ。

基康　（家來を從へて登場）最早時は來た。決心を承らう。

（家來に）出發の用意をしろ。

（家來數名船の方にゆく。）

（三人沈默。）

基康　（成經に）貴方の決心は？

成經　わしは迎へをお受けする。

基康　（背く。康頼に）貴方は？

康賴　（力なく）わしは友を見捨てるに忍びません。
基康　よろしい。では貴方は此島に殘るがよからう。成經殿だけ伴つて歸らう。成經殿、出發の用意をなされい。
成經　（康賴に）わしは苦しい立場ではあるが思切つて一足先きに都へ歸ります。貴方は止つて俊寛殿を慰めて時機を待つて下さい。私は都へ立歸つたらきつと再び迎への使を送ります。（俊寛に）貴方はわしが憎からう。だがわしの立場を思つてゆるして下さい。わしが都へ歸つたらきつと淸盛殿に取りなして、貴方も歸洛の叶ふやう取計ひます。それを賴みに苦しみに堪へて待つて居て下さい。
俊寛　（答へず）
成經　何か形見に殘したいがわしに何もあらう筈がない。此衾を貴方に遺します。わしはこれで雨露を凌ぎました。
俊寛　（衾を地に抛つ）わしは貴方を友とは思はぬ。早く都に歸るがいゝ。そして自分の敵に追從するがいゝ。
家來　船の用意は出來ました。
基康　ではお別れする。（船に乘る。成經續く）
成經　（船の上より康賴に）御言傳てはありませぬか。
康賴　（何か言ひかけて感動のあまり止める）
基康　直ぐに出發しろ。
家來　（纜を解く）

俊寛　（顏をそむける）
成經　（康賴に）ではお別れ致しまする。
康賴　（堪へ兼ねたる如くに）基康殿、お待ち下さい。
基康　何か御用か。
（船少しく動く。）
康基　待つて吳れ。私は考へて見たいから。
康賴　船を止めろ。（家來船を止める）
俊寛　（不安の極に達し）康賴殿。わしは貴方を信じますぞ。
康賴　（苦しみに堪へざる如く）神々よ、わしに力を與へて下さい。
基康　船を出せ。（船動く）
康賴　待つて吳れ。わしは迎へをお受けする。
俊寛　（眞靑になる）康賴殿、貴方もか?!
康賴　俊寛殿、ゆるして下さい。わしは貴方の側にゐたい。最後まで貴方の慰めの友でありたい。けれど、わしは今自分を支へる事が出來なくなつた。貴方は私がどれ程故鄕を慕つてゐたか知つて居られやう、其のために賴むべからざるものをも賴みとしてゐた事を。熊野神社に日參した事も、千本の卒都婆を流した事も。今や其日が來た。殆ど信じられない夢のやうな日が。けれどわしは貴方を憐れむあまり、今の今まで堪へて來た。けれど今はわし

の力も盡きたやうな氣がする。此船を逸したら二度と機會は來ないかも知れない。あの荒れた乏しい、退屈な、長い〳〵日が無限に續く事を思へば堪らない。わしは此船が地獄に苦しむ罪人を迎へに來た弘誓の船のやうな氣さへしてゐるのだ。

俊寛　(康頼の袖を掴む)　永久に地獄に殘るわしの運命を思つて吳れ。それも只一人で！　あゝ考へてもぞつとする。殘つて下さい。殘つて下さい。

康頼　私が歸つたらきつと淸盛殿に取計らうて迎への船を送ります。それを信じて待つて下さい。

俊寛　それが宛になるものか。此度の處置で淸盛がわしをどれ程憎んでゐるかゞ解る。わしは此島に只一人殘つて船の姿が見えなくなる瞬間が恐ろしい。わしの命が其瞬間を支へ得るとは思はれない。

康頼　きつと迎へに參ります。其の日を待つて下さい。私を歸らせて吳れ。

俊寛　(康頼を抱く)　殘つて吳れ。殘つて吳れ。

康頼　(苦悶の極に達す)　あゝ、神々よ。

基康　船を出せ！

康頼　待つて吳れ。(決心す)　わしは歸らねばならない。

(俊寛を放す)

俊寛　わしを無間地獄に墮すのか。

康頼　ゆるして吳れ、ゆるして吳れ。

俊寛　(康頼にしがみつく)　助けて吳れ。

康頼　(躊躇す)

基康　(いらだゝしく)　船を出せ！

康頼　待て。(俊寛を押し放ち船に乘る)

俊寛　(よろめく)　あゝわしは、待つて吳れ！

(家來船を止めんとす。)

基康　(聲を勵ます)　出發しろ。

(船動く。)

俊寛　基康殿。わしは犬の如くひれ伏して貴方に乞ふ。わしを只九州の地まで伴れて歸つて吳れ。

基康　(顏を背向ける)

成經　俊寛殿、きつと迎へに參ります。

康頼　心を確に俊寛殿。私は誓つてもいゝ。きつと迎へをよこすことを。(無意識に懷より法華經を取出す)　誓のしるしに此法華經を貴方に遺します。私の只一つの慰めであつた此經を。私のかたみに！

俊寛　(法華經を引き裂く)

基康　(聲を勵まし)　直ぐ出せ！

(船、岸を離る。)

俊寛　(船に縋りつく)　わしも伴れて歸つて吳れ。(船、動く。俊寛水の中に浸る)　待つてくれ。(船、動く。俊寛

水に浸りたる儘、一間ばかり船に引きずられてゆく）

基康　手を放させろ。

家來（俊寛の手を摑んで放す）

俊寛（またしがみつく）

基康（刀を拔き背にて俊寛の手を打つ。俊寛、手を放す）急いで漕げ。

（船、岸を離れる。）

俊寛（ずぶ濡れになつたまゝ）船を戻せ！　船を戻せ！

基康（家來に）急げ。（俊寛に）わしの勢ではないぞ。

成經　きつと迎へに參りますぞ。

康頼　ゆるして呉れ。ゆるして呉れ。（手を合はす）

俊寛　助けて呉れ！　わしを一人殘すほどなら、むしろわしを殺して呉れ。

（答へなし、船退場。）

俊寛　たゞ九州の地まで。一生の願ひだ。そしたら海の中に投げ込んで殺して呉れてもいゝ。

（答へなし。）

俊寛（水際を傳つて走る）船を戻せ！　わしを助けて呉れ。

（答へなし。）

俊寛（丘の上に匍ひ登り沖をさしまねく）おーい、康頼殿。

（沖より呼ばはる聲聞ゆ。）

俊寛　船を戻せ！　船を戻せ！

（沖より銅鑼の音響く。）

俊寛　船を戻せ！　船を戻せ！

（答へなし。）

俊寛（衣を引裂く。狂ふ如く打ち振る）おーい。康頼殿。

（答へなし。）

（此時雷の轟く如く山の鳴動聞ゆ。）

俊寛（震へる）助けて呉れ！

（答へなし。）

俊寛（絶望的に）駄目だ！（地に倒れる。立ち上る）鬼だ。畜生だ。お前等は歸れ。歸つて清盛に媚び諂へ。仇敵の前に跪いて憐みを受けい。わしは最後まで勇士として只一人此島に殘るぞ。此島で飢ゑて死ぬるぞ。

（も一度劇しき山の鳴動。）

俊寛（思はず叫ぶ）助けて呉れ！（地に伏す）（間）（必死の力を出して立ち上りよろめきつゝ）わしは此の島の鬼となるぞ！

（浪の音、松風の音、其間を時々山の鳴動。）

——幕——

第三幕

第一場

（舞臺、第一幕に同じ。岩多き荒涼たる濱邊、第二幕より七年後の晩秋。）

俊寛　（痩せ衰へ、髮を蓬々と延ばし、ぼろ／＼に破れ、風雨のために縞目も分らずなりたる着物をきてゐる。岩角に立ちて、嘆息しつゝ海を眺める）あゝ駄目だ。また欺された。何百度欺されゝばいゝのだ。康頼奴がなまじひに迎へによこすと云つたばかりに！　苦るしまぎれにいいかげんな事をいつたのだ。其場限りの慰めだ。それが何の宛になるものか。それをお前は知つてるくせに。愚か者！　未練なわしよ。あゝわしはもう自分に頼る氣もなくなつた。どうしてわしは死んでしまはないのだ。此岩角に頭を打着ければ、此の悪夢のやうなわしの生涯は閉ぢるのではないか。あゝ想像もつかない恐ろしい七年が經つた。わしはどうして生きて來る事が出來たのだらう。四季の遷り變りと月の盈虧がなかつたら、どうして月日さへ數へることが出來たらう。何よりも苦しいのは食物がない事だ。わしはいつも餓鬼のやうに飢ゑてゐなければならない。もう弓を引く力もなくなつた。水潜ぐる海士の術も知らない。（ふと岩陰を見る）見つけたぞ！（岩陰に飛び行き）待て。蟹め。（あわて捕へんとす）えゝ逃げ居つたわい。（がつかりする。考へる）ああわしは餓鬼だ。少しの食物を得るためにどんなに淺ましい事をしなければならないか。

（此時岩角に止りゐたる兀鷹空を舞ひ、矢の如く海面に降り魚を捕へ翔ちさる。）

俊寛　あゝわしはあの兀鷹が羨ましいわい。

（漁夫一登場。畚を岩の上に置き網を打つ。）

俊寛　（おづ／＼と漁夫の側に近寄る）

漁夫一　（氣味悪るさうに俊寛を見る。網をあげ、捕へたる魚を畚の中に入れ、再び網を打つ）

俊寛　（畚の中を覗き込む。何かいひかけて、躊躇す。やがて思ひきりたる如く）此魚をわしの硫黄と換へて呉れまいか。

（懐より硫黄の塊を出す。）

漁夫一　（俊寛を輕蔑したやうに見る）わしはそんなものはいらない。（網を引上げる）

俊寛　さうであらうが二三尾でいゝから換へて呉れまいか。

漁夫一　九州から硫黄を買ひに來る商人に持つて行くがいい。

俊寛　いつ來るか分らない。わしは飢ゑてゐるのだから。

漁夫一　それつぱかしの硫黄を貰つたつて仕方がないや。
（俊寛が避ける如く、少し離れた所に行き網を打つ。）
俊寛　（塚の中を物欲しさうに覗き込む。やがて隙を覗ひ手を突込み魚を掴み、懐に入れる。）
漁夫一　（それを見付ける）竊みやがつたな。太い奴だ。
俊寛　わしは知らぬわい。
漁夫一　嘘をつけ。魚を出せ。（俊寛に詰め寄せる）
（漁夫二と其妻登場。）
漁夫二　どうしたのだ。
漁夫一　此奴、わしの魚を竊みやがつたのだ。
漁夫二　此流人奴か。とつちめてやれ。
漁夫二の妻　（背中の子供をゆすぶりながら）此奴はいつもうろ／＼して物竊みをするといふことだよ。
漁夫二　打ち撲つてやれ。（俊寛逃げんとす）
漁夫一　待て！（俊寛を地に摑ち伏せる）
漁夫二　盗人奴！（俊寛の顔を打つ）
俊寛　（顔を掩うて地に伏す）
（漁夫の子供火のつくやうに泣く。）
漁夫二の妻　（慳貪に子供をゆすぶりながら）吼えまいぞ。吼えまいぞ。吼えると此流人のやうに撲たれるぞ。
漁夫二　（俊寛を突きやり）失せろ、流人奴。二度と此様な眞似をしやがつたら、生かしては置かないぞ。

漁夫一　二度と此界隈にうろつくな。
漁夫二の妻　いやな奴だね。あんなのを餓鬼といふのだらうよ。
（三人退場。）
俊寛　（立ち上り、四邊を見廻す）あゝ、何といふ慘めさだ。（走り行き岩角に頭を打ち突けんとして躊躇す）ああ　死ね！　死ね！（地に伏す）あゝ駄目だ。これでもわしは死ねないのか。（慟哭す。やがて岩角に腰を掛ける。ふとそこに落ちゐたる魚を見付ける。無意識に拾ひ上げて喰はんとす。此時犬の群の吼ゆる聲起る。ぎよつとして四邊を見廻す）しつ。しつ。（犬益々吼える。俊寛、石を拾ふ）畜生！（石を投げる。犬の聲靜まる。魚に噛りつく）
（有王登場。俊寛人の氣配に岩陰に隱れる。）
有王　（四邊を見廻しつゝ）何んと云ふ荒れた島だらう。都に居る時鬼界ヶ島の淋しい事は聞いてゐたが、これ程だらうとは思はなかつた。本當に鬼でも住むやうな島だ。此島で一日と暮らせようとは思へない。あゝ御主人さまは此島で、七年も只一人で暮らさなければならなかつたのだ。若しや最早お果てなされたのではあるまいか、此島中を山を攀ぢ濱邊を傳つて探したけれどもそれらしい人も見當らない。若しか絶望のあまり岩角に頭を打ち付

けて自殺でもなさりはすまいか。いや〳〵、そんなことはあるまい。奥方や若君の安否も分らぬ先にそのやうな事はなさるまい。（岩の方に行く）

俊寛 （岩陰より出て去らんとす）

有王 （俊寛の姿を見て驚き二三歩後ろに退る。小聲にて傍白）あれはなんだらう。あの恐ろしい姿は！ わしは餓鬼道へでも迷つて來たのではあるまいか。いや、やはり人間のやうだ。尋ねて見よう。（俊寛の後ろより聲を掛ける）一寸、物をお尋ね致したい。

俊寛 （後ろを振り向く）

有王 わしは都から來た者だが、（俊寛、都と聞いて驚ろいて有王を見る）此島に法勝寺の執行俊寛僧都と申す方が十年前より御渡りになつてゐる筈だが、若しや御存じあるまいか。

俊寛 （驚ろきのため眞青になる。何か言ひかけて唇を痙攣る。やがてつく〴〵有王を見る） 有王だ！ （有王に抱きつく。やがて反射的に有王を放し顔を掩ふ）あゝ、わしは恥づかしい。

有王 （驚ろきて俊寛を見る） お前は誰だ。わしの名を知つてゐるお前は。

俊寛 有王よ。わしだ。俊寛だ！ （有王に抱きつく）

有王 （驚ろき、熟々と俊寛を見る） あゝ。御主人様だ！（俊寛を抱く）

俊寛 あゝ、わしは〳〵。（慟哭す）

有王 お懐かしう御座いました。（愛憐の情に堪へざる如く泣く）貴方樣の此の御變りやうは！

俊寛 わしの姿を見て呉れい。

有王 あゝ傷はしや、御主人樣。よく生きてゐて下さいました。どうして此十年を御過ごしなされました。此の荒い島で、只一人で。（泣く）

俊寛 わしは餓鬼のやうに暮らして來た。どうして生きて來たか自分にも分らない。總べては困苦と缺乏と孤獨と、そして堪へられない侮辱だつた。

有王 こゝで御目にかゝらうとは！

俊寛 夢だ！ 惡い、長い夢だ。

有王 今生で再び御目にかゝれるとは。あゝ有難い。

俊寛 此の變りはてた淺ましい姿を憐れんで呉れ。

有王 御主人樣、最早御安心なさいませ、私が參りました。貴方の手足のやうに忠實な有王奴で御座います。

俊寛 （有王を抱き歔欷りなく）

有王 私の心は昔と寸分變りませぬ。貴方が都をお立ちなされてから、苦しい長い日が續きました。あゝ長い〳〵日が、わたしはどんなに貴方の事を御案じ申したか、先年鬼界ヶ島の流人達が今日は都へ登ると聞いた時、私は

夢かとよろこんで取るものも取敢へず鳥羽まで參りましたけれども、康頼殿と成經殿の輿は歸つたけれども、貴方様は一人鬼界ヶ島に取殘りなされたと聞いた時、私は絶え入るばかりに悲しみました。それから七年の間貴方の赦免の事がある日をあけくれ待ち侘びてゐました。けれど七年が空しく過ぎました。待ち倦ぐんだ末、私は堪へ切れなくなつて人目を忍び此の島に尋ねて參りました。せめて今生に一度だけでも御目にかゝりたいと思つて。

俊寛　あゝ、お前に再び會へようとは！　遥々と來て呉れたか。わしのすべての友、すべての家來がわしを見捨てたのに。此島の漁師さへわしを蔑り、餓鬼を恐れるやうにわしを避けようとするのに。

有王　私の尊い御主人、私は貴方のために命を惜みませぬ。幼い時から貴方に受けた御恩を思へば、私はよろこんで貴方のために死にまする。

俊寛　わしは絶望のあまり幾度も幾度も死にかけた。深い海や峻しい岩角は、絶間なくわしを死に誘うた。だがわしの妻子の愛着がわしを死なせなかつた。此地上のどこかで妻や子が生きてゐるのだと思へばわしは死ねなかつた。然もきつと不幸と恥辱との中に。有王よ、わしは妻子の安否を氣遣つた時、いつもお前のことを頼みにしてゐた。すべての家來は背き去つても、お前だけはきつと最後まで命を賭けても彼等を守つて呉れると信じて居た。わしに聞かせて呉れ。聞かせて呉れ。わしの妻はどうして居ますか。

有王　（何かいひかけて止める、憐れむ如く、俊寛の顔を見、顔を背向ける）

俊寛　云つて呉れ！　有王。わしは大抵想像してゐる。どんな恥な暮らしをしてゐてもわしは最早驚きはしない。

有王　（苦しさうに）あゝ、私の申し上げる事はもつと悪い事で御座います。

俊寛　（青ざめる。心を確かに保たうと努めつゝ）わしは覺悟してゐる。

有王　（堪へ兼ねたる如く）西方に御はします奧方様。御主人様の御心を御支へ下さるやうに！

俊寛　あゝ亡くなつたか。自害したか。

有王　（思ひ切りたる如く）幾度かそれを企てられました。其度毎に私が必死になつて御止どめ申さなかつたら。貴方が西八條に捕らはれていらつしたあと、平氏の役人共が館に押寄せて近親の方々をこと／＼く搦め捕り、連れかへつて拷問し、謀叛の次第を白状させてこと／＼く首をはねました。若し重盛が命乞ひをしなかつたら、女や幼い者さへも免かれる事が出來なかつたでせう。奧方は

若君と姫君とを伴うて鞍馬の奥に身を御隱しなされました。深い御恩を蒙つてゐる數多くの郎黨は自分の身に咎めのかゝるのを恐れて皆逃げ去つて仕舞ひました。私一人御供をいたし御奉公申し上げましたけれども、其不自由さは申すも御いとしい程で御座いました。絶えず敵の追手を恐れ、殊に恥ぢと侮りとを防ぐためにあの氣高い奥方がどんなに心を苦しめられたか、貴方が此島に御流罪になられたと聞いてから奥方の御歎きは側の見る目も苦しい程で御座いました。康頼殿、成經殿の御赦免があつて貴方のみ御殘りなされたと聞かれてから、奥方の悲しみは最早私の慰め申すにはあまりに深くなりました。そして遂に病の床に御就きなされ種々手を盡くして御看病申し上げましたけれどもその甲斐なく遂に御果てなされました。

俊寛　あゝ哀れな妻よ。（眼を閉ぢる。力なく）二人の子供は？

有王　其後を申し上げるのはあまりに苦しう御座います。

俊寛　云つて呉れ。云つて呉れ。わしの心は最早悲しみに痺れてゐる。

有王　若君は夜も晝も父母を御慕ひなされ、「母上はいづくにゆかれた？　鬼ヶ島とやらへ連れてゆけ。」と御むづかり遊ばしましたが、六年前の二月頃其時流行つた疱といふ病氣に御かゝりなされ遂に御失せなされました。

俊寛　（石の如く硬く冷たき表情にて）たゞ一人殘つた娘は？

有王　姫君さまは此世をはかなみ奈良の法華寺にて尼になつて、母上や若君の菩提を弔うてゐられましたが、去年の秋の暮ふと御行衛が分らなくなり、手を分けて探しましたところ。（俊寛を見る。堪へかねたる如く面をそむけ口を緘む）

俊寛　云つてくれ。一と思ひに此場に及んでもはや私に悲しみを吝んでくれな。

有王　さる谷間に姫君の御死骸が見つかりました。

俊寛　（殆んど無感覺になりたる如く虚ろなる目付きに…）無た！　すべてが、總てが亡びてゐたのか、わしの氏を根こそぎ奪つてゆくのか。

有王　氣をお確かに！

俊寛　（我にかへりたる如く）清盛はどうしてゐる！　平氏の運命は？　わしに信じられない程殘酷な運命が平氏をどう扱ふか、わしはそれが知りたい！

有王　世は澆季になつたと思はれまする。平氏は益々榮え蔓り、其莊園は天下に半ばし、一族悉く殿上に時めき、「平氏にあらざるものは人にあらず。」といはれて居ります。清盛が嚴島に參詣する道を直くするために切り開か

した音戸の瀬戸では傾く日をも呼び返したと人は申しまする。法皇は清盛の女の胎から生れた皇子に位を譲られる、と聞いて居ります。あらゆる暴虐に飽いた身を宮殿を凌ぐやうな六波羅の黄金の床に横たへて、美姫を集めて宴樂に耽つて居ります。天下は清盛の前に恐れ伏し、平氏に媚び諛ひ何人も敢へて對抗しようとするものはありませぬ。

俊寛　成經はどうした。都へ歸れば隙を覗つて復讐する事が出來るといつた成經は？

有王　成經殿は此度宰相、少將に昇られるといふ噂で御座います。平氏に刄向ふ事などは思ひもよらぬやうに見受けられます。

俊寛　父を清盛に殺された成經が！　康賴はどうしてゐる。

有王　康賴殿は東山双林寺の山莊に籠つて風流に身を窶してゐられます。鬼界ケ島での生活を材料にして寶物集といふ物語りを世に出されるといふ噂で御座います。

俊寛　犬だ！　鼠だ！　わしは最後まで勇士として立つぞ。自分を賣らぬぞ。有王船を用意しろ、船を！

有王　お心を靜かに！

俊寛　只一矢を！　わしの腕に未だ力があるうちに！

有王　船は急にはありませぬ、私が此島に來る事が出來たのも不思議な程で御座います。赤間の關で役人に捕へられ既に危きところを脫れ、船頭を欺してやうやく此島に着く事が出來ました。

俊寛　九州まで！　いかなる手段をつくしても！　九州まで着けば身を忍ばして都に入り、時機を覗ふ事が出來る。

有王　假令九州まで歸り着いても、清盛が草を搔き分けても探し出さずには置きませぬ。

俊寛　只一太刀！　わしの憎みを清盛の肉に只一太刀刻みつけるために！

有王　（熟々と俊寛を見る）　あゝ御主人樣何事も時で御座います。吾々の運は去りました。

俊寛　（倒れんとす）

有王　（俊寛を支へ憐みに堪へざる如く）　御氣を確かに！　榮枯盛衰は人間の力に測り難き天のさだめでございます。今時を得て全盛の極にある平家の運命もいつかはきつと盡きる時が來るでせう。

俊寛　（夢中にて）　殘つてゐる！　またわしの腕に力が殘つてゐる。

有王　一人や二人の力で刄向うても、今時を得てゐる平氏を覆すことは出來ませぬ。天が平氏を滅ぼすのを待ちませう。

俊寛　清盛よ、お前がわしに課した苛責の償をお前に知ら

さずには置かぬぞ！

有王　あの淸盛の前代未聞の惡逆が天罰を受けずには置きますまい。

俊寛　今わしが流すこの膏のやうた涙をお前の歡樂の盃に注ぎ込んで飲まさずには置かぬぞよ。

有王　無間地獄の苛責とても今のあなたの苦しみにまさりは致しますまい。

俊寛　此の苦しみを倍にして、七倍にしてきつとお前に酬いるぞ！　わしの足がまだわしの體を支へる限りは。えゝ。船を出せ。船を！

有王　（力盡きたる如く、ぐつたりとして）　船はとても得られませぬが。

俊寛　たとへ生きながら龍となつて大海を越ゆるとも！（衣を裂く）わしは憎む。わしは憎む。（狂ふ如く）えゝ、此の頭が張り裂けるわい！（殆ど無意識に頭を岩角に打ち當てんとす）

有王　（眞靑になり、俊寛を抱き止める）　御主人樣。御主人樣。

俊寛　（有王の腕の中にて）　淸盛よ、わしの死骸をお前の死骸に重ねるぞ！（失神して倒れる）

有王　（俊寛を抱きかゝへたるまゝ）　御主人樣、お氣をお確かに！　あゝ、いたはしや。あまりに苦しみが過ぎました。鬼神もお憐れみ下されい。かゝる苦しみが歷史の記錄にもありませうか。

俊寛　（我に返り、抱かれたるまゝ、無限の感情をこめて）あゝ。有王よ。

有王　御主人樣。氣をお確かに！　有王は最後まで宮仕へ致しますぞ。海を潛り、山に攀ぢても、食物を獲り求めあなたを養ひ守りますぞ。（俊寛を抱き緊める）

――幕――

第二場

（俊寛の小屋。磯に漂着したる丸太や竹を梁や桁とし、蘆を結んで屋根を葺き、苫の破片藻草、松葉等を掛けて僅かに雨露を避けたるのみ。すべて乏しく荒れ果ててゐる。俊寛、草を敷き破れたる苫をかけて臥てゐる。第一場より一ケ月後の夜、隙間より月光差し入る。小屋の外は嵐吹く。）

俊寛　（突然苫を押しのけ、起き上り、四邊を見廻す）　體道に落ちてゐるのか。妻よ。今に、今に恨を晴らしてやるぞ！（我にかへりたる如く）あゝ夢か。（急に自分の地位をはつきりと意識したる如く）あゝわしはどうして死に切れないのだ。既に三七日も飲食を斷つてゐるのに！　わしは干死することも出來ないのか。わしの生命

の根は執念深く斷ち切れない。此の淺ましいわしの業をいつまでも晒させようとするのか。食を斷つても斷つても死に切れぬ蛇のやうに。わしの力はわしの四肢からもう失せたのにわしの根はいつまでも死に切らないのか。運命は飽くまでもわしを責め苛なまうとするのか。わしは死にたい。死にたい。たゞ恨みだけがわしの命を燃やしてゐるのだ。わしは死んでたゞわしの恨みだけが生きてゐるのだ。わしは恨みそのものだ、わしは生きながらの怨靈だ。（耳を聳てる）あゝ風の音か。わしの子供が泣いてゐるやうな氣かしたのだが。

有王（登場、魚と荒布とを持つてゐる）只今歸りました。

俊寛（猶何者かの後を追ふ如く）あゝ歸つたか。

有王　御氣分は如何で御座います。（俊寛の側による）

俊寛　わしの根は徐々はつきりするばかりだ、わしの身體は日に〳〵衰へてゆくのだが。

有王（熟々と俊寛を見る）御主人樣、何卒私の申す事を御聞き下さい。今夜は心を靜めて何か召し上りませ。ここに魚と荒布とが御座います。

俊寛　わしは最早飮食は斷つのだ。わしははやく死にたい。

有王　何故そのやうな事をおつしやいますか、私が生きてゐる限りは假令御不自由とは申せ、海山を漁つても貴方を餓ゑさせは致しませぬ。

俊寛　あゝわしは生きてゐてどうするのだ。わしの手足にまだ力が殘つてゐた間は、いかにもして一度都に歸つて敵に一太刀酬いる望みがあつた。お前からあの恐ろしい凶報を聞いた時、わしがすぐに死なゝかつたのは唯その希望のためのみであつた。があまりに烈しい悲しみは私を打つた。衰へ切つた私の體を病氣が蝕んだ。私はもはや再び都の土を踏む望みはない。一指を加へることが出來ないで敵と倶に一つの天を戴くことは限りない苦しみだ。

有王　病氣は治すことが出來るではありませんか。命さへあれば再び都に歸れないとは限りません。

俊寛（苦しさうに）有王。此の期に臨んでもはやまやかしごとを云つてくれな。

有王　でも壽命のある限りは。

俊寛（さへぎる）わしはもはや再び立つことは出來ない。

有王　どうしてそのやうなことがありませう。何卒飮食をお攝り下さい。私が苦心して漁り求めて來たのでございますから。

俊寛　わしは干死にするのだ。わしの呪ひが惡魔の心に適ふために。わしの肉體の力はつきた。私に殘つてゐるはたゞ魂魄の力た。私の此の力で復讐して見せる。淸盛はわしからすべての力を奪つた。然し此の力を奪ふ事は出

來ないのだ。人間の魂魄の力がどれだけ強いか。わしはそれを知らせてやる。淸盛を呪うてやる。共に魔道に伴うてゆくぞ！

有王　あゝ恐ろしい。御主人樣、貴方は靜かに此世を終つて下さい。私は爭ひに飽きました。あゝ此の年月私の見て來た事はあまりに恐ろしいことばかりでありました。思へば思ふ程淺ましい。私は此恐ろしい世を惜しいとは思ひませぬ。其渦の中から脫れたい。假令此の荒れた島はいかに淋しくとも、こゝで靜かに餘生を送りませう。私が朝夕心をつくして御奉公申し上げますから。熟々貴方の御生涯を思へば只事ではない氣が致します。眼に見えぬ惡業が貴方の氏に附き纏つてゐる氣が致します。靜かに業の盡きるのを待ち平和な來世を御迎へ遊ばすやう。私はひたすら祈ります。今貴方の心に起つてゐる事は世にも恐ろしい事で御座います。貴方の來世を魔道に落さぬやう。

俊寛　わしの此の、此の骨髓に徹する怨をどうするのだ。あゝわしの受けた苛責がどれ程のものだつたか！　わしはよい人間ではないかも知れない、だがか程の苛責がわしに相當してゐるだらうか。少くともわしは淸盛程惡虐ではないつもりだ、彼程人を傷つけてはゐないつもりだ。天は其淸盛をどのやうに遇してゐるか！

有王　あゝ私もそれは分りませぬ、が、淸盛の積んだ惡業はきつと罰を受ける時が來ると思ひます。

俊寛　あゝわしはその罰を呼び起すのだ。その罰を七倍にしてやるのだ、彼を地獄に引きずり墮してやるのだ。

有王　御主人樣、何卒御心を靜めて下さい。淸盛の懲罰は魔王に委せて下さい。此世では記錄にない程の恐ろしい苛責を受け、死後もまた地獄に墮ちて永劫に盡きない火に燒かれなくてはならなかつたら！

俊寛　假令地獄の火に燒かるゝとも淸盛を呪ひ殺さずには置かないぞ。彼を火の中に呪ひ落して永劫に責め苛まずには置かないぞ。

有王　（耳を掩ふ）あゝ恐ろしい。佛樣が主人の心をお靜め下さるやう！

（沈默。嵐の音が過ぎる。）

俊寛　有王よ。お前は都へ歸つて呉れ。

有王　（驚く）御主人樣。何をおつしやいます。

俊寛　お前はまだ若い。わしとともに此島で朽ち果てさすに忍びない。都へ歸つてよき主に仕へ世に出る道を計つて呉れ。

有王　私は世を厭ひます。此島で一生貴方に仕へるほか何の望みも持ちませぬ。

俊寛　都へ歸れ。都へ歸れ。

有王　私は死ぬまで貴方を養ひ守ります。

俊寛　わしはお前にとつてい丶主人ではなかつた。お前に何んの榮をも與へることが出來ないで、恥と煩ひとのみ負はせた。お前がわしの妻子に最後まで盡して呉れた事は、わしの肝に銘じてゐる。お前の一生を此島に埋めさせてはならない。立ち歸つてお前の榮を求めて呉れ。

有王　御言葉が身に餘りまする、私は貴方のためによろこんで死にます。此島に朽ち果てることは物の數ではありませぬ。只いかに心を盡しても貴方のあまりに深い心の手傷を慰めることが來ないのを悲しむばかりで御座います。

俊寛　わしを捨て丶呉れ。此島で一人死なせて呉れ。

有王　私は最後まで貴方の側を離れませぬ。貴方とともに死にます。

俊寛　わしの死はもう手の屆く程近づいてゐる。

有王　あ丶私は無常を感じます。靜かに此世を終りませう。來世の平安を祈りませう。主從は三世と申します。

（間。）

俊寛（何事かを思ひつきたるごとく急に立ち上り、やがて眞青になりて、崩れる如く寢床に坐る）

有王　どうかなさいましたか。急に御顏色が惡くなりましたか。

俊寛（平氣を裝ふ）わしは寒い。有王、火を焚いてくれ。

有王　あ丶あまり夜風がきついのが障つたので御座いませう。直ぐに火を焚きませう。直ぐ薪を拾つてまゐりますから。（退場）

俊寛（寢床の上に倒れる。やがて決心したる如く立ち上る）有王よ。お前の忠義はいつまでも忘れぬぞ。（よろめきつ丶藻草を搔き分けて小屋を出で四邊をうかゞひ濱邊の方に向つて退場）

（舞臺暫く空虛。）

有王（登場）直ぐに火を焚きますぞ。ひどい嵐だ。（俊寛の姿の見えざるに氣付いて、驚き薪を投げる）御主人樣。（小屋の中を探す。藻草の搔き分けてあるのを見る。急に眞青になる）あ丶。（驚き慌て小屋を走り出で、月明りに濱邊の方を透し見つ丶急ぎ退場）

―幕―

第三場

（舞臺第一場に同じ。時。第二場の直後。烈風吹き、波の音高し。荒れ狂ふ海の上に利鎌の如き月かゝる。雲足疾く月前を掠め飛び舞臺淡暗くなり、またほの明くなる。）

（俊寛よろめきながら登場。幾度か岩角に躓きては倒

れ、また起きあがる。息を吐きつゝ後ろを透し眺め、よろめきつゝ岩を攀ぢ上り、峻しき巖角に突き立つ。手足、顔のところ／＼傷き血痕附着す。月雲を離れ、俊寛の顔を照らす。）

俊寛　（月を睨みつゝ）いかに月天子、汝の照らす此の世界をわしは呪ふぞよ。汝の耦たる日輪をも呪ふぞよ。かつては汝等の名によつて此世界に正しき律法あることを證したこともあつたが、今は惡魔の名によつてそれを取消すぞ。あゝ此の世界をわしは憎む。わしが生きてゐる間、わしをいかに遇したか。それをわしは永劫に忘れぬぞ。此の世界は歪める世界だ。善が滅び惡が勝つ世界だ。あゝ、なきに劣る世界だ。かゝる世界は惡魔の手に渡すがいい、惡魔よ來れ。わしは汝に今こそ親しく呼びかけるぞ。わしは三界に怨靈といふものゝ出來る理由を今こそ知つた。わしのごとく遇せられて死んだものゝ靈が、怨靈にならずして何になるのだ。（月雲にかくる）あゝ信頼の怨靈よ。成親の怨靈よ。わしに憑け。わしに憑け。地獄に住む惡鬼よ。陰府に住む羅刹よ。濕地に住むありとあらゆる妖魔よ。みなその陰氣なる洞窟を出でゝわしの圍りに集へ。わしはわしの靈を汝等の手に渡すぞ。わしはわしに生を與へたるものに叛き、永劫に汝等に屬することを誓ふぞ。わしの誓のしるしを受けい。（俊寛石を拾ひ己れの胸、額等を搏つ、皮膚破れて血奔しる。地に倒れ、又立ち上りて狂へる如く衣を裂く）あゝ惡魔よ。わしの呪を容れよ！（岩角に突立つ。烈風蓬髪を吹く。俊寛兩手を天に伸ばす）わしはあらゆる惡鬼の名によつて呪うたぞ！　清盛は火に燒けて死ね。宗盛の首は梟けられよ。維盛は刄に斃れよ。わしは清盛の女の胎を呪うたぞ。その胎より出づるものは水に溺れよ。平家に禍あれ。禍ひあれ。平家の運命に火を積むぞ。平家の氏に呪ひを置くぞ。胤の胤、裔の裔まで呪うたぞ。清盛よ汝を地獄に伴ひゆくぞ。（月雲を離れ俊寛の顔を照らす。月を睨んで）汝、僭冒者よ。天の座より墮ちをれい。（天に向つて唾を吐く。風のため唾悉く俊寛の顔にかゝる。俊寛狂ふが如く）惡鬼よ。羅刹よ。妖魔よ。來つて我圍りに集へ。すべて汝等の族に屬するもの悉く來つて我呪ひに名を署せよ。わしは今わしの魂魄を永劫に汝等の手に渡すぞ。おゝ清盛よ奈落の底で待つてゐるぞ。（岩角に頭を打ちつける。倒れる）

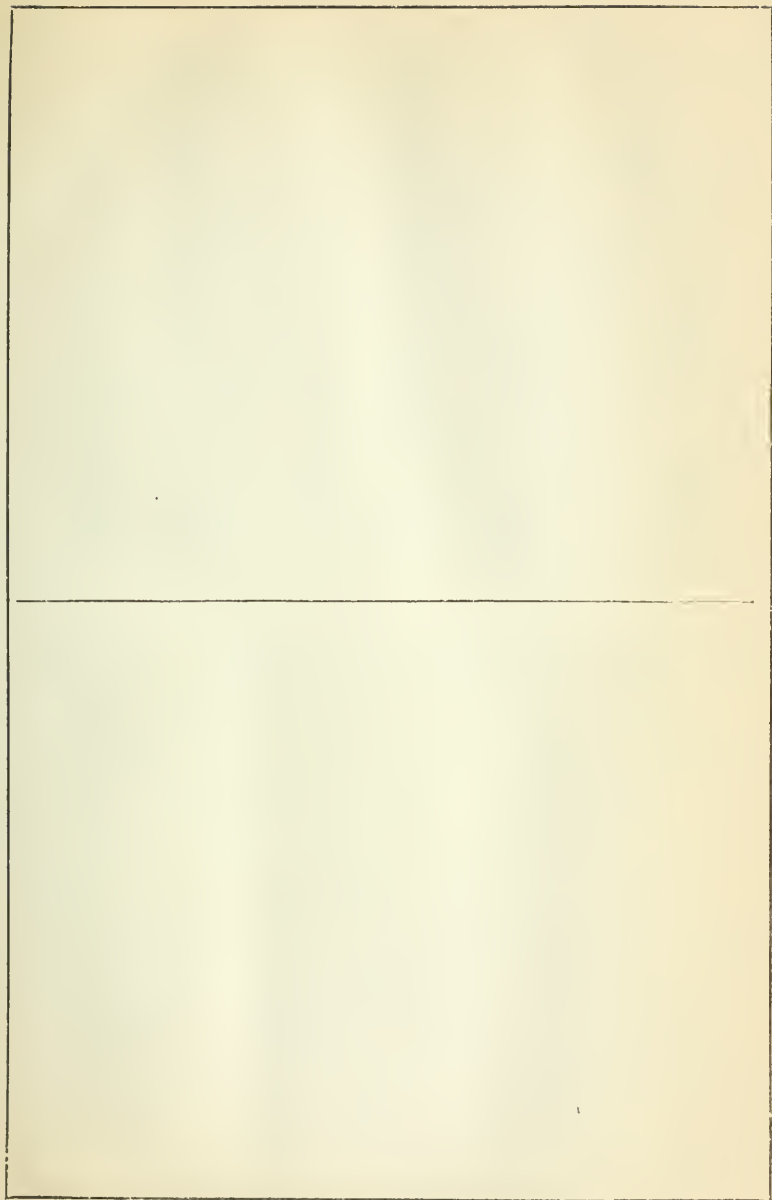
（間）

有王　（登場）御主人樣。（うろ／＼探す）あゝどこにゆかれたか、あゝ分つてゐる。分つてゐる。何を貴方が思ひつかれたか！　あゝ恐ろしい。御主人樣。（沙の上に血の痕を見付ける）おゝ。（血の痕をたどり、岩の上に攀

ち、俊寛の死骸を見付ける）おゝ御主人樣。（俊寛を抱き起す。既に絕息し居るを知る。地に倒れる。やがて起き上り俊寛を抱き締める。慟哭す。沈默。やがて俊寛の死骸を抱きつゝ）あゝ、傷はしい。御主人樣。苦しい〳〵御生涯で御座いました。何故に貴方はこれ程の苛責を御受けにならなければならなかつたか。それは私にも分りません。あゝ然し貴方の惡夢のやうな、御生涯は終りました。靜かな平和な來世が貴方を待つてゐるやうに！（熟々と俊寛の顏を見る）何んといふ恐しい死顏だらう。あゝ御主人樣、貴方は呪うて死なれましたか。天を恨み、世を憎み、敵を呪うて、恐しい、恐しい考を死ぬる際まで持ちつゞけて！　あゝ貴方の未來が恐しい。あゝ私が此十年の間見て來た事は實に恐しい人生の相であつた。（沈默。やがて決心したる如く立ち上る。死骸に向けて）有王は其處までもどこまでもお伴致しますぞ。（俊寛の骸を負ふ）あゝ佛樣。私は此世を厭ひまする。此恐しい世界から一時も早く脫れたう御座います。私は主人とともに死にまする。私は何も分りません。私の今することがたとへ間違つてゐようとも、何卒ゆるして下さいませ。あゝ主人の來世を御救ひ下さいませ。主人の靈を地獄より救ひ出して永への平和を惠みたまへ。（死場所を選びつゝ）今私の靈をあなたの御手に託しまする。（俊寛の死骸を負ひたるまゝ岩の上より海に身を投げる）

（嵐の音。波の音。月光ほしいまゝに濱邊を照す。）

――幕――

（一九一九・一二・三一・）

室生犀星篇

山ざと

人

所　長（四十五くらゐ）

その妻（三十四）

下　役　西川（二十二）

おなじく　小島　登場せず

所長のむすめ、申請人等

處

海濱の登記所

時

現　代

第一景

やや右手に卓三ッ四ッ、一間の窓。窓にそひ土藏の入口、正面人民受附口、及び玄關、衝立にかくれてゐる。左手官舍の障子戸、日ざし人民受附口の硝子戸に當つてゐる。初春の午前。

所長　ロ、二十八番八畝三歩也、リ、二十七番三畝六歩也、リ、三十二番三反五畝七歩也、ハ、二十二番、二反二畝六歩也、ホ、十六番、三畝三歩也、

西川　（書類をひろげたまま）ちよつと待つてください、ええと、ホ、十六番、二畝六歩也……

所長　二畝三歩なんだよ。違つてゐる。

西川　よございます。（書類に辨唐紙を張る）お次ぎへねがひます。

所長　二塚村御供田では、ホ、三十七番、二畝十六歩也、へ、十七番六畝二歩也、リ三十二番では四反六畝也。

西川　僕、かはりませうか。

所長　もう少しだからしまはう。（疲れた聲で節をつけなほ讀み合せを續ける）ワ、八十二番、三畝十七歩也、ロ、一番五反六畝二歩也、ホ、七十六番では九反六歩也、シ、十二番、三反八畝七歩也、シ、十三番、二畝三歩也。（やや疲れたる聲にて）一服やらう、けふはばかに暖かくなつたやうだね、汗が出るくらゐだ。

西川　ええ、これから段々閑散（ひま）があるやうになりませうね、畑打ちにいそがしくなりますから……

所長　さうだよ、いまが一番忙しいときかも知れないよ、けさも起きるともう申請人で控所が一杯なんだもの。百姓ばかりだから受附口へ行つて見たまへ變な匂ひがするから。あの匂ひがなくなるといつでも春になるんだよ。

西川　まだ火鉢が出てゐるから包ふんです。(氣がついて)今のうちに先刻の書類を訂させて置きませう。

所長　さうしてくれたまへ。直木代書人にはこまるね。(眼鏡をまたかけ直して書類を見なほして西川に渡し、煙管でたばこを吸ひ手あぶりではたく)

西川　(受附口へ行き代書人を呼び書類をわたす。新たな申請人書類をさし出す) 明日にしてくれませんか、けふは一杯になつてゐるんだから、それにこの樣子だと晩までかかるんです。どうか、明日の朝なるべく早く……。

所長　いまから書類を出されちや困る。全く……毎日灯をつけて仕事をするものだから眼がわるくなつた。今年は變だね、土地賣渡とか抵當とかが多くなつたぢやないか、それに去年なんか今ごろは遊んでゐたもんだよ、春鰯の始りがけにこんな忙しいことなんか珍らしいんだ。

西川　去年は三角臺へ出掛けましたね。警部さんや校長さんなんかも一しよでしたね。あのころなんか毎日おていさんと藏ん中で鬼ごつこしてゐたものですよ、奥さんが二階の梯子から落つこちたりなんかして、大へん暇がありましたね。

所長　あんな暇なことも珍らしいな、本所からは誰も來ないしね。この春の年度がはりには本所から誰かが來るやうだよ、內藤さんが來るかも知れない。それが濟むと又た異動かな。三年と一とところに住ましてくれないんだからね。一とところにゐると土地の價格もよくわかつて代書人に胡魔化されることなんかないんだが、すこしも椅子が溫まらないんだよ、君たちは大丈夫たけれど。

西川　しかし今年は大丈夫でせうよ、そんなに異動されたりして耐るもんですか、やつと去年入らしたばかりぢやないんですか。

所長　いや分らないよ。(不安さうに空眼をして窓さきを眺め、きせるを淋しさうにはたく) 小島君がゐてくれなかつたら、こちらの勝手がすこしもわからないし、いまでも小島でないと古い帳簿や物品の入れかはりが少しも解らないんだ。

西川　小島君は明日は出勤すると言つてゐました。しかしあの床屋はいやなところですね。

所長　小島はあそこに六年も借りてゐるんだ。今の床屋の前の床屋の時代からゐるんださうだよ、あのあたりの人とも交際ひをよくしてゐるんで評判がいいさうだよ。

西川　(何か考へながら氣のなささうに) さうですか。(申請人と代書人、受附のところに額をさし出し書類の訂正したのを差し出す。西川それを立つて受取りに行く) これでよろしい。

所長　(眼鏡をかけ手あぶりを卓のわきに下ろす) そろそ

ろ始めるかな。

西川　ええ、――けふは奥さんはどちらへか入らしつたんですか。

所長　（わざと何氣ない風を裝ふ。しかし明らかな不愉快な色をする）ちよつと町まで出かけたんだ。君のはもう縫へてゐるらしい。

西川　さうですか濟みません。町つて城下の方ですか。それなら日曜に僕が用達ししてよかつたんですが……

所長　城下さきだがもうかへる時分なんだ。（いつもの調子になり讀合せをする）ハ、九十六番、三畝九步也、イ、三番八畝三步也、ロ、六十一番八反九畝十二步也、（そのとき郵便が來る。所長立つ。官報の封を切る）大頭株の異動が始つたよ。（默讀の後西川にわたす）

西川　さうですね。（なほ讀みながら頁を返す）入學どきが濟んだらしく入學者の名前が出てゐますね。

所長　法政大學かね。

西川　（物憂げな聲で）ええ、うつかりしてゐると何時の間にか濟んでしまふ、今年こそはと思つてゐるんですが。

所長　來年を待つさ、まだ若いんだからいいぢやないか、それよりか折角講義錄の方を勉強するんだね。僕らと一しよに本所にゐた連中はみんな講義錄で下地をこさへてゐるんだよ、それがもう上席判事になつてゐるんだからな。全く僕なんかも田舍廻りをしてゐる間にいつの間にか手も足も出なくなつてしまつた。やはり遣るときには思ひきりやつとくといいね。いまになると唯何も彼もおそいことだらけだよ。

西川　（默つて讀んでゐる）

所長　町の方で辯護士になつてゐる北村なども本所で机をならべてゐたんだが、東京へ出て間もなく試驗を取つたらしいんだ。この間も町で行き會つたが知らん顏をして行つた。あいさつをしようと外套の袖口で手をもぢもぢさせてゐた此方が、跋がわるくて顏を赧めたくらゐだ、ははは……（寂しく笑つて）君はそんな北村のやうぢやないね。

西川　北村つてそんなですか？――僕なんか彼那になりつこはないんですからいいけれど。

所長　（少し意氣込んで言ふ）なに辯護士の試驗くらゐは誰だつて少し身を入れて勉強したらとれるよ。（所長、忙しげに氣づいて藏へ入つてゆく）

西川　（官報を投げ出してぼんやりと窓さきを眺める。米を搗く音がきこえる。やや永い間）

所長　（藏の中から）印紙の消印の訓令は何年から始めるんだつたかな、大正七年度かな、ちよつと見てくれたまへ、机の上にあるんですよ。

西川　（あわてて所長の机の上をさがしながら）　いま見ますよ、ええと、たしか、（書類をさしがあてて）　ええ、六年度からですよ、その以後の分は全部ナイフで切ることになつてゐます。

所長　さう、さう六年度だつたな、今年はあんなに蟲干をしたのに、ひどく濕けてゐる。

西川　（椅子に坐つてゐたが氣づいて）　手傳ひますか。

所長　（聞えないらしく返辭をしない。西川は何となく藏の方を眺める）

西川　手傳ひますか。

所長　（まだ默つてゐる）

西川　（藏の入口の方へ行き）　手傳ひますか。

所長　いやよろしい。

西川　（受附口へ行き申請人の名を呼んで登記濟をわたす。二三人群れる影が日の當つた硝子戸にさす）　變だな、こんなに長く入つてゐるなんて、――（椅子にもどつて藏の方を凝視めてゐたが、その時、玄關に所長の娘が歸つてくる）

おてい　（聲だけにて衝立のかげから）　唯今。

西川　おかへりなさい。

おてい　（靴をぬぐ間もなく這入つてくる。眼大きく田舍には珍らしい利發さうな眼をしてゐる）　おとうさんは？――

西川　お藏でしらべ物をなすつてゐらつしやるんです。もうお晝なんですね。

おてい　ええ。行つて見ようか知ら。

西川　行つてゐらつしやい。

おてい　（藏の入口に鳥渡立ち止る）　おとうさん、たゞいま。くらいのね。（藏の中へ這入つて行く）　――（しばらくしてから出てくる）　何か調べものをしてゐらつしやるのよ、何を言つてもうんうんつて何日ものやうぢやないの。

西川　（差し覗くやうにおていの顏を見つめる）　どんなものを見てゐらつしやるんですか。

おてい　（考へて）　ほら、登記の書きものを綴つたのがあるでせう、あれをめくつてゐらつしやるの。

西川　ふうむ。何だらうな。

おてい　（官舍になつてゐる障子の中へ這入つて行く、何か低い聲でうたをうたふ）　小島さんはすつかりいいんですつて。床屋の子がさう言つてゐらしつたんですよ。

西川　さうですか、ちよつとした風邪らしいから、なほるのも早いんでせうね。

おてい　（障子をすこし開け）　お春さんが今夜あそびにくるのよ、あなた入らつしやらない。

西川　ありがたう。
（その時藏の中から所長が呼ぶ。）
西川　ただいま。
（しばらくして二人とも藏を出てくる。所長蒼くなつてゐる。西川も異常に昂奮してゐる。所長手に帳簿を持つてゐる。）
所長　これを見たまへ、二十圓印紙が六枚、五圓の分が三枚、それに裏から濕らして剝いだらしいんだ。しかも消印漏れなんだ。どうして消印が漏れてゐたんだらう。僕の赴任した前の、も一人前の、いま執達吏をしてゐる上山さんの時代だよ。
西川　すると四年前ですね、だが剝いだころは何時ごろでせう、まさか今年ぢやないでせう。
所長　（依然蒼ざめたまま手を震はしてゐる）今年ぢやないな、小島君が知つてゐるわけだ。（考へて鋭どい眼付になる）あの男より外にこの時代の書類を知つてゐるものが無い筈だ、こまつたな、年度がはりの檢査官の來る前にこんな事件が持上つてしまつてはね、それにこんどの切手をナイフで縱に切る訓令が出たのも、やはりこれと同じい事件が起つたからなんだよ、やはり田舍の登記所なんだがね。
西川　とにかく小島君を呼びに行つて來ませうか。
所長　（西川の顏を見詰めたまま）さあ、なほ他の書類も調べて見る必要がある。これだけなら何んとか處分のしやうもあるが、しかしこれだけでも總計百三十五圓になるからな。（笑はずに冷笑のやうな氣もち）とにかく片端からこの年度の分を査べて見るから、君は登記の方を濟ませてくれたまへ、二三件くらゐ明日に廻したつていいから。
西川　ええ、ぢや、こつちが片づいたら僕も手傳ひます。
おてい　（官舍の障子の內から）おかあさんは？
所長　町へ行つたんだが、もう歸へる時分だよ、ごはんは先にお上り。お父さんはすこし急がしいんだから。
おてい　（障子をあけて出てくる）昨日もゐらしつたぢやないの。
所長　（不愉快な顏付きをする）昨日も行つたが御用だから仕方がないよ、――西川君、辨當をつかひたまへ、湯が湧いてゐるから。（おていに對ひ）西川さんにお茶を淹れておあげ、もう一時過ぎだな。
西川　では急いで飯にして代りませう。
所長　さうしてくれたまへ。
（所長土藏の內にあわてゝ消ゆ、西川辨當を持ち障子戸の內にはいる。おていの聲がする。）
所長　（慌だしく土藏の入口へ出てくる。手に一杯の書類を

持つてゐる。極度に喪失された表情で自分の机の上を眺め、そして障子戸の方に向ひ）君、食事がすんだら來てくれたまへ。（せかせかと蔵の中へ這入つてゆく）

西川　はあ、すぐ行きます。

所長　（間もなく出てくる）西川君、ちよつと來てくれたまへ、ちよつと！

西川　（すぐ出てくる）

所長　この綴りは殆全部剝いであるんだ。全部だよ、廢棄年限にはまだ五年もあるんだ。しかもみんな濕して剝いだものと見え、ほら、こんなに紙がむけむけになつてゐるだらう。ほら、これなんぞはまるで引裂いてあるんだ。（極度の驚愕）これはとても內分ぢやだめだ。さツきの分だけならおれはどうにかするつもりだつたが、こんなに酷くて何も彼も駄目だ。むちやくちやだ。どうなることだ。

西川　（からだを固くする）するとまだ他の分もやられてゐるかも知れませんね、これだけでは濟みさうもありませんね。

所長　他の分もやられてゐるだらう、手のつけやうがない。もつと早く氣がつけばよかつた。何氣なしに今日の抵當事件の先きの申請書をしらべるとこれなんだもの。おれは少しぼんやりしすぎたよ、あの男にまかせきりだつたのがぬかりなんだ。おれ一人で査べてゐるのも恐ろしいくらゐだ。

西川　（むしろ機械的な喪失）ではすぐ小島君を呼びに行つて來ませう。

所長　待ちたまへ、これはあの男には一切知らさずに置かう、そして手續きをするやうにしよう、とにかくおれは町へ行つて所長に會つた上にしよう、あの男には一切默つてゐてくれたまへ。

西川　しかし小島君に決つてゐるわけでもないでせうに。

所長　（決然として）いまになると何も彼も解ることがあるんだ。すこしをかしいと思ふことがあつたが、こんなにひどい鼠だとは考へなかつたんだよ、これからは厭な目にあはなければならないね。こんな年をしてこんなひどい目にあふなんてよくよくおれも不仕合ものだよ。（衝立の前にある閲覽椅子にかける）見たまへ、ざつと此の二三件の申請書たけでも、三百八十圓になるんだ。しかも此の次の申請書もさうなんだよ、この年はどうしてこんなに澤山の遺産相續や賣渡土地が多かつたのだらう。遺産相續に貼用印紙の多いことが分るなんて當り前のこつたが。（やけくそになり）この一と綴だけみんな持つて行つてくれたらいいのに、何て厭なこつた、ねえ、いい年をして、毎日證人とか何とかで法廷へ引つぱり出

されるなんて、思つてもぞつとする。

西川　僕も出なければならないでせうか。僕はかまはないんですが。

所長　君も呼び出しは食ふよ、當分何もできないよ、おまけに新聞には出される、代書人どもから輕蔑される、おまけに決り切つて異動になるに定つてゐる。こんどはどこか山の中へでもやつてくれるといい、下役なんぞのゐないところへおれ一人やつてくれるといい。（所長、突然立ち上る）君一しよに來てくれたまへ、こんな暢氣にしてゐられるもんか、かうなつたら片つ端から査べよう。手傳つてくれたまへ。

西川　（立ち上る）ええ、しかしごはんをおあがりになつたらどうです。

所長　いや、よさう、そんなものは喉へ通りはしない。何だかかつとしすぎて嘔氣さへ感じてゐるのだ。

（登記申請人そつと受附口の戸をあける。二人とも氣づかず藏へ入りかける。西川ふと氣がつく。）

西川　何かご用ですか。

申請人　（陰鬱なる聲）登記はまだ濟みませんでせうか。井村喜右衛門の申請でございますが。

西川　井村喜右衛門さんですね。まだです。たしか抵當權設定ですね。あれは二番抵當にまでなつてゐるので、まだまだ讀み合せがすみさうもないんです。

申請人　（依然陰鬱なる聲）登記濟證書でお金を引きかへにいただくことになつてゐるんですが、今朝から金貸しの方がかうして待つてゐられるのですが、早く金をにぎりたいと存じまして、――

西川　しかしそれはあなた方の事情ですが、こちらは大勢の方を對手にしてゐるんですから、あなただけを早くしておあげするわけには行きません。

申請人　この方がお急ぎですし、家の方ではみんな親戚のものが集まつて待つてゐるのでございます。早くしないと家の方でも困ることがございますので……

西川　登記濟みになつたら呼びますからそこを閉めておいて下さい。

所長　（藏の中から呼ぶ）君、むちやくちやだ。まるで話にならない。（烈しく書類を繰る音がする）まるで……あとのことも考へないでやつた仕事だ、かたりだ、早く來てくれたまへ。

申請人　どうかお慈悲でもつて早くおたのみします。

西川　わかつて居ります。そこを閉めておいて下さい。（所長なほも呼ぶ）いま行きます。（申請人、受附口から消える）

第二景

同じ日の夕方、電燈、晝間聞えない海鳴りがする。控所の電燈が受附口を黄ろく染めてゐる。官舍障子戸にもあかりが點いてゐる。所長一心に書類をしらべてゐる。西川も向ひ併せの卓で書類を繰つてゐる。

所長　これで全部だ。ああ草臥れた、では明日の朝早く本所へ行くことにする。君は小島には默つてゐてくれたまへ、おれもあの男の顔を見るのがつらいから、あの男の出勤しない前に出掛けるつもりだ。そして直ぐ本所から檢査官に來てもらふつもりなんだ。あとは君にたのむ。

西川　承知しました。

所長　こんなことになるのもみんなおれの運のわるいのさ。（やや落着いて）全く今朝までこんな恐ろしい事件が起きてゐやうとは思はなかつた。（藏の方を見ながら）先刻あの中で寒氣がしてがたがた震へた。そしてどの書類を見ても印紙が貼つてあるのが寧ろ不思議な氣がした。でも明日は厭だな、こんな用件で本所へゆくのが全くたまらない。

西川　（書類を繰りながら）これなんぞ全くていねいに仕事をしてありますね、一體藏の中でこんな仕事をする暇がよくあつたものですね。

所長　きつと主任が出張してゐる間とか、外出中の隙を狙つたものだね、かうして居てはとてもそんな仕事はできるものぢやないからね。あの男は妙に落着いてゐるからな。それにしても印紙を何處へ賣りつけたかが分らないよ、この土地ではなからうと思ふんだが（所長ふと受附口を見る、申請人のかげ見ゆ）とにかく此の事件は大きく擴がるにちがひないな、第一消印を洗ふことなども、なかなか困難なことだからね、とにかく六年間にあの男はすつかり此處をめちやくちやにしたものだ。

西川　いづれ代書人か何かに賣りつけたんでせうが、さうすると同じ腹のものがゐるわけですね。

所長　うむ、おれにもちよつとした考へがあるんだ。（低聲で西川の卓の方へ顔をさしつける）直木もぐるではないかと思ふんだ。さういふ疑ひを起させるやうなことがちよいちよいあるんだから。

西川　ええ、僕もそんなことを今考へてゐましたよ。

所長　（卓の上の書類を床の上におろし）この分は無事だな、では既うこれだけにして置かう、それから登記の方は日も暮れたし、明日に廻さうぢやないか、さう言つて申請人をかへしてしまはう、（受附口の物凄い人かげを見る）何だかけふは申請人のかげを見ることも厭た、さツきからの事をすつかり見透かされてゐるやうな氣かす

る。

西川　では歸しませう。（受附口へ行き二三人の申請人を呼ぶ）明日にしてください。何しろ大へん忙しいんで、待つてもらつても遲くなる一方だから、（時計を見る）明朝十時ごろに來てください。

申請人　（暗い聲音で）わたしどもは今日ぢゆうに金の取引きをしたいんでございます。どうか假證でもいいんですからおねがひいたします。假證さへあれば取引ができるんですけれど。

西川　假證ですか、さあ、（所長の方を向いて）どうしたものでせう。

所長　いいや、假證にしておきたまへ、そんな事情なら。

西川　では假證をあげますよ、そのかはり明朝それを持つて來てくれなければいけません。

申請人　どうかおねがひします。

西川　（卓のところにて假證をつくりながら）あの男は今月になつてから三度も來るんですよ、よほど苦しいと見えますね、いつだつてぎりぎりの日限になつてから來るんですからね。

所長　（何となき冷笑）一度抵當に入れたら大概浮べないものだよ、百姓を食ひものにする高利貸ときたらだにみたいなものだ。登記簿一杯に金を借りてしまつて氣のつくころには、もう土地は自分のものでないんだからな。からして見てゐるとえんまの帳のやうな氣がするよ。

西川　全くですね。（受附口へ行く）――（そして假證をわたす。申請人のかげ消える）

所長　だいぶおそくなつて君も疲れたらうから歸つてくれたまへ。おれも草臥れた。何だかぐつたりしてゐる。

西川　では歸らしていただきます。（卓の上を片づけながら）けふはいやな日でしたね。

所長　いやな日だとも。生涯に二度とないやうな日だ。いまになると滅入り込む一方だよ。

西川　では又た明日。

所長　疲れたらうね。

西川　（衝立のかげにて靴を穿く。妻かへつてくる）おかへりなさい、たいへん遲うございましたね。町へならこの日曜に僕出掛けることにしてゐたんですが……（すこし大聲に）奥さんがおかへりですよ。

所長　（默つてゐる）

妻　いいえね、すこし他の用事もあつたものですから。けふは大へんおそくなりましたのね。

西川　え、すこし忙しかつたものですから。ではおやすみ。

妻　晩でもお茶をのみに入らつしやいまし。

西川　ありがたう。

（妻が這入つて來たとき所長椅子にかけたままぼんやりしてゐる。ショオルを外す。珍らしいくらゐの美貌。しかし疲れておつとりとしてゐる。）

妻　ただいま。たいへんおそくなつて濟みません。たいへんなお荷物なものでございますから、もう手間が取れてしまつて漸つと片かついたのが日のくれでございましたの。それからこれをいただきました。

所長　（物憂げに風呂敷包に一瞥をくれたまま）　みんな片がついたかい。お前疲れたらう。

妻　（所長の疲つてゐる表情に氣づく）　え、もう疲れてしまつてぐたぐたなんですの、でも大へんよろこんでゐらつしやいました。よろしくつて何度も言つてゐらつしやいました。

所長　御用にたつてよかつたね。疲れたらしい目をしてゐるね、ぼんやりと眼がひらいてゐる。

妻　おひるをいただく間もなく働いてゐたんでございますもの。

所長　お前もか。

妻　あなたもおあがりにならなかつたんですか。

所長　（むしろその感情に甘えるのに叛らひながら）　けふはばかに忙しかつたものだから、つイめんだうくさくなつてね、止めておいた。

妻　（愕く）　まあ、ぢや、さつそく何か致しませう。（羽織をぬいで官舍の障子の方へ行かうとする）

所長　いやそんなに腹は減つてゐないよ、妙にほしくなかつたんだ、それよりお前の方が減つてゐるだらう。

妻　いいえ、わたしこちらへまゐるときに少しいただいてきたんですの。とにかくお召しかへをなすつたらどう。（妻、所長を凝乎と見る）どうかなさいまして？

所長　（落着いて）　からだは何んでもないんだよ、ただお前をみると何だか氣の毒な氣がした。もうちよつとお寄り。（妻そばに近づく）そんなに眼のふちがくぼんでゐるぢやないか、お前のことだからあとで疲れることも考へないで、しろねずみのやうに働いたんだね。

妻　（頬のところに手をさはつて見る）　そんな一日くらゐでやつれるものでせうか。でも眼がつかれましたわ。ぼんやりと明いたきりのやうになつてゐますの。

所長　（憐れむやうに低い聲でいふ）　重いものなんか持つたんだらう。

妻　え、女中さんが勝手にゐらしつたものだから、つい荷物をはこぶ手傳ひをしました。

所長　だから出かけに言つておいたぢやないか、なるべくからだの草臥れない仕事をするんだつてね、しかしそんな事はお前には無理だね、お前は何んでも彼でもよく働

くんだから。まあ少しおかけ。

妻　（不思議さうに）　何か變化つたことがあつたんですか。いつもすぐお退けになるとお召物をおかへになるのに、けふはお珍らしいのね。

所長　さう見えるかね、おれは今になつて考へるとお前にわざわざと上役の引越しの手傳ひなんかに行つてもらはない方がいいと考へてゐるんだ、それも一日がかりでね、それまでにしなくともいいと思ふんだが、しかし今から何を言つても仕方がないが、それにだよ、それまでにしてもこんな仕事にかぢりついてゐるのが、けふはつくづく淺猿しいと考へてゐるんだ。何もあんな人のところにお前を（妻を見詰める）やらなくともいいんだ。おれは少し臆病すぎるんだよ、そしてお前までをおれの臆病のだしにつかつてゐる。

妻　（あわてて所長の口をさへぎる）　いいえ、そりやわたしがわるかつたんです。わたしそんなつもりでなしに、唯のお親しいだけの意味におてづたひに參つたんですもの。それでいいぢやございませんか、けふは少し變つてゐらつしやる。

所長　（寂し笑ふ）　おれのやり口はいつでもへまなんだ。お前はそんな風に言ふけれど、かうしてわざわざお前がでかけるのは、何分よろしくといふふうに上役に色目をつかふと同じだからね。自分の一身の安泰を暗にたのんでゐるのと同じだからね。おれが行くのならいいけれど、お前が行くのはおれには何か氣がさす。（憂鬱に）　お前が上役のところでくるくる働いてゐるのを考へると、可哀さうになる、それだけだ、おれは妬くなんてことのないのはお前も知つてゐることだからね。

妻　（默つて泪ぐむ）　わたし何も考へなしに行つたんですもの。わたしほんとにぼんやりさんですわね。かんにんしてくださいね。きのふ出がけにちよつと考へりやよかつたんですけれど……。

所長　お前はおれのために出かけてくれたんだから、おれの方で苦情なんてないんだよ、いまになると、そんなおせつかいなんかも何んにもならなくなつたんだ、却つて惡い工合になるかも知れないんだ、何も彼も惡い方になつてゐるんだ、お前が眼のくぼむまで草臥れたことも何んにもならなくなつた、つまりおれたちは正直に暮してゐるうちにまンまと一杯くはされてしまつてゐたのだ。

妻　（所長が昂奮してゐる顏を見つめてゐたが）　なぜそんなことをお仰るんです、あなたも上役もお友達同士でございませんか、それのお手傳ひにあがつたつてそんなに氣をつかふものぢやありません。

所長　（きつぱりと）　お前はいまおれだちの上に何かが[illegible]り

かけてゐるかを知らない。ねえ、これを見てごらん、そして何も彼もむだになつたことに氣づくだらう。
（所長、妻に書類の一部を渡す。妻茫然とそれをながめる。むしろ呆氣に取られて所長の顔を見る。そして又た慌しく書類を飜へす。）
所長　おれだちは眞面目に暮して來て聽てこれだ、こんな始末だ、これでみんなだめになつた。このおれでさへ今朝まで何も知らなかつたことだ。
妻　（凝乎と立つたまゝ）けれどもわたしだちは知らないことなんですもの、ほんとにあなたが何を知つてゐらつしやるものですか。
所長　おれは全く何も知らない、知らないことだ。だがそんなことでおれは昨日までやすやすと暮して來たが、明日はそんな譯にゆかない。まるで落し穴へはまつたやうなものだ。お前のして來たことも只のおせつかいだ、こんな事件の前では何んにもならない。
妻　何んてひどい人でせう、小島さんへはまだ言はないんですか。
所長　あの男はいまごろぬくぬくと寢てゐるだらう、なんにも知らないでな、バレることなんぞ夢にも思はないだらう、わるい事をしてくれたもんだ。
妻　あなたはどうなさるつもりですか。
所長　（苦しげに）明日の朝本所へ行つてみんな話してくるつもりだ。おれ自身がしたやうな氣になつて本所の門をくぐるのが耐らなくいやだ。
妻　ほんとにね、こんな事が今日起らうなんて、まるで夢ですね。當分わたしたちはこれまでのやうに暮せませんね。
所長　だから山の中へでも轉任させてもらふつもりだ。下役のゐないところで、何も彼も自分ひとりでやれるやうな寒村がいいよ、もう昇給や榮轉なぞどうでもよい、一生涯あまり人と接近しないところがいい。もう懲り懲りだ。
妻　そしたらわたし少しくらゐお手傳ひしませう、だいぶ見てゐるうちに解つてゐるやうな氣がしますから……全く山中の寂しい登記所がよござんすね。
所長　（しみじみした調子で）白山のふもとに誰も行手のない登記所があるんだ。雪のないのは春おそくと夏くらゐださうだよ。そんなところで暢氣にくらしたいね。事件だつて大雪になれば殆ど一日ぢゆう一件もないさうだよ、おれはそんなところへ行つて樂にくらしたい、何もいらないんだ。
妻　（その氣になり）そこに轉任させていただきませうよ、そしたら最うわたしも町へなんぞ出ません、一日ぢ

ゆうその山の中で暮します。でも春になつたら暖かくなるのでせう。

所長　春はいいさうだよ、おれはそこへ行くことに定めた。だが子供は可哀いさうだな、そんなところに置くのは子供の世界をちぢめるやうなものだからな。

妻　（氣がついて考へ込む）ええ、村と言つても四五十くらゐのところでせうしね、あの子はあんな派手ずきな子ですし……。

所長　（默つてゐる。暫らくして）でも此處にゐるわけには行かない、又、他の町へゆく氣もしない……

妻　やはりそこへ行きませうよ。

所長　（靜かに）お前さへその氣になつてくれたらね。

妻　（さわやかになり）わたしなんかどうでもいいんですもの。

所長　その氣でゐてくれ。

妻　ええ。

所長　（やつと氣がぬけたやうに）これでおれはさつぱりした。行くところができたやうな氣がするよ、いままではまるで方角が立たなかつた。

妻　（優しく）あなたは人がいいのね。

所長　わるくなれはしないよ、こんな暮しをしてゐてはね、さあ、着物を着かへよう。そして明日は何も彼も決めるんだ、着物をもつて來てくれ。

（妻。官舍の方へ去らうとする、そこへ西川が玄關の呼りんをならす。）

妻　西川さんがゐらしやいました。

所長　さうか、やあ、上りたまへ、今夜は久しぶりで花でも引かうぢやないか、お前早く食事の支度をしてくれ。

西川　（茫然と所長が快活になつてゐるのに呆れる）花を引くのは久しぶりですね。

所長　今夜は負かしてやるよ。

妻　自分でお負けになるくせに、西川さん、しつかりなさいまし……。

西川　（引き込まれて）大丈夫です奧さん。

妻　（あでやかに微笑む）このなかでわたし一番强いかも知れませんわ、みんな負かしてあげますから。

所長　なあにお前なんかにしてやられるものか？

（自然にみな寂しい微笑をうかべる。）

茶の間

人物

信三　つとめ人
おつや　信三の妻
母親　おつやの母
荻島　つとめ人

情景

茶の間。長火鉢の上に電燈が下つてゐる。鐵瓶の湯氣が上つてゐるが既う宵の程が過ぎてゐるやうな物靜かさである。子供のおもちやが次の間へ通ふ暖簾の裾に散らかつてゐる。上手に斜めに北國の町家らしいしとみ戸が下りてゐて、橋のない溝の上に春さむい雪がゆつたりと降つてゐる。まだ肉體的にも若いおつやが長火鉢の前に坐つてゐる。左手に階段がある。

おつや　（縫物の針を運ばせながら低いこゑで暖簾の垂れてゐる方へ向いて言ふ）熱はまだあるやうですか。夕方には七度八分くらゐに下つてゐたんですけれど……

母　（姿は見えない）ないやうだね。それによく睡てゐるやうだよ、そこからも鼾が聞えはしないかね、ほら、ね、鼻も先刻の吸入が利いたのか本統にこころもちよささうにすうすう通るやうになつたやうだ。吸入つてよく利くものらしいね。

おつや　（耳を澄ます。そして微かな愛情めいた微笑みを漏らす）ええ、吸入をかけてようございましたね、でも、あんなにいやがるものだから、つい可哀さうな氣がしましてね。こんなに利くんだつたら少しくらゐむづかつたつて明日の朝もかけてやりませう。

母　（しみじみと）それがいいね。わたしたちの子供時分はこんな吸入なんてものはなかつたものだよ、いま時の子供は何と言つてもいろいろな立派なお醫者さまの機械が揃つてゐるから仕合せなわけだね。そのかはりむかしと違つてだんだん子供のからだが弱くなつたやうな氣がするね。お向ひだつておとなりのお子さんだつてみんな病弱しいんだから……

おつや　（縫ひかがりを齒で切りながら）けれども家の子はまだ達者な方ですよ。この間も病院で三人のお子さんを連れてみんな交る交るの病室に臥てゐる方がゐましてね。廊下でよく行き會ふもんですからつい挨拶をするやうになりましたが、その時もわたしのそばへ入らしつて、まあ、このお子さんは一體どこがおわるいんですかと、

呆れたやうな顔貌でお仰るんですもの、全くうちの子のやうないい顔いろをしてゐる子供なんか、滅多に病院にはゐはしませんからね。

母　（話に身を入れ少し起き直つたやうな聲音で）　そしてお前どう言つたの。

おつや　（何となくうれしさうに）　わたし何んだかきまりがわるいやうな氣がしましてね、すこし風邪をひいたものでございますから大ごとになつては取り返しがつかないと思つて、まあ言つて見れば病氣の先廻りをして診せにまゐつたんでございますと言つたら、その奥さんが心から感心したやうな調子で、ええ、その方がいいんですよ、少しくらゐの風邪でも打つちやつとくよりか、輕い間になほして置くんですね、あとあとが清々しますから。わたしのやうに三人とも入院してゐた日には、まるで子供の看護に生れたやうなものですよ、と、ほんとにお氣の毒でした。ずゐぶん窶れてゐらしつたやうですよ。

母　お可哀さうにね、しかしそれも矢張り何か業のやうなものだね。そんなに三人の子供がみんな病院に入つてゐるなんて、よくよくの不仕合せな方だね。（年寄りらしく）　そんな人はやはり前生がよくないんだよ。

おつや　（すこし笑つて）　そんな前生なんてものはあるもんですか。

母　誰にだつてあるものだよ、お前なんか前生は善光寺さまの牛だつて言ふんだもの。うそならお臀の左に繩ずれのあざがあるのを見てごらん。わたしも始めはうそだと思つてゐたらちやんとあるんだもの。

おつや　（思ひあてて不愉快な顔をする）　いやなことを言ふお母さんね。もうそんなことはこれから言はないでちやうだい。

母　……

おつや　（間を置いて）　水枕はもういいでせうか。

母　さうだね。（間を置いて）　だいぢよぶ。もうよほど下つてゐるやうだよ。つめたくなつてゐるから。

おつや　さうですか。いいあんばいね。この樣子だと明日は藥をのませなくともいいかも知れませんね。

母　（睡さうに何か返辭をする）

おつや　（縫ひものをつづける。縫ひものをしてゐる襟足をすぼめる。寒い凍て冴え返る音がする）

母　（睡さうな聲で）　誰か來たやうぢやないか。

おつや　（耳を立てたが）　水甕のお餅の水を先刻かへておいたものですから、多分あれが凍るんでせう。それに今晩はよほど應へますね。人通りもあまりなくなつたやうですよ。

母　春さきになつてからきふに寒くなることか、あるもの

さ、大かんよりか寒いことがね。

おつや　（表に氣を配る。凍る音ばかりでないやうな氣がして表へ眼をやる）……

母　信三はおそいね。

おつや　ええ、それでも四五日中にはひまになるらしいんです。（しばらくして）　お母さん、誰か入らしつたやうですよ。

母　（ゐねむりらしく返辭がない）

おつや　誰方か知ら。（中腰になる。そして耳を立てたが何となく顏色をかたくする）

客　（低いこゑで遠慮深げにいふ）　ごめんなさい。

おつや　はい、唯いま、…（これも低いこゑで何故かひつそりと立ち上る。あたりが餘り靜かだからしぜんさうなる）　どなたでございますか。（おづおづと土間から中格子を引きながらいふ）　中山はこちらでございますが。

客　僕です。荻島ですがおそくにあがつてすみません。もうおやすみになつてゐたんぢやありませんか。それならまた參つてもいいんです。近くまで來たものですから、ついお寄りしたくなつてあがつたんです。

おつや　（しばらくその聲音に居竦められて佇る。そして暖簾の方を眺める。母のいびきが聞える。おつや、何か考へあてゝきつぱりした表情になる。先刻からと違つたやうに活々する）　まあ、こんなにおさむいのに、よく入らしつてくださいましたのね。（しとみ戸をひらく。そとにゆつたりした雪が暗に射したあかりに浮いて見える）　どうぞおあがりください。こんなにおさむいのにまあ。

客　（自然に低い聲になる）　みなさんおやすみですか。

おつや　（客の怕れた聲に惹き入られる）　いましがたまでお母さんが起きてゐたんですけれど、もう睡入り込んだらしいんでございます。

客　お子さんは？——

おつや　もう寢みましたの。

客　ぢあ、あの、なんですか、おつやさん一人きりなんですか。

おつや　ええ。でも、……（暖簾の方を見る）　ひよつとしたら母は目をさましたかも知れません。そんなこと、どうでもいいんですけれど。（長火鉢の火を搔き立てる。「こんな夜はなかなか應へますね。」と客が言つて手を翳す。そしてあたりを親しさうに見廻す）

客　この茶の間は全く久しぶりですね。しかし爐はもうつぶしてしまつたんですね。

おつや　ええ。子供が落ちたりなんかするとわるいと言つて、疊をしいてしまひましたの。ほんとはあつた方がいいんですけれど。

客　子供は達者ですか。
おつや（客に馴れ懐しさうにする）　ええ、まあ達者の方です。
客　けふ野村さんのところへ行つておつやさんがよくあそこへ遊びに行くことをきいたんです。おさらひによくゆくさうですね。
おつや（ややてれて）　ええ、おけいこの道なものですから、ついおうかがひしてゐますの。
客　野村さんで此間も女の人で僕のことをよく知つてゐるのが、一度ぜひお逢ひしたいつて傳言されてゐたんですが、僕はおつやさんだとは思はなかつたんです。野村さんは初めおつやさんだといふことをハッキリ言つてくれないで、なんでも僕が野村さんに行つたらあそこのうちでは、すぐおつやさんに電話をかけて呼びよせると言つてゐたんですが、こちらでそんな古い知り合ひもなし……若しかと思つて見たものの、やはり氣がつかなかつたんです。（客、露骨に）おつやさんは野村さんに若し僕がたづねて來たら、ぜひ一度來るやうに頼んだのですか。
おつや（赧らんだがきつぱりと）　ええ、そんなふうに言つたかも知れません。（微笑つて）でもお電話は野村さんが自分で考へ出してかけやうとしていらつしつたのでせう。しかしよく入らつしつてくださいましたのね。

客　僕も一度お逢ひしたいと思つてゐたんだけれど、逢つても仕方のないやうな氣がしてね。何から言つていいか分らないやうな氣もちでね。
おつや（茶を入れながら俯向きがちになり）　ええ、そりやさうですけれど……こちらへ入らつしつたことは大ぶさきから知つてゐたんですし、それにあの綾子さんに此間途中でおあひしたときに、あの方がお宅へおうかがひしたつてさう言つてゐらつしやいましたの。だから綾さんさへおうかがひしてゐるなら、わたしだつておたづねしたつてかまはないと考へてゐたんですけれど、つい、ぐづぐづしてゐましたの。でも綾さんもずゐぶんかはりましたね。むかしのやうなお嬢さんめいたところがすつかりなくなりましたのね。
客　（なかしさうに思ひ出して）　この間突然に訪ねて來ましてね。ちよつと喫驚りしたんです。でも、すぐ顔をみるなり綾さんだと思ひましたよ。かはつてゐても何處かにかはらないところがありますからね。ところがあのひとときたら最う世帶の話しばかりし出してね。何んでも滿洲の方の旦那さんからの毎月の仕送りを少しづつ貯めて、着物や帶を買つた話ばかりだつたが、それを妙に僕にほめてもらひたいやうな風でしたよ。あんな大家のお嬢さまも世帶じみてくるとみんなあんなになるのかと思

つた。それに最う一つをかしいのは、歸りぎはに風呂敷包みの中から、何を取り出すのかと思つたら鷄の皮づつみを出して、これはまことに失禮なものですけれどと言つて、おみやげの代りに置いて行きましたよ。僕は鷄の肉が非常にさもしいもののやうに思つてね。

おつや　まあ、そんな人になつてしまつたのか知ら。けれどもまだ美しいぢやありませんか。

客　ええ、まだ子供のときの顔かたちが、そつくり殘つてゐますね。鼻つきなんぞまるでむかしのとほりですね。しかし妙に窶れてさむさうだ。——縫物をしてゐたらどう、僕にはかまはないで……。

おつや　（一方に縫物を片づける）もうしなくてもいゝんですの。でも野村さんにおたのみしておいて、ようございましたわ。でなきやお會ひできなかつたかも知れないんですもの。いつか夏のころお宅の前を通つたことがございましたけれど、お寄りしにくくつて素通りしたんですが、……いいお住居ですのね。

客　見晴は高台だからいいんですけれど、冬はさむくていけないんです。（何となくおつやの顔から眼を離す。——そしてふと勝手への開き戸を見つめる）まだ、あのままですね。いま見てもなかなかよくかいてあるな。これはお世辭ぢやないんです。

おつや　（同じく開き戸に芝居繪の似顔をかいた交ぜ張りを見る）張り代へやうといつも思つてゐながら、まだ、あれきりになつてゐますの。あんな繪を毎日毎日うつしてゐたころがほんとに暢氣でしたわね。それでもあのころは繪の具なんぞつかつて一生懸命でしたのよ。さう言へばあれを張つてゐたころは師走のころでしたのね。やはり霰か何かが裏戸を叩いてゐてびつくりしたわね。それに妙なことにはいつでもお目にかかるときが冬が多うございますね。今夜もふつてゐるし、全くふしぎなやうですね。

客　（思ひ出して）たしか十二月の十八日でした。お觀音さまの日のやうだ、晩に山の上のお寺へ行つたら提灯に雪が吹きつけてゐましたね。あのときの御詠歌はいつでも耳についてゐるやうでよく思ひ出しますよ。

おつや　（一時に考へあてたやうに）歸りましてからわたしずゐぶんお母さんから叱られたことを覺えてゐますの。あのころはひどい嘘をこしらへて出歩いたものですから……しかし、あのころはようございましたのね。何んでもしたいことが工合よくできたんですもの。お母さんひとりさへ丸めてしまへばよかつたんですからね。

客　（皮肉に笑つて）いまぢやそれができないと言ふんですか。

おつや　（しやんとして）　ええ、それもさうですけれど、そんならそなんぞつくこともございませんし、したくもございませんわ。

客　（さびしく平凡に）　まだこちらへつとめてゐたころですから、もう十年くらゐになりますね。

おつや　（考へて）　ええ、大きい方が、七つになりますからね。早いものでございますのね。

客　男だつたかしら。

おつや　ええ男の子ですの。（暖簾の方で子供のむづかる聲がする。おつや、それを聞きすまして起たなくともいいかどうか考へる。間もなく歇む）昨日からすこし風邪氣味で熱があるものですから……。もう下りましたけれど。

客　それやよくないですね。おだいじになさい。

おつや　たいしたことはないんです。お宅でも皆さまお達者ですか。

客　（眩しげに）　みんな達者です。

（話やうやく絶えがちになる。二人とも話題に縋らうとして焦つてゐるが見つからないでじれじれした氣味になる。客は煙草ばかりふかしてゐる。おつや、しきりに話題を求めてゐるため顏いろ硬くなる。）

おつや　わたしほんとにおあひしたので何だかぽかんとしてゐるくらゐなんです。おあひしない前は、やたらにどうしたらお目にかゝれるかと、そればかり氣に病んでゐたんですけれど。

客　（ぼんやりと）　僕も一度くらゐ會つたらと思つてゐたんですが、會つてみると何も話すことがなささうですね。あんまりつまみどころがないやうな氣がしましてね。

おつや　（同感する）　ずゐぶん貯めておいたお話があつたんですけれど。それにあなたもすつかり變りましたのね。もとはこんなに凝乎としてゐらつしやらなかつたんですもの。

客　（おつやの眼を見入つたが物憂くその眼の鋭どさを失ふ）さう云へばこんなに落着いてゐたことなんてなかつたやうね。ここの家でおつやさんを追ひ廻したことがあつた。

おつや　（思ひ出して微笑ふ。しかしおあいそのやうに表べばかりの笑ひ）そしてお母さんによく見つけられましたのね。するとあなたは何時でもまるで走るやうにしてお歸りになつたのね。あとをも見ずにね。

客　（苦笑ひする）あのころはおつやさんだつて最つと活潑で、そんなにちやんと坐つてなんかゐなかつた。よくお母さんの背後では舌を出したりしたいたづら者だつたんだが。

おつや　（むしろ極りわるく）このごろになつて考へる

と、ひやひやするやうなことがありますの。だからお母さんが古いことを言ふと、わたし默つてしまひますのよ。なんだか餘處事のやうな氣がしてならないんですもの。

客　子供のときの話はときとすると非常に不愉快になることがあるね。が、どうかするとまた興味深いこともあるんだが……。

（二人また默つてゐる。客、ややしばらくして立ちかける。おつや、むしろ何氣なく客の立ちかけたのを眺め、べつに止めやうとはしない。）

客　だいぶ晩いやうですから、――お母さんによろしく言つておいてください。

おつや　いろいろまだ話があつたんですけれど、何日、お發ちになりますの。

客　日は決つてないんだが、四五日中なんです。また暫らく會へませんがお達者で、（客、あいそ笑ひをする）それから子供さんをお大切にね。

おつや　（土間へ一緒に下りかけ、中格子戸からしとみ戸の暗い方へ行きかけ）これで又た十年くらゐは年始狀もくださいませんね。いつものやうにね。（やや皮肉なれど情のある聲）

客　その方がさつぱりしていいぢやありませんか。もうしんるゐ交際のやうなものだから。

おつや　しんるゐ交際ですて、――

客　まあ、そんなものです。

（しとみ戸に客が手をかけやうとすると、おつや、しとみ戸の上から押して見て默つて笑ふ。客、それを知らずにしとみ戸を開けやうとする。）

客　開かないやうだな。どうしたのか、ちよつと開けてください。

おつや　（振り顧る客を見て笑ふ）開けてごらんなさい。

客　（氣がついておつやの顏を見る。或る表情を感じる。しかしまるで巫山戯られたときのやうな感じ）だつて開かないぢやないですか、さう言はないで開けてください。れいの茶目が出たのね。やつと、いまごろにね。

おつや　（手を退ける）ぢあ、開けておあげしますわ。（戸が開く、白々と寸餘の雪が溝をひとすぢ黑くした外に續いてゐる）

客　どうもありがたう。や、雪がだいぶつもつてゐる。

おつや　（もはや平常のやうになり表へ出て）いまごろの雪だから、すぐ消えますわ。

客　ぢや、　よなら。（帽子を脫り早足になり行く）

おつや　さよなら。

（暫らく客を見送る。間もなく家の中に入り火鉢のわきに坐り、手を火に翳しながら一ところを見入りな

がら茫然としてゐる。むしろ名狀しがたい放心的な物侘びた姿。しかし刻々に何かを考へ當てるため鋭どい姿になる。間もなく縫ひものを始める。やや暫らくして母親の聲がする。）

母（睡いこゑで）つい、うとうととしてゐたが、誰か來てゐたやうぢやないか。それとも夢を見たのか知ら。信三はまだかへらない？――

おつや（齒ぎれよく）誰も來はしないんですの。

母（べつに疑はずに）さうかい、ぢあ、わたし一と足さきに二階でねますよ、信三は最うかへる時分だし……

おつや（立ちかけて二階へ行きながら）どうぞ、――ぢあ、お床があつたまつてゐるかどうか見て來ませう、先刻、行火に火を入れて置いたんですけれど。

母　大丈夫溫かくなつてゐるでせう。（母親出て來る。長火鉢のところで老人らしく淋しげに煙草を吸ふ。あくびを一つする）

おつや（二階から下りて來て）いゝ工合にほかほかしてゐますよ。みかんをいつものやうに枕もとに置いておきました。こんどのは甘いんですよ。

母　ありがたう。夜中に目がさめると何も考へることがないもんだから、妙に口淋しい癖がついてしまつてね、年とると矢張り口ぎたなくなる一方だよ、ほんとに氣をつけてくれてありがたう。子供の時分はそんな子ぢやなかつたんだけれど。

おつや　亭主をもつてから違ふとおつしやるの。いやなお母さん。

母（しみじみと胸にあるやうに）すぐお前はさう言ふけれど、そりやお前の變り方つてものは大へんなものだよ、しかしどこか他人行儀めいたところが出てくるのだけはいやだけれど……しかしよく氣をつけてくれるから感心だよ。

おつや（微笑ひながら併しきつかりと、またいくらか優しく命令的に）おやすみなさい。

母（ほくほくと）ねますとも、――お前も床に這入るといゝ。（階段を上る）信三には何か溫かいものを拵へておやり。

おつや　ええ、――でも外で何か食べてかへるでせうから。

（子供泣く、おつや暖簾のうちに入り、添へ乳をしてゐるらしく低い子守うたをうたふ。美しい聲。「ねんねお山のねむのはな、ねむのはな咲きゃねんね山、ねんねお山の……」しづかにまたうたをつゞける）――（信三歸る。外套の雪を拂ひながら茶の間の上り口に置く。そして茶の間をひと眺めして、暖簾の内を見る。）

おつや　おかへりなさいまし。そとは寒かつたでせう。

信三　このごろの雪はあつたかいよ。それに急いで步くものだから、――（靴を脫ぐ）
おつや　（暖簾の內から）ごはんはおあがりになつたんですか。
信三　あ、濟んだ、お母さんは？――
おつや　いまし方まで起きてゐらしつたんだけれど……
信三　さう、誰も來なかつたかい。（信三、煙草に火を點ける）
おつや　（やゝ間を置いて）珍しいお客さまがありました。
信三　（長火鉢の吸殼をのぞき込みながら）吸口をつけないでバットを吸ふお客さまだね、へえ、誰か知ら、はいからな男らしいな。
おつや　荻島さんですよ。
信三　荻島――聞いたことがあるやうだが、さう、さう、荻島庄平のことかい。
おつや　ええ。
信三　あの男が晩に來るなんて、――（信三やゝ不愉快げな聲になる）お母さんが此間會つたとか言つたが、僕も一度くらゐ會つておけばよかつた。何しろ名前ばかりで一度もお目にかかつたことがないのだからな。それにお前の好きなひとだと言ふんだから。
おつや　（默つてゐる）
信三　まだ、こちらにゐるやうに言つてゐたかね。
おつや　二三日中にお發ちになるやうに言つてゐらつしやいました。
信三　おいとま乞ひかね。
おつや　そんなおつもりだつたのも知れません。
信三　お母さんは起きてゐたのかい。
おつや　いゝえ。
信三　おやすみになつてから？――
おつや　ええ。（暖簾の內から胸を搔き合せながら出てくる）でも、わたし默つてゐましたの。
信三　なぜ、
おつや　べつに深い意味はなかつたんですけれど……お茶をいれませうか。
信三　（不愉快をまぎらせながら）いらない。しかし何だつて荻島はいまどきになつて遣つて來たんだらう。
おつや　（平氣で）しばらく會はないつて言ふんで入らして下すつたのよ、べつに何も他に意味もない……
信三　（剌立つて）意味もない……
おつや　でも十二三年も入らつしやらなかつたんですもの、もともと、荻島さんとは親類同樣なんですし……これまでもこちらへ入らつしたことはあつたんでせうけれ

ど、あなたに遠慮して入らつしやらなかつたんでせう。
信三　さうか。べつに遠慮なんかしなくともいゝんだがね。とにかく僕は、ばかに睡いんだ。
おつや　床はあつたまつてゐますから、おやすみなさい。
信三　（立上りながら上着を脱ぐ）　古い男なんかが訪ねて來ても、大がいの場合は默つてゐる方がいいよ、正直もいゝ加減な年にはそんなに必要でないから。
おつや　（胴衣を手に取り默つてゐる）……。
信三　へいぜいから見ると少し元氣らしいね、荻島が來たせゐかな。
おつや　（やつと微笑ひながら）　さうかも知れません。
信三　（少し覗き込むやうにして笑ふ）　お前にもまだそんなしをらしい氣があるなんて、ちよつと可愛らしい氣がするよ。
おつや　さうでせうか。
信三　さうとも、咎めるよりもしをらしさが先きに立つよ。
おつや　（考へ込む）　さうね、わたし自身でもそんな氣がしますわ。それはさうと何か召しあがりませんか、何か溫かいものでも？——
信三　（先刻とは別な調子で）　何か食べるかな。（打解けて）まだ實は飯前なんだよ。
おつや　びつくりして）　まあ、さうならさうと早くお仰れば いいのに。なにかこさへませう。
信三　腹の足しになれば何んだつていいんだよ。
おつや　（いそいそと襷がけになり勝手へ行きながら振りかへり思ひなほして）うんと御馳走してあげますよ、通りまで行つて來ますから……
信三　傘なしぢや寒いよ、だいぶ雪がつもつたから。
おつや　（袖を胸に搔き合せ）　大丈夫ですわ。すこしくらゐの雪は？——（しとみの外へ出て）まあ、たいへんな雪よ、足駄が沈むくらゐなんですもの。いつの間にこんなに降つたのか知ら？——
信三　（長火鉢にもたれ何か考へ込みながら侘びしげに言ふ）もう、そんなにつもつたかな。
おつや　（やや遠いこゑで）　すぐに來ますから。
（信三、長火鉢にかがんでゐる。何の音もない、——物憂いけはひで時計が十一時を打つ。信三、思ひ出したやうに時計のねぢをかけ氣がついて暖簾の内をのぞき込んで止める）——（しばらくしておつやが歸つて來たらしく雪を拂ふけはひがする。しとみ戸が開く。）
おつや　（寒さうに袖を合せ）　大へんな雪ですよ。どうして今じぶんこんなに降るのか知ら？　道路は歩けないくらゐなんですもの。
信三　さくらの咲く時分にもよく降ることがあるよ、こと

に去年はつぐみの巣がだいぶ高いところにあつたつて山のものが言つてゐたから、まだ今年はこれくらゐでは濟むまいよ。

おつや　（皮包の草餅を出す……）　ぢあ、つぐみの巣が木の下の方にあつたら、その年はふらないんですか。

信三　山のものはみんなさう言つてゐる。小鳥なんてやつは悧巧だからな。雪のよけいに降る年は高いところに巣がまへするなんて、よく考へたものさ。

おつや　（感心して）　さうね。悧巧なんですね。――おひとつ、いかが。

信三　（つまんで頰張る）　だが、また皮包みを押入れへ投り込んで、あとでお母さんに見つけられるとこまるよ。いつだつたかも叱られたぢやないか。

おつや　（微笑ひ出して）　まだ一しよになりたてでございましたね。でも、あんときはお母さんに隱しておいたから、わるかつたんですよ。朝にでも氣をつけておけば皮包を見つけられはしなかつたんですけれど……。

信三　（低いこゑで）　でもお母さんもこのごろはよくなつたやうだね。以前のやうにやきもちを燒かなくなつたからね。

おつや　（思ひめぐらす）　ええ、さうよ、ほんとによくなつたのね。けれどもあの時分はおもしろかつたやうな氣がしますわ。張り合ひがあるやうで今よりかいいやうな氣がするわ。

信三　ぢあ、いまはおもしろくないといふのかい。（微笑ふ）

おつや　（さびしく笑ひ）　おもしろくもをかしくもないのね。なんだかあんまり靜かすぎるやうです。

信三　（平靜な戲談らしく）　お前もさう思ふのかい。ぢあ、せつかく荻島君にでも來てもらつた方が元氣になつていいぢあないか。

おつや　（頭をふつて見せる）　それも最う駄目。

信三　（顏を覗き込んで。惡氣なしに）　なぜ？――

おつや　（事もないやうすで加之懷しげに）　何んとも思はないんですもの。あの方がおかへりになつてしまつて、あなたとかうしてお話してゐると、何んにも入らつしやらなかつた前のやうな氣がするんですもの。ほんたうよ。これだけはふしぎなやうね。

信三　（さういふこともあるかと感じ入り）　さうかな。そんな氣になつてゆくものかな。

おつや　（しばらく考へ込んでゐる。ややあつて）　男のひともやはりさうなんでせうねきつと。それともちがつてゐますか知ら？

信三　（苦笑ひしながらすぐにまじめになる）　そんな簡單

なわけにはゆかないよ。しかし結局はさうもなるがね。（考へ直して）やはりさうなるかな。しかしどこか女とちがつてゐるところがあるよ。說明しにくいところがあるがね。

おつや　（ふと何かを考へ出し別にかうでいせずに）　このごろおあひになりまして？——

信三　（にがひ顏をする）　しばらくあはないよ。そんなひまなんて今のところないからな。あはないことはお前もよく知つてゐるぢやないか。べつにあひたくもないんだよ。

おつや　（きふに美しい眼をする）　わたしその方と一ぺんあひたいと思つてゐるの。どんなひとですかしら。

信三　つまらないしやうばい人だよ。あはない方がいいのさ。

おつや　（あつさりと無垢に）　さうでせうか。

信三　さうさ。おれはちやんと此處のうちにゐるんだからね。ね、おい。ふさいでゐるわけぢやないね。

おつや　（まじめな顏つきではつきりと）　いいえ、そんなこと氣になんかかけてゐないのよ。ただふいに思ひ出したからおたづねしたの。

信三　（安心して）　さうかい。それならそれでいいが……。

（ふたりとも默つて坐つてゐる。表に雪を拂ふ音がはたはたとする。ふたり目を表にそそぐ。）

おつや　出前持がきたやうね。

信三　ちよつと出ておやり。雪でたいへんだらうから。溝に橋板がとれてゐたから氣をつけないと危ないぜ。

おつや　ええ、氣をつけてやるわ。

（おつや、しとみ戸をあけに出る。信三、たばこをふかし長火鉢にもたれ表を見てゐる。）

おつや　（やや遠いびつくりしたやうな聲音で。——）　あぶないわ。どうしたの、臺のものを下におきなさいよ。まあ、あんたみたいな子供にそんな重いものを持つて出させるなんてね、……すこし考へなしの御主人ね。

出前持ち　（かじかんだこゑで）　なにかまはないんです。これくらゐの雪なんか……。

おつや　ぢや、わたしそれを持つてあげるわ。指さきが凍ぢかんでゐるぢやないかね。

出前持ち　なに、かまはないんです。なれてゐますから。

おつや　明日の朝取りにきてくださいな。今晩はもうおそいから。

出前持ち　さよなら。

（信三、表の聲に氣を取られてゐる。しとみの開いたところから雪が吹き込んでくる。……信三、もの侘びしげにあくびを一つする。）

おつや　（出前の箱をさげながら）　まだ十二三の子供なんですよ。可哀さうに。
信三　さうかい。しかし仕方がないよ。いちいちそんなものを哀れんでゐては、こちらで可哀さうな氣もちの種切れになるわけだから――。
おつや　（皿、小鉢をならべ勝手から酒徳利を持つて來て燗をする）わたしけふ荻島さんとお話をしてゐて、あの方もお話がなくなつてゐらつしやるのを見てゐたら、なんだか氣の毒な氣がしましたの。
信三　（こともなく）　それで二人で默つてゐたのかい。
おつや　ええ、對ひ合つてぼんやりしてゐましたの。でも、なにもお話することがないんですもの。
信三　その默つてゐる間がいいんだよ。言はばその間に兩方で考へてゐるものがおやすくないのさ。
おつや　なんだか息づまりさうな氣がしてくるんですもの。わたし、ほんたうは早くおかへりになつてくだされぱいいと考へたくらゐですわ。ちよつとしたやけな氣になつてしまひましてね。
信三　（鋭い或る思はくに衝き當つて）　お前の考へてゐることは矢張り荻島をきらひでない證據だよ。お前は素氣ないやうに見えてそれで左うでないんだからな。
おつや　（銚子の酒をつぐ。信三、それを飲む）　さうですかしらわたし、あの方と七八つくらゐの時分からのおともだちですからね。
信三　（何か考へ）　そんな友だちといふものは、ばあさんになつても、よく思ひ出すことがあるものださうだよ。――荻島の手紙はまだお前持つてゐた筈だね。あれをちよつと見せないか。
おつや　（平氣で好意を交ぜ）　ええ、お見せしてもようございます。けれども、既ういぢめるのはよして頂だい。
信三　（盃をあけ）　わかつた。いぢめはしない。
おつや　とにかく寢みませうか。（美しい目をする）
信三　（立上りながら天井を見て）　明り取りがまだ開いてゐるぢやないか。道理でひやひやすると思つた。（土間へ下りて綱を引く）雪の重みがのしかかつてゐるね。閉まらない。
おつや　（天井を見る。蒼白い雪あかりが顔へ落ちる）　ぐつと引いてごらんなさいましな。
信三　（ちからを込め）　これでいいかい。（明り取りの戸、閉づ。同時に雪のかたまりが土間へ落ちる）そとが明るいが月夜だね。
おつや　え、さうかも知れません。
（おつや。皿や小鉢のあと始末をする。消炭の壺に炭火を消す。信三、厠へ立つて行く。）

信三　だいぶ寒いな、寢ることにするかな……。

おつや　お床がすつかりあつたまつてゐるでせうよ。そつとしてゐてください。いまよく寢てゐるんですから。目をさますとこまりますから。

信三（暖簾の内へ這入り）よく寢込んでゐるね。（間—）熱もなささうだ。電燈は點けないのか。

おつや（覗き込んで）だいぢやうぶ目をさまさないでせうから、つけて下さいな。

（電燈點く。暖簾の片しぼりにされたところから、炬燵の艶めいたふとんが見える。子供の寢床及びたんすのわきに人形などがある。）

信三　やはり女の子といふものはどこか寢てゐても可哀いいものだね。兄キの方はおとなみたいな顔をしてゐる………

おつや（鏡臺のそばで髮に手をやり夜更の鏡の底をのぞき込む）ええ、あの子は血色がいいし兄よりも器量がようございますからね。——おねまきはあつためてあるんです……（顔料の瓶から二三滴掌に垂らし顔にさつとさすり）いますぐ參りますわ。（しばらくそのまゝに音もない。おつやの二の腕するどく夜更けの鏡の前でうごいてゐる。）

—— 幕 ——

父母所生（一幕）

人物

父　健康なる老人（五十九歳）
母　ひ弱い美しさをもつてゐる女。もと小間使（四十二歳）
行種　先妻の長男。官吏（三十六歳）
さと　その妻（三十四歳）
しげ子　行種の長女。母親に似てゐる（十四歳）
正　小間使はるの子。よそへ遣つてある（十二歳）
女中
おいや
植木や
その他の人物。

時
明治三十五年ごろ。

處
田舍、古い城下町。

第一景

情景

八疊の間。廻り緣。冬がまへの木二三本。厠の半景。――庭をへだてて茶室。正面凡て果樹園めいた廣い庭、杏、すもの花が咲いてゐる。名づけがたい囀りが花間にある、靜かな午後過ぎ。

八疊の間に荷づくりの品物が重ねられ、取亂されてゐる。鞄、行李など、――おいやそれらを搬んでゆくごとに部屋の中さびしくなる。……むしろ老人らしい靜かさの中、もの憂い足もとが見られるだけ。

父　（痩身。たけが高い）へいぜいから心がけをして居ればいいのに、いまになつては何も彼もおそいぢやないか、とにかく掛ものは持つてゆくがよい。あれはかねになるから。

母　（どこか陰氣なところがある）でもわたしが持つてゐてもわかりはしないんでございますから置いてまゐります。

父　おまへのやうに瀬戸ものばかりでは何の足しにもならないぢやないか。それよりか敷ものも持つて行くといい、おいやに包ませて置いたから、――わしにはいま何もい

らないからね。
母　（沈んだこゑで）　ありがたうございます。しかし行種さんが入らしつたあとでわたしが何も彼もさらへて行つたやうに思はれるのがいやでございますから、もう澤山でございます。それにお茶棚の上の時計だけあれば何をいただいたよりか嬉しうございます。
父　（振りかへり見て）　お前は妙にあの時計が好きだね。時計と一しよにあの茶棚も持つて行つたらどうだ。わしのおやぢの時分からあるんだ。それにおまへはたんねんに艶ぶきんをあてたものだから、あんなにこつくりしたいいつやをしてゐる。（妻の返辭をまたずに次の間へ聲をかける）ぢいや、ちよつと來てくれ。
母　わたしあれだけはいただきません。あれはおさとさんがちやんと此間ゐらしつたときに手でなでてまでゐらしつたんですから、あれだけはそのままにして置いてくださいまし。
父　（いたはるやうに）　わしにまかしてお置き。わしはおまへに何もあげるものはないのだ。永い間わしのめんだうを見てもらつたおまへに家一つさへ用意ができてなんだ。わしはそれをしよつちう考へてゐたがけふになつてみるとおまへに氣の毒でならん。わしにまかして置いてくれ。わしのあげるものは默つて持つて行つてくれ。

母　（なみだぐんで――）　でも、あとで世間の聞えもございますから。
父　（愛情のため昂奮）　世間なぞどうでもいい。わしの言ふなりにしてゐて呉れ。それでいいぢやないか。
母　はい。
（ぢいや入り來る。）
ぢいや　まだ何か外にすることがございますか。もう車は一臺だけは門の前へ出して置きました。
父　この茶棚を一つくるんでほしいのだが、繩きずのつかないやうに荷づくりをしてくれ。
ぢいや　はい。なるほどこれは奥さまが毎朝おみがきになつたものでございますのに、どうして荷づくりなさらないかと先刻からおたづねしようと思つてゐたのでございます。
父　一人で持てるかね。
ぢいや　なかなか重うございます。
母　わたしお手づたひしませうか。
父　だいぢよぶだよ。これくらゐのものは？
ぢいや　（かつぎながら）　わたしがいつも時計をみにまゐるたびに、奥さまはこの中からおやつをくだすつたものですよ。當分おやつも頂戴できませんかな。
母　（さびしく微笑ひ）　つぎの方がくださいますわ。ぢい

やさん。
ぢいや　（次の間で）　どうだか分りますものかね。
　（父這入つてくる。）
父　（あたりを見廻して）　これですつかり片づいたやうだね。一籠だけ出てしまつたやうだから、こんどのでもうお終ひだね。ほしいものがあつたら遠慮なくさう言つてくれ。
母　わたしもういただきすぎるほどいただいたんですもの。何もあとにございません。あとでおさとさんが酷い女だとお思ひにならないかと、それがなんだか心配なんでございます。
父　そんなことは言はせはしない。みんなわしがこさへた品ものばかりだからね。全く行種がこちらへ引上げて來ようなんて、まるで夢にも考へなかつたことだからね。おまへにすまないけれど……。
母　（はつきりと）　いいえ、わたしいつかこんな事になるだらうと、ときどきひとりで考へてゐましたから、こんどは大してびつくりしませんでしたの。ただ、旦那さまがきつとご不自由あそばさないかとそればかり氣になつてゐました。でもこれまであんまり樂をしてゐたものですから、ばつがあたつたのかも知れません。
父　（妻の微笑を見詰め）　わしも左ういへばやはりこんな風になることを時々考へてゐないではなかつた。しかしそれを口にするのがいやでね。わしも行種が來てしまつたら、茶室に炬燵でもしてこもつてゐるよ。老人らしくね。いままではまだ元氣はあつたが二三日くひものもうまくない……。
母　（身に沁みて聞く）　けふなんぞ何となく弱つてゐらつしやるのね。どうかもつと元氣になつてくださいな。おさとさんもお見えになることだし……これまでよりか賑やかになるんでございますから。
父　おさとに初めてつきあひするんだし、根が他人だからね。わしはやはり一人で室にこもつてゐる方がいいね。わしはまる二十年といふものお前とふたりきりでじみに暮してきたんだから、もう賑やかなことはいやだ。
母　（庭の方をちらりと見て）　二十年になりましたのね。接木の杏がまああんなになつてゐるんですもの。まるでお祭の造り花みたいに咲きそろひましたのね。ことしは澤山に實りませう。
父　（同じく庭を見る。杏の花が西日を浴びて燃えてゐる）　ことしは寒肥えが利いたと見えて、花びらの厚いこと、まるで八重のやうだ。おまへのところへもわしはこつそりと持つて行つてあげるよ、ぶだうもだいぶ水を吸ひ出して花がたくさんついたやうだから、それも待つて行く

よ。

母 ……(默つてゐる)

父 (覗き込んで……) 人になんぞわかりはしないよ。こつそりと行くぶんにはね。

母 (うつ向いたまま) それではお約束が、ちがひます。こんどおわかれしたら又とおあひしないことにお話したぢやございませんか。

父 それはさうだが……

母 わたしたちはわかいひとたちのやうにはまゐりません。そのことはどうぞおまもりくださいな。わたしにしてもそれはつらいことなんですけど、これくらゐのことはがまんしなければならないと思ひますの。わかいひとたちならできさうなことでも、わたしたちは既うしてはならないんでございますからね。

父 (溜息、何となく恥を感じながら) さう言へばわしたちはこれからあとは何もできないな。おまへの言ふことはよくわかるが、しかしわしは何時かまたこれまでのやうな暮しができさうな氣かしてならん。こんな考へは子供じみてわるい考へだが、年をとると何だか考へが子供らしくなるものらしいな。

母 (父の顔を見詰めなだめるやうに) その話はもうやめませうね。わたしたちはあんまり永い間暮してきたので、いまから考へるとあんまり呆氣ないほど靜かでございましたね。わたし何んだか二十年もひとところに睡つてゐたやうな氣かいたしますの。まるで睡りつづけてゐたやうにも思はれますの。

父 そんな氣もするね。しかしおまへはいま目をさましたやうな年ごろだから、わしに遠慮をしないでいいところがあつたら落着いてくれるとよい。わしはまるでおまへの若い時分をむりやり押しつぶしてしまつたやうなものだからね。わしはそれが一番氣に懸つてしよちゆう濟まないやうな氣がする。そして氣のついたじぶんはもうおまへは若くはない。わしはまるで何も知らないおまへをだましてゐたやうなものだ。わしはそれを何時かおまへにあやまらうと思ひながら、つい何時の間にかけふになつてしまつたのだ。わしのことはわしが謝まるからがまんしてくれ。

母 (父の顔を見て泪ぐむ) いいえ、わたしはまだこれまでに唯の一度もそんなことを考へたことはございません。不平や不服めいた氣の起つたこともありません。いつでも樂しくまるで二十の時分から今までを一と足に飛んで來たやうに思ひますの。そしてわたしは不思議にいつでも鐵砲を肩にかけて元氣よく山へゐらつしやるあのころのあなたばかりが目にちらついてゐますの。晩方

いろいろな小鳥を入れた編袋を提げてお歸へりになるのが、まだ石屋の松並木の下に見えるやうでございます。そしてどんなにおねがひしても鐵たけは仲々お廢めにならなかつたんですね。それがまるであの事があつてからふつつりと山へもお出でにならなくなりましたのね。わたしあの時だけはほんたうに嬉しうございました。朝のことでしたのね。あんな鶉があんな季節はづれにお部屋に飛び込むなんて、ふしぎといへば不思議すぎますのね。

父　（想ひ出して）　いや、實はね、殺生はやめたいと考へてゐたものの、依怙地なもので何かのきつかけがないと思ひ切れないものだよ。あのときの鶉の左の足が折れてゐたのも可哀さうだが、しかし外にもつと厭なことを見たんだよ。あんなときに鶉が飛び込んだことも鐵をやめる原因になつたが、それよりか最つといやなことを見たんだよ。それをお前に話をしようと思つたが、わざと控へておいたのは、お前がまた弱つてしまふと思つたからだよ。

母　（考へ込んで）　まつたくわたしには知らなかつたことでせうか。

父　（憐れんで）　お前は知るまい――正のことだよ。あの前の晩わたしはあそこの家のまへを通つて、正がぼんやり飴屋の前に佇つてゐるのを見たんだ。なぜそんなところにゐるんだと尋ねると、默つて佇つてゐて何もいはないんだよ。何かいたづらをしたのなら謝まつてやるから一緒におうちへお這入りといふと、おうちへ入れないから這入つてやらないとあの子が剛情をとほすんだもの。ぢやあわしのうちへ來たらどうだといふと、何時まででも此處にゐるんだと言つて動かないんだ。わしも手の出しやうがなくて默つて歸つたが、何ともいへない氣がした。あの子は一たい誰に育てああいふ剛情な子になつたのだらうね。あそこのうちの風儀はよくない。しかしあの子はあんな變な子ぢやなかつた筈だがね。わしはその翌くる日に鶉が飛び込んで、片方の足がねぢ切れてゐるのを見て、すぐ飴屋の角にゐた正の小さい裾から覗いてゐる足を思ひ出したら、どうしても鐵に出る氣がしなかつた。おまへには默つてゐたがわしはあれからなるべく町通りを歩かないやうに心掛けてゐたんだよ。

母　（落着いて聞く）　それはわたしも氣がついてゐました。あなたが町通りをゐらつしやらないくらゐのことは、わたしには分つてゐましたの。そして正がどういふものか心がねぢれてゐるのも氣がついてゐました。しかしわたしはあれが生れつきからああだつたと思ひません。あそこへ行つてから急にかはつたのでございますね。その證據にはお友だちと一しよに遊んでゐますと、わたしに會

つたつて碌に口もきかないんですもの。どこへかふいに隱れてしまふか馳け出してしまひますけれど、自分ひとりきりだとわたしのそばへ寄つてきて、それはなつかしさうにしますの。あの子は何も彼もあんまり分りすぎてゐて、そんなことであんな小さい頭をつかつてゐるかと思ふと可哀想でならないんです。うちへ遊びに來たつてわたしのそばを離れないでゐるくせに、時計ばかりに氣を配つてゐるんですもの。そして妙に毎日なんて來たことがございません。きつとあなたもお氣がついてゐらつしやりはしませんか。

父　（じつくりと考へ）　さう言へば妙に隔日にくるやうだね。するとけふはやつてくる日なんだね。おまへがゐなくなることは知つてゐまい。まさか、あの子がどんなに敏感(びんかん)でもね。

母　毎日だとあちらの家へ知れるから隔日に來るんでございますよ。――それにこんどのことだつてみんな解つてゐて、默つてゐるやうですよ。それは此二三日ひまさへあれば遣つて來てゐませう。そしてお庭へ出て居れば居るで尾いてくるし、お部屋に居れば居るで隔れないやうなところがございます。一昨日あなたに牡丹の芽立ちをおねだりしたでせうね。

父　默つてどんどん手を引張つて先に立つてゆくから、一たいどこまでつれて行くつもりだといふと、ここでいいのつと言つて牡丹の前へ立たせるんだよ。これをどうするのといふと、掘つて頂戴つてきかないんだ。根のいいのを一株頒けてやつたがね。……

母　（悲しげに）　あれがやはり子供ごゝろにおかたみにいただいたんでございませうよ。あの子はあゝ云ふ妙なくせの子でございますから。

父　（はかなげにいふ）　何んでもさういふ心に殘ることを言ふ子だ。おまへにはまだ默つてゐたけれど、この緣の下を見てごらん。あの子がみんな集めておいたんだよ。あちこち庭の中を掘りかへして一つ一つ目じるしをして、紙包みにくるんであるんだよ。

（母、緣の下を覗いて見る。紙包み七八つばかり竝べられてある。）

母　これをみんなどうするのでせうか？――あの子はどこにどんな草花の根があるかをちやんと知つてゐるやうでございますね。それがほんたうに悉しく知つてゐるんですからね。

父　（母の顏を見詰め）　これはあれがみんなおまへにあげるために、自分で掘つたらしいんだよ。

母　（急激に胸せまり兩手で顏を覆ふ。むしろ靜かすぎるくらゐに）　まあ……。

父　わしも初めは氣がつかなかつたんだ。だからおまへはこれをどうするつもりだといふと、大人のやうに笑つていまにわかるのといふんだ。

母　（紙包みを椽の上にならべる——わたしこれだけはいただきますわ。（紙包みの一つを解く。株根二つ三つ轉がり出づ）すゐせんでございますね。

父　（自分も別の紙包みをひらき乍ら）すゐせんだよ。これは——紫苑の芽なんだな。よく知つてゐたものだね。あんな塀ぎはにあるのをよく覺えてゐたものさ。わしにも分らないところなんだが……。

母　それにあの子は妙にこんな草だの木だのが好きなんでございますね。（懐しさうに別の紙包みを開いて）まあ、こんなゆりの根なんか深く埋つてゐるものをよく掘つてくれたのね。ありがたうよ。（さびしく笑つて見せ）わたし何んだか涙が出てしかたがないんですもの。

父　（その弱々しさに釣り込まれ。……）この間から庭ぢゆうを走つてあるいてゐたが、これを集めるためだつたんだね。

母　さうお仰れば、昨日でしたか、爪の間一杯に泥をためてゐました。取つてあげると言つてもいゝつてきかないんですもの。このごろ妙に人なつこくなつて來ましたやうね。

父　まだすつかりは分らないやうだけれど、自分がなぜあそこの家にゐるかといふことを知つてゐるやうだ。——正が來るといけないから元通りにしておきなさい。

母　（あらたに思ひ出して）わたしこれをいただいても、こんなものを植ゑることなんかできはしないんですもの。どこかの二階でもかりてお針でもして暮したいんですから。——わたし悠長にこれを植ゑてなんかゐられないんですもの。（考へなほして）けれどね、いろいろな鉢を買つて來て植ゑてやりませうよ。みんな根がつきますか知ら？——

父　大丈夫だよ。どこか小さい離れでもかりるといゝね。おもやと隔れたしづかなところがないかね。

母　さがして貰つてあるんですけれど……（氣がつく。植木やが庭づたひに來る）こちらへ——かはまないんですから。

植木や　さつそくでございますが、けふ川向ひへ行きましてね。そして一軒だけ決めてまゐりました。六疊に三疊の離れでございますよ。奥さまのおすきな川も庭さきを通つてゐるんです。

父　そりやよかつたね。

植木や　そこで伜でございますな、さきの分は門のそとまで出しましたが、まだ先刻の道路に石積みがゐるんで駐

つてゐますから、一しよに出さうと思つてるんです。

母　いろいろありがたうよ。ぢあ一しよに出してくださいな。

植木や　もう何も積むものがございませんな。

母　ええ、何にも――。

植木や　（紙包みを見る）そんなものまで持つてゐらつしやるんですか。（愉快さうに）奥さまは草つぱでも大切になさるんだからな。そんなものでも馴染み出すと春は春で一番さきに思ひ出すものですからね。わたしなんぞこんどの家を建てなほすときに、うち庭の松の木一本でおやぢと大喧嘩をしましたよ。

父　どうして？――

植木や　おやぢでは松の木を伐つてしまへといふんです。あれをあのままにしとくと家を毀さないと、動かせないものですからね。しかしわたしでは松の木はああして玄關の中へ取入れてもいいから、そつとしときたいんですよ。何しろ七十年もああして生きてゐるのを伐るなんて、碌なことがありませんからね。だから松の木を伐るくらゐなら一切わたしは手をかさないと、酒をくらつて言ひ通したんでさ、――するとおやぢも降參してしまつてたうとう玄關の中へ取入れましたが、中々奥床しいものですよ。

父　（感心して）あれは立派な松の木だよ。そりやいいことをした。松の木もよろこんでゐるだらうよ。

母　あなたらしくてほんとにいいことをなさいましたのね。

植木や　（精悍に）あとでおやぢも却つてよろこんでくれましたよ。何しろおやぢばかりでも四十年の間梯子で手入れしたやつですからね。

母　ほんとにね。その離れにこれを植ゑるところがありますかしら。

植木や　（考へて）ええと、何んでも七八坪くらゐの庭ですから大丈夫ですとも。わたしがみんないいやうに奥さまのおすきなやうに植ゑておきますよ。水植ゑにして一週間もしたら芽先きが樂しめるやうにしませうよ。なにしろこの陽氣でございますからな。（耳をそば立てて）はア、もうこちらへ遣つて來たんだな。先刻はまだ川向ひを練つてゐたんだが……。

（芝居の町廻りする太鼓の音が乾いた暖かい遠くから近づく。）

父　（耳を傾て）芝居がかかるんだね。

植木や　いい芝居ださうです。しかしわたしたちは毎日芝居ごつこをしてゐるやうなものだから見たかありませんや。

父　芝居つていへば永く見ないやうぢやないか。いつか、——まだ、正のゐたころ行つたきりだね。

母　（しばらくうつとりと）　ええ、ほんとに永くまゐりませんね。

（間。しばらくして。）

植木や　おやあ、これをいただいて行つて植ゑておきませう。いづれまた。

母　いいやうに植ゑてください。

植木や　承知しました。

（植木や庭づたひに去る。町廻りの太鼓やや近づく。）

父　（つくづくと）　ゆつくりした暮しだつたが、芝居も見るをりもあまりなかつたやうだね。

母　（依然うつとりして）　ええ、ございませんでしたね。

父　これからはひまがあるんだから、ときどき芝居を見に行くといい……。

母　いいえ、わたしそんな賑やかなところへ行きつけないものでございますから、もう行きたくございませんの。

（耳を澄して）　町角をまがりましたのね。

父　だいぶ遠退いたやうだね。

太鼓の音消える。）

母　（氣がついて）　お茶でもいれませうね。

父　（庭をみる）　日かげが木のあたまにしかささなくなつた。お茶でものむとするかな。

（母、茶を入れにたつ。瓶かけで茶を入れながら……。）

母　夕方近いんですから濃い茶をいれるのはよしませうね。

父　うすいのでいいよ。つかんことを言ふやうだが、このごろ正をあそこの家へやらなければよかつたと考へるやうになつたよ。かうしておまへが外へ出るやうになつたら、なほおまへのためにも一しよにゐてくれると心丈夫だと考へてゐるんだが、どうもこの考へはもう遅いね。

母　（心から……）　ええ、わたしもそのことが胸一杯なんでございますの。惜しいことをしましたのね。

父　取り返しがつかないことをして了まつたな。なぜあのときあれをやつてしまつたかな。わしらはばかだつたよ。

母　（遠くを眺めるやうに考へ出す）　あのときも行種さんが入らつしやるんで、あわててあそこへ遣つたのですね。あのときは既う日さきが何だかこはくて、それに世間のこともございましたし……わたしはどんなにしても手離したくはなかつたのですけれど……

父　（あやまるやうに）　わしはあのときは全くあわてた。そして無理にあの子をやつてしまつたが、あれはわしが悪かつた。おまへの味方を奪つてしまつたことは、何と言つても悪かつた。あのときは世間も怖しかつたが、行

伜の顔をみるのが耐らなかつた。それゆゑわしは行種のかへるまで茶室にばかりゐた。それにとなりや近所の噂までわしには恐かつた。人が何んにも言はない前にわしは用意しすぎて了つたのだ。あれはわしの一生のうちで一等わるいことだつた。いや、わしは一生のうちをまるでわるいことを仕通してきたやうなものだ。しかしおまへは默つて尾いてくれたが、いまになるとわしはわしをにくんでゐるよ。

母　けれどもああしないではどうしても納まらなかつたのですね。わたしはまだ若うございましたし……

父　わしはあんまり澤山おまへにあやまることだらけで、どれからあやまつていいかわからないくらゐだよ。

母　（手で制して）その話はもうよしませうね。お茶が冷えてしまひますからおあがりください。

父　（お茶をのみながら）わしはまだおまへの泣いてゐたことをおぼえてゐるよ。まる一日。

母　（默つて泣く……）

（間。夕方ちかい明りがくらみをおびてくる。）

父　（喉の乾いた人のやうに）おまへはたにも知らなかつたが、わしはもう何も彼も知つてゐた。——それがいまになるとわしはくるしい。わしはこれをお前に一度言つておきたいと思つてゐたんだ。

母　（默つて泣く……）

父　おまへはけふまで何ひとつわしに不平がましいことを言はなかつたね。何かわしに言ふことがないか。

母　（濕つた聲で）なにもございませんわ。わたしたちは深い因緣がございましたのね。それだけですわ。そのほか何もいふこともないのですわ。

父　（ややしつこく）おまへはあきらめて因緣だといふか、ほんとに何かいふことがあつたら言つてくれ。それがどんなことでもわしはよろこんで聞くから。

母　いいえ、何んにもございません。

（母、父により添ひ低いこゑですすり泣きをする。間。——庭づたひにぢいや入り來る。やや強い風が吹く。）

ぢいや　（息切れをさせ）すつかり積み込みましたから出してもようございますか知ら。

母　（身じまひをして）ご苦勞さまね。もう出してくださいな。それから車力やさんは何人ですかしら。

ぢいや　（指折り）ええと、一臺に二人づつですから都合四人でございます。途中に坂がございますから、あと押しがいるのでございます。

母　（押入れから紙包みを出し）ではこれをご祝儀にね。ぢいやさんはあとよ。

ぢいや　わたしなぞどうでもようございますが、みんなが

喜ぶことでせう。

父　酒があつたらやるとよい。

ぢいや　(頭をふつて醉うた人のまねをして見せる)　あいつらはみんなふだんから醉つぱらひですからな。祝儀だけで澤山ですよ。醉はせたらさわぎでございますからな。

母　ではいいやうにね。

ぢいや　かしこまゐりました。

(ぢいや去る。表に人ごゑがして、間もなく荷車の音が遠退く。)

父　(荷車の音をききながら)　ではもう鞄ひとつだね。

母　ええ、それから夜具が一包みございます。これは人力にだつて一しよに乘せられると思ひますの。

父　二臺にするといいね。

母　わたしもさう考へてゐますの。

父　(庭の方を見詰めながら)　もう今晩ぎりだね。おまへがここで泊るのもね。

母　(しみじみと)　ええ、やかましいと思つてゐましたけれど、もう家鴨の啼ごゑもきけませんのね。

父　けふは妙にしづかだね。

(庭の奥から木を叩くやうな音がする。歇んでは起つては消える。ふたりとも耳をかたむける。)

父　あの音は何だらうね。先刻からするやうだかな……

母　ええ。わたしも變だと思つてゐるんでございますが。

父　(起つて庭へ下り奥の方を見る)　どうも正らしいな。いつの間にやつて來たのかしら。

母　(奥庭を見る)　正らしうございますね。何をしてゐるんでせうかね。日がくれかかつてゐるのに……正や、正、何してゐるの。

(木を叩く音歇む。)

母　風が出てさむいからお家へおはいり。――わたし、ちよつと行つて見てまゐります。

(母。庭の方へきえる。父、縁の上の紙屑をひろひ茫乎と佗しげに立つてゐる。風やや勁くなる。間。)

母　(正の手をひいてくる)　だいぶ遲いんですから、もうおかへりなね。あちらのおうちでも心配してゐらつしやるやうだから。

正　(むしろ畸形的な感じ。痩せてゐる。手に竹の根の杖をもつてゐる)　おそくなつたつていいんです。ちやんとけふは左う言つてきたの。

母　(あやぶんで――)　ぢや。どこへ行くつて言つて來たの。

正　平氣で――さうでない意味にも取れる)　ここのうちへ行くつて言つて來たの。いつかお母さんがけふごはんを一しよに食べると言つたでせう。さう家で言つたらそ

れならいいつて言つてゐた。

母　（想ひ出して）　さうね。ごはんを一しよにいただくことになつてゐたのね。（父の方を見て哀しげに）　わたしそれはちやんと覺えてゐたんだけれど、おまへのうちへわるいかと思つて默つてゐたんですよ。ぢや、けふは一しよにたべませうね。

父　（さびしく）　わしもそれは氣がついてゐたんだが……こちらへおいで、――お庭で何をしてゐたの。（正、父のそばに腰かける）

正　けふはおそくなつてもいいんだ。

母　なにかご馳走しませうね。（父に對つて）　ほんとにいいあんばいに此の子が來てくれてよございましたのね。いいときにはいいことがちやんと定つてゐるやうなものですね。

父　お酒をつけてくれるだらうね。

母　（笑つて）　ようございます。ぢあ、わたし仕たくをしてまゐりますから、こちらの部屋にいたしませうか。

父　うん。しかしだいぶ暗くなつて來たやうだ。

母　ともしませうか。

父　わしが點火すよ。おまへあちらを早くやつてくれ。

（母去る。父次の間から竹の臺のらむぷを取り出し、ほやを布で拭いてゐる。正、緣の下をながめ薄明りに何かをさがしてゐる。）

父　（ほやを掃除しながら）　おまへ庭で何を叩いてゐたのかね。

正　（緣の下から起き上つて）　木から繩を下げてそのさきに薪を吊し上げて叩いてゐたの。

父　（をかしげに）　劍術のけいこか。

正　いいえ。

父　ぢあ、ぶらんこかね。

正　（齒がゆげに）　そんなものぢやない――。

父　ぢあ、何にをしてゐた。

正　ちよつと憎い奴がゐたものだから叩いてやつたんです。

父　（らむぷに火をともす。それを座敷の眞中へ出す）　それは一たい誰のことかね。

正　（畸形的な感じが強い）　誰のことだか。

父　（正のかほを凝見める。正の顔ゆがんで悲しげに見える。間）　おまへはそんなに憎いことがあるかね。子供つてものはそんな考へをもつてはならないものだよ。子供はのんびりしてゐなければいけないからな。

正　（默つてゐる。羽織のひもをいぢつてゐる）……。

父　おまへのまはりのひとは皆いいひとばかりなんだから、そんなに憎らしいひとなんてゐないぢやないか。――

決してそんなことをひとにいふものぢやないよ。

正　（突然にいふ）　僕うちへかへらうか知ら？——

父　（吃驚りして）　ごはんを一しよにたべることになつてゐるぢやないか。そんな氣のまがつたことを言ふものではない。こちらへお上り。

正　（甘えてゐるのを匿して）　僕、此處でいい……。

父　（默つて正を眺めてゐる）……。

（間。やややしばらくして父、正のそばへ寄る。）

父　（老い嗄れたこゑで低く）　おまへは何か言ひたいことを言はずにゐるんだね。それでそんなにむつつりしてゐるんだね。さうぢやない。

正　（默つてゐる）……。

父　けふはおこらないで機嫌よくごはんをたべておいで。お母さんにも機嫌よくしてゐるんだよ。そのわけはおまへはちやんと分つてゐるだらうからね。

正　（やつと）　ええ。

父　（しづかに）　けふはわしのうちへ行くと言つて來たんぢやないね。默つて來たんだらうね。わしはちやんと知つてゐるが、併しそれはどうでもいいんだがね。

正　（いつの間にすかされて了ふ）　え。默つて來たの。

父　さうだらう。（何か考へ込んで）　これからそんなことをして來てはいけない。分つたね。

正　（從順に）　わかつた。

父　おまへは先刻憎いやつを叩いてゐたなんて言つたが、あれは誰のことだかしやうぢきに言つてごらん。わしはそんな人なんておまへのまはりにはゐないと思ふんだが、おまへとわしとの考へはちがつてゐるから、わしはそれを聞きたいんだよ。ね。ちよつと言つてごらん。

正　………。

父　わしにはそれは誰だか分つてゐる。（侘しげに）　あてて見ようかね。

正　（眼をみはる）……。

父　（優しく）　これからあんな事はしない方がいいね。しないと言つてごらん。

正　（突然に）　僕はあいつらが嫌ひなんです。

父　（あまり突唐なのでびつくりする）　あいつらつて誰のこと？——。

正　（又突然に言ふ）　緣の下に匿いた僕の種子（たね）をどうしたんです。あれは大切なものですよ。あれを出して下さい。けふぢゆうに僕はいるのです。

父　（あまりの烈しさに茫然としてゐる）……。

（母入り來る。白い前垂れをしめ手をふきながら默つておぜんをならべる。床の間に正のぜんが供へられてゐる。）

母　（正のぜんを指さし）けふはここにして置きませうね。

父　（こころよげに）それはよく氣がついたね。その方がいいよ。

母　正や、ごはんですよ。おあがり。風が出て來てさむいからお部屋へおあがり。

（母、正のそばへ寄る。らむぷの灯またたく。裏の藪と樹に樹のさはる音がやや烈しくなる。父默つてらむぷを部屋のすみに移す。）

正　（不機嫌に默つてゐる）

父　（すかすやうに）緣の下に置いてあつた種子はね。あれはちやんとお母さんがしまつておいたんだよ。ね、いいかい、それでいいのだらう。

母　（温かく柔しげに）正、ありがたうよ。あの種子はお母さんがいただいておいたよ。おまへがあれをわたしにお吳れのやうだからね。ありがたうよ。お母さんはおれいを言ひます。

正　（泪ぐむ）それならいいんだけれど。僕、見えなかつたものだから……。

母　（あたまを撫でてやり）あれはちやんと先刻植木やにたのんで植ゑさせておいたの。きつとみんなつくでせうよ。おまへは深切ね。さあ、ごはんをみんなで食べませう。

正　ええ。

父　（嘆くやうに）みんなで一緒にかうしてごはんを食べることなんか、もう二度とないだらうな。（自分のぜんの前にすわる）

母　もうそんなことは言はないでくださいましな。

父　（わざと氣輕に）よし、よし。正はここへ坐るんだよ。

正　（床の間の座につく）これでいいの。

父　それでいい。

正　（分つてゐるやうで解らないごとく）僕、なぜこんなところに坐るのか知ら？——。

父　（だまつて微笑つてゐる……。

母　（ごはんをよそつて默つてゐる）

（間、みんなだまつて食事をする。風はげしくなる。）

母　（給仕しながら）ひどい風になりましたね。

父　（庭を見る）…。風が出たやうだね。

——ゆるく幕——

第二景

前景の次ぎの間の茶の間。

古風な弓張提灯の箱等なげしに架けられてゐる。右手むかし風な武士家玄關に通ず。凡て板の間。——茶の

間の障子開け放たれ花樹ある廣大な庭が見える。左手に茶室の間の半景。よく晴れたる翌朝。

母　(爽々しい庭さきから這入つてくる) いい天氣になりましたのね。すつかり奥庭の方が片づきましたよ。

父　(茶室の前の冬がまへの薦を取り除けてゐる) すこし汗ばむくらゐだね。ほらこんなに蕾が膨らんでゐる。薦の中だから氣がつかなかつた。

母　(椿の木に寄つて) 蕾がはじ切れさうですね。ことしは陽氣がよかつたせゐか、早く咲きさうでございますね。

父　こんなに暖くちや薦をかむつてゐては蒸されるくらゐだらうよ。

母　ええ、ほんとにね。――それからわたしけふ皆さんに會はなければならないでせうかしら。わたしほんとは會ひたくないんですけれど、しかしよく考へると左うもまゐりませんしね。

父　(同感して) いやだらうがおまへが會つてくれなくては、もののありかも分らないしね。けふきりのことだから我慢してくれ。

母　(納得して) ええ、あふことにいたしますわ。それからぢいやがよめ菜をすつかり摘みましたの。

父　さうかい。あれはすぐに芽を出すから三度くらゐ摘めるんだよ。

母　(何となくしんみりと) ぢいやは永くつかつてやつて下さいね。もうそんなに用事もできなくなつてゐるやうですけれど、これはわたしからおねがひしますわ。

父　ぢいやのことなら心配しなくともいゝよ。多分、わしのうちからおとむらひの出るまで置いてやるつもりなんだ。わしのおやぢの時分からゐるんだからね。おまへが託まなくともそんな薄情なことをするわしではないよ。

母　どうぞね。いまもよめ菜を摘みながらせめて奥さまのごちそうに何んにもわしはできないけれど、このよめ菜を和えておあげするんだと子供のやうなことを言つてゐるんですもの。あのひとも年を取るほど子供らしくなつて、いい人になつて來ますのね。それにわたし可哀さうに思はれますのは、ぢいや自身も何となく不安心らしく考へてゐるやうですわ。行種さんがゐらつしやるといふことでね。――あなたからずつと置いてやると左うおつしやつたらきつと安堵しますわ。さうでないと、あゝいふ人の心をやきもきさせるのは、氣の毒でございますからね。

父　わたしからその事ははつきり言つてやつて置くからね。――しかしだいぶぼけてゐるやうだね。

母　年が年でございますから仕方がございません。

(遠くに花火のあがる音がきこゆ。穏やかな日かげが

老夫婦をてらしてゐる。）

父　（そらを見て）開通式のお祝ひの花火らしいね。一たい幾日あがることだらうな。

母　一週間でございますて。

父　ぽんぽんあがる音が陽氣でいいが、けふはあがらなくともいいやうな氣がする。（苦笑ひする）

母　みなさんは何時のでいらつしやるんでせうかね。

父　十一時だときいてゐるが、汽車の時間割なんてあてになるものか知ら？――おまへはまだ汽車を見たことがないね。

母　ええ。まだです。なんだか怖いやうな氣がして、平氣で乘つてゐられさうもございませんね。わたしなんかすぐ眼眩ひがしさうに思はれます。

父　大丈夫だとも。たいへんいいこころもちださうだよ。

（父。茶の間にある汽車の時間割を取り眺める。）

父　わしなんか見たつて解らないんだが、しかし十一時には間違ひはないんだ。何しろ鐵橋の橋杭の土臺だけでも二年もかかつたんだからな。毎日よいやこらせのうたを聞いてゐるうちにあゝいふ變なものが通るやうになつたんだからね。

母　みなさんもその汽車でいらつしやるんでせうね。

父　さうだよ。わしはこのごろ妙なことを考へるんだよ。あゝいふ文明めいたものが馳り出してゐると、わし等のやうな年寄りは何んだか早死にしさうに思はれてならない、――妙に急がされてゐるやうでね。だからわしは汽車の走つてゐる音響をきいてゐると頭がぼおとしてしまふ。……

母　わたしはあの音響をきくとあたまがいたみますの。けれどもそんな死ぬのを急がされるなんてことはございません。氣のせゐですわ。

父　（眞顏になり）おまへがゐなくなつたり行種がきたりして、すこしも落着く間もない隙間にわしはほろりと參るやうな氣がするんだ。なんだかものを食べても味のないやうな氣がするのは、心にはよくないと思ふね。年寄りといふものはやはりぽきりとやられてしまひさうだね。これは戲談だが……（にが笑ひを弱々しくする）もしものことがあつたらわしはおまへに知らせていいか知ら？――わしは決してわるいことだともおもはないんだがね。

母　（考へて）そのときはわたし來させていただきますわ。誰が何と言つても參ります。けれどもそんなことをお考へにならない方がようございます。

父　おまへが來てくれればいいよ。わしはやはり行種と一しよにゐてもおまへとゐるやうなわけにゆかないから

ね。

母　（しみじみと）　ええ。

（ぢいや奥から手籠を提げてくる。）

ぢいや　わづかだと思つてゐましたらずゐぶんでございました。旦那さまの分まであるやうでございます。

母　ありがたう。（籠の中を覗いて見て）　いい匂ひがしてゐますね。（微笑ひ乍ら）　ぢいやさんが料理してくれるの、まだ、ほんの芽先きね。

父　（のぞき込んで）　芽の若いほど柔らかいんだね。

ぢいや　ええ。わたしが和えてごらんに入れますよ。毎ねん、この芽さきが一番早いやうです。去年は奥さまがお摘みになりましたね。正さまも入らしつて夕方からでしたけれどぢやんとお晩には用意できましたやうでした。

母　あのときはまだぐみの木のかげに雪があつたやうね。それにくらべるとことしはヨ程暖かいのね。去年は四月にはいつてから二度も降つたんですもの。お涅槃の日だつたか知ら？

ぢいや　（手を叩いて）　正さまがおねはんのおそなへの園子をもつてゐらしつたから、やはり四月の十五日ですよ。旦那さまはお風邪でおやすみになつてゐらしつたから。

父　さう、よくおぼえてゐるね。あのときは全くよめ菜で元氣がついたくらゐに思つたよ。

母　けれどもことしでお終ひになるのね。（さびしい顔をする）

ぢいや　（わざと元氣よく）　たんとお食（あが）りなさいまし。

ぢいや　（急に思ひ附いて）　先刻川向ひの方からお使ひでしてね。朝の間にたたみの裏がへしをしておいたとのことでしたよ。植木やさんが、きつと例の調子で言ひ附けたのでございませう。何でもやはり役所へお勤めになる方の持家ださうです。

母　（好意をよろこんで）　植繁（うゑしげ）ならなんでもまかせておけますね。そんなに汚れてゐなかつたのなら裏返しなんてしなくともよかつたかも知れないのに。――。

ぢいや　その方がしかしさつぱりしていい氣もちですよ。

父　さうとも。

ぢいや　（きふに）　ときに何時のお着きでございます。

父　十一時だよ。

ぢいや　（日脚を仰ぎ見て）　まだ一時間はございませうね。

母　そんなものでせうね。

ぢいや　お荷物が大へんでございませうな。大勢さまだから。

父　たかが知れてゐるよ。（思ひついて）　それからぢいや、おまへのことは心配しなくともいゝからね。ゆつくりした氣もちでゐてくれ。わしがみんな飲み込んでゐるから

な。

ぢいや　(主人の顏を見詰め)　ありがたうございます。

母　わたしに變つてお世話してあげてくださいな。

ぢいや　承知いたしましてございます。それから先刻正さまと石屋の角であひましたら、まるでわたしをうまくだまして奥さまのおところをお聞きにならうとなさいましたから、わたしは存じませんと申し上げておきました。どうももう早やご存じのやうでございますな。

母　(不安げに)　あの子のことだから知つてゐるかも知れませんね。默つて訊ねたりなんかしないだけなほ知つてゐるやうでございますね。

父　(同樣に)　さうだな。しかしどちらにしても知れるだらうからな。しかしあの子はおまへを尋ねてゆくやうなことはすまい。あの子はちやんとひとりでみんな合點してゐるからね。

母　え。多分ね。ですけれど……。

父　昨日もね、僕はどこへも行きたくないんだなんて妙にそんなことを仄めかしてゐたやうだよ。わしは深く話に立ち入らないでひとりで遊んでゐたはうがいいんだよと言つたら默つてゐた。

母　……(何となく憐いでゐる)

ぢいや　(きうくつにしてゐる)

父　(ふと話頭をかへして)　ぢいや、おまへとおさととあまり仲がよくない方だね。この前おさとが來たときにも何だか變なふうだつたぢやないか。

ぢいや　えゝと、あれは一昨年の春のことでございましたつけ。いいや、杏のできてゐたころだから六月ころでしたかな。

父　行種の休暇だつたよ。

ぢいや　さうさう、まだ暑い時分でした。なんでもあのとき詰らないことからお叱りを受けました。これはいやな話ですからね。よしませう。

母　(思ひ出していやな顏をする)　あの話はよしませうね。

ぢいや　ええ。

父　(何氣なく)　どうしてあんなに九疋もねずみの子がゐたのか、わしはあとで聞いて可哀さうなことをしたと思つたが、しかしああするより外にしやうがなかつたんだからね。

ぢいや　(思はず)　みんな生きてうづうづしてゐたんですから、全く可哀さうなことをしました。しかしあれを生かして置いたつて何んにもならないんだから、若奥さまがああなさるよりか爲方がなかつたんです……みんな水の上を眼の見えない赤い奴か、ぷくぷく浮いては流れてゆきましたよ。それもすつかりで九疋でございましたか

られ。

母　（少しきつとして）　ぢいやさん。

ぢいや　（かしこまる）　はい。

父　おさとはどこか氣の強い女のやうだ。おまへとはまるで反對のところがある。あの時も思ひ切つて可哀さうに捨ててしまつたが、ちよつとわしにもできんことだからな。

ぢいや　氣のつよい方ですよ。わたしはどうしても川へながすことが厭だと申しますと、ご自分でどんどん行つてお捨てになつたんですものな。わたしはああいふ方を初めて見ましたよ。

父　おさとばかりではないよ。あの連中はみんな氣がつよくて叶はない。わしにはすこし重荷だよ。（ちからなく笑つて）ほんとだよ。

母　けれどもああいふ氣性でないと今どきは暮せないんでせうね。わたしああいふてきぱきした方は好きなんでございますけれど、あのときだけは厭な氣がしました。けれども美しく上品な方ね、さうおもはない、ぢいやさん。

ぢいや　（ためらひながら）　ああいふ美しさはきびきびして恐うございますな。しよつちう叱られさうでしてな。

父　（微笑ふ）

母　（微笑はず）

ぢいや　それにどこかわたしなんかとお話しをしてくださらないやうで、それが氣がかりでございます。ぢいや、ぢいや、つて言つてくだされぱわたしは譯もなく働けるんでございますけれど、永い間奥さまから呼びならされてゐた擧句に、ききなれないお聲で呼ばれるとわたしのことですから、きつと間のぬけたことだらけでございませうね。わたしそんなことを昨夜も考へとほしたんです。

母　（優しく）　それはね、ぢいやさん。きつと日が經つてゆくと慣れてしまふんだから、そんなに心配しなくともいいんですよ。

ぢいや　（頼りなげに）　さやうでございませうか。

母　きつとですよ。それにね、あの方もぢいやが年寄りだからよいやうにして下さるでせうよ。

ぢいや　よいやうに奥さまからも申し上げておいて下さいまし。

母　ええ。さう言つてあげませう。

ぢいや　（手籠を提げ）　ではこれを一つ料理いたしませう。

母　よいやうにね。

（ぢいや去る。樹がくれに植木やと何か話しこゑがする。植木や來る。）

母　きのふは色々ありがたう。片づきましたか知ら。

植木　ええ。もうすつかり片づけました。きつと奥さまの

お氣に入ると思ひますよ。前の川から庭へ引いてある水が大變きれいですから……これはきつと奥さまのお氣に入りますよ。

母 （うれしさうに） いいところのやうですね。樂しみにして行きますよ。家の方もすつかり掃除してくれたさうでお禮を言ひますよ。

植木や （好意のため愉快に昂奮して） もう何日だつておすわりになるだけになつてゐますよ。（父の方に向つて）それから旦那、手洗鉢のやうなものはございますか。中厠のあれが御不用ならいただきたいんですが……もう手洗鉢さへあればすつかり揃ふんですよ。

母 （さへぎつて） それはわたし買ふつもりなんですからいいんですよ。

父 あれはいらないんだから持つてゆくといい。なあにあれは使つてないんだから關はない。

植木や ではいただかうぢやありませんか。ご不用だと言つてゐらつしやるんだから。

母 さうね。ぢあいただきませう。

（植木や厠の中の手洗鉢を持ち出し繩で荷ごしらへする。）

植木や そろそろ入らつしやる時間でせうな。

父 （時計を見る） もう間もあるまいよ 車だから早いだらうよ。

母 （植木やに茶を出す） おひとつおあがり。

植木や ありがたうございます。（奥庭に向ひ） ぢいやさんお茶をいただかないか。何を摘んでゐるのか。

（ぢいや入り來る。いたどりとあざみの芽をもつてゐる。）

植木や （見て） あざみの芽だな。

ぢいや これも和えると中々うまいもんだよ。

植木や さうださうだよ。奥さま、憚さまですがちよつときふすをかして下さい。

母 （茶と駄菓子をもち） いま入れてあげます。

ぢいや おそれ入ります。

父 （立ち上つて） 茶室に火を入れて來ようか。

母 わたし唯今入れますから。

父 わしが入れるよ。お茶の道具もすこし持つてゆかないか。おまへの好きな夏茶碗があるぜ。きつとあとでほしくなるやうなものだよ。

母 （思ひ切つて） あれは置いてまゐります、おつかひくださいまし。

父 さうか、ぢあ、この夏はあれをつかつて見よう。

（父。茶室の方へ去る。ぢいやと植木や、茶をすすつてゐる。）

ぢいや　いい天氣だな。これに家の中に事が起らないでゐると、申分のない結構な春だがなあ。

植木や　全くだ。

母　けれども植繁さん。わたし何だかさつぱりした氣もちにもなつてゐるんですよ。ここを去るのはさびしいんだけれど、べつに變つた暮しをするのがね。

植木や　(凝乎と何か考へて) けさも出かけにおやぢが奥さまにはまことに申しやうもない事をしたと言つて、御挨拶に出るのがつらいと申しましてね。おまへからいいやうにお詫びしておいてくれと言ひ附かつたんです。どうか惡くおもはないで下さい。

母　(眼を瞠つて) わたしが何んでそんな古いことなんか考へるものですか。さう言つてくださいな。そりやわたしこちらへはおやぢさんのお世話で上つたんですけれど、そんな二十年も前のことなんか、みんな忘れてしまつてゐるんですよ。却つてこちらへ來たんでわたしはしやはせになつたかも知れないくらゐですもの。さう言つて下さいね。そしてあちらへ越したらお茶でもおあがりに入らしつて下さいつてね。

植木や　ありがたうございます。おやぢはそればかり言ひ暮してゐるんです。すまないと申しましてね。まだ奥さまの前でございますが、まるでそのときは娘さんだつたと言つてゐました。

母　(笑つて) そんな話はするものぢやありませんよ。さうね。二十のときだつたから、――まだ庭の中に藪があつた時分でしたよ。

植木や　藪があつたんですか。――さう言へばうろ覺えにおぼえてゐますね。

ぢいや　塀のきはからずつと家をとりまいてゐたのさ。いい筍が出たつけな。奥さまはまるでちひさくて、あそこのほら棄石の上へのぼつてやつと干しものをなすつたくらゐだつたよ。

母　(考へに耽つて) そんなこともあつたね。ぢいやさんがまだ山へ旦那様と出かけてゐたころだから、――それにいつでもわたしが一人ぽつちでひるのうちはお留守居なんですもの、何んにもすることがなくてお庭の日あたりのいいところでよく髮なんか結つたものですよ。ほんとにあのころはよかつた。ただぼんやりと日を暮してゐるのがね。二十年なんていふとずゐぶん永いやうだけれど、かうして經つて見れば早いものですね……。

ぢいや　こちらで踏ン張つてゐたつて向うでずんずん經つちまひますから……。

植木や　ほんとだ。向うぢや容赦しないんだ。あの杏だつて若木の間はみずみずしい奴がどつさり實つたんだけれ

ど、あんなにぼけると、まるで實の皮がかさかさしてくるからなあ。わけてこちらさまには古い木ばかりだ。

ぢいや　ことしは少し接木をしなくちやならない。

植木や　さうだよ。しまひに木の臺まで古ぼけてしまふから、いまのうちに生かしとくなら接木をした方がいいんだ。ぢいやさんのやうな年ぢやまるきり接木も間にあひはしない　…(笑ふ)

ぢいや　(まじめに)　全くだ。なにもかも腐り方題だから、——。

母　(戯談めいて佗しくいふ)　わたしなんかも接木はだめなはうね。こんなになつちや——(ふしぎな美しさがひらめく)それにあんまり靜かに暮しすぎましたからね。

植木や　(媚びずに。正直にいふ)　奥さまなんか女のいやみらしい垢を抜いちまひましたからさつぱりしてようございますよ。

母　(解らずに)　それはどんなことになるの。

植木や　(笑ひながら)　どう言つたらいいかな、つまり世間にすれないやうな柔和なところが美しく見えるんですよ。ねえ、ぢいさん。

母　植繁さんはあひかはらず面白いことを言ふのね。あんまり永く家ん中にゐたから顔いろがわるくなつたといふ意味なんですかね。

植木や　いやそんなふうにお取りなすつちやあいけません。

ぢいや　植繁はへらずぐちを叩くね。

植木や　おれはほんとのことを言つてゐるんだよ。

母　(自分の頬に手をさはり)　いつそもつとおばあさんになつた方がいいと思つてゐるの。まだわたしは中途半端なんですからね。

植木や　(何となく默つてゐる)

ぢいや　(默つてゐる)

(門の前に車の音がする。人聲も交つて騒々しくなる。)

母　(やや固くなり)　みなさまが入らしつたやうね。

植木や　ええ。

母　(ぢいやに向ひ)　茶室の方へ知らして下さいな。

(ぢいや去る。母と植木や玄關の間へ出てゆく。父、ぢいやと連れ立つて出て來る。)

父　ちやんと十一時だね。

(玄關の間へ出てゆく。ひと荐り話しごゑや挨拶を交す聲が起る。正、奥庭から出て來て玄關の間を覗いてゐる。——ぢいやと植木やと荷物を搬ふ。)

行種　(洋服を着てゐる)　みんなが面白半分に乘るものですから、ずゐぶん込みましてね。しげ子など嘔氣がすると言ひ出してこまりました。

父　何しろ大へんなお祭さわぎだからな。しげ子かい。大きくなつたね。お祖父さんのところへお出で。（しげ子はためらはずに祖父のそばへ行く。頭をなでながら――）この前に會つたときはまだこんなに、（手で脊丈を計り）小さかつたんだが、こんなに大きくなつたかな。これからおぢいさんと一しよなんだよ。

行種　この前來たときはまだやつと歩んよができる時分だつたからな。

しげ子　でもわたしどこか此處のうちに覺えがありますわ。

行種　さうかね。しかし十年も前だからそれは氣のせゐだよ。

しげ子　（あたりを見廻し）あそこに茶室（おちや）があるでせう。あれなんかちやんと覺えてゐるんですもの。

植木や　（行李をかつぎながら）お孃さまは覺えがいいんですよ、きつと。

行種　さうかも知れない。――おさとはどうした。

ぢいや　（玄關から這入つて來て）お荷物の片づけをしてゐらつしやいますよ。こちらの奥さまと？――。

行種　（關はず）おはるさんとかい。おまへいいやうにしてやつてくれ。

ぢいや　はい。（去る）

父　（變にまぶしい顏をしてゐる）

行種　（ずきずきと）先刻こちらへ這入つて來たときに、しげ子くらゐの男の子がゐたのは誰ですか。……（間。正、姿を消してゐる。行種、氣がつく）まだ見たこともない子ですが。

父　（當惑してあいまいに）どこか近くの子だよ。あれが可愛がつてゐるものだからね。

行種　さうですか。

（行種、庭や家の内部を鋭どく見まはす。）

（父、ひしひしと何ものかを感じる。）

行種　もとの通りですね。わたしは何時でもここへ來て暮らすことばかり考へて、働いてゐたやうなものですよ。國の方に土地や家があるといふことは、ずゐぶん心丈夫なものですからね。

父　これからおまへの好きにしてくれた方がいいよ。けれどもわしだけは食はしてくれないとこまる。（わらふ）

行種　（いきいきとして）あなたくらゐはらくをさせてあげますよ。座敷はあひかはらず落ち着けさうですね。（座敷の方へ行く、父、尾いてゆく）――あんまり明るすぎるくらゐだが、しかしここはわたしの部屋にしときますよ。

父　夏は日がささないから大へん涼しい部屋だよ。

（しげ子ひとりぼんやりと疲れて立つてゐる。正、奥庭からこれを眺めてゐるがしげ子は知らない。）

行種　（茶の間へもどつて）何しろ家が古いからすこし普請をしなければならない――（ひとり言のやうに言つて）此處なんぞ家がゆがんでゐる……。

父　ここの家はあと二十年くらゐは持つんだよ。ゆがんでゐてもそれなりで固まつてゐるんだ。いまどきの下手な大工の手にかけるよりそつとして置いた方がいいからな。おまへなんぞは家のあたひはよく分るまいよ。

行種　（冷かな笑みを浮べ）こんなに古ぼけてゐるんだから、雪でもどつと來た日にや一と耐りもないと思ひますよ。

父　（不愉快げに）一昨年の雪だつてびりつともしなかつたんだから、雪の心配はいらないよ。

行種　さうですかね。しかしわたしは手入れをしますよ。このままでは住みごこちがわるござんすからね。

父　（うつちやるやうに）どうでも好きにするさ。

（おさとと母と入つて來る。）

おさと　（行種に向ひ）いろいろお世話になりましたよ。

母　いいえ、ちつとも氣がきかないものですから。

行種　おはるさんにはまだ御挨拶もしませんでした。――そののちはお變りもなく……こんどは又いろいろお騷がせしてしまひまして。

母　（美しく）いいえね、へいぜいから手入れがとどかないものですから、お庭なんか荒れてお氣に入らないでせうが、これからどうぞよいやうになさいまし。おさとさんも入らつしやるやうですから。

行種　（尊大に）先刻からも父に言つてゐるんですが、家なんか、わけてここなんぞ古くなつてゐますから、これは普請をしないでは持たないだらうと思つてゐるんです。古い家には時々かなめや土臺のめんだうを見てやらなければなりませんからね。

母　（初めて氣がついたらしく）古いには古うございますけれど、まだこのままでもよございます。それにむかしの材木はしつかりしてゐますから。

父　（加勢を得たやうに）手入れをし出したらきりがないよ。しかしそのままにして置いたら、ちやんと持てるだけ持つてゐるものだ。釘一本でも柱にしがみついて壽命のくるまでは腐りも曲りもしないものだよ。

行種　（おほやうに笑つて）その壽命がきてゐるんです。お父さんなんかかうして住んでゐてはわからないが、わたしのやうに外からやつてくるものには、それが分るんですよ。まアちよつと見てごらん、この茶の間なんかまるでどこでこたへてゐるか分らないくらゐ危ないもの

さ。

おさと　さうですね。雪でもふりましたら危なうございますね。（おさと、茶の間の柱にさはり見る）

父　（しづかに）おまへは着く早々家のことばかり言ふが、古いものほど念入りにつくられてゐるんだよ。おまへには煉瓦なんかで積んだ異人屋敷みたいなものが好きなんだらうよ。そんなに家へはいるなり苦情をいふものぢやないんだ。

行種　べつに苦情はいひはしないんです。唯、あんまり古ぼけてゐるからそれをどうして持たせるかといふことを、お話してゐるだけですよ。

父　（默つて怒つてゐる）

おさと　（話頭を換へようとして）わたしかうして來てみますと、樹なんか多くてせいせいするくらゐですわ。そんな家のことなんかよりよ程ようございますね。（母を見て）これまでお手入れはたいへんでしたらうね。

母　もう無性ばかりしてゐるものですから、ずゐぶん汚してしまひました。さあ、お庭へ行つて見てゐらつしやい。（しげ子の手をとり）をばさんがあんないをしてあげますよ。

しげ子　ええ、お母さま、行つてもいいんですか。

おさと　ああ、お母さまも一しよにまゐりませう。せつかくをばさまがああ言つてくださるんですから。――わたし、ちよつと行つてまゐります。

行種　ずゐぶん廣いよ。

（三人、奥庭へ去る。父ぢつと床の前に坐つてゐる。行種たばこをふかしながら暫らく無言でゐる。行種、何か言ひたげに折々父の方を顧みてゐる。）

行種　ぢいやはずつとまだ置いておくんですか。もうかなり老齡のやうぢやないんですか。

父　ぢいやはまだつかつてゐたいんだよ。

行種　（躊躇らひ）しかし最つと若いものの方が用にたつぢやないですか。ああしてゐるのを見ると、やつと歩いてゐるやうですね。（氣のないふうに）でもお父さんに御用がおありなら仕方がありませんが……。

父　（ぶつきら棒に）わしには年寄りの話し對手がいるからな。おまへのやうにすぐ家の中の整理をするのはまだまだ早いよ。

行種　（何となく白けて）べつに整理するわけぢやないんですが……しかし、話し對手には、あの、おはるさんが入らつしやるぢやないんですか。（何か思はくありげに言ふ）

父　（怒りを匿して）あれは今日こちらをおまへだちに引繼ぎをして立つことになつてゐるんだ。おまへだちから

言はれない前にね。

行種　さうですか。入らつしやつてもいいぢやありませんか。わたしは別にそのことに就て何も言つたことはないと思つてゐるんですが……。

父　どつちみちあれは自分から身をひいてゆくんだから……それにお前だちの方から苦情は出ないうちと思つてね。それが一番穏當なやり方だからな。

行種　（ふくれて）お父さんは少し悪考へがすぎますね。わたしたちはまだ何もおはるさんのことで、口をきいたこともないのに、妙なふうにわる考へをなさいますね。わたしの考へでは家の中の取締りをしていただいたりしたいと思つてゐたんですよ。それにお父さんもさびしいだらうと考へましてね。

父　（悲しく昂奮してゐる）口さきではどうでもいへるものだよ。この間の手紙には自分は靜かにくらしたいから在來の人をみんなどうにかしたいと書いてよこしたぢやないか。わしはその通りにしないつもりだつたが、あれは自分から行先きをこしらへて、笑つて出てゆくことに決めてゐるんだ。お座なりのことはいまになつてはお互ひに言はない方がいいね。

行種　お父さんの氣はだいぶ曲つてゐますね。それではわたしは何も言はないことにしますよ。手紙でべつにおはるさんのことを諷刺すつたわけぢやないんです。そんな必要はありませんからね。

父　（むしやくしやして）わしはおまへが來てから、だいぶ氣短かになつたやうな氣がする。つまらないことは言ひ出さないでくれ。默つてこの家をわたせばいいぢやないか。

行種　（落着いて）しかしお父さんはひとりで怒つてゐらつしやるんですよ。僕が何も言ひ出さない前に、先廻りをして邪推してゐるんですからね。

父　わしはむかしからおまへだちと氣が合はないんだよ。それだけだよ。

行種　さうですか。

（父、席を立つて茶室の方へゆく。庭にゐた三人かへつて來る。）

おさと　お庭へ入らつしやいましよ。そりや清々していい氣もちだから――それに、すつかり杏やすももが咲きそろつてゐてきれいですよ。

行種　さうかい。見てくることにしようかな。

しげ子　ずつと奥へ行くと既う誰がゐるんだか分らないくらゐですわ。ほんとに廣いんですもの。

母　（柔しく）これからお遊びになるのに都合がよござんすね。

おさと　からだのためにもよいと思ひますの。それに野菜だつて何だつて作れるやうでございますからね。これまでなぜお作りにならなかつたんですか。

母　（どぎまぎして）つい無性なものでございますから。

行種　これからわたしが作つてやるよ。下らない樹なんか伐つてしまつてね。あれぢや陰地ばかりで仕方があるまいよ。第一陰の地面といふものは悪いものだ。

母　きつといゝやうになりませうね。いろいろお考へになつてゐらつしやいますから。

おさと　宅はなんでも一年ぢゆう毀したり建てたりすることが好なはうでございますからね。

母　（微笑する）

行種　それからつかんことをお尋ねするやうですが、こちらをお發ちになるやうですね。（狡猾に）そんなことをなさらなくとも、ずつと入らしつて父の世話をやいていたゞきたいんですが、どうしてそんなに急にお立ちになることを決めたんです。父からきいて今もびつくりしたらくらゐなんです。

母　（年甲斐もなく赧くなる）すこしからだを休めたいともぞんじましておねがひしたんでございます。べつに深い意味(わけ)があるんぢやないんです。わるくおもはないでくださいまし。

行種　これはわたしからおねがひするんですが、もうしばらくいらつしつていたゞけないでせうか。（妻に向ひ）そして貰つた方がみんな都合がいいんだがな。

母　いいえ、わたしもうよそさまを借りるやうに決めてゐますし、それにお許しも出たやうでございますから身勝手でございますが……こんどはかへらしていただきます。

おさと　（わざとらしく）わたくしどもが参つたんで行らつしやるんですと、なんだかわるいことのやうに思はれてならないんでございます。わたくしどもはゐらしつてくださいますとほんとに心丈夫なんですけれど。

母　（けんそんに）いいえ、決してそんな譯ぢあございません。以前から考へてゐたことなんですからどうぞわるく思召さないでください。

行種　（この話から身を引いて）庭を見てくるよ。

（行種、庭の方へ去る。おさと座敷の方へ行く。）

おさと　ちよつと着がへをいたしますから。しげ子も入らつしやい。

しげ子　ええ。

（母にあいさつしてしげ子去る。植木や玄關から出てくる）

植木や　臺所の方のものはともかく纒たけといておきまし

たよ。中はこちらでさはるのもなんですから。

母　ごくらうさま。

ぢいや　（荷受の紙片を示す）　これに印判がいるとあちらで申してゐますが。

母　あちらでおたづねしてください。お座敷にいらつしやるから。

（ぢいや、座敷の襖をあけようとする。）

おさと　（鋭いヒステリックな聲で）　いま着かへをしてゐるんですよ。ちよつと待つて下さい。

ぢいや　はい。

（ぢいや、植木や、蒼くなる。何となく威壓を感じてゐる。間もなくおさと出てくる。）

ぢいや　（恐縮して）　どうも濟みません。これに印判をおねがひしたいんでございます。

おさと　（やゝ靜まり）　さう、着かへをしてゐましたものだから。

（ぢいや、おさとから荷受の紙片を受取つて去る。）

植木や　お勝手のものは臺所へ搬んでおきました。

おさと　さう、どうもいろいろ。

母　それから少し勝手の方をお引繼ぎしたいんでございますが。

おさと　どうぞおねがひいたします。ではご一緒にまゐりませう。

（母とおさと、玄關口より臺所へと去りながら、玄關口でいふ。）

おさと　この槍はいつでもここにおかけになつてゐるんですか。大へんな埃りでございますね。

母　むかしから左うしてかけてあるんださうです。それからここから二階へあがるんですが、物置同樣にしてゐるものですから……どうぞ上覆(うはばき)をおはきなさいまし。よごれてゐますから。

（姿、見えずなる。二階へあがる音きこゆ。）

おさと　たいへん暗うございますね。雨戸がしまつて居りますね。

母　いつも開けたことがないんですの。古いがらくたばかり這入つてゐて滅多に見たこともないんでございます。

（話しごゑ聞えずなる、……行種、奥庭から這入つてくる。座敷の方を見て聲をかける。）

行種　お母さんは？——。

しげ子　（姿は見えず）　臺所の方へいらつしやいました。をばさんが品物のあんないしてくださるんですて。

行種　さうか。——着かへをするかな。

（行種、座敷へ這入る。姿見えずに。）

しげ子　（敏感に）　ここのおうちに男の子がゐるやうね。

先刻お庭へ出たでせう。あのとき裏門のところからいきなり這入つて來て、わたしたちを見て、あわてゝ又裏門から出て行つたのよ。わたしと同じくらゐの子よ。わたし、ここのうちの子ぢやないか知らと思つたの。

行種　（考へながら……）をばさんが何か言つたかね。

しげ子　いいえ、何んにも。けどお母さんがね。あれはどなたですとおたづねになつたら、あの子つて誰のことですかつて知らなかつたやうよ。だからお母さんがね、いま庭から出て行つた子供のことだと言つたの。をばさんは氣がつかなかつたやうよ。

行種　をばさんはへんな顔をしてゐただらう。

しげ子　ええ、ずゐぶんへんな顔をなすつてゐらしつた。あの子、ほんたうは誰れなの。

行種　知らないね。

しげ子　わたしたちが着いたときにも玄關先きにゐたのよ。すぐ見えなくなつたんですけれど……。

行種　どこか近所の子供だらう。

（行種、着がへをすまして出てくる。同時に茶室の方から庭づたひにおさとと母とが出て來る。）

母　いつも大概茶室にゐらつしやるんです。あそこが大へん氣に入つてゐるやうですから。

おさと　いろいろ有がたうございました。でもずゐぶん古いお家ですね。お二階なんぞもう一ト間くらゐできさうですわ。

母　ええ。

（二人、茶の間の敷石の上に立つ。）

おさと　すつかりあんないしていただきましたの。

行種　お父さんは？

母　茶室にゐらつしやいます。

おさと　何かあなたが言つたんぢやないんですか。こちらへ入らしやらないといふと、わしはこゝが一等氣に合つてゐるんだよと素氣なくお仰いましたよ。

行種　べつに何にも言ひはしないよ。どうしたんだらう。

母　（不安げな氣もちで）お茶でも立てゝゐらつしやるんでせう。わたしちよいと失禮いたします。もうそろそろお暇したいと思ひますから。

行種　まだいゝぢやありませんか。

母　少し荷物もまだ殘つてゐるものですから。

おさと　では又あとで……。

（母、茶室の前で父と何か話しながら奥の間へ行く。父、出てくる。）

行種　わたしはあそこへ手頃な家を二軒ばかり建てたいんだ。あんな杏なんか伐つてしまつてね。

おさと　その方がようございますね。お父さんが入らつし

やいました。

父　おまへはせいぜい庭でもつぶして貸家でも建てること を考へた方がいいよ。

行種　それは話だけなんですよ。まだ建てるとも建てないとも決つたわけぢやないんです。

父　（昂奮してゐる）だが、わしの生きてゐる間は、庭だけはそつとしておいて貰ひたいよ。わしは庭の中でこれまで暮してきたやうなものだからね。杏やすももの木はみんなわしの茶飲み友だちだつたんだからね。わしはあれらが片手で持てる時分からそだてたんだから、どの枝は何年かかつてどれだけ太つたかといふことをちやんと知つてゐるんだ。だから當分、當分だよ。それもわしのゐる間はおまへの手にふれて貰ひたくないのだ。

行種　お父さんのやうに大切にしてゐたら毛蟲に食はれるくらゐが、落ちですよ。みんな根元がくさりかけてゐて、蟻の巣だらけで漸つと生きてゐるやうな態ぢやありませんか。

父　根元はくさりかけてゐてもしんはぎりぎりに生きてゐるんだ。おまへだちの生涯が二度つづいてもあれは枯れはせんよ。わしは毎日あれを見てくらして來たんだから、あれがどんなにまだこたへるかを知つてゐるんだ。

行種　（與もなく）さうですか。わたしは別に伐るとも言ひはしないのにあなたは一人で怒つてゐるのだ。

父　（異常に亂れた心もちの錯雜したありさまで）おまへが庭へ出ると、杏やすももや梨などが、みんな嫌がつてふるへてゐるやうだよ。あんなものでも分るところはちやんと解つてゐるらしく、しかもおまへが地面の工合や建もののことを考へてゐる間に、あれらは地面の下でこまかい根をくみ合せてぶる〳〵やつてゐるんだ。人間にはときとしてそれが分りかねるが、わしのやうにあれらを植ゑ付けまでしたものには能くわかるんだよ。

行種　（昂奮して）お父さんはどうかしてゐますね。あんな杏やすももに神經なぞあつてたまるものですか。くだらないこつた。

父　（烈しく）古い杏の根元のくさりかけたところを見なさい、あかいぼろぼろな土のやうなものが流れてゐる。あれは木の言はゞ血のやうなものだ。あれは老いぼけて疲れてゐる證據なんだ。おまへにはそんなものはてんで眼につかないだらう。

行種　くされば赭くなるに定つてゐますよ。わたしは古い木はきらひです。

おさと　（横合から）いいかげんになさいましよ。失禮ですから。

行種　お父さんはむかしから分らないところのあるひとだ

よ。わたしはべつにおねがひしますつてこちらへ來たわけぢやないんだ。

父　（みじめに逆上して）　おまへたちに何が分るのだ。おまへたちに分るものは新しい家とか、地面の上べだけだ。地面の中のことや樹のことなんぞ夢にだつて分つてゐないのだ。わしはここで五十九年もくらした。そしてどこに何が生えてゐるか、それが何年かかつてけふまで育つて來たかを毎日見てくらしたのだ。

行種　（怒つて）　そんなことが今の世に何になるものですか。百姓だつてそんなことは知つてゐるんですよ。

（ぢいや、茶室から鞄一つ、植木や夜具の包みを背負つて、玄關口へ消える。玄關口に俥のつく音がする。）

父　百姓の知つてゐることは育てて刈ることだけだよ。育ててばかりゐて刈ることをしないわしたちには、百姓なんかの知らないおじひがこもつてゐるんだ。これはおまへたちにどんなにしつこく言つたつて解りはしないがね。まだ三十代の人間になにがわかるものか。

行種　（投げ出すやうに）　ぢや分らないことにしておきませう。もうこんな古くさい話はこりごりだ。

父　（氣がついて玄關口をじつと見ながら……）　いまに分る時があるよ。

おさと　あのとほり氣短かなものですから、どうぞお腹立ちのないやうにしてくださいな。

父　（默つてゐる）

行種　わたしはこんな古い家なんかをあてにして來たわけぢやないんだ。唯、國の方で住みたいだけで來たんですよ。こんなにお父さんからがみがみ言はれるくらゐなら來なければよいと思ふんだ。

父　（默つてゐる）

（ぢいや、這入りかけ父の方へ近づく。低いこゑでいふ。）

ぢいや　ただいま、お發ちになります。奧さまでは默つてゐてくれるやうにとお仰るんでございますが、それも何んですからと存じまして……。

父　（嗄れたこゑで）　さうか、そして荷物はみんな手落ちなく搬んでくれたのか。

ぢいや　ええ。みんなすつかり濟みましてございます。ぢあ、またあとで……

（ぢいや、あたふたと去る。父、何となく固くなつてすぐ出られないやうな氣もちで立つてゐる。）

おさと　わたしお見送りいたしますわ。しげ子、をばさんが、お立ちだから一しよにゐらつしやい。

しげ子　ええ、いますぐよ。

おさと　いそいでゐらつしやい。

（二人、玄關口へ出てゆく。父、悲しげに立つてゐる。）

行種　（默つて頑なに坐つてゐる）

（玄關さきでみんなあいさつをする聲が一と莽りつづく。）

しげ子　（美しい低いこゑで）さよなら。

母　（泪ぐんだこゑで）またお會ひしませうね。みなさん、さよなら。

（俥のわだちの音がする。間もなく門のそとへ消えてしまふ。父、默つて茶室の方へちからなく歩いてゆく、日のかげ茶室の障子に樹と花とをうごかしてゐる……。）

——幕——

大槻傳藏

大槻傳藏
若い侍
その女
要三
その他小間使おしづ等。

城下傳藏下屋敷の宵の口。
傳藏ひとり書見をしてゐる。蛾か行燈のまはりに絆うてゐる。

傳藏　（暫らく見てゐて懐紙に包んで棄てる）
（間。傳藏、書見を續ける。）

要三　行つて參りました。だいぶ水は引いたやうでございます。

傳藏　堤防はどうした。

要三　（ためらひ）少しばかり壞えてございます。

傳藏　おれの築いた方は大丈夫だらう。谷屋の側から下の橋までだ。

要三　それが二個所ばかりやられて了つたのです。何しろ千日院の森も流れて行つた程でございます。

傳藏　町人どもは何と言つてゐるか？

要三　大槻様のお指圖の石垣が崩れる程の洪水(みづ)だから、お城下三の橋とも流れ落ちるのは當り前だと申して居ります。谷屋用水は水勢の當るところでございますから、きつと石垣の底が掘られたに違ひありません。それでも夕景まで保つてゐたのは有繫お指圖の石垣だと申して居ります。

傳藏　おれはあの石垣の下六尺から積み上げて置いたのだ。しかも石垣の下地盤は石疊を敷きつめてある。それも一ト耐りもないなんて人間の仕事も隨分詰らないものだ。先刻おれが見に行つた時は恰度大橋の落ちた時だつたが、まるで箸をへし折つたやうなものだつた。おれは見張りするのが馬鹿々々しくなつて歸つたくらゐだ。

要三　とにかく今夜は徹夜ださうでございます。もう一ト雨は來るだらうと申して居ります。

傳藏　（笑ふ）水は出盛り時が過ぎたらもう二度と盛り返すことがないものだよ。雨もあがつてゐる。星が出てゐるかも知れない。

要三　（空を見る）すつかり晴れてゐるやうでございます。

傳藏　ともあれおれの築いた堤防の崩れたのは始めてだよ。水の勢ひで石が喰はれてゆくのがおれには厭な氣を起させる。それに石垣には草むらの根を仕立てて忍ばせて置いたのも、何の甲斐もなくなつたわけだ。

要三　（さかしく）固めの石が最初にゆるんだのでせう。

傳藏　（不機嫌に）その方だちにその石が分るものか？生意氣なことを言ふな。分つてゐたら當てて見ろ。

要三　（狡猾に）殿さまの固めは小さい石一つで全體が保つてゐるのだ、さうらしく言ひ觸らされて居ります。

傳藏　ふ！　そちも左う思ふのかい。

要三　殿さまのには能く小さい奴が雜つて居りますから、わたくしも左う考へて居たのです。

傳藏　お城の石を一ツ拔けば崩れるといふのは、昔からの愚說だよ。下積みの石をみんな拔き取つたつて、上の方はちやんとしてゐるんだ。

要三　では何處に固めの石があるのでございます。

傳藏　知つて要なきことだ。酒でも持つて來い。

要三　おしづをお呼びしませうか？

傳藏　（うなづく）

（要三去る。おしづ酒肴をととのへて出て來る。傳藏、默つて杯を舐める。）

傳藏　洪水で見舞ひに行くところもないか。お前の町とは反對ではあるが……。

おしづ　さきほど一寸參りましてございます。

傳藏　誰のゆるしを得て參つた。

おしづ　要三さまに申しあげ一ト走りにまゐつたのでございます。申譯ございません。

傳藏　（不愉快に）あいつは勝手なことをする。

おしづ　恐れ入ります。

傳藏　これからはおれの耳にも入れるんだ。

おしづ　はい。

要三　（姿を見せず）申しあげます。

傳藏　何だ。

要三　（出る）大聖寺在から參つたと申す若侍が一人、お目通りをねがつて居ります。夜分ゆゑ一應斷りましたけれど枉げてのお願ひでございます。

傳藏　また仕官をたのみに來たのだらう。おれは仕官の方のことは一切知らぬと云へ。一體どんな人品だ。

要三　美しい若ものでございます。お城下には一寸見られぬくらゐのちやんとした侍です。

傳藏　用件は？

要三　唯お目通りだけでございます。大變悄乎いたし居り

ます。

傳藏　通して見ろ。

（おしづ、酒肴を片づける。傳藏、行燈の火を掻く。若侍、要三に伴はれて出て來る。水際立つた若もの。）

傳藏　遠慮なく……。

若侍　夜分にあがりまして濟みません。途中洪水で手間を取り恐縮ながら夜分になりました。

傳藏　何か特別な用件でもあるのですか、それとも仕官の途ですか？

若侍　はい、仕官の途のことでおねがひに上つたのでございます。見ず知らずの厚面しさを忍んで參つたのです、お寢みのところを申譯ございません。

傳藏　（濶達に）わしは仕官の方は一切世話せぬことにしてゐるのだ。それに貴公とは初見ではあるし、貴公、わしに換つたとしても初見のものには仕官の世話はしないだらうな。

若侍　さやうにございます。ただ、お名前を慕うて上つたものでございます故、お目通りだけでも本望の至りでございます。

傳藏　（何となく若ものの誠意に動かされる）どうしてお城下へ出る氣になつたのです。田舍で武藝の道を講じて居ればいいのに。

若侍　（赧くなる）それが土地に居られぬ仕儀になつたのです。唯今、田舍からすぐにお屋敷に着いたばかりでございます。

傳藏　（若ものを凝視する）女のことからですか？

若侍　（恥ぢ入る）仰せのとほりでございます。

傳藏　わしの屋敷で草鞋を脱いだのか？　わしは親切にした覺えはないが、貴公も無謀な男だ。女の人はどうした。

若侍　町端れの茶店に待たせ置きました。殿さまにお目にかかつた上で身の落着き先を決めやうと考へてゐたのです。

傳藏　（感動して）それではまだ今宵のところは宿もないのだな。おれの屋敷へ着いたくらゐなら……。

若侍　はい。女めも心配いたし居りますが、何分にも殿さまにお目にかかつた上に致したいと思ひ居ります。

傳藏　つれあひは町人の娘か？

若侍　いいえ、主すぢのものにございます。一刻も早く立退きたいと考へ、あとさきの考へもなく參つたのでございます。

傳藏　（やさしく）それは氣の毒だ。茶店では待ちくたびれて居らう。何ならわしの屋敷に今宵のことは泊られい。その上でゆつくりと振方をつけられた方がよい。

若侍　（いそいそと）殿さまのお屋敷に泊めていただけば、

そんな仕合せはありません。女もさぞ申聞かせたら喜ぶことと思ひます。
傳藏　では女を連れて參られい。
若侍　何ともお禮の申しやうもございません。では一寸行つてまゐります。
傳藏　短慮なことを爲されたな。
若侍　おそれ入ります。
（若侍立つ。傳藏、玄關さきに送る。）
若侍　（小さな包みを置き）これをお預り下さるやうにおねがひいたします。
傳藏　（陰氣に）それはお持ちくだされい。
若侍　はい。ではすぐかへつて參るでございます。
（若侍去る。傳藏、あとを見送つてゐる。傳藏、行燈の下に坐り書見をつづけようとしてゐるが、氣が落着かない容子に見える。或るいら立たしい氣もち。）
傳藏　（ふと……）洪水で騒いでゐるのにああいふ仕合者もゐる。
（要三、出て來る。）
要三　殿さま。若侍はいかがなされたのです。
傳藏　（寂しく）鳥渡用事に行つた。また來るよ。
要三　（傳藏の顔を見詰める）へえ、何うしたのです。
傳藏　かけ落者だよ。それが見ず知らずのおれを訪ねて來たのだ。
要三　殿さまはそれをお隱まひになるのでございますか？何處のものとも知れない者どもを……。
傳藏　おれの家に泊めて遣ると言つて置いたよ。
要三　そんなことを爲されていいのですか。どこかの隱密だつたりしたらどうなさるのです。さういふ例はこれまでに能く聞いたことがございます。
傳藏　（やや不安に）おれの見るところでは、唯の駈落者にすぎないよ。聞いた風なことを言ふな。
要三　（しつこく）御前への聞えもございます故、もう一度お考へになつてはいかがでございます。今宵のことはお止りの方がよいと思はれます。どこか町の旅籠屋へ案内して明朝ゆつくりとお逢ひになつた方がよいと、要三めは考へるのでございます。殿さまにもない輕はずみなことと恐れ乍ら思ひます。
傳藏　（折れて）お前もさう思ふのかい。おれもあゝは言つたものの、これは考へものだと先刻から思うてゐるのだ。世の中は太平だが底氣味のわるい太平つゞきだからな。
要三　ではどう取計らひます。

傳藏　（困惑して）　實はいま女を拉つれに行つたのだ。間もなく來るにちがひない。斷つたら向うで困るだらうしおれも具合がわるいた。

要三　そこは要三めが取計らひます。女のつれと申してゐるとすれば、先刻、おしづが町へまゐつた時に彼の若侍と一しよだつたのを見かけたさうでございます。歩き疲れてゐるやうに見受けたやうにおしづは申してゐました。

傳藏　どんな女だ。

要三　おしづを呼びませうか。

傳藏　呼べ。

（要三、手を叩いておしづを呼ぶ。）

要三　先刻町で會つた二人づれのこと申し上げなさい。

おしづ　はい。どのやうなことでございます。

要三　どのやうなことつて、（困つた顔をする）　たとへば何んだな、（傳藏の顔を見る）

傳藏　目立つた姿に見えたかな。

おしづ　はい。おつれあひの女の方は此のあたりで見かけぬ旅姿でございました上に、ひどくお疲れで侍の方がいたはり乍ら歩いて居られました。二人ともまるで繪のやうにお美しく見えました。それにお城下へは初めてと見え町の名を尋ねながら居られましたが、長町ときいただけでお屋敷をたづね居られることはツイ氣がつかなかつたのでございます。最前、若い侍さまがお見えになつたときに、すぐあの方だと思ひ出したのでございます。ほんとに、いたいたしいお伴でございました。

要三　（突き込んで）　きれいな女かな。

おしづ　（昂奮しながら）　このあたりにああいふ美しいひとは見かけたことがございません。まだ、娘々した方でございます。それに白山近いお生れのひとのやうに、たいそうお色のぬけあがつた白いお方でございます。堅町の油屋の娘さんなぞと較べものにならぬ程でございます。

要三　そんな美人がゐるかな？　若侍はうまくやり居つた。吹けば飛ぶやうな若侍の何處がいいのだらう。

傳藏　（或る表情をする）　ばか！　そしてお前には國內のものに見えたのだな。

おしづ　それは道をたづねてゐらつしやる言葉づかひで分つたのでございます。麻の葉の紺よごしの旅かたびらに小さい杖をついて居られました。或ひは腰のつかひやうに酷くおつかれが見えたのは、通しの駕籠の呼吸が合はないので、まだふらふらして居られたのにちがひございません。へいぜいお駕籠を用ゐたこともなささうにわた

くしには思はれたのでございます。それにおいどのところが綻れて皺になつたのを見てもお駕籠に乘られたことが分つたのでございます。

傳藏　（何か感動してゐる）

要三　町はづれの茶店とは三軒茶屋のことだな。

おしづ　はい。ひと時で往き返りができるところでございます。（ふと思ひ出して）今宵はお二方ともお屋敷でお泊りでございますか。それなればわたくし萬事よろしくお取りなしいたしますでございます。（善良に）あゝいふ方のお世話をするのは、氣が晴々と浮き立つてまゐります。どのお部屋にいたしませう。要三さま、おはなれになさいまし。あそこは靜かでよろしうございます。おふとんはお客さまへ參じるものなれば、おいやを起して置かなければなりません。ほんとにわたくしお世話をいたしたうございます。

要三　（憂鬱に默つてゐる）

おしづ　それにお煙草盆の用意もございますから、どういたしたらようございませう。

要三　（睡りから醒めたやうな聲）まだ決つて居らぬのだ。かけ落者は武家では泊められぬ。

おしづ　でも殿さまのおなさけでございますもの。

要三　また呼ぶからあちらへ行け。

おしづ　はい。

（おしづ去る。）

（洪水の引いた水太鼓遠くで鳴る。）

傳藏　（何か考へ乍ら）水ももう引いたやうだな。

要三　太鼓が鳴るやうでは大丈夫でございます。それはさうとして若侍はどうしたらいいでせう。

傳藏　いま考へてゐるのだ。可哀さうだな一旦泊めてやると言つて置いて斷わるのは？

要三　武家のならひで仕方がございません。しかし要三め御用を勤めて居る間に、世間では仕合なものばかり居るやうでございます。

傳藏　おれにしても左うだよ、若侍にしても選りにも選つておれなんぞ尋ねてこなくともいいのに、——おれはまだあれらの面倒を見る粹な男ではないが、そちの言ふやうな旅籠屋へやる譯にもゆかんよ。一旦泊めてやると言つたのだ。

要三　ではどうなさるんですか？　お泊めになつて後々の咎になつても詰りますまい。人の世話面倒を見ることのお嫌ひな殿は、時々その世話をなさるのがわたくしには分りません。

傳藏　世話がいやだからするのだ。こんどは女もゐる。

要三　（考へる）それで殿のお考への程がお聞きしたいのでございます。
傳藏　困つた。
要三　見ず知らずの人間に對手になるのは、考へものでございます。
傳藏　それもさうだ。
要三　（低い聲）ことに殿はいま大切な時でございます。
傳藏　……
要三　殿にもお迷ひがございますな。加賀百二十萬石を片眼でおさへてゐらつしやる殿が、由なき駈落者に氣を奪られるなんてわたくしには怎うしても平常の殿のやうに思はれません。
傳藏　おれはその女や男に氣を奪られてゐるのではなく、そんな者がおれをたづねて身の振方を決めようといふ心がけが、おれにはこれまでになく珍らしいことに思へるんだよ。おれは人から手頼られるほどの情のある人間ぢやないのだが、自分でさう思ふだけになほ左ういふ珍らしい者の現はれたときには無下にはできない性分だよ。そりや堤防を築くときの人死なんぞは平氣で見てゐるが、あれとこれとは違ふのだ。おれは弓試しに百姓を打つたことがある。そしてその山里を後をも見ずに下りたことがある。しかしおれはそんなことも遣るが、お前のやうにあれらをいきなり斬る氣もちにはなれん。
要三　わたくしは鍬を持つてゐる百姓を打つことはできませんが、生やさしい若侍どもをちやほやして色戀の宿をしようとは思ひません。ああいふ若侍どもがゐて、要三めの色戀の分まで漁りつくしてゐるやうで、一擊くらはしても殿のやうなお心になることはできません。要三めは冷たい床の中に夏でも手足の冷えてゐるまま寢みますが、おしづの言ふ靜かなお離れで、駈落者をやすませるには要三めは何一つこれまでに仕合せになつたことがありません。
傳藏　（しみじみ）おれはああいふものは叩き斬るか、かばうてやるかの二つきりだよ。
要三　（首を上げる）あれらを叩き斬つたら嘸いい氣もちでございませうな。（此男らしい慘めな氣もち）長町の椎と築地の裏通りで譯もないことでございます。
傳藏　（冷然と要三の顏を見る）本音を吹いたな。
要三　むしやくしや致します。
傳藏　落着け。人間といふ奴はときどき氣もちの良いときには、できさうな時はいいことをして置いた方があとあとの往生にいいものだよ。お前はあいつらを斬つて置いて女の首に舌なめずりでもする氣があるのかい。
要三　（悚然と）なにを仰せられになります、

傳藏　それならそれでお前の思はくの程が分る氣がするが、しかしお前の好みはいつも左うい ふ遣口だよ。おしづを見ろ。あれらの世話をしたがつて逆上せてゐるほどの子供だが、しかしおれにも左ういふ氣がないとは言はない。唯おれはどうしていいか困つてゐるのだ。

要三　しかし間もなく女を連れて戻つて來るとすれば、何とか考へを決めて置かなければならないでせう。斯うしたらどうでせう、切角ではあるが急に取込みがあるので、今宵のところは町の旅籠屋へ參るやうに申したらいかがでございませう。

傳藏　（本意なげに）　そちがうまく取計らつてくれればいいよ。しかしおれは何か氣がすゝまない。一旦受け合つて置いて斷わることはな。

要三　（じれて）　仕方がございません。

傳藏　あれらはわしを二枚舌をつかふものだと冷笑ふかも知れない。

要三　殿には珍らしくお迷ひになりますな。高が田舍娘をつれてゐるばかりに、いつになく氣の弱いことを仰せになるのです。

傳藏　平常こんな場合にのぞんだことがないからこまるよ。女がゐなかつたらおれは一言もなく斷つてしまふ。そちにしたつて左うだらう。

要三　（默つて考へてゐる）

傳藏　（默つてゐる）

（先刻の蛾、はたはたと行燈の紙壁を打つ。ふたりともそれに見入つてゐる。）

おしづ　申しあげます。お伴れあひの女の方だけが參られました。

傳藏　女のものばかりだと……。

おしづ　はい。門前に立つてゐられたので、わたくし尋ねましたところ、先程の侍さまのおつれだつたのでございます。だいぶ前から門の前をあちゆき此方ゆき爲されてゐたのでわたくし家へお呼び入れしたのでございます。

傳藏　いま迎へに行つたのではないか？

おしづ　わたくしの考へますには、女の方はきつと待ちくたびれてお屋敷まで尋ねて來たのにちがひがございません。女のことゆゑ、ぶしつけに案内を乞ふわけにも參りませず、困じはててゐられたのでございませう。ほんとにわたくし佳い具合に見つけてよろしうございました。

傳藏　行きちがひになつたのだな。（要三を返り見る）もう向うへ侍は行き着いてゐる時分だな。

要三　もう踵はあちら向いてゐるころでございませう。

傳藏　女をこちらへ通すがよい。

おしづ　はい。蒼かんで居られますから、わたくしのお部屋にお待せしたらいかがでございませう。
要三　よけいなことを言ふな。
おしづ　(仕方なく)ではお通しいたしますでございまう。
(おしづ去る。)
(間。ふたりとも默つてゐる。)
要三　先刻仰せられたとほりにいたしませうか。
傳藏　(くろしげに)もうちつと待て。
要三　(或る表情)次へ立つてようございますか。
傳藏　しばらく坐つて居れ。
要三　はい。
(おしづに伴はれた女入り來る。)
(まだ娘の境にゐる女。類なき美貌。)
傳藏　近く寄られい。行きちがひになられたと見えるな。
女　はい。
傳藏　今宵お泊め申すことに傳へて置いたが……(言葉を濁す)
女　(羞かしさを忘れたる嬉悦の表情)見ず知らずのものに色々ありがたうございます。
傳藏　よ程、お疲れと見える。くつろがれい。

女　はい。
傳藏　(その美貌に壓せられる)名は何と申されます。
女　吉野と申します。
傳藏　武家のお育ちと失禮ながらお察しするが……。
女　恐れ入ります。
傳藏　先程、お伴れに御事情いろいろと承り申したが、言はゞ短慮のことであつた。しかし今更ら何とも言ふこともないが……。
女　(淋くなる)この後ともよろしくおねがひいたします。
(要三、いらいらする。)
要三　御用がございましたらお呼びくださいませ。
傳藏　(うなづく)
(要三去る。)
傳藏　(理由なき焦燥)おいくつになられるか。
女　(うつ向く)はい。
傳藏　(きまり惡げにする)これは失禮なことをおたづね申した。
女　いいえ。(依然うつ向いたままでゐる)
(傳藏、言葉絶えたまま焦る。)

傳藏　城下は初めてと見えますな。道をたづね歩かれたさうであるが、――

女　はい。はじめてでございます。

傳藏　このあたり夜分はさびしいのに、よく夜道をなされた。

女　他に行くところとてなく懸命になつて參りました。

傳藏　勝氣（けなげ）に思ひます。

（傳藏、默然として苦しむ。）

（手を叩く。おしづ出づ。）

傳藏　次の部屋でお待たせして置くやうにして置きなさい此處は窮屈であらうから。

女　おそれ入ります。

おしづ　（いそいそと）はい。ではおくたびれでございませうから、しばし呼吸（いき）をおつきなされませ。

女　ありがたうございます。

（女、おしづ去る。）

（傳藏、默然として坐つてゐる。）

（三度び蛾、あんどんの紙に觸る。傳藏、やや粗暴に蛾を打つ。蛾落つ。）

（間。）

傳藏　（手を叩く）

おしづ　はい。

傳藏　客人は何をして居られるか？

おしづ　わたくしの鏡臺をおかりなさいまして身じまひをしてゐらつしやいます。わたし、髮のお手づたひをしてあげましたが、ふさふさした心もちのよい髮でございました。

傳藏　（默つてゐる）

おしづ　それに伴れの侍の方が遲いので、ちよつとした物音にもお歸へりになつたのではないかと申されます。ああいふお優しい氣もちになられるものでございませうか？

傳藏　おれにはよく分らない。そちには分るだらう。

おしづ　わたくしにも分りません。たゞ、あまりにお氣つかひなされるので、わたくし一寸見にまゐりたいと思ひますがいかゞでございませうか。夜道でお城下は初めてのやうでございますから、提灯（あかり）をつけてまゐりたいと思ひ居ります。

傳藏　迎へには及ぶまい。女でさへ尋ねて來たくらゐだから、いくら田舍者でも大丈夫だらう。

おしづ　ではそのままに致し置きます。

傳藏　それがよい。

おしづ　もう御用はございませんか。
傳藏　女は何かおれのことをそちに言つてゐたか。
おしづ　殿さまのおなさけのあついことを喜んで居られました。わたくしたちは仕合者だと申されて居られました。
傳藏　(冷笑ふ)　おれはそんな親切ものぢやないよ。
おしづ　ではお離れの用意をぢいやに申しつけますでございます。
傳藏　(あいまいに)　よからう。
おしづ　ごめんくださいまし。
(おしづ去る。)
(傳藏、默然として坐つてゐる。)
(女の類なき美貌、たよりなげに眼にうかぶ。傳藏それを見入りながらその美貌に惹き入れられる。女のかげ障子戸のそとに消ゆ。)
(雨、落つ。)
傳藏　(手を叩く)　要三はいかが致した。
おしづ　先刻、裏口から出られたきりまだお歸へりになりません。
傳藏　先程とは？
おしづ　女のおつれがお見えになつてからでございます。別にどこへ參るといふことは申されませんでした。

傳藏　(愕然として蒼白になる)　腰のものは？
おしづ　御供の柄袋のついたのをお持ちになりました。
傳藏　あれを指して行つたか？
おしづ　(おづおづ)　どうなさいましたのでございます。
傳藏　(烈しい感動をおさへ乍ら)　いや何でもない。用はないからあちらへ行つて居れ。
おしづ　はい。
(おしづ去らんとす。)
傳藏　ちよつと待て。
おしづ　(立止る)　はい。
傳藏　女は何をして居られるか。
おしづ　先刻からお待ちつかれて居られます。
傳藏　(何となく笑みを漏らす。或る慘忍の表情)　さうか。
おしづ　それにしても遲いことでございます。
傳藏　夜道で石ころの多いのと不案内の爲めであらう。
おしづ　氣がかりのことでございます。
傳藏　……
(おしづ去る。)
(傳藏、心亂れたさまで立ち或ひは坐す。ふと思ひついて押入れの中をさぐる。色々の長刀を鑑る。)
傳藏　こんなときは長船でも鑑るといいかも知れない。
(傳藏、行燈のそばで長船を拔き眺める。しかし心は

それに添はない。長船を投げ出す。)

傳藏　何時ものやうに燒きの匂ひもして來ない。

(間。)

傳藏　(手を叩く)

(要三出てくる。殺伐なる風貌に變つてゐる。)

要三　何か御用でございますか。(長船を見る)

傳藏　(殺氣を帶ぶ)　いづれへ參つて居つた。

要三　(雨にぬれてゐる)　どこへも參りませぬ。下屋敷御門の內に煙草を喫んで居りました。

傳藏　うそを吐け。どこへも參らぬなら腰のものを見せろ。

要三　なぜ、そのやうに仰せになられます。帶刀をお目にかけるやうの事は要三は致しません。

傳藏　(かつとする)　見せろ。

要三　はい。

(要三、次の間の脇ざしを持つて來る、傳藏、脇ざしを拔く。驚く。)

傳藏　やつたな。

要三　(うつ向く)

傳藏　まさかと思つてゐたが矢張りやつたのだ。(傳藏、がつくりと坐る)　早まつたことをした。

要三　生きてゐても甲斐のない奴にございます。

傳藏　女を殘して置いてどうする氣だ。何といふことをしたのだ。やきもちもいい加減にしろ。

要三　(明瞭に)　そればかりではございません。殿の目を見ることが要三めを躁り立てたのでございます。

傳藏　おれの目付がそちに何かを言ひ付けたといふのか？

要三　(うつ向く)

傳藏　そしてあの女が殘つてゐて素町人の娘のやうにおれの言ひなりになると思ふのか？　あの女を見ろ。

要三　(傳藏を凝視す)

傳藏　(要三を凝視す。或る不明瞭なる感情が混み合ふ)

傳藏　おれはあの女が尋常なみに從ふとは思はない。おれはそれをちやんと見ぬいてゐるのだ。

要三　なみならぬ女のやうに思はれます。

傳藏　(暗然とする)　あの女だけを殘して置くわけに行かない。

要三　(うつ向く)

傳藏　おしづを外へ出した方がいいだらう。

要三　はい。

(手を叩く。おしづ出て來る。)

おしづ　何御用でございます。
要三　若侍を迎へに行つてくるといい。あまり遲いやうだ。
おしづ　はい。あの方もそのやうに申されて居ります。では、ひと走りに行つて參じます。（いそいそ立つ）
（要三。おしづを呼び止める。）
要三　はしたの御用でお屋敷のお提灯はならぬぞ。
おしづ　里方のあかしを點してまゐります。
（おしづ去る。）
（雨、次第にはげしくなる。）
要三　（去らんとす）
傳藏　（苦しげに呆ける）雨が段々烈しくなつたな。
要三　また水が出るかも知れません。この樣子だと……
傳藏　お前は平氣であの女を形づけられるのかい。
要三　仕方がございません。このままで夜が明けてしまつたら殿もおこまりでございませう。（傳藏を見る。或る皮肉なる表情）
傳藏　それもみなお前がやつたからだ。お前さへさし控へてゐたらこのまま穩やかに夜が明けるのだ。
要三　（益々皮肉に）では要三めが自分だけの心で輕はずみをしたことになりますな。（笑ふ）

傳藏　（にくにくしげに）お前のやきもちでなければ忠義振りだよ。
要三　そしてあの女を形づけるのもお止めにもなりませんね。（喰ひ入るごとく凝視す）
傳藏　（くるしく）お前の好きなやうにするといいよ。
要三　（投げ出し……）まだ要三めは柔らかい女のうなじに刄を加へたことがございませんが、要三め永い間のひとり暮しにはよくそんなことを考へたものでございます。これは要三め一生のねがひだつたかも知れません。それが今夜叶つたのかも知れません。（陰くものすごく聲なき笑を漏らす）
傳藏　たはけたことを言はないで、早く行くがよい。お前の一生のねがひは嘸お前を快い心もちにするだらう。
要三　では暫らくの間に形をつけてまゐります。
（要三、去らんとす。）
（傳藏、しづかに背後より要三を刺す。そして茫然として立つ。）
傳藏　（死體を片づける）
（女の美貌、再び傳藏の何ものかを壓す。）
（傳藏、その姿を見つけたまま、うつとりする。）

傳藏　（やがて……）旅の方、旅の方。

（間。）

傳藏　ちとお話にまゐられい。

女のこゑ　はい。

（傳藏、むしろ痴呆的微笑のまゝ、女の出て來るのを待つ。）

吉田紘二郎篇

西郷吉之助（五幕六場）

第一幕

時　文久二年二月十五日の午後

場所　薩南大島龍郷村海岸丘の上

登場人物

流人　菊池源吾　西郷隆盛（三十六歲）
島の與人　劉佐民の娘　アイガナ（十九歲）
島の與人　劉佐民
同　妻
島の大男　川口三五郎
薩藩の使者　伊集院五郎
同　柴山武左衞門
同　從僕　數名
島の役人　數名
島の住持　白夢和尚
島の子供等

茅葺きの小屋、やゝ上手に片寄りてあり。八疊の座敷、正面下手とも濡れ緣にてめぐらす。正面一間の床の間には粗末なる懸軸。小さき位牌一つ。獵銃、刀架に懸けたる大刀等。左手の濡れ緣には軒より網、釣具、魚籠、簑などが懸けてある。正面座敷に隣りて上手に茶の間及び勝手などある意。座敷と茶の間との境には板戸あり。床の間と板戸の間には一間の押入。板戸には羅紗のマントが無雜作に引つ懸けてある。すべて流人の閑居にふさはしく簡素なる體。

上手及び下手一面に高き椿の木立。椿の幹の白きと花の紅きが殊に美しき對照をなして見える。地上一面に椿が落ち重なつてゐる。上手に芭蕉、棕櫚、竹など亞熱帶地らしき植物が繁り居る。雲雀及び鶯の聲のどかに聞ゆ。

椿の木立の後は切り岸になりて、直ぐ下は濱になつてゐる。下手、椿の木立の下から海岸に通ずる徑あり。椿の木立の間から、遠き島々など見ゆ。靜かな濱の音、七八歲の島の子二人、椿の下にて、無言のまゝ落ちたる椿の花を拾つては糸に刺してゐる。すでに二尺ばかりの長さに花を刺してゐる。椿の花二つ三つはたと落つ。

鶯啼く。
島の男の子等六七人下手椿の木立の下より騒ぎながら登場。二人の女の子を見つける。

男の子一　やあ、あまつちよらがあんなことしてるぞう。

男の子二、三、四　やあい、やあい……。

（みなにて囃し立て、落ちたる椿を投げかける。女の子二人、上手椿の中に隠れる。）

男の子五　さあ、こゝでいつものやうに相撲を取らう。先生さまいつものやうに來て相撲の手数へてくださるといいがのう。

男の子六　先生さまさつき、お寺の方へ行かつしたのを、おら、濱で見た。今に歸つて來なさるだらうよ。

男の子一　それまでおらたちこゝで相撲取つてゐようよ。

男の子等　さうだ／＼。

（椿の下にて子供等相撲を取る。川口三五郎、犬を連れ、火縄銃を持ち、狩仕度にて登場。子供等の相撲を見る。）

男の子二　やあ、三五郎だ三五郎だ。

三五郎　何だ三五郎だい。なまいきな、小童のくせに。

男の子三　威張るない、威張るない。そんな大きな態をしてゐても、こなひだは先生に芋の子のやうに、づんでんころりと投げられたではないか。

他の男の子等　さうだ／＼。やあい大男の三五郎、三五郎の芋の子やあい。

三五郎　ハツハツハツ、悪い奴らぢや。おれが敗けた敗けた。勘辨してくれ。

男の子等　そんならゆるす。威張るない。わあい／＼。

三五郎　いま／＼しい餓鬼らぢやなあハツハツハツ。

アイガナ　（板戸を明けて濡れ縁に走り出て來る。色白き美しき女。産後の面やつれして見ゆ）これ／＼みんないゝ子ぢや、家の坊やがいまねんねしたばかりぢやで、ちつとの間静かにしてあつちにいて遊んでくだされ。先生が戻つておいでなされたら、また何ぞよいおみやげがありませうよ。

男の子五　先生さまがお歸りになつたらわしたちと相撲取つてくださるかなあ。

アイガナ　あゝ取つてくださるともホヽヽホ……。

男の子等　ぢやあ、あつちに行つて遊んで來よう。

（子供等下手椿の下に退場。）

三五郎　あゝ、奥さま、よいお天氣でございます。ずつと引きつゞきおからだもお宜しいさうで結構でございます。先生は今日はお留守でございますかい？

アイガナ　ありがたうございます。まあ三五郎さんとしたことが、今日は十五日、月照上人さまの御命日ではござ

いませんか。

三五郎　いや、なるほど月照上人さまの御命日、それではまたお寺詣りにおいでなされたのでございますか。

アイガナ　雨が降らうと風が吹かうと、この島においでされてから、たゞの一度でも御命日にお寺詣りを怠りなされたことはありませぬ。

三五郎　先生はまことに御殊勝なことで……。

アイガナ　このごろこそ、坊もできたりしましたので（ちよつと羞恥の體）あきらめておいでなさるやうですが、ひところはいつ自殺をなさるかも知れないと思ひました。家の父さんが一度は刀をもぎ取つてやつと、それで自殺を思ひ止まりになりました。

三五郎　さうだつたさうでございますな。何でも月のよい晩だつたと申すぢやありませんか。

アイガナ　お月見の晩でございました。こゝの緣端であそこの海をごらんになつておいでゝしたが、だしぬけに床の間の刀をお抜きなされて。

三五郎　おう／＼。（不圖人聲に耳を傾け）いや先生のお噂をいたしてゐましたら、どうやらあの濱を歩いておいでのは先生らしうございます。和尚さまと濱で話をしておいでなさるやうぢや。

アイガナ　あゝたしかにさうでございます。

三五郎　いや、實はな奥さま、あの岬の棕櫚林の横でございますよ。二三日兎が大分寄つて來て、畑を荒してゐますので、先生をお誘ひしようと思ひましたが、今日は御命日では、飛んだ悪い日に伺ひました。まあ先生に叱られませぬうちにハッハッハッ……どうぞ宜しく仰つしやつて下さい。（三五郎上手へ退場）

アイガナ　（柱に凭りて下手を眺める）どうなされたのか。濱のところで、立ちどまつて和尚さまと何かまたお話なされてゐるやうぢや。このごろは旦那さまは、またどうかすると、わしは尙一度だけは國に歸らねばならぬかも知れぬとばかり仰つしやるが、もし旦那さまとお別れしなければならぬのならわたしやどうしたら宜からう。日でもお別れすることはわたしにはできぬに。それかと言うて、せつかくあれほどの御器量人を見す／＼わたし一人の女のために、この島に埋めてしまふのもお氣の毒だし……一層わたしが死んでしまふか（板戸の方を振りかへる）……それもならぬし。どうか十年でも二十年でも御赦免の使などが來ませぬやうに。（手を合せて拜む。板戸の彼方にて子供の泣き聲。アイガナ急ぎ板戸の中に退場）

（舞臺しばらく空虛。しきりに鶯の聲。）

（西郷隆盛下手より腕を組み、俯向き勝にて登場。袴

を着け、小刀を帯し、藁草履。巨眼巨軀の偉丈夫。）

隆盛　（椿の下に立ちとまり、落ちたる椿を見る）昨夜の嵐でよう椿が落ちた。（鶯の聲を聽く）あゝすつかり春になつた。長閑なものぢや。（濡れ緣に近寄る）いかにも春ぢや、あれが薩摩の山でもあらうか。あれが大隅の見當でもあらうか。山も海もすつかり霞んでしまうた。

アイガナ　（茶を運んで登場）お歸りなさいまし。

隆盛　小倍たちは眠つてゐるかのう、おあい！

アイガナ　よう二人とも眠つてばかりをります。

隆盛　さうか。（いかにもうれしさうな表情）さう寢てもいゝものかのう。どれ一つ……。（板戸の方へはいる）

アイガナ　旦那さまさう顏をおいぢりになつてはいけませぬ、眼をさましますから。まだお抱きになつてはいけません……。

隆盛　あゝまだ抱いてはいけぬか。

アイガナ　はい。

隆盛　おつ母さんがさう言つてゐたのう、坊やのお臍が落ちるまではまだ抱いてはいけないつてハツハツハツ……。

アイガナ　はい。（かろき羞恥）

隆盛　まだ臍が落ちぬかハツハツハツ。坊主の方もよく寢てをるなあ。わるさばかりしよるが。坊主の眠つた顏はいとしいのうハツハツハツ……。

アイガナ　さう、そこでお笑ひなさいますと坊が眼をさまします。

隆盛　まあさう言ふな。（板戸の中より出て來る）あんまり可愛いものだからのうハツハツ……お前はもう起きてよいのか。何でも二十一日はいやでも寢てゐなければならぬといふぢやないか。（緣端へ坐る）

アイガナ　それは城下あたりの身分ある方々のお娘たちのことでございませう。わたくしらのやうな島の女たちはそのやうなことは……。

隆盛　また島の女、島の女といふ。

アイガナ　でも、島の女なればこそ、お城下や、都の美しい女たちに見かへられてしまふのでございます。

隆盛　何をいふ、ばかな。またそのやうなことを。

アイガナ　でも旦那さまにはお城下にも立派な奧樣がきつとお待ちでございませうし、都では都で……。

隆盛　わしはまつたくまだ獨身ぢや。鹿兒島にも、都にも妻も何もない。わしも男ぢや。そりや、都では女を呼んだこともある。しかしわしには女に魂を奪はるゝやうな暇はなかつた。二十二で殿樣のお側に召し使はるゝやうになつてから今日まで、わしの頭にはいつもたゞ恐れ多いことだが、主上と、殿樣と日本といふものばかりがあつた。都で遊んだ女などゝいふものは、ほんのその日そ

の場かぎりの戯れであつた。その無風流なわしがこの島に流されて、三十三歳でこの胸が痛むほど、心の底から初めて女に惚れるといふことを知つたのぢやハツハツハツ……。

アイガナ　まあ旦那さまは……。

隆盛　いやまつたくぢや。嘘は言はぬ。大島に流さるゝまでのわしにとつては天下、國家がわしの戀人であつた。わしはいつでも何事に對しても生命を賭けてかゝらねば氣がすまぬ性分ぢや。匹夫の勇とそしらるゝかも知れぬが、昔から薩摩武士には一人の少年のために命を投げた男もあつた。そこが薩摩隼人の隼人たるところかも知れぬ。わしの體中にも同じ血が燃えてゐるやうぢや。薩摩隼人には名も入らぬ。金も入らぬ。命も入らぬ。この島に流されてから、初めて天下國家にもまさるものを見出した。お前のその美しい心ぢやハツハツハツ……。

アイガナ　まあ旦那さまの……。

隆盛　いや、まつたくだ。わしはお前がはじめてこの家に手傳ひに來てくれた日から、お前が好きであつた。お前が二日來てくれ、三日來てくれるにつれてわしはお前が好きでたまらなくなつた。すまないことだと思うたがわしは月照上人の命日にお寺に通ふ路すがらさへお前のことを考へてゐた。恥づかしいことだが、わしはあの濱を歩きながらお前の名をあの濱の砂の上に幾度書いたか知れぬハツハツハツ……。

アイガナ　………。

隆盛　もしお前がわしのところに來てくれなかつたら、わしはお前の親父どのと果し合ひしてもお前を奪うたかも知れぬ。

アイガナ　まあ……。

隆盛　ハツハツハツ……驚かぬでもいゝ。まあたとへばだ。わしのその時の心持ちを言つて見ればだ。

アイガナ　でも旦那さまはもうこのごろでは、わたくしのことなんかどうでも宜しいのでございませう。また天下とやら國家とやら、それの方が大事になつて來たのでございませう。

隆盛　どうしてその可愛いゝ美しいお前を忘れられようぞ。天下、國家といへばいかにも立派だが、そこにはなあ、生命の欲しい奴、名や、金の欲しい奴、權勢の欲しい奴ばかりがゐる。一片の肉をあさる野良犬の群のやうな男たちばかりが、やれ天下、やれ國家、と大きな聲で叫んでゐる。尊王といひ、攘夷といひいづれ皆腐肉をあさる犬の群だ。わしは思つたばかりでもいやだ。二度とあのやうな世界へ還つて行かうとは思はぬ。安心せえ。

アイガナ　（茶をいれかへてすゝめる）そんならほんにう

れしうございますが……。
隆盛　どうしてお前のやうな美しい女を捨てゝ行かれようぞ。
アイガナ　ほんに、わたしを捨てゝお出でなされてはいやでございます。
隆盛　これ見い、あの島の影を、あの海を。すつかり春になつたのう。大方あれが九州の山でゝもあらうか。まるで小ひさな一片の雲のやうではないか。あの小ひさな世界でやれ尊王ぢや、やれ倒幕ぢやと、我慾に驅られ、憤怒に燃え、修羅の巷を駈けめぐつてゐる人たちの姿があさましいではないか。これ、春の日はあのやうに照り、春の風はこのやうに吹くに……。（雲雀の聲しきりに。沈默）
アイガナ　まだ、月照さまの御命日でございますのに朝からあたゝかい御飯も上げてをりませぬ。
隆盛　さうだつたのう。わしらだけは朝から、冷飯ですませたが、和尚にはそれではすむまい。あたゝかい飯でも焚いて上げてくれ。
アイガナ　ではさういたしませう。（板戸の中へ退場。隆盛床の間の位牌の前に坐り、瞑目する）
（鳥の聲のどかに、波の音聞ゆ。）
アイガナ　（登場）旦那さま大變でございます。
隆盛　何うした？
アイガナ　お米がもう一粒もございません。
隆盛　與人殿からのお米はまだ來てゐなかつたのか？
アイガナ　いえ、いつもの御扶持米はちやんと十日分だけ來てゐたのでございますが、昨日も一昨日もあの……。
隆盛　あゝ、あの流人の仲間どもが來て食つてしまつたのか、それでもう一粒もないのかハツハツハツ……。
アイガナ　はい。
隆盛　今度はいつ、お扶持米をいたゞくことになつてゐるのぢや。
アイガナ　十七日でございます。
隆盛　では十七日まで斷食しよう。
アイガナ　旦那さまはいつでも、あの無遠慮な流人たちにお扶持米を喰べ荒らされてしまつて、御自分では二日も三日も斷食なさるが、わたくしは齒痒うてなりませぬ。
隆盛　いや、さうではない。同じ流人でもわしはまだ殿樣のおなさけで、勿體なくもこの流人に年に十八俵といふお扶持米をいたゞいてをるが、あの仲間の男たちは一合の米もいたゞいてをらぬのぢや。元は見ず知らずの男でも、かうやつて一つ島に流されて來るのはよく／＼の縁ぢや。まあわしが持つてゐるものは、あの男たちに食はしてやれ。わしは二日や三日食はぬところで死にもしま

い。實際わしは斬罪にも當る大罪を犯した男、一粒の米でも殿様から頂戴するのは涙がこぼれるやうだ。（默然とする）

アイガナ　でも旦那さま……。

隆盛　さうだつた。お前はそれでは乳が止まつてしまふであらう。それは可哀さうなことをしよつた。

アイガナ　わたくし、一走り母の家まで走つてまゐりませう。

隆盛　まだお前、そのからだで、わしが行つて來る。わしはともかく、お前や子供らが可哀さうだ。

アイガナ　旦那さまが、……飛んでもない。では裏に子供たちが遊んでゐるやうでございますから、子供たちに頼みませう。（板戸の中に退場）

（雲雀の聲遠く聞ゆ。夕暮れの色かすかに迫る。間。）

隆盛（濡れ緣の端に立ち、沖を眺む）どうも氣が鬱いでならぬ。（床の間の大刀に目をつけ刀架から大刀を手に取る。急いで元の場所に置く。再び誘惑さるゝかのやうに大刀を手に取る）初めて御先代さまのお伴をして江戸に上つた時、越前侯へお使した折、御先代さまから拜領いたしたのであつた。昔を思ひ出すやうな物はみな捨てたがこればかりは捨て得なかつた。久しく手にもしなかつたが、（鞘を拂ひ刀身を見る）形といひ、香といひ亂燒といひ……（次第に引き付けらるゝやうに見つめる）まるで秋の大空のやうな……明月のやうなこの心。うゝむ。かう、この刀を見つめてゐるとわしの心の邪念も鬱結も目の前の雲のやうに消えてしまふ。うむ、さうであつた御先代さまのお伴をして江戸からの歸りに中村（後に桐野）や篠原等と一緒にこの刀で京の鴨川べりで關東の奴等を無二無三に切りまくつたのは。あの時はまだわしも血氣さかりであつたが、うむ（突然跣足にて庭に飛び下りやにはに大刀を振る）あゝ、宜い氣持ぢや、わしの腕もまだなか〳〵鈍つてはをらぬやうぢや。しかしもうあのやうな全身の血が沸き立つやうな機會はわしの一生に二度とは來まい。有村治左衞門の奴うまいことをしよつたわい。もしわしが江戸にゐたら井伊大老の首は人手には渡さなかつたがなあ。杉山彌一郎や佐野竹之助の奴等さぞ勇ましう戰うたであらう。思うたゞけでも腕が鳴る。あゝこの腕が……（いま〳〵しさうにそこいらを歩き、大刀を揮ふ）聽けば京方と關東との間にも今にも合戰が始まらうも知れぬとのこと。この腕で、幕府の奴等を切つて〳〵切りまくつたらあゝどんなにかこの胸が空からに。わしは中村だの篠原だの大久保だのあいつらが羨ましい。わし一人がこんな島で、あゝこの腕が……（緣に腰かける。嬰兒の泣き聲聞ゆ）だが待てよ。あれも、こ

れもみな迷ひか。（刀を鞘に入れ足を拭いて縁に上り、刀を刀架に懸ける。嬰兒の泣き聲に耳を傾ける。風出で、波の音高まる。海の方を見つめる。暮色迫り、十五夜の月水平線の上に昇る）あゝあの月、あの滿月が、あの……
……。（縁の上を走る）浪の上に碎くる月の影が、今夜もあれあのやうな黄金の波が薩摩潟までもつゞいてをる。
……あの夜も雲一つなかつた。借屋の裏から船を裝うて、和尚と平野二郎とそれに小者一人……わしはあの夜いやでも和尚を殺さねばならなかつた。藩の重役等はわしに上人を連れて法華獄に行けと言うた。彼等は、あの日向境で和尚を切るつもりだつたのだ。都からわざ／＼お連れした和尚をどうしてわしの手で殺すことができよう。わしはともかく船に乘つて逃かれるだけは和尚と一緒に逃がれて見ようと思うたが、所詮免れる術はないと知つたので、船もひそかに御先代さまのお船をお借り申した。わしは船窓に書かれたあの草花の模樣まではつきり覺えてゐる。わしは和尚と一緒に一つの褥に入るつもりで船に乘つた。わしはどうしても和尚一人を海の底にやるには忍びなかつたので、一緒に抱き合うて飛び込んだが、水音を聽いて平野が馳けつけた。帆をかけてゐるので船は矢のやうに走る。待て、舟を廻せと命じても船は止まらぬ。平野は一刀の下に帆綱を切る。抱き合うた二人の死骸が引き上げられた。わしは何でその時死なゝかつたのか。和尚一人を殺してわしはかうおめ／＼と生きながらへて、いつまでこの月を見るのか。……それにしても抱き合うて飛び込んだ男の一人が死に、一人が生きのこるとは……人間の運命ほどわからぬものはない。死ぬるも、生きのこるもみな天運のまゝか。明日のこの身がどうなるものかそれも知れぬ……。

アイガナ（板戸の奥よりあわたゞしく息苦しさうにして）旦那さま大變でございます。（泣き伏す）

隆盛　どうしたんぢや。體の具合でも惡くなつたのか。冷てはいけぬ。

アイガナ　いえ／＼、かね／＼わたくしが案じてをりましたことが……。

隆盛　かね／＼案じてゐたことゝは？

アイガナ　薩摩からの御使者がお見えになりました。

隆盛　えッ！　薩摩からの使者ソ！

劉佐民の妻（上手より走り來り縁側にしやがむ）旦那さま、たうとう大變なことになりました。（泣く）

隆盛　して、それは不吉の使者か、喜びの使者か？（刀架より刀を掴み取り、きつとなる）

劉佐民の妻　何のための御使者でございますやら。それはまだ……。

隆盛　ふうむ。大かたわしに詰め腹でも切らせろつもりであらうハツハツハツ……。（刀を握り替へ決心の體）

劉佐民（上手より走り込み）詰め腹どころではございませぬ。旦那さまにとりましてはこの上もないお芽出度い御使者でございます。（娘の方を向き、涙を拭く）

隆盛　なに、わしには芽出度い使者と？

劉佐民　はい、御赦免の御使者らしうございます。

隆盛　えッ！　御赦免の！　眞實か！（板戸の中に駈け入り拜領の袷をかゝへて出づ）もう直ぐこれへ見えるか御使者は？

劉佐民　はい、もう直きそこの濱を歩いておいでになります。

隆盛　あゝ、もうそこの濱まで見えたか。（隆盛狼狽氣味にて部屋の中を探しつゝ歩きまはる）あゝこれおあいあの何をどうした？

アイガナ　旦那さま何でございます！

隆盛　あのそれ、御拜領の袷だッ！

劉佐民の妻　旦那さま、あなたさつきから腋の下にお抱へになつておいでゝございます。

隆盛　ハツハツハツ……これは、成る程。（板戸の中に駈け入る。アイガナつゞいて入る）

（薩摩の使者伊集院、柴山、僕數人、提灯を持ち、島役人の案内にて下手より登場。）

隆盛（服を改め板戸の中より出づ。アイガナつゞいて出づ）やあ、お珍らしう、伊集院殿、柴山殿。船の上が難儀でござりましたらう。ハツハツハツ……。

伊集院　先生にも御機嫌克く。

柴山　わたくし等も何よりうれしう存じます。

隆盛　して、先づ何より。

伊集院　殿様よりの御言葉をおつたへいたします。（二人座敷正面に坐る）

隆盛（にぢりより、輕く頭を下ぐ）

伊集院　この度遠島の儀御赦免なされ、即刻歸參致さるべしとの仰せでございます。

隆盛（頭を下げたるまゝにて暫く無言）

柴山　先生にもさぞ御滿足でございませう。わたくし等もこんなにうれしいことはございません。（柴山、伊集院二人濡れ緣の方へ退く）

隆盛（なほ無言。そつと涙を拭く）

伊集院　先生の御心中お察しいたします。

柴山　では、先生お別れを惜まるゝ方々もおいでになるでございませうが、國許にても殿様始め大久保、小松、中山の重役方も一刻を爭ふ目下の狀態であれば、十七日までには是非とも先生をお連れ申せとのお仰せでございま

したが、生憎出船以來暴風雨つゞきのため二日も遅れましてこの島へ着きましたやうな次第。甚だお氣の毒でございますが即刻お立ちを……。

隆盛　（頭を上げたまゝ呆然と正面を見つめる。月朧にかすむ）

伊集院　先生、いかゞでございます。殿様はじめ重役方も、この際先生をお呼び申さんでは、どうしても……。

隆盛　（ぢつと大きな眼にて伊集院を見つめる。伊集院黙り込む。白夢和尚上手の木蔭に佇む）

隆盛　だまらつしやい。わしは今になつて大久保や小松等の計らひで御赦免にあづからうとは思はぬ。わしは鹿兒島に歸るのはいやぢやというて下され。

伊集院　でも、殿様の仰せでございます。

隆盛　二言目には殿様をかつぎ出す。そのやうな世界はもう飽きましたのぢや。わしはこの大島が一番好きになりましたのぢや。わしにはもう可愛いゝ妻も出來た。子供も出來た。（板戸の方を見る）この島で芋でも拵へてをるのが一番わしには似つかはしい仕事でござるのぢや。わしにしてもまだ若い、この島に來てからも、時には一度國へ歸つて乾坤一擲の大事を計畫して見ようと思うたこともある。現に、つい今しがたであつた。わしはそのやうなことを夢みてゐた。しかしあんたらが見えて、殿だの、重役だのといふ言葉を頭から聽かされると、わしはつくづくそのやうな窮屈な世界がいやになりました。もうわしは昔の西郷吉之助ぢやない。大島のたゞの百姓ぢや。もうそのやうな窮屈な世界はいやでござる。

（柴山、伊集院二人、困り果てた顔をする。上手の木立より島の寺の住職白夢和尚登場。鬚悉く白し。）

白夢　（緣の下に立つたまゝ會釋し、しばらく月を眺めてゐる）あゝ先生、先刻は失禮いたしました。

隆盛　あゝこれはようこそ。こちらへお上り下さい。

白夢　あまり月がようございますのでつい月に浮かれてハツハツハツ……春の夜の月もまた格別なものでございますのう。

隆盛　和尚、よいところへおいでゝございました。恰度鹿兒島から友人等が訪ねてくれましたので一獻掬まうと思つてゐたところでございます。これおあいお客さまへ。

（アイガナ退場。）

白夢　（緣に腰を卸し月を眺め入る）　先生、まことによい月ではございませぬか。

隆盛　（緣に近づく）　まことによい月でございます。（アイガナ酒を持ち來る）まあ一獻。

白夢　ありがたうございます。（杯をいたゞく）　まづ先生も。

隆盛　伊集院殿、柴山殿もどうぞこちらへ。これはこの島のお住持白夢と申されるお上人……（伊集院、柴山挨拶をする）さあ、あんた方もお疲れであつたらうが先づ一獻……。

伊集院　先生、でも、わたくし等は殿様のお使ひにまゐりましたので、先づ先生の御返事を……。

隆盛　返事は返事だ。酒なくしてこの良夜を奈何せんだ、ハツハツハツ……。（人々しばらく杯を廻し飲む）

白夢　先生、あなたが月照上人と一緒に薩摩潟に身をお投げなされたのも、このやうな滿月の夜であつたと承りますが。

隆盛　十一月の滿月の夜でございました。（暗然とする）

白夢　その後先生には一日も上人のことをお忘れなきやうにお見受けいたしますが。

隆盛　あの時武士らしく刀を持つて相果てますれば、生き恥をさらすこともなかつたと思ひますが、和尚に刀を當てますのも心苦しく、ついあのやうなことになつて、まことにお恥かしい次第で……。

白夢　では、先生は今でも上人のためならば、喜んで何も彼も打ち捨てなさる御覺悟でございませうな。

隆盛　仰しやるまでもござりませぬ。

白夢　では申しませう。拙僧のやうな老人か斯樣なことを申し上ぐるもいかゞでございますがこの頃の江戸幕府を何とお考でございます。違勅また違勅の罪を犯して憚ることなく、傍若無人、惡逆無道。曩に井伊大老が櫻田門外に刺されましたも唯天罰の然らしむるところ。幕府の威勢日に墜ちまするもみな天の配劑。今若しこゝに薩摩を盟主とし、九州四國の雄藩を集め勤王の軍を起しまするならば、一擧にして幕府を倒し、新らしい日本を生み出すことは日を見るより明かでございます。ところで、その四國九州の各藩を打つて一丸とするには、こゝにただ一つの土臺石がなければならぬ。

隆盛　土臺石？

白夢　いかにも。二百五十年ばら／＼に裂き碎かれてをつた各藩の力を一つに打ち堅むるための鍵と申さうか、土臺石と申さうか、それがなくてはこの乾坤一擲の大事業はできませぬ。

隆盛　…………。

白夢　その土臺石は先生でなくて、誰が他に日本國中にありませう。

（柴山、伊集院うなづいて見せる。）

先生がたゞ一人、都の眞ん中へお出かけになるばかりで、長州、土州、肥州……すべての雄藩、日本國中の人々の心は先生を中心に動いて參りませう。恰かも低きに隨ふ

やうに。
隆盛 …………。
白夢 先生御一人を中心として、今日本は新らしい世界を生み出すために、苦しんでをるのでございます。動き初めたのでございます。今は、この日本の片隅に安逸を貪つておいでなさる場合ではございません。先生はあの日本中の人々の呻き聲をお聞きにはなりませぬか。日本中がたゞ先生一人をお待ちいたしてをるのでございます。先生は日本の眞ん中にお出でなされて日本開闢以來の大博奕、乾坤一擲の大事業を成就なさらねばなりませぬ。月照上人の御志もそこにあつたかと思ひます。今の世には先生を措いて、どこに新らしい日本國を築く土臺石がございませう！
伊集院 いかにも和尚の言はるゝ通り先生は日本の唯一つの土臺石でございます。
隆盛 その土臺石もやがてふたゝび不用になれば大島の海の中へ捨てられるであらう、ハッハッハッ……。
白夢 これは先生ほどのお方のお言葉とも存じませぬ。土臺石なればこそ最初から捨てらるゝは覺悟でございませぬか。（しばらく沈默）
隆盛 うむ、面白い、役に立つた後ではまた捨てらるゝを覺悟で土臺石になるのも面白からう。世界にはそのやうな大馬鹿者も一人くらゐはなくてはなるまい。わしはその大馬鹿者になつて行かうかハッハッハッ……。（杯をぐつと乾して和尚に獻す）
柴山、伊集院 では先生には早速……。
隆盛 うむ、直ぐ出立としよう。船の用意は？
伊集院 何時でも宜しいやうに取りはからうてございます。
隆盛 では……（アイガナを見る）
アイガナ 旦那さま。ではいよ／＼わたくしが案じてをりました通り。（泣く）
隆盛 案ずることはない……。
アイガナ でもわたくしは旦那さまとお別れいたしましては一日でも……。
隆盛 あゝ、それもさうだらうが……。こいつは困つたのうハッハッハッ……和尚、わしはやつぱりこの島で芋を作ることにしよう。
和尚 芋はまた來年も出來ます。今年だけは……。
隆盛 都に上つて、天下對手の芋を作れといふのですかい？
和尚 左様でございます。都でのお仕事がおすみにさへなればいつでもまた大島へは……。
隆盛 では、天下對手の芋を作つたら、わしはまた直きに

この島へ歸つて來るぞ。

和尙　さうなさつた方が宜しい。拙僧もこの島でお待ち申してをります。早う歸つてくだされ。なうアイガナ殿。ほんの、三月か半年の辛抱ぢや。別れにくいところぢやらうが、辛抱しておやりなされ。

アイガナ　わたくしは一日でも別れるのはいやでございます。（泣く。板戸の中にて子供泣く。劉佐民の妻板戸の中に入り子供を連れ、嬰兒を抱いて出づ）

劉佐民　娘、われも悲しからうが旦那さまの御出世のためぢや、我慢せえ。辛抱せえ。

アイガナ　いやでございます。あゝ仰つしやるが、都へおいでになればもう何で二度とこんな邊鄙な島へお歸りなさいませう。

隆盛　和尙、困つたのう。もう都行きは止めにせうか。

白夢　一殺多生！　こゝが御辛抱でございます。

隆盛　…………。（默然として劉佐民の妻に抱かれたる子供等を見る）

―― 幕 ――

第二幕

第一場

時

文久二年四月上旬、第一幕より二ヶ月後

場所

兵庫湊屋奧座敷

登場人物

西郷隆盛
大久保市藏（利通）
村田新八
森山新藏
平野次郎
有馬新七
弟子丸龍助
森山新五左衛門（森山新藏の子）
若侍等

湊屋奧の廣間、上手寄りに床の間、違ひ棚等。成るべく落ちつきたる風に。中央四間は障子になつてゐて、障子を明くれば兵庫の夜の海濱が見える。下手及び上手に襖ありて廊下につゞく。中央に燭臺一つ。燭ゆら

ぐ。何となく森としたる感じ。遠くにて蛙の聲。
森山新藏（四十二三歳）村田新八（いかにも薩摩隼人らしき美丈夫二十三四歳）燭臺を挿みて坐り、打ち沈みたる態。

村田　それにしても、もう今日あたりはお上から何とか御沙汰がありさうなものでございますなあ。

森山　わたくしもそのことばかり考へて居ります。殿樣がこゝへお着きになつたのは今月四日。わたくしらは早速先生のお伴をして大阪から兵庫へ駈けつけ、その夜にもお目見えがかなふことゝのみ思つてをりましたが、二日經つても三日經つてもお上からは何の御沙汰もない。

村田　吾々ごとき者ならばお上の御都合次第でいつまでお待たせなさらうと不服もござりませぬが、先生ほどのお方を。

森山　さうですとも。それに今度の先生のお働きと申しましたら、吾々傍にゐてまあよくもあれほどの根氣がおありだと驚き入るばかりでございました。

村田　まつたくでございます。先生のお伴をして鹿兒島を立ちましたのは三月三日、人吉に出で、肥後、筑前の諸藩に立ち寄り、夜を日についで下の關に着いたのは三月十二日下の關で殿樣をお待ちいたす筈でございましたが、九州諸藩にての風聞では、もう京都では血氣に逸る浪士たちが今にも無謀な軍を起しさうな状況でありました。下の關に來るとかの浪士等は殿樣の御入京をきつかけに愈々戰を開かうと企てゝゐることが分つたのでした。さすがの先生もあの時ばかりは驚きなされました。これは下の關で殿樣をお待ち合せいたしてゐる場合ではない。一刻を爭ふ危急の場合だと仰つしやつて、お上に對しては事情を認めた手紙を遣して先發いたしました。幸ひあなたが下の關へお出で下されたので、あれからは三人で夜に日をついで大阪まで駈けつけましたが……。

森山　大阪に着きましてから今日まで約二十日、先生のお骨折と申したら、とても人間業とは思はれませぬ。まるで網を張つたやうな嚴しい幕吏の眼をくゞり、血迷うた浪士等の刄をくゞり、逸りに逸つた京中の命知らずの若者たちをぐつと押へておしまひなされたあの膽力、あの豪氣。あれでこそ島津家の御威光も立ち、殿樣の御一身にも恙なきことができたのでございます。

村田　それにしても氣にかゝるは、今日も夜になつてもまだ何の御沙汰もないのは……。

森山　そのことについては先達てからわたくしも案じてをりますが、先月下旬先生が伏見のお邸でお留守居の堀江殿と逢はれた時であつた。……堀江どん、あんたは長州の永井雅樂と腹を合せてをらるゝやうぢやが、永井は追つ

て長州の勤王の志士たちが打つた切るというてをつた。あんたはよつぽど馬鹿者ぢや。あんたも心を入れ替へなさい。權謀術策では天下の事は成らぬ。誠心ぢや〳〵と語つてをられた。何でも餘程氣に喰はぬことがおありだつたと見えて大きな聲で叱つてをられた。

村田　それから大阪の藩邸でも松江田殿が小なまいきなことを申し上げてうんと叱られてをりました。あの二人は佐幕派でもあり、なか〳〵の男ですから油斷はなりませぬ。

森山　今度の一件も、堀江や松江田が、眞つ先に姫路までお上をお出迎へして、お目見えしたと申しまするから、どうもそこいらに禍根が潜んでゐやうも知れませぬ。

村田　成る程。眞實それにちがひありませぬ。でなければ今日までまるで閉門同様にして、先生をこゝに押しこめて置くといふことはありません。不屆千萬なは堀江、松江田の徒ぢや。先生は……。（拳にて涙を拭き、突然刀を摑んで立ち上る）

森山　村田どん、どうなさる。

村田　もう、それにきまりました。今夜直ぐ大阪に立ち歸り先づ堀江を打つた切り……。

森山　いや〳〵、それは惡い。もしそれが眞實であるとすれば、そのやうなことをなさつては、一層先生の立場を惡くする……。

村田　いや、先生には御迷惑はかけませぬ。もしもの場合は腹掻つ切つてでも。（なほ飛び出さうとする。森山止める）

隆盛　（上手の襖を明けて登場。袴を着け、小刀を帶し、大刀を提つたまゝしばらく二人を見てゐる。旅疲れと物思ひにやゝやつれてゐる。顏色も蒼白で、沈痛な眼をしてゐる。村田を止める）あゝこれ村田、さう逸つても仕方はない。何事も成るやうにしきや成らぬ。

村田　でも先生、あんまりでございます。あれほど先生がお盡しなされたに。如何に殿様にしても、あまりひどいお仕打でございます。（手の甲にて涙を拭く。隆盛も、森山もしばらく默然として佇む）

隆盛　人を對手にすればこそ腹も立つ。天を對手として誠を盡すまでぢや。まあよい〳〵怒るな。若い者はすぐ怒るでのうハッハッハッ。（寂しき笑ひ）……何となく今夜は鬱陶しいのう。（障子を明ける。兵庫の海岸の火影見ゆ。火影はあまり多からぬが宜し。遠くにて蛙鳴く）ああ月も落ちてしまうたやうだ。かうやつて眺めてゐると故鄕のことが思ひ出さるゝのう。（しばらく沈默）

森山　左樣でございます。もうこのごろは故鄕でもあのやうにお城の濠では夜晝蛙が鳴いてをりませう。

村田　あの蛙の聲を聽くと、まつたくたまらなくなります。先生、やつぱり故鄕の方が宜しうございますなあ。

隆盛　故鄕を出て來てわづか一月經つか經たぬに、もう故鄕が戀ひしいかハッハッハッ……。

村田　あの城山の上から月の夜の櫻島や、城下の火影を眺めた景色は忘れられません。

隆盛　わしも城山から見た薩南の眺めは好きぢや。今朝もわしは大島の子供たちのことを夢に見てゐた。不思議なことぢやが、おあいがしきりにわしを止めてもう兵庫なんかに二度と行くんぢやないと言つてゐたハッハッハッ人間といふものは弱いものぢやのう。

村田　先生、もう故鄕へ歸りませう。

隆盛　さう急に故鄕に歸りたうなつても困るが、そのうちには城山の月も見られよう。

森山　もう故鄕では杜鵑が啼いてゐませう。

村田　おう故鄕のあの山の色、あの日の光り、海の光り、あゝあの初夏の風…先生、故鄕に歸りませう。

隆盛　さう急がんでもよい、わしも都より、どこより故鄕が一番よいと思ふ。どうせ死ぬなら屍は故鄕のあの光つた山に埋めてもらふさ。だがまだ早い、故鄕に歸るのは。一度はいやでも歸らねばならぬ。せかぬがよい。

村田　でもあの蛙の聲を聽くと、南の故鄕がたまらなく懷しいなあ。

（三人默然として蛙の鳴く聲に耳を傾ける。）

若侍一（下手の襖を明けて）お客樣でございます。

森山　どなたぢや。

若侍一　筑前の平野二郎さまでございます。

隆盛　なに、平野二郎、おうそれは珍らしい。直ぐこれへ御案內申せ。

若侍一　かしこまりました。

隆盛　平野二郎か。ほんに珍しいことぢや。（うれしさうに部屋の中を歩きまはる）

平野（總髮にて旅仕度。下手より登場。精悍の氣面に溢れたる丈夫）やあ、これは西鄕先生、御健勝で……。

隆盛　あんたも達者で……。（兩人追想の感に打たれしばらく無言）あんたのお顏を見れば折角忘れようとしてゐた和尙のことが思ひ出されてのう。

平野　わたくしもこちらへの道すがらもあの夜のことばかり考へてまゐりました。

隆盛　あんたのおかげでわしはこの通り生きのびてをりますが、和尙だけを殺して面目次第もございませぬ。

平野　いや、それもこれもみな天運でございます。ざんぶといふ水音に驚き、わたくしがたち上りました時は、折からの疾風に船は矢のやうに走る。船と二つの亡き骸と

は一丁餘も隔つてをりました。咄嗟の氣轉に刀を拔いて帆綱を切り、舟を廻して舳の上に、お二人の亡き骸をお上げは致したもの丶お二人ともすでに事切れておいでなさいました。あの時の先生が今このやうによみがへて、天下の大業をお一人の肩に擔うておいでなさるのを見まするとまだ〳〵天の先生に命ずるところ大なるがゆゑだと思ひます。で早速でございますが、今月四日には薩州侯も當兵庫へ御着きなされました由。京、大阪の諸國の志士は、ひたすら今日のあるのを待つてをりました。實を申すと先生が大島を出られたといふ噂が傳はりましてから、吾々勤王黨の浪士どもは百萬の味方を得ましたより心強く感じました。先生、今を措いて、勤王の師を擧ぐる時節はありませぬ。先生一日も早く吾々のために……。

隆盛　してあんた等の御決心はどういふ風になつてをりますかな。

平野　第一に京都所司代酒井若狹守、九條關白の首を斬り、彦根、鯖江の城を燒き、島津侯を盟主として大阪城に據つて天下に號令いたす考でございます。

隆盛　成るほど戰ひの法としてはそれが宜しい。だが一つおたづねいたしたい。先づ京都、大阪地方に兵を集めるとして、いよ〳〵江戸に上るまでには相當の日數もかゝり、準備もかゝるであらうが、幕府はこのごろ佛蘭西政府と密接な交渉を持つてをるやうである。もし佛蘭西の軍艦と兵力などを借りて大阪灣から、吾々の背後を衝くやうなことがあるとしたらどうなさるつもりだ。萬一、その場合に吾々が英吉利を味方に頼んだとする。吾々は勝利を得るかも知れぬ。だが、その結果は英吉利の勢力を日本に植うるだけのことになる。それは幕府より恐ろしい勢力でござる。

平野　（默思）先生の御說さすがに敬服いたしました。擧兵の方法等につきましては尙一應同志の士とも懇談いたしまするが、いかゞでございませう、薩摩侯は吾々勤王の士へ御助力下さるでせうか。

隆盛　いや、それはわしの一存だけでは何とも御返事いたしかねる。主君とゆる〳〵相談いたした上御返事申上げよう。たゞ何事も時期の問題だ。時節を待たねば仕損ずる。若い人達ばかりだからみんなが、無謀なことをせぬやうに、あんたがよく押へて置いて下され。でないと千仭の功を一簣に缺くことになりますぞ。

平野　しかし、先生時期を逸しましては……。

隆盛　いや〳〵逸する時期はまだ來てをらぬ。時期はわしにお任せ下さい。

平野　では先生は時期さへ來れば吾々のために。

隆盛　無論命は投げてをる。この前は和尙と死んだ。今度

は平野さん、あんたと一緒に死なう。

平野　忝う存じます。（下手へ下る、不圖立止まり）失念いたしましたが、先生はいつごろ京都へお上りなされますか。

隆盛　さあ、いつ京都へ上れるかわしにも分りませぬ。

平野　では薩州侯の御都合は？

隆盛　實は（やゝ躊躇して）まだお目見えもかなうてをらぬやうな次第で……。

平野　あの、先生にはまだお目見えもかなうてをらぬと仰つしやるのでございますか！（隆盛うなづく。森山、村田俯向いてしまふ）

平野　ふうむ、さつきから先生のお顔色がいつもほどでないと思ひましたが、それではやつぱり君側の小人等が（暗然とする）……。

隆盛　何事も天に任すまでぢや ハッハッハッ。（寂しき笑ひ）

平野　お察し申します。（涙を拭く）ではこれで失禮いたします。

隆盛　あんたも天下の爲めぢや、達者でのう……。

平野　ありがたうございます。先生もどうぞ……。（退場）

隆盛　（平野を見送り）立派な武士ぢや。だが、どうもみんな逸り過ぎて困るのう ハッハッハッ……（森山村田を見る）時にもう何時だらう。（憂鬱な顏）

森山　もう大分夜も更けたやうでございます。

村田　今日もたうとうお上からのお使ひはございませんでしたなあ……。

隆盛　…………。（沈思）

若侍二　（下手より登場）大久保樣からのお使ひでございます。（手紙をわたす）

隆盛　なにッ！（嬉しさうに）大久保から？（手紙を受取り讀む）うむ。早速濱までお出を乞ふ。內々にて申上度儀有之……ふゝむ……。

森山　どういふ理由（わけ）でございませう。

村田　先生をおびき出して、もしかすると堀江、松江田の佞人どもが大久保殿を說いて……。先生ッ！　お一人でお出かけになつてはいけませぬ。お伴いたします。

隆盛　ハッハッハッ……あんた等は大久保をそのやうな人間と思ふのか。わしの心を知つてをるのは大久保一人ぢや。わしはどこに行かうと、またどのやうなたくらみがあらうと人は恐れぬ。恐るゝのは天ぢや……わし一人で行く。誰も隨いて來てはならぬぞ。（上手へ入る。人々心配げに見送る）

――暗轉――

第二場　海濱の場

兵庫海岸松並樹。遠くに兵庫の町の火かすかに見ゆ。曇り空。蛙の聲。
上手より西郷、下手より大久保登場。中央に近きところにて逢ふ。

大久保　（すかし見て）吉之助ではないか？
隆盛　市藏か？
（兩人近づいて肩に兩手を置く。しばらく沈默。）
大久保　この間からのお前の苦衷察しする。（兩人松の根方に腰を卸す）
隆盛　…………。
大久保　お前が兵庫に來たことも、お上はちやんと御承知ぢやが……。
隆盛　…………。
大久保　お前がさぞ毎日お使を待つてをるであらうと思うて、お上にもそれとなくお話をしたが、何も彼も變なことになつてしまつた。こんなことなら、お前をわざ〱、大島から呼び出すやうなことをするのではなかつたものを。みんなわしが惡かつた。ゆるしてくれ。
隆盛　わしには。何が何だかさつぱりわけが分らぬが、お上には何ぞ？
大久保　惡い奴等があつて姫路まで出て來て、お上を途中で待ち受け、お前のことをあることないこと申し上げたのだ。
隆盛　さうであつたか。（沈默）
大久保　お上には大變な御立腹だ。
隆盛　それはまた何で？（立ち上る）
大久保　（立ち上り）第一、お前が浪人どもと結んで決策をやつたといふこと、第二、年少客氣の者どもの尻押をいたしたといふこと、第三、お上御着京の上は當分御滯京なさるやう勝手に取り決めおいたといふこと、第四、下關でお上を待ち合せるといふ約束を反古に致し、お前等のみ勝手に大阪へ出發いたしたのはお上の御威光を恐れぬ仕打といふこと、先づこの四ヶ條た。
隆盛　（やゝ沈思、腹立たしげに）市藏、わしや、何も言はん。
大久保　うむ、わしにはお前の心はよく分る。お前ほどの大忠臣を、むざ〱。（泣く）
隆盛　ありがたう。かたじけない。で何か、まだなか〱お目見えはできさうもないか？
大久保　お目見えどころか、お前はせつかく大島を出て、これほど働いてくれたに、お上の御立腹はとてもお前には想像はつくまい。

隆盛　むゝ、……。
大久松　お前はやがて切腹か、遠島か……。
隆盛　わしがか？　わしに切腹ッ！　遠島ッ！（忌々しさうに松の根方を歩く）
大久保　吉之助、今夜こゝでわしと死んでくれ。わしは實は、こゝでお前と刺し違へて死ぬ覺悟で出て來たんぢや。吉之助わしと一緒に死んでくれ。（腰の小刀を拔く）
隆盛（しばらく呆然として大久保を見る）ありがたい。市藏お前のその志は忘れぬぞ。しかしよく考へて見ろ。今お前とわしと二人がこゝで刺し違へて死んだとしたら、誰が島津一藩の者を率ゐてゆくか。島津家はともかくとしても、お前とわしが死んだとしたら日本の將來はどうなると思ふか。お前の志は誠にありがたいが、お前が死ぬ時ではない。わしもこゝでは死なぬ。お互にいつ、どこで、殺されるかも知れぬが、その時節が來るまでは死んではならぬ。お前は生きのびてゐて藩論を改むることに盡力してくれ。でないと、藩の若い奴等が可愛想だ。
大久保（默思）うむ、わしが誤つた。お前一人を窮地に陷れ、わし一人殘るのは耐へ切れぬことぢやが、ゆるしてくれ。わしは、もすこし生き殘つて働くから。
隆盛　うむ、それでわしも安心した。だが、せめて一度だけお目見えがしたいが……。
大久保　お前にはまことに氣の毒だが、それだけは思ひ止まつてくれ。とてもそれどころのさわぎではないのだから。お前はよし船に乘るまでは無事であつても、いつ、どこで切腹の御沙汰がないとも限らぬから……。
隆盛　それほどまでにお上はわしをお憎みなさつてをるのか。
大久保　…………。（俯向いたまゝ泣く）
隆盛　…………。
大久保　言ひ忘れたが、お前は多分、今夜夜が明けぬうちに鹿兒島に歸さるゝことになるだらう。天祐丸が夕方から出帆の準備をしてをつた筈だ。
隆盛　今夜、船で歸國を命ぜらるゝのか。
大久保　さうだ、今夜、船で……お上の眼にはお前はもう大罪人なのだからなあ。
隆盛　わしが大罪人？（きつと空を睨み、齒を食ひしばる）
大久保　萬一、命だけは助かるとしても、輕くて琉球くらゐには流されることになるであらう……達者でゐてくれ。さよなら……。（大久保俯向きながら下手へ退場）
隆盛　さようなら、お前も達者で……。（森山、村田木蔭より走り出づ）
森山　先生ッ！

村田　殘念です！（兩人左右に跪く。）

（有馬新七、弟子丸龍助、森山新五左衞門其の他數名の若侍、木蔭より出づ。）

有馬　先生お祭し致します。しかし、おめ〳〵とこのまゝ御歸國になつてはいけません。

弟子丸　わたくし等の命に替へても先生の船は出させませぬ。

新五左衞門　もし先生が鹿兒島へお歸りになるのでございましたら、わたくし等は侫人等を切り殺した上で、御前に出て美事に腹を掻き切ります。

有馬　わたくし等はこれから濱に行つて天祐丸を燒いて來ます。（濱の方へ走り行かうとする）

隆盛　待て。今は血を以て血を洗ふ場合ではない。何事も時節ぢや。あんたらのお志は吉之助肝に銘じてお禮を申します。その決心を尙少し後まで忍んで置いていたゞきたい。吉之助はたとへ何處へ流されてもなか〳〵死にませぬ。尙少しあんたらの命はおあづけします。

弟子丸　では、先生はこのまゝ鹿兒島へお歸りになりますか？

隆盛　君命でござるからには……。（悄然として上手へ歩み寄る）

（人々は見送りつゝ相抱いて泣く。蛙一しきり鳴く。）

――暗轉――

第三幕

德之島謫居の場

時
文久二年八月十四日午後

場所
德之島岡前村海岸

登場人物
大島三左衞門（西鄕隆盛）
アイガナ
長男　菊一郎
代官　中原萬次郎
代官の家來　一、二
薩藩の使者　一、二
若者　甲、乙
駕籠人足

竹と棕櫚林に取り圍まれたる板葺の家。屋根の上には平たき石が數多並べてある。六疊の座敷のみが上手竹林に寄つて見える。竹林の中には上、下手とも徑があ

る。正面一間の床には素燒の瓶子に芒が投げ込まれてある。壁には大刀が立てかけられてある。三四册の佛書と袋入の天吹が瓶子の傍の小机の上に重ねて置かれてある。疊の上には着物が脫ぎすてゝある。左手の庇に沿うてのうぜんかつらが紅く咲いてゐる。座敷の左右に向日葵、玉蜀黍などが繁つてゐる。時々小鳥の聲。

秋の靜かなる曇り日の午後。遠く浪の音。

隆盛　（部屋の中央に瞑默したるまゝ坐つてゐる。頭髮蓬々と亂れ鬚髯延び、肉落ち、骨秀でたる貌）

（島の若者甲、乙、釣竿を擔ぎ上手より登場。跫足を偸むやうにして家の前を過ぎ、下手の竹林の徑に近づき立ち止まる。）

若者甲　いつ來て見てもあの男は本を讀んでをるか、あのやうに眼を瞑るかしてをる。あれでよう倦かぬものぢやなあ。

若者乙　（聲を忍ばせるやうにして）　まつたくだ。でも俺はこなひだ、さうだこの前の月待ちの夜だつた。烏賊釣りに行つて、恰度お月さまが出たころこゝを通りかゝつたが、膽つ玉が潰れたかと思ふほどびつくりしたよ。

若者甲　ふうむ？

若者乙　あの大きな侍が庭に出てよ、熊の吼えるやうな大きな聲で、ほれ、あすこに立てかけてあるだらう。あの長い刀を引つこ拔いて、びう〳〵と振り廻してるのだもの。そしてこんな大きな眼で、ぢつと俺を見るんだ。

若者甲　そいつは凄かつたらうなあハツハツハツ……あの大きな眼で見られたら。

若者乙　凄いの凄くないのつて、まつたく兩脚がわな〳〵と顫へたよ。

若者甲　それでもあの侍は何でも城下では豪い一方の大將だつたといふではないか。みんなに推されて謀叛人の大將になつたので、流されたといふことだよ。

若者乙　さうだらう、あの面構を見たゞけでも、並の人間ではないことが分る。

若者甲　何んな惡いことをして島流しになつたのか知らぬが、城下には妻子もあるだらうに、考へて見ると氣の毒なものぢやのう。

若者乙　氣の毒ぢやとも、あの蓬々と亂れた髮や、蒼ざめた顏を見ると、どうしてもあの侍は氣が狂つてゐるにちがひない。

若者甲　でなければ夜も晝もあのやうに默りこくつてばかりはをれまい。狂人ぢやのう乾度。

若者乙　氣が狂うてゐるとも。立派な狂人ぢやとも。氣の毒なものぢや。

若者甲　それにしてもあの侍が、生まるゝ時、もすこし背

が低いか、力が弱いかしたら謀叛人の大將にも推されもしまいし、そしたらそのやうな大それた考も起すまいにのう。それを考へると人間は生まるゝ時、ちやんと一生の運といふものを擔いで來るのぢやのう。あの侍があの大きな體で、あの大きな眼をしてをる間は、一生島流しばかりくりかへしてをるだらうよ。

若者乙　さうすりや、俺たちのやうな小つぽけな人間で、あるかなしか、茅で切つたほどの眼を持つた方が安心といふものだのうハツハツハツ……。

若者甲　さうだとも、さうだともハツハツハツ……。

（兩人下手林の中の徑に退場。小鳥の聲。）

隆盛　（しづかに眼を開く）眼を閉づれば却つて慾念の世界が現はれ、耳を塞げば却つて苦患の聲が響く。わしはまだ迷うてをる。天下が何ぢや。日本が何ぢや。わしの心を秋の水のやうに澄ました刹那、そこに映り來るたゞ一筋の正覺の光明に比ぶれば日本が生れ更らうと、日本が海の底に沈まうと、そのやうなことは朽ち葉が一つ梢から落ちるほどのこと。わしはもう二度とこの島を出てはならぬ。淺猿しい蝸牛角上の爭にあたら魂を磨り減らすやうな愚を繰りかへしてはならぬ。（立ち上り緣端に出て空を仰ぎ小鳥の聲を聽く）いかにも、何時の間にかすつかり秋になつてしまつた。わしは幾年振りでこのやうな靜かな心で秋を見ることが出來たであらう。馬鹿馬鹿しい忠義立てなどして、やれ武士だの、やれ御奉公だのと、考へて見ても恥かしい。今度こそは死ぬまでこの島は出ぬぞ。龍郷には三月前に手紙を賴んで置いたが、おあいはもうあの手紙を讀んだであらうか。おあいと子供等さへこの島へ來てくれれば、わしのこの家も少しは家らしくなるであらう。あいつらも大きうなつたであらう。このごろはまたあいつらの夢ばかり見るが……。（遠き濱にて着船を知らせる法螺貝の音聞ゆ）船が着いたさうな。（緣の柱に凭りかゝり身を延ばして正面の遠き濱を見る）いや／＼あの音は聽かぬがよい。あの音を聽くと不思議に胸騷ぎがしてならぬ。何か嬉しいたよりでもあるかと、豫期してあの音を聽くが、船は幾度濱に着いてもつひぞ嬉しいたより一つ運んで來てくれたことはない。（ふたゝび法螺貝の音聞ゆ）しかし、嬉しいたよりもないかはりに悲しいたよりもない。それを思ふと、幾度濱に船が着いても何のたよりもない方がまだ仕合せかも知れぬ。（なほ殘り惜げに正面を見つめる）

代官の家來一　（上手より急ぎ足にて登場）先生、鹿兒島から船が着いたやうでございます。

隆盛　わしもさう思つてさつきから見てをるが、こゝからは見えぬのう。

代官の家來一　あゝ、なるほどこゝからは見えませぬ。（走つて下手竹林の横から正面を覗く）先生こゝからでございますと、よく見えます。ずゐぶんいつもの船より大きうございます。眞黒な船でございます。帆檣も二本あります。

隆盛　（庭に下り下手竹林の方へ歩み寄る）成る程、二本檣だのう。帆檣の上には旗がひら〳〵動いてゐるやうぢや。艪舟から人が上つて來るわ。

代官の家來一　また城下から流人でも（不圖氣付いて隆盛を見る）送られて來るのではありますまいか。お氣の毒な。

隆盛　うむ、眞つ先に歩いて來るのは侍ぢやのう。その次に歩いて來るのも侍らしい。

代官の家來一　三番目には商人らしい男がまゐります。それから、その次の男は舟に何か忘れ物をしたのか、白い砂の上を走つて戻ります。

隆盛　さうぢやのう。病人でもあるか、駕籠のやうな物を擔いで來るではないか。

代官の家來一　左樣でございます。あんなものを擔いで來るとは、不思議でございますなあ。

隆盛　そして代官所の方へ行くではないか。蕎麥畑の中を歩いて行く……。

代官の家來一　あの樟樹の下を右にまがりました。あゝ、それから濱をこちらの方へ女が歩いてゐまります。

隆盛　どこへッ！

代官の家來一　栗畑の横のあの牛小舍の前でございます。それからその女は子供の手を引いてをります。

隆盛　なにッ！　子供の手を引いて（伸び上る）うむ、ほんとに……。

代官の家來一　そして懷にも子供を一人抱いてをります。

隆盛　あつ、そこに來た。もうそこにやつて來た。

代官の家來一　若い女でございます。立ち止まつて道を訊ねてをります。走り出しました。

隆盛　あ！　おあいだッ！　子供たちだッ！

（狂氣のやうになつて走らうとする。よろめく。アイガナ下手より登場。男の子の手を引き、赤ん坊を抱いて急ぎ足で。）

アイガナ　（第一幕の時よりずつと面やつれしてゐる。髮も亂れてゐる。船に醉つたので白い布で鉢卷をしてゐる。隆盛の前にひざまづいて泣く）旦那さま……。（鉢卷落ちる）

隆盛　よう來てくれたのう……。

アイガナ　旦那さま、まあおいたはしい……。

隆盛　坊主たちも達者だつたのう。船には弱つたゞらう。

（男の子を抱きかゝへて頰ずりをする。アイガナの懐の子を覗き見る）菊一郎、ようお母さんと一緒に來てくれたのう。父さんは待つてゐたよ。（縁側へ連れてゆく）

菊一郎　こゝ、お父さんのお家？

隆盛　さうだ。今日からは坊やの家だ――

菊一郎　（きよと／＼見まはし）何だか變だな。

隆盛　そんなに變かい？　ハツハツハツ……。

菊一郎　何も玩具がないから。

隆盛　玩具かい？　こいつは困つたなあ。京都で玩具を買つて來ればよかつたなあハツハツハツ……。（アイガナを見て笑ふ。アイガナも笑ふ）あゝ、いゝ玩具があるぞ。これだ、これだ。（アイガナを導いて座敷へ上る。床の間に袋に入れた天吹――長さ七八寸の尺八樣な小笛、昔、薩摩隼人が陣中にて吹きし物といふ――を袋から取り出して菊一郎の手に持たせる）ほらよい笛だらう。これは家の祖父さまが初陣の時鎧櫃の中に藏れてお吹きなされたものださうだ。兵庫から船でこの島へ流された時もこの天吹だけはわしは離さんで持つて來た。わしにとつては大事な物だからのう。

アイガナ　坊やも今に大きうなつたら初陣の時にこの笛を吹きますねえ。

隆盛　（子供の手より天吹を取りて吹く）ハツハツハツ……もう駄目だ。これでも子供のころは上手に吹けたものだが。（子供を抱き、菊一郎の唇に笛を當てさせる）

アイガナ　（懐の子を傍に寢させ、脱捨ててある隆盛の着物を疊む）まるで夢のやうでございます。かうやつて旦那さまにお目にかゝりましたことを思ひますと。旦那さま、もうどのやうなことがありましても、こゝの島からお出になつてはなりません。お殿樣のためにあれほどおつとめなされても、ちよつと御意にかなはぬことがあればこれでございますもの。いくら殿樣だからというてもあまり人情がなさ過ぎます。

隆盛　今度といふ今度はわしもつく／＼忠義立などゝいふことの馬鹿々々しさを知つた。もうどんなことがあつても、坊やなんかを捨てゝ出かけはしない。

アイガナ　さうでしたらわたくしもどんなに嬉しいか知れませぬ。（着物を疊み終りて、隆盛の後にまはり、肩を揉む、子供は隆盛に抱かれたまゝしきりに笛をもてあそぶ）

隆盛　それほど別れるのが辛いかハツハツハツ……。

アイガナ　はい。（そつと涙を拭く）

隆盛　そして、お前等が乘つて來た船は、やはり鹿兒島から出たのであらうな。

アイガナ　はい、お城下からまゐつた船に賴んで便をさせていたゞいたのでございます。

（この時、上手より代官中原萬次郎家來二人を連れ、薩藩の使者を案内し、座敷を覗く。困り切つた顔をしてふたゝび棕櫚林の中に隱れる。）

隆盛　大きな船のやうぢやのう。

アイガナ　はい、ずゐぶん大きうございました。船には殿樣の御使者とかいふお侍が乘つておいでになりました。それからその船の底には船牢とか申す暗い鐵の扉の船牢舍が出來てゐるといふことでございましたが、わたくしは恐ろしいので、どうしても覗いて見る氣はいたしませんでした。

隆盛　船牢といふのか？（默思）誰か氣の毒な人が入れられてゐたであらうのう。

アイガナ　わたくし、名を聽いたゞけでも恐ろしうございましたので、どのやうなお方がはいつておいでになるか、少しも見ませんでございました。まああのやうな暗いところに入れられて、鬼界ヶ島などに流さるゝ方のことを思ひますと、お氣の毒でなりませぬ。ほんに旦那さま、もう二度とこの島をお出になつてはいけません。それこそこの次に、船牢入りでもなさるやうなことがありましたらわたくしはとても生きてはをれませぬ。

隆盛　安心するがよい。この前龍郷に流されてゐたころはまだ尙一度世に出たい、思ふ存分働いて見たいとも思つてゐたので、御赦免の御使者をいたゞくまでは、ずゐぶんと疳積も起したが、今はすつかり世間を捨てゝ覺りを開いたので、わしは毎日々々を實に氣持よくおくつてをる。今度こそはどのやうな御上のお召があつても、一足もこの島からは出ないで、お前と一緒に死ぬことに決めた。

アイガナ　勿體なうございます。旦那さまさへこの家に一生お止り下さるのでしたらわたくし、もう二度と龍郷の父や母の家にも歸りませぬ。わたくしほど仕合せな女はありませぬ。（俯向いて袂で涙を拭く）

（上手、棕櫚林の蔭から、家の中の樣子を見てゐた代官や、島津家の使者等も顏を掩ふ。西郷に藩よりの命令書を手交するに忍びないで躊躇する。代官中原は涙を揮つて緣端へ近づく。）

中原　先生ッ！

隆盛　（不圖中原の方を見る。使者二人を見て不思議に思ふ）中原さん！

アイガナ　（驚く）あの御使者は、わたくしと一緒の船でおいでになりましたが……。

隆盛　お前と同じ船で？

中原　先生！　お氣の毒で、何とも申し上げられません。先生はもうこの島においでになることもかなひません。

隆盛　（意を決して）　中原さん、覺悟はしてをりましたで……。

中原　どうぞ御覽下さい、これを。（眼を拭ふ）

隆盛　（しづかに書面を開く）　うむ、しかしこれではまだ命だけは別狀もないやうで……。

薩藩の使者一　しかし先生、只今から直ぐに沖之永良部島へお越しを……。

隆盛　では、その船牢と申すのはわしを入れるために準備して來られたのか？

薩藩の使者二　左様でございます。（俯向く）

隆盛　ではわしは今日からは船牢の中ばかりで暮さなければならぬのか。

薩藩の使者一　はい。（俯向く）

隆盛　（床の間の大刀を摑み、くやしげに瞋恚の苦惱に耐へぬ表情。アイガナ及び子供等を見守る。躊躇する。しづかに立ち上る）

薩藩の使者二　（駕籠をさしまねく。上手の棕櫚蔭より乘物來る）　先生どうぞ……。

隆盛　（しばらく駕籠を見る）　いやどうぞ、船まで歩かせてください。もう二度と土を踏むことは出來ないでせうから……。（片手に草履を持ち、跣足で砂を踏み、しづかに下手へ退場）　砂が冷たうてよい心持ちだ、ハッハッハッ……。（寂しき笑ひ）

（中原、使者等俯向いたまゝ涙を拭く。アイガナ緣に突つ伏して泣く。菊一郎天吹を握つたまゝ呆然として立つ。夕暮の色迫る。しばらく時が經つてから船の法螺貝の音。）

――幕――

第四幕

江戸城内の場

時

明治元年四月四日の晝、第三幕より六年の後

場所

江戸城内大廣間

登場人物

西郷隆盛

勝安房

田安中納言

大久保越中守

幕臣二人

若き侍

官軍の參謀　海江田信義

同　木梨精一郎
同　吉村長兵衛
同　村田新八

正面襖、板戸などすべて取りはづしてあるので、廊下を歩く人の姿や、庭園や、庭園をへだてた建物なども見える。正面及び左右に列んだ大きな柱や、高い欄間のみが目立ちて見える。飾り物などは取り去られてゐるので、全體にやゝ暗い空虚な伽藍のやうな感じを與へる。欄間の釘隱しだけが光つて見える。櫻はもうたいてい散つてしまつてゐるが、八重の遲咲だけが葉櫻の間に交つて咲いてゐる。風もないのに絕えず散つてゐる。山吹の花が櫻の根方に咲いてゐる。全體に、最も歷史的な江戸開城の森嚴、悲壯感と、空城の打ち沈んだ空氣を漂はす。

勅使が坐る廣間と、幕府方や、官軍方の人々の坐る廣間とは別々になつてゐるが上手から下手へずうつと、襖を取り外して一つの大廣間にしたものである。舞臺にあらはれる廣間は、その一番下手の一部だけを表はしたものになつてゐる。

舞臺の上手に見える金屛風は隣りの部屋から、續いてゐる屛風の一部分に過ぎない。

正面の廣間と庭園との間は長廊下になつてゐて、庭園を貫いて上手より下手へ廣い道が通じてゐる意。

幕が明くと同時に、金屛風の上手の隣りの廣間から勅使が江戸開城の勅書を讀んでゐる聲が嚴かに聞えて來る。水を打つたやうに森としてゐる。隆盛は中央よりやゝ上手寄の柱にもたれたまゝ快く眠つてゐる。

隆盛から少しはなれて上手に吉村、海江田、木梨等の參謀連が坐つてゐる。きはめて興奮した風で。

次の文言は金屛風のなかにて、きはめて明晰に、おごそかに讀むこと。

第二條　城明渡尾張藩へ可相渡之事
第三條　軍艦銃砲引渡可申追て相當可被返下之事
第四條　城內居住の家臣城外に引退き謹愼可罷在之事
第五條　慶喜叛謀相助候者重罪たるに依り嚴科に處せらるべきの處別格の寛典を以て死一等可被宥之間相當の處置可被爲在之事

隆盛、黑き詰襟の軍服の上に陣羽織を引つかけ、朱鞘の大刀を傍に置いたまゝ眠つてゐる。櫻の白い花瓣がひとしきり散る。勅書の傳達が終つたので、吉村、海江田、木梨參謀等は立ち上つて金屛風に沿うて上手の隣の廣間の方へ出て行つてしまふ。隆盛だけが一人取りのこされる。

退出する馬上の人々が正面の庭の櫻の下を上手より下手へ走るのが廊下をへだてゝ見える。田安中納言、憂鬱な表情にて俯向いたまゝ勅書を抱いて屛風の蔭から下手へ退場。つゞいて大久保越中守。……越中守は不圖立ち止まつて隆盛を見るが、そのまゝ行き過ぎる。幕臣二名上手より越中守よりもやゝ遲れて登場。非常に興奮してゐる。隆盛を見て近づき急に刀を拔かうとする。終に刀を拔き得ずして、殘り惜しげに退場。同じく金屛風の蔭より上下姿にて勝安房登場。

勝　（感慨無量の面持ち、兩手を袴の下に入れて、舞臺中央に立ち止まり俯向いたまゝやゝ久しく沈默。二三歩歩き出して初めて隆盛に氣付く）あゝさすがに稀代の英雄……もし西郷先生一人生まれなかつたら、德川の幕府はなほ百年は續いたであらう……併し、この英雄のために倒されたことは德川にとつて決して不名譽な事ではなかつた。（輕く默禮して七八歩隆盛の前を行き過ぎる。その時急に馬の蹄の音が聞えるので、隆盛眼をさます）

隆盛　あゝッ！（あたりを見まはす）こゝは何處だ。ここは大島ではないのか。あゝ江戸城の大廣間だつた。おい大久保さん、越中守さん、おう、もう江戸城お引渡しの儀式は濟んでしまつたのか？

勝　（立ち止まり、笑ひながら）西郷先生ッ！　お眼がさめましたか。江戸城お引渡しの儀式はすつかりすみました。

隆盛　（立ち上る）おう勝先生ですか。面目次第もございません。實は田舍武士の悲しさあまり御美事な御殿の結構に見とれまして、あの欄間の釘隱しを算へてをります間にすつかり眠つてしまひました。

勝　いや、お察しいたします。この十年間といふもの、あんたはこの江戸城を落すために一睡もなさらなかつたのだから……。

隆盛　さういへばさうぢやなあ勝先生……もしあんた程の英傑がこの城にをらんぢやつたら、わしは一年でこの城を落して見せたが……。

勝　わたしもあんたが攻めて來るのでなかつたら、なかなかこの城は渡さなかつたが……。

隆盛　あんたも今度はずゐぶんお困りぢやつたらうな……。

勝　あんたとわしと立場を替へて一太刀交へて見たかつたなあハツハツハツ……でもあんたのお蔭でこの城も助かる、百五十萬の江戸市民も易々と眠られる……。

隆盛　お互にこれまでの寢不足の埋め合せにうんと眠らうハツハツハツ……。

勝　西郷先生、あんたのお蔭で日本中が今日から安心して眠られるんぢや……。

隆盛　勝さん、さうおだてゝくれるな、恥づかしいが……。
勝　いや、まつたくあんたのお蔭ぢや。
隆盛　いや、わしもまつたくのところ、いよ〳〵これで江戸城お引渡しまで漕ぎつけたかと思うたら、急に重荷が下りたやうで、張りつめてゐた氣も緩んでしまうたのか、うと〳〵と眠つてしまひました。勝さん、わしはもう半時ばかり江戸城を枕にして、故鄕の夢が見たかつたハッハッハッ……。
勝　ハッハッハッ……あんたほどの英雄でもやつぱり故鄕は忘れられぬものかなあ。
隆盛　一日も早う故鄕に歸りたけれやこそ、蛤御門の戰から鳥羽伏見と夜に日をついで戰さもし、江戸城お引渡しまで命がけの仕事をしましたのぢや。あゝ、もうわしの一生の御奉公も濟みました。（やゝ沈鬱な心。大儀さうに大刀を手にする）
（下手より村田新八登場。兵卒の姿をしてゐる。）
村田　先生？　御馬はどちらへ曳きませう？
隆盛　（村田の姿を見て驚く）おう、あんたは村田さんではないか。その姿で？
村田　先生のお叱りを蒙るかと思ひましたが、今日の先生の御身邊が危ぶまれましたので……。

隆盛　勝先生、御免し下さい。勅使と參謀の他一人も連れぬ約束でしたがこのやうな可愛いゝ無法者が居りまして、お約束外の人數を江戸城に入れました。お詫びいたします。
勝　何の。西鄕さん、あんたは羨ましい。
隆盛　わしはこのやうな可愛いゝ無法者をあまやかすので、つい時々飛んだしくじりをいたしますよ。ハッハッハッ……でも若い者は可愛いゝ者でのうハッハッハッ……。
勝　いかにも、あんたの性分では……。
隆盛　村田さん、相すまぬが、それぢやわしの馬は北の御車寄の方へ廻して下され。もう愈々江戸城お引渡しもすんだで、薩摩を立つ時、あんたと約束しといたやうに、あんたと二人でお暇を願うて故鄕へ歸らう。そして城山の木蔭で思ふ存分晝寢でもしよう。
村田　先生忝うございます。
隆盛　あんたは故鄕に歸るのがそんなにうれしいかのう！
村田　はい。死にもせんで、先生と御一緒に南の國へ歸ることができると思ひますと……。（俯向いたまゝ泣く）
（隆盛、勝安房共に默然とする。村田下手へ退場。）
隆盛　勝さん、あんたも今日からゆつくりおやすみハッハッハッ……。

勝　あんたのおかげで慶喜公のお首も助かり、わしも今夜から初めてのび〳〵と眠れます。……（深い溜息）
隆盛　では、御達者で。（大刀を握り直し目禮する）
勝　あんたも……。
（隆盛ふたゝび默禮して氣の毒げに勝安房を見、上手へ退場しつゝそつと淚を拭ふ。）
勝　……………。
（廊下中央に近く步み寄り、暗然としていつまでも西鄕を見送る。空曇る。しづかに白き花片庇をかすめて散る。）

——幕——

第五幕

城山の場

時
明治十年九月二十三日眞夜中より二十四日未明
場所
岩崎谷
登場人物
西鄕隆盛（五十二歲）
桐野利秋（四十歲）
村田新八
邊見十郎太（二十八歲）
池上四郞
野村忍助
山野田一輔（三十三歲）
別府晋介（三十二歲）
隆盛の子菊一郞
有馬平人
池田彥次郞
少年兵　數名
斥候

下手に暗い木蔭を作つた老樟がある。靑竹に荒繩をぐる〳〵と卷き附けて作つた銃架がその根方に置かれてあつて、マルチネー銃が五六挺立て懸けられてある。一つの銃には喇叭が結びつけられてある。銃架から少し上手の方へ離れて土を掘り、石を築いた竈があり、火が燃え、その上には鉛を鎔かす鍋が懸つてをる。上手に土嚢を積み重ねて壁にした小屋がある。屋根は椎の丸木を竝べたもので、上に土をかけ、さらにその上を柴や茅などで掩うてある。粗末な低い小机が片寄せて置かれてあつて、机の上には蠟燭が一本燃えてゐ

てゐる。小屋の中には蓆を敷き、その上に縞の毛氈が垂れてある。

小屋の後は丘になつてゐて、小屋の直ぐ左側からそこへ上つてゆく赭土の徑がついてゐる。

丘の彼方には陰暦八月十七日の月がかゝつてゐる。月の光に照らされた薩摩潟いつたいの海、櫻島、沖の島島、天保山、甲突川、鹿兒島の町が手に取るやうに見える。かすかに遠く開聞嶽の影が夢のやうに月光に照らされてゐる。天保山、甲突川畔及び磯にかけた包圍軍の篝火が見える。城下の街は喪に服した町のやうに暗い感じをあたへる。

詰襟の服に袴を着けた若者や、飛白の單衣に袴の少年たちが、樟の下の鍋で鉛を鎔かしては、型に流し込んで、小銃の彈丸を作つてゐる。みんな白い鉢卷をして、刀を帶してゐる。無言のまゝほとんど機械的に同じ動作を繰りかへしてゐる。丘の上には一人の少年の歩哨が劍を着けた小銃を擔いで、小ひさな木立を盾にして麓の方を警戒してゐる。時々木立から離れて丘の上を左右へ動く。

土嚢の小屋から下手へ二間ばかり離れたところに、古い板を竝べて机にした臺が据ゑ付けてあつて、そこには陣營用のカンテラが一つ點されてゐる。別府晋介、池上四郎、野村忍助三人がしきりに机の上で地圖を展げて案じてゐる。木の株、石などを腰かけにして。別府晋介は額と、右の脚を繃帶してゐる。歩くごとに刀を杖にしてゐる。野村は腕を繃帶してゐる。邊見十郎太は肩と左の脚を繃帶してゐるが、別府等から少し離れて丘へ上る徑の傍に莚席を布いてその上に時々呻きながら寢てゐる。小屋の中には低い机を前にして、隆盛が坐つたまゝ身じろぎもしないで本を讀んでゐる。隆盛は縞縮の着物を着てゐる。

絶えず蟲の聲が聞える。

人々は二月出陣以來打ち續いての戰ひに疲れ切つてゐる。

少年斥候　(銃を提げ、下手より走り登場。別府等の前に止る) 傳令ッ!

池上　(少年の方を向き) うむ、竹之内さんかな?

少年斥候　隊長からの報告でございます。(報告紙を渡す)

池上　(報告紙を展げて讀む。別府等地圖を案じながら聽く) 水上街道より原良、小野及び西田、常盤方面の敵は今、日沒と共に一齊に運動を開始せしものゝ如し、その主力は甲突川右岸に在りて機を待つものゝ如し。兵力約五千、野砲八門を備ふ。……(讀み終る) うむ、味をやりをるわい、ハッハッハッ…… (報告書に走り書して少年

に渡し）御苦勞だつたのう。隊長に宜しく。（少年下手へ退場）

別府　いよ〳〵今夜ぢやのう。それにしても軍使に行つた山野田も河野もまだ歸つて來ぬが、どうしたのだらう。

野村　出かけて行つたのは晝飯食つて直ぐだつたらう。それにしてもあまり手間取るのは宜いことぢやない。川村さんの本營はどこにあるんぢや。（この時遠くにて小銃の音響く）

池上　敵のことぢやからはつきりは分らぬが、多分磯御殿であらうと思ふ。誰か夕方角矢倉の方から來た男があつたが、軍使の連中が若宮小路あたりを通つてゐるころ、銃聲がちよつと聞えたやうだつたと言ひよつたが、まさか白旗をかゝげて行つた軍使を殺すこともあるまい。

別府　それに川村中將は先生の御緣家だし、立派な人物だからなあ。

邊見　（席の上に起き）　諸君はまだ軍使の返事を待つてをるのか。すでに今夕、先生からはあのやうな悲壯な御決心の訓令も出てゐるぢやないか。おいどんは一刻も早くこの城山を枕に討死したい。

別府　吾々が討死をするのは最初からの覺悟ぢやが、たゞ先生を（西郷の方を向く、西郷は端然として本を讀み耽つてゐる）……先生は曠古の英傑、日本の土臺石だ。日本のために先生はなくてはならぬ唯一人の英雄だ。吾々は幾度死なうと、怨みも悲しみもせぬが先生をどうして殺すことができよう。吾々すべてが川村さんの陣へ行つて腹を切つても、先生一人をお助け申したい。（涙を落す）

邊見　おいどんも、その心に何のかはりがあらう。さう思つたればこそ、桐野には怒られたが諸君に贊成して、軍使を出すことにしたが、たとへ吾々の希望が川村さんに聽かれたとしても、先生がどうして吾々を捨てゝお一人で助かるやうなことをなさるものか。もし先生がそんなことをなさるくらゐの人間なら、最初から二月の出陣においたちと一緒に鹿兒島を立たれるものか。先生は最初から今日あるを知つてをられた。先生はおいたち一萬五千の薩摩隼人のために死んで下さるんだ。日本の西郷先生が、おいたちのために死んで下さるんだ。おいたちは日本で一番仕合せもんだ。

（別府等及び彈丸を作つてゐる少年等も暗然として俯向く。遠くから笛の音が聞えて來る。）

野村　誰か笛を吹いてるなあ。

別府　天吹の音ぢやなあ。

池上　明日の戰さが愉快でたまらぬといふので、下の方では若い者がみんな騷いどる。野村さん、あんただつたら

う、最前、大小荷駄本部の谷本六兵衞に歌を書いてやつて、本部の酒を出さしてしまつたのはハッハッハッ……。

野村　ハッハッハッ……でも今夜かぎりの命だもの、みんなに飲ませてやりたかつたので、それに今夜のこの月ではこたへられぬよのう。

池上　狙撃隊の方では蒲生さんが眞つ先になつて琵琶をやる、詩吟をやる盛んなものだや。みな元氣がいゝぞ。（不圖樟の下の少年たちを見て）おい、稚兒さんたち、彈丸の準備はどうぢや。

少年兵一　こゝに笊一ぱいだけ出來てをります。（笊をかかへて見せる）

池上　それだけが、明日の朝の戰さに使へるのか。（池上、別府等絕望的な表情）

少年兵二　昨日は敵が朝からたくさん城山を目がけて射撃をしてくれましたので、後で鍬を持つて行つて敵の彈丸を掘り出して拾うて來ましたが、今日はちつとも敵の方の彈丸が飛んで來ませんので、もう鉛もございません。

邊見　明日の朝になればおいたちの死骸の上に、敵の奴等の彈丸が山と積まれようにのうハッハッハッ……。

別府　もうよいわ、どうせ討死するんだから。今更幾ら殺生しても勝戰さにもなるまい。彈丸はそれだけでたくさんぢや。あんたらも下の方へ行つて、みんなと一緒に思ふ存分遊んだ方がいゝ。（少年等下手へ退場）

斥候有馬平八　（銃を擔ひ上手より走り登場。頭と手を繃帶してゐる）斥候報告ッ！

別府　どうだつた？　有馬さん！

斥候有馬平八　天神馬場、千石馬場、中福良區に亘り約三四千の敵が陣地を占領してをります。その右翼五六百の地點に野砲陣地らしいものが見えます。高見馬場附近には盛に蹄の音が聞えましたが、敵の前哨らしきものに遮られまして充分偵察することが出來ませんでした。（この間、池上、野村等一々地圖を案ずる）

別府　御苦勞でした。あんたも最う下の方へ行つて、みんなと一緒に遊んだがよい。

斥候有馬平八　はい、ありがたうございます。（樟の下に行き、銃の掃除をし終つて、銃を持つて、下手へ退場。遠くにて小銃の音しばらくつゞけさまに響く。人々耳を傾ける）

邊見　おう大分やつちよるぞ。斥候の衝突にしては少し念が入りすぎてるやうぢや。（丘の上の歩哨に聲をかける）おい、彥次郎さん、何か變つたことはないか。

少年歩哨　たゞ今川の岸を五六人走つて行く者があります。みんな刀を拔いてゐます。味方の人たちのやうです。

邊見　さうか。味方の若い者が月が良いのでわるさをして

ゐるのだなハッハッハッ……。
少年歩哨　その前を十人ばかりの敵の兵らしい者が逃げて行きます。銃は川向うから撃つてをります。
邊見　うむ。
少年歩哨　刀を抜いた男たちが川を渡つて行きます。あゝ切り込みました。（銃の音はげしく聞える）
邊見　うむ、勇ましいのう。おいどんもこの腕さへ動かせたら、思ふ存分切り入つてやるがのう。
山野田　（軍使山野田一輔上手よりあわたゞしく登場）　いや、みなさん、お待ちかねでございましたらう。（別府等の前に立つ）……實は河野と兩人で軍使だと名乗つて參りましたが、何を誤解いたしたのか小銃を撃ちかけたりしましたが、つひには二人を捕縛いたしまして紡績機械場の倉庫に押し込めるといふやうな亂暴です。しかし川村中將に逢ひましたら大變氣の毒がつて下されて、ともかく午後五時までに、先生、御自身川村さんの本營に（桐野利秋長劍を提げ上手より登場傍にありて聽く）おいであるか、或ひは御返答をといふことでございましたが、歸り途で再びわたくしは敵に捕へられ、河野はまだあちらに殘されて居るやうな次第で今では、萬事休したといふより他はありません。（人々溜息をつく）
邊見　いよ〳〵おいたちのために先生を殺さねばならぬのか！
池上　でもまだ敵の總攻撃までには時間もあらう。
山野田　朝の四時に總攻撃を開始するといふことでした。
邊見　四時ッ！
池上　でも、私學校の馬が一疋をる。あれを走らすればまだ間に合ふ。
桐野　ワッハッハッハッ……諸君は今になつてなほそのやうな女々しいことを語るのか。
池上　女々しいことではない。先生を殺すに忍びないからだッ！
桐野　では先生におたづねして見い。
別府　（痛む足を引き摺りつゝ小屋にゆく）　先生！
隆盛　（初めて書物から目を離す）　晉どん、何です？
別府　たゞ今軍使は歸りました。山野田が歸つてまゐりましたが、先生どうぞ川村中將の陣へ……。
隆盛　さつき軍使を出すと同時に、諸君には、訓令を出したであらう。わしの決心はあれより他にない。あんたらのやうな有爲の青年をみす〳〵殺してしまふのは忍び得ぬところぢやが、何も天運ぢや、あんたらわしと一緒に城山で討死して下さい。（隆盛小屋を出で正面へ出る）まだ攻撃が始まるまでには時間があらう、みんな下の方で酒でも飲んでおいでなさい。諸君のための最後の酒樽

が二本兵站部の方へ置いてある筈だから。桐野さんあんた下に行つて鐃を開いて下さい！（みな〳〵上手へ寄る）あつ、それから桐野さん、あんたの弟御も、さうぢやが、少年兵だけは今直ぐに、城山を落ちるやうに命じて下さい。あの人たちはたとへ官軍に捕へられても罰せらるゝことはあるまいと思ふから。若い人たちを殺すには忍びんでのう……。

桐野　でも、どうしても落ちません者は？

隆盛　あの立派な若者たちが生きのこつてくれるのは、日本のためなんだから。あの若い人たちの命はあの人たちの美しい魂と一緒に明日の日本のために殘して置くのが、わしらの義務でもあらうぢやないか。一萬五千の若い人たちをわしはむざ〳〵と殺してしまうた。わしはあんたたちを殺すために故郷に歸つて來たことになつてしまうた。あの若い人々の親御たちの心中を察するとわしはもう……。（暗然とする）さあみなさんあつちに行つて……。（一同退場、別府晋介と邊見十郎太は人の肩にたすけられて）

隆盛　（丘の徑へ歩み寄り、不圖そこに立つてゐる少年歩哨に氣付き）おう、そこに誰かをるのう。誰かなあ？

少年歩哨　わたくしでございます。

隆盛　おゝあんたは池田どんの……彦次郎さんぢやのう。あんたは幾つぢやつたかのう。

少年歩哨　十四歳でございます。

隆盛　十四歳……おつ母さんに逢ひたからうのうハッハッハッ……。

少年歩哨　…………。

隆盛　わし、ほんにあんたにお禮を言ひますぞ。さあ、その場所はわしがあづかつて、立つてゐるで、みんなと一緒にあつちで何か喰べてのう。それから桐野さんに話しといたから、あんた等少年組は攻撃が始まらぬうちに、こゝを落ちてください。一刻も早い方がよい。裏山の方に落ちればたいていい落ちのびられようから。

少年歩哨　（しづかに下手に退場）

村田新八　（少年と引きちがひに上手より登場。額を繃帶してゐる）先生ッ！　どこにおいでになります？

隆盛　村田さんか、こゝぢや。

村田　（臺の上のカンテラを持ち丘の方へ上つてゆく。懐から地圖を出して草の上に展げる。敵から見えないやうにカンテラの火をこちらに向けて地圖の横に置く）

隆盛　ではもう配備はすつかり整ひましたか。

村田　はい。さつき桐野さんとも御相談いたしまして、このやうにいたしました。（二人草の上にしやがむ。村田地圖を指す）

敵の陣地から申し上げます。これが水上街道でございますが、こゝの高地點から、この畑地を經まして、甲突川の右岸これが第一旅團らしうございます。この攻撃方向はこの突角らしうございます。

隆盛　第一旅團長は野津だつたのう。

村田　はい野津少將でございます。それからこれが多賀山になつてをりますが、これから鳥越坂、葛山の線にわたつてこれが、第四旅團らしうございます。この高地には山砲が二門、野砲が六門ばかりあるやうでございます。この道を出て、こゝに出て來るらしうございます。伊敷、丸岡、淨光明寺、この線に居りますのが第二旅團らしうございます。

隆盛　（うなづく）

村田　この線を山田少將の別動第二旅團が占領してをります。それから味方の方の配置は最初先生がお決め下すつたまゝになつてをります。たゞ蒲生さんの狙撃隊の位置が兵員の關係で少し左翼に寄りました。それから新照院越と夏陰下の橋口さんの持場がこれも右翼部隊の關係から、後方へ約二百ばかり引くことになりました……。（地圖を卷き懷に入れる）

隆盛　御苦勞でした。それで結構でせう。（笛の音やゝ近く響く）あんたとはずゐぶん長いお馴染でしたなあ。あんたがわしを訪ねて來て下されたのはわしがはじめて大島から歸つて來た時だつたが。あれからあんたと二人で京都へ急いで行つたのがあの雛のお節句の日だつたなあ。下の關まで九日の道中、菜の花と桃の花のなかを歩いてをるやうなものぢやつたが、あれから兵庫ではあんなことになつて、大久保がわしと刺しちがへて死なうというた。

村田　あのころは大久保さんも親切な人でございましたが……。

隆盛　今日でも大久保は親切な男だよ。

村田　でも先生を暗殺するやうにわざ〳〵東京から……。

隆盛　いや、あれは決して大久保の本意ではない。わしは信じてゐます。實際に證據も何もないのだからのう。あれこそ疑心暗鬼を生ずだ。わしが故鄉に歸つて來て、私學校を立てゝから、私學校の風を見て一番驚いたのは長州の連中だ。内務卿の大久保を突つついては、わしのことを批難したにちがひない。大久保は止むを得ない、私學校を調べに役人を送つたのぢや。きはめて單純な動機さ。大久保の命を受けた下々の役人どもが惡かつたのぢや。大久保の誠心を曲解したのぢや。何時も國を誤るのは上の心を曲解する下々の役人どもぢや。わしは大久保の立場を氣の毒に思ふ。おう（町の方を指し）あすこに

甲突川の白い磧が見える。霧が少しこめてゐるやうだが、水も昔のまゝに月の光りに映つてゐる。わしが生れた邸は、おうあの黒い木立がある。あの少し右手であらう。市藏の家は……あの銀杏樹のやうな木立がある。あの近くぢや。大久保とわしはようあの甲突川で相撲を取つたもんぢや。あのころは川村もわしらとあそこで相撲を取つた。川村の軍艦がもう三時間早く鹿兒島に着いてゐたら今度の戰爭は起らなかつたらうと、川村が、神戸から手紙を出しよつた。わしは人吉の陣中であの男の手紙を讀んだ。さういへばわしなり、篠原なりが、もう一日、鐵砲打ちから早く鹿兒島に戻つてをつたら、私學校の若い者を、かう怒らせることもなかつたらうがのうハッハッハッ……しかし何も彼も人生のことは運命だのう村田さん……。

村田　しかし運命とはあきらめますが、先生をこゝで殺さねばならぬかと思ひますと。（涙を拭ふ）

隆盛　愁をいへばかぎりはない。あんたは鬼界ケ島へ流され、わしは二度目の大島流し、あの時もう死んだ筈ぢやつたからのう。蛤御門でも死なず、伏見鳥羽でも、江戸城でも死なず……わしだけがかうして生きのびてゐるのぢやからのう……。

村田　先生もさすがに可愛ケ嶽ではまだ死にたうないやうに仰つしやいましたなハッハッハッ……。

隆盛　ハッハッハッ……。あんたぢやないがわしもあの時は故郷が懷かしかつたよ。

村田　死ぬなら、鹿兒島まで落ちて死なうと仰つしやいましたな。

隆盛　鹿兒島はやつぱりよいのう。あんたが江戸城の大廣間で、故郷に歸りたいというたが、わしも鹿兒島が好きぢや。かうして子供時代相撲を取つた甲突川に映る月の影を見て、櫻島を見て、……

村田　それにこの玉のやうに美しい南の故郷の空を見まして……。

隆盛　故郷の町を見ながら死ぬのは果報なことぢやのう………。

村田　先生、大分涼しい風が吹いてまゐりました。（笛の聲近づく）

隆盛　あゝもう秋ぢやからのう。（不圖人影を見て）誰ぢや、そこにゐるのは……。

菊一郎　（天吹を持ち、樟の木蔭より登場、足及び頭に繃帶をしてゐる）お父つあん、わたくしでございます。

隆盛　（なつかしさうに）菊一郎だつたか。どうだ傷は痛まぬか？（心配げに菊一郎の繃帶に觸つて見る）

菊一郎　はい、さほどでもありません。

村田　菊一郎さんは可愛ヶ嶽ですでに御戰死なすつたといふ噂まで傳はりましたのでしたが、よくまあお達者で、それまでにおなりでございましたなあ。

隆盛　運のよい奴ですハッハッハッ……お前だつたかさつきから笛を吹いてゐたのは？

菊一郎　はい、わたくしでございました。

村田　たいさうお上手ですなあ。

隆盛　大島にをつたころから天吹ばかり吹いてをつたのです。あの天吹はわしの祖父が初陣の時持つて行つたものださうですが、大島で菊一郎にやりましたが、今日まで壞しもせず吹いてをりますのぢや。妙な子で、笛がばかに好きでしてのう。（菊一郎を見て）お前みんなとあつちで騷いではゐなかつたのか。

菊一郎　わたくしは今夜になつて、いよ／＼今日きりで死ぬのだと思ひましたら、大島のことが思ひ出されまして、さつきからあすこの山の上で沖を見てゐました。

隆盛　あすこの山から……。

菊一郎　あすこの山の上から何だか大島が見えるやうな氣がしたのです。島は見えます。大島か何か知りませんが。だから、わたくしはさつきからあすこにしやがんでゐたのです。

村田　大島は菊一郎さんにはお懷しいでせうなあ。

菊一郎　わたくしは鹿兒島よりか、大島の方が懷しうございます。大島はわたくしの故郷ですから。

隆盛　（しばらく俯向いてゐたが伸び上つて沖の方を眺めようとする。しかし村田に憚るやうな態度で再び俯向いてしまふ）

菊一郎　おつ母さんは……お父さんが、二度目に島にお歸りになつた時、もう二度と大島からお離れになつてはいけませんと仰つしやつたさうですねえ……。

隆盛　女といふものはいつでもそんなことをいふものだよハッハッハッ……。（村田を見てきまり惡げに笑ふ）お前、大島に歸りたいか？

菊一郎　…………。（答へないで俯向く）

隆盛　わしと一緒に死ぬか。

菊一郎　はい。

隆盛　死ぬのはいやと思はぬか。

菊一郎　…………。（答へないで父の顏を見つめる）

隆盛　死んでくれるか。お父さんと一緒に。

菊一郎　はい。

隆盛　大島でも今夜はあの和尙や……三五郎や……みんなが月を眺めてゐるだらうのう……。

菊一郎　おつ母さんや妹も……。

村田　（背を向けてしまふ）

（桐野利秋、別府晋介、池上四郎等、新しき薩摩飛白に着替へて、袴を着、草鞋を穿いて登場。池上新らしく仕立卸した飛白の單衣、襦袢、脚絆を抱へて來る。）

桐野　先生、わたくし等はお先に着替へました。これですつかり仕度は出來ました。

隆盛　（丘より下りて來る）みんな涼しさうですなあハッハッハッ……。

桐野　さつぱりいたしました。先生どうぞお着替を……。

（池上、隆盛の前に着物を出す）

隆盛　ありがたう。（受け取つて臺の上に置く）

（丘の上を見る。菊一郎なほ沖の方を見つめてゐる。隆盛しばらく無言。）

（遠くて砲聲が聞える。近くて小銃の音がはげしく聞える。）

桐野　うむ、いよ〳〵攻撃を始めたなあ。（喊聲近く聞ゆ）うむ、直ぐ眞近くやつて來たな。（桐野、池上等丘の上へ走る）直ぐ下まで寄せてをります。（と隆盛を見る。隆盛うなづく。桐野丘より走り下りて、銃架の銃を掴み、笊の中の彈丸を握つて、丘の上からつゞけさまに射撃する）ぶう命中ツ！……。（二度撃つ）あつ、殘念……はづれた。（三度撃つ）うむ、倒れた……。（つゞけて撃つ）

隆盛　桐野さん、殺生はたいていにして、それぢや下の方へ行つて指揮をねがひます。

桐野　はい。（殘念さうに銃を置く。そこに國分壽介が傷き隆盛の前に來て、何か言はうとしたが言葉が出ない。しばらくもだえ、突然刀を胸に刺して倒れる。桐野はそれを見る）ちえツ、死ぬのはまだ早い。……（長刀を拔き、三四度地を打ち）諸君、先生のために最後まで戰はう。一人でも多く敵を叩つ切つて死ぬのぢや。諸君行かう！

（刀を揮つて上手へ入る。人々走り從ふ。少年等出で來り銃を取つて走る）

隆盛　（小屋の中から大刀を取り、舞臺中央に來り、銃聲を聽く、敵彈のため樟の枝折れる）

村田　（丘の上より）先生、大分戰は面白うなつてまゐりました。甲突川を眞つ黒になつて敵の大部隊が渡つてまゐりました。照國神社の前に火がつきました。（丘を走り下り）さあ、先生あちらへまゐりまして最後の一戰を………。

隆盛　（かろくうなづき、刀を持つたまゝ、砲聲を聽きつゝ）村田さん……。

村田　はい……。

隆盛　今、何時ですかのう？

村田　（懷より時計を出し、カンテラにて見る）今恰度三時五十五分でございます……。

隆盛　夜が明けるのも間があるまいのう。
村田　はい……。（隆盛を見送りつゝ涙を拭く）
隆盛　（上手へ二三歩行き、立ち止まり、振りかへつて丘の上を見る）
菊一郎　……。（丘の上に立つたまゝ沖の方を見つめてゐる）
隆盛　……。（村田を見て、再び上手へ歩む。村田隨ふ。空やゝ白みわたる）

――幕――

狂人となるまで（一幕）

時

現代。初冬のころ

登場人物

初瀬庸一郎（二十六歳）
妹　かな子（二十歳）
姉　豐子（三十七歳）
母　（五十六七歳）
姉婿　和田幸治（四十二三歳）
山上健助（三十歳）

場所

或る湖に近き田舍の町。地方の舊家らしき構へ

かなり廣い洋館造りの書齋、正面には窓がある。上手には扉口があつて、扉口から廊下になつて、日本風の部屋に連なつてゐる意。下手には窓及び扉がある。扉を明くれば庭になつてゐて、庭から湖の畔へ出られる。窓からは庭の落葉した木立をへだてゝ湖や、湖をめぐつてゐる山、畔湖の監獄のやゝ古びた煉瓦の塔のわづかに一部分だけが見える。遠い山にはすでに雪がつもつてゐる。空は夕燒けの色に燃えてゐる。下手にはピアノ、書棚、上手寄りにストーヴ。正面窓に沿うてソウファ、中央には椅子數脚、テーブル。テーブルの上にはマッチと水注子やコップが載せてある。ソウファには黑い毛糸のショールが懸けてある。ピアノの上の壁に額が懸けてある。その他には何の裝飾もない。全體がきはめて沈んだ薄暗い空氣につゝまれてゐる。

やゝ遠く監獄の鐘が靜かに鳴つてゐるまゝ幕が開く。

かな子（正面の窓によりかゝり背を向けて湖の方を見て、鐘の聲を聽いてゐる。可憐な女、どこかに腺病質的な弱弱しさがある。飛白の羽織を着てゐる。鐘止む。しばらく、間）

庸一郎（下手の扉を排して登場。蒼白な顏の神經質らしき男。非常に落ちついてゐるやうだが、時々暗い影に脅かされてゐるやうな眼をしては周圍を見廻す。帶がやゝ解けかゝつたやうな風になつてゐる、眼立つほどではないが。膝前が明きやすいのを時々氣にしては、掻き合せようとする）

（戸外を歩いてひどく疲れた風で、しづかに部屋の中を偸み見るやうな心持で扉を排して登場。かな子だけ

が一人でゐるのを見てほつと安心した態。）
（しばらく舞臺の中央に近くすゝみ寄つて、無言で、かな子の後ろから窓を通して湖や、監獄の塔をぢいつと見つめてゐる。）
かな子（兄が部屋にはいて來たことに氣がついて）おや、兄さん！
庸一郎（妹を見つめる）
かな子　あたし、ちつとも知らなかつたわ。今かへつていらしつたの？
庸一郎　あゝ。
かな子　どこにいつてらしたの？（兄の方へ近づく）
庸一郎（なほ湖や塔の方を見つめる）
かな子（窓の方を振りかへる。兄と同じやうに塔や湖を見る。不圖氣が付いて、氣の毒さうに兄を見る）あツ。あたしが悪うございました。カアテンをしめませう。（窓の方へ寄る）
庸一郎　かなちやんいゝよ、もうカアテンなんかしめなくつたつていゝよ。
かな子　二三日前まではこの窓を明けてもまだお庭の木の葉が繁つてゐましたので、湖もあの塔もよく見えなかつたのですが、一昨日のあらしで、一度に木の葉が落ちてしまつたので、すつかりどこも見えるやうになりましたの。
庸一郎　あの赤い塔が見えたつてもう何でもないよ。今まではあの塔を見ると、腹が立つやうであつたり、くやしかつたり、また氣の毒でたまらぬやうな氣がしてならなかつたが、もう何でもないよ。僕はもう大丈夫だよ。すつかり精神が落ちついたから、あの塔を見てゐても、何も彼も過去のことは、僕でもない、また蔦子でもない、第三者の出來事として、客觀的な立場から冷靜に考へることができるやうになつたから。
かな子　ほんたうに？　兄さんにできて、そんなことが？
庸一郎　大丈夫だよ。僕も男だ。もう三年もこんなくだらぬことで迷つたんだもの、どんなことがあつたつて、蔦子のことで二度と自分の心を苦しめるやうなことはしはしないよ。
かな子　それだとみんなどんなに喜ぶか知れませんわ。
庸一郎（正面の窓の傍のソウフアに腰を下す。かな子も兄に竝んで）かなちやんにもずゐぶん長いこと心配をかけたなあ。（妹の背を撫でゝやる。かな子俯向く）でも、もう大丈夫、兄さんも今度こそは思ひ切つて強くなつて働くよ。何も彼も忘れて。
かな子　ほんたうにさうだつたら、どんなにうれしいか知れないわ、兄さんにできて。

庸一郎　大丈夫だとも、安心してゐるがいゝ。
（立ち上り、ピアノの傍へ立つ。不圖ピアノの上の書物に氣付く。手に取る。ふたゝびピアノの上に置く。）
この本は三年前、かなちやんと蔦子と三人であの晩こゝで讀んだまゝだなあ。（窓を通して監獄の塔を見る）
かな子　あの晩は姉さんがピアノを彈いてくだすつたのねえ。（兄の傍に歩み寄る）
庸一郎　あの時のまゝだ。ピアノも、本も、あの夜のまゝだなあ。
かな子　あれつきり兄さんはこの本にもピアノにも、指一つ觸れることを誰にもゆるしてくださらないんですもの。
庸一郎　さうだつたなあ。三年目にかうやつてピアノの前にかなちやんと二人で立つたわけだなあ。ハツハツハツ……あの時のまゝに鍵がかゝつてゐる。（寂びしく笑ふ。塔の方を見る）
かな子　それで兄さんはどうなさるおつもり、姉さんを？
庸一郎　無論別れてしまふのさ。
かな子　兄さんにできて？
庸一郎　できるも、できないもないぢやないか。蔦子は法律上からいつてもすでに初瀨家の者ではないのだから。
かな子　でも兄さんは姉さんをそれほどやつぱり憎めて。憎んでゐらしつて今でも？
庸一郎　憎まないでをれろか。わたしをあの恐ろしい監獄の中に入れるやうなことをしたのも、初瀨家の名譽も社會上の地位も臺なしにしてしまつたのも蔦子ではないか。わたしといふものを一生日蔭者にしてしまつて、その上にあのやうな大それたことを仕出かした女を憎めないでをれるか？
かな子　でも兄さんは、口ではさう仰しやるけれど、……また御自分では憎んでゐらつしやるおつもりでせうけれど、ほんたうに憎めて姉さんが？
庸一郎　………。
かな子　兄さんにそれほどはつきりした決心がおありなら、何も今日までこんなに御自分おひとりで苦しんでゐらつしやる必要はないぢやありませんか。
庸一郎　…………。
かな子　あたしは兄さんがお氣の毒です。あたしには兄さんのお心持ちがわかります。だつて兄さんはこのごろまた毎日出かけてゐらつしやるんでせう？
庸一郎　どこに？
かな子　あの監獄の見張り臺の下をいつも兄さんは歩いてゐらつしやるでせう。
庸一郎　そりや歩いてるさ、家にゐても氣がくさ〳〵して

仕方がないんだもの。湖の岸を歩いてゐると氣がすうつとするやうだから。

かな子　いゝえ、湖ぢやありません。兄さんはこのごろ夕方にさへなればあの塔の下を歩いてゐらつしやるわ。今日だつて……。

庸一郎　かなちやん、笑つておくれでないよ。兄さんはやつぱり默目だ、ほんたうはまだ迷つてるんだよ。憎んでもゐるが、やつぱり意氣地なしなのか知らぬが……

かな子　まつたく姉さんもお可哀さうな方よ。

庸一郎　ぢやかなちやんは兄さんの心を笑ひはしないね。

かな子　えゝ、わたし兄さんに同情します。

庸一郎　ありがたうよ。家でも兄さんの心を掬んでくれるものはかなちやんばかりだから。兄さんはかなちやんひとりを賴りにしてるんだよ。

かな子　姉さんはいつまであすこにはいつてゐなければならないのでせう？（塔の方を見る）

庸一郎　もう二ケ年位ぐらゐは。

かな子　まあそんなに長く。

庸一郎　弱いからだゞから、それまでにからだの方がまゐつてしまひはしないかと思ふ。

かな子　可哀さうねえ。でも、あすこを出て來なすつてから、どうなさるでせう。家のおつ母さんだつて、豐姉さんだつて、蔦姉さんをやつぱり敵のやうに思つてゐらつしやるんですから。

庸一郎　まつたくだよ。わたしたちはどうなるんだか、明日のことを考へると墓穴の中にでも引き摺られて行くやうな氣がする。たゞかうやつて毎日同じ窓から同じ塔を見て、同じあの鐘の音を聽いてゐる間に一歩々々、眞つ暗なところに連れられてゆくやうな氣がしてならぬ。

かな子　ほんたうにどうなるんでせうね。

庸一郎　強い人たちは自分で自分の思ふ通りの道を切り拓いてゆく。人が苦しまうと、人が死なうと、世間の人が何と言はうと、そんなことはおかまひなしに、ぐん／＼自分勝手なことをしてゆく。兄さんもそんな人間になりたい。勝手なことをして見たい。思ふ存分のことを誰にも憚らないでやつて見たい。

かな子　だつてそんな非道いことがあたしたちにできるものですか。狂人にでもならなくつちやねえ。……お父さんがあんなことになつたのも、やつぱり人が善くて、氣が弱かつたからですよ。お父さんも氣でも狂ひなすつたら、あんなことをなさる必要もなかつたでせうに。（ちよつとピアノの上の額に見入る）

庸一郎　狂人ッ！（しばらく遠くの空に見入る。夕焼の空ます／＼赤く燃える）さうだ、狂人にでもならなければや、

わたしたちのやうな弱蟲には何もできないねえ。

かな子　あたし狂人になつてもいゝから、自分の嫌ひな人なんかには思ふ存分言ひたいことを言つてやりたいと思ふわ。

庸一郎　愉快だねえ、自分の思つてゐること、自分がしたいと思つてゐることが一度でも出來たら。どんなに愉快だらう。思ふ存分人をいぢめた奴等をいぢめかへしてやれたら。あいつ等を思ふ存分……一生にたゞ一度でいゝから思ふ存分……(ひどく昂奮して一點を凝視する。かな子、兄の眼を見て驚く)

かな子　兄さんツ！

庸一郎　(妹を見る。さらに深い絶望的な表情にかへる)

かな子　兄さん、もうあまりいろんなことをお考へにならない方がようござんすよ。先生もさういつておいでゞしたよ。兄さんはすつかりおからだが惡くなつておいでだから、何も考へないで氣をゆつたりしてゐなければいけないつて。どこか溫泉にでも行くといゝんですわ。

庸一郎　駄目だよ。兄さんはこゝの窓からあの塔を見たり、あの鐘を聽いたりするのが苦しくてならなかつたので、ほら城崎にも行つたことがあつたらう、伊豆にも行つたよ、だけど駄目だつた。夕方になると却つてあの塔も見えず、あの鐘の音も聞えないところには、とても居られないんだ。あの塔を見てゐれば、鐘の音を聽いてゐれば、ずた〱に自分の魂を削られてゐるやうな氣がするんだが、やつぱり一日でもあいつでもつて自分の魂をちく〱痛めつけられないと却つて物足りないやうな寂しい氣がしてならないんだよ。(再びだん〱昂奮して來る)

かな子　(驚いて)　兄さんすこしおやすみになつたらどうです。お疲れなすつたでせう。あゝ、お裾に枯れ草の葉がついてゐますわ。とつて上げませう。(兄の裾をはたく)

庸一郎　ずつと水際のところを歩いたので、葦の葉がくつついたのかも知れない。

かな子　さあ、少しおやすみなさい。ソウファの上でいゝでせう。橫におなんなさいよ。

庸一郎　橫になつて眠れるといゝんだがなあ。眠れる人がうらやましい。この幾年といふもの一度だつてぐつすり眠つたことはないんだからなあ。(ソウファの上に橫になる)

かな子　ほんたうにねえ、姉さんをお貰ひになるまでにもあんなことで兄さんはひどい神經衰弱になつてずゐぶん眠れませんでしたねえ。思ひがかなつて姉さんと一緒になつたと思ふと直きにまたあんなことで、あれからはまたすこしもおち〱お眠りにもならないのねえ。

庸一郎　ひと思ひに咽喉でも撃つか。（ピストルで咽喉を打つ眞似をする）

かな子　まあそんなことを。

庸一郎　まるで頭が割れさうだよ。

かな子　お可哀さうに。この二三日また夜つぴてちつともおよれないやうね。

庸一郎　また今夜も眠れまい。夜が來るのが恐ろしい。

かな子　…………。

（兄をいたはり、ソウフアの上の黒い毛糸のショールを肩から掛けてやる。）

庸一郎　（塔の方を見る。日がすつかり暮れてしまふ）ああ耐らない。頭の心がどうかなつたのかなあ。深い墓穴の底にでも引き摺られてゆくやうだ。耐らない。（頭をもみくちやにしてソウフアに體を投げかける）

かな子　ねえ、眠れなくつてもいゝから、すこし横になつて何も考へないでゐらつしやいよ。でないととても兄さんのおからだがつゞきませんよ。この二三日殊に兄さんは昂奮しつゞけてゐらつしやるんですから、いろ〳〵な問題ばかしで。（黒いショールをさらに掛け直してやる）

庸一郎　かなちやん、ありがたう。兄さんも實際自分で自分の心がわからなくなつちやつたんだから。（手の甲で涙を拭く）

（ソウフアに俯向いてしまつてゐるが泣いてゐることが肩の筋肉の顫動で知れる。）

かな子　（すべての窓のカアテンを締めてしまふ。ストーヴの前にしやがみ火を焚く）

（舞臺はしばらく暗い。）

（電燈がつく。）

（上手の扉を排し、母、豊子、和田幸治登場。）

（母は大島を着てゐる。豊子と和田は紋附を着てゐる。）

母　庸一郎はおゐでかい？

（庸一郎は人の跫音に起き上らうとしたが、ふたゝび眼をつむつてソウフアに凭りかゝつてゐる。）

かな子　なあにお母さん？

母　ちつと兄さんにお話があるんだが……。

かな子　だつて可哀さうよ兄さんは、今眠つたばかりで、疲れてゐらつしやるんですから。

母　それもさうだがせつかく心配をして和田の兄さんも來て下すつたのだから、ちよつと起きてもらひたいんだよ。

かな子　それに二三日兄さんはよつぽどどうかしてゐらしつてよ。あたし心配でならないの。今日も朝から頭が痛んで仕方がないつていつてらしつてよ。

豊子　そんなら思ひ切つて運動でもすればいゝんだわ。

かな子　だつて姉さん。

和田　それぢや、また明日にでも。

母　いゝえ、せつかくいらしつてくだすつたんですし、またあんまり延ばしても置けない話ですから。庸一郎ッ！

（ソウフアの傍に寄る）

庸一郎　おつ母さんですか。これは、兄さん、姉さんも。失敬しました。さあどうぞ。

（姉と和田は中央の椅子に凭る。母はソウフアに近く椅子を寄せて腰掛ける。庸一郎はソウフアに。）

母　かな子、お前さんはストーヴの火が焚きついたらちよつとあちらのお座敷の方が散らかつてゐたから、片付けといておくれ。

かな子　はい。（母や姉の顔を見、不審さうに上手の扉より退場）

母　實は今日兄さんがかな子の縁談のことについて、わざわざ姉さんと二人で來て下すつたんだがねえ。

豐子　庸さんの考へもちよつと聞いて置きたいと思つてやつて來ましたのさ。

庸一郎　かなちやんの縁談ですつて？　で、先方は？

母　ほら、こなひだも話のあつた大阪の方さ。

庸一郎　ほら大阪の方つて、あの船問屋の若主人といふのですか？（ちよつと耐らなく不愉快な顔をする）

母　兄さんはわざ〳〵お忙しいのにこのほどから三度も大阪まで出かけて下すつたんだよ。

庸一郎　そりや、ありがたいことですが、あの話でしたらお斷りいたした筈ぢやありませんか。

母　そりやさうだつたけれどね、先方から再三再四兄さんの方へ人が來てぜひかな子をくれと仰しやるんだから。

豐子　それにねえ、かなちやんだつてもうあんまり早いといふ年でもないんだから。それに……。

庸一郎　それに家のやうにだん〳〵貧乏になつて、おまけにわたしのやうな馬鹿がゐたゝめに社會上の名譽も失つてしまつたし、どうせ碌な家からは貰ひに來てくれないからといふんでせう。

豐子　庸さん、變なことをおいひだね。そんなつもりで…………。

和田　（豐子をたしなめて）お前までがそんなことを言つたんぢや、話はできぬ。ねえ、庸一郎さん、何分先方は俄富限者、まあ言つて見れば成金です。それに當人も成るほど女など隱して持つてゐたこともあるさうですが、今ではもう自分でも後悔してるんですし……。

母　それにやつぱり立派な大學も出ておいでだし。

庸一郎　それに大變な物持ちなんでせう、ハッハッハッ…………。

豐子　庸さん、せつかくかうやつて和田も骨を折つて上げてるのに、茶化すやうなことはお止しなさい。

庸一郎　茶化しはしませんよ。眞劍ですよ。だから、僕はそんな金持ちなんか大嫌ひだといふんです。

和田　庸一郎さん、お金持ちだからといふわけではございません。第一人物が……。

庸一郎　さうです、あんなに、幾人も女を拵へて平氣なやうな人物は僕大嫌ひです。

和田　でもそれだけ將來財界に出ましても。

庸一郎　うまく世間をごましてえらくなれるといふのでせう。だから僕大嫌ひだといふのです。

母　庸一郎ッ！

豐子　庸さんは無茶苦茶ですよ。そんな理窟はこの狹い部屋の中だけは通りませうが、世間はそれでは通りませんよ。

庸一郎　通らなければ僕は一生でもこの部屋の中にゐますよ。

豐子　あんたはそれでいゝだらうが、かな子はどうします。

庸一郎　かな子は僕のたゞ一人の妹ですから、僕がいゝやうにしてやります。

豐子　ぢや、和田やあたしたちが御相談するのは餘計なことなんですねえ。

庸一郎　まあ、さういつたものです。

母　まあ、庸一郎ッ、お前さんは何といふ……。

豐子　おつ母さんようござんすよ。これほど馬鹿にされゝば和田だつて、あたしだつてもう二度とこゝにはまゐりませんよ。（くやしさうに涙を拭く）

母　この人は二三日頭の具合が惡いんですから、どうぞ惡く思はないでください。

和田　さうですとも、豐子が少し何ですから。

豐子　いゝえ誰が二度と來るものですか。庸さん、あなたは立派な兄さんだからかな子を立派なところに片付けておやんなさい。

庸一郎　あゝ、立派な兄さんですよ、監獄の門もくゞつて來ましたし……。

豐子　あたしはそんなつもりで……。

庸一郎　えゝ、よくわかつてゐます。それからわたくしの妻は、わたくしが監獄で苦しんでゐる間にわたくしを裏切つて、他人の赤ん坊を產んで……。

母　まあお前そんなことを……。

庸一郎　誰だつて知つてまさあ。その赤ん坊を壓し殺して、湖に捨てゝ、死にそこねて、監獄に行きました。（ひどく昂奮する）

母　もうそんなことはお止めよ、庸一郎ッ！

庸一郎　言ひたいだけ言はしてください。（涙を拭く）
豐子　意氣地なしのくせにおしやべりだけはできるのね。
和田　豐子ッ！
庸一郎　さうです、意氣地なしです。あの女のために監獄にまではいつて、その上、あの女には裏切られて、それでもあの女を捨てきれないんですから。
母　まあ！
豐子　まあ、まだ蔦ちやんのことを思つてゐるの　あんたは？　今まで三年が間ぶら〳〵してゐるのは自分が監獄にはいつたり、蔦子があんなふしだらをしでかしたので世間に申しわけがないからだとばかり思つてゐたに！
庸一郎　僕もはじめはさうだつたのです。……（やゝ皮肉に）だけど三年の間には僕の心持は大分かはつて來ました。三年の間といふが、つい今しがた、姉さんなんかゞこの部屋にはいつて來ないまでは僕は半分はあいつを憎み、半分は氣の毒たと思つてゐました。自分で自分の心をどうすることもできないで苦しんでゐました。それがかうやつて姉さんなんかと話してゐると、姉さんなんかのその善人らしい冷たい眼を見たり、その賢人らしい言葉を聽いたりしてゐると、蔦子のあのころの心持ちがいぢらしくなつて來たのです。
豐子　では、あのころあたしたちが蔦ちやんに冷淡だつたから、蔦ちやんがあんなことをしでかしたといふの？
庸一郎　冷淡ではなかつたでせう。僕が監獄にゐた間、あなたがたは正しい眼で、正しい言葉で蔦子を取り扱つてゐてくだすつたんでせう。しかし蔦子ならずとも、僕だつてあなた方の賢さうな言葉や善人振つた眼を見ると息がつまりさうになります。
豐子　お生憎さまね、蔦ちやんのやうな美しい眼でなくて。
庸一郎　ほら、そんな眼をされたゞけでも反抗したくなる。僕は今日、今からすつかり蔦子に同情します。どんなに蔦子が悪い女であつたにしろ、僕に隱して惡いことをしてくれたにせよ、あなた方にわからない温かいところが僕にはわかつてゐたんです。
豐子　この人はほんたうに面白い人だよ。あれほどあんたを嫌つてゐたんぢやないか結婚するまでは。
庸一郎　嫌つてゐたんぢやありません。僕を嫌はせるやうに、嫌はせるやうにと仕向けた人たちがあつたから、一時は僕のところから離れてしまつたのでした。ほんたうに嫌つてゐたんならどうして十年も十一年もの間僕の手紙や寫眞を一枚殘らずあんなに大事にしてとつといたのです。
豐子　何でもいゝさ。あんたはもう氣が狂れてるんだから。
庸一郎　さう、僕は氣が狂れてるかも知れません。今日ま

で氣が狂れなかつたのが不思議です。
豐子　今になつても蔦子のことを思ひ出すなんてお笑ひ草だわ。
庸一郎　今になつてもぢやありません。今日姉さんたちと話してゐてはじめて決心したんです。
豐子　何ですと？
庸一郎　何でも彼でも蔦子には惡いところはない。もう一度蔦子をこゝの家へ連れて來ます。
豐子　狂人のやうなことを考へるのは止したがいゝでせう。
母　まあそんなことが……
庸一郎　いや、僕は姉さん方の御親切に對してゞも蔦子を監獄から連れもどして來ます。僕には今すつかり決心がつきました。姉さん、おつ母さんありがたう。
和田　庸一郎さん、ほんたうにあなたは少し昂奮し過ぎてゐらつしやる。今日は靜かにお休みなさいね。わたしの飛んだおせつかいのために、あなたの感情を惡くしました。少し靜かにお休みなさい。
母　それがいゝよ。こんな話はまたいつでもできることだし、ほんたうに顏の色がたいへん惡い。苦しさうだが、大丈夫かい？　先生に來て貰ひませうか？（ソウファに腰を下させる。額に手を當てゝ見たり、肩を撫てゝやつたりする）まあ、すつかり瘦せてしまつたねえ。
（庸一郎うつむいてしまふ。母、袖口でそつと涙を拭ふ。）
（扉を叩く音。）
和田　おはいりなさい。
かな子（上手より登場。蒼ざめた顏）お客さまです。
和田　どなたです？
かな子　兄さんの！
母　兄さんのお友達ッ！
かな子　山上さんですッ！
母　山上さんッ！
（和田、豐子みな〳〵驚く。）
豐子　あのならず者が！　あたしたちの家をこんなに不幸に陷れたのもみんなあの男のせゐです。それだのによくどんな顏をしておめ〳〵とあたしたちの家へ。
和田　あの男かい？（豐子に眼くばせする）
豐子　えゝ。（低い聲でさゝやく）
和田　庸一郎さんどうします。追ひかへした方がよくはありませんか。それともこゝに引つ張つて來て、わたしが面罵してやりませうか。（ひどく昂奮する）
母　まあ、體よくお斷りしたがいゝだらう。
（この間庸一郎はしばらくぢいつとして床の上を見つ

めてゐる。まるで放心したもの丶やうに。)

かな子　では、おかへししませうか。(不安な面持ちにて扉の方へゆきかゝる)

(しばらく沈默がつゞく。みな〳〵庸一郎を見つめる。庸一郎決心したる態にて。)

庸一郎　いや、逢ひませう。

母　お前逢ふのかい？　大丈夫かい？　大變顏色が惡いし。

かな子　それに二三日眠れないんでせう。頭が痛いつてばかり言つてゐるんですよ兄さんは……。

母　お斷りしときな。

和田　それがいゝでせう。もしものことがあるといけないから……。

庸一郎　大丈夫でせう。逢つて見ます。(ソウフアから立ち上がる。膝頭がかるく顫へる)

母　大丈夫かい？

庸一郎　えゝ、大丈夫です。

母　逢はない方がいゝんだがなあ。

和田　ぢや、わたしがこゝに一緒にゐませう。

母　さうして下さると安心です。あんな惡漢は何を仕出かすか知れないから。

庸一郎　兄さんありがたう。しかしやつぱり僕ひとりで逢ひませう。それの方がいゝでせう。どうぞあちらへ。

和田　さうですか。ぢやみんなあちらへまゐりませう。

(一同上手へ退場。)

庸一郎　(部屋の中を歩きまはる。ひどく昂奮してゐるのを、強ひて隱さうとする。中央のテーブルの上のコップを握つて、水を飲まうとするが、手がわな〳〵顫へてコップと水注子が打ち突かる音が聞える。つとめて氣を落ちつかせようとする)

(書棚を明け、鍵を出し、ピアノを明けて、ピアノの前に腰を下し、たゞ一つキイを叩く。部屋中に重苦しい音がたゞ一度響く。音はなるべく鈍重な感じを起させるものがいゝ。)

(つまらなさうに起き上つて、下手のカアテンを明ける。次にまた中央に來てカアテンを明ける。戸外には月の光りが水のやうに流れてゐる。部屋の中の明りが暗くなつて、月の光りが部屋の中にも青く流れて來る。監獄の塔が月の光りの中にかすかに見える。中央に立ち止まつて上手の扉口を見つめてゐる。)

(上手の扉を排して、山上登場。背の高い、逞しい筋肉を持つた男。日焦けした顏には漆黑の鬚がある。茶がかつた背廣を着て、上からは駱駝のオーヴアを引つかけてゐる。)

山上　(扉口のところで立ち止まる)　やあ、しばらく……。

（對手がぢいつと自分を見つめたまゝてゐるので、ちよつと手持無沙汰を感じたらしい形。）

庸一郎　（きはめて神經質らしく脣を顫はせて）しばらくでした。おかけなさい。（中央のテーブルに近く椅子をすゝめる）

山上　やあ、ありがたう。

（オーヴアを脱いで一つの椅子に掛けて置く。）

（きよろ／＼と部屋の中を見まはす。窓の外を見まはす。）

夜分でよく見えないが、いゝ景色らしいな。あゝあれが湖だなあ。僕は中學時代に一二度君のところを訪ねたことはあつたが、この部屋ははじめてだなあ。

庸一郎　さうだよ。

山上　いゝ部屋だなあ。これは君のお父さんの書齋だつたのだなあ。

庸一郎　さうだよ。

山上　おや、何かい、やつぱりこの部屋でお父さんは……いやこんなことを言つて君の心の古い苦痛を新らしくさせてはすまぬが……。

庸一郎　これほどの苦痛な思ひをさせといて、今更、それくらゐのことで、僕を苦しめるのが氣にかゝるのかい？

（皮肉さうに笑ふ。膝頭や手が顫へる）

山上　いや、さう言はれるとまつたく面目ないが、僕だつてたまには殊勝な心持ちになることもあるよ。君のお父さんが山を崩して、あの湖の岸にずゐぶん廣い新田を作られたといふことや、こゝの書齋でピストルで自殺をされたといふことは父や母たちからもよく聞かされたよ。

（ピアノの上の壁の額を見て。）

あれだな、この部屋で自殺された君のお父さんは？

（ピアノへ近く歩み寄り、額を覗く。）

あゝやつぱり君に似てゐる。いゝ男だな。しかし、君と同じやうに神經質らしいな。ハムレット見たいなところがあるなあ。

庸一郎　さうだよ。父も苦しんだ人らしいからなあ。僕の家は昔はずゐぶん大きな家だつたさうだから。その大きな家を支へてゆくには父はあまり氣の弱い人だつたのだよ。氣が弱くつて、先祖からの重い社會的な地位だの、名聞だのばかし負はせられるのは子孫としてはまつたく迷惑なことだよ。たいていの人間はハムレットになつてしまふよ。

山上　そこで君がまた第二世のハムレットといふわけだねえハツハツハツ……

庸一郎　もう僕をいぢめるのは大概にしといてくれ給へ、僕は氣でも狂ひさうだから。僕は君に、よく僕の家を訪

ねて來る勇氣があると思ふよ。

山上　君に決鬪でも申し込まれるとでも僕が思つちやゐないかといふのかい？

庸一郎　まさかッ。（皮肉さうに笑ふ）

山上　よくのめ／＼とこんな面をしてやつて來られたものだといふのだらう。つまり良心があるかつていふのだらう？

庸一郎　…………。

山上　そりや、良心もあるさ。しかし僕のやうに體中がひびだらけになつたものは、良心のことなんか考へてゐた日には一日でも生きてをられはしないからなあ。

庸一郎　ぢや君は四度も僕の手から、銀行の金をあれほど摑み出してしまつて、僕をあの恐ろしい監獄の中に叩き込んで、蔦子の肉體まで弄んで、しまひには蔦子にまであのやうな大それたことをさしといても、それでもなほ、僕等のことを氣の毒とも何とも思つてゐないのかッ？

山上　君も一度あの暗いところにはいつて來たので大分修業が積んだぞ。大分男らしくなつたなあ。僕の前ではまるで處女のやうだつたが、えらいッ。僕の前で昂奮するだけになつたのは……。（テーブルの上からマッチを取つて煙草を喫ふ）そりや、僕だつて人間だから幾分良心もあるさ。しかし、今言つたやうに良心を賣り物にしとつたんぢやまつたく生きてゆけないからな。實は今日だつてこゝに來るのは、何も君を苦しめてやらうと思つて來たわけぢやないさ。やつぱり生きてゆくためにはどうしても今日君に逢つて、最後に尚一度僕の無心を聽いていたゞかなくつちやならないので來たんだよ。

庸一郎　最後の無心つて！

山上　さうだよ、最後の無心だよ。僕もあれから生まれたこの土地にもをられず、大阪にも行き、それから東京へも行つたが、どうも面白いことはなく、今度は一つ滿洲にでも行つてうんと稼ぐつもりだ。それで實は君に旅費を百兩ばかりどうかしていたゞきたいんだよ。

庸一郎　今の僕にはそんな金はないよ。

山上　さうかも知れぬが、今度だけどうかしてくれ。

庸一郎　もう君に上げる金なんか一文だつてないよ。僕の一生は臺なしにされるし、蔦子までがあんなに……。

山上　僕が君等の一生を臺なしにしてしまつたといふのだらう。そりやわかつてるよ。どこまでも責任は負ふよ。しかし僕にも少しは言はしてくれ給へ。君等は代々大地主、大金持ちの若様で育つて來て、子供の時から誰にでも頭は下げられるしさ。それに比べると僕のやうな水飲百姓の子は生まれて來るからまるで人間あつかひはされないんだからなあ。僕が四年生だつた、君が一年生だつ

たか。君は美少年だつたからなあ。あのころから僕は金持ちの坊つちやんの君がうらやましかつたよ。中學では僕は落ちたので君とはたゞ一つしかクラスはちがはなかつた。僕はもうあの頃は色氣づいてゐたのさ。大金持ちの坊つちやんの君がお蔦さんなんかと自由に交際出來るのに、僕のやうな身分のやつは振りかへつてもくれる者はないんだ。あのころからだよ、僕は美少年で、素直で、男にも女にも可愛がられる君を目の敵のやうに思ひ出して來たのは。

庸一郎　君はよくあのころから僕を脅かしたよ、短刀なんか待つて來て。僕はまるでメスメリズムにかゝつてゐたんだよ、こなひだまで、

山上　今でもまださうだよ。

庸一郎　そいつは君も自分の力を信じ過ぎてゐる。

山上　さあ、そいつはどうだかな。それはどうでもいゝが、僕はうれしかつたねえ、短刀さへ持つてゆけば君が僕の前にどうでもなるんだから。僕はお金持ちだの、舊家だのといふことが可笑しくなつて來た。短刀さへあれば世の中のこと何一つ出來ないことはないと信ずるやうになつた。

庸一郎　君は銀行の支配人の部屋に僕一人ゐる時はいり込んで來たんだつたね。

山上　朝の八時ころから、君、前の材木屋の蔭に隱れてゐて、午後の三時だつたよ、君一人が支配人の部屋にゐるのをたしかめてはいつて行つたのは。實際、あの社長がゐたんぢや、いくらお蔦さんが僕を證明してくれても、君だつてあれだけの金を無擔保で貸し出すことはできないことだつたからなあ。

庸一郎　君は僕に金庫の戸を開けさせて、抱へ切れないほどの金を持つて行つた。

山上　だつて君、蔦子さんが僕を保證してくれたからぢやないか。

庸一郎　蔦子が君に貸して上げてくださいといふことは幾度も僕に話してゐた。あの時はもう蔦子はすつかり君の命ずるまゝになつてゐた。君のメスメリズムにかゝつてゐたのだつた。

山上　メスメリズムぢやない。僕を戀するやうになつてゐたんだよ。

庸一郎　戀ではない。

山上　戀だよ。僕を戀してゐたればこそ君を裏切つたのだよ。

庸一郎　裏切つたのぢやない。君に脅迫されたんだよ。

山上　ハツハツハツ……まあ何でもいゝ、君のいゝやうに解釋したまへ。ともかく僕は貧乏人の子として、金錢上

で思ふ存分君に復讐することができたと思つた。また戀にも打ち勝つことができたと思つた。さうなつて來ると、ますます深く君の心の底に喰ひ入つてゆきたくなつた。君の骨までもしやぶつてしまひたいと思つた。僕の短刀の前に小さく顫へてゐる意氣地なしのお金持ちの坊つちやんを見るのが愉快でならなかつた。外國では赤ん坊にナイフを突き刺して、ひいひいいふ赤ん坊の泣き聲を聽かねば胸がすかないといふ囚人があつたさうだが、僕なんかもそれなんだなあ。子供の時から誰一人ちやほやしてくれるものもなかつたので、自然、かうひねくれて來たんだなあ。ともかくも大金持ちのお坊ちやん、美少年ではやし立てられてゐる君を、いぢめつけて、君がひいひいいふのを見ると胸がすくのだ。二度目に銀行に行つたなあ。あの時も金庫の金をすつかり持ち出した。四度目には、君もさすがにちよつと抵抗しようとしたなあ。しかし僕の短刀の前にはひとたまりもなかつた。君が監獄に打ち込まれたといふことを聽いた時はちよつと可哀さうにもなつたが、君のお母さんや親戚で、銀行の金を辨償して君が監獄から出されると聽いた時は癪にさはつたよ。金持ちといふ奴は監獄内の時間さへ自由に買ふことができるかと思ふと癪にさはつたよ。だけどあの時はもうお蔦さんは僕の子供を持つてゐたからなあ、僕はえらい復讐ができたやうでうれしかつたよ。

庸一郎　もう止してくれ。君は惡魔だ。

山上　惡魔ツ！　そんな名は君等のやうに神なんていふものを擔ぎ出す人間には不快な言葉だらうが、僕等のやうな人間には一番ありがたい言葉なんだよ。

庸一郎　脅迫で女を奪つて置いて、それが何で僕に對する復讐なものかッ！

山上　脅迫ッ？　馬鹿なことを！　君こそ自惚れてるんだよ。君が尚少し監獄から出て來なかつたら、僕はお蔦さんをつれて東京か何處かに逃げる約束までしてゐたんだよ。脅迫でそんなことができるものか。第一僕の子供を生むまでになつたといふことだけでもお蔦さんがどれほど僕を頼つてゐたかといふことがわかるぢやないか。もし脅迫であつたとしたらお蔦さんだつて早く子供の處置をどうかするくらゐのことは知つてる筈だよ。ほんたうに脅迫で僕とあゝなつたとしたらもつと早く君に訴へる筈ぢやないか。君は女といふものをエンゼルか何んぞのやうに空想してるんだ。君はよつぽどお目出度い詩人だなあハッハッハッ……心をゆるしていゝ女が世界中に一人だつてあるものか。

庸一郎　…………。

山上　君はチエホフの『熊』といふ芝居を知つてるだらう。

女はあれだよ。今喪服を着て、右の手に亡くなつた男の寫眞をかゝへて尼寺にゆく氣でゐるが、左の手を握つて柔かなお手でございますねえ、何といふ立派なお眼でせうとでもいふ男が出て來れば、もう尼寺行きはお止めにするんだよ。君はやつぱりお坊ちやんだなあハッハッハッ……。

庸一郎　それぢや君は蔦子を自分のものにしてからでも、やつぱりそんな女と思つて一緒になるつもりだつたのか？

山上　そりやあ無論さ。だからお蔦さんが僕のものになつても、今度はお蔦さんに裏切られぬうちに、こつちからお蔦さんを捨てゝしまふのさ。

庸一郎　ぢや、今では君は蔦子があの湖のそばの塔の中に苦しんでゐるのを何とも思つてはゐないのかい？

山上　まだお蔦さんはあの監獄にゐるのかい？　道理でさつきから君が、センチメンタルな眼をしてあの塔の方ばかり見てゐると思つた。あゝ、君はあれから今日まで三年間といふものこゝの一室に立て籠つて、こゝの窓からあの塔ばかり眺めてゐたんだなあ。對手の女はどんなことを考へてゐるかわかるものか。君がその蒼い顔をしてあの塔を眺めてゐる時、お蔦さんは僕のことでも考へてゐたにちがひない。お氣の毒さまだ。

庸一郎　君はまだそんなことを言つてゐるのか。あれほど蔦子を苦しめて置いて。

山上　そりや、女が馬鹿だからさ。君と同じやうに自惚れが強いからさ。大金持ちのお孃さんだからさ。

庸一郎　見たまへ、あの廊下の向うを。（上手、扉の方を指さす）あの部屋だつた。恰度今夜のやうな靜かな月の夜であつた。僕は、あれつきり一度も蔦子と同じ部屋では寢なかつた。あの時、僕がもすこし寛大であつたらあんな悲しいことを仕出かさないですんだのだつたが今思ひ出してもぞつとする。あの部屋の疊を上げて、その下でたうとう君の子供を殺したんだ。……（眼を掩ふ。ひどく昂奮する）僕はその夜もすこしも眠れなかつたので、この部屋に寢てゐても、蔦子が何をしてゐるかといふことはよくわかつてゐた。蔦子があの部屋で指一つ動かしても、僕の神經はそれを感じてゐた。僕は自分の心に聽いても、あの時の自分を疚しくないと信じてゐたい。しかしそれは嘘た。僕もまだあの時は、蔦子を今日ほど強く愛してゐなかつた。實はさつき姉に逢つた。その時から一層蔦子を愛するやうになつた。それからまた君に逢つた。そしたら尙一層蔦子を愛するやうになつた。もしあの時、僕に、今感じてゐるほどの愛があつたら、蔦子にあんな悲しい思ひをさせることはなかつたのに。僕は君を恨ん

でゐた。蔦子を惱んでゐた。だから僕は恐ろしい豫感を持ちながらも起きてはゆかなかつた。僕は最後に赤ん坊が欅の下で呻いたのを知つてゐる。それでも僕は蔦子を引きとめにゆかなかつた。僕はッ……僕はッ……。（髪をもみくちやに掴む。泣く）蔦子ッ！　勘忍してくれ！　蔦子ッ！……（窓の方へ走り寄る）あの塔の下に、今、蔦子かッ！……ほんたうのことをいふと僕自身、君と同じやうに蔦子をあの塔の下に押し込んでしまつたのだ。もう蔦子は歸つて來られないかも知れぬ。あの塔の下で死ぬかも知れぬ！

蔦子ッ！

（ふたゝび自分の髪を掴む。もだえる。そのはずみに懷からピストルが落ちる。）

山上　おやピストルが……大變君は昂奮してるなあ。どうも君の心持ちは僕にはわからぬ。（ピストルを拾ひ、立ち上つて上手の扉に近寄り）あの部屋でお蔦さんがその赤ん坊を？……あの欅の下で……。

（しばらく暗い顏をして見つめてゐる。扉口から流れる月の光りが男の顏を照らす。）

（中央へ來り、テーブルの上に庸一郎のピストルを置く。）

君は何だなあ、やはりお父さんと同じやうにこゝで、この書齋でピストルを額に打ち込んで死ぬつもりだな。意氣地のないお坊つちやんにはそんなことが恰度ふさはしいことかも知れぬ。いつまでも詩人相手の對話はできぬ。さあどうぞ僕の最後のお願ひだから百兩だけ……。

庸一郎　ぢや君はいよ〳〵滿洲に行くんだなあ。そして日本には歸つて來ないんだなあ。

山上　さうだよ。僕のやうな奴でも、こゝは故郷の地だ。懷しいや。でも歸りたくつても歸つて來られない身ぢやないか。

庸一郎　さうか。ぢや今の僕の身ぢや百圓も大金だが、どうかしよう。（ベルを押す）

山上　もう僕もこれ切りで一生お目にかゝれないかも知れぬ。君と一緒にこの土地へ生まれ合はせたのがお互の不仕合せだつた。ゆるしてくれ給へ。

庸一郎　君、赤ん坊のお墓だけお詣りしてゆかないか。

山上　どこにあるんだ墓は？

庸一郎　町の共同墓地だよ。

山上　あゝ、あの塔の少し南の方の丘だつたなあ……（しばらく窓から眺めてゐる）……しかし今更お詣りしたところでハツハツハツ……。（寂しく笑ふ）

かな子　（上手扉口より登場）兄さんお呼びですか。

庸一郎　あゝちよつと。

かな子　（兄の傍へ來る。庸一郎さゝやく。山上ぢいつとかな子を見つめる。かな子退場。）

山上　ほんたうに氣の毒だなあ。でもこれつきりだからどうぞ。

庸一郎　そして君は今夜直ぐ立つのかい？

山上　さうだとも。眞晝間こゝの町を歩ける身でもないからなあ。停車場には待ち合してゐる者があるから急ぐんだ。

庸一郎　友達かい？

山上　うむ、女だ！

庸一郎　奧さんかい？

山上　まあそんなものだ。

庸一郎　では大事にしてやり給へ。

山上　當分はねえハッハッハッ……。

庸一郎　當分ッ？

山上　さうだよ、今度連れてゆく女だつてお蔦さんから三人目なんだよハッハッハッ……驚かなくつたつていゝよ。僕は不思議でなあ、これで、この女はと、一度目をつけたら屹度物にして見せるよ。まあ蛇見たいなものだなあハッハッハッ……。

かな子　（上手より登場）、兄さん、ではこゝに……。（紙包を兄の手に渡す。退場。山上かな子を見つめてゐる）

庸一郎　では、これをどうぞ。これつきりだらうな。僕はもう君の脅迫には恐れないよ。今日は脅迫されて上げたんぢやないからなあ。君がこれつきりと言ふし、それに日本にもゐないといふのだから……

山上　（受取りて紙幣を調べて見る）たしかに。ありがたう。（ポケットに入れる）あれは何かい？　君の妹さんかい？　うむ、素敵たなあ。君はずゐぶんあの妹さんを可愛がつてゐるやうだが、まつたくいゝ女だねえ。（蛇のやうな眼で部屋や、庭や、廊下あたりを見廻す）滿洲行きは止めにしたくなつた。やつぱり日本の女がいゝなあ。

庸一郎　そんな氣味の惡い眼で方々を見てくれるな。早く立つてくれ給へ。僕はさつきから頭が割れさうに痛むんだから。

山上　歸るよ……（二三歩上手へ行きかけて）……だが倘一度歸つて來るかも知れないよ。君は今ではあの妹さんをずゐぶん可愛がつてるねえ。

庸一郎　妹一人が僕の味方なんだ。妹は僕の命だよ。

山上　すまないが君の妹さんを僕にくれないかねえヒッヒッヒッ……。

庸一郎　何だつてッ！　（さつとなる。厭な顏はす）

山上　君の妹を僕にくれろといふのだ。

庸一郎　…………。

山上　身分がちがふからいけないといふのだらう。いけなければいけないでいゝ。

庸一郎　歸つてくれ給へ。

山上　歸るよ、そのかはり或ひは明日にでもまた妹さんを貰ひに來るかも知れないよヒツヒツヒツ……。(陰険な笑ひ方をする)

庸一郎　君なんかにやれるものか。君は滿洲に行くと言つたぢやないか。

山上　誰が滿洲になんかに行くものか。おめでたいお前をおだてに來たんだ。お蔦さんも、實はもう監獄から出て來てお前と一緒にお睦まじく暮してゐるかと思つてこの町にやつて來たんだ。もしさうだつたら倘一度お蔦さんをおれのものにしてやらうと思つてさ。おれは何でも人が大切さうに持つてゐるものを引つたくるのが好きなのさ。どうせ當分は大阪か東京か、そこいらにゐるから、またちよく〳〵やつて來るわ。そしてお前が大切にしとるものは何でも奪つてやるからさう思つてゐた方がいゝ、ハツハツハツ……お目出度い奴さ、ハツハツハツハツ……。

庸一郎　おや君はこれほどまで僕の一家を苦しませて置いて、それでもまだ飽きないで。

山上　飽きないよ。おれにはお前たちがお誂へ向きにできてるんだ。金はあるし、美人ではあるし、意氣地はなしさ。おいまたお蔦さんなり、妹なりをおれに奪られないやうにしろよ。倘二度見せて置いて上げようかこれ……(と背廣の下から短刀を出して見せる)

庸一郎　……(短刀を見た刹那に過去の恐怖觀念を聯想して顫へる)

山上　ほらやつぱり恐いだらう。もう君は何といつても一生駄目だよ。中學時代に一度おれに短刀を突きつけられてからは、今日までずつとメスメリズムに罹つてゐるんだから……愉快だ、愉快だ、君がさうやつて齒を嚙んで顫へてゐるのを見るとハツハツハツ……。(揶揄してやりたい氣になつて、テーブルの上のピストルを庸一郎の手に握らせる)これ、よく考へて見給へ、君はまだこれから先、幾年生きてゐるか知らぬが、君がこのピストルの引き金を僕の胸に向けて引くだけの勇氣が出ない間は、一生、僕の短刀さへ見ればから意氣地がなくなつて、社會的名譽でも、妻でも、妹でも、僕の思ふまゝにしなければならないのだよ。

庸一郎　短刀を引つ込ましてくれ給へ。あんまり殘酷だ!

山上　殘酷だよ。苦しいかいハツハツハツ……。

庸一郎　僕はもう今日までの苦痛だけでたくさんだ。これからまたこの苦しみを繰りかへすんだつたら、とても生きてはをれない。

山上　君はこのピストルで死ぬつもりだつたのだらう。

庸一郎　あゝ、さうだよ。僕はとても耐へ切れないから。

山上　まだ、君に死なれてたまるものか。もう十年くらゐ生きてゐてくれ。この短刀だ、これだ……。

庸一郎　(短刀を見まいために、部屋の中を逃げまはる)もうたくさんだ、ゆるしてくれ給へ。でないと僕はもう頭が變になりさうだ。

山上　意氣地のないことをいふな、男ではないか。これ、この短刀さへあれば、お蔦さんだつて、君の妹だつて、これ、この短刀。

庸一郎　(眼をふさいで逃げまはる。山上無理に庸一郎をつかまへて短刀を見せつける)君は惡魔だツ！　もうゆるしてくれ！　君のやうな殘忍な人間を見たことがない……。(顫へてピストルを落す)

山上　僕はお前のやうな弱い男を見たことがない。何といふ顫へ方だハツハツハツ……愉快だツ！　愉快だツ！　これ、そんなに顫へないでも君もピストルを握つて立て、そして僕を撃て！　それだけの勇氣さへあればお蔦さんだつて、君のあの美しい妹だつて、救ふことができるのぢやないか。(ふたゝび顫へてゐる庸一郎の手にピストルを持たせる)ほら、この短刀だ、いゝか、それ、お前はこのピストルをおれの方に向けさへすればいゝのだ。やつぱり顫へてるな。おい、しつかりしろ、意氣地なし、今、こゝにお前のあの美しい妹を引き摺つて來て、おれが自由にして見せようか、これこの短刀で。(ぐつと短刀を庸一郎の鼻先へ突きつける)顫へてゐる。顫へてゐる。愉快だなあ。もう聲を出すこともできない。ハツハツハツハツ……こんな臆病な奴を見たことがない。おや〳〵眼の色まで變つて來たぞ。ハツハツハツ……

(庸一郎はげしい痙攣を起しピストルを落し、倒れようとする。山上無理に抱きかゝへてピストルを握らせ、飽くまでも短刀を鼻先へ突きつける。そしていかにも殘忍な興味に醉ふもののやうに、庸一郎が顫へれば顫へるほど執拗に短刀を見せつける。)

おや〳〵何だか變だぞ。眼をぐる〳〵まはしてるぞ。愉快だ。(庸一郎の兩方の手を掴んで自分の顔と庸一郎の顔とをくつ付けるやうに近くして見る)まるで蛙が煙草のやにを食はされたやうな顔になつて來たぞ。(庸一郎がひどく痙攣を起すのを、無理に抱へてゐて、短刀で脅かす眞似をする)あゝこれで氣がせい〳〵した。さあ今日はもうこれでゆるしてやる。明日にもまた來てやる。そしていゝかあの美しい妹を奪つてやるぞハツハツハツ……。おや變だぞ、どうしたんだい、びつくりして蟲でも起したのか、妙な奴だなあハツハツハツ。

庸一郎　夢遊病者のやうにピストルを握つたまゝ部屋の
　中を歩む。たゞ一點を見つめたまゝ）
山上　少し氣が落ちついたやうだなあ。さあそれでは尙一
　度訓練してやらう。おれの胸をめがけてかうするのだ。
　（自分の胸にピストルを向けさせる。そして短刀を突きつ
　けて見せる。庸一郎されるまゝになつて、ピストルを山
　上に向ける）さうだ。感心に今度はあまり顫へないぞ。
　さあ、それで擊つんだ、いゝか、ほんたうに引き金を引
　いてはならぬが、その要領だ。（庸一郎ピストルを握つた
　手を下す）そら尙一度向けて見い。（庸一郎ピストルを
　向ける）さうだ。あゝ恐い！　恐い！……（わざと驚き
　逃げるやうなとぼけた恰好をして、しりごみをする）
庸一郎　ハツハハツツ……。（氣味惡い聲で笑ふ。ピストル
　を山上に向けたまゝ追ふ）
山上　おう恐い！　恐い！　さうだ〳〵。
庸一郎　ハツハツハツ……。（兩人テーブルの周圍をめぐ
　り、ピアノの前より、ソウフアの前に動く。庸一郎はな
　ほピストルを持つたまゝ山上を追ふ）
山上　あゝ恐いツ！　恐いツ！　御免ツ、ハツハツハツ…
　…御免ツ！　ハツハツハツ……。
庸一郎　ハツハツハツ……。（ます〳〵笑ひ聲が無氣味にひ
　びく。明りがます〳〵暗くなる。山上がわざと恐れた態
　をしてしりごみすればするほど庸一郎はしつかりピスト
　ルを握つて、そして時々はげしい痙攣を起す。そしてぢ
　いつと一點を見つめたまゝ山上を追つかける）
山上　もうそれで練習はたくさんだ、もうピストルは止め
　てくれ。
　（ピストルを取らうとするが、庸一郎は離さないで笑
　ひながら追つかける。）
山上　もうたくさんだといへば……。
庸一郎　ハツハツハツ……。
山上　おや、變だぞ。眼か坐つてしまつたぞ。おやツ！
　（山上愕然として何かに擊たれたやうに、急に上手の
　扉口から廊下の方へ逃げ出す。庸一郎笑ひながら山上
　を追つかける。）
　（二人の姿が舞臺から消えると同時にピストルの音。
　山上が倒れる音。呻く聲。）
　（庸一郎の無氣味な、しかし耐らなく愉快さうな強い
　笑ひ聲。）
　（人々の騷ぐ音。）
　（間。）
　（舞臺しばらく空虛。）
　（母、豐子、和田、顫へながら上手の扉口より小走り
　にて登場。）

母　お醫者さんはすぐ來てくださいますね。
和田　電話が直ぐ通じまして先生も御在宅でしたから。
母　警察の方へも？
和田　今、かなちやんが電話をかけてゐます。
母　あんな惡い男でも、あんなことになると可哀さうですねえ！　まあどうなることでせう……。
和田　正當防禦といふことになるでせうから……。
豐子　肅ちやんに誰がピストルを持たせたんでせう。あのピストルはあのお父さんが！
母　あッ、あのピストルだつたねえ、あの時私が湖にでも捨てゝ置けばよかつたに……もう何も彼もおしまひだよ。
（豐子も母も手で顏を掩ふ。上手よりかな子あわたゞしく登場。）
かな子　大變です、おつ母さん！　はやく、はやく。
母　どうしたの？
かな子　兄さんが、臺所にあつた薪割を摑んで監獄の方へ飛んで行きました。
母　まあ、兄さん、それぢやすみませんがすぐ追つかけて行つてください。
和田　ようございます。ぢやこゝからすぐあの橋をわたつてゆきませう。
（和田下手の扉を排して、戸外に飛び出す。庭を上手より下手へ二三人提灯をかゝげて走る。）
（人々の聲聞ゆ。）
（豐子正面の窓より月光の下の塔を見つめてゐる。）
母　どうしようつていふのだらうあの子は？
かな子　監獄のあの高い塀を壞しちやつて、今夜中に姉さんを監獄から家に連れて戻して來るつていふんです。あたしあんな氣の強くなつた、そして嬉しさうなかゞやいた兄さんのお顏をはじめて見てよ。
母　まあ、可哀さうに。ぢや、あの子はたうとう氣が狂つてしまつたのねえ、まあ……
かな子　今朝から兄さんは氣でも狂ひさうだ、氣が狂つた方が仕合せかも知れないつていつてゐました。
母　まあ可哀さうに氣が狂つて……內氣なあの子は氣が狂つたのではじめて……あゝ、可哀さうに……。
（母、急にうしろへ倒れかゝる。かな子、母を抱く。）
かな子　姉さん、はやく、はやく。
豐子　（驚いて母の傍に駈けつけ抱く。二人で母をソウファの上に休ませる。そして左右から母にすがりつく）
かな子　お母さん……。
豐子　お母さん……。
（部屋の裡ますく暗くなつて、月の光りのみ漂ふ。）
――靜かに　幕――

町はづれの店（一幕）

時

現代　秋から冬へうつりかはる頃

場　所

或る高原の町はづれの店

登場人物

茂　吉　店の主人（四十五、六歳）
おちか　妻　（三十五、六歳）
お　桑　茂吉の弟、兼松の妻（三十歳くらゐ）
馬左衛門　おちかの養父（六十歳くらゐ）
道太郎　お桑の子、茂吉との間に生まれた子（十一歳）
水力電氣の工事に雇はれて來て居る日本人、朝鮮人工夫、その妻子等
鐵之助　お桑の今の情夫、田舍廻りの芝居者
その他芝居者、車夫數名及び村の人々

町はづれの居酒屋の土間。荒いすゝけた格子戸をへだてゝ往來になつてゐる。格子戸の前には落葉しかけたポプラの樹が二三本並んでゐる。下手に高い山脈の地膚があらはに見えてゐる。コスモスや野菊などが道の兩側をつゝんでゐる。高壓電氣の鐵塔が一本、檣のやうに高く山の裾にそびえてゐる。土間には三四脚の腰掛があつて、下手には酒樽が据ゑてあり、德利やコップを載せた棚がある。棚のうしろに賣り溜の箱がある。正面には暖簾がかゝつてゐて、そこから奥へ出入ができるやうになつてゐる。上手には煤けた障子を閉てた一室がある。上手の一室から時々病人の呻き聲が聞える。

日本人や朝鮮人の工夫たちが土間で酒を飲んでゐる。おちかが酒を注いでやつたり、勘定をしたりしてひとり忙しく土間に働いてゐる。

俥に乘つた若い男たちが小旗を立てゝ太鼓を叩きビラを撒き店の前を通る。どや〳〵と村の人たちが俥をとりかこみ店の前を走る。

眞つ白な朝鮮服を着た若い女が赤い腰衣を着けた女の子の手を引いて戸口から土間を覗く。何か言つてぐでん〳〵に醉つた若い朝鮮人を連れて出ようとする。その朝鮮人は日本の印半纏を着てゐる。

おちか　おい、おい、勘定はどうしたんだい。勘定は？

朝鮮の男　（半纏の丼の中へ手を突つ込み銀貨を二枚出す）

おちか　何だ、これだけかい。馬鹿におしでないよ。上等の白鷹を五合も飲んでしまつてたつた二貫置いてゆかうといふのかい。おふざけでないよ。（銀貨を卓の上に叩きつける）

朝鮮の男　今日はそれだけしかない。明日貰ふてから持つて來る。勘辨しておくれ。

おちか　づう／＼しいにも程がある。明日貰ふてから持つて來る？　明日はまたどこの山へ行つて働くのやら、渡り鳥のやうなお前たちに一文だつて貸せるかい。金がなけりやお前のその子供の着物なり、かみさんの簪なり、そこに置いとけ。

朝鮮の男　今日はすまない。明日は屹度持つて來る。勘辨しておくれ。

おちか　何が勘辨だ。はじめから飲みたふすつもりで來たんだ。さあ何でもいゝから置いて行け。

（子供の上衣を脱がさうとする。朝鮮の男と女がおちかの腕にすがつて引き止める。おちかさらに女の簪を拔かうとする。）

馬左衞門　（土間の奥から走り出て來ておちかの手を握る）おちかや、手荒いことは止せや。これが日本人ならまだといふこともあるが、ろくすつぽう言葉も話せないやうな朝鮮人ぢやねえか。

おちか　何をいつてゐるの？　まうろくの癖に。

馬左衞門　まうろくか知らぬが、あの女にしたところで遙遙日本までやつて來て、西を向いても東を向いても頼る人一人ないところに、あのやうな飲んだくれの亭主一人を頼りにせねばならぬのだ。どのやうに心細いか知れぬ。ねえ、お前もすこしは人情といふことを知つたがえゝぞ。

おちか　ふうん。あんたから人情の講釋聞かうとは思はなかつたよ。自分の女房は賣る。人の娘を貰つては血の出るやうな稼ぎをさせる。あんたにも人情があるのか。

馬左衞門　親をつかまへて何をいふ。

おちか　わたしの一生を臺なしにしといて今さら親御でございもないものだ。ぢつとしてすつこんでゐた方がいゝ。おい朝鮮の旦那。何かあるだらう。

朝鮮の男　今日は何もない。おかみさん勘辨してくれ。

おちか　ぢやいゝ、この餓鬼の着物を……。

（朝鮮の男腹掛の丼の中から肥後の守を出す。朝鮮の女泣きて男の手を握る。土間の人々立ちさわぐ。）

おちか　妙な眞似をするんだね。

朝鮮の女　醉ふてゐます。おかみさんどうぞ。

おちか　酒を飲んで、金を拂はず、人を脅かしといて何がどうぞだ。

馬左衞門　ぢや、ちやうどいゝ。その短刀を酒のかたに預け

ときな。（朝鮮の男おとなしく馬左衛門に短刀をわたす）

おちか　（馬左衛門の手から短刀を取る）　こんなものを丼に忍ばせてゐるやうでは今までも何をして來たかわかりやしない、物騒な奴た。こんな奴に人情なんかかけようといふ人の氣が知れぬ。（朝鮮の女、男の手を引つ張つて店を出てゆく）

馬左衛門　（ふたゝびおちかの手から短刀を引つたくる）　いゝ短刀ぢやないか。

おちか　欲しけりや上げるよ。馬鹿々々しい話さ。そんなものと酒五合と替へるなんて。

馬左衛門　ほんたうにくれるか。肥後の守だが、なか／＼いゝ燒た。切れさうだ。

おちか　切れさうだなんて、お前さんにはそんな物を持たせるよりも、竹切れでも持たしといた方がいゝよ。

馬左衛門　何でよ？

おちか　えらさうなことばかりいつてゐる癖に、まだ若い時から人一人斬つたことも、突いたこともないぢやないか。悪黨だの、博奕打ちだのといつて人を脅かしてばかりゐるが、猫の兒一つ殺せねえ弱蟲ぢやないか。

馬左衛門　變なことをいふなあ。

（酒を飲んでゐた男たち馬左衛門とおちかの方へ顔を向ける。）

おちか　變なことをいふぢやないよ。これまで散々何の手出しも出來ない自分の女房だの娘だのばかり食ひ物にしといてさ、その年まで人一人斬つたこともない悪漢なんてあるもんぢやない。博奕打なら博奕打らしくするがいい。

馬左衛門　親を馬鹿にするない。

工夫甲　親爺さんだつて時と場合ぢやどんなことでもするわなあ。

工夫乙　はゝはゝは……悪い知慧をつけるぢやねえか。

工夫丙　爺さんだつて若い時にや人の一人や二人は叩き斬つたこともあるにちがひないのう親爺さん。

馬左衛門　いや、わしはどうも若い時から喧嘩早かつたが、仕合せといふのか不仕合せといふのか一度もそのやうな場所に打つ突かつたことがなかつたのさ。

工夫甲　いや、親爺さんは隱してゐるんだらう。もういゝ加減に白状しても時効といふ奴さ。

馬左衛門　わしだつてさう臆病ではないつもりさ。喧嘩をして昔からまだ敗けたことはなかつたからなあ。今でも時と場合ではこの肥後守ぐらゐ振り廻しかねないよ。

工夫乙　さうだらうとも、さうだらうとも。親爺さんの面を見たばかりでもわからあ。

おちか　何がそのまうろくに出來るものか。

馬左衛門　何だと、まだそんなことをいつてけつかる。見ろ、おれをいつもかも馬鹿にしとるで一生のうち一度はお前の度膽を抜かすやうなことをして見せるから。

工夫丙　爺さんえらいぞえらいぞ。その元氣だて。さあ一杯……。（コップを馬左衛門にさす）

馬左衛門　ありがたう。若い者は親切だ。（うれしさうにコップをいたゞいて飲む）

おちか　自分の娘が親切でないからだらう。

馬左衛門　あたり前よ。われはこの二十年といふもの、一日だつておれにやさしい言葉一つかけてくれたことがあるか。

おちか　こつちこそいはねばならぬ。わたしのたつた一人の母親を賣りこくつてさ、その娘の生血まで吸つてゐるのぢやないか。三度々々饑ゑないほどのおまんまをいただいてゐりやあだまつておとなしく土間の隅にはひつくばつてゐるがいゝ。

馬左衛門　何とでもいへ。今に思ひ知らせてくれるで、この親不孝者。

おちか　何が親不孝だ。勝手な熱を吹きやがつて。

工夫甲　爺さんまあ仕方がない。別嬪には敗けとくさ。さあ一杯飲みねえ。（コップをさす）

馬左衛門　ありがたうございます。（飲む）

工夫甲　なあ爺さん、あんたゞつて男だ。年はとつてゐてもやる時はやるさなあ。（酒をすゝめる）

馬左衛門　（酒を飲む）さうだとも博奕打に年があつてたまるものかなあ。博奕打と役者には年はねえやなあ（肥後の守をぎら／＼光らせて見る。醉がまはつて來る。感傷的になる）

工夫丙　さうだともなあ爺さん。人間はいつまで生きてゐたつて限りはないや。いざといふ時にはなあ爺さん。（コップをさす）

馬左衛門　さうだとも、わしはこれでも昔から馬鹿正直でなあ、そのためには女にもだまされたさ。

工夫等　はゝはゝはゝ……。

馬左衛門　それだけにまた命を賭けて人のためにしようと思つたこともあつたよ。

工夫甲　さうだらうとも。そこが男だ。

馬左衛門　今になあ、あの女だつて、わしを馬鹿にしとるが、思ひ知りますだなあ。（ちよつと唇をかむ）

工夫乙　爺さんしつかりやんなさいよ。おちかさんに馬鹿にされてばかりゐちや仕方がねえからなあ、はゝはゝは……。

（甲乙丙勘定を卓の上に置いて店を出る。）

おちか　餘計なことばかりしやべつて行つたが、ちえツ、

みゝつちいことだ。(卓の上の銀貨と銅錢をやけに賽り溜の中に放り込む)

馬左衞門　おちかや。

おちか　何だね。

馬左衞門　すまぬがすこし小遣ひをくれねえか。

おちか　ふん。散々人の前でこきおろしといて小遣ひをくれねえかもあつたもんぢやない。また博奕だらう。(上手の障子の中で呻き聲が聞える) そんなに度々お金は上げられないよ。

馬左衞門　そんなに度々といふが、五日前に二兩くれたばかりぢやねえか。

おちか　一月に二兩でもたくさんだ。人のたゞ一人のおつ母さんをあんなことにしといて、ほんたうをいへば、お前さんは、わたしの讐見たいなものぢやないか。

馬左衞門　あのことはわしの一生のあやまりだつた。だから今でもお前にあやまつてるぢやないか。そのかはりに……。

おちか　わたしを育てゝ十三の年から稼がしたといふのだらう。

馬左衞門　おれの惡いことはかりいつてくれるな。お前たつてさういへば(そうつと上手を指さして)あんな病人を抱へながら……わしはこの黒い目でちやんと睨んでるぞ。

おちか　それがどうつていふの。薄情で浮氣の果があの人の業病さ。からだの達者な間は自分ひとりで散々面白い目を見てさ、そのためにからだが動かなくなれば十年でも十五年でもわたし一人に厄介をかけるのぢやないか。早く首でも縊つて死んでくれゝばいゝぢやないか。いつまでも亭主面をしてゐる氣が知れぬ。わたしに煮湯を呑ませるやうなことをして、お粂との間に出來たあの白痴の道太郎までわたしに飼はせてるぢやないか。わたしこそ踏まれたり、蹴られたりさ。ちつとやそつとわたしがたのしい思ひをしたつてそれが何だねえ。(呻き聲が聞える) ふん、話が聞えたと見える。散々人を苦しませた仕返しだ。氣味がいゝ。

馬左衞門　おちか、おれは惡黨でもお前のやうな氣にはなれぬ。

おちか　當り前よ。意氣地なしの癖に女や子供だけを一生生き埋めにするやうなことをして。亡くなつたお母さんだつて……(涙を拭く)

馬左衞門　小遣ひの一件はどうなつたんだい！

おちか　うるさいなあ。(賽り溜の中から銀貨を五六枚投げてやる)

馬左衞門　たつたこれつたけか。

おちか　何がこれつたけだ。

道太郎　（登場。低能な子で、ろくに口がまはらない）　おつ母……。

おちか　何だ。

道太郎　昨日來たお役者なあ。

おちか　馬鹿ッ！　何をいふか。

道太郎　今直ぐ小柳亭の二階まで來てくれといふた。

おちか　さうか、仕立物をあづかつたからだらう。ぢやいいか、わたしちよつと出て來るからその間店の留守番しとるのだぞ。またいつものやうにぼんやりしとるとこれだぞ。（細引と薪を見せる）

道太郎　うむ。（うなづいて見せる）

おちか　（奥にはいつて羽織を引つかけ、風呂敷包みをかゝへて店を出てゆく。病人呻く）

馬左衞門　ひどい女もあるもんだなあ……おい道太郎親父さんの肩でも叩いてやれ……店の方はおれが番をしといてやる。（道太郎障子の中へ入る）さすがのあいつもお役者からと聞いては、何も彼も忘れて出て行きやがつた。上には上があるものだ。あんな女の生血を吸ふ男がゐるんだからなあ。うむ、うまいことがあるぞ。（賣り溜の中に手を突き込み金をすつかり手拭につゝみ肥後の守と一緒に懷に入れる）あゝいゝ氣味だ。あいつが歸つて來てびつくりするだらう。それからと（樽からコップに酒を受けて飲む）こんなに思ふ存分酒を飲んだことは幾年振りだらうはゝはゝは……おい道太郎、店の番を賴むぞ。しつかり店の番をしてをれよ。（醉つた足どりて退場）

お桑　（黑の蝙蝠傘に人目を忍び格子の中を覗く。派手な着物を着てゐる。色の白い華奢な女。戶外の木の下にしばらく佇んでゐる。裏手にまはつて家の中の樣子をうかゞふ。再び表に來て奥の呻き聲に耳を傾ける）もし……もし……どなたかおいでゝせうか。

道太郎　誰だなあ。（障子の中から出て來る）

お桑　おうお前は道太郎ぢやないか。

道太郎　おれ、小母さんのやうな人知らんがなあ。

お桑　おつ母さんは？

道太郎　お役者のところへいつた。

お桑　お役者のところへ？

道太郎　あゝ。

お桑　おぢいさんは？

道太郎　酒を飲んでどこかへいつた。

お桑　おぢいさんも丈夫か？

道太郎　あゝ、酒飲んでは博奕を打つとる。そしておつ母さんにどやしつけられとる。

お桑　お父さんは？

道太郎　いつも寢てる。
お桑　いつごろから？
道太郎　もうずつと前から。
茂吉　（障子の中から）お桑ではないか？　お桑ッ！
お桑　あなたは？
茂吉　わしはこんな日が、もいちどは來るにちがひないと思つて今日を待つてゐた。お前はやつぱりわしのことが忘れられないで歸つて來たのだ。（道太郎障子を明ける）
お桑　いゝえ、ちがひます。わたしはあなたに逢ひたいと思つて歸つて來たのではありませぬ。あの人がまだ病氣で苦しんでゐたころからあなたはわたしをあんなことにしといて。
茂吉　お前はまだ倫吉のことをいつてるのか。
お桑　だつて一度だつてわたしからさへやさしい言葉一つかけられないで、死んでしまつたあの人のことを考へると、わたし氣の毒でならないのです。わたしほんたうに悪いことをしたと後悔してゐるのです。あなたさへあんなことをなさらなければ……。
茂吉　わしがお前を誘惑したといふのか。お前はあの佝僂(せむし)の弟に滿足してゐたのか。わしだけが悪人だつたのか。
お桑　わたしあの人にすまないと思ひましたから、お墓まゐりにやつて來たのです。

茂吉　うまい罪滅しの仕方だなあ、おれなんかあれから十二年、これこのとほりにして寢床の上に寢たつ切りだ。夜も晝も脊骨や、手足の節々が割れさうに疼く。それでもあのおちかといふ女は冷たい水一杯飮ませてくれるではなし、十二年の間に一度だつてわしの肩を一つ擦つてくれたこともない。わしは弟の佝僂奴の祟りであらうとあきらめてゐる。死ぬ時はおれを恨んで死んだといふから。おちかはまたおちかで今になつてもまだあの時のことを忘れないでおれを苦しめてゐるのだ。あいつは蛇以上に執念深い奴だ。
お桑　でも道太郎をよく育てゝくれてゐますぢやありませんか。
茂吉　育てゝゐてくれると思ふのか。道太郎は生まれもつかぬ馬鹿にされたのだ。
お桑　えッ、何ですつて。
茂吉　お前が家を追ひ出されて間もなくであつた。おちかの奴、道太郎を殺すつもりでこゝの上の崖から落したんだ。
お桑　おちかさんがそんなことを。
茂吉　うむ、みんなわしとお前に對する復讐からなんだ。ところで道太郎は救つてくれた人があつて具合よく助かつた。しかしその時頭をひどく打つたのでそれつきりろ

くにものもいへないやうな馬鹿になつたのだ。

お桑　可哀さうに、何も知らぬ子供を。

茂吉　それにあゝやつて育てゝ置くのはなあ、あの子を可愛いと思ふからぢやないのだ。三日にあげず何か氣に喰はぬことがあると可哀さうにあの子を細引でくゝり上げては打ちのめすのだ。からだ一つ動かすこともできぬわしにあの子の呻き聲を聞かせたいばつかりにするのだ。

お桑　まあ、人間としてよくもそんなことができたものだ。道太郎や……まあこんなに可愛らしい子に生まれついたになあ。どれ手を見せてごらん……どれお頭を……わしが悪かつた、勘忍しておくれ。わしはなあもう二度とこの村へ歸つて來ることもないで、このお金なあ、これを上げるから大事にしまつとくんだよ。それからこれはおぢいさんに、寒くなるから上げておくれ。わしが旅の行く先き〳〵で編んで置いたものだからなあ……わしはもう行きますよ。（金包みと毛絲のシャツを道太郎にわたす）

茂吉　お桑、もうお前は行くのか。

お桑　はい。

茂吉　お前はわしにやさしい言葉一つかけてはくれないのか。

お桑　亡くなつたあの人のことを思へば……。

茂吉　でもおれはそのために十二年もかうやつて苦しんでゐるのぢやないか。

お桑　わたしだつてあれから幾度いろ〳〵な男から男へと賣りわたされるやうなあさましい目を見てゐるか知れません。これからたつてまた明日にでも男にも捨てられて、またどうなるか知れませぬ。みんな亡くなつたあの人の呪ひだとおもつてあきらめてゐます。

茂吉　お桑ッ！　ちよつとでいゝからわしのとこへ來てくれ。

お桑　いけません。もう二度とそんなことをいつて下さいますな。わたしはあの時のことを思ひ出してもぞつとします。あなたは恐ろしい方です。魔法でも使つたやうにわたしの心を……。

茂吉　わたし一人ではないのだ。お前はどの男にも抵抗することはできないやうな女に出來てゐるのだ。お桑、おれは十二年の間こゝに夜も晝も寢たつ切りでお前を待つてゐたのだ。おれを可哀さうだと思つてくれ。おれは十二年の間自分の一人の妻にさへ冷たい水一杯飲ませてもらつたこともないのだ。お桑、もうわしも直き死ぬにちがひない。末期の水だと思つてたつた一杯の水でいゝからお前の手で飲ませてくれ。それが何の罪にならう。お前は義理の妹ではないか、わしは十二年の間こゝに寢た

つきりで一杯の水も……。
お粂　たうとうわたしが敗けましたね。ぢや水一杯だけお上げします。そしてお別れいたします。
（お粂水をコップに掬み、茂吉の傍へ持つてゆく。）
茂吉　あゝうまい……うまい……わしは十二年振りに水のうまさを思ひ出した。わしは水のうまさを忘れてゐた。お粂もう一杯注いでくれ。
お粂　困りますねえ、姉さんにでも歸つて來られるとそれこそ大變ぢやありませんか。
茂吉　あいつはさつき役者のところへ出かけて行つたからなか〳〵かへらないよ。
お粂　ほんたうに役者ですか？
茂吉　あゝ役者だよ。
お粂　こんな病人を置いて。
茂吉　みんな復讐のつもりさ。
お粂　まあおあがんなさい。（コップをわたす）幾杯でもおあがんなさい。三杯でも四杯でも……もうわたしが行つてしまつたら冷たい水一杯飲ましてくれる人もありますまいから……。
茂吉　ありがたう。わしはもうその言葉でたくさんだ。このまゝ死んでも悲しいとはおもはぬ。
お粂　あなたは薄情な人ですが、餘り可哀さうな方ですねえ。（涙を拭く）もう水はたくさんですか。
茂吉　ありがたう。
お粂　夜具もこれでは寒いでせう。もう霜が下りませうから。（夜具をかろくたゝく）ではもうこれでお別れにいたしますよ。
茂吉　お粂ッ！
お粂　あッ、いけません。いけません。
茂吉　お粂ッ！
お粂　いけません！　いけません！
（障子がたふれる。お粂は茂吉の手を振りはなして土間へ下りる。茂吉は幽靈のやうな手をのばしてお粂をとらへようとする。）
おちか　（登場）おやッ！　お粂ちやん。
お粂　姉さんでしたの。
おちか　相かはらず綺麗ね。それに若いわ。自分が浮氣をして生んだ子は人に育てさして、自分は好いたことをして遊んで歩くんだから。わたしのやうに貧乏世帶を切りまはして、厄介な病人たの、年寄や子供だのと背負はされるだけ背負はされてゐる女とはちがふわねえ。
お粂　……　……。
おちか　何しに人の留守をねらつてやつて來たの。また亭主を盜みに來たの。お生憎さまねえ。足腰も立たないん

だから一緒に逃げるわけにもゆかないわ。はゝはゝは……おや、そつちの浮氣者（茂吉の方を見、コップを見出す）わたしの留守に冷たい水でも飲ましてもらつたのですか、さあもうそれで安心してあなたも往生なすつたがいゝでせう。

茂吉　お前はわしを、わしを放つといてどこへ行つた。

おちか　用事があつたから出かけましたよ。

茂吉　用事とは何だ。

おちか　あなたの用事ぢやない。わたしの用事さ。

茂吉　お前は旅役者に逢ひに行つたのだらう。

おちか　それがどうしたといふのです。わたしの勝手でせう。あなたはわたしの留守にこんなことをしてゐるんだもの、そんなことをいはれた義理ではないでせう、おう、さうだつた。道太郎あれから商ひはあつたかい。

道太郎　何もない。

おちか　（賣り溜を見る）おや、どうしたの一文もはいつてゐないぢやないか。どうしたんだい。

道太郎　おれ知らぬ。

おちか　知らぬことがあるものか。お前が盜んだにちがひない。

道太郎　いや、盜まぬ。

おちか　盜まぬならちやんとあるはずではないか。よしそれならそれと……。（細引を持ち出してぐる〳〵と道太郎を土間の柱に縛りつけてつゞけざまに擲る）

茂吉　これ、何も知らぬ子を。止せといふに。

道太郎　（呻き泣く）

馬左衞門　（醉つた足どりで登場。おちかの腕をとらへる）

おちか、たいてい分にしといた方がいゝぞ。可哀さうに。

おちか　男を寢取られても、たつた一人のおつ母さんをあんな目に逢はされても、誰ひとりわたしを可哀さうだといつてくれる者はない。いつたい誰が一番可哀さうなんだ……。（泣く）

馬左衞門　お前はあんまり執念深い。一旦は可哀さうだと思つても、お前のやうにあんまり執念深いとかへつて憎らしくなる。お前もうすこし佛性を出せ。

おちか　佛性つ？　はゝはゝは……わたしのやうに子供の時からひどい目ばかりに遇はされて來た者の心がお前さんなんかにわかるものか。

馬左衞門　ぢや、お前のいゝやうにするがいゝ。こつちもそのつもりでゐるから。

おちか　お互ひさまだ。（ふたゝび道太郎を擲りつけようとする。茂吉呻く）

鐵之助　（戸口から土間を覗き込み、お粂を見てびつくりする）

お粂　おやッ？　あんたは何しに？

鐵之助　お前こそこんなところへ何しに來たんだ。おかみさん、（土間にはいつて來る）あなたが先つき風呂敷をお忘れだつたから持つて來て上げました。（おちかちよつと顏を赧らめる）

お粂　あなたは？

おちか　この女はあんたの？

鐵之助　わたしの女房ですよ。

おちか　あんたのお上さんですつて。お粂さん、あんたは仕合な女だなあ。（深い嫉妬の念に燃える）

鐵之助　わたしのやうなやくざ者の女房ではあんまり仕合せでもありますまいよ。

おちか　あんたのやうないゝ男を袖にすりや罰があたりますよ。お粂さんといふ女は昔からどうして油斷のできぬ女でしたから。

鐵之助　おかみさん、ぢやあんた昔からこの女を？

おちか　だつてわたしの義理の妹ですよ。

鐵之助　へえ……。

おちか　あすこに寢てゐるのがわたしの大事な連れ合ひですよ。わたし大事の男をお粂さんに寢取られたんですよ。十二年前の話ですがねえ。

鐵之助　ぢや、わざ〳〵わしの眼を偸んでまたこんなところにやつて來たんだなあ。

おちか　何のために來たのか知らぬが、わたしがあれから歸つて見ると二人切りでコップの水を飲ませるやら何やら。わたしも飛んだ時に歸つて來たものさ。

鐵之助　お粂ッ！　きさまはおれの顏に泥を塗つたな。

お粂　わしが何で。

鐵之助　あの白々しい……。（急に飛びかゝつてお粂の髮を鷲摑に摑んで引き倒して踏む。擲る）どいつだ。おれの女房を横取りしようとした奴は？　この通りに泣いてゐるが助けには來ないのか。薄情な男だ。

おちか　助けようにも脚も腰も立たないのだから。

鐵之助　可哀さうな奴だなあ、はゝはゝは……。

茂吉　（呻く）

鐵之助　おれがどうするか見てゐろ。

お粂　殺してくださいどうぞ。

鐵之助　殺すまでも、苦しませるだけ苦しませてから殺してやるわ。（おちかが道太郎を擲つた薪でお粂を擲る）

馬左衞門　おい、いゝ加減にして勘辨しておやんなさい。（よろけかゝる）

鐵之助　人の女房をいらぬお世話だ。

馬左衞門　人の女房でもあんまり可哀さうで見てをれぬわい。役者といふ奴は顏はやさしさうにのつぺりしとるが、

心はどうも恐ろしい奴ぢやなあ。
鐵之助　醉ひどれのまうろく、何をいふか。すつこんでをれ。（お粂の髪を摑んで戸外に引き摺つて行く）さあ來やがれ。
お粂　おぢいさんさよなら、道太郎をどうぞ。
馬左衞門　安心しろ。おれがついとるから。
お粂　ありがたうございます。
鐵之助　さあ早く來い。往生際の惡い奴た。（ふたゝび蹴る。お粂氣絶する）こいつが死んだ眞似をした。（引き摺つてゆく）
馬左衞門　それはあんまりだ。
鐵之助　何があんまりだ。（馬左衞門の向う脛を蹴る。馬左衞門倒れる）はゝはゝは……ぢや、おかみさんまた逢ひますよ。
おちか　もいちどぜひねえ。
鐵之助　承知しました。さあ。（氣絶してゐるお粂を引き摺つて退場）
（工夫甲乙丙等登場。）
工夫乙　どうしたんだ親爺さん！
工夫甲　おや、泣いとるぢやないか。
馬左衞門　あの役者の奴ひどい目に遇はせやがつた。
工夫丙　どうしたんだねえ。
馬左衞門　おれは生まれてまだあんな奴にこんなひどい目に遇はされたことはない。おれは悔やしうてならぬ。それにあのおとなしいお粂坊を、あいつは殺してしまふにちがひない。（お粂の悲鳴が聞える）お粂だ。お粂だ！
工夫甲　おや變だぞ。爺さんの眼がすわつてしまつた。
工夫乙　爺さん。まだ醉がさめきらぬから、さああつちへ行つてすこし寢てゐた方がいゝ。
工夫丙　まあ可哀さうに向う脛から血が流れてる。さつきこゝへ來たあの役者か？ひどいことをしやがるな。（おちかの顔をのぞく。おちか、つんとすました顔をする。女の悲鳴。馬左衞門よろけながら飛んでゆく）
工夫甲　親爺さん飛んで行つたぜ。
工夫丙　醉つてゐるからなあ。
茂吉　（呻く）
工夫乙　おや〳〵、道坊はまた縛られてゐるのか。可哀さうに。（ほどいてやらうとする）
おちか　餘計なことをしてもらひますまい。
工夫乙　だつて何も知らない子を可哀さうぢやないか。
工夫甲　おちかさん、今日だけはゆるしてやつてください。
（道太郎を解いてやる）
工夫丙　親方どうだねえ鹽梅は？
茂吉　ありがたうございます。ながいことお世話になりま

したが、わしももういよ〳〵今夜あたり駄目らしうござ
います。
工夫甲　そんな心細いことをいはんで氣をしつかり持ちな
さい。
茂吉　いや、わしは今朝までは死にさうなかつたが、さつ
きから急に重い物でも卸したやうな氣になつた。もうい
つ死んでも何とも思ひませぬ。
工夫乙　親方は今日は變なことばかりいふなあ。
（突然けたゝましい叫び聲が聞える。）
工夫丙　何だらう。あの聲は？
（村の人々多勢走つて來る。）
村の男一　馬左衞門さんが大變なことをやつつけたぞ。
工夫甲　どうしたといふのだ。
村の男二　色の白い男を刺し殺したぞ。
おちか　えツ！
村の女　恐ろしいことだ。
村の男三　色の白い男が、お桑さんを引き摺りまはして、
水力電氣の崖から突き落さうとしてゐたところに馬左衞
門さんがかけつけて、止めたが止まらぬので、たうとう
馬左衞門さんは腹を立てゝ短刀でその男の横つ腹を突い
たぞ。
おちか　あのまうろく爺が……あの人を？　（泣く）

茂吉　はゝはゝは……。（呻きながら笑ふ）
工夫甲　爺さん醉つてゐたからなあ。
工夫乙　それにあの肥後の守が惡かつたよ。
村の男四　あすこから馬左衞門さんが來た。
（村の人々さゝやきながら退場。）
馬左衞門　（登場。片手に血に染んだ肥後の守を掴んでゐ
る。呆然としてゐる）
工夫丙　爺さんたうとうやつたなあ。
馬左衞門　……。（きよとんとした眼でおちかや、工夫たち
を見る）
おちか　このまうろく爺、それでわしへの面當をしたつも
りか。
茂吉　（呻きながら床の上に苦しく笑ふ）
道太郎　おぢいさん、さつきの小母さんが寒くなるからこ
れをやつてくれといつたよ。（毛絲のシヤツをわたす）
馬左衞門　（毛絲のシヤツを片方の手に受け取つたまゝや
つぱり呆然としてゐる）
工夫甲　爺さん、しつかりしなせえ。あんな惡い奴を殺し
たつてちつともかまふことはない。
工夫乙丙　さうだとも〳〵。
工夫甲　爺さん、お前さんはもう立派な博奕打の親分だ。
しつかりしなせえ。

おちか　何が立派な親分だ。罪もない人を殺しといて。ほんたうにどれもこれもわたし一人を眼のかたきにして憎む。いつたいこの家の中でだれが一番不仕合せな人間だと思つてゐるのか！（身をもがく。髪を摑んで泣く）

茂吉（呻く。無氣味な笑ひ方で笑ふ。苦しさうに寢床の上を反轉する）

工夫乙　おや病人が變たぞ。

工夫甲　ほんたうに。おい水だ、水だ！

馬左衞門　……（肥後の守を取り落し、毛絲のシャツを摑んだまゝ土間の腰掛へ凭りかゝつてしまふ。おちかの泣く聲だけが聞える）

――幕――

門（二幕）

時

現代。晩秋の夕暮から夜まで

場　所

或る國境に近い山間の村

登場人物

村田義一郎　落ちぶれかゝつた舊家の主人（五十四歳）

かね子　妻（四十五歳）

健二　弟（四十三歳）

松子　娘（實は健二とやす子の間に生まれたる子、松子はかね子を實の母親と信じてゐる）（十四歳）

笹川勇作　東京から來た會社員、かね子の弟（三十二歳）

やす子　（三十二歳）

その他作男、手傳ひの女、村人、小作人等。

第一幕

場面

屋根瓦など古びいたみたる豪家らしき建物。垂木なども折れかゝつたまゝになつてゐるのもある。正面十疊の間、古びたる床懸一軸と、瀬戸物の大火鉢一ヶある他何の裝飾もない。左手玄關の間六疊、昔のまゝの式臺附、鈴掛など昔のまゝで錆びた釘などが打ちつけてある。そこには中央に粗末な一臺の足高な机、二脚の椅子がある。壁には蜂蜜の廣告ビラや小包料金の表などが貼りつけてある。壁に沿うて園藝用噴霧器、蜜蜂箱など亂雜に並べてある。右手十疊の室に隣りて八疊の間の一部が見える。板の間になつてゐて蠶の棚などがそのまゝに並べられてある。すべてが田舍の活動の期を過ごして將に冬の沈默の時機を待たうとする晩秋の午後の空寂さを漂はせてゐる。

上手、八疊の間と向かひ合つて建てる倉の壁の一部分が見える。倉の壁に沿うて一抱へほどの槐樹がある。根に小さき龕。御燈明臺などがあり、秋草が咲いてゐる。

下手玄關の軒をかすめて左手にこの家にやゝ不相應に思はれるほどの大きな、そして全體の建物よりやゝ新

らしく整つた門の屋根瓦、柱など見える。門の上に、砂丘めきたる松山、更に遠く國境の山及び空が見える。

作男及び女しきりに鷄を追つかけまはし一羽を捕へる。松子も一緒に庭をかけまはりはしやぎ騷ぐ。かれ子玄關裏の臺所より十疊の間の緣側に出る。瘦せ型の、日燒けした顏、ひどく生活に疲れたる人の俤。

かれ子　和助、それを捕まへたんかい？

和助　牝ですけんど、ちつとも卵生みませんでこれを殺したらえゝ思ひますで。（白色レグホンを示す）

かれ子　可哀相おやがお客さんに上げるものがないでのう。（ちよつと顏を曇らせる）

和助　あつち、持つていんどきませう。

（男と女は上手へかくれる。松子も一緒に行かうとする。）

かれ子　松子。どうしたんや、遊んでばかりゐて。お父はんが東京から歸りやはつたらまたうんと叱られるで……。

（火鉢の傍に坐つて煙管を手に取る）

松子　……。（もぢ〳〵して母の顏を見る。母の傍に來て坐る）

かれ子　お父はんがたつた十日ばかり家にゐなさらん間に、怠け者になつたいふたらお母はんまで叱られるおやないか。

松子　……。（遠くで野芝居の小太鼓かろく響く。松子その方へ氣をとられる）

かれ子　今日は學校から歸つて來てから、まだ何も勉强せんのおやろ。早う勉强しなされ。來年女學校にはいれなけれやほんとに蘋の工場にやつてしまふとお父はんが言うておやつたよ。

松子　（やゝ反抗的に）勉强したんや。

かれ子　何を？

松子　綴り方！

かれ子　綴方ッ？　お前は算術が一番下手おやないか。算術をうんと勉强をし。

松子　あい。

かれ子　早う奥へいんでよ。

松子　（決心した體で）お母はん……。

かれ子　何です？

松子　今日なあ、芝居見に行きたいが……。

かれ子　勉强もせんであんなことを。昨日いんだばかりおやないか！

松子　でも今日は……。

（上手から玄關の方へ笹川勇作、湯上りの體にて、手拭を下げたまゝ來る。薄い鬚ある紳士。）

勇作　あゝ姉さん、いゝ氣持ちでした。五右衛門風呂といふ奴には、さうだ、この前こゝに來た時はいつたまゝでしたが面白いものですねえ。十年にもなりますかねえ。
(二人の間に坐る)
かね子　さう。たしかもうそれくらゐにはなりませうよ。
勇作　それにしては何も彼もあのころと殆んど變化がありませんねえ。(感慨深さうに家の周圍を眺める)
かね子　あんまり變化がなさ過ぎますよ。(皮肉らしく笑つて、さらに深い寂しい顔をする)
勇作　いや變化がないでもありませんよ。第一またあのころは松ちやんなんかほんの赤ん坊でしたからねえ。(と、松子を顧る)
勇作　おや松ちやん、どうしたの。泣いてるぢやないか。
松子　…………。
勇作　どうしたの?
かね子　芝居を見に行きたいといふのです。
勇作　芝居?
かね子　えゝ、こんな山の中でも、一年に一度ぐらゐは今ごろになると田舍まはりの芝居が來るんですよ。
勇作　へえ……成る程、さつき麓から歩いて來る時、桑畑の傍に莚で圍つた小屋見たいなものが出來てゐました。無靈見たいな板の間には大きな男が一人仰向けになつて寢てゐましたよ。あれが芝居小屋でしたかハツハツハツ……それでどんな物をやるんです?
かね子　毎日出し物はちがうんです。昨日は何だつたかのう?(松子を顧みる)
松子　阿波の德島十郎兵衛ぢやつた。
かね子　あゝ、阿波の鳴戸ぢや。算術はちつとも出來んが、碌でもないことなら直き覺えるんですぜホツホツホツ……。
勇作　ハツハツハツ……それぢや見せてやつたらいゝでせう。
かね子　いゝえ、駄目。毎日つゞけて芝居を見せたなどいふたら、お父はんが東京から歸つて來なさつたらどんなに叱られるか知れぬ。今日は九時まで算術の勉強ぢや。そしたら明日は芝居見せてやる。早う奥にいんでさ……。
(松子しぶ〳〵退場)
かね子　(退場する松子の後姿を眺めたまゝ)可哀相は可哀相ですぞ。あれで毎晩遲くまで勉强するんですがどうも良うできんのです。村田家の人には一人も頭の良い人がないのです。だからあの子ばかりを責めるわけには行かんのですが……。
勇作　女ですから、出來ないものをさう無理に勉强させんでもいゝぢやありませんか。

かれ子　あたしもさう思ふんですが、村田の考では、今ではどうしてもあの子を女學校から女醫學校まで入れて、村田家を繼がせるより他に方法がないといふのですから……。

勇作　さうすると、あの子が兄さんの最後の理想の一つとして選ばれたのですかねえ。

かれ子　最後の理想つて？

勇作　兄さんも隨分、理想だの、空想だのを描いた人でしたねえ。だが、一つも成功したものはまだないやうですねえ。

かれ子　………。

勇作　最初は布哇行き、北海道の馬鈴薯畑開拓。この村に歸つて來なすつてからは果樹園の開拓。養蜂事業……たが一つも巧く行きませんでしたねえ。

かれ子　さうです。まあ運が惡いといふのでせう。人にも親切だし、自分でもずゐぶん良く働くんですが、することなすこと……。

勇作　どこかに計畫上の缺陷があるのぢやないでせうか。

かれ子　あたしもこのごろになつて始めて、どうかすると村田の頭が惡いのぢやないかと思ふことがあるんですが、しかしどこと言つて……。

勇作　頭が少し違つたところがあるといへばあるのでせう。無いといへば無いのでせう。まあ何と言つていゝかわからないことですが、たとへばあの門です（不圖下手の門を指さす。空の色やゝ夕燒の色を呈す。かれ子もその方を見る）あれは兄さんが北海道から來られてから第一に計畫された仕事でした。僕等から言はせれば、もうあの頃は村田家の財産と言つては、わづか二町歩ばかりの田畑と、一町歩にも足りないほどの山林ばかりだつたのですし、借財の方も可なりあつたのですから、あんな馬鹿氣た大きな門なんか拵へるよりか、他にもつと緊急な仕事があつた筈です。

かれ子　それはあつたですとも、あたしにしても不贊成でした。

勇作　わづかに殘つてゐた山林を賣り拂つて、あんな馬鹿馬鹿しい門なんか拵へるなんて、もう第一歩から誤つてゐましたよ。

かれ子　さうかも知れぬが、また兄さんのその時の心持ちも考へてやらねばならぬと思ひます。

勇作　どういふ譯で。（と火鉢の傍にあつた煙草をとり出す）

かれ子　あんたばかりぢやない。村田家の親戚の人たちだつて、村田が近くの村にもないやうな大きな門など拵へたのを見て色々なことを言ひました。笑うた人もありま

した。

勇作　そりや、さうでせう。何でもあの門一つ拵へるために兄さんの山林をすつかり賣つてしまつたんぢやありませんか。

かね子　そこです。村田がそれほどの決心をせねばならなかつたのは、第一、なくなられたこゝのおつ母さんに責任がありますのぢや。（ちよつと上手の方に氣をつけて、やゝ低い聲で）おつ母さんはあのやうに十六年も病みつゞけたまゝでしたが……。

勇作　姉さんもずゐぶん苦勞をなさいましたねえ、あの方のためには。（同じく上手に氣をくばりながら）

かね子　（感慨深さうに俯向いてしまふ。膝の上にぽとりと涙を落す）

勇作　姉さんは小さいころから養子にやられなさるし、養家では養家で苦しみ、こゝに來ては……。

かね子　（抑へるやうにして）まあそんなことはどうでもいゝが……ともかくです。なくなられたおつ母さんが、村田とわたしを枕もとに呼んでかう仰つしやるんです……あたしは立派な門のある家から嫁に來たんぢや、だから死ぬる時も立派な門から與を出して貰はんぢやならぬと……。

勇作　そんなこともあつたんですかねえ。

かね子　村田はあんな親孝行な人ですからねえ。それにおつ母さんにしても、無理に門だけ拵へさせるつもりでもなかつたでせう。それは村田にしても同じでせうが。また麓の叔父さんなどに對する意地もあつたでせうよ。

勇作　なるほどねえ……。

かね子　人の田も山林も胡麻化してしまふし、町に出す米と言へば、質の良い自家の米は自分の名で賣るし、自家の俵には自分の方の惡い米を入れて出すんですし……。

勇作　そんな惡いことをしてあんな大きな城のやうな邸を作つたのですかねえ。（ちよつと伸び上つて麓の方を見る）

かね子　だからさ、村田はあんな人ですから。男の意地としても村田は門だけでもせめて叔父さんの門より大きな門が作りたかつたでせうよ。何せ、こちらが村田一黨の宗家なんですから、それを思ふとわたしにしてもおつ母さんを貧乏のまゝで死なせたのは悲しいと思ひますよ。（袂で涙を拭く）それにあのころはまだ健二さんもやす子に突かれた眼の痛みがほんたうに癒らんで、京都の大學病院だの、有馬の温泉だのいふて隨分お金はかゝつてをりました。その苦しい中からあの門を拵へるんですから、自家の人の身になれば、またあたし等に話しにくい苦しいところもあつたでせう。

勇作　まつたくですねえ。健二さんの事件さへなかつたら、また兄さんの事業にしてもうまく行つたでせうにね。

かれ子　さうですとも。いつたいやす子といふ女のやり方は常識では考へられませんよ。何ぼ自分の男を戰爭に出したくないからと言つて、自分の男の眼を突いて盲人にするなんて……。

勇作　一度は出征なすつたんでしたねえ。

かれ子　さうです。旅順でひどい負傷をして内地の病院に送られて、傷がなほつて、尙一度いよ／＼出征するといふ日の朝だつたさうです。やす子があんなことをしたのは。

勇作　よく／＼思ひつめたものでせうねえ。それでやす子さんといふのは監獄に送られたんですねえ。

かれ子　北海道の何とかいふ監獄です。

勇作　しかし考へて見れば健二さんも氣の毒だが、やす子さんも氣の毒な人ですねえ。（考へ込む）

かれ子　（ちよつと不愉快さうな顏をして煙管に火をつける）

勇作　で、監獄からは旣うやす子さんは出たんですかい？

かれ子　えゝ、二年とゐないで出たさうです。精神異狀とか何とかいふて。（吐き出すやうに言つたが、急に人の氣はひがするので勇作に目くばせをする）

（上手竈棚の傍から小作人と、健二出で來る。健二は色蒼白く、神經質らしき盲人。）

小作人　健二さま、ありがたうございました。おかげでえらう安心いたしました。（と式臺のところで腰を低くこゞめて懷より紙包を出し）これはお恥かしうございますが。

（健二が押しやるを無理におく）

健二　今いふた通り、案じることもありますまい。たゞこの月の半ばまでは旅立ちなどはなさらぬがよい。人は自分に思ひも寄らぬ時、思ひも寄らぬ迷ひに引かゝるものだやけに……。

小作人　はい、はい、ありがたうございました。（下手へ去る）

（健二小作人を見送りて、十疊の間へ來る。）

勇作　お疲れでしたらう。（座をすゝめる。健二、手探りしながら勇作の傍に坐る）

健二　ハッハッ……好きでこんなことを始めましたが。

勇作　いつたい何時こんなことを御研究になつたのです？

健二　研究したわけではないのですハッハッ。

かれ子　子供のころ健二さんは病身で、山のお寺にあづけられてゐなすつたのださうです。その時和尙さんに教はりなさつたんで……。

健二　ハッハッハッ……。（恥づかしげに笑ふ）

勇作　それで巧くあたりますか。
健二　さあ、どんなものですかハッハッハッ……。
かね子　いえ、健二さんは正直だから、よく占ひがあたるさうですよ。こないだもさうでした。この麓からでしたがまだひんびんしとる男でしたが、健二さんが占ふて少し氣をつけなさいと言ひなさつたが、それから一週間立たぬうちに酒を飲んで、川に落ちて死にましたよ。多い時には一日に十人は來ませうよ。すゐぶん遠いところからも……。

（この時再び野芝居の小太鼓の音遠くに聞ゆ。太鼓の音止むと殆んど同時に松子が裏の方で高い聲で歌つてゐる聲聞ゆ。）

かね子　おや、松子の聲でせう、歌うてるのは？
健二　…………。
かね子　どこでせう？
勇作　裏の松山の中ぢやありませんか。
かね子　またそれぢやいつもの松山に行つて歌うてるんですのう。
勇作　たいへんいゝ聲ぢやありませんか。

（松子の歌の調子、一層高く、一層美しく響く。三人しばらく聽きとれる。）

かね子　自分では女醫なんかにはならぬ、音樂家になるんだなんて生意氣なことをいふんですぜ。あの歌がお得意なんでせう算術は丙丁ですが唱歌なら何時も甲ですのう（健二を顧る。健二うなづき、考に沈む）可笑しいのですよ、村田は三浦環といふ人が城下に來たころは、自家の松子も音樂家になさうか唱歌がうまいからつてホホホ……。

（勇作笑ふ。健二寂しげに笑ふ。）

勇作　（不圖氣付いたやうに）時にもう日が暮れかゝつて來たが、大分寒くなつて來た。僕も今夜は立たなければなりませんから洋服と着替へませう。（立ち上る）
かね子　さうした方がいゝ、あまり日が暮れると田舍は歩くのに難儀だから。
勇作　僕が立つた後で、兄さんでも歸つて來なさると殘り多いが……。（門の方をしばらく見つめて躊躇するが、思ひ切つて上手の方へはいつて行く。
健二　兄さんも、もう歸つて來なさらうと思ひますがなあ。（屈托さうに煙草を喫かす）
かね子　わたしもさう思ふのですが……。（ぢいつと門の方を見つめる）おや、うつかりしてゐました。勇作が立つとすれば早う御飯の仕度もしてやらねば。

（玄關裏の臺所へはひる。黄昏の靜寂室内を占む　健二夕暮の寂寞の聲を聽くかのやうに、耳を傾けて柱に

懸りかゝる。松子振りかへり振りかへり門の上の空を見ながら下手より登場。門の上、山のあたり夕焼けの色美しく燃ゆ。）

松子　（うたひながら來り、立ちどまつて、門の上の夕焼けの空を見る）結構な空やなあ。

（間）

松子　（家の中を覗きながら）あら叔父さんかいな、そこにをるなあ？

健二　あゝわたしぢや、松子かい？

松子　わしびつくりした。そない薄暗いとこにゐるんぢやもの、叔父さんは一人で。

健二　ハツハツハツ、そないにびつくらしたのかい。叔父さんがこゝにゐたんで。

松子　でも叔父さんは、さうやつてゐると幽靈のやうに寂しいもの。

健二　面白いことをいふの、どうして。ハツハツハツ……。

松子　どうしてやら知らんけど……叔父さん？

健二　何ぢや？

松子　叔父さんはいつも何だか寂しさうぢやなあ。

健二　わたしがかい？

松子　あゝ……。

健二　さうでもあるまい。

松子　いゝや、さうぢや。あたしいつでもさう思ふのぢや。叔父さんはなぜこのごろ寂しい顏ばかりしてるかて？叔父さんは盲人ぢやからかのう？

健二　さうかも知れぬ。盲人の顏は寂しいからのう。

松子　誰でも言ふとるわ、村の人たちは叔父さんは氣の毒だて。

健二　わたしのことをかい？

松子　あい。

健二　………。

松子　（不圖思ひ出して）あゝ、それからあたしが昨日芝居見にいんでもどりよつたら、見知らぬ小母さんが來て、叔父さんは丈夫かねつてたづねたが。

健二　何處でよ？

松子　あの大沼の傍でよ。

健二　大沼の傍で？

松子　あい。

健二　どのやうな小母さんだい？

松子　どのやうないふても言へんが。

健二　家のお母はんぐらゐの人けえ。

松子　うむ、若え。そしてもつと色の白え。

健二　そして叔父さんは丈夫かい言ふてそれだけで……。

松子　お父はんやお母はんも今家にゐてかへとなあ。

健二　たづねたのかい？……
松子　あい。
健二　そしてどつちの方へもどつていんだ。
松子　そしてたあ、あたしをぢいつと見てゐたが、可愛いい子ぢや言ふて抱かうしたけに、びつくりして逃げて來たんぢや。後で見たらやつぱり大沼の傍に立つとつた。
健二　（獨言のやうに）あの大沼の傍に立つてゐた！……ひよつとしたらあの女がやつて來たのぢやないか？　いや、そんなことがあり得るものか。（室の中を手探り歩きながら縁側へ立つ）でもさつき訪ねて來た嘉衞門さんもわたしに低い聲でさう言つた。何だかあの女に似た女を昨夜こゝの直ぐ門の前で見たと（戰慄と不安を感じたやうな表情で一點を見つめる）大沼と言へば、あの女とあのやうなことになつたのもあすこであつた。あすこであの晩逢ふやうなことさへなかつたらあの女も他の男と一緒になつたであらうし、またあの女もわたしもこんなことになることもなかつたゞらう。人間の一生といふものはほんに妙なものぢや。道を歩いてゐる人が、もう一歩早いか、遲いかで或る人は仕合せに打つ突かる、或人は不仕合せに打つ突かる……わたしはこのごろになつて、人間はどのやうにもがいても、なるやうにしかならぬしまたどのやうになつたところで、それがその人の名譽でもなく、不名譽でもないといふことを知るやうになつた。名譽だの不名譽だのといふつまらぬ考へから人を捨てたり、憎んだりすることがほんにくだらぬことぢやといふことも知るやうになつた。わたしはあの女のためにこのやうに兩方の眼もつぶされたし、社會といふものから葬られてしまうた。わたしはこの十何年どないにかあの女を呪ふたか知れぬ。しかしこの頃ではわたしは幾らかあの女の心も掬むことができて來たやうに思ふ。もしわたしの前にあの女が戾つて來たとしたならわたしは…………しかし、そないなことが……わたしの心はこのごろはいつも何か知らぬが黑い影にでも追はれてゐるやうな氣がしてならぬ。人間にはいつでも思ひ設けぬ大きな禍がふりかゝつて來るといふことがあまり強く感じられて來た。わたしは生てゐることが怖しくなつて來た。わたしは、兄たちのやうに死ぬまで自分等の思つた道をまつしぐらにすゝむことのできる人がうらやましい。

（かれ子下手、玄關の裏より登場、手に御水の瓶子を持つ。）

かれ子　健二さん、そこにおいでゝすかい。松子もそこにかい！　お前勉強せんといかんが、歌ばかりうたうて。
（庭に下りて龕の扉を明けて瓶子を中に入れる）
健二　姉さんはよう信心なさるなあ。一晩でも御水とお明

りを絶やしなさつたことはないでせう。

かれ子　えゝ、だけど、自家の神さまはこれほど祈つてもいまに何の驗もあらはしてくださらんので。

健二　姉さんは何をさう神さまに願ひなさるんです？

かれ子　あたしですかい？　そりやあなたいくら神さまぢやからいふても、これほど毎晩御水を上げて御明りをつけたりしてゐるのですもの、それに對してでも何か宜いことをさづけてくださらねばならぬ義理でせう。

健二　ハツハツハツ……。（淋しげに笑ふ）

かれ子　だからあたしいつでも祈るのです、神さま、あなたはこの村田家に何代といふ間神さまとして祭られてゐなさる。さうすれば少しは村田家のことも考へてくださる筈だ、村田家が今日のやうに落ちぶれてゐるのをあなたは知らぬ顔で見てゐなさるつもりか。一日でも早う今夜にでも宜い仕合せを持つて來てくださいつて。

健二　さう、祈られては神さまも少しお困りでせうハツハツハツ……。

かれ子　ホツホツホツ……。

松子　お馬ぢや、高天さまの御神馬ぢや。（鈴の音聞ゆ。男二人下手より來る。一人の男は挾み函を擔いでゐる）

男一　御供物でございます。（紙包みをかれ子に渡す）

かれ子　御苦勞さまで御座います。（火鉢の傍の小箱より小錢を出して男に渡し奥の間へ入る）

男一と二　ありがたうございます。（下手へ退場）

松子　御神馬を見て來う。（馬を追ふて門の外に出る。鈴鳴る）

（松子再び門の方より登場。門の上の空を眺む。夕燒けの空次第に黄昏れゆく。）

松子　叔父さん……。

健二　……。（俯向いたまゝ柱に凭りかゝつて考へ込んでゐる）

かれ子　（手に御燈明を持つて登場）松子、まだそこにゐたんかい早うあつちにいんでランプを持つておいで。

松子　あい……。（なほ不思議さうに健二の方を見てゐたが、やがて再び暮れてゆく夕空を眺め入る。舞臺暗くなる）

かれ子　（燈明をかゝげて、龕の前にしやがみ、合掌して熱心に祈願をこめる）

健二　（柱に凭れたまゝ遠い空の音に聞き入るやうな表情）

（色白き、影の如く寂しき女、上手のしげみに隠れ、壁にそふて立つ。女しげ／＼と健二と松子の姿をすかし眺めて、悲しさに堪へぬやうに顔を掩ふ。）

（鈴の音かすかに響き、やがて消えゆく。）

第二幕

舞臺面第一幕と同じ。同じ日。第一幕より約一時間後。

玄關の間のテーブルの上にランプを置き、松子一人椅子に凭りかゝつて眠つてゐる。麥を搗く音、麥搗き歌かすかに聞ゆ。

小作人勘三（年齢四十五六歳）　おしまひでしたかい？

（返事なし）今晩は……はあ嬢さんよう寝てゐなさるな。（少し大きな聲で）おしまひでしたかい？

奥よりかね子の聲　はい……どなた？

小作人勘三　わたしです、今晩は……

（かね子登場。）

かね子　あゝ、勘三さんでしたかい。今晩は……まあおかけ。（松子の方を見て）まあ、松子はまた眠つてゐる、これ、松子！

（松子起きる。）

かね子　どうしてこないに勉強がきらひなのだらう。また、それぢや、來年も落第だよ。さあ、あつちに行つてお湯にでもはいつておいで。

（松子退場。）

かね子　勘三さん何か用でも？

勘三　旦那さまは東京においでだつたといふことでしたが、まだお歸りにはなりませんかい？

かね子　あい、もう歸りなさるぢやらうと思ふとりますが……

勘三　實は旦那さまのおいでを待つてからと思ふとりましたが、いつまでも待つてをれませんので、ちよつと御相談に參りました。（式臺に腰を卸し、マッチを借りて卷煙草を喫む）

かね子　で、御相談と仰つしやるなあ……

勘三　旦那が東京へお立ちの前にもちよつと申しては置きましたが、御存じの通り今年も植付けの時からあの旱魃でしたのでまあ八俵のとかあ六俵、ひどいなあ五俵しか穫れますまい。まあ明日にでも奥さんちよつと田に往んで穗を手に持つてごらんなされ、ばら／＼の實が算へるほどしかなつてをりません。

かね子　あたしはようわからんけど、まあ例年とくらべてさう惡いとも聞きませんが、勘三さんの言ひなさる通りなら。

勘三　えゝ、何でわたしが嘘を言ひませう。それで小作米の方ですがなあ、今年はまあ一俵だけまけていたゞきたいのですが。

かね子　一俵と言ひなさると？

勘三　段に一俵づつです。

かれ子　さあ、あたしにはそのやうな相談は……

勘三　奥さんには無理でせう。で、旦那さんがお歸りでしたらどうぞ……あつ、そんなら健二さんがおいでゝすやろ。

かれ子　をります。

勘三　ぢや、ちよつと健二さんを、恐れ入りますが……

健二　（奥の方より）勘三さんですかい？（手探りしつゝ出て來る）

勘三　おしまひでしたかい。

健二　おしまひでしたかい。

かれ子　勘三さんが小作米のことで相談に來なさつたんですがのう。

健二　あつちで聽いとりました。が、姉さんが言ふてゐなさつた通り、やつぱり兄さんが東京から歸つて見えんことにや。

勘三　そりやようわかつとります。がわたしの方も急ぎますので早う御相談だけしといて貰ひます。

健二　相談はしときますが……

勘三　それから何です。こないなことは言ひにくいのですが、こちらの田も今年きりで、來年からは他の衆にやらしていたゞけますまいか。

（かれ子、健二やゝ驚きの表情を示す。）

勘三　たんとでもあればですが、ヱヘ……こちらのは半丁歩にも足りません、却つてその方へ……。

かれ子　（やゝ羞づかしさうに顏を赧らめて）えゝ、そりや、もうあんたも知つての通り、村田の事業がうまくゆかんので、勘三さんにあづけといた田畑も年々人にゆづるといふ風で、あんたには氣の毒だが、前からの行きがかり上、迷惑を願ふとりますが……そのこともあたしと健二さんだけではどうも決めかねますので、いづれ村田が東京から歸りました上で……

勘三　えゝ、その方は急ぐやうでも急ぐことでもありませんので先づ小作米の方からどうぞ……（立ち上る）

かれ子　話しときます。

勘三　どうぞ願ひます。無理言ふてすみませんが……

かれ子　いゝえ、なに……

勘三　いやもう何ですぞ、地面持つても何でせうが小作しとりましても、どうも百姓ぢや死ぬまでうだつは上りませんぜ。

かれ子　さうですのう、今ぢや農家が一番割が惡うござんすのう。

勘三　朝暗いうちから起きて、日が暮れるまで牛馬のやうに働いても東京見物一つできませんが。（ちよつと皮肉に）

かね子　それや、さうですのう、しかし……

勘三　まあ見てごらんなされ、わたしたちにしても、あんた麓の工場に紡績を運びにいんでも一日に三兩は貰へますぜ、朝は八時から午後四時までゝさあ。このごろぢや女などで田などに出て働くものは一人もありませんぜ。織場の仕事を引き受くれば一月には女であんた八十兩から儲かりますで。いまにあんた田舍は荒野になつてしまひますぜ。働く人間は一人もをらんで地面持ちばかりが墓場のやうな荒れ地の番をしませうぜハッハッハッ……

かね子　ホッホッホッ。（不愉快げに笑ふ）

健二（始終沈默してゐる

勘三　それでは姉さん、……健二さん……

かね子　おやすみ……

（勘三退場。）

（間。）（麥つき歌、杵の音聞ゆ。）

かね子　自家の人は何時歸りなさるつもりだらう。勘三までがあのやうなことを言ふやうになつたか……。（獨語ちながら、テーブルの上の新聞紙を讀む）あゝ、勸業債券の當り錢の番號が出てゐますぜ（急にあわただしく眼を通す

健二（殆んど何の興味も持たないやうに）さうですかい。でも、吾々のやうに落ち目になつてゐるものは、錢にまで馬鹿にされますわ。

かね子　……（無言のまゝ讀みつゞける）

健二　姉さんは債券と一枚一枚引き合はせんと、よう覺えてゐなさるのう。

かね子　そりやあなたたつた二十枚ばかりの債券ぢやもの。

健二　でも、それだけの數をよう覺えてゐなさる。

かね子　でもあなた、今では二千圓の債券にでも當つてくれるより他に、あたしたちがこの境遇を打ち破る方法はないぢやありませんか。かうなれば何も彼も命がけですわいホッホッホッ。

健二　姉さんの債券も久しいもんですのう。

かね子　……次第に絶望の色をあらはす。腹立たしげに新聞を放り出す）

健二　駄目でしたかい、姉さん……

かね子　………

（再び新聞を拾ひ上げて讀む。）

かね子　絹の相場がまた下りましたよ。

健二　さうですかい。

かね子　九十二錢になつとりますよ。

健二　九十二錢！　大分安いですのう。

かね子　これぢや、とても賣つたところで元々にもなりま

せんぜ。この春のあの高い桑と、高い手間賃を拂うて九十二錢ぢや。まるでお話にもなりませんぜ……

健二　さうですのう……(輕く溜息をつく)

(間。)

(かれ子再び熱心にくりかへして新聞の抽せん廣告を讀む。)

健二　(不圖耳を立てゝ)俥の音ぢやありませんか？　姉さん……。

かれ子　ほんに俥の音ですのう。

健二　兄さんが歸つて來たんぢやないでせうか？

(義一郎登場。双鬢すでに白し、苦鬪に疲れ果てたる憔悴の色見ゆ。よれよれになりたるインバネス、赤茶けたる中折帽を冠り、手に蝙蝠傘と新聞紙包みの卷物とを持つ。後より色褪せ、補綴だらけの半纏を着た車夫バスケットと毛布包み一つをげん關に運ぶ。)

義一郎　(半ば悲鳴をあげるやうに)あゝ、あゝ、草臥れた。えらいことぢやつたぞ。(懷中から紙入れ取り出して車夫に金をわたす。車夫默禮して去る)

かれ子　(式臺から下りて、急いで主人の手にせる物を受けとる)ほんにお疲れでしたらう。

健二　(手探りしながら式臺の方へ近づく)草臥れてでしたらうのうハツハツハツ……(寂しく笑ふ)

義一郎　うむ、いや、わしもすつかり田舍者になつてしまうたよハツハツハツ。三十年振りに東京に出たんぢやがえらい變り方ぢや。田舍者には恐ろしいやうぢや。どこを見てもえらいことぢや、あゝあゝ。(溜息をつく)

かれ子　(インバネスを脱がせながら)あなたお湯が沸いとります。お湯からはいりなさつたらどう？

義一郎　湯もありがたいが、もすこし待つてゐてくれ、どうしたんか家に歸つて來たら、かう急に草臥れが出て……(物さうに袴や足袋を脱ぎ捨てる。木綿の紋附羽織を壁に掛け、正面十疊の間にはいる。勇作背廣服を着、奥より出て來る。かれ子室の中央の吊ランプに火をともす)

勇作　兄さん、しばらくでした。

義一郎　うむ、あんたも來てゐたんか。(なつかしさうに勇作を見る)

勇作　今夜僕は東京へ立ちますので、お目にかゝれないかと思つとりましたが。

義一郎　あんたはいつも丈夫でよいのう。あんた等はこれからぢや。うんとやりんさいよ。

勇作　兄さんだつて、まだ〳〵これからぢやありませんか。

義一郎　いや、もう駄目ぢや……あゝ、日暮れて道遠しぢや。

勇作　で、兄さんは何で今度は東京にお出かけになつたのです？

義一郎　何といふ目的もなかつたが、わしも三十年來爲ること成すこと、よう面白うゆかんぢやつた。村田一黨の宗家としてこの家の名譽、この家の社會的地位といふものを昔通りにしたいと思つたればこそ、隨分わしも、お前の姉さんも惡戰苦鬪したよ。姉さんにしても、わしにしても恐らく一人で三人前は働いたぞ。しかし、天運といふか、それともわし等の計畫に誤りがあるのかのう、働いても働いても尙一歩といふところでいつも背負ひ投げを喰はされた。で今度は一つ更に心機一轉といふつもりで上京したんぢやが。

（健二、かね子俯向き、深い感慨に沈む。）

勇作　ほんたうにお氣の毒なほど兄さんはその點に於いては不運でしたね。

義一郎　運命なんていふやつに自分の不成功の責任をなすりつけるのは臆病なことぢやが、カナダから日本にネーブル柑の苗木を取り寄せたのは、この縣ではわしが眞つ先だつた。わしは八年の間、わしの財力と、努力のすべてを盡してネーブル柑を育て上げて行つた。わしは始めて手毬のやうなネーブル柑がなつたのを見た時は、あの畑の隅でほろりとした。ところがその秋のあのひどい霜で、わしの八年間の努力が鐚一文の價値もなくなつた。わしはあの時ばかりは氣が狂ひさうだつた。それでもお前の姉さんにはげまされて、わしはまた蜜蜂を飼つた。郡内でもわしほど箱數を多く持つた者はなかつた。そしてわしはまたその方面に於いても縣内での先覺者であつた。ところがどうだ、わしにすゝめられてわしの仕事を眞似して行つた人たちはネーブル柑でも、蜜蜂でもみんな相當に成績を擧げてるのにわしだけは、何一つ成功せなんだ……

かね子　あたしも、どうかすると齒痒くなつて來るんで、時としては兄さんのやり方が惡いのぢやないかと思ふと、兄さんに無理なことをいふこともありますが、まつたく兄さんは運が惡いんでせう。事業の上で成功せなんだばかりか、名譽といふ點にまで思ひも寄らぬことから……

（健二、急に抑へがたい憤りを示す。勇作も義一郎もかね子の言葉をとゞめようとする。）

勇作　姉さん……

義一郎　かね子ッ！……

（しばらく、不愉快な沈默。）

健二　姉さん、わたしや、姉さんの心持も宜うわかつとります。（やゝ顫へ聲にて）

義一郎　健二、何言ふのぢや。そないたこと今になつて言ふ必要はないが。
健二　いや、わたしは姉さんを怨んで言ふのぢやない。姉さんほど、嫁に來て村田家のためによう盡してくれた人がどこにあらう。たけに、姉さんが、あのやす子の仕打を憎みなさるのは無理もない。しかしやす子の仕打ちを憎むとするならば誰よりもわたしが眞先きに憎まねばならぬ。兄さんや、姉さんはやす子があのやうなことをしたんで、村田家の名譽も土臺からくづされてしまうたと思ふておいでなさるぢやらう。わたしも長いことさう思ふて、やす子を憎んでゐました。今も憎んでゐます。しかし兄さん、わたしや、このごろになつて村田家の名譽やら、また社會的地位なんていふことにみんな夢中になつてゐなさるのが少し可笑しいやうになつて來ました。
かね子（興奮した感情を無理に抑へようとして）健二さん、まあそんなことを……
義一郎　健二、お前はほんたうにさう思ふとるのかい？
健二（極めて落ち着いた態で）えゝ、さうです。
かね子　健二さん、もしあなたがさう思うてゐなさるとすりや、兄さんはほんたうにお氣の毒ですぜ。兄さんが折角成功しかゝつてゐた北海道の農園を捨てゝ故郷に歸つて來なさつたのは、亡くなられたおつ母さんと、それから、あなたのためでしたぜ。あたしや、あんたの嫁さんを惡う言ふのぢやないが、もしやす子さんがあんたをそのやうな片輪者にするやうなことをせなんだら、あたし等は北海道にゐて、屹度成功したにちがひありません。北海道ではまあ成功者の一人でしたぜ。あの有望な農園も何も捨てゝ、兄さんがこゝに歸つて來なすつたのは誰のためです。
勇作　姉さん、もうそんなことを今更言つたところでどうしませう。
かね子　健二さんのやうに言ひなさると兄さんの一生の努力といふものが、まるで何の意味もないことになるぢやありませんか。あたし等がこゝに歸つて來た時は恰度戰爭の最中でした。あたしたちはまるで村の人たちに非國民扱かひにされました。村に着いてもこゝまで荷を運んでくれるものもありませんでした。
義一郎　かね子、もうえゝがなあ、言はんと。
健二　いや、姉さんも言ひたいたけ……。
かね子　えゝ、言はせてもらひます。自分の女房に眼を突かれてそれで盲になつて、戰爭にも行かれぬ馬鹿ぢやといふ人もあれば、ありや、夫婦詰しあひでしたことぢやといふ人もあるし、ほんたうにあたし等、村に歸つて來ても……。

健二　その時の姉さん等の心持はようわかつとります。

かね子　そりやさうでせう。で、兄さんはあんたのため、一生涯をさゝげて、あんたの名譽も取りもどしてやる。村田家の地位といふものも昔通りにして見せるといふので今日まで働いておいでぢやつたのです。それぢやのに、御本人のあなたが今になつてそのやうなことを言ひなさるんぢやまつたく兄さんの立ち場がありませんぞ。

健二　さう言はるればさうかも知れません。けれど、わたしのこのごろの僞らぬ心を言へば、わたしや、名譽だの地位だの言ふてあせつてゐなさる兄さんや姉さんの心が氣の毒になつて來ました。もつとも、わたしや、やす子に眼を突かれた日から日の光りといふものを見たことはなし、わたしが見とるのはいつも暗の世界ばかりぢやから、こんな氣になつたのかも知れぬが。

義一郎　健二や、お前はほんたうにさう思ふのかい？　お前のほんたうな心を語つてくれ。

健二　わたしはどうしてもさう思ふのです。

義一郎　お前がさう言へば、わしの心までが、わしの今までの事業をも疑ふやうになる。わしはお前の言葉が恐ろしい。お前の言ふことは、何やら氣味の惡い影を持つてるやうぢや。

かね子　あなたはそのやうな弱い氣でどうします。あなたは、それでは第一あたしに對してすみますまいが。あたしがあなたに貰はれたのはまだあなたが東京にゐなさる時でした。あたしにはこのやうな山の中に來て住む氣は微塵もなかつた。北海道からこゝへ來る時でもあたしは反對でした。でもあなたは母のためぢや、健二のためぢや、わし等は母と健二のために一生をさゝげるのだと仰つしやつた。ほんたうに尊い仕事ぢやとお話でした。あたしはあなたの立派な決心と言葉に惹きつけられてこゝの山の中に一生を葬りに來たんでした。もしあなたまでが健二さんの心になつてしまふのでしたら、いつたいあたしのこれまでの苦心といふものは何になるんです。あたしは誰のために苦しんでゐたんです。

（袂を眼に當てる。）

義一郎　いや、わしの言葉をさう解釋してもらつては困る。健二は健二、わしはわしぢや。健二の言葉にも眞理はあらう。ぢやが、わしが踏んで來た道にも眞理はあらう。のう勇作さん。

勇作　そりや、さうですとも、兄さんのこれまでの努力をどうして無意味だなんて言へるものですか。

かね子　兄さんはあたしを、御自分の理想通りに教育するんだと言つて、あたしをこのやうな人間に作り上げて下さつた。そして今になつて……あたしは何の爲めに生き

てゐたんでせう。(涙を拭ふ)
勇作　姉さん、兄さんの心持ちは、さうぢやないのですよ。
　姉さんはすこし興奮してゐなさる。
かれ子　あたしや興奮はしてゐません。
義一郎　わしが旅から歸つて來たばかりぢやないか。お互
　にもすこし笑ふた方がえゝ。
かれ子　いゝえ、別に怒つたわけぢやありませんがホッホ
　ッホッ……(氣まり惡さうに笑ふ)　そりや、さうとあな
　た疲れてゐなさらう、風呂にはいつて。
義一郎　いやもう疲れもとれた。勇作さんも今夜立つとす
　ればいつまた逢はれるかも知れぬ。わしや少しでもゆつ
　くり話してゐたいで、健二、お前から風呂にはいつてく
　れ。
健二　それぢや、さうしませう。(立ち上り、玄關より上
　手の方へ手探りしつゝゆく)
義一郎　松子はもう寢たかい？
かれ子　さつきこゝで居眠りしとりましたが。また奥で寢
　とるかも知れませんぜ。
義一郎　(不快氣に)よう。怠けるのうハッハッハッ……。
かれ子　何ぼ叱つても聽きませんもの。あなたがいつたい
　育て方があまり寛大ぢやもの。
義一郎　さうでもないんぢやが。困つたものぢや。どうし
　てもわしや、あの子は將來醫者になすつもりぢや。松子
　が醫者にさへなれば村田家も昔通りになるかも知れぬ。
　どうしてもわしはあの子を立派に育て上げねばならぬ。
かれ子　それにしちや、あなた今少し嚴重に育てゝ上げんぢ
　や、來年もまた女學校は駄目でせうぜ。
義一郎　今の學校はなか〳〵はいりにくいでのう。
勇作　どこの學校もさうらしいですねえ。この節の子供は
　まつたく可哀さうです。
かれ子　でも、可哀さうだ、可哀さうだと言つてゐた日に
　やあ、子供自身が一生人間らしい人間になることもでき
　ぬぢやありませんか。あなた、松子は、今度はどうでも
　女學校に入れないぢや、女醫なんて夢にも出きません
　ぜ。
義一郎　まあ、さう責めるな。
かれ子　ぢや、あなたの宜いやうになさい。
義一郎　わしだつて考へてはゐるんぢやから……時にあの
　子は少しも顔を見せんが、どうしたんぢやらう。
かれ子　さつきこゝで居眠りをしてゐましたが、またどこ
　ぞにいんで眠つてでもゐませう。
義一郎　それぢや駄目だ。探し出して來ておくれ。
かれ子　はい、ほんとに世話の燒ける子ぢやなあ。(退場)
勇作　東京で面白いこともありましたらう。

義一郎　いや面白いことは一つもなかつた。たまに田舍から出かけると氣がつまりさうぢやで。みんなうまく成功しとるぞ。龜原といふ男はわしと北海道で一緒に事業をやつてゐたんぢやが、今では神田に堂々たる邸宅を構へてゐる。應接間にはずうつとかう虎の皮を敷きつめてゐる。わしにのう、もう三四年北海道にゐればよかつたと言ひよつたが、あいつはほんにえらい成功をしたわい。

勇作　その人は今は何をしてるんです？　東京で……。

義一郎　代議士ぢやが、事業の方は事業の方で大けなことをやつとる。日本銀行の副總裁をやつとる宮川もわしの法律學校時代の友たちだつたので會ひに行かう思ふたが、日本銀行の前までいんで止めにした。それから深川に造船所を持つてゐる松山も昔の友たちぢやつたので訪ねて見たが、今歐洲漫遊中で留守ぢやつた。

勇作　大分いろ／＼な人をお訪ねでしたね。

義一郎　折角上京したんぢやから片つぱしから訪ねて見よ思ふたが、草臥れてさうも出來なんだが、みんなよう成功しとるわい。

勇作　で、何か心機一轉といふやうなうまい計畫でも出來ましたか？

義一郎　いや、心機一轉するやうな新らしい世界でも見出せるかと思つたが、もうやつぱり年のせゐぢやらう。東京に行つて見たところでたゞ草臥れるだけぢやハッハッハッ。（寂しく笑ふ）

勇作　ハッ、ハッハッ……でもさうばかりとも限りやすまい。

義一郎　實はな、（不圖思ひ出したやうに）わし山本八郎に逢ふて見たんぢや。

勇作　政友會の幹事か何かやつてる男でせう。

義一郎　さうぢやこの前の選擧の時わしあの男の投票を纏めるんで少し骨を折つてやつたこともあるで。

勇作　さうですか。でどんな御用で。

義一郎　どんなつて、これといふこともなかつたのぢやが、わしが思ふには、將來日本の運輸界の中心はどうしても飛行機に奪はれるに決まつてゐる。でさうなれば今日の汽車のステイションの代りをするものは飛行機の發着所ぢやのう。そこにわしは着眼したんぢや。東京を起點として、飛行機の飛行距離や、物資や、地勢の關係などを調べて見ると、どうもこの村の麓あたりが廣くもあるし、候補地として有望ぢやないかと思ふたのぢや。

勇作　（やゝ驚いたやうな、笑ひを隱したやうな表情で）兄さんはそんなことまで考へておいでですか？

義一郎　それでぢや。政友會あたりの幹部連はもうそれ位の計畫は持つてゐるぢやらうし、どこいらに飛行機の發

着所を選定するつもりか、そこいらのことを聽いて見たかつたのぢや。いよ／＼麓あたりになるとすれば、今の中に少し土地を買ひ占めとくんぢやのう。

勇作　（やゝあきれた風にて義一郎を見たまゝ默り込んでゐる）

（松子眠さうな顏にて登場。）

松子　お父はん……

義一郎　勉強してゐたかい？　お父はんの留守に。

松子　（もぢ／＼して）あい。

義一郎　また怠けてばかりゐたらう。

松子　うむ、さうぢやない。

義一郎　ぢや、お父はんが東京に出かける時言ひつけといた宿題を持つて來て見んさい。

松子　お父はん、東京のお土産は？

義一郎　あゝ土産か、明日郵便で來るやうにしといた。

松子　噓ぢやないかい。

義一郎　ほんたうぢや。さあ宿題を持つて來て、お父はんに見せんさい。

勇作　（懷中時計を出して見て）ぢや、僕時間が切迫しますので、ちよつと荷物を何しますから……

義一郎　あゝぢやが、もう一晩ゆつくり話せんかのう、出立は明日にして、（懷しさうに）一度別るればまたいつ逢ふやら分らんで。

勇作　ありがたうございますが、先方の期日が決まつてゐますんで。

義一郎　（低い聲で）さうかいのう……

（勇作退場。）

（松子壁の傍の蜜柑箱の中からノートを取り出し、義一郎に渡す。義一郎しばらくノートを讀む。讀んでゆく間に次第にかれの顏暗くなる。）

（間。）

義一郎　どうしたんや、松子。

松子　（俯向いたまゝ默つてゐる）

義一郎　お父はんは東京に出かける時何と言つて出た。たつた五十題ぢや。お父はんは十日家にゐなんだ。十日の間に五十題ぢやと一日にたつた五題づゝぢやないか。それぢやにお前は十日にたつた九題しかしとらん。一日に一題にもあたらんぢやないか。それから見い、一題だて答がほんたうに合ふたのはないぞ。九題が九題ともみんな無茶苦茶ぢやないか。鶴と龜の脚數の問題などはもう何十遍敎へてやつたやら知れぬ。（絕望と共に憤怒の表情で）お母はんなんか、お前に甘いけにいふて怒つてゐなさつたぞ。お父はんも甘いわけぢやないが、お前ももうたいていお父はんの心もわかつてくれてえゝ

筈ぢや。お前はな、勉強をして女學校にはいつて、それから東京に行つて立派な醫者になつてくれえ。お父はんの願ひぢや。お前の御先祖はみんな立派な殿様の御醫者で、槍を立てゝお城に行つたんぢや。お前がなあ立派なお醫者にさへなつてくれりや、お父はんは明日死んでもうれしいのぢや。これほど言ふてもわからんかい。

松子　でも、わたし算術は出來んのぢやもの。どうしても嫌ひぢや。

義一郎　できんことはない。死ぬつもりでやれば出來る。算術が出來んぢや十年たつても女學校にははいれぬぞ。

松子　（默つてゐる）

義一郎　算術を勉強せえ、さうすりや好きになる。

松子　どうしてもあたし嫌ひぢや。

義一郎　これほど言ふても嫌ひぢやいふなら、もう算術も止めえ明日からあの牢舍のやうな罐の工場に追ひやるわ。勝手にせえ。

松子　あたし牢舍のやうな工場にいぬのはいや。

義一郎　ぢや算術を好きになれ。

松子　どうしても好きになれぬ。（すゝり泣く）

義一郎　よし、泣け。算術の嫌ひな奴は家には置けぬ。罐の工場に追ひやるからさう思へ。明日の朝まで待つてやるから、算術を好きになるか、やつぱり嫌ひか返事せえ。

（退場）

（松子一人緣側に泣いてゐたが、庭に下りて門の方へ出てゆく。）

（間。）

（勇作、かね子登場。かね子は勇作のカバンを提げてゐる。）

勇作　ぢや、姉さん、こゝで失禮します。

かね子　いゝえ、罐まで行きますわ。

勇作　暗いですから、どうぞ。

かね子　なあに、もう直に月が出ませう。

（義一郎、健二、奥より出づ。）

勇作　いや、兄さんは長い旅でお疲れでせう。どうぞおやすみ下さい。

かね子　ほんたうに、あなたはよございますよ、お湯にでもはいつて下さい。

義一郎　お湯は歸つてからでいゝ。（玄關の壁から提灯を外し、火を點す）わしも罐まで送つて行く。道々まだ話したいこともあるで。

勇作　恐れ入ります……健二さん、では御機嫌良う。

健二　御機嫌良う。氣をおつけなさい。また何時逢ひますかのう。

勇作　さよなら……また直に逢へますよ。

かれ子　松子はどこに行つたでせう。
義一郎　今までこゝにゐたが。
勇作　よござんす。またそのうちやつて來ますから。
義一郎　今度はすこしゆつくりやつて來なされ。鴨打ちにでも一緒に出かけようよハツハツハツ。(庭に下り)東がだん〳〵明るうなつて來た。道を歩いとる中に月が出るぜ。どうだこの空の美しさは。
勇作　さうですねえ。
義一郎　この天地の靜けさはどうぢや、太古そのまゝのやうぢやのう。青山白雲を友とする田舍の生活もよいだらう。
勇作　よござんすねえ。
義一郎　ハツハツハツ……
勇作　ハツハツハツ……
(三人退場。健二一人殘り居る。麥搗きの音、麥搗き歌かすかに聞ゆ。)
(間。)
(上手しげみの中より白い顏の、影のやうな女、人目を憚りながら出て來る。)
女　(しばらく、そこに立つて男の姿を見つめる。幾度か聲をかけようとしては躊躇する)あなた……
健二　どなたですかいのう?
女　…………。
健二　わしの耳の聽きちがひだつたのか?
女　あなた……。
健二　どなた?
女　あたしです。
健二　えツ!
女　あたしです。
健二　(驚きと疑ひの表情で)あたしと言ひなさるのは?
女　あたしの聲をもうお忘れになりましたかい!
健二　やす子ではないか!
女　あい……(袂を顏にあてゝ泣き入る)
健二　(驚きと不安に襲はれたやうに)おう、やす子か!
(懷かしさを抑へ切れぬやうに緣側から下りようとするが、急に何か思ひ出したやうに心持ちを變へて立ち止まり)どうしてこゝに來たんぢや今になつて?
女　やつぱりあなたのことが忘れられませんので。
健二　わしをこのやうな片輪者にしといて?
女　…………。
健二　一生、わしの名譽も、わしの幸福も奪つといて。
女　さう言はれるとあたしはもうこゝにかうして立つてもをられません。あなたのそのお顏を見ただけでもあたしは切りさいなまれるより苦しうございます。

健二　それでは何でやつて來た。
女　あなたはまだあたしを憎んでおいでになるのですか？
健二　………。
女　無理もありません。あたしの淺墓な考へから、あなたを一生そのやうな片輪にしてしまうたのですから。
健二　………。
女　あたしはそのためには一生どのやうな苦しい目に逢ふても、何とも思ひませぬ。あたしは何故あの時死なゝかつたでせう。死ぬまで何故北海道の監獄に入れて置いて貰はなかつたのでせう。あすこから出て來たことを後悔してをります。あすこにゐる間は、あたしは起きても、寢てもあなたのことばかり考へることができました。あなたのことを思つて、思つて、思ひ貫いて死ねばよかつたのです。あたしは監獄を出た日に何故身を投げて死ななかつたのでせう。
健二　今になつてそのやうなことを言ふたところで、それが何にならう。それでわたしの眼が開くといふのでもなし。
女　もう、それを言つて下さるな。言つて下さるなといふのは無理です。けれどそれをあなたに言はれるとあたしはちよつともこゝにはをられませぬ。あたしが厚かましい顏をしてあなたをたづねて來た心をどうぞ掬んで下さい。
健二　お前はまだ自分のやつたことを正しいと思ふとるのぢやらう。
女　まあ、どうしてあたしが、そんな。
健二　そんなら今になつて、わたしをたづねて來て、辯解がましいことを言ふ必要はないぢやないか。
女　あなた、あたしはどこまでも惡うございました。たゞあたしがこれほど辛い思ひをしてたづねて來た心を掬んで下さい。
健二　お前はわたしにさらに恥の上塗りをさせるために來たんぢやらう。
女　まあ、あなたッ！
健二　ぢや、何のために來たッ！
女　あなたに逢ひたかつたからです。（すゝり泣く）
健二　わたしを盲目にしといて、社會的に葬つといて、それから逢ひたいので來た！
女　逢ひたいから來ました。
健二　わたしはお前のその顏が見たい。白々しいことをしやべるその顏が見たい。
女　何であたしが白々しいことを。
健二　お前はいつたい監獄を出てから、どこへ行つた？
女　親はゐませんし、こゝに來たところで、おつ母さんや、

兄さんたちにしたところで、あたしを置いて下さる筈はなし、恰度監獄にゐたころ、あたしを可愛がつて下された西洋人の牧師さんのお世話で、函館に二年ばかり奉公をしとりました。それから流れ流れて、東京にも三年ばかりをりましたが、今では田舍まはりの芝居の……。

健二　（驚いて）　何ッ！　芝居ッ！

女　芝居です。今こゝの村に來てゐます芝居の連中と一緒に。

健二　お前がかい？

女　さうです。あたしは舞臺に出るんぢやありません。ただ樂屋で手傳ひをしてるだけですから村の人たちに顏を見られることもありません。

健二　お前は、そのやうなことが村の人に知れたら、それこそわたし等の恥の上に恥を重ねることを知らぬのか？

女　そりや知つてをりますとも。

健二　ぢや、何でわざ〳〵この村までついて來た。

女　あなたはまだほんたうに女の心といふものを御存じないのです。あなたはやつぱり今でも兄さんや姉さんと同じやうに、名譽たの、地位だのいふことばかり考へておいでになるのです。あなたはまだあたしをそれほど憎んでおいでになるんですか。無理はありませんけれど、それではあんまりです。あなたが戰地においでになる、松子は生まれる。あなたが負傷なすつたといふ便りがあつた時は、あたしはあなたの命の身代りにと祈りました。二度目にまた戰地にお立ちの時、あたしはどうしてもあなたを戰地に出したくはありませんでした。あたしはあなたと別れては一日も生きてをれませんでした。あたしは平氣で半年でも一年でも離れてをられる人たちを羨ましいと思ひました。あたしは……あたしは……それであなたを一生不幸にしてしまひました。（袂にて涙を拭ふ）もうあたしお暇をします。松子にも聲もかけないで別れてゆきます。昨日も大沼のところまで松子を追つかけてゆきました。あたしの心を少しは可哀さうだと思つてください。でもあたしはほんたうにあなたの一生を不幸の底に葬つてしまつたのでしたねえ。さよなら。（上手へゆきかける）

健二　ちよつとお待ち。もう歸るのかい？　また芝居小屋の方へゆくのか？

女　さうです。芝居も今日きりですから、あたしたちはみんな明日この村を立ちます。

健二　明日ッ？　（感情次第に靜まりゆく）

女　えゝ。

健二　………。

女　でも、あたしは村の人に逢ふのがいやですから、あた

し、人はまだ明日の朝暗いうちに立つつもりでをります。（懐中を探つて）それからこれは聖書でございます。あたしがまだ北海道の監獄にゐましたころ、その牧師さんがあたしに下さつたものです。これには色々なことが、あたしの爪で書き込んであります。（男に手渡しする。）

健二　爪で？

女　さうです。監獄の中では鉛筆一本使ふこともできませんので、本の隅々に爪で書き込んで置きました。

健二　（聖書の頁を指先で撫でて見て驚く）成るほど、一枚一枚よう書いてあるのう。

女　それはみんなあなたを思つて書いたものばかりです。

健二　それほどお前はあたしのことを思ふてくれたのか。（聖書を握つた手がわなわなと顫へる。）

女　はい……（俯向いて泣く）

健二　…………。

女　人に見つかるといけませんから、それでは……。

健二　去ぬか？

女　はい。

健二　今度は何處に……。

女　何處に行きますか、田舎まはりの旅役者の仲間ですから……今年の冬は四國を打つてまはるとか言つてゐましたが……。

健二　お前はそれでいつまでその芝居にをるつもりぢや？

女　こんな日蔭者ですもの、どうせ世間には出られませぬ。いつまで芝居にをりますか、それも分りません。

健二　お前はそれではあまり頼りないとは思はぬか。

女　でもあたしにはそれより他に行く道はないのですから。

健二　お前のほんたうな心を話してくれ。

女　（愕然として）あたしのほんたうな心を話せつて仰つしやるの？

健二　お前はあたしや松子に逢ひたいため、一と目見たいため來たといふのぢやが、それは世間並の弱いお前の心が言はせる言葉ぢや。わたしの眼を突いたあの時のお前の強い心に何故お前はなつてくれぬ。わたしは今始めてお前のあの時の強い心がわかつて來た。わたしはこのごろ何やらいつも暗い影に追つかけられてゐるやうな氣がしてゐた。そして何をしてもわたしの心も生活もいつも空虚だつた。何かわたしの心、わたしの生活に取り入れなければならぬものがあるのだといふことは、ぼんやり考へてゐたが、それが果して何だといふことはわからなんだ。またこのごろお前に逢ふ前兆だつたか知らぬが、お前のあの時の心を掴む準備はわたしにもできてゐたや

うぢやつた。お前がもしこゝにもどつて來たらよろこんでお前を受け容れることができるつもりぢやつた。しかし、實際はお前がこゝにはいつて來たあの時には、わたしはお前に眼を突かれた時と同じ二つの心に苦しんでゐた。お前の心をありがたいと思ふ心と、憎いと思ふ心とがこの十何年來わたしの胸のうちに鬪ふてゐた。わたしはこれからもまた時としてはこの二つの心の鬪ひに苦しむかも知れぬ。が、わたしは今はじめてお前がゐないでは、わたしは生きてをれぬといふことを知つた。

女　あなた、もし……（男の方へ近づく）

健二　まつたくだ。わたしはこの十年來求めてゐたものを今見付けたんぢや。やつぱりお前だつたのだ。

女　あなたはそれほどあたしを……。

健二　さうぢや。それと同じやうにこれから先お前もわたしなしには生きてをれぬのぢや。

女　どうしてあなたなしに生きられませう。

健二　だからお前はわたしと一緒にならねばならぬ。

女　でも、どうしてそんなことが。

健二　いや、出來る。あの時のお前の強い心さへ持てば。

女　でも、あたしはもうあの時のやうな無分別なことはできません。

健二　いゝや、どうしてもやらんぢやならぬ。

女　でもあたしは、兄さんや姉さんに顏を合はせる勇氣はありません。

健二　そないに弱い心でどうする。

女　いゝえ、それはゆるして下さい。わたしは一人で別れてゆきます。

健二　お前はわたしを一人でこのまゝ、こゝに置いて見殺しにするつもりか。

女　あたしはどうすればよいのです。

健二　（しばらく躊躇してゐたが決然として）わたしを連れていんでくれ。

女　えツ？　あなたを？

健二　この盲目を連れていんでくれ！

女　どこへです？

健二　どこへでもお前がいぬところへ？

女　これほどの不幸に陷れたあたしを、あなたはまだそれほどまで……。

健二　うむ、どこへでもお前さへ連れていんでくれるなら。

女　あなたのそのやさしい言葉を聽けば、あたしはなほさら、あなたを連れて行けなくなります。あなたに不幸の上の不幸を重ねさせることになりますから。

健二　わたしは人間の不幸だの、幸福だのゝ空虚なことを

知り過ぎたんぢや。人間は幸福を求めるために生きてゐるんぢやないといふことが、わたしにはこのごろ分つて來た。

女　でも、あたしにはそんな恐ろしいことはできません。

健二　何が恐ろしいことぢや。お前の心によく聽いて見たがいゝ。お前の心は幸福を求めてはゐない筈ぢや。お前の心は一番正直だ。お前はたしかにわしを求めてゐる。さあ、お前の心の聲をお聽き。

女　でも、兄さんや、姉さんがあなたのために一生懸命になつてゐなさるのを思へば、あなたをどうして伴れ出せませう。

健二　兄さんにしても、姉さんにしても、成る程、わたしのために幸福を投げ棄てゝ働いてゐなさる。だが、犧牲になる人も苦しからうが、犧牲をさゝげられてゐる本人のわたしは息詰まるやうなこの古い家から逃げ度いのぢや。お前はわたしを救ひに來てくれたんぢや。

女　でも、あなたをそんな片輪にまでしたあたしが、この上……。

健二　うむ。わたしはお前と一緒に死んでもよい。お前のいぬところへ。

女　では、あなたはそれほど。

健二　わたしの言葉を信じてくれ。わたしはもう一人では生きてをれぬ。

女　もつたいなうございます。（男の胸に兩手をかける）

健二　（女の肩をさすりながら）寂しかつたのう。（俯向いてしまふ）

女　はい。

（月出づ。）

健二　みんなは麓まで行つたで、まだ歸つては來まいが成るたけ早い方がよい。大沼から右に下りれば道で會ふ氣づかひはない。わたしは着替へて來るで。

女　ぢや、手傳ひませう。

健二　盲人でも馴れた家で勝手はようわかつとる。お前はそれよりそこにゐて外から來る人の番をしておいで。それから簡單にのう、わたしは考へるところがあるで暫く旅に出る。旅費は簞笥から五十圓持つて出た。追手などかけて貰ふと却つて家の恥ぢや。わたしは死にゝいぬんぢやない。やす子と一緒に旅に出るんぢやから安心してくださいと書いといてくれ。

女　でも、あたしの名を書いて。

健二　それがよい。さうすりや、わたし等に追手をかけるやうなことはないから。大丈夫、書いとくれ。（退場）

（女一人玄關の間より硯箱を持ち來り、手紙を書く。月の光りますます明るくなる。）

女　あの子はどこに行つたのだらう。尙一度逢つてゆきたいが……（手紙を認めつゝ戸外を見まはす。幾度となく袂で涙を拭く）

健二　さあ、わたしの仕度も出來た。

（男、上手奧の間より杖を持ちて出づ。）

健二　手紙は出來たのぢやらう。ぢや直ぐ出かけたがよい。

女　でもあなた。

健二　何ぢや？

女　あたし、尙一度あの子の顏を見てゆきたいのです。

健二　何を言ふか、今になつて。あの子を連れてゆかうといふのなら兎も角、あの子は兄たちと一緒に置いてやつた方が、あの子のためにも、兄たちのためにもよい。あの子をつれるのはあまり可哀さうだ。そこはわたし等が耐へねばならぬ。さあいのう。

女　はい。

（女、手紙を玄關の間のテーブルの上に置き、正面の座敷及びテーブルの上のランプを消し、男の手を引いて見かへりがちに上手へゆく。）

健二　もうお月さんが出たやうぢやのう。

（と言つて門の見當を眺める。）

女　はい、恰度今あの高い御門の上へあがつてをります。

健二　あの兄さんの高い門の上にか。わたしは盲目ぢやから、高い門を見ることもできなんだが、今まではあの高い門の中に生きてゐて、これから兄さんと一緒に第二の門を作り、第三の門を作る時節もあらうと思ふてゐたが、今ではわたしにはあの高い門の中にかくれてゐたことが不思議に思はれるやうになつた。兄さんや姉さんにはまだあの高い門が必要ぢや。さあ、わたし等はあの門を出て行くんぢや。

（女、なほ殘り惜しげに隅々を見、松子の姿を探してゐたが、決心したらしく、涙を拭きながら、男の手を引き門の方へ出て行く。舞臺しばらく空虛。月の光り冴え、高き門の屋根瓦夜の空に青く巨人の如く浮き上りて見ゆ。蟲の聲一としきりしげく聞える。）

義一郎の聲　よい月ぢやのう……（疲れたる體で下手より登場。かね子後よりうなだれがちにはいつて來る）

義一郎　まつたく今夜のやうな月のよい晩に旅をする人は仕合せだ。（ふりかへつて門の上の月を見る）

かね子　明りがみんな消えてる。健二さんも、松子も寢たんでせうか？　もう。

義一郎　さうかも知れぬ。健二やツ？

かね子　松子ツ！　（緣側より正面の座敷に上り手探りにマッチを探りて十疊の間のランプを點す）

義一郎　のんきだのう。奧にでも寢てるんぢやらう。（二人奧へ入り再び出て來る）

かね子　どうしたのでせう。誰もをりません。お種も手傳ひの男たちも今日は日が暮れると直ぐもどつてしまひましたので家には誰もをらんのですが、いつたい健二さんも、松子もどうしたんでせう。

義一郎　風呂ぢやないか。

かね子　でも健二さんは、もう先つきおはひりでしたもの。

（かね子再び家の周圍を探す）

義一郎　おい、健二や、……松子や。

かね子　（再び出て來り）どこにもゐませんが、妙ですのう。

義一郎　さつきわしが少し松子を叱つたが、二人でどこかに遊びにでも行つたのぢやないか。

かね子　あなた餘程ひどくでも松子を怒りでしたかい？

義一郎　さう、ひどくといふわけでもないが。

かね子　あなた加減なしに叱りなさるんで……松子ッ……松ちやんや……（再び庭に下りて松子を探す。義一郎默然としてしばらく正面の間に立ちつくしてゐたが、不安げに上手奧の間及び臺所などを覗き、玄關の間に來り、不圖テーブルの上の手紙を發見する。正面の間へ持つて來てあけて、讀む。讀んでゐる間に驚きと絕望の表情が泛かぶ）

義一郎　……（化石の樣になつて手紙を持つたまゝ突つ立てゐる）

かね子　松ちやんや……健二さんはゐなさらんかい……（倉の方から庭の正面に出て來て不圖義一郎を見る）あなたどうしなさつた？

義一郎　………。

かね子　あなた……あなた……。

（義一郎手紙を落す。かね子庭にゐて、緣に凭りかゝつたまゝ讀む。）

かね子　健二さんか……また懲り性もなくあのやす子に……あなた、あたしたちのこれまでの、血の出るやうな苦勞も誰のためでした。健二さん、あんまりひどい………あたしたちにこれほどの辛い目をさせといて、あんまりです。（袖口で涙を拭ふ）

義一郎　………。

かね子　あなた、健二さんを。

義一郎　さうだ……だが待て、追つかければまだ追ひつくにちがひないが、この手紙で見ると、死ぬやうなこともあるまい。二人のためにはそのまゝにしといた方がえゝかも知れぬ。

かね子　でも、あたしたちがあんまり踏みつけにされたや

うで……。
義一郎　健二の身になれば、健二の行きたい道もあるんぢやらう。わし等は健のためぢや思ふて働いてゐたが……せめてわし等が死んだ後でも健二や松子だけは不自由のない生活をさしてやらうと思ふて働いてゐたが、わしの考へが間違つとつたのかのう。
かね子　あなた、あなた……もしさうだつたらあたしは………。
　（泣き入る。）
義一郎　わしは母のためにあの高い門だけは作つてやつた。しかしたゞそれだけぢやつた。健二のためにもわしは第二、第三の門を作つて置いてやるつもりぢやつたが……わしとお前がこれほど苦しんで作つてやつた門は、健二には生きるための門でなくて、地獄の門であつたかも知れぬ。わしのやりかたが間違つとつたのかのう？………もしさうぢやつたら……わしは何うしたらよいのぢや。
かね子　あなた、あたし等の一生は……。
義一郎　いゝや、やつぱりわしは間違つてはをらぬ。わしにはまだ爲ねばならぬ仕事がある筈ぢや。かね子、お前やわしの歩いて來た道は間違ふてはをらぬ……いや、迷ひぢや。わし等は勇氣を落してはならんぞ。松子はどうした。健二は健二ぢや。わし等は今日からは松子のために死ぬまで苦しむんぢや。
かね子　もしかしたら、松子まで連れてツ！
義一郎　えツ！　松子まで……（蹴落されたやうな絶望の顔）
　（下手門の方より騒がしき人聲。村人三人、松子登場。提灯の明りなど。）
村人一　奥さん、おいでゝすかい。
村人二　こちらのお孃さんが。
かね子　（愕然として）あの松子が。
村人三　はい、あの大沼の土堤の上にあんた、この夜中にぼんやり考へ込んだ風で立つておいでゝしたので。
村人二　わたし等、麓いんだ戻り道に見つけましたんで、旦那さんや奥さんどないに探してゐなさるぢやらう思ふて。
村人一　お連れしましたのぢや。
義一郎　（さすがに嬉しさをつゝみ切れない風で）それや、みなさんえらい御心配をかけました。今しがたわし等も戻つて來て、松子がをらんので家のまはりを探しとりましたところでした。ありがたうございました。
かね子　松子どうしたんや、そないに泣いてゐて、早うあつちへお上り。

村人一　家にいのう言ふてもお嬢さんよう歸りなさらんのです。こりや、お父はんにでも叱られなさつたのぢやろ、そんならわし等がおわびして上げういふて連れてまゐりました。どうぞ叱らんと。

かね子　さあ、松子もう泣くのぢやない。（無理に松子の手を取りて、玄關の方へ連れて行く）ほんにありがたうござりました。

村人一　ぢや、どうぞ叱らんと。

村人二　お嬢さん、早うおやすみ。

村人一、二、三　おやすみなされ。

かね子　みなさんおやすみなされ。

（三人退場。）

義一郎　松子、さあ、こつちへお上り、明日は東京からえゝお土産が着くぜ。こつちおいで。もうお父はん叱らんで。

かね子　あゝ、よかつたねえ、家に戻つて來て。お父はんが恐いねえ。東京の土産も持つて來んで叱るだけ叱つて、さあお座敷にお上り。

かね子　どうしたんやお前。何で大沼なんて恐ろしいところにいんだのぢや。

松子　わし算術は、どうしても嫌ひや。麓の工場にいぬのも嫌ひや。

かね子　それでお前大沼に行んだのかい？

松子　わしどこか遠いところにいぬつもりぢやつた。

かね子　遠いとこて何處や？

松子　わし、日暮れ方、夕燒け見てゐたら、遠い山越えていにやまだどこかにわしのほんまのお父はんがゐなさるやうな氣がしたんや。（義一郎、かね子驚きの表情を示す）

かね子　こゝにほんまのお父はんも、お母はんもゐるぢやないか？

松子　そりやさうぢや。けど、まだお父はんのやうに叱らぬお父はんがゐるやうな氣がしたんぢや。

かね子　それで遠い山越えてゐぬつもりぢやつたのかい。

松子　あい。

かね子　それでも、遠くまでいんでも他のお父はんの顏知らんぢや探しやうがないがなあ。

松子　あい……でもわし、遠いところにいんで見たかつたのぢや。

かね子　どうしてよ？

松子　わし（すゝり泣く　阿波の德島十郎兵衞ぢや。

かね子　この子、何言ふのぢや。

松子　わし十郎兵衞ぢや……（泣く）

かね子　どうして？

松子　でも遠いとこに巡禮して行くんぢやもの。
かれ子　ぢや、その娘のおつるぢやないか。
松子　あゝおつるぢや。
かれ子　ホツホツホツ……昨日（義一郎の方を見て）あなた芝居を見にいんだのですぜ。で、おつるを見たんでこんなこと言ふんですせホツホツホツ……。
義一郎　ハツハツハツ……。
松子　お父はん、わしおつるのやうになあ。
（泣きじやくる。）
かれ子　ホツホツホツ……。
義一郎　ハツハツハツ……もう明日からは嫌ひなものは勉強せんでもえゝ。お父はんはちつとも叱りやせぬぞ。ハツ、ツハツ。
（松子を見まもりつゝ、ぽとりと涙を落す。そして無雑作に手の甲で涙を拭ふ。かれ子松子を抱きしめ、袂に顔を埋めて泣く。）

——靜かに　幕——

（一九二三・八）

清作の妻（一幕）

時

明治三十七年ころ

場所

或る海岸の農村

登場人物

野々宮清作
お兼　妻
お虎　清作の母
お町　同妹
庄左衞門　同叔父
加志正輔　退役陸軍歩兵大尉
牧原嘉重　村長
古茂七　役場小使
村の兵事係
村の人々
村の娘一、同じく二

静かな秋の日の夕暮れから夜にかけて。

清作の家。下手が土間になつてゐる。土間につゞいて上手に八疊の間、濡れ緣。上り框に沿ふて爐が切つてあり、自在鍵がかゝつてゐる。八疊の間の大黑柱が目立つて大きく見える。八疊の間の奥にさらに一室ある心。上手に牛小屋及び籾倉。籾倉の屋根向うに柿が赤く熟してゐる。梢頭だけが見える。

爐に榾をくべて妹のお町が考へこんでゐる。土間の奥の方には土間の竈があつて、竈の横はすぐ裏口の戸になつてゐる。母のお虎は土間の竈に藁をくべては大釜に湯をわかしてゐる。

下手にも柿の木があつて、そこからは急に土地が下り傾斜になつてゐて、海岸の方までずつと見通しが出來る。

海の上には夕陽の名殘りがわづかにとりのこされて空は赤く焼けてゐる。濱の方から渡海船の竹法螺の音が聞える。

村役場の小使古茂七が疲れた足どりで上手籾倉の横から出て來る。

古茂七　お町さんか、結構なお天氣でしたな。

お町　古茂七さん。結構なお天氣でしたな。またお使ひ？

古茂七　えゝ、けさからもうわしは峠を幾つ越したことやらなあ。

お町　それやお骨が折れませう。
古茂七　それがさ、三度が三度とも例の召集令狀といふやつぢや。赤紙ぢや。
お虎　（土間の方から、古茂七の話を聽いて、火のついた竹切れを持つたまゝ出て來る）古茂七さん、またあの赤紙を持つて行きなさつたのか。（ひどく手が顫へてゐる）
古茂七　お虎さんか。このころは毎日のやうに赤紙ばかりぢや。
お虎　……（ひどく驚いた態）
古茂七　今日はな。峯の作compoundどんの悴よ。それに平八さんの三男坊、三本松の武吉よ。一番氣の毒なのは橋口の勘左衛門の家ぢや。もうあの家では五人目ぢや。一番目と二番目はお前召集されて戰地へ行つたかと思ふ間もありやせぬ白骨になつて歸つて來た。三番目と四番目はお前三日前に召集されたばかりぢやないか。幾ら役目ぢやといふてもわしはけふ五番目の召集令狀を持つて行つた時はもう、あの赤紙を出さうとしても、この腕がよういふことを聞かぬのぢや。
お虎　無理もない。勘左衛門さんも氣の毒な人ぢやなあ。
古茂七　いや、勘左衛門は昔からあのやうに氣の强い男だし、あれでも物の道理のわかつた男ぢやからなあ、悲しいやうな顏も見せぬが、それだけに一層氣の毒でならぬ。

お虎　で、お米さんはどうしてゐなさる？
古茂七　お米さんは女ぢやからなあ。
お虎　氣でも狂はねばよいがなあ。
古茂七　わしもさう思ふ。
お虎　わしなぞはもう今から氣が狂ひさうぢや。もし清作が戰さにでも出るやうになつて、もし死ぬやうなことがあつたら……わしやそれを思ふとかうやつて生きてゐるのが苦しい。（お町と顏を見合はせる。遠くでしづかに鐘の音が聞える）
古茂七　ありや清作さんが打つてる鐘ぢやな。清作さんがあの鐘を買ふて來て朝と晩に打つやうになつてから、村の若い者どもが前とはまるでちがふほど朝は早うから、日が暮れるまで野良に出て働くやうになつたがなあ。
お虎　ぢやが、今ではもう野良に出て働く若い者といふても幾らも居はせぬ。
古茂七　毎日々々赤紙で戰地へ呼ばれて行くのでなあ。お虎さん。清作さんにしても、何時赤紙が來ないとも限らぬよ。
お虎　わしや、毎日胸さわぎばかりしてなあ。
古茂七　でも、若い者ぢや。一度は戰さにも行かんことにや。
お虎　日本中の人のためぢやからなあ。

古茂七　さうだとも、日本中が親は泣き寄りぢや。さう思へは諦めもつく。清作さんに宜しうな。

（古茂七下手へ退場。お町八疊の間の天井からランプをつるす。お虎ぼんやりと土間口に立つてゐる。）

お町　なあ、お母さん、兄さんも姉さんも遲いなあ。

お虎　いつ戰さに行かねばならぬかわからぬといふのに、いつも眞つ暗になるまで野良にゐて、ちつとも歸つては來ぬ。

お町　戰さに行けばなかなか歸つて來れぬから、畑も荒れようし、今のうちに出來るだけ手を入れて置くんだと兄さんはいふてゐなさつた。

お虎　さうかも知れぬが、またあのお兼が何かと家では相談もしにくいことを、野良に引きとめて話しこんでをるのぢやらうよ。

お町　さういへばお母さん。何も毎日姉さんが兄さんについて野良にゆかねばならぬこともあるまいになあ。

お虎　清作の馬鹿かお兼に魂までも……。

お町　さういへば兄さんとお母さんとあたしと三人だけでこの家にゐたころが一番仕合せでしたなあ。あのころは兄さんも今よりかずつとあたしにも親切だつたし、お母さんに對してもどれほどなあ……。

お虎　いつまでも、男でも女でも一人でをるわけにはゆかぬが、嫁を貰ふたところで男の心一つにあるさ。あの子が第一に馬鹿なのさ。

お町　あたし兄さんが惡いとは思はぬよ。

お虎　それぢや誰が惡いのかな。

お町　兄さんの心をあんな風にしてしまふものが惡いのさ。

（清作の叔父庄左衞門土間の裏の戸を明けて登場。）

庄左衞門　姉さん、まだ清作は野良からかへつて來ぬやうぢやなあ。

お町　たつた今、兄さんはいつもの鐘を鳴らしてゐなさつたから、もうぢきにもどつて見えませうよ。

庄左衞門　清作があの鐘を買ふて來て村の人たちのためぢやといふて、朝も暗いうちから起きて叩きはじめたころは、村中のものが朝も暗いうちから起きて働くやうになり、一年と經たぬうちに若い者の風儀まで改まつたといはれたものぢや。ところであのお兼といふ古狸奴が來てからは、清作が鳴らす鐘に汚れがはいつたといふとるわい。

お虎　わしもそのやうな噂をきかぬではない。が、清作にはお兼でなけりや夜が明けぬのぢやからなあハ、ハ、ハ……しかし、まあ、若い者ぢやから無理もあるまい。このやうなことを何かといふのは姑根性であらうてなあ

ハヽハヽハヽ……わしの死水はどうせあの人たちに取つてもらはねばならぬのぢやからな。

庄左衞門　さうぢやとも。姉さんもあまり嫁の悪口はいはぬもんぢやぞ。ところでな、わしはちよつと相談があつて來たのぢやが、また清作はもどつて來まいな。（お町を見る。お町下手の柿の木の下から裏手の方をながめる）

お町　まだ兄さんも姉さんも見えぬやうです。

庄左衞門　なあ姉さん、清作もどのみち近いうちに戰地へ呼び出されるにちがひない。

お虎　わしはもうこのころでは夜もろく／＼眠りはせぬ。いつあの赤紙がやつて來るかと思ふと、雨戸の外で人の跫音がしてもこの胸を刺されるやうな氣がする。

庄左衞門　そりや無理もない。たつた一人の悴ぢやもの。だがそこは御國のためぢや。男として今度のやうな戰さに出て働くといふのは名譽なことぢや。わしでももすこし若けりや願ふても出征するつもりぢや。

お虎　わしも、そりや覺悟はしとるのさなあ。（ちよつと涙を拭ふ）

庄左衞門　それでぢや、あのお兼のことぢや、まだ正式に役場の方へ入籍しとるといふわけでもないのぢやなあ。

お虎　まだ籍にははいつてをらぬ。

庄左衞門　そこぢや。そんなことがあつてはならぬが、清作が出征して萬が一、もしものことがあつたとしたら。

お虎　わしはそのやうな恐ろしい話は聽くのもいやぢやがなあ。

庄左衞門　いや、清作は目出度う歸つて來るにちがひないがさ。姉さん、あんたはいつまでもあのやうな淫賣あがりのやうな女を清作の女房にしとくつもりかなあ。あんたあの女は長崎では妾奉公までしとつたといふことぢやないかなあ。

お虎　そのやうな話も聽いた。

庄左衞門　そこぢや。そのやうな女をいつまでもこの家の女房にはさせて置かれまい。それにはよい機會ぢや。清作が出征した後で、何とかしてこの家を出て行つてもらふのぢや。

お虎　そのやうなことができるぢやらうか。それは可哀さうぢや、幾らお兼が長崎でどのやうな商賣をしてをつたにしたところで。

お町　叔父さん、そりや姉さんが可哀さうぢや。

庄左衞門　まあそんならそれはそれでよい。ともかくお兼をこの家の戸籍に入れることだけは、もちつと見合せといた方がよい。

お虎　そりやどういふわけでたあ！

庄左衞門　もしものことがあつた場合にさ、お上から金が

下る。（低い聲で）その金を誰がもらふと思ふ。
お虎　あゝ……
庄左衛門　なあ姉さん、清作をあれまで大きう育て上げたのはあんただぢやなあ。それだやに、もしものことがあつた場合に、あんたはどうして生きて行くつもりだや。お町にしたところですぐに路頭に迷ふことになるのは知れ切つたことだや。
お虎　あゝ……
庄左衛門　いゝかなその場合に、お上から下る金をいたゞくのは親よりも先づ女房といふことになつとるのだや、法律上ではな。ところで女房といふものはちやんと戸籍面にはいつてをる女房でなけりや駄目なことだや。
お虎　うゝむ……。
庄左衛門　わかつたかな姉さま。
お虎　あゝ……（呻くやうな聲。そしてちよつとお町を見る。お町もちつと母の顔を見る。下手から清作、つゞいてお兼が鍬なかつぎ鎌や野良仕事の荷をかついで登場。お兼不圖三人が話してゐる姿を見て立ちどまらうとする。庄左衛門、お虎、清作に氣付く）
庄左衛門　清作か……お兼さんもかへつて來た。えらう遲うまで働くんだやのう。
清作　叔父さんですか。何か用でも？
庄左衛門　何な、濱の方にちよつと用があつたもんだやから。序に立ち寄つて見たのさ。あんたもどうでも今度は出征せにやなるまいて。そのやうなことを考へたんでちよつと逢ふて見たうなつてハ、ハ、ハ、……
清作　えゝ、わたしもう覺悟はしとります。そりやもう今夜にも分りませんで、後は女ばかりのことですし、叔父さんどうぞ頼みますよ。
庄左衛門　後々のことは心配せぬがよい。目出度いことだや。うんと働いて金鵄勳章はぜひ貰ふて來にや村の衆に對してもすまぬぞ。
清作　（母やお兼に氣をくばりながらちよつと聲を低めて）そりやもう出征する以上はわたしも生きて歸らうとは思ひませぬ。叔父さんや村の人たちの恥になるやうな卑怯な眞似はしません。安心してゐてください。
（お兼、土間の壁に野良の荷を立てかけながら清作の話に耳をかたむけてそつと涙を拭く。）
庄左衛門　なに、戰地へ行つたからつて死ぬとはかぎらぬ。目出度う金鵄勳章を胸に飾つてかへつて來て、お母さんや、おれたちをよろこばせてくれなあ、お町！
お町　あたし兄さんはきつと達者で生きて來なさると思ふ。
お虎　そんなことがわかるものか、のんきなことをいふと

る。わしやもうほんにどうしたらよいやら……

庄左衞門　姉さん、心配せぬがよい。わしはまた濱へ行つて歸りに寄りますわ。清作ちよつとなあ……（下手へ退場しながら、清作をつれてひそ〳〵聲で話す。お兼は鍬を洗ひに下手の柿の木の方へ傾斜を下りてゆく。緣臺はしばらくお虎とお町二人きりになる）

お町　お母さん、あれぢやものなあ。姉さんは野良からもどつて來てもわたしらにちかぢかものもいは ぬのぢやな。兄さんにしてもさうぢやなあ。あたしさう思ふよ。兄さんが一層戰地に行きなされた方がよいわな。どうせ兄さんは姉さん一人のものになつとるのぢやから、あたし兄さんが今夜にも出征するやうなことになつたら、かへつて氣が晴々しはせぬかと思ふ。その時の姉さんの泣き顏が見てやりたいよなあ。

お虎　お前はさう思ふか。わしはそのやうな氣にはなれぬ。

（清作、うなだれながらふたゝび下手より登場。お虎、大きな盥を庭先に運び、湯を掬んで來る。）

お虎　清作や。草臥れたぢやらうな。

清作　お母さん。湯はわしが掬みますで、放つといて下さい。

お虎　（盥の湯をかきまぜて）　ちやうどよい加減ぢや。さあ足をゆすいだ。

清作　お母さん、すみません。（足を洗ひ湯を捨てゝ緣側へ上る。お町、膳の仕度をして爐のはたに運ぶ）

お町　兄さん草臥れなすつたらうな。

清作　なあに、今日は甘藷釜の仕事だけぢやつたから、なあ。しかしあれでもう霜が下りても心配はない。（爐に手をかざしながら）あゝすつかり秋になつたなあ。夜はもう冷々するやうぢやな。（蟲鳴く）

お町　あい……

清作　靜かなものぢやなあ。わしはこれだから秋が好きぢや。（ぢつと蟲の音にきゝとれる）

お町　兄さんは俳諧がうまいけになあホ、ホ、……

清作　このごろのやうに忙しうては俳諧もやれぬさハ、ハ、ハ……

お町　でも兄さんの俳諧は上手ぢやと校長さんが褒めとつたがなあ。

清作　わしの俳諧はありや、軍隊仕込みの俳諧ぢや。聯隊にゐたころわしの戰友の柏原といふ男がよく夜になるとわしに俳諧の話をしてくれたのさ。何だつたかな……何とかの消燈喇叭や霜の聲ツていふのが生まれてはじめての句さ。それを柏原といふ男にばかに褒められたのが俳諧に病みついた初まりさ、ハ、ハ、ハ……あの男ももう大方召集されたかも知れぬなあ……

お町　兄さんも召集されたら昔のお友達と一緒になるのでせうなあ。
清作　たいていは同じ聯隊だらうよ。さうすると久し振りで柏原にも逢へる。あいつとわしと組んで山砲の砲身を擔いで山を驅け登つたことがあつたが、あの時は眼がくらみさうに苦しかつたが……
お町　ぢや、戰爭といつても知つたお友達と一緒ぢやからさう恐ろしいことはないなあ。
清作　死ぬにしてもみんなと一緒だからなあ。柏原の奴もきつと今ごろはわしのことを思ひ出しとるだらうよ。(遠い夢みるやうな眼)出征するなら早く出征した方がいゝになあ。わしにはもうあの秋の滿洲の廣々とした戰場が眼に見えるやうぢや……なあに敵の奴ら……
お町　兄さん、御飯が冷たうなるで早う喰べてください。
清作　うむ、さうか。
(村の娘一、二上手から登場。)
村の娘一　お町さん、お母さんは?
お町　土間にゐなさるがなあ。
村の娘二　濱に風呂が沸いたといふから呼びに來ましたがなあ。
お町　ぢや、一緒につれてつてもらはうかなあ。
村の娘二　お母さん、もなあ。

お町　お母さん、濱に湯が沸いたさうな。
お虎　わしや、行きたうないが。
お町　さういはんで一緒にさ。ちよつと一風呂浴びて來たがよい。
清作　お母さん、さうなさい。お町と一緒にちよつと行つて浴びて來たがよい。
お虎　ぢや、いつぱいよばれるかなあ。
お町　それがよい。
(お虎、お町、村の娘一、二下手へ退場。月が出る。)
(清作奥の間から日本刀と奉公袋をかゝへて來て、奉公袋のなかを調べて見る。日本刀を拔いてぢつと刀身を見つめる。)
(お兼鍬を洗ひ下手よりあらはれる。)
清作　足を洗ふて早く上つたらどう?
お兼　あい……(お町やお虎たちの後を見送つてゐる)
清作　土間の大釜に湯がわかしてある筈ぢや。それを掬んで來るといゝ。わし、うつかりして鍋の湯を捨てゝしまうたでなあ……。
お兼　ぢや、せつかくお母さんにわかしていたゞいたのだからさうしませう。(土間の竈の前に行き、土間に置かれた釜をのぞいて見る。ちよつと寂しい顏をする)
清作　どうした。湯がわかしてあるだらう。

お兼　いゝえ、すこしも殘つてはをりませぬ。
清作　さうか……裏の方で何か洗うてゐなさつたやうだが、その方に使うてしまうたのぢやな。
お兼　さうかも知れませぬ。
清作　わしがあの湯を捨てねばよかつたがなあ。
お兼　わたしは水で結構です。
清作　いや、もう水では冷たいよ。竈(へつつい)に火が殘つとるだらう。一(ひと)くべ焚いたらどう？
お兼　水で結構です。
（下手の柿の木のほとりに盥を持ち出して水で足をゆすぐ。遠くから麥搗歌が聞える。）
清作　足を洗うたら、お前も早う飯にしたらよいだらう。
お兼　（爐のはたに寄る）どうしたのかわたし何も喰(た)べたうはない。
清作　風でも引いたのかい？
お兼　さうでもありませんが。
清作　困るなあ。今夜にでももし戰地へ出かけなけりやならぬことになれば、そんな風では出て行く者も心殘りだやが。
お兼　いゝえ、わたしのことはすこしも心配なさることはありません。あなたこそからだを大事にして下さい。
清作　わしは大丈夫だ。（なほ日本刀を見る）

お兼　あなた、今も二人で歸つて來てから、叔父さんもこゝにゐなさつたが、あたしには一言も何とも仰しやらぬでせう。お母さんにしても、お町さんにしても、口一つきいてはくださらぬでせう。濱の風呂に出かけなさるのならわたしにも聲くらゐかけてくだされてもよいと思ふのですが……
清作　…………。
お兼　このやうなことをいつて、あなたに心配させるのは辛いですが、あなたがこゝの家にゐてさへくだされば、わたしはどのやうなことも辛抱します。けれど、もしあなたが戰地へでも行きなさりや、わたしはたつた一人でかうやつてゐねばならぬ。わたしや一層首でも縊つてしまはうかと思ひます。
清作　ばかなことをいふものぢやない。
お兼　あなたにはわからぬのです。わたしの心持ちが。昨日もさうでした。あの軍人會の村木さんと、役場の人があなたの留守に見えて、清作さんもいつ出征せにやならぬかも知れぬ。さうすると留守はあんたが引き受けにやならぬ、間違ひがないやうになあといつて、みんなでわたしの顔を見て妙な笑ひ方をなさるの。わたしの胸にはちやんとその人たちの心が響いて來ました。村の人たちまでがわたしを、今日まで變な眼で見てをります。

清作　何とでも思はせるがよいぢやないか。
お兼　あなたは男だからさういひなさるが、女の身になつてごらんなさい。わたしの身になつて。
清作　今夜になつてわしにそんなことをいうてくれるな。
お兼　さうなあ。わたしが惡かつたなあ。あなたの身になれば生きるか死ぬるかといふ場合だからなあ。
清作　お前の心持ちはわしにはよう分る。わしはいつも口にこそ出さぬが、ほんに氣の毒だと思うてをる。
お兼　わたしはもう何もいひませぬ。でも、わたし一人になつたら、あなたが戰地からかへつて來てくださるまで生きてゆかれるか知ら、わたしそれが心配です。
清作　また、そんな馬鹿なことを。
お兼　いゝえ、ほんたうです。わたしのやうな親も兄弟もない女を、あなたなればこそ今までからうやつて可愛がつてくだされたのです。それを思ふと、わたしはもう今日今こゝで死んでも悲しいとは思ひませぬ。
清作　そんな氣の弱いことをいふものぢやない。たとへ出征したからと云ふて死ぬものとはきまつてをらぬ。日本中の人が今は夜も晝も同じ心になつて苦しみ合ふてをるのだ。どうでも日本は勝たねばならぬ。（遠くで出征軍人を送る萬歲々々の聲が聞える）また誰れか今夜立つのだな。（お兼おびえたやうになつて耳をそばだてる。喇叭が鳴る）
お兼　わたしやあなたが戰爭に出て働いてくださるのはうれしいと思ふとります。これまで近在のどこの村に出かけて行つても、あんたの村は清作さんがをるので仕合せぢや、あんたの村には何をやつてもかなはぬ。それも清作さん一人の力ぢやとみんながいうてくださる。わたしや、今日までどれほどうれしいと思うたか知れぬ。
清作　今夜にも赤紙が來るにちがひない。忘れ物のないやうにして置かにや。（ふたゝび奉公袋をしらべる）
お兼　あ、さうでした。お守さんを入れるのを忘れとりました。（奥へはいつて守札と白い襦袢をかゝへて來る）この襦袢はこなひだからわたしが縫うて、お加持をしてもらうたのです、彈丸除けの祈禱が封じこんであります。（袂で涙を拭く）
清作　（受け取りて）ありがたう。（奉公袋と一緒に風呂敷につゝむ。小使古茂七あわたゞしく下手より登場。手には赤紙を摑んでゐる。お兼は胸を衝かれたほど驚く）
ハ、ハ、ハ……いよ／＼來たな。
古茂七　はい、いよ／＼あなたも戰地へ行かにやなりません。（召集令狀を清作にわたす。清作受け取りぢつと讀む。手が顫へてゐる。お兼と古茂七は清作を見つめてゐる）

（間。）

清作　明日の午前十時までに聯隊に着かにやならぬ。ぢや、今夜直ぐ立たにや間に合はぬ。わしもたうとう戰地へ行けるやうになつた、ハ、ハ、ハ……

（ひどく昂奮して部屋のなかを歩きまはる。）

お兼　今夜直ぐですか？

清作　あゝ、直ぐぢや。古茂七さん、濱の渡船は何時まであつたかな。

古茂七　この際ですから渡船は役場の方からいつでも出させるやうにしてあります。

清作　そいつはありがたい。

古茂七　九時に渡船を出しますで、村から清作さんと一緒に今夜七人出て行くことになつとります。

清作　今夜七人ですか。

古茂七　七人です。

清作　それぢやもう第一國民まで手が着いたなあ。

古茂七　今夜立つな、清作さんと濱の文吉さんの他はみんな未教育者ばかりですよ。

清作　さうだらう。このごろのやうに毎日何千と死ぬのではなあ。

古茂七　敵も強いのですなあ。

清作　態見たいな奴だからな。

古茂七　あんたこの村には今日きりもう男というては一人も若い者はゐませんぞ。

清作　さうぢやなあ……お母さんやお町はまだ歸らぬかな。

古茂七　今日までに村からは三十九人出征して、もう十五人死んだ、これから先幾人死ぬことやら。

清作　戰爭はこれからだからな……。（不圖月の光りに照らされた緣側の柱に氣付いてなつかしさうに近づく）お兼、これを見い。この大黒柱に斧の痕があるだらう。これはまだ親父さんが生きてをられたころわしがかういふわるさをしてな、叱られたことがあつた。おう、それからこれをごらん、ずつとこの柱には目盛りがしてある。これが十二の時のわしの脊ぢや、これが十五の時の脊ぢやな、かうやつて年々に大きうなつとるわい。この大黒柱もわしとはながいお馴染だつたが……この大黒柱とも今夜切りのお別れか……（柱を撫でながら手の甲で涙を拭く。お兼、喪心したやうになつてぢつと清作を見つめてゐる）

古茂七　村中の若い者が出て行つてしまうた後の田や畑はどうなるものか。戰爭のたんびに一番馬鹿を見るのは土にかぢりついて働いとる人間ぢや。やれ體が丈夫ぢやの、素直ぢやのいうて兵隊にとられてゆくのは村の若い

者はつかりぢや。わしや華族の子なんかで戰死したなんて滅多に聽いたこともない。何たら理窟をつけてこの戰爭最中に東京では華族づらが踊りこくつてをるちうことを聽いたがなあ……清作さん、お兼さん、いづれわしも九時には濱まで見送りに行くでなあ。一度役場までもどつて來ますで。お兼さんくよ／＼せんがよい……

お兼　ありがたうございます。

吉茂七　戰爭もさう長いこともありますまいでなあ。（下手へ退場）

お兼　あなた、いよ／＼今夜きりぢやなあ。（清作の前に坐つて泣く）

清作　見つともないで泣くな。

お兼　泣くまいと思ふけれど、わたし一人になつてから後のことを考へると、どうして一日でも生きてをられようかと思ふのです。わたしにはとても一人でこの家にはをれませぬ。その刀で一層わたしを殺してから出て行つてください。

清作　馬鹿なことをいふ。

お兼　でもわたしはとてもあなたに別れては……

（お虎、お町下手より走り登場。）

お虎　清作……清作……（清作に飛びつくやうにして抱き、泣く）

清作　お母さんもからだを丈夫にしてなあ。なあに、心配することはない。わしらは砲兵でも、穴のなかにかくれてゐて敵を擊つんだから死ぬ氣つかひはない。安心なものさ。

お虎　清作や死んでくれるな。生きてかへつてくれ。お前一人が賴みぢやからなあ。

お町　（お兼の方を見て）でも兄さん卑怯なことをしては駄目だなあ。

お虎　餘計なことをいふものがあるか。

お町　でもさうぢやもの。どうせ戰爭に行くからはわし、兄さんは死んで來るものと覺悟しとる。（横を向いて顏を掩ふ）

お虎　おう、さうぢやつた、鉈豆をその袋に入れといてくれ。昔から鉈豆はかならず戰さに行く時持つて行つたものぢやさうな。二度ともとへかへるといふことでな。（奧から鉈豆を持つて來て清作にわたす。退役大尉加志山、村長牧原、兵事係、村の世話役、庄左衞門、村の人々上手下手より提灯を持ちあわたゞしげに集まつて來る。なかには酒を飲んでゐるものもある）

加志山　清作君お目出度う。

牧原　お目出度う。お虎さんいろ／＼心配だらうが、案じぬ方がよい。

加志山　大いにわが村の軍人團の名譽のために殊勳をあらはしてくれたまへ。いづれわれ〳〵のやうな老骨も今度こそはあんた等若い人のあとからすぐ出征ができる筈だと樂しんでをる。戰地で逢はうよ。

（みな〳〵淸作やお虎に挨拶をする。お兼一人がひどく除け者のやうにされてゐるのが目立つて見える。）

庄左衞門　目出度い門出だで、別れの盃だけはなあ姉さま。

（庄左衞門はひどく酒に醉つてゐる）

お虎　さうだつたなあ。（お町と二人で土間に下り酒の器を運んで來る）

庄左衞門　（隅の方に泣いてゐるお兼を見て、上り框によろめきながら）なんぼ普段は淸作をちよつとも離さぬお兼さんも、赤紙一枚來ればどうする力もないなあ、ハヽハヽハ……（人々お兼を覗き笑ふ。お兼蒼白な顏をして庄左衞門を見つめる）お兼もこゝへ來てお酌でもしたらどうだ。幾らわれ一人の男のやうに淸作を惹き附けて置きたうても、今度ばかりはなんぼお前の力でもどうもならぬわい。ワッハヽハ……お前の大事な淸作が出征するんぢや。もう二度と逢はれぬのぢやぞ。さあこつちに來てお酌でもしろ。おい長崎の別嬪ッ！（人々笑ふ。淸作は庄左衞門を見る）

お虎　庄左や、お前はみつともない。わしの心も知らんで、場合を考へろよ。

庄左衞門　はい〳〵。姉さん勘忍して下さい。

加志山　ぢや、別盃ぢや、早う廻したがよい。

庄左衞門　さあ淸作お前から、（盃を淸作にさす）今度は母さまぢや……（お虎にわたす）それがすんだら……お町ぢや。（お町盃をうけて飮む。次に庄左衞門自身盃を受けて一息に飮み乾す）さあこれで目出度く終つた。みなさんどうぞ御勝手に一杯づゝあがつて下され。

（お兼は隅の方で庄左衞門や人々の樣子をぢつと見つめてゐる。）

牧原　それではもう渡船も出ますので、これで出かけていたゞきませうか。

加志山　野々宮淸作君萬歲ッ！

人々　萬歲ッ！

（人々提灯を持ち下手濱の方へ下つてゆく。お虎は淸作の腕に介けられて歩いてゆく。すぐうしろから、お兼がうつむきながら。）

兵事係　誰か留守番の者が一人殘つてゐないわけには行くまい。

庄左衞門　あゝさうぢや。うむ、お兼さん、あんた殘つてをつておくれ。あんたがよい。

加志山　でもけふだけは。（氣の毒さうに）

お兼　いゝえ、わたし殘つて留守番をしとります。

加志山　そいつは氣の毒だなあ。

お兼　ではあなたどうぞからだを氣をつけて下さい。（すすりあげて泣く）

清作　うむ。大丈夫だ。後のことを頼むよ。

（人々退場。お兼一人柿の木の下に遠ざかりゆく提灯の火を見ながら佇んでゐる。）

お兼　あゝもう提灯の燭も遠くなつてしまうた。わたしはいつまで一人でこゝにあの人を待つてをらねばならぬのやら……いやわたしはこゝにとても一人ではをれぬ。（遠くで萬歳の聲）どうしたらよいかなあ……わたしにはたうとう別れの盃一つ誰れもくれはせなんだ。お母さんにしろ、お町さんにしろ女でゐながら、わたしの心を思うてくれるものは一人もないのか。（身を顫はせて泣く。萬歳の聲）……よい、わたしやもう誰れも賴みはせぬ。わたしやどうしても清作さんと別れはせぬ。わたしやどうでも尙一度あの人に逢うて來る。清作さんがをらぬ家などどうなつてもかまふものか。わしも濱まで送つて行く。（お兼は物に憑かれたやうに跣足のまゝ下手へ小急ぎに急ぐ。舞臺しばらく空く。蟲の音。月冴ゆ。麥を搗く女の唄。古茂七上手より登場）

古茂七　あゝ／＼。もうみんな濱の方へ出かけたらしいな。お虎さん……お兼さん……誰れもをらぬ。家中を留守にして。（縁に腰を卸す。そこに置いたまゝになつてゐる酒を二三盃つゞけざまに飮む）清作さんも氣の毒ぢや。が、お兼さんはなほ氣の毒ぢや。どうしてみんながいつまでもあの人一人を目の敵にするのかなあ。なんぼ他國から來たというてもあんまりぢや。あの庄左衞門といふ奴は若いころから惡い奴でなあ。村會議員などとのさばつてをるが、あんな惡者は死んでしまへばよい。あいつ屹度お兼さんに恥をかゝされたことがあるにちがひない。いやな奴だなあ。（また酒を飮む）この大黑柱だな、さつき清作さんが泣いてゐたが……こゝに古い斧の刃の痕がある、これおやな……（ぢつと見つめてゐる。あわたゞしい叫び聲。人々の群。清作は兩眼を突かれ血だらけになつて人々に介けられて下手から歸つて來る。手には日本刀を引き拔いて持つてゐる）

清作　お兼どこにゐる。畜生ッ！　おれの眼をこのやうにして……うぬ、殺してくれる。さあこゝに來い。（日本刀を振り上げようとする。人々なだめ止める。うしろからお兼が人々に捕へられ、引き摺られて來る。手には血に染んだ簪を提つてゐる。ひどく踏まれ、叩きのめされたらしく髮もみだれ、着物も土にまみれてゐる）

お兼　（人々の手をもぎはなして、清作の足もとに飛んで行

つて）どうぞ殺して下さい。清作さんわたし飛んだことをしました。（清作の眼を見て泣く）でもわたしどうしてもあなたと別れるのが……

清作　殺さんでか。今日まであれほどにしてやつたおれの恩も忘れて、このやうな目に逢はせて。さあこゝに來い。お前を殺さんでどうするか。（刀を振り上げてお兼を刺さうとする。人々清作の手から刀をもぎ放す）

庄左衞門　姉さん。早う醫者を呼んで。それから清作はあつちにやつて寢かせんぢや。それからこの國賊はみんなで叩き殺せばよいのぢや。

お兼　どうぞ殺して下さい。あなた、あなた、わたし飛んだことをしてしまひました。

（人々清作を爐のはたに寢かせる。）

庄左衞門　おう殺さんでか！

加志山　まあお待ち。われ〳〵の手でこの女をどうするといふことはできぬ。氣が狂つたとしか思はれぬ。ともかく警察の手に渡すより他はない。その上のことだ。それまでは逃がさぬやうにして靜かに奧の部屋にでも寢かして置いた方がいゝ。

お兼　あなたどうぞ殺して下さい。わたし飛んだことをしてしまひました。（お兼、清作の前に突つ臥す。人々無理にお兼を奧へつれて行く）

清作　おう殺さんでか。きさまはよくも……（傷ついた眼を抑へながら起き上つて奧の方へ行かうとする。人々抑へる。濱の渡船の竹螺法の音が聞える）

加志山　あゝ、もう渡船が出る。ぢやわれ〳〵は濱まで出かけて來るで、清作君の看護は賴みますぞ。醫者と、それから警察と……あゝ古茂七君。君すぐ廻つてくれ。

古茂七　はい……（土間の裏へ出る）

加志山　ぢや、われ〳〵は濱まで行つて來よう。

（人々退場。奧ではお兼のすゝり泣く聲。舞臺には清作の左右にお虎とお町だけが殘る。）

清作　お母さんか。さああの刀を貸して下さい。あいつを叩き切つてやらねば。（起き上らうとする）

お虎　お兼を叩き切つたところでお前のこの眼がどうなるものか。（ふたゝび寢床の上に寢かせられる。呻く。お虎とお町はおろ〳〵して清作をいたはる）

（間。蟲の聲。）

清作　（急に起き上り、奉公袋のなかの繩を取り出して）お母さん、あいつはやつぱり惡い女でした。あいつをこゝに引き摺り出して下さい。あいつをこの繩で絞め殺してやらぬうちは腹の蟲が癒えぬ。お母さんあいつのあの首をこの繩で……（奧の方へ駈け込まうとする）

古茂七　（あわたゞしく土間の裏戸を明けて走りこみ）お

虎さん大變だ。お兼さんが今あの籾倉の裏の柿の木で首をくゝつて死んだ。

お虎　えツ、あの裏の柿の木で……（古茂七、お虎、お町土間へ飛び下りて裏へ走る）

（間。）

清作　（寢床の上に立ちすくんだまゝ耳をそばだてゝゐる。裏の柿の木の下でお町やお虎の姉さん！　お兼や！　と呼ぶ叫び聲が聞える。二人の女のすゝり泣きが聞える。清作は手に掴んでゐた繩を落してしまふ）お兼や！　お兼や！（清作は立ちすくんだまゝ。濱では萬歳の聲、竹法螺の音）

——幕——

燕　（一幕二場）

時

治承四月八月二十三日

場所

相州石橋山

人物

武士甲　大庭三郎（二十五六歳）

武士乙　長尾五郎（二十一二歳）

若き武士　眞田與一（二十歳）

老卒（六十歳）

武士、一、二、三、四、五、六、七、八

その他武士、兵卒等

日が暮れてゐる。雨が降つてゐる。かすかに夜の空に明暗の一線を描いてゐるのが見える。

乙女、十國あたりの嶺だけが、中央に蕎麥畑、大根畑などあり、上手及び下手にやゝ大きな巖石などころがり、木立などよろしく。絶えず波の音聞ゆ。

遠くにて矢叫びの聲折々。

甲冑の武士八人。蓑笠を着る。武士四は大將らしき者。手負ひせるあり、刀を拔けるあり。炬火を手にせるも、炬火は消えてゐる。辛うじて道をたどり得るくらゐの暗。

武士一　もうすぐでございます。もう少しの御辛抱でございます。

武士二　あゝ、あれに燭が一つ見えます。眞鶴の岬にちがひございません。

武士三　かねてかやうなこともと存じまして、萬一の場合のために吉濱の岸に一艘船を隱して置きました。あれまでお越しになれば。

武士四　いや、もう駄目だ。俺はこゝで討死と決めた。我ながらまづい戰をした。俺はわづか三百の手兵のことだけを眼中に置いて戰の計畫をした。何といふ笑ふべきことだ。これで源家の統領などと呼ばれることを夢にでも考へるのは身の程知らずだ。俺は何といふ小つぽけな膽つ玉の人間だらう。俺は自分で自分に愛想が盡きた。

武士三　三百の寡兵で三千の敵を迎へるには、この狹い石橋山こそこの上もない有利な地點でございます。早川口から石橋山へかけての陣所の御配置、見事な御手並でございました。たゞまだ御運が開かないまでのことでござ

います。

武士四　いや、さうではない。俺がたゞ小さな一國一城の主といふのなら、こんな戰法で戰うたところで恥にはならぬ。しかし苟くも源家の統領たる名を繼ぐ俺が、こんな小つぽけなこせついた策戰で戰つたと言はれたら勝つても名譽ではない。敗けては恥の上塗りぢや。たとへ今度は落ちのび終せたところで、このやうな小膽で、どうして天下を賭けての大事業が俺に出來るものか。俺はなせ相模平野の眞ん中に三百の手兵を率ゐて出なかつたか。死ぬにしてもこんな狹苦しい山の中より、あすこだつたら晴々したらうに。俺は敗けても大將らしい戰をして死にたかつた。あゝ、しかしこんな愚痴を言つたところで。（急に腹卷を外さうとして）さあ、介錯を頼むぞ。

武士一　左樣な御短慮では……あなた樣はそれでお宜しいかも知れませぬが、安房、上總、武藏、相模とあなた樣を頼みに軍を起しました源家の人々を何うなさいます。あなたはみんなを見殺しになさるおつもりでございますか。あなた樣のおからだは源家萬人のおからだでございます。死ぬのはいつでも死ねます。ともかく下の濱まで。

（武士數人。無理に武士四を引き立てゝ下手の木立の中に急ぐ。風強く吹く、遠き矢叫び。引きちがひに若き武士一人下手より登場。しきりに敵手を探す。老卒一人馬柄杓を握つたまゝ小急ぎに下手より登場。）

老卒（低聲にて）もし、もし、それにおいでなさるは？

若き武士（暗の中を見つめて）さういふお前は、六彌太ではないか。（聲ひどくかすれてゐる）

老卒（走り寄つて）あゝやつぱりあなた樣でございましたか。あなた樣は、今夜大將さまのお身代りにこゝで討死をなさるつもりでございませうがなあ。

若き武士　御主君のお伴をして吉濱から一緒に安房へ渡るつもりであつたがみんなで八騎。主從八騎はいつの戰にも昔から源家にとつては不吉な例とのこと。誰か一人遠慮せよとのことで、俺が一人引きかへして來た。

老卒　あなた樣のやうなあたら若武者を殺さぬでも、まだお年を召した方々もをられまするに。（涙を拭ふ）どうしてあなた樣を一人で殺されませう、さあこの爺も一緒に死なして下さい。

若き武士　危い、早う歸つてくれ。早う。

老卒　あなた樣を一人でこの危いところに置いて、どうしてわたくしが、歸つて婆に合せる顔がござりませう。

若き武士（沈默。あたりの人の氣はひにのみ注意をくばる）

老卒　わたくしごときが愚痴を申したところで詮もない。がしかし、あなた樣がまだいたいけな坊さまでゐられた

ころから、お育て申上げたこの爺を、なぜ討死には一緒にお連れくださらぬ。わたくしはお怨み申します。

若き武士　志はありがたう。忘れはせぬ。しかしお前にはさつき言うたやうに賴まねばならぬことがある。濱に殘して置いた馬を引いて早う國に歸つてくれ。御主君も、父上も、もう船にお乘りになつたころだ。これで俺も安心した。お前、國に歸つたら奥にさう言うてくれ、俺は立派な戰ひをした。そして御主君のお身がはりに、石橋山で天晴れな討死をしたと。坊が大きくなつたらようく今夜の戰さの物語りをしてやつてくれ。

老卒　それはなりませぬ。そのお話でしたら小倅に言うて、先程馬を引かせてやりましたのでもう御案じになることはございません。あなた樣が討死なさるのに、どうしてこの爺が……どうぞこの爺をお伴に。

若き武士　ならぬ、ならぬ。主人の言葉を聞かぬか。早う行け。

老卒　それでは、わたくしはこゝで腹掻つ切つて死にまする。あなた樣の討死を餘所にどうしてこの爺が。（小刀を拔かうとする）

若き武士　待てツ！　爺やありがたう。では一緒に討死ぢや。

老卒　あツ。おゆるし下されますかツ！　忝うございます。

（炬火を持ちたる武士甲、上手より登場。嵐吹く。舞臺いよ／＼暗くなる。）

武士甲　誰ぢや。

若き武士　相模の國の住人眞田與一義忠。

武士甲　伊豆の國の住人大庭三郎景尙。

（兩人太刀を拔き、戰ふ、炬火消ゆ。雨ます／＼激しく降る。嵐吹く。太刀を捨てゝ蕎麥畑の中に組む。若き武士、武士甲を捻ぢ伏せ、小刀を拔かうとするが鞘につかへて拔けないので、老卒を呼ぶ。咽喉を痛めたるため聲立たず。武士乙上手より登場、炬火を持てど、消ゆ。炬を捨てゝ二人の方へ手さぐりにて進む。武士甲捻ぢ伏せられたまゝ助けを呼ぶ。）

武士乙　誰ぢや。

武士甲　俺ぢや。平家の者ぢや。

若き武士　六彌太！　刀を持て。刀を。六彌太！（聲聞えず。老卒暗の中を手探る）

武士甲　敵と組んでゐるのぢや。手を貸してくれ。

武士乙　平家方にて誰ぢや。

武士甲　大庭三郎景尙ぢや。

武士乙　（驚きたる體にて躊躇する）

若き武士　早く下の奴を刺してくれ。（敵を抑へたまゝそこいら草の中を手探る）

武士乙　上か下か？
武士甲　下のは大庭ぢや。
武士乙　下のは大庭か？　下のが。
武士甲　さうぢや大庭ぢや。
武士乙　（やゝ快げに微笑す）　お前は敵に組み伏せられたのか。
武士甲　さあ、早う上の奴を刺してくれ。
若き武士　早うせえ。下の奴を刺してくれ！（苦しさうに聲を絞る）上のが大庭ぢや。
武士甲　頼む、頼む。下のが大庭ぢや。
武士乙　（意を決して、若き武士の草摺りを手探る。ひどく若き武士に蹴倒され、再び起ちて刺す）
若き武士　（呻きつゝ仰向に倒る。呻き聲を聞きつけて走り寄りたる老卒は、折柄忍び寄つた武士丙と相撃して倒れる）
（嵐やゝ靜まる。武士乙燃えさしの炬火を拾ひ焚く。武士甲起き上り若き武士の首を掻き、小袖に包む。）
武士乙　（炬火を持ち、武士甲の傍に寄る。顔に新しき傷あり、血滴る）手強い奴だつたのう。危いことであつたのう！
武士甲　まつたく手強い奴だつた。御加勢を得なんだら、ほんに危いところぢやつた。（武士乙を見て驚く）おゝ、お主は五郎爲宗ぢやないか？
武士乙　まあさう驚くには及ばぬ。敵に組み伏せらるゝも時の運ぢやはゝはゝ。それにしてもこの男は咽喉を痛めてゐたと見えて、よう聲を出し得なんだ。それがお主のためにはもつけの幸だつた。そしてこれはいつたい誰ぢや、天晴な若者だが。
武士甲　相模の國の住人眞田與一義忠と名乘りをつた。
武士乙　あの與一義忠か。（しばらく沈默）與一殿であつたか、俺は子供のころから仲宜しであつた。敵ながら天晴れ武士を、むごいことをしてしまうた。（手の甲にて涙を拭く）それにしても景倚、氣の毒ぢやが都から來たあの女は俺が貰うたぞ。かねての約束通りに。
武士甲　何ツ！　あの都からの女をツ！
武士乙　今になつて何をとぼける。お主と俺とはどういふものか昔から氣が合はぬ。しかもこの春都から下つて來た女を二人で張り合ふことになつてしまひには決闘までと昂じて來たのを、仲間の奴等のはからひで、同じ捨つる身なら潔う今度の戰ひで手柄を爭へ、そして勝つた方があの女を取るといふ約束まで、みんなの前でしたことをお主は忘れたのか。
武士甲　その事を忘れてなるものか。その誓ひがあつたればこそ俺もこの强敵と引つ組んだのだ。それで、どうし

てお主があの女をお主のものにしようとするのだ！

武士乙　言ふまでもない。この天晴れ豪の者を打ち取つたのは、俺ではないか。恐らく今日の戰ひのこれが一番の手柄であらうぞ。

武士甲　無論これほどの立派な手柄が他にあつて耐るものか。それでだ、刺殺したのはお前か知らぬが引組んだのは俺ではないか。

武士乙　組み伏せられてすでに首を掻かれるばかりのところではなかつたか。それでもお主は討ち取つたといふのか。

武士甲　さうぢや、お主が來てくれぬでも俺は必ずこの男を討ち取つて見せたわ。

武士乙　今になつてお主は卑劣千萬な。人を僞り、人の手柄を奪はうとするのか。

武士甲　お主こそ人の手柄を。

武士乙　うむ、武士の風上にも置けぬ奴。

武士甲　おのれこそ。

武士乙　汝こそぢや。犬にも劣つた奴！

（武士甲と乙、太刀を拔かうとする。その時矢叫びの音近づき、烟火の光りが木の間に見ゆるので、武士甲小袖につゝみたる首を抱へて上手へ走る。武士乙一人、若き武士と老卒の死骸を見つめたるまゝ佇立する。）

（嵐狂ふ。雨ひどく降る。）

同じくかへし

時

第一幕から十三年の後、秋の日の午後、夜に入る

場所

同じく石橋山

人物

庵主　前の武士乙、長尾五郎（三十四五歳の男）

武士甲　大庭三郎（三十八九歳）

美しき女　大庭三郎の妻若葉

濱の老人、男、女、少年等

家の子　數人

遊び女　二人

前の幕の蕎麥畑、大根畑より北の方へ一丁ばかり木立を隔てたる山腹。やゝ上手に寄りて古びたる庵室、正面に阿彌陀像あり。下手には型ばかりの籬、芒、萩草などすべて初秋の心。

下手籬を隔てゝ眞鶴の沖、三浦半島など見ゆ、籬の下手より濱へ通ずる坂道あり。

室内には何の飾りもない。左、右、正面みな濡れ縁に

なつてをり、左緣側に閼伽棚あり。蓮の花二三輪手桶に入れてあり。右手に濡れ緣に沿うて壁に托鉢の笠が一つだけ懸けてある。直ぐ下に樋を切りて小さき戸棚一つ

正面の濡れ緣の上の庇の下に、少し左に寄つたところに燕の巢がある。庵主、黑き法衣にて佛前に坐り、珠數を爪繰つたまゝ瞑目してゐる。絕えず遠く靜かに浪の音聞ゆ。

濱の男三人、下手籬の外から庵室を覗く。

一人の老人は柴を折つては火を焚き、篠竹を火に溫めては曲りを直してゐる。やがて小刀にて歌口を明け笛を作る。孫らしい少年しきりに小刀を見つめてゐる。

靜かに小鳥の囀にて幕開く。

濱の男　今日は丁度あの恐ろしい石橋山の合戰から十三年目ぢやなあ。早いものぢやのう。

濱の老人　まつたくぢや。初めが八月十七日の八牧、二十三日がこの石橋山、二十六日が衣笠の戰ひ、今日も明日もと源氏と平家の戰ひ、俺、つく〴〵武士なんていふものに生れんでえゝことをしたと思うた。親子兄弟が切りつ切られつのう。引きつゞいては富士川の戰ひ、屋島の戰ひ、壇の浦と悲しいことばかり、むごたらしいことばかり、このやうな世の中に生れ合せたのも因果ぢや。天子さまゝでが筑紫の涯で海にはまらつしやるなんて思うても淚が出る。

濱の男　ぢや、爺さんは平家びいきかなあ？

濱の老人　（驚いて）　滅相な、平家びいきなどゝいふ言葉を冗談にも言うて見ろ、ぢきに鎌倉さまにこれだぞ。（と縛られる態をする）俺たちには源氏もなければ平家もない。が、むごたらしいことはいやぢや。殺すも、殺されるも同じ兄弟ぢやになあ。

濱の男　兄弟といへば義經さまが一番氣の毒ぢやのう。

濱の老人　しいつ。またそのやうなことを。

濱の男　石橋山の合戰といへば今でも覺えてをるがなあ。あの秋はいつもの年よりか大根も蕎麥も滅法よい出來で喜んでゐたがよ。あの一晩で畑は荒されてしまふし、からつきし一本の大根も取れなんだ。おまけにおつかなびつくりで翌の朝蕎麥畑へ行つたら、首のない武士らしい男の死骸が素つ裸にされてころがつてゐた。何でもまだほんの若い男だつた。

濱の老人　素つ裸になつてのう！

濱の男　あ、素つ裸でよ。きつと大將分か何ぞの武士たらう。だもんで鎧も冑も誰かゞ剝き奪つたにちげえねえだと俺も想うた。俺も畑を荒された腹癒せに何ぞ太刀でも拾はうと思うたが弓一つ落ちてはゐなんだ。それから隅

の方に六十ばかりになる爺さまの武士が一人つんのめつて死んでゐた。これも誰か剝いだと見えて腹卷も何もなかつた。やつぱり素つ裸で蕎麥畑の中に捨てられとつた。
濱の老人　おいたはしいことぢや。
濱の男　恰度そこに戰の見張りに來た武士に捕まへられて、わしが二人の死骸をあの大根畑の隅に穴掘つて投げ込んでやつた。つまらねえ話さハツハツハツ……。それでも後で鎌倉方の役人が見えた時は、わしはそこの穴を案内して錢貰うたが。
濱の老人　その若い方の武士といふのが岡崎さまの若樣で眞田與一さまぢやつたのぢやのう。
濱の男　さうよ。その爺さまの方が。
濱の老人　一緒に討死なされた六彌太ちう人ぢやのう。
濱の男　わしも後でそれを聞いた時は妙な氣になつたよ。
濱の少年　爺、早う笛をこしらへてくれろ。
濱の老人　勘辨してくれ。話にばかり氣をとられてゐた。どれ〳〵……。（笛の歌口を切る）
濱の男　それはさうと。（庵の内を覗く）こゝのお住持さまも元は何でも立派な侍大將であつたといふではないか。のう爺さま。
濱の老人　（笛の中を覗きながら）うむ、そのやうな噂も聞いた。何でも深い御心願があつてのことであらう。あのお若いのに餘所目も振らず念佛三昧に耽つてをられる。いつ來て見ても阿彌陀さまと向ひ合うて膝を組まれたまゝ身動きもなさらぬ。まるで作り附けの佛さまのやうぢや。
濱の男　元は平家の武士ぢやとの話も聞いたが、お住持さまに聞いても笑うてばかりをられる。滅多に傍目も振らぬほどの御修行をなされてゐるのにお邪魔するわけにもゆかずのう。
濱の老人　まつたくぢや、まあよう、あれほどの御勤めができることぢや。わしは年寄りぢやで、朝は暗いうちに起き、夜はいから更けてから寢るが、いつ濱から覗いて見てもこゝの庵寺にお燈明が消えてゐたことはない。お燈明の前にはいつもきちんと作りつけたやうにお住持さまが坐つてゐなさる。
濱の男　まあ生佛さまのやうなものぢやなあ。
濱の老人　さうぢやとも。かうやつてうしろからお姿を覗いてゐると後光でも射してゐるやうぢや。ありがたいことぢや。（合掌する）あれで何ぢやぞ、あのやうに浮世のことは何もかも忘れてゐなさるやうぢやが、あれ見いあの庇のところに燕の巢があるぢやらう。あれだけはどういふものか時々ぢつと見てゐなさる。そして暑いころなどは、夜などどうかすると御自分で扇で蚊を追うてや

つてゐなさつた。果報な燕ぢやないかのう。
濱の男　わしもその話だけは聞いた。ほんに尊いことぢやのう。
濱の少年　爺、早う笛をこしらへて。
濱の老人　おう、それ〳〵もう出來たぞ。早う濱にいて吹け。（老人、歌口に脣を當てゝ吹く、笛鳴る）
濱の少年　早う、早う笛を。（笛を取りて庫裡の方へ奔る）
濱の老人　ハツハツハツ、禮も言はんで、笛を持つていてしまうた。
濱の男　あゝ、もう日が落ちてしまうたさうな。
濱の老人　秋の日は早い。
濱の男　風がうら寒いやうぢやのう。つい無駄話で暇をつぶしました。
（老人は小刀と篠竹を抱へて上手の庫裡の方へ、男は柴をかついで下手へ退場。浪の音。蜩の聲ひとしきり聞え、空赤く燒ける。下手より濱の遊び女二人登場。）
遊び女一　（籬の外にて）お住持さまはまだお年も若いし、たいさうお綺麗な男ぢやさうなが、いつ來ても佛さまと顏を合はせたきり、誰がこゝいらで何と言うて騷がうとも振り向きもなさらぬ御殊勝振り、でも今日だけはどうあつてもお住持さまに聲をかけてお顏を見ようではないか。

遊び女二　そのやうなことをしてもよいか知ら？　わたしらのやうな身で。
遊び女一　そのやうな弱い心でどうするものぞ。世間の男といふ男たちには弄び物にされてゐるわたしらが、ほんに、心から賴る人は、そして悲しい話でも聽いていたゞくのは、あのやうな立派な聖でもなければ他にはあるまい。わたし世の中の男といふ男には愛想が盡きたので。
遊び女二　それで今度はあのやうな立派な聖と遊ばうとでもいふのかい。
遊び女一　ばかな。たゞお顏見たゞけでよいぢやないか。あつ、それよりか今日は何んでもお住持さまに聲をかけてあの池の蓮の花と、蓮の葉を貰つて來るのぢやつたのう。
遊び女二　（うなづく）
（遊び女一と二、庵寺の正面濡れ緣に近づく。）
遊び女一　お住持さま。もし。
遊び女二　もうし、お住持さま。
遊び女一　お住持さま、お住持さま。（遊び女二を顧みて）おつんぼさまぢやないのかい？
遊び女二　（遊び女一を制する）
遊び女一　お住持さま。もうし。（緣側に腰を卸す）もしお住持さま。まあ何といふお氣の强い坊さまだらう。（何

かと、そこいらを見まはす。不圖燕の巣を見つけて）あつ、お住持さま、あなたの大事な燕が見えませんぞ。燕がッ！

庵主　（しづかに女の方を見る。蒼白く面やつれしたれど、いかにも天晴れなる武士らしき骨格。額に古い刀疵がある。憂鬱な眼にはなほ力強い意志の閃きが見える）何と仰しやるか？

遊び女一　（縁側からつと離れて恥かしさうに）　あの庇の燕がをりませぬのでちよつと……

庵主　燕がッ！　（不圖庇の方を見る。二人の女もその方を見る）

遊び女二　蛇にでも呑まれたのではありますまいか？

庵主　……（沖の方を眺め、やがて夕燒の空を見つめる）

遊び女一　それとも、もう秋風が立つて來たのでまた遠いお釋迦さまの國へ歸つたのではありますまいか？

遊び女二　いゝえ、まだついさつきまで濱では燕が飛んでゐた。

遊び女一　いゝや、もうその遠い天竺とやらへ飛んでいつたかも知れぬ。

庵主　まだそこいらに燕は飛んでゐませぬか？（尚、不安げに空を眺む）

遊び女一　もう日が暮れかゝつて來ましたので、飛んではゐませぬ。

庵主　では今日、遠い旅へ飛んで行つたのでもあらうか。（空を見つめる）

遊び女二　そしてまた來年の春になれば燕はこゝの庇に戻つてまゐりませう。

庵主　さう……燕はふたゝび歸つて來るであらうかのう？（空を見つめたまゝ考へる。濱にて着船を知らする法螺の音聞ゆ。不審げに耳を傾ける）　聞き馴れぬ法螺の音だが、船でももしか……

遊び女二　ほんに船でも着いたのでございませう……

遊び女一　（籬の外に走り濱を覗く）　あゝほんにつひぞ見たこともない大きな船が着きました。鎌倉からでも來たのか、大將方の御船でございませう。舳の方へ太刀を佩いた立派なお武士(もののふ)たちが見えます。

遊び女二　（籬の外に走り　遊び女一と嬉しさうに何かさゝやきながら濱の方を見る）

庵主　やつぱり大きな船が着きましたか？　鎌倉あたりから來た船のやうに見えますか？（何か思ひ出したやうに急に深く考へ沈む）

（遊び女一と二、ふたゝび濡れ縁の方へ來る）

遊び女一　お住持さま、どうぞあの裏のお池の蓮の花と、それから廣い葉を二枚ばかり下さいませんか？

庵主　それはお易いことだ。幾枚でも勝手にお持ちなさい。何になさるのぢや？
遊び女一　え丶、燈籠を作つて流します。
庵主　盂蘭盆でもないに！
遊び女一　盂蘭盆でもございませぬが、今夜はあたしの父が、石橋山の戰ひの時御主人さまのお伴をして討死なされたのでございます。
庵主　父御が？
遊び女一　はい。あたしはまだほんの子供でよう覺えてはゐませぬ。が、それからは母と二人で武藏の方へ身寄りの者を賴つてまゐりましたが、武藏に着いて間もなく母は亡くなり、あたしはついこのやうな稼業に賣られまして。
庵主　それは氣の毒な話ぢや。それで父御のために燈籠をお流しなさるのか？
遊び女一　さうでございます。それにこの人の……
庵主　お前さまの？
遊び女二　はい、あたしの子供が三浦の崎に一人、里にあづけてありますので……
遊び女一　その子を察はしう思ひますので、この下の濱から三浦の崎まで母の心をこめて燈籠を流さうといふのでございます。

庵主　いづれにしても氣の毒なことで。
遊び女一　ではいたゞいてまゐります。
庵主　御遠慮なく。（女二人上手庫裡の方へ退場）
（庵主濡れ緣に佇立したまゝ燕の巢、夕燒の空を眺め入る。沈鬱なる思ひ入れにて濱の方を覗く、誰かすぐそこいらから近づいて來るのを恐れるやうな面地で。
裏山にて少年の吹く笛の音聞ゆ。）
何といふ心の弱いことであらう。庵を結んで既に十年、俺はやつぱり十年前の俺であつた。人を憤る心も人を誘る心も、人を忘れ得ぬ苦しさも何で十年前と微塵のちがひもあらう。さつきのあの女たちの聲を聞いた時、俺は十三年前に別れた都の女が後から俺を呼んでをるのだと思つた。俺の十年の苦行精進が俺の心の面に何一つ尊い影でも投げてくれたか。いつたい俺は何で弓矢を捨てゝこんな生活にはいつて來たのだ。治承四年の八月恰度今夜であつた。あの時はひどい雨であつた。與一義忠殿を刺した時だけは妙に無常も感じた。しかし俺は二十六日、三浦黨との衣笠の戰ひでも三人の敵を斬り倒した。大庭景侮と石橋山の功を爭うた時、俺は與一の首一つ何で惜まう。犬に吳れるのぢやと思つて、景侮に與一の首を叩きつけてやつた。あの時の彼奴の顏といつたらなかつた。犬だ、畜生だ、俺はさう言つて與一の首を彼奴にやつた。

彼奴は罵られても唾をひつかけられてもまるで尾を掉る犬のやうに喜び居つた。俺はまだ若かつた。俺の胸は血に飢ゑてゐた。俺はまだ與一の首の十や二十は何時でも獲る自信を持つてゐた。俺はあの時與一の首に戀の勝利が賭けられてゐたことに氣付かぬではなかつた。俺は後悔もした。しかし俺はあさましい手柄爭ひをしてまで戀に勝たうとは思はなかつた。また女が眞實俺を戀しいと思ふなら、景尙を振り捨てゝも俺の懷に逃げて來るであらうと思つてゐた。自惚れた俺の顏を思ひ出しただけでも恥かしい。俺は一年待つた。二年待つた。三年待つた。女はたうとう來なかつた。あの犬のやうな噓つきの、小悧巧な景尙の奴にたぶらかされたのだ。女といふものはみんなそんなものだ。誠の男といふ男の心は女にはわからぬものだ。景尙奴は間もなう俺たちの仲間を賣つて鎌倉へ降つた。女も跟いて行つた。俺は富士川の役でむざむざと虜になつて佐殿の面前へ引据ゑられた。俺はよう舌も嚙み切らんで佐殿の前へ出た。俺はまだ女に未練があつたからだ。女が一度は俺のところに歸つて來るにちがひないと思うてゐたからだ。俺は何といふ馬鹿者であつたらう。佐殿が源氏の仲間に俺を引き入れようとなされた時、もしあの時佐殿の後に時を得顏の景尙がゐなんだら俺は武士の面目を捨てゝも佐殿の下に働いたかも知れぬ。あの女が歸つて來るのを待つために。俺は與一の靈を弔ふためだと言つて、佐殿の前で髻を切つたが、あれが俺の本心だつたらうか。俺はまだ女に未練があつたのだ。佐殿にも源氏の奴等にも景尙にも俺といふものを見せつけてやりたかつたのだ。殊にあの女に俺の心の潔白さを見せてやりたかつたのだ。俺の武士らしい噂を聞かせてやりたかつたのだ。俺は下手な、自惚れの芝居を打つたのだ。十年、俺はこゝの庵寺で一人の見物もない芝居を打ちつゞけてゐたのか！（一層深き憂鬱。室内を歩きまはる）いや／＼、かういふ妄語を口走るのはまだ俺の精進が足らぬからだ。勿體ないことだ。……あゝ日も暮れてしまうたさうな。（佛壇に法燈をかゝぐ。蟲鳴く）

武士甲　（太刀を佩き旅人の姿にて上手より登場。しばらく庵主の動作を注意して見てゐたが、皮肉な微笑を浮べる）おう爲宗久濶ぢや。

庵主　（振返りて）何つ！　お主は景尙ッ！（不快な表情、啼き憤りを強ひて隱さうとする）ではさつきのあの船で？

武士甲　ハツハツハツ、驚いたであらう。今この濱に船をつけたばかりだ。まあ靜かにせえ。お前の心を見すかされたといふではなし、さう慌てるには及ばぬ。殊勝氣に

法衣は纏うてをれど、どう見てもお主はやはり十三年前の長尾五郎僞宗ぢやのう。鎌倉でも、また、こゝまで來る道々でもたいさうなお主の噂を聞いたが、案にたがはず、見ると聞くとは大違ひ。かうやつて逢うて見ればお主はやつぱり五郎僞宗ぢや。ハッハッハッ……法衣の下に隱さうとしてもお主のその憤りが、法衣の下に隱されるものか。

庵主　（しづかに）景倘、恥かしいが、俺はまつたくお主が言ふ通りまだ覺りどころか生覺りもできぬ。

武士甲　それは初めから分りきつたことだ。熱病にでも取りつかれたやうに髻を切り、太刀を捨てたところで、元元熱病ぢや。熱は冷めるにきまつてをる。熱が冷むれば切り捨てた髻が欲しくなり、太刀が欲しくなる。その欲しい心を無理に抑へて、殊勝らしい顏をして十年が間このむさくるしい庵寺にくすぶつてゐたお主の辛抱强さだけは馬鹿と言はうか、感服といはうか。いつたいお主は何でもくわつと熱に取りつかれ易いのが昔からの病ぢや。あたら見すく自分の手にはいらうとしたうつくしい小鳥をも、その取りのぼせる熱病のために、自分で取逃がすやうな愚なことをする。

庵主　何ッ、何だと。自分の手にはいらうとした美しい小鳥を自分で取逃がしたッ？　お主は俺をあれほど馬鹿にして置いて、この上にまで恥を搔かせようとするのか。

武士甲　さうだ、この上にまでお主を馬鹿にしようと思ふのだ。お主のやうな人間は腹を立てさせると面白いよ。お主はそれ現在、その法衣の下に瞋恚の炎を燃やしてゐるのぢやないか。それがお主の十年の苦行の賜物か？　俺はお主のやうな善人面をする人間を煽て上げるのが面白いのだ。お主は與一の首を捨てた時も、俺を犬と言つた。

庵主　さうだ、犬ではないか。畜生ではないか。武士の……

武士甲　さうだ風上にも置けぬ奴ぢやと言つた。その通りだ。俺は犬のやうな、畜生のやうな人間だ。だからお主が言ふ通りに嘘もついた。恥を恥とも思はなかつた。そして畜生らしく、犬らしく振舞つて來た。俺は一度だつてお主のやうに善人振つたことを言つたこともなかつた。また善人振つた眞似をしたこともなかつた。俺は女を欲しいと思つた俺の心に對して正直だつた。俺はお主らには嘘をついても、犬畜生のやうな眞似をしても、俺の心には決して裏切らなかつた。だから俺は源氏にもなつた。これ（自分の太刀や裝ひを誇示するやうに）今度備中に所領を戴いたので、今夜この濱から旅立つのだ。

庵主　何故鎌倉からは發たぬのだ？

武士甲　一度、犬畜生の生活をお主に見せてやりたいため

に。
庵主　わざ〳〵船を廻して來たのか？
武士甲　それになあ、お主が十年の若い盛りを棒に振つてしまつたのも、元はといへば俺のためだ。俺はお主が善人面をして、ちよつと突つゝきさへすれば十年でも、一生でも棒に振つてしまふその自惚れを巧く煽てゝやつたのだ。俺の芝居が巧くあたつてお主は十年間といふもの、善人面の芝居を打つてくれたのだ。俺はその間にあの女に三人の子供を生ませた。
庵主　…………
武士甲　三人の子供を生ませたんだあの女に。お主か……
庵主　…………
武士甲　不愉快な話だらう、お主のやうな善人には。自惚れ男には。……あの女は俺に三人の子供を生んでくれたのだ。あの女はもうすつかり俺のものになつた。魂からすつかり。
庵主　それでもお主はあの醜い祕密だけは？
武士甲　打ち明けてゐないだらうといふのかい？　馬鹿な、あんなことが今になつて何の力がある？　女の心を摑むに。女といふ奴はな、一度男のものになれば、その男が人殺しであらうと憎いとは思はぬものぢや、ましてあれしきのこと。
庵主　それでもお主は俺か恐いのだらう。だからこゝにやつて來たのだ。あの時は俺か素直に首を投げてやつたが、俺か尙一度鎌倉にでも出て行つて腰を据ゑてかゝつたら、お主の武士の名がすたるといふ心配が湧いて來たにちがひない。お主が出世をするにつれて……。だから俺を殺すつもりで來たのであらう。
武士甲　馬鹿ッ！　お主はどこまでお目出度いのだ。お主は今では片田舍の賣僧、殊には平家にゆかりある者、俺は今では源家の立派な一國一城の主ではないか。誰がお主のやうな賣僧の讒訴に耳を傾けようぞ。
庵主　何ッ！　尙一言いつて見よ。（押入れの中に首を突き込んで太刀を握る）俺に向つて賣僧とッ？
武士甲　さあ、その態は何だ。法衣を纏うたものゝそれが態か？　それが賣僧でなうて何だ。俺は犬畜生にしろ、お前に勝つたぞ。俺は犬畜生らしい生き方で女を得、子供を生ませた。そしてこの出世だ。お主は人を見下す傲慢な心で、善人面をして十年を送つた。そしてその結果はどうぢや、俺が女に子供を生ませたことを話した刹那のお主の顏は。お主は人の妻か欲しいのか。俺の女が欲しいのか。その淫らな心を何故素つ裸にして俺の前に見せきれぬのだ。何故お主の畜生の心を畜生らしく見せぬのだ。賣僧でなうて何だ、ハッハッハッ、ハッハッハッ。

俺はお前に勝つたぞ。

庵主　……。（太刀を掴んだまゝ身を顫はせる）

武士甲　太刀を拔け、拔いて切れ。お前はそれでも十年の苦行を積んだ聖なのか、ハッハッハッ。

（若き家の子二人炬火を持ちて下手より登場。）

若き家の子一　出船の御用意が出來ました。

武士甲　あゝよし、直ぐ行く、子供たちも待つてゐるであらう。そして奧は？

若き家の子二　奧さまはさつき濱邊で濱の遊び女が燈籠を作つてをりますのを興がつて御覽なされておゐでになりましたが、船にはまだお見えになりませぬ。

武士甲　（やゝ不安さうに）さうか。なに、もう船に歸つてゐるかも知れぬ。（二三歩あるき）だが、さうだ俺は船に行くからお前たちは二人で濱の方を廻つて探して來てくれ。

（家の子二人炬火を持ち上手へ入る。武士甲、一つの炬火を受け取り下手へかゝる。）

武士甲　爲宗、もう歸るぞ。

庵主　（太刀を握つたまゝ）さよなら。

武士甲　お主はまだ夢が覺めぬであらう。もすこし熱に取り憑かれてゐたがよい。お主のやうな人間に世の中のことや、女の心がわかるものか。善人面をして、いつまでもお目出度い夢でも見てゐたがよいわ、ハッハッハッ：……（退場）

（濱の方から出船を知らせる法螺の音しきりに聞ゆ。庵主は柱にもたれたるまゝ考へ込む。太刀を落す。上手庫裡の横から衣を被いだ女が出て來る。武士いぶかしげに女の方を見る。女かつぎを取る。美しき女。）

庵主　おゝ、お前は！

美しき女　若葉でございます。

庵主　たうとう俺のところに。

美しき女　いゝえ、もうあたしは人妻でございます。母でございます。

庵主　それでは、今になつて何で俺のところにやつて來た。

美しき女　あなたこそ何であたしをそれほどお待ちになつたのです？

庵主　俺はお前を待ちはせぬ。

美しき女　あなたはもう御自分の心を僞つてゐらつしやる。なぜあなたは、俺は今日までお前を待つてゐたと仰しやつてはくださらないのです。あたしはさつきからすつかりあなたのお言葉を聞いてゐました。でなければ何であたしがあなたの前にかうおめ／＼と出てまゐりませう。あなたの御心がうれしければこそ、かうやつて恥かしさを忍んで　あなたへ　お別れにまゐつたのでございま

す。
庵主　では御前は今日まで俺がお前の來る日を待つてゐた心をうれしいといふのか。
美しき女　はい。世間ではあなたのことを石橋山の戰ひに與一殿を殺したゝめに無常を感じて世を捨てたの、または景倚との爭ひに敗けて、武士の面目なしに世を捨てたのと申してをります。世間の噂はみんな噓でした。やつぱりあなたはあたし一人のために世をお棄てになつたのです。
庵主　そんなことが……
美しき女　いゝえ、あなたは御自分の心を僞つてはなりませぬ。あたしがあの時あなたのところへ逃げて行つたなら、あなたは景倚を討果しても、世をお捨てにはならなかつたでせう。あたしが弱かつたのです。あなたが弱かつたのです。
庵主　何故お前はあの時、俺のところへ逃げては來なかつたのか？
美しき女　まだあのころはあたしは眞の女にはなつてゐませんでした。まだ女といふものゝ魂を見つけてはゐませんでした。あなたこそなぜ刀にかけてもあたしを奪つては下さらなかつたのです。あなたも惡かつたのです。
庵主　あの畜生のやうな景倚の子供を三人までも生んだ今日、お前にはよくそのやうなことが言へる！
美しき女　あなたは、まだ女といふものを御存じないのです。女の誠の心を！
庵主　けがらはしい。あつちへ行つてくれ！
美しき女　あなたには、あたしが景倚の子を生んだことがそれほど憎いのですか。戀もない男の子を生まなければならぬ女を氣の毒だと思つてはくださらぬのか。それだけのお寬いお心はあなたの胸には湧きませぬか？　あなたは世界中のどの男よりもあたしを愛しいと思つておゐでになります。しかしどの男の戀にもあるやうに、あなたは女の尊い魂を賭け物になすつておゐでになります。あなたも景倚もあたしの女心を十三年の間賭け物にしておゐでになつたのでした。あなたは何故あたしの心を試すやうなことをなさいました。なぜあたしの、女心を大切に抱いてはくださいませんでした。あなたはなぜあたしを奪つてはくださらなかつたのです。
庵主　俺にはまだ大きな男の仕事が殘つてゐるやうな氣がしてゐた。あさましい爭ひまでして女一人の心を得ることよりは……
美しき女　大きな仕事がどこに殘つてゐました？　あなたはこのやうな寂しい十年の御苦行から何をお見出しになりました？　どんな光りを……？

庵主　いや、まだ凡愚下根の身の、何の光りをも見出しはせぬ。しかしいつかは眞如の光りを見る日もあらう、肉を殺ぎ、骨を刻んでゐるうちには。

美しき女　（やゝ冷笑的に）　さあ二十年三十年とこのやうな御苦行をおつゞけなさいますうちにはその眞如の光りとやらを見出しになることもございませう。立派な正覺の境へおはいりになることもありませう。たつた一人の若い女の心さへおわかりにならないあなたですもの。

庵主　では、なぜお前は自分であの時俺の懷へ逃げては來なんだか？

美しき女　あたしにはたつた一人の母がありました。あたしはあの時十六でございました。もうそれだけ申し上ぐればあなたは女の弱い心についてお察しがつく筈です。

庵主　では、もしあの時、俺がお前を奪つたらお前は母に背いてゞも、俺のところへ來たといふのか？

美しき女　はい、男のその心を見たゞけで、乙女心は炎よりも强う燃えます。男の心にたるみがある間は女の弱い心は燃えませぬ。

庵主　では、もしかりに俺が今その炎を燃やすとしたら。

美しき女　もう無駄でございます。時が遲れました。あたしは人妻でございます。母でございます。それにもし今、あなたがそのやうなことをなされたら、あなたの今の名も、今日までの十年の御苦行も水の泡になるではありませぬか。

庵主　俺は世間の噂を恐れはせぬ。十年の苦行も二十年の苦行も何と思はう。

美しき女　たゞあたしのために！

庵主　たゞお前のために。

美しき女　うれしうございます。それならばなほさらあたしはあなたと御一緒にはなれませぬ。あたしはあなたを殺さうとは思ひませぬ。（男の手を握る）おいたはしい、このままおやつれになりましたこと。

（庵主と美しき女濡れ緣に凭り添ふ。女つく〴〵と男の衰へたる面影を見つめる。）

（濱の遊び女が流したる燈籠一つ簾のかなたに、暗き沖をしづかに滑り遠ざかりゆくのが見える。）

（美しき女庵主の膝にくづ折れて泣く。男輕く女の肩を撫でる。）

（濱にて再び法螺の音聞ゆ。女驚きて男より離る。）

美しき女　今はじめて、あたしの胸に、夫をも子をも捨て行く戀の道をうれしいと思ふ女心が燃えて來ました。ほんとうに男をいとしいと思ふ心を覺えました。あたしは喜んであなたとお別れをして行くことができるやうになりました。

庵主　俺から離れて何處へ行くのか？

美しき女　沖へまゐります。あの船で今夜のうちに備中とやらいふ遠い旅へ出なければなりませぬ。

庵主　景尙と共に？

美しき女　でもあたしは景尙の妻でございますもの。三人の子の母でございますもの。（泣きくづれる）

庵主　………

（上手より炬火を點した二人の家の子登場。）

家の子一　奥さまこちらにおいでなされましたか。殿さまには奥さまのお姿がお見えになりませぬので、ひどく御心配をなされておいでになります。船は先刻から纜を解くばかりになつてをります。

家の子二　お子さま方もお待ちかねでございます。お伴いたします。

美しき女（籬の外へ伴れられながら尙一度振りかへつて）では庵主さまお別れいたします。いつまでも御機嫌よう。どうぞ……。（すゝり上げて泣きながら下手へ入る）

庵主（立ち上り、跣足のまゝ籬の外まで走りゆき女の姿を見送る。法螺の音聞ゆ。庭にはいつて來て、濡れ緣に上つてなほも名殘惜げに柱に凭りかゝつて暗い海の方を眺める。不圖太刀が緣の上に投げ出されてあるのに氣付いて急に太刀を戸棚の中へ藏す）あ、何事も考へまい。今日は恐ろしい迷ひの日であつた。口に語るべからざる妄語を語つた。埒もないことに瞋恚の炎を燃やし、あさましい煩惱の犬とも畜生ともなつた。（なほ沖の方を見ながら、閼伽棚の手桶に投げ入れられた蓮の花を持つて來て佛壇に供へる）今夜は與一殿の恰度十三回忌であつた。さつきからのどさくさで、すつかり忘れてゐた。今頃は恰度早川口で合戰の手合せをしてゐた。景尙奴と二人で爭うてゐたあの都の女をかれのものにするか、俺のものにするか、女一人、男二人の一生の賭け事がはじまつてゐたのは、今頃であつた。女の一生を賭け、與一殿の命を賭けて俺たちは戰うてゐたのであつた。淺猿しいことであつた。

（しづかに佛壇に向つて珠數を爪繰り祈念す。法螺の音が聞ゆるたんびに強く珠數を揉み、悶ゆ。濱の方で騷がしき人聲聞ゆ。絕ゆ。蟲の音、波の音やゝ高くなる。）

（濱の少年笛を握つたまゝ下手より走り登場。續いて濱の男、女、老人等登場。男一人炬火を持つてゐる。）

濱の少年　お住持さま。大變だ。お住持さま。

庵主（振りかへり）どうしたといふのだ。何がッ！（恐ろしい出來事を直覺したやうな不安な表情）

濱の少年　女衆が海にはまつて死んだぞッ。

庵主　えゝ、誰がッ！（濡れ緣に飛び出て）

濱の老人　今日鎌倉から來さしつた豪(えら)い侍大將の奧さまだッ！

庵主　あの……。（跣足で庭に下りてよろめき、籬の方へゆく）

濱の女　さつき二人の武士が炬火ともしてこゝを下つただ。あの時の菩薩さまのやうな奧さまだあ。

庵主　ではやつぱりあの女であつたか。（籬の外に出て、落ちんばかりに、崖から下を覗く）

濱の老人　あゝあゝ、むごいことぢやのう。どういふわけがあるか知らぬが、若い女が。なまいだぶ〳〵。

濱の女　ほんに可哀さうぢやのう。

庵主　（籬の方へ來る）それでその侍大將はどうしてゐた。

濱の老人　どのやうな身分の方でも夫婦の情には變りはないと見えて、泣いてゐたとも言ひます。

庵主　何ッ。泣いてゐたか！

濱の少年　何やら狂人のやうになつて船の上で怒り散らしてゐたゞあ。

庵主　何ッ。船の上で狂人のやうに怒り散らしてゐたか。うむ。（冷たく笑ふやうな 理智的な閃きが かれの唇に動く。刹那的に）

（濱の老人、男、女、少年等庵主の顏を見つめ、暗い沖の方を眺める。）

庵主　そして、その女は助からなかつたのか？

濱の女　船の上に引き上げたが息吹きかへさなんだで、そのまゝ。

庵主　亡骸(なきがら)を船に乘せたまゝ纜を解いたか？　そしてその船は？

濱の老人　はい、もうだいぶ沖に出ましたでございませう。眞鶴の鼻を廻つて行くにや追ひ風だで。

庵主　今ごろはその亡骸(なきがら)も暗い波に搖られてゐるであらう。（爪立ちながら暗い沖を眺める。深い絕望と哀愁の色）暗くて船の姿も見えぬ。（緣の上に走り上り柱に縋り爪立ちして沖を眺める）

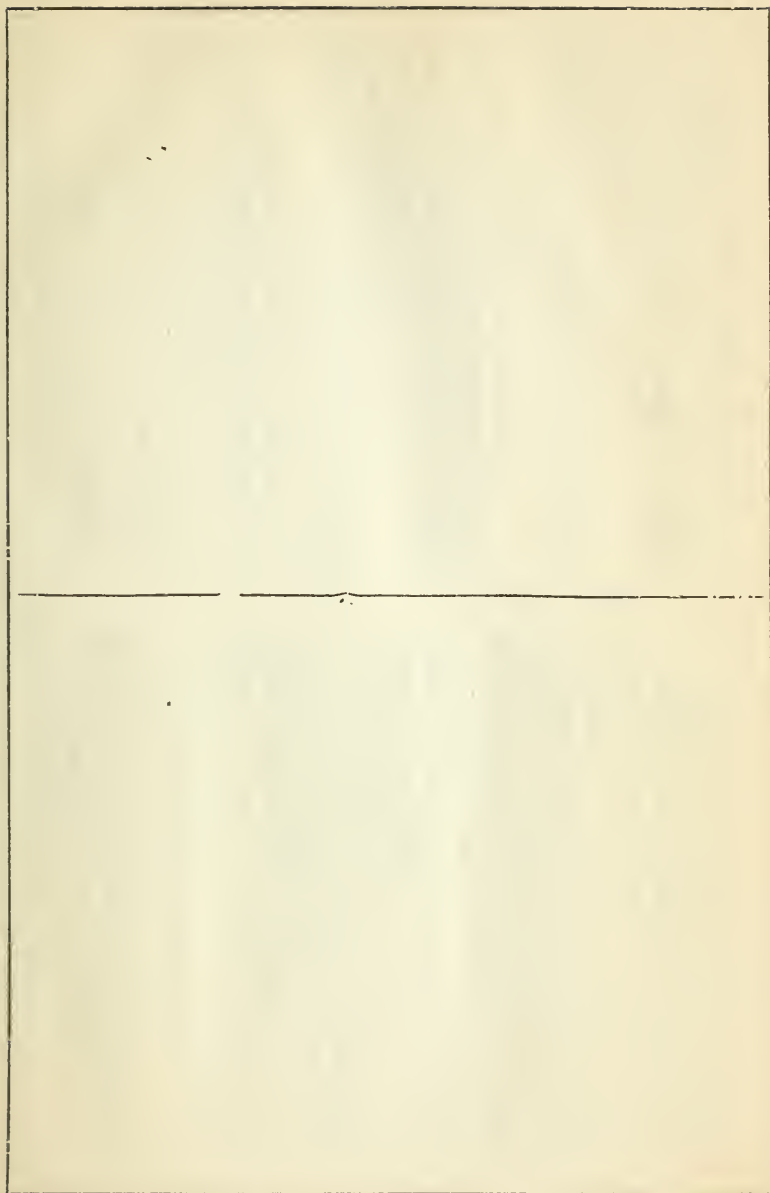
濱の老人　生憎雨でも降るのか、墨のやうな暗い雲があのやうに三崎の鼻から流れて來ましたので。

庵主　沖には何も見えぬ。（ぢれつたさうに緣の上を走る）暗いのう！

（爪立ちて柱に凭りかゝりながら沖を眺める。兩手で顏を掩ふ。）

（濱の老人、女等不審さうに泣いてゐる庵主を見まもる。女たちのうちには袂で涙を拭くものもある。）

（蟲の聲。波の音。遠い嵐の近づく音。炬火消ゆ。）

―― 靜かに　幕 ――

近藤經一篇

玄宗と楊貴妃（五幕十場）

時

唐の玄宗の時代

場所

長安及び驪山に於て

人物

玄宗　唐の皇帝
陳玄禮
張九齡　｝玄宗の老いたる武將
李林甫
楊國忠　楊貴妃の兄
安祿山
高力士　｝：玄宗の重なる臣
王忠嗣
哥舒翰　｝玄宗の忠勇なる武將
蕭晃
宋渾
羅布奭　｝李林甫の一味
楊愼矜
史思明　｝安祿山の一味
壽王　玄宗の第十八番目の子
李龜年　玄宗の寵愛せる宮廷附作曲、歌の名人
楊環（楊貴妃）　玄宗の寵妃
其他　侍從、廷臣、武將、給侍、兵卒、使者、侍女、及び醫師等大勢。

序詞

作者と名乘る序詞役出る。

或る人は境遇か性格を作ると云ひ
或る人は性格こそ境遇を作ると云ひます。
一體どちらが本當なのでせう？
私は兩方共本當だ
少なくとも嘘ではないと思ひます。
成る程人間の性格といふものは
確にその人の境遇によつて支配されるでせう。
然し又同時に人間の境遇といふものは
その人の性格によつて影響されます。
但しその支配なり、影響なりは

「作る」と云ひ得る樣な強いものではなく
共に或る點までに限られた事で
それ以上の所にゆけば此の二つのものは
各々獨立した、何物にも動かされない
確固たる領分をもつて居る事は云ふまでもありません。
が、とにかく此の二つのもの、性格と境遇とが
互ひに働きかけ、働きかけられ合つて
其處に動かす事の出來ない
人間の生涯といふものを形造ると云ひ得ると思ひます。
つまり一言で云ふならば
或る人間の生活、生涯といふものは
その人間の性格と、その人間の境遇とによつて織られた
織物だと云つていゝと思ふのです。
さて、そこで今、我々作者が歴史をよんで
或は又他のある機會によつて
或る人の生活なり、生涯なりを知ると直ぐ
我々は其の織物を作つて居る二つの要素の本質と
その織り込まれ方の度合と
又その微妙な關係を考へないでは居られません。

そして其處に我々の興味を牽く何ものかのあるとき
我々の胸の血は湧き
創作慾は刺戟されます。
そしてペンをとつて
今我々がその人の生活なり、生涯なりによつて
我々の中に形造つた所の其の人を
紙の上に描き出します。
ですから今更云ふまでもない事ですが
我々によつて描かれた人々は
必ずしも實際あつたそれらの人々と同じ人間ではありません。
いや、同じでない所か
時には全で違つた人間になる事さへ無いとは云へません。
然し、若し我々が眞實の創作家である以上
その我々の描いたものに噓はありません。
それは本當の事、事實以上の事實なのです。
よし實際有つた其人が
實際そんな事をしなかつたとしても
我々によつて創られたその人は
同じく我々が創つてその人に與へたその境遇では

それより他に仕樣はなかつた
少なくともさうするのが一番自然であり
必要である事をしたのです。――又するのです。
それでいゝのです。それでいゝのです。
歷史家ではない我々作者の役目は
たゞ、それだけで濟んで居るのです。
いや、さういふ仕事をするのが
卽ち我々作者と名づけられた者なのです。
前置きの又前置きが
あんまり長くなりましたから
後は極く簡單に濟ませませう。
今から此處で
皆さんの前に演せられる脚本は
材を今から凡そ千二百年程以前
支那大陸は北部の名川渭川の岸に
花と榮えた長安の都
その花の都に咲き競つた
百花の中の花の王
曾て此の世に來つた美人の中の美人として
百世に其の名を歌はれる絕世の美女に
東洋の歷史に於て
物質文明の盛を盡した大唐帝國の
全盛時代の皇帝が
總てを賭して求めた戀
その戀より生じた壯麗、悲慘な半生の歷史にとり
それを今も申した通り
私といふ作者が胸の血と肉とをもつて
描き出した悲劇です。
おゝ、そも
戀によりて目覺め
叡智にして總てを知り
然も、弱きがために苦しみぬける一個の人が
その半生にわたる長い間の
悲慘きはまる惡戰苦鬪は
終に彼の頭上に
最後の月桂冠をもち來つたか、どうか。
おゝ、そも
僞りに生れ、僞りに生き
僞りを云ひ、僞りを爲せし女は
終にその僞の中に此の世を去らなければならなか
つたか、どうか。
皆さんは
今から五時間の後
めい／＼御自分でその結果を御覽になるでせう。

そして其の時皆さんが
斯くの如く生き
斯の如く死んだ人々に就て
何とお考へになるか
何とおつしやるか
私はそれを伺ひたく思ひます。
あゝ、然し、何はともあれ時が來ました。
今から早速幕をあけます。
どうぞ、ゆつくり御覽下さい。
（禮して入る）

第一幕

驪山なる玄宗の離宮、温泉宮（別名華清宮）中の廣大なる廊下。
初秋の午後。
右手より李林甫と張九齡の二人話しながら出る。

李林　さう、貴郎のその御心配は御もつともですが……。（短き間）まあ、それも、もうさう長い事ではないと思はれますから……。

張九　何に？「それも、もう長い事ではない」と云はれると、貴郎には何か上手いもくろみでもあるのかね。

李林　いや、私、私自身にはありません。けれども私は或る人からその事に就て或る相談を受けたのです。そして若しこの事さへ思ふ樣にゆけば、貴郎、いや貴郎だけには限らないが、今貴郎の云はれた御心配は今日にもなくなつてしまふだらうと思ふのです。

張九　それは又どういふ事なのかな。そんな上手い事があるものなら、一日も早く……。然しそれは一體どんな事なのかな。それを貴郎に相談したいといふのは誰かな。若しよかつたら、私に明かして下さらないか。（短き間）おゝ、もしも、それで本當に陛下のあの御憂鬱と御氣まぐれとをなほす事が出來るものなら、私は身を粉にくだいて働かうから……。

李林　貴郎の御心持はよく分ります。然し、その事といふのは實は傍で幾らどうしようと思つても、どうする事も出來ない事で……。

張九　えゝ。

李林　それは、たゞ陛下御自身の御心一つによつてきまる事なのですから……。

張九　えゝ。陛下御自身の御心一つによつてきまる？

李林　（思ひ切つたといふ樣にて）えゝ貴郎ならかまふまい。お打ち明けしませう。

張九　おゝ。どうか。さうしてもらへれば……

李林　その事といふのは實は（と少し聲をおとして）陛下に一人の優れて美しい女を差し上げるといふ事なのです。

張九　え〻つ。

李林　貴郎も御存知の通り、陛下の御憂鬱の原因はと云へば、あの御美しかつた武惠妃のおかくれになつた事にあるのでせう（短き間。思ひ起す如く、半分獨白の如く）あの方が亡くなられてから、もう三年になる。その間幾千の女達は後宮に入つた。然し、その中の唯一人としてが、陛下の御心から、あの御悲しみを消す事が出來なかつた。唯一人どうかと思つた梅妃も駄目だつた。朝に入つた女が夕には御暇になる。そして陛下の御心は一日一日と荒んで來た。私達はなほ倦まずに女を探した。あの武惠妃に劣らない様な美しい女を探がした。然しそんな女は無い。（もとの調子にかへり）私達は絶望してしまつたのです。そして、もうたゞ事は成りゆくま〻にまかせるよりほかないと思つて居たのです。所が四五日前突然高力士が、私の所にやつて來て「今度は大丈夫だ」と云ひます。私は何かと思つてき〻たゞすと、彼は非常な美人を見附けたといふのです。「あれなら大丈夫だ、きつと大丈夫だ」と一人できめて居るのです。が、念のためにとにかく私にも一度見てくれといふ事でしたから、都合をつけて、その女を見に出かけたのです。一目見て私も驚きました。「之が人間か」と思ひました。私は自分の目を疑はないでは居られなかつた位です。「大丈夫だ、是なら大丈夫だ」私も思はず、さう叫ばないでは居られなかつたのです。それで私も早速賛成して、その女を陛下の御目にかける事にしたのです。（短き間）今度は大丈夫です。御安心下さい。あの女さへ陛下の御傍に居れば陛下の御心もお落ち付きなさるでせう。そして我々の間にも亦昔の様な平和な日が還つて來る事でせう。

張九　（にが〳〵しい氣で）貴郎方は自分達の平和と、安樂との爲めに陛下の御心の安らかである事を望み、然も、その爲めには手段を選ばれないのか。

李林　手段を選ばないとは？

張九　何とか他にもやり方はありさうなものだ。そんな女などの力、いや力ぢやない魔力、いや魔力、さうでもない……。いや、とにかく、その……女などを用ひないで、もつと何とか他に方法はあさうなものだ。そんな事をするのは、それは陛下を一層惡い方にはお導きするに過ぎない。

李林　まあ、まあ一途にそんな事を言はれるものではない。貴郎は未だ皇帝の御氣質をよく御存知ないとみえる。

張九　いや、よく知つて居る。私はあの皇帝がまだこればかし（と手で高さを示し）の御子供の時から御傍に居た者

だ。あの方の事なら、誰よりも私が一番よく知つて居る。

李林　おゝ、それはさうかも知れない。貴郎は陛下に就いては我々の知らないいろ／＼の事を知つて居られるだらう。けれども貴郎は又我々が陛下に就いて知つて居る唯一つの事を御存知ない。そしてそれが一番と云つてもいい位大事な事なのです。

張九　それは一體どういふ事？

李林　それは陛下は女なしでは、いや、といふより愛する者なしでは、それも自分の心を傾け盡して愛せる者なしには居られない方だといふ事です。

張九　……。

李林　考へて御覽なさい。始めに王皇后、次が武惠妃と心から愛し得る方が居られた間陛下の御心はおだやかでした。御政事にも御力をおつくしになつた。陛下が此の頃の様になられたのは先にも云つた様に三年以前あの御寵愛の武惠妃をお失ひになつてからの事です。

張九　然し、（短き間をおき）然し君も御氣附きではあつたらうが、あの武惠妃を御寵愛の頃には、よくその爲めに朝の政事を御休みになつた。（短き間）今又君の云はれた様な女が御傍に出たならば、あの頃の弊を繰り返す事になりはしないか。私はそれが案じられてならない。

李林　然し、もしさうなつたとしても、それは今日の狀態よりはいゝでせう。何に政事は我々におまかせ下されば、どうでもなります。あの恐ろしい御氣まぐれさへをさまれば他の事はどうにでもなります。今の樣では我々一同夜も晝も安らかな時はありません。思はず不用意に出した一言の爲めに何時生命を失はなければならないかさへ分らないのですからね。

張九　（嘆息して）困つた事だ。（間）（思ひ返した様に）うむ、そして先刻貴郎が云はれたその女といふのは一體何んな身分の女なのかね。さう下等な者ではありますまいね。

李林　えゝ、大丈夫下等な事はありません。陛下の御側女としては決して恥かしくない身分の者です。

張九　何をして居たのです？　何といふ女です？

李林　（一寸ためらふ樣な風をしたが、直ぐ）若しかすると貴郎も御承知の女かも知れません。（口早やに）それは、あの壽王殿下の御妃(おきさき)の楊環といふ女です。

張九　えゝつ。壽王殿下の御妃の楊環！

李林　さうです。

張九　それを、それを貴郎方は皇帝の御側女にしようといふのか？

李林　さうです。

張九　馬鹿なッ。畜生道だ。そんな事が許されると思ふか。いくら先王の道がすたれ、世が亂れたからと云つても、

此の張九齢が眼の黒い中はそんな事はさせない。

李林　(かすかに微笑するが、直ぐそれを隠して)　おゝ、それはさうだ。貴郎にさう云はれてみれば成る程これは少しよくない事の樣でした。

張九　(のぼせつゝ)　よくないも、いゝもない。

李林　おゝ、然し、もし貴郎が、それをどうかなさらうといふ御心なら一刻も早くなさらないと間にあひませんよ。

張九　間に合はぬ!　何が!

李林　楊環は今日宴席で陛下の御前に出る筈です。

張九　えゝつ、今日、今日、今日其の女が此處に來て居るのか。

李林　來て居ます。もしかすると今頃は、もう御前に出て居るかも知れません。一目でも皇帝がその女を御覽になればもう事は決つてしまひますからね。

張九　おゝ、もうぐづ／＼はして居られない。何故君はもう少し早く此の事を私に云つてはくれなかつた。あゝ、先帝の御靈よ、私をお守り下さい。私は行かう、たとひ身命にかけても此の事だけはお止め申さなければならない。(急ぎ正面に連なる廊下より奥の方に去る)

李林　(獨白)　はゝ、正直で、一途な、可愛いゝぢいさんだ。然し、あれが居ると、どうも何にかにつけ俺のしようとする事の邪魔になる。(短き間)可哀相だが仕方がない。(間)　然し、あんまり云ひすぎて、命をなくす樣な事にならなければいゝが。もしそんな事にでもなれば少し藥かきゝすぎたといふものだ。

(此の時廊下の奥より陳玄禮出で來る。兩人會つて禮する。)

李林　どうなさいました。私はこれから御宴席に行かうと思つて參つたのですが。

陳玄　行きたい方はおいでなさるがいゝだらう。私はもう御免だ。(行かうとする)

李林　(引きとめる樣に)　何をその樣に御腹立ちなのです!　何か御氣にさはつた事でもあつたのですか。

陳玄　氣に喰はぬも、喰ふもあつたものではない。私は、もうこんな汚らはしい御殿に來るのはいやになつた。

李林　しつ。廊下には人が居ないとは限りません。御言葉はお愼みになつた方がいゝ。(聲をひそめて)何か事があつたのですか。

陳玄　あつたもないも……。(間)　まあ、おきゝなさるがいい。陛下には熟柿の樣に醉ひしれてあの壽王殿下の御妃の楊環樣におたはむれになつたのだ。

李林　(驚ける樣して)　ほを。さうして……。

陳玄　わしはどうも始めからよくない。あの女を一目見られた時から陛下の御眼が怪しいと思つて注意はして居た

のだが、どうする事も出來なかつた。(短き間)始は先づ遠くから御盃を下さる、次には歌を御所望になる、次は琵琶で、次が舞、そしてそれが終ると御側に召して……。えゝつ。考へるのも汚らはしい。畜生道だ。(と云ひ流石に云ひすぎたといふ風に默る)

(間。)

陳玄　とにかく、な、陛下があの有様だ。(間)あの御聰明だつた陛下があの有様だ。(間)あんなになつてしまはれた陛下はいゝかも知れないが、側であの恐ろしい變り方を見て居る俺等はたまらない。

李林　御察し申します。

陳玄　(急に感動しつゝ、李林甫の肩に手をかけ)　李林甫君。(間)しつかりして呉れ給へ。此の大唐帝國の爲めに。(短き間)わし等は陛下とともに力をつくしてそれを築いた。そして今、陛下もわし等も年老いた。築かれたものを守り育てゝゆくのは君等の役目だ。(短き間)あゝ、わし等の時代は去つた。君達若き人々の時代が來る。しつかりして呉れ給へ。わしは君に信頼して居る。高力士、牛仙客、あんな手合ひは浮き雲だ。若い人の中で、君だけ、一人君だけが陛下を助けて此の大帝國を守つてゆく事の出來る人だ。(短き間)しつかりやつてくれ！　わしは頼む。

李林　(感動して、思はず陳玄禮の手を握る)

(陳玄禮無言のまゝ右手に去る。)

(間。)

李林　(獨白)　人の誠心……。(間)あゝ、思はず泣かされる所だつた。(長き間)　張九齡に、陳玄禮。建國の遺臣……。あゝ、唐帝國の起つたのは故ない事ではなかつたのだ。(考へ込む。少時く。やがて奥の方にゆかんとする。その時羅布爽奥より來る。玄林甫を見て禮をする)

李林　おゝ、羅布爽か。丁度いゝ所だ。その後の宴席の具合はどうだ。

羅布　えゝつ、その後の？

李林　さうだ。陛下が、あの女にお戲むれになつてからのだ。

羅布　えゝつ、貴郎はそれを……。

李林　それは今きいたのだ。それからどうなつた。後を……。

羅布　壽王殿下はやきもきしながら、幾度となく楊妃に目くばせしたり、そつと手まねきをしたりなさいましたが、あの女は見向きも致しませんでした。

李林　ふゝむ。強たかものだな。

羅布　陛下はもう御心がどこかに飛びぬけた様な御有様で、澤山の寶物をおさづけになり、その上陛下が始終御

頸にかけておゐでになる例の紅水晶の首飾りを御手づから、あの女の首にかけておやりになりました。すると、又あの女は、それをこれを見よがしに壽王殿下の方に見せつけるのでございます。殿下の御顏は、ほんとに傍で見て居ても御氣の毒な位でございました。あの樣子ではあの女は殿下を捨てゝ陛下の御心に從ふ氣かも知れません。

林　知れた事だ。少しでも強い、大きいものにつくのが女心の常だ。柏の下にやどるより、檜の下にやどる方が安心だらう。

羅布　おゝ、するとどういふ事になるのでございませう。

李林　楊環は宮中に入る。そして明日から我々はあの女の言葉一つで、いや眼附一つで生かされもし、殺されもする樣になるのだ。

羅布　えゝつ。

李林　まあ、そんなに驚く事はない。（間）時にあの張九齡老人が何か事を起しはしなかつたか。

羅布　あゝ、あの方は宴會の眞最中にやつて來て、いきなり陛下の御傍に行つて何か申し上げた樣でした。

李林　ふむ。

羅布　すると、いきなり陛下の御顏が曇りました。

李林　ふむ、それで？

羅布　一時御顏は曇りましたが、すぐに陛下は御立腹になりました。そしてあの人は宴席を追ひ出されてしまひました。何でも六ケ月とか謹愼を御命じになつたと云ふ事でございました。

李林　さうか。では命に別條はなかつたのだな。

羅布　（合點ゆかず）

（此の時壽王興奮せる樣にて奥より出る。）

李林　（それを見つけるより早く、羅布爽に）行け！（羅布爽あわてゝ左手に去る。壽王はそれには氣がつかぬ。李林甫急ぎ壽王の方にゆく）殿下！

壽王　おゝ、李林甫。

李林　お察し致します。

壽王　おゝ、お前は知つてゐるのか。

李林　只今、宴席よりの者からきゝました。

壽王　おゝ。（間）李林甫。來なければよかつた。來なければよかつた。來たとしても、あの楊を連れて來なければよかつた。（短き間）あゝ、あの高力士の奴が……。ああ、然し何と云つても俺が馬鹿だつたのだ。俺が馬鹿だつたのだ。（間）然し、誰が誰があの女があんな事にならと思はう。（間）あの女の心に何ものかゞ憑いたのだ。あれは一時の氣まぐれだ。夢だ。少し時がたてば眼がさめよう。それにしても、それにしても、父上も、父上だ。あんな事をなさるとは、あゝ、俺には何が何だか譯が分

らない。
李林　御心を御落著けなさいまし、御心を。ほんとうに貴郎のおつしやる通り、これは一時の通り魔でせう。今に、もとの通りになります。もとの通りに……。
壽王　おゝ、お前もさう思ふか、お前も。さうだらう。さうだらう。(短き間)もし、さうでなかつたら私も默つては居ない。
李林　しつ。御言葉をお愼み下さい。此處をどこだと御思ひになります。
壽王　………。
(此の時奥の方に、多人數の歩く音。直ぐに玄宗と楊貴妃——と今からしてしまふ——を眞先に、高力士、牛仙客その他多くの臣つきそうて出る。李林甫は、壽王をかくまふ樣にしながら傍に立ちて禮する。)
玄宗　(李林甫を見つけて)おゝ、李林甫、何をしてゐたのだ。お前を待つて居たに。
李林　はつ。少し爲ておかなければならない用務がございましたので遲くなつて申し譯がございません。(短き間)只今參らうと思つて居りましたが、今日はもう御やめでございますか。
玄宗　うむ、やめといふ譯ではないが、家の中はまだ少し暑苦しいので、これから池の傍にでも行つて風に吹かれながら飮まうと思ふのだ。どうだ一緒に來ないか。
李林　御供いたします。
玄宗　ふむ、來るか。(短き間)さあ、では行かう。(皆々行かんとす)
(此の時まで壽王は李林甫の後から楊貴妃に目くばせして居たが、楊貴妃は知らぬふりして空うそぶいて居る。で壽王は終にたまらなくなつて、行かんとする楊貴妃の方に飛んでゆく。)
壽王　楊環! お前、どうかしたのか。
楊貴　(輕蔑した樣に彼の顔を見返り)どうもしは致しません。
壽王　(熱狂的に突然楊貴妃の手をつかむ。何か云はうとするが聲が出ぬ)
楊貴　(むつとして、その手をふりほどきながら)何をなさるのです。私は陛下の御供をして居るのでございます。御放し下さい。(彼をふり切り玄宗の方に逃げて行く。壽王それを追はんとす)
玄宗　(苦痛の表情、然し、きつぱりと)誰かつ、早くあれをおさへろ!
(二三の臣走り出て壽王をおさへる。)
玄宗　(壽王に)誰の前だと思ふ。馬鹿者!
壽王何か云はんとする。とそれより早く李林甫の斷乎

たる聲聞ゆ。）

李林　殿下、御ひかへなさい！（自ら壽王の方にゆき、二三の臣の手より彼を自分の方にひきとり、少し右手にさがらせる。そして玄宗に）陛下、直ぐ御後から參ります。どうか一足御先きに。

（玄宗無言のまゝ、うなづき左手にゆく。皆つゞいて入る。）

李林　殿下。氣をお落ち附けにならなければいけません。氣をお落ち附けにならなければ……。

壽王（李林甫にすがりつきながら）おゝ、でも、あの女があんな事を云つた。あの楊が此の私にあんな事を云つた。これでも私は落ち附いて居なければならないのか。これでも……。これでも……。

李林　さうです。（短き間）相手を誰だとお思ひになります。反抗なさるのは自殺なさるのも同じ事です。

壽王　自殺？お前は私が死を恐れて居ると思ふのか。（熱狂的に）おゝ、何故に、何故に今私が死を恐れよう、生を願はう。私はあの女のために生き、あの女のために死ぬ。あの女の傍より他に私には生きて居る所はない。あの女の傍でより私は生きて居る事は出來ない。（短き間）おゝ、私の太陽。私の光り。私の生命。おゝ、おゝ、おゝ。（李林甫に）お前は、私にあの女なしで生きよといふのか？

甫林　お落ち附きなさい。では、どうなさらうとおつしやるのです。

壽王　知れた事だ。もう、かうなれば仕方がない。男二人の中一人が死ぬのだ。

（間。）

李林（急に聲に力をいれて）殿下。それは本當に貴郎の御心から出た御言葉でございますか。

壽王　おゝ、もしさうだつたら密告しようといふのか。（間）もしさうなら。（と懷中に手を入れる）

李林（すばやくその手をおさへて）お急ぎなさいますなッ。

壽王　…………。

李林（四邊に注意して、さて）おやりなさいまし！

壽王　えゝつ。

李林　私も及ばずながら力をお貸し申しませう。

壽王　えゝつ。お前が？

李林　さうです。（短き間）名は父上でせう。が、父らしからぬ事をした人を父としておかなければならないといふ事はありません。おやりなさい。昔から例のなかつた事でもありません。そして、これさへ上手(うま)くゆけば天下は貴郎のものです。何に、太子を廢する位の事は譯はありません。そして私がお側について居て天下を治める。此

の大唐帝國は貴郎と私の自由になる……。

壽王　おゝ。

李林　おやりなさい。私がついてゐます。

壽王　（李林甫の手をとり）むゝ、やるとも、どうせこのまゝでは生き甲斐のない身體だ。やれる所までやつてみよう。

李林　せいてはいけませんよ。事をするには機會といふものがあります。ぢつと待つのです。いゝ時が來たら私が申します。それまでは待つのです。何事も忍んで待つのです。くれ〴〵も早まつてはいけませんぞ。

壽王　分つた。ではお前の云ふまで私は默つて待つてゐる。

李林　おゝ、さうして下さい。さうして下さい。さうすれば大丈夫です。きつと上手(うま)くゆきます。呉れ呉れも急いではいけませんよ。せいては……。

壽王　あゝ、分つた。大丈夫、お前のやれといふ時まで我慢して居る。

（間。）

李林　さあ、では私は庭の方に行かなければなりませんから、今日はこれで失禮します。いづれ又相談したい事があつたら、そつと伺ひます。貴郎も私に何か御用かあつたらおいで下さい。

壽王　あゝ、それでは……。

李林　では。

（壽王右手に去る。）

李林　一つの野心は、直ぐ次の野心を生む。そしてそれが一つより一つと段々大きく強くなつてゆく。そして、とう〳〵此處まで來た。今の今まで自分でさへ思ひもかけなかつた所まで來た。（間）流石に少し恐ろしい樣な氣もする。然しどうせ皆馬鹿ばかりなのだ。用心さへすれば、その爲めに此方の身に危險のせまる樣な事はあるまい。（歩き出す）然し、本當に思ひもかけない事になつたものだ。（間）が又考へてみれば、それが天の命ずる所かも知れない。（短き間）誰がたくんで、こんな機會を作り得よう。（短き間）俺といふ人間がやるのでなくて、運命といふ奴が俺の手を借りてやるとでも云ひたい位だ。（短き間）此處だ。此處で謹まなければいけない。（短き間）あゝ、然し、希望は、希望は海の樣だ。おゝ、海の樣だ。

（左手に入る）

第　二　幕

第　一　場

長安に於ける玄宗皇帝の宮殿の大廣間。唐時代の善と美とを盡せる、極度にぜいたくな宴會の席。

秋の夜。

（幕あきたる時、多くの給侍人急がしさうに食卓上の準備をしてゐる。）

給侍甲　（萬事準備の終れるをみて）さあ、これでいゝと。もう手落ちはないだらうな。（給侍乙に）おい、君そつち側を一通り調べてくれないか。僕は此方側を見るから。

給侍乙　よしきた。

（二人とも食卓を調べつゝ、それに沿ひて左手に入る。他の給侍人達も左手に去る。皆去りたるとき、先の甲、乙、左手より出る）

給侍甲　さあ、これでよしと。（短き間）然し、まあ、何といふぜいたくなもんだらうな。

給侍乙　ほんとにな。俺はもうこれで四十年も此の仕事をして來たが、まだ、こんなぜいたくな仕度は見た事がないな。

給侍甲　四十年所ぢやないぜ。支那始まつて以來、こんな料理は出來た事たあ、あるまいよ。（一つの椅子に腰を下す）

給侍乙　ふん。さうかも知れないな。（甲のそばの椅子に腰をかける）

給侍甲　何しろ、トルコ産のかもしかのざうだとか、ペルミア灣の貝だとか、日本から來た鶯だとか、何だとか彼だとか、一つ何百、何十兩とするものを、ごつたごたにぶち込んでそれを山と積むんだからな。

給侍乙　ふむ。

給侍甲　流石の陶文桂の奴が、料理しながら「何だか罰があたりさうな氣がするつて」云つて居やがつたつけ。

給侍乙　あいつがかい。

給侍甲　うむ。

給侍乙　ふむ。然し、本當にそんな氣がして來るかも知れないな。世間はこの不景氣だといふのに、自分のものではないと云ひながら、そんなものを捨てる様に使つてみればな。

給侍甲　ほんとだよ。實は俺も少しの間だつたが傍で見て居てをしい様な氣がして思はず知らずためいきをついてしまつたんだ。

給侍乙　はゝゝゝ。

給侍甲　はゝゝ。（間）然し、考へてみりあ、今夜の料理の一人前だけで十人の家族が一年は樂に食べてゆかれるんだからな。

給侍乙　うむ。成る程。（急に考へ込む）

給侍甲　（立ち上り）然し、まあ、今夜は特別な事だからな。あの楊貴妃様の御兄様の楊國忠様の御歡迎。李林甫が宰相におなりになつた御祝ひ。その上あの安祿山様が

長い間の契丹征伐からのお歸りだ。陛下としてはこれ位の事は當り前かも知れないて。

給侍乙　ふむ。さう云へばさうだ。（間）然し、な、おい。李林甫樣や、楊國忠樣の事は、まあいゝとしても何故又あの安祿山なんていふ人間をこんなにもてなさなけれあならないんだか、それが俺には分らないがな。

給侍甲　知らないのか、お前。あの安祿山といふ方は、昔つから陛下の無二の御寵臣だつたのだ。

給侍乙　いくら御寵臣だからつてな。何も立派な事でもして來たとか、手柄があつたとかいふならいゝが何も戰に敗けて、おめ〳〵逃げ歸つて來た者を、そんなにていねいにもてなさなくたつてよささうなものぢあないか。（短き間。聲をおとして）それに、何だか聞く所によると、あの安祿山といふ奴は何か大變なたくらみをして居るんだといふ事ぢやないか。

給侍甲　しつ。そんな事が他人にきこえるとよくないぜ。

給侍乙　何あに、かまふものか。こんな事たあ誰だつて云つてる事だ。あの男が何時かの御宴會の後で酒に醉ひつぶれて眠つて居る所を見たら、頭が龍の頸に化けて居たといふ話たつて知らない奴はない位だ。

給侍甲　えゝ、そんな事まで……。

給侍乙　何んだ、お前は又、今までお前だけがそれを知つてるとでも思つてゐたのか。おい〳〵人間だぜ。人間だぜ、誰だつて同じ樣に耳はもつてるんだ。頭といふ奴ももつて居るんだ。

給侍甲　………。

給侍乙　然し、なあ、おい。くどい樣だが俺には分らないな。どうして又陛下はそんな奴をそのまゝにしてお置きになるんだらう。勿論こんな噂は陛下の御耳にだつて入つて居るんだらう。

給侍甲　入つてる所ぢやない。實は今度あの宰相の張九齡樣が御隱退なさつたのも、その爲めだといふ事だ。

給侍乙　どういふ事があつたんだ？

給侍甲　あの安祿山が戰に敗けて歸つて來るといきなり、張九齡樣はあの男を斬つた方がいゝと陛下に申し上げられたのださうだ。勿論あの方には、あの男の心は前から分つておゐでになつたんだらうからな。丁度いゝ機會だとお思ひになつたんだらう。

給侍乙　うむ。

給侍甲　所が陛下は何と云つても、それをおきゝいれにはならないのだ。然し、張九齡樣も、一度かうと申し出された事はなか〳〵後にお引きになる方ではない。重ねて、その事を申し出られたさうだ。何でもその時にはあの男の逆心のある事を露骨に陛下の前に述べられたさうだ。

給侍乙　ふむ。さうしたら……。
給侍甲　さうしたら陛下はお驚きになる代りにお怒りになつたさうだ。そしてその場でいきなり張九齡樣に退職、隱退をお命じになつたさうだ。
給侍乙　ふむ。では陛下はあの安祿山といふ男をそれ程信用しておゐでなさるのかな。
給侍甲　さうなんだらうな。
給侍乙　分らないな、俺には分らないな。あんな男を信用なさるなんて……。あの聰明な陛下が……。
給侍甲　いくら聰明な人でも、考へ違ひといふ事はあるだらう。それに側から見て居るとあんな事が、と思ふ樣な事が、その局にあたつてゐる當人には分らない事はよくあるもんだ。（短き間）その上、こんな事を云ふのは恐れ多いが、あの楊貴妃樣がおいでになつてからの陛下は、もう昔の陛下ではない。目がくらんでおゐでになる。總ての事に對しての判斷は陛下御自身の御心から出るのではなくて、あの女の口一つできまつてるのだ。あのぬけめのない安祿山が、祕にあの女に手を廻して何かしなかつたと誰が云へよう。然もあの男はあの楊國忠樣とは浮浪時代の友達だといふのだもの。
給侍乙　あーあ、恐ろしい事だ。張九齡樣はおやめられになる。陳玄禮樣は自ら御引きになる。そして後には賭博者のならず者や、反逆人が此の宮中に入つて來て、折角固りかけた事を目茶苦茶にかきまはす、終にはこの唐の國そのものまでも、づた〱に引きさいてしまふといふのか。
給侍甲　ふむ。然し、まあ一概にさう云つたものでもあるまいぜ。
給侍乙　何故たい。
給侍甲　張九齡樣はおゐでにならなくつても、まだ李林甫樣がおゐでだ。あの方がひかへておゐでになる間はいくら楊國忠だつて、安祿山だつて勝手な事は出來まいて。
給侍乙　うむ。さうだ、李林甫樣がおゐでだな。あの方がおゐでになる中は大丈夫だ。（短き間）然しなあ、おい、これからは此處は大變だな。
給侍甲　本當だ。思つてもぞつとする位だ。
給侍乙　ほんとだ。用心しないと此方まであぶないぞ。
給侍甲　はゝゝ。まさか。俺達がその渦の中にまき込まれる事はあるまい。
（給侍丙、左手より出る。）
給侍丙　おい〱何をしてるんだ。この忙がしいのに。え、おい。
給侍甲　でも、もう此方のする準備は濟んだぢやないか。
給侍丙　準備は濟んだつて、お客がおゐでになるぢやない

か。
給仕乙　まだそんな時間ぢやあるまい。
給仕丙　でも、もう六時半だ。
給仕乙　えゝ、六時半？
給仕丙　うむ、七時には宴會が始まるのだからな。
給仕乙　もう六時半か。話をしてゐて、つい時のたつのを知らずに居たんだ。惡く思はないでくれ。（甲に）おい、行かう。
（三人左手に去る。）
（入りちがひに右手から高力士、二三人の供を連れて入る。）
高力　（供の一人に）早く給仕長をよべ。
供の一人　はい。（急ぎ左手に去る）
高力　（食卓を見て）ふむ。大分立派に出來た。これなら御きげんをそこなふやうなことはあるまい。
（此の時、先の供の一人、給仕長を伴ひ急ぎ出る。）
高力　（給仕長に）おゝ、御苦勞だつた。なか〳〵立派に出來たな。
給仕長　（恭々しく禮をして）恐れ入ります。
高力　陛下はお急ぎだが、仕度は、もう萬事いゝかな。
給仕長　はい、もう何時でも。
高力　さうか、それでは、直ぐ御出御になるから、その積りにして……。
給仕長　かしこまりました。
（高力士及びその供右手に入る。）
給仕長　（左手に向ひ）おい、はじまるぞ、もつて來い。
（右手より、承知を告ぐる返事あり。）
（給仕長は卓の上をいぢり居る。少時くして左手より數人の給仕手に手に料理を持ち來り、それを卓上に竝べる。）
（やがて右手に、靜かな音樂の音。玄宗皇帝と楊貴妃竝び、後に李林甫、楊國忠、安祿山、高力士、その他の宮臣を從へて入り來る。）
（玄宗と楊貴妃竝びて主席に坐す。）
玄宗　楊國忠、お前は此處に（と自分の隣りの席を指し）來るがいゝ。安祿山は其處（と楊貴妃の隣りの席を指し）に坐るがいゝ。今日はお前達二人が主賓だからな。（云はれて二人はめい〳〵その席の所にゆく）さあ、それでは皆席についてくれ。堅苦しい禮式はぬきにして、何時もの樣に遠慮なく、愉快にやらう。さあ、坐れ。
（此處で安祿山の隣りに李林甫、楊國忠の隣りに高力士以下一同着席す。）
（給仕共酒をつぎ廻る。皆飮み且つ食ふ。）
玄宗　高力士。李白の所へは使ひを出したらうな。

高力　はい。早速呼びにやりました。
玄宗　さうか。それから李龜年も來て居るだらうな。
高力　はい。次の間にひかへさせておきました。
玄宗　さうか。(短き間)李白が來たら直ぐ此處へ通す樣に云つておくがいゝ。
高力　はい、さう取りはからつておきました。
玄宗　(滿足氣に)むゝ、さうか。
(酒宴つゞく、皆小聲で會話して居る。その中段々皆醉がまはつて來て話聲が高くなる。笑ひ聲などもまざつて來る。)
(少時くして、李白酒氣を帶んで右手より登場。)
高力　(目早く目附けて)陛下、李白がまゐりました。
玄宗　さうか。(顧みて)李白か。おそかつたな。
李白　(恭しく禮して)はい、陛下、これでも陛下からの御使ひに接しまするると、直ぐその場から飛んで參つたのでございます。それに、その樣な御小言を頂戴いたしませうとは思ひもかけない事でございます。
玄宗　ふゝ……。まあ、いゝ。其の邊にかけろ。(彼のために高力士の隣りに席が出來る)實は今日はお前を待つてゐたのだ。
李白　(楊貴妃を始め一同に禮をして席につきつゝ)それは又何か御用で……。
玄宗　わしの今夜のこの宴會を飾るためにお前の詩がほしいのだ。歌ひ手は李龜年だ。あれならお前も不足はあるまい。何でもいゝから一つ作つてくれ。
李白　何の御用かと思ひましたら、さういふ事で……。それなら私にも出來ませう。それではどうか紙と筆を。
(高力士目くばせする。給侍の一人がすぐ紙と筆とをもつて來る。李白それを受けとり、考へもせずに、さらさらと詩を書く。そしてそれを玄宗に渡す。)
玄宗　(默讀して滿足氣に)ふむ。(と云つて、それを楊貴妃に渡し)高力士、李龜年をよべ。
高力　はい。(目くばせする。給侍の一人右手に去る)
玄宗　(楊貴妃に)どうだ、流石に李白だな。
楊貴　(玄宗の顏を見てにつこり笑ふ)
玄宗　今、李龜年にそれを歌はせようと思ふが、どうだ、お前一つ琵琶を引いてやらないか。新來の人達のもてなしでもある。わしもきゝたい。
楊貴　陛下の御好みなら……。
玄宗　(高力士に)おい、急いで貴妃の琵琶をとりよせろ。それから李龜年をよべ。
高力　はい。(他の給侍に小聲で云ひつける。給侍承知し右手に去る)
玄宗　祿山。久しぶりでお前の笛もきゝたいな。

安祿　いや、もう戰に敗けて追ひまくられて居る間に、笛の吹き樣などすつかり忘れてしまひました。

玄宗　はゝゝ。

（此の時李龜年美裝して現はれる。）

玄宗　おゝ、李龜年か。久しく逢はなかつたな。病氣はどうだ。

李龜　（玄宗の前に膝まづき）陛下の御情けで、危い命を取りとめました。

玄宗　さうか。あそこの溫泉は身體にはいゝから、大丈夫だとは思つてはゐたが、思つたより早く快くなつてよかつたな。聲も、幸ひもとの通りになつたさうだな。

李龜　はい、御かげ樣で、どうにか……。

（李龜年の現はれた時から楊貴妃は感歎の情をもつて彼を見て居たが、玄宗との會話をきいてゐる中或る嫉妬の表情が彼女の顏にうかぶ。然し、彼女の顏の感歎の色は增してゆく。）

玄宗　（楊貴妃の方をふりむき）あゝ、楊環。これがかねがね話して居た李龜年だ。わしのもつ樂手中の寶だ。可愛がつてやつてくれ。

楊貴　おゝ、此の人か。（李龜年に）名前はきいてゐました。是非お前の歌がきゝたく思つて居ました。

李龜　（楊貴妃の前に膝まづき）身に餘る光榮でございます。どうぞ、よろしく。

玄宗　（李龜年に盃をさし）さあ、一つ飮め、そして歌へ。此の酒は決して喉にはさはらない。

玄龜　（盃をうけとり）有難うございます。（飮む）

（此の時先の給侍、琵琶をもち入り來り、それを高力士に渡す。）

玄宗　さあ、琵琶も來た。では早速きかうか。李龜年、今夜は特に楊貴妃がお前の伴奏者だ。

李龜　えゝ、楊貴妃樣が……。

玄宗　さうだ。

楊貴　下手いからお前困る所もあるだらうけれど……。

李龜　もつたいない事でございます。

楊貴　（席を立ち琵琶をとらんとして窓外を見る。月今しも彼方の森の上に出る）おゝ、陛下、月が出る所でございます。

玄宗　月が。（立ちて）もう出たか。おゝ、美しい滿月だ。高力士、燈火を消せ。月の光の中で聽くのは又格別だらう。

高力　承知いたしました。（給侍共に云ひつける）

（給侍共、食卓の上から燈火を持ち去る。後は窓から入る月の光のみで薄暗い。）

玄宗　うむ。これはいゝ。さあ、始めないか。（氣がついて）

ああ、これはいかん。これでは李白の詩がよめん。はゝは。やつぱり燈火をつけるか。

楊貴　では陛下、折角暗くしたのでございますから、このまゝ何か一つやりませう。それから後であの詩をやつてもよろしうございませう。

玄宗　さうだなあ。では、さうして、先づ始めは李龜年何でもお前のいゝものをやるがいゝ。

李龜　私は何でもよろしうございます。貴妃様のおよろしいものを。

楊貴　私も何でもいゝけれど。

玄宗　めんどくさい。ではわしがきめてやらう。霓裳羽衣の曲をやれ。

李龜　承知いたしました。（楊貴妃に）では、どうぞ。

（楊貴妃、琵琶の調子を合せ、やがてひき出す。李龜年それにつれて歌ふ。）

開元天子萬事足　惟惜當時光景促
三郷驛上望仙山　歸作霓裳羽衣曲
仙心從此在瑤池　三清八景相追隨
天上忽乘白雲去　世間空有秋風詞

（此の第七句『天上忽……云々』の句の中頃を歌ひ居る時、右手より突然一人の男飛び出し、玄宗の方に走り寄り切りつける。玄宗は危くも身をかはす。）

玄宗　狼藉者！

（安祿山、素早くその男に飛びつき、取つておさへる。）

安祿　燈火を。燈火を。

（滿座總立ちとなる。）

（給仕二三人急ぎ燈火を持つて來る。）

（壽王が短劍をもつた腕を逆にとられて安祿山の膝下に組みふせられて居る。）

（一同驚く。中でも李林甫は愕然とする。）

玄宗　おゝ、お前……。（少時し呆然と立つて居たが、がつくりと椅子に倒れる樣に腰を下す）

（安祿山は壽王をみるとていねいに、然し用捨なく、劍をとり、さて彼を抱きおこす。壽王は氣違ひの樣になつて玄宗の方に飛びかゝらんとするが、人々が用心して居て駄目とみると、今度はいきなり楊貴妃の方に飛んでゆく。楊貴妃は悲鳴をあげて手にもてる琵琶をなげつけ逃げる。その時又安祿山は素早く走り行き壽王をしつかりと抱きすくめる。）

玄宗　（立ち上り息切れ切れに）おゝ、その者を、牢に、牢に……。（又がつくりと椅子に倒れる）

第二場

長安に於ける玄宗の宮殿内、李林甫の室。

（前場の翌朝極く早き頃。）

（李林甫一人。稍青ざめた、神經的な顔して室内を彼方、此方と歩いて居る。）

（少時くして蕭晃静かに入り來る。これも神經的な顔色をして居る。）

李林　（蕭晃を見ると、珍らしくせき込んだ調子で）どうだつた。

蕭晃　（「駄目だ」といふ風に首をふつて）何んな事があつても許す御つもりらしい。

李林　さうか。（長き間）（斷乎として）ではやるより仕方がない。（間）あいつは來てゐるか。

蕭晃　連れて參りました。

李林　呼んでくれ。

蕭晃　はい。（去る）

李林　（獨白）氣の毒だ。俺もこんな殺生はしたくない。然し、俺自身の安全のためには仕方がない。（間）俺の方から何も云はない時に、飛び出した罰だと思つてくれ。（間）お前さんがもう少し辛捧してさへ居てくれたら、お前さんにもよかつたらうし此方も仕事が樂だつたのにた。かうなつては是非もないことだ。俺の方でもあきらめる。お前さんもあきらめてくれ。

（蕭晃、一人の武士を連れて出る。）

李林　おゝ、我強足か。御苦勞だが、又お前を煩はさなければならない事が出來た。

（我強足は「承知しました」といふ樣に頭をさげる。）

李林　然も、今度は少し大物だぞ。

（我強足「どんなものでも」といふ表情をする。）

李林　うむ。お前にならこそ、こんな事は朝めし前の事だらうが、一つどちらない樣にしつかりやつてくれ。（間）（聲をひそめ）實はな、あの西の森の牢屋に入つて居る壽王な。（我うなづく）あれを殺つてしまひたいのだ。（我「承知した」といふ風にうなづく）禮はいゝだけする。直ぐにやつてくれ。（我うなづく）然し、あの男の血を流しちやあ具合が惡いのだ。（懷から毒藥を出し）まどろつこしいだらうが、これで一つやつてくれ。その代り牢屋の番人はたゝき斬つてもいゝ。いや、たゝき斬つてしまつてくれなければ困る。然しな、おい、早まつてはいけないぞ。かうするのだ。先づあそこに行つて入口の番人は仕方がないから殺つてしまへ。それから中に入ると、今から行けば丁度朝めしの時になる。そこであの男の所にあの朝めしを運ぶ奴を捕へるのだ。そして、これで（と卓上から金ぶくろをとり）釣つて、その食ひ物の中に此毒を入れる。それからその男について行つて、壽王がそれを食べるかどうかを確かめるんだ。そして若し食べたら、

それでいゝ。その男と一緒に引きさがれ。然し、そこで忘れてはいけないのは、その男を殺つてしまふ事だぞ。いゝか。それから、この金ぶくろを取り返してくる事だぞ。

戎强　(れつちりとした口を開いて)　もし、それを食べなかつたら。それより第一その男が毒を入れさせなかつたら……。

李林　ふむ。(考へて、思ひ切つた樣に)やつてしまへ。その時はやつてしまへ。片つ端しから打き斬れ。とにかくどんな事があつても今朝中に、あの男は殺つてしまはなければならないのだ。

(戎强足の顏に殺伐な滿足の色浮ぶ。そして例の「承知した」といふ表情をする。)

李林　では行つてくれ。しつかりやるのだぞ。

(戎强足うなづきて去る。)

(間。)

李林　おゝ。(身ぶるひする)血に饑ゑた惡鬼。あいつの顏を見て居ると此方でさへ恐ろしくなる。

蕭晃　然し、實にいゝ道具が手に入つたものですね。

李林　ふゝ。(考へ込む)

(間。)

蕭晃　(突然)　どうです。あの新參のばくちうちも一その事、今の中にやつてしまつたら。

李林　楊國忠の事か。

蕭晃　えゝ。あれでも、あの女の後楯があるだけ、捨てゝおくとめんどくさいものになりかねませんよ。

李林　何あに、あんな男は何でもないさ。どつちにした所でたかゞ知れて居る。(間)然し、それより少し手ごはい奴が外に居る。

蕭晃　とおつしやるのは、あの安祿山の事ですか。

李林　さうだ。(短き間)あいつの人にとり入る手腕には驚く。まるで魔法使か何かの樣だ。昨日まで殺しかねない程怨んで居た奴を一晩の中に味方にしてしまふ位の事はあいつにとつては譯ない事の樣にさへ見える。何處の馬の骨だか分らない身で始めて此の宮廷に入つて來てから、ほんの一年とはたゝない間にすつかり陛下にとり入つて、いや陛下だけぢやあない。一時はあの六ケ敷しやの張九齡や、頑固やの陳玄禮までまるめこんで直ぐに平盧范陽の節度使になる。今度は又今度で散々戰に敗けて歸りながら、此處に著くと何處にどう手を廻したか、三日の間に、あの楊貴妃に取り入つて、すつかり陛下をまるめてしまふ。實にあの手際だけには驚く。

蕭晃　然し、何と云つた所で、あんな奴に……。

李林　(氣をとりなほして)　うむ、そりあ驚くと云つたつ

て程度問題だ。何も今の今、俺達があいつの爲めにどうされる心配があるなぞといふ譯ぢやあない。又そんな事があつたら大變だが。（短き間）然しとにかくぼんやりして居ると、どんな事をされるか分らないと思ふんだ。

蕭晃　「どんな事」とは？

李林　お前、陛下が昨日例の氣まぐれで、あいつに何かやらうと云はれた時、あいつが何を望んだか知つてゐるか。

蕭晃　いや、私は昨日は御前に出ませんでしたから……。

李林　あいつは蟲よくも河東の節度使を望んだのだ。河東は平盧范陽とは土地つゞきだ。あいつが何をたくらんで居るかは此の事だけでも明らかすぎる。（間）それは奴の胸にはもとからあつたことなのだ。そして俺の力を知つて居る。然し、あいつは自分の力を知つて居る。そして俺の力を知つて居る。今長安で事を謀れば俺にたゝきつぶされるのを知つて居る。そこで少時く地方に下つて私かに實力を養つて、兵馬にうつたへて事をなさうといふのだ。なかなか考へて居る。（間）然も、なほ手におへないのは、俺が奴のそのたくみに氣が附いて居るといふ事を奴が知つてる事だ。それで奴出來るだけ例の手腕をふるつて誰が陛下に奴のそのたくらみを告げても陛下がそれを信じる事の出來ない様に用心して居やがる。（間）ほんの一分間考へた計畫で、生かすも殺すも、勝手になる人間ばかりの此の宮廷で、少し氣がかりになるのは奴だけだ。

蕭晃　では、一その事奴を殺つてしまつたら……。

李林　それは俺も考へてはみた。然しあいつめなかなかの腕きゝだからな。それに又よほど上手くやらないと、あいつの手下が默つて居ないだらう。とにかくあいつには兵隊といふ武器があるのだから。（間）まあ、まあ此方の根柢が絶對に鞏固になつて、軍隊が自由になるまでは、仕方がないそつとしておいてやるのだな。（短き間）何あにそれまでに彼奴にどれだけの事が出來るものか。

（間。）

（戎強足出る。）

李林　（戎を見て急ぎ）おゝ、どうした。

戎強　（多少の快活さをもつて）えゝ、やつて參りました。

李林　上手く行つたか。

戎強　番人をやつつけて中に入ると丁度給侍がめしをもつて來ました。金を見せましたが云ふ事をきゝません。おどかしても駄目です。それで一思ひにそいつを殺つて、いきなりあの人の室の中に行つて殺つて來ました。

李林　えゝ。あの人をも劍でか？

戎強　えゝ。

李林　（怒らんとしたが、自ら制して）うむ、まあ、まあどつちでも同じ様なものだ。（間）誰にも見附かりはしな

かつたらうな。
戎强　見附かつた奴を三人ばかり打き斬つて來ました。
李林　さうか。（間）御苦勞だつた。さあ。（卓の上からもう一つの錢の入つた袋をとり戎强足に渡す）
戎强　（袋をうけとり禮して去る）
（間。）
蕭晃　大丈夫でせうか。
李林　ふむ。少し用心しないといけない。（間）然し、俺は大抵は大丈夫だと思ふ。
蕭晃　でも少し露骨すぎますからね。いくら陛下だつて、これでは默つて捨てゝはおかれないでせう。
李林　然しな、陛下は此のけんぎを先づ第一に楊貴妃にかけるだらう。何故と云つて總ての事情がさうなつてゐるものな。
蕭晃　えゝ、そりやあさうでせうね。
李林　してみれば陛下には此犯人を探す事は出來ないだらう。
蕭晃　さうでせうか。
李林　俺の眼がくらんでさへ居なければさうだ。（間）今、陛下の前にはあの女より無い。高力士の云ひ草ではないが陛下は「あの女の人形」だ。（短き間）人形はその持主に手をあげようとはしまい。

第　三　場

（同じく玄宗の宮殿內、奥庭、池のほとりの高樓。）
（李龜年の歌にて幕あく。玄宗と楊貴妃二人きり彼の歌をきゝをり。歌すむ。）
玄宗　おゝ、御苦勞だつた。さあ。（と盃をさす）
李龜　有難うございます。
玄宗　（楊貴妃に）おい、酌をしてやらないか。
楊貴　（稍めいていの氣持に輕く）えゝ、李龜年への御盃なら仰せまでもなく……。
（玄宗、急に暗い顏する。楊貴妃はたちまちそれを認めて一寸はつとする。）
楊貴　（わざとふざけた樣な風に）さあ、李龜年こちらへおいで。お前は本當に果報者だよ。大唐陛下の御寵愛淺からぬ此の私に假そめとは云ひながら、一度でもお酒の酌をしてもらふなんて……。ねえ。お前。有難くて口かまがりはしないかえ。
（玄宗の顏益々暗くなる。陰鬱、不快な間。）
玄宗　李龜年、俺がついでやらう。
楊貴　（突然眞面目になりたる如く、そのくせ笑談らしき所もある樣な、あいまいな調子で）いえ、いえ、いけませ

ん。李龜年、お前は私の側に居なくてはね。お前は私の側に居てくれるだらう。そして私にお酌をさせてくれるだらう。ね、李龜年、私の可愛いゝ李龜年だもの、ね、そしてお前の可愛いゝ楊環たものね。

李龜（云ふ言葉なくたゞ〳〵して居る）

玄宗（突然）おい、よせ、よせ。

楊貴（とぼけて）えゝ、何を、何を……。

玄宗（顏にヒステリカルに蒼くなる。暗き、悲痛な表情。）

楊貴（突然態度をかへ、少しあざける樣に）おや、おや、貴郎は怒つてゐらつしやるの？　いえ、本當にやきもちをやいてゐらつしやるの？　大唐帝國の皇帝が、此の宮廷づきの若い歌唄ひに。ほんの子供の歌唄ひに……。（間）陛下、あんまり御見上げ申せた事ではございませんね。貴郎がそんな風でゐて下されば、私は樂で安心しては居られるといふものですけれど。

玄宗（稍狂せる如き調子にて）出てゆけ。おい、誰か、誰か！

楊貴　いくらおよびになつたつて、誰も參る譯はございません。先程陛下御自身で遠くおさげになつたではございませんか。

玄宗　……………。

楊貴　それにもし私を此宮殿から出さう爲めの御用なら、誰を御呼び下さる必要もございません。私も人間でございます。手かせ、足かせされて運ばれなくても、自分の足で出て參ります。私が生きて居られる所は何も此處ばかりではございません。

玄宗（急に變な落付いた態度になり）おゝ、さうかも知れない。（間）（靜に）然し、お前は、俺が、生きたお前を此處から出すと思ふか……。

楊貴　えゝ。（と思はず驚くが、直ぐ嘲笑の態にかへりて）ほゝほ。これは又思ひがけない事をおきゝするものでございますね。では貴郎は私を殺さうとおつしやるのでございますか。

玄宗　さうだ。（例の刀をとり）今直ぐ、此處で、俺が自ら斬つてやらうと思ふのだ。（刀をとる）

（李龜年はうろ〳〵して居る。）

楊貴（流石に一瞬變な壓迫をうけて不安になるが少時くして勇氣をとりなほした樣に今までの樣子にかへり）ほゝゝ、面白うございますこと。貴郎に私が斬られるなら斬つて御覽なさいまし。ほゝゝ。そんな事は出來ないにきまつて居ます。

玄宗（刀をとり楊貴妃の方にゆく。刀をぬく。その時楊貴妃の顏を見る。思はずぬいた刀を下におろし考へ込む）

楊貴（いら〳〵しながら、然し勝ちほこつて）ほゝゝ。

そら御覽遊ばせ。貴郎には斬れない。貴郎には斬れない。腰ぬけの陛下、貴郎には私を斬る事は出來ない。(間)(未だ玄宗が斬らうともしないのを見て、思ひ切つて) あゝ、私はもう貴郎の御側に居るのがいやになりました。貴郎の様な老いぼれの、意氣地なしの側に居るのはいやになりました。失禮します。左様なら……。(行きかける)

玄宗　(決意したらしく) 待て！ (短き間) やはりお前の命は俺がもらはう。(彼女を斬らんとする。その瞬間彼女は實に巧に彼の膝に抱きつく)

楊貴　陛下！ わ、わたくしはやつぱり死にたくありません。陛下を殘して一人死にたくありません。私は嘘を、嘘をついて居たのです。心にもない嘘を云つてゐたのです。許して下さい。許して下さい。(玄宗の足元に泣き伏す)

玄宗　おゝ。(ふり上げた刀を又力なくおろす)

楊貴　(顏を上げて) 白狀致します。陛下。私は自分があればかりの事で陛下にあんな疑ひをお受けしなければならない程信用のない者かと思つた時、此の世に生きてゐる甲斐はない氣がしたのでございます。それで、それで私は心にもない暴言をはいて、陛下の御手にかゝつて死なうと思つたのでございます。(泣く) おゝ、所が、所がいざといふ時私の決心はにぶりました。それも、それも此の世が戀しくなつたとか、自分の命がをしくなつたとかいふのではございません。たゞ、たゞ陛下が、陛下が……。陛下のある此の世を思へば、陛下の御側に居られる此の身を思へば……。私は、私は思ひ切つて死ぬ事は出來なくなつたのでございます。こんな命でも今すてるのがをしくなつたのでございます。(玄宗の足にすがり) 許して下さい。許して下さい。(突然玄宗のもてる刀をとり) あんな事をしたおわびには、おゝ、私はこの通り(と髮毛の先を切り) おわび申します。もう、今迄の様な榮耀榮華な身分になり、夜毎に陛下の御情にあづからうなどとは夢々望みは致しません。おゝ、たゞ陛下が此の哀れな女を少しでも可哀相だとお思し召しになつたなら、どうぞ、今日までの厚い御情の萬分の一をお割きになつて、たとひ陛下の御室の掃除をする役になりと御命じ下され、せめて日に一度づゝでも陛下の御顏ををがまして下さいまし。お願ひでございます。陛下の御側をはなれて私は一日たりとも生きては居られない女でございます。(泣きくづれる)

(長き、長き間。)

玄宗　(悲壯、悲痛なる聲で) 楊貴妃！

楊貴　(玄宗を見上げて) 陛下！

玄宗　生きよう。(涙ぐみつゝ) 俺達は生きよう。

楊貴　(玄宗にすがりつく)　おゝ、陛下!　貴郎は、貴郎は私を許して下さる。許して……。

玄宗　(狂せる様に楊貴妃を抱きしめながら。獨白の様に)　何といふ戀だ!　然し、俺は生きてゆかう。お前を抱いて。お前を抱いて。(かすかに)　然し、一人で。(思ひ返した様に)　おゝ、然し俺は生きてゆく。俺は生きてゆく。(又更に彼女を固く抱き、彼女に)楊貴妃!　(間)楊貴妃!　(間)　おゝ、お前の、お前の居る世は美しい。俺は死ねない。おゝ、俺は死ねない。

(楊貴妃玄宗の顔を見る。玄宗楊貴妃の脣に強く、強く接吻する。)

(此の時一人の侍從出る。)

侍從　(恐る恐る)　陛下。

玄宗　(楊貴妃をはなし侍從の方を見る)

侍從　御云ひつけにそむきまして恐縮でございますが、一大事が出來致しましたので……。

玄宗　何に!　一大事が出來た?　何た、どんな……。

侍從　何と申してよいか申上げかねる程の事で、一同恐懼して居る次第でございますが……。

玄宗　どうしたのだ。

侍從　はい、あの壽王殿下が……。

玄宗　何に、壽王がどうかしたといふのか。

侍從　………。

玄宗　何をぐづぐづして居るのだ。出來てしまつた事は仕方がない。(短き間)　あれが逃げでもしたのか?

侍從　いえ、さういふ事なれば、一同もこれ程困却も致さず、又どうとか執る方法もございませうが……。(突然玄宗の前に膝まづき)　陛下、我々一同の不注意の罪をお許し下さい。壽王殿下は今朝何者かの爲に悲慘な最期をおとげになりました。

玄宗　えゝつ、えゝつ、壽王が、壽王が殺された。あの壽王が……。

楊貴　(流石に驚愕の色を爲す)

玄宗　そして、そして犯人は分らないのか。どんな風にして、どんな風にしてやつた。

侍從　殿下におつきそひして居りました從者は皆斬られて居ります。犯人を知る手がかりとなりますものは一つとしてございません。(短き間)　萬事私共の手落ちでございます。どうぞ御許し下さいまし。

玄宗　立て!　お前達は許すも許さないもない。立て!　案内しろ。行つてみよう。(楊貴妃に)　直ぐ歸つてくる。お前は此處に待つて居るがいゝ。

楊貴　(素直に)　はい。

(玄宗、侍從に從つて去る。)

（間。）

楊貴　（李龜年の方に進みつゝ）李龜年、お前何をそんなにこはがつて居るの！　意氣地なしだね。（間）でも、私、さう下手でもないだらう！　あれならお前達の仲間に入つて一役もてやしない？　えゝ、李龜年。

李龜　（驚愕しながら）貴妃樣、貴女、あれはまあ……。

楊貴　おや。ではお前は私のあの芝居が分らなかつたのかい。おほゝゝゝ。笑談ぢやないよ本職のくせしてさ。眼のない人だね。

李龜　でも、何故又あんなあぶない……。

楊貴　だつて、もうあの場合あゝするより仕方がなかつたのだよ。うつかり口をすべらしてしまつたんだものね。さうでなくてさへお前との事はもう前から感付かれかゝつて居たんだもの……。（短き間）けれども反つてよかつたよ。一寸骨だつたけれど、もうこれで當分は安心だからね。

李龜　貴妃樣、貴妃樣。私はこはくなりました。私は……。

楊貴　何を意氣地のない事をお云ひでないよ。それこそ大唐皇帝の圍ひ者と逢引きする男ぢやないか。今更これ位の事に驚いてどうなるものかね。

李龜　でも、でも貴妃樣。私は……。

楊貴　生命がをしいといふのかえ。安心おし。私の生きてる間は、お前を殺させはしないから。その代り覺えてゐておくれ。私は私を捨てたお前を一日だつて生かしておかないからね。

李龜　おゝ。

楊貴　（情にもえつゝ）李龜年！　私が、此の私がどんなにお前を思つて居るか、それはお前だつて分るだらう。ね、分るだらう。

李龜　分つて居ります。貴妃樣、そして、私はもつたいなく思つて居ります。

楊貴　もつたいないなくなんか思つてくれなくつてもいゝ。李龜年。お前が百遍もつたいないと思ふ代りに一度でいゝ、一度でいゝから、本當に此の私を可愛いゝと思つておくれ。私はお前が可愛いゝのだよ。死ぬ程お前が戀しいのだよ。私を抱いておくれ、私を抱いておくれ。お前の身體の中に、私の身體がとけ込んでしまふ程私を、私をしつかり抱いてゐておくれ。（李龜年の腕に身を投げかける）

李龜　（貴妃を抱きつゝ）貴妃樣、貴妃樣。

楊貴　李龜年。李龜年。

（二人抱き合ひ、烈しく接吻する。）

（これより以前、安祿山來り、少時くその場の樣を見てありしが、此の時二人の方に近づく。）

安祿　いゝ所を拜見させて頂いたものですね。

（楊貴妃、李龜年驚き離れる。）

楊貴　（安祿山をみて、流石に愕然として）お前は、まあ、一體、お前は……。（亂れて）無禮者！

安祿　無禮者？　はゝゝ。何でもよろしい。けれども今迄とは立場が違ひますよ。成る程一分前まで貴女は私の主人だつたらう。私の生命は貴女の手の中にあつたらう。けれども今はさうぢやありませんせ。しつかりして下さい。少し考へて見て下さい。貴女と、それそこに居る貴女の可愛いゝ男とを、生かすも、殺すも、私の自由なのだ。

楊貴　大きな口をおきゝでない。陛下が私の云ふ事より、お前の云ふ事の方をお信じになるなんて事があるものか。

安祿　ふむ。貴女がさう信じるなら、さう信じて居るがいい。私は反對に思つて居る。（短き間）ことにいざとなれば證人は居るんだ。

楊貴　えゝつ。證人が……。それは、それは誰だ、誰だ。

安祿　自信があるなら、そんな聲を出さなくたつていゝでせう。（短き間）その證人といふのは今そこまで私と一所に來た高力士です。

楊貴　おゝ。

安祿　あの氣の小さい男は貴女方の醜態を見かねて逃げ出してしまつたのです。

楊貴　おゝ、あの人は、あの人はその事を陛下に云ふ樣な事はあるまいか。

（李龜年は途方にくれ、おろ〳〵して居る。）

安祿　あの男にはそんな事を云ふ事は出來ないでせう。いや、あの男は自分の爲めにもそんな事を云ひはしないでせう。けれども、此の事を默つては居られない男が外に居ますよ。（行きかける）

楊貴　（安祿山の著物をおさへ）おゝ、一寸待つて。

安祿　（立ち止りて）何んですか。

楊貴　では、ではお前はどうしても、どうしても此の事を陛下に云はうといふのか！

安祿　勿論です。

楊貴　今直ぐに？

安祿　直ぐに。（短き間）私が何を云つたつて貴女は平氣な筈ぢやありませんか。（行きかける）

（楊貴妃決然として、そこにおちて居た玄宗の刀をもつて安祿山に斬りつける。安祿山すばやく身をかはし、彼女をおさへ刀をとる。）

安祿　ふゝ。そんな事だらうと思つて居た。

楊貴　えゝ。恩知らずの畜生。惡魔。誰の爲めにお前の首が今まで胴を離れないで居たと思ふんだ。その恩も忘れ

て、その恩も忘れて……。

安祿　（どうしても楊貴妃が折れて出さうもないので、急に態度を變へて）楊貴妃。私は忘れはしません。貴女から受けた數々の恩を決して忘れてやしません。いや、それ所か出來るなら、どうかしてその御恩をかへしたく思つて居るのです。けれども、それには先づ第一に私がさういふ事の出來る身分にならなければならない。分りますか。さういふ事の出來る身分にね。貴女の御恩に報いる事の出來る樣な身分にね。

楊貴　おゝ。

安祿　貴女には分るでせう。（間）所で、それをするには貴女が必要だ。貴女の力が必要だ。そこで私はあゝして貴女を窮地に追ひ込んで貴女をためしてみたのだ。貴女は今私を殺さうとなすつた。その決心です。一つ間違へば自分の命にかゝはる事を平氣でやれるその心組です。私は貴女を見込んだ。貴女は事を爲し得る方だ。やらうと思ひさへすれば何でも出來る方だ。どうです一つ相談に乘る氣はありませんか。さうすりあ、貴女が今陷つて居る窮地の中に素晴らしい道を見附ける事が出來るのです。

楊貴　おゝ、では、お前は、お前は本當に……。

安祿　しつ。言葉は謹んで下さい。（間）分つたでせう。え、貴女には分つたでせう。

楊貴　（恐る恐る）　どうすればいゝといふのだい。

安祿　味方になるのです。私の味方になるのです。そして私の云ふ通りの仕事をするのです。

楊貴　おゝ。

安祿　それより他に貴女が安全に此の世に生きてゆかれる道はありません。（間）然し、一度さうなれば貴女は幸福になれます。安樂に、榮耀榮華な喜ばしい日が送れます。（間）考へて御覽なさい。貴女は私の恩人だ。私は貴女への御恩がへしとして、貴女の望む事なら何でもしてあげる。貴女は今の樣に、あの老いぼれの目をぬすむ必要もなく、それ、そこに居る美しい男と天下晴れて一所になれる。その男も今の樣な歌唄ひの、慰みもので居なくてもいゝ。私は貴女方二人に私の力にかなふものならどんなものでも進じよう。貴女方は此の世の中で又とない樂しい生活を送れる幸福な人になるだらう。私はそれを貴女に約束する。この男の胸にかけて、それを貴女に誓ふ。どうです、私の味方になつて、一働きしては下さいませんか。

楊貴　…………。

安祿　どうです、楊貴妃。此の安祿山の敵になるか、味方になるか。たゞ一言だ。早く返事をして下さい。

楊貴　安祿山。私はお前には敵はない。おゝお、お前は男……そして、そして私は女だ……。

安祿　有難う。これで私も安心しました。貴女も安心してさい。私の仕事は成就したも同じです。

楊貴　それでお前、今私にしてもらひたい事といふのは？

（短き間）まさか、あの陛下を……。

安祿　（制して）しつ。そんな滅茶な事を……。

楊貴　おゝ、それで私も安心した……。

安祿　何もあの人のいゝ陛下を今急いでどうかうする必要はありません。（間）今私が貴女にお願ひしたいのは、あの宰相の李林甫です。

楊貴　おゝ、李林甫？

安祿　さうです。此の唐の宮廷で私にとつて恐ろしいのはあの男一人です。他の奴は何百人居たつて、蟲けら同然のものばかりです。然し、あの李林甫が居る間は手が出せません。（間）然も、いけないのはあいつが、あいつで又恐ろしい事をたくらんで居る事です。そら、あの壽王に陛下や貴女を殺させようとしたのも、實はあの男のしわざぢやあないかと思はれるんです。

楊貴　えゝ、あの李林甫か……。

安祿　えゝ。

楊貴　おゝ、では、あの壽王を殺したのも……。

安祿　（おどろき）えゝ、壽王を殺した？　壽王は殺されたのですか。

楊貴　おゝ、お前はまだ知らなかつたのか。あの方は今朝何者かに殺されたといふので、陛下は今急いで其處においでになつたのだ。

（間。）

安祿　（考へ込んでゐたが）ふむ。いよ〳〵彼奴に違ひない。（間）それにしても何といふ周到さだ。（間）恐ろしい奴だ。

楊貴　あの男のしわざだらうか？

安祿　きまつてゐます。あいつ奴、陛下を殺し、貴女を倒し、そのごた〳〵につけ込んで貴女の兄上の楊國忠をも亡いものにし、ついで皇太子を毒殺し、ぬれ手で粟の様に此の唐帝國を乘つ取らうとくはだてたのでせう。

楊貴　おゝ。

安祿　所で、私が貴女におたのみしておきたいといふのは、今も申した通り彼奴の事です。私はこれから少時く地方に下つて、ひそかに十分の實力を養ひます。勿論出來るだけ早くはやりますが、どんなにしたつて一年はかゝるでせう。

楊貴　えゝ一年？

安祿　世界一の幸福になれるのです。一年位は長くはない

でせう。その一年の間貴女はあの男を、あの恐ろしい男を見張つて居て下さい。見張つて居るだけでなく用心してあの男が何事も起す事の出來ない樣にしておいて下さい。それの出來るのは貴女だけなんですから……。(間)そこで私の方の準備さへとゝのへば、直ぐ貴女の所に知らせます。さうしたらその時は一つ貴女の腕であの男をやつつけて下さい。手段はどうでもいゝ。あの男さへやつつければ、それでもう萬事此方のものです。貴女も御存じではあらうが、長い間の泰平と、陛下の豪遊で長安は云ふに及ばず、唐國全體の武備は有るも無いも同じ樣なものになつて居ます。一度私が十萬の胡軍をひきゐて立てば、天下ゆくとして從はざるなしは目に見えて居ります。

楊貴　分りました。今となつては私も、自分自身の安全の爲にもお前さんの味方にならなければならなくなりました。安心して下さい。私に出來るだけの事はしますから。

安祿　有難う。貴女にさう云はれゝば、もう安心です。(短き間)小さくない仕事です。お互ひにしつかりやりませう。

楊貴　えゝ。

(間。)

安祿　(李龜年を見て)あの人は大丈夫でせうね。

楊貴　ほゝ、それは私の身體の半分を疑ふ樣なものでせうわ。

安祿　はゝ。さうですか。それなら今日はこれで。

楊貴　えゝ。

安祿　いづれ又何か御話したい時には……。

楊貴　えゝ。何時でも。

安祿　では失禮します。(行きかゝる)

――幕――

第三幕

第一場

同じく玄宗の宮殿内。玄宗の室。

幕あきたる時玄宗は月のさし込む窓の前に立ちて物思ひに沈んでゐる。長き沈默。

(空をゆく雁の聲聞ゆ。)

玄宗　おゝお。(窓のわくの上に打つ伏す。かすかに)どうすればいゝのだ。どうすればいゝのだ。

(長き間。)

(楊貴妃入り來る。)

楊貴　陛下！　(玄宗きこえぬ)もし、陛下！

(玄宗びくりとしてふりむく。)

楊貴　陛下はまあ御一人で何をなさつて……。

玄宗　……。何に、何もする事がなかつたので雁の聲をきいてゐたのだ。(短き間)實は、今お前をよびにやらうと思つてゐたのだ。よく來てくれたな。

楊貴　えゝ。私今夜ぜひ少し陛下に申さなければならない事がありましたので。

玄宗　俺に云ひたい事?

楊貴　はい。ぜひ陛下にきいて頂かなければならない事なのでございます。

玄宗　何をそんなに氣色ばんで居るのだ。俺が何か今迄お前が俺にものを云ふのを禁じた事があるかな(笑ふ)何もそんなにいらだつ事はない。俺は何でもきく。さあ遠慮なくお云ひ。

楊貴　えゝ、えゝ、でも、でも餘りなのですもの。(泣く)

揚宗　(彼女に近づき)おい、おい、一體どうしたといふんだ。え、これ。(彼女の肩に手をかける)又、誰かお前の惡口でも云つたのか。

楊貴　いえ、いえ惡口位なら何でもありません。そんな事なら私はいくらでも忍びます。けれども、けれども、あんな事云はれては、あんな事云はれては……。(泣く)私はいやです。もう、もう私はいやです……。いやです……。(烈しくすゝり泣く)

玄宗　おい、どうしたといふんだ。泣いて居ては分らないぢやないか。何でもいゝから云つてごらん。俺に出來る事なら、どうでもしてやるから。さ、おい云つて御らん。(間)云へないのか?

楊貴　でも、あんまりな事なんですもの。

玄宗　どうしたといふんだ。え、何だといふんだ。

貴　(玄宗にすがりつゝ)陛下。私が陛下を毒殺しようとして居るんですつて。

玄宗　………。

楊貴　私が、私があの安祿山と密通して、ぐるになつて、(玄宗びくりとする。が強ひてそれをかくす)陛下を亡きものにして、此の唐の國を奪はうとしてゐるんですつて。(短き間)陛下、ね、陛下。私は、私はそんな事を言はれなければならない女でせうか。そんな事を……。あの豚男と一緒になつて陛下を、おゝ、此の陛下を。(玄宗默然としてゐる)(ヒステリカルに)あゝ、私はたまりません。そんな事を云はれて生きて居るのはいやです。あんまりです。あんまりです。私を殺して下さい。

玄宗　おい、氣を落ち附けないか。(努力しながら)お前は俺がそんな馬鹿々々しい事を信じると思つてゐるのか。

楊貴　そんな事思つてやしません。そんな事……。

玄宗　それならいゝぢやあないか。

揚貴　でも、でも皆んなが、皆んなが一緒になつてそんな

事を云つて私を追ひ出さうとして居るのです。私の兄をも……。おゝ、私は、私はいやです。いやです。もう、そんな所に居るのはいやです。おゝ、でも陛下がゐらつしやいます。陛下が。私は陛下のお側をはなれて生きては居られません。あゝ、私はどうしよう。どうしたらいいのだらう。おゝ、だから、だから私は死にたい。私は死にたい。こんな事云はれて生きてるのは、あんまり恥知らずです。恥知らずです。

玄宗　安心しろ。お前の心持はよく分つて居る。俺はお前をもお前の兄をも、安祿山をも信じて居る。(間) 實はお前の口からきく前に此の事について俺は既にいろ／＼の事を聞いた。幾人もの者が來て俺に注意した。中には直ぐに安祿山を殺してしまへなどと云つたものさへあつた。然し俺は平氣で居た。お前達の見て知つて居る通り平氣で居た。そして、そんな事を云ふ奴を笑ひ、腹の中では、むしろさういふ奴の方をこそ疑つて居る。

楊貴　おゝ、陛下、どんな奴が、どんな奴がそんな事を云つたのです。

玄宗　(苦し氣に一寸間をおき) そんな事をお前知らなくたつていゝぢやないか。氣持を惡くするだけだらう。

楊貴　えゝ、でも、でも……。

(間。)

玄宗　安心するがいゝ。俺には分つてゐるのだ。安心するがいゝ。

楊貴　おゝ、陛下、本當に？

玄宗　何で俺がお前を疑はう。

楊貴　陛下、私は、私は何と申し上げていゝか分りません。私は此の世の中に陛下より御すがり申す方はないのです。どうか、どうか私を可哀相たと思つて何時までも見捨てないで下さいまし。

玄宗　分つてゐる。分つてゐる。お前の心持は俺には皆分つてゐる。(間) さあ、そんな事は心配しないでいゝから今夜はもう下つて、ゆつくり休むがいゝ。な、神經を落ち付けなければいけない。え、いゝかい。

楊貴　えゝ、有難う……。

玄宗　さ、行つて、ゆつくりおやすみ。

楊貴　えゝ、では……。

玄宗　うむ。

楊貴　失禮致します。(禮して去る)

(長き間。)

玄宗　(獨白) おゝ、噂は本當なのか……。(間) こればかりは……と思つてゐた最後の信頼も亦破られたのか。(間) おゝ、何といふ女。何といふ女……。お前には、此の俺の心は分つて呉れないのか。千分の一でも萬分の一

でも、おゝ、よし大海の水に對する一滴だけでも……、それがお前に通じて吳れたら、いくらお前でもまさかこれ程俺を苦しめてはくれないだらうに。(間)おゝ、のろはれたる戀よ。のろはれたる心よ。おゝ、おゝ、俺は、俺はどうすればいゝのだ。どうすればいゝのだ。(ぢつと室の中央に立つ)

第　二　場

同じ宮殿内の一室。

夜更けて。

安祿山と史思明の兩人話をしてゐる。

史思　ふむ、ぢや、どうしても行きますか。

安祿　うむ、どうもその方が安全だと思ふんだ。(間)李林甫のやる事に氣の附く陛下が此方達のする事を感づかないといふ事は無いといつてもいゝからな。

史思　へゝ。變に臆病風にとつつかれましたね。

安祿　何に、何にも臆病風といふのぢやないが、事實俺はあの男にだけは頭が上らないのだ。何故だか自分でも分らないけれど、あの男にかうぢつと見つめられただけでも俺はよくぞつとすることがある。一寸でも話をすりあ、その度んびに冷や汗をかゝないことはない。

史思　あんまり意氣地がなさすぎますね。

安祿　本當だ。自分でもあまりの意氣地がなさに腹を立てて「何にくそ」と思ふんだが、いくらそんな事を思つたつて駄目なんだ。(短き間)あいつだけには手が出せない。

(間。)

史思　然し、陛下がその事に氣が付いてゐるといふ事は未だ確かな事實といふ譯ではないんですからね。はつきりした事實といふ譯ぢやないんですから……。

安祿　うむ、そりや確かな事實といふ譯ぢやない。然し先刻も云つた通りあの陛下の言葉付きから察すると、どうも怪しい。少なくともそこに疑ひを入れるに十分の餘地がある。(短き間)疑ひのある所に對しては用心しなければならない。

史思　でも、あんまり用心しすぎると臆病といふ事になつて……。

安祿　臆病？　お前は其の用心を臆病といふのか。(間)臆病と用心とは違ふ。俺達の樣な仕事をする者にとつては用心しすぎるといふ事はないんだ。考へてみると、今の樣にかうして長安にゐれば俺達は陛下にとつては袋の中の鼠以下ぢやないか。大將の考一つで、俺達は五分の間に捕へられて、牢に入れられ、首をちよんぎられてしまふ事も譯はないんだ。然も、その人間が此方の恐ろしいたくらみに氣がついてゐるかも知れないといふんだ。こ

の上こんな所にぐづ〳〵してゐるなあうはゞみの顎の上に居るよりあぶない。俺はそんな無謀なことたあしたくない。

史思　ふむ。成る程、さう云へばな……。

（間。）

安祿　そこでな。早速長安を去るといふのは問題ないとして、たゞ困るのは、それに使ふ口實だ。何ぼ何でも何の理由もなしに、今日の明日と云つて急に出かけることは出來ないからな。いや出來ない所ぢやない。もしそんなことをすりあ、あの古だぬきの大將、此方が大將の感付いたことを覺つて逃げるんだといふことに氣がついて、どんなことをするかも分らないからな。さうなりあ恐ろしい蟒蛇だからな。そいつで俺は頭をなやましてゐるんだ。

思史　（考へて居たが）うむ。之れにはいゝ事がある。

安祿　えゝ、いゝ事が……。

史思　そら、せんだつてあの河東の軍に一寸したもめがありましたね。

安祿　うむ。

史思　あの時の報告書はまだそのまゝ持つてでせう？

安祿　うん、もつて居る。

史思　誰にも見せやしなかつたでせう？

安祿　うん、誰にも……。

史思　あれを使つたらどうです。あの日附をかへて、事を大げさな樣に云ひふらして、そいつを治めなけりあならないといふのを口實にしたら……。

安祿　うむ。こりや妙案だ。流石にお前だ。さうしよう。さうしよう。それがいゝ。それがいゝ。

史思　然し、（間）こんな事をいふと又貴郎をこはがらせるだけかも知れないが、例の李林甫はどうするんです。此のまゝ私達が居なくなつてしまやあ、後に殘つた奴はどんな勝手なまねをするか分りあしないでせう。さうして、あいつの居る間は貴郎にあ手が出せないとなりあ、何時まで待たなけりあならないんです。一生待つたつて手の出せる時は來ないといふ方がいゝくらゐですぜ。何故と云つてあいつは私達より十をも若いんですからね。

安祿　ふむ。そこは俺のやる事だ。ぬけめはない、安心しろ。

史思　どうしようといふんです。

安祿　素敵な武器があるんだ。

史思　何です？　え。

安祿　お前には未だ云はなかつたが、實はあの楊貴妃が此方の味方なんだ。

史思　えゝ、楊貴妃か……。

安祿　えゝ、大きな聲をするな。

史思　おゝ、では、では噂は本當なんですか。
安祿　本當だ。
史思　早いもんですね。
安祿　本當に早い。恐ろしい程……。これもあの李林甫の仕事に違ひないと思ふんだ。
史思　然し、まあ、どうしてあの楊貴妃か仲間にひつぱり込めたんです。
安祿　ふゝ。そこは俺の手腕だ。(短き間)強迫したんだよ。
史思　えゝ、強迫した？
安祿　まあ、そんな事はどうでもいゝぢやないか。とにかく、あの女は此方の味方なんだ。そして李林甫の事は萬事あの女にたのんでおいた。(間)あの女ならだ。あの女なら李林甫をどうにか片附ける事が出來るだらう。(短き間)若し、あの女に出來なかつたら、その時はあんな怪物と同じ時代に生れたのを此方の不運とあきらめて、おとなしく暮すより仕方がない。(間)いや、然し、そんな事はあるまい。斷然そんな事はあるまい。いくらあの怪物にどんな力があらうとも今此の宮殿であの女に睨まれたらどうする事も出來はしない。勝利は俺達のもんだよ。最後の勝利は……。
史思　(考へつゝ)然しね。大將。一體、楊貴妃は心の底から味方の味方なんですか、強迫によつて一時味方になつてるだけで私達が居なくなつてしまへば、直ぐくらくらになつてしまふ樣なんぢやないんですか。
安祿　餘計な心配だよ。そこには大丈夫な譯があるんだ。いづれゆつくり話さう。心配はないんだ。そりあ、お前にも今直ぐ合點がゆくよ。
史思　えゝ、今直ぐ、どうして？
安祿　もう直きあの女は自分でこゝに來る筈だから……。
史思　えゝ、楊貴妃か……。
安祿　うむ。
史思　此處へ？　此處へ？
安祿　何をあわてゝ居るんだ。あの女に會ふのが恐いのか。
史思　いや、何に、何に……。(間)然し、何んですか、恐がると云へば、あの女は李林甫を恐がつては居ないんですか。
安祿　うむ、別にさう大して恐がつても居まい。(短き間)女だからな。
史思　女だから？
安祿　さうさ、女にあ、男の價値といふものは分らないんだ。本當に恐ろしい男は女には恐ろしいとは見えないんだ。本當にえらい人間が馬鹿な奴の目にはえらく見えない樣にな。
史思　でも、私達があの男をこはがつて……、(思ひ付いて)

おゝ、それより第一私達の計畫が陛下に感付かれさうなのを恐れて逃げ出したといふ事になりあ、後に殘されるあの女は心細くてたまらないでせう。

安祿　誰がそんな事をあの女に知らせるものか。俺達はあくまでたゞ一寸反亂を取りしづめにゆくといふだけにしておくんだ。それにあの女には前から俺はもう直き地方に歸るといふ事は云つてあるんだから大丈夫だ。今となつて來て心細がつたりするものか。(短き間)その上後にはあの女一人といふ譯ぢやない。楊國忠だつて居るんだ。取越苦勞する事はない。

(間。)

(右手の幕の間より楊貴妃覆面して出る。)

(安祿山立ち上る。史思明もつゞいて立つ。)

楊貴　(ふく面をとりつゝ)兄は未だ來ませんか。

安祿　えゝ、まだ。(楊貴妃が史思明を氣にするのを見て)あゝまだ始めてでしたが、これは私の武將の史思明といふものです。どうかよろしく。

楊貴　おゝ、さうですか。名前だけはきいてゐました。よろしく……。

史思　(詞なく、たゞ頭をさげる)

安祿　早速ですが、今夜貴女に御會ひする事のできたのは誠に好都合でした。

楊貴　えゝ?　何故。

安祿　突然ですが、私は急に出發を早めなければならなくなつたんです。

楊貴　おゝ、さう。さうして何日(いつ)たつんです。

安祿　なるべくなら明日の朝にでもたちたいと思つてゐるんです。

楊貴　えゝ、明日の朝?　それは又どうして……。

安祿　何に大した事ではないんですがね。河東の方に殘して來た軍隊に少しもめが出來たんです。私が行つてやりさへすれば何でもない事なんですがね。然し、とにかく一日も早く行つた方がいゝので、出來るだけ早く出發(た)つ事にしたのです。

楊貴　さうですか……。

(間。)

安祿　それで早速ですが、その後陛下に御會ひになりましたか。

楊貴　えゝ、昨晩……。そしてあの話をしました……。

安祿　おゝ、さうしたら。

楊貴　陛下はまるであんな噂なんか相手にもしてぢやありませんの。その方の心配は全で要りませんわ。

安祿　(考へ込んでゐる)

楊貴　私陛下と話してゐる間に何だかそんな事を云ひ出し

たのが恥かしい様な氣がして來た位でしたわ。

安祿　さうですか。(考へ込む。間。心を定めて) そりや有難い事です。それなら貴女の立場も樂だし、仕事もしいいといふ譯です。それに私が行つてしまへばそんな噂も自然人の口から遠ざかるでせう。(間) そこで、どうか一つふんばつてあの李林甫をどうにかして下さい。繰り返す様ですが、これが私の貴女にお願ひする總てです。

楊貴　えゝ、大丈夫、その事も安心して下さい。兄もあの男を心から憎んで居りますから、もし私の力だけで足りなければ二人でどうにでもしますから。

安祿　どうか、よろしくお願ひします。

楊貴　えゝ、大丈夫此方の事は安心して、一生懸命やつて下さい。(間) 然し、いざといふ時に約束を忘れてはいけませんよ。

安祿　大丈夫。安祿山は男です。

楊貴　さう。では私は急ぎますから、これで……。

安祿　えゝ。では多分明日又一寸御目にかゝれると思ひますが、とにかく御身體を大切に。

楊貴　えゝ、貴所も……。

安祿　有難う。お互ひに小さくない仕事をやるんです。しつかりしませう。

(楊貴妃うなづき入る。史思明呆然として彼女の後を見送つて居る。)

安祿　(史思明の肩をたゝいて) おい、どうしたんだ。(史思明うろたへる) 目がくらんだのか。はゝゝ……。(短き間) さあ、片付けるだけの事を片付けてしまはう。

第三場

宮殿内の廣間。

李林甫考へに沈みつゝ出る。反對の方から蕭晃出る。

蕭晃　(李林甫を見つけ) おゝ、此處でしたか。安祿山の奴が今朝出發するさうですね。

李林　うむ。

蕭晃　いゝんですか。

李林　いゝとは云へない。

蕭晃　それでは、それではどうします。どうしたら……。

李林　どうも今となつて直ぐどうするといふ事も出來ない。

蕭晃　では見す見す奴を、あの猪を放してやるのですか。そりや少し危險ぢやないんですか。

李林　うむ。それも危險ではない事はない、といふ程度だ。

蕭晃　それでは貴郞の平常の主義にたがやしませんか。「總ての仕事をくづれ得るすきのない様にやる」といふ……。

李林　たがつてゐる。(間)正直に云つてな、蕭晃。今度は
俺が彼奴に一ぱい喰はされたのだ。
蕭晃　えつ。貴郎が……。
李林　さうだ。俺がだ。いや俺がといふより皆かなのだが、
とにかく彼奴も一とかどのものだな。自分の身にせまる
危險をこれ程早くかぎつけて、然も、それに處する處置、
それも可なり決然たる處置をこれ程早く決めた所はなか
なか見上げたものだ。
蕭晃　然し、今はとにかく敵をほめて居る時ではあります
まい。どうかしなくては……。
李林　(にたりと笑つて何か云はうとするが、それはやめて
次の樣に云ふ)うむ、本當だ。どうにかしなくては……。
然し、そのどうにかについていゝ考が、手段がないのだ。
(間。)
蕭晃　今朝此處へ來た時やつつけてしまつてはどうです。
李林　彼奴にそんな油斷があるものか。彼奴きつと何とか、
かとか云つて自分の手下を出來るだけ大勢連れて來るに
違ひない。下手に手を出せば此方がやられるだけだ。何
と云つても向うは軍人、此方は此方だからな。
蕭晃　(考へながら)では、どうするんです。
李林　だから、どうも出來ないと云つてるぢやないか。
(間。)

蕭晃　今日位貴郎がたよりなく感じられた事はなかつた
が……。
李林　そりあ、さうだらう。俺が今日位打ちのめされた事
はないんだからな。
蕭晃　そのくせ貴郎は何だか平氣さうぢやありませんか。
(短き間)貴郎は一體此の事件を茶化してなのですか。そ
れとも私を馬鹿にしてなのですか。
李林　何を云つてゐるんだ。俺が何時お前を馬鹿にした。
いつ此の事件を茶花した？
蕭晃　でも貴郎は先刻からちつとも力を入れてものを云つ
ては居ないぢやありませんか。
李林　お前が云はせないのだ。俺が力を入れて云はうとす
る事をお前はきかうとしない。そしていくら云つても始
まらない事を俺に云はさうとする。だから俺は力をいれ
てものを云ふ事が出來なくなつたんだ。(間)一體誰だつ
て人間はどうする事も出來ないといふ事にぶつかる事は
あるものだ。そしてその時人間はたゞ默つて居るより仕
方がないのだ。
蕭晃　ぢや貴郎のその平氣さはどうしたものです。どうに
も出來ないといふ所にぶつかりながら……。
李林　馬鹿つ。お前は此の「どうにも出來ない」といふのが
運命的な意味のものだと思ふのか。あの安祿山を放して

やれば、それで俺のする事が破られてしまふとでも思つてゐるのか。（短き間）おい、俺は李林甫だよ。あんな猪が幾つ飛び出さうとそれでびくつく樣な俺ぢやない。安心しろ！　あいつが逃げるのは他でもない此の俺がこはいからだ。俺の側に居たゝまれなくなつたからだ。たゞ、その逃げ出し方が俺の思つてゐたより機敏だつたといふだけだ。

（間）

それよりな、實は、俺は今もう少し大事な事に就て考へて居たのだ。（今まで頭をたれて居た蕭晃、額をあげて李林甫を見る）それこそ俺達にとつて、いや此の唐の國にとつてすら運命的な事だ。

蕭晃　それは、それはどういふ事で……。

李林　蕭晃。いよ〳〵その時が近づいて來たらしい。

蕭晃　えゝつ、その時が……。

李林　さうだ。例の事を起す時が近づいて來たらしいのだ。

蕭晃　おゝ。それは、それは又どうして？

李林　お前あの王鉷と吉溫が捕つた事を未だ知らなかつたか。

蕭晃　えゝ！　王鉷と吉溫が捕つたのですつて！

李林　うむ。

蕭晃　ど、どうしたんです。

李林　昨晩あいつら二人に安祿山のたくらみを陛下に密告させた事は知つてゐるだらう？

蕭晃　えゝ。

李林　すると驚いた事には二人は直ぐつかまへられて牢にぶちこまれてしまつたのだ。

蕭晃　えゝつ。ではつまり陛下は安祿山一味を信じ切つてなんですね。

李林　ふむ。そこなんだ。俺が頭をなやませて居るのは。

（考へ込む）

（間。）

李林　俺はな、どうも陛下は見ぬいてやしないかといふ氣がするんだ。

蕭晃　えゝつ、何を、何を見ぬいてるんです。

李林　安祿山のたくらみも、此方達のたくらみも。

蕭晃　えゝつ、此方達のたくらみですつて？

李林　もとより、確かにさうだとは云へない。（短き間）然しな、陛下は今迄俺達か、いや俺が思つて居たよりは、もう少し偉い人間の樣な氣がして來たんだ。近頃陛下と會つてゐると何たか時々かう變な壓迫を受ける事があるよ。とにかく今迄俺は少しあの人を見くびりすぎて居た樣に思ふ。

蕭晃　……。

李林　所でだ。相手がさういふ人であればあるだけ、少し此方の仕事を急がなければならないと思ふんだ。
蕭晃　準備はすつかり出來て居ると云つてもいゝ位です。いざとなれば明日にでも事を起せます。（間）何時になさる御つもりです。
李林　そこまではまだはつきりとは決めてゐない。然し、十日を出でない中に事をきめたいと思つてゐる。
蕭晃　おゝ。（間）然し、その間に捕つた二人の口から此方の謀が洩れる樣な事はないでせうか。
李林　そんな事にぬけめがあつてたまるものか。（短き間）今頃はもう二人とも此の世の空氣はすつては居まい。
蕭晃　えゝ？
李林　我強足をやつたんだ。
蕭晃　おゝ。殺つてしまつたんですか。
李林　うむ。その結果は未だ分らないんだか……。
蕭晃　然し、そんな事をすりや、なほ陛下に疑はれやしませんか。
李林　だから、それもあつて事を急ぐんだ。あゝ、あれ達が來た。結果が分る。
（羅布頭と宋渾出る。）
李林　どうだつた。上手く行つたか。
羅布　どうにか、やつつけはしましたが、少しどうも……。
李林　どうした！
羅布　亂暴してしまつたのです。
李林　大勢やつつけたのか。
羅布　えゝ。それに……。
李林　云ひしぶる事はない。どうしたんだ。
羅布　我の奴がやられたんです。
李林　えゝ、我がやられた。
羅布　えゝ。
李林　ではあいつがやつたといふ事を知つてる奴が生きてゐるのか。
羅布　いや、そこに手ぬかりはありません。私達が飛び出してそいつ等はやつつけて來ました。然し、どうも少し大袈裟になりすぎて……。
李林　我の屍はかくしたらうな。
羅布　えゝ、石をつけて池に投げ込んでおきました。
李林　よし。考へ込む。（間）（決然と）勢はせまつて來た。かうなつた以上一時もぐづ〳〵して居るわけにはゆかない。皆今夜十二時、例の室に集つてくれ。一刻も早く最後の手段にとりかゝらなければならない。
（間。）
こんな所にぐづ〳〵して居ると人目にたつ。さあ、別れ別れに行かう。もう直き出御だから……。

（二人づつ左右に入る。）

（舞臺空。音樂。やがて玄宗と楊貴妃、後に李林甫を始め楊國忠、高力士その他の延臣從ひ出る。玄宗と楊貴妃坐につく。皆左右に立つ。）

玄宗　安祿山は未だか。

李林　はい、只今、直ぐに參るでございませう。

（安祿山、史思明、その他安祿山の重なる武將四五人出る。）

玄宗　おゝ、安祿山か。急に出發つといふ事だな。

安祿　はい。誠に餘り急な事で、心苦しい次第でございますが、一時も猶豫の出來ない事でございますので……。

玄宗　ふむ。まあ。どうしてもお前が自分でゆかなければならない事なら仕方がない。（間）然し、お前が行つてしまふと、長安は淋しくなるな。

安祿　どう致しまして。御側には李林甫も居りますし、楊國忠も……。

玄宗　いや、然し、俺の歌の合の手は、やつぱりお前でなくては出來ぬ……。

安祿　いゝえ、それは私あの李龜年に十分をしへておきましたから……。

玄宗　ふむ。さうか……。

安祿　（ふざけて）又それでも、どうしても御役にたちませんやうでございましたら、ゴタ〳〵がすみ次第御相手に參りませう。

玄宗　ふゝゝ。さうしてくれるか。

（間。）

安祿　（せきながら）陛下、では一刻をも爭ひますから、これで失禮を……。

玄宗　おゝ、もう行くか。

安祿　はい。（間）では陛下を始め、楊貴妃にも、皆樣にも御身體御大切に……。では失禮致します。（行きかける）

玄宗　（默然として居たがいきなり）安祿山！　まて！

安祿　（びくりとするが、それを巧におしかくして立ち止り玄宗の方をむく）

玄宗　どうしようかと思つて居たのだが、やはりお前にやらう。（短き間）いゝ土產物だ。（高力士に）あれらを連れて來い。

高力　はつ。（去る）

玄宗　これからは彼方はさぞ寒いだらうな。

安祿　（手持ぶさたさうに）はい。然し、左樣でもございません。

玄宗　さうかな（間）お前があつちに居る中に俺も是非一度行つてみたいと思つてゐるが。

安祿　おゝ、是非、是非おいで下さいまし。

玄宗　うむ。春にでもなつて氣がむいたら行つてみようかな。
（此の時高力士あわてゝ出る。）
高力　陛下。（玄宗の側にゆき耳うちする）
玄宗　（愕然たる面もち、然し、直ぐ平靜になる。考へ込む。間もなく）いゝ。それを、それを持つて來い。
（高力士急ぎ去る。）
（長さ、長き沈默の間。）
（高力士、王鉷と吉温との屍を臺にのせ數人の武士に運ばせて出で、それを玄宗の前におく、李林甫の一味を除き他の者皆驚く。）
玄宗　（屍を指しつゝ）俺がお前への贈り物を取るがいゝ。
安祿　えつ。これを……。陛下、それは何ういふわけでございますか。
玄宗　その二人がお前の事を俺に讒訴したのだ。（間）お前が俺に對してたゞならない事を企てゝ居るといふ樣な噂はみな此の二人の口から出たらしいのだ。俺は俺のお前に對しての信用を表はす爲めに生きた二人をお前に贈らうと思つて居た。所が何者かゞ昨夜の中に彼等をさういふ姿にしてしまつた。殘念な事をした。然し、よし贈物は死んだとしても俺の心持はお前に分つて呉れるだらうと思ふ。
安祿　陛下。（間）よく分ります。
玄宗　分つて呉れたか。
安祿　……。
（間。）
玄宗　皆も心得て呉れ。俺は平和を好むものだ。總ての事を出來得る限り穩やかにをさめたい。であるから俺は云ふのだ。（間）皆の者よ。此の唐帝國はお前達の長い間の協力によつて漸く今日の隆盛を來すことが出來たのだ。然し、まだ〳〵今は決して安んじて居られる時ではない。いや、今に限らない。いやしくも一つの國家を安全に隆盛に保つてゆくには何時になつても安んじて居られる時といふものはない。然し、中でも今は恐ろしい時だ。危い時だ。見よ。西の突厥、南の吐蕃は私に爪をみがいて隙さへあれば我が國に侵入しようとして居るではないか。東に海をへだてた日本、先日漸く征服したばかりの契丹、それらも何時又事をあげようかも知れぬ。その上、又、北には北で、あの新羅が近く朝鮮半島を統一した。その勢力もあなどれない。數へてくれば敵は多い。敵は外に多い。今もし我々が內に一致を缺いて互ひにそねみ、讒し、爭ひ合つたならば、それこそ此の唐帝國は一朝にして亡び、幾千百年の光輝ある歷史を有する我等が祖先傳來の此の中國の地は彼等外夷の蹂躙にまかせられなけ

ればならないであらう。皆よ、皆はその事に甘んじられるか。俺はいやだ、俺には堪へられない。俺は此の中國の地は永久に我等漢族の手の中に保ちたい。我等の祖先と我等とが、その天然に惠まれた如く、我等の子孫をも此の豐饒な自然の恩惠に浴せしめたい。お前達はさうは思はないか。

（皆默然たり。）

玄宗　皆の者よ。仲よくして呉れ。一致してくれ。そして、ともすれば破目をはづしてのさばり勝ちな慾望といふものを制してくれ。そして各々が分に安んじ、所に安んじて、各々の爲すべき所に力を盡してくれ。その中にこそ眞の平等もあり、各人の幸福もある。そしてその時我等の國土は平安であり、我等の國は榮えるであらう。（間）おお、皆の者よ。若きお前達は今お前達の眼の前にある平和の喜びを十分に知つては居ない。それはお前達が戰亂の苦痛を知らないからだ。俺の若き日はその戰亂のにがき經驗の中にすごされた。そして今俺は平和の中に住んで居る、俺にはよく分る。戰亂といふものが如何に人を不幸にするものか、そして平和といふものが人の幸福に如何に必要なものか。おゝ、それをお前達も知つてくれ。考へてくれ。そして總てを平和の中に解決してくれ。邪惡と、爭鬪の罪惡の道に引入れられることなく、人間か天から與へられた喜びを味ふことを樂しんでくれ。俺はお前達を信じて居る。どうか皆なよ。力をあはせてやつてくれ。互ひに他の足りない所を許し合ひ、助け合つて我々總てにまかされた此の唐の國を守つてくれ。俺の若き日の血と肉とをもつて築き上げた此の國を。俺はお前達にたのむのだ。

（皆肅然たり。）

安祿　（玄宗の前に膝まづき）陛下！　私は陛下のためになら私の身命をもをしみません。

玄宗　安祿山！　今のそのお前の言葉を忘れずに呉れよ！　俺はお前を信じ、頼りにして居る。此の唐國が今日の樣に安らかなのは決して此の長安の中央政府だけの力ではない。お前達各地の節度使の目に見えぬ、限りない困難と、努力とに負ふ所が多い。俺はお前達に感謝して居る。たゆまず、うまずやつてくれ！

安祿　確かに、陛下！　（間）（立ち上り）陛下、では私はこれで……。

玄宗　ゆくか。（短き間）身體を大事にするがいゝぞ。

安祿　有難うございます。（心から一種の感激にうたれ、二人の屍の事など忘れて急ぎ足にその場を去る。史思明等つゞく）

玄宗　李林甫。では俺は今日はこれでいゝのだな。

李林　はい。陛下。
玄宗　では……。（立ち上り）高力士。その屍を片付けさせるがいゝ。
高力　はつ。
（高力士及び數人の武士の他皆去る。高力士武士を指圖して屍を運び去る。短き間。李林甫と蕭晃出る。）
蕭晃　何を考へ込んで居るんです。
李林　うむ。（間）おゝ、俺は先刻陛下は俺の思つてゐたより偉い人だつたと云つたらう。
蕭晃　えゝ。
李林　所が、所が又あの時思つたよりなほ一層偉いらしい。
蕭晃　えゝ？
李林　（間をおき）陛下はな、何から何まで皆んな知つて居るんだ。
蕭晃　えゝつ。何から何まで？
李林　うむ。さうかと思つて居たんだが、今の話ではつきりした。
蕭晃　（間をおき）然し、知つて居ながら、今までどうもしないでおくのはをかしいぢやありませんか。
李林　そこが偉いのだ。
蕭晃　えゝ。何故？
李林　陛下が此の事に氣がついたのは極く近頃なのだらう少なくも俺達の事に氣がついたのは最近なんだ。所で氣がついた時には、もう此方の手がまはりすぎて居てどうする事も出來なかつたんだ。下手に手を下せば事の爆發を早めるだけといふ狀態になつて居たんだ。（短き間）それらの事がはつきり分つて、荒々しい事をせずに、人の心にうつたへて解決しようといふ所はなか〳〵見上げたものだ。
蕭晃　ぢや、一體これから此所はどうすればいゝんです。
李林　どうするも何もあるものか。今迄通り、どん〳〵此方のやりたい事をやつてゆくのさ。（短き間）そりあ、あの陛下には氣の毒だ。いろ〳〵の事が分つて居るだけ氣の毒な氣がする。然し、いくら氣の毒だからつて、その爲めに此方のやりたい事をやめるわけにはゆかない。陛下の云つた通り人間は各々分に從ふのがいゝのだ。俺はあの男の下について居る人間ではない。俺のやらうとして居る事をやるのは俺の爲めにも天下の爲めにもいゝのだ。
蕭晃　それにしても、から向うに氣づかれた上は、やるなら一日も早い方がいゝですね。
李林　勿論だ。（間）おい。此の十五日は例の夜會だな。
蕭晃　えゝ。
李林　その時にやる事にしよう。
蕭晃　えゝつ。

李林　まだ十日ある。最後の準備には十分だ。（短き間）では、いづれ今夜皆と一所に逢はう。

（一人歩き出す。）

蕭晃　（歩きつゝ）それにつけても、あの二人はをしい事をしましたね。かうなつてみりあ一人でも多い方がいゝんだが……。

李林　ふむ、然し、まあ大した事はないさ。可哀相だつたが。云はゞ捨て石だな。俺達のたてる建物の縁の下にころがつて居る石になつたんだな。（間）又その邊が奴等には丁度いゝ所だつたんだ。

蕭晃　えゝ？

李林　山の麓まで一緒に行くには都合がいゝ、が、いざ登るとなると、もう一緒に行く事の出來ない奴。さういふ人間が世の中には多いのだ。云はゞ、まあちよこ〳〵とマメに働いて膳だての用意をするには役にたつ、然し、いざとなつたとき一緒にそれを食ふ資格はないといふ奴なのだな。さういふ奴にかぎつて「誰か來て俺達を使つてくれないかな」といふ樣な顏をして居る。「どうか私達をお使ひ下さい。私達は貴郎の爲に犬の樣に働きます。さうです犬の樣に働きます。そして後はどうなつたつてかまはないのです」とでも云ひかねないんだ。つまり、さういふ人間には何をしようかとか、何かしたいとかいふ目的はないんだな、いや、目的などといふものは頭から分らないのだな。然し、さういふ奴でも、とにかく何にもしてゐないといふのは何となく淋しい、そこで何とかして自分達を使つてくれる人を求めて居るんだ。だから、さういふ奴に對しては此方で遠慮なく思ふ存分利用し、使つてやつていゝのだ。それが、つまり彼等にとつても一番有難い事になるんだからな。（短き間）あの二人も、まあ云はゞさういふ種類の人間なんだ。だから奴等としては、かうして俺達といふ者に見出されて、此の古今未曾有と云つてもいゝ一大陰謀の一役に使はれたといふ事はこの上もない幸だつたといふものなんだ。

蕭晃　はゝ。まあ、さう云へばさうですね。奴等もこれで世界歷史に名を殘すといふものですから。……勿論あまり香ばしい名ではありませんが。

（二人去る。）

第　四　幕

長安に於ける李林甫邸内の一室。

右手に大いなる寢臺あり。その上に李林甫横はり眠り居る。數名の侍女、及び醫者三人つきそひあり。

（幕あくと羅布爽と宋渾左手より出る。）

（醫者、侍女等立ち上り挨拶す。）

宋渾　（醫者等に小聲で—以下同じ—）御様子はどうです？

醫一　（小聲で—以下同じ—）今、お寢みになつてゐでになります……。（短き間）が、どうも……。

宋渾　いけないのですか……。

醫一　はい。どうもその……。何とも申し上げかねますので……。

宋渾　ほうを……。（間。）

羅布　では全然見込みはないのですか。

醫一　いや、勿論それは誰しも斷定する事は出來ませんが、正直な所を申して十中九までは望みはないと思はれます。

（宋渾、羅布夾の兩人目を見合す。）

羅布　お目ざめになれば一寸位お話する事は出來るでせうか。

醫一　はい、それは出來ない事もなからうかと思はれますが……。

羅布　さうですか。（宋渾に）では、とにかく少し待つて居てみようぢやないか。

宋渾　うむ。さうしよう。

羅布　（醫者達に）では、少時くの間此處で待つてゐますから……。

醫一　はあ、左樣ですか。どうぞ。

（羅布夾、宋渾の兩人室の左手入口に近き所にある卓の前に腰を下す。醫者、侍女等は各々もとの所に歸る。）

羅布　やつぱり望みは無いらしいな。

宋渾　ふむ……。（間）折角此處までやつておいて……。をしいものだ。

羅布　ほんとに……。（間）どうかならないものかな。手筈は十分整つて居るんだ。何も大將一人居なくたつて。

宋渾　（おさへる樣に）駄目だ。（短き間）そりあ、やつつけるだけはやつつけられるだらうがな。その後の事を考へて見ろ。大將でなくて誰に此の大仕事をまとめる事が出來る。（間）まとめる事が出來ないで滅茶滅茶になる位なら何も好んでそんな危い事をして、骨を折る必要はなからうぢやないか。

羅布　ふむ。さう云やあ、さうだが。然し、その中にあの楊國忠や、安祿山が何か事を仕出かさないとも限らないからな。そしてもしそんな事にでもなりやあ此方は早速お拂ひ箱だ。それより出來る出來ないは時の運として、とにかく此方で先手をうつ方がよかないかと思ふんだ。

宋渾　俺は不贊成だ。（短き間）いくら老い込んで、ぼけた

からつて、まだ〳〵あの陛下を相手に廻して、勝つといふ見込のたつのは大將より他にはない。何んだ、あんなぐうだらべえの楊國忠や、青二才の安祿山に何が出來るものか。駄目だ。駄目だ。大將がなくなりあ、俺はやつぱり今迄通り陛下の忠實な家來になる。それが一番得策だ。何故と云つて俺達は今迄のまゝでも何も別に困るといふ事あなかつたし、又これからだつてないだらうからな。

羅布　ふむ。まあ、さう云へば、さうだな。(間) あゝ、然し、かへすがへすも大將は……。あゝ、どうかよくなつてくれないものかな。

(間。)

李林　(うなされる如く) 陛下は、陛下は未だおみえにならないか……。

(醫者、侍女等うろ〳〵する。)

李林　あゝ、まだか、まだか……。(又うと〳〵眠つてしまふ。)

(間。)

宋渾　おい、聞いたか。「陛下はまだおみえにならないか」つて云はれたぜ。

羅布　確かだつたな、どうしたんだらう。

宋渾　さあ、どうしたのかな。

羅布　夢でも見られたものかも知れないね。

宋渾　ふむ、さうかも知れない。

(此の時左手の入口より蕭晃入り來る。)

宋渾　おゝ、蕭晃ぢやないか。

蕭晃　(兩人を見て) おゝ、何た、こゝに居たのか。(一段聲をひそめ) 實は今君達を探して居たんだ。

宋渾　さうか。何か……。

蕭晃　何かぢやない。(又一段聲をひそめ) 今陛下が此處に來られるのだ。

宋渾
羅布　えゝつ、陛……。

蕭晃　しつ。御微行だ。

羅布　うむ、では、こゝで殺(や)つてしまふといふのか。

蕭晃　まるで違ふ。(短き間) 大將病氣になつてから、すつかり考へが變つてしまつたらしいのだ。熱にうなされながらでもよく變な事を云ふ。「私は是非貴郞に申しておかなければならない事がある」とか、「おゝ、どうかしつかりやつて下さい」とか、云ふんだが、それがどうも皆陛下に云つて居るらしいのだ。所が今夜になつていよ〳〵急に是非一目陛下に會ひたいから、陛下にその事を申し上げてみてくれといふのだ。

兩人　ふむ。

蕭晃　それで俺が使ひに行つたといふ譯だ。
羅布　陛下は何と云はれた？
蕭晃　直ぐ承知されたんだ。もう直ぐにも此處へ見えるだらう。
羅布　ほを。
蕭晃　それで實は君達に少したのみたいことがあるんだがな。
羅布　何んだ。
蕭晃　うむ。外でもないが、何れ陛下と大將との對談は人拂ひだらうと思ふんだ。所か俺は是非そいつを聞いておかなければならない。何故つて、それによつて俺達の今後の方針をきめなけりあならないからな。
羅布　ふむ。
蕭晃　そこでだなあ。俺はどうにかごまかして、陛下がこられない前にどつかその邊の幕の陰にかくれるから、陛下が來られたら君達上手くやつて、俺の居ない事に陛下が氣の附かないやうにやつてくれないか。
羅布　うむ、よし、承知した。
蕭晃　今揚賓矜にもたのんでは來たんだが。なるべく大勢の方がいゝ。ではたのむよ。いゝかい。
羅布　承知した。大丈夫だ。
蕭晃　（宋渾に）たのむよ。

宋渾　うむ。
蕭晃　では俺は行つてくる……。
（蕭晃、李林甫の方に行く。）
蕭晃　（醫者達に禮して）目は覺めてではありませんか。
醫一　おさめになつてとも、おやすみになつてともつかない樣な御狀態でございます。
蕭晃　どうでせう、話しかけてもいゝでせうか。
醫一　左樣、何か重大な御用なら今の中がよろしいかと存じます。
蕭晃　さうですか。では……。（寢臺に近寄り）李林甫樣。
（李林甫眼をあく）行つてまゐりました。
李林　むう、蕭晃か。そして、そして、陛……。あの方は何と云はれた？
蕭晃　直ぐ御承諾になりました。
李林　おゝ、さうか。
蕭晃　もう直ぐにおいでになるでございませう。
李林　醫者達を下げてくれ。人を拂つてくれ。そしてお前達も遠慮してくれ。俺達は二人きりで話さなければならない事があるのだから……。
蕭晃　承知致しました。（醫者達、侍女達にむかひ）御聞きの通りだ。皆さん下つて下さい。
醫一　承知致しました。

（醫者、侍女等皆右手に去る。）
（其の時左手より揚愼矜出る。）

揚愼　（蕭晃に）陛下が御着になつた。

蕭晃　さうか。先刻の事は此の人達にもたのんでおいた。（揚愼始めて兩人に氣づき互に挨拶す）よろしく賴む。（皆承知する）ぢや、とにかく一緒に向うに來てくれ、そこでごまかすから……。

（皆一緒に寢臺の方にゆく。）

蕭晃　陛下が御着になりました。

李林　（起き上らんとし、起きられず）おゝ、さうか、直ぐに此方へお通し申してくれ。

蕭晃　（制する）御靜かになさらなければいけません。

李林　お前達も遠慮してくれ。惡い樣にはしないから……。

蕭晃　御安心下さい。仰せにはそむきませんから。

（皆二三歩寢臺をはなれる、蕭晃皆に目くばせして皆寢臺の下手の方に歩く。そこで彼は一人そつとぬけて右手にたれたる幕の後にかくれる。他の三人は急ぎ左手に去る。）

（やがて玄宗三人に案内されて出る。）

玄宗　よろしい。

三人　はい。（去る）

（李林甫は玄宗の來たのに氣が附いて、無駄に床上に起き上らんと努力して居る。）

玄宗　（李林甫のその樣子を見て、いきなりそつちに近よりゆく）いゝ、李林甫、そのまゝでいゝ。

李林　はい。然し……。

玄宗　人の爲めに作られた禮は自然の力の前には廢されなければならない……。そのまゝで居て吳れ。でないと俺は落ち附いてお前と話をする事が出來ない。

李林　はい。では……。（橫はる）

（二人共に口を切らんとして切り得ず。重苦しき長き間。）

李林　（終に決心して）陛下！（間）陛下を今頃わざ〳〵こんな所まで御呼びたて申した事を御許し下さい。（間）私はもう長くは生きて居りますまい。（間）そして私は死ぬ前に是非陛下……陛下だけに聞いて頂きたい、聞いて頂かなければならない事があつたのでございます。

玄宗　李林甫、俺はそれを知つて居た。お前が俺に云はずには死んでゆけないものをもつて居る事を知つて居た。だから俺は直ぐに來た。

李林　……。

玄宗　「さあ、何でも云ふがいゝ。俺はどんな事でも許すから」俺はお前にそんな事は云ふまい。お前は俺からの許しを必要とする樣な人間ではないのだ。（間）俺は死にゆ

く友の言葉をきく氣で此處に來た……。

李林　昨日までは敵の、そして今日は友の……陛下。

（二人互に頑な見合はす。緊張せる間。）

李林　陛下。私も今となつて陛下の前に哀れつぽい言葉を竝べて陛下の御同情や、お許しを求めようとは致しますまい。何故と云つて、私は今でも自分のしようとして居た事を悪い事とは思ひませんから。それに、それに死んでゆく人間にとつて生きてゐる人の思惑が何になりませう。私は今懺悔がましく私が生前陛下に對して企んだり、行つたりしたいろ／＼の事をのべる事は致しますまい。たゞ、私が今陛下に申しておきたい、是非陛下にきいておいて頂きたいといふ事はこれからの事です。私の亡き後陛下が天下を治められるに必要な事です。と云ひますのは私は今まで私の計畫の實現の必要上世の中の出來事で陛下に御知らせしなかつたり、僞つて御知らせして來たものが少なくありませんから、陛下は是非その事の眞相を御承知なすつておきゝにならなければいけません。（間）勿論御承知の事でせうけれども、私の他にも私と同じ樣な事を企てゝ居るものもある事ですから……。

玄宗　うむ。

（間。）

李林　陛下。（短き間）私自身の場合は例外にして頂きたうございますが、陛下は何故彼等の陰謀を御存知になりながら、それをどうかしようとはなさらないのですか。何故貴郎は手をつかねて彼等愚人共の向う見ずの企の進むのを見てゐらつしやるのですか。

玄宗　許せ、李林甫。俺はお前にさう云はれると面目ないのだ。（短き間）俺はまうろくした。いや、俺の心はくらんでしまつた。俺の生活は亂れ、俺の政治は墮落しきつてゐる。然も俺はそれを知りながら、それをどうかしようといふ氣にもなれない。いや、さういふ氣になる事はあつても、それを實行する根氣がない、努力もしない。俺は駄目になつた。俺は自分に對しての信頼を失つてしまつた。

李林　陛下！　自分自身をみくびる事は時として他人をみくびるよりもよくない事です。陛下はそんな方ではありません。（間）をこがましい事かも知れませんが、今の世の中で陛下に代つて此の大中國を今日あるよりもより安泰に、今日あるよりもより隆盛に、今日あるよりもより美しくすることの或ひは出來ると思はれたのは只私一人でございました。又その自信があればこそ私は陛下に對してあゝいふ事を企てたのでございますが。その私が亡き後、誰かよく陛下に代る、いや代つてよき者がありませう。そんな人間は少なくとも今の世にはありません。

一人もありません。それは私が斷言します。

玄宗　……。

李林　成る程それは陛下の今の御心は亂れて居るかも知れません。陛下の今の御生活は亂れて居るかも知れません。陛下の今の御政治もいゝものとは申せないでございませう。然し陛下は一度その氣におなりになりさへすれば此の大唐帝國を再び二十年以前の狀におもどしになる事が出來るのです。そして、たゞ陛下だけにそれが出來るのでございます。

玄宗　李林甫。お前は、お前は本當にさう云つてくれるのか。

李林　陛下！　第一に陛下のそのお弱いお心を御とりなほし下さい。四十年以前、あの暴逆な韋氏皇后の一族を打ち倒して此の大唐帝國を中興なさつた時の陛下の元氣はどこにおやりになりました？　（間）陛下！　私は陛下として尊敬した事は只の一度もありませんでした。然し一個の人としては私は常に、常に陛下を尊敬して居りました。そして今でも尊敬して居ます。私の亡き後に殘る最大の爲政者は陛下です。他の如何なる者が陛下に代つても、陛下が爲され得るより以上によく天下を治める事は出來ません。おゝ、そして、それ故にこそもう再び自分が起つ事の出來ぬ事を知つた今、昨日までの陛下の敵、恐ろしい敵が陛下の無二の忠臣と云へないまでも無二の忠告者となり得たのです。

玄宗　……。

李林　陛下！　自信をとり返して下さい。さうしてもう一度奮起なさつて下さい。今にして陛下がお起ちにならなければ、此の中國の天地は身の程知らずのヤクザ者が爭鬪のちまたとなり、その上先日陛下のおつしやつた通り外夷の蹂躪の下にまかされて民は塗炭に苦しみ、我等が祖先の國は失はれなければなりますまい。陛下。力を出して下さい。どうか、もう一度陛下の力を出して下さい。陛下さへその氣におなりになればそれこそあんな者共は何でもありません。秋の木枯しの前に飛び散る木の葉の樣に影をかくしてしまふでございませう。そして此の大中國は再び安泰な地となり、民は平和の喜びを享ける事が出來るでございませう。（間）然し、それは今でなければいけません。今です。今です、今といふ事が必要です。今ならまだ決して遲くはありません。然し今より一日おそくなれば一日だけ事は惡くなるでせう。早くなさいまし。早く。一時も早くあの身の程知らずどもの根を打ち切つておしまひなさいまし。（段々苦しさうになつてくる）そして、そして陛下その仕事には是非あの陳玄禮老人をお使ひなさい。あの老人を。あの人の心は鐵です。

もし世の中に信じきれる人の心といふものがあるとすれば、それはあの人の心です。あゝ、然し、もしもあの人がどうしても動かなかつたら……。そんな事は萬々あるまいとは思ひますが。もしも何と云つても動かない樣な事がありましたら、その時は仕方がありません。張九齡か、裴耀か、王忠嗣か、さもなければあの郭子儀をお使ひなさい、これらの者なら恐らく陛下の御心のまゝに身命を賭して働くだらうと思ひます。然し、出來る事なら是非陳玄禮を……。あの人さへ出れば他の者は自ら陛下の下に走せ集まるでせう。その上地方の者でも、今、都に來てゐる河西の哥舒翰や、平原の顏眞卿、常山の顏杲卿、饒陽の盧全誠、南陽の魯炅などは間違ひなく陛下の御味方をするでせう。そしてさうなれば總てはもう陛下の御心のまゝです。あの河東の靑二才などは物の數ではありますまい。然し陛下呉れ呉れも申しておきますけれど、今申した以外の人を力になすつてはいけませんぞ。決して人を過信なすつてはいけませんぞ。世の人心は今ではもう陛下が思つて居らつしやる以上に陛下を離れてしまつて居るといふ事を常に念頭において事をなさらないと間違ひますぞ。それから先程も申した樣に、何より大切なのは早くといふ事です。何よりも早く、一刻も、一瞬も。まだ／＼と思つてゐらつしやると取り返しのつかない樣な事になりかねませんぞ。おゝ、そして、そしてそれは陛下、貴郎をだけではない、此の中國幾億の民を地獄に蹴おとす事になるのですぞ。陛下、陛下にはもとより、こんな事は分りきつてなのでございませうね。

玄宗　分つて居る。（短き間）わかつて居ながら、先きも云つた樣に俺にはそれをどうする事も出來ないのだ。

李林　えゝつ。

玄宗　俺の中なる總ての根氣は俺を去つた。

李林　然し……。

玄宗　許せ。俺はもう何事をもする氣になれないのだ。

李林　では陛下は安祿山をあのまゝにしておゝきになる御積りなのですか。

玄宗　おゝ、俺は此の年になつて再び武器をとりたくはない。いや、とる力がない、とる氣になれない。俺はどうかして事を平穩の中にすませたく思つてゐる。

李林　事は決して平穩の中には濟みません。

玄宗　濟まないだらうか。

李林　濟みません。

玄宗　……。

李林　あの男は猪です。一度走り出したら、もう何物も目には入らなくなるものです。その猪が今あゝして走り出すのをひかへて居るのは、たゞ此の私が此處にあつたか

らです。その私がなくなつたら……。失禮ながら陛下、あの男は今、もう陛下を恐れは致しますまい。

玄宗　……。

李林　陛下！　御決心が必要です。もしも陛下が此の死にのぞんで居る男の言葉を御信じになるならば、そして、陛下の半生をもつて築かれた此の國を大事だとお思ひになるならば、そして、そして陛下の御心一つにその幸福をかけてゐる幾千億の民草をお思ひになるならば、陛下、今です。一時も早く彼の安祿山征討の兵をお出しなさい。そして事を未然におふせぎなさい。私が陛下に申し上げなければならない事はこれだけです。

（長き間。）

玄宗　李林甫！　（間）俺には、おゝ、俺にはそれが出來ないのだ。

（長き間。）

玄宗　俺には力がない。根氣がない。俺は駄目になつたのだ。

（長き間。）

李林　陛下！　（短き間）私は此の事にだけはさはりたくなかつたのです。けれども、今となつては云はないわけにはゆかなくなりました。總ての、總ての源がそこにあるのですから……。

（玄宗不安の面持。）

李林　許して下さい。私はそこにふれます。陛下の先刻から云はれた事は皆嘘です。陛下は少しもまうろくしてではないのです。陛下の根氣も、力も、聰明さも、皆昔のまゝです。いや、昔以上です。然も、陛下をして、あの青二才の前に腕をのばす事を許さないのはたゞ、たゞあの女、楊貴妃があるためなのです。あの女が安祿山の味方にあるためなのです。

玄宗　おゝ。

李林　陛下、情を知らない奴だと云はないで下さい。私は陛下の御心を察しないものではありません。然し、然し、世の中には戀より大事な事のある事を知つて下さい。

玄宗　おゝ。では、ではお前は、お前はどうしてもこの俺にあの安祿山を伐てといふのか。

李林　陛下が暗愚の名を百世に殘されたくないなら。

玄宗　あの女を失つても、あの女を……。

李林　男子が一生の仕事は、一女子に對する愛より重大なものとお思ひにはなりませんか。

玄宗　……。

李林　それがお分りにならない様な陛下ではない筈です。

（長き長き間。）

玄宗　（目ざめし如く）　おゝ。（間）　お前の云ふ通りにしよ

う。（短き間）お前の云ふ通りにしよう。

李林　それが陛下のおとりになるべき道です。陛下の御爲めといふより天下の爲めに。そしてそれ故にこそ私はこれ程までに言葉をつくして云ふのです、

玄宗　お前の、お前の云ふ事はよく分つた。（間）李林甫。俺は何故早く位を退かなかつたかと思ふよ……。（獨白の如く）さう思つた事だけは幾度となくあつたんだが、おお、俺にはそれすらも許されなかつたのだ……。

（李林甫、急に苦し氣にうめく。）

玄宗　おゝ、どうした。

李林　陛下……。

玄宗　おゝ、苦しいか。（間）あゝ、お前が生きて居たなら……。

李林　陛下！　御察し下さい。私は此の歳で死ぬのです。これから何か出來ようといふ曙光を、はるか彼方に見ただけで。何もせずに。（間）おゝ、私は怒りたい、のろひたい、泣きたい、わめきたい。然し、それが何になりませう。死は旣に固く私の心臟をつかんで居ます。あゝ、私はそれを感じる。私は恐らく明日の太陽は見ないだらう。そして、そして、もう二度とは此の世にかへつて來ないのだ。（突然、無理に起き上りつゝ）陛下。私の、私の手を握つて下さい。始めは陛下の忠臣であり、後には陛下の逆臣となり、今又陛下のもとにかへつた、そして、そして三十三で死んでゆかなければならない。此の男の手を握つて下さい。

（玄宗兩手で固く彼の手を握る。）

李林　（段々意識朦朧となり、夢幻的になる）おゝ、陛下。私は陛下に對して無數の恐ろしい事をたくらみました。けれども、けれども私は今まで只の一度だつて陛下を憎んだり、きらつたりした事はありませんでした。私の敵としたのは私の道をふさいで居る陛下です。陛下としての陛下です。人として、個人としての陛下には、私は常に變る事のない愛と尊敬とを持つて居ました。おゝ、愛と、尊敬。父親に對する樣な愛と、尊敬とをもつてゐました。（間）おゝ、陛下、許して下さい。卑劣にも近い私の種々の陰謀、策略を。私の樣な位置におかれ、私の樣な望をもつたものには、さうするより外にゆくべき道はなかつたのです。あゝ、私は努力した。一百姓の家に生れた私は此處まで來るのに、どれ程努力したか……。（間）光は見えて居る。もうたゞ一歩といふ所だ。そこで、そこで私は倒れた。おゝ、そして、そして、それは何もせずに倒れたのと同じ事だ。あゝ、私は倒れた。倒れた、そして死んでゆくのだ。何もせずに……。あゝ。（がつがりと床の上に倒れる）

玄宗　李林甫！（李林甫を抱き起す）

李林　陛下！

（李林甫は玄宗の手に抱かれたまゝ死ぬ。）

（長き間。）

（玄宗、李林甫の屍をそつと床の上に横へる。）

玄宗　おゝ、惡しき地に播かれ、生えたち、然も時ならぬ時に枯れてしまつた若き木よ！　もしもお前が善き地に生え、のびのびと育ち、そして天壽をめぐまれて居たならば……。それこそ此の中國は古今に比類のない大爲政者を見出したであらうものを。（長き間）李林甫よ。俺はお前の最後の言葉と、忠告を無駄にはしない。安らかに眠つてくれ！

（李林甫の服をとぢてやり、默然と彼の前に禮して、左手、入り來れる方に去る。）

蕭晃（幕の後より出る）何といふ事だ！（間）俺は此の自分の耳を疑はないでは居られない。いや、耳所か、此處に立つて、かうしてあんな話をきいた人間が本當に俺であるか、どうかといふ事さへ疑はしい樣な氣がする。（間）然し、それは事實だ。何と云つた所で動かす事の出來ない事實だ。（間）これはかうしては居られない。ぐづぐづして居れば何時どんな目に會はされるか知れたものぢやない。（間）どうしたらいゝものか。（長き間）おゝさうだ。もうからなつたら……。（間）さうだ。さうだ。それがいゝ。こんな事を知らせてやつたら安祿山は喜んで、俺を重く用ひて吳れるに相違ない。そして彼奴の仕事が上手くゆけば、俺の望みはとゞくわけだ。一所にやる奴が誰だつて、そんな事はかまふ事つちあない。（間）さうだ。さうしよう。それが一番利口な道だ。

第五幕

第一場

宮殿內、玄宗の室。

夜。

（玄宗、數人の侍女。楊貴妃は立つて舞つてゐる。）

玄宗（突然楊貴妃に）よせ！　いゝ、もうよせ。

（楊貴妃驚き舞をやめる。）

玄宗（稍落ち附いて）今夜はもうよさう。御苦勞だつた。皆下つてゆつくり休むがいゝ。

楊貴（玄宗の方に近より）陛下。どうかなさつたのでございますか。

玄宗　いや、どうもしはしない。

楊貴　でも……。

玄宗　心配するな。俺は一人きりになりたいのだ。（間）い

いから皆下つてくれ。皆。
楊貴　おゝ、では、あの私も……。
玄宗　うむ。お前も……。
楊貴　おゝ、陛下。
玄宗　氣づかふ事はない。俺は怒つてゐるのではない。明日又會はう。
（長き間。）
楊貴　（冷然と）では陛下、失禮いたします。
玄宗　うむ。
（皆去る。）
玄宗　（立ち上り獨白）朝起きては今日と思ひ、今日を過しては明日こそと思ふ。然し、たゞさう思ふだけで日をすごし、月をすごした。女と、酒とにひたり、夜となく晝となく歡樂に溺れながら……。あゝ、俺自身にも分らない。何時までかうして居たら、あの女の愛が得られるといふのだ。あの女の心は一日一日と俺をはなれてゆくだけではないか。おゝ、そして俺は、それを知りながらも、たゞあの女の側に居たいだけの爲めに俺の爲すべき總ての事を放棄して、馬鹿の樣にかうやつて居る。おお、玄宗よ、俺の心よ、お前は一體どうしたのだ、あの李林甫は死に臨んで何と云つた？　お前はあれのあの言葉を忘れたのか、そして、お前が彼の屍の前に誓つたあの言葉を忘れたのか、おゝ、玄宗よ、立て。そしてお前の爲すべき最後の事をなせ。（間）爲すべき最後の事を。おゝ、さう云つても、俺には果してその力が殘つて居るのか。何事かを爲すだけの力が殘つて居るのか、總ての、總ての力はあいつが俺から奪つて行つてしまつたのではないか。俺は只皇帝といふ面をかぶつて一人きり荒野の中に立つて居る樣なものだ。おゝ、それを思へば、それを思へば俺の勇氣はくだける、力はぬける。あゝ、あゝ、俺は。俺は、どうすればいゝのだ。
（此の時高力士入り來る。）
高力　陛下。（玄宗氣がつかぬ）陛下！
玄宗　（ふりむく）おゝ、高力士か。
高力　陛下。今時分突然參つて陛下の御靜思をお亂し申す事をお許し下さい。私はある人々にたのまれて是非內密で陛下に御願ひ申さなければならない事がありますので、こんな失禮をも顧みずに私に許された特權を濫用したのでございます。
玄宗　願ひといふのは何だ。
高力　他でもございませんが、陛下。（間）陛下の御不興を蒙つて居ります或る者が最後に、只の一度でいゝから陛下に直接御目にかゝつて申し上げたい事があるからお賴み申してくれとの事で、私もその表情に感じさせられて、

からして陛下の所にお願ひに出た次第でございますが、陛下、陛下はその者共の死をもつての願ひを御許し下さいますでせうか。

（間。）

玄宗　その二人といふのは誰だ。

高力　陳玄禮と張九齡でございます。

玄宗　陳玄禮と張九齡！　（間）おゝ、會はう。

高力　御會ひ下さいますか。

玄宗　會はう。連れて來るがいゝ。

高力　有難うございます。二人もさぞ喜ぶ事でございませう。では今直ぐ此處へ連れて參りますから……。

（去る。）

玄宗　おゝ、俺の氣持がともかくも、かういふ風になつて居る時、偶然にも彼等が來たのは天がまた俺に何事かをせよと命じてゐるのかも知れない。（步き廻る）

（高力士の後に從つて陳玄禮、張九齡入り來り、三人入口の所にたゝずむ。）

玄宗　おゝ、陳玄禮に張九齡か。さあ、此方へ入れ。

（三人共意外の感にうたれる。）

玄宗　遠慮するな。お前達は意外に思ふだらう。然し俺はお前達の思つて居る程馬鹿になつては居ない。（間）さあ、此方へ入るがいゝ。

（三人室の中に入り、高力士は少し後に他の二人は前に出て立つ。）

玄宗　俺はお前達の來て呉れたのを嬉しく思つてゐる。

陳玄　（からうじて）　陛下！　陛下は私達の申し上げる事をおきゝ下さいますでせうか。

（間。）

玄宗　喜んで。さあ、お前達の云ひたいだけの事を云ふがいゝ。

陳玄　（非常な努力をもつて）　陛下！　今のまゝ、今のまゝおけば此の唐帝國は亡びてしまひます。

玄宗　……。

陳玄　私は幾度も陛下に申し上げました。そして陛下の御不興を蒙りました。然し、私は今最後にもう一度、私の生命を賭して陛下に申上げます。（間）　陛下！　安祿山を、あの逆賊安祿山をうつて下さい。

玄宗　……。

陳玄　陛下は今日でもまだあの男の忠を信じておゐでになるのでございますか。あの男は陛下に弓を彎く樣な者ではないと信じておゐでなさるのでございますか。もし、さうなら陛下私の首をかけて斷言致します。それは陛下のお思ひ違ひであると。

玄宗　（何か云はんとする）

陳玄　（興奮して、直ぐつゞける）　陛下、陛下は先月以來ひんぴんと起る武庫の火災は何を語つて居るとお考へになりますか。あれはとりもなほさず彼の擧兵の準備が既完成に近づいた事を示すものではございませんか。彼の逆心は十年來の事でございます。そして近くは終にあの楊國忠の一味までを己が味方に引きずり込み、内外力をあはせて日夜反逆の鉾をとぎ陰謀の爪をみがいて居ました。おゝ、今や天下の人は、皆、悉くその事實を知つて居る。そして陛下は、それを御存知ない。國をあげて一匹夫に到るまで、國家の運命に心を痛めて居るとき、陛下は安閑として日夜酒色にふけつておゐでになる。私には陛下の御心を理解する事が出來ません。

玄宗　許してくれ！　俺の心は俺自身にも分らないのだ。

陳玄　えゝ？

玄宗　（少し間をおき）　俺は知らなかつたのではない。（短き間）　知つてゐながら、俺にはどうする事も出來なかつたのだ。

陳玄　おゝ、では、では陛下は彼等の逆心を御存知だつたのでございますか。

玄宗　知つて居た。（短き間）　恐らくはお前達の誰よりもよく知つて居たであらう。

陳玄　えゝ、それで、それで居ながら陛下は默つてすてゝおゝきになつたのですか。事がこんなになる今日まで……。では陛下は此の唐の國家を大切とはお思ひにならないのですか。

玄宗　……。

陳玄　どうして陛下がそんな事をなさつたのか、それを、それを、私に敎へて下さい。云つてきかせて下さい。

玄宗　許してくれ？　俺にはそれより言葉はないのだ。（間）始めの間俺は確かにあの男を信じてゐた。然し、それは極く始めの間だけで、その後間もなく俺は彼の異志を感じた。然しその時俺はあの男を相手にする氣にはなれなかつた。それは餘りに自分の力を輕蔑しすぎる樣な氣がした。自分を汚す事の樣な氣さへした。俺は默つて捨てておいた。あゝ、然し、今となつてみれば、いや、今となるまでもなく、實はそれが俺のそもそもの間違ひだつたのだ。手落ちだつたのだ。俺がさうして彼を見のがして居た間に、彼の勢力は強くなり、大きくなつた……。

陳玄　おゝ、では、では陛下は彼の勢力を恐れて、事をそのまゝにしておゝきになつたのですか……。

玄宗　勢力を恐れて……。おゝ、さう云はれても仕方がないかも知れない。

陳玄　えゝつ。

玄宗　（おさへる樣に）　然し、さう云ふ意味は俺が彼の武

力的勢力を恐れたのではない。彼の智的勢力を恐れたのでもない。俺は、俺は彼のもつ只一つの武器を恐れたのだ。

陳玄　えゝつ、彼のもつ一つの武器。それは、それは、何ですか。

宗玄（間をおき）それは、……。それはお前達も知つて居るだらう、あの女だ。楊貴妃だ。

（間）

玄宗　お前達は何といふ事だと思ふだらう。おゝ、然し、あの頃、いや、今もと云つた方が本當だらうが、とにかくあの頃俺にはあの女を離れての俺自身の生活といふものを考へる事は出來なかつた。あの女なしでは俺は只の一日も生きてはゆかれない氣がしてゐた。俺はあの女の奴隷であり、人形であり、犬であつた。その俺にとつては主人なるあの女が俺に手向ふ敵に組したのだ。俺はどうしたらよかつたのだらう。

陳玄　おゝ、では、ではやはりあの噂は本當だつたのですか。あの楊貴妃までが一緒になつたといふ……。

玄宗　さうだ。（短き間）どうしてそんな事になつたものか、俺にも分らない。然し、とにかく、あの女は何時の間にか、全く彼の一味の者になつてしまつて居た。おゝ、そして俺は俺の手を縛られた。足を縛られた。胸を、心を……。（間）おゝ、さうして、俺は自分の眼の前で進んでゆく彼等の企らみを、馬鹿の樣になつてぢつと見て居たのだ。見てゐるよりなかつたのだ

陳玄（奮然として）おゝ、では陛下には此唐帝國よりも、あの女の方が大事だつたのですか。此の國は亡びても、あの女さへあればそれでいゝとお思ひになつたのですか。

玄宗　……。

陳玄　陛下！　陛下！　貴郎は……。貴郎は何故、何故、もつと早くあの女を連れて貴郎の位をお退きにならなかつたのですか。さうすれば……。さうすれば……。（口ごもる）

玄宗　本當だ。お前の云ふ通り俺は一日も早く俺の位を去るべきであつた。俺はその事も幾度となく考へた又幾度となく決心しかけた。（間）然し、そこには俺にさうする事さへ許さないものがあつたのだ。

陳玄　それは、それは何ですか。

玄宗　お前達は又驚くであらう。俺はあの女に俺以外の……。いや、俺以外ではない、只一人の戀人、本當の戀人のある事を知つたのだ。

陳玄　えゝつ、楊貴妃に、あの楊貴妃に陛下以外の男が……。そして、陛下がそれを……。

玄宗　さうだ。俺は極く早い頃から、薄々それを感じては

居た。そして心をなやませては居た。然し、恐ろしい事實は、俺が安祿山の異志に感づき始めた頃から段々と俺に、はつきりして來た。俺はあの女の心にうつる俺自身といふものを、はつきり見た。俺はあの女の前に、少なくともその男と並び立つとき、たゞ此の大唐帝國の皇帝としてのみ立つて居る。そして、その他のものとしては立ち得ない事を知つたのだ。俺は絶望した。絶望に狂氣するかと思つた。(短き間)あゝ、狂氣してくれたならば、俺の心があの時狂氣してくれたならば……。俺はどんなにそれを望んだであらう。然し俺の理性は俺を見すてゝは呉れなかつた。そして、そして俺は此の正氣の眼で總ての事を見て居なければならなかつた……。餘りの苦しさに堪へかねて、俺は幾度その男を殺し、女を殺し、俺自身をも殺さうと思つたか知れない。おゝ、然し、俺には、俺にはそれが出來なかつた。(間)俺は、俺はその男をも愛して居たのだ。

陳玄　えゝつ。その男をも……、その男をも……。

玄宗　さうだ。(間)俺はあの女を知らない前からその男を愛して居た。一人の女として愛して居た。所が、その俺の女が、俺の女を奪つたのだ。今迄の俺の愛人は男となつて俺の愛人を奪つた。俺の心は憎惡と、怒りに燃えた。(うめく樣に)おおゝ、然も、然も、その憎惡と怒りの間からも、俺は、その二人を愛さないでは居られなかつたのだ。(間)俺は一方その二人を死ぬ程憎みながら、一方その二人の寛大此の上もない保護者でありたいといふ強い要求を感じた。いや保護者でありたいのではない。保護者で滿足するといふ氣持だらう。いやもつと露骨に云ふならば、その場合俺にはもう自分がその二人の保護者であり、とにかく、その二人に有難がられ、或る意味で愛されて居るといふより他に生き得る道はなかつたのだ。少なくとも、それが俺に殘された一番樂しい……道だつたのだ。おゝ、そして、俺がその二人に對して、さういふ位置を保ち得るのは、少なくとも完全に保ち得るのは俺の今の位置、皇帝といふ位置よりないのだ……。

張九　(毅然として)陛下！　では陛下のそんなつまらない滿足の前に此の唐一國の運命を顧られない、いや、顧る必要がないとおつしやるのですか。

高力　(制して)張九齡！まあ……。

玄宗　(高力士に)すてゝおいてくれ！　俺はせめてもらひたいのだ。俺は出來得るだけの強い非難が受けたいのだ。今の場合俺には慰めよりも、譴責の方がよりいゝ慰めなのだ。

高力　でも、陛下、陛下の心もお察ししないで……。

玄宗　おゝ、高力士！　お前には分つてくれるか。お前に

は……。

高力　あれが分らないでどう致しませう。私は心から陛下の御心をお察し致します。

玄宗　然しな、高力士、何と云つても國家に對しては俺は罪人だ。何と云はれても返す言葉のない罪人、少なくとも不忠實きはまるものだ。俺には、俺の醉ひしれた心には此の長安中の人の心より、あの女、あの曾て俺を愛してくれたことさへない、あの女の只一度の微笑の方が貴とかつた、此の大唐帝國そのものよりあの女一人の心の方が貴とかつた。俺はその事について自分をせめようとは思はない。自分自身が間違つてゐたとも思はない。いや、それは「せめる」とか、「間違つてる」とかいふ事以上のものだ。然し、俺が、此の皇帝といふ位置にある俺が、この位置をも責任をも忘れて、その戀の爲めに俺のなすべき事をすて、俺に借されて居る權力を濫用し、それから生ずるあらゆる恐ろしい事を顧みなかつた事は許せない罪、天下の人々に對して謝するに言葉のない罪を犯したものだ。その點俺は誰に何と云はれても一言もない。許してくれ！　俺は物の公私の別の出來ない人間だつた。いや、區別できてもその區別に從つて行動する事の出來ない人間だつた。俺は自分一個の爲めに國家の運命を危くして顧みない人間だつた。俺は、俺は皇帝といふ位置に居る資格のない人間だつたのだ。

陳玄　（默然として居たが、突如として進み出で）陛下！　陛下の御心も御察しせずに、たゞ一途に陛下をせめ、惡口した事を許して下さい。

玄宗　あゝ。

陳玄　陛下！　私は働きます。私は働きます。犬の樣に、馬の樣に。陛下、陛下のために働きます。私の命のつゞく限り、力のつゞく限り働きます、使つて下さい。私を使つて下さい。私に命じて下さい。陛下の帝國を守れ！と只一言私に命じて下さい、私はやります。何におそい事があるものですか。年はとつても陳玄禮です。それに、いくら亂れて居るとは云つても、まだ／＼天下には陛下のために身命ををしまない武將は少なくはありません。何が、何があんな靑二才などにまけるものですか、どうか、陛下心をきめて下さい。そして私に命じて下さい。只一言「行け」と。

玄宗　陳玄禮！（間）お前は、おゝ、お前はこんなにまでなつた俺の爲めに、未だ働いてくれるといふのか。

陳玄　（玄宗の前に膝まづき）陛下！　私は、陛下の臣ではないのでございますか。

玄宗　おゝ。（陳玄禮の肩に手をおき、涙ぐむ）陳玄禮。俺は、俺はお前に感謝する。

陳玄　陛下！

玄宗　陳玄禮！（間）やらう。（間）もう一度。今もう一度、四十年前のあの様に……。俺達に殘された最後の力を振はう。

陳玄　おゝ、陛下……。

侍從　陛下！　申し上げます。

（此の時一人の侍從急ぎ入り來る。）

玄宗　何んだ。何か起つたのか。お前の顏は。

侍從　はい。只今、あの大原から至急の使者が參りまして、即刻陛下に拜謁いたしたいと申します……。

玄宗　何に？　大原から使者だ。

侍從　はい。

玄宗　通せ、直ぐ。

侍從　はい。（去る）

陳玄　彼奴が、安祿山奴が、いよ〳〵事をあげたのではないでせうか。

玄宗　恐らく、恐らくさうだらう。

陳玄　もし、もし、さうならば、陛下……

（大原よりの使者あわたゞしく入り來る。後より侍從從ふ。）

使者　陛、陛下……。

玄宗　落著いて話せ。安祿山の事だらうが。

使者　は、はい。陛下。そして、そして大原の守は破れました。

張九　えつ、何に、大原の守がやぶれた。

使者　はい。敵は何を云ふにも二十萬からの兵をもつて居ります。然も、大部分が胡人の軍でございます。僅か五千の守備兵ではどうする事も出來ません。その上多くの者は戰はない先に逃亡してしまひました。

張九　何に？　戰はずに逃げた？

使者　はい。

張九　馬鹿なつ。何といふ事だ。

使者　殘りの者は皆死力を盡しましたが、どうする事も出來ずに、皆殺されるか、捕虜になつてしまひました。そして安祿山の軍は虎の樣な勢をもつて洛陽の方に進みつつあります。

陳玄　陛下！　もう、かうなりましては一刻を爭ひます。直ぐに今直ぐに追討の命をお下し下さい。私は明朝、夜あけと共に此處を出發致したいと思ひます。

張九　陛下、私にも同樣、明朝出發の命をお下し下さい。

（間。）

玄宗　行け。行つてくれ。然し、お前達だけではない。俺も行く。

陳玄
張九｝「えゝ、陛下。貴郎も！。

玄宗　うむ。俺も行く。（間）おゝ、久しぶりで俺の中に湧いた此の血よ、戰場こそ今俺のゆくにふさはしい所だ。

陳玄（歡喜しつゝ）おゝ、陛下！

玄宗　時がない。出發の準備をしよう。（使者に）御苦勞だつた。ゆつくり休むがいゝ。

使者　はつ。（去る）

陳玄（云ひにくさうに）陛下。（間）一つ陛下に伺つておかなければならない事がございますが……。

玄宗　何に……。

陳玄（力をいれて）陛下は楊國忠（玄宗、はつとする）をどうなさる御心算ですか。

玄宗　……。

陳玄　いざといふ時の御決心は、おありになりますか。

玄宗　いざといふ時……。

陳玄　はい。（間）これは單に私一個の杞憂にすぎないかとは思ひますが……。（短き間）私は、あの男をあのまゝほつておいては……（口をつぐむ）

玄宗　おゝ、お前は先づ、あの男を殺さなければならないといふのか。

陳玄　陛下！　私は……。

玄宗（おさへて）陳玄禮。お前がさう云ふのは分る。（間）然し、然し、どうか、それだけは許してくれ？『今になつても』と笑つてくれ！　然し、俺には出來ない。（短き間）あの男を、あの男を殺さなければならないといふなら、あの女をもといふのだらう。おゝ、俺には……。

陳玄　陛下！　男と女とは違ひます。私は楊貴妃の事を申して居るのではございません。私はたゞ楊國忠の事を申して居るのでございます。

玄宗　おゝ、然し、彼はあの女の兄だ。あの女はあれを愛して居る、そして、そして俺はあの女にあの男の安全を約して居る。俺にはあの男を殺す事は出來ないのだ。まかせてくれ、俺にまかせてくれ！　惡い樣には、惡い樣にはしないから……。

陳玄　陛下！　勿論私は陛下を御強ひ申す事は出來ません。然し、陛下！　あの男の涯を知らない横暴、豪奢は長い間全長安の民が憎惡の的でございました、しかもその上あの男が安祿山と私に通じて居りました事は多少心ある者の間には周知の事實でございます。今その反逆者を打ちに出陣する時にあたつて、如何に端くれとは云ひながらその一味の者、然も表面宰相の顯職にある彼の楊國忠を後に殘してゆくといふ事になれば、出てゆく將卒、後

に殘る諸人の不服、不安はどんなでございませうか。私は恐らく彼等がそれを默つては居ないだらうと思ふのでございます。

玄宗　……。

陳玄　所がこれに反して、今出陣の時、勅令を下して、彼を捕へ、先づ出陣の血まつりに彼を斬つてすてる事が出來たなら……。おゝ、それこそ軍に從ふ將卒の血は如何にもえ立つ事でございませう。長安幾百萬の民は如何に快哉を叫ぶ事でございませう。そして、又それを傳へきいた天下の民の心は如何に奮ひたつ事でございませう。その時陛下自ら陣頭に立つて全軍を指揮なさるならば、それこそ彼の安祿山何者でございませう。天下は再びもとの天下になり、中國はたゞ陛下の御心のまゝに動くでございませう。

玄宗　(何事かを心に決して)　お前の云ふ事は本當だ。(短き間)　その通りにしよう。

陳玄　おゝ、陛下、私の申した事を……。

玄宗　明日の朝、彼を捕へて斬らう。

陳玄　陛下!　勝利はもう此方のものでございます。

(此の時一人の侍從あわてゝ走り込む。)

侍從　陛、陛下。城南の大武庫が火事でございます。

張九　えつ、何につ、城南の大武庫が火事だ?

侍從　(窓外、稍や赤くなれる空を指し)　あれ、あの通り此處からも見えます。

陳玄　失火か。　}同時。
張九　武器は助かつたか。

侍從　つけ火です。つけ火です。四方、八方から一時につけたのです。そして、そして武器は一つも取り出す暇はなかつたと云ひます。

張九　(どなる)　番人はどうしたのだ!

侍從　殺されたのです。皆殺されたのです。そして犯人共は火をつけて逃げたのです。それを誰も知らなかつたのです。

陳玄　陛下!

玄宗　陳玄禮!　(間)仕方がない。西の庫の古い武器を使へ。

陳玄　承知致しました。何に、何にを失望する事があるものですか。天は逆臣にはくみしますまい。では……。

(三人行かんとす。)

玄宗　(よびとめる)　高力士!

高力　はつ。

玄宗　お前に一寸たのみたい事がある。殘つてくれ。

高力　はい。

(陳玄禮、張九齡去る。)

玄宗　高力士！　お前には、お前だけには分つてもらへるだらう……。

高力　……。

玄宗　俺は長い間、闇の中をさまよい歩いた。……さう、餘りに長い間。自分でも分らない。俺はあの女に縛られて居たのだ。いや、あの女だけではない、あの女をもとして大勢のものに……。俺はどうする事も出來なかつたのだ。（間）おゝ然し、今、今時が來た。俺がその束縛から解放される時が來た。餘りに遲く、然し、然し確實に……。

高力　陛下！

玄宗　俺は總てを失ふ。然し、總てを得る。俺は淋しい。然し俺は幸福だ。

高力　おゝ、陛下。

玄宗　俺は明日の朝早く長安を去る。再び此處に還つて來るか、それは分らない。そこで、俺はたのみたいのだ。お前に、俺の知つてゐる者の中で、只一人俺の心を知つてくれるであらうお前に頼みたいのだ。

高力　陛下！　私に、出來まする事なら、どんな事でも……。

（間。）

玄宗　高力士！　俺は、俺はあの女を殺す事は出來ない。（間）彼等はあの女を殺せといふだらう。俺にはあの女を殺す事は出來ない。

高力　陛下！

玄宗　高力士！　あの女を逃かしてやつてくれ。あの女の幸福を守つてやつてくれ！　これが俺のお前にする最後の願ひだ。

高力　おゝ、陛下、どうして……。

玄宗　身につけ得るだけの金をつけて、今夜の中にあの女を連れて逃げてくれ！　あの女をつれて……。そして、そしてあの男をも連れて。

高力　楊國忠をでございますか？

玄宗　（うなづく）おゝ。（間）李龜年だ

高力　……。

玄宗　二人の幸福を守つてくれ。どんな所でもいゝ。あの二人に幸福な、光ある生活を送り、安らかな生涯を終らせてくれ。俺は、利己的な俺は、それを俺自身の幸福のために、平和のために、喜びのために望むのだ。

高力　……。

玄宗　高力士！　お前は此の俺の最後の願ひを承知してはくれないのか。

高力　……。

玄宗　高力士！　俺はお前に頼むのだ。（間）お前も知つて居るだらうが、俺の力はいろ／＼の者にそぎとられた。

正直に云つて、今俺には、あの安祿山に勝てるといふ確かな自信はもてないのだ。若し一度俺の軍が破れたなら、そして天下が安祿山のものになつたなら、よし彼の味方をして居たとは云へあの女の運命は安らかな、幸福なものではあるまい。俺はお前に頼むのだ。お前は此の俺の最後の頼みをきいてはくれないのか。

高力　陛、陛下。私が御引受け致しました。此の事は御心にはおかけなさいますな。

玄宗　高力士！　有難く思ふよ。

高力　陛下……。

（間。）

玄宗　それから、それから、あの楊國忠をも使ひをやつてくれ。今夜直ぐに長安を落ちる樣にと……。

高力　えつ、楊國忠をも……。

玄宗　おゝ。あの男は馬鹿だ。安祿山に一味しながら今はもう捨てられて居るだらう。それでなければ今頃まで長安にぐづ〳〵して居る譯はない。可哀相な男、そしてあの女の兄だ。とにかく、あいつをも助けてやつてくれ。

高力　（きつぱりと）承知致しました。

玄宗　頼む……。

高力　陛下！　では時がございませんから、いづれ又後程……。

玄宗　いや、もう會ふ暇はあるまい。いや、暇はあつても會へば又別れが苦しい。

高力　おゝ、では陛下は、もう、あの楊貴妃にも……。

玄宗　おゝ、會ふまい。今となつて、もし、未だあの女が僞はりを云つたら……。おゝ、それは俺には堪へられない。俺はもうあの女に會ひたくない。

高力　おゝ、でも、でも、もし楊貴妃に陛下の此の御心が分つて、是非お會ひしたいと申されたら……。

（間。）

玄宗　（激しき苦悶の後）默つてやつてくれ！　默つてやつてくれ！　何も云はずに彼女を連れ出してくれ。總ての事は俺が戰場に去つてから……。おゝ、俺が此の世を去つてから明かしてくれ……。

高力　何を、何を御心弱い事をおつしやいます。

玄宗　心弱い？　おゝ、然し、兎が楊子江を飛びこさうと云つたら誰が笑はない者があらうか。力のない者は弱い事を云ふよりあるまい……。俺とても……。

高力　（おさへて）陛下！　陛下は餘り御自分を見くびりすぎておゐでになります。いくら誰がどうしたからと云つて陛下は陛下です。そんな、そんな事をおつしやるとは……。

玄宗　お前は知らないのだ。誰も知らないのだ。李林甫か

……。（云ひかけてやめる）
高力　えゝ。
玄宗　云ふまい。きいてくれるな。（間）お前の云ふ通り俺は心を強くもたう。然し、俺はもう會ふまい、あの女にも、お前にも、達者で居てくれ！　（強ひて）又會ふ時があるかも知れない。
高力　陛下。（間）では、その時をお待ち申して居ります。
玄宗　おゝ。頼んだぞ。
高力　はい……。（感にたへかね急ぎ足に去る）
玄宗　（始め、呆然と室の中央に立つて居るが、やがて窓の所にゆき火事の方を眺める）おゝ、俺は、俺自身にも分らない盲目の力に引きずられ此處まで來た。（間）內なるものも、外なるものも、總ての力は俺を見捨てゝしまつた。（間）陳玄禮のあの熱誠に動かされて、あの時あゝは云つたものゝ今此の俺に何が出來る。今出來る位なら、今をまたずにして居たらう。俺にはその力はない。その力のない事を知つて居るからこそ俺は今まで、かうして居たのだ。（間）あゝ、かうなつた人間に殘されて居る事は、たゞ與へられた最後の盃をいさぎよく飮みほす事だけだ。さうだ、それだけだ。たゞ、それだけだ。

（長き間）

玄宗　（突然）許してくれ！　楊貴妃！　俺はお前に對して如何に數々の罪を犯したか。そしてお前から如何に數數のよきものをもらつたか。俺はお前の罪人であり、お前は俺の恩人だ。おゝ、俺はお前に謝罪し、感謝する俺を許してくれ！　（間　俺は幸福た。今、今俺は自分を幸福な者だと思へる。おゝ、たゞ、たゞ最後に一度だけでもお前の誠心を見る事が出來たなら……。それが淋しい。たゞそれだけが、お前の誠心にふれずに死んでゆく、ただそれだけが淋しい。（間）然し、然し今更何を云はう。誰に人の心を強ひる事が出來よう。俺は、もう何もお前に求めはすまい。たゞ、俺に、此の俺にお前を愛する事だけを許してくれ。たゞ、それだけを、それ以上に、おお、俺はお前に何を望まう……。

（武庫の棟燒け落ちたらしく、此の時すさまじき勢で火の柱が天に逆立ち、すごい音かすかに聞ゆ。）

宗間　あゝ。俺が半生の努力を語る、あの城南の大武庫は燒けた。あだかも、その燒けおちた灰にも似た俺の餘生を絕てと敎へるかの如に……。（間）萬事はすぎた。萬事は……。六十年に餘る俺の生涯、夢の樣に、たゞ長い夢の樣に。

第二場

同じく宮殿內。庭園に接せる大廣間。

朝早く。

（庭上には多數の兵集り居る樣子。人のざわめき、太鼓の音、その他の音哱々聞ゆ。玄宗、武裝し、同じく武裝せる數人の武士を從へて左手より出る。同時に右手より楊貴妃髮をふり亂し、青い、凄い顏して出る。數人の侍女從ふ。玄宗は楊貴妃を見て愕然として立ち止る。）

玄宗　（取り亂しつゝ）高力士に、高力士に會はなかつたか。

楊貴　そんな者に、そんな者には會ひません。

玄宗　おゝ、お前は、早く逃げなければいけない。

楊貴　何を、何を、私が逃げるのです。

玄宗　おゝ、逃げてくれ、逃げてくれ、お前は……。

楊貴　陛下、陛下、陛下。貴郎は貴郎はあんまりです。私に默つて、私に默つて戰ひにお行きになるなんて、あんまりです。あんまりです。

玄宗　楊貴妃！　そんな事を云つてる時ぢやない。早く、早く身を隱せ、危いのだ。

楊貴　そんな事を、そんな事を……、あゝ、私は、どうしたのだらう。貴郎は私を捨てゝお行きになるのだ。あゝ、私は……。

玄宗　おゝ、だから俺はお前に會ひたくなかつた。

楊貴　えゝッ、だから、だから私に會ひたくない。何故です、何故です。きかせて下さい。

玄宗　……。

楊貴　おゝ、陛下！　（突然玄宗の胸に縋りつきつゝ）私はそんな者になつてしまつたのでございますか。陛下御自身御出陣なさるといふ一大事をさへ知らせて頂く事の出來ない樣な者になつてしまつたのでございますか。犬の樣に、犬の樣に捨てられてしまつたのでございますか。

玄宗　……。

楊貴　おつしやつて下さい。おつしやつて下さい。私は陛下に何か惡い事でも致しましたか。何か陛下の御氣にさはる樣な事でも致しましたか。おゝ、もしも私が知らぬ間に犯して居る手落ちがあつたら、惡事があつたら私は陛下の前に膝をついてあやまります。身を投げて謝罪します。打つなり、蹴るなり、陛下の御自由になさつて下さい。おゝ、たゞ私を見捨てるだけは、見捨てるだけは、許して下さい。

玄宗　……。

楊貴　おゝ陛下、陛下は私の胸です、頭です、心です。陛下の御側を離れて私は一刻たりとも生きて居る事は出來ないのです。どうか私を見捨てないで下さい。見捨てないで下さい。

玄宗（苦し氣に、然し、それを制しつゝ）心配するな。萬事は高力士に云ひつけておいた。お前達は俺の去つた後も決して不自由はしないだらう。

楊貴（猛然とせる如き態にて）おゝ、陛下、貴郎は、貴郎は私の生活の事をおつしやるのでございますか。いやしい物質的の生活の事をおつしやるのでございますか。（突然ヒステリカルに）あんまりです。あんまりです。陛下。私はそんた、そんな人間ではありませんそんな、そんな……。おゝ、私は、私は……。どうしよう。どうしよう……。私はそんな意味で云つたのではありません。私の大事なのは陛下の御心です。陛下の愛です私のほしいのはそれだけです。それがなくなつた時、私の前に總ての光はなくなるのです。私の生活は斷ち切られてしまふのです。その陛下があんな事をおつしやる。あゝ！　私は、私は、どうしたらいゝのだらう。どうしたら、どうしたら……。

（間。）

玄宗（苦痛をおさへて、重々しく）楊環！

（楊貴妃思はず顏を上げ玄宗を見る。）

玄宗　今になつても、今になつても、未だお前は俺の前に本當の事を云はうとはしなかつたのか。

楊貴（始め少時く玄宗の言葉の意味が分らないで居るが、やがて其意味をさとり驚きつゝ巧にそれをおしかくしながら）陛下、私は何も陛下に……。

玄宗（おさへて）僞の上に僞を重ねるのは止せ。（短い間）俺は今までの長い間のお前の僞をせめようとは思はない。いや、それ所か、お前にその長い間の僞を強ひさせた男として俺はお前の前に許しを乞ひたくさへ思つて居る。（短き間）然し、然し楊貴妃、俺は今の今の場合お前に僞を云はせたくなかつた。又きゝたくなかつた。だから、だから俺はお前に逢はずに行かうと思つた。

楊貴　……。

玄宗　楊貴妃！　お前は俺がお前を捨てゝ戰に行くと思つて居るのか……。（間）俺はお前に捨てられて戰場に行くのだ。そして恐らく其處で死ぬだらう。

楊貴　えゝつ、死ぬ？　死ぬ？

玄宗　さうだ。死ぬだらう。（間）楊貴妃！　俺は何も云はずに行きたく思つて居た。そして總ての事は俺の去つた後で高力士からきいてもらひたく思つて居た。その方がお前の爲めにも、又俺の爲めにもいゝと思つて居た。然し今此處で、かうしてお前に會つてみると俺は此のまゝ默つて行つてしまふ事は出來ない氣がする、一刻を爭ふ時だが、出來るだけ手短かに總ての事を打ち明けよう。聞いてくれ。

楊貴　（默つて頭をたれて居る）
玄宗　（武士達に）一寸の間遠慮してくれ。
武士達　はつ。（皆左手に入る）
（間。）
玄宗　楊環！（楊貴妃思はず、顏をあげて玄宗を見る）お前は何も知らないのだな（短き間）。俺が何も知らないと思つてゐるのだな。
楊貴　（不安と、恐怖との色をもつて玄宗を見る）
（間。）
玄宗　俺は知つて居たのだ。何も彼も俺は殘らず知つて居たのだ。
楊貴　（不安と恐怖とをもつて）陛下！
玄宗　お前が俺と一緒に暮してくれた幾年月の間、お前が只の一度も俺を本當に愛してくれた事のなかつた事も、毎日毎日お前が俺に僞を云ひ、僞を見せ、苦しい狂言を演じて居た事も、此の三年以來、あの安祿山にまどはされて、終にお前が私(ひそか)にではあるが弓をひく人間になつた事も……。
楊貴　（驚愕と、恐怖との烈しき發作をもつて）おゝ、陛下、陛下、陛下！（玄宗の足元に膝まづく）
玄宗　何も恐がる事はない。先刻も云つた通り、俺はその事でお前をせめようとは思はない。いや、俺にはお前をせめる事は出來ない。（間）たゞ、たゞ、俺は今死にに行く今、一言、たゞ一言お前の僞でない言葉がきゝたいのだ。最後の前只一度でいゝお前の誠心が見たいのだ。お前は此の俺の願ひをかなへてくれないか。今になつても未だ俺の前に僞りの人として立ち、俺に僞を信じさせようとするのか。
楊貴　おゝ、でも私は、私は……。
玄宗　お前は本當の事を云ふのが恐ろしいのか。本當の事を云ふと俺がお前を罰するとでも思つて居るのか。お前は女だな。（間）お前には今となつて未だ此の俺のお前に對する本當の心持が分つてくれないのか。此の俺がお前をどんな心持で愛して居るか、分つてはくれないのか。（間）成る程それは俺がお前を知つた最初の間俺はたゞ盲人の樣にお前の愛を强要しお前を苦しめたらう。然しそれは最初の中だけだつた筈だ。其の後俺の心の眼がお前を知つた事によつて開かれ出すと共に俺はそれまでの自分の爲てゐた事思つてゐた事の間違ひだつた事を知つて來た。自分さへ望めば何事も意のまゝになると思つて居た俺の誤信は根柢からくつがへされた。俺は空しき帝王の殼から脫けて始めて一個の人間として立つた。そして、俺はそれまでの俺がお前に對して求めた樣々の無謀な要求に對してお前に恥ぢ、謝罪したく思つた。然し、俺の

變な自尊心が何故かその時俺にさうする事を許さなかつた。(間) 俺の自尊心? いや、いや、俺には勇氣がなかつたのだ。お前の前にその事を打ち明けるだけの勇氣がなかつたのだ。(短き間) ……。俺はたゞ心の中ではお前にあやまり、心の中で俺のお前に對しての態度を改めた……。然しそれはお前には分つてはくれなかつた……。(間) 泣く事はない。お前は何も泣く事はない。お前にそれが分らなかつたのはむしろ當り前だ。その原因はお前になくて俺にあつたのだ。(間) 俺には自信がなかつたのだ。その時俺は既に年とつた老人だつた。お前の周圍にはお前の若い心を引きつける男は澤山居た。俺には一個の人として、お前を俺のものになしうる自信はもてなかつた。然も、然も、俺にはお前なしの生活といふものは考へる事さへ出來なかつたのだ。そこで俺は意氣地なくも、それが如何な馬鹿々々しい事であるかは知りながら、自分の心をおしかくして、帝王といふものゝ特權をもつてお前を、いやお前の身體を無理に俺の側にひきつけておいたのだ。蟲よくも、さうやつて居る中には何時か自然に俺の心がお前に分つてくれる事もあるかと思ひながら……。(間) 然し、終に俺の望んで居た樣な時は來なかつた。お前の心は一日一日と俺から離れた。そしてたうとう全く他の男のものになつてしまつた。

楊貴　えゝ、陛下、えゝ、私が、私が……。

玄宗　楊環! お前はお前が俺をふみにじつて、あの李龜年の下に去つた事を知つた時の俺の心を察してくれることが出來るか。いや、いやそれよりも、それよりも、その後お前達二人が巧に俺を僞いて居る積りで、種々の見るに見かねる樣な事を俺の前でするのを見た時の俺の心持を察する事が出來るか。俺は幾度お前達二人を殺して自分も死なうと思つたらう。然し、然し、俺にはそれをする力さへなかつた。さうして俺はたゞ默つてお前達のする事を見て居た……。

楊貴　(陛下の足元に身をなげる) 陛下、陛下、私の罪をお許し下さい。

陛下　許して呉れといふのは俺の方だ。俺は求むべからざるものを求めようとしたのだ。お前の心にないものをお前の心から引き出さうとしたのだ。そしてお前に僞を云はせ、僞を爲せたのだ。俺はお前の前に罪人た。然し許して呉れ! この爲めには俺も苦しんだのだ。苦しみぬいたのだ。さあ、立つてくれ、そして此の互ひをあざむき合ひ、苦しめ合つた、然し、恐らくは互ひの心を育てあつた二人が、此の世に於て只一度の誠心からの抱擁をしようではないか。

楊貴　でも陛下、でも陛下、私は、私は……。

陛下　楊環！　お前はまだ俺の心が分つて呉れないのか。此の俺が、今はお前にどんな愛と、感謝とをもつて居るか分つてくれないのか。俺はお前の爲めに俺の名譽を失つたらう。俺の國を亡ほしたらう。然し、然し、俺はお前のおかげで俺の魂をとりかへした。そして、おゝ、よし、その生活は如何に苦しかつたにせよ、俺は人間らしく、人間らしく生きる事が出來た。俺はお前に感謝しないで誰に感謝する事が出來よう。お前は俺の母だ。俺を人間として生んでくれた本當の母だ。さあ、たつて、俺の手を握つてくれ！

楊貴　（陛下の足にすがり）　私を連れて行つて下さい。私を連れて行つて下さい。どこへでも、どこへでも、陛下のおいでになる所に連れて行つて下さい。私は何でもします。何でもします。陛下の爲めになら何でもします。どうぞ、どうぞ私を助けると思つて、陛下のおそばにおいて下さいまし。

（間。）

玄宗　おゝ、（涙ぐむ）楊貴妃！（彼女の手をとる）分つてくれたのか。

楊貴　陛下、陛下、陛下！

（二人固く抱き合ふ。）

玄宗　（少時くして）　俺の願つて、然も求められずに居たものは滿たされた。俺は心を殘す事はなくなつた。さあ、離してくれ！　俺は行く所に行かなければならない。

楊貴　お！　陛下、貴郎は私を、私を連れて行つては下さらないのですか。

玄宗　うむ。お前は俺と一所に來てはいけない。お前の行くべき所は他にある。

楊貴　いえ、いえ、決して、決して、私はもう陛下より他には……。

玄宗　感激によつて、お前の本心に從ふ事を忘れてはいけない。お前のゆくべき男は俺ではない筈だ。

楊貴　えゝ！

玄宗　俺はお前がその男の所に行くのを望む。望むだけではない。それを俺達三人のために喜ぶ。

楊貴　……。

玄宗　楊貴妃、世の中で一番恐ろしい事は「僞る」といふ事だ。他人を僞り、己れを僞る、それが何よりも恐ろしい。俺は俺の長い生涯をたゞその僞の中にのみ過した。俺はお前にその後を追はせたくない。お前は李龜年の所にゆけ。そしてお前達二人の心のまゝに生きよ。お前達が此の世に於ての生活に必要なだけのものは、俺が最後の贈物としてお前に送る。萬事は高力士が取り計らふであらう。幸福に暮せ！　楊貴妃！　お前の幸福、それは、と

りもなほさず俺の幸福なのだ。

楊貴　陛下、陛下……陛下。(床の上に泣き伏す)

玄宗　(涙ぐみつゝ)泣いて居る時ではない。早く行つて身を隠してくれ。

楊貴　えゝ？　身を隠す……。

玄宗　おゝ。(ある恐怖にうたれ默る)

(此の時右手より陳玄禮　張九齢武装して出る。此の場の様を見て驚く。)

(玄宗はあわてゝ、たゞ無駄に楊貴妃を隠さんとする。)

陳玄　(しづかに玄宗の方に進み)　陛下！(小聲で)申し上げ悪い事でございますが、將卒の要求は私の思つて居りましたより烈しうございます……。

玄宗　(亂れつゝ、左手にむかひ)　誰か、誰か居ないか、高力士は居ないか、高力士を、高力士を呼べ！

(庭上騒然。「楊貴妃を、楊貴妃を」といふ叫び聲聞ゆ。玄宗絶望の狀。)

陳玄　陛下！　御決心が必要かと存じます。もとより私共の力の限りはつくしましたが……。

玄宗　やめてくれ、おゝ、おゝ高力士は居ないか。

楊貴　(突然立ち上り)　陛下、陛下は私の事でお困りになつてゐらつしやるのではございませんか。

玄宗　いや、お前の事ぢやない。お前の事ぢやない。(陳玄禮に)まかせてくれ、俺にまかせてくれ。いゝだらう。

陳玄　陛下、私はもとより……。然し、問題は兵卒共でございます。

玄宗　兵卒共には俺が云ふ。

陳玄　云つてきかせるならば、陛下、私もこんな苦勞は致しません。陛下、私はどれだけ言葉をつくしたか分りません。私の最後の智慧をしぼり、最後の辭をつくして說きました。然し始めから、そんな事に耳をかたむける者さへありません。それ所か、中にはそんな事を云ふだけでも私を逆徒の仲間だと申す者さへございます。(間)私は陛下が彼等の前に、さういふ事をおつしやつた時の結果を恐れるものでございます。

楊貴　(陳玄禮に)　私の事でせう、私の事でせう、私を殺せといふのでせう。

玄宗　楊貴妃！　楊貴妃！

楊貴　さうなのでせう。さうなのでせう。

玄宗　あゝ。

(庭上益々騒然たり。王忠嗣、哥舒翰同じく武裝し、數名の兵を連れて入る。皆玄宗に禮する。)

王忠　(陳玄禮に)　どうする事も出來ませんでした。然し、私達も、實を云へば彼奴には同情は出來なかつたのです。

それでなくてもですが彼奴め、こつそりと長安を逃げ出ようとして居たのですから……。

玄宗　（進み出て）　どうしたのだ。

王忠　……。

哥舒　陛下！　御決心が必要でございます。

玄宗　……。

哥舒　只今、興奮しきつた兵の一隊は西の城門で、長安を落ちのびようとした楊國忠の首を打ちとりました。

玄宗　おゝ。

楊貴　えゝつ。えゝつ。（同時）

哥舒　彼の邸宅は今燒かれつゝあります。そして次に、次に彼等は……。（口ごもる）

楊貴　（決然と）　お云ひ、云つておしまひ、私の首がほしいといふのだらう。

玄宗　楊貴妃！　楊貴妃！

哥舒　（決然として楊貴妃に）　えゝ、さうです。兵卒共は貴女の首を見ない間は長安を後にしないと云つてゐます。

玄宗　哥舒翰！

楊貴　陛下！　御心配下さいますな。これこそ、これこそ私にふさはしい只一つの報いでございます。

陳玄　おゝ、よく云つて下すつた。よく云つて下すつた。さうして貴女が決心さへして下されば……。な、楊貴妃、陛下の爲めだ。此の大唐帝國の爲めだ。どうか思ひ切つて自決して下さい。

玄宗　（思はずどなる）　黙れ！　陳玄禮。貴様達は、おゝ、貴様達は……。

（此の時高力士急ぎ出る。）

高力　御許し下さい。陛下。

玄宗　おゝ、高力士！　どうしたのだ。

高力　私は、私はさがしたのです。宮殿中をさがしたのです。けれども、けれども……。それが此處に、どうした事か私には分りません。私の手落ちです。私の手落ちです。お許し下さい。

楊貴　いえ、貴郎が惡いのではないのです。貴郎が惡いのではないのです。昨夜、昨夜私は宮殿には居なかつたのです、安祿山からの使ひの者に會つて居たのです。

（玄宗の外皆驚く。）

玄宗　高力士！　あれを連れて逃げてくれ。いや、今出ては駄目だ。隱してくれ。そして、そして、靜かになつてから……。

楊貴　いえ陛下。私は死にます。私は死にます。喜こんで死にます。私が、私が此の罪の身體を捨てさへすれば、陛下の全軍は奮ひたつのではありませんか。その奮ひ立

つた軍をもつて陛下はどうかあのならず者を打つて下さい。おゝ、今更こんな事を云つても始まらない事ですが、私があの男の自由になつたのは、私から望んだ事ではないのです。私は、私はあの男に強迫されたのです、あの李龜年との事を種に強迫されたのです。そして馬鹿な私はあの男の味方になつたのです。あの男は妾を通じて直ぐに私の兄をも一味の中に引き入れました。そして、それは全くあの李林甫を暗殺させよう爲めだつたらしいのです。ですから、あの人が一度病氣で死んだ後、もうあの男は何事をも私達には云はずに事をやりました。今度の事でも、いざとなるまで兄も私も何も知らないで居たのです。私達は、馬鹿な私達はだまされたのです。だまされたのです。おゝ、陛下、陛下はあの陛下の逆臣をお破りになるとともに私達兄妹の怨みもはらして下さるのです。その軍の士氣を奮ひたゝせるために私の生命が役に立つのです。私は何でそれををしみませう。さあ、陛下、どうぞ、どうぞ早く私の首を打つて下さい。

玄宗　楊貴妃。お前の氣持はよく分る。然し、お前は死んではいけない。(庭上のさわぎ烈しくなる)さあ、早く、早く逃げてくれ。直ぐ、直ぐ。

楊貴　いゝえ、いゝえ、私は……。

玄宗　逃げてくれ、逃げてくれ！　俺の、俺の爲めと思つて逃げてくれ。

楊貴　どんな事があつても、どんな事があつても、さあ、早く、早く。陛下のその劍で……。陛下の御手にかゝて私は此處で死にたいのです。

玄宗　いけない。いけない。いけない。

(此の時庭上近く「楊貴妃を殺せ、楊貴妃を殺せ」といふ大勢の叫聲聞ゆ。人々のせまり來る氣配。)

玄宗　おゝ。早く、早く……。

楊貴　早く、早く……。

玄宗　逃げてくれ！

楊貴　殺して下さい！

玄宗　いけない。どうしても、どうしても……。

楊貴　殺しては下さいませんか。

玄宗　逃げてくれ！　逃げてくれ！　俺の爲めに、俺の爲めに……。高力士！

(此の時旣に數名の兵口々に楊貴妃をのゝしりつゝ庭上より此の廣間に入り來る。)

楊貴　(突然玄宗の腰にせる劍をぬきて)陛下、陛下の劍を使ふ事をお許し下さい。(自ら喉をつきて倒る)

(室內にあるものはしんとする。)

玄宗　揚貴妃！　揚貴妃！　(彼女を抱き起す)

楊貴　陛下！　陛下！　(息絕ゆ)

玄宗　（間）
おゝ。
（彼女の屍を下におき默然として立つ。）
（長き、長き間。これより先、今亂れ込める兵卒共は出てゆき、庭の方に楊貴妃の死を報告す。それ故、この長き間の前半は庭上相變らずやかましいが、後半はしんとする。）

宗玄　陳玄禮。（短き間）彼女は死んだ。

陳玄　……。

（間。）

（突然庭上に歡呼の聲おこる。）

陳玄　陛下！　揚貴妃は逝かれました。然し、陛下の將士の心をおとりもどしになる事が出來ました。

（「皇帝萬歲」の叫び庭上に繰り返さる。）

陳宗　將士は奮ひ立つて居ります。勝利は眼の前でございます。陛下は日ならずして、陛下の帝國を御恢復なさるでございませう。

玄宗　おゝ、さうか……。そして俺は又皇帝になるのか。然し彼女は、彼女は死んだ。（可なり長き間）（突然、身を投げて楊貴妃の屍にすがり）おゝ、楊貴妃！　揚貴妃！　俺の、俺の揚貴妃！

（室内の者皆肅然として立つ。庭上には「皇帝萬歲」の叫び盛んに繰り返へされる。）

――幕――

解說

有島武郎篇

小傳

有島武郎氏は、明治十一年三月四日、當時大藏省書記官たりし武氏を父として、東京小石川區水道町に生れた。父武氏はもと薩摩川内北郷家の家臣、母幸子は南部藩々士の女であつた。南と北との涯から來つて新都東京で合流した武家の血統か有島武郎といふ日本文學史上の存在を創り出したわけである。

明治十五年、父君か橫濱稅關長に轉任すると同時に一家は橫濱の官邸に移つた。その後十年の間この官邸生活が續いたのであるが、此間に壬生馬、隆三、英夫(里見弴氏)の三弟及二人の妹か生れた。

氏の少年時代は、その長官の長子といふ境遇と生れつきの德望との故に、王子のやうな幸福のうちに過ごされた。早くから米國人の家庭學校等に出入せしめられて、專ら英語を學ばしめられた。十歲にして虎門學習院へ寄宿したが、その中學時代にあつては溫良聰明な模範的學生であつたといふことである。そのために氏は皇太子殿下(大正天皇)のお相手を仰せつけられたことさへあるのである。後年の氏が社會主義的な思想を懷くやうになつたことを考へると氏の生涯が如何に變轉を極めたものであるかといふことか、此事實に徵しても窺はれるではないか。

明治二十九年學習院中等科を卒業、札幌農學校へ入學、新渡戶稻造博士の家に寄寓したが、氏は此處で始めて一つの思想的傾向を持つやうになつた。卽ち、當時の新思想たる基督敎に心醉するに至つた。氏は後に內村鑑三氏を介して信仰生活に入つたのであつた。森本厚吉氏と共著にかゝる「リヴイングストン傳」は、その信仰から生れたものであつた。

越えて明治三十四年「鎌倉幕府時代の農政」といふ論文を提出して農學校を卒業、歸京すると直ちに一年志願兵として入營した。兵營生活を終はると、明治三十六年米國に渡つて、ハアヴァフォードに學び、マスター・オブ・アーツの稱號を授けられた。此在米中に、氏の基督敎に對する信仰は動搖し始め、その專攻するところの歷史經濟に對する態度は懷疑的となり、文學及び社會主義、唯物史觀等に興味を抱くやうになつた。後ハーヴァドに遊ぶ頃には氏の此傾向は益々强くなつて居た。

明治三十九年ヨーロッパを廻り、ロンドンでクロポトキンに會つたりして、その翌年四月、足かけ五年の外遊を終へて歸朝し、同じ年の十二月東北帝國大學の教授として赴任する時の氏の氣持は、「一人の文學愛好者として、教員でもして一生を過ごさうと云ふ決心」だつたのであつた。ところが札幌の人々は依然として信仰の堅い基督教徒としての氏を迎へるつもりで居た。氏の第二期の北海道の生活は、さういふわけで、最初からその環境との間に侘しい隔かあつたのだ。

氏は明治四十二年神尾光臣氏の二女安子と結婚した。氏が三十二歳の時であつた。行光、敏行、行三等の三男が次次に誕生した。かくて、札幌での生活は、たゞ外面から見たゞけでは、夫として、父としての平和の極みを盡して居た。然し、淋しい雪國に埋もれた氏の魂は、その惱むべき惱みを深く惱まざるを得なかつた。後年の作家は此靜な生活のうちに おもむろにその誕生の 準備をして 居たのである。

明治四十三年四月、雜誌「白樺」が氏の友人たちの手に依つて發刊されると一緒に氏の文學的活動は始まつた。長篇小說「或る女のグリンプス」の連載がそれである。これは前後三年に渡つて連載された長篇であつて、一部の人々の間には漸く氏の名か重ぜられるに至つた。

ところが、氏はその家庭生活に於て惠まれて居なかつた。第三子出生の後間もなく、夫人が健康を害したのである。氏はために職を退いて歸京し、大いにその看護に盡したけれども、同棲八年の夫人を、大正五年八月、痛ましくも失はなければならなかつた。

夫人の死は氏を強く刺戟した。爾來氏は再生の意氣をもつて實に華々しく文壇に活動した。「クラ、の出家」「カインの末裔」等の名作が此時期に次々に發表された。本篇に採錄された「死と其の前後」も亦此時期に執筆されたものである。

此時代の有島武郎氏の思想の核心をなすものは、大まかにいへば、「人間愛」といふ言葉に要約することが出來やう。ところがその「人間愛」の日を以つて廣く社會を觀察して行くうちに、氏の社會主義的教養は、氏をそのまゝに晏如たらしめて置かなくなつた。氏に取つては不幸にも、氏は一個のブルジョアであつた。純情そのものであつた氏は、自分がブルジョアであるといふ意識に堪へなかつた。財產といふものから解放されたいといふ希望はどうしても抑へることが出來なかつた。北海道の農場をその小作人たちに讓與し、古くからの番町の本邸を去つて借家に住まつた、そして續いて財產の處分に移らうとして居た。此間の消息は藤森成吉氏の戲曲「犧牲」に充分窺ふことが出來る。と

ころが、實に世間にとつても思ひがけなく、波多野秋子との戀愛事件が勃發して、大正十二年春、その借家をあとにして、輕井澤の高原に旅立つたまゝ、氏は永遠にその愛兒たちの許へ歸つて來なかつたのである。

花はその盛りに潔く散つた。有島武郎氏の死は強い〲衝動を當時の社會に與へたのであつた。

解說

死と其の前後

大正六年五月「新公論」誌上に發表されたものである。夫人の死後間も無くの作であつて、その事實から暗示を受けたものであることはいふまでもない。冷い、陰慘な運命の翳に怯えながらも、此落寞たる人生に相倚る二つの魂の深い愛と、死の神祕とが美しく描き出されて居る。手法としては幻の世界と現實の世界とを交錯させて、其處に一種無氣味な空氣を釀し出して居る新味が眼につく。松井須磨子時代の藝術座の試演に上演されたやうな記憶があるが確かでない。

御　柱

大正十一年三月「白樺」誌上に發表された。藝術から入つて、ある深さまで達した魂が描かれて居る。主人公の平四郎は、藝術から入つて「人間愛」の深さまで徹して居るのだ。氣持のよい一幕物である。

ドモ又の死

大正十一年十月、氏の個人雜誌「泉」誌上に發表されたものである。「ドモ又」の名は德川初期の名工、浮世繪の祖といはれる吃又、卽ち岩佐又兵衞から來た渾名であることいふまでもない。愉快な喜劇であるが、全體に氏の作品としては珍らしい線の太い生活意欲が漲つて居ることは見逃せない。むしろ小說家としてその生涯を終つた有島氏の尠い戲曲中でも之は特に有名なもので、水谷八重子の藝術座をはじめとして各處で數回上演されて居る。

長與善郞篇

小傳

長與善郞氏は、明治二十一年八月六日、東京市麻布區宮村町に生れた。學習院に學び、高等科に進む時には法科を選んだが、のち文科に轉じた。此文科に轉科したことには武者小路實篤、志賀直哉諸氏の「白樺」同人の影響が與つて力あつた。早くからトルストイ、イプセン、マーテルリ

ンク等に親しみ、「白樺」の愛讀者であつたが、後にその同人となつた。そして同誌に在學中から匿名で短篇小說を發表したのが氏の文學的活動の最初であつた。

學習院高等科を卒業してから東京帝國大學英文科に入學したが、「白樺」同人の多くと同樣に中途で退學、爾來創作に精進を續けた。

長與氏の出世作ともいふべきものは「白樺」に發表した長篇小說「盲目の川」でもあらうか。その後引續いて「項羽と劉邦」「賴朝」「夜の戲曲」「春田の小說」「青銅の基督」「陸奧直次郎」「竹澤先生と云ふ人」等の戲曲、小說を文壇に投ずるに從つて、その重厚莊大なる作風はいつか氏を大家の列に入らしめた。

數年前より病を得て、ために氏の文學的活動は一時休止するの止むなき狀態にあつたが、本年三月號の中央公論に氏は長い沈默を破つて小說「辰子」を執筆した。おそらくわが文壇は今後の氏の活動に多くを期待することが出來るだらうと思ふ。

解說

項羽と劉邦

此作品は曾て「白樺」誌上に發表されたものであるが、その後數回の訂正を經て、大正十四年五月現在の形に完成したものであること、作品の末尾に記るされた通りである。

長與氏には多くの戲曲があるが、特に此作品は氏の作風を代表したものといふことが出來る。その結構の雄大莊麗さ、篇中に表現された人生の複雜さ、深刻さ、鋭い對象をなす特異の性格、然かも大きな性格を對立せしめて、その兩個の運命が相剋する相を活寫する戲曲的手腕、これは實に遺憾なく氏の特長を具現したものである。

加藤一夫氏は「中央文學」第四年第六號に於て長與氏の作風に就いて次のやうに言つて居る。

「武者小路君の文章なり性格なりは急流のやうな勢ひと敏速とをもつて居るが、長與君のは堂々と押しよせる澎湃たる怒濤と云つた樣な概がある。そしてそれは必ずしも人道的といふ形容詞をつけらるべきものでなくて、たゞ生命の本然に從つて行はれるものと云つてよい。――中略――(長與君は)感想を書いても、詩を作つても小說を書いても戲曲をつくつても、生命の內部から幾列もの橫隊をつくつてぢりぢりと押しよせて來る樣なところがある。」

加藤氏に說かれた長與氏の以上の如き持味は、「項羽と劉邦」一篇に間然するところなく表はれて居るので、氏の代表作として本篇に此作品を收めたことは大いに當を得たものだと思ふ。

此作は材を「淺茅軍談」に求めたものであるが、作者の戯曲的手腕に依つて、多くのモディフィケーションが行はれて居ることはいふまでもない。

今は、アメリカに行つて映畫俳優として成功して居る上山草人の率ゐた新劇協會は曾て有樂座に此戯曲を上演して非常な舞臺效果を改めたことがある。

倉田百三篇

小傳

倉田百三氏は明治二十四年二月二十三日、廣島縣比婆郡庄原町字庄原に、倉田吾作氏の長男として生れた。生家は吳服商であつた。二十九年同町々立小學校に入學し、三十六年同校高等科三年を修業すると同時に、廣島縣立三次中學校に入學した。

氏の文學的傾向は早くから表はれ、中學三年生にして既に強い文學熱にとらはれて、文學に耽るのあまり一ヶ年を休學した程であつた。

明治四十二年、三次中學校を卒業、同年上京して、第一高等學校に入學し、直ちに辯論部、文藝部等の部員として旺に活躍した。傍ら深く人生問題に思を潜め、具さに若人の悩みを悩んだ。

かくの如く順風に舟をやるやうな勢で學業に進んで行つたか、不幸、才子多病の古語は欺かず、氏は病を得て、その學業を半途に擲たなければならなかつた。氏は明治四十四年高等學校を退學したのであつた。

氏の思想生活は暫らくもその精進を懈るところなく進められて居たが、西田天香氏の感謝と奉仕の生活の主張に共鳴すべき點を見出すに至つたのであらう、倉田氏は大正三年に至つて、京都市外鹿ヶ谷の一燈園に入つたのであつた。

創作の花咲くべき思想の沃土は漸く準備された。氏は大正五年九月、友人千家元麿、犬養健、高橋元吉の諸氏と相謀つて文藝雜誌「生命の川」を發行し、同時に處女戯曲「歌はぬ人」を同誌に發表した。今日まで徹頭徹尾作家としては戯曲に依つてのみ自己を發表して居る氏は、文壇の初見參をもやはり戯曲をもつて試みたのであつた。然し、此作品はその宗教的色彩と一種メロディヤスな作風とに特色をもつて居たにもかゝはらず、あまり文壇の問題となるには至らなかつた。

特異なる戯曲家としての今日の盛名が氏のために文壇に確立されたのは、實に第二に發表された長篇戯曲「出家とその弟子」に依つてゞあつた。これは氏の位置を文壇に確立したばかりでなく、今日にあつても氏の名を最も重からしめて居る傑作であつた。これは最初に「生命の川」誌上

に第四幕第一場までを、その殘餘の部分を白樺誌上に掲載したものであつた。次いで大正六年六月此作品が單行本の形を取つて岩波書店から發行された頃には、文壇といはず、一般讀書界には、ために騷然たる一大センセーションが捲き起こされて居た。「出家とその弟子」を讀んで泣かざるものは人に非ずとの言葉さへ行はれ、作中に主人公たる親鸞は忽ちにして文壇の人氣者となり、一時は親鸞研究時代を現出したかの觀があり、石丸梧平氏の「人間親鸞」その他の類書が盛に刊行されるといふ勢であつた。即ちわが倉田百三氏は二十六歳の弱年にして既に文壇の英雄たるの名譽を與へられたる運命の寵兒であつた。

爾來、戲曲「俊寛」、論文集「愛と認識との出發」戲曲「布施太子の入山」「父の心配」等を次々に發表して、今や一方を代表する一流の大家として立つて居るのである。常に健康に惠まれざる氏が今日までの精進努力は眞に壯とするに足るものがあるであらう。

現在は藤澤の地に居を卜して、多くの門下の人々に擁せられて、雜誌「生活者」を主宰して居る。

解説

出家とその弟子

眞宗の教祖親鸞を拉し來つて主人公とし、歎異抄の宗教的眞を戲曲のうちに具體化せる作品であることいふまでもない。但し「祷り」を取入れる等、其處此處に基督教的の匂がたゞよつて居ることは、時代の然らしむるところでもあらうか。勿論眞宗の教義を宣傳するために物せられた傾向的作品では全くなく、偶々藝術家たる倉田氏がその教義に興味と同感を感じて、その藝術的衝動を刺戟せられたる結果の表はれに過ぎない。

作中に於て作者が描かうとするものは結局此複雜多岐なる人生である、人間の運命である、その運命に操られて生ずる葛藤の諸相である、生存の孤獨を忍從するもの丶寂しい涙である。それらのものが佛教的な寂(さ)びた愛を通して視られて居るところに此作品の持つ特異性がある。

ロマンロランは、此作品を讀んで深く動かされ、「獨り詩的魅力、微妙な優しさが、この花の香りに、我々を浴させたにとゞまらず」此戲曲を「現代世界の宗教的作品の中の最も純粹なるもの丶一つと目する」と、作者へあてた手紙のうちで激賞して居るといふことである。

讀者は、此戲曲に就いてその形式に關して或は疑をもつかも知れない。即ち、かくの如き形式の戲曲が上演によく堪へ得るかどうかといふ點である。それに就いては、筆者は、此作品の發表を機として卓上戲曲(レーゼドラマ)、即ち讀むための戲

曲といふもの丶可能に關する論議が文壇に於て行はれたといふ事實を讀者に報道して置かうと思ふ。そして倉田氏はその可能を信ずるといふ意見であつたやうに記憶して居る。

然し、實際に於ては、此作品は、大正八年七月、有樂座で創作劇場の手に依り初演せられて以來、舞臺協會等の手に依つて何回となく上演されたものである。

なほ「出家とその弟子」には英、獨、佛、エスペラント、支那等の飜譯があることをつけ足して置く。

布施太子の入山

これは佛教傳說の本生譚から材を得た戯曲である。布施太子、即ち葉波國の太子須太拏といふのは前生の佛陀なのだ。その傳說では、太子は布施波羅密を行ずるために大いに布施を行うて居たのだが、遂には敵國の求むるまゝに國賓の白象まで與へた。此のために父王の怒りに觸れて檀持山に追放されることになり、太子は妻子を伴つて布施を行ひつゝ山に入ると、今度は波羅門に二人の愛子、愛妻をも乞はれるので、最後にそれをも布施してしまふといふことになつて居る。

倉田氏は大體此話を骨子として曲戯化したのであるが、その入山の動機は、迫害され、追はれるのではなくて、出家得道のためといふことになつて居る。

此作も佛教思想を基調としたものだが、その愛子や、愛妻を布施する場面は慘忍の感に堪へないやうな氣がせぬこともない。此慘忍の感がそれらの場面に幾分でも殘つて居るものとすれば、まだ此作品は成功したものと言へぬのではあるまいかと思ふ。

大正九年十二月の作である。

俊寛

大正八年十二月に完成した作品である。取材は「平家物語」中の有名な一節、說明を俟たない。

「俊寛」の基調は、「出家とその弟子」のそれと著しい對比をなして居る。後者が天國的であれば、これは地獄的である。これは絕望の黑い翳に悽慘に彩られて居るのに、前者は希望の光に和やかにつゝまれて居る。

「俊寛」の誕生はなか〳〵多難であつた。作者がその第一幕を執筆してからすぐに病臥して執筆の自由を奪はれたゝめに、三年間といふものあとが書けないで居たのであつた。病やゝ癒つて、漸く困難な執筆を終つて全體が完成した時には、さきに「白樺」誌上に發表された第一幕と共に「新小說」に掲載されて、大いに文壇の問題になつたものである。

幸に、編者の手もとに、作者の「俊寛」に關する談を筆記した文章があるから、その一部分を次に引用して見よう。

「――前略。あの作全體を貫いて居る寂しい運命と深い悲しみとの根本氣分は、ピッタリと、あれを書いて居た時分の私の生活の氣分と一つになつて居ました。ソフォクレスなどを讀んで、ギリシヤ劇的な運命の悲しみを韻文的なリズムを保つて表現しようと云ふのが、あの作の創作の動機でした。あの作は、さういふリズムのことを頭において讀んでいたゞかないと、その本質をなして居る藝術的生命が掴まれないと思ひます。――後略。」

「俊寛」は左團次、勘彌、壽美藏・猿之助によつて初演され、その後猿之助の手に依つて數囘上演されて居る。猿之助の「俊寛」は非常に作者の氣に入つて居るといふことである。

室生犀星篇

小傳

室生犀星氏は本名を照道といひ、ほかに魚眠洞の號がある。明治二十二年八月一日、金澤市裏千日町三十一番地に、曾て家祿百石を食んだ小畠家の息として生れた。幼にして赤井家に入りその姓を冒したが、後、十四歲にして更らに室生家に入つた。父君、室生眞乘氏は雨寶院の住職であつたのだから、氏はその家職を繼いで、僧侶をする筈であつたらしいことは、氏の本名を見ても頷かれる。

學齡に達するや金澤市長町小學校に入り、室生家に入るに際して、その高等科第三學年に在つて同校を退學し、爾後父君に就いて、經典等を修めたほか、特に學歴と稱すべきものなく、此點に於ては一種のセルフ・メード・マンといふべきであらう。氏の著しい特色をなして居る東洋的な風格、徘諧の「寂」にも通ずるやうな持味は、おそらく此寺院生活時代に敎養せられたものではあるまいかと思はれる。

やゝ長じて職を裁判所に奉じ、後に金澤市の石川新聞社に入社した。

明治四十二年、二十歲にして初めて上京し、此時北原白秋、兒玉花外の兩氏と相識つた。のち、四十五年、金澤市より、萩原朔太郎氏、山村暮鳥氏と相結んで詩の雜誌「卓上噴水」を發行した。かくて氏の文學的活動はまづ詩人としてその第一歩を踏み出したのである。

更らに大正五年、前記二氏のほかに、多田不二、竹村俊郎、恩地孝四郎の諸氏を加へた詩の雜誌「感情」を發行した。此雜誌は數年の間續刊され、新詩人としての室生犀星氏の名は漸く文壇的となつて來た。次いで大正七年一月、

氏は處女詩集「愛の詩集」を自費出版した。

　けれども、氏の名を最も世間的に有名ならしめたものは大正八年八月、「中央公論」誌上に發表した處女小說「性に目覺める頃」であつた。その纖細巧緻なる描寫は、氏をして一躍新進創作家の列に入らしめたのである。爾來、「結婚者の手記」「蒼白き巢窟」等次々に發表する作品は、常に嘖嘖たる好評のうちに迎へられて、いつか氏は文壇に確固たる高位を占めるやうになつて居た。

　だが、戲曲家としての氏の活動はづつと遲い。氏がその處女戲曲「山ざと」を「新潮」に發表したのは、實に大正十五年になつてからのことであつた。その後數篇の戲曲を發表したが、特に昭和元年六月、「新潮」誌上に發表した「大槻傳藏」は文壇に迎へられて、此一作に依つて、氏の戲曲家としての位置は確められたかの觀があつた。

　氏には、多くの詩作、小說、戲曲等のほかに數百の俳句がある。

解說

山ざと

　室生氏の處女戲曲、大正十五年一月、「新潮」誌上に發表されたものである。此世の鬪ひを諦めた人の寂しさと靜けさとがしんみり出て居る。東洋風の閑寂の味、それが洗鍊された白の間からたゞよひ出て來る。取り扱はれた登記所の生活は、裁判所に働いた頃の作者の思出でもあらう。

茶の間

　大正十五年四月、「改造」に發表されたもの。何處か久保田万太郎氏の作風を偲ばせるやうなところがある。情調の世界を描いてあるからだらう。「山ざと」の主人公が此世の鬪ひを諦めた人の寂しさを持つて居るとすれば、「茶の間」の女主人公は戀を離れた女の寂しさをもつて居るのかも知れない。靜な、然し少しも生命の烈しい躍動を感じない、平和な夫婦生活の心境、戸外には音も立てないで雪が降り頻つて居る。何處までも日本人らしい味の作品である。

父母所生

　昭和元年十月、「中央公論」に發表された。

　此度は、諦めきつた老年の女と、諦めようとして諦めきれない老年の男との心境である。氏の作品には何處までも侘しい鈍色の空氣がついてまはる。初めて開通した汽車の走る音を聞いてさへ頭痛がするといふ老夫婦、然かもその二人は息子の前にさへ遠慮をしなければならぬやうな成立を持つて居るその二人の澱みきつた平和な生活を搔き亂す

ために、新しい時代の空氣を呼吸した息子の若夫婦が歸つて來る。老夫婦の間に出來て、今は他へ養子にやられて居る正が影のやうに出沒して侘しい空氣を更に侘しくして居る。

　此作には前掲の二作に比してはやゝ鋭い葛藤が描かれ、何か積極的なものを感じられないではない。然し作品の基調をなすものは、依然として、諦によつて得られた靜な心境だといはなければなるまい。これは多くの戯曲家が好んで覗ふところとは大いに相違して居る戯曲家室生氏の著しい特色である。

大槻傳藏

　昭和元年六月、「新潮」誌上に發表され、昭和二年三月頃、道化座市川米左衛門の一派によつて脚光を浴びた作品である。

　變態性慾的な一種の無氣味さ、物凄さ、それが此作の總である。それには此作の簡潔な白まはし、極めて技巧的な舞臺上の進行が大いに役立つて居る。此作は發表當時にも大いに文壇の問題となつた。編者も、室生氏の戯曲的手腕は此作品に最も鮮かに發揮されて居るやうに思ふ。

吉田絃二郎篇

小傳

　吉田絃二郎氏、本名は源次郎、明治十九年十一月二十四日、佐賀縣神埼郡西郷村に生れた。父君は榮作氏、母堂は富山氏龍子であつた。その父祖の役宅が、佐賀城を去る東北方四里の背振口の鍋島藩の砲臺に代々あつたので、四五歳ころまでは此地方で暮らした。

　明治二十三年頃、父君が酒造業に失敗して郷里を出て、長崎縣に移住したゝめ、氏の小學教育は同地に於てなされた。父君が屢々芝居方面に關係したので、早く六七歳の頃から觀劇の習慣になれて居たとのことである。

　長じて長崎東山學院に學び、のち更らに郷里佐賀の工業學校に學んだ。日露戰爭の頃には海軍工廠造船工場に職を奉じて居た。

　明治三十八年四月早稻田大學英文科に入學、翌年十二月一日一年志願兵として對馬要塞砲兵大隊に入隊し、四十一年秋まで見習士官時代を對馬の要塞に過した。此間の島での生活が、後年氏をしてその出世作「島の秋」を作らしむる素材を提供したのであつた。

　明治四十四年早稻田大學英文科卒業、卒業論文は「舞臺

上の自然主義」といふ論題であつたといふことである。此一點から見ても氏が夙に戲曲の方面に志を抱いて居たことは窺はれるやうに思ふ。此ころ坪内博士の文藝協會に入り、その宿志を成就すべく、松井須磨子、加藤精一、佐々木積等の諸氏と劇の研究に努めた。然し、考ふるところあり、協會からは僅か月餘で退くことゝなつた。次いで芝三田ユニテリアン敎會に入り、六合雜誌の編輯に從事し、同時に遞信省囑託となつた。

大正二年一月「早稻田文學」に處女作「磯こよみ」を發表し、續いて「蜥蜴」を「ホトトギス」に、「二つの墓」「島の秋」を「早稻田文學」に發表するに及んで氏の新進作家としての位置は漸くに定つたかの觀があつた。

大正六年九月より早稻田大學講師として英吉利文學を講じ、のち敎授に進んだが、今日は敎職を退いて居るかに聞いて居る。

解　說

西鄉吉之助

「西鄉隆盛」といふ題名を選ばないで、「西鄉吉之助」といふ題名を選んだところに作者の用意がある。即ち作者は豪傑としての隆盛を描かうとはしないで、純情の人吉之助を描かうと試みたものであらう。配流の島の西鄉、城山の西鄉、それは何處までも柔しい和んだ西鄉である。怒濤の如き西鄉を描かないで、春の陽ざしのやうな、或はまた秋の夜の澄んだ月光のやうな西鄉を描いたところに作者の特色がよく表れて居ると思ふ。

此作品は震災後復興の本鄉座で市川左團次一派の手に依つて上演された。

狂人となるまで

强い戀情を持ちながら、それを此現實世界に活かして行く力を持たない弱い性格、現世の壓迫のもとに崩れて行くより仕方のない純情、さういふ弱い人間である庸一郎は、最後の力が盡きようとする瞬間に氣が狂つたのである。そして彼は氣が狂ふと一緒に世間と拮抗して行く力を得た。あまりに美しい純情の人は氣でも狂はなければ現世の醜い生活を生きぬくことは出來なかつたのだ。

町はづれの店

運命に呪はれた人達の一群、互ひに憎み合つて行かなければならない苦しい生活の相が一幕のうちに緊縮されて居る。芝居者鐵之助を醉つた勢で殺した馬左衛門に對する作者の氣もちは、「狂人になるまで」の庸一郎に對するそれと

一脈通ずるものがあると思ふ。現世の力に壓倒されて崩壞しようとする純情の爆發である。

門

高く建てられた「門」は、甲斐なき現世の欲望の象徴である。純情的なドンキホーテである主人公の義一郎は、夢のみを追うて、罪のないその欲望のために苦鬪する。後の日の「清作」である健二は、その肉眼の明を失したゝめに却つてその心眼が透徹になつて現世の甲斐なさを見るやうになる。結局二人は何處までもそれ〴〵異る二人の世界に生きて行くのであつた。

清作の妻

吉田氏の戯曲中最も有名なものゝ一つ。屢々上演もされ、映畫化されたこともあるやうに思ふ。戰爭の罪の一つを描いたものであつて、「國家のため」といふ社會道德に背いた女主人公お兼の行爲をも觀客に同情せしめずには置かないところに此作の生命がある。

燕

潔く生きようとする者と、汚れの世の中に汚れた人として生きる者との對立である。中に立つた女は、結局潔い男の深い純愛に殉じて水の底へ沈んだ。死よりも強い戀情の讃歌である。

近藤經一篇

小傳

近藤經一氏は明治三十年四月十二日東京に生れた。曉星小學校、京華中學校、第一高等學校を經て東京帝國大學文學部國文科を卒業した。

中學校在學時代の後期から創作に興味を持ち、高等學校在校中より大學卒業後二三年間所謂文士生活をしたことがあるが、その後は一個の事業家として映畫製作の業に從つた。その後文藝春秋社から雜志「映畫時代」が發行されるやうになると、入つてこれが編輯を擔當することになつて、今日に及んで居る。

最近長篇小說「愛慾變相圖」の作がある。

本篇に採錄した「玄宗と楊貴妃」は氏が大學時代の作に係るものである。

解說

玄宗と楊貴妃

有名な白居易の詩「長恨歌」にも歌はれて居る唐の玄宗皇帝と楊貴妃の事蹟に材を得たものであることはいふまでもない。たゞ玄宗と楊貴妃との戀愛的關係に至つては、白居易の解釋と此作者とは全く違つて居る。作者は此二人が相愛して居るとは見なかつたのである。その他多くの戲曲化か任意に行はれて居ることは、作者の序詞に見ても明らかである。

此作品は作者が在學時代の作であるといふが、その結構の雄大、葛藤の複雜さに至つては、白面の一青年戲曲家のよくなし得るところかと訝かりたい程の出來榮えである。

大正十年十月、帝國劇場に於て、森田勘彌の文藝座の手に依つて上演された。

昭和四年三月　（編輯部編）

編輯校訂責任
吉田甲子太郎
佐藤十三郎
清水義政

日本戲曲全集・第四十四卷
現代篇第十二輯・第十二回配本

著作權者檢印

禁無斷上演

昭和四年三月二十二日印刷
昭和四年三月二十五日發行
（非賣品）

著作者 有島武郎
長與善郎
倉田百三
室生犀星
吉田絃二郎
近藤經一

發行者 和田利彥
印刷者 島源四郎
製本者 高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目
發行所 春陽堂
五一
電話日本橋六四一
三七八八
振替東京一六一七

東京市本鄕區眞砂町・日東印刷株式會社印刷